雪風と風の旅人

サイ・ナミカタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪風と風の旅人

【Ｎコード】
Ｎ４２８６Ｒ

【作者名】
サイ・ナミカタ

【あらすじ】
優秀なメイジの少女『雪風』のタバサ。そんな彼女が＜使い魔召喚の儀＞で原因不明の事故を起こしてしまった！　結果、呼び出されたのは周（しゅう）という国から来たという、謎の青年……太公望。これは、シルフィードではない使い魔を彼女が呼び出したら？　という前提で書かれた「ゼロの使い魔」と「封神演義」のクロスオーバー作品です。異邦人の追加による、バタフライ効果をお楽しみいただければ幸いです。

プロローグ　風の旅人、雪風と出会う事

――少女は、絶望していた。

春の使い魔召喚の儀。それは、神聖にして絶対のもの。

生涯の『パートナー』たりえる存在を呼び出し、それが持つ＜属性＞を見て、進むべき専門課程を決定をする――いわば、今後の進路を左右する大切な場で、真の名前を用いなかった、その報いがコレなのか。この世界の『始祖』は、どこまでわたしに試練を与えれば気が済むのだろう。

――彼は、困惑していた。目に映る……今の自分を取り巻く環境に。

抜けるような青い空と豊かな草原。それはいい。周囲にいるまだ子供といってもよい年齢の人間たちと、見たこともない妖(あやかし)ども。そして己の目の前に立つ、氷のような瞳の内に深く暗い絶望の色を宿す、青い髪の少女についても、まあ後で考えればいいだろう。だが……。

「何故に、わしだけがここにおるのかのう……」

……しかし、その疑問に答えてくれる者はなく。

「おいおい、『雪風のタバサ』が平民を呼び出したぞ！」

「まさか、召喚に失敗したのか？」

「ありえないだろ、ゼロのルイズならともかく」

「ちょっと！　あたしならってどういう意味よ！！」

自身以上に困惑した声が響くのみであった。が、ほんの少しだけ状況を判断するに足る発言があったのは確かである。

まずひとつ。彼らに『雪風のタバサ』と呼ばれている者が、彼をこの地へ呼び出したのであろうということ。

ふたつ。その際に何らかの手違いがあり、何故か彼『だけ』がここへ引き寄せられてしまったのであろうということ。

そして最後に。目の前の少女こそが『雪風』のタバサ。つまり、彼をこのような状態にした本人であろうということ。

だが、推測のみで判断すべきことではない。まずは、この『異常事態』を生み出した原因（と、思われる）者に確認を取るべきだろう。そう判断し、彼は口を開いた。

――男性は、狼狽していた。

毎年春……フェオの月に行われる＜使い魔召喚の儀＞。それは、このトリステイン国立魔法学院において、２年生へと進級するために必要な試験にして、神聖な儀式である。

男性――この儀式における責任者『炎蛇』のコルベールの記憶においても、また、過去の歴史を鑑みてもありえない『事故』を目の

前に、普段のおっとりした言動や見かけによらず、こういった非常事態に対して、めったなことでは動じない『教師』が……激しく混乱してしまっていた。

この『事故』を起こした少女は、非常に優秀な生徒である。

そんな生徒が、まさか最も扱いの簡単なコモン・マジックのひとつ＜サモン・サーヴァント＞を失敗することなどありえない。いや、実際失敗ではないのだろう、なにせ『呼ばれた者』が目の前にいるのだから。

では、いったい何をして彼をここまで困惑させているのか。

それは、召喚された者が『人間』だということだ。＜サモン・サーヴァント＞で人間が呼び出された例など過去にない。それだけならばまだいい……いや、よくはないのだが……タバサの前にいる少年――年の頃は、おそらく15～6といったところであろう彼の服装は、あきらかに自国民のそれではなかった。

純白の布を頭に巻き、橙色の――国内では見たこともない造形の胴衣を着ており、さらには濃紺のローブ……ともマントとも言えるような、これまた不可思議な造りの外套を身にまとっている。

周囲にいる生徒達は、呼び出された少年をひと目見ただけで『平民』と断じてしまったようだが、それは彼が『杖』を手に持っていない、ただそれだけの理由だ。だが、コルベールが見るに、少なくともただの平民ではないように思えたのだ。もしも彼が異国の貴族であったなら、最悪国際問題に発展しかねない。

それに。今のところ、かの少年に敵意――周囲の者たちに対し、

何らかの抵抗をしようといった雰囲気はない。だが、状況の推移によってはどうなるかわからない。だから、コルベールは事態に介入すべく動いた。

――少年は、少女に問うた。

「雪風のタバサ……と、申したか？　わしをこの地へ呼び出したのは、おぬしで間違いないかの？」

少女は少年の声を聞き、コクリ……と、小さく頭を縦に振った。

頭痛がする。おそらくは自分だけが強制的に引っ張り出されたせいだろう。頭を振りながら、彼はさらに質問を続けた。

「なるほど……で、いかなる理由でわしを……」

――が、その言葉は最後まで紡がれることなく、他の声に遮られた。

「お話中のところ申し訳ありません……私はジャン・コルベール。二つ名は『炎蛇』。このトリステイン魔法学院の教師を務めている者です。ミスタ、えー、失礼ですが、お名前を伺ってよろしいでしょうか？」

真っ黒な長衣に木の杖を持った、頭髪のやや寂しげな男が声をかけてきた。おそらくこの場の責任者的存在なのであろう。少年は、そう判断し――改めて『観察』を始めた。

この人物は周りにいる子供達と異なり、柔らかな空気を醸し出し

てはいるものの、それ以外の全て――たとえば移動のための動作ひとつとっても全く隙がない上に、さらに周囲の者たちに一切それを悟らせていない。この者に、武術の心得があるのは間違いなさそうだ。それも、ほぼ確実に実戦の経験がある。

……今のところ、彼らに敵意はないようだが、引き剥がされ、見知らぬ土地へ連れてこられた今、自分にどれほどのことが可能なのか判断がつかない。ならば、こちらから攻撃を仕掛けたりするのは愚の骨頂であろう。まずは、情報を集めることから始めなければならぬ。瞬きするほどの間で、ここまで検討を行うに至った少年は、大人しく問いかけに答えることにした。

名前……か。いくつかの名を持つ自分だが、今この状態で名乗るのならば、これが最も適切であろう。

「わしの名は『太公望』呂望（たいこうぼう・りょぼう）。太公望と呼ぶがよい」

プロローグ　風の旅人、雪風と出会う事（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

初めてのＳＳ執筆にもかかわらず、無謀にも好きな作品同士のクロスオーバーに挑戦してみました。ペースがゆっくりですが、できるところまで頑張りたいと思います。

２０１１／０３／２０　誤字、改行位置を修正
２０１１／０５／０３　一部加筆修正、改行位置などを修正

第1話　雪風、使い魔を得るの事

――建国から数千年という長い歴史と伝統を誇る王国、トリステイン。

保有する国土はさほど広いとはいえないものの、王都トリスタニアやその周囲は四季折々の花や噴水などによって美しく彩られ、国内にある世界最大の湖が観光名所となっているなど、風光明媚な『水の王国』として名高い国家である。

そのトリステイン王国にある、名門貴族の子女たちが数多く集う学舎。それが、ここトリステイン国立魔法学院だ。

かの学院では、毎年春になると、ある儀式が執り行われる。それが＜春の使い魔召喚の儀＞である。この儀式によって、学生たちは己の『パートナー』となる＜使い魔＞を呼び出し、契約する。ここで＜召喚＞されるのは、一般的に犬や猫、鳥などといった動物が多く、召喚者によってはバグベアー、バジリスクといった魔物を呼び、特に素質のある者が儀式を行った場合、グリフォンやサラマンダーなどといった幻獣が現れることもある。

つまり、呼び出した＜使い魔＞の『種類』によって、召喚者の資質を計るという目的でもって、この儀式は長年継続されてきたのだが――この日。思わぬ『事故』が発生した。

本来ならば、ありえない事態――なんと『人間』を召喚した者が出てしまったのだ。

しかも、その事故を起こしたのは……学院内でも特に優秀な者と

して名の知られた少女『雪風』のタバサだ。二重にありえない事態に、周囲は騒然となった。事故を起こしてしまった本人も、呆然としてその場に立ち尽くしている。

と――その場を収拾すべく動いた者がいた。それが、この儀式の現場監督責任者にして、この学院に勤める教師『炎蛇』のコルベールだ。彼は、周囲の生徒たちに静かにするよう声をかけると、ごくごく丁寧な口調で『呼び出されてしまった』少年に声をかけた。問いかけられた相手も、特に慌てた様子はなく、素直に自分の名前を告げた。

『太公望』呂望（たいこうぼう・りょぼう）――と。

相手の態度を見て安心したのであろうコルベールは、言葉を続けた。

「ええと、ミスタ・タイコーボー？　早速ですが、質問をさせていただいてよろしいでしょうか？」

「別にかまわぬぞ。答えられるかどうかはわからぬがのう」

まるで、今日の天気について答えるような気軽さでもって、コルベールの問いかけに頷いたのは『タイコーボー』という、このあたりでは聞き慣れない……というよりも、まず存在しないであろう名を持つ少年だ。周囲の喧噪など、どこふく風といった様子で、悠然とその場に立っている。

ここに至って、ようやく……瞳に絶望の色を浮かべていた少女タバサは、現在の状況を把握し――改めて自分が呼び出した相手を観察する余裕ができた。

――『雪風』のタバサ。現時点で15歳。

現在、彼女が名乗っているタバサという名前。これは本当の名ではない。かの少女には深い家庭の事情があり、あえて真の名を伏せ、このトリステイン国立魔法学院で学んでいる――海外からの留学生である。そんな彼女の＜メイジ＞つまり＜魔法使い＞としての実力と才能は、学院中にその名が知られているほどに高いものだ。

だが、普段から無口で、他者を寄せ付けぬ冷たい空気を纏っていることと、彼女が得意とする魔法が＜氷＞と＜風＞を伴うものであったこと、そして深い水底のような色の髪を持つことから、いつしか周囲から『雪風』の二つ名が冠せられた。

人間を召喚するという、通常ならばありえない『事故』を起こしてもなお、立ち直ることができたのは――彼女が背負う事情が故だ。

――まずは、相手をよく見なければいけない。タバサは即座にそう判断した。

自分が召喚した――おそらく、自分と同じ、あるいは1つか2つ程度年上であろう少年。彼は、このハルケギニアでは非常に珍しい黒髪で、異国のものとおぼしき衣服――なかなかに高級な布地で作られたものを身につけている。また、突然見知らぬ地へ呼ばれたにも関わらず、まったく動揺した様子がない。

それどころか、ふてぶてしいとも言える態度で大人のコルベールに相対している。その様子から察するに、それなりに場数を踏んでいる可能性がある。もしも、彼が状況を見抜けないただの馬鹿者だとしても『普通の人間』でないことは確かだろう。

もともとメイジとしても『観察者』としても優秀であるタバサは、よりにもよって人間を召喚してしまったという衝撃など既に忘れてしまったかのように、相手を見極めるべく観察を続けている。しかし、そんな彼女の様子などまるで気に掛けていないといった風情で、監督者たるコルベールは口を開いた。

「それではお伺いします、あなたはどちらの国の貴族でいらっしゃるのでしょうか？」

コルベールの質問に、周囲がざわつく。もっとも、それに対する答えは……彼らをして、やや斜め上を行くものであったが。

「う～む……今のわしには、その質問全てに答えることはできぬのう」

「ええと、それは一体どうしてでしょうか？」

その場でズッコけそうになるのを必死にこらえたコルベールは、さらに問うた。

「そうだのう……まず、わしは周という名の国からこの地へ呼び寄せられた」

「シュウ、ですか？　失礼ですが、聞いたことがありません」

首をかしげるコルベールに、我が意を得たとばかりに答える太公望。

「まあ、そうであろうな。こう見えてもわしは、自国を含めた世

界各地を旅をして回った経験がある。だが、ここは確かトリステイン……と、申したか？　かような地名は、初めて耳にしたものなのだ」

再び周囲が騒がしくなる。トリステインを知らないなんて、とか、どこの田舎者？　とか、シュウ、なにそれ？　などという心ないものがほとんどであったが、それらの反応もこの少年――太公望にとっては折り込み済みのものであるようだ。

「どうやら、まわりにいる者たちも『周』を知らぬようだ。つまり、わしは……お互いに、その存在すら知らないほどに遠方の国からやってきたことになる、と。ここまではよいかのう？」

「ええ、ですが……」

「国が違えば文化も異なるものだ。すなわち、わしの持つ常識がおぬしたちの持つそれと同じ可能性は非常に低い」

「ま、まあその通りですね」

「つまりだ、おぬしの言う＜キゾク＞とやらが、わしの国では全く別のものを指すのかもしれぬということだ。よって、今のままではおぬしの質問全てに正しく答えることができぬ、と……まあ、こういうわけなのだよ」

このやりとりを聞いたタバサは、太公望に対してさらなる興味を持った。

彼は、コルベールの「どこの国の貴族なのか」という、自分の所属する国と、己がメイジであるのかをいっぺんに聞き出そうとする

質問を逆手に取り、情報を集めるべく自分のペースに巻き込もうとしているのだと判断したからだ。そして、そんな彼女の推測を裏付けるかのように質問は続いてゆく。

「そこでだ、質問に質問を返す形になってしまうが、まずは答えてほしい。先程、そこにおる娘にも問おうとしたことなのだが……さて、いかなる理由でわしはここへ呼び出されたのかのう？」

――まずいことになった。コルベールは、既に内心の焦りを表に出さないようにすることだけで精一杯であった。

異国の装いをした少年を呼び出してしまったことで、すわ国際問題勃発か！？　と慌てて場の調停を行おうとしたものの、生徒たちとほぼ同年代（と、思われる）若い太公望に対して正直油断していたことは否めない。故に深く考えずに発言してしまったが、その言葉の隙を突かれ、会話の主導権を握られてしまった。

彼が本当に、お互いに存在も知らないほどの遠方から来たのか、また貴族……メイジであるのか。ハッキリ言ってそれはもはやどうでもいい。問題は、現時点でこの少年が何者であるのか、全く判断がつかないことである。もしも、彼が異国における貴族だったとしよう。その彼に、

『＜使い魔＞にするためにあなたを呼び出しました』

などと答えたらどうなるか。質問をしなおす？　問題外だ。

こっそり＜魔法探知（ディテクト・マジック）＞を使う？　既に会話を始めてしまっているこの現状ではありえない選択だ。もしも相手の身分が高かった場合、大変な失礼にあたるからだ。コルベールは焦った。だが……焦りは、

思考を鈍くする。

この失策を取り返すためには時間が欲しい。そう考えたコルベールは、問題を先送りすることを選んだ。目の前の生徒と上司には申し訳ないが、事は既に自分の手にあまる。

「そ、そうですね……っと、実はここに集まっている彼らは……この学院の生徒たちなのですが……今後の人生に関わる、非常に大切な儀式を行っている最中でして、はい。私には、その監督をする義務があります。ですので……ミス・タバサ」

と、側に立つタバサに声をかけた。そして懐から1枚の羊皮紙を取り出し、素早く何かを書き付け手渡す。

「彼を学院長室へ案内してください。それをミス・ロングビルへ渡せば優先的に通してもらえるでしょう。あっと、急ぎの用件ですので＜フライ＞を使ってくださいね」

せめてもの抵抗に、どうやら自分の教え子は気付いてくれたようだ。彼女……タバサは、じっと目を見て頷き返してくれた。コルベールは、内心でほっとしていた。

「……わかりました。ついてきて」

タバサは太公望にそう告げると、ふわりと宙に浮いた。

口をあんぐりと開けて、太公望はその様子を見つめた。

と、飛んだ？　宙に浮いた？

予想はしていたが、やはりここに集まる者達は、ただの人間ではない。

改めて周りを見ると、みな『杖』のようなものを持っている。今飛んでいった少女も杖を持っていた。もしや、アレは宝貝（ぱおぺい）の一種なのだろうか？　ここは、自分の知らない場所に存在する仙人の修行場なのであろうか？

そんなことを考えているうちにタバサの姿が小さくなってゆく。太公望は焦った。せっかく主導権を握りつつあるというのに、このままでは置いて行かれかねない。しかし、今の姿で……かわいがっていた霊獣に乗ることなく飛ぶことができるのだろうか。

太公望はふと不安を覚え、懐をさぐった。

彼が愛用している宝貝『打神鞭（だしんべん）』は……そこにあった。念のため取り出してみるも……これといって問題はないように見える。何故か周囲の空気が変わったように感じるが、それはまた後で考えるとして。体内に巡る＜力＞も……自分本来の状態に比べて大幅に落ちてしまってはいるようだが、空を飛ぶ程度ならば問題なくできそうだ。そう判断した彼は、利き手に打神鞭を握りしめたまま、小さく呟いた。

「はてさて……鬼が出るか蛇が出るか。楽しみだのう」

そして、ニヤリと笑みを浮かべた黒髪の少年は、すぐさまふわりと浮き上がり――既に豆粒ほどの大きさになってしまったタバサを追って空を征く。

――その場に残されたコルベールの、正直寂しいといって差し支

えない頭髪が、数十本単位ではらはらと抜け落ちたのは……太公望と名乗った少年の飛翔によって巻き起こった風のせいだけではないということを、念のため付け足しておく。

○●○●○●○●

彼女――『雪風』のタバサは驚いていた。

その驚きの対象は、自身の執り行った＜使い魔召喚の儀＞で人間を呼び出してしまったことではない。師と仰ぐ人物の、思わぬ失態について……でもない。

彼女をして最も驚かせたもの、それは。先に飛び立ち、既にそれなりの距離を稼いでいた自分に追いついてきただけでなく、

「う～む、これはまた異国情緒あふれる風景だのう」

などと軽口を叩きながら、田舎から出てきた観光客よろしくきょろきょろと周囲を観察している彼が見せた『余裕』。それこそが彼女を驚かせた最大のポイントだ。

空を飛ぶ魔法＜フライ＞は、それを扱うメイジの力量によって、飛翔速度を大きく変える。この魔法学院内で、タバサに『空』で追いつける者はほとんどいない。少なくとも彼は、それなりの腕を持った＜風＞の使い手であることは間違いなさそうだ。

タバサは、自分が呼び出した少年に対する評価をまた1段階上げた。

――いっぽうそのころ。トリステイン魔法学院の学院長を務めるオスマン氏は、本塔の最上階にある学院長室で、背もたれつきの高価な椅子に腰掛けながら、ゆっくりと水ギセルの煙を燻らせていた。

今、この部屋には「健康のために喫煙はおやめください」などと言う無粋な人物はいない。喫煙は身体に良くない。そんなこと、遠の昔に自覚している。だからこそ求めたくなるのか……などとぼんやり考えながら過ごすこの時間は、彼にとっては至福の刻。

そんな彼の元へ難題を持ち込んだのは、彼の秘書ミス・ロングビルそのひとであった。いや、正確に言うと、彼女はメッセンジャーの役割を果たしたに過ぎないのであるが。

オスマン氏は、彼女から手渡された羊皮紙を一瞥すると、つ……と眉を寄せてため息をつき、水ギセルを仕舞いながら答えた。

「ここへ案内しなさい、ミス・タバサとその……異国のメイジとやらを」

○●○●○●○●

「なるほどのう。つまりわしは、この娘御が起こした『事故』によって、この地へ呼び出されてしまった……と。そういうことかの？」

ここまで約1時間程、太公望は先方の事情とやらの説明を受けていた。

曰く、この国では＜魔法＞という技術を使う『人間』が『貴族』

と呼ばれること。
　曰く、ここは貴族の子弟たちが＜魔法＞を学ぶための場所であること。
　曰く、そんな彼らに最も適した＜魔法＞を探すために行われる儀式があること。
　曰く、その儀式は「使い魔を喚び、その性質を見て決める」ものであるということ。

　そして、今自分がここにいるのは、その『儀式』とやらのせいであることを。

「私も、それなりに長くこの職に就いておるが＜サモン・サーヴァント＞によって人間が召喚されるなどという事故は初めてのことでの。一学生の起こした不手際ということで、事を大きくしないでくれると助かるのじゃが」

　心の底から申し訳なさそうな顔をしつつ語るオスマンと、固い表情を崩さないタバサの顔を交互に見やりつつ太公望は考えた。

　正直なところ、召喚されたことに関して言えばどうでもいい。むしろ、感謝さえしていると言っても過言ではない。何故なら、彼は心の底から休息を欲していたからだ。

　太公望と名乗ったこの少年――実は、本名を伏義（ふっき）という。

　彼は、見た目はただの少年のようだが、実際には違う。現在の＜肉体＞を得てから、なんと１００年近く生きている、人間を超えた存在＜仙人＞なのだ。しかも、その魂魄（こんぱく）の起源だけでいうなれば、さらに長き時を過ごしてきた、正真正銘の『超越者』なのである。

伏義は、本当に疲れていた。何故なら、彼はこれまで生きてきた永き時の流れの中で『世界の命運』という、たったひとりで背負うには、あまりにも重過ぎる責任をその両肩に乗せ、見守り……待ち望み……仲間を集め……そして戦い続けてきたからだ。

だから、彼は全てが終わり、見守ってきた世界に平和が訪れた後――あらゆる束縛を捨て去り、人々の前からその姿を消した。

……いちばん面倒な戦後処理を他人に押しつけたんだろう、とか、元来持っていた重度のサボリぐせが再発したんだろう、とかいう諸説はさておくとして。

とにかく、ここに至るまでの数ヶ月間――自分を慕う者や、さらに仕事をさせようと自分を追い掛け続ける、大勢の者たちによる厳しい捜索の目を逃れつつ、野を渡る風のごとく気ままな旅を続けていたくらいなのだ。そんな時に、自分を含む誰も知らない土地へ呼び寄せられたというのは、伏義にとって、その場で飛び跳ねて喜びを表現したいほどに歓迎すべきことであった。

自分の『心』を構成するうちの『半分』である『太公望』の部分のみが、この地へ引き寄せられるという事態が、いったい何故発生したのか、その原因は未だ不明ではあるものの……伏義は、既に確信していた。ここが『空間』を越えた『異界』であることを。

かつての仲間達、あるいは周の地へ残してきてしまった残りの『半身』が、ほぼ間違いなく自分を連れ戻しにこの地へやって来るだろうが、それまでの数ヶ月間……いや、もしかすると数年はのんびりぐうたらできるのではないか。伏義は、そう考えた。

そして、伏義――現在は残る『半身』太公望の姿に、持っている

＜力＞までもが戻されてしまった彼は、改めて現在の状況を整理した。

ここまでの情報から判断するに、タバサという少女は本来＜使い魔＞……自分に隷属する存在を呼び出そうとしたものの……何の手違いか、伏義から太公望の部分『だけ』を切り離し、この場所まで連れて来てしまったらしい。そして＜使い魔＞を呼ぶことができなかった場合、今後の生活に不都合が生じるというのだ。

つまり、彼女の命運は彼の手中にあるといっても過言ではないだろう。

ならば、やるべきことは決まっている。

そう……今ある手札を利用して、この地における己の立場を確立するべし！

追っ手の気配に神経を尖らせることなく、悠々自適の毎日を送れるであろう土地へ招いてくれたことには感謝するが、それはそれ、これはこれである。別に誰かに頼らずとも、この世界でひとり生きていく自信はある。しかし、せっかく用意された『ぐうたら生活』のチャンスをふいにするほど、この男『太公望』は生真面目ではない。

なにせ、この男は……とある自給自足の村で、食料を盗んで捕らえられた際に――大勢の村人たちに囲まれ、彼らを纏める長から「労働か処刑か好きなほうを選べ」と迫られるという、ある意味極限の状況下においてもなお、

「働くぐらいなら食わぬ！」

と、突っぱねた程に生粋の怠け者なのである（結局働くはめにはなったが）。

とはいえ、まだ顔に幼さを残すような少女に対して、意地の悪い駆け引きを行うほど彼の性根は悪くない。よって、目の前にいる老人――師であり、かつての上司と似た雰囲気を持つ者に、その矛先が向くこととなる。

――かくして、トリステインを代表する偉大なメイジ・オスマンと、仙人界Ｎｏ．１の腹黒と謳われた軍師・太公望の仁義なき戦いは幕を開けた。

――ここは、決戦場（コロセウム）だ。

魔法はもちろん、剣同士がぶつかる音は聞こえないけれど、目の前で繰り広げられるこれは、間違いなく『戦い』と呼べるものだろう。

風の刃ではなく、言葉をぶつけ合う戦場。競い合うは、トリステインのみならず、他国にまでその名が知られた偉大なるメイジ、オールド・オスマン。その彼に一歩も引かず火花を散らしているのは――わたしが呼び出した『使い魔候補』。タバサは、その激戦を固唾を飲んで見守っていた。

「話し合い」が始まる前に、太公望は彼女に向かってこう言った。

「事故の責任は、おぬしにはない」

……と。

わざとやった訳ではない。とはいえ、彼を故郷から無理矢理見知らぬ場所へと誘拐同然に連れ去ったのはタバサである。にも関わらず太公望は、それを責めるどころか、にっこりと笑ってこう続けたのだ。

「＜使い魔＞とやらに、なってやらんこともないぞ」

タバサは耳を疑った。いくらなんでも人が良すぎるだろうと。

そんな彼の言葉を聞いて、満面の笑みを浮かべたオスマン学院長が、それでは契約を……と、言いかけたその時。タバサは確かに見た。太公望と名乗った少年の瞳の色が、瞬く間に黒く変わるのを。

「では……さっそく条件を詰めるとするかのう。そうだな、まずはここに足止めされることに対する補償その他について、学院側がどの程度支払う用意があるのか、そこから始めるとしようか」

それを起点に発生した『交渉劇』は、オスマン学院長・太公望のどちらも相当な食わせ者であることを実証した。太公望が「学院に対して求める待遇」についての詳細を提示するやいなや、学院長は「あくまでこれは生徒が起こした事故であり、そのような条件を学院側が飲むいわれはない」と返した。

すると太公望は、事故の責任の所在について「生徒は、教師の監督のもと召喚の儀式を執り行ったのであり、故にその場で起きたことに対する責任は監督者、ひいてはこの学院の長たる者にある」と、追求した。責任問題に関して圧倒的な不利を悟った学院長は、それに対して一歩譲ると、学院にいる間の食事、及び寝床の提供を申し

出た――補償金の大幅減額と引き替えに……。

両者の戦いはそれから小一時間ほど続き、最終的に、双方がある一定の条件――

・書類上は＜使い魔＞とするが、お互いを尊重し貴族とほぼ同等の権限を与える
・タバサが卒業するまでの間、学院が太公望の衣・食・住の面倒を見る
・同期間、学院は太公望に対して、所定の給与を支払うこととする
・太公望は＜使い魔＞として常にタバサの側にあることとする
・太公望は、事故ならびにこの場での交渉について口外しない

……を、飲むところで決着した。

「ふぅむ。結局のところ、この交渉はだな……学院が、生徒をどれほど大切に思っておるのか、それに尽きる。わしは、そのように考えておるのだがのう？」

「カァーッ！　ミスタ・タイコーボー……君は、まだこのわしから引きだそうとするか。まったくその若さで抜け目のない……将来が恐ろしいわい」

「かかかか、オスマン殿こそようやりおるわ……ここまで条件を剥ぎ取られたなぞ、わしの記憶の中でもそうはないぞ」

微妙な番外戦を繰り広げる両者を尻目に、いつのまにか席へ戻っていたミス・ロングビルが書面の作成を行っている。おそらく、こ

こまでに交わされた契約内容をまとめているのだろうが、心なしか顔色が悪いように見える。

それにしても……タバサは考えた。人間を召喚したこともそうだけれど、＜使い魔＞が、学院に対して待遇の交渉をするなんて、前代未聞の出来事なのではないだろうか。交渉のテーブルへついた手腕といい、あの高速＜フライ＞といい……まさしく彼は、規格外の＜使い魔＞だ。最初のうちこそ絶望しかけていたけれど、わたしは思わぬ当たりを引いたのかもしれない……と。

――オールド・オスマンは、全身に冷や汗をかいていた。

先程の一戦は、かつて宮廷に住まう魑魅魍魎どもとやりあっていた、今は遠い昔の出来事を、彼の脳裏にまざまざと蘇らせていた。どう高く見積もっても２０歳には届かないであろう少年の交渉術は、まるで老獪な政治家そのものであったからだ。

書面を交わし、その後無事＜コントラクト・サーヴァント＞の儀式を終えた彼らをひとまず退室させると、オールド・オスマンはぐったりと椅子にその身を預ける。と、彼の秘書、ミス・ロングビルが心配そうな顔をして彼の側へと近づいてきた。

「オールド・オスマン？　その……大丈夫ですの？」

オスマンは、目を見開いた。ミス・ロングビルがいつになく優しい！　と。そして彼は、そっと手を伸ばした……彼女のお尻に。だが、僅かに触れるか否かといったあたりで見事阻止されたばかりか、おもいっきり手の甲をつねられてしまった。老い先短い老人の、お茶目なスキンシップなのに……などとぶつくさ言い続けるオスマン

を睨み付けながら、ロングビルは言った。

「まったく、ちょっと甘い顔をするとこれなんですから！　……それにしても、さきほどの件は、いくらなんでも譲りすぎではありませんの？」

彼女の言葉に、オスマン氏は小さく笑った。

「本当にそう思うかね？　ミス・ロングビル。わしとしては、なかなかうまくいったものと自負しておるのだが？」

オスマン氏は、学院長室で水ギセルを燻らせながら、さりげなく見ていたのだ――離れた場所の光景を映し出す効果を持つ魔法具『遠見の鏡』を使い、学院の中庭で執り行われていた＜使い魔召喚の儀＞を。

そこに突如現れたイレギュラー。異常事態に全く動じぬ度胸。異国の技であろう＜系統魔法＞に近いようでいて、ごく一部が微妙に異なる未知の＜魔法＞の使い手にして、今すぐ宮廷で通用するほどに洗練された交渉術の持ち主。

それほどの人材を、たったあれだけの条件で手元に囲うことができたのだ。彼としては、まさに僥倖といって差し支えない。

「それに……」

契約の書面に、オスマン氏がどうしても紛れ込ませたかったのはたったの一文だけ。それ以外は、ただの目くらましに過ぎない

『使い魔として、常にタバサの側にあること』

ミス・タバサはただの学生ではない。あの若者、これから間違いなく苦労の連続になるじゃろうて……そう心の内で嗤う老爺の姿は、まさに狸そのものであった。

○●○●○●○●

太公望――地球に残る歴史においては、古代中国・周の軍師にして政治家。

その実体は、人間たちの住む世界の遙か上空に存在する＜仙界・崑崙山＞教主・元始天尊より、殷の王を影から操り国を乱す、邪悪な仙人たちを打倒せんと立てられた壮大な作戦――『封神計画』の実行責任者として下界に遣わされた＜仙人＞である。

周囲の期待に応え、周軍の軍師として殷（いん）を滅ぼし、仲間の仙人達を率いて『封神計画』の影に巧妙に隠された真の目的『歴史の道標』打倒を果たした最大の功労者は今――ひとりの少女の＜使い魔＞になっていた。

「ごめんなさい」

トリステイン魔法学院は、本塔とその周囲を囲む壁、それと一体化した5つの塔からなる。自室がある寮塔へと向かう道すがら、タバサは自分の＜使い魔＞となってしまった少年――太公望へ謝罪していた。

「む、何のことだ？」

学院長とあれほどのやりとりができるのだから、そのくらいわか

っているだろうに。わざわざ聞き返すなんて、実は結構意地悪なひとなのかもしれない……そんな思いを欠片も外へ出さず、タバサは再び言葉を紡ぐ。

「あなたを召喚してしまった」

「さっきも言ったが、おぬしに責任はない。これはあくまで事故なのだ。そもそも、自分の意志でわしを呼び寄せたわけではなかろう？」

「でも」

それでも、変わらない事実がある。

「あなたを、故郷から無理矢理引き離してしまった」

「そのことなら気にすることはない。そもそも――」

そこまで言った太公望は、先程までの饒舌ぶりが嘘のように、ほんの一瞬口ごもった後――タバサにとって、完全に予想外となる言葉を返してきた。

「呼んでもらえて、逆に喜んでいるくらいなのだ」

思わず絶句してしまったタバサだが、なんとか思考を立て直す。

励ましの言葉……ではないだろう。

単なる強がり……でもなさそうだ。

喜ぶ？　彼の言葉が本当なら、異国へ拉致されたことを歓迎するような何かがあるということだろうか。そこまで考えるに至って、まさか、悪事を働いて追われるような事をしていたのではあるまいか……という不安がよぎる。

そんな彼女の胸の内を見透かすように、太公望は続ける。

「ここ何年ものあいだ、ずっと働きづめでのう。いい加減疲れておったので、暇をもらってのんびりしておったところなのだよ。そこへ、なんと！　見たことも、聞いたことすら国から招待を受けたと、まあそういうわけなのだ。ハッキリ言って、こんなに嬉しいことはないわ」

タバサは、それを聞いて呆然とした。

「学院長には」

「建前上、というやつだよ。それに」

ニヤリと笑った太公望は、人差し指をピッ、と立ててのたまった。

「もらえるモノは、もらっといたほうが良いであろう？」

……と。

タバサは思った。このひとは、とんでもない曲者なのではないだろうか。使い魔として契約したのはいいが、果たしてわたしに使いこなせるのだろうかと。いや、この程度の人材を御せぬようなら、秘めた目的を果たすことなど到底できないに違いない。もしや、これはわたしの信仰心の低さ故に与えられた『始祖』ブリミルによる

試練なのでは……。

俯き、押し黙ってしまったタバサを見て……太公望は、彼にしては珍しく焦りを覚えていた。学院長室でのやりとりを彼女に見せたのは、失敗だったのではなかろうか、と。

先程の言葉は本心だ。実際、彼女に対して含むところなど全くない。だが、あの応酬を側で聞かせてしまったせいで、罪の意識を持たせてしまったのではないか。ならば、なんとかその重さを取り除かねばなるまい。何かよい方法はないものか――そう考えた。

――この男。腹黒などと呼ばれる割に、根の部分は非常にお人好しなのである。

「そうだのう……そんなに気になるのなら、頼みがあるのだが」

その一言を聞いて顔を上げたタバサを見て、内心「食いついた！」と安心する太公望。釣り師の面目躍如である。もちろん、それを顔に出したりはしない。

「わしは、喚ばれてから説明を受けたこと以外、ここについて何もわからぬ。だが、これから生活をしていくにあたって、知らぬと不便なことが多いと思うのだ……ここまではよいか？」

頷くタバサ。

「よって、おぬしにそういった細かいことを教えてもらいたいのだ。それを引き受けてくれるのなら、おぬしとわしとの間に貸し借りはナシ。それでどうだろうか？」

「わかった。貸し借り無し」

「では、契約成立だのう」

そう言って太公望が差し出した片手を、タバサは両手でしっかりと握り返した。二度と手離さない、と言わんばかりに強く、しっかりと。

第1話　雪風、使い魔を得るの事（後書き）

コルベール先生は、人が良さ過ぎてこういう舌戦は苦手だと思うのです。

なお、今回の再編成に伴い問題を押しつけられた学院長ｖｓブラック軍師の戦いと、以後のやりとりを1つにまとめました。

なお原作での太公望は「道士」とされていますが、封神演義を知らない方が混乱しないようあえて「仙人」としています。

今後のネタバレ：ルイズはサイトを呼びます。

２０１１／０８／１７　追記：視点があまりにも移動しすぎて読みづらかったため、固定しました＝ほぼ全面改定しました。

２０１１／０３／２０　誤字、改行位置を修正
２０１１／０５／０３　一部加筆修正、及び統合、改行位置などを修正
２０１１／０５／１８　一部誤字脱字修正、本文加筆
２０１１／０６／０７　タバサに関する説明及び本文加筆修正
２０１１／０７／１６　太公望と伏義に関する説明及び本文加筆修正
２０１１／０８／１７　本文全面改定

第2話　軍師、新たなる伝説と邂逅す

――太公望がタバサの部屋で、新たに訪れた世界『ハルケギニア』の成り立ちについて詳しい説明を受けはじめた頃。未だ続いていた＜使い魔召喚の儀＞において、再び現場監督兼責任者たるコルベールの頭皮を直撃するような事態が発生していた。

「あんた誰？」

「誰って……俺は、平賀才人」

そう――またしても『人間』が召喚されてしまったのである。

「おいおい、『ゼロのルイズ』まで人間を呼び出したぞ！」

「う、うるさいわね！　ちょっと間違っただけよ！」

「間違いって、ルイズはいつもそうじゃん」

さきほどの件もある、下手な対応はできない。そう判断したコルベールは、新たに召喚された人物を詳しく観察する。

「な、なんなんだよ、ここは！　コスプレ会場？　おい、まさか新手の新興宗教か何かの集まりじゃないだろうな！？」

おそらく、突然行われた＜召喚＞に戸惑っているのだろう。意味不明なことを口走りながら、周囲をきょろきょろと見回しているが……正直、これが普通の反応だとコルベールは思った。さっきの子供は、あくまでも例外だと。

「ひょっとして、映画かなにかの撮影か？　カメラはどこだ！　あっちか！？」

ひたすらわめき続ける少年の服装を、コルベールは詳しく分析する。

彼が羽織っているのは、青い……フードつきの胴衣だろうか。それにスラックスを履いている。タイコーボーと名乗った少年と比べるとだいぶ地味なものを身につけているが、これまたトリステインではまず見ないであろう造りの服だ。使われている布地自体も、今まで見たこともないような光沢を放っている。

さらにコルベールは、召喚されてきた者の顔形にも注目した。黒い髪と瞳、そして、やや黄色がかった肌の色といった特徴が、微妙に先の子供とかぶる。

もしかすると、彼も『シュウ』という国から来たメイジなのかもしれない。コルベールは、少年に気取らぬよう、こっそりと＜魔法探知＞を唱えた。

魔法の反応は――なし。つまり、彼は平民だ。

コルベールは、心底ほっとした。これで脅威レベルは大幅に下がったといって差し支えないだろう。だが、念のためだ。この少年に対してあまり無体な扱いをしないよう、しっかりと注意をしておいたほうがいいかもしれない……そう判断した彼は、儀式を執り行った生徒に対し、必要と思われる指示を与えた。

――平賀才人（ひらがさいと）17才、高校2年生。

蒼き星『地球』の、平和な国家・日本に生まれた、ごくごく普通の――まあ、ちょっとミリタリー系に寄ったオタク趣味があり、出会い系サイトに登録して絶賛彼女募集中という、女の子に対して積極的だかそうでないのか、イマイチよくわからない性格の持ち主ではあったが――どこにでもいるような、平凡な男子高校生である。

担任教師の彼に対する評価は、

「ああ、平賀くんですか。成績は学年内では中の中といったところです。負けず嫌いで好奇心の強いところは評価できるけれど、ちょっとヌケてるところがありますね」

母親の口癖はというと、

「もっと勉強しなさい。あんた、どっかヌケてんだから」

才人は、ヌケているだけに突発した出来事にほとんど動じることなく、割と何でも受け入れられる性格であった。ここで、あえて彼を悪く言うなれば……物事を深く考えず、口や身体が先に動いてしまうタイプといったところであろうか。

そんな、どこにでもいるような少年の運命は、この日――日本の首都である東京・秋葉原の街にあるパソコンショップで修理が済んだばかりのノートパソコンを受け取り、都内にある自宅へと帰る途中……奇妙な『物体』と遭遇してしまったことで、一変した。

「なんだこりゃ？　電光掲示板……じゃ、ないよなあ」

縦2メートル、横幅は1メートルぐらいのぴかぴか光る楕円形の物体が、彼のすぐ側に突然現れたのだ。おまけに、どうなっているのか理屈は全くわからないが、それは宙に浮かんでいるようであった。

「鏡みたいにも見えるけど、厚みは全然ないみたいだな。蜃気楼ってわけでもなさそうだし、どうなってんだこれ？　ただの自然現象にしちゃおかしいよな」

才人の好奇心が激しく疼いた。彼は、この物体が一体何なのか知りたくなった。そして、その『鏡』のような物体をまじまじと見つめ――とりあえず『実験』を開始した。

まずは、足元に落ちていた小石を投げつけてみた。すると、なんと石は鏡の中へと消えてしまったのだ。裏側にも落ちていない。何個放ってみても結果は同じであった。

「ほほう。なかなか面白いじゃねーか」

続いて、棒で突っついてみたのだが――何も起こらなかった。少なくとも、棒の先が折れたり、傷ついたりといったようなことはなかった。そこで『分析』をやめていればよかったのだが……よりにもよって、才人はそこに自分が触れたらどうなるか。それを試してみたくなってしまった。

「棒はなんともなかったんだから、俺が触っても危険はないってことだよな！」

最初はやめようかとも思った。しかし、すぐにそれは「ちょっとだけなら」に、変わった。さらに「くぐってみよう」に変化した。

非常に短絡的かつ、いけない性格である。

そして。なんと彼は大胆にも『鏡』の中に、上半身を突っ込んでしまったのだ。

――その結果。才人少年は、鏡の中にあった『道』に引きずり込まれ、まるで全身に電気を流されたような激しいショックに襲われた。そして彼は、馬鹿なことをしてしまったという後悔に苛まれつつも、そのまま気絶してしまった。

気が付いた時には、見知らぬ異世界『ハルケギニア』に＜召喚＞されており。

その混乱から立ち直れないうちに――問答無用で――地球では、お伽噺の中にしか存在しないはずの＜魔法使い＞にして大貴族の三女『ゼロのルイズ』ことルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの＜使い魔＞にされてしまった。

『好奇心は猫をも殺す』とはよくいうが、才人はその典型的な例といえるだろう。

――この物語本来の『道』を辿っていれば、才人はその最初の１ページ目からして相当な苦難に見舞われるはずであったのだが、偶然先に召喚されていた人物のおかげで――間接的なものではあるが、綴られるべきであった『歴史』よりも、ほんのちょっとだけ扱いが良くなったことを、念のためここに記す。

○●○●○●○●

――同日。時刻は、既に夜となっていた。

太公望は、タバサから「この世界における一般的な常識について」説明を受けつつ窓の外を見た。そして、断定した。

やはり、ここは地球ではない。決定的な証拠がある。空に浮かんだあの巨大な月だ。

百歩譲って、そう見える土地があったのだとしても。２つあるのはどう考えてもおかしい。ふと、月の側に浮いていた宇宙船『スターシップ蓬莱島』の存在が頭をよぎったが、アレがあんな風に見えるはずがないのだ……それに。

「メイジ、か」

この世界における＜メイジ＞と呼ばれる存在。当初は自分達＜道士＞や＜仙人＞と同じようなものだと考えていた太公望は、それが全くの思い違いであると知らされた。

――仙人とは「生命としての道を究めんとする者」。

『仙人骨』という、１００万人に１人の確率で生まれる特殊な骨格を持った者が、空間を隔てた異界である＜仙人界＞の者から『スカウト』を受け、そこで長い修行を積むことで『生命の道』を極め、不老不死となったのが＜仙人＞だ。

＜仙人＞になると、年をとるのが極端に遅くなる――よって、若いうちに『秘法』を極めることができた者ならば、たとえ１００年経過しても、若者の姿のまま生き続けることになる。太公望はその典型的な例だ。しかも、彼らは寿命で死ぬことがない。

また、他者に害されて肉体が滅んでも『魂魄（こんぱく）』さえ残れば、意識を保った上で活動することができる。熟達した者ならば、その状態から新たな肉体を得ることすら可能なのだ。

そんな彼ら＜仙人＞は『宝貝（ぱおぺい）』と呼ばれる特殊な道具を用いて、周囲の気象を操るなど、強力な事象を発生させる＜力＞を持つ。また、これはごく一部の者に限られるが＜仙術＞と呼ばれる特殊な技能によって空を飛んだり、水を酒に変えるなどの摩訶不思議な現象を引き起こせる者たちも存在する。

――メイジとは「魔法を使う者」。

『魔法語（ルーン）』と呼ばれる特定のキーワードを口にすることで、それに対応した事象を発生させることができる。寿命は一般的な人間とほぼ同様。ただし＜メイジ＞の血を引かぬ者は、どんなに努力しても＜魔法＞を使うことはできない。このあたりは＜仙人＞に近いものがあるといえるだろう。

なお、魔法を使うためには、特殊な契約を結んだ『杖』を用いる必要がある。つまり、杖を持たぬメイジは普通の人間となんら変わらぬ存在ということだ。

＜力＞を持たぬ者から見ると、まるで奇跡だとしか思えないような事象を引き起こすことができるという点において、一見似通っているようにも思える両者なのだが……その在りかたが大きく異なる。

＜仙人＞は、基本的に『人間』とは異なる存在であり、その強大な＜力＞ゆえに＜人間界＞に与える影響を恐れ、積極的に世界へ干渉することは――ごく一部の例外を除き、ほとんど無いといっても

過言ではない。

いっぽう＜メイジ＞は、その多くは王族、あるいは貴族として各国の支配階級となり『平民』と呼ばれる＜力持たぬ民＞たちの上に君臨している。

なるほど、自分の持つ宝貝『打神鞭』は、彼らの持つ『杖』のように見えなくもない。懐から『打神鞭』を取り出したあの時、周囲の空気が変わったのはそういった事情があったからなのかと、太公望は納得した。それにしても――。

「皮肉なことだのう」

「何？」

太公望のつぶやきを耳に留めたタバサは問う。

「いやなに、こっちのことだ」

思わずため息をつきながら、太公望はタバサに先を促す。

この世界における価値観についてどうこう言えるほど、太公望は自惚れてなどいない。しかし、よりにもよって『強大な力をもって、民衆を支配する邪悪な仙人』を打倒すべく戦ってきた自分が、その『敵』とほぼ同じ立場の者であると認識されてしまったというのは――正直なところ複雑な気分であろう。

『所変われば品変わる』と言うしのう……と、なんとか自分の気持ちに折り合いをつけようと太公望が苦戦していたところへ、コン、コンッと規則的に扉を叩く音がした。来訪者は、ミス・ロングビル

と、大きな荷物を持った学院の使用人だった。

「お二人にはしばらくご不便をおかけしてしまいますが……」

「別にいい」

「部屋の主がこう言うのだ、わしもかまわぬぞ」

ミス・ロングビルたちが持ち込んだのは、敷物と毛布であった。曰く、突然のことで部屋に空きがなく、寝具の用意もままならなかった。寝具については早急に手配するが、部屋については申し訳ないが、しばらくタバサの部屋で寝泊まりしてほしい、と。

しきりに恐縮しながら部屋を去る彼女たちを見送った後、扉を閉めようとしたタバサは、太公望によってそれを阻まれる。

「さて夜も更けた。今日はここまでにして、寝るとしようかの」

「それなら何故」

タバサは問うた。いったいどうして、扉を開けっ放しにしているのか？

「おぬし、その服のまま眠るわけではなかろう？　着替えが終わるまで外におるから、済んだら声をかけてくれ」

そう言って振り向きもせず廊下へ出た太公望は、後ろ手で扉を閉めた。

「……意外に紳士？」

思わず漏れたタバサのつぶやきは、幸いにも彼の耳へは届かなかった。

○●○●○●○●

――そして、翌朝。

太公望が目覚めて最初に見たものは、知らない部屋だった。わしはまだ夢の中にいるのだろうか？

寝起きでぼんやりした顔のまま、周囲を見回す。ああ、そうだ＜召喚＞されたのだったな……と、前日の出来事を思い出した。

「くぁ……」

太公望は、床の中で伸びをしてから起き上がった。部屋の主であるタバサは、まだ寝台の上で寝息を立てている。改めて観察すると、ずいぶんと幼く感じた。昨日は終始緊張していたようだが、今こうして見る寝顔は、年相応のそれに思える。

夜明けまで、まだ余裕がある。だいぶ早起きをしてしまったようだが、周囲の様子を確認するには丁度いい。少女を起こさないよう、太公望はそっと窓を開け外へ飛び出した。

……ちなみに、タバサの部屋は高い塔の5階にある。

タバサの部屋から出た太公望は、まずは付近の地形を確認するべく、学院の遙か上空へと舞い上がった。

出てきた塔から見て、右手に大きな石造りの塔が建っている。昨日案内された学院長室があるのがあそこだろうと当たりをつけた。その塔を中心に、五角形の外壁と、その頂点を結ぶように中央の塔より背の低い塔が位置していた。子供たちの学舎と聞いていたが、城といっても差し支えない、立派な佇まいである。

「さて、まだ時間はあるようだし、街の場所も確認しておきたいところだが」

ここが「メイジたちの修行場」であるのなら、街は別の場所にあるはずなのだが、しかし、学院の周囲にそれらしきものはなく。おそらくここは、一般の人間たちが住む場所から相当離れているのだろうと太公望は推測した。もっと高度を上げるか――そう思ったとき、眼下に通行人を見つけた。

――いっぽうそのころ。平賀才人は、道に迷っていた。

朝。目が覚めて、昨日のアレ――突然、異世界の美少女魔法使いに＜召喚＞されたことが『夢』などではなく現実なのだと、改めて思い知らされたばかりであったのだが……しかし。持ち前の好奇心が、後悔に勝ってしまった。なんとも本当に懲りない男である。

すぐ側にあるベッドの上で、今もぐーすか寝ているご主人さまを起こしたら、色々とうるさいことになる。そう判断した才人は、足音を忍ばせ、こっそりと外へ出た。

そして、彼はさっそく学院の周囲を散策しはじめた。目の前に広がる未知の光景に、きらきらと顔を輝かせながら。

「すっげえな！　中世ヨーロッパのお城みたいじゃないか！！」

石で出来たアーチ型の大門に、同じく重厚な石造りの階段。規則正しく植えられている立木たち。もはや完全に観光旅行気分で、才人は異世界の探検を続ける。

だが、そんなふうに調子に乗って長時間あちらこちらと歩き回っているうちに、才人はなんと、元いた部屋がどこにあるのか、さっぱりわからなくなってしまった。

才人は焦った。何故なら、自分をこの世界に＜召喚＞したルイズという名の少女から、＜使い魔＞の役目として、朝、指定の時刻になったらわたしを起こすようにと厳しく申し渡されていたからだ。

もちろん、当初は才人も反抗した。なんで俺がそんなことをしなければいけないのだと。元いた場所に戻せと叫んだ。そもそも、何の説明もなく無理矢理＜使い魔＞などというモノにされてしまったこと自体が、彼にとっては気にくわないことだったのだ。

しかし、ルイズはそんな才人の抗議を受け、こう返してきた。

「なに言ってるのよ！　＜サモン・サーヴァント＞の呼びかけに応えるって決めたのは、あんたでしょう!?　自分の意志で『召喚の門』をくぐったんだから!!」

そう言われて、初めて才人は知ったのだ。あの『光る鏡』が、このハルケギニアと呼ばれる異世界へ続く『扉』だったということと――それが＜使い魔＞を召喚するためのものだったのだということを。続いて、彼はさらなる衝撃の事実を知らされた。

「だいたい＜サモン・サーヴァント＞は、召喚に応えた＜使い魔＞を、自分のところへ呼び寄せるための魔法なのよ。元の場所へ戻す機能なんて、ついてないわ。おまけに、異世界って何よ！　意味のわからないこと言わないでよね」

そう、なんとルイズは……いや、この世界の＜魔法使い＞たちは、ここことは異なる世界――日本はおろか、地球の存在すら知らないらしい。つまり、どうやって元の世界へ帰ればいいのかわからない。その手がかりすら無い状態なのである。

一瞬、ここから脱走することも考えた才人であったが、逃げてどうなるわけでもない。なにしろ、行くあてもなければ、この世界には頼れる人間すら存在しないのだ。

今の才人にとって、唯一縋れるのは……目の前にいる、桃色の髪を持つ小生意気な女の子だけなのだ。つまり、身の置き方が定まるまでは、大人しく彼女の言うことを聞くしかない。そうしなければ、ここでは生きていくことすらできそうもないから。

激しい問答の末、ようやくそれを悟った才人は、仕方なくルイズの＜使い魔＞としてやっていくことを決意した。彼女の部屋の掃除や洗濯、その他雑用を引き受けることによって、この世界で生きるための――寝床と食事を確保するために。

……にも関わらず、彼はまたしても好奇心に負けてやってしまったのだ。朝、少女を起こすというごく簡単な仕事すらできないと思われてしまったら、どうなるかわからない。

才人が本気で困り果てていたその時だった。後方から救いの声が

聞こえてきたのは。

「そこのおぬし、ちと尋ねたいことがあるのだが、かまわんかの？」

――俺より年下か、同じくらいの年齢に見えるのに、妙にジジくさい喋り方をするヤツだなあ。平賀才人の、太公望に対する第一印象はそんなものであった。

「ん、何？」

「ここから一番近い街へはどう行けばよいのか、教えてはもらえぬかのう？」

才人にそんなことがわかるわけがない。彼は昨日、いきなりこの世界に連れてこられたばかりだったし、そもそも現時点で自分が迷子になっているような状況なのだ。だから、才人は正直にそう答えることにした。

「悪い、俺もまだここに来たばっかでさ。それよか、寮塔ってどこにあるか知らないか？　ここってすっげぇ広いだろ、迷っちまって」

「なぬ？　それなら、ここから正反対にある……あの塔だ」

先端に宝玉のついた、教鞭のような杖で示された場所を見て――才人は驚愕した。

「うっ、めちゃくちゃ距離あるじゃねーか。こんなに遠くまで来てたのかよ！」

才人はガックリと肩を落とした。

「ああくそ、またやっちまった！　このままじゃ、俺……どうなるかわかんねえぞ」

あの、顔は可愛いのにやたらとキビシイご主人さまのことだ。このままでは＜使い魔＞に必要な教育だ、などと言って『食事抜き』という名のオシオキをされるかもしれない。いや、最悪の場合……身一つで追い出されて、見知らぬ異世界で行き倒れ……なんて結末すらありえる。そんなことになったらどうしよう。

才人は落ち込んだ。ぺしゃんこになった。マリアナ海溝の底より深いところまで引きずり下ろされたクラゲもかくや、というレベルまで。

「こんなところで迷ってて……間に合わない……絶対やばいって……」

顔を真っ青にして、ブツブツと呟いている。そんな才人を海溝の底からすくい上げ、もとい釣り上げたのは、質問に答えてくれた少年だった。

「まあ、今日のところはこのあたりにしておくか。おぬし、ずいぶんと急いでおるようだのう。どれ、わしが一緒に連れて行ってやる」

「は？　連れて行く！？」

「おぬし、高いところは大丈夫かの？」

え？　どゆこと！？　才人は、完全に混乱してしまった。

「ああ、大丈夫だけど」

なに真面目に答えてんの？　俺。今、それどころじゃないだろ。混乱を続ける才人の内心を知ってか知らずか、太公望はその場でくるりと背を向けると――彼にこう告げた。

「そうか、ならば肩に掴まれ」

……そして才人は、再び奇跡を『体感』することとなる。

○●○●○●○●

「ファンタジーすげえ！！」

――才人は思わず叫んでいた。

＜魔法使い＞の背に乗って見た朝日は、彼がテレビで見たことのある環境番組のワンシーンよりも、ずっと綺麗だった。すげえよ、これでこそ魔法の世界だよ！　これから、まだまだ見たことのないモノを見ることができるんだろうか。才人の胸は、見知らぬ『異世界』への期待と好奇心によって、激しく躍った。

今、目の前に広がるこの景色をもっと楽しんでいたい。だが、そんな才人の気持ちとは裏腹に、ゆっくりと地面が近づいてくる。そうだ、忘れちゃいけない。急いで部屋へ戻らなきゃいけないんだ。才人は、それを残念に思いながらも、こんな凄い体験をさせてくれ

た、親切な＜魔法使い＞に心の中で感謝した。

「それ、着いたぞ。　わしはここで失礼する。ではの」

寮塔の前へ舞い降りた後、立ち尽くしている才人に声をかけた＜魔法使い＞は、再びふわりと浮き上がる。それを見て、才人は慌てた。いやいやいや、ボケッとしてる場合じゃない、コイツに言わなきゃいけないことがあるだろうと。

「あ、ありがとう、助かったよ！　俺、平賀才人っていうんだ。お前は？」

満面の笑顔で礼を告げた才人に、恩人は何でもなさそうな顔で答えた。

「礼などいらぬ、これも何かの縁だ。わしの名は『太公望』呂望。この学院にいれば、そのうちまた会うこともあるだろう」

そう言い残して、タイコーボー・リョボーと名乗った少年は飛び去っていった。

その背中を見送りながら、才人は思った。なんだよ、魔法使いって、ひとの話を全然聞かないようなヤツばっかりだと思ってたけど、中にはいいやつもいるじゃないか。しゃべり方は、なんだかうちのじいちゃんみたいだったけど――。

「って、感慨にふけってる場合じゃねえ！」

慌てて塔の階段を駆け上がっていく才人。その後、思わぬ邂逅を果たした『伝説』たちが再会を果たすのは――本人たちが考えるよ

りも、ずっと早かった。

第2話　軍師、新たなる伝説と邂逅す（後書き）

2話分を再編成しました。
シエスタの登場は、もうちょこっとだけ後なんじゃ！

2011／08／27　追記
原作小説ではなく、アニメ版ゼロ魔から入った、あるいは封神演義クロスということで本作品に興味をもってくださった方が結構いらっしゃるようなので、才人について、改めて加筆修正をしてみました。いったい、彼がどういう経緯で召喚されてきたのか。彼の性格で、何故おとなしく使い魔をやっているのかなど。なお、原作と微妙に展開が違っているのは、彼よりも先に召喚されたひとがいろいろやらかしたからであります！

2011／03／20　誤字、改行位置を修正
2011／05／03　一部加筆修正、及び統合、改行位置などを修正
2011／06／07　才人に関する説明文その他本文加筆修正
2011／07／13　誤字脱字修正、本文加筆修正
2011／08／27　誤字脱字修正、才人がらみの本文加筆修正

第3話　軍師、異界の修行を見るの事

……事ここに至って、太公望は己のうかつさを呪った。

トリステイン魔法学院の食堂は、学院の中央に位置する本塔の中にあった。食堂の中には、１００人はゆうに座れるであろう長いテーブルが3つ、並んでいる。タバサたち2年生のテーブルは、真ん中だった。

貴族と同等の扱いをする、という契約を交わしていた太公望は、当然のことながらタバサとともに、この食堂で食事をとることを許されている。もちろん、その内容も貴族のそれとまったく同じだ。

大きな鳥のローストが、鱒の包み焼きが、威圧するように太公望の前に並んでいる。

「このわしとしたことが……なんという……」

――あまりの事態に、太公望は息を飲んだ。

「偉大なる始祖ブリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもうたことを感謝致します」

祈りの唱和を終え、料理を口にしようとしたタバサは、隣にいる太公望が固まったように動かないことに気がついた。ほんの少しの間を置いて、太公望がボソリと呟く。

「……タバサよ。わし、肝心なことを伝え忘れとった」

「それは何？」

「わしは……なまぐさが食えぬのだ」

タバサは驚いた。太公望曰く、彼はなまぐさ――つまり肉や魚の類は一切食べられないのだそうだ。これまで住んでいた地域では、たとえ初めて訪れる店であろうとも、彼の服装を見ればすぐにそれに相応しい食事を出してもらえたのだという。

そう言って、しょんぼりと頭を垂れる太公望の姿は、見た目の年齢相応なもので。昨日見せたそれとはまるで別人のようだ。こんな顔もするのか……などという『雪風』らしからぬ感想を胸に抱きつつ、タバサは質問する。

「あなたが食べられるものは？」

「野菜や果物なら問題ない。それと、なまぐさを使わぬ菓子の類かのう」

「わかった。お昼からはそのように厨房へ伝える」

「すまぬ、感謝する」

パン！　と両手を叩くように合わせ、礼を述べる太公望。

国が変われば習慣も変わる。この国へ呼ばれた時に、太公望自身が言ったことだ。にも関わらず、食事のことを伝え忘れるとは……正直とんだ失態である。

「せっかく出してくれたものを残すというのは、実に忍びないこ

となのだが……」

そう言って料理を脇へよけ、フルーツをつまむ太公望にタバサは申し出る。

「わたしが食べる」

「ぬな!?　かなりの量だぞ」

「大丈夫、問題ない」

その後、タバサは唖然とした太公望を尻目に2人分の朝食――フルーツは太公望とトレードした――をあっさりと完食した。

――ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールは現在、不機嫌の極みにあった。

ただ独り離れた席につき、誰にも聞き取れないほどの小声で、ぶつぶつと恨み言を呟き続けている。

「魔法の成功率ゼロ。そんなあたしが、ようやく成功させた魔法の結果が『アレ』って、いったいどういうことよ。ドラゴンとか、グリフォンとか、そんな＜使い魔＞が来てくれれば嬉しかったけど。このさい、小鳥とかネズミでもいいって思ってたけど……」

フォークを握る手に力が籠もる。

「それなのに、よりにもよって『ただの平民』が来ちゃうって、どういうことよ。怨敵ツェルプストーにまでバカにされちゃったじ

ゃないのよ！」

ルイズは、悔しかった。彼女が呼び出した使い魔は生意気で、主人の命令を聞こうとしないばかりか、他の世界から来ただのなんだのと、訳のわからないことを言う。無体な真似をしてはいけないと、監督教師から釘を刺されていたため、厳しく『しつけ』ることもできない。あたしは、自分の使い魔にすらバカにされるのかと、ぎりっと唇を噛んだ。

「どうしてなのよ。同じ人間が来るなら、せめて……」

自分の向かい斜め奥の席に座るふたりにチラリと視線を向けながら、ルイズは呟いた。

「あの子みたいに、異国のメイジだったなら――何かが掴めたかもしれないのに」

そう……彼女『ゼロのルイズ』には、大きな悩みがあった。

普通のメイジならできて当たり前なことが、一切できない。どんな呪文を唱えても、失敗――何故か＜爆発＞させてしまうのだ。

もしもルイズがごくごく平凡な、身分の低い貴族であったなら、そこまで大きなプレッシャーを感じることはなかったのかもしれない。そして、自分の持つ『可能性』に気づき、別の『道』を歩めたのかもしれない。

――だが、彼女はよりにもよって、公爵家に生まれてしまった。

トリステイン王家の傍流たる名家。三女とはいえ、それほどの高

貴な血筋をもつ者が、現状のままでいていいはずがない。生真面目な彼女には、それが苦痛だった。

故にひとり殻の中に閉じこもり、常に眉間に皺を寄せ、他者を寄せ付けない威圧感を放っていた。そんな状況で他人の話を聞く余裕など、あるわけがない。それも……彼らの間の価値観では圧倒的に身分が低いとされている『平民』が相手ならば、なおさらだ。

よって、ルイズは自分が呼び出した使い魔に対しても、一切心を開くことはなかった。全ての価値観が＜魔法＞のあるなしによって決められるといっても過言ではないこのハルケギニアの社会において、これは当然ともいえる帰結である。

……いっぽうそのころ、そんなご主人様の胸の内など知るよしもない＜使い魔＞――異世界『地球』出身の少年・平賀才人は、使い魔召喚の儀を監督していた教師コルベールの計らいにより、本来の歴史とは異なる場所――アルヴィーズの食堂の床ではなく、厨房の片隅にある平民たちの休憩所で、まかない食をもらっていた。

○●○●○●○●

――メイジは、人間・妖怪を問わず、多くの弟子を取るのか。

もしも昨夜、召喚主からこの『修行場』についての説明を受けていなかったら……教室に入った直後、太公望はそのような感想を持ったかもしれない。それほど、室内は多種多様な生き物たちであふれている。タバサと太公望が中に入っていくと、燃えるような赤く豊かな髪をもった娘が、中央付近の席から笑顔で手招きをしていた。

「おはよう、タバサ。それと、ミスタ……？」

「太公望呂望と申す。太公望と呼んでくれ。失礼だが、おぬしの名を教えてはもらえぬだろうか？　わしの記憶違いでなければ、初対面だと思うのだが？」

にっこりと……いや、妖艶に、と言い直したほうがいいだろう……一般的な男なら、誰でもあっさりと魅了されてしまいそうな微笑みを浮かべながら、少女は口を開いた。

「まあ、遠国の出身らしい変わったお名前ですのね。私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。あなたを召喚したタバサの親友よ。二つ名は『微熱』。キュルケでよろしいわ」

キュルケはちらりとタバサのほうを見て言った。

「タバサ、なかなか素敵な殿方を召喚したものね」

「駄目」

「もう、わかってるわよ。取ったりなんかしないから」

なにやら不穏な台詞が飛び出したような気がしなくもないが、言葉を交わす2人の姿は、その身長差も手伝って、親友というよりも、まるで仲のいい姉妹のようだ。そして誘われるように席へ掛けた太公望（ちなみに並び順は向かって左からキュルケ、タバサ、太公望である）は、改めて室内を観察する。

巨大な目玉が浮いている。その他にも、巨大なトカゲにフクロウ

……あそこにいるのはコウモリか。なるほど、これらが本来＜使い魔＞と呼ばれるべき者たちか。

主人の目・耳となり、時には盾となってその身を守る『パートナー』。それが、この世界において＜使い魔＞と呼ばれるモノの定義だと聞いた。たしかにあれらの存在と比べたら、自分はとんだ『例外』で『珍しい』のだろう。その証拠に、室内のあちこちから無遠慮な、それでいて好奇に満ちた視線を感じる。

……と、ふいに己への注目が後方へと逸れ、代わりにくすくすと小さな笑い声が聞こえてくる。なんとなしに気になった太公望が後方を振り向くと、ちょうど桃色の髪をした少女と、黒髪の少年が連れ立って入ってくるところであった。

――なんか、大学の講義室みたいだな。才人は、学院の教室内を見てそう思った。

才人とルイズが中に入っていくと、先に教室へ来ていた生徒たちが一斉に振り向いた。単に注目を集めただけではない。何やら、馬鹿にされているような空気を感じる。その証拠に、自分たちを指差してくすくすと笑っている者までいる始末だ。

なんかやな感じだな。と、才人が実に居心地の悪い思いをしていると……教室の片隅に、見覚えのある顔を発見した。あそこにいるのは、今朝親切にしてくれた、あの＜魔法使い＞じゃないか！

才人は、思わず叫び声を上げてしまった。

「あっ！　お前、このクラスだったのかよ！」

「平賀才人ではないか！　また会うたの」

＜魔法使い＞のほうも、すぐに才人の姿に気がついたようで、笑顔で手招きをしている。才人はそれがなんだか嬉しくて、急いで彼の側へ駆け寄っていった。

「才人でいいよ。今朝はありがとな」

「困ったときはお互い様だ、まあ座るがよい」

才人は、横にあった椅子を引き寄せた太公望に、自分の隣に座るよう勧められる。もちろん、喜んでそこへ腰掛けた才人。そしてそのまま、ほとんどなし崩し的に異文化交流が始まるかと思いきや……それは、耳をつんざくような大声によって遮られた。

「つ、つ、使い魔が、ご、ご主人様放っといて何やってんのよ――！！！！！」

すわ物語が開始してから初の直接戦闘開始かと思われたが、しかし。紫色のローブに身を包み、とんがり帽子をかぶった、やさしげな中年の女性――この授業を担当する教師が入ってきたおかげで悲劇は回避された……ひょっとすると喜劇の間違いかもしれないが。

不幸な事故を未然に回避した功労者である彼女は、己の功績に気付くことなく教室を見回すと、実に満足そうに微笑んで、こう言った。

「皆さん。春の使い魔召喚は大成功のようですね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な＜使い魔＞たちを見るのが

とても楽しみなのですよ」

さらに、シュヴルーズと名乗った教師は続ける。

「ミス・タバサとミス・ヴァリエールは実に変わった〈使い魔〉を召喚したものですね。特にミス・タバサは、遠く『ロバ・アル・カリイエ』のメイジを呼び出したとか。学院長から話は伺っていますよ」

おおっ、という声が教室中から上がる。

――そう。太公望の立ち位置の調整に苦慮した学院長は、教職員たちに、

「彼は『聖地』を越えた、ハルケギニアの遙か東にあるといわれる諸国『ロバ・アル・カリイエ』のひとつからやってきたメイジである」

……という虚偽の説明を行うことで、太公望が貴族とほぼ同等の待遇を受けることを納得させていたのだ。もちろんこれは、タバサと太公望にも、前もって通達されている。当然のことだが、口裏を合わせる必要があるからだ。

だが、そんな生徒たちの驚きようが、日本出身の才人にわかるわけもなく。

「ロバ……なんとかって、何？」

彼はルイズ――不承不承ながらも彼らの隣席についていた主人に小声で訊ねた。

「あんた、本当に常識を知らないのね。ここからずーっと東の『聖地』……サハラを超えた先にある国々のことよ」

ルイズは、呆れた声で呟き返した。これも当然のことながら、己の＜使い魔＞が自分たちの常識の埒外にある『異世界』から現れたことなど全く知らない――正確にいうと信じていなかった彼女は、その後うんざりしたように教壇へと視線を戻した。

そんな彼女の態度を見て、せっかく可愛い顔してんのに、一言余計なんだよなあ……と、才人は思った。だが、彼の思考はすぐさま別の対象に向けられた。

「そうだったのか。場所は全然違ってるけど、えっと、タイコーボ……なんだっけ？　あいつも俺と同じで、めちゃくちゃ遠い場所から＜召喚＞されてここに来てたんだ！　だから他の連中と違って、俺のことを普通に扱ってくれるのかもしれないな」

才人は、そのように受け取った。彼は知らないことだが、その考えはほぼ正しい。

「そうだよ！　向こうは確かに魔法使いかもしれないけど、俺とおんなじ＜使い魔＞なんだ。それなら、この世界で初の友達になれるかも！　結構いいヤツみたいだし。もしかすると、魔法の使い方を教えてもらえたりなんかしちゃったりして！！」

……だがしかし。そんな才人の大幅期待込みな前向き思考は、突如沸きあがった笑い声によって、虚しくかき消されてしまった。

「ハハッ、やっぱりそうだったんだな『ゼロ』のルイズ！　まと

もに魔法ができないからって、その辺歩いてた平民連れてきたんだろ！」

「違うわ！　あたし、きちんと＜召喚＞できたもの。こいつが来ちゃっただけよ！」

オイ、こいつが来ちゃったってどういうことよ。才人が文句を言おうとした直後、別の生徒が嘲り声でそれを遮った。

「嘘だ！　雪風のタバサが異国のメイジを呼び出したのが、その証拠だぜ！！」

めちゃくちゃな理屈である。当然のことながらルイズは反論した。

「そんなの、証拠になんかならないわ！」

立ち上がって訴えるルイズを、１人の男子生徒が指さして笑った。

「嘘つくな！　どうせ＜サモン・サーヴァント＞も失敗したんだろう！？　『ゼロ』のお前に、まともに召喚できるわけないもんな」

周りの笑い声が大きくなる。

「ミセス・シュヴルーズ！　侮辱されました！　あの『かぜっぴき』が、わたしを侮辱しましたわ！」

「かぜっぴきだと！？　俺の二つ名は『風上』だ！」

『かぜっぴき』と呼ばれた小太りの生徒が立ち上がり、ルイズを睨み付ける。ため息をついたシュヴルーズが、手に持った小振りな

杖を振ると、立ち上がっていたふたりは、まるで糸の切れた操り人形のように、ストンと席に腰を落とした。

「ふたりとも、みっともない口論はおやめなさい。いいですか、級友を『ゼロ』だの『かぜっぴき』だの言ってはいけません。わかりましたか？」

ルイズはしょんぼりとうなだれていたが、一緒に叱られた生徒はさらに抵抗を示す。

「ミセス・シュヴルーズ。僕の『かぜっぴき』はただの中傷ですが、彼女……ルイズの『ゼロ』は事実です」

シュヴルーズは厳しい顔をして、杖を一振りする。と……どこから現れたものか、小うるさい生徒の口に、ぴたっと赤土の粘土がが押しつけられる。

「あなたは、その格好で授業を受けなさい」

シュヴルーズは重々しくこほんと咳をすると、再び杖を振った。すると、教壇の上に石ころがいくつか現れる。

「では、授業をはじめますよ」

――こうして、太公望と才人にとって初めての＜魔法＞授業が始まった。

第3話　軍師、異界の修行を見るの事（後書き）

文中「ぬな!?」のところで原作ではおなじみの簡略化されているイメージ。

２０１１／０５／０３　一部加筆修正、及び統合、改行位置などを修正
２０１１／０６／０７　ルイズ関連の説明を加筆修正
２０１１／０７／１３　誤字脱字、本文加筆修正

第4話　動き出す歴史

午前の授業を終え、タバサとキュルケのふたりと共に食堂へと向かう道すがら、太公望は思わずぼやいた。

「まったく……びっくりしたわ」

「だからわたしは危険だと言った」

「いや……」

驚いたのはそこではない……と、言いかけた太公望は、なんとかそれを飲み込むことに成功する。実際、彼が本気で驚いた対象は、タバサに指摘されたものについてではない。

＜魔法＞というものに驚愕した。なにもない空中から、粘土を――どこかから転送したのではなく――創り出したこと。そして、それを正確なコントロールで目標へ命中させたその事実に。

その後目にした、石を他の金属に『物質変換』する＜錬金＞や、ルイズという名の少女が起こした『爆発事故』について、全く驚かなかったといえば嘘になる。だが、錬金のほうはともかくとして、爆発については、以前身近に似たような事象を起こせる仲間が複数いたので、特に目新しいものではなかったというだけのことだ。

しかし、あれらも使いようによっては――。

そこまで考えたところで、太公望はふと我に返った。そして思わず大きくため息をつく。最初に反応したのはタバサだった。

「どうしたの？」

首をくいっとかしげて見上げる彼女に、太公望は苦笑しつつ答える。

「いや、今のわしには、やはり休息が必要だとつくづく実感してのう」

長い間、その小さな身体には重すぎて、潰れてしまいかねないような責任を背負って戦い続けてきた後遺症だろうか。太公望の思考は、ついつい「そちらの方向」へ行ってしまう。もう、戦は終わったのだ。＜魔法＞の観察をするのは、あくまでこの世界を『理解』するためであって『利用』するためではないのだから――。

思わず黄昏れてしまった太公望の肩を、キュルケがポンと叩いた。

「そりゃあ、昨日の今日でこれじゃ、疲れて当然よね。昼食にはデザートが出るわ。甘いものを食べれば、少しは落ち着けるんじゃない？」

「なぬ、甘いモノとな！？　わしは甘味が大好物なのだ！」

さらにタバサが、聞き逃すには重大すぎる忠告をする。

「好きなものは早い者勝ち」

「なんと！　それを早く言うのだ！！」

あわてて駆け出そうとした太公望が、何かの圧力を受けたかのよ

うに押し戻される。タバサの＜風＞の魔法が、彼を引き留めたのだ。

「廊下を走るのは禁止」

「おっほっほ！　大丈夫よ、デザートは逃げたりしないから。あなたって、意外とお子ちゃまなのね」

「ふふん、わしは自分に正直なだけなのだ」

そう言いつつも、改めて魔法の＜力＞を体験した太公望は、その後も無理な暴走をすることなく、まだ見ぬ甘味を目指して歩き出したのであった。

○●○●○●○●

「笑いなさいよ」

命じられたまま、黙々と汚れた教室内を掃除を続ける才人へ、ルイズは言った。

――そう、またしても彼女の魔法が失敗してしまったのだ。

魔法の成功率ゼロ。だから『ゼロのルイズ』。クラスメートには、いつもその不名誉な二つ名で呼ばれ、笑われてきた。

土系統の初歩＜錬金＞。石ころを望む金属へ変える呪文。１年生でもできる簡単な魔法。でも、やっぱりうまくいかなかった。石は＜爆発＞し、教室はめちゃくちゃになってしまった。罰として、魔法を使わずに片付けること――シュヴルーズ先生が口に出したその

言葉が、ルイズの胸をチクリと刺した。

「わかったでしょ、これがわたしの二つ名『ゼロ』の由来。どんな魔法を使っても、あんなふうに爆発するの」

才人は答えない。ルイズは、机を拭く手を止めて続けた。

「笑っちゃうわよね、魔法を使わず片付けなさい、ですって。そりゃそうよ、今よりもっと酷くなるの、わかりきってるもの」

才人は、作業を続けている。

「ちゃんと勉強してるし、たくさん練習したわ。でも、爆発しちゃうの！」

ルイズは、未だ沈黙を守っている才人の前までやって来ると、彼の使っていた箒を奪って、叫ぶように言い放った。

「どうせあんたもバカにしてるんでしょ。貴族のくせにできそこないだって。＜魔法＞の使えない、落ちこぼれだって！」

だが。そんなルイズに対して、才人の返した言葉はこうだった。

「本当にお前が魔法の才能ゼロだったら、俺は今ここにいねーだろ」

「……は？」

「サモン……なんだっけ？　お前がその魔法を成功させちまったから、俺はこうして＜使い魔＞やってるんだって言ってるんですけ

ど？　これで理解できたか！？　あーあ、昨日の夕飯はハンバーグだったんだぞ、ちくしょう……」

「あんた、何言って……」

あっけに取られたルイズの眼を見て、才人は続けた。

「少なくとも、１回は成功してんだろ。だから、ゼロじゃなくてイチのルイズだ。結果はお気に召さなかったようですけどねえお嬢様！？」

そういって、手を出す。

「箒、返せよ。早く終わらせないと、昼飯に間に合わないだろ」

○●○●○●○●

「ここ、これを見てください、学院長！」

トリステイン魔法学院に奉職して２０年のベテラン教師『炎蛇』のコルベールは、学院長室で、唾を飛ばしながら上司に向かって直談判を行っていた。

彼は、太公望との交渉で不覚を取ってしまった経験から、とても慎重になっていた。そのため、後に呼び出された平民の少年が気にかかっていたのだ。あのときは安易に契約の儀式をさせてしまったが、果たして彼は、本当にただの平民なのだろうかと。

そして、念のためメモをとっておいた＜使い魔＞との契約時に刻

まれる『ルーン文字』を調査した結果、かつて『始祖』ブリミル――この世界ハルケギニアに〈魔法〉をもたらしたとされる存在が使役していた〈伝説の使い魔〉のそれと、完全に同一であることが判明したのだ。

当初は、コルベールの剣幕に目を白黒させていたオスマン学院長だったが、彼が提示したスケッチと資料を見るやいなや、秘書であるミス・ロングビルに部屋から出るよう促した。そして、彼女の退出を確認したオスマン氏は、重々しく口を開いた。

「詳しく説明してもらおうか、ミスタ・コルベール」

――いっぽうそのころ、アルヴィーズの食堂内では。

「この、桃の下に使われている、この……モグ、さらさらと口の中で溶けてゆく甘い餡は……ふむ、クリーム、というのか。ムグ…‥井村屋のあんまんとは、また違った味わいで……これはなかなか……」

太公望は、至極ご満悦であった。

昼食後――待ちに待ったデザートが運ばれて来た際に、真っ先に目に留まった『桃のタルト』。それが、現在彼を幸せにしている菓子の名前である。

「行儀が悪い」

ポロポロと生地をこぼしながら食べ続ける太公望を注意しつつ、タバサはせっせと彼の世話を焼いていた。

朝食の時といい、今の姿といい、自分の隣にいる彼は、まるで子供のように無邪気で。とてもではないが、昨日、コルベール先生や学院長を相手に心理戦を繰り広げていた人物と同一だとは思えない。ひょっとしてわたしは、人間を召喚してしまったという負い目から、目に映った全てを過剰評価してしまっていたのではないだろうか……？

タバサがそんな疑いを持ちかけた瞬間、横からにゅっと手が伸びてくる。

「タバサ。食べないならわしがもらってやるぞ」

「断固阻止する」

まるで兄妹みたいだわ……必死に自分の皿を守るタバサと、それを食い入るように見つめる太公望の様子を、キュルケは苦笑しつつ眺めていた。

――そんな平和？　な情景が破られたのは、わずか数分後。

○●○●○●○●

どうしてこんなことに？　彼女は恐怖していた。

――時はほんの少しだけ遡る。

彼女――貴族達の世話をするため、学院に雇われた奉公人の１人であるメイドのシエスタは、とある平民の少年のために食事の用意をしていた。

その少年――サイト・ヒラガという名だそうだ――は、なんでも、召喚の魔法で突然呼び出され、使い魔にされてしまったのだという。学院側から、彼へ毎食の用意をするよう厨房へ指示が来ていたが、内容については自分たちのそれと同じで構わないとのことだったので、まかないとして作られているものが出されている。その給仕を任されていたのが、彼女――シエスタである。

気まぐれな貴族の犠牲者。シエスタは、サイトに同情していた。家族から引き離され、見知らぬ土地へ連れてこられた恐怖は計り知れぬほど大きいに違いない。不安を和らげるためにも、できるだけ彼には親切にしてあげよう……その程度の認識だった。

だから、何か手伝うとサイトが申し出た時も、一度は断った。だが、忙しい中、何もせず食事だけもらうのは忍びない、という彼の言葉と、それを聞いて笑顔を見せた料理長マルトーの後押しもあり、デザートの配布をお願いすることにした……ただ、それだけのはずだったのに。

それからたった数分後。配膳中に、貴族様に対して粗相をしてしまった自分をかばって、彼は――！

――貴族の少年、ギーシュ・ド・グラモンは、憤っていた。

ほんの数分前まで、気の置ける級友たちと何気ない会話を楽しんでいた。そんな安らぎの空間をぶち壊したのは、１本の香水瓶であった。

ポケットからそれが落ちたとき、すぐ側にいたメイドが拾い上げ

てしまったせいで、色々と面倒なことになってしまった。ありていにいえば「二股がバレた」。自業自得だというのは自分でもわかっていることなのだが、行き場のない怒りをぶつけるのに、目の前にいたメイドの存在は丁度よく。

「君が軽率にも香水の瓶を拾い上げたおかげで、2人のレディの名誉が傷ついた。この責任を、どう取ってくれるのかね？」

自分の言葉に、あわてふためくメイドの姿を見て、少しだけ気分が晴れた。そろそろ許してやろうか――そう思ったとき、ひとりの平民が出しゃばってきたのだ。

――平賀才人は、イラついていた。

わけもわからず呼び出され、いきなり＜使い魔＞にされたことにも。

生意気なご主人様とやらが、いっさい自分の話を聞かないことに対しても。

だが、それ以上に今朝、教室で見せつけられた、彼の感覚をして「やな感じ」とされたあのやりとりに憤っていたのである。

大勢で、たったひとりの少女を笑いものにしていた。ああいう雰囲気は才人のいた世界でもよくある――だが、不快なそれであった。そして今、自分に親切にしてくれたシエスタが、フリルつきのシャツを着て、薔薇まで咥えている気取った男によって、目の前で理不尽にも責められている。なんなんだよ、この世界は。＜魔法＞が使えるってだけで、そんなに偉いのか！？

気がついたら、口が出ていた。

「何言ってんだ。その子は悪いことなんかしてない」

キザ男――たしかギーシュとか呼ばれてた――が、睨んできた。睨み返す。

「ふん、これだから平民は。いいかい給仕君、このメイドが香水を拾ったとき、僕は知らないフリをしたんだ。それを察して、話を合わせる機転を持ち合わせなかった彼女に罪がないとでも？」

「アホか。そもそもお前が二股なんぞするからこうなったんだろうが」

周囲にいた貴族たちがどっと笑う。

「その通りだギーシュ！　お前が悪い！！」

ギーシュの顔に、さっと赤みが差す。

「ふん……そうか、思い出したぞ。君は確か、あの『ゼロ』のルイズが呼び出した平民だったな」

バカにしたような口調で、ギーシュは続ける。

「しょせんは、あの『ゼロ』が呼び出したんだ。そんな君に、貴族の高尚なやりとりを理解しろというのは無理なんだろうね」

「ふざけんな、なんでそこでルイズの名前が出てくんだよ」

「使い魔を見れば、主人の程度がわかる――メイジにとっては常識だよ。……『ゼロ』の＜使い魔＞くん」

才人は激しい怒りを覚えた。この世界に連れてこられてから、一番ムカついた。そうまで言われて黙っていられるほど、彼は大人しくなかった。

「うるせえキザ野郎。てめえなんか一生薔薇の棘でもしゃぶってればいいんだ！」

ギーシュの目が光る。

「よかろう。君に、貴族の礼儀を教えてやろうじゃないか」

――そんな一触即発だった場面に飛び込んできたのは、桃色の髪をした少女だった。

○●○●○●○●

「あいつ、笑わなかった」

ルイズは呟いた。雑用以外なんにもできないし、口の利き方もなってない。でも。少なくとも、あたしを馬鹿にしたりはしなかった。魔法が使えない、このあたしを――。

ロクに言うことを聞かない＜使い魔＞だけど、少し……そう、ちょっとだけ、待遇面について考えてあげてもいいかしら。でも、それでつけあがらせちゃいけないから、ほんのちょっぴりだけ……などと考えていたところへ、突然その声が飛び込んできた。

「よかろう。君に、貴族の礼儀を教えてやろうじゃないか」

見れば、自分の使い魔――さっきまで考えていたあいつと、ギーシュが睨み合っている。なんでこう問題ばかり起こすのか。既に出来上がっていた人垣を掻き分けて、ルイズは急いで彼らの元へと向かった。

「ちょっと待ちなさいよギーシュ！　あんた、あたしの使い魔をどうするつもり！？」

「なに、簡単なことだよ。君の『しつけ』がなっていないようだから、ちょっと教育してやろうと思ってね」

どういうことよ！？　と、改めて状況の説明を受け……ルイズは蒼白になった。この使い魔……非常識にも程がある。

「謝りなさい」

「なんで？」

「怪我したくないでしょ？　今すぐギーシュに頭を下げなさい」

「ふざけんな！　なんで俺が謝らなきゃならないんだよ！！　悪いのはアイツのほうじゃないか！」

言い争いを続ける主従を遮ったのは、他でもないギーシュであった。

「なんだい？　ルイズ。そんなにその平民のことが心配なのかい

？　まあそうだろうね。ゼロの君が、たった一度だけ起こせた奇跡の象徴なんだから」

ルイズの顔が強張る。

「なあ、ご主人様よ。これでも俺に謝れって言うのか？」

低い声で確認してきた才人を押し退け、彼女はまっすぐと杖を――ギーシュに向けた。

「ギーシュ・ド・グラモン。ヴァリエール家の名において、あなたに決闘を申し込むわ」

アルヴィーズの食堂は、一瞬静寂に包まれ――その後、一気に沸き立った。騒然とした空気の中、当事者の中で最も早く立ち直ったのは、ギーシュである。

「何を言っているんだい？　僕は、その＜使い魔＞君に用が……」

「＜使い魔＞の不始末は、主人が責任を負うべきよ」

にべもなく切り捨てるルイズ。

「決闘は、校則で禁止されていて……」

「なら、試合ってことにしてあげてもいいわ。それとも……怖いの？」

そこまで言われては、もう引き下がれない。

「……ッ。いいだろう『ゼロ』のルイズ！　ついでだ、その生意気な＜使い魔＞も連れてくるがいい。場所はヴェストリの広場だ。まとめて相手になってやる！」

くるりと身を翻し、その場から立ち去るギーシュ。

――こうして『歴史』は、本来のそれより少し逸れた形で――動き出した。

第４話　動き出す歴史（後書き）

無事、戻れたことに感謝を込めて。まだ油断はできない状況だそうですが、少しでも早くみんなが落ち着きますように……。

ここ数話ほどサイト・ルイズコンビばかりが目立っている状況ですが、次はいよいよ（ようやくとも言う）太公望サイドにもどる予定です。

２０１１／０５／０３　一部加筆修正、及び統合、改行位置などを修正

２０１１／０７／１３　誤字脱字、一部本文加筆修正

第5話　微熱、橋掛けの役を果たすの事

「ゼロのあの子が、勝てるわけないじゃない。まったく、これだから……」

――ヴァリエール家は、うちに色々『取られる』のよね。彼女は、後半を胸の中でだけ呟き、代わりに大きなため息をついた。

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。

トリステインの隣国・ゲルマニアからの留学生。彼女の実家であるツェルプストー家は、ルイズの実家ヴァリエール領と国境を挟んだ隣にあり、トリステイン・ゲルマニア両国の戦争でたびたび杖を交えた間柄である。また、その他諸々に絡み合う事情によって、お互いを『仇敵』と見なしているのだ。

本来ならば「ライバル」といって差し支えない間柄。しかし、優れた『トライアングル』メイジである彼女と『ゼロ』のルイズでは、あまりにも差がありすぎた。それがキュルケには面白くない。常にルイズをイラつかせるような言動は、

「ヴァリエールには、ライバルであって欲しい」

というキュルケの願望から出た、彼女なりの発破のかけかたなのである。

だが……今回のこれには、さすがの彼女も呆れざるを得なかった。まともに魔法を使うことのできないルイズが『ドット』の中では比

較的優秀であるギーシュに喧嘩を売った。無謀にも程がある――。

ちなみに＜メイジ＞は――ドット、ライン、トライアングル、スクウェア……という順番で、実力のランクが定められている。これは、使う＜魔法＞に重ねることができる＜属性＞の最大数を示すものである。

たとえば、タバサは＜水＞1つと＜風＞2つを重ねた魔法＜氷の矢（ウインディ・アイシクル）＞を使うことができる。これは、空中に発生させた＜水滴＞を＜冷風＞によって凍らせ、さらにもうひとつ＜強風＞を加えることによって、任意の場所に鋭利な氷柱を撃ち込むという＜攻撃魔法＞だ。

当然、高位のランク――つまり、より多くの＜属性＞を重ねることができる者ほど＜魔法使い＞としての戦闘能力も、実力も高いということになる。

だから、魔法のできないルイズが勝てるわけがない。ごくごく小さなそのキュルケの呟きを、本来であれば誰にも聞かれるはずのなかったそれを――しっかりと耳にしていた者がいた。すぐ側にいた太公望である。

ちなみにタバサにも聞こえていたのだが、彼女はデザート皿の防衛を現在の最優先事項としていたため、華麗にスルーしていた……それはともかく。

「あのやたら派手な小僧……たしかギーシュ、といったか？　それほどの使い手なのかの？」

「ドットにしてはそれなり、といったところかしら。でも、正直ルイズには荷が重すぎる相手ね」

一緒に才人も指名されているのだが、彼は戦力として数えられていなかった。

「ほうほう……あの娘御を相手にしてもか。それはなかなかの実力者だな。で、具体的には、どんな＜魔法＞の使い手なのかの？」

――今、この男なんて言った？　あたしの聞き間違い……！？

太公望の言を反芻していたキュルケに代わり、自陣のデザートを消費しつくしたタバサが答える。

「人間大のゴーレムを＜錬金＞で創り、自在に操ることができる」

「ゴーレム……魔法の人形といったところかの？　強さと作成速度は？」

「動きは並の人間程度。青銅製だから、素で殴られればただでは済まない。1体作成するには数秒程度。同時に7体まで使役可能」

なるほど、と、頷く太公望。

「一般的に勝利とされる条件は？」

「相手を気絶させるか、降参させる。あるいは持っている『杖』を落とせば勝ち」

それを聞いた途端、両腕を組んでうんうんと唸り始めた太公望を見て、キュルケは思った。やっぱりさっきのは聞き間違いよね――と。だがしかし。

「すまん。正直、わしにはあの娘が負ける要素が見あたらぬのだが……しかも、単独ではなく才人もついておるのだぞ？　ひょっとして、相手に怪我を負わせたら失格、などというルールでもあるのか？」

何を言っているのだ、この男は。ゼロのルイズがギーシュに怪我を負わせる？　そんな馬鹿なこと、あるわけないじゃない……キュルケは思わず、タバサと視線を交わした。しかし、そんな彼女の思いとは裏腹に、太公望はまるで不思議なものを見るような目でキュルケとルイズたちの双方を交互に見遣った後、ニヤリと……まるで、とびっきりの悪戯を考えついた幼子のように、嗤った。

立ち上がった太公望は、懐から打神鞭を取り出すと、つい、と一振りする。

そして――食堂を、一陣の風が吹き抜けた。

○●○●○●○●

ギーシュとの試合（という名の決闘）が決まった直後から行われている、ルイズと才人の話し合い？　は、ひたすら平行線を辿っていた。事件の当事者であるメイドのシエスタが、怯えきって厨房へと逃げ帰り、大半の生徒が広場へと移動した、その後も――。

「あのね、平民は絶対に貴族には勝てないの。何度言えばわかるの！？」

そう、ルイズが窘めれば。

「へっ、何が貴族だっての。あんなヒョロいヤツに負けるかっての！」

と、才人が勇ましくやり返す。

「いいから、あんたは大人しく部屋に戻ってなさい！」

主人が命令しても。

「冗談じゃねえ！　女の子だけに任せて逃げられるか！！」

＜使い魔＞は従わない。

だが、そんな彼らを突如襲ったものがあった。それは、糸のように絡みつく＜風＞。

局地的に起きた風がルイズと才人を包み込むと、天井付近へと舞い上げる。突然のことに、悲鳴を上げる間もなかった彼らは、次の瞬間、椅子に座らされていた……既に空席となっていた、太公望の向かい側に。

「2人とも、頭は冷えたかの？」

「んなっ、あああんた、ななにを」

太公望の一言で、ようやく何が起きたかを理解したルイズは必死に抗議をしようとした。したのだが、あらゆる感情がごちゃまぜになっている今、うまく言葉が出てこない。いっぽう、同様の目に遭わされた才人のほうはというと、こちらは状況がわからず、ただポカンとしているのみ。

「才人、おぬしはたいそうな果報者だのう。そこな娘御は、死地へ向かおうとしているおぬしを、身体を張って守ろうとしておるのだから」

いきなり何を言い出すんだこいつは！　真っ赤になって立ち上がったルイズよりも、彼女の使い魔である才人のほうが、より早く反応した。

「どういう意味だよ！」

机にドン！　と、勢いよく両手を叩きつけて立ち上がった才人だったが、太公望はまったく動じていない。それどころか、そのまま淡々と言葉を紡ぎ続ける。

「今朝の授業で、あのシュヴルーズ……とかいう名の教師が、何もない空間から粘土を取り出して、小五月蠅い小僧の口に詰め込んでおったが……もしも、だ。あれが目に張り付いたとしたら、どうなる？」

「……目が、見えなくなるね」

自分の口から出た言葉に、ハッとした。そうだ、ここはファンタジーの世界なんだ。

「念のために確認するが、おぬしは目が見えなくとも戦えるほどの達人だったりするのかのう？」

「……武術の経験は皆無です、はい」

ここに至って、才人はようやく気がついた。あのギーシュとかいうキザな貴族が＜メイジ＞――つまり、昨日から立て続けに見せつけられていた、一連の奇跡を起こしうる存在だということに。そんな相手に何も考えず、闇雲に立ち向かおうとした結果、ルイズのことを巻き込んでしまった自分のうかつさに。

そして才人は、完全に黙り込んでしまった。

――こいつ、いったい何なの？　ルイズは目を白黒させた。

あたしがどんなに言い聞かせようとしても聞く耳持たなかった＜使い魔＞を、たったこれだけで黙らせちゃうなんて。そういえば、教室でも何か仲良さそうに喋っていたわよね……もしかして、昔からの知り合い同士だったりするのかしら……？

朝の探検中に偶然出会っただけだという事実をルイズは知らない。当然そんな彼女の内部の葛藤を知るよしもない太公望は、今度はルイズのほうを向いて、こう聞いた。

「さて、ルイズといったな。おぬしは、勝ちたいか？」

「当たり前じゃない！」

ムキになって言い返すルイズであったが。しかし。

「聞くところによると、おぬしはまともに＜魔法＞を使うことができない、というではないか。それでいったい、どうやって戦うつもりだったのだ？」

「そ、それは……」

思わず下を向き、言葉に詰まるルイズ。太公望は、そんな彼女の様子を確認した後、今度は黙りこくっている才人に言を向けた。

「才人よ、悔しいか」

「当然だ」

俯いたまま、だが、ぎりぎりと拳を握りしめている才人。そんな彼らを満足げな笑みを浮かべて見つめていた太公望は、ゆっくりと口を開いた。

――後に、キュルケは語る。あれは、世に云う悪魔の微笑みそのものであった、と。

「ならば――おぬしらふたりで、奴に勝つための策を授けてやってもよい」

ガバッと身を起こすルイズと才人。見事なまでに同時に、だ。

「どんな策よ!?」「どんな策だ!?」

台詞までほぼ一緒だ。この主従、息ぴったりである。

「その前に、取引といこう。ルイズよ……明日の昼に出されるであろうおぬしのデザートを、わしに寄越すと約束するのだ。さすれば！　このわし自ら考えた、華麗なる作戦を授けてやろう！！」

今度は、ふたり一緒にテーブルへ突っ伏して頭を打ち付けた。実にいいコンビだ。先にそのダメージから立ち直った才人が、思わず

ツッコミを入れる。

「条件付きかよ！」

叫ぶ才人に、当然だろう？　といった風情でぬけぬけと返す太公望。

「勝てる見込みのないおぬしらに、勝利を授けようというのだぞ？　それを、たった1個のデザートと引き替えに提供してしまう、わし。逆にサービスしすぎだと思わぬか？」

「でも、その作戦で勝てなかったら」

そんな太公望の発言に、今度はルイズが噛みつこうとするが。

「もともと、負けて当然の勝負だったのだぞ。わしの策が当たれば儲けもの、外したところで敗北する事実は変わりあるまい？」

――ばっさりと斬り捨てられる。

「うぐっ」

「まあ、聞くか否かはおぬしらの自由だし、わしは別にどっちでもかまわんのだがの～。ほれほれ、早く決めぬと、ギーシュとやらに逃げたと勘違いされてしまうぞ」

ニョホホホ、と、神経に障る笑い声を上げる太公望をジロリと睨んだルイズ。

うさんくさいけど……でも、コイツはあの『雪風』が呼び出した

ロバ・アル・カリイエのメイジ。そうよ、エルフともやりあってるって噂のある『東』のメイジの言うことだもの、本当にいいアイディアがあるのかもしれないし……けど、でも……。

彼女は、内心の葛藤をそれはもう必死の思いで心の片隅へと追い遣ると、喉の奥から、かろうじて声を絞り出すことに成功した。

「いいい、いいわ。ああ、明日お昼のでで、デザートくらい、あげるわよ。ききき、聞かせてもらおうじゃない、そそその、ささ作戦とやらを」

ルイズ。葛藤に負けず、本当によく頑張りました。

「ニョホホホ……取引成立だのう。まいどあり～」

――あたしの親友が呼び出したのは、間違いなく悪魔だ。

キュルケは大いに後悔した。勝てるわけがない――なんてこと、口に出して言うべきではなかった、と。いいようにコントロールされてしまった仇敵に、いくばくかの哀惜の念を感じながら。

第5話　微熱、橋掛けの役を果たすの事（後書き）

２０１１／０５／０３　一部加筆修正、改行位置などを修正
２０１１／０７／１３　誤字脱字、本文一部修正

第6話　軍師、零と伝説に策を授けるの事

「青銅のギーシュが決闘するぞ！　相手はゼロのルイズと、その使い魔だ！！」

――ギーシュ・ド・グラモンは今、困惑していた。

魔法学院の西にある中庭「ヴェストリの広場」。日中でもあまり陽が差さず薄暗いそこは今、娯楽に飢えた貴族たちの群れで溢れかえっている。

つい、その場の勢いで決闘を受けてしまったが、対戦相手は『ゼロ』のルイズである。もし、これが使い魔相手の戦いならば、自慢の『ワルキューレ』を差し向けるのに躊躇いはない。だがしかし…相手は無力――魔法を失敗ばかりする落ちこぼれの――女の子なのである。

自分は女性を楽しませる薔薇――そう公言して憚らない彼にとって、レディに対して直接的な暴力をふるうなどという選択肢はない。だいたい、発端になったメイドの件にしても、ちょっと怖がらせてやれ、その程度の認識しかなかったのだ。それが、あれよあれよの間に事態が跳ねて転がって絡まってしまった結果――彼はここに立っていた。

突如、ドッと歓声が沸き上がる。ルイズと、例の使い魔だ。どうやら逃げずにやって来たらしい。緊張しているのだろう、やや俯き加減に歩いてくるルイズ。そして、そんな彼女を守るように歩み寄ってくるのは、あの生意気な平民。その手には、何も持たされてはいない。素手だ。

使い魔は主人の盾となる――か。

そうだ、なにもルイズを相手にする必要はないじゃないか。あいつだ、あの礼儀を知らない＜使い魔＞の平民を、ルイズの前で少々いたぶってやろう。そうすれば、彼女は怖がって降参してくるに違いない――。

我ながら素晴らしい名案だ。ギーシュはひとりほくそ笑んでいた。

そして両者は広場の中央へと歩み寄り、互いの間を２０歩ほど――距離にして約１５メイル程――の位置で、向かい合った。

「諸君！　決闘だ！！」

ギーシュが薔薇の杖を天に掲げると、周囲からワッと歓声が沸き上がる。そしてそのままピッとルイズたちに突きつけた。と、その動きを見て警戒をあらわにした才人が、庇うようにルイズの前に立つ。

「ルイズ、なかなか忠誠心あふれる＜使い魔＞じゃないか。『しつけ』はなっていないようだったがね」

周囲から嘲り笑いが巻き起こる。だが、ルイズは俯き、無言のまま。しかしよく見ると、彼女の身体は小刻みに震えていた。

「おやおや、怖くなったのかい？　でも、ここまで盛り上がってしまった以上、今更中止することなんてできないよ」

うんうん、と同意する観衆たち。だが、ルイズはなにも答えない。

「さて……それでは、始めるとしようか！」

――ギーシュが開始を告げた、その直後。

大きな爆音が連続で鳴り響き、広場の中心から土埃が大量に舞い上がった。

「うわっ……なんだこりゃ」

「やっぱり『ゼロ』だ。決闘でも失敗するなんて」

「なんだよ……土煙のせいで、何も見えないじゃないか！」

口々に文句を言う観客たち。だが、彼らはまもなく――その目で信じられないものを見ることとなる。

土煙が晴れた広場の中央。そこには――うつ伏せになって倒れるギーシュと、その彼の上に馬乗りになっている平民――ルイズの使い魔がいた。その手には、なんとギーシュの薔薇の杖が握られていた。

そして彼は、大声で宣言する。

「やったな、ルイズ！　これで、俺たちの勝ちだ！！」

一瞬の間。そして、大歓声が上がった。

○●○●○●○●

――時は、ほんの少しだけ遡る。

「あんた、ふざけてんの！？」

「わしは、いたって真面目な提案をしておるつもりだが？」

――策を授ける。

タバサは面食らっていた――太公望が、食後のデザートと引き替えにルイズへと差し出した『策』に。ちなみに彼女は、作戦の漏洩防止のため＜サイレント＞で周囲の音を遮断するという申し入れをしたことによって、この場への同席を許されていた。側にいたキュルケは、ルイズによって追い出されてしまっていたが……それはさておき。

「地面を＜錬金＞しろって、どういうことよ！」

「地面『を』ではない。地面『に』『錬金の魔法』をかける、の間違いだ」

「同じじゃないの！」

「いや、全然違うだろ……」

納得のいかないルイズとは異なり、才人は太公望の意図に気がついたようだ。魔法に対する先入観がないが故に、理解が早かったのだろう。

「あの威力だもんなあ。でもさ、そうすっと、あのキザ男ただじ

ゃすまないんじゃないか？　大丈夫かなあ……」

余裕が出てきたのだろう、本気で対戦相手の心配をし始める才人。そんな彼に好ましげな視線を向けた太公望は、新たに生まれた不安の種を消す仕事に取りかかる。

「その点については大丈夫、心配しなくともよい。せいぜいかすり傷程度で済むように仕向ける。そのためには才人、おぬしの協力が必要不可欠なのだ」

「任せとけ、もともと俺たちのケンカだしな」

力強く頷く才人。

太公望が彼らに提示した作戦とは。

1．ルイズが地面に＜錬金＞の魔法をかけ、土煙を撒き上げ目くらましとする

2．その隙に才人がギーシュの後方へ回り込んで、杖を奪う

と、いう至ってシンプルなものであった。

「それって、あたしの魔法が失敗することを前提にしてるんじゃないのよ！」

才人はその作戦にあっさりと同意したのだが……ルイズは誇り高き貴族、それも公爵家のご令嬢である。そう簡単に割り切れるものではない。可愛らしい頬をプーッと膨らませて抗議する。だが、太公望にそのような愛らしさによる攻撃は全く通用しない。真顔のままあっさりと切り返された。

「ならば、言い方を変えよう。土煙を作り出すのだから、立派な＜錬金＞では？」

ルイズの動きが、ピタリと止まった。

「それってただのへりく……うっ」

思わず才人が漏らしそうになった余計な一言は、太公望のひと睨みによって阻止される。幸いにも、当のルイズはそんな彼らのやりとりに気付くことなく、下を向いて

「土煙を作る＜錬金＞……そうよ、失敗じゃない、新たな可能性なのよ……」

などと呟き続けていたので、支障はなかったが。

「では、詳細を詰めていくとしようかのう。ルイズ」

「えっ、な、何よ」

「必勝を期すために、おぬしの口から、できる限りギーシュについて教えてもらいたいのだ。敵の＜魔法＞だけではなく、性格についても頼む」

ルイズは、太公望の目をしっかりと見据え――頷いた。

「そうね。これは、あたしたちの決闘なんだから、当然だわ！」

こうして、彼らは次々と作戦の詳細を詰めていった。

相対するまでの振る舞い――才人が彼女の斜め前に立って歩き、その姿をわざとギーシュに見せつけることで、ギーシュの思考を才人を攻撃する方向に誘導する。そう、ギーシュの性格上、ルイズを先に狙ってくることはまずありえない。それを逆手に取ろうというのだ。

ワルキューレの有効範囲のことはもちろん、決闘の場の地形の利用法から、立ち位置の詳細確認、ギーシュの目をくらますために効果的で、かつ才人の進路妨害にならない＜錬金＞の発動場所、などなど……わずか数分の間に次々と出てくる太公望の提案に、当事者たちはもちろんのこと、タバサも感心していた。正直、これに対する報酬がデザート1個というのは、本人のいう通り、安すぎたのではなかろうか……と。

しかし、タバサには不安があった。瞳の奥がわずかに陰る……すると、そんなごくわずかに生じた彼女の変化――纏う空気に気付いた太公望が、話を振る。

「どうした、タバサ。何か言いたいことがあるのか？」

小さく頷いたタバサを見て、ルイズは驚いた。いつも読書に没頭していて、積極的に他者と交わろうとしない、静かで無口な子……それが彼女が持っていた、タバサへの印象だった。そんな彼女が、自分には全く関係のない決闘について、何を言おうというのか。

「効果的な作戦だというのは認める。問題はそれで倒されたギーシュと、周囲の反応。負けを納得しない可能性がある」

ルイズはハッとした。その指摘はもっともだ。もし自分がギーシ

ュの立場だったら、絶対に納得しないだろう。やりなおしを要求するかもしれない。

だが、今ルイズの目の前にいる東方の男は。これまでにない大きな笑みを浮かべ、タバサの頭へぽん、と手を乗せて言った。タバサの目が、驚きで見開いている。

「よい指摘だ。さすがはこのわしを呼び出せただけのことはあるのう、タバサ」

そして自信満々といった態度で、先を続ける。

「もちろん、それについても検討済みだ」

「それはどんな？」「いったいどうやって！？」

思わず同時に身を乗り出すタバサとルイズ。太公望、爆釣り状態である。

「ふっふっふっ……それはな……」

○●○●○●○●

「やったな、ルイズ！　これで、俺たちの勝ちだ！！」

「あんたもよくやったわ、サイト！」

薔薇の杖を握りしめたまま、ルイズの元へ駆け寄った才人へ、満面の笑顔で労いの言葉をかけるルイズ。こいつ、こんな顔もできる

んじゃねえかよ……思わず見とれてしまった才人に、ルイズは一転、不信げな眼差しを向ける。

「……なによ？」

そんな彼女に、頭を掻きながら才人は答える。

「あっ、いや、お前、初めて名前で呼んでくれたから」

「え、そ、そうだったかしら？」

初めて成功した魔法。あたしが召喚した＜使い魔＞の少年。

思えば、昨日からろくに話を聞こうともせず、一方的な命令しかしていなかった。それなのに、こいつはあたしを「ゼロじゃない」と、言ってくれた。あたしへの侮辱に、本気で怒ってくれた。そして――あたしを勝たせるために、頑張ってくれた。名前すら、まともに呼んでいなかったというのに。

で、でも、ま、まあこいつはあたしの＜使い魔＞なんだから当然よね。でも、そうね、もうちょっと、そう、少しだけ、話を聞いてあげるのは、しゅ、主人として当たり前のことだわ。忠誠には、報いるところがなきゃ、いけないもの。

などと、主従の距離が微妙に縮まろうとしていた時。

「ふ……ふざけるなあああああ！！！！！！」

彼らの背後から、声がした。さっきまで地面を舐めていたギーシュである。

「こんなものが決闘だと？　勝利だと！？　認められるわけがないだろう！！！」

開始の合図と共に起きた轟音の正体は、ルイズの失敗魔法。ギーシュはそれによって引き起こされた土埃を思いっきり吸い込んでむせてしまい、まともにルーンを唱えることができなかった。

おまけに視界まで遮られていてどうしようもなかったところへ、後方から突然の衝撃。気がついたら、自分は地面とキスをしていて……さらに貴族の象徴たる『杖』を奪われていた。これで納得しろというのは彼のプライドが許さなかった。

すると、それまで騒いでいた観衆達が徐々にギーシュの味方につきはじめる。それはそうだろう、せっかくの暇つぶしが、たったの一瞬で終わってしまったのだから。

「ギーシュの言う通りだ、これは決闘じゃない！」

そして、当然ともいうべき流れが場を支配し――彼らは叫んだ。

「再戦だ！！！！！」

しかし――自分たち以外の周り全てを敵にしてしまったルイズと才人は、まったく動じていなかった。興奮し、顔をどす黒く染めているギーシュとはまるで対照的な表情をしていたルイズは、彼に対してこう返したのである。

――それは、太公望が『切り札』として授けた……文字通り魔法の言葉。

「再戦？　別にいいけど……次は、あんたの足元を＜錬金＞するわよ」

広場の空気は――ギーシュが創り出す青銅の戦乙女のように、冷えて固まった。

『爆発で教室がめちゃくちゃだ！　もうアイツに魔法を使わせるな』

場に集っていた観客達は、そんな風にルイズのことを非難していた、自分たちの言動を思い返す。そう……彼女の『失敗』は、周囲に甚大な被害を及ぼすのだ。それが、もしも足元――ゼロ距離で発動したら。

『どんな魔法も爆発するのか、さすがはゼロのルイズ』

どんな魔法でも――簡単で、詠唱の短い魔法すら、彼女の手にかかれば凶器に変わる。今更ながら思い知ったのだ、彼女の持つ『危うさ』を。そして、思考は巡り出す。

「次は……ってことはさ。さっきのルイズは、ギーシュが巻き込まれて怪我しないように、離れた位置で＜爆発＞させたってことだよな」

「そういや、使い魔にも武器を持たせてなかったもんな」

ギーシュは、激しいショックを受けていた。ルイズの持つ＜力＞についてではない。才人による攻撃――才人は、ご丁寧にも背後からケンカキックをお見舞いしていた――によって受けた、軽いダメ

ージに対してでもない。

彼に最も衝撃を与えたもの、それは……ルイズの心の在り方。傷つけることしか考えていなかった自分に対して、なんと彼女は寛大なことか。

全てを悟ったギーシュは、つかつかとルイズと才人の元へと歩み寄る。そして、周囲を見回し、広場中に届くような大音声で、こう宣言した。

「この勝負――ルイズと、その＜使い魔＞の勝ちだ！」

そして、改めてルイズ達に向き直る。

「先程の言葉を撤回しよう。君は『ゼロ』なんかじゃない、貴族として相応しい人物だ。そして、心からお詫びする。本当に済まなかった、ルイズ」

そう言って、頭を下げた。

「ま、まあいいわ。こっちにも不手際があったことだし」

少し照れながらも謝罪を受け入れたルイズ。そして次に、ギーシュは先程まで馬鹿にしていた少年――才人へと視線を移した。

「使い魔くん、君にも詫びよう。済まないことをした」

「使い魔って言うな。俺には平賀才人って名前があるんだ。それと、詫びならシエスタに言ってくれ。……っと、これ返さないとな」

才人は、握っていた薔薇の杖をギーシュに返す。

――こうしてこの決闘は、ギーシュの謝罪によって幕を閉じた。その脚本が太公望によって書かれたものだと知る者は、ほんの少数である。

……いっぽうそのころ、学院長室では。

「確かめられなかったのう……」

「確かめられませんでしたね……」

才人の左手に刻まれた『ルーン』の詳細を確かめるべく、あえて決闘騒ぎを止めることなく、じっと広場での戦いの様子を見守っていたオールド・オスマンとコルベールが、ふたり揃って＜遠見の鏡＞の前で頭を抱えていた。

○●○●○●○●

「ホントに勝っちゃうなんて……」

ヴェストリの広場で、他の観客達に混じってこの決闘を見守っていたキュルケは、目の前で見た光景が信じられなかった。夢ではないかとさえ思った。だが、耳に届く歓声も、熱気によって肌を打つ風も、間違いなく現実のものであった。

『ゼロ』だと思い込んでいた仇敵の、思わぬ『実力』を目にした彼女の心に火が灯る。そうだ。それでこそヴァリエール、我がツェ

ルプストー家のライバルに相応しい姿――！

キュルケの内でぷすぷすと燻り続けていた火が、今まさに炎となり、熱く燃えさかろうとしていた。

――さて、そんな広場の様子を、学院の上空から見ていた者たちがいた。太公望とタバサのふたりである。

「おおむね予想通りの結果だのう。まあ、才人の奴が跳び蹴りをかましてくれた時は少々焦ったが」

「グラモン家は、軍人を多く輩出している名門。最低限の受け身はできて当然」

そうなのか、おかげで助かった。と、悪びれもせず言ってのける太公望。

「これが、あなたの策」

ルイズの『失敗』を効果的に利用することで『決闘』での勝利を得る。

さらに、絶妙なタイミングで例の一言を放たせることで『負傷者を出さないよう工夫していた』と周囲が想像するように仕向け、これまでとは一転、ルイズへの評価を大幅に上昇させる。

また、相対的に敗北したギーシュの評判も下げないよう工夫されている。誰も傷つくことなく、決闘後に禍根を残さないという意味でも絶妙な1手であった。

「でも、どうして」

もっと近くで観戦しなかったのか。タバサは、そう口に出そうとして止めた。よく考えれば、当然の帰結であった。

太公望が策を授けようとした時、まだ数人の生徒が食堂内に残っていた。作戦会議中は＜サイレント＞によって遮音されていたが、それでも彼が何か助言をしたという事実を知る人間がいたことは確かだ。もし自分たちがあの広場にいたら、それを口実され――せっかく作り出した＜風＞が、不穏な空気へと変わってしまう可能性がある。

そんなタバサの考えを読んだ上で肯定し、さらに補足するが如く太公望は語る。

「あいつら、大声でわしらふたりの名前を連呼しながら近寄ってきて、おかげで勝った、ありがとう！　なんて騒ぎ出しかねんからのう」

そんなことになったら、間違いなく面倒がこっちにまで及ぶ――脳内にその光景がありありと浮かんでいるのであろう、心底嫌そうに顔を歪めている太公望を見て、タバサは思った。朝の授業風景と、食堂でのわずかなやりとりを見ただけで、よくここまで見通せたものだ……と。

タバサのそんな思いをよそに、太公望はさらに先を続ける。

「と、いうわけでだ。午後の授業とやらに、わしが出るのはまずいであろう」

確かに……と、頷くタバサ。

「わたしが出席するのも危険」

だが、正直なところ、彼女のそれはただの言い訳に過ぎない。次の授業は元々タバサが受ける必要のないものであったから。なにより、今は他にやるべきことがある。それは、タバサにとっての『最大の目的』を達成するために、どうしても必要なこと。

「ならば、することは決まったな」

「昨日の続き。図書館なら、より詳細な資料が揃っている」

本塔の方向を指で指し示すタバサに、満足げに頷く太公望。

「よろしく頼む」

――使い魔と主人は視覚の共有ができる。

彼の『先を見通す目』。おそらく、まだその片鱗しか示していない。でも、いつか彼の目に映る全てが『視える』ようになったら、きっとわたしの世界は広がるだろう。

図書館のある本塔へ向けて飛び去った彼らの後には、生まれたばかりの風が舞い踊っていた――。

第6話　軍師、零と伝説に策を授けるの事（後書き）

ここまでは、太公望は、基本的にこういうスタンスですよ、ということを位置づけるためのお話ということで、次回からは少しずつ太公望&タバサをメインに戻していく予定です。才人のガンダールヴ覚醒は、もうちょびっとだけ後なんじゃ！

――没ネタ――

「ギーシュとやら……1つ言っておく」
「な、なんだね？」
「服が悪趣味――センス最低――」
「ゆ、許さないぞおおおおおタイコーボー！！！！！！」

２０１１／０５／０３　一部加筆修正、及び統合、改行位置などを修正

第7話　軍師、手札を欠くの事

広場での決闘騒ぎに一応の決着が着いたあと、タバサと太公望のふたりは、揃って本塔にある図書館を訪れていた。ハルケギニアで生活するにあたって、必要な知識を身につける。そのためには、まず文字を覚えなければならない――。

太公望がこの国の文字が読めない事に気がついたのは、昨夜、タバサの部屋でハルケギニアの書物を見せてもらった時だった。そこには、彼がこれまで見たこともない線状の何かが列をなしていたのだ。

そこで、今日からタバサに文字を教えてもらうことになっていたのだが――その課程で、タバサと太公望はおかしなことに気がついた。

最初に違和感を覚えたのはタバサだった。太公望の習得力が、異様なまでに速いのだ。教材に使用したのが子供向けの本とはいえ、1時間もたたぬうちに1冊全ての意味を読み取れるようになるなど、もはや異常といっても過言ではない。

いっぽうの太公望も、現状に戸惑いを感じていた。1文字ずつ読み方を教わっている時には、発音だけ――それも、これまでに全く聞いたことのないようなものが――聞こえていたのにもかかわらず、それが「単語」という形になった途端『序章』『勇者』『姫』と、いったように、自分に理解できる言葉となって、頭に染み込んでくるのだ。

それを伝えると、タバサはしばし考え――口を開いた。

「犬や猫を使い魔にすると、人間の言葉を喋ったりできるようになる」

「それと似たような現象が、わしに起きていると？」

「あくまで仮説。そもそも、あなたとわたしは同じ言葉を話しているのに、使用されている文字が全く異なるという事実が不可解」

タバサの発言を受けた太公望の脳裏に、ふいに閃くものがあった。同じ言葉を話しているのに、使う文字が違う――？

「ひょっとすると……だが。わしらは、同じ言語を用いて会話をしているわけではないのかもしれぬ」

「どういうこと？」

太公望は、口にした仮説を証明すべく確認を始める。

「確かめてみよう。そうだのう……『覆水盆に返らず』と、書いてみてはくれぬか」

言われるまま、ペンを取って手元の羊皮紙にサラサラと記すタバサ。書き終わったそれを受け取った太公望は、それを一瞥して言った。

「『一度行ってしまったことは取り返しがつかない』と、書いてある。これは、わしが言ったことと、一字一句間違いないかのう？」

タバサは首を左右に振った。普段表情の乏しいその顔に、僅かな

がら驚きの色が混じっている。

「違う。私は『皿の上のミルクをこぼしてしまった』と書いた。でも、これは取り返しのつかないことをしてしまった、という慣用表現。だから、その意味自体は同じこと」

羊皮紙に記された文章を睨みながら、太公望は言う。

「わしがタバサに書いてくれと頼んだ言葉も『器に入った水をこぼしたら元には戻らない』すなわち、取り返しがつかないことの例えだ。意味は同じ、だが」

理解を示すタバサ。

「お互いに、口から出した言葉が異なっている、つまり」

彼女の言葉に頷き、太公望は断言する。

「わしらは互いに異なる言語を使っているが、なんらかの方法で会話が成立している。召喚された時点で既に言葉が通じておったことから考えるに＜サモン・サーヴァント＞に、そういった機能がついておるのだろう。文字の習得速度や、書かれた内容によって受け取る側の認識に何らかの齟齬が生じることについては、また別の検証が必要になるが」

タバサは驚愕した。ハルケギニアにおいて、それぞれの地方訛りのようなものはあっても、言語そのものが異なることはないのだ。何故なら『ガリア語』と呼ばれる共通語（コモン・ワード）が存在するからである。

トリステインでも、タバサの出身国ガリアでも、人類の宿敵とさ

れるエルフでさえも共通語を使って会話を行う。もっとも、エルフには種族固有の言語も存在しているらしいのだが、あくまでそれは噂でしかない。

にも関わらず、自分が呼び出した存在は、サハラも含めたハルケギニア全体とは全く異なる『別の言語』で会話しているのだという。そして、それが事実だということは、今の実験結果が証明していた。

この実験結果を見て、タバサは思った。召喚された当日、彼は「お互いに存在すら知らないほど遠い国から喚ばれてきた」と言っていた。いったいどれほど遠くの地からやって来たのだろう――？

見知らぬ異国へと、想像の翼をはためかせ飛び立ちそうになっているタバサをよそに、太公望はとある懸念――しかも割と深刻な――を抱いていた。

魔法の影響を受けて、会話が成立している――逆にいえば、その効果が消えてしまった場合、この世界での意思疎通が非常に難しくなるのではないか、と。

＜サモン・サーヴァント＞および＜コントラクト・サーヴァント＞は、召喚者あるいは被召喚者の死によって無効化――契約が切れる仕組みになっていると、契約する前に説明を受けている。が、太公望には、それ以外の方法で『魔法の効果を打ち消してしまう可能性があるもの』を持っていた。

――それは、彼の持つ最大の切り札。スーパー宝貝『太極図（たいきょくず）』。

展開した領域内において、宝貝の使用を完全に封じ、さらには宝貝よって引き起こされた全ての事象を鎮め、無効化し、癒やしの力

へと転換。敵味方を問わず全てを回復させるという究極のアンチ宝貝である。

かつて、敵対する仙人が宝貝を使って発生させた1万貫の土石流を瞬時に鎮め、その全てを、砂粒1つに至るまで『元通りの位置に回復』してしまったことを例に取っても、効果の程は伺えよう。

ハルケギニアの魔法に対して『太極図』が有効か否か、近いうちに色々と試そうと考えていた太公望だったが、これではうかつに使用するわけにはいかない――少なくとも、この世界の言語を自分のものとするまでは。比較的早い段階で、それに気がつけただけでも由とするべきか。

ぐうたら生きるのも、楽じゃないのう――。

もうひとりの＜使い魔＞が聞いたらマジ泣きしそうなことを考えながら、太公望は生活基盤をしっかりと固めるべく、タバサに講義の続きを促すのであった。

――その夜。

時間を忘れて書をめくっていたタバサと太公望は、閉館時間を過ぎてもそこから動かないふたりに業を煮やした司書の女性によって、外へつまみ出されていた。そこに至って、彼らは初めて夜になっていることに気付いたというのだから、その熱中度がいかほどのものであったのか、推して知るべし、である。

既に食堂は閉まっていたので、軽めの食事を厨房に頼んだふたりは、タバサの部屋へと――塔外壁の窓から――戻ろうとした……の

だが、無人のはずの部屋の奥から、なにやら声が聞こえてくる。

「まさか、泥棒か？」

「わからない、でも用心に越したことはない」

外壁を背にして張り付くような体勢をとった彼らは、気取られぬようこっそりと中の様子を伺う。そこにいたのは……興奮気味に何事かをまくし立てる桃色髪の少女と、それをあしらうように笑う赤髪の娘と、その間に挟まれ、天国と地獄を同時に味わっている黒髪の少年であった。

――キュルケ曰く。

昼に聞けなかった策の内容を確認しに来たが、扉に鍵がかかっていた。ノックをしても無反応。タバサは＜サイレント＞をかけた状態で本を読んでいることが多いので、確かめるために解錠の呪文＜アンロック＞を唱え、部屋の中へ入ったところで、通りがかったルイズ――タバサ達に何かを言いに来たらしい――に見咎められたのだという。

「勝手に他人の部屋の鍵を開けるなんて！」

と、説明中にも関わらずいきり立つルイズを

「あら、こんなのいつものことだし、タバサは気にしてないわ」

暖簾に腕押し、柳に風で受け流すキュルケ。

「＜アンロック＞は重大な校則違反なのよ？　わかってんの！？」

「あなたの＜アンロック＞が『あン、爆発！』だから禁止なのはわかるんだけど」

「けけ、ケンカを売ってるのかしら、つつ、ツェルプストー？」

こんな調子で、部屋主が戻ってきても収まらない少女たちだったが、とうとう付き合いきれなくなった太公望とタバサのダブル風攻撃――太公望が天井付近まで舞い上げ、タバサが空気の縄で縛り付ける――で押さえ込まれ、静かになった。

そして、どうにか事の顛末――発端から決闘の推移に至るまで、ついでに策の内容について、念入りに口止めをして――を語り終えた頃には、夜もだいぶ遅い時間になってしまっていた。

部屋へ戻るという彼らを見送り、寝支度を始めようとしたタバサは小さくため息をつく。召喚の儀式からまだ2日しか経っていないのに、なんだかもう1ヶ月ほど過ごした気分だ。これからも、こんな嵐のような日々が続くのだろうか――。

それが果たして良いことなのかどうか、まだ彼女にはわからなかった――。

第7話　軍師、手札を欠くの事（後書き）

お前、ただ太公望に「覆水盆に返らず」って言わせたかっただけだろう、と指摘されても反論できない、そんなお話。おまけで、太極図の取り扱いは慎重に、という。

突然ですがアンケートです。

今回、会話「」部分の改行をせずに書いてみました。
読みやすさ、見やすさなど、これまでの話に比べていかがでしたでしょうか？
改行なしのほうが読みやすい、という方が多い場合、過去の話も全て修正しようと考えております。

よろしければ感想欄にご意見をいただければ幸いです。

２２：５０　誤字修正
２０１１／０５／０３　一部加筆修正、統合によってずれた話数名を訂正

第8話　軍師の平和な学院生活

太公望がハルケギニアへと召喚されてから数日が経った。最初の2日間こそ怒濤のような騒ぎの中にあったものの、その後はおおむね平穏であった。

そんな彼の使い魔？　生活を紹介しよう。

朝、日が昇る前に目を覚ます。同居人を起こさぬようにそっと外へ出て、本塔の屋上へ移動し、そこで1時間ほど『瞑想』を行う。

その後部屋へ戻ってタバサを起こす。彼女が身支度を整えている間は外――もちろん窓ではなく廊下で――大人しく待機。出てきた彼女と共に、朝食を摂りにアルヴィーズの食堂へ向かう。

「テーブルマナー」のなんたるかすらわかっていない太公望の食事姿は、控えめに見ても良いとはいえないものだが、すぐ隣の席につき、まるで手のかかる子供に指導をするように世話を焼くタバサの姿と相まって、ほのぼのとした空気を醸し出す。

朝食の後は、タバサと共に授業を受ける。

夢のぐうたら生活を実現するためには、この世界の＜魔法＞そして『言語』について詳しく知っておく必要があり、その手段として魔法の授業はうってつけなのだ。ある意味、この場にいる生徒たちの誰よりも真剣に、教師の言葉と黒板に書かれる文字に集中し、手元のメモ帳――タバサから譲り受けた――に書き付けている。

将来の怠惰のためには今の努力を惜しまない――太公望とは、そ

ういう男であった。

昼食後の1時間は、ひとりで学院の敷地内をうろつく。そして、時折出会う学院の使用人たちや『使い魔の仕事』をさせられている才人に出くわしては交流を深めている。

ある時、こんな事があった。

貴族様に洗濯するよう命じられていた絹のハンカチが、風に飛ばされてどこかへいってしまった。このままでは手打ちにされてしまう……と、嘆くメイドがいた。シエスタである。偶然その場にいた才人が一緒に探して回ったが見つからず、途方に暮れていたところへ太公望が現れた。

才人が事情を話すと、太公望は一言

「薪(まき)を1本もって来たら、なんとかしてやろう」

と、告げる。

なんで薪!?　という疑問はあったものの、以前の経験から「コイツの言うことなのだから、何か意味があるのだろう」と考えた才人は、大急ぎで裏庭の薪置き場へ向かうと、そこから1本の薪を頂戴し、太公望に手渡した……のだが。

――太公望の起こしたアクションは、才人の想像の斜め上を行った。

「見ておれ、才人よ！　この薪を使った＜炎占い＞で失せ物の行

方を占ってやろう！」

『杖』を取り出して、薪の先をがんがん叩き始めた――しかも、まき～まき～教え給え～とか、軽くイった目をしてブツブツ呟いている――太公望を見た才人は、そのまま回れ右してハンカチ探索に戻ろうとしたのだが……『占い』という言葉の響きにすっかり魅せられてしまったシエスタによって引き留められる。

……と、それまで変化のなかった薪の先端が、勢いよく燃え始める。揺らめく炎を見つめながら、ムゥ……と唸った太公望は、才人とシエスタに『結果』を告げた。

「よいか、これから急いで厨房へ行き、コップに1杯の飲み水を手に入れよ。そして、それを持って炎の名を持つ塔の側にある建物の前へと行け！　そこにひとりの男が立っておる。そやつにコップの水を渡せば、失せ物が見つかるであろう」

そんなバカな……と、思いっきり疑いの目を向ける才人だったが、藁にもすがる思いで『託宣』に聞き入っていたシエスタの手前、それを無碍にするわけにもいかず。言われた通りに厨房で水を手に入れ、炎の塔の側にあるという建物へと向かった。

――そこにいたのは、コルベールであった。

何かを探しているのか、周囲をきょろきょろと見回している。と、彼は才人とシエスタの姿を見て何かを目に留めたのか、ふたりの方へ近づいてきた。

「おお君たち、ちょうど誰かに飲み物を持ってきてもらおうとしていたところなんだよ。良かったら、その水を譲ってもらっても構わないかね？」

言われるままに水を差し出すと、コルベールはひと息で水を飲み干した。そして懐から一枚の布を取り出し、額の汗を拭う。

「いやあ、おかげで人心地ついたよ。ありがとう」

笑顔で礼を言い、コップを返そうとしたコルベールは、ふたりの視線が手元の布きれに集まっていることに気がついた。

「……どうかしたのかね？」

「き、貴族様、そ、そ、そのハンカチは」

シエスタが、震える声でコルベールに問う。

「おっと、いけない！　さっき偶然拾ったものなのに、ついうっかりと……もしかして、これは君の物だったのかね？」

――それからが大変だった。

占いが当たった！　と、おおはしゃぎのシエスタと、なんでもありかよファンタジー！　と、頭を抱える才人。そんな彼らから事情を聞いて『炎を使った占い』にいたく興味をそそられたコルベールに、根掘り葉掘り聞かれそうになったり、貴族のせいで困っていたシエスタを助けてくれた！　と、厨房で働く料理人たちに才人共々大歓迎されたり、噂を聞きつけた女性達――平民、貴族を問わず――に、自分も占って欲しいと押し掛けられたり……などなど。

――最終的に、学院長から『学院内での占いは禁止』という触れ

が出されるまで続いたこの一連の騒動によって、太公望は「ちょっとした」有名人になってしまったが、その対価として、

「身分を問わず人当たりのよいメイジ」「東方の秘術を知る異国人」

などというそれなりの評価を得られたことは、今後学院生活を送る上でプラスになることは間違いだろう。と、まあこんなふうに着々と『自分の居場所作り』に精を出すのがこの時間帯だ。

その後は、再びタバサと合流して午後の授業に出たり、図書館に籠もってハルケギニアの歴史や地理を学ぶ。本の虫である彼女の解説は、簡潔にして要を得たもので非常にわかりやすい。

タバサとしても、理解の早い生徒である太公望にモノを教えるのは思いのほか楽しくやり甲斐があるし、自分自身の復習にも繋がるので、勢い熱心になる。その結果、大幅に閉館時間をオーバーして司書の手で外へつまみ出される……というのが既に日課となりつつあった。

――と、こんな調子で日々を過ごす太公望。今のところは、まだ平和を満喫していた。

第8話　軍師の平和な学院生活（後書き）

いわし占いはここでも披露されませんでした。

ところで、太公望がルイズに召喚されない理由がなんとなくわかってきた。それは……いつまでたっても戦いにならないからだ！

……いや、このＳＳではちゃんと戦います、きっと。そのうち。

２０１１／０５／０３　一部加筆修正、統合によってずれた話数名を訂正

第9話　軍師、痛みによって謀る事

タバサは、独りで居ることを好む少女だった。彼女にとっての他人とは、自分の世界に対する無粋な闖入者であり、数少ない例外に属する人間であっても、余程の場合でない限り鬱陶しく感じる存在に過ぎなかった――はずなのだが。

そんな彼女が――虚無の曜日に、クラスメイトやその使い魔達に囲まれて、共に乗合馬車で街へ向かっているのには――ちょっとした事情があった。

「街へ服を仕立てに行きたい」

ことの発端は、前日の昼に太公望が発した言葉であった。

彼は替えの服を持っていない。これまで、胴衣については男性教諭から着古したローブを借りて凌いできたが、上に羽織っている着衣の汚れが目立ってきた。

『道士服』と呼ばれるらしいそれは、太公望曰く

「ハルケギニアのメイジが羽織るマントのようなもの」

……だ、そうだ。

そういえば、彼の国では服装によって出される食事が変わると言っていた。つまり、身分を証明するために必要な衣服なのだろう。

彼の生活に必要なものは学院の経費で落とせるし、タバサとして

も、太公望に不自由な思いをさせるつもりはなかったので、翌日――学院が休日となる虚無の曜日――に、トリステインの街を案内すると約束し、ひとまず話は済んだ。

……と、思っていたら。太公望は、いつの間にか彼と仲良くなっていたらしいサイト――ルイズが使い魔にした少年――に、そのことを伝えたらしく。そこから各所へ話が飛んだ結果、

曰く「使い魔に身を守るための武器と服を買い与える慈悲深い主人」ルイズと。

曰く「優しい主人を持って幸せだとうそぶく従者」サイトに。

曰く「春の新作が気になるから一緒に行きたい」キュルケがついてきて。

現在の状況――控えめに言っても騒々しい――が成立した。

トリステインの街まで、まだ1時間以上かかる――ふっとため息をついたタバサは、同行者たちと益体もない話を続けている己の使い魔を、少し恨めしげな目で見遣った後……持ってきた本に視線を落とし、ページをめくり始めた。

○●○●○●○●

「さて、残るは才人の武器……か」

仕立て屋での採寸を終えた太公望たちの一行は、それ以外の買い物の成果を両手に抱えて――荷物を持たされているのは太公望と才人のふたりだけだが――トリステインの城下町を歩いていた。行きに乗ってきた馬車は、街の外で待たせてある。あちこちで買い物を

するため、馬車では進めない、狭い路地を通る必要があったから。

太公望は、物珍しそうに辺りを見回していた。白い石造りの街は、これまで見たことのない風情であったし、道端には様々な露天商が店を開いていたからだ。と、そんな彼と同じく好奇心を剥き出しにしていた才人が、ルイズに耳を引っ張られる。

「ほら、よそ見しない！　このあたりはスリが多いんだから」

ルイズ曰く、このあたりは割と物騒な地域らしい。こういう所は、どこの国でも同じなんだのう……などと感慨に耽っていた太公望に、ひとりの男の肩がぶつかった――その瞬間。男は、その場へ崩れ落ちるように……どう、と倒れた。

――突然のことに、辺りから悲鳴が巻き起こる。

「人が倒れた！　急病人だ！！」

「誰か衛兵……　いや、水メイジを呼べ！！」

広がる喧噪の中、真っ先に動いたのはタバサだ。小声で仲間たちに指示を出す。

「この場から離れたほうが無難、ただし、慌てず普通の速度で歩いて」

病人を見捨てるのか！　と、問うルイズと才人を、

「今のわたしたちにできることは何もない」

と、ただの一言で黙らせて。

そのままタバサを先頭にして路地を抜けて大通りに出た一行は、平民向けだがなかなかに小洒落た感じの料理店へと入る。

平民の店なんて……と、ぶつぶつ文句を言うルイズを無視し、テーブルごとに衝立で仕切られたそこの一番奥にある席を確保したタバサは、手慣れた調子でウェイターに全員分の飲み物を注文した後、まっすぐに自分の使い魔――太公望を見据え、問い詰めた。

「あなた、何をしたの」

全員の視線が、太公望に集中する。

「何もしてはおらぬよ、わしは……な」

「それは嘘。あのスリが倒れる直前、あなたの懐に手を入れたのを見た」

タバサの言葉に、あの男スリだったの!?　とか、どういうこと!?　だの騒ぎ出したルイズ・才人・キュルケの3人に黙るよう、口の前で指を1本立てるジェスチャーをして見せた太公望は、ふぅとため息をつくと、やれやれというように首を左右に振る。

「わしの『ご主人様』は思いのほか目敏いのう。少々見くびっていたようだ」

「ごまかさないで」

彼女の二つ名『雪風』に相応しい、冷たい空気が場を支配する。

降参だというように、太公望は軽く両手を挙げて答えた。

「わしは本当に何もしてはおらぬよ。やったのは……これだ」

太公望は、懐から『打神鞭』を取り出してタバサ達に見せる。

「この『杖』には、盗難防止用に『わし以外の者が持つと生命力を吸い取る』呪いがかけられておってのう。あやつは、わしの懐を探ろうとして、うっかりこの杖に触れてしまった。ただそれだけのことなのだ」

――今度は、別の意味で場が凍り付いた。

「なにそのヤバい杖」

さすがの才人も真っ青だ。

「神聖な杖にそんな処置を施すなんて……」

と、逆に憤りを覚えるルイズ。

「……その呪いとやらがどの程度のものなのか、教えて頂けて？」

キュルケが震える声で問えば。

「触れた程度ならその場で気絶。持ち続ければ干涸らびて死ぬ程度、かの」

悪びれもせず、からからと笑いながら太公望が答える。一同、声も出ない。

そんな硬直した空気を打ち破ったのはタバサだった。文字通り、持っていた己の杖を太公望の脳天めがけて叩き付ける。

ごぃん。と、実にいい音が辺りに響き渡り……太公望は、その場に崩れ落ちた。

「そんな大切なこと、どうして今まで黙ってたの……」

真冬に吹き荒ぶ寒風もかくやといった冷たい声で、ぽつりとタバサは呟いた。

無口な子。本の虫。他人を寄せ付けようとしない。完全に伸びてしまった太公望を尻目に、同行者の3名が己の「タバサ個人評価ノート」の片隅に『怒らせると怖い』と書き加えたのは、ある意味必然といえよう。

○●○●○●○●

――太公望が目を覚ましたのは、帰りの馬車の中であった。

道中、打撃を受けた箇所をさすりつつ、状況を確認する太公望へ

「＜レビテーション＞で馬車まで運ぶのは、結構大変だったのよ」

と、ちょっと怖い笑みを浮かべながら話すキュルケや、

「結局こんなさびた剣しか手に入らないなんて……」

と、悔しがるルイズに

「あーるぴーじーだと、こういう剣が最強っていうお約束があるんだよ」

などと、意味のわからない話をして慰めて？　いる才人。そんな彼らの騒ぎをよそに、タバサは手持ちの本を開いていた。しかし、行きの時のそれとは異なり、彼女は自分だけの世界に没頭してはいなかった。

あの瞬間――杖を振り上げた直後。ほんのわずかだが、太公望の身体が反応したように思えた。だからこそ、タバサは躊躇わずに杖を振り下ろしたのだが――結果、彼はそのまま攻撃を受け、倒れてしまった。

ふと、店で彼が呟いた言葉を思い出す。

――わしの『ご主人様』は思いのほか目敏いのう。少々見くびっていたようだ

まさか――避けもせずに攻撃を受けたのは、彼の演技？　だとしても、わざわざそんなことをする理由がさっぱりわからない。彼女は心底混乱していた。自分の＜使い魔＞の実像が、全く掴めないことに。

もっとも、それはある意味当然である。彼女は太公望が身体を張ってまで『究極のサボり』を開発すべく日々努力を続けていることなど、知る由もないのだから――。

第9話　軍師、痛みによって謀る事（後書き）

シルフィがいないから、みんないっしょにおでかけだよ！
才人、原作タイムテーブルより1週間早くデルフリンガーゲットだぜ！
フーケ？　誰それ状態です。まだ情報がない的な意味で。

太公望は、痛いのキライなのに今回ちょっと身体張りすぎだと書いていて思いました。

ちなみに「触れた者の生命力を吸い取る」という設定は封神演義側の原作にも存在しています。ただし「仙人以外が触れたら危ない」というもので、決して盗難防止用などではありません。つまり『呪い』という説明は、太公望がわざと誤解させるために用いた策です。スリが触って宝貝起動→気絶のコンボは事実ですが。

２０１１／０３／２２　タバサの攻撃理由を加筆修正
２０１１／０５／０３　一部加筆修正、統合によってずれた話数名を訂正

第１０話　伝説、左手と親友に出会うの事

――平賀才人は今、得意の絶頂にあった。

彼は宿命という名の導き手により、最高の相棒との邂逅を果たしていた。伝説の左手を担う者。その名も『デルフリンガー』。

先日の虚無の曜日。主人のルイズに手（と耳）を引かれて立ち入った、小さな武器屋。昼もなお薄暗いその店の奥、乱雑に積み上げられた棚の横に、それはひっそりと「立て掛けられていた」。

＜インテリジェンス・ソード＞。意志を持つ魔剣にして、しゃべる能力を持った薄手の長剣。表面にはうっすらと錆が浮いていた、だが才人には、そんなことは一切気にならなかった。吸い付けられるようにその剣へと手が伸び、そして両手で柄を握った瞬間……左手のルーンが輝き、身体がまるで羽根のように軽くなるのを感じたのだ。

「おでれーた。てめ、『使い手』か。見損なってた。よしお前……俺を買え」

……まるで、テレビゲームのイベントシーンみたいじゃないか。才人は、すっかりその剣に魅入られてしまった。眉をひそめて「もっといい剣を買ってあげるわよ」という主人に、是非これをと拝み倒し、遂に自分のものにすることが出来た。

最初こそ「こんな錆びた剣なんて……」と不満を見せていたルイズだったが、ありがとう、本当にありがとう、と、まるでボールをもらった子犬のようにキラキラと目を輝かせ、何度も何度も礼を言

う使い魔の態度が、迂闊にもちょっと可愛く思えてしまい。ついには――持ち歩くときは鞘に収めておくことを条件に、その剣を持つことを許した。

○●○●○●○●

――1日目。

せっかくだから剣の使い方を覚えたい、そうデルフリンガーに告げると、新たな相棒はいたく喜んだ。そして、とりあえず振ってみろと言われたので、近くの空き地へと向かい、鞘から抜いた。これまで剣など手にしたこともなかったのに、まるで身体の延長のようにしっくりと馴染んでいる。不思議だ。

「これがお前の＜力＞なのか？　デルフリンガー」

「いいや違う、それが『使い手』たる証なんだよ、相棒」

俺の左手に刻まれたルーンとやらが、特別な力を持っているらしい。おでれーた。

――2日目。

筋肉痛で動けなかった。昨日は調子に乗って振り回しすぎた。いやマジ痛いんですけど。デルフ――名前が長いのでこう呼ぶことにした――は、いっしょに身体も鍛えないとな、と、笑っていた。ピンク髪の小悪魔が、面白がって何度も足をつっついてきた。やめて。

――3日目。

筋肉痛はもう治ったみたいだ。「数日遅れで来るようになったら年だ」って前に父さんが言っていた気がする。使い魔の仕事が終わった後、外でデルフを振っていたら、ギーシュ……このあいだ決闘をしたキザ野郎だ……が声をかけてきた。

「きみは剣士だったのか……もしやメイジ殺しだったのかい？　やはりあの時は本気ではなかったのだね」

次の瞬間……気取った仕草で例の薔薇の杖を振ったギーシュの真横に、いきなり金属製の像が出現した。

「どうだい、相手がいたほうが稽古にも身が入るだろう？　良かったらぼくが『ワルキューレ』でお相手しよう。もちろん、お互いに怪我をさせないという条件でね」

あれ？　ひょっとして、こいつ意外といい奴だったのか？　……それにしても。

「これが噂のワルキューレか！　結構かっこいいじゃん」

「そうだろう、そうだろう！？　まさに戦乙女の名に相応しい姿だと思わんかね」

青銅で出来た甲冑姿の乙女像かよ……うわあ、ルイズが止めてくれなかったら、これと真正面からやりあう羽目になってたんかい……殴られたらすげえ痛そうじゃん。最悪、骨が砕けてもおかしくないわ。しかし……こんなのに斬りかかったら、デルフの奴折れちゃ

うんじゃないのか？

……心配はいらなかった。まるで、溶けたバターにナイフを入れたみたいに真っぷたつにできた。本気のきみと戦わなくて良かったと言うギーシュに、それはお互い様だと返してあの時のことを謝ったら、握手を求められた。異世界で、また友達ができた。

――4日目。

きみは本当に強いなあ。

俺が、7体の『ワルキューレ』を文字通り瞬殺した後、ギーシュは言った。いやいや、確かに速攻倒せたけどさ、お前、俺が怪我しないように手加減してくれてるじゃん。そう言ったら、

「謙遜は美徳だが、過ぎた謙虚は嫌味にしかならないよ」

なんて諭された。

「ひょっとして、俺ってすごいの？」

「うん、実際たいしたものだよ」

部屋に戻ってからルイズに聞いてびっくりした。なんでもギーシュは軍人の家の出で、しかも『ドット』ランクのメイジとしてはかなり強い部類に入るんだそうだ。実は俺ってすごい？　ちょっと自信持っちゃっていいのかな？　かな！？

――5日目。

ルイズに、俺とギーシュの模擬戦を見せた。デルフとふたりがかりで説明しても、ちっとも信じてくれなかったからだ。バラバラになった『ワルキューレ』を見て、ようやく納得してくれた。

「なんで剣士だってこと、黙ってたのよ！」

「いや、デルフに教えてもらうまで俺も知らなかったんだよ！」

左手に刻まれたコレのせいらしい。そう言ってルーンを見せると、ルイズは「ルーンにそんな効果があるなんて話は今まで聞いたことがない」という。

「なら、これはルイズがくれた＜力＞なんだな」

そう言って笑ったら、突然ご主人様が動かなくなった……なんでだ。

――6日目。

「まことにもって悔しいけれど、『ドット』のぼくじゃもう相手にならないなあ」

ギーシュが頭を掻きむしりながら言う。うーん、ここまで付き合ってくれたギーシュには悪いけど、確かにちょっと物足りなくなってきたのは事実なんだよなあ。いや、ギーシュ君も結構頑張っているんデスヨ？　『ワルキューレ』の動きとか生成とか、最初の頃よりだいぶ速くなってきてるしネ。まあ、俺がさらに強くなってしま

ったけなんですけどネ。

「とはいえ、ぼく以外の貴族と戦うのはまずいだろう」

どうして？　と聞く俺に、下手に勝ったりしたら、おかしな逆恨みをされるかもしれないから、とギーシュは真顔で言う。ああなるほど、そういやこの学院にいる生徒連中って『魔法が使えぬ者は人にあらず』ってな態度取ってるしな。ルイズも、そのせいで周りからバカにされてたみたいだし。ひとりくらいなら何とかなるかもしれないけど、さすがに集団でかかってこられたら、いくら俺でもきついよな。

○●○●○●○●

と、いうわけで。タバサと部屋で本を読んでいたタイコーボーに声をかけてみた。

「模擬戦やらないか」

「なんでわしがそんな面倒なことに付き合わねばならんのだ」

――消去法です、とはさすがの俺でも言えなかった。

ルイズに剣を向けるなんて、いろんな意味で論外。とはいえ、他に知り合いのメイジの心当たりはというと、タイコーボーとタバサ、それとこのあいだ一緒に買い物に行ったキュルケっていうおっぱい！　な女の子だけ。

ギーシュが言うには、タバサとキュルケは『トライアングル』メ

イジで、学院内でもトップクラスの使い手なんだとか。そういや、あの＜土＞の先生も同じランクだって言ってたよな。教師と同じってことは、相当すごいってことだろう。

……それを抜きにしても、女の子とチャンバラなんてやりたくない。タイコーボーの強さはよくわからないけど、使うのはたぶん＜風＞の魔法で、ギーシュとは正反対の系統？（属性と系統って何がどう違うんだかよくわからん）らしいから結構興味あるし。

まあ、あの小さなタバサの一撃で気絶しちゃったくらいだから、あんまり期待はできないけどな。ガリ勉タイプっぽいし。それにほら、俺とデルフのコンビってスゴイし！

しっかし、マジで嫌そうな顔してるなあコイツ。授業中もクソ真面目に勉強してるしなあ……。って、読書に戻りやがったし。こりゃダメかな……出直すか。と、思ったら。別の方向から援護射撃が来たー！

「タイコーボー、彼と勝負してあげて」

タバサナイス支援！　もっとやれ！！

「嫌だ。わしにとって、この本を読み終えるほうが遙かに大切なのだ」

うわ、即お断りかよ。本から顔を上げすらしなかったぞコイツ。

「明日の昼に桃のタルトを追加で注文してもいい。費用はわたしが負担する」

……野郎、ページめくる手ェ止めやがった。

「……もうひと声」

えっ、デザートがトリガー!?

「2個プラス」

「さて、それじゃルールを決めようか才人」

安っ！　俺との勝負の値段、激安っ！！

――こうして俺とタイコーボーは戦うことになった。んで、これから試合ルール決めるんだけど……うん、わかってますヨ。油断は禁物ですよネ。このあいだの件もあるし、おかしな条件つけられないようにしないとな！

第１０話　伝説、左手と親友に出会うの事（後書き）

さあ、ついに太公望の直接バトル的出番がやって参りました！

今回サイトの心理の移り変わりを表現する意味で、中盤以降をいつものそれと文体変えてみました。結構ノリノリで書けて面白かったです。原作サイトのお調子者っぽさが少しでも出せていればよいのですが。

ギーシュとサイトには強くなっていただかなければ困るのです、今後の展開的にも。頑張ってくれふたりとも！

２０１１／０５／０３　一部加筆修正、統合によってずれた話数名を訂正

第１１話　伝説、風により地上へと帰還す

――メイジの怖さは、既にわかっていると思っていたのだけれど。

「模擬戦やらないか」

その夜。ルイズの使い魔がギーシュと共に部屋へやって来て、タイコーボーにそう持ちかけた時。わたしは一瞬、彼の正気を疑った。突然何を言い出すのか……と。

言われた本人も、顔をしかめている。当然だろう。口では面倒だ、などと言ってはいるが、そもそもタイコーボーは、己の＜メイジ＞としての＜力＞を誇示するような人間ではない。既に１０日程一緒に暮らしているにも関わらず、未だに彼の実像が掴みきれないわたしでも、そのくらいのことは理解している。

「なあミス・タバサ。きみからも、彼に頼んでみてはくれんかね」

ギーシュがわたしの耳元で囁いた。そもそも、何故彼が一緒にいるのだろう。

「結果のわかりきった勝負をさせるほど、わたしは愚かではない」

呟き返す。しかし、ギーシュが放った次の言葉が、わたしの心を微かに動かした。

――ぼくでは、もう太刀打ちできないんだよ。

なんでも、ここ数日のあいだにギーシュとサイトのふたりは仲良

くなり、互いに遺恨の発生しないレベルでの模擬戦を繰り返しているのだとか。

それ以上にわたしが驚かされたのは、全力で繰り出した『ワルキューレ』を、剣1本でなんなく切り裂く――しかも真正面から――という荒唐無稽な話が、あのルイズにすら公認された事実であるということ。

確かあの時……例の決闘騒ぎでタイコーボーがルイズ達に策を授けた場で、サイトは「武術の心得が一切ない」と言っていたはず。あの状況で嘘をつく理由はない。だとすると、あれから彼に何らかの変化が起きたということになる。

そういえば。先日トリスタニアの街へ赴いた際に、錆びた剣を手に入れていた。もしかすると、あれは特別な魔法がかけられた＜マジック・ウェポン＞なのかもしれない。そう、持ち主の動きを補佐するような……。

これは、降って沸いた好機だ――彼、タイコーボーを見極めるための。

「タイコーボー、彼と勝負してあげて」

その後の返答は、予想通りのものだった。

「嫌だ。わしにとって、この本を読み終えるほうが遙かに大切なのだ」

即座に断られた……でも、わたしは知っている。彼に頼み事をするための言葉を。

「明日の昼に桃のタルトを追加で注文してもいい。費用はわたしが負担する」

予想通り、タイコーボーは食いついてきた。少し痛い出費だが、彼の実力を測るために必要なのだから、ここで惜しんではいけない。

……だけど正直、1個プラスで抑えて欲しかった。

○●○●○●○●

――ギーシュ・ド・グラモンは呆れていた。彼の無謀さに対して。

ミス・タバサの使い魔が提示した条件は、なんと

「制限時間10分、先にまいったと言わせたほうが勝ち」

などという、非常にあっさりとしたものだった。しかもだ。

「なあ、本当にそんなんでいいのか？　あー、なんだ、その……相手に怪我をさせちゃいけない、とか、そういう条件はつけなくても？」

そんなサイトの心遣いに対して、彼はこう答えたのだよ。

「なんだ才人、自分から申し込んでおいて、いまさら臆病風に吹かれたのか」

――と。

ああ……サイトのやつ、笑ったまま顔を引きつらせてるじゃないか……。そりゃそうだ、せっかくの気配りを無にするようなことを言われて良い気持ちはしないだろう。あれがぼくだったら、とうの昔に決闘を申し込んでいる。

いや、でも――彼はあのミス・タバサが召喚した異国の＜風＞メイジだ。ひょっとして、すごい実力の持ち主なのかもしれない。だが、どんなに腕が立つのだとしても、まともにルーンの詠唱ができるとは思えない。

なにせ、サイトの素早さは尋常ではない。トリスタニア王国元帥の地位にある父上にお褒めの言葉をいただいた、ぼくの『ワルキューレ』7体同時の攻撃で、捉えることすらできない速度なのだから。

彼の主人に勝負の仲介を頼んだぼくが思うのもなんだけど、せいぜい大怪我をしないよう気をつけてくれたまえ――。

○●○●○●○●

巨大な2つの月が、本塔脇の中庭を薄く照らしている。そこへやって来たのは「模擬戦」をするための太公望と才人、両方の主人であるタバサとルイズ、そして面白そうだからとついてきた、ギーシュとキュルケの計6人であった。

模擬戦なんかやめなさい。そう必死に止めるルイズの言葉を、才人は聞こうとしなかった。いや、聞いてはいたのだが、言い返したのだ。

「雑用以外にも使い魔としてできることがあった、その＜力＞を磨きたいんだ」

……と。

そんなことを言われてしまっては、主人として止めることはできない。確かに自分の使い魔は強かった。メイジには絶対敵わないはずの平民が、全力を出したギーシュ相手に圧勝してみせたのだから。

しかし、今度の相手は全く実力のわからない……あの、東方から来たというメイジ。彼は、ルイズにとって一種の恩人だった。何故ならあの決闘騒ぎ以降、周囲から自分を馬鹿にする声が消えたから。翌日、大好物のクックベリーパイを渡さなければならなかった時は正直殺意が芽生えかけたが、それでも感謝していることは間違いない。

お互いに、大怪我をするような事態になって欲しくはない……それがルイズの偽らざる気持ちであった。もうクックベリーパイについての恨みはない。たぶん。

○●○●○●○●

「それじゃ、ルールを確認するわよ」

１０メイルほどの距離を開け対峙した太公望と才人の中央で、キュルケが声を上げる。中立の立場にいるということで、彼女がこの模擬戦の審判を買って出たのだ。それ以外の３名は、遠巻きに彼らを見守っている。

「まず３カウントして、そのあとはじめの合図をするわ。それと

同時に試合開始。ふたりとも、それでいいかしら？」

「うむ」「ああ」

「１０分以内に相手を降参させたら勝ち、ルールはこれでよろしくて？」

頷く両者。ふたりから了解を得たと判断したキュルケは、試合に巻き込まれないよう、他の者たちのいる場所まで後退する。

「それじゃ、３……２……１……　はじめっ！」

キュルケが言うや否や、才人は背にしたデルフリンガーを抜いて駆け出した。左手に刻まれたルーン文字が光り輝く。先手必勝！　あっという間に、太公望まであと数歩という距離まで間合いを詰める――だが、その瞬間。彼の前に、土煙が巻き起こった。

あの時と同じかよ！　才人は憤った。太公望は土煙で目隠しをして、自分の死角から攻撃してくる……瞬時にそう判断した。今の才人には頼もしい味方『デルフリンガー』がいる。そんな手を食うものか！　とばかりに剣風で周囲の土埃を吹き飛ばした彼は、油断なく身構えた……だが、攻撃が来る気配はない。いや、それどころか太公望の姿そのものを見失ってしまった。

「どこだ、どこにいる！？」

必死に周囲を探る才人。その後すぐに視界全てが晴れた。にもかかわらず、太公望はどこにもいない。

「ふっふっふ……」

その時だ。何処かから、太公望の声が聞こえてきたのは。

「あ、相棒……上だっ！！」

デルフリンガーの声で天を振り仰ぐと、そこには――２つの月を背に、服をバサバサとはためかせ、１０メイルほどの高さに浮かんでいる対戦相手の姿があった。

「た、タイコーボー！」

すぐさまデルフを構え、彼の遙か上方にいる太公望の攻撃に備える……が、いっこうにそれらしき動きはない。空の上の太公望は腕を組み――月の光を背に受けているせいでその表情は読み取れないが、間違いなく――笑っていた。

「おい、どういうつもりだよっ！」

と、声を荒げる才人に、太公望は高らかに笑いながら返す。

「ふはははははっ、どうだ才人よ！　この高さまでは攻撃できまい！！」

――観客が一斉に……それは見事なまでにズッコけた。つられてコケなかった才人は、ハッキリ言って相当努力したといえよう。

「キュルケよ！　あと何分だ？」

いきなり太公望から声をかけられたキュルケが、戸惑いながらも答える。

「えっと、残り……8分ね」

「なんだ、まだ結構あるのう……それならば」

と……試合中であるはずの太公望は「よっこいしょ」というかけ声と共に、その場で肘をついて――空中なので正確にはつけてはいないのだが――横に寝そべってしまった。見るからにだらだらしている……。

「ある意味ものすごく器用」

「いや……感心している場合なのかね？　これは」

素直に感想を述べるタバサに、ツッコむギーシュ。他の者達は呆れて声も出ない。

この状況から、最も素早く立ち直ったのは才人だった。

「おい！　何やってんだよっ！！」

「見てわからぬか？」

「わからないから聞いてるんだよっ！！」

「ふむ。しょうがないから教えてやろう……だらだらしているのだ」

「ふざけんなっ！！」

剣を振り回し、いきり立つ才人。だが空を舞う太公望は全く動じ

ない。それどころか、暢気に大あくびをしている始末。

「試合なんだぞっ！　攻撃しなきゃダメだろっ！！」

「なんでそんな面倒な真似をする必要があるのだ」

「攻めなきゃ勝てないからに決まってるじゃないか！！！」

当たり前じゃないか、お前は何を言っているんだ。そう責める才人と、ようやく立ち直ってそれに同意する観客たち。しかし、そんな彼らに太公望はこともなげに言い放つ。

「別に、勝つ必要なんてないであろう？」

……ナンデスト？　リピート・アフター・ミー！？

「な、何言ってんだお前……」

「だから、わしがおぬしを倒す必要などないと言っておる」

「いや、そういう意味じゃなくてだな！　ほら、お前タバサが出した条件飲んで、この試合受けたわけだろ！？　いいのか、おい？　ちゃんとやらないと、デザートもらえなくなっちゃうだろ！？」

可愛そうなくらいにわたわたしながら言う才人へ、

「わしが引き受けたのは、あくまで『おぬしの相手をする』ことであって、勝敗の結果や試合内容については何ら条件に含まれておらんのだ。だから、こうして攻撃の届かない場所で、時間がくるまでだらだらしておれば！　それだけで！！　桃のタルトはいただき

なのだ！！！」

太公望からの、妙に力が籠もりつつ……それでいて無情な宣告が発せられる。

――やられた……全身を凄まじいまでの脱力感に襲われながら、タバサは思った。最初から、太公望は才人と戦うつもりなどなかったのだ。

「なんでもあり」という一見厳しいルールが実は隠れ蓑で、１０分という時間制限を設けたことに意味があったのだと悟った。そう、試合というには長すぎず、短くもない制約をつけることによって、最小限の労力で引き分けに持ち込むための策――。

「そういうわけで、わしのほうからはこれ以上何もしない。才人よ、おぬしは別に遠慮する必要はないぞ。まあ、できるならとっくにやっておるだろうが」

からからと笑い声を上げる太公望へ思わずデルフを投げつけそうになった才人だったが、かろうじて踏みとどまった。太公望はああ言ったものの、剣を手放した瞬間、自分はただの高校生に戻ってしまうのだ。それに、太公望が本当に攻撃してこないという保証もない。

「なあデルフ。お前、天にかざしたら稲妻が落とせるとかそういう機能はないのか？」

相棒に一縷の望みを託すも。

「……６０００年生きてきて、長いこと剣をやっているが、たぶ

んない、と、思う」

返ってきた結果は無惨だった。

「なんだよ！　ひょっとして喋るだけかよ！？」

「何言ってやがるんだ相棒！　そ、それだけのはずがねえじゃねえか！！」

「お、なんだ！？　もしかして、すごい隠し機能でもあるのか？」

「あ……え……うん、あったと思うんだが……忘れた」

「使えねえええええええええ！！！！！！」

「ひでえええええええええええ！！！！！！」

――こうして、時は無情にも過ぎていき……結局、両者引き分けで試合は終了した。

○●○●○●○●

「う～む、なんと言ったらいいのか……」

正直コメントに困る試合だった……と、ギーシュは振り返る。うんうんと頷くキュルケに、頭を抱えるタバサ。あれが使い魔だなんてタバサも大変ね……と、人ごとのように呟くルイズ。と、そこへ、剣を鞘へ収めた後も未だ納得のいかない表情の才人と、してやったりという顔をした太公望が戻ってきた。

「張り切ってた割に、随分とみっともない戦いだったわね」

ルイズの口撃に、才人は何ら反論できなかった。ここ数日でつけたはずの自信に、大きくヒビを入れられた。

「でも……ふたりとも無事でよかったわ」

その言葉に、才人が反応した。

「べべ、べつに、ああ、あんたの心配してたわけじゃ、なな、ないんだからね！」

などという色々な意味で貴重な台詞は、しかし彼の耳には届かなかった。

――ふたりとも無事でよかった。

そうだ、俺が背負っているのは、他者を傷つけるための武器なんだ。

昨日までは、相手が『ワルキューレ』……生命を持たない人形だったから、そんなあたりまえで、大切なことにも気付けなかった。それを、いくら挑発されて苛立っていたとはいえ、一瞬でも投げつけようと考えた自分が怖くなった。

もしも、アイツが空を飛ばずに、あの場に残っていたら――？

そして、デルフを振り抜いていたら――？

異世界に来て心細かった俺の、はじめてできた友達を――この手

で斬ってしまったかもしれない。

全身の力が抜けた。そのままがっくりと崩れ落ち、膝をつく才人。いったいどうしたのよ、と、近寄ってきたルイズに何も答えることができない。と、そんな彼の肩に誰かがぽん、と手を乗せた――太公望だった。その顔は笑っていたが、さっきまでのそれとは違って見えた。

「その様子ならば大丈夫そうだのう……ま、振り回されんように気をつけろ」

――引き分けなんかじゃなかった。

それまで得意の絶頂にあった平賀才人は、こうして地上へと戻ってきた。

第１１話　伝説、風により地上へと帰還す（後書き）

気がついたら、結構な（自分の中では）長文になってました……とんでもない夜更かし。いやもう徹夜ですね。このＳＳを書き始める前の段階から、結末を決めていた勝負だというのにこのていたらくはないだろうと。

ちなみに、スープーなしで太公望が飛んでいますが、１話で触れている通り、本作では伏義時の飛行能力が残っているという設定です、念のため……。

……派手なバトルを期待していた皆様、こんな結果で申し訳ありませんでした。でも、そのうちちゃんと戦いますから！　いや本当に……。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第１２話　伝説、嵐を巻き起こすの事

「終わった後だから言うがな、才人にもちゃんと逆転の目はあったのだぞ」

模擬戦を終え、寮塔へと向かう道すがら――太公望は突然そんなことを言い出した。

そんなことはありえない――それは、サイトを含め、そこにいた全員の意見が一致するところだ。サイトは魔法が使えない。持っている武器も＜インテリジェンス・ソード＞とはいえ、あくまで剣に過ぎない。空高く舞う太公望に対しては無力だ。

「まさか、剣を投げつければよかった……なんて言わないわよね？」

ルイズが問うた声に、ビクリと才人が身を震わせる。

「いや、それはない」

なら、いったいどうやって！？　解答を求める５人に、太公望はフフン……と、鼻で笑って「よ～く考えてみるのだ」と言うと、さらに言葉を続ける。

「そもそもだな、才人がそのような真似をするような人物ならば、わしはあんなルール設定をしたりはせぬよ」

「ふうん……あんた、ずいぶんサイトのこと信用してるのね」

どこか悔しそうな、それでいて僅かに自分の使い魔に対する誇らしさが込められたルイズの一言に、太公望はこともなげに返答した。

「信用ではない。信頼だよ、ルイズ」

才人のことは、おぬしのほうが良くわかっているのではないかの？　そう言った彼の表情は、先程とはまるで別人のように真面目。でもどこかに優しさを感じるものであった。

……と、そんな太公望の言葉を聞いて、ルイズはあることを思い出した。これまで色々なことがあって、確認するのをすっかり忘れていたのだ。

「あんたたち、やっぱり召喚前からの知り合いだったのね！」

「は？」「なぬ？」

思ってもみなかったその問いかけに、目を白黒させる才人と太公望。

「とぼけることないじゃない！？　だいたい、その髪の色！　黒い髪なんて、このあたりじゃすっごく珍しいんだから。おまけに肌の色とか、顔の造りだって似てるじゃないのよ」

――タバサははっとした。ルイズの言う通りだ……なぜ今まで気がつかなかったのだろう。メイジと平民。瞳の色や着ているものこそ異なっているが、似た服を着せて横に並ばせたら、兄弟――サイトが兄で、彼より頭半分ほど小さいタイコーボーが弟――だと言っても通用するのではなかろうか。

「いや、召喚された次の日に、たまたま声かけられただけなんだけど」

「嘘よ！　それだけで、あんなに仲良さそうに話しかけるわけないじゃない！」

「ああ、それは……」

才人は説明した――学院内を歩いているうちに、道に迷って困っていたところを、偶然通りかかった太公望に助けてもらったのだ、と。

背中に乗せてもらったら、コイツものすげえ速さでビューンって飛んで、あっという間に目的地まで運んでくれてさ、そんで、お礼言わなきゃって思って慌てて名乗って……そんな風にひたすらあの日の感動を語る才人の言葉は、残念ながら最後まで綴ることはできなかった。

「なあサイト。ミスタ・タイコーボーの背中に乗って飛んだというのは本当かね？」

そう問うたギーシュの声は、いつものそれと違い若干固くなっていたのだが……それに気がつくほど才人は鋭敏な感覚の持ち主ではなかった。

「え、こんなことで嘘ついたって仕方がないだろ」

あはは……と笑った才人だったが、ここに至ってようやく気がついた。周囲の空気がなんだかおかしいことに。そんな彼を見て、ルイズがはあっとため息をつく。

「あんたは＜魔法＞をよく知らないから、仕方ないんだけど……」

呆然としたルイズの後を継いだのはギーシュ。

「自分以外のひとを抱えたまま＜フライ＞を維持するのは、ランクの低いメイジにとってはかなり難しいことなんだ。その上、高速飛行まで可能とは……」

ギーシュの説明を、タバサが補足する。

「超高等技術。一緒に飛ぶだけならともかく、高速飛行なんてわたしにはできない」

その場にいるメイジ達の視線が一斉に太公望へと向けられる。そして最後に、キュルケがとどめの一撃を繰り出した。

「つまり、ミスタ・タイコーボーは最低でも『トライアングル』。いいえ、最高位の『スクウェア』レベルのメイジと判断したほうが妥当ってところかしらね」

場が静寂に包まれる。誰かが、ごくりと唾を飲み込む音がした。

「ええっと、この無知なわたくしめに教えていただけませんでしょうか、お嬢様」

突然、使い魔モードに入る才人。

「なにを聞きたいのかしら」

寛大なご主人様が教えてあげるわ……と、言わんばかりに薄い胸を反らすルイズを見て、頭の片隅でがんばってるんだナ……と思った才人だったが、さすがにこの状況でそれを口に出すほど空気読めない子ではなかった。代わりに、先程挙げた質問を続ける。

「その『スクウェア』って、具体的にどのくらいスゴイんでしょうか」

「わたしのお母さまが同じ＜風＞の『スクウェア』だけど……そうね、おもいっきり手加減して起こした竜巻で、このあいだ乗ったような馬車を空まで吹き飛ばす程度かしら？」

ルイズの母は、トリステインのみならず、このハルケギニア世界ですら『伝説』と称される域に達している＜風＞メイジである。ハッキリ言って『一般的な風のスクウェアメイジ』への比較対象としては（能力的な意味で）全く相応しくないのだが、そんなことは才人にはわからない。

待ってクダサイ。俺、安全牌のつもりがまさかの大型地雷踏んでたんですカ！？

先刻の精神的敗北ですっかり参っていた才人は、さらなる事実を突きつけられ、あぐあぐと声にならない呻きを漏らした後……その場へ崩れ落ちた。

――この状況は完全に想定外だった。

まさか、自分の『飛行能力』がそこまで高く評価されるとは。初日に、タバサの＜フライ＞を見ていたせいで、ここではごく当たり

前のことだと思い込んでいたのが太公望最大の敗因であった。

こうなっては仕方がない、なんとか事態を沈静化せねばならぬ……彼は、己の脳細胞をフル回転させ、善後策を講じる。そして、1秒にも満たないわずかな時間で、今後の立ち位置を決定した。

「ばれてしまっては仕方がないのう。いかにも、わしは高位の＜風使い＞だ」

スクウェアメイジ、とは言わない。あくまで自分は仙人なのだ。

「タバサは、うすうす感づいておったのではないかの？」

小さく頷くタバサ。

「あなたの纏う＜風＞は異質。『ドット』や『ライン』ではありえない程に」

「ならば、何故わしがそれを黙っていたのかは……言わずとも理解できるであろう？　ただでさえ、わしはここでは異邦人、目立つ存在だ。そんな者が強い＜力＞を持っているとわかったら、どうなる？　結果は容易に想像がつくであろう？」

言葉を止め、そこにいる全員に思考を促す。太公望は――多少の騒ぎを起こすことはあったが――基本的に、穏やかな存在だった。真面目に授業を受け、図書館へ籠もり、部屋へ戻っても書をめくっていた。今日の模擬戦にしても、嫌々ながら受けたにすぎない。結局のところ、彼はこの地で静かに暮らすことを願っているのだ……と。

「そういうわけで、わしの＜力＞については他言無用に願いたい」

頭を下げる。まあ、そういうことなら……と、素直に受け入れるギーシュ。だが。

「条件がある」「あたしも同じく」「タダで、っていうのは虫が良すぎるわよね」

タバサ、ルイズ、キュルケの3人は納得しなかった。目を輝かせながら太公望へとにじり寄ってゆく。ようやくこの曲者をイジるチャンスが来たのだ、逃す手はないということだろう。

「ま、まあそう簡単にはいかぬと思っておったが……わしにどうしろと？」

額に汗を流しながら後ずさる太公望に、

「試合を受けてもらいたい」と迫るタバサ。

「東方のメイジとしての視点から、自分の魔法を見て欲しい」と願うルイズ。

「あなたの国の話を聞かせてもらいたいわ」と頼むキュルケ。

彼女達から一斉攻撃を受けた太公望は、必死の抵抗を見せるも遂には折れ――試合はお互いに怪我をさせない程度のものに留める、魔法を見たり、自国の話をするのはここにいるメンバー以外の誰にも見られない場所で行う――という条件を付けることで、それを飲んだ。

ちなみに「ついで」ということでギーシュと――ようやく立ち直った才人も――仲間として迎えることを併せて承諾した。

○●○●○●○●

「ところで、例の答えを教えてもらえるかしら？」

「簡単なことだ。さっきのおぬしたちのように、集団で挑んでくればよかったのだよ」

全員がそれぞれの部屋へ戻る寸前に、ルイズが最初の質問――どうすれば才人に逆転の目があったのかに言及すると。太公望はまるでなんでもないことのように、そう答えた。

『制限時間１０分、先にまいったと言わせたほうが勝ち』

そう、このルールには「ひとりで戦わなければいけない」などという縛りはなかったのだから、あの場で観戦している者達に手助けを乞えば良かったのだ、と。

「もっとも、そんなことになったら……わしは制限時間いっぱい逃げることに全力を尽くしていたがのう」

と、笑う太公望に、一同はなんともいえない視線を投げることしかできなかった。

――まあ、このへんが落としどころかのう。

寝床の中で、太公望は独りごちた。思わぬところから自身の持つ『能力』に興味を持たれてしまったが、そろそろ授業以外の場で実践的な〈魔法〉を見たいと思っていたところだし、ちょっとした試合をする程度なら問題ない。

それに。彼女たちの出す要求を最後まで渋ったことで、面倒ごとを嫌うという印象を強化できた。おまけに望んでいた条件を付けられたのだから、よしとしよう……。

ひとり納得し眠りについた太公望の遙か頭上には、まだ2つの月が輝いていた――。

第１２話　伝説、嵐を巻き起こすの事（後書き）

才人は天然の爆弾だと思います。意外なものが伏線でしたという話。

まさかの「スクウェア」認定をされてしまいましたが、アイツ戦いは好まないんだなーという印象を植え付けることでサボる算段らしいです。

「信用ではない。信頼だよ」はとても好きな言葉です。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第13話　土くれ、学舎にて強襲す

――明けて翌朝。

太公望が目を覚ますと、真上から己の顔をのぞき込んでいたタバサと目が合った。

「やっと起きた」

「……いつもと変わらぬ時間のはずだが」

太公望はよっこらせ、というかけ声と共に身体を起こし、上半身を伸ばした。そしてようやくタバサのほうに視線を向けると、既に着替えを終えていたらしい彼女は、膝を揃えて畳み、彼の枕元に座っていた――『杖』を持って。

そういえば。昨日の夜、彼女と試合することを承諾していた。まさか、これから一戦やりたいなどと言い出すのではあるまいな。太公望は、内心冷や汗をかいた。

彼はふと、崑崙にいた仲間のひとりである宝貝人間を思い出す。自分より強い者を見ると、見境なく挑みかかるバトルマニア。タバサは彼のようなタイプではないと思うのだが……いや、そういえばめったに感情を表さないこととといい、言葉少なであることといい、微妙に特徴がかぶるというか……。

高位の＜風使い＞などと言ってしまったのは失敗だったかのう……と、思わず頭を抱えそうになった太公望を思考の谷間から引き戻したのは、彼の寝間着の袖を掴み、くいくいっと引くタバサ。

「早く着替えて」

「いったい、何をそんなに急いでおるのだ？」

内心、頼むから早く戦いたいとか言わないでくれ……と願っていた太公望だったが、その祈りはどうやらこの世界の神に届いていたようだ。

「もうすぐ、日が昇る」

すっ、と窓を指差したタバサがぽつりと言い、太公望の目をじっと見つめる。

「空」

ああ、そういうことか。太公望は理解した。

「わしの背中に乗って、日の出が見たいと？」

こくこくと首を小さく前後に揺らすタバサ。こんな、玩具箱を目の前にした幼子のような態度で頼まれてしまっては、さすがの彼も断れない。苦笑いをして頷く。

「すぐ支度する。待っておれ」

――それから数分後。ふたりは窓の外へ飛び出した。

○●○●○●○●

――それは、まさに幻想的な光景だった。高度３０００メイル。地平線の向こうから顔を出す太陽は、神々しいまでの輝きを放っていた。遙か下界に望む魔法学院は、まるで玩具の城のようにこじんまりとして見える。

頬に当たる風が心地よい。風竜もかくやという速度で飛び続けているにも関わらず、向かい風の影響がその程度にしか感じられないのは、タイコーボーが周囲に張っているシールドのおかげだろう。

それにしても……まさかこれほどとは思わなかった。わたしという「荷物」を乗せてなおこの速さを維持できるということは、ひとりで飛んだら……たとえ風竜の全力をもってしても、彼に追いつくことは敵わないのではないだろうか。

この＜力＞を借りることができたら――そこまで考えて、彼女は思い直した。確かに彼はわたしの使い魔だ。しかし『事故』で無理矢理言葉すら違う異郷へと連れてこられた無関係の人間でもある。こうして側にいてもらえるだけでも由としなければいけないのだ。

それに……彼は争いを好まない。だからこそ、これまで自分の力量をひた隠しにしてきたのだろう。にも関わらず、手合わせを了承してくれた。スクウェアクラス、しかも異国のメイジと杖を交えることができるなど、得難い機会。そして、彼はほぼ間違いなく実戦を経験している。そんな相手と戦い、語り合うだけでどれほどのものが得られるか――それ以上を求めるのは、いくらなんでも贅沢というものだ。

思わず、太公望の肩を掴んでいた手に力が込もる。

「どうした、もしや寒くなってきたかのう？」

返ってきた反応は、暖かかった。

「大丈夫、なんでもない」

これで充分。こんな風に空を飛べただけで――。

その後１０分ほど空中遊覧を楽しんだふたりは、ゆっくりと寮塔５階にある自室へと舞い戻った……のだが。

またもや＜アンロック＞で部屋に突入していたキュルケ・ルイズ・才人の３人――キュルケと才人はタバサ同様、空への誘惑に抗えず待ちかまえていたらしい。ルイズは別の用件があったようだが――に見咎められてしまい。太公望はさんざん理屈を突きつけられた挙げ句、何度も空と地上を往復させられる羽目になり。

――全員が満足するまで飛ばされ続けた太公望は、その後夜まで起き上がれなかった。

○●○●○●○●

――太公望が召喚されてから２回目の虚無の曜日、その夜。

トリステイン魔法学院の本塔。その外壁に、ひとりの人物が「垂直に立って」いた。壁に靴底をつけ、悠然と佇むその姿には、ある種の風格すら漂っている。

「情報じゃ、物理攻撃が弱点らしいけど……こんなにぶ厚かったら、ちょっとやそっとの魔法じゃどうしようもないねえ」

その不審者は、足の裏から伝わってくる感触で塔外壁の状態を調べていたのだった。

「確かに＜固形化＞の魔法以外はかけられていないようだけど……」

新たに＜錬金＞を重ね掛けすることによって、それを無効化しようとしたのだが、一切掛からなかった。おそらく『スクウェア』ランクのメイジが、この壁に＜固定化＞を施したのであろう。それよりもワンランク落ちる『トライアングル』たる自分には、到底手が出せない。壁の上に立つ不審者は、そう判断した。

「とてつもない試練を乗り越えて、やっとここまで来たってのに……！」

小声でそう呟きながら、ぎりっと歯噛みする。

「かといって『破壊の杖』を諦めるわけにゃあいかないね……」

その場で腕を組み、悩み始めたこの人物こそ……今宵の主賓である。ただし、招かれざる客――という注釈がつくのだが。

――いっぽうその頃。タバサの部屋では騒動が持ち上がっていた。

「この状態のわしにモノを頼もうなどとは……おぬしは鬼か」

寝床の中から上半身だけを起こした太公望がぼやく。部屋の主であるタバサも、珍しくその瞳に怒りの色をたたえている。

「そ、それは、や、やりすぎちゃったとは思ってるんだけど」

「思ってるだけかい！！」

ガーッ！　と、大口開けて威嚇する太公望の姿にさすがに焦ったのであろう、才人は、主人のマントの裾を掴むと、軽く引っ張った。

「ごめん、やっぱ無理だよな。ほら、帰るぞルイズ」

そう。今回騒ぎを持ち込んだのは、ルイズと才人の主従であった。せっかくの虚無の曜日、太公望の気が変わらないうちに、東方の技？　で自分の＜魔法＞を調査してもらいたい……。

そう考えたルイズは、彼と仲の良い才人を連れて、朝早くにタバサの部屋を訪れたのだが。キュルケと才人たちの悪ふざけに乗っかってしまった上に、空を舞う楽しさに我を忘れた結果……肝心な用件を伝える前に、太公望は倒れてしまったのである。

「まあ、おぬしの事情はわかった。約束だからの、わしなりに調べてやってもよい」

「ホント！？」

ぱっとルイズの顔が輝く。

「だが、さすがに今日のところは無理だ。回復し次第見てやるから、しばし待て」

「そ、そうよね。あ、えっと……ごめんなさい」

素直に詫びるルイズの姿に驚いた才人とタバサが目を丸くする。
そんな彼らを見て、さすがの太公望も怒る気が失せたらしい。やれやれ、と疲れたように口を開く。

「だが、過度な期待は禁物だぞ。これまで誰にも失敗の原因がわからなかったおぬしの魔法について、わしが正しく答えられるとは限らぬのだからな。むしろ、解明出来なくて当たり前。そのくらいの覚悟はしておいて欲しい」

その言葉に、ビクリと身体を震わせるルイズ。しかし、気丈にも声を絞り出す。

「……ええ。国立アカデミーの研究室にいる姉さまにもわからなかったんですもの。覚悟はできているわ」

その答えに満足したのか、太公望はしっかりと頷いた。

「ならば……」

ドゴォォオオ……ン。

だがしかし、その言葉は外から聞こえてきた突然の轟音によってかき消される。いち早く異変に反応し、窓の側へと駆け寄ったタバサは見た。

――本塔のすぐ側。月明かりの下に、巨人が顕現しているのを。

○●○●○●○●

突然の轟音と、部屋にまで響く衝撃に驚いたタバサは、急いで外を見た。そして確認した。本塔脇の中庭に、巨大なゴーレムが立っているのを。あれは、まさか……。

「土くれ」

「何だそれは」

「最近、この国を中心に暴れ回っている盗賊」

あなたはそこにいて。未だ起き上がれない太公望へそう告げると、タバサは杖を持って、窓から空へ飛び出した。

そのとき部屋から飛び出したのは――窓ではなく廊下の扉からだったが――タバサだけではなかった。ルイズは『土くれ』という名前にいち早く反応していた。彼女は、その名を聞いたことがあったのだ。強力な＜土＞魔法を用いて、貴族が持っている魔法の宝物だけを狙うという、神出鬼没の大怪盗――それが『土くれ』のフーケ。

とある貴族の屋敷に伝わる家宝のティアラを盗んだとか、王立銀行を白昼堂々襲ったのだという噂が、まことしやかに流されている。それが、ここに現れたということは……魔法学院の宝物庫狙いに決まっている。なら、自分がすることはひとつしかない。ルイズは、中庭へ向かって駆け出した。

「おい、どこへ行くんだよ。まさか……」

「そのまさかよ」

「あんなデカいの、お前ひとりでどうするっていうんだ！」

慌てて制止しようとする才人を振り払う。

「貴族は、そのためにいるのよ」

彼女のどこまでもまっすぐなその姿勢は、才人にはとても眩しく見えた。ルイズの手助けがしたい――彼はこのとき初めて、心の底からそう思った。

「使い魔は、主人の盾になるんだろ。デルフ取ってくるから、出口で合流しよう」

そして、すぐさま相棒を背負って玄関へ駆けつけた才人と、同じく外の轟音に気がついて駆けつけてきたキュルケを加えた3人組は、互いに憎まれ口を叩きつつも、ばたばたと事件現場へ向かって急行した。

――結論から言えば、彼らの行為は無駄にはならなかった。ただ残念なことに、怪盗捕縛という結果ではなく、より事態を複雑にしてしまったという意味において……だが。

「くそっ、ここで諦めてたまるもんかい」

『土くれ』の2つ名で呼ばれ、トリステイン国内はおろか、隣国までその名を轟かせる怪盗フーケは、焦っていた。

ウルの月――フレイヤの週、虚無の曜日。その日、学院長のオールド・オスマンが所用でトリスタニアの街へ出向く。学院最高責任者にして最大の使い手が、１日中不在となる――その情報を元に、決行の日を定めたはずだったのだが……想定以上に、目標のガードが堅かった。

得意の＜錬金＞は、やはりこの宝物庫を護る壁には通用しない。しかし、この場でぐずぐずしていたら、人目に付く危険性がある。こうなれば最後の手段とばかりに、フーケは人型のゴーレムを生成した。全長３０メイル、土製とはいえ城攻めすら可能な、自慢の巨大ゴーレムだ。

そのゴーレムの拳で、目的の場所――宝物庫の外壁を殴る。殴る。殴る。だが、ビクともしない。拳の部分を鉄に変えて、さらに衝撃を与え続けてみた。が、ヒビ１つ入れることができない。逃走後のことを考えると、これ以上の精神力消費は危険だ。悔しいが、引くしかないのか……？

その時、思わぬ事態が発生した。突如、ゴーレムの脇……１メイルほどの位置が爆発し、そこに亀裂が入ったのだ。しかも、周囲の＜固定化＞まで解除されている。

「誰だか知らないが、ご協力感謝するよ」

このチャンスを見逃す手はない。生じた亀裂めがけてゴーレムの拳を振り下ろす。バカッという音と共に、人ひとりが通り抜けられるほどの穴が開いた。

フーケはゴーレムの腕を伝い、宝物庫内部へと進入した。中にはたくさんのお宝――＜マジック・アイテム＞が納められていたが、

今回の目標はただひとつ。さまざまな杖が立て掛けられた一角。その中に、どうやっても杖には見えない品がある。フーケは、それを手に取ると、急いでゴーレムの肩に飛び乗った。

去り際、杖――今回持ち出したそれではなく、愛用のもの――を振る。すると、壁に文字が刻まれた。

『破壊の杖、確かに頂収いたしました。土くれのフーケ』

そして、フーケは闇夜の中へと消えていった――。

「あれはどういうこと？」

窓から飛び出した後、ゴーレムからの死角となる建物脇の植え込みに身を隠しつつ、密やかに件の巨大ゴーレムへ接近しつつあったタバサは、突然の事態に眉をひそめた。

それまで、巨大ゴーレムの攻撃にびくともしなかった本塔外壁。そこにルイズの＜失敗魔法＞が――ゴーレムの腕に当てようとして外したのだと思われるそれが直撃した瞬間。あれだけの強度を誇っていた壁に、亀裂が走ったのだ。ついに攻撃に耐えられなくなったのか？　それにしては――。

いや、検証している場合ではない。今自分が行うべきは、早急にゴーレムを使役するメイジ――おそらくはあの肩に乗っている黒いローブを纏った人物を確保すること。だがしかし、その作戦は失敗に終わってしまった。何故なら、それから間もなくして目標物――巨大ゴーレムが突如音を立てて崩れ落ち、それと共に舞い散った大量の砂煙が、タバサの視覚を完全に遮ってしまったからだ。

視界が晴れると、そこには堆く積み上がった土――元はゴーレムであっただろうそれが小さな山を形成しており、黒いローブを着たメイジの姿は、跡形もなく消え去っていた。

○●○●○●○●

――そしてその翌朝。トリステイン魔法学院は、喧噪に包まれていた。

学院内で厳重に保管されていた秘宝『破壊の杖』が、昨今噂でもちきりの怪盗『土くれのフーケ』によって盗まれてしまったからである。しかも、巨大なゴーレムを用い、その腕力でもって保管場所の壁を破壊するという大胆不敵な方法で。

事件現場となった宝物庫には、学院中の教師たちが集まっていたが――事態は昨夜から何ひとつとして動いていなかった。何故なら……。

「衛兵は何をしておったのだ！　やはり平民など当てにならん」

「それより、当直の貴族は誰だったのだね！？」

と……彼らはこんな風に、ずっと責任のなすりつけあいに汲々としていたからだ。

――わたしたちは、何のためにこの場へ駆り出されたのだろう。

タバサは冷めた目で周囲を観察していた。昨夜の事件を目撃した

人間のひとりとして招集を受けているにもかかわらず、未だ事情聴取すら行われていない。同じく呼び出された面々はと見ると、キュルケは欠伸をかみ殺した表情で壁に寄りかかっていて。サイトは物珍しそうに辺りを見回しており。ルイズは俯いて肩を震わせていた。

こんなことなら、彼を部屋に残してきたほうが良かったかもしれない。自分の横に腕を後ろ手に組んで立つ、未だ顔色の優れぬタイコーボーに、心の中で詫びた。

それから約１０分ほどして――槍玉として、その日の当直であったにも関わらず、部屋で眠ってしまっていたミセス・シュヴルーズが挙げられたちょうどその時、押っ取り刀でトリスタニアから戻ってきたオスマン氏が現れた。唾を飛ばして彼女を責める貴族たちを一瞥した後、彼はこう述べた。

「この中で、まともに当直をしたことのある教師は何人おられるのかな？」

コルベールが軽く片手を挙げた以外、誰も反応しない。それどころか、顔を伏せて目立たぬようにする者までいる始末。唯一応えたコルベールが、逆に驚いている。

「さて、これが現実じゃ。責任を追及するというのなら、コルベール君を除く全員……もちろん、わしも含めて、ということになる」

宝物庫の中に、重い沈黙がのし掛かる。

「皆、この魔法学院が賊に襲われるなどとは思ってもおらなんだ。しかし、その認識が間違いだということは、これが証明しておる」

オスマンは、宝物庫の壁に開けられた穴に目をやった後、再び視線を室内に戻す。

「で、犯行の現場を見ていた者達がいると聞いてきたのだが？」

「この3人です」

オスマンの質問に、コルベールが前へ進み出て応える。自分の後ろに控えていたタバサ・ルイズ・キュルケの3人を指差した。才人と太公望も側にいたが、才人は使い魔なので数に入っておらず、そもそも太公望はただの付き添いなので、目撃者ではない。

「ほほう……君たちかね」

オスマン氏は、興味深そうに才人と太公望を見つめた。才人はどうして自分がじろじろ見られるのかわからず、しかしどうやら相手が偉い人物だということは理解していたので、姿勢を正して畏まった。太公望はというと、一瞬ピクリと眉を動かしただけで、特に何もしなかった。

その後、ようやく事情説明に入る。代表として前へ進み出だルイズの説明を受けたオールド・オスマンは深々とため息をついた。

「後を追おうにも、手がかりなしという訳か」

立派な白髭を撫でつけながら何事かを考えていた彼は、ふとこの場にいるべき人物の姿が見えないことに気がついた。

「ときに、ミス・ロングビルはどうしたね？」

本来、オスマンの補佐をしてしかるべき彼の秘書、ミス・ロングビルがいないのだ。その場にいた教師たちに行方を尋ねるも、要領を得ない答えが返ってくるのみ。一体彼女は何をしているのか……。

と、まさに『噂をすれば影が差す』という諺を実証するようなタイミングで、問題のミス・ロングビルが姿を現した。

「申し訳ありません、今朝から調査しておりましたの」

彼女曰く。朝起きたら学院中が針でつついたような騒ぎになっていた。何事かと駆けつけてみれば、本塔に明らかな異変があり。もしやと思い宝物庫へ急ぐと、壁に書かれたフーケのサインを見つけた。これは国中を騒がす大盗賊の仕業かとおののきながらも、自分にできる仕事――事件の調査を開始したのだという。

「仕事が早いの、ミス。で……結果は？」

「はい。フーケの居所がわかりました」

室内中から、おおっという感嘆の声が漏れる。

「どこからそれを調べ上げたんじゃね？　ミス・ロングビル」

「はい、近隣の農民に聞き込んだところ、近くの森の廃屋に入っていった黒づくめのローブの男を見たそうです。おそらくですが、そのローブを着た男がフーケで、廃屋は彼の隠れ家なのではないかと判断しました。ですので、こうして急ぎお知らせをと」

それまで後ろに控えていたルイズが叫んだ。

「黒ずくめのローブ!?　それはフーケです、間違いありません!!」

オスマン氏は、目に鋭い光を宿し、ロングビルに尋ねた。

「そこは、近いのかね?」

「はい。徒歩で半日。馬で4時間といったところでしょうか」

それを聞いた教師たちが、口々に叫び出す。王室に報告して、兵を差し向けてもらうべきだと。しかし、オスマンの答えは違っていた。彼はため息をついて首を振ると、一喝した。年齢にそぐわぬ大音声であった。

「ばかもの!　身にかかる火の粉を払えぬようで、なにが貴族じゃ!　魔法学院の宝が盗まれた、これは魔法学院の問題じゃ、当然我らで解決する!!」

ミス・ロングビルは微笑んだ。まるで、この答えを待っていたかのように。

○●○●○●○●

――学院長が、捜索隊の有志を募っている、でも、誰も杖を掲げない。

どうして?　ここにいる先生たちは、みんな『トライアングル』以上の優秀なメイジなのに。落ちこぼれで、魔法を失敗ばかりしているわたしなんかより、ずっと優れた貴族であるはずなのに。理解

できない。

気がつくと、あたしは――顔の前に、杖を掲げていた。

「ミス・ヴァリエール！　あなたは、生徒じゃないですか。ここは教師に任せて……」

ミセス・シュヴルーズが驚いている。でも。

「誰も掲げないじゃないですか」

あたしの反論に、先生は黙ってしまった。誰も、声を上げない。どうして？　わからない。感情が渦のようになって、心の中でぐるぐると廻っている。いいわ、それなら……。

あたしひとりでも。そう言葉を紡ごうとした途端、１本の杖が掲げられた。

「ふん、ヴァリエールには負けられませんわ」

ツェルプストー。憎き仇敵……そのはずだ。そんな彼女に釣られたように、もう１本、杖が掲げられた。タバサだ。

「心配」

そういえば、最近はよく彼女たちと行動を共にしてきた気がする。なんだろう……さっきまで黒く渦巻いていた心の中に、何かがほんのりと灯ったようだ。

「ありがとう……」

自然と、礼が口から出ていた。

そんなあたしたちを見ていた学院長の表情が緩んだ。微笑んでいるみたい。オールド・オスマンは笑って、こう言ってくれた。

「そうか、それでは君たちに頼むとしよう」

――あたしは、この期待に応えたい。そのためには、なんだってしてみせる。

生徒たちだけで盗賊討伐へ赴く。この異常事態に声を上げたのは、ミセス・シュヴルーズただひとりだった。もっとも、その彼女も自分が行くかと問われた末、体調不良を理由に辞退したのだが。

オールド・オスマンがちらりとタバサに視線を向ける。

「ミス・タバサは若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士だと聞いている」

タバサは、返事もせずにぼけっと突っ立っている。教師たちは驚いたように彼女を見つめた。親友であるキュルケも、初めて知ったというような顔をしていた。

「シュヴァリエって何？」

小声で聞いてきた才人の問いに、これまた小さくルイズが答える。

「王室から与えられる爵位のことよ。爵位としては最下級の称号だけど、国から認められるような業績を挙げないと手に入らない…

…実力の証拠」

「そしてその使い魔は……東の彼方、ロバ・アル・カリイエから召喚されたメイジにして＜風＞と＜火＞の使い手だという報告を受けておる」

場がどよめく。

「……火？」

ポツリと……しかし咎めるような口調で呟いたタバサに。

「＜薪占い＞の件、まだ根に持っとるんかいあの狸ジジイ！　ああ、ちなみに触媒使ってやっと火花を起こすのがせいぜいであるので、そちらには期待しないで欲しい」

表情を全く動かさず、囁くように答える太公望。ちなみに、これは彼がハルケギニアに来てから自分の能力について述べたものの中において、珍しく本当のことだ。かつて＜火＞属性の宝貝を手に入れた際もうまく使いこなすことができず、武器の扱いに長ける仲間に譲ってしまったほどである。閑話休題。

次に、オスマンはキュルケを紹介した。

「ミス・ツェルプストーは、ゲルマニアの優秀な軍人を多く輩出した家の出で、彼女自身も火の『トライアングル』と聞いておるが？」

キュルケは得意げに、髪を掻き上げた。

「そして、ミス・ヴァリエールは、その……数々の優秀なメイジを輩出した公爵家の息女で、その、なんだ、将来有望なメイジと期待しておる」

すると、オールド・オスマンの言にかぶせるように、コルベールが口を挟む。

「しかも、その使い魔は伝説のガンダー……うぐ」

オスマン氏は、なにやら慌てた様子でコルベールの口を塞いだ後、集まった教師たちを見回して尋ねた。

「彼らに勝てる者がいるというのなら、前に出たまえ」

――出て来た者は、ひとりとして居なかった。

「まあ、そうですよネ。メイジ優遇社会ですもんネ……」

ついに自分が紹介される！　と、胸を張っていた才人は、あっさりと流されてしまったことに肩を落とす。オスマン氏は5人に向き直ると、朗々と告げた。

「魔法学院は、諸君らの努力と貴族の義務に期待する」

ルイズとタバサとキュルケの3人は、真顔になって直立し、唱和した。

「杖にかけて！」

第１３話　土くれ、学舎にて強襲す（後書き）

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文統合修正

第１４話　軍師、座して機を待つの事

「では、改めて情報を整理するぞ」

学生（＋α）によるフーケ討伐隊が結成されてから間もなくして。宝物庫内に集められていた教員たちは、それぞれの職務へと戻り…関係者のみがその場に残って作戦会議を開いていた。

…

会議参加者はタバサ、ルイズ、才人、キュルケの４人と、議長役の太公望。彼らに協力を申し出たミス・ロングビルの計６名である。

「ねえ。なんでミスタ・タイコーボーが仕切ってる訳？」

形の良い眉をへの字に曲げて不満を口にするルイズに、タバサが応えた。

「わたしが頼んだ。最適の人選」

「そ、そうかもしれないけど……」

使い魔召喚の儀から既に２週間。これまでの経緯もあり、ルイズは太公望――タバサの使い魔の作戦立案能力に疑いを持っているわけではない。だが、これは魔法学院の、ひいてはトリステインの問題なのだ。つまり、トリステインの貴族が責任をもって取り仕切るべき。そう主張したのだが。

「俺はタイコーボーがいいと思う」「あたしも」「わたくしは協力者ですので」

うぐぐ……と、言葉に詰まるルイズ。他の全員が納得しているのに、これでは自分だけが聞き分けのない子供みたいじゃないか。そう考え、なんとか心に折り合いをつけた。

「わ、わかったわ。べ、べつにあんたが気に入らないって訳じゃないのよ」

渋々了解したルイズに、うむ、と頷く太公望。

「任されたからには、きっちりと仕切ってやるわ。さて……ミス・ロングビル、でよかったかのう？　もういちど、おぬしが得てきた情報について確認させてもらう」

「はい、何でもお聞きください」

「情報提供者は、近隣に住む農民。黒いローブをまとった賊とおぼしき男が、近くの森の奥に建っている廃屋に入っていくところを見た。場所は、ここから馬で４時間ほどの深い森の中。これで間違いないかのう？」

「ええ、間違いありません」

ロングビルの返答を聞き、なるほど……と、目を閉じてしばし考え込む太公望。

「で、その場所は、学院側から見てどの方向にあるのだ？　また、廃屋近辺の地形……たとえば、足元が岩場であるとか、廃屋は全部で何軒あるのか、どれほどの規模なのか、その廃屋が何で造られた建物であるのか、周囲の場は開けておるのか、そういった類の情報について、何か聞いてはおらぬかのう？」

この太公望の発言に、慌てたように答えるロングビル。

「えっ！？　あ、そ、それでしたら学院から西の方角にあるようです。廃屋は木こりが使っていたという小屋で、一軒。それなりに深い森の中の、少し開けた場所に建てられていて……地面は……ごくありきたりな土だったはずです。申し訳ありません、さすがにこれ以上のことはわかりませんでした」

彼女の答えに、ほうっと声を上げた太公望。その顔には笑みが溢れていた。

「謙遜する必要はない！　こんな短時間で、そこまで聞き出してくるとは……随分と仕事のできる御仁だのう。あの狸ジジイの秘書なんぞにしておくには、正直惜しい人材だ」

そんな太公望の言葉に、うんうんと頷いて賛同する一同。全員に褒められて悪い気はしないのであろう、ロングビルは恥ずかしそうに微笑んでいる。

「おぬしのおかげで、いくつかのことがわかった。まず、敵は複数犯。また、その廃屋にいる可能性はほぼゼロ。さらに、盗まれた品は既に他の場所へ運ばれているであろう」

「えーっ！！！」

驚く一同。ミス・ロングビルの笑顔は引きつっていた。

「あ、あの、どうしてそう思われたのか、教えていただけますか？」

「人目を忍ぶ盗賊が、わざわざ黒いローブを着て移動していた、これがひとつ。本気で逃げるつもりなら、そんなあからさまに怪しい服なぞ脱いでおる。見つけてもらいたいから、そんな真似をしておるのだと判断した」

「その男が囮」

タバサがポツリと補足する。

「そういうことだよ。おまけに、深い森の中の一軒家、だと？そんな不便な立地、しかも近隣の住民に出入りする姿を見られるような場所を、隠れ家なんぞにするわけがないわ！　これがふたつ目の理由といったところだ。目立つ囮を立てて、本命は今頃ゆうゆうと別の場所へ向かっておるのだ。さすがは諸国に名を轟かす怪盗といったところかのう」

一挙に畳み掛けた太公望の説明に、言葉を失う討伐隊メンバー。せっかくフーケの足取りが掴めたと思ったら、それが目くらましだと断言されてしまったのだ。その反応は当然だろう。

「あっ、あの、すみません、実はその付近でゴーレムを見たという情報も」

突然、思い出したように情報を追加したロングビルであったが、太公望はあっさりとその言を斬り捨てる。

「なるほど、ますます囮確定だ。と、いうわけでその廃屋には向かうだけ無駄であろう。残念な結果になってしまったが、この上はすみやかに王室なり国の役人なりに被害を報告すべきだとわしは考

える」

「む、無駄とは思えません！　囮だとしても何か手がかりが残っているかも」

「そうよ！　そんなの、見てみなきゃわからないじゃない！！」

会議参加者を見回しながら意見を述べた太公望に強く反論したのは、ミス・ロングビルと、ルイズのふたりだった。

「わしは、無駄足になるだけだと思うのだが……」

腕を身体の前で組み、渋い顔をする太公望に声をかけたのはタバサ。

「なら、あなたは行かなくてもかまわない」

「た、タバサ！？」

「どちらにせよ、いまだに体調が万全ではないあなたを連れて行く気はなかった。学院長へはわたしから謝罪する」

「うぬぬぬ……そこまで言うなら止めはせぬが……」

ううむと唸りながら答える太公望。と、何かを思い出したかのように彼はぽん、と手を打った。

「そういえば……破壊の杖を、実際に見たことがある者はおるか？」

タバサ、ルイズ、キュルケ、ロングビルの４人が手を挙げる。

「ふむ……この４名が知っておれば大丈夫だとは思うが、才人にも覚えておいてもらおう。まさか例の廃屋に隠されていたりはしないと思うが、念のためだ。誰か、簡単なものでかまわぬから絵図を描いてはもらえぬかのう？」

その言葉に応えたロングビルによって描かれたそれは、どう見ても杖だとは思えなかった。長い円筒形のそれについた複数のパーツ。才人は、これと非常によく似たものに覚えがあった。しかし、まさか『アレ』がこの魔法世界にあるとは思えない。

「ほう、上手いものだのう……で、これの大きさは？」

「確か長さは７～８０サント、太さは７～８サントくらいだったと思います」

「なるほど。特徴的な見た目であるし、これなら間違えることもないであろう。しかし……これは、本当に『杖』なのかのう？」

首をひねる太公望に、

「杖……なのではないでしょうか？　わたくしも詳しくはわかりませんが」

――うん、きっと気のせいだ。そう結論付けた才人は、さらに続く説明をぼんやりと聞いていた。

――それから１０分後。

「わたしたちは、学院長に報告してくる。あなたたちは門で待っていてほしい」

「では、わたくしは馬車を用意して参ります」

学院長室へ向かうタバサと太公望、厩舎へと急ぐロングビルを見送ったルイズ・才人・キュルケの3人組は、揃って学院の門へと歩を進めていた。

「あ～あ、こんなことになるなら、昨日あんな悪ノリしなきゃよかったわ」

「だよなあ。タイコーボーが来られないって、戦力的にも痛いよな」

結局、件の廃屋へ向かうメンバーに太公望は同行しないことになった。当初は不満を持っていた一部のメンバーも、会議終了後、その場にへたり込むように膝をついてしまった彼の姿を見てしまっては、文句など言えようはずがなかった。

「なに言ってんのよ！　そもそも、あいつに頼っちゃいけないのよ。これはあたしたちの問題なんだから！」

「話を逸らすんじゃないわよ。あなただって楽しんでいたくせに」

「うぐ……あんたこそ、文句言うなら来なきゃよかったじゃないのよ！」

その後、校門へ到着してもなお続く彼女たちの口論は、才人が仲

裁に入っても終わらず、タバサとミス・ロングビルが合流するまで繰り広げられたのであった。

○●○●○●○●

「あの小屋ね」

鬱蒼と茂る森の中に、ぽつんと開けた空き地。その中央に、一軒の廃屋が建っていた。ロングビルの情報通りである。5人は、小屋の中から見えない位置に身を潜めたまま、タバサの指揮に従って互いの役割を確認する。

馬車での道中、現地に着いたら何をするかについて、彼らは既に相談済みだった。

もしもの時のために、まずは偵察兼囮を放つ。そして、フーケがいた場合は外へおびき出し、姿を見せたところへ魔法で一斉攻撃をかける。

ちなみに、名誉ある斥候として指名されたのは才人だった。彼は当然のごとく不満を表明したが、タバサから全員の中で最も素早く、接近戦になった場合の剣の腕を買っているからだと説明されると、表情を引き締めて頷いた。だが、その口端はほんの少しだけ上がっていた。

中に誰もいなかった場合は、実戦経験を持つタバサと、フーケと同じ＜土＞のメイジであるロングビルが外で周囲を警戒。残りは屋内に手がかりが残されていないかどうか調査を行う。何か発見したら、すぐさま知らせる――以上が、タバサが中心となって提案し、

決定した作戦内容である。

「あの……わたくしは、周囲の様子を偵察してこようと思うんですが」

「却下。この状況で、戦力を分散させるのは全員の危険に繋がる」

ミス・ロングビルの提案に、即座に反論するタバサ。

「で、でも、もしフーケが遠くからあのゴーレムを出してきたら」

「これはその為の配置。あれだけの質量を生成するには時間がかかる。サイトのスピードなら単独でゴーレムの攻撃範囲から離脱可能。他のメンバーも、指揮官の側にいれば、慌てず即座に対応できる」

「いつまでもゴチャゴチャ言ってても始まらないぜ。んじゃ、行ってくる」

才人は鞘からデルフリンガーを抜いた。左手のルーンが光り出す。

「おおっ、ついに実戦か！」

才人は、歓喜の声を上げたデルフを黙らせると、すっと一足飛びに小屋の側へ近づき、おそるおそる窓の中をのぞき込んだ。ひと部屋しかないその中には、埃のかぶったテーブルと椅子が見えたが、人の気配はないし、隠れられるような場所も見あたらない。

しかし、相手は国内でも名の通った怪盗である。特殊な方法で姿を消しているのかも。そう考えた才人は、頭の上で腕を交差させた。

これまた馬車の中で決めていた「誰もいない」のサインである。

手はず通り全員が小屋へ近づいてゆく。タバサが杖を振ると、小屋の扉が音もなく開いた。どうやら罠はなさそうだ。

「では、中の調査を。ミス・ロングビルとわたしはここで周囲を警戒」

頷いたルイズとキュルケ、そして才人の3人が小屋の中へ姿を消す。ロングビルは、そんな彼らの姿を落ち着かない様子で見守っていた。

「……何もないわね」

「やっぱり無駄足だったじゃないのよ。んもう、服が埃っぽくなっちゃったわ」

勇んで中へ突入し、部屋の隅々まで調査した結果わかったのは――手がかりと呼べるようなものは、何ひとつとして残されてはいないということだけだった。

「タイコーボーの言うとおり、囮だったんだな。ま、それがわかっただけでも良かったんじゃないか？　さっさと外に出て、待ってるふたりに教えてやろうぜ」

中には何もなかった。それを聞いたミス・ロングビルの反応は劇的であった。さあっと顔から血の気が引いたかと思うと、慌てて室内へ飛び込んでいく。

小屋の中を見渡した彼女は、ばたばたと部屋を駆け回り、何かを

探している。そんな姿を見た討伐隊のメンバーは唖然とした。

「あ、あの、ミス？　フーケに騙されたのが悔しいのは理解できるんですけど……ご覧の通り、ここには何も残されていませんわよ」

「キュルケの言うとおり。速やかに撤収して学院長に報告するべき」

――その後なんとか錯乱気味のロングビルを落ち着かせた彼らは、学院への帰路についた。馬車の中で、下を向きひたすら何事かを呟いている彼女に、ルイズ達はせっかくの調査が徒労に終わったのが悔しいのね……と、心から同情の視線を送っていた。

○●○●○●○●

「ううむ、やはり空振りであったか。残念じゃ」

事の次第を報告するため、討伐隊のメンバーが学院室へ赴くと、そこにいたのはオスマン氏と太公望のふたりであった。気難しげに髭をなでつける学院長とは対照的に、太公望は椅子にゆったりと腰を下ろし、ゆうゆうと茶を飲んでいる。

「まことにもって無念ではあるが、事ここに至った以上、本日執り行われる予定だったフリッグの舞踏会は中止。その上で王室に被害の報告をするしかあるまい」

深いため息と共に声を絞り出したオスマンは、ちらりとミス・ロングビルへと視線を向けると、気遣わしげに声をかけた。

「ミス・ロングビル。朝早くからの捜索、本当にご苦労じゃった。あとはわしが引き受ける。君は、部屋へ戻って休むがいい」

事実相当参っていたのだろう、ロングビルは返事もそこそこに部屋を後にする。彼女の退出と、遠ざかっていく足音を確認すると、オールド・オスマンは重々しく口を開く。

「さて。戻ってきたばかりで疲れているところを悪いが、諸君らにはもう一働きしてもらいたい。実のところ……ここからが本番なのじゃ」

驚きをあらわにした面々へそう告げた彼の瞳には、愉快げな光が宿っていた――。

第１４話　軍師、座して機を待つの事（後書き）

まさかの太公望お留守番ルート。

平日だというのに何かが降りてきたようで既に対フーケの結末まで書き上がっているのですが、ものすごく長くなってしまったので２分割。普段もこのペースで書けたらいいんですが、さすがに体力が持たないですね……。

ちなみに、更新予定をユーザーページの「活動報告」にぼちぼちと上げています。もしも興味を持ってくださっているかたがいらっしゃいましたら、そちらもあわせてご確認ください。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第15話　土くれ、舞踏会へ参加するの事

――部屋に戻ったミス・ロングビルは、未だ混乱の極みにあった。
何故!?　どうして……考えてもわからない。あそこに『あれ』が置かれていたのは『絶対の事実』であるはず。

疲れて思考が鈍っているんだ。そう判断した彼女は、上着を脱ぎ、ベッドへと身を投げ出した。目を閉じて、再びあの時の状況を思い出す。

あれだけの大きさの『物』、小屋の内部にはもちろん、先に入っていった彼らが持って隠せるような場所も道具もなかったはず。内部……先に……意識がブラックアウトしそうになるのを必死にこらえながら思考を巡らせる。

――確認しに行かなければならない。
彼女はベッドから起き上がると、重い身体を引きずるようにして部屋を後にした。

「どこ行くんですか？　ロングビルさん」

厩舎へ向かう近道――人通りのない裏庭を突っ切るように早足で歩いていたミス・ロングビルは、ふいに前へ出て来て道を遮った少年に、声をかけられた。才人であった。

「あなたは、さっきご一緒したミス・ヴァリエールの……」

「はい、使い魔やってる平賀才人です。顔色悪いですよ、部屋に

戻って休んでたほうがいいんじゃないっすか？」

「大丈夫です。わたくしには、確認しなければいけないことが……」

「それって、ひょっとするとアレのことっすかね？」

片手の親指でくいっと後方を指し示す才人。そこには……見覚えのあるケース――『破壊の杖』が納められていたそれ――を抱えた、彼の主人・ルイズの姿があった。

「な、な、なんで、それが、こ、こ、ここに」

「ああ、なんでも、ゴーレムが崩した瓦礫の下に埋まってたらしいですよ」

「へっ？」

才人の答えに、気の抜けたような声を出したロングビル。

「さっき庭師のひとが見つけて、俺のところへ持ってきてくれたんです。これからご主人様と一緒に学院長のところへ届けに行こうかと」

「そんなバカなっ！　私は確かに持ち出して……」

ロングビルは、そこまで口に出してから、ようやく自分がとんでもない失態を犯したことに気がついた。

「あ、あ、あなたが、ふ、ふ、フーケ……」

ケースをぎゅっと抱き締めたルイズの身体は、小刻みに震えている。このあたしとしたことが、疲れでとんだドジ踏んじまった……！　ロングビル――もとい『土くれ』のフーケは、なんとかこの場を逃れる方法を模索し始める。

相手は平民と、ケースで両手が塞がれているメイジ。正体は割れてしまったが、まだなんとかなる――そう判断したフーケは、素早く懐から杖を抜く。しかし、ルーンが紡がれようとした瞬間。彼女の口に、ぴたっと粘土が収まった。

そんなフーケの姿を見届けたルイズは、足元へそっとケースを置くと、杖を取り出し天にかざす。すると。

「見ました」「聞きましたぞ」「これは確定だの」「まさか彼女が……」

複数の声と共に、突如メイジたちの群れが裏庭に出現する。オールド・オスマンを筆頭とした、学院の教師たちであった。タバサにキュルケ、太公望もいる。どうやら、この『合図』があるまで姿を隠していたらしい。その全員が、フーケに杖を向けていた。

「やりましたわ！　生徒を相手に磨き続けた技が、ここへ来て生きるなんて」

見事フーケを封じた『赤土』シュヴルーズが、歓喜のあまり涙を浮かべている。

「華麗なダンスを披露してくれたの、ミス・ロングビル。いや『土くれのフーケ』よ。どうじゃ、まだ踊り足りないかね？」

オスマンの皮肉に、その場へがっくりと崩れ落ちたフーケ。その姿を見た教師たちの間から、大歓声が上がった。

○●○●○●○●

「実はここからが本番なのじゃ」

そう言って笑ったオスマンが、椅子の影から『破壊の杖』が納められたケースを取り出したとき、討伐隊のメンバーは驚きのあまり声を上げることもできなかった。

――何故これがここにあるのか。

話は、タバサと太公望が学院長室へ向かった時まで遡る。

「よく話を合わせてくれたの。おかげで怪しまれずに別行動ができる」

討伐隊が結成された直後。タバサは太公望からふたつの依頼を受けていた。それは、この場で作戦会議を開き、太公望をその司会役に指名することと、太公望が腕を組んだら、それを合図に彼をチームから外すよう提言すること。

昨夜のうちにタバサから聞いた内容と、現在までの情報を密かに検討していた太公望は、内部の者の犯行、あるいは手引きをした者がいると判断していた。そこへ飛び込んできたミス・ロングビルの「調査報告」。

その発言に疑念を覚えた太公望は、討伐隊への協力を持ちかけて

きた彼女に疑いを持たれぬよう――議長による情報整理という形で――証言集めを開始する。そして、ほとんど時間がなかったにも関わらず（馬で４時間かかる場所に、朝出立して昼前に戻ってきている時点で既におかしいのだ）、まるで見てきたかのように現場のことを語るロングビルを、フーケ本人もしくは仲間であると断定した。

しかし。ただの囮やかく乱にしてはその場所に拘りすぎる。もしや、本当にその廃屋に『破壊の杖』が隠されているのか？　だとすると、何故わざわざ学院の者をおびき寄せるような真似を――？

――杖……なのではないでしょうか？　わたくしも詳しくはわかりませんが

この言葉、声色には嘘が感じられない。なるほど、おおよそのことは理解した。絵を描かせて『破壊の杖』がどんなものであるのかもわかった。ならば、試してみるかのう。まったく面倒ではあるのだが――。

学院長室へ到着した後、すぐさまオスマンとタバサにこれらの見解を伝える。驚きに目を見開いたふたりに、自分の策を披露し――それは実行に移される。

「その結果が、ソレってわけですか」

なんのことはない。太公望が先回りして現場へ赴き、そこにあった『破壊の杖』を回収してきただけのことだ。現時点での最有力容疑者であるロングビルに、監視役としてタバサを張り付かせて。

「あたしたち、囮の囮をさせられてたってわけね」

「ぼやくでない、おかげで貴重な時間をかせぐことができたんだからの」

そう。そして太公望が『破壊の杖』を持って帰還した後……タバサたちが戻ってくるまでの間に、学院長は教師たちに事情を説明し、全員でフーケ、あるいはその仲間と思われるロングビルを取り囲むべく指示を出していた。どんな手練れのメイジでも、この人数に囲まれては何もできないだろう。そして、もしこれが国中の貴族に煮え湯を飲ませ続けてきたフーケ捕縛に繋がれば、それはとてつもない名誉となるに違いない――オスマンの言葉に、教師たちは奮い立った。

「そこでじゃ、捕縛の総仕上げという名誉に与るのは――」

ちらりと太公望と視線を合わせるオスマン。頷いた彼を見て、言葉を続ける。

「ミス・ヴァリエール。もっとも早く『杖』を掲げた君にこそ相応しいと思うのじゃが……どうじゃ、この老いぼれの願い、聞き届けてくれるかの？」

――勇んでその役割を引き受けたルイズは、それが「破壊の杖のケースを持って、才人の後ろに立っていること」だと聞いたときはさすがに耳を疑ったし、断ろうかとまで考えた。しかし、それが相手の油断を誘う策だと聞いたことと。

「ど、ど、どこに行くのかしら？　ふ、ふ、フーケさん」

「噛んだ」「見事に顔がひきつっておるな」「フーケとか言っちゃダメだろ」「やっぱり、ヴァリエールにこういう演技は無理よね」

「う、うるさいわねっ！」

今から演技指導をするにはあまりにも時間がないということで、それは＜使い魔＞――最初に指名されていた才人――の役目にするということに、納得した。

ちなみに、才人の演技は一発目からして太公望から太鼓判を押されるほど、自然な出来ばえであった。

○●○●○●○●

「諸君らの尽力により、見事『土くれのフーケ』を捕縛し、『破壊の杖』を取り戻すことに成功した。学院の名誉は守られ、盗賊は牢獄へと送られる。一件落着じゃ」

フーケが縄を打たれて、学院の衛士たちに引っ立てられていった後。裏庭では、オールド・オスマンによる演説が行われていた。

誇らしげに胸を反らす教師たち。中でも、当直をサボりフーケに盗難を許したという失態を見せたにも関わらず、名誉挽回の機会を与えられたミセス・シュヴルーズは、感激のあまり失神してしまう有様であった。

「ここにいる教員皆の手柄について、王室へ報告することを約束しよう。また、ささやかではあるが、わしのポケットマネーからボーナスを支給する」

裏庭に、再び歓喜の声が沸き上がる。

「そして、フーケ討伐に最も貢献した者たちを紹介する」

オスマン氏に手招きされ、タバサ、ルイズ、キュルケ、才人、太公望の５人が前へと進み出る。彼らは拍手によって迎えられた。

「中でも、特に危険な役目を買って出てくれたミス・ヴァリエールについては、王室へ『シュヴァリエ』の爵位を、既に『シュヴァリエ』を持っておるミス・タバサと、彼女たちに協力したミス・ツェルプストーについては精霊勲章の授与を申請することによって、この功に報いたいと思う」

３人の顔がぱっと輝いた。

「なおミスタ・タイコーボーはロバ・アル・カリイエのメイジ、サイト君については貴族ではないため勲章の授与はできないが、わしから金一封を与えるということで、労わせてもらう」

再び、彼らを拍手が包み込む。５人は、礼――ルイズ、タバサ、キュルケの３名は、貴族の名に恥じぬ優雅なお辞儀で、才人は学校で習った４５度ほど腰を曲げる最敬礼で、太公望は、包拳の礼でそれに応えた。

そんな彼らを笑顔で見つめていたオスマン氏は、ぽんぽんと手を打つ。

「さてと、今夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。見事『破壊の杖』も取り戻せたことだし、予定通り執り行う。以上、解散じゃ！」

再び大きな歓声が上がり、その場に集まった者達は散り散りになってゆく。最後まで残ったのは、オールド・オスマンと『破壊の杖』

を抱えたコルベール、そして討伐隊に加わった者達だけであった。

静かになった裏庭に、切実な声が響く。

「あ、あの、金一封とかいりません。かわりに、聞きたいことがあるんです……その、破壊の杖がどこから来たのか、それと……これについて」

左手のルーンを見せながらオスマンに願い出たのは才人。ルイズが驚いたような表情で見つめている。

「わしは金一封の中身がどれほどのものなのか、具体的に話し合いたいのだが」

続いたのは太公望。タバサの瞳が、好奇心で溢れている。

オールド・オスマンは大きな大きなため息をついた……両者共に難題じゃの。

「ここではなんじゃし、ふたりとも学院長室へ来たまえ。コルベール君も、すまんが『破壊の杖』を持ってついて来て欲しい。ミス・ヴァリエールと、ミス・タバサにも関わりのあることじゃが、君たちはどうするね？」

「行きます」「聞きたい」

即答したふたりへ、頷き返すオスマン。

「あたしは、舞踏会の準備がありますので、お先に失礼しますわ」

そう言ってキュルケは、踵を返した。こっそりタバサに向けてウィンクをして。あとで話せ、ということだろう。

――オールド・オスマンの長い1日は、まだまだ終わりそうもない。

第１５話　土くれ、舞踏会へ参加するの事（後書き）

と、いうわけで対フーケ、終了致しました。結局戦いにならなかったｏｒｚ

さて、次の次の時間軸は、いよいよアレに突入すべきタイミングです。さあ、太公望のぐうたらな時間はいつまで続くのか！？

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第１６話　伝説と零、己の一端を知るの事

「それでは、話を聞こうか」

学院長室へ案内された太公望・タバサ・ルイズ・才人の４人は、来客用のソファーに腰掛け、学院長と向き合っていた。オスマン氏の後方には、コルベールが控えている。

「才人。すまんが、まずはわしに話をさせてはくれぬかのう」

俺のほうが最初に申し込んだのに。と、一瞬躊躇った才人だったが、コイツがわざわざ確認を取ってきたってことは、何か理由があるんだろう――そう思い直し、頷く。

「……すまんの」

太公望は、才人へ頷き返すと、まっすぐと学院長を見据えて会話を始めた。

「さて、それでは『金一封』とやらについて具体的に聞かせてもらおう。今回わしが行った仕事は……情報収集、犯人の割り出し、『破壊の杖』回収……他にもまだまだたくさんあるわけだが。中途半端な金額で納得するとは思うなよ？」

――才人は思った。なんか……映画の名場面集を見てるみたいだ。それも、極道モノとかマフィアの交渉シーンをダイジェストで並べたやつ。

あーあ、ルイズは横で固まってるし。あのなんだっけ、コルベッ

ト……とかいう先生、顔が真っ青だし。タバサは……あれ、目がキラキラしてるな。もしかして好きなのか、こういうイベント。

才人は、すぐ側で繰り広げられる『交渉』を、まるで劇場へ赴いた観客になったような気分で、ぼんやりと眺めていた――。

太公望の先制攻撃で始まった『交渉』は、時折学院長が攻勢に出るものの、そのほとんどが太公望側の優勢で進んだ。この話し合いの過程で、太公望がフーケ捕縛作戦全体の立案――なんと学院の教師たちを説得するための演説草案作成までこなしていた事実が判明し、この場に立ち会った者たちは驚愕した。

ついには1ドニエ（銅貨1枚）単位での攻防が始まるに至って、太公望はこれ以上攻めるのは無駄と判断したのか、折衷案を提示してきた。

「まあ、わしも鬼ではない。金銭以外での交渉もやぶさかではないぞ」

その白々しい物言いに、学院長を含む全員が「鬼以外のなんなんだ！」と心の中でツッコんでいたのだが、当の本人は涼しい顔だ。

「ふむ……君はわしに、いったい何を望んでいるのだね？」

「『フェニアのライブラリー』の閲覧許可を。なお、これはわしとタバサの両方へ出してもらいたい」

この提案に驚いたのはコルベールだ。

「なっ……あそこは、教員以外立ち入り禁止、学院秘蔵の書物庫

ですぞ」

しかし、そんなコルベールを抑えて学院長は鷹揚に頷いた。

「……まあ、ええじゃろ。ただし、その許可と引き替えに金一封は無しじゃぞ」

「よっぽど教員へのボーナスで懐が寂しくなったようだのう。わしとしては、もうひと声欲しいところなのだが……まあ、無い袖は振れぬというからな。仕方あるまい」

不承不承といった風情で納得した太公望の姿を見た全員が、コイツやっぱり鬼、いや悪魔なんじゃないだろうか……と、内心評価を修正していた。

机の引き出しから2枚の羊皮紙を取り出したオスマン氏は、ペンでさらさらと何事かを書いて、太公望とタバサに手渡す。

「それを、図書館の入り口にいる司書に見せるがええ。そうすれば『フェニアのライブラリー』に立ち入って、収められている資料の閲覧ができるようになる。ただし、あそこの書物は持ち出し禁止じゃからな」

許可証を受け取り、頷くふたり。タバサの目が歓喜できらきらと輝いている。勲章申請の時よりも遙かに嬉しそうだ。それだけこの許可証が欲しかったのだろう、太公望の手を両手でガッチリと握り締めている。一方の太公望も、そんな彼女の様子を見て満足げに笑み崩れていた。

「と、いうわけでだ。このあとサイト君との話があるのでな、君

たちふたりは部屋へ戻って、舞踏会の支度をしたまえ」

そう促す学院長に応え、席を立つタバサ。だが、太公望はその場から動こうとしない。彼は相変わらず笑っていたが……その笑みの質が、先程までのそれとは変わっていることに、タバサは気がついた。

「その話には興味があるのでな。同席させてもらいたい」

「さすがにそれは許可できん。これは……」

と、そこまで口にしてやっと学院長は気がついた。苦虫を１０匹くらいまとめて噛み潰したような顔をして太公望を睨み付ける。

「ふふん、才人の左手に刻まれたのは、相当特殊なルーンらしいのう。だが、それも『フェニアのライブラリー』に行けばわかってしまう内容……どうだ？　わしの推測は間違っておるか？」

――ここで聞けずとも、自力で調べる。太公望は、そう主張しているのだ。

なるほど、この流れに持って行きたかったからこそ、最初に話をさせろと主張したわけか。つまり、金銭交渉は囮。本命はライブラリーの閲覧許可証とルーンに関する情報だったって訳だ……うん、こいつ悪魔だ。決定。太公望に対する全員の評価が確定した瞬間であった。

「わかった、ミス・タバサも同席したまえ。まったく……君がトリステイン貴族の子弟なら、学院卒業後に次代の宰相候補として王宮で修行を積ませるよう、マザリーニ枢機卿宛てに推薦状を書いと

るところなんじゃが」

そう言って深いため息をついた学院長は、普段よりもさらに老けて見えた。

○●○●○●○●

「＜ガンダールヴ＞？」

その名前に覚えがあったルイズは、首をかしげた。以前、自分の魔法について調べていた時、何かの本で見た覚えがある名前だったのだが……思い出せない。

「そう、あらゆる『武器』を使いこなす能力を持つ＜伝説の使い魔＞の証じゃ」

伝説……これが？　才人は、あらためて自分の左手に刻まれたルーンを見た。

「だから『武器』を持つと身体が軽くなったり、使い方が頭の中に流れ込んでくるのかな……デルフも、そんなようなこと言ってましたし」

「デルフ、とは？」

問う学院長に、才人は後ろに立て掛けていた剣を見せ、鞘から少しだけ引き抜いた。

「話は聞かせてもらったぜ！　ご紹介に与ったデルフリンガーさ

まだ。＜ガンダールヴ＞ね。そうそう、確かそんな名前だったな」

「なんと！　＜インテリジェンス・ソード＞ですか」

身を乗り出して興奮するコルベールを制して、オールド・オスマンは話を続ける。

「武器の情報に、身体の強化……やはり間違いないか。デルフリンガー君といったな。他に、君が知っていることはあるかね？」

「う～ん……あるはずなんだが、６０００年以上生きてるもんでな、記憶がどうにもあいまいなんだよ。すまねえな」

そうか、それは残念だ……と呟く学院長。

「でも、何で俺がそんな＜伝説の使い魔＞に？」

そう尋ねた才人に、学院長は肩を落とし、さっぱりわからんと答える。すると、それを聞いた太公望が何かに気付いたのか、腕を組んで考え込んでいる。

「タイコーボー、何か知ってるのか！？」

「いや、いくらなんでもそこまではわからぬ。少々気になることはあったが、こっちの話での。でだ、ルーンについてはだいたいわかったことだし、『破壊の杖』についても聞いておいたほうがよいのではないか？」

そう促されたことで、今度は『破壊の杖』の由来について、学院長が滔々と語り出す。曰く、今から３０年ほど前。他国をひとりで

旅行していた際に、突如飛来したワイバーンに襲われ危機に陥ったこと。

そこに現れた人物が、持っていた2本の『破壊の杖』のうち1本で、ワイバーンを吹き飛ばした後にばったりと倒れ、気を失ったこと。

彼は深手を負っており、看病の甲斐なく息を引き取ってしまったこと。そして、彼が使った1本を彼の墓に埋め、残されたもう1本を彼の形見として持ち帰り、学院の宝物庫へ厳重に保管していたこと――。

「彼は、死の間際までうわごとのように呟いておった。『ここはどこだ。元の世界に帰りたい』とな……」

なんとか助けたかったのじゃが……と、オスマンは遠くを見るような目で語った。当時を思い出しているのだろう。と、そんな彼の感慨を打ち壊したのは、才人の言葉だった。

「そのひと……きっと、俺のいた世界から来たんです」

オスマンの目が光った。

「君は、彼の故郷を知っているのかね？」

「そこまではわかりませんけど……あの『破壊の杖』はくマジック・アイテム＞なんかじゃなくて、俺がいた世界の『武器』なんです。さっきケースを貸してもらったとき確かめたから、間違いありません。あれの本当の名前は『M72対戦車用ロケットランチャー』。フーケのゴーレムを一撃で吹き飛ばす程の威力があります」

その場にいた者達が、驚きに目を見張る。そして才人は語り始めた――自分がここではない別の世界から召喚されてきたこと。そこには月が1つしかなく、＜魔法＞が存在していないこと――。

異なる世界――本当にそんなものがあるのか？

才人の前にいる老人と教師は、そう言いたげな表情をしていた。まあ、ルイズだって未だに信じてくれないし、この世界の人間にとってはそれが普通の反応だよな。だいたい、俺が地球にいた頃に、もし『自分は異世界から来た魔法使いだ』って名乗る奴が出てきたら……やっぱりそう感じただろうし。

と、才人が半分諦めたように周囲を伺うと……ひとりだけ、あきらかにおかしな反応をしている人物がいた。太公望だ。腕を組み、目を閉じてなにやらぶつぶつと呟いている。

「なあ、タイコーボー……もしかして、お前は信じてくれるのか！？」

「ああ、信じる……というか、まさか『異界人』だったとは……いや、ひょっとすると『異星人』か？　おぬしと初めて会ったときから、どうも他の人間と毛色が違うと感じておったのだが、いやはや……」

信じてくれた！　おれの、この世界に来て初めての友達が！！

才人は感激した。だが、あまりの嬉しさに我を忘れてしまったせいで、彼は太公望がうっかり漏らした爆弾発言を聞き逃してしまっていた。

――ひょっとすると『異星人』か？

「何か知っているの？」

この部屋に入ってきてから初めて口を開いたタバサへ、太公望はぼりぼりと頭を掻き毟りながら答えた。

「異世界云々についてはこれから検証せねばならぬが、ひとつ確実に言えるのは――ルイズが、とてつもない可能性を秘めたメイジだということだ」

○●○●○●○●

このあたしが、とてつもない可能性を秘めたメイジ――？

ありえない。でも、ロバ・アル・カリイエから来たメイジが。調査をお願いしたひとが。学院長が、トリステイン貴族だったら王宮に推薦するとまで言った人物がそう言っている。ルイズは、その一言に縋った。

「お願い……教えて。あたしの魔法がどうして失敗するのか。家族の誰も、先生たちも、王立アカデミーで研究している姉様にすらわからなかったの……どんなに勉強しても、毎日ぼろぼろになるまで練習してもできなかったのよ。お願い……」

最後はもう言葉にならない。気がついた時、彼女はほろほろと涙を零していた。

「こっ、これ、泣くでない！」

一方、ルイズの様子を見た太公望は、いつもの人を喰ったようなそれから一転、まるで別人のように慌てふためいた。ぐずり続けるルイズをあやし、困ったように空中へ視線を這わせる。ついには、助けを求めるように学院長に目を向ける。オスマン氏はしばし迷っていたようだが――ついには、頷いた。

そしてオスマンが口を開こうとしたその時。彼の代わりに、別の人物が声をかけてきた。それは、この場に同席していた教師『炎蛇』のコルベールであった。

「私も、是非君の見解が聞きたい。己の無力を告白することになりますが、私たち教師がどんなに調べても、ミス・ヴァリエールが失敗する理由がわからなかったのです。彼女はこんなにも追い詰められていたというのに」

そう言って、頭を垂れる。しん……と静まった室内に、唯一ルイズのぐずる声だけが響いていた。

――数分後。ルイズがようやく落ち着いたのを見計らって、太公望は説明を始めるべく動き出した。彼は、その手始めとして、椅子から立ち上がって頭に巻いていた布を取ると、捻って縄状にした後、テーブルの上に乗せた。

「さて、ここに1本の縄がある。これを使って簡単に説明する」

一同を見回すと、皆真剣にテーブルに注目していた。

「その前に＜サモン・サーヴァント＞について確認したい。オスマン殿、この魔法は、ハルケギニアのどこかにいる生物の前に『入

口』を作り、自分の前へと呼び出す『出口』を開く魔法……この認識で間違っておらんかの？」

「うむ。開かれる場所や、選ばれる対象がどうやって決まるのかについては不明だが、己に最も相応しい使い魔との間に一方通行の『門』を創り出す」

うむ、と頷いた太公望は、テーブルに置いた縄を指差す。

「この縄の両端、これを『門』。そして縄の長さを『距離』と考えて欲しい」

そう言うと、彼は縄を持ち上げてその両端を掴み、ぴたりと繋ぎ合わせた。

「『門の接続』とは、こういうことなのだ。中間の『距離』をねじ曲げ、空間同士を繋ぎ合わせる……タバサよ」

自分の主人に声をかけた太公望は、持っていた縄をテーブルへ戻した。

「今わしがやってみせたように、この縄の端と端をくっつけてみてくれ。ただし、手ではなく魔法を使って、だぞ。よいか、ぴったりと合わせるのだ」

頷いたタバサは、得意の＜ウインド＞を使って接続を試みる。だが、なかなかうまくいかない。ようやく太公望から合格の声がかかった時、彼女は肩で息をしていた。

「このように『接続』にはたいへんな＜力＞と、先端同士……つ

まり、向こう側とこちら側の空間をしっかりと認識する『感覚』を必要とする。コモンとされておる＜サモン・サーヴァント＞だが、実は無意識にこのようなとんでもないことをしているのだ。ここまでは理解してもらえたであろうか？」

「これは……まるで考えてもみなかった理屈じゃが……納得できる」

「ええ、アカデミーで研究していてもおかしくない内容ですぞ」

研究者としての血が騒いできたのだろう、オスマンとコルベールが興奮したようにまくしたてる。しかし、ひとり納得していない人物がいた。ルイズである。

「でも、これとあたしの魔法に、何の関係があるの？」

「そう急くでない。これからちゃんと説明する」

そう言うと、太公望はどっかと椅子に腰掛けてひと息ついた後、再び持論の展開を開始した。

「さて。『空間』をねじ曲げるのが大変な作業であると理解してもらえた、そう判断して話を進める。普通のメイジはあくまでハルケギニアの中でしか『接続』することができない。ところがルイズは……」

一端言葉を句切り、ルイズにまっすぐ視線を向けた太公望は、結論する。

「空に浮かぶ月よりも遠い『異世界』と自分を結ぶ縄の両端を、

寸分の狂いなく繋いでみせた。そんな娘が無能だと？　絶対にありえん。もしもルイズがわしらの国に生まれておったら、間違いなく幹部候補生としてスカウトが飛んで来るわ。『空間ゲート接続』というのはそれだけ難しく、強い＜力＞を必要とする高度な技術なのだよ」

静まりかえる室内。と、コルベールが手を挙げた。

「ミス・ヴァリエールが素晴らしい可能性を秘めている、ということはわかりました。しかし、何故魔法を失敗するか、それについてわからないことには……」

コルベールの疑問はもっともだ。ルイズとしても、自分がどんなに優れた力を持っていると言われても、失敗の原因が判明しなければ意味がないのだ。

「ここからは、あくまでわしの仮説に過ぎないのだが……今度はコルベール殿にお訊ねしたい。普通のメイジが魔法を失敗した時にも＜爆発＞するのかのう？」

「いえ、ありえません。何も起きないのが普通なのです」

「うむ。わしらの間でも、基本はそうなのだ。しかし、とある失敗をした時に＜爆発＞を伴うことがある」

「そ、それって……」

震える声を抑えきれず、ルイズは尋ねる。そんな彼女を見た太公望は、真剣な表情で続きを話しはじめた。

「大きすぎる＜力＞を制御できずに暴走させてしまったとき、行き場を失った＜力＞が暴れ回り、結果＜爆発＞することがある。これは、炎を伴う場合も、袋の中に限界を越えるまで物を入れ続けると、あちこち破れて中身が飛び出してしまうように……火を一切伴わない＜破裂＞となることもある」

――と、そこまで太公望が述べたところで、これまで話の中に入れず少し退屈そうにしていた才人が大声を上げる。

「そうだよ！　ルイズの＜爆発＞ってさ、燃えてないじゃん！！」

「えっ？」

一斉に才人に振り返る一同。

「なんかおかしいって思ってたんだ。やっとわかった。教室で爆発させたとき、色々吹っ飛ばされてたけど、ルイズは火傷してなかったし、火事だって起きなかった！」

ルイズをはじめとしたメイジたちが、あっと声を上げた。言われてみればその通り、これまで何度も彼女は失敗してきたが、火災が発生したことなどなかった。

「ギーシュと決闘したときだって、ルイズはあんなに土煙があがるほど爆発させてたのに、俺、ちっとも熱くなかった。なあ、これってルイズの＜爆発＞が特別だっていう証明にならないか？」

全員が、息を飲む。思わぬ場所から援護をもらった太公望が破顔する。

「よく覚えていてくれた、才人よ。確かにそれは証明のひとつになる。ルイズよ、おぬしが魔法を失敗していた理由。それは……巨大すぎる＜力＞が＜魔法＞という器に収まりきれずに溢れ出し、破裂してしまっていた。その可能性が高い。つまり＜力＞のコントロールを覚えれば……」

その言葉を引き継いだのは、コルベールだった。

「彼女は『スクウェア』……いや、それを凌駕する可能性を秘めている、と」

室内は一瞬の静寂の後……大きな歓声に包まれた。

――ルイズは、泣いていた。だが、今流している涙は、これまで幾度となく溢れさせていたそれとは異なり、暖かいものだった。

自分の肩を無遠慮にバンバンと叩きながら「だから言ったろ！お前はゼロなんかじゃないって」と、笑いかけてくる＜使い魔＞。無礼だなんて言わない。不思議なことに、この痛みすら心地よく感じる。

最初は、初めて成功した魔法でただの平民を呼び出してしまった、と、やり場のない怒りに囚われていた。でも、そんな彼が、実は伝説と呼ばれる使い魔で。しかも、その存在そのものが、誰にもわからなかった失敗の、原因判明の為に役立ってくれたのだ。

『メイジの実力を測るには、その使い魔を見よ』

この言葉は、真実だったのだ。

太公望の言うとおり、本当にそれが失敗の理由なのかはわからない。だが、ルイズにとって一筋の光明となったのは間違いない。

――タバサは、胸の奥が熱くなるのを感じた。

そう、ルイズと同様……彼女も、ハルケギニアの『外』にゲートを開き、太公望というまさに『規格外』の使い魔を召喚しているのだ。つまり、研鑽次第では今よりもずっと強くなれるということを、己の使い魔が証明してくれた。そんな彼は。

「まあ、乗りかかった船だ。＜力＞のコントロール方法についてはわしがある程度見てやろう。そのためにはルイズ、あとでおぬしの魔法をよく見せてもらう必要がある。かまわぬか？」

「も、もちろんよ！　こっちからお願いするわ」

自分と同様、厳しい顔をして誰も寄せ付けなかった少女を、笑わせていた。

○●○●○●○●

「さて、だいぶ時間がかかってしまったが、今からでもまだ遅くない。舞踏会の支度に戻るがええ。君たちは主役なのじゃから……と、すまんがミスタ・タイコーボーは少し残ってくれ。フーケの件について尋ねたいことがある」

「……まだ何かあるんかい。まあよい、手早く頼むぞ」

タバサ、ルイズ、才人、そして先程の講義によって研究熱に文字通り火が付いてしまったコルベールの４人が学院長室を後にすると、オスマン氏と太公望のふたりは椅子に座り向かい合った。

「……で、人払いをしてまで話したいこととはなんだ？　まあ、だいたいの想像はついておるが」

対面に座る太公望の言葉に、オスマンは舌を巻いた。これは下手に騙して不信を買うより、正確な情報を与えたほうが今後のためだろう。そう判断し、話し始める。

「君のことだ、おそらくわしが黙っていても結論にたどり着いてしまうじゃろう。まったく……＜ミョズニトニルン＞にならなかったのが不思議なくらいじゃわい」

「それは一体なんのことだ？」

「＜ガンダールヴ＞と同じ、伝説の使い魔の１体じゃ。＜神の頭脳＞＜神の本＞とも呼ばれ、＜ガンダールヴ＞を含むその他３体の使い魔と共に『始祖』ブリミルによって使役されていた存在じゃ」

「ルイズは『始祖』と呼ばれる存在が使役した使い魔を呼び出した。つまり、始祖と同様の＜力＞を持ちうる可能性を秘めている……と？」

「その通りじゃ。さっき君の話を聞いて、確信した。彼女の系統は失われしペンタゴンの一角＜虚無＞じゃろう」

「＜虚無＞か……土・水・火・風の４大系統に属さぬ、既に失われて久しい『伝説』の系統、だったな？」

「そうじゃ。失敗の理由も、それで説明がつく。合わない系統に、大きすぎる力。当然の流れじゃな……もしも君に刻まれたルーンが伝説の使い魔のそれであったなら、この仮説は崩れておったのだが」

「わしの左足の裏に刻まれとるアレは、それらに該当しないということかの？」

「うむ。始祖の使い魔のルーンは、現れる場所が決まっておるからの」

なるほど……と、太公望はテーブルに両肘を付いてぼやく。

「これは、絶対に他言無用の案件だのう……タバサは勿論本人たちにも言えぬわ」

「話が早くて助かる。もしこんな話が王宮にでも漏れたら大変じゃ。暇を囲っておる宮廷雀どもが、戦がしたいと鳴き出しかねんわ」

「ま、わしとて、戦乱なぞご免被りたいからの。しかし、異世界に、そこからやってきた使い魔、そして武器か……そのあたりも含めて、例の件を詰めておいたほうがよさそうだのう」

「うむ。かかるであろう予算は組んである。だが、ほどほどに頼むぞ？」

「しかし、やはりおぬしは狸ジジイよのう」

「君にそう評価してもらえるのは光栄だ、と返しておこうかの。ホッホッホ」

――お互いを認め合った曲者達は、その後舞踏会が始まる直前になるまで、夜空に浮かぶ赤い月も真っ青になるような談話を続けた――。

第１６話　伝説と零、己の一端を知るの事（後書き）

過去一番の長文と相成りました。フリッグの舞踏会、入れたかったけど入らなかった！！　今後の展開上必要な場面なので、次回にまわします。それにしてもオスマンがどんどん黒くなっていく気がする……誰のせいだろう。わからない。

＜暴走＞については、ナタクなどのそれをかなり強引に解釈しています。力のコントロール云々についても、ゼロ魔原作小説にはない（はず、感情以外の要素があったら勉強不足ですみません）ので、封神演義のほうからこれまた独自強引理論で持ってきています。

少しずつ歴史が動いてきました。やっぱりぐうたらできないよね、太公望。ごめんよ。

２０１１／０４／０３　０：３０　誤字脱字修正

第17話　黒幕達、地下と地上にて暗躍す

トリステイン魔法学院のホールで、フリッグの舞踏会が例年よりも盛大に執り行われていた頃。学院地下にある倉庫の中で、両手を後ろ手に縛られ……さらには＜錬金＞で作成した頑丈な拘束具によって壁へと繋がれていた怪盗『土くれ』のフーケは、虚ろな瞳で床を眺めていた。

明日にも、王国衛士隊に引き渡されるとのことだったが……これまで散々貴族の感情を逆撫でするような真似をしてきたのだ、おそらくは縛り首。良くてチェルノボーグの監獄で、一生を終える羽目になるだろう。

部屋からの脱出も考えたが、すぐに諦めた。彼女を拘束しているのは、学院最高のメイジたるオールド・オスマンが自ら作成した特別製。そもそも、魔法で脱出しようにも、杖を取り上げられていてはどうにもならない。

「わたしも、いよいよ年貢の納め時ってやつなのかしらね……」

ふと、脳裏にとある光景が浮かんだ。だが、自分がこうなってしまった以上、もう二度と叶わぬ願いであろう――。

と、フーケが閉じこめられている地下室に続く階段のほうから、コツ、コツ……という小さな足音が聞こえてくる。見張りのはずはない。何故なら、この地下倉庫へ続く道は、1本しかない。地上で番をしていれば事足りるのだ。王国衛士隊でもないだろう。彼らがやってきたのなら、もっと物々しい音がするはずだ。一体何者だろう。

足音が、倉庫唯一の出口である木戸の前で止まった。格子がついているわけではないので、相手の姿はわからない。

「起きているか？　『土くれ』」

フーケは鼻を鳴らした。

「あら、まさかダンスのお誘いかしら？」

「ま、似たようなものだ」

ガチャリという鍵を外す音がして間もなく、静かに扉が開いた。が、それはすぐに閉じられる。再び闇に閉ざされた倉庫の中に、何者かが立っていた。刺客――ではないだろう。殺る気があるのなら、既に自分は息をしていないはずだ。

「話がある」

「話？　だったらせめて明かりくらいつけてくださいな。何も見えない闇の中で、見知らぬ殿方に口説かれるだなんて、ぞっとしませんわ」

憎まれ口を叩いたフーケだったが、相手はそれを了承と取ったらしい。闇に包まれていた室内に、申し訳程度に小さな光源が現れた。フーケは、わずかな灯火に照らされたその顔に、見覚えがあった。

「あまり機嫌が良くないようだのう……ま、この有様では当然だが」

――そこに立っていたのは、タバサの使い魔・太公望であった。

「ハハッ、物好きな子ね。惨めな怪盗と、最後の会話を楽しみたいってところかしら？　おあいにくさま、そんなものに付き合うつもりはありませんことよ。大人しくダンス会場に戻りなさいな。見張りが戻ってきたら面倒なことになるわ」

フーケのそんな減らず口を軽く受け止めた太公望は、お返しというにはあまりにも大きすぎる爆弾発言を、あっさりと投下する。

「見張りの連中なら、眠り薬入りの酒をしこたま飲んでいびきをかいておるよ。それに、二十歳をいくつも超えぬような小娘に、子供呼ばわりされる筋合いはないわ」

その言葉に、フーケはわずかに反応した。

「なるほど……見かけ通りの年齢じゃないってわけね」

そう言って、見事に騙されていたわと自嘲気味に笑う。

「面倒もあるが、便利な側面もある。今置かれているような状況では特にな」

ニヤッと口の両端を上げた太公望を見て、フーケはいたく好奇心を刺激された。今回の事件で、あれほどの冴えを見せた男――どうやら自分よりも年齢を重ねているらしい――が、見張りを眠らせてまで、ただの身の上話をしにきたわけがない。

「取引をしよう。おぬし、逃げ出したいであろう？」

「あら。思ったより魅力的なお誘いじゃない。でも、タダじゃあないわよね？」

以前、学院長の秘書・ロングビルとして、太公望がオスマン相手に繰り広げた『取引』場面を見ている彼女は、いきなりそんな申し出に飛びつくほど愚かではない。しかし、そんなフーケの態度が、どうやら太公望はお気に召したようだ。満足そうに頷くと、要求を口にする。

「逃亡を手助けする見返りに、おぬしの＜力＞を借りたい」

「わたしの＜力＞ねえ……メイジとして、という意味以上のもの、かしら」

相手の出方を伺うように、フーケは言った。

「そういうことだ。もっとも、盗賊稼業については廃業してもらうことになるが。もちろん、それ相応の保障はさせてもらうつもりだ。さて、これ以上は取引が成立するまで話すことはできぬが……どうする？　この申し出を受ける気はあるか？　まあ、悪事を反省して大人しく縛り首になりたい、というのであれば無理強いはせぬがのう」

その言葉を最後に口を閉ざした太公望を見つめながら、フーケは考えた。目の前の男が出してきた提案は悪くない。この場で応じるだけなら問題はないだろう。保障とやらがどの程度か確認し、気に入らなければそのままオサラバすればいいだけのことだ。

「いいわ。受けてやろうじゃないの、その申し出。それで、わたしは具体的に何をすればいいのかしら？」

「その前に、盗みを止める見返りについて話しておこう。おぬしがこの学院で秘書を務めていた際に受け取っていた給料の2倍を、毎月だ。たとえ頼む仕事がなくとも、1年間支払う用意がある。また、今回の逃走が成功した暁には、前金として1ヶ月分渡すことを約束しよう」

フーケは、思わず目を見張った。正直破格の条件である。だが、うまい話には必ず裏がある。ここは慎重に対応しなければならないだろう。少し考えて、フーケは口を開いた。

「ずいぶんと太っ腹じゃない。でも、それだけ出すってことは、相応に厳しい仕事ってことよね。内容を教えてもらえないことには動けないわ」

「それは、今の段階では話せぬ。もしもおぬしを逃がすのに失敗した場合のリスクが高すぎるからのう。まあ、命がけでやれ、などということは言わぬから安心するのだ」

彼の言うことは尤もだ。この場で明かすには色々と不都合があるのだろう。だが……そのおかげで、まだ交渉の余地がある。

「ふうん。でもさ……あんたがこんな交渉を持ちかけてフーケを逃がそうとしました、って話が、うっかり外へ漏れ出さないっていう保障はないと思わない？」

わずかな隙に噛みついたフーケを、太公望はあっさりといなした。

「ふふん、おぬしがそれをバラしたところでどうということはない。いたいけな少年と、国を騒がせた盗賊。果たして世間はどちら

の話を信用するかのう？　フーケ。いや……『マチルダ』よ」

フーケの顔面は蒼白になった。斬り返されただけではなく、まさに急所に突き入れられた一撃だった。マチルダ・オブ・サウスゴータ。それは、かつて捨てることを強制された……彼女の本当の名前。この男、一体どこまで手が長いのだ？　これでは迂闊なことなどできやしない――。

そうして静まりかえった室内で再び響いた声は、太公望のものだった。

「さて、改めて自分の立場を理解してもらえたと思う。逃亡成功後、わし宛に連絡先を明記した伝書フクロウを飛ばすのだ。以後、それでやり取りをする。ああ、支払いは宝石で構わぬか？　フクロウに持たせるには、金貨ではかさばりすぎるのだ」

「よおっくわかったわよ。でも、換金に手間がかかるから、少し割り増ししてちょうだい。それと、天然物以外を送りつけてきたら即契約破棄と見なすわよ」

「よかろう、そのくらいの交渉は問題なく受け付ける。では、これで契約完了ということでよいかのう？」

「ええ、いいわ。選択の余地はなさそうだし」

「そう構えるでない。では、早速だが逃走方法について打ち合わせをしようか」

――太公望が話す『逃走計画』を聞いていたフーケは、笑いを堪えるのが大変だった。なるほど、この方法は悪くない。何より自分

好みだ。失敗する可能性がないわけではないが、成功すれば、気に入らない貴族どもに一泡ふかせることができる。

それに、1年間という制限つきとはいえ、安定した収入が見込めるというのは何より魅力的だ。学院で秘書をしながら盗賊稼業を続けていた頃よりも、この男の下にいたほうが充実した生活が送れるだろう。ならば……。

「あなたの言うとおり、この国では顔が割れてるし、しばらく外で大人しくしておくよ。しかし、なんだね……ぷぷっ……本当に、ワルだねえ」

場所と現状のせいで大きな声は間違っても出せない。必死に笑いを堪えるフーケに。

「ニョホホホ……褒め言葉と受け取っておこう」

同じく小声で笑い返す太公望。

「ああ、そうそう。忠誠の証として、いいことを教えてあげるわ。あのセクハラジジイ、ミス・タバサとあなたとの契約料が安くあがった、って浮かれてたわよ」

「ほう……それはいい話を聞いた。初回の手付けに情報料を上乗せしよう。ククク、あの狸め……このわしを甘く見た報いを受けてもらわねばのう。ところで、仕事の頑張り次第では1年といわず契約延長もありえるので、考えておいてはくれぬかのう?」

「新しい上司は気前が良くて、本当に嬉しいわ。こうなったら、なんとしてもうまく逃げ出さないといけないわね」

――地下倉庫で主従を誓ったふたりは、声を上げずに嗤った。

○●○●○●○●

――さて。地下倉庫で、まっとうとは到底言い難い『取引』が行われてから１０分後……太公望は、再び学院長室を訪れていた。

「とりあえず、あんなもんでよかろう？　念のため確認しておくが、救出作戦についてはわしはノータッチだからな？」

「わかっとるわい、もともと自分の撒いた種じゃ。今護送を担当しておる衛士ども相手なら、わしひとりでも充分お釣りが来るからの」

水キセルを燻らせながら、オスマンは呟いた。そう……今回の真の黒幕にして依頼人。それは、この部屋の主であるオールド・オスマンその人であった。

彼は、学院長室から自身の使い魔――ハツカネズミの『目』と『耳』を通して、地下倉庫で行われたフーケと太公望のやりとりを最初から確認していた。ちなみに、眠り薬を混入したワインを見張りの衛士たちへ差し入れたのもオスマンの仕業である。

「彼女へ渡す報酬についても、想定内に抑えてくれて感謝する。もちろんこちらで全額負担するから、情報は共有ということで頼むぞい」

「ああ、もともとそういう約束であったからのう。自分の懐を痛

めずに欲しい情報が集められるというのは、こちらとしても願ったり叶ったりだからな」

ふっふっふ……と、互いに目を合わせ、嗤い合うオスマンと太公望。

「それにしても、まるでラスボスのような風格じゃったの」

「こんないたいけな少年をつかまえてラスボスはなかろう」

「本当にいたいけな子供は、自分をいたいけなどとは言わんわい。ところでその姿……ひょっとして＜フェイス・チェンジ＞か？」

「素だよ。始祖ブリミルとやらに誓ってもかまわぬ。童顔なのは認めるがの」

「その見た目でマチルダより年上とか反則にも程があるじゃろ……」

「それはともかく、この話を持ちかけられたときはさすがのわしも呆れたぞ」

――オスマンが太公望へ持ちかけた話とは。

曰く、街の居酒屋で尻を触った給仕の娘に、なんとなくだが見覚えがあった。それが気にかかったオスマン氏は、しばらくその店へ通いつつ彼女を観察し、やがて――昔付き合いのあった貴族の――既にその家は断絶していたが――娘だと確信した。

その後、ロングビルという偽名を使っていた彼女――マチルダの

事情を知っており、その身の上に深く同情していたオスマンは、自分の秘書として採用し、これまで身近に置いていたのだが……結果として学院に危難を呼び込んでしまった。

とはいえ、このまま縛り首にされるのを黙って見ているというのも目覚めが悪い。なんとか彼女を救い出し、かつ更正させる良い方法はないだろうか……最悪の場合自分だけが泥を被る覚悟で太公望へ話を持ちかけたところ、腕の良い斥候役を欲していた太公望から、情報収集役として裏から雇うという折衷案を提示され――学院に迷惑がかからない形でそれを実行するための案をふたりで出し合った結果――現在に至る。

「知り合いの娘だからといって、秘書の身辺確認を怠るとか、ありえぬわ。ひとを害するような真似をしておらんかったから、今回は特別に乗ってやったが……」

心底疲れたといった風情で、肩を落とす太公望。

「いや～、まさかあんなお転婆しとるとは、思いもよらなんだわ。ねえ？　男なら誰だってあんなあちこちプリンちゃんに育っておったら、そりゃ惑わされるよ。なあ？」

至極真面目な顔でそう尋ねるオスマンに。

「おぬし、いっぺん死んだほうがよいのではないか？」

太公望は、呆れ声でボソッと呟き返した。

若いのに枯れたジジイみたいな反応しおって……と、オスマンは軽く咳払いする。

「舞踏会は既に始まってしまったが、今からでも遅くはない」

オスマンの念押しに、頷く太公望。

「ちゃんと出席するから安心するのだ。いらぬ憶測を生みたくはないからのう」

――その翌日。

学院から引き渡されたフーケを引っ立てていった国の衛士隊一行は、トリスタニアの街でフーケへ＜ディテクト・マジック＞を含む簡単な取り調べを行った後、護送用の馬車で一路チェルノボーグの監獄へと向かった。

ところが、突如天から落ちてきた大量の水によって、護送の一団はまるごと押し流され……必死に馬車の元へ向かったときには既に遅く。黒いローブにフードで顔を隠した謎の人物によって、フーケは拘束から逃れており。必死の追走も空しく、彼らはまるで煙のように姿を消した――。

その後、この逃亡事件は――学院側から怪盗フーケが複数犯であるという報告を受けていたにも関わらず、奪還に対して警戒を怠っていたこと、今回の持ち回りを担当していた衛士長が、本来出すべき警護の兵数を小銭惜しさにケチっていたこと……ついでに収賄疑惑まで発覚し、最後には自らがチェルノボーグへ送られるという事態に至り、結果――その後フーケがぷっつりと消息を絶ったこともあり――フーケが逃亡したという事実と共に、関係者一同に厳しく箝口令が敷かれ――いつしか闇へと消えた。

第17話　黒幕達、地下と地上にて暗躍す（後書き）

おかしいな……今回舞踏会が入るはずだったんだけど……くろいひとたちのあんやくでいっぱいいっぱいになってしまいましたよ？

以上、前回学院長と太公望が話し合っていた本当にろくでもない内容でした。久しぶりに誰かが損をする話。フーケを味方サイドに引っ張り込みたかったが故に起こしたイベントでしたが、見事なまでにバトルフラグをかたっぱしから叩き折っていく太公望は……本当にもうどうしてくれよう。タバ冒ルートでそのぶん頑張ってもらわねばいけませんね……次こそ舞踏会！　黒くない話もそろそろやらないと！！

ちなみに、降ってきた水はオスマン大先生によるウォーター・フォールです。もちろん彼はフーケに正体を明かしたりはしていません。ところで原作でオスマンが王宮から責任を問われなかったのは、相当うまく立ち回っていたからだと思います。今回のコレはさすがに援護できませんが。衛士長の腐敗を知っていたからこそ先制攻撃をしたということでどうかひとつ。

２０１１／０４／０４　１０：００　誤字、一部テキスト修正
２０１１／０４／０４　２２：００　誤字、一部テキスト修正
２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第１８話　始まりの終わり

アルヴィーズの食堂の上にあるホール――フリッグの舞踏会場は、学院関係者による怪盗フーケ捕縛の報に沸き、例年になく大きな盛り上がりを見せていた。

才人は、ルイズから買い与えられていた礼服を着て、会場脇のバルコニーの枠にもたれ、歓談や食事に夢中になる貴族たちを、外から眺めていた。

「ふふん、馬子にも衣装ってやつじゃねえか」

「うるせえな。こんな服着るの、初めてなんだよ」

従兄弟の結婚式には、制服で出たし――と、バルコニーの枠に立て掛けたデルフリンガーの憎まれ口に、そっくり同じような口調で答えた才人は、先程メイドのシエスタが運んできてくれた肉料理を口に運び、それをワインで流し込む。

ホールの中では、キュルケが男達に囲まれて笑っている。彼女のまとう深紅のドレスと赤い髪が相まって、まるで中心で燃える炎のようだ。

黒いパーティドレスに身を包んだタバサは、一生懸命にテーブルの上の料理と格闘している。その隣にある席の前は、山ほど積まれたデザートが――パイにタルト、色とりどりの果物も処狭しと並んでいるが、そこに着くべき主はまだ到着していないようだ。

「どうした才人、中に入らぬのか？」

と、その主――太公望が現れた。彼はいつものそれとは違い、才人同様に礼服に身を包んでいたのだが――傍目で見ても着慣れていないのがわかるくらい、着崩れしていた。

「うわっ、似合わねえ！」

自分のことを差し置いて、思わず笑ってしまった才人に、

「仕方なかろう。このような服を着るのは初めてなのだ」

と、窮屈そうに答える太公望。横にいるデルフリンガーもカタカタと笑っている。

「なんか、場違いな気がしてさ。お前こそ、タバサほっといていいのかよ？　あのテーブル見てみろよ。デザートしこたまキープして待ってるみたいだぜ」

「なんと！？　さすがはタバサ、気が利くのう。だがしかし、わしにはこれからやらねばならぬことがあるので、菓子を楽しむのはその後だ」

「やらねばならぬこと？　何だ、それ」

そんな才人の問いを遮るように、呼び出しの衛士がルイズの到着を告げる。

「ラ・ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな～り～！」

あいつずいぶんと遅かったな、女って身支度に時間かかるから大変だよな――などと考えつつ声のしたほうを振り向いた才人は、思わず息を飲んだ。

あれがルイズか。白く淡い光沢を放つパーティドレスに身を包み、髪を上品な造りの髪留めで上にまとめた彼女の姿は、いつも以上に輝いていて――眩しかった。

ルイズは、さかんにダンスを申し込んでくる男子生徒たちに断りを入れながら、ゆっくりとバルコニーに佇むふたりと1本の側へ近寄ってくる。

「あんたたち、こんなところで何やってるのよ」

「いや、別に」

才人は、ぷいと顔を横に逸らした。酒が入っていてよかった。これなら、顔の赤さを彼女に気取られずに済むだろう。そこへ、太公望から声がかかる。

「せっかくの雰囲気を壊してしまって悪いのだが、3人に大切な話がある。そう長くは時間をとらせぬから、少しかまわぬか？」

「3人ねェ……ケケケ、それは俺っちも含んでってことだよな？」

機嫌が良さそうにカタカタと鍔を鳴らすデルフリンガーに、太公望は頷く。

「ええ、かまわないわ」「俺も、ここでメシ食ってただけだし」

残るふたりの了承を得た太公望は、周囲を伺い――他に誰もいないことを確認すると、早速話を始める。

「さっきの件だ。才人が〈伝説の使い魔〉だという話、誰にもしてはおらぬだろうな」

「もちろんしてないわよ――だいたい、今まで身支度してたんだから」

そう答えるルイズと、同じくずっとここで飲み食いしてたし、そんな話は出しようがなかったと言う才人の返事に、大きくふうっと息を吐く太公望。その表情は、心底ほっとしているようだった。

「それは良かった。ならば、これから何があっても絶対に他言無用だぞ。当然、誰に対しても、だからな？　才人よ、今後は普段からそのルーンを隠しておくのだ。そうだのう――片手だけでは目立つ。両手の邪魔にならない、手袋のようなものが望ましいのだが」

「え、なんで？」

今まで普通に出していたのに。そう問い返す才人の疑問に答えたのはルイズだ。

「あ、そっか……伝説っていうくらいだもん、すっごく珍しいってことよね」

「何か悪いの？」

それに答えたルイズの顔は、傍目から見ても明らかな程、血の気が引いていた。

「えっとね、この国にはアカデミーっていう研究機関があるんだけど……そこでは、しょっちゅう色々な実験をしてるの。もし、伝説なんていわれる使い魔だってわかったら、あんた連れて行かれて、解剖されちゃうかもしれないわ」

「なにそのヤバイ機関。人体実験までやってるのかよ」

思わず左手を隠し、周囲を用心深そうに伺う才人に苦笑する太公望。

「ん、まあ解剖云々はともかく、目立つとまずいというのは理解できたかのう？」

素直に頷くふたりと、カチンと鍔を鳴らすデルフ。理解したという表明だろう。ルイズは内心、もうちょっとで自慢するところだったわ――などと冷や汗をかいていたのだが、そこまではさすがに他の3名にはわからない。

「タバサにも、こちらから堅く口止めをしておく。あとは……そうそう、ルイズの魔法を見る件についてだが」

この言葉に、ピクリと反応するルイズ。

「正確におぬしの＜力＞を測るため、次の虚無の曜日まで、体調をしっかりと整えておいてもらいたいのだ。魔法も授業以外では絶対に使わぬこと。練習も禁止だからな」

「……わかったわ」

「それと才人、おぬしギーシュと仲が良かったな。できれば『ドット』メイジとの比較を行いたいので、彼に協力を依頼してもらいたいのだが？」

「ああ、そのくらいならお安いご用だ。明日聞いてみるよ」

「なら一緒に頼みに行くわ。だって、あたしが協力してもらうんだから」

ふたりの解答に満足した太公望が、にっこりと笑って言った。

「そうだな、それがよかろう。ああ、これで最後なのだが、才人よ。できれば、手のひらに収まるような、それでいて、メイジから見て『武器』に見えないものを手に入れ、携帯しておくがよい」

その台詞に、デルフリンガーが激しく騒ぎ出す。

「なんだよ！　俺っちじゃ不満だってのかい！？」

「騒ぐでない、おぬしがいけないという話ではないのだ。屋外なら問題ないが、狭い場所で長い剣を振り回すわけにはいくまい？それに、ルーンの力を使う際に、いちいち剣を抜いていたら、いらぬ警戒をされてしまうからのう」

「ああ、言われてみればそうかもしれねえな。メイジから見て、そうは見えない隠し武器ねえ……うん、それなら相棒は自然に＜力＞を使えて、しかも慣れることができるってことだな。お前さん、よく考えるねえ」

感心したように呟くデルフリンガーに、才人も同意する。

「話はこれで終わりだ。ではの」

「あ……ちょっと待って」

軽く手を振って、その場を去ろうとした太公望を、ルイズが引き留める。

「何だ？　どこかわからないところがあったかのう？」

「ううん、そうじゃなくって……その……今日はありがとう」

コクリと首を前に傾けた太公望は、その言葉を背に離れていった。

もっとも、

「行くぞ！　待っておれ、わしの甘味！！」

などと叫んで自席へ駆け出したせいで、せっかくの雰囲気その他諸々が台無しになっていたのだが――。

「ったく……アイツって……」

「本当、子供なんだか大人なのか、よくわからなくなるわ」

「まあ、天才となんとかは紙一重っていうからな」

――違いねェ。最後を締めたデルフリンガーの言葉に、一同は笑い声を上げる。と……ふいに、ルイズの顔に影が差した。

「サイト……その、ごめんね」

突然の言葉に、才人は慌てた。こんなしおらしい態度のご主人様もいいなあ、などとちょっとは考えたが口には出さなかった。

「な、なにがだよ。俺をこんなとこまで召喚したことか？　それとも平民平民って散々見下してきたことか？　他には……心当たりがありすぎて、すぐには思い出し切れないんですが？」

照れ隠しに、才人は思わず憎まれ口を叩いてしまう。

「ちょ……あの、そりゃね、主人としての威厳ってものが……ああ、もう、ちがーう！　あんた……本当は、帰りたいんじゃないの？」

「まあ、そりゃな。いきなり連れてこられて使い魔になれとか、滅茶苦茶だろう。家に帰りたいし、父さんや母さんに会いたい」

当然よね……才人の言葉に、ルイズは俯いた。今まで考えてもみなかったことだが、彼にだって、故郷があり――家族がいるはずなのだ。それなのに、一方的に＜魔法＞で彼らを引き裂いてしまった挙げ句、今もこうして自分に付き合わせている。

「でもさ、帰る方法が見えてきたから、今はそんなに焦ってない」

笑顔でそう言った才人に、マイナス思考に陥りかけていたルイズは思わず顔を上げた。

「タイコーボーが言ってただろ。お前は、異世界にいた俺とお前の間に『門』を作れたんだ、って」

「待って！　前にも言ったかもしれないけど、ハルケギニアには、召喚したものを送り返す魔法はないのよ！？」

「あいつのところにはあるんじゃないのか？」

その言葉にはっとするルイズ。そうだ、タイコーボーは言っていたではないか。『空間ゲート接続』というのは非常に難しい技術なのだ――と。それはつまり、彼の国にはそういう＜魔法＞が存在しているということになる。

「あたし、ロバ・アル・カリイエなら即幹部候補になれるって言われたわよね」

笑みを隠しきれない顔で呟くルイズに、才人は頷き返した。

「すげえよな。アイツがあそこまで言うんだから、お前、本当にそっちの才能あるんだよ。だから、いつかお前がそれを覚えたら」

「帰っちゃう……のよね」

「ああ、んで、お前に日本の凄さを見せつけてやる」

「は？」

「いや、だからさ。お前と一緒なら、行ったり来たりできるようになるだろ？　そりゃ最初呼ばれたときはムカついたけどさ。まだまだこの世界を見てみたいっていうのは、俺のホントの気持ちだ」

「あんた……」

「それなら、使い魔やめずにいつでも帰れるし、こっちにも来られるじゃないか。だから、お前のこと、手伝うよ。俺は魔法なんて使えないけどさ。部屋の片付けくらいならやれるしな」

――使い魔をやめずに？　いっしょになら、行ったり来たりできる？

その言葉を反芻し続けているルイズをよそに、才人の独演会は続く。

「なあなあ、ロバ……なんとかにも行ってみたくないか？　きっと、こことは違う魔法がいっぱいあるぜ！？　よし決まり！　みんなで一緒に旅行しようぜ。案内はタイコーボーにしてもらってさ。俺と、ルイズと、タバサに、ギーシュ、キュルケも誘って。きっと楽しいだろうなあ」

――みんなと一緒に旅をする。

今まで、そんなこと考えてもみなかった。この使い魔を召喚してから、自分の周りが劇的に変わった気がする。本当に、そんな魔法が出来るようになるのか、あたしにはわからない。でも、少なくとも目の前にひとり――それを信じてくれているひとがいる。

ルイズはドレスの裾を両手で恭しく摘み上げると、膝を曲げて才人に一礼した。

「わたくしと一曲踊ってくれませんこと？　ジェントルマン」

「俺、ダンスなんかしたことねえよ」

「あたしに合わせるだけでいいのよ」

そう言って自分を見上げるルイズの顔は、激しく可愛くて、綺麗で、清楚であった。才人はふらふらとルイズの手を取り……ふたりは並んでホールへと向かった――。

そんな彼らの様子をバルコニーで見守っていたデルフリンガーは、こそっと呟いた。

「おでれーた。主人にダンスを申し込まれる使い魔なんて、初めて見たぜ」

第１８話　始まりの終わり（後書き）

やっとこれで１巻が終了です！　舞踏会は演出の関係上もう少しだけ続くんですが……いよいよ例のルートへ突入していきます。

ルイズと才人への影響が凄いことになっている気がしますが、さて。

って仕事行かねばー！！

２０１１／０４／０５　２１：３０　誤字脱字誤用を修正、一部加筆
２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第19話　雪風、立ちはだかる運命に抗う事

――才人が、初めてのダンスに苦戦していた頃。

フリッグの舞踏会場は、かつてない盛り上がりを見せていながらも、各所で行われている内容はといえば、いつものそれと変わらなかった。男子生徒と女子生徒、それぞれの若さ溢れる甘酸っぱい駆け引きや、教員同士の歓談。そして――。

「この桃はよう熟れておるのう。ほれタバサ、おぬしもひとつどうだ？」

「……とろけるように甘い」

会場の片隅で、ひたすらテーブルに乗せられた料理――かたやサラダと肉料理、一方は果物と菓子のみと内容が偏っているが――と、ひたすら格闘を続ける者達がいた。

タバサと太公望である。

「あなたたち、踊らないの？」

燃える炎のように赤い髪に、魅惑的な肢体を深紅のドレスで包んだ女性が、彼らの側へ歩み寄ってきた――彼女に魅了された複数の男子生徒を引き連れて。

やって来たのは、キュルケであった。

タバサと太公望は、そんな彼女のほうを一瞬だけ振り向くと、テーブルの上を指差し……すぐさま料理との格闘に舞い戻った。

「んもう、今日の主役は、フーケ捕縛に大活躍したあたしたちなのよ！　楽しまないでどうするのよ」

呆れ声のキュルケに、ふたりは食器を手にしたまま答える。

「充分に楽しんでおるが？」

「同じく……ん、奥のテーブルに新しい焼き菓子到着を確認。今夜初登場」

「報告ご苦労。謝礼として、おぬしのぶんも確保してくる！」

「期待してる」

――空いた皿を手にして、よっしゃー！　と気合いを入れた太公望が件のテーブルへ駆けていく姿を、タバサは視線を料理にロックしたまま、片手を上げ軽く振ることによって見送った。

「まったく、揃ってこれなんだから！　ほら、見てご覧なさいな」

そう言って、キュルケは会場の一角を指し示す。その細い指先の向こうには、桃色の髪の少女と黒髪の少年が頬を染めて踊っている。

「あの堅物のルイズまで踊ってるのよ？　相手は自分の使い魔なんだけど」

と、ここまで言ってキュルケは気がついた。そういえば、目の前にいる青い髪の少女――タバサと一緒にいるのも、ルイズ同様＜使い魔＞だった。うっかり忘れそうになるが。

入学して以後開かれた数々の舞踏会で、タバサはいつも他人を寄せ付けず、ひとりだけで――ただひたすら料理をたいらげているだけだった。でも、今日はそうではない。まあ、一歩前進なのかしらね――。

「しょうがないわね。それじゃ、連れがいるから……またね」

キュルケは、タバサの頬に軽くキスをすると、取り巻き達と共に人混みへと消えていった。そこへ、入れ替わるように山盛りの菓子皿を持った太公望が戻ってくる。

「ありがとう」

「何を言う、これは情報への正当な対価なのだ。わしも食べたかったしの」

からからと笑いながら、取り皿に「戦利品」を振り分ける太公望へ、タバサがポツリと言葉を放つ。

「その件だけじゃない。許可証」

ああ、そのことか――と、今更気がついたような太公望に、タバサは目を向ける。ちなみに、このような時ですら、彼らの手は止まることなくテーブル上に山と積まれた食料へと攻撃を続けていたりする。

「図書館で書物を探しておる時、稀にだが、おぬしの視線がある方向を向いていた」

タバサの手が止まった。

「その先に何があるのか気になってのう。司書に聞いたら、教員以外立ち入り禁止とされている書物庫があるというではないか。しかも、数千年前の本まで当時のまま残っておるとか」

「それだけで」

――わざわざ、許可証を取ってくれたのか。

『フェニアのライブラリー』。確かにタバサは、ある人物を助けるために、ずっとそこへ立ち入りたいと願っていた。だが、それを告げたことはないし、思わせぶりなことをしたつもりもない。しかし、自覚のないまま、視線を彷徨わせていたのだろう。

「きっかけはそれだが、わし自身も古い書物に興味があったのでな。せっかくだから、一緒に申請したというわけなのだ。ふたりとも入れれば、面倒もなかろう？」

――彼の目は、いったいどこまでを見据えているのだろう。

ふと、頭の中でばらばらになっていたパズルのピースが組み合わさる。そうだ、これこそが彼の持つ真価ではないか。

国中を混乱させた怪盗を、わずかな時間で突き止め、捕縛した眼力――神眼といっても過言ではないそれは――学院はもちろんのこと、王立アカデミーの研究員ですら突き止められなかったルイズの魔法をも見出そうとしている。風竜よりも早く飛べる？　そんなものは、この＜力＞に比べたらなんでもない。

食事の手を止め、俯いてしまったタバサを見て、

「どうしたのだ？　食べ過ぎで腹でも痛めたのか？」

などとまるで見当違いの心配をする太公望。そんな彼の声を聞いて、タバサは思った。もしかすると、このひとなら――。

「聞きたいことがある」

顔を上げ、真っ直ぐに太公望を見つめるタバサ。突然向けられた真剣な眼差しに、彼女と同様に手を止め、見返すことで太公望は応える。

「わしに答えられるものであれば」

「身内に病人がいる……わたしは、それを治す方法を探している。あなたには、治療の知識はある？　知っていたら教えてほしい。特に、心の病に関することを」

彼女の、心からの願い。だが――この時、運命はタバサに味方しなかった。寂しげな……それでいて悲しそうな色を湛えている太公望の目を見て、彼が次に何を言うのか、わかってしまった。

「すまない。わしに医術の心得はない……それに、心の病は……わしらの国の者にも治すことができないものなのだ」

「……そう」

掴みどころのない性格の彼だが、こういう時に嘘を言う人物には見えない。その彼ができないと断言するのなら、本当に不可能なん

だろう。落胆していないといったら嘘になる。しかし、自分だけではどうしても立ち入ることが叶わなかった『フェニアのライブラリー』へと導いてくれた。それで充分だ。その道を進み、探せばいい――。

タバサが決意を新たにした、そのとき。

バサバサッという羽音と共に、ホールの窓から1羽のフクロウが飛び込んできた。灰色のフクロウは、舞踏会の喧噪の中、迷うことなくまっすぐとタバサの元へと向かい――その肩へと留まった。

タバサの表情が、硬くなった。フクロウの足に括り付けられた書簡を手にすると、さっと目を通す。そこには、短くこう書かれていた。

『出頭せよ』

――と。

タバサの目に、強い光が宿る。先程までのそれと違う、様々な感情がないまぜになった、複雑な――それでいて暗い輝きが。

タバサはすっと立ち上がると、まっすぐに誰もいないバルコニーのほうへと歩き出す。このまま闇にまぎれ、外の厩舎へ。そう考えた彼女の腕を、後ろから掴んだ者がいた――太公望だった。

華奢なタバサの腕をぐいっと掴み、その身体ごと自分のそばへと引き寄せた彼は、周囲を伺いながら、口元を手で隠し、小さな声で彼女の耳元へと囁く。

「国がらみの仕事で呼ばれた――違うかの？」

何故――！？　タバサは言葉もない。

わたしは『任務』のことなど、これまで一言たりとも彼に話してはいない。その戸惑いを察したのだろう、何でもないことのように、太公望は言葉を続ける。

「シュヴァリエ……とやらは、実績の証だそうだのう。タバサ、おぬしはあきらかに多くの実戦経験を積んでおる。周りには隠しておったようだが、わしには普段の何気ない身のこなしや言動から、それがわかっておった。そうでなければ、間違ってもこんな小さな娘をフーケの監視役につけるような真似はせぬ」

以前、彼に『少々見くびっていたようだ』と言われたことを思い出す。そうだ、彼はとっくの昔に見破っていたのだ。わたしが『騎士』であることなど。

「そこまでわかっているなら……離して。すぐに行かなければならない」

強引に腕を振り払おうとしたタバサだったが、思いの外強く握られていてそれもできない。睨み付けても、いつもの飄々とした態度でかわされてしまう。

「別に、そこまで急いで来いと書かれてはいなかったであろう？」

「でも」

確かに、ただ『出頭せよ』と書かれているだけ。でも、できるだけ早く行かなければならない。もしも彼らの機嫌を損ねてしまった

ら……！

「ずいぶんと焦っているようだが、焦りはろくな結果を生まぬ。まさかとは思うが、この学院に、おぬしを監視している間諜がいて、それを確信しておるのか？　少なくとも、わしがここへ呼ばれた日から、それらしき者を見た覚えはないのだが？」

「……いない。わたしも、当然調査している。学院側も、身分の不確かなものを雇ったりはしない」

「……不確かなのが今おぬしの腕を掴んでいるわけだが、まあそれはよいとして」

ふいに、太公望の目つきが変わる。タバサは、彼のそんな表情に見覚えがあった。これは……交渉のときや、何か悪戯を思いついたときの……！

――まずい。タバサが気付いた時は、既に手遅れだった。

「これ！　タバサ、タバサ！！　いくらなんでも飲み過ぎだ！！すまん誰か、ちと手を貸してくれ！！！」

まさしく大音声と言うに相応しい声が、ホール全体に響き渡る。その声に、なんだなんだと太公望とタバサの周りに人だかりができる。そんな中、彼らのすぐ側まで寄ってきた者達がいた。キュルケと、その取り巻き達だ。

「あら、ミスタ。こんなところで痴話喧嘩かしら？」

「違うわ！　タバサのやつが悪酔いしてな、バルコニーから飛び

降りると言って暴れるのだ！！　頼むから止めるのを手伝ってくれ」

――嘘、わたしは酔ってない。そう言ってもがくタバサを、キュルケが抱き締める。

「んもう、酔っぱらいは、自分が酔ってるって気がつかないの。ほら、今日はお部屋に戻って休みなさいな……スティックス、お願い」

キュルケの側にいた男子生徒のひとりが、さっと杖を取り出してルーンを唱える。あの詠唱は＜スリープ・クラウド＞――そう悟った瞬間、タバサは夢の世界へ落ちていった。

第１９話　雪風、立ちはだかる運命に抗う事（後書き）

調べ物をして予定より遅くなってしまいましたが、ようやく第２章、タバサの冒険ルートに突入できました。タバサの、そして太公望の運命は、これからどのように変わっていくのでしょうか。

では行ってきます。

帰宅したら、章表示分けを試してみよう……できるかな？

２０１１／０４／０７　２２：００　誤字、本文一部加筆修正
２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正
２０１１／０５／１８　一部キャラの口調及び誤字脱字修正

第２０話　雪風は霧中を征き、軍師は炎を視る

タバサは、薄く靄がかかった視界の中を、杖も持たず、たったひとりで歩いていた。彼女の周囲には、真っ白な霧――雲かもしれない――と、遠くまで続く１本の道以外には、何もない。

昔読んだ本に書いてあった、死後の世界ヴァルハラへ続く道のよう――そんな感想を抱きながら、足元だけを頼りに、彼女はまっすぐ前へと進んでゆく。

そんなタバサの前を、誰かが歩いている。しかし、視界が悪くその後姿をはっきりと見ることはできない。もっともタバサは、前を行く者に声をかけるつもりなどなかったのだが。

……と、歩み続けるタバサの耳に、小さな声が飛び込んできた。それはどこかで聞き覚えがあるような、それでいて懐かしいような……。

「……ロット……シャルロット」

前を向いていたタバサの足が、止まった。

「……誰？」

わたしの――ちいさな人形と交換に置いてきた、その名を呼ぶのは。

タバサは、その場に立ち止まって周囲を見回す。と、道の外側――先程まで深い霧に包まれていた一部が晴れ――その先にあった大

岩の上に、ひとりの人物が座っていた。

「おじい……さま！？」

そんなはずはない。御祖父様は亡くなったはず――。

思わぬ人物の姿に狼狽した彼女のもとへ、再び懐かしい声が響く。

「シャルロット……」

特徴的な青い髪。４０歳を過ぎてなお青年のような瑞々しさを面影に残す男が、先程タバサが祖父と呼んだ老人の側に、静かに佇んでいた。

「父さま！！」

大声で叫んだタバサは、彼らのもとへ駆け出そうとした。だが、道を外れたその途端、足を踏み外す。彼女がこれまで歩いていた道は、細い崖道だったのだ。咄嗟に＜フライ＞のルーンを詠唱しようとしたが、杖を持っていないことを思い出し、歯噛みした。あれは、わたしを惑わすための罠――。

崖下に広がる闇へとタバサが飲み込まれていこうとした、その時。彼女の腕を、崖の上からがっしりと掴み取った手があった。

「どうやら、間に合ったようだの」

――タバサの手を取ったのは、彼女の使い魔・太公望だった。

○●○●○●○●

「……夢？」

気がつくと、そこは自室のベッドの上だった。身につけているのは、いつもの寝間着だ。タバサはゆっくりと身体を起こし、頭を左右に軽く振った後、ここに至るまでの経緯を思い起こす。

そうだ、確か――舞踏会の最中に、伝書フクロウが出頭命令を運んできて。それで、厩舎へ向かおうとしたところをタイコーボーに捕まって、それで――！

慌ててベッドから飛び起きたタバサは、窓の外に目を向ける。まずい、もう日が昇っている。おそらく、一晩中眠ってしまっていたのだろう。

――と、扉をノックする音が室内に響いた。

「タバサ、もう起きとるか？」

……彼の声だ。一瞬、急いで着替えを済ませて外へ飛び出そうかとも思ったが、タイコーボーのことだ、すぐに状況を理解して追いついてくるだろう。無駄なことをしても体力を消耗するだけ。ここは正直に答えておこう。

「……今起きた。着替えるから、少し待って」

「わかった。なるたけ早く頼む……と、できれば厚めの上着を用意しておくのだ」

厚めの上着？　もしや、今日は冷え込むのだろうか――状況の割

には、自分でも驚くほどに落ち着いていたタバサは、急いで服を身につけると、言われた通りのものを用意し、扉を開けた。

「終わった」

「そうか、では部屋の中で話をしようかの」

そう言って中に入ってきた太公望は、背負い袋と思われるものを手にしていた。

「厨房で、弁当を作ってもらってきた。おぬしの準備ができたなら、出かけるぞ」

タバサにはちと物足りない量かもしれんがの、と、からから笑って袋を持ち上げて見せた太公望に、タバサは唖然として言った。

「出かける……？」

「急ぎの仕事があるのだろう？　馬で行くより早い移動手段があるではないか」

まさか……わたしを自分の背中に乗せて、一緒に行くというのだろうか。だめ。わたしは、あなたをこの道へ巻き込むつもりなんかない。

「これはわたしに課せられた任務。あなたには関係ない」

「その任務の邪魔をして、一晩休ませるという判断をしたのはこのわしなのだ。その責任を取る必要がある。それにだ……」

太公望は、懐から1枚のくるくると丸められた羊皮紙を取り出すと、ぴらっと広げる。タバサは、その書面に見覚えがあった。

「初日に交わした契約書類だ。ほれ、ここにこうある――『太公望は、使い魔として常にタバサの側にあることとする』……とな」

「でも」

「デモもストもないわ。一度結んだ、しかも双方充分納得の上で取り決めた契約を理由もなく一方的に破棄しては、他人から信用を得ることなぞ絶対にできん。学院も、おぬしも、これまできちんと約束を守っている。わしのほうから破るわけにはいかぬ」

まったく、これを見越してこの一文を紛れ込ませおったな、あの狸ジジイめ……などと内心でブツブツとオスマンへの黒い呪詛を吐く太公望だったが、それはタバサの耳には届かない。

「これ以上の話は空の上でするとしよう。ああ、この袋はおぬしが背負ってくれ。では行くぞ、タバサ」

2人分の弁当袋をタバサへ手渡した太公望は、彼女の返事を待たずに窓の外へ飛び出した。そんな彼の後ろ姿を見たタバサは……わずかな逡巡の後、彼を追って窓から飛び降りた。

○●○●○●○●

――なるほど、厚手の上着を用意しろと言っていたのはこのためか。

タバサを背に乗せて空を飛ぶ太公望は、人を乗せて高速飛行する姿をあまり他人に見せたくないという理由から、高度５０００メイルを維持しつつ一路ガリアの首都・リュティスへと向かっている。確かにこの高さを飛ぶ生き物は、ハルケギニアには存在しない。ましてや、普通の人間が＜フライ＞でこの高みへ到達すること自体、絶対に不可能だろう。

前回背中に乗せてもらった時よりも遙かに強い向かい風が、タバサの髪を嬲る。上着なしでは、この風と突き刺すような寒さには耐えられなかったと思う。太公望曰く、シールドの強さを調節することで消耗を抑え、そのぶん飛行できる距離を稼いでいるのだそうだが、それはつまり、やり方を変えればさらに上の世界を見ることも可能だということ。

それにしても……本当に速い。おかげで、途中で休憩を挟んでも、成体の風竜にすら劣らぬ速さでリュティスまで到着できそうだ。彼の背中に強くしがみつくようにしていたタバサが、そう太公望に告げると、意外な返事が戻ってきた。

「いや。今回は馬で街へ出て風竜に乗り継ぐよりも、ちと速い程度に抑えよう」

「何故」

「例の間諜の件だ。本当に学院近辺にいないのかどうかを確認しておきたい」

タバサは、その一言だけで理解した。昨日のわたしの言動を見た彼は、わたしが実際に行動を見張られている可能性がある――そういう立ち位置にいるのだと推測した上で、不安要素をできるだけ摘

み取ってくれようとしているのだ、と。

もし、学院だけでなく、タバサや太公望にすら正体を見破れないほどの優秀なスパイがついていたのなら、とっくに太公望の＜力＞は露見し、最悪自分と彼の身柄を確保すべく、王の関係者が動いているだろう。しかし、絶対にいないという保障もないので引き続き警戒は必要だ。

現時点で王の手の者がいないと確認できたとしても、出頭命令が出てからあまりにも速く到着した場合、タバサがいずこからか支援者を得たのではと怪しまれ、警戒されてしまう可能性もある。

と、ここまで考えたタバサは――太公望を『目的』に巻き込みたくない一心で、これまで任務に関する一切の情報を漏らさないよう注意を払っていたが、事ここに至ってしまった以上、情報の秘匿は逆に彼の行動を阻害しかねない――そう結論した。既に関わらせてしまった以上、せめて状況の説明をする必要がある、と。もちろん、全てを話すわけにはいかないが……。

「話しておきたいことがある」

――そして、タバサは語り始めた。自分が、ガリアの国王とその一族にとって、疎ましい存在であること。そのため、時折こうして呼びつけられ、表に出せない、それでいて命を落とす可能性がある『任務』を請け負わされていることを。

「なるほどのう……ちなみに、逃げることは考えておらんのか？」

「母を人質に取られている。もしわたしが逃げたら」

「どうなるかは自明の理、か……」

国王が、部下に忠誠を誓わせるために人質を取る。よくある話だ。逆に己の忠義を証明するため、自ら進んで身内を差し出す者がいる程である。しかし……。

太公望は、改めて――出会った時から今日に至るまでの――タバサの言動を思い返す。学院にいた子供達のそれとは一線を画す立ち振る舞いに、勘の良さ。そして……初めて出会った時に見た、絶望の色を宿す瞳と……昨夜初めて知った、彼女の奥底に隠された、燃えるような、それでいて暗い炎の存在を。

――わしは、あの炎がどういうものかを知っている。あれは、かつての自分が宿していたそれと、同じものだ。タバサは、他者を寄せ付けぬ氷の仮面をつけてこそいるが、心根の優しい娘だ。おそらく、わしを巻き込まぬよう気を遣って、余計なことを言わぬのだろう。

『＜サモン・サーヴァント＞は、己に最も相応しいパートナーを選び召喚する』

なるほど。相応しいかどうかはさておいて、自分と似通った運命を辿ろうとしている娘によって、わしは呼び寄せられたのか。この世界の『始祖』は、どうやらわしにやらせたい仕事があるらしい。

夢のぐうたら生活は、結局実現せずに終わるのかのう――。

心の内で盛大なため息をつきつつ、太公望は自分が今後どう動くべきなのかについて、タバサの話に耳を傾けつつ思考を巡らせるのであった――。

第２０話　雪風は霧中を征き、軍師は炎を視る（後書き）

次回、リュティスにて。
いっきに物語が動き出しました。

ところで。

「友達を助けるのに、理由なんかいらないだろ！」

と、言えるのが才人。これに対して

「友達だから助ける。それが理由じゃ」

そう答えるのが太公望かなと個人的には考えます。だからこのふたりの周りには、人が集まってくるのかなあと。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第２１話　軍師、北花壇の主と相見えんとす

――ハルケギニア最大の国家・ガリアの王都リュティス。

その東端に位置する、巨大で壮麗な宮殿『ヴェルサルテイル』は、ガリア王家の人々が住まう城だ。その中央に建つ蒼色の大理石で造られた『グラン・トロワ』と呼ばれる建物では、当代の国王ジョゼフ一世が政治の杖を振るっている。

そして、その政治的中枢から少し離れた場所に建つ、薄桃色の大理石で組まれた小宮殿『プチ・トロワ』の一室で、ひとりの少女が苛立ちを募らせていた。

「あのガーゴイル娘は、まだ来ないのかしら」

歳のころは１７といったところだろうか。細い目に、瑠璃色の瞳が鋭く光っている。陶磁器のように白く滑らかな肌と、艶めかしい艶やかな唇が印象的な娘であった。しかし、彼女を最も引き立たせているのは、その青く輝く髪であろう。丁寧に梳かれ、最高級の絹糸の如くそよぐそれは、ガリア王家の血を引く者の証である。

――娘の名は、イザベラ・ド・ガリア。この王国の王女であった。

イザベラは、豪奢な装飾が施された椅子に腰掛け、ひとりの少女が到着するのを待ちながら、自分が現在置かれている立場を改めて確認し――さらなる苛立ちを覚えた。

季節の花が咲き乱れるヴェルサルテイル宮殿には、無数の花壇が存在する。由緒あるガリア王国の騎士団は『東薔薇花壇警護騎士団』

『西百合花壇警護騎士団』といったように、それらの花壇にちなんで命名されているのだが、陽が差さない宮殿の北側には花壇がないため、その名に『北』が入る騎士団は存在していない……表向きは。

――北花壇警護騎士団。

それは、ガリア国内や国外で起こる様々な面倒ごとを『裏』で処理するための組織。一応は騎士団であるため、多くの『騎士（シュヴァリエ）』を抱えている。

しかし、その組織としての在りようが故に、所属している者たちは互いに顔も名も知らない。もし仮に仕事を共にすることがあっても、番号名で呼び合う――名誉とは無縁の闇の騎士団。イザベラは、その団長を任されているのである。

「まったく、父上は自分の娘が可愛くないのかしら！　わたしだって、王家の役に立ちたいのよ。あの人形娘なんかとちがって、わたしは本当に有能なんだから！！」

だからこそ、官職に就きたいと願ったのに――こんな地味な仕事を寄越すなんて。

イザベラには、致命的なまでに魔法の才能がなかった。おそらく『無能王』と称されるジョゼフ一世――魔法を一切使うことができない故に、侮蔑を込めてそう呼ばれる父親の血を色濃く受け継いでいるのであろう彼女は『ドット』レベルの魔法を唱えるのがせいぜいであった。

にもかかわらず、イザベラの従姉妹姫は。今、その到着を待っている己と血を分けた少女は。溢れんばかりの魔法の才能を持ち、幼

くして『シュヴァリエ』の称号を得るほどの存在であった。このハルケギニアにおいて、魔法の才能は人望と比例する。それは、ガリア王国でも例外ではない。

イザベラは、本来『無能』などと呼ばれる程、愚鈍な娘ではない。それ故に、この広い宮殿にいる貴族たちだけでなく、側近くに仕える使用人たちまでもが――自分よりも魔法の才能に優れる従姉妹姫こそがガリアの王女に相応しい、そう考えていることを熟知していた。彼女は、それが悔しくてたまらない。

だからこそ、従姉妹姫に辛く当たる。己の内に溜め込んだ鬱憤を晴らすが如く。何故、わたしには魔法の才能がないのだ。どうしてこの娘にばかり……と。

そんなふうに苛立ちを募らせるイザベラに、侍従のひとりが件の従姉妹姫到着を告げる。だが……その報せには、戸惑いが混じっていた。なんでも、使い魔が一緒についてきており、どうあっても主人の側から離れようとしないのだという。

「ふふん。なんだい、あのガーゴイル娘。使い魔を大人しくさせておくこともできないっていうのかい……」

申し訳ございません、なんとか引き離して参ります。怯え声でそう言った侍従の姿を見て、イザベラは興味をそそられた。

「いいわ。その＜使い魔＞とやらも一緒に連れてきなさい」

「で、ですが……」

「このわたしが、いいと言っているのよ。命令が聞けないの？」

震えながら外へ出て行った侍従の後ろ姿を見て、イザベラは満足げな笑みを浮かべた。普段『人形』と呼んで差し支えない程、感情を顕わにしない従姉妹が――使い魔に振り回される姿を見るのは、さぞ面白いに違いない……と。

○●○●○●○●

「おほ！　おほ！　おっほっほ！」

イザベラは、気の触れたような笑い声を上げた。周囲にはべる侍女たちは、みな戸惑いを隠そうともしていない。なんとなく楽しそうだと感じてはいたが、まさかここまでの傑作とは予想だにしていなかった。

「あんたが！　溢れる才能を鼻にかけて余裕気取ってた北花壇騎士7号さまが！！　＜サモン・サーヴァント＞に失敗しただって！？」

しかも。従姉妹が語ることを信じるならば、そのせいで『召喚事故』を起こし、よりにもよって異国――東方のメイジを誘拐同然に連れて来てしまったのだとか。

「で、そんなあんたの尻ぬぐいをするために、トリステインの魔法学院が責任を取って、その子を対外的に＜使い魔＞として雇った、と……あーっはっはっは、まったく、みっともないったら！　ほら、お前たちも笑いなさい！！」

イザベラの命令で、侍女たちは仕方なしに笑みを浮かべた。しば

らく、イザベラたちは従姉妹姫――タバサをだしに、笑い続ける。

しばし笑ったイザベラは、ふいに問題の＜使い魔＞に言を向ける。

「おっほっほ、この娘が本当に迷惑をかけたわね。それにしても、どうしてここまでついてきたのかしら？　登城する、って、聞かされていなかったの！？」

王女から言葉をかけられた使い魔――太公望は、満面の笑みで答えた。

「いちおう、外で待っていろとは言われたんですがのう。街の中はいつでも見られる。しかし、わたくしのような者がこんな立派な城の中へ入る機会など、これを逃したらもう絶対に来ないと思いましてな！　逃げるご主人様を追いかけて、無理矢理くっついて来たと。まあ、そういうわけでして」

そう言った太公望は、物珍しげに周囲をきょろきょろと見回している。

「いや実際、長らく旅をしておりましたが、こんなに立派な建物は、初めて見ました。しかもまさか、こんな大国の王女さまにお目通りが叶うとは！　そう聞いておれば、さすがに遠慮しましたものを」

頭を掻きながら恐縮する異国風の装束を身につけた男に、イザベラは鷹揚に頷いた。

「おほほほほ、東方ロバ・アル・カリイエにも、この宮殿に並び立てるような城はないというのね。それにしてもシャルロット。あ

んた、この者にわたしと会うことを伏せていたの？　まったく使えない子だわ。事故を起こすのも道理ね」

「……シャルロット、とは？」

首をかしげ、心底不思議そうな顔をしている少年を見て、イザベラはまた笑った。

「あははははっ、お前、本当に何も聞かされていないのね。光栄に思いなさい、このわたくし自ら教えてあげるから。いいこと、あなたを攫ったそこの小娘の名前はね、シャルロット・エレーヌ・オルレアン。この国の、王族よ」

「んな！？　なっ……なっ……わ、わたくしはそのようなおかたに」

「そんなにあわてなくていいのよ？　だって、それはもう過去の話。その娘は、もう王族なんかじゃないんだから。家を取り潰された、ただの没落貴族に過ぎないわ。ねえ、シャルロット？　なんとか言ったらどう！？」

ニヤニヤと笑って問いかけるイザベラに、タバサは答えない。だが……いつもなら真っ直ぐ見返してくるはずの視線が、今日は下を向いたままだ。イザベラには、それがこのうえもなく愉快だった。

「ねえシャルロット。本当なら、すぐにでもこのわたしに『事故』を報告すべきだったと思わない？　けど……寛大なわたしは、許してあげるわ。だって、言えないわよね、こんなこと。あの天才、王弟シャルルの娘が――まさかコモン・マジックを失敗しただなんて……ねえ？」

静まりかえったプチ・トロワの謁見室に、イザベラの高笑いだけが響き渡る。彼女は思った。こんなに楽しい気分になったのは、いつ以来だろうか。もっと、この愉悦を味わいたい、と。

……そうだ！　それには、この奇妙な異国のメイジ――王族に対する礼どころか、王宮を訪れる際の常識すら知らない程度の流浪者の扱いを、人形娘のそれより高くしてやればいい――そう、イザベラは考えた。

○●○●○●○●

「あの反応、見たであろう？　学院近辺にあの姫の間諜がいない事は確定したな」

風竜の背に乗って『任務』へと向かう道すがら、太公望とタバサは先程までのやりとりについて、確認を取り合っていた。

上機嫌のイザベラは、現地まで着いていくといって再びタバサを困らせた（ように見せかけていた）太公望のために、なんとわざわざ自分の名を使ってまで風竜を用意したのだ。わたくしは、あなたを誘拐した娘と違って、寛大な王族だから――と。

もちろん、その風竜に＜盗聴＞や＜遠見＞の類の魔法が仕掛けられていないかどうかは、タバサの＜ディテクト・マジック＞によって確認済みだ。

「あなたは、大胆なことをする」

正直、心臓に悪かった。そう話すタバサに、太公望は人の悪い笑みを浮かべる。

「現時点で見せてもよい手札を切った、それだけのことだ」

一緒に王宮へ行き、イザベラ王女に謁見する。リュティスへの空路でそう言った太公望を、当然ながらタバサは止めた。しかし、いくつかの理由を聞かされたタバサは、結局――渋々ながらも、それを許可したのだ。

太公望はまず、タバサから普段の謁見の様子――特に王女イザベラとその周辺の言動を、出来る限り詳しく聞き出した。

そして、イザベラの能力と性格――少なくとも、王から国の裏仕事を任されるだけの器量があること、にも関わらず子供のように周囲を振り回し、タバサに対して血の繋がった従姉妹とは思えないほど辛く当たること、その他諸々の情報から、周囲の者達の忠誠心がおしなべて低いであろうことを推測した。

それをふまえた上で、疎ましい従姉妹が、本来隷属すべき＜使い魔＞を御することができないと知ったら……どういった行動を取るか。ほぼ間違いなく謁見の間へ連れてこいと言われるだろう――そうタバサに語り。

さらに。タバサが＜サモン・サーヴァント＞に失敗して事故を起こしたこと。その責任を取るという形で学院側が異国のメイジである太公望に頭を下げ、相応の対価を支払っていることを話すよう指示をした。

「学院との取引については、口外しないという契約があったはず」

最後はそう言って反対したタバサに対して、

「それはあくまでわしが、だ。おぬしがバラす分には問題ない」

ケケケ……と、意地の悪い笑みで反論した太公望は――実際嘘ではないので――そのまま堂々とくっついて行ったわけだが……その結果は、ご覧の通りである。

「召喚事故を起こしたなどという珍しい話は、黙っていてもいずれ噂となって伝わる可能性がある。ならば、その前にこちらから開示してしまったほうがよい」

「下手に隠すと、余計な探りを入れられると？」

「その通りだ。ならばいらぬ憶測を生む前に、ある程度手札を晒したほうが後々の為になる。最初につけられた強い印象は、なかなか変えられないものだからのう」

そのせいで、おぬしには不愉快な思いをさせると思うが……と、先に詫びた太公望に、タバサも頭を下げた。そのような思いをするのは慣れている、こちらこそ危険に巻き込んでしまって申し訳ない、と。

「命に関わるような危険はない。失敗してもせいぜい謁見室に入れない、その程度だ。そもそも『裏』を取り仕切れるほどの娘が、他国の国営施設が雇った者に対して危害を加えたらどうなるかぐらい、判断できぬはずがないのだ」

しかも雇用契約書まで交わしてあるのだ、下手に太公望へ手出し

をしようものなら、国際問題に発展するのは間違いない。タバサ自身も、そういう意味においてはイザベラを信頼していた。もしも『北花壇騎士団』団長である彼女が本当に『無能』で『愚か者』であってくれたなら、タバサはここまで苦労していなかっただろうから。

「だがこの件で、おぬしを支援しようとする者が減るかもしれぬ」

「かまわない。逆にこれがいい踏み絵になる」

たった一度の――確かに大きな失敗ではあるが――間違いで、それまで担ぎ上げようとしていた御輿を簡単に下ろす。そのような者を信頼することなどできない。わたしを傀儡にして、自分の利益を得ることだけしか考えない……あるいは『魔法』の腕でしかわたしを見ていない輩を振り分ける機会になる。そう、タバサは答えた。

「でも、勘違いしないで欲しい……タイコーボー。わたしは、あなたの存在を失敗だとは思っていない」

「当たり前だ。もしおぬしがそんな輩なら、とっくの昔に逃げ出しておるわ」

笑いながらそう答える太公望を見ながら、タバサはふとプチ・トロワでのやりとりを思い出した。あの従姉妹イザベラが、自分の父に敵対する――反ジョゼフ派貴族の旗頭となりえるわたしを疎ましく思うのは理解できる。でも、何故あそこまで挑発するのか。最初は、わたしの堪忍袋の緒が切れて反乱を起こすのを期待している、そう考えていた。だが……。

そんな疑問を太公望に向けると、彼はイザベラをしてこう評した。

「あの娘は、他人に自分の存在価値を認めてもらいたくてたまらない……孤独な子供といったところかのう」

ある意味、タバサの友人ルイズに似ておったな……内心でそう呟く太公望。

孤独な子供。豪奢な王宮で大勢の家臣に傅かれ、それでもなお孤独だというのか。そんなの、理不尽ではないか……わたしに比べたら、彼女はずっと恵まれている……！

理解できない。そう答えたタバサに、

「あくまでわしの印象だからな？　そもそも、ひとの心とは複雑なものだ。簡単に理解しあうことができるなら、争いなど、そうは起こらぬはずだしのう」

そう言って小さく笑う太公望の声は、どこか寂しげだった。

――ふたりを乗せた風竜は、彼らが話し合っていたその間、只ひたすらに『任地』へ向けて翼を広げ、空を飛んでいた――。

第２１話　軍師、北花壇の主と相見えんとす（後書き）

我らがイザベラ様が初登場です。タバサルートである以上、彼女の登場回数が増えていくのは自明の理であるわけですが、さて今後どう物語に関わってくるのでしょうか。

うん、なんだ……イザベラ様も大好きなんです、ええ。といいますか、ガリア一族が大好きなんです。やっと出せた。ふふ。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第２２話　雪風と軍師と老戦士

「ふむ、討伐任務……とな」

タバサと太公望をその背に乗せて、風竜はガリアの王都リュティスから３００リーグほど南に離れた空を飛んでいた。

彼らが向かっているのは、ガリア東部の山地の中にある「アンブラン」という名の村である。今回イザベラ王女から命じられた任務は、その村を襲う妖魔・コボルドの群れを殲滅することであった。

「で、そのコボルドとは何者なのだ？」

そう問うてきた太公望に、タバサは所持していた生物辞典を開きながら答える。

「犬のような頭を持つ、亜人の一種。腕力と知能はそれほど高くない。単体ならメイジでなくとも何とかなる相手。ただし、３０匹以上の群れで行動することが多く注意が必要」

ふむふむ……と、相づちをうつ太公望。

「戦場ならばともかく、それ以外の場所で無益な殺生を行うのは、人外問わず我らの間では御法度なのだが……そのコボルドとやらは、話し合いの通じる相手ではないのか？」

眉根を寄せて唸る太公望に、タバサは説明を続ける。

「コボルドの『戦士』は凶暴で、人語は解さない。稀にいる『神

官』が人語を操る場合もあるけれど、彼らには人間を生け贄にして、自分たちの神に生きたまま奪った肝を捧げる習慣がある。人里に降りてきて街や村を襲うのはそのため」

「うげっ、人食いの習慣があるのか」

思わず表情を歪めた太公望に、コクリと小さく頷くタバサ。

「彼らはなんでも食べる。だから討伐しなければならない。現にこれまで、いくつもの街や村が、放置していたコボルドによって滅ぼされている」

なるほど、それならばやむを得んのう……そう呟き、ため息を吐く太公望。

「見えてきた。あの村」

タバサの言葉に、太公望は風竜の飛び行く先に目を向けた。そこは、３０００メイルの上空から見ると、三方を山で囲まれた、まさに陸の孤島といって差し支えないような場所であった。近くの街まで、徒歩で数日かかるほど離れている。

アンブランの村は、人里離れた場所にあったが、そうは思えないほどに栄えていた。タバサは風竜を巧みに操作すると、村の中央にある大きな広場に降り立った。

「おやぁ、竜だよ、風竜だ！」

タバサと太公望が竜から降りると、大勢の村人たちが、人なつっこい笑顔を浮かべながら彼らの周りに集まってきた。どうやら、来

客が非常に珍しいらしく、興味深そうにいろいろな質問を投げかけてくる。

「妖魔に襲われているという割には、なんとものんびりした雰囲気だのう」

戸惑ったようにそう呟いた太公望の所見通り、コボルドに襲われているという割には、村人たちに悲壮感はないように思える。だが、タバサはそんな彼らに妙な違和感を覚えた。集まった村人達は、男も女も、老いも若き者も、ガリアのどこにでもいる、ごく普通の格好をした、善良そうな人々であるにも関わらず――だ。

ここ数日の強行軍で疲れているだけだ。タバサはそう自分に言い聞かせる。

と、人の輪から幼い少女がちょこちょこと出てきて、太公望を見上げた。

「お兄ちゃん、面白い格好！　頭にある白いのは、お耳？」

太公望は、いつも通り頭に白い長布をぐるぐる巻きにしている。細長い結び目を、ぴん！　と、まるで兎の耳のように立てているので、少女の目にはそう見えたのであろう。

「む？　触ってみるかの？」

「いいの？　やったあ！」

しゃがんで、少女に目線を会わせた太公望がそう言うと、少女は喜んで駆け寄ってきて、長布の結び目を掴んだ。

「こ、これ引っ張るでない！　タバサ、何でおぬしまで掴んでおるのだ！！」

「一度触ってみたかった」

そんな彼らの様子を見て、集った村人たちは一斉に笑い声をあげる。だが……ひとりの男から発せられた怒声が、そんな平和な空気に水を差した。

「こりゃあああああ！　貴様らあああああ、何をしとるかあああぁ～！！」

駆け寄ってきたのは、槍をかついだ老人であった。真っ白な髪と髭が、彼が相当の高齢であることを伺わせる。時代がかった甲冑に身を包み、手にした長槍はいかにも重そうに見える。それでもかくしゃくとした足取りでタバサたちに近寄ると、槍を突き付けた。

「怪しいやつ！　名を名乗れ！！」

村人のひとりが呆れたような声で、この方々はおそらく城からいらっしゃった騎士さまですよ……と、老人を窘める。

「ふむ……よくよく見れば、お二方ともマントを着けておられるな。だが、貴族さまといえど、わしの許可なくしてアンブランに立ち入ることは許されぬ！」

側にいた少女に、大人たちのところへ戻るように言い聞かせた太公望は、その足で油断なく槍を構える老人に近寄り、名乗った。

「突然の空からの来訪、大変失礼した。こちらは、ガリアの花壇騎士タバサさま。わしは、その従者を務める太公望と申す者」

紹介されたタバサは、老人の目を見て小さく頷く。ちなみに太公望が従者として振る舞っているのは、任務の際にはそのように名乗ることを、前もってタバサと打ち合わせていたからである。

思いの外丁寧な名乗りに少し警戒を解いたのか、老人の表情が緩む。しかし、槍はそのまま油断なく構え続けている。

「これは貴族のお嬢様に従者殿、ご無礼を許されよ。わしはユルバンと申す者。恐れ多くも領主ロドバルド男爵夫人よりこの槍を与えられ、警士件門番としてこのアンブラン村の治安を預かっておる」

そう言うと、ユルバンは改めて槍を構え直す。

「であるからして、わしの言葉は、男爵夫人の言葉と心得えられよ。さて、それでは当村へやってきた理由を述べていただきたい」

その口上に、特に慌てることなく太公望は答えた。

「我らは、依頼を受けてコボルド退治に参ったのだが……ユルバン殿は、男爵夫人よりその件について、何か聞き及んではおられぬのだろうか？」

すると、それを聞いたユルバンの顔が激しく歪んだ。まるで、悔しさのあまり耐えられない、といったように。

「うぬぬぬぬぬ！　あれほどわしひとりで充分だと申し上げたのに……ロドバルドさまは、このわしが信用ならぬとおっしゃるのか

！　ええい！！」

ユルバンは槍を肩に担ぐと、ひょこひょこと歩き出した。タバサは、無言のままその背を追って歩き出す。同じくその後をついていった太公望は、近くにいた村人数名に事情の説明を頼み、一緒に着いてきてもらった。

「あの御仁は……いったいどういうおかたなのだ？」

ユルバンに聞こえぬよう、小声で尋ねる太公望に、

「あの爺さんは、この村を守っている兵士でね……昔は相当な使い手だったらしいんだが、今はご覧の通りってわけでさ」

これまた小さく返事をする村人。

「ふむ。年齢に似合わず、足取りはしっかりとしておるようだが？」

「いやあ、それでもあの年だからねえ。ひとりでコボルド退治に行くって息巻いてたんだが、年寄りの冷や水もいいところさね。いやあ、あなた方が早く来てくれて助かった。あと3日も遅かったら、あの爺さん、痺れをきらして飛び出していっただろうから」

笑いながらそう答えた村人たちの声には、ユルバンを馬鹿にしたような色はない。頑固な老人にしか見えないが、おそらく彼は、村人たちに愛される存在なのであろう……太公望は、そう結論した。

ユルバンの向かう先には、立派な門構えの屋敷がある。おそらく、そこがこの村を預かる男爵夫人の屋敷なのであろう。太公望は、村

人たちに礼を言うと、歩みを早めタバサの後を追った。

○●○●○●○●

ロドバルド男爵夫人の屋敷は、小さいながらも手入れの行き届いた貴族屋敷だった。ユルバン老人の後について、タバサと太公望も扉をくぐる。と、執事と思しき中年男性が奥から駆けつけてきた。

「ユルバンさん、どうしたね？」

「奥様はおられるか！」

「今は書斎におられると……」

ユルバンは執事のほうを見向きもせずに、ずんずんとひとり奥へと進んでいく。戸惑う執事に太公望が用件を告げると、執事は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに笑みを浮かべ……来訪への感謝を述べた後、召使いを呼び、タバサと太公望を奥へと案内させた。

タバサと太公望が書斎へと案内されてゆくと、ユルバンの大声が聞こえてきた。

「奥様、いったいどういうことですか！　お言いつけ通りコボルド退治を延期してみれば！　王都からあのような年端もいかぬ子供ふたりを呼びつけるとは！！」

「だって……ユルバン、あなたひとりだけではさすがに……」

書斎の奥に、困り顔をした老婦人がいる。あれが男爵夫人なので

あろう。彼女の困惑をよそに、ユルバンは抗議の声を上げ続けている。５０年以上、男爵家と村を守り続けた自分が信用できないのか、ひとりでもコボルドごときに遅れはとらない……と。

そんなところへタバサと太公望が入っていったものだから、ユルバンはさらに興奮し、大声を上げる。

「おお、これはこれは騎士さまがた！　今聞かれた通りです。おふたかたの手を煩わせるほどのことではありませぬ。早速、王都へお戻り願いたい」

「これ、ユルバン。失礼ですよ！　せっかく遠方からいらして下さったというのに……」

「貴族とはいえ、子供ではありませぬか。見たところ実戦経験もないようだ」

つまらなさそうに鼻を鳴らすユルバンを無視して、ロドバルド男爵夫人はタバサ達ふたりのほうへと近づいてきた。

「ようこそ、あなたがたがリュティスからいらしてくださった花壇騎士様ね」

タバサは小さく頷くと、短く名乗った。

「花壇騎士タバサ。こっちは、従者のタイコーボー」

ふん！　と鼻息荒く部屋を出て行こうとしたユルバン老人の背に向けて、男爵夫人は声をかけた。

「ユルバン。わかっているとは思いますが、この騎士どのがいらしている間は、村を出ることはまかりなりません。あなたには、村を守るという役目があります」

ユルバンの顔色が変わった。

「つまりそれは……この私を討伐隊から外すということですかな？」

男爵夫人は、彼の言葉に重々しく頷く。そして激しく抗議するユルバンに、これは命令ですと告げると、ユルバンは絶句し……悔しそうに首を振ると、部屋を出て行ってしまった。

「いやはや……ずいぶんと元気な御仁ですのう」

あっけにとられた顔で太公望が呟くと、ロドバルド男爵夫人はふたりのほうへ向き直り、頭を下げた。

「失礼を許してくださいね。決して悪い人ではないのよ。ただ、責任感が強すぎるといいますか……」

タバサと太公望は、頷いた。

――そして男爵夫人は、タバサたちに討伐依頼の説明をした。

コボルドの群れが、ここから徒歩で1時間ほどの場所にある廃坑に住み着いたのは1ヶ月ほど前のこと。幸い村はまだ襲われてはいないが、最近偵察隊と思しき者達が様子を探りに来るようになった。コボルドは、知性が低い割に用心深い。こちらの防御態勢の隙を見極めた上で、襲いかかってくるつもりであろう――と。

「群れの規模は？」

「廃坑の大きさからして、おそらく３０……多くて４０程度でしょう。おふたりだけで大丈夫でしょうか？」

タバサは頷いた。太公望も、少し間を置いて同様にする。

「ところで騎士どの……先程のユルバンの件で、お願いがあるのです。彼のことですから、おそらく『自分も連れて行け』と申し入れてくるはずです。その時は、きっぱりと断っていただけないでしょうか」

タバサの瞳をじっと見つめながら、男爵夫人は続ける。

「あの通り、ユルバンはかなりの年です。昔ならいざしらず、もう実戦には耐えられないでしょう。彼は、何十年もわたしたちのために尽くしてくれました。今や、夫も子供もいないわたしにとって、家族同然なのです」

男爵夫人の言葉は、慈愛に満ちていた。あの老戦士を危険な目にあわせたくない、そう願ったから、わざわざ花壇騎士に依頼したのだろう。

そう考え、頷こうとしたタバサを押しとどめたのは、太公望だった。

「いや、一緒に連れて行ったほうがよいでしょう」

驚いて見つめるタバサと男爵夫人の顔を交互に見た後、太公望は

続ける。

「ああいった御仁は、下手に押さえつけようとすると反発する。男爵夫人、失礼ですが、長年彼を側に置いていたあなた様にお伺いしたい。もしもわしらが断ったとしたら……彼はどういった行動に出ると思われますかな？」

「そ、それは……まさか！」

自分が導き出した答えに恐れおののくように、男爵夫人は身体を震わせる。

「さよう。ほぼ間違いなくひとりでコボルドの巣へ突入を敢行し……その先は、言わずともおわかりのようですな」

「でも」

それでも反対しようとするタバサに、太公望は小さく笑って答える。

「わしらは風竜に乗って来ているのだ。耐えられないと思ったら、最悪竜の背にでも縛り付けておけばよい。男爵婦人も、ご安心めされよ。彼には、傷ひとつ負わせはしませぬ」

太公望の言葉を聞いても、未だ躊躇っていた男爵夫人であったが……最後には、ゆっくりと頷き……そして頭を下げた。

「わかりました。ユルバンのこと、くれぐれもよろしくお願い致します」

その後男爵夫人は、英気を養っていただきたいと、自らふたりを食堂へ案内した。

そこで出された肉料理――おそらく、近くの山に住む鹿の肉だろう――を、なまぐさが食べられないとしょぼくれる太公望のそれと、手持ちの山盛りキノコのバターソテーを双方納得の上でトレードしたタバサは、あっさりと機嫌の直った彼を尻目に、急いでナイフとフォークで切り分ける作業を開始する。

だが――一口肉を口に含み、わずかに眉をひそめた。味つけが薄いのである。おそらく、老齢で独り身のロドバルド男爵夫人にあわせた味なのであろう。

ふと、隣の太公望はと見れば――なんの問題もないように、ぱくぱくとソテーを平らげている。単にわたしの好みの問題なんだろうか？　とにかく味に文句をつけるのは失礼なので、タバサはひとり黙々と料理を口へと運んだのだった。

第２２話　雪風と軍師と老戦士（後書き）

まずはょぅι゛ょとのバトルを期待していた皆さんに、心からの謝罪を。

よりによってこのエピソードかよ！　作者ジジコンかよ！！　と、いう方々、すみません。彼女の出番はもうしばらく後になります。

ところで、例の殺生は御法度のくだりですが。序盤ではなく最終話以後の太公望のため、人を害す者を退治する、命の危機があるなどのどうしようもない場合に限っては割り切れている、という解釈をしておりますので何卒ご了承ください（原作でも、それらしき描写がございます）。

あと、太公望のアレは絶対耳です。感情にあわせてへにょっとするし。

２０１１／０４／１２　２２：２０　誤字脱字、本文一部を修正
２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正
２０１１／０７／１１　誤字脱字修正

第２３話　軍師、炎と共に舞い降りる事

――ずいぶんと味つけの薄い料理が並べられた晩餐会が済んだ後。

太公望は、従者用としてあてがわれた部屋には向かわず、まっすぐにタバサの部屋――彼女は、騎士ということで立派な客間兼寝室に通されていた――へ出向いていた。当然、明日の作戦会議を開くためである。

タバサとふたり、コボルドの習性その他について改めて復習をしていたその時、ふいにコツコツと、扉をノックする音が聞こえてきた。

「誰？」

タバサが問うと、しわがれた声が響いた。

「わしです」

ユルバンの声だった。タバサが頷いたのを見た太公望が扉を開けると――そこには、平服に着替えた老戦士が立っていた。

自分を招き入れた者が、訪問相手であった騎士の少女ではなく、その従者だったことに少し驚いたような顔をしたユルバンだったが……部屋の奥に目的の娘を見つけると、神妙な顔をしてその側へと歩み寄ってゆく。

そして、無言のまま自分を見つめているタバサの前に、片膝をついた。

「お頼み申す！　どうか！　どうかわしも明日の討伐に連れて行ってくだされ！！」

「そのつもりだった」

「そこを曲げてお願い申し上げ……え？」

一瞬自分の耳を疑ったユルバンだったが、タバサが再度放った、

「あなたを連れて行くと言っている」

と、いう言葉に、聞き間違いではなかったのだと改めて喜んだ。

「ま、まことでございますか！　ありがたい、深くお礼申し上げる！！」

時代がかった仕草で、ぺこぺことお辞儀をするユルバンに、タバサはポツリと事実を告げた。

「感謝する相手が間違っている。わたしは反対だった。あなたを連れて行くのは、彼がそう進言したから」

「お嬢様！　年長者に対する礼を欠くなど、貴族にあるまじき振る舞いですぞ」

そう言って、扉の側から近寄ってきた年若い――お嬢様と呼んだ相手と、せいぜい2つか3つしか違わないであろう――従者をまじまじと見つめるユルバン。この若者が、わしを連れて行ったほうがよいと進言してくれたとは、一体――！？

「何度も申しておりますでしょうが？　ユルバン殿は、長きにわたってこの村を守り続けてきた歴戦の戦士と伺っております。さればこそ、周辺の地形にも詳しいはず。間違いなく討伐の助けになってくださると」

それに、よくご覧くだされ！　と、太公望は身振り手振りでユルバンの身体つきを褒め称える。ご老体とは思えぬ引き締まった肉体！　これぞ日々の鍛錬を欠かしておらぬ証拠ですぞ……と。

「わたしは、あなたを討伐任務の大先輩として信頼している。だから、あなたがそこまで言って同行を求めるユルバンを信用することにする」

「ですからその言い方は……と、失礼したユルバン殿。そういうわけで、是非とも貴殿の力をお借りしたい。実はこちらからお願いに出向くつもりでおりましたが、わざわざお越しいただけるとは。感謝いたす」

呆然としていたユルバンを尻目に寸劇を繰り広げていたひとり……太公望が、ぺこりと頭を下げる。ユルバンも、つられて礼を返す。

「ユルバン殿。ご覧の通り、お嬢様はまだお若い。当然討伐の経験も少ないので、今回は普段討伐任務を請け負う家臣団の中から、比較的年の近いわしがお守りとして供につけられましての」

村の大事にこのような編成でもって挑むなど、失礼なこととは承知の上ですが……と、心底申し訳なさそうな表情で、ユルバンに語る太公望。

「なに。わしはこう見えても領内ではそれなりに知られた＜風＞の使い手。領内の盗賊退治や妖魔討伐で小隊指揮の経験も積んでおります。若輩者故にご不安かと思われますが、そのへんのちゃらちゃらした貴族共にひけをとったりはしませぬぞ」

ユルバンは仰天した。まさかこの若さで小隊指揮（小隊＝３０～５０人程度の兵員を有する部隊）の経験者とは。話半分だとしても……自分の身体を観察し、毎日鍛錬を積んでいると見て取った眼力から、それなりの実力を持った戦士であるのは間違いない。

「男爵夫人には、既に随伴の許可をいただいております。アンブランの守りの要であるユルバン殿が村を離れることを、いたく心配しておられましたが……なに、我ら全員でかかれば、コボルド討伐などあっという間に終わります。さすれば、すぐにでも奥様の不安を取り除いてさしあげることができましょうぞ」

なんと、男爵夫人の了解まで取り付けておるとは！　実に手回しがよいではないか。ユルバンは内心で驚いた。そして……これまで、いくら男爵夫人に申し出てもコボルド退治の許可をもらえなかった理由についても納得した。

村の守人たる自分が、持ち場を離れてしまうことに不安を覚えられていたのだと。自分の腕について疑われていたわけではないのだ、奥様は、戦士としての自分を信頼してくださっていたからこそ、村にいてもらいたかったのだと。

――かつて、期待を裏切ってしまったこのわしを……奥様は、それでもなお信じてくだすっていたのだ。

ユルバンは、感激したと同時にこの若者がいたく気に入った。い

ち貴族の従者とはいえ、メイジであるにも関わらず、平民の自分を全く卑下していない。それどころか、年配の戦士としての経験を期待してくれている。

だから――彼が差し出した手を、迷わず握った。

「いや、こちらこそ改めて宜しくお願い申し上げる。して……これから作戦会議というところですかな？」

「その通り。この周辺の地図と……可能であれば、コボルド共の巣になった廃坑の絵図面などがあるとありがたいのですが」

それを聞いたユルバンは、我が意を得たといわんばかりにドン、と胸を叩いた。

「お任せくだされ。このあたりの山、そしてあの廃坑については、何度も調査しておりますれば。すぐに持って参りますぞ！」

勇んで部屋を出て行ったユルバンの後ろ姿を見送ったタバサは、ポツリと零す。

「……本当に口が上手い」

「ふふん、あれだけ言っておけば、単独討伐に出たりなどしないであろう」

同じく小声で返した太公望。彼はしたり顔で、それに――と、続ける。

「かの御仁が任務の助けになるのも、間違いのない事実だ。しか

し……タバサの演技もなかなかのものであったぞ？」

「だんだんあなたの影響を受けてきた気がする」

「存分に誇ってよいぞ」

「遠慮したい。ところで、小隊指揮の経験があるというのは真実？」

「師団を率いたこともあるぞ」

「……本当に？」

「さあどうかのう……ニョホホホホホ」

――その後、一抱えほどもある絵図面と地図を持って客間へ戻ってきたユルバン老人が真っ先に見たものは……椅子に腰掛け、茶請けにと出された菓子をポリポリと無心に嚙り続けている少女と、その横に立て掛けられた長い杖。そのすぐ隣で、何故か頭を押さえてうずくまっている若者の姿であった。

○●○●○●○●

「なるほど、山の中腹にある木枠で囲まれた穴が出入り口。換気口兼避難用の細い洞穴が、やや斜め上方向に向かって1箇所伸びている……と。内部は人工の坑道と、一部鍾乳洞。先の2箇所以外には外に出るための道はない、か」

ロドバルド男爵夫人宅の客間では、ユルバンが持ち込んだ絵図面

を元に、コボルド討伐のための作戦会議が開かれていた。

「入口はそれなりに広いですが、洞穴のほうは、ひと1人が通るのがせいぜいといったところでござる。見張りは入り口のほうには常に置かれておりますが、洞穴のほうは出入りに使われること自体がめったにありませぬから、まず何もおりませぬ」

老戦士の言葉に頷く太公望。身分はタバサのほうが上だが、今回は小隊指揮経験者の彼が取り纏めと実際の指揮を行うということで、全員の意見が一致している。

「ならば、いることを前提に考えておいたほうがよいでしょうな。さて……この地形を見てどう思われますかな、お嬢様？」

「火で燻す」

「と、申しますと？」

一言で黙ってしまったタバサを、ユルバンが促す。

「まず風竜で上空から＜遠見＞。洞穴近辺に見張りがいないかどうか確かめた後、いなければ入り口に戻ってそこの見張りを倒す。その後、入り口で火を焚いて煙で燻せば、コボルドは洞穴側に逃げる」

「ふむ、なるほど」

納得したユルバンの横で、絵図面を睨んでいた太公望が付け加える。

「火で燻すという案は悪くない……が、敵が両方に分散する可能性がありますのう。ユルバン殿、入り口付近は、確か森になっていましたな？　そこの木を２０本ほど切り倒して、その一部で入り口を塞いだ上で燃やしてもよろしいですか？　延焼はしっかり防ぎますゆえ」

さらっととんでもないことを口走った太公望に、ふたりの視線が集中する。

「……何か問題が？」

「廃坑だから塞ぐのも、山火事さえ起こらなければ燃やすのも構いませぬが」

「そこまでやったら＜精神力＞が持たない」

「ああ、そう言われてみればその通りですのう」

気の抜けたようなその答えに、思わずズッコケたタバサとユルバン。だが、真の衝撃はこれからだった。

「タバサ……お嬢様、わしが木を切り倒して入り口を塞ぎますゆえ、そのあと上に積もった木の葉を＜錬金＞で油に変えてもらえますかのう？　それなら、あとの仕事はわしひとりでもやれますので」

……いや問題はそこじゃない。タバサとユルバンは突っ込んだ。

「……あなたは以前＜火＞の魔法は扱えないと言った」

「いや、単に火をつけるだけなら油の上に松明でも投げればよか

ろ？」

タバサが固まった。

「枯れ木ではなく、生木ではまともに燃えませぬぞ？　よしんば火がうまくついても、山風に煽られて火事になる恐れがあるのではないかと」

「風を操って、うまく燃えるよう調節する。もちろん風向きも同様に」

ユルバンも硬直した。

「あなたには、それができるの？」

確認するタバサに。

「できぬなら、間違ってもそんな提案せんわ！」

叩き付けるように断言した太公望。そして会議の場は静寂に包まれた。

――約1分後。ふたりが再起動したのを見計らって、太公望が言葉を出す。

「とはいえ、さすがのわしでもそこまでが限界。つまり、洞穴側から脱出してくるコボルドを成敗するのは、おふたりに担当してもらうことになる」

その言葉を聞いて、タバサとユルバンのふたりはようやく立ち直

る。そして、穴から出てくるコボルドをタバサが物陰から＜ウィンディ・アイシクル＞で攻撃。ユルバンは基本タバサの警護。討ち漏らした敵を槍で倒す……という役割分担を決めたところで作戦は纏まった。

○●○●○●○●

――翌昼。

風竜に跨って村を出発した3人は、当初の予定通り上空から洞穴側の偵察を行い、その出口近辺にコボルドがいないことを確認すると、中腹の入り口に注目した。

「では打ち合わせ通り、わしが木を切り倒して入り口を塞いだら、お嬢様は＜フライ＞で降りてきて木の葉を油に＜錬金＞。その後風竜に戻る。ユルバンどのは上空で待機。お嬢様が合流したら、ふたりは洞穴の前へ移動……以上よろしいか？」

「了解」「承知した」

ふたりの返事を確認した太公望は、視線を廃坑入り口へ向ける。

「見張りは2体……か。ではひとつ、わしの実力をお見せしよう」

ニヤリと笑った太公望は、そう言って懐に手を入れた。

「この『打神鞭』も活躍を望んでおる！！」

そして左手に『打神鞭』を、右手にまだ火のついていない松明を

持った太公望は、くわわっ！　と目を見開き、高らかに名乗りを上げる。

「わき上がれ天！　轟けマグマ！！　炎の男爵太公望まいる！！！」

わーっはっはっはっは……と、トチ狂ったような笑い声を上げながら、地上へと降りていった太公望を見送ったタバサとユルバンは、もしかして彼は壊れてしまったのか――？　などという感想を抱いていたのだが……次の瞬間。

――彼らの眼下に、巨大な竜巻が出現した。

「疾――――――ッ！！！」

『打神鞭』を繰り、入口前の木立を吹き飛ばす規模の竜巻を作り出した太公望は、そのまま空中で風を動かしつつ、舞い上げた木を廃坑前に積み上げてゆく。

……ちなみに、見張りのコボルド2体は、最初の竜巻で空の星となった。

そして風が止んだ後……廃坑前の森は『広場』になっており……入り口の前には、綺麗に倒木が積み上がっていた。

「……やりすぎ」

風が収まった直後＜フライ＞で広場へと舞い降りてきたタバサは、同じく広場に立っていた太公望へ一言そう告げると、手早く＜錬金＞で油を作り出してゆく。それを見ていた太公望は、急いで松明に

火を灯す。

「よし、あとはわしに任せておぬしは反対側を頼む」

「本当に、大丈夫？」

あなたは＜火＞を扱うのが苦手だと言っていたのに。そう尋ねるタバサに、太公望は顔中に自信ありげな笑みを浮かべて答える。

「確かに、わしは＜火＞メイジのような真似はできぬ。だがのう……できないのなら、無理をせず、他のやりかたで補えばよいのだ！」

危ないから離れろ。そうタバサへ警告した太公望は、自らも空中へ舞い上がり、積木の山から距離を置く。

「行けっ、ファイヤ――――！！！！！！」

かけ声と共に、松明を放り投げた太公望が『打神鞭』を振るう。すると、放物線を描いて飛んでいった松明の火が突如大きくなり――『杖』の先から巻き起こった風が、炎を纏う。まさしく炎の竜巻と呼んで差し支えないそれは、積木に向けてまっすぐに向かっていき……そこへ燃え移った途端、爆炎となって激しく燃え盛った。

「あれだけの炎が上がっておるのに、火も、煙もまるで生きておるように廃坑へ吸い込まれて……こちらへも、外側へも流れて来ない。いやはや『炎の男爵』と名乗られるだけのことはありますのう。騎士様が信頼するのも道理ですわい」

＜フライ＞で戻ってきたタバサへ向けて――一部とんでもない誤

解を抱えたまま――ユルバンは呆然と呟いた。あれでは、廃坑の中のコボルドどもは、もしやすると全て蒸し焼きになっているのではあるまいか、と。

そんな老戦士ユルバンの呟きを背に、洞穴へ向けて風竜を駆るタバサは、杖をギリギリと固く握り締め……決意を新たにしていた。

――この任務が無事終わったら、太公望から聞くべきことが山ほどある――

……と。

第２３話　軍師、炎と共に舞い降りる事（後書き）

書いているうちに自分が壊れました。一端切ります。そろそろ寝なきゃダメだ！

今回、初の力押し大作戦と相成りました。遂に打神鞭登場です。ある意味太公望らしくもあり、らしくない戦い方でしたが……いかがでしたでしょうか。

ところでオスマンとの会話もそうなんですが、爺さんキャラとのかけあいを太公望にやらせるのは本当に難しい……読んでいてどっちがどっちだかわからなくならないように、注意してはいるのですが……。

追記：わたしはよふかししてかぜをひいただめなしゃかいじんです。よいこのみんな、よるははやくねましょう

２０１１／０４／１３　１３：００　誤字修正、一部加筆
２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正
２０１１／０７／１１　誤字脱字修正

第２４話　老戦士に幕は降り

洞穴側での仕事は、驚くほど簡単な「作業」だった。

煙で燻され、熱にやられ、ただひたすらに新鮮な空気を求めて外へ出てくるコボルドたちを、タバサは＜氷の槍（ジャベリン）＞で――＜氷の矢（ウィンディ・アイシクル）＞を使うまでもなかったので――淡々と屠っていく。ごくごく稀に、一撃では仕留めきれなかったこともあったが……それらは全て、ユルバンの槍の錆となった。

そんな単純作業が３０分ほど続いた頃――洞穴の奥から、くぐもった……それでいて、恨みがましい声が聞こえてきた。

「ゴフ……おの……れ……ゴホッ……おのれ……」

まさか、中に人間がいたというのか。そんなはずはない、ここへ来る前に、村人たちに欠員がないかどうか、旅人などの往来があったかどうかをしっかりと確認してきている。タバサとユルバンは、思わず顔を見合わせ、洞穴の奥から出てくる者に注目した。

それは、奇妙ななりをしたコボルドだった。獣の骨でできた仮面を被り、鳥の羽を集めて造ったのであろう髪飾りをつけ、どす黒く染められた――おそらく獣か何かの血であろう――ローブを身に纏っていた。

「コボルド・シャーマン！？」

タバサは、思わず息を飲んだ。

コボルド・シャーマン。それは、人間やエルフとは異なる独自の『神』を崇める、コボルド族の神官。人語を解し、強力な先住――系統魔法とは異なる、場の精霊と契約することで行使可能となる――魔法を操る存在。彼らは、高い知能を持ち、コボルド族の頂点に立つ者。おそらくは、この廃坑に住み着いた群れを率いる長であろう。

「メイジめ……ゴホッ……けちな魔法を操る毛無しザルめ……よくも我が悲願を……２０年かけて、再びこの地を訪れた……それを……」

――その一言に、ユルバンが反応した。

「２０年前……じゃと!?　まさか……!!」

「あの時も……忌々しい＜土＞メイジに……『宝』を奪おうとした我らの試みを、阻まれた……許さぬぞ、許さぬぞ、人間め……!!」

コボルド・シャーマンが杖を振り上げた、その時。裂帛の如き気迫を込めた叫びと共に、突き出されたユルバン老人の槍が――一撃で神官の急所を貫いた。

それが、この地を混沌に陥れようとしていたコボルドの群れの、最後であった。

○●○●○●○●

「２０年前――わしは、失態を犯したのです」

風竜の背に乗り、村へと戻る道すがら、ユルバンは告白した。

「アンブランの村を、コボルドの群れが襲ったあのとき――わしは、村の門番を務めておったにもかかわらず、それを止めることができませなんだ」

かつて、コボルドの群れがアンブランの村を襲った。その時、ユルバンは門を守る者として、ひとり群れの前に立ちはだかったのだが……多勢に無勢。棍棒の一撃で打ち倒され、結局村への進入を許してしまった。強力な＜土＞の使い手であるロドバルド男爵夫人の活躍により、幸いにも人的被害は出なかったが――村の警護を預かる番人として、それがずっと心の傷となっていたのだ、と。

「しかし、お二方のおかげで、わしは名誉を挽回することが叶いました。あの一件で魔法を使えなくなってしまった男爵夫人に、これでようやく恩を返すことができ申した」

満足げな、それでいて物寂しげなユルバンの言葉に、タバサは疑問を持った。

「魔法が使えなくなった？」

「左様でございます。熾烈を極めたコボルドとの戦いの最中、男爵夫人は手傷を負われ……結果、神の御技である魔法を失われたのです」

タバサは首を捻った。怪我を負ったことが原因で魔法が使えなくなったなどという話は、これまで聞いたことがない。思わず太公望のほうを見遣ると、彼も眉根を寄せ、何かを考え込んでいるようだ

った。

しかし、そんな彼女の疑問が解決する間もなく、風竜はアンブランへ到着し――彼らは、首を長くして帰還を待っていたロドバルド男爵夫人の歓待を受けることとなった。

「ああ、ユルバン。よくぞ無事戻ってきてくれました」

「男爵夫人、ご心配をおかけ申した。コボルドどもの群れは、長も含め殲滅致しました。これからは、再びアンブランの警護を務めさせて頂きたく存じまする」

膝をつき、臣下の礼をとるユルバンに、男爵夫人は優しく微笑んだ。

「ええ。あなたの忠義、本当に嬉しく思います。あなたは、この村の……いいえ、私にとっていちばんの『宝』なのです。これからも、アンブラン……そして私と共に在ってくださいね」

ロドバルド男爵夫人の目は、慈愛に溢れていた。彼女は、心からユルバン老人を大切に思っているのだろう。だが……タバサは、そんな男爵夫人に対して、どこか違和感を覚えた。そう、この村へ到着した際にも感じた、わずかなそれを。

「ささやかではありますが、宴の用意を致しております。騎士様、そして従者殿。どうぞ討伐の疲れを癒やしていってくださいませ」

そう言って深々と頭を下げるロドバルド男爵婦人。なんだろう……わたしは、彼女のどこに疑問を感じているのか。タバサは、未だ答えを出すことができぬまま、宴の場へと案内されていった――。

○●○●○●○●

――宴は、村の居酒屋一軒をまるごと貸し切って行われた。

あちこちで、村人たちが輪を作り、笑い声をあげている。その中には、ユルバン老人の姿もあった。

「そして、わしの槍の一撃が、にっくきコボルド族の長を貫いたのだ！」

「やったじゃないか、ユルバンさん」

「やっぱり、あんたは村いちばんの戦士だ。これからも、アンブランを頼むよ」

善良そうな人々に囲まれた老戦士は、本当に幸せそうであった。どのようにしてコボルドに立ち向かったのか、その一挙一動を、身振り手振りを交えつつ、顔いっぱいに満面の笑みを浮かべて語り続けている。

そんなユルバンの元へ、酒杯を持った太公望が近づいてゆく。

「実際ユルバン殿の活躍は、誠に見事なものでしたぞ。槍もそうですが、村や周辺の山全体を知り尽くしたあなたが居たればこそ、この討伐作戦はうまくいったのです」

「いやいや、従者殿の魔法も素晴らしかったですぞ。その若さで部隊を率いているというのも納得の妙技でござった。わしは……貴

君にも、騎士のお嬢様にも、感謝してもしきれない恩を受け申した」

そう言って立ち上がり、頭を下げようとしたユルバンを、太公望は押し止める。

「お気になさることはない、これが我らの務め。ユルバン殿が村を守ることと、何ら変わらぬことをしたまでのこと」

笑顔でユルバンに酒杯を勧める太公望。しかし……タバサには、その笑みがほんの少しだけ強張っているように感じた。

タバサは、改めて周囲を見回してみる。なんだ、この胸のざわつきは。店の中には、どこもおかしな点はない。ガリアのどこにでもある村の、なんでもない居酒屋。その中で、酒を飲み、料理をつまんで笑い合う人々……。

男爵夫人宅の晩餐と同様、味付けの薄いつまみを食べる手を止め、タバサは考え込んでいた。すると、そこへ件のユルバンが近づいてくる。太公望は、先程の輪の中で談笑を続けているようだ。

「騎士様、このたびは誠にありがとうございました。改めてお礼申し上げる」

「いい。これは任務」

「ふふ、従者殿と同じことを仰るのですな。それにしても……」

ふと、ユルバンは太公望のほうへと視線を向ける。

「あのような従者殿を持たれて、お嬢様はお幸せですな」

それは――何かを言いかけて、タバサは口を噤んだ。確かにわたしは、幸運なのかもしれない。彼――太公望は、どうにも掴み所のない性格をしてはいるが、根は優しく、非常に有能であることは間違いない。

「お気づきになられましたかな？　あの従者殿……今回の作戦を練っている最中、ずっと騎士様を……主人というよりはまるで……そう、血の繋がった実の妹を気遣うが如く振る舞っておられたのを」

いや、わしが言うまでもなくおわかりでしょうな――そういって笑うユルバンの言葉に、タバサは内心の驚きを隠すことができなかった。ふと、日頃の太公望を思い出す。なにかをしようとするときに、さりげなく差し出される手。新しい本を手渡したとき、優しく頭を撫でてくれる、その仕草。

今回の任務にしても、本来であれば太公望が着いてくる必要などなかったのだ。にもかかわらず、危険を顧みず自ら王宮へ乗り込み、観察し、タバサを補佐してくれている。もしも自分に兄がいたら、彼のように助けてくれたのだろうか――。

黙り込んでしまったタバサの側に、村人たちが寄ってくる。どうやらユルバンを迎えにやって来たようだ。

新たな輪の中に加わったユルバンは終始笑顔であった。その人の輪の内には、男爵夫人も混じっていた。貴族であるにも関わらず、身分にこだわらない性格なのだろう彼女は、そんなユルバンを見て優しい笑みを浮かべていた。

そんな男爵夫人に、ユルバンは晴れ渡った秋の空の如き笑顔で語

りかける。

「人生の最後に、ようやく罪滅ぼしができ申した。はて困りましたな、これでもう本当に何もすることがありませぬぞ」

「何を言うのです。あなたには、この村を守るという使命があるではありませんか」

「そうでしたな。私は幸せ者にございます」

――その言葉を最後に、酔ったのであろうユルバン老人は、椅子に深く腰掛けたままこっくりこっくりと舟をこぎ始めると、ゆっくりと瞼を閉じ……だがその眼は、二度と開くことはなく。彼が愛した多くの村人たちに囲まれた中で……まるで眠るように、その人生に幕を降ろした。

○●○●○●○●

「彼は、幸せでした。ご覧になられたでしょう？　あの最後の笑顔を」

――わしが討伐任務などに連れ出さなければ。翌朝、しめやかに執り行われた葬儀の列中、その顔を苦悩に歪め……深く詫びた太公望へ、ロドバルド男爵夫人は慈愛に満ちた笑顔で答えた。

「この２０年間、ユルバンのあのような顔を、私はついぞ見たことがありませんでした。私ではどうしても為し得なかったことを、あなたはしてくれたのです」

すると、その言葉がまるで合図であったかのように……村人たちが、男爵夫人の周りへと静かに集まってくる。そして、彼らの瞳が――一斉に太公望と、タバサを見つめた。その目に浮かぶ表情を見て――タバサは、背筋に冷たいものが走るのを感じた。

――彼らの顔には、男爵婦人と全く同じ笑顔が、浮かんでいたのだ。

「２０年前のことです。このアンブランの村は、コボルドの群れに襲われました。そして……全滅したのです。ロドバルド男爵夫人と、ユルバンのふたりを除いて」

そしてロドバルド男爵夫人は語りはじめた。この村の真実を。

かつて村がコボルドに襲われたとき、門番を務めていたユルバンが棍棒による一撃を受けて昏倒してしまったこと。その後、村人たちはひとり残らず皆殺しにされてしまったこと。最後には、ロドバルド男爵夫人の魔法によってコボルドは追い払われたものの……夫人もまた、深く傷ついてしまったことを。

「気絶していたことが幸いし、ユルバンは一命を取り留めました。しかし……あることに婦人は気がついたのです。目覚めた後に、ユルバンが村の惨状を知ったら。そして、唯一の生き残りである男爵夫人までもが死んでしまったら、彼はいったいどうするであろうか……と」

――責任感の強い彼のこと、おそらく自ら死を選ぶであろう。

「そう考えた夫人は、傷をおして魔法をかけたのです。この村に伝わる宝『アンブランの星』と呼ばれた、土の＜力＞の結晶を用い

て。身内のいない彼女にとって、ユルバンはただの家臣などではなく、家族も同然でしたから」

ですから……と『彼女』は続ける。ロドバルド男爵夫人は、優秀な〈土〉メイジでした。彼女は、その命が尽きるまで、ただひたすらに『人形』を作り続けたのです。ある程度の自由意志を持ち、半永久的に動き続ける魔法人形『ガーゴイル』を――。

「そうです。私も含め、この村の者は――すべて『ガーゴイル』なのです」

タバサと太公望は、改めて周囲を見渡した。そこは、どこにでもある、ありふれたガリアの山村。だが……それは見た目だけだったのだ。

タバサは、ようやく理解した。今まで感じていた違和感の正体。

脅威に晒されているにも関わらず、日常と変わらぬほがらかな様子の村人たち。怪我で魔法を使えなくなった男爵夫人。そして奇妙に薄い味付けの料理。そう、全ての食事は、ユルバンを基準に作られていたのだ。何故ならば、この村では唯一、彼だけしか食べ物を必要としなかったから――。

風竜の背に乗り、タバサと太公望は空へと舞い上がった。眼下に広がるのは、自分たちが救った村。そこには、思い思いに闊歩する村人たちの姿が見えた。

別れ際に、男爵夫人は感謝の言葉と共に、何かのお役に立ててください、と、2体の魔法人形――血を吸わせることで、その姿を完璧に写し取ることのできる、村人たちを造ったそれと同じもの――

を主従に手渡すと、こう告げた。

我々は、見た目は少しずつ老いていき……やがて土に還ります。それまで、ユルバンの墓であるこの村を守り、共に在り続けます。だから、このことは決して口外しないでください……と。タバサと太公望は、秘密を守ることを固く約束した。

遠ざかる村を見つめながら、タバサはぽつりと呟いた。

「わたしには、わからない。ユルバンが、本当に幸せだったのかどうか」

ユルバンのためにだけに存在した村。その全てが見せかけだけの偽物。そう独白した声に、太公望が小さく答えた。

「わしにも……わからぬ。だが……あの男爵夫人と村人たちの魂魄は、確かにあの場所に存在していた。それだけは……間違いない」

「魂魄……？」

「生きとし生ける者、全てには『魂』が宿っておる。あそこにあったのは、人形だった。だが、そこに宿る魂だけは……本物であったよ」

――ガーゴイルにも、魂が宿るというのか。物言わぬ、ただの人形にも？

タバサと太公望の頬を、風が嬲る。その風のぶんだけ、アンブランの村が遠ざかる。ひとりの老戦士を守るためだけに造られた『箱庭』が遠ざかってゆく。

ふたりは、押し黙ったまま……王都リュティスへと向け風竜を駆った。

○●○●○●○●

――その夜。プチ・トロワの謁見室で従姉妹姫から任務完了の報告を受けたイザベラは、まっすぐに自分の部屋へと戻っていた。

彼女の頭の中には、とある思いが渦巻いていた。あの従姉妹が＜サモン・サーヴァント＞を失敗した。それについては、調査の上改めて父上に報告しよう。だが、その前に、すべきことがある。

――あの娘ができなかった＜サモン・サーヴァント＞で、わたしが素晴らしい＜使い魔＞を呼ぶことができたなら、召使いたちも……そして父上も、わたしを認めてくださるに違いない。いや、ネズミやフクロウのような……普通の＜使い魔＞でも構わないのだ。少なくとも『失敗』にはならないのだから。

だが、イザベラはそれを人前でやるほど無謀ではなかった。万が一、自分が失敗するところを誰かに見られたら……それが己の立場に致命傷を与えかねないと、充分わかっていたから。

だから、たったひとりで……自分の部屋に籠もり、周囲を入念に探って誰もいないことを確かめると……愛用の杖を取り出した。

そして、ゆっくりと力ある言葉を紡ぎ出す。

「我が名はイザベラ・ド・ガリア。５つの＜力＞を司るペンタゴ

ン。我の運命（さだめ）に従いし＜使い魔＞を召喚せよ」

呪文は完成した。魔法が成功したのならば、そこには白く光る円鏡のような召喚ゲートが開くはずであった。しかし……彼女の前に現れたのは、まるで空間を切り取ったような『四角い窓』。

「……よぉやく、繋がった」

窓の奥から、声がした。と、同時に細長く……青い手がイザベラに向かって伸びる。悲鳴を上げる間もなくその腕に掴まれるイザベラ。

――そして。イザベラ・ド・ガリアは、ハルケギニアから消えた。

第２４話　老戦士に幕は降り（後書き）

だから寝ようよ自分。
つ、つい筆が進んで……書ききってしまいました。ノリがいいときに止めてしまうと、しばらく先に進めなくなってしまうものですから……と、己に言い訳。

さて、自分としては珍しく（と、言いますか初めての）シリアス展開となりました。そしてここから再び歴史が動きます。果たしてイザベラはどこへ行ってしまったのか？　その謎は、もうしばらく後に判明致します……ということで。

２０１１／０４／１５　誤字・脱字、本文一部加筆修正
２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第２５話　閉じられた輪、その中で（前書き）

！ＣＡＵＴＩＯＮ！

今回『封神演義』における最大級の謎にして盛大なるネタバレを含んでおります。封神演義を知らない、または興味はあるけどまだ読んでいないから、いつか読みたい……と思っていらっしゃる方は、上半分ほどは見ないことをオススメ致します……。

……と、申しますか、このお話自体がその封神演義のネタバレ前提に組み立てられておりますので、今更だとは思うのですが……それでも心配だというかたは、このページ自体をご覧にならないほうがよいかもしれません。タバサと太公望の物語については、ここを見ずとも一応繋がる構成にはなっています。以上、封神演義のネタバレ警告でした。

第25話　閉じられた輪、その中で

――時は、1ヶ月ほど前まで遡る。

ハルケギニアの暦で語るならば、フェオの月――フレイヤの週、ユルの曜日。そう、トリステイン魔法学院において『使い魔召喚の儀式』が執り行われた、あの日。

ハルケギニアとは異なる世界、蒼き星、地球――そこに在る国『周』。

大陸全土を巻き込んだ大戦が集結し、徐々に平和を取り戻しつつあったその国の外れにある荒野を、ひとりの若者が大陸を渡る風のように、ただ……歩いていた。

青年の名は、伏義（ふっき）。

彼には、かつて強大な『敵』がいた。

滅びた『自分の世界』を再現すべく、星の歴史を影から操り……思い通りの世界に進化しなければその全てを破壊。また同じ『歴史』を1から作り直すという「作業」を、数万年の間――まるで子供の砂山遊びの如く繰り返してきた存在『歴史の道標』。

その存在にして最大の『敵』である『歴史の道標』を、星の始まりから監視し……そして打倒せんと、数千年に渡って秘密裏に進められてきた壮大なプロジェクト『封神計画』の立案者にして実行指揮者であった彼……伏義は、戦いに勝利した後……人々の前から姿を消した。

――いちばん面倒な戦後処理を全部押しつけて逃げたとか言ってはいけない。

……と、まあそんなわけで彼はあちこち気ままにブラブラしていたわけだが。

「御主人んーッ！　どこッスかー！！」「お師匠さまーっ！！」

当然のことながら、そんな彼を捜し出そうとする者達がいるわけで。

本人からすれば、ちゃんと自分がいなくても世界が廻るように後進を育ててきたのだから、もう一線から退いてぐうたらしていてもいいはず。そう言いたいところだろう。だが、伏義はだからといってそうホイホイと取り替えがきくような人材などではないのだ。

――何故なら、彼は地球の『始祖』。星の生命を、誕生の時から見守ってきた『最初の人』のひとりなのだから。

追われるから、逃げる。そんな日々を過ごしていた時『事故』は起きた。

トコトコと歩いていた時にふと気がついた、追っ手の存在。その追跡をかわすため、いつものように『空間ゲート』を開いて『自分の空間』に入り込もうとしたその時……空間同士の接続ポイントに、ごくごくわずかな――ヨクト単位レベルの――ズレが生じた。

それは、本当にわずかな……優れた『空間使い』であった伏義に

すら気付かないような「揺らぎ」。だから、ゲートをくぐった時点では、彼は異常に気付けなかった――だが。

最初に違和感を覚えたのは、彼の内にある魂魄を構成するうちの半分。

伏羲の魂魄は、複数に分裂するという特異性を持つ。これは、彼と『歴史の道標』と呼ばれた存在にしかなかった＜能力＞にして、最大の特性。

分裂させた魂魄のどれかがわずかにでも残っていれば、たとえ他の魂魄が消滅したとしても復活できるという、味方にすれば心強く、敵に回すと非常にやっかいな＜力＞である。

伏羲は『封神計画』を実行するにあたり、自分の『始祖』としての＜肉体＞と＜力＞と＜記憶＞を無くすという多大なリスクを背負いながらも、あえてその魂魄を2つに割り、全く異なるふたりの人間――後に仙人となる者――として生まれ変わることで、世界に降り立った。

そのひとりは「太公望」。

伏羲の心の『光』を司り、何も知らず『封神計画』の『表』の実行者となる。

もうひとりは「王天君」。

こちらは伏羲の心の『闇』を司り、太公望と同様……当初は何も知らされぬまま、後に事情の一端を理解し、世界の『裏』から『封神計画』の遂行を手伝うこととなる。

後に、彼らの魂魄は再びひとつに戻り、それと同時に伏羲として

の＜記憶＞と＜力＞を取り戻すのであるが……今回の『異変』に気がついたのは『闇』の部分。優れた『空間使い』として成長した、王天君の記憶であった。

――創った『自分の部屋』に、妙なノイズが発生している。

おそらくは、王天君に……伏義としての＜力＞が戻った状態でなければ気がつかなかったほどの、ほんのわずかな歪み。だが、それを修正しようとした――その時だった。

『……は……＜タバサ＞』

何処からから聞こえてきたその声と共に、突如歪みが大きくなった。

『……召喚せよ』

そして『部屋』の中に、光り輝く円鏡型の『ゲート』が現れる。そう……亜空間の中に、全く別種の『道』が、突然割り込んできたのだ。『空間をねじ曲げるほどの強大な力』同士が、計算もなく強引に交差したのだから、ただですむわけがない。

当然その影響で、大きく揺らぐ『部屋』。空間震と呼んで差し支えないであろうその振動により、伏義の身体がぐらついた。そして、そのせいで『円鏡のゲート』に左手が触れてしまい……猛烈な勢いで、全身を引きずり込まれそうになった。

――このままでは、飲み込まれる！

瞬時にそう判断した伏義は、必死で謎の『ゲート』を解除すべく

空間宝貝を展開しようとした――だが。もがけばもがくほど、引き寄せる＜力＞は強まっていき――そして、引く＜力＞と戻そうとする＜力＞が強大だったが故に――彼の＜身体＞は文字通り引き裂かれた。その＜魂魄＞と共に。

円鏡状のゲートが消えた後。空間震の影響で発生した、どこでもあり、どこでもない場所。ひとつの円のように閉じられた球体状の亜空間。その中に――元は伏羲であった者のひとり――王天君は取り残され……その『半身』である太公望は、いずこかへと消えていた。

――連れ去られた太公望がどうなったのかについては、物語の冒頭にて語られているのでそちらを改めて見ていただくとして……ここから先は、残された王天君がこれまで何をしていたのかについて、語らせてもらうこととする。

○●○●○●○●

「ったく……なんだってんだよ、今のはよぉ」

そう言って立ち上がった王天君は、すぐに己の身体に起きた異変を察知する。

「オイ……フザケんじゃねぇぞ。なんでオレだけがココにいんだよ。あいつぁ……太公望はドコ行った!?」

急いで座標確認用のモニター宝貝を展開する。だが、その表示がおかしい。太公望の行き先はもちろんのこと、自分の現在位置すら把握することができない。最初に開いたゲートへの接続ポイントす

ら見失っている。

ギリッ……と、唇を噛み、王天君は吐き捨てた。

「故障……ってワケじゃあねぇよな、こいつは」

おそらく、さっきの「割り込み」が原因だろう。王天君は、周囲の空間を＜感覚＞で捕らえる。すると……まるで、複雑に絡み合った糸のように、亜空間同士が混在し……彼自身が、その糸と糸の間――そう、閉ざされた輪の中にいることを「理解」した。

「閉じこめられた……だとぉ！？」

ふと、かつて自分が敵地へと送られ「人質」として封印籠の中に監禁――妖怪たちから保護するという名目で――されていた時のことを思い出す。忌々しい記憶。あそこでの経験が、自分の心を壊し……今に繋がっていることを。

いや、待て……王天君は考え直す。あの時とは状況が違う。今のオレになら、時間はかかるだろうが――この空間を紐解いて、外へ出るだけの＜力＞がある。

助けなど期待できない。何せ、王天君は＜仙人界＞でも最高の＜空間使い＞なのだ。唯一、彼の能力をコピーすることができる天才がいるにはいるのだが、その彼をもってしてもオリジナルの王天君を捉えることは叶わなかったのだから。その王天君を閉じこめるほどの＜空間＞に、救助が来ようはずもない。

『半身』である太公望のほうはというと、空間を把握する能力はあっても、開け閉めするような＜力＞は持っていない。それに。

「太公望にゃ間違っても期待できねぇ。あいつぁとりあえずぐうたらできる環境作って、調べるにしてもそれからだ。いや、オレのほうから勝手に迎えにくるだろう……なぁんて考えて、放置しやがる可能性のほうが高ぇんじゃねぇか？」

――『半身』だけあって、相方の性格をよく掴んでいる王天君であった。

「ったくよぉ……面倒なコトになりやがったぜ」

イライラと爪を噛みつつ、モニターで周囲の空間座標を計算。そして、そもそもの「原因」となった、割り込みの追跡（トレース）を開始する。解明のヒントとなるのは、あの時聞こえてきた『声』だろう。

それからわずか数日後。王天君は、問題の『道』を発見した……しかし。

「一方通行のゲートだとぉ！？」

そう。ようやく見つけた手がかりは、片側の閉じられた特殊空間ゲートだったのだ。苛立ちのあまり、王天君は被っていた帽子を乱暴に手に取ると、バンッと床――亜空間とはいえ、いちおう＜底＞は存在するのだ――へと叩き付ける。しかし、文句は言えない。何せ、彼自身もそういった『一方通行の空間』を武器のひとつとして扱う者であったから。

「クソッ。こうなったら、この空間座標の近辺だけ集中的に監視して……『窓』が開いたら、こっちで無理矢理繋げるしかねぇか」

彼は辛抱強く、その時を待った。そして……それから数週間後。ようやく例の『声が作り出す道』に『近しい』ものを補足したのである。

『我が名はイザベラ・ド・ガリア。５つの＜力＞を司るペンタゴン。我の運命（さだめ）に従いし＜使い魔＞を召喚せよ』

王天君は、いずこかへ繋がろうとしていたその『道』に干渉し、ねじ曲げ……そして、自分のいる亜空間へと、綿密な操作でもって接続した――再びあのような『事故』が発生しないように。

道同士を繋いだ際に、何やら身体に『入り込んでくる』ような違和感を覚えたが、今すぐどうこうなるような問題ではなさそうなので、とりあえずは後回しにする。

「……よぉやく、繋がった」

彼が繋いだ『窓』の外。そこは、豪奢といって差し支えない部屋だった。そして、目の前には、青い髪の――いいトコのお嬢さん風な娘が立っている。

この女は太公望を連れ去った犯人ではないだろう。だが、この『道』について詳しく聞き出す必要がある。それに……調査なしで見知らぬ場所へと自ら出向くのは、彼の性格に合わない。騒がれるのも面倒だ。ならば――！

繋げた『道』を起点に、新たな『自分の部屋』を瞬時に作り出した王天君は、これまで閉じこめられていた亜空間の位置だけ記録した後『部屋』へ移動する。そして『窓』から腕を伸ばし、少女の腕を掴み取ると――強引に、部屋へと『ご招待』した。

――そして、時は現在へと繋がる。

○●○●○●○●

――イザベラは、暗がりの中で目を覚ました。

カッチ……コッチ……と、何処かから規則的に刻まれる、不思議な音が聞こえてくる。いったいなんの音だろう……そう思って身体を起こそうとした、その時。イザベラは、自分が見たことのないビロードの長椅子に、その身を横たえていることに気付く。

ここは、わたしの部屋じゃない。なら、いったいどこ!?

自分の状況を把握する間もなく、どこか……おそらく、今自分が横たわっている長椅子の正面方向から、声がした。

「お目覚めかい？　眠り姫さんよぉ」

このわたしに、そんな口をきくだなんて……なんて無礼な！　いったい何者だ。急いで起き上がり、そう叫ぼうとしたイザベラだったが……己の目の内に飛び込んできた相手の姿に、絶句した。

古ぼけた……しかし、脚部や天板側面に施された彫刻といい、使われている材質といい、まさしく高級といって差し支えないテーブルの向かい側。そこには、今自分が座っている長椅子と同じようなものが置かれている。声の主は……そこに腰掛けていた。

不気味なまでに青白い肌。全身をぴったりと張り付くように覆う、

黒い服。身体のあちこちに、銀製と思われる装飾品を身につけた……少年といってもいい年齢に見える男。しかし……イザベラが真っ先に注目したのは、それらではなかった。

彼女の瞳に映っていたのは……正面にいる少年のもつ、細く長い耳。

「え……エル……フ……」

――エルフ。それは、ハルケギニアの歴史において、長きに渡り人間の『天敵』とされてきた存在。強力な『先住』の魔法を操り、戦士としても非常に優秀。人間のメイジが彼らを倒すには、１０倍近い人数差が必要とされるほどの、絶対的強者。ハルケギニアに住まう人間にとっては『恐怖の象徴』といって差し支えない存在である。

イザベラは、そこでようやく思い出した。自分の身に何が起きたのかを。

従姉妹姫に対抗し、人知れずこっそりと唱えた＜サモン・サーヴァント＞。だが、それは『失敗』し……突如現れた『窓』の奥から伸びてきた腕に掴まれ――その奥に、引きずり込まれてしまったのだ。

あの手だ。おそらく、自分は……召喚に失敗し、人間どころかエルフを呼び出そうとしてしまったのだ。だが、逆にこうして囚われてしまった。

「オメーに、聞きてぇコトがあんだけどよぉ？」

そう問うた『エルフ』の声は、イザベラの耳には届いていなかった。

「な……なんで……どうして……」

両腕で身体を抱え込むようにして、ガタガタと震えるイザベラ。その瞳からは、大粒の涙がボロボロとこぼれ落ちる。わたしは＜サモン・サーヴァント＞で『呼ぶ』ことすらできないのか。それどころか、逆にエルフに捕らえられるなど……王族として、いや、メイジとしてあってはならないことであろう。

「泣くんじゃねぇよ！　話があるって言ってんだろ！？」

忌々しげにそう告げる少年に、イザベラは答えられない。ただただ、震え、涙を零すばかりであった。

――どうしたもんかねぇ……これは。

ったく、太公望……あのイイコちゃんなら、こんな小娘ひとり簡単に落ち着かせることができるだろうに。まったく……イライラさせられるぜ。

舌打ちした王天君の耳に、目の前の少女の呟き……いや、小さな声ではあったが、まさしく魂の叫びといってもいいだろうそれが飛び込んできたのは――歴史の必然だったのだろうか。

「あたしばっかり……どうして……こんな目にあうの。なんで、あの子だけが……あたしが代わりに……あの子ばっかり……こんなの、酷すぎるわよォ……」

彼――王天君にも覚えがあった、それは。『闇』に棲む者にとっ

て眩しすぎる者。『光』という存在に対する羨望……そして、強い嫉妬の念。

なるほど。オレが、この小娘のところへ比較的簡単に『接続』できたのは、それなりの理由があったってことかよ。

――引っ張り込まれたあのアホについては、後でいいか。この『世界』にいるのは間違いねぇ。何故なら、オレの魂がそう言っているからだ。とりあえずは……今、目の前にいるコイツで遊んでみよう。結構楽しめるかもしれねぇ。

こうして。蒼き姫と『始祖』の心の闇を写した鏡は、運命の出会いを果たした。

第２５話　閉じられた輪、その中で（後書き）

ジョカの漢字、あったけど第三水準って何。通常表示できねぇ～！
スープーと武吉くんがちょっぴりセリフだけ出演。

まめちしき。ヨクト単位。
１０の－２４乗（０．０００００００００００００００００００１）
ナノよりも小さい。とにかく超小さいとだけ思っていただければ。

さて。ついに王天君が登場です。ある意味『裏』同士のタッグがこれからどう動いていくのか……乞うご期待！　と、言えるように頑張りたいと思います。

追伸：ふたりを「伏義の生まれ変わり」というような表記をしていますが、実際にはちょっと違いますので念のため……（説明するには複雑なので、わかりやすい形にさせていただきました）

追記。倍と乗を書き間違える恥ずかしいミスを修正。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正

第２６話　軍師、異界の始祖に誓う事

「わしは夕飯食って風呂入ったらすぐに寝るぞ」

「同じく」

ハルケギニアの常識では考えられないほどの強行軍で、トリステイン魔法学院へと戻ってきたタバサと太公望のふたりは、一旦部屋に戻って上着だけを替えると、その足でアルヴィーズの食堂へと向かった。

『約束』を守るためとはいえ、さすがに無理をしすぎた。今日のところはもう何も考えず、ゆっくりしたい……そんな思いでいっぱいだった太公望の期待を最初に裏切ったのは、食堂の入り口に立った瞬間に飛んできた、少女の金切り声だった。

「あ、あ、あんた、い、い、今までどこ行ってたのよーっ！！」

――それは、約束の相手。ルイズによる魂の叫び声。

「まあ落ち着け、ルイズ」

「お、お、落ち着けるわけ、な、な、ないでしょう！？」

あたしがどれだけ気をもんでいたか――そう口にしようとしたルイズを制し、太公望は、喉の奥から心底疲れ切った声を絞り出す。

「例の件であろう？　覚えておったから、こうして急いで帰ってきたのだ。約束は守る、だから今日のところは静かに休ませてはく

れんかのう」

そう言われてよくよく太公望の姿を見たルイズは、彼が羽織っているローブと一体化したようなマント以外が微妙に薄汚れており、さらにその顔には深い疲れの色が刻まれていることに気がついた。そして、それは傍らに立つタバサにも当てはまっている。

タバサに関係することで、何か急な用事でもあったのか。にも関わらず、ちゃんと約束を覚えていてくれた。そんな相手に、これ以上何かを言うのは、貴族の子女としてあるまじき態度だろう。

一言謝罪の言葉を述べたルイズは、その後――周囲の注目を集めてしまったことにようやく気がつくと、顔を真っ赤にしたまま着席する。

その後、早々に席についたタバサの元には、キュルケが近寄ってきた。

「あなた、その格好はどうしたのよ？　ずいぶん疲れてるみたいだから、今日のところは何も聞かないけど……たくさん食べて、早くお休みなさいな」

そう言って、自分の料理の一部――タバサの大好物であるハシバミ草のサラダと、鳥のあぶり焼きを、青髪の少女の前へと押しやる。

「ありがとう」

「いいのよ。そのかわり、落ち着いたらいろいろ聞かせてもらうから」

そう言ってウィンクしたキュルケの心遣いに、タバサは心から感謝した。

――そして夕食が済み。食堂から出ようとしたふたり……正確には、太公望に声をかけてきた者がいた。コルベールであった。

「ミスタ・タイコーボー。お疲れのところ大変に申し訳ないですが、取り急ぎお話をしなければならないことがありまして……その、学院長を交えて」

「それは……何名で、かのう？」

太公望はまずコルベールを見、次いでタバサに目をやった後……再び視線を目の前に立つ男に戻す。

「ミス・タバサには申し訳ないのですが、３人で」

「……わかった。タバサ、先に戻っていてくれ。もしやすると遅くなるやもしれぬから、そのときは窓だけ開けておいてくれればよい」

コクリと頷いたタバサは、側にいたキュルケと共に寮塔へ続く廊下へと歩き出す。その後ろ姿を見送った太公望は、ふっとため息をつくと、コルベールに向き直った。

「では、参りますかのう……学院長室へ」

くだらない用事だったら、ただじゃおかんぞあの狸ジジイ。と、いう内心の声を必死で抑えながら。

――その後、学院長室で聞いた話は……確かに急いで耳にいれておくべき内容であった。ただし、善悪に関係するようなものではなく……明日の『約束』に関連した、非常に有益な情報だったからだ。

一時間ほどそれらについて学院長たちと話し合った太公望は、ようやく念願の入浴を果たすべく、まずはタバサの部屋に戻ろうとした。だが、今度は扉の前で才人が待ちかまえていた。

「さっき帰ってきたって聞いてさ！　なあなあ、例の武器の件だけど……」

興奮してまくし立てる才人をとりあえず落ち着かせると、さっき食堂でルイズにしたのとほぼ同様の説明を行い、休み明けの昼に改めて聞かせてもらうから今日はもう……と、自室へ帰らせた。

それから３０分後。これでようやく休める――そう呟きながら、軽い入浴を済ませて部屋に戻ってきた途端、窓から飛び込んできた茶色い羽根の伝書フクロウ――おそらくフーケが寄越したものであろうそれを見た太公望は、この世界に来てはじめて、本気でハルケギニアの『始祖』とやらを呪い、そして誓った。

もしも顔を合わせることがあったなら……『打神鞭』の最大出力でもって、次元の彼方へ吹き飛ばしてくれるわ――と。

○●○●○●○●

――明けた翌日、虚無の曜日。

学院から馬で１５分ほどの距離にある、周囲を背の高い木立に囲

まれた平原。その中央に、彼らは集っていた。

この場にいるのは、太公望をはじめとしたタバサ、ルイズ、才人、ギーシュ、キュルケという、例の模擬戦騒ぎの一件で、ルイズの『約束』を知る者たち。そして、コルベールと学院長のオスマン氏。

オスマン氏が＜錬金＞で作った簡素な教壇風の台座を前に、太公望とオスマン学院長、そしてコルベールが立ち――その向かい側、1メイルほど距離をあけた位置に、これまた魔法によって作られたベンチが並んでいる。そこに生徒たちが座る姿は、端から見ても、特別な課外授業といって差し支えないものであった。

教壇から『生徒』たちを見渡した太公望は、教鞭のように『打神鞭』を――先端に『太極図』がついていなければ、まさに教鞭そのものな形をしているのだが――振るいながら、説明を開始した。

「さて、ここに集まった者たちは、わしがこれからルイズが魔法を＜爆発＞させてしまう件について、独自の技術的観点から調査を行うことを知っておる。それを前提として話を進めていくわけだが、その前に……」

太公望は、横に立つコルベールに弁を向ける。

「昨日、こちらのコルベール殿から、非常に興味深い話を伺ったのだ。これは、ルイズの魔法だけでなく、それ以外の者たちにとっても非常に有益、かつ画期的なものであったため、学院長殿の立ち会いの下、特別に公開してもらいたいと思い、同席を依頼した」

そう言って演壇を降りた太公望。学院長がわざわざ立ち会うようなレベルの話を、他の生徒を差し置いて優先的に聞ける。期待に胸

を膨らませるメイジ達の前に、コルベールが立った。

「ミス・ヴァリエールとミス・タバサ、そしてサイト君については、すでに聞いている内容となってしまいますが、まずはそこから話をしないと、何故この発見に繋がったのかがわかりませんので、簡単にですが説明しますぞ」

そう前置きしたコルベールは、以前太公望が行ったように＜サモン・サーヴァント＞が、いかにとんでもない魔法であるのかについて説明した――もちろん、異世界云々の話は除いて、だが。

コモン（汎用）とされている魔法が、実は『無意識に空間を接続する』という、とてつもない＜精神力容量＞と、広大な空間を把握するための『感覚』を必要とする技術であったこと。その話を聞いたコルベールが、日頃簡単に扱っている＜コモン・マジック＞というものについて改めて着目したこと。そして――。

「私は、ついにその記述を見つけたのです。３０００年前の魔法書から。そして知ったのです。なんと……当時、コモン・マジックは……＜念力＞＜サモン・サーヴァント＞＜コントラクト・サーヴァント＞の３つしか存在しなかったことを！！」

――一瞬の間を置いた後。

「えええええぇぇぇぇえええええ――――っ！！！」

平原に、驚愕の大合唱が響き渡った。

「ど、どういうことなんですかっ」「＜ライト＞とか、後からできた魔法なんですか！？」「昔は手で＜ロック＞していたんですの

!?　ヴァリエールみたいに」「一言余計なのよあんたはっ！」

はいはいはい！　と、手を挙げながら、指される前に我先にと質問する――一部例外はあったものの――生徒達を前に、してやったりといわんばかりの笑みを浮かべたコルベール。太公望とオスマンも実に満足げである。

「皆さんの疑問は当然だと思いますぞ。私も、そう考えました。そこで、次は今現在コモンとされている魔法が、かつて存在したのかどうかを確認するため、改めてその魔法書を紐解いてみたのです」

ゴホン。と、咳払いをしてコルベールは先を続ける。

「結論から言うと、今あるコモン・マジックは、全て＜系統魔法＞の初歩の初歩の初歩として扱われていました。たとえば＜ライト＞。これは＜火＞の系統魔法のページに記されており……＜ロック＞＜アンロック＞は＜土＞に属する魔法というように」

驚きのあまり声も出ない生徒を尻目に、コルベールの演説は続く。

曰く『流れ』を探知・分析する＜ディテクト・マジック＞は＜水＞に属すること。

曰く＜固定化＞の魔法と同様、土系統の『スクウェア』メイジが強固に施した＜ロック＞を＜アンロック＞で解除するのが、別系統のメイジにとっては非常に難しいことを例に挙げ、また、さらに古い魔法書でも同様の扱いがなされていたことから、これはほぼ間違いのない事実。歴史的な大発見である……と。なお、

「＜風＞の初歩の初歩とされる魔法は存在しないのですか

？」

と、いうタバサの質問には、

「＜ウインド＞がそれに相当するらしい……のですが、書物によってはそれが＜レビテーション＞だったりと実に曖昧でして。確定には至りませんでした」

と、答えた。

「と、いうことでしてな。昨日、これをミスタ・タイコーボーにお話ししたところ、ミス・ヴァリエールが練習する魔法を、まずはコモンの基礎である＜念力＞に絞るべき、という意見で一致しました。また、この発表は学院長立ち会いのもとで行うべきとのことで、今日このような機会を持たせていただいたわけです」

発表内容を締め、演壇から降りたコルベールに、集まった生徒達は惜しみない拍手を送る。照れたように頭を掻くコルベールに、オスマン氏が笑みを浮かべながら右手を差し出した。その意味に気がついたコルベールは、嬉しさを隠しきれないように、その手を強く握り返した。

場が落ち着いたところで、再び太公望が教壇の前に立つ。

「では、基本的な方針が決まったところで、いよいよ実験に入りたいと思う。一旦全員こちらへ来てくれぬか？　……オスマン殿」

全員が立ち上がって教壇の側へ近づいてきたのを確認すると、太公望はオスマン氏へ向き直って頷く。すると、先程まであったベンチが全て消え去った。

「オスマン殿に立ち会いをお願いしているのは、実はもうひとつ理由があるのだ。これからわしがしようとしていることは、ハルケギニアでは『異端』すれすれである可能性があると聞いてしまってのう」

『異端』という言葉を聞いて、タバサと才人を除く全員がビクリと身体を震わせる。

ハルケギニアに住む者たちの間では、かつてこの世界に＜魔法＞をもたらしたとされる『始祖』ブリミルが『唯一神』として広く崇められ、人々の信仰を集めている。

実質無宗教に近い日本で育った才人にはいまいち理解できないことなのであるが、この『ブリミル教』と呼ばれる『一神教』の世界ハルケギニアにおいて、その教えから外れる行為、つまり『異端』認定されるのは、重大な『罪』であるという意識が根強いのだ。

それに関しては、一神教の概念どころか神話そのものからやって来た太公望にとっても同様なのであるが、ハルケギニアの歴史を学ぶ過程で、

「そういう考え方があるのか」

というレベルで理解していた彼は、魔法は必ず『杖』と『魔法語』を組み合わせて用いるものであり、それ以外は『異端』とされ、最悪の場合迫害の対象となってしまうことを知り得た結果、何らかの＜力＞を行使する際には必ず『打神鞭』を取り出していたし、また、魔法らしく見せかけるためわざわざ『ルーン』を覚えることまでしてのけている。

タバサについては、幼い頃から過酷な運命を強いられ続けてきたせいで、ブリミル教に対する信仰心が非常に薄く、神の存在自体についても否定的だ。もっとも、聡い彼女は、それを表立って表明するようなことはないが。

「そういうわけで、学院長の『異端ではない』という承認があれば、理屈をつけて通せる。うっかり口を滑らせた者については……」

――どうなるかわかるよな？　そう言いたげな顔で全員を見る太公望。

「有用性については、学院長としてこのわしが保障する。わしらは昨日のうちに実際に見せてもらっているのじゃが、これを利用すれば、君たちのメイジとしてのランクアップがほぼ間違いなく望める。それだけの価値があるものと判断した」

最初の言葉で及び腰になりかけていた者も、そうでない者も――オスマンのその言葉で表情を変えた。メイジとしてランクアップができる……つまり『ドット』なら『ライン』に、『トライアングル』なら『スクウェア』への近道が示されるということだ。

「才人よ、さっきから自分には関係ないといったような顔をしておるが、これはおぬしにとっても役に立つことだからな。しっかり見て、覚えておくのだ」

「え、俺は＜魔法＞使えないのに……って、もしかして！」

期待に顔を輝かせた才人であったが、

「残念ながらおぬしが『魔法を使える』ようになるわけではない。その逆で『使えない』からこそ、見て知っておく必要があるのだよ」

その言葉で、奈落へ叩き落とされかけた。だが……それでも見て知っておけとは、いったいどういうことだろう？　持ち前の好奇心のおかげで、才人はすぐに復活を果たす。

「それでは、始めるとしようかのう」

そう言って太公望は、懐からコインが詰まった革袋を取り出す。その中から1枚の銅貨をつまみ取ると、台座の中央に置いた。

「それ、わしの銅貨なんじゃからな。あんまり消費せんでくれよ」

哀願するオスマンに。

「ダァホ。学院長ともあろうものがケチくさいこと抜かすでないわ！　それに、その言葉はわしではなくルイズに言ってくれ」

やっぱり失敗前提にされてるー！　ウガー！！　と、興奮するルイズをなだめつつ、太公望は全員に台座から数メイル横へ移動するように指示すると、自分はそこから見て９０度――台座を時計の中心と見立て、その針の位置でいう6時の位置にルイズたち、3時の場所に太公望が行ったと考えていただきたい――の場所へ移動すると、半跏趺坐（はんかふざ）の形で地面に座り込む。

そして『打神鞭』を構えたまま、声を出す。

「ギーシュ。まずはおぬしから始めるぞ。実験については聞いておるな？」

「ああ、聞いているよ。だから今週はできるだけ＜精神力＞を温存しておいたのさ」

「気が利くのう！　実に助かる。よいか、これは必ずおぬしの役に立つものとなる。よって、しっかりと『感覚』を掴むのだぞ！」

ギーシュの細やかな気遣いに、こやつは思わぬ拾いものだったかのう？　と、内心の評価を上げた太公望は、全員に聞こえるように注意点を述べる。

「さて……今からわしが行うことによって、おぬしたち全員が一時的に、これまで『見えなかった』ものが『視える』ようになる。だが、これはわし自身も相当な集中力を必要とする＜技術＞なので、静かに見守ってもらいたい。うっかり声を出しそうな者は、前もって手なりなんなりで口を塞いでおいてほしい……特に才人に背負われた剣」

「へへ……わかったぜ」

カチカチと鍔を鳴らすデルフリンガー。そして全員がそれぞれ納得したと見て取ると、太公望は精神を集中する。

と……太公望を中心に、ぴん――と、空気が張り詰める。そして『それ』は、輪のように広がっていった。

「ではギーシュよ……一歩前へ出るのだ」

言われた通り、ギーシュは黙って台座の方向へ一歩進んだ。

「わしが『始め』と言ったら＜念力＞で、台座の上の銅貨を1メイルほど上まで持ち上げるのだ。キーワードは自由だ。ただし、できるだけゆっくりと唱えてもらいたい」

黙ったまま頷くギーシュを見て、同じように頷き返した太公望。そして。

「始め！」

その言葉と共に、ギーシュは＜念力＞をできるだけゆっくりと紡ぎ始める。すると……彼の周囲に、うっすらと……光の靄（もや）のようなものが立ち上がる。それを驚きの目で見守る観客たち。

その靄は薔薇の『杖』の先に集まり、まるで一本の糸のようにすっ……と、銅貨目指して伸びてゆく。そしてそれは＜魔法＞の完成と同時に銅貨に到達すると、その周囲をまるで繭のように包み込んだ。

ふわりと浮かぶ銅貨。だが――傍目には、それはまるで『杖』の先から出た一本の＜糸＞によって、支えられているようであった。

「よし。そのまま、今度は５０サントほどゆっくりと下へ降ろしてみてくれぬか」

言われた通りにギーシュは＜念力＞を続ける。と、＜糸＞が繋がったそのままに、銅貨が降りてゆく。上下の動きを何度か繰り返した後、太公望はギーシュに銅貨を台座へ戻し、魔法を止めるように伝える。

ギーシュが＜念力＞を使い終えると同時に＜糸＞は霧散するよう

に消えた。

「うむ、では次に……」

太公望がさらなる指示を出そうとした、だがその前に。

「ちょっと何なの今の！」「なにかがぼくの身体から伸びて」「おおー、魔法ってあんなふうに＜力＞が出てるんだ」「おでれーた！」「あたしも！　あたしにもやらせて！！」「わたしも興味ある」「だーっ！　だから黙ってろと言うとっただろうがっ！！」

――大声を上げながら駆け寄ってきた彼らの為に、作業は中断を余儀なくされた。

「ようは、おぬしらの＜力＞を『感覚で捕らえる』ことができるような＜フィールド＞を周囲に作り出していたのだ。目に見えるように思えたであろうが、実際にはそうではなく『感覚』がそのように受け止めておっただけのこと」

また張り直さなければならん、まったく面倒な……そう、グチグチと文句を垂れながら太公望は説明する。どういう理屈であああなるんだ、との問いには、これは自分たちの国の特殊技術の結晶で、それらを基礎から全て学ばねば実現できない。そもそもすぐに教えて理解できるような内容では絶対にない！　と答えていた。

「まあよい。タバサとキュルケについても、ルイズと比較するために同じことを試してみよう。ただし、今度同じことをやらかしおったら、わしは帰るからな」

お願いだからそれだけはやめて！　珍しく半泣きで懇願するルイ

ズに、タバサと才人、そしてさすがにイジリ大好きなキュルケも、名指しで注意されていたにも関わらずうっかり声を出してしまったデルフリンガーも悪いと思ったのだろう、きちんと謝罪する。

そして、実験は再開された。

キュルケ、タバサの順に行われたその結果。キュルケについては、ギーシュの3倍ほど厚い靄が身体の周囲に立ちのぼり、杖の先から出たのは＜糸＞ではなく『荒縄』と形容すべきものであった。タバサについては、キュルケよりさらに大きい――ギーシュの5倍程度の量の靄と＜糸＞ではなく『紐』……ちょうどギーシュとキュルケの中間程度の太さのそれが確認された。

今度は自らフィールドを解いた太公望が、全員に向けて解説を始める。

「この結果わかったのは」

「あたしの＜魔法＞がスゴイってことよね」

得意げに髪を掻き上げたキュルケであったが。

「この中で、ギーシュが最も巧みに＜力＞を扱えているということだ」

太公望の言葉に、彼女はええーっ！　と、不満の声を上げた。

「どうしてなの？　どう見てもあたしがいちばん力強かったじゃないの！」

キュルケの意見に異を唱えたのは、オスマン氏であった。

「全く同じことをしているのに、君の＜力＞がいちばん強かった。つまり、それだけ＜精神力＞の使い方に無駄があるということじゃ。これで間違いないかの？」

オスマンの言葉に、太公望が頷く。

「そういうことだ。キュルケよ、おぬしより上の＜精神力量＞があると思われるタバサの＜糸＞が細かったことから考えても、それは一目瞭然。つまりだ、＜力＞のコントロールという意味において、3人のうち最もセンスがあるのは、現時点ではギーシュということになる」

自分よりも圧倒的に＜力＞が上であると思っていたふたりよりもセンスがある。そう言われたギーシュは、まさに天にも昇る心地であった。逆にキュルケはがっくりと肩を落とす。そんな彼らに、太公望は苦笑しつつ声をかける。

「もともとギーシュは、ゴーレムの複数操作などというとんでもない技能を持っておったからのう。これについては別の機会に説明するが……キュルケ、それにタバサ。逆に考えるのだ。コントロールさえ身につければ、今よりもさらに手数が増やせるということなのだから、落ち込む必要などないのだと」

――言われてみればその通り。異端すれすれと言われたこれは、確かに『ランクアップ』への近道だ。それを悟ったキュルケとタバサは、思わずぎゅっと拳を握り締めた。

「さて、それではいよいよ本番……ルイズ、おぬしの＜力＞を見

せてみるのだ」

頷くルイズ。だが、その手が僅かに震えているのを見て取った太公望は、彼女にまず深呼吸をさせて落ち着かせる。

「緊張するな……と、言われても、正直まあ難しいであろう。よいか、ルイズ。いつも通りにやればよいのだ。失敗してはいけない、などと余計なことは考えるな。ただ、思ったままに魔法を使うのだ。いつもと同じようにやる、それだけを心がけるのだぞ」

そして、ふたりはそれぞれの位置についた。

「では……始め！」

そして、ルイズは＜精神力＞を集中しはじめた……のだが。

――でかい。太公望の顔が引きつった。正直、内心の動揺を隠すだけで精一杯であった。これは……崑崙の幹部クラス――いや、最高幹部『崑崙１２仙』並だと……！？

ルイズから立ち上った『それ』は……例えるならば1本の大樹。先程試した3人のそれとは比べようもないほどに強大なもの。昨日見たコルベール、そしてオスマンですら比較にならないレベルの＜力＞。

太公望は、内心で頭を抱えてしまった。前に見たときは、そこまで注意を払っていなかったとはいえ……これほどの＜力＞を感知しきれなかったとは、我ながら寝ぼけていたのではあるまいかと。

あえて言い訳をするならば、そもそもの＜力＞の根幹が＜精神力

＞と＜生命力＞で異なっていたためだという理由がつけられるかもしれないが、それにしても――。

いっぽう太公望以外の面々はというと、こちらは驚愕のあまり声が出ない状況であった。だが……オスマンとコルベール、そしてタバサの3人は、そんな中あることに気がついた。もちろん太公望も。

――ルイズの『杖』から＜糸＞が出ていない。その代わり、銅貨のある位置に＜光の玉＞と形容すべきモノが出現している。

そしてその光は＜魔法＞が紡がれるたびに大きくなってゆき――そして、終了間際、いっきに収縮を始めた。太公望の顔色が変わる。

「そ、総員待避――――ッ！！！！！！！」

一斉に逃げ出す関係者。そして。

ドッゴオォォォォォォォォォォォォン。

轟音とともに、銅貨であったものは砕け散った――。

第２６話　軍師、異界の始祖に誓う事（後書き）

仕事ってさ……忙しい、しかも疲れている時に限って、そこらじゅうから集まってくるよね、って話。

そして魔法関連の説明ながすぎじゃないかなあと我ながら思いましたが、ここでしっかりやっておかないと、あとあと大変なのでガッツリと。次回はルイズの魔法とギーシュの何がすごいのかについてを予定。ながい。

ところで、実は割と最近まで「レビテーション」をコモンと勘違いしていました。危なかった……原作を外伝含め全部読み返しておいてよかったぜ……。

なお、コモン・マジックの歴史や系統云々については、完全に自分の捏造設定なので絶対本気にしないようお願い申し上げます。太公望のフィールドについても同様です。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正
２０１１／０８／２８　ブリミル教について加筆、誤字脱字修正

第27話　持てる者と持たざる者

「ヲイ、ご主人さまよ！　なんだよあれ。デカすぎとかってレベルじゃねェぞ!?　あれじゃ、爆発して当たり前だろ!!」

「う、うるさいわねっ！　あたしだって知らなかったのよっ!!」

爆発の余波が収まった後。例の＜力＞を見てぎゃんぎゃん騒ぐ主従をよそに、教師陣は素直な感想と、結論をまとめていた。

「ミスタ・タイコーボーの仰る通り、ミス・ヴァリエールは＜力＞が強すぎたがために、あのような＜失敗＞を起こしていたのですな」

「う～む……正直あそこまでの大きさとは」

タバサやキュルケ、そしてギーシュも、あまりのことに呆然としていた。だが……そんな中、太公望だけが、ひとりで頭……もとい、膝を抱えて座り込んでいた。左手の人差し指で地面になにやら文字を書き、小声でブツブツと呟きながら。

「素の状態で『12仙』クラス……正直ありえんわ……しかも空間ピンポイント……あれで無能扱い!?　ならわしの立場って……」

どんよりと黒い空気を纏っている彼の姿は、傍目に見ているだけでも正直怖い。だが、そんな太公望の様子に気がつかない……と、いうよりも。まさしく『場の空気が読めない』者が、そばに寄ってきた。

――この＜フィールド＞を作り出した張本人、ルイズである。

「ね、ねえミスタ・タイコーボー。それで、コントロールについてなんだけど」

ピタリ……と、太公望の手が止まる。そして、ギギギ……と、ルイズに向き直ると、眉根を寄せ、口の端を歪ませながら、ケッ……と吐き捨てた。

「知らぬ。おぬしはもういっそ＜爆発＞だけ極めとけばいいのと違うか？」

そして。フン、と鼻を鳴らすと……その場でごろりと横になってしまった。

「え、ちょ、ど、どうしたのよっ」

「わしは知らぬ。知らーぬ」

――それから。理由はよくわからないが、完全にへそを曲げてしまったらしい太公望の機嫌を直す『作業』に全員でもって取りかかり、それが終了するまで……約３０分ほどの時間を要した――。

「わしとしては正直不本意極まりないのだが、結論を言わせてもらう」

太公望は、顔を激しく歪めながら、先程の現象について語り始めた。

「ルイズが魔法に失敗していた理由は、やはり＜力＞そのものが大きすぎたせいだ。例えて言うならば、コップへ水を入れるために、バケツの中身をそのままひっくり返しておったのだよ。そんなことをすればどうなるか……わかるであろう？」

オスマンの手によって再生された台座の上へ、再び銅貨を1枚乗せながら、不承不承といった風情で太公望は語る。

「あふれて、こぼれ出しちゃう。そういうことよね」

キュルケの答えに、うむ。と頷く太公望。

……ちなみに、現在ルイズの口には太公望の頭に巻かれていた布――何故か最近やたらと出番の多いそれ――で、封印が施されている。これ以上空気読めない発言されたら面倒だ。そう考えたキュルケの発案によるものだ。

当初、本人は猛烈に抗議しようとした……のだが。いつものそれとは違う、とてつもない迫力を伴った太公望のひと睨みによって、大人しく受け入れていた。

「おまけに、本人が自覚していない、とんでもない特性を秘めておる」

「それは＜糸＞のこと？」

そのタバサの質問に、よく見ていたな。そう答えた太公望は、スタスタとルイズの前へと歩み寄る。

「よいか？　わしが、いいと言うまで絶対に口を開くな。わかっ

たか？　それが守れなかった場合、わしはすぐさま部屋に戻って寝るからな。本気だぞ」

ドスの利いた声に、コクコクコクコクと頷くルイズ。

「では一旦、その封印を解く。その布を持ったまま、先程の位置へ立つのだ」

言われた通り、ルイズは布を持ったまま位置につく。

「この銅貨がちゃんと見えているか？　見えるなら首を縦に振れ」

ルイズが頷くのを確認した太公望は、台座から離れて他の全員が集まっている場所まで移動すると、新たな指示を出す。

「よし。ではその布を縛って、自分の目を隠せ。そののち、わしの『始め』の合図が聞こえたら銅貨に向けて＜念力＞を唱えるのだ」

――何故そんなことを。うっかり、そう口に出しそうになったルイズであったが、太公望から立ち上っている――彼女にもようやく見えた――どす黒い何かに気圧され、大人しく目隠しをする。

……と、ここで。太公望が全員のほうに向き直ると、自分の口の前へ指を1本立てて見せた。黙っていろということだろう。全員が首を縦に振るのを確認した太公望は『打神鞭』を一振りする。

……台座から、ふわりと浮かび上がった銅貨が、ルイズの後方――約２０メイルほど先まで飛んでゆき、静かに地面に置かれた。

「始め！」

太公望の合図と共に、ルイズが＜念力＞の＜魔法＞を紡ぎ出す。
そしてそれが完成した――その瞬間。彼女の後方、２０メイルほどに位置していた銅貨が＜爆発＞した。

思わぬ方向からの爆音に声を上げそうになったルイズだったが、必死にそれを抑える。見ていた観客たちも同様であった。そして。

「全員、口を開いていいぞ。ルイズもな」

そう太公望が告げた直後。

「えええええぇぇぇぇえええええええ――――っ！！！」

平原に、再び驚愕の大合唱が響き渡った。

○●○●○●○●

「あの＜糸＞は、いわば＜力＞を誘導するための＜道＞なのだ」

なんとか少し落ち着いたのだろう。ようやく通常運転を再開した太公望は、再び持論を披露し始める。

「普通のメイジは、あの＜糸＞によって＜対象＞の位置まで＜力＞を運び、そして効果を発動させる。ところが、ルイズの場合はその『誘導するための道』を必要としていない。直接『発動したい場所』に＜力＞を展開することができるのだよ」

「それのどこがすごいの？」

ルイズの言葉に――本人はあくまで無邪気に、そして素直な感想を口に出したに過ぎないのであるが――太公望の口端がピクッと動いた。こめかみがひくついている。

いやいやいや、これとんでもないから。そう答えた者たち――オスマン、コルベール、タバサ、そして才人の取りなしで、なんとか微妙になりかかった空気が元に戻った。

「まったく、これだから天才というやつは……！」

ギリギリと『打神鞭』を握り締めた太公望は、今度は才人に言を向ける。

「……のう才人よ。おぬしはご主人サマと違ってちゃんと気がついたようだが……仮にだぞ、もしもおぬしが、ルイズと戦うことになったとする。もちろんデルフリンガーは持っている状態でだ」

――その時、おぬしはどうやって挑む？　その太公望の問いに。

「物陰からこっそり近づいて、後ろから斬りかかる」

と、答えた。

「それは、何故だ？」

「見られたら死ぬ」

「どどどういう意味よ、この、犬――――ッ！！！」

主人を視線で殺すバケモノ扱いするなんて！　そう叫んだと同時に、ルイズの見事なまでに美しい軌跡を描いた回転蹴りが、才人の顔面を捉える。なおその際に、当然発生する事象によってめくれあがった物体の奥がチラリと見えた。

それに対して。

「昨日おろしたばっかりのアレだネ」という感慨を持った直後、意識が暗闇の淵へと引きずり込まれていった者が１名。

快哉を叫ぶのを必死に堪え、心の中だけで「白かった！　白かったであります！！」と打ち震えた者が１名。

「お子ちゃまね」と、鼻で笑った者が１名。

思わぬ役得に目尻が下がった者が１名に、俯きつつゴホンと咳払いをした者が１名、何の感慨も持たなかった者が３名。

――どれが誰であるのかは、あえて記さずにおいておくこととする。

○●○●○●○●

――才人再起動後。

「どうやら、本当にわかっておらぬようだのう」

左手に『打神鞭』を持ち、それで右手のひらをポンポンと叩きながら、太公望はルイズに視線を向ける。そして、空き地の中央付近

を指すと、そこへ移動するように促す。

指定された位置にルイズが立ったのを確認した太公望は、彼女に対して『杖』を向ける。どよめく観客たちを静かにさせると、言葉を紡いだ。

「それならば仕方がない。身体でもってわからせてやる。なに、痛い目にあわせたりはせぬから、その点については安心するがよい」

「あら、ミスタ。その発言はちょっとどうかと」

「よしキュルケおぬしもルイズの隣へ行け」

「ええーっ！」

余計なことを言うから――そういいたげな他メンバーの視線を背に受けながら、キュルケはがっくりと肩を落とし、ルイズの隣へと向かう。

「さて。これからわしが、あのふたりへ向けて＜エア・ハンマー＞を唱える」

「ちょ」「待って」

「怪我などさせぬと言っておるだろうが！　今度は＜力＞の流れが見えるように、わしの周囲を調整する。全員黙って見ているのだぞ。そうそう、ルイズとキュルケは、もちろん安全のために身構えておいてよいからな」

その言葉に、即刻防御態勢をとるふたり。

「まずは、一般的な＜メイジ＞と同様、＜糸＞による誘導形式で放つ」

そう言って太公望は、まっすぐルイズたちに『打神鞭』を構えると＜エア・ハンマー＞のルーンを紡ぎはじめる――当然これは「ふり」である――と、彼の周囲に、例の薄い靄――抑えに抑えてタバサとほぼ同等のそれが、ゆらりと立ちのぼる。

……と、＜糸＞がぴーっと彼女たちの数メイル手前までまっすぐ伸びてゆく。そして一定距離まで伸びた糸が拡散し、雪崩のように周囲の空気を押し出すと、風の槌となってふたりに襲いかかる。当然太公望は手加減をしているので、少し後ろへ押しやられた程度で済んだが。

「今度は、ルイズのように『空間座標指定』で＜力＞を解放する」

今度も、先程同様まっすぐルイズたちに『杖』を向け＜エア・ハンマー＞の詠唱を開始した太公望の姿を見ていた観客たちは、すぐに大きな違いに気がついた。

薄い靄が現れたところまでは一緒……だが＜糸＞が出ていない。代わりに、ルイズとキュルケの『真横』数メイルの位置に、光点が発生し……詠唱終了と同時に拡散。突如発生した＜風＞が、前方以外は完全に無防備となっていた彼女たちふたりを、真横から吹き飛ばした。

「こういうことだ、わかったか」

宙をくるくると廻ったルイズとキュルケを、浮かせたまま手前ま

で引き寄せ、ゆっくりと着地させた後――太公望は訊ねた。

「普通のメイジは『杖』の向いている方向にしか＜魔法＞が放てない」

「それは＜糸＞で＜力＞を流してあげる必要があるから、よね」

「けれど、ルイズにとっては『杖』の向きなんか関係ないんだ」

「そう。さらに一度『それに＜力＞を送りたい』と『認識』した『モノ』の中心に自動で＜力＞を発生させることが可能」

「しかも！　それが途中でどこか別の場所へ行ってしまったとしても……ですぞ」

口々に、ルイズの＜力＞について語るメイジたちへ、才人が補足する。

「オールレンジ対応、どこから来るか全く予測できない。しかも、使った本人がその気になったら自動追尾が付いてくる＜爆発＞だぞ？　シャレにならんだろこれ。だから俺は言ったんだよ『見られたら死ぬ』って」

と、いう才人の締めの言葉に、うわあ……と、改めてその脅威に気がついた面々と、ようやく自分がどれほど普通ではない＜力＞を持っているのかを認識しはじめたルイズ。

「修行なしで『空間把握』だけでなく『座標指定』に『自動誘導』までやってのけるだと!?　わしが、この太公望が……それができるようになるまで、どれだけ苦労したか……ルイズ、おぬしには理

解できぬであろう？」

肩をわななかせ、きつく握り締めた両手の拳をぷるぷると震わせながら、太公望のある意味魂の叫びといってもいいそれがルイズに向けて炸裂している。彼の黒い情念を真正面から受けたルイズは、わけもわからず後じさる。

「冗談でも誇張でもなく血を吐き、何度も何度も死にかけて、ようやく手に入れた＜力＞が持って生まれたものとか……うぬぬぬぬ……これだからわしは『天才』が嫌いなのだ！！　わかったかルイズ、だからわしはああ言ったのだ。他の魔法なんぞ知らぬ、もういっそ＜爆発＞を極めろ、と！！！」

「そんなの嫌あああぁぁぁぁあっ！！　あたしは、あたしは普通の＜メイジ＞になりたいのよおおおお！！！！」

――魂の奥底から生まれたふたりの絶叫が、平原に響き渡った――

第２７話　持てる者と持たざる者（後書き）

だから長いって……すみませんもう１話続きます。実は初めて意識的に完全ギャグパートとして狙って書いてみたのですが、いかがでしたでしょうか。自分が狙ってギャグをやろうとするとこうなる、ということで。

珍しく太公望が苛ついております今日このごろ。基本は女子供には甘めな彼ですが、いざというときは本当に容赦がありません。もっとも、原作ではその後大抵強烈なしっぺ返しをくらうわけですが……。

「天才」と「影が薄い」と「主役が云々」は彼にとってある意味最大の禁則事項ということで。昨日までの積み重ねがいっきにそっちへ行った形になってしまってマジごめんルイズ。あととばっちり？　のキュルケ。

２０１１／０４／１９　ちょっとだけ本文加筆修正
２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正
２０１１／０７／１５　誤字脱字、本文加筆修正

第２８話　巡る糸と、廻る光

――いったん食事休憩を挟んだ、１時間後。

「う～む、当初は例の＜フィールド＞を展開しながら見て教えるつもりだったのだが……あれほどの『感覚』持ちならば、ふぅむ……そうだ！　もっといい方法があった」

ぽん！　と手を叩いた太公望は、再度台座の上へ銅貨を１枚置くと、ルイズに『杖』を持ったままベンチへ腰掛けるよう促す。

……ちなみに、彼のご機嫌が直ったのは、ルイズが自身のデザートにと用意させていたクッキーを全てお供えしたからである。

そして太公望はルイズの後ろ側に立つと、両手を彼女の肩へと乗せる。思わずビクッと身体を震わせてしまったルイズに、落ち着くように指示をすると、周囲、そして目の前に座る少女に対して、これから行うことについての説明を開始する。

「これは、本来わしらが行う修行方法のひとつなのだ。体内を＜循環＞する＜力＞の流れを教えるために、これからわしがルイズに対してそれを試してみようと思う」

ほうっ、という感心の声を上げたその他の――ルイズの横・数メイル離れた位置に集まった観客たちは一様に興味を示す。

「ただし、これは通常の＜メイジ＞には合わない可能性が高い。あくまでルイズが特殊であることを前提に行うものであるため、申し訳ないが同じことを試したいという者がいても、その点について

は一切期待しないでもらいたい」

そして全員へ静かにするよう告げた太公望は、今度はルイズに対してこう言った。

「これから、わしは『あること』をする。これは、内容を言ってしまったら効果が薄れてしまうため、あえて伏せさせてもらうぞ。よいか、まずは目を閉じて……そしてゆっくりと肺の中いっぱいに息を吸い込み、その倍の時間をかけて吐き出す。これを3回繰り返すのだ」

言われた通り、深呼吸を行うルイズ。

「では、いつも通りの呼吸に戻し……＜自分＞の＜中＞に意識を集中するのだ。わかっていると思うが、わしが良いと言うまで声を出してはいかんぞ」

その直後――傍目から見ているものには、何をしているのかさっぱりわからなかったが――ルイズには、自分の肩……そう、太公望が手を置いているあたりから、何か……例えるならば、細い細い『糸』のようなものが『流れ込んでくる』のがわかった。

『それ』は、まるで血液のようにルイズの体中を循環し、やがて下腹部のほうへと集まると、1個の『珠』となり、その後――ちょうど背骨に沿うような形で、ぐるぐると移動し始めた。例えるならば、そう……まるで、螺旋を描くように。

「ルイズ、何か感じないかの？」

「えっと……何か『糸』みたいなものが肩から流れ込んできて、

そのあと……1つになって、背中でぐるぐる廻っているみたい」

「よし、やはり掴めたな！　では次の段階にゆくぞ。まだ目は閉じたままだぞ」

これは……なんだろう。ルイズは、不思議な『感覚』に囚われていた。さっきまで背中で廻っていた『珠』が、再び複数本の『糸』になり――全身を、血液のように満たしてゆく。

と、身体がふうっと温かくなったと思うと『糸』は再び1箇所へと集い、また『珠』となる。そして『珠』は右手に持った『杖』に向けて移動してゆくと……その先で、ふいに消えた。

「今度はどうかのう？」

「何か『珠』みたいなものが杖のところまで来たけど、消えちゃったわ」

その答えを聞いた太公望は、満面の笑みを浮かべると、ルイズに告げた。

「今の『感覚』を覚えておるな？」

「ええ」

「では、それを忘れないうちに＜念力＞を使う。よいか、おぬしの内に流れる＜力＞を、あの『糸』と『珠』のように巡らせることを想像するのだ。そして＜魔法＞を紡ぎ終えるまでに同じように廻し、巡らせ、集め……そして『珠』を『杖の先』に移動させ終えたと同時に、唱え終えるのだ。くどいようだが、イメージが大切だか

らな」

さあ、やってみるのだ。そう促されたルイズは、立ち上がって『杖』を構え、銅貨へと向ける。イメージ……そう、イメージするのよ……と、呟きながら。

――そして周囲が見守る中。ルイズは＜念力＞を唱え始める。

ルイズの中を、不思議なリズムが巡っていた。いつしか神経は研ぎ澄まされ、周囲の音は一切耳に入ってこなくなっていた。自分の身体の中で、何かが生まれ、廻っていく感じ。そしてそれを『杖』へと送り込み――＜魔法＞を完成させる。

その瞬間――銅貨は凄まじい勢いで空を目指して飛んでゆき……何処かへ消えた。

「うーむ、ま～だ＜力＞が入りすぎだのう」

という暢気な太公望の声をきっかけに、静まりかえっていた観衆が沸き立った。

「ちょっと、何よ今の！！」「すごい威力」「飛んだ！　飛んだよ！！」「銅貨の急上昇を確認したであります！！」「わしの銅貨は星になったのじゃ……」「おでれーた！」

そんな中、固まっていたルイズの側に駆け寄ってきたのはコルベールであった。

「ミス・ヴァリエール！　見ましたか！？　爆発しませんでしたぞ！！」

その言葉に。自分が何をやったのか、やりとげたのか。それをようやく理解したルイズは――ぽつりと一言呟いた。

「成……功……！？」

「その通りですぞ！　確かに＜力＞加減は強すぎましたが、あなたは間違いなく＜念力＞で銅貨を浮かせることに成功したのです！！」

「あ、あ、あた、あたし……」

全員が、わっとルイズの周りへ集まってくる。ルイズは、台座の上を見る。銅貨はない。でも、台座はどこも壊れていない。ふと太公望を見ると……彼は、にっこりと笑って、頷いた。

「やったぁあああああ――っ！！」

ルイズの喜びに溢れた声と大きな拍手が、平原に響き渡った。

○●○●○●○●

「ふむ、ほぼ掴みかけてきたようだの」

その後、３０枚ほどオスマン氏の銅貨が行方不明となったのちに――ルイズは、台座の上の銅貨を、ある程度自由に上げ下げできる程度までには＜念力＞を扱えるようになっていた。

「ね、ね、次はいよいよ＜系統魔法＞よね！？」

期待に胸を膨らませたルイズであったが、太公望の言葉はそれを裏切った。

「いや。おぬしには、まず徹底的にこの＜念力＞を極めてもらう」

どうしてよ！？　そう詰め寄る彼女を制したのは、オスマンであった。

「ミス・ヴァリエール。彼の言うとおりじゃ。嬉しい気持ちはよくわかる。だが、君はあくまでスタートラインに立てたに過ぎない。よって、基礎から学びなおす必要がある」

その言葉に頷いた太公望は、さらに補足を行う。

「この＜念力＞という＜魔法＞は、純粋な＜力＞のみで行われるものだ。他の者たちよりも圧倒的に＜力＞で勝るおぬしがこれを極めることによって、新たな『道』が切り開かれるであろう」

「新たな『道』？」

「そうだ。ルイズを含む、メイジの皆に確認したい。この＜念力＞は、普段はどのように使う＜魔法＞であるのか」

その太公望の問いに、次々と解答が寄せられた。曰く「窓の開け閉め」「箪笥の引き出しを開く」「棚を横にズラす」等々……主に、日常に即した答えが全てであった。

「と、いう身近な使い方をされている＜魔法＞だが、さて……他に、これを使ってできることはないのかのう？」

その問いに、首をかしげるメイジたち。おぬしら頭固いの～、さっき見たばかりであろう？　と、やや呆れ声で言う太公望の言葉によって、気がついた者がひとり。コルベールである。

「＜レビテーション＞と同様の効果が見込める。そうですな！？」

あ……と、声をあげる彼らに、追撃をかける太公望。

「そう、銅貨を浮かせることができるのだから、そのまま動かせば……ほれ＜レビテーション＞の完成だ。＜力＞の使い方が違うだけで同じことができる。だが……まだだぞ？　もう一歩踏み込んでみるのだ。『モノ』に拘る必要はないのだよ」

……モノ、ねえ……＜念力＞かあ。そういや、マンガとかでよく……。

「あーっ、わかった！！！」

声を上げたのは、メイジたちではなく才人であった。答えてみよ、そう言った太公望へ、才人は、ある意味ハルケギニアの常識では考えられない解答を出した。

「自分に＜念力＞かけて、空を飛べる！！」

いやいやそれは無理だから……そう言おうとした彼らが見たモノは。

「その通り……正解だ」

満面の笑みでもって答えると、自ら『杖』を振り＜念力＞と唱えた太公望が、ふわり……と、宙へと浮いた、その姿であった。

「わしがこれまで『空を飛ぶ』ために使ってきたもの。それは＜念力＞なのだ。＜フライ＞などでは断じて、ない！！」

――実際のところは、ちょっとだけ違うのだが。そこは黙っておく太公望。

「確かに、普通のメイジにとって、これは難しい、いや、できないことなのであろう。だが、ある意味＜力＞と『空間把握』そして『座標指定』能力に特化しているルイズにとってはどうかな？」

そう言ってさらに高く浮き上がった彼は、お得意の＜高速フライ＞を全員に見せつける。わっはっはっは……と、笑い声を上げながら通常の＜フライ＞では到底実現できない速度で飛び回る太公望に、あぜんとした視線を向ける観客たち。

そしてルイズの前へと舞い降りると『打神鞭』を彼女の前に突き出した。

「どうだルイズ。おぬしには、わしと同じことができる可能性がある。前に、わしの背に乗ったとき、どう思った？」

「風竜より……はや……い……」

「どうだ？　＜念力＞はつまらない＜魔法＞だと思うか？」

一瞬だけぽけっとした顔を見せたルイズであったが……すぐさま、ぶんぶんと首を横に振る。

「＜念力＞は、全ての基本……いわばコモンの初歩の初歩だ。まずは、銅貨を自在に宙で操れるまでに練習するのだ。よいか、わしの見ていないところで、間違っても空を飛ぼうなどとは考えるなよ？　まだ＜爆発＞の可能性がゼロではないおぬしが、うっかりコントロールに失敗したらどうなるか……わかるであろう？」

コクコクと、今度は首を縦に振るルイズ。その顔は、抑えようにも抑えきれない歓喜に満ちあふれている。

「これが、わしがおぬしに示す最初の『道』だ。そして――その行き着いた先に『空間制御』が存在する。例えて言うならば＜サモン・サーヴァント＞の上位だ。自分の前に『入り口』を作り、自分の行きたいと考えた場所に『出口』を作る。その間に存在する『空間』を曲げ『扉』同士を繋げられるようになる。どうだ、考えただけでわくわくしてこんか？」

おぬしの持つ、その強大な＜力＞と『空間把握』『座標指定』『感覚』をもってすれば、必ずやそれは実現できるであろう。そう断言した太公望の言葉に、ルイズは強く頷いた。

「それとだ。才人とよく話し『念力でやれそうなこと』の案を出し合うのだ。才人は、さっきのようにハルケギニアの常識からかけ離れた考えかたができる。そういう意味では、案外わしよりも面白い＜念力＞の使い方が浮かんでくるやもしれぬ」

おぬしもそれで構わぬか？　そう問うた太公望に対し、才人はというと。

「ああ、もちろん。見て知っておけっていう意味がやっとわかっ

たよ。俺は、メイジのことを知らない。＜魔法＞がどんな仕組みで動いているのかを知るってことは、つまり」

例の仮定――ルイズと戦うとしたら、どうする？　といったそれのような、たとえばメイジと敵対しなければいけないような事態――が、実際に発生したときに非常に役立つ。そして、協力を誓っていたルイズの『練習』。その、役に立てる。そういうことだろ？　そう聞いた才人に、太公望は笑みでもって応えた。

「そういうわけだ、頑張ろうぜご主人様！」

手を差し出した才人。その手を見つめながらルイズは思った。

――＜念力＞……これが、あたしにとっての『入り口』なんだ。

……そして、彼女は才人の手を取り……歩きはじめるべき道を決めた。

第２８話　巡る糸と、廻る光（後書き）

サラマンダーよりは確実に速いです。
太公望のドキドキ３分間魔法教室（仮）第１回目は、いったんここで区切ります。ギーシュのゴーレム操作をやる予定だったのですが、それはまた後の機会に……すまんギーシュちゃんとやるからもうちょっと待って。

「もっている力をどう使うか」ある意味太公望的視点による＜念力＞のつかいかたでした。

知ってるかい……？原作の＜念力＞ってさ……「口語」で好きなワード指定可能だから、夢が広がるんだぜ……？

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第２９話　偶然と事故、その先に在りしもの

「さて」

場の雰囲気が落ち着いたところで、太公望が再び演壇へと戻る。

「ルイズについては、今後の見通しが立ったとして……今日、この場で他に、魔法関係の技術について何かわしに聞きたい、あるいは教わりたい者はおるか？　ぬ、時間が押しているので今回は悪いが生徒優先で」

聞きたい者がおるか？　の段階で真っ先に手を挙げたコルベールを制して、太公望は目の前のベンチに座っている者たちを見回す。

――全員が挙げていた。才人も含めて。

「全員かい……それはまあいいとしてだ。では、聞きたいのか、それとも教わりたいのかで一旦優先順位をつけさせてもらうぞ。わしに『聞きたい』者は手を挙げよ」

ここで手を挙げたのは、ルイズと才人であった。

「よしルイズ。わしに聞きたいこととはなんだ？」

指名されたルイズは、どうしてもこれが聞いておきたかったらしい。まっすぐ太公望の目を見て質問した。

「えっとね、よくミスタが話している『空間ゲート移動』についてなんだけど……あそこまで詳しいってことは、ひょっとして……

あなたもできるんじゃない？」

そうそう、それだよ！　才人も、全く同じことを質問したかったようでしきりにルイズに同意している。

と、これを聞いた太公望は、少し渋い顔をして答えた。

「それなのだがな……今は、できないのだ」

「今は、ってことは、前はできたってことだよな？」

才人の言葉に頷いた太公望は、ちらりとタバサのほうへ視線を向けると、頭を掻きながら少し考えると、口を開く。

「タバサよ。あれはあくまで偶然の『事故』だったのだし、わし自身はなんとも思っておらぬ。いやむしろ悪かったとすら考えておるので、おぬしには決して気に病まないでもらいたいのだが……」

そう前置きされたことで、才人以外のメンバーが、太公望が何を言おうとしているのかに気がついた。そう……あの日、彼が召喚されたときのことだ。

「あ、それは私も興味がありますぞ」

「わしもじゃ。＜サモン・サーヴァント＞で呼ばれる側、しかも＜メイジ＞としての見識が聞けるなど、まず起こりえない事態じゃからの」

そう言って盛り上がる教師陣。だがしかし。続く太公望の言葉は、彼らにとって完全に予想外のものであった。

「それなのだがな……わしはおそらく……『呼ばれた』わけではない。あくまで『事故に巻き込まれた』だけなのだよ」

「どういうこと？」

普段めったに変わらないタバサの表情が、変化した。それを見た太公望は、だからおぬしが気に病む内容ではないのだ……と、慌てて言葉を続ける。

「前に、わしが休暇をもらって旅をしていた、という話をしたと思うのだが」

「召喚初日。覚えている」

タバサ以外は、うわそれ初耳！　という顔で話に聞き入っている。

「あの日な、たまたま旅先から『ゲート』を開き『自分の部屋』を作って、その中へ移動したのだ」

「……部屋を作る？」

「ああ、これは『空間制御』の中級でな。どこでもない空間……別の『次元』。専門的な言い方をすると『亜空間』と呼ばれる場所。便宜上『自分の部屋』などと例えることが多いのだが」

何と説明すればよいか……そうだのう……と、右手人差し指でポリポリと頬をかきながら、太公望は答える。

「＜サモン・サーヴァント＞で『入り口』だけ作る。その後、出

口側を作る代わりに『扉』の奥にある『空間』を歪めて好きな形にするのだ。だいたいは球形であったり、立方体だったりするわけだが……その『空間』は、外からは決して見えない。その中はまさに『自分専用に作り出した小さな異世界』となるわけだ」

そんなことができるのか！　と、驚愕するメイジたちと、いきなり話が魔法よりもＳＦっぽくなってきたせいで、持ち前の好奇心がむくむくとふくれあがってきた才人。

「これは『空間ゲート接続』に比べて少ない＜力＞で行うことのできる技術であるから、将来的にはルイズもやれるようになると思うぞ。『部屋』を自分の側に作り出して、どこにいても物を出し入れ可能な倉庫にするなど、いろいろ使いようがあってすごく便利なのだ」

ほえ～っとした顔で聞いているルイズに、さらに太公望は告げる。

「ちなみに『自分の部屋』は、余程大きな＜力＞を持った者でない限り、作った本人にしか干渉できないものなので、泥棒対策、または＜サイレント＞以上に機密性の高い空間を確保できるという意味では、最高の環境なのだよ」

面白そう！！　そう顔を輝かせるルイズを微笑ましく思いながら、太公望はやや脇に逸れてしまった話を元に戻すべく先を続けた。

「……でだ。その部屋にはいった途端、いきなり『光の道』が割り込んできた」

本来、とてつもない＜力＞でもって曲げている空間にそんな「割り込み」が生じたら大変なことになる。そのせいで激しい衝撃を受

けた太公望は、自分の身体を支えきれずに倒れ込みそうになった。その時に『光の道』に触れてしまい……気がついたら、ここハルケギニアに召喚されていた、というのである。

「本来であれば、あの『道』は別の場所へ繋がるはずだったのであろう。あのような割り込みは、普通ならばまずありえぬことなのだよ。何が原因で発生したのかは不明だが、本当に偶然、それこそ涅槃寂静――０．０００００００００００００００００００００００００１％程の確率なのだ」

まさしく天文学的数値である。彼らの感覚から言えば、正直ゼロだといっても過言ではないだろう。

「でだ……どうもその衝撃の影響で、亜空間を『掴む』ことができなくなってしまったようでのう。まあ、この症状自体は前にも経験しとるから、速くて数ヶ月……遅くとも数年以内には治ると思うのだが」

頭を掻きながら言う太公望。王天君のことについては、話がややこしくなるのでここではあえて口に出さない。実は今まで忘れていたとは別の意味で言えない。

「そういう意味では、わしが逆にタバサの＜召喚＞の邪魔をしてしまった可能性も否定できぬのだ。今まで黙っていてすまなかった」

そう言って頭を下げた太公望に。

「謝らないで。むしろ歓迎する」

「ミスタほどのメイジを呼べたなんて、邪魔どころか素晴らしい

ことなのではないかとぼくは思うよ」

「そんな確率で起きた事故のおかげで、あたしは魔法が使えるようになったのね。まさしく『始祖』ブリミルのお導きだわ！」

「いやまったくですぞ」

「呼ぶ側としては、ある意味羨ましい事故だわ」

「恐るべき話じゃの」

と、答えて大騒ぎするメイジたち。ちなみに、上記はそれぞれタバサ・ギーシュ・ルイズ・コルベール・キュルケ・オスマンの言葉である。

そんな中、ぽつりと発言したのは才人である。俺の時とはだいぶ違うな……という前置きをした上で、太公望の発言に補足する。

「なるほどな……地震が起こったみたいなもんか。『道』同士がぶつかって、歪んで……それが元通りになろうとして跳ね返る。んで当然反動があるから、その衝撃でめちゃくちゃ大きく揺れる……それじゃいくらタイコーボーが凄くても＜魔法＞使って逃げる余裕なんてねーよな」

この発言に、本気で驚いたのは太公望だった。眉をひそめ、まじまじと才人の顔を見つめている。一方、その他のメンバーにとっては何のことだかわからないので、一様にぽかんとした顔を並べている。

「才人……おぬし、いったい何者だ？」

「何者って……ただの高校生」

「高校生とは？」

「えっと……ここの学院みたいに、俺たちと同じ年頃のヤツが通う、色々なことを勉強するための場所でさ。俺の国では、ほとんどの人間がそこに行くんだ」

その答えに、口をあんぐりと開ける太公望。しばしフリーズしていたようだが、ややあって再起動を果たす。

「なんでもないことのように言うが、今おぬしが話したことは、わしらの間では幹部候補以上の者にしか開示されない機密情報であり、高度な学問『自然科学』に属するものだ。それが、国民のほとんどに知られているとは……もしや、相当に国力のある国なのではないか？」

「うーん……確かに、科学技術は全世界でもトップレベルっていうけど……俺はただの学生だから、詳しくはわかんねーぞ」

「確かおぬしの国には＜魔法＞が存在しないのだと言っていたな？　ちなみに人口はどのくらいで、現在はどの程度の科学レベルに到達しておるのだ？　たとえば……まさかとは思うが『宇宙』へ出られる、などというような？」

「え、ああ。人口は確か1億ちょっと……くらい？　宇宙だったら……同盟国が月までなら有人飛行で行けるようになってるけど」

なん……だと……!?　人口1億越えに宇宙まで進出!?　宝貝

なしで？　太公望は驚愕した。なんという技術力と叡智を備えた国なのであろうかと。しかも、それら知識を惜しげもなく民に与えているという。そうか、だからあの『破壊の杖』のような『武器』が生まれるのか。

「のう学院長。ちと提案……というか進言したいことがあるのだが。無料で」

「なんとなく言いたいことはわかったが、念のため頼む」

これまでになく真剣な表情を浮かべた太公望を見て、学院長以外のものは何のことやらさっぱりわからず、ぽかんとして彼らの様子を伺っている。

「あのな、人口１億越えだぞ？　しかも、全長３０メイルのゴーレムを一撃で吹き飛ばす『武器』を大量生産できる国家だぞ？　おまけに＜魔法＞なしで、空の月まで行ける船を造り出す天才が集まる同盟国がついておるのだぞ！？　おぬしらメイジは＜魔法＞が使えないからと才人を馬鹿にしておるようだが、それほどの国の国民が、突然誘拐されたら……その国の王はどうすると思う？」

――本当にわからないのか？　静かに告げた太公望の声に、小さく震え始めた者たちがいた。だが、まだ理解していない者もいたため、彼はさらに続ける。

「最悪の場合だが。王は、自分の国に対する侮辱と受け取るだろう。そして、全力で探し始めるだろう……才人の行方を。まだ『空間ゲート』の技術はないようだが、案外すぐに開発されるかもしれない」

もしもそうなったら……全軍をもってこのハルケギニアに侵攻を開始するかもしれない。その圧倒的な破壊力を持つ『武器』を手に。太公望は、そう締めた。

そこまで聞いた全員が震撼した。才人としては「いや……日本だしいくらなんでもそんなことはしないと思うんだけどなあ。せいぜい遺憾の意が発射されるだけで」なんて暢気に構えていたわけだが。

「と、いうわけで早急に才人の待遇改善を行うことを進言する……とはいえ、他の貴族に知られたら色々と面倒なのは理解できるので……」

腕を組んで考え込む太公望。と、何やら思いついたようにパン、と両手を叩く。

「そうだ、たとえばだな……ルイズの役に立ったから、これからは貴族と同じ食事をとる栄誉を与える……とかなんとか言って、そういうところから周辺を慣らしてゆくというのはどうであろう？」

パチン、と指を鳴らしてオスマンがそれに応える。

「それいただきじゃ。明日からサイト君はアルヴィーズの食堂で食事をとってよい。もちろん、その食費は今後学院側で出そう。入場については、許可証を作成する。ミス・ヴァリエール。そしてサイト君。すまんが、まずはそれでかまわんかね？」

「い、い、い、異存、あ、あ、ありませんわ」

「本当ですか！　やったあ！！　まかないも美味いけど、やっぱみんなと一緒に食事したかったんだよなあ」

カタカタと震えながら答えるルイズ。今まで興味はあったものの、まさかそこまでとんでもない国だとは考えてもみなかった彼女にとって、太公望の『進言』はまさに晴天の霹靂だったのだ。もう、間違ってもパンツ洗わせたりなんかできない。

ただし、彼女はちゃんと才人を故郷から連れ去ってしまったことを自覚しており、帰すために努力しようとしていたことは間違いないので、あまり責めてはいけない。だいたい、わざと彼の前に『鏡』を出現させたわけではないのだから……まあ、わざとじゃないなら何をしてもいいというわけではないので、そこをはき違えてはいけないわけだが。

いっぽうの才人は、ただ無邪気に待遇改善を嬉しがっていた。よくも悪くも現代っ子、平和な国・日本出身の高校生である。

……と、そんな才人がふと気がついて、太公望に尋ねる。

「……って、ちょっと待て。俺もお前に聞きたいことがあるんだが？」

「何だ？　話せる内容ならば構わぬが」

「お前の国には＜魔法＞があるんだよな？　で、それが技術になってる。なのに『自然科学』とか『宇宙』って単語が出てくるってのはどういうことだよ？　まさか」

自分の閃きに驚愕しながら、才人は訊ねる。

「わしらの間ではあらゆる事象を『科学的』に分析し、理解する

ことで、より効率的に、少ない＜力＞で効果を発揮できるよう研究を行っているのだ」

『打神鞭』を振るいながら、太公望は熱弁した。

「風は何故吹くのか。雷によって空が光った後、遅れて雷鳴が聞こえてくるのはどうしてなのか。河原にある石のほとんどが丸い理由とは。火の温度と共に色が変わる意味とは。雨が降るメカニズムはどうなっているのか。そういったものを学び、理解した上で、それらの知識を元に＜力＞を行使する。これが、ハルケギニアのメイジと大きく異なる点であろう」

――ロバ・アル・カリイエは、ハルケギニアに比べて技術や魔法が発展している。そう噂には聞いていたが、予想以上に進んでいるらしい。驚愕する生徒たちと学院長。学問が大好きで、かつ新しい技術の話に目がないコルベールに至っては、興奮のあまり身体中が小刻みに震えている。

だが、才人が聞きたかったポイントはそこではなかった。

「もしかして、だぞ？　もしかしちゃったりして、さ。その＜魔法＞と＜科学＞が合わさって、ひょっとして『宇宙船』があったりとか、しちゃうのかな？　かな？」

いやまさか、でも……と、期待に胸を膨らませた才人に。太公望は満面の笑みでもって答えた。天空を指し示しながら。

「あるぞ。そもそも、わしらの現在の本拠地は、地上より遙か空の上にある宇宙空間――星の海を征く船。人工的に作られた、生物が住むに足る環境。月の後ろ側。惑星と次元の狭間を隔てて浮かぶ

それ。『スターシップ蓬莱』だ」

「行きてェ――！　ロバ・アル・カリイエ超行ってみてェ――！！」

大騒ぎする才人と、私もですぞ！　と、激しく同意しているコルベール。ふたりは手を取り合い、興奮しながらぶんぶんと振っている。

そんなふたりに、わしはむしろ才人の国のほうに興味があるんだが……という太公望。大気圏突入とか『亜空間ゲート』なしで実現しているとするならば、もしや、わしが知らない、突入方法に関する独自の技術があるのかもしれない。それならば是非とも見てみたいのだが……と。

だが、そんな風に盛り上がる3人をよそに、ポツリと呟いたのはキュルケであった。

「そういうわけだったのね……あたしと同じか、1つ2つは年下のミスタ・タイコーボーが、先生たち並かそれ以上にすごいメイジになれるはずよね」

でも、やっぱり悔しいわ……そう呟いたキュルケの言葉にオスマンが反応する。

「あー、ミス・ツェルプストー。騙されちゃいかん。彼はあんな見た目だがの、君より10歳ほど年上じゃからな？」

「何さらっとバラしとんじゃこの狸ジジイ！！！」

――一時の間を置いて。

「えええええぇぇぇぇえええええ――――っ！！！」

平原に、本日最大級の叫声が響き渡った。

第２９話　偶然と事故、その先に在りしもの（後書き）

複数の嘘と未公開のせいで情報が錯綜しています。彼らの間で、ロバ・アル・カリイエがトンデモ世界認定される事態にまで発展。きちんと情報を伝えるって、たいせつですよネ。両方の原作をご存じのかたには、こういう「すれ違い」を楽しんでいただければ幸いです。

２０１１／０４／２２　誤字修正
２０１１／０４／２４　いただいたご意見を元に加筆修正
２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正
２０１１／０７／１１　誤字脱字修正

第３０話　軍師の過去、そして現在へ

衝撃の――太公望の年齢がキュルケより１０歳年上という事実？
発覚直後。

「あたしの１０歳上ってことは……２７？　あれで？」

「え、え、エレオノール姉様と、お、お、同い年……」

「さすがに倍近く離れているとは予想の範囲外だった」

「ロリババアは有りだけどショタジジイとか誰得だよ！！」

「君が何を言っているのか理解できないが、とにかく驚いているのはわかった」

大騒ぎする生徒達と固まっているコルベールの隣で、口元を隠して笑いをこらえているオスマンを睨み付けた太公望は、あとで覚えておれよ……と、心の内で思いながらも場を鎮めるべく発言を再開する。

「放っといてくれ、わしの年齢のことは！　悪かったのうこんな見た目で！！　さんざん言われてもう慣れておるわ、将としての威厳がないと！！！」

本当の年齢はそんなもんではないのだが、さすがにそれを言うと色々とまずい事態に陥りそうなので、太公望は現在２７歳という設定で通すことにした。

――もしかすると、彼のあの口調は、無理矢理威厳を出そうとしてやっていることなのだろうか。そういえば『男爵』だと名乗りを上げていたし、彼なりに苦労していたのかもしれない……。

ふとそんなことを考えたタバサであったが、実際は正真正銘ジジイな年齢なのでこの喋り方になっている、ただそれだけのことである。あと、彼女は身分について変な誤解をしている。まあ、これはノリだけで名乗りを上げた太公望の、自業自得なのであるが。

そんな中、ギーシュがすっと手を挙げた。

「ミスタ・タイコーボー。ひとついいだろうか。ぼくは今……さりげなく問題発言があったと思うのだよ」

「なんだギーシュ、言ってみろ」

「将軍としての威厳がないと言っていたようだけれど、ひょっとして……あなたはそれなりに身分の高い軍人なのではないのですか？」

あ、しまった。太公望が気がついたときは、もう手遅れであった。

「そう。しかも彼は、師団を率いるほどの指揮官」

おのれタバサ、ここであのときの仕返しをするか！　なんという効果的な……と、頭を抱えた太公望。そして、そんなタバサの言葉に固まったのは、ギーシュ、才人、コルベール、オスマン。ルイズとキュルケにはわかっていなかった。

まあ、大貴族とはいえ女の子。軍の組織について、階級はともか

く編成についてまで詳しく知っておけというほうが無理な話であろう。

「師団って？」

「簡単にいうと、1～2万程度の軍勢のことだね。それを率いることができるのは、トリステインでいうと最低でも少将、あるいは中将の地位にある将官だけなのさ」

ギーシュの説明に、さらに補足したのはコルベール。

「軍隊の階級は、厳密には国によって異なるのですが……おおまかにいうと上から元帥、大将、中将、少将、准将、大佐、中佐……というように続いていくのです。つまり、ミスタ・タイコーボーは、国元において軍で上から3番目に高い地位に就いていた、と。こういうことになりますぞ」

「あの観察眼、作戦立案能力、そして指揮の腕に交渉術。むしろ納得したわい……その若さで中将か。やはり君にはトリステイン貴族として生まれて欲しかった」

そう言ってため息をついたオスマン。その隣にいたコルベールは固まっていた。

――まさか、彼が軍人……しかも高級将校とは。使い魔召喚の儀で、突然遠方から呼び出された上に、周囲を見知らぬ者たちに囲まれていたにも関わらず、落ち着き払っていたのも……あの会話術も当然だ。

それにしても……あれほど進んだ知識と技術を持つロバ・アル・

カリイエ内の一国、その軍の中将位にある人物を、もしも――ろくに話しもせず＜使い魔＞にしてしまっていたら……国際問題どころか、最悪トリステインは大軍をもって攻め滅ぼされていたかもしれない。コルベールは、背筋に冷たいものが流れるのを自覚した。

実は、太公望は中将どころか大元帥に相当する地位にいて、かつ地位的にはナンバー2。さらには本来次代の＜教主＞、あるいは、人類が知る歴史の通り歩んでいたのであれば『斉』の＜大公＞となるべき存在だったわけだが、そこまではわからないコルベールであった。むしろそれは、幸せなことだったのかもしれない。

そんな硬直した場の中、がっくりとうなだれながら太公望は告げる。

「うぬぬぬぬ……身から出た錆というか、色々面倒だから黙っておるつもりだったのだが、そこまでばれてしまった以上は仕方がない。だが、これからも今まで通りに扱ってもらいたい。口外するのもやめて欲しい。まあ、誰も信じないとは思うが念のため、な。だいたいわしは堅苦しいのが嫌いなのだ。よって、変に敬語なんぞ使わないでくれ、頼む」

パンッと両手を合わせ、頭を下げる太公望。才人とギーシュから飛んだ「よりにもよって、国の軍隊をあずかってる中将閣下が、祖国ほったらかしてハルケギニアに滞在していて大丈夫なのか？」という質問に対しては。

「ちょうど一段落ついたところでのう、休みついでに軍を退役しておるのだ。戦はもうこりごりなのでな……将来的に招集がかかる可能性はなくもないであろうが、しばらくの間は問題ない」

と、答えた。物は言い様である。

「さて……なんだかぐだぐだになってしまったが、いい加減話を戻すぞ。とりあえず、ルイズと才人の質問は終わりかの？　あとの3人は……そうだのう、申し訳ないがご主人様からということで、タバサ。わしに何を聞きたいのだ？」

「魔法の『複数同時詠唱』について知りたい」

「なぬ？　『複数同時詠唱』……とは？　いったいなんのことだ！？」

何を言っているのかわからない。ぽかんとした顔をしている太公望に、タバサは苛立ちを覚えた。あれだけ見せておいて、とぼけるつもりなのか、と。ならば、情報公開をするまでだ……言える範囲で。

「昨日まで、わたしたちは知人に頼まれて、妖魔征伐に出かけていた」

その発言に、ほうっと感心の声を上げる面々と、片眉をつり上げる太公望。

「敵は＜先住魔法＞の使い手を含む妖魔、総勢４５。手勢は、わたし、タイコーボーのメイジふたりに、平民の『騎士』がひとり。彼我戦力差は数だけで言えば１５倍。それを、彼の指揮のもと一切の消耗なく完封、殲滅した」

彼女はコボルド……とは言っていない。逆に＜先住魔法＞の使い手がいた、との情報を出すことで、相手の勢力を、知らない者に対

して意識的に高く感じさせているわけだ。思いっきり太公望の影響を受け始めている。

ただし、そこに嘘はない――もっとも＜先住魔法＞の使い手たるコボルド・シャーマンは、太公望の策によって、それを一切行使できない状態に追い込まれていたわけだが。そして当然、この話を聞いた太公望を除く全員が驚きの声を上げた。

その際に……と、タバサは続ける。

「タイコーボーは、圧倒的な＜力＞を見せつけた。そこでわたしが見たのは……彼が＜フライ＞を維持したまま＜エア・シールド＞を周囲に展開し、さらに＜カッター・トルネード＞で森をなぎ払い、加えて＜ウインド＞でなぎ払った木を積み上げていく姿。しかも＜遍在＞を使うことなくこれらを全て同時に行っている。つまり彼は……一度に複数の＜魔法＞をコントロール可能な、常識では考えられない超技巧者」

――それが本当なら、まるで、ハルケギニアの歴史上最強と謳われた伝説の風メイジ『烈風』カリンそのものではないか。

タバサは普段物静かな少女だが、平気で嘘を言うようなタイプの人間ではない。と、いうことは……全員が太公望のほうを、畏怖の目で見つめた。

「ちょっと待て。常識では考えられないと言うが、おぬしらも普通にやっておることではないか。何かおかしいことなのか！？」

珍しく慌てた風情でそう訊ねてきた太公望へ。

「そんなことやれるわけないわよ！　いったいどこのバケモノよ！！」

そうツッコんだキュルケ。しかし太公望は、ある人物を指差してこう言った。

「たとえば、そこにおるギーシュだが。7体ものゴーレムを使役し、同時に扱っておる。わしの＜力＞とギーシュのそれは、全く同じ理屈で動いておるものなのだぞ？」

それに……と、太公望は続ける。

「たしか、タバサは＜氷の矢（ウィンディ・アイシクル）＞を得意としておったな？」

確認されたタバサが、頷いた。

「何本同時に飛ばせる？」

「3本。杖の側に待機しておき、任意のタイミングで放つことも可能」

はあ～っ、と、太公望はため息をついた。

「そうか、そのあたりも無意識にやっとるのか……」

そして彼は、がっくりと肩を落として話を始めた。

「あのな、その＜ウィンディ・アイシクル＞は、そもそも『空中の水蒸気を集める』『それを風で冷やし凍結させる』『任意の位置に浮かせる』『発射まで任意の場所で待機』『自由意志で発射をコ

ントロール』という、同時に5つの事象を発生させている＜魔法＞なのだ。つまり、それをちゃんと『認識』することによって……さらに複雑な動き、およびコントロールが可能となるであろう」

「それとあなたの『同時展開』は」

タバサの言葉を遮って、太公望は続けた。

「実はまったく同じことなのだよ。わしは基本＜念力＞で飛んでいると話したが、実のところ、さっきタバサが言った行為は……実は全て＜ウインド＞を利用して、おぬしの＜魔法＞と同じように、同時に発生させていただけに過ぎないのだ」

なん……だと……！？　＜ウインド＞でそれだけの威力を出していたこともそうだが、まさか『空中での待機』『盾の展開』『真空の混じった竜巻の発生』『木の積み上げ』これが、ひとつの＜魔法＞で、しかも同時に実現できるというのか。この発言に、才人以外の全員が驚いた。

「これが『事象を科学的に理解し、利用する』最大の利点だのう。どのように＜力＞を作用させれば、自分が思うような事象を起こせるか、無意識にではなく、完全に計算して行動することができる」

つまり……と、太公望は結論する。

「ある意味において、ギーシュもまた『天才』なのだ。同時に7つの＜錬金＞を、個別に操作しておるのだから」

そう言って、ギーシュの前に立つと。彼に『打神鞭』を突き付ける。

「つまり、訓練を積むことによって、たとえば＜錬金＞で……『盾を持つワルキューレで自分を守り』『地面の一部を油に変え、相手の足をすくい』『武器を持ったワルキューレで、倒れた敵を攻撃する』と、いったようなことが可能となる。どうだ、自分の持つ潜在能力の素晴らしさに気がついたか？　ギーシュよ」

――それは、まさに『ひとり軍隊』。自分はその『司令官』だ。言われてみて、ギーシュは初めて気がついた。己の持つ可能性に。そしてそれは訓練によってできるようになるということを教えられた。さらに……軍学を身につけることで、彼が例に挙げたこと以外にも、色々とやれるようになるのではないか、と。

「ただし……この『同時展開』は、意識的に複数の思考を行う『技術』を必要とする。これは、いちおう訓練によって身につけることができるものではあるが、基本的には『生まれつき』備わった機能なのだ」

そう言うと、太公望はコンコン、と、自分の頭を叩く。

「ここ……脳みその構造に関係することなのだ。ちなみにこれは男よりも、女にその『才能』が備わっていることが多い。ふむ、そうだな……タバサよ」

「わたしに何か？」

「うむ。たとえばだ、おぬしはワインを飲み銘柄について思いを馳せつつ、本を読みその内容をしっかりと頭に叩き込みながら、わしと言葉を交わし、話している内容をきちんと理解できるであろう？」

「もちろん」

……と。ここで複数名から驚きと賛同の声が上がった。

「いや、そんなの無理だろ普通」「ぼくは複数の女性の声を全て聞き分けて理解できるよ。もちろん薔薇の香りを楽しみながら、ね」「あたしも、本を読みながら話くらい簡単にできるわ」「彼氏たちみんなと話をしながら、次の日の予定を考えたりできるのと同じことよね」

この反応に、太公望はニヤリとした笑みで応える。

「そう……実はこれこそが『同時展開』に必要な能力『複数思考』なのだ。よって、向いていないものがこれを習得しようとした場合、集中力が乱され、逆に＜メイジ＞としてのランクが落ちてしまうことになるから、取り扱いにはくれぐれも注意が必要だ」

太公望は、そう言うと、周囲の子供達を見回しながら言葉を続ける。

「今の反応と、これまでわしの見たところでは……ギーシュとタバサにこの才能が備わっておる。ルイズにもある才能だが、今はまだせっかくの＜力＞を拡散させる結果となるので、わしがやっていいと認めるまで絶対に試してはならぬぞ」

そして、今度はキュルケの前に立つ。

「キュルケにもできなくはないことだが、おぬしの場合はむしろ1本に絞り、一発の威力を増大させる方向の才能が高そうだ。これ

はこれで希有な能力なので、あえて『複数展開』はきっぱりと諦め、そちらを伸ばすことを勧める」

――そう語る太公望は、まさに『新たな道へ導く者』そのものであった。

「のう、ミスタ・タイコーボー」

「学院で教鞭をとれというのは却下だ」

オスマンが言おうとしたことを即座に斬り捨てた太公望に、コルベールが疑問を呈した。ある意味、それは彼にとって必然とも言える問いかけ。

「何故です？　あなたを見る限り、教師としての『道』が最も適していると、私は思うのです。その――軍人よりも」

そんな彼の問いに。

「面倒だからに決まっておろうが！」

ある意味、最も彼らしい解答を出す太公望。

「えええええ」「面倒とかひでえ」「ないわ、その答えはないわ」

非難囂々の生徒たち。そんな彼らを見て、太公望は頭を押さえながら言う。

「よいか、ひとに何かを教えるという行為は……ある意味、その

者の人生に『道』を指し示すことなのだ。そして、それが本当に正しいものであるのか、それは本人の歩む、その先に至るまでわからない」

だから……と、彼は先を続ける。

「よって、わしはこれまで志願者がいても、誰ひとりとして弟子を取ることはなかった。わしの国では、弟子を取らない者は真の意味での一人前、大人として認められない。にも関わらず……だ。弟子を取るということ、それはすなわち、その者の『人生』に責任を持つことに繋がるからだ。どうだ、実に面倒極まりないであろう？」

――お師匠さま！　と、自分を呼ぶ者がいたが、太公望は彼を正式に『弟子』にはしていない。『認めていない』わけではなく、あくまで側付きの者……というよりも、年の離れた弟のような存在として可愛がっていたのだ。

「今回、ここで教えているのは、あくまで例外中の例外。ハッキリ言うが、全員見ているだけで、こっちの心臓に悪いからだ！　特に、相手の実力を一切測ることなく正面突撃仕掛けるような奴！！　当然自覚はあると信じたいがな！！！」

ガーッ！　と、大口開けて威嚇する太公望の声に、才人が俯いた。思いっきり覚えがあるからだ――そう、以前仕掛けた、太公望との模擬戦についてだ。

才人は、さっきのタバサの話を聞いて、内心冷や汗をかいていた。まさか太公望が、そこまでとんでもない＜魔法使い＞だとは思ってもみなかったのだ。しかも、既に退役済みとはいえ、軍を指揮していた中将閣下。普通の高校生が挑みかかるなど、ハッキリ言って話

にもならない。

「と……いうわけだ。よって、わしが教えるのはあくまでここにいるメンバーのみ。そもそも、例の＜フィールド＞は異端すれすれなのだから、そう簡単に表へ出せるものではないことくらい、理解できるであろう？」

ったく、我ながら本当に面倒なことを引き受けたものだ。そうぼやく太公望を見て、コルベールは思った。君はやはり、教師になるべきだよ――と。

「さて。とりあえず全員の基本方針はよいとしてだ。キュルケ、ギーシュ。おぬしらのしようとしていた質問は、今までの解答によって満足できるものか？」

「ぼくは大満足さ！」「あたしも。ああいう話が聞きたかったから」

そうか。ふたりの声に頷いた太公望は、場を締めるべく声を上げた。

「では……まだ時間がある。このあとだな、全員でもって、トリスタニアの街へ出て、ぱーっとやるなんてどうだ？　そうだのう……ルイズの魔法、初成功祝いに」

それはいい！　と、盛り上がるメンバー。そして、その言葉にぱあああああっと顔を輝かせるルイズ。そうだ、あたしは今日、はじめて＜召喚＞以外の魔法を成功させたのだ！

……そして、街のなかなかシャレたレストランで大いに盛り上が

った一行。ちなみに、これらの費用はオスマン氏が全てもつこととなった――もちろん、太公望の策によって。

――その夜。ルイズは、家族に宛てて手紙を書いた。

はじめて、魔法が成功したこと。そして、それに至る経緯を……言っても構わないと言われている範囲内で。

友達が、遙か東方、ロバ・アル・カリイエのメイジを招いてくれたこと。

自分と同じ失敗をしていたひとが、そのメイジの知人の中にいたこと。

その知人は『才能』がありすぎて、普通の＜魔法＞の枠に収まらず＜爆発＞を起こしてしまっていたこと――そして。自分が、それと同じ原因で失敗を繰り返しているのではないかと言って、色々と見てくれたこと。

結果は、そのメイジの言うとおりだったということ。君は、いつか『スクウェア』どころか、それを凌駕する可能性すら秘めている――一緒に調べてくれていた先生たちも、そう言ってくれたこと。

今はまだ、物を浮かせることしかできないが……その東方のメイジ曰く、いつかあたしは、ハルケギニアの誰よりも速く空を飛ぶことが叶うであろう、そう話してくれたこと。そしてその彼自身が、学院の誰よりも速く空を飛ぶことができる、素晴らしい＜風＞のメイジであるのだ、と。

最後に。今日、自分の魔法が初めて成功した……それを祝う会を、

先生たちと友達みんなが開いてくれたこと。とても嬉しくて、楽しくて、涙が出たことをしたため……伝書フクロウにくくりつけると、空へ向けて放つ。

――この一通の手紙が、後にとてつもない嵐を巻き起こす結果となるのだが、それはまだ、ルイズにはわからなかった――

第３０話　軍師の過去、そして現在へ（後書き）

日付こそまたいでいますが、ひさしぶりの２話投下！！

さらっと太公望の年齢情報その他が上がると共に、とあるフラグが複数立っています。実際はもっと年上なんですけども……ねｗ　あと才人、自分で書いておいてこういうのもなんですが、３０前の人間をジジイとか言うな、マジで泣くぞｗまあしゃべりかたのせいなんですが。

それと才人について。彼の「ひらめくポイント」に注目です。そう……「才人はあくまで才人」なのです。出会い系に登録し、アキバでパソコンを修理に出し、セーラー服に胸をときめかせ、スチュワーデスのコスに打ち震え、革命胸に涙する存在。そんな彼が念力に関して科学知識云々を出すわけがありません！　ある意味、すっごくファンタジー。そして、太公望にすら「その発想はなかったわ」と言わせる内容。

それがルイズに与えられし『道』。地球……いやアキバ文化なめんなファンタジー！　と、いうことで。才人の日本人高校生ならではの「閃き」、そして太公望の「応用」、さらに今後そこへ付け加えられるコルベールの「研究」。頑張ってそれらをうまく料理していければな、と、思いつつ本日は締めさせていただきます！

２０１１／０４／２３　タイトルと誤字修正……なんという間違い。
２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正
２０１１／０７／１１　誤字脱字修正

第３１話　空想と魔法そして怠惰が出会う時

――刻は数日だけ前に戻る。

平賀才人は、考え込んでいた。太公望のアドバイスについて。

「メイジにとってはそう見えない、武器、かあ……」

ちなみに現在、ルイズに買ってもらった皮の手袋をして過ごしている。そう……ふたりは太公望のアドバイスをちゃんと守って＜ガンダールヴ＞のルーンを隠すようになっていたのだ。

で……例の武器の件なのであるが。

最初は『隠しナイフ』あるいは『手裏剣』を考えた。だが。

「それ……武器に見えちゃうんじゃないの？」

と、いうルイズのコメントにより却下。手裏剣については武器には見えづらいが、投げられたら危なそうだという想像くらいはつく、という返答で才人はこのふたつを候補から外した。

次に、刃物から離れることにした。ならばどうするか……。

そこで出てきたのが『メリケンサック』。確かに武器には見えない。しかし。

「指輪っぽいわね。でも、手袋の上からそれをつけたら手が痛くなりそう」

絵図面を見せたところ、ご主人さまは首をかしげながらそう言った。

「うーん、悪くないアイディアだと思ったんだけどなあ……そうか、手袋をしたまま持つってことも考えないといけないんだよなァ……いや、ちょっと待て。手袋？」

ぼんやりと……才人の中に、イメージが浮かんでくる。

「そうだよ……『武器』って考えすぎたからいけないんじゃないか？　いや、あれこそは漢（おとこ）の武器だよなあ！！」

……で。今度出てきたのは『ボクシンググローブ』。拳は男の武器である……という才人らしい考え方から出た発想。確かにこれはハルケギニアのメイジからすれば武器とは思えないだろう。しかし、スケッチを見たルイズの反応はというと。

「普段からそんなのつけて歩いてたら、バカに見えるわよ」

……ごもっともである。リングの上以外でつけて歩くようなモノではない。

「結構難しいもんだなあ、こういうこと考えるのって」

はぁっとため息をつき、自分の手を見る。皮の手袋を。

――その時だった。彼にまさしく『天啓』と呼ぶべき閃きが舞い降りたのは。

「オッケエェェエ！！　これだあああああ！！！」

さっそくルイズに意見を求めたところ。

「確かに、それなら『武器』には見えないし、手袋としても言い訳できるわ」

「だろ？　フッフッフ……まさか、ファンタジー世界でコレを使って戦うことになるなんてな……」

ある意味アクションゲーム、格ゲー好きな俺にとってはたまらないぜ。そういいながら彼が書いた絵図面――それは。『指ぬきグローブ』。

日本流に言うならば、ある意味でアキバファッションのひとつ。そして……テレビゲームやマンガによく登場する、ストリートで戦う格闘家がよく愛用していたアレである。

――そして現在。虚無の曜日の翌日、昼。太公望に早速図面を見せたところ。

「なるほどのう、拳闘用の『武器』か。わしにもこの発想はなかったわ」

「やった！　タイコーボー閣下がそう言うなら問題ないな！！」

「……その呼び方やめんかい。今まで通りに接してくれと言ったであろう？」

「わざとだハハハ」

「こやつめハハハ」

――拳骨で才人が悶絶しておりますので、しばらくお待ち下さい――

「でさ、これ作ろうと思ったんだけど。＜錬金＞頼むにも、ギーシュには言えないだろ？　かといって、他に俺から頼めそうなひとがいなくてさ」

「ああ、そういうことならわしから学院長に聞いてみよう」

――で。その結果＜ガンダールヴ＞のことを知っていて、かつ隠したほうがいいであろうという事情を理解し、またそういった技術開発に熱心なコルベールが改めて紹介され……そしてこの出会いが。後に、世界に様々な『発明品』をもたらすきっかけとなる。

○●○●○●○●

「なるほど、それで私のところへ来たと」

魔法学院・火の塔の側に立てられた『研究室』の室内で、コルベールは雑多な資料やら実験器具で埋め尽くされたテーブルの上を片付けつつ、才人と太公望のふたりへ椅子を勧めながら言った。

「はい、コルベール先生なら、そういったことに詳しいって聞きましたので」

才人は、部屋の中を見回した。いかにも「研究者」「技術者」の

部屋といったような雰囲気だ。あちこちに散らばる羊皮紙は、何かの設計図なのだろう。いろいろな記号やイメージ図のようなものが書き込まれている。

着座し、早速例の絵図面を見せたところ、コルベールは興味を示した。

「これが『武器』かね……しかし、このままだと拳を痛めますぞ」

「それなんですけど、本当は、拳の周りに衝撃をやわらげるようなものがついているのが普通で……たしか、こんな感じで」

サラサラと絵を描き加えた才人。それを見てふんふん……と頷くコルベール。

「しかしあれだのう、この『武器』はどういう場面で使われるのだ？」

殺傷力は剣や槍などに比べて低いであろう？　そう質問した太公望に対しては。

「ああ、これは元々スポーツ用なんだ」

「そうか、なるほどのう」「すぽぉつ？」

納得した太公望と、よくわかっていないコルベール。後者に対して説明するべく、指ぬきグローブを使うわけではないが、拳で戦う格闘技の中でも特にわかりやすいと思われるそれについて語りはじめた才人。

「はい。えっと、俺の国……というか世界に『ボクシング』っていう競技があって、そこで使われるものなんですけど……ここでいう『決闘』みたいにあくまで試合形式で、あとで遺恨が残らないようにちゃんとルールを決めて、拳だけで戦うんです」

そして才人は自分の知識を総動員して彼らに説明した。ボクシングについて。

それは『リング』という、倒れても大怪我を負わないように設計された、闘技場のような舞台で行われること。公平さを保つために、体重別でランクを分け、身体の大きなものが有利になるような状況にはしないこと。複数名の審判を置き、どちらかが激しいダメージを負った場合、即座に試合を終了すること。

また、どちらがより上手に戦ったかを点数にして評価し、勝敗を決めること。さらに、身体への影響を考え、時間制限を設けた上で、さらにすぐそばに医師が待機していること……などなど。

「と、まあこんな感じです。俺たちの国では６０年以上戦争が起きていないから、こういう『試合』を見て鬱憤を晴らしたり、娯楽の一種として楽しまれているんですよ」

「ふむう、平和な国だのう……わしとしては羨ましい限りだ」

「まったくです。ですが、だからこそこういう発想が出てくるんでしょうな」

才人のスケッチを見たコルベールが、ため息をつく。

「それで……できそうですか？」

「大丈夫、半日もあればできると思いますぞ。ただ、実際に使ってみてもらって、使い心地や強度を確認したほうがいいでしょう。ですから、まずは試作品を1つだけ作成することにします」

にっこり笑って答えたコルベールへ、ありがとうございます！と、これまた笑顔で礼をした才人。

「ああ、その試作品ができたら、わしも呼んではくれぬか？　実物を見てみたい」

「もちろんですぞ。全員でいろいろ意見を出し合ったほうがいいですからな」

そんな感じでワイワイと盛り上がる3人。と、そんな中で才人が思い出したように話題を切り替えた。

「ところで……例のルイズの＜念力＞について、2つ程思いついたんだけど」

「む、それはどういったものだ？」

早速興味を示す太公望と、コルベール。

「あのさ、箒（ほうき）に乗って空を飛ぶことってできないか？」

「……は？」

「いや、だからさ。『自分に＜念力＞』をかけるんじゃなくて『モノに＜念力＞』をかけて、その『上に乗る』んだよ。そうすれば、

失敗して＜爆発＞させちまった時の危険性も下がるんじゃないか？」

この才人の発言に、ふたりは文字通り固まった。コルベールはあんぐりと口を開け、太公望は頭を抱えてしまっている。

「いや……その発想はなかったわ……わしもまだまだ頭が固いのう」

「まったく……サイト君はまさしく『宝物』ですぞ」

「ところで……何故箒なのだ？」

「おとぎ話の中のことなんだけどさ。魔女っていったら箒がお約束なんだ！」

でも、それだと乗っていて尻が痛くならぬか？　ですなあ……だったら、いっそ椅子を浮かせてそこに座るとか。　ああ、そのほうが確かに楽だな！　なんて感じでどんどん話が膨らんでいく。そして。

「でさ、それに慣れたら、大勢を乗せて運べるようになると思うんだけど」

「確かに、それはいけそうだのう」

「んで、これが2つ目なんだけど……『空飛ぶ絨毯』とかどうだろう？」

「ふむ……着眼点は悪くないと思いますぞ。ただ……柔らかいものですから＜念力＞で全体を支えるのが難しい上に、乗っている人

間も安定しないとわたしは考えます」

「あ、そっか……でも、板とかじゃ座り心地悪そうだなあ。ソファーとか」

「……椅子から離れて考えませんか」

「わしゃどうせなら、ごろりと横になれるようなモノのほうがいいのう」

「それだあああああああああ！！！」

――で。そのままだと持ち運びが不便だ。いや、それなら折りたたみ式にすれば……折りたたむとは？　ああ、それはこんな感じにすれば……と、いったような流れで、設計図が書き上がっていき……そして、そのアイディアは固まった。

名付けて『空飛ぶベッド』（折りたたみ式、バラして持ち運び可能）。

これが実際に使用されるようになるまで、まだしばらくの時がかかるのだが――このとき出た「折りたたむ」という発想が、後にコルベールの発明に大きな影響を与えることとなる。

なお、結局ルイズの自力初飛行は椅子ではなく箒に乗って行われることとなったのだが、これについては、

「箒だ！　これはロマンなんだ、絶対に譲れねェ！！」

と、いう才人の強固な願いにより実現されたものである。

○●○●○●○●

――さて、場所は変わって学院長室。そこに居合わせたのは、オスマン学院長、コルベール、ルイズ、才人、そしてタバサと太公望の6名である。デルフリンガーも持ち込まれているので、正確には7名だが。

椅子に座り、周囲を見渡した太公望は、こう切り出した。

「実は、才人の待遇についてあれから色々と考えたのだが……彼を『武成王の血縁者』ということにしたいと思う」

「ブセイオー……とは？」

オスマンの質問に、太公望が答える。

「武によって成る王と書いて、武成王（ぶせいおう）という。本名は黄飛虎（こうひこ）。彼は、わしにとって大恩ある人物での……わしらのような＜力＞を行使することはできなかったが、その代わり、とんでもない武芸の達人でな。王の武術指南役であり、全軍の訓練総指揮者。あらゆる『武器』を使いこなし、その武勇において右に出る者はなかった」

ほう……と、関心を持つ者たちに、太公望は説明を続ける。

「ふふふ……＜魔法＞が使えないからといって侮ってはいかんぞ……彼はな、正真正銘、戦いの『天才』だったのだ。その太刀筋で大岩を両断し、鉄棍棒で城壁を叩き割り、単騎で敵軍のど真ん中に突進してさんざんかき回した挙げ句に無傷で帰ってくるなんてザラ

でな、さらに＜術者＞が＜力＞を使う前に側まで駆け寄り、拳でもってぶっ飛ばしたり……とにかく、とんでもない男なのだ」

「それは……まさに伝説の＜ガンダールヴ＞そのものですな……」

あんぐりと口を開けて呟いたコルベール。そして、唖然とする一同。才人などは、内心で「三国志の呂布みたいだ」などという感想を持っていたのだが、まさかその『武成王』が、呂布と同じ大陸で活躍した武将だなどとは思いも寄らなかった。

「そういえば、彼の愛刀も、デルフリンガーと同じくしゃべる剣であったな」

「なにっ！　オレっち以外にもそんな奴がいたのか！！」

興奮するデルフリンガーに、うむ、と頷く太公望。

「飛刀といってな、名前の通り飛ぶ能力を持つ剣での。敵に投げつけても自力で飛んで帰ってきてくれる便利な剣なのだ。ただ……うっかり固いモノを切ったりすると大騒ぎして五月蠅い上に、剣のくせして臆病で戦うのを嫌がるので、評判はいまいちであったが」

ああ、たしかにそれはちょっとイヤだ。俺の相棒がデルフで良かった……と、おかしなところで才人の評価が上がったデルフリンガーであった。

「でだ。彼の息子たちは、皆そろって武芸に秀でておっての。その血縁者……妾腹の子で、母と共にわしのあずかり知らぬ遠国へ行っていた、ということにすれば、彼がわしと同じ東方の出身者ということにしてもおかしくない。最近になって偶然才人の太刀筋を見

て、ふと思い立ったわしが詳しく話を聞いてみて、その結果……彼の境遇を知ったと。こうすれば問題なかろう。万が一わしの出身地の者に知られるようなことがあっても、わしがそう言っていたとすれば通る」

「でも、そのひとの身分はどうなの？」

そう質問したルイズに対しては。

「それについては問題ない。武成王は、トリステイン流に言えば元帥位に就いていた武将で、かつ大貴族なのだ。個人の武勇だけでなく、軍を率いることにかけても一流、さらに気さくな性格で兵や民たちに慕われた人格者でな」

わしも、彼には本当に世話になったのだ……そう言って、遠い目をする太公望。

「二つ名で彼を呼ぶとすれば『武神』武成王黄飛虎。そして、このわし『軍師』太公望呂望。わしらのタッグは、国内どころか、敵国でも知らぬ者がないほどに有名だったのだよ……」

妄腹とはいえ、その息子に無体なことをするなど許し難い。そうわしが主張したとなれば、反発も少ないであろう。そう語る太公望へ、才人が訊ねた。

「本当にすごかったんだな、そのブセイオー……ってひと。けどさ……だったら、どうしてそのひとが＜ガンダールヴ＞にならなかったんだろう。俺なんかが呼ばれるより、ずっと相応しいと思うんだけど」

そう呟いた才人に、太公望は……沈んだ声で答えた。

「もう……彼はこの世におらんのだ」

「えっ？」

「敵の罠にかかってな……死んでしまったのだ……わしの身代わりとなって」

しん……と、静まりかえった学院長室の中で、太公望の声だけが響く。手を膝に置き、ぎりぎりと握り締めながら太公望は続ける。

「わしの目の前で……全身を酸の雨で溶かされて……助けたくとも、敵の罠は強固で、どうにもならなかった……そして死の間際、武成王はわしに言い残したのだ。太公望、後は頼んだ……と」

唇を噛み、全身を細かく震わせ俯いてしまった太公望に、周りの者たちは声をかけられなかった。いつも子供のように無邪気に振る舞う彼が、まさかそんな壮絶な体験をしてきていたとは……と。

「わしは、彼の意志を継いだ。彼とわしの悲願であった、地の平和を取り戻すために戦い続けた。そして……それは遂に実現した。だから、わしはもう戦などこりごりなのだ。あとはもう、ただ静かに過ごしたい……それだけなのだよ」

――だから……と、彼は続ける。

「そんなわしが、彼の『息子』を大切に扱いたいと思うのは当然であろう？　もしも、それに反論してくるものがおれば、これらの事情と、最悪わしの年齢と身分を明かしてしまっても構わない。さ

らに文句を言うものがいた場合、このわしが自ら相手になってやってもよい。そこまでしてくる馬鹿がおるとは思えんが、念のため言っておく」

オスマンは深く頷いた。その他のメンバーも同様だ。

「ちと話が湿っぽくなってしまったな、すまない。才人、そういうわけで、今の話をしっかり覚えておいてくれ。おぬしは武成王・黄飛虎の血を引く者だ、という設定だとな。幸い、わしと同じくこの国では珍しい黒髪で、顔の造形も似ておるから説得力は充分だ。国の名は……自分の出身国をそのまま言えば問題ない。自分たちの住む土地をロバ・アル・カリイエとは呼ばないから今までわからなかったのだ、とな」

「ああ、わかった」

「他の者たちもよいか？」

「はい」「わかったわ」「わたしも構わない」「もちろん」「わかったぜ」

全員の答えを聞いた太公望は、満足げに頷くと……最後に言った。

「あー、念のため言っておくが、今した話は全て本当のことだからな？　なーんちゃって、とか言ってひっくり返したりはせんから、信じてくれよ？」

「わかってるよ！！！！！」

――相変わらず、最後の最後でシリアスな雰囲気を台無しにする

太公望であった。

第３１話　空想と魔法そして怠惰が出会う時（後書き）

前半はイロモノ３人衆もといプロジェクトＸ、後半はシリアス風と空気が１８０度違ってしまいました。最初は２話に分けようかと思ったんですが、それには中途半端だったのでこんな感じになりました。夕べ更新すると言いつつできなかったお詫びということで……。

なお、この「才人を武成王の息子として扱う」は、当初から考えていた案になります。そうすれば、自然に地位を上げていけるかなと。あと、指抜きグローブ。これについては予想が当たったひとがいなかったのでちょっとガッツポーズしてしまいましたｗ

なお、このアイディアですが。実はドラゴンボールのビーデルから来ています。あとは飢狼伝説のテリー・ボガード、そしてストリートファイターのリュウ&ケンですね。空飛ぶベッドは、もちろんあの有名ゲームで登場する乗り物です。マジ欲しい。

３ＤＳのストリートファイター４やって、リュウのステージ音楽を聴いたとき、つくづく思いました。このゲームは自分の青春の思い出だったんだなあ……と。

最後に。ユーザーページの「活動報告」に、今後本作中で発生するイベントについて、一部抜粋して掲載しています。いちおうランダムに並べているので、バレを気にせず、かつなにが起こるんだろう！？　と、興味のあるかたはよろしければ覗いてみてください。全部当てた人はマジで神認定します。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第３２話　軍師、羽根の力に屈するの事

――今後、才人を太公望にとっての大恩人『武成王の妾腹の子』として扱う。

そのため、太公望は武成王・黄飛虎について才人を含む全員――オスマン、コルベール、タバサ、ルイズ、デルフリンガー――に、彼について、より詳しく語った。

ただし、父の記憶はおぼろげにしか残っておらず、幼少の頃ほんの少しだけ教わった剣技だけを頼りに、あとは自己流で腕を磨いてきた。

父の話は母から聞いていたが、ずっと海を隔てた遠国で過ごしていたため、太公望から話を聞くまで、そこまでの大人物だとは全く知らなかった……といったような捏造設定を、お涙頂戴要素を交えつつ才人に叩き込みながら。

「と、まあこんな感じで話を合わせていくとするかの。よって、ルイズも今後は＜使い魔＞ではなく『護衛』として彼を扱って欲しい。都合の悪いときは、わしに話を振ってくれてもよいからな」

それを聞いて、頷くルイズ。

「そうね……昨日の件もあるし、サイトがすごい剣士だっていうのは真実だし。貴族として、嘘をつくのは嫌だけど……でも、あたしが助けられたのは本当のことだし。だから、今度はあたしが礼を返す番よね。貴族の子女として」

その言葉に、ぱあああっと顔を綻ばせた才人。もともと、ルイズはとんでもない美少女だ。しかも、彼にとっては好み超ド級ストライクな――まあ、一部箇所を除き――女の子だ。その彼女に、そんなことを言われて嬉しくないわけがない。

「とはいえ、才人もあまり調子に乗るでないぞ。ここの＜魔法＞信仰と平民蔑視はかなり根深いものだからのう。それと、いきなり態度を変えるのはおかしいから、基本は今までのままでよいからな」

「ああ、そうだな。何か聞かれたときだけ答えるくらいにしておくよ」

「ほかの皆も、これでよいか？」

「勿論じゃ」「わかりました」「問題ない」「ああ」

全員の答えに、うむ。と、満足げに頷いた太公望が、では今日はこれくらいで――と、場を締めようとしたその時だった。彼の身に『異変』が起こったのは。

「……これは、なんのつもりだ？　オスマン殿」

椅子から突如現れた＜拘束具＞によって、全く身動きできない状態にガッチリと押さえ込まれた太公望は、何故かふさぎ込んだような様子で俯いているオスマンに訊ねた。

「いや、な……わしとしても、可愛い女の子相手ならともかく、男なんぞにこんな真似はしたくないのじゃよ……だがな、どうしてもこれだけはやらなければいけないことなんじゃ」

はあっ……と、深いため息をついたオスマンは、パチンと指を鳴らす。すると……コルベールが、ゆっくりと太公望の側へ近寄っていった。

「コルベール君。大変申し訳ないが、彼の靴を脱がせてくれんかの」

「わかりました……すみません、上司の命令ですので」

「ちょ……ちょっと待て！　一体このわしに何をするつもりなのだ！！」

暴れようにも身体に全く力が入らない。オスマンの＜錬金＞によって作り出された拘束具は、それはもう見事なまでに完璧な状態で、太公望を縛り付けていた。

「君は……さっきこう言ったな。王の武術指南役にして元帥のブセイオー殿とタッグを組んでいたと。そして……その事実は、国内のみならず、他国でも有名であったと」

静かな……だがしかし暗い情念を宿した瞳で、オスマンは問う。

「そして、大貴族で将たる彼は……君の身代わりとなって死んだのだ、と」

そのオスマンの問いに、太公望は己の失策を……つい当時を思い出して感傷的になっていたせいで、うっかり本来言うべきではないことまでぽろっと口に出してしまったことを悔いた。だが、全てはもう、手遅れである。

「それほどの武将が、自分を犠牲にしてまで救おうとした人物……あなたは、ひょっとして彼の縁者、あるいは……より身分の高い重要人物である可能性がある」

そう静かに呟いたタバサの瞳も、また闇に染まっていた。

「ミス・ヴァリエール。わしの机の上にな、羽根ペンが乗っておるじゃろう？　それをだな……＜念力＞で手元へ持ってくるのじゃ」

「は、はい、学院長」

「ん、んななななっ……」

ルイズが『杖』を一振りすると、ふわふわと羽根ペンが飛んできた。それを見た太公望は、彼らが何をしようとしているのか、瞬時に悟ってしまった。こういうとき、自分の判断力が本当に恨めしく思える。

「そろそろ、素直になってもらおうかの……ミスタ・タイコーボー。なに、大人しくしゃべってくれれば何もしない。君は……一体何者なのかね」

「い、いや、言ってもおぬしら絶対信じないと……」

「ミス・ヴァリエール。彼の足の裏をだね、その羽根ペンで……」

「いやーッ！　だ、誰かッ、助けてくれ――ッ！！」

太公望の絶叫が、学院長室に響き渡った……そして。

――只今大変見苦しい場面が展開されております。しばらくお待ち下さい――

「いやはや……まさか、元総軍司令官。おまけに王の相談役とは……」

「おでれーた。この兄ちゃん、ただもんじゃねえとは思ってたが」

「しかし、あれで才能がないとは……彼の国は相当レベルが高いんですなあ」

――それから1時間後。『ルイズの＜念力＞練習を兼ねた、羽根ペンによるくすぐり攻撃』によって、太公望はかなりの情報を引き出されていた。

乱世に生まれ。幼い頃から修行に励み、同時に『軍学』と『政治学』そして『自然科学』を学んだこと。成長した後に、身分はそれほど高くなかったにも関わらず、時の王に知恵ある者として見出され、王宮で働くようになったこと。

残念ながら＜力＞の行使者としての才能はほとんど無かったため、戦場では後方勤務が多かったが、その代わりに学んだ知識を駆使し、老王の死後は新たに即位した若き王を支えるべく官僚のひとりとして奮闘。いつしか新王の側近くで仕えるまでになったこと。

戦場で圧倒的な＜力＞を持つ敵将に、回避できない一騎打ちを挑まれた結果敗北。捕らえられ、処刑されそうになったところを武成王黄飛虎によって命を救われ、そしてそれをきっかけに彼と仲良くなり……やがては年齢を超えた親友として、家族ぐるみの付き合い

をするまでになったこと。

そんな中、ついに各地で起きていた合戦は大陸中を巻き込んだ大戦となり……その乱を鎮める戦いの途中、武成王は例の罠から太公望を助けるために亡くなり、彼と同じ元帥にまで昇格していた太公望は、その意志を継ぎ、改めて戦を終わらせる決意をしたこと。

『知将』として王と兵たちの信頼を勝ち得ていたこともあって、武成王亡き後は『軍最高司令官』として指揮をとることとなり――国の命運を賭けた最後の大合戦においては、王自らが最高司令官、自分はそれを支える軍師として参戦。勝利に貢献したこと。

そして……遂に敵国を討ち滅ぼした彼は、後始末を終えた後、王や多くの人々に引き留められるも職を辞して、ひとり旅に出たこと――。

「壮絶すぎだろコイツの人生……」

「若いくせに妙にヒネた性格になるわけじゃわい……」

……ぶっちゃけた話、これは嘘だらけの内容なのであるが、いちおう真実――王の相談役にして軍師であること、処刑寸前で武成王に助けられ、友人関係となったこと、最高司令官であったことなど――も、それなりに混じっているため話にそれほど違和感がない。

そして、ここまでされながらも隠すべき肝心の情報は一切漏らしていないところは、さすが太公望である。しかし、ある意味ここまで喋らせたオスマンらの『手腕』は、褒めてしかるべきであろう。

文字通り魂が抜けたような顔をして、椅子に縛られたままぐった

りと伸びてしまっている太公望の姿を見て、オスマン以下『刑』の執行見届け人となった彼らは頭を抱えてしまった。

「なあ娘っ子。オレ様が言うのもなんだが、かなりまずいんじゃないかコレ」

カチカチと鍔を鳴らしながら言うデルフリンガーに。

「あ、あたし、つい、ちょ、調子に乗りすぎて……」

これまた同様に青ざめた顔で答えるルイズ。

――ロバ・アル・カリイエの……辞職済みとはいえ総軍司令官にして王の相談役たる相手に、とんでもないことをしてしまった。トリステインで例えるならば、グラモン元帥とマザリーニ枢機卿を足したような地位にあった人物に、よりにもよって『くすぐりの刑』を執行してしまったのである。

これが、召喚数日以内ならば冗談の一言で済ませられた話だ。しかし……彼らは、これまで太公望の実力や立ち振る舞いを見てきてしまっている。

そして、ただの将官にしては深すぎるといって差し支えない見識を持ち、その割に頑ななまでに身分を隠そうとしていた彼が、この期に及んでくだらない見栄を張るような嘘を言うとは思えない。そう……彼らは既に、そんな判断をするレベルにまで彼を『信頼』してしまっていたのである。

「わしは思う。＜魔法＞で全ての記憶が消せたなら……と」

「＜魔法＞って万能じゃないんだネ……モグラ、よくわかったヨ」

「何故モグラなのかねサイト君……まあ、今すぐどこかに潜りたいという気持ちは、わたしにもよく理解できますが」

そうぼやく彼らに、この中でいちばん雲隠れしたいのはわたしだ！　……と、大声で主張したい気持ちでいっぱいなタバサは……どうやって彼に謝罪したらいいのか、ただそれだけをひたすらに考えていた。

○●○●○●○●

「久しぶりに死ぬかと思ったわ」

ぐったりした表情――まるで腐った魚のような目をした太公望は、自分の前に置かれた桃のタルト――学院長が特別に厨房へ注文し、焼いてもらった1ホールまるごと――に、フォークを突き刺しながら、そう呟いた。

「いや、すまん。正直やりすぎたと反省しておる」

さすがに頭を下げるオスマンと、参加者全員。

「まあ、わしの自業自得な面もあるとしてだな……ともかく、最高指令云々を誰かに話したとしても、到底信じられる話じゃないのは理解できるであろう？」

それは確かに――と、彼の姿を見て納得する周囲の者たち。あきらかに15～6程度にしか見えない上に、普段の彼はどうにも子供

っぽい。しかも＜フェイス・チェンジ＞の類ではなく完全に素顔であるというから驚きだ。

「それにだ。わしは国元では元帥なのだ！　なーんて主張して、昔の身分を笠に着て威張り散らすような恥ずかしい真似だけは、絶対にしたくなかったのだよ」

「それで……隠しておられたのですか」

「まあのう。ああ、静かに暮らしたいというのも本音だ。あちこち遊びに行ったりするのはむしろ大歓迎、それ以外にちょっと誰かの手伝いをする程度なら別に構わんがの」

桃のタルトを咀嚼しながら答える太公望。少しずつ機嫌が直ってきているのは甘い物効果であろうか。その表情を見て、一同は「やっぱりコイツには甘味を与えるのが最も効果的なんだ」と、改めて理解した。

「そういうわけでだ、ギーシュとキュルケが知っている通りの地位……つまりは、元退役中将ということで通しておいて欲しい。まったく……我ながらつい感傷的になって余計なことを喋ってしまったものだ」

そう、ため息をつきながら願う太公望に、全員が了解した。

「それと、合戦のことはあまり思い出したくない話でもあるので、できればあまり触れないでいて欲しい。誤解のないように言っておくが、わしは本当に争いごとが嫌いなのだよ。軍にいたのは、わし以外に適任がおらんかった、ただそれだけの理由でのう」

「え、でもお前より実力が上の＜魔法使い＞がいっぱいいたんだろ？」

なのに、どうして戦嫌いなお前が、よりによって最高司令官になるんだよ？　そう聞いた才人に、茶を啜りながら太公望は答える。

「まあ、戦いの場だけに限定するならば、おかしなことだと思われるのは仕方のないことかもしれんの」

少し長くなるが、構わんか？　そう前置きした上で、太公望は語り始めた。

「戦争というものは、そもそも政治の延長、一つの手段に過ぎないのだ。事前の話し合いがうまくいかなかったから、暴力でもって相手を無理矢理屈服させる。または、話もせずに後ろから殴りかかる。これが戦争。どうだ？　こう聞くと、まるで子供の喧嘩みたいであろう？」

そもそもだ……と、太公望は続ける。

「戦わずして勝つ。これが、双方に被害がなく最も理想的な形なのだ。ここでいう勝ちというのは、政治や交渉でもって相手国と仲良くなることも含まれる。正直これがお互いにとって一番であるな」

敵となるはずだった相手と仲良くなれれば、新たな文化交流が生まれる。それによってお互いに刺激しあい、高めあえるような存在になれば国全体の発展に繋がる。これは双方の国にとって良いことなのだ――と。

「戦いを避けるため、自軍の兵力を見せつけて威圧し、相手のや

る気を削ぐという方法もある。だが……これは、相手がこちらを敵と認識した上で、戦力を蓄えてしまう可能性があるので、盗賊団のような少人数の敵相手ならばともかく、国を相手にする場合は正直とりたくない手段だ」

と、持論を語る太公望の話に聞き入る彼らは、納得した。確かに太公望は『戦わずに勝つ』『まずは交渉から入る』これらを徹底している……と。

「どうしても戦が避けられないとなった場合は、その前に自軍の持つ戦力を改めて確認しつつも、相手の情報を徹底的に集め、精査する。そして、やるからには勝つための準備を整える。それ以外にも、周辺諸国との調整やらなんやら、やらねばならんことがとにかくたくさんあるのだ。にもかかわらず、だ……」

そこまで語った太公望は……突然何かを思い出したかのように、ギリギリと拳を握り締めている。手に持ったフォークが、プルプルと震えていた。

「こっちが、数ヶ月……あるいは数年かけて行った準備をあっさり台無しにする、バトルマニアどもが世の中には大勢おってな……絶対先に仕掛けるなっつっとるのに、わしを臆病者扱いして勝手に敵陣に乗り込んで砲撃かますわ、戦場で作戦命令無視して戦端開くわ、そのくせ真っ先にやられて戻ってきおって……なまじ＜力＞が強いせいで、こんなふうにさんざん場をかき乱す馬鹿者共が多いこと多いこと……」

昔を思い出したのであろう。ウガーッ！　と叫び声をあげる太公望。

「そんなやつらが司令官として立ってみろ、迷惑を被るのは誰だ？　まずは、そんな愚か者に従わねばならぬ兵たちだ。本人が馬鹿やって自分だけ死ぬのは自業自得だが、巻き添えで死ぬ彼らにとっては、たまったものではないだろう？」

ぐぬぬぬぬ……と、うなり声をあげながら、さらに彼は続ける。

「次に、後に残される彼ら兵士の家族たち。そして……上が愚かな戦を仕掛けたがために、本来必要のなかった戦費をまかなうべく、重い税をかけられる国民たちだ。そもそも、国の宝である民草に迷惑をかけていいなどという法はないであろう？」

だんだん論説に熱が入ってきたのであろう、彼は身振り手振りを交え説明する。

「だから、そういった政治的感覚と、戦場における駆け引きの手腕を併せ持っておった武成王やわしが司令官として王に指名され……結果、本来戦嫌いであったわしが軍を率いるしかなかったのだ！」

ドン！　と、拳でテーブルを叩く太公望。

「つまり、総軍司令官として軍を率いるために必要なのは、これらを考えた上で動くことのできる能力であり、個人の＜力＞の強さ云々は関係ないのだ！」

……まあ、たまには下の者に対しての威厳を保つ必要があるから、ある程度の＜力＞は持っておらんといかんがのう。そう言って、太公望は話を締めた。

――実際に軍を率いたのは封神計画の一環であったのだが、当初

から太公望自身は民を巻き込む戦いを徹底して避けようとしていた。だが、残念ながら時代の流れが、それを許さなかったのである――

オスマン氏は、やっぱりこの男トリステインに欲しかったわ……と、肩を落とした。宮廷に巣くう一部のバカ貴族どもに今の話を聞かせてやりたい、と。

話し終えた後、顔を伏せ……既に冷めてしまった茶を啜る太公望を見つめながら、コルベールは思った。彼は、戦の話をしたがらない。しかし、いつか――もっと時が過ぎ、彼と今よりも親しくなる機会が訪れた時、こんな話ができる人物に、どうしても聞いてもらいたいことがある。彼は、いったい何と言うであろうか――と。

「さて。だいぶ話が長くなってしまったが、これでもういいかの」

「ああ、すまんかったな、その……色々と」

「まあ、わしも甘かった。それだけに、才人の件はくれぐれも注意しよう」

そして、その場は解散と相成った――。

○●○●○●○●

その後。部屋へ戻り、本を読んでいた太公望が、ふと思い出したように声を出した。

「タバサよ。前におぬしと約束しとった模擬戦の件なのだが……」

「……今日の罰ゲーム」

「違うわ！　おぬし、わしをなんだと思っとるのだ！！」

まったく失礼な……そうブツブツと文句を垂れる彼を見て、ふいにタバサは思った。ちゃんとわたしの約束も覚えていてくれたのだ……と。

「あと数日もしたら、お互い完全に疲れが取れるであろう？　とはいえ、ちと準備もあるので……それが終わり次第、そうさのう、来週末、あるいはそれ以降になってしまうが、約束通り一戦やってみてもよいと考えておるのだが、どうだ？」

タバサは奮い立った。戦嫌いを宣言している彼から申し込みをしてくれる機会なんて、そうそうあるものではないだろう、と。しかも、太公望はあきらかに自分以上の実力者にして、戦場を駆け抜けた本物の『司令官』だ。

「是非お願いしたい」

「よし、決まりだな。ただし……これは絶対に1対1で、かつ誰にも見られない場所で行いたいと思うのだが、構わぬか？」

「それは……何故？」

「このハルケギニアに来てから、まだわしがおぬしに見せていないものがある。だがこれは、おそらく異端とされてもおかしくないほどに特殊な、国元でもわしだけが扱える、わしだけの＜魔法＞なのだ」

『異端』。あの＜フィールド＞以外にも何かあるとは思っていたが、さらに隠し技があるというのか。それなら、誰にも見せたくないというのは理解できる。タバサは、承諾の印に頷いた。

「ある意味……これを使うということは、わしの『全力』にして『本気』だ。タバサよ……覚悟はよいか？」

――そう言った太公望の目に宿る光は、とても真剣なものであった。

第３２話　軍師、羽根の力に屈するの事（後書き）

太公望が早速ブーメランを食らいました。うっかりぽろっと言うよね彼……というか、原作よりうっかりさん度が大幅に上がっている気がする……ちょっと気をつけなければ。

珍しく、週明け更新入りました！　長めですが、お楽しみいただければ幸いです。

ところで、ついにタバサ戦の予約が入りました……が、その前に１戦挟みます。誰との戦いかは、ここ数話の流れでおわかりになるかと思われますが……念のため。

２０１１／０４／２５　２２：４０　誤字脱字、および後半の内容がぐだぐだでちゃんと繋がっていなかったため、文章を大幅に加筆修正しました。本来太公望の時代にそぐわない内容なんですが、彼の考え方に近いと思われたため、あえて入れてみました。もっとも、本来は司令官が全部やるべきものじゃないんですけどね……；正直太公望がチートすぎるだけで。

全然関係ないんですが「ブセイオー」って書くと、なんか合体変形しそうだなあとおもいました。まる。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第３３話　土くれがもたらす風

――怪盗改め、情報斥候となった『土くれ』のフーケはご機嫌であった。

トリステインからの逃亡成功後、彼女は隣国である帝政ゲルマニアの首都・ヴィンドボナへその身を隠していた。

そして、新たな上司となった太公望との約束通り、伝書フクロウで居場所を知らせてからわずか数日後。すぐに返事が返ってきたのである。

「カット済みの石に、原石が半々か……しかも、どれも売り払うには安すぎず高すぎずで取引しやすいようなものが選ばれてる上に、傷がつかないようにちゃんと梱包されてるなんてね」

そう。その伝書フクロウの足には、例の『報酬』として約束されていた宝石――なんと、当初の予定であった１ヶ月分の前渡しどころか、その３倍の額に相当する天然のそれが同梱されていたのである。

『約束の１月分、および例の情報料だ。それと、打ち合わせの際に、肝心の逃亡先での一時的な滞在費について、詳細を話し合っておくのを忘れてしまっていた、すまない。よって、今回併せて同封させてもらうこととする』

そう記された手紙を見て、フーケはにんまりした。これは……予想以上の『当たり』を引いたのではなかろうか……と。そして、続けて書かれた内容に目を通す。

『また、今回カット済みのものと原石を半々で送ったが、もしもどちらか片方がいい、あるいは希望の石や貴金属、装飾品などがあるということであれば、その都度教えて欲しい。可能な限り対応する』

「まったく……あのセクハラジジイなんかより、よっぽど気が利いてるじゃないか、あの坊や。おっと、確かわたしより年上なのよね……あれで。さて、それで肝心の仕事内容は……って！　あはは はっ、なるほどね。これはわたしの＜力＞を欲しがるはずだわ」

そこに書かれていた仕事内容とは――

『＜マジック・アイテム＞に関する情報、およびその詳細調査報告』

『近隣諸国の最新の噂話、および可能であれば政治関連の情報調査報告』

で、あった。確かに＜マジック・アイテム＞を専門に頂戴していた元怪盗フーケにとってぴったりの仕事であり、彼女以上に有能な者はそうそういないだろう。後者の情報についても、今後情報入手のために各地を移動することを考えれば、そう難しくはなさそうだ。

「ふむふむ……アイテムのほうは、これまで前調べをしてあった情報についてでも、最近のものであればいいのね……それなら、すぐにいくつかリストアップできるわ」

そう呟いたフーケは、かつて入手していたアイテムの情報について書き連ねる。

「それにしても……最後のコレはまた変わった注文だね」

『なお＜マジック・アイテム＞について、特に以下のような特徴を持つものの情報を強く求める。これらについては、入手難易度は一切問わない。たとえば王宮の金庫にしまわれているようなものでも構わない。情報だけでも寄せられたし』

その特徴とは。

『破壊の杖と同様＜マジック・アイテム＞とされているにも関わらず、使用方法が一切不明であるもの』

『触れると呪われる、あるいは気絶、干涸らびて死亡する等の噂、或いはそういった特徴を持つ＜マジック・アイテム＞または、それに類するとされているもの』

……で、あった。

「なんだい、えらく物騒なものをご所望だねえ……でもまあ、わたしが使うわけじゃないし、あくまで情報を送ればいいだけなんだから、構わないか」

そういえば……いくつかそんな＜アイテム＞があったっけ。そう思い返しながら、彼女は呟いた。特にその中で――彼女の印象に残っていたそれ。フーケ……いや、マチルダにとって仇といってもいい相手が持っていた『音が鳴らないオルゴール』。

「確かに＜ディテクト・マジック＞に反応するのに、おかしなアイテムだったわよね、あれは。＜固定化＞もかかってるんだから壊

れているわけじゃないだろうし」

他にも何かあったっけ……ああ、そういえば、あれと似たようなものが各王家に代々伝わってるんだったわ。それもついでに書いておこう。

――この彼女の思いつきが、後の歴史へ大きな影響を与えることとなる。

「さて……他には何か書かれてないのかしら」

と、改めて手紙を読み続ける。

『とりあえず、今回は以上だ。なお、この手紙の内容が他者に漏れることのないよう、開封してから30分で、自動的に爆発する』

ヒイイイッ！　その文章を見た途端、フーケは情けない悲鳴を上げて、机の下に潜り込んだ。何故なら、ちょうど間もなく開封してから30分が経過するからだ。

が……待てど暮らせどその時は訪れない。と……おそらく最後の1枚であろう手紙が、ひらりと彼女の前へ舞い落ちてきた。

『……と、いうような便利機能は搭載されていないので、内容を暗記したら、即座に燃やして処分して欲しい――望』

その一文を見た彼女は、両手をプルプルと震わせ……大声で叫んだ。

「やっぱりガキだよ、アイツはッ！！！」

○●○●○●○●

――さて。その頃フーケにガキ認定された者はというと。

「……ヘッキシッ！！」

「おや、風邪ですか？　でしたら無理はなさらないほうがいいですぞ」

「いや、そういう訳では……誰か、わしの噂でもしておるのかのう」

コルベールの『研究室』で、才人と共に例の『試作品』を見せてもらっていた。注文の品を受け取った才人は、早速手にはめてみる。

すると……身体中が軽くなり、その『武器』の使い方が才人の頭の中へ流れ込んできた。拳の使い方のみならず、足技まで網羅したそれは――まさに『格闘ゲーム』の操作説明書が脳内にインプットされていくような感覚であった。

「ちゃんと『武器』として認識できてるみたいです！　使い方もバッチリ」

「おお、それはよかったのう！」

「はめ心地はどうかね？」

「ちょっときつめかな……とは思いますけど、皮だから馴染めば

大丈夫です」

「それでは、さっそく試してみますか」

……で。開発関係者3名と、それを知った見学者数名――ルイズ、タバサ、ギーシュの3名＋デルフリンガー。キュルケは先約があるとかで今回は参加していなかった――が、人通りのない中庭へと移動する。

なお、この時ルイズは練習を兼ねて、柄の部分に柔らかい布を巻き付けた箒に乗って――跨るのではなく横に腰掛ける形で――ぷかぷかと宙に浮いていた。そう、既に太公望から『物体を浮かせて飛ぶ』のはやっても構わないという許可が出るまでに彼女の＜念力＞の腕は上達していたのだ。それにしてもルイズ、すごいバランス感覚である。

そして中庭中央まで移動すると、全員の見ている前で、早速シャドーを開始した才人。正拳突き、回し蹴り、両手を交互に動かしたジャブ……などなど、それはかなりのスピードで展開され、見学者たちを驚かせた。

「いやはや……これはたいしたものですぞ」

「すごいな。サイトは、剣だけでなく素手での格闘もここまでやれるのだね」

そう呟いたギーシュは、彼の動きにすっかり魅入られていた。

一通り試して、身体が温まった才人は、全員の元へ戻ってきた。彼らは、それを盛大な拍手で出迎える。才人は、照れくさそうに頭

を掻いて笑っていた。

「すごいじゃないのサイト！」

「わたしでも見切れなかった」

そう褒め称える見学者たちに、満面の笑みでもって応える才人。相変わらず調子に乗りやすい男である。まあ、気持ちはわからなくもないが。

「うーん、できれば組み手とかもやりたいとこなんだけどな……さすがに『ワルキューレ』殴ったら痛そうだしなあ」

そんな彼のリクエストに応えたのは、なんと太公望であった。コキコキと全身を鳴らしながら才人の元へ近づいてゆく。

「よし、ならばわしが相手をしてやろう」

「おい待てや中将閣下。お前＜魔法使い＞じゃねーか！」

「魔法が使えぬ相手に『打神鞭』は使わぬ」

「じゃあ、どうするっていうんだよ！！」

と……そんな才人の問いに、太公望は握り込んだ左手をぐっと突き出し、腰だめに構えたそれ――まさしく『拳法』のポーズでもって、それに答えた。

「武器ナシでやるのだ」

「……面白ぇじゃねえか！！」

そしてふたりは広場の中央へと移動すると、向き合って礼をした。

「ミスタ・タイコーボーは大丈夫なのかしら」

「彼はああ見えて元軍人ですからな。おそらく勝算があるのでしょう」

共に見学者の輪に加わっていたタバサも、太公望を心配するひとりであった。たしかに彼は軍人だが……『杖』なしで、あの動きをする相手にどう立ち向かうというのだろう。間違っても、怪我などしないで欲しいのだけれど……。

「さあ！　ラウンドワンだ！！」

――そして、ふたりの戦いは始まった。

「そんじゃ……行くぜッ！！」

かけ声と共に、いっきに距離を詰めた才人は、太公望に向けて殴りかかる。だが、やや大振りにすぎたその拳は、あっさりと躱され、地面へと叩き付けられると――驚いたことに、彼の拳はそのまま土をえぐり、舞い上げる。

「なんなのだ、そのパワーは……とんでもないのう」

思わずひるんだ太公望の隙を、才人は見逃さなかった。ザッと太公望の懐へ入り込むと、素早く蹴りを叩き込む……が、これは「どひゃー！」というちょっと間の抜けた声とともに、綺麗に躱されて

しまう。

「くそ、結構動きが速いな」

「わしは、逃げ足には定評があるのだ」

「威張って言うことじゃねェだろ！！」

軽口をたたきあいながらも、彼らの戦闘は続く。と……だんだん太公望の動きに慣れてきたのか、才人の動きに無駄がなくなってきた。つぎつぎと繰り出される攻撃を紙一重で躱しながら、太公望は反撃のチャンスを伺う。

「ふ、ふたりとも凄いな……」

「正直、ここまでとは思わなかった。特にタイコーボー」

「いやはや、まったくですぞ」

「あ、あたし、どうやって戦ってるのかよく見えないわ……速すぎて」

集まった観客たちは、驚きの目で彼らの動きを必死に追っている。

そして、ついに反撃のきっかけを掴んだ太公望は、身体をサッと沈めると、下段回し蹴りで、才人を転ばせることに成功した。そしてそのまま拳による追撃に入るも、あっさりと避けられた上に、即足技によって反撃される。なんとかギリギリでそれを躱した太公望は、いったん距離を取ると、額の汗をぬぐう。

「だまされた！　才人のくせに強いではないかっ！！」

「聞き捨てならねェ台詞だぞコラ」

「仕方ない……こうなったら、これを使うしかあるまいのう」

と、太公望は懐に手を入れると、一本の瓶を取り出した。

「ワイン……ですな」「ワイン……よね」

観客たちの呟きをよそに、そんなデカイ物、懐のどこに入っていたんだ。そうツッコみたくなるのを必死にこらえた才人は、太公望に向かって訊ねる。

「おい、なんだそりゃ」

「フハハハハハ、厨房からアルビオンの古いのをパクってきたのだ」

「マルトーさんにチクんぞヲイ」

と、太公望はワインの瓶口を手刀でスパーンと叩き切ると、ゴクゴクといっきに飲み干してしまった。ウィー、ヒック。しゃっくりを上げた太公望。それはもう見事な酔っぱらいの完成である。

「おい……どういうつもりだよ」

そう問うた才人へ、足元をふらつかせながら太公望は答える。

「酔えば酔うほど強くなる～。師匠直伝の『泥酔拳』で勝負～」

「テメェふざけるな！！」

そう叫んで飛びかかっていった才人をぬらりと躱した太公望は、ちょこんと片足を前に出して、才人をあっさり前へと転ばせる。そして空中へ飛び上がると、彼の背中へ落下による力を加えた強烈な肘撃ちを炸裂させた。

「ぐはっ……」

思わず、昼に食べたものを戻しそうになった才人は、なんとか立ち上がろうとしたものの、そこへさらに太公望の蹴りが飛び、２メイルほど吹っ飛ばされる。

悶絶する才人をよそに、太公望は余裕の表情でその場に横になってしまった。

「き……きったねえ……急に強くなりやがって……ドーピングじゃねェのか」

よろめきながら立ち上がり、抗議した才人へ太公望は答える。

「泥酔拳は立派な技。おぬしが弱いのでは～？」

「こっ……このヤロー！！」

そして。必死の攻撃をはじめるも、ぬらりくらりとトリッキーな動きで躱されまくった才人はだんだんと体力を削られていき……ついには、大振りの右正拳付きにカウンターを合わせられ、その場で気絶してしまった――。

○●○●○●○●

「いやぁ強ぇな兄ちゃん。さすがは元軍人だ」

木の根元に立て掛けられたデルフリンガーは、感心した声で褒め称えた。

「本当よね。あなたはメイジなのに」

そう言ったルイズへ、太公望は答えた。

「戦場で『杖がなくなりました、もう戦えないので命だけは勘弁してください』が通用するわけなかろう？　当然、体術も鍛えておるのだ」

彼の言う通りです。そう頷いたコルベールへ、ほえ～っとした顔をするルイズ。タバサも、何か思うところがあったのだろう。考え込むように下を向いていた。ちなみに、才人はそのタバサの＜治癒＞によって、既に回復している。

「ところでデルフリンガーよ。おぬし、確か才人に剣を教えておるのだったな」

「まあな。伊達にこの６０００年、いろいろな剣士に使われてきたわけじゃねェからな。基本的な動きから応用まで、強かった奴らの剣技はだいたい覚えてるぜ」

それは素晴らしい。そう褒めた太公望は、次に才人に向かって言

った。

「と、いうわけで剣についてはデルフリンガーから教えてもらうとして……素手の組み手については、ある程度わしが相手になってやれると思うが、どうだ？」

「やる。つーか、絶対お前の顔面に一撃入れるまで諦めねェ」

「ニョホホホホ。さーて、いつになったら実現するかの～」

「チクショー！　マジムカツクーッ！！」

――そして、平和な一日は過ぎ去っていった――

第３３話　土くれがもたらす風（後書き）

全世界の才人さん、ならびにちんとうさん、すみません。

遂に実現しました、リクエストが最も多かった「泥酔拳」です！（次点打神鞭）　まとも？なバトルを書くのは初めてでしたが、いかがでしょうか？

ところで、以下お知らせです。

まず、昨日のうちに３２話（この前話）を見直しの上、大幅修正しております。もしよろしければ、再読いただければ幸いです。

そしてもうひとつ。これも問い合わせがあったのですが、原作２巻で発生するアルビオン関連イベントは、この先しばらく発生しない……と、申しますか、ストーリー全体のイベントを全体構成の関係上、原作から大きく入れ替えます（これも、当初からの予定でした）。よって、ニューカッスル城のワルド戦他を期待しているかたは誠に申し訳ありませんが、関連イベントはもうしばらく先になる予定ですので、何卒ご理解くださいませ。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第３４話　最高　対　最強

――才人が新たな『武器』を手に入れてから、早２週間が経とうとしていた。

この間、彼の周囲には劇的な変化があった。まず、自分への待遇がこれまでの＜使い魔＞扱いから一転、ルイズの『護衛役』として認識されるようになったこと。

その理由として、まず例の『才人は武成王の妾腹の息子』云々の話について、オスマン学院長から教師達に対し、その旨の通達が行われたからである。

当然ながら、最初はほとんどの者達から反発の声が上がった。だからどうした、所詮は他国。しかも遠い東方の平民だろう……と。

そこで、オスマンが次の段階――もしも彼、サイト君を侮辱するならば、そのブセイオー元帥の祖国であり、ミスタ・タイコーボーの出身国にしてロバ・アル・カリイエ最大の国家・シュウを侮辱したと見なされ、最悪の場合戦になる可能性があると話した。これで、教師たちは遠い東方とはいえ国際問題を懸念し、了承した。

……さすがに教職に就いている者に、それ以上言う必要はなかったのだった。

生徒の見本たるべき教師が、才人を無体に扱わない。これは大きい。

また、召喚者であるルイズ――トリステインでも特に有名な大貴

族の娘が、あえてクラスメイト達の前で、これまでとは一転、才人に対しての扱いを＜使い魔＞のそれから変えたという事実もまた、周囲の子供たちに衝撃を与えた。

あのプライドの高いルイズが、あそこまで態度を変えるとは……実はコイツ、ただの平民じゃないのではないか？　と。

それに続いて。既に生徒たちのほとんどと仲良くなっていた太公望が、才人の『父』である（と、いう設定の）武成王についての武勇伝や、自国……つまりは東方の＜メイジ＞についてこれまた捏造設定を交えつつ面白おかしく語り――これの受けが思いのほか良かったことで、才人が『東方最強の＜メイジ殺し＞の息子』という認識が少しずつ染み渡っていったこと。

――そして。その認識が広範囲にまで至った頃。タイミングを見計らったように、太公望がギーシュへと『協力』を依頼した。

快くその申し出を受けた彼の『ワルキューレ』7体を、瞬殺してのけた才人の『剣技』と。おまけに太公望との『組み手』までも見せられた生徒、及び学院関係者たちの内心に、この少年……メイジでこそないが、実はとんでもない存在なのではないか、という意識が生まれ。

さらに、それによって相対的に同じ『平民』たちの間での評判も上がった。特に、厨房の責任者であり料理長のマルトーなど、

「あの若さで、貴族どもとまともに戦えるほどの武芸の『達人』なのに、ちっとも偉ぶらない。隠し子ってことで今まで大変だったみたいだが……そのせいなのかね。苦労は人を成長させるっていうからな」

などと、周囲に話してまわっていたほどだ。

ついには、才人本人が持っていた最大の資質――性格が人なつっこく明るい。また、ある意味誰に対しても公平に接するため、いつのまにか周りに人の輪を作ること――のおかげで、彼は、最初からこの学院にいたのではないのかというまでに周りにとけ込むことに成功したのであった。

――そんな彼を召喚したご主人さまはといえば。こちらも大きな変化があった。

二つ名が『ゼロ』から『箒星（ほうきぼし）』に変わったのである。

『箒に腰掛ける』という、他のメイジ達と比べると特殊な形ではあったが、はじめて自力で空が飛べるようになったルイズは、それを心から喜んだ。

そして、宙を飛び回ることでさらに『空間把握』の能力が上がるであろう、という太公望の言葉と、自分自身の「もっと自由に空を飛べるようになりたい」という願望から、彼女は放課後になると、練習のためずっと箒で空を飛ぶようになっていた。

当然、そんなことをしていれば人目につく。当初は奇異の目で見られていたのだが……しかし、そんな彼女の姿を目撃した一部の者――おもに、男子生徒――が、その可憐な姿に、文字通り心臓（ハート）を鷲掴みにされてしまったのだ。

本来、平民が使う『箒』という粗末な道具。そこに、貴族の娘―

―それも、学院内でもとびきりの美少女が、可愛らしくちょこんと腰掛けてぷかぷかと宙に浮かぶ姿は、そのアンバランスさが故に、多くの男たちの心を捕らえた。才人の祖国風に言うならば、所謂『ギャップ萌え』というやつである。

で。あるときギーシュが、そのルイズに対して……よりにもよって教室の中で、

「君が空を舞う姿は、まるで流れ星のようだよ」

……などと、実に格好良く例えてしまったからさあ大変。

彼とつきあっている（と、周囲から噂されている）モンモランシーという名の少女が「また他の女に目移りして！」などと騒ぎ出すわ。

ギーシュの言葉に心から同意した男子生徒がそれを取りなすわ。

言われたルイズ本人が――気性の激しい彼女にしては珍しく、顔を赤くしてうつむきながらもじもじする姿を見たその他男子生徒が床を転げ回って悶絶するわの大騒ぎに発展。

そんな中、周囲にとけ込みつつあった才人が

「流れ星っていうより、どっちかというと『彗星』って感じだな」

などと発言し。

「スイセイって何？」

と、いうルイズの質問に対して、

「流れ星の中にも、キラキラ光る、綺麗で長い大きなしっぽがあるやつがあるだろ？　それを、俺たちのところでは『彗星』って呼ぶんだ」

と、答えたところへ「確かにそれっぽい」という同意の声があがり。調子に乗った才人がさらに、

「だろう？　それに、ルイズの髪ってさ、桃色だよな。俺たちの間では、赤い彗星は他のより3倍速いって相場が決まってるんだ。近い色の髪色のルイズに『彗星』の二つ名はピッタリだと思うぜ」

……などとまたハルケギニアの人間には全く意味のわからないことを言って、辺りを騒然とさせたところへ、さらに割り込んできた太公望が、

「わしのところでは『彗星』のことを『箒星』とも呼ぶぞ」

と、口を挟んだ結果。

「それだあああああ！！！」

と、いう男子全員の意見一致をみることとなった。

ただ、ここまでなら二つ名が変わるほどのことではなかっただろう。だがしかし……そこでまた、才人が余計なことを付け加える。

「また俺の国の話で悪いんだけどさ、彗星……タイコーボーと俺の父さんがいた国だと、箒星だっけ？　それはさ、何十年も、ずっ

と空の上にある世界を旅してるって言われてるんだ。で、一度消えても何年かするとまた帰ってくる。その星に向かって一緒に将来を誓い合った恋人同士は、幸せになれるっていう伝説があるんだぜ」

などという、いろいろと間違った解釈がまぜこぜとなった話を出したせいで、今度はそういうロマンティックな会話に弱いルイズをはじめとした女子生徒達から「それ素敵！」といった声が出て。遂には、ルイズの真似をして＜念力＞で箒を浮かせ、空を飛ぼうとする者達が現れた。

しかし、これはもともとルイズの『才能』が可能とした技術であり、他の者にはせいぜい浮かんだ箒に座るのが精一杯であった。故に、いつしかルイズには『箒星』の二つ名が冠されることとなったのだ。

……わしのところでは、箒星は不吉の前兆なんだが。とは、空気の読める太公望には口が裂けても言えなかった。

――彼らふたり以外にも、変化は訪れていた。

まずはタバサ。彼女は、太公望が起きているそれと同じ時間に起床し、彼と共に本塔の屋上で『瞑想』を行うようになっていた。

澄んだ空気の中、正しい形で『感覚』を研ぎ澄ますための訓練。これまでは『狩人』の『感覚』に頼っていた彼女であったが、そこへさらに『周囲に満ちる＜力＞の流れ』を掴むための方法を付け加えようというわけだ。

これらを併せることで、最終的にはルイズや太公望が実際に行っ

ている『座標指定』による『魔法の発動』を行えるようになることが、彼女にとって現時点での最大の目標。実際、これができるようになれば、ある意味『スクウェア』へ昇格する以上の価値がある。

そしてキュルケは＜力＞のコントロールを。そしてギーシュは『太公望著・兵の動かし方基本編』マニュアルを渡されてそれを読み、学んでいた。

双方共に『基礎の基礎』であったが、特に＜力＞のコントロールについては、これまでハルケギニアにはなかった概念であったため、キュルケにとって非常に価値のあるものとなり。少しずつではあったが、1日に放てる＜魔法＞の最大数が増えつつあった。

そしてギーシュ。彼は軍学の基礎について国の元帥たる父の薫陶を得てはいたものの、それはあくまで＜メイジ＞専用。『平民』の兵の動かし方については、ほとんど無知に等しかった。

そこへ『ワルキューレ』を運用する上で参考になる、しかも――ギーシュ本人は知らなかったわけだが――地球の歴史において、後世の軍学に多大なる影響を与えた人物直筆のマニュアルという、コレクターからしたらまさに垂涎もののアイテムを授けられ、さらにそれを読んだことで、まさしく雷鳴に打たれたかの如き衝撃を受けた彼は……なんと、才人に一撃を入れられるほどにまで成長していた。

全員が、少しずつ、それぞれの道を歩んでいる。

――以下、そんな日常の一コマである。

○●○●○●○●

その日。学院内の教師であり＜風＞の使い手にして『疾風』の二つ名を持つ『スクウェア』メイジのミスタ・ギトーが、教壇の前に立ち、授業を行っていた。

彼は、自分の系統である＜風＞に、誇りを持っていた。だが、それが強すぎるが故に、あまり生徒たちからの評判がよくない教師であった。

「最強の系統が何であるか知っているかね？　ミス・ツェルプストー」

「虚無じゃないんですか？」

その答えを聞いたギトーは、鼻で笑った。

「伝説の話ではなく、現実的な答えを聞いているんだ」

その言い方にカチンときたキュルケは当然反論をしようとした。だが、その前にギトーは別の人物を指名したのだ。

「では、ミスタ・タイコーボー。君はどうかね？　もちろん、東方から来たメイジの視点からでよろしい、是非その答えを聞いてみたい」

ギトーは当然、太公望が＜風使い＞であることを知っている。例のフーケ事件の際に、学院長のオスマンからそう紹介を受けているからだ。

ったくこの先生は……言いたいこと丸わかりだよ。教室の空気がそんな色に染まりかけたその時、太公望は口を開いた。

「そうですのう……ここは＜風＞と答えるべきなのでしょうな」

ギトーは、実に満足げな笑みを浮かべる。さすがは同じ＜風＞のメイジ。よくわかっている。東方でもその考えは変わらないのだな……と。

「さて……その上で、何故＜風＞が最強であるのか。それについて、話をさせていただいてかまわぬでしょうか？　あくまで、持論ですが」

「もちろんだ。東方のメイジから話を聞ける機会はそうそうはないからな」

真剣な表情になったギトーに対し、それでは失礼して……と、一言断りを入れると、太公望は改めて語り始める。

「まずは、結論から先に言わせてもらいますと。＜風＞の系統は……『最強』にして『最弱』である。わたくしはこのように考えます」

最強にして、最弱？　突然何を言い出すんだ。ギトーは目をむいた。生徒たちも、いつもとは全く違う展開に、これからどうなるのかを期待した。

「＜風＞は、時には己を守る＜盾＞となり、時には敵を打ち払う＜矛＞となります。しかし……他の＜系統＞に比べ、その万能さが故に＜使い手＞を選ぶのです」

『使い手を選ぶ』という言葉に思うところがあったのか、ギトーは表情を改めた。

「ふむ……続けたまえ」

「例えば。自分を狙う敵に囲まれたとします。このとき＜盾＞と＜矛＞、いったいどちらを出せばよいのか。＜風＞は、そのどちらも出せる……故に、状況を的確に判断し、より良い選択を行うことを常に迫られる。そこに迷いは許されない」

これが＜風使い＞に付きまとう最大の問題です。そう語る太公望。

「もちろん、全てを吹き飛ばすだけの強大な＜力＞があるメイジであれば、攻撃一辺倒でも構わないのかもしれません。しかし、残念ながら全ての＜風＞メイジが、そう……『スクウェア』といった高みに到達できるわけではありません」

「その通りだ」

私も、ここに至るまでは苦労したからな。そう言って遠い目をするギトー。

「よって、そこに至るまでの間は、常に最良の選択を迫られ続ける。当然、その選択に必要なものは……ギトー先生でしたら、もちろんおわかりですな？」

と、ここでギトーへ言を向ける太公望。そして、それに対して勿論だ……と答え、持論を展開しはじめるギトー。

「君が最初に言った状況に対する的確な判断力と、どのように＜力＞を使うべきであるのかを常に考え、正しく実行するための知恵と技術、そして応用力だ」

その言葉を聞いて、満足そうに頷く太公望。

「さすが先生、まさに仰る通りです。よって……それらを持たぬ者は＜風＞を使いこなすことができず、判断に迷い……自滅する。つまり『最弱』となるわけです」

ある意味、やるべきことがほぼ決まっている他の系統に比べ、多くのことができるがために取捨選択の即決判断力が必要となる。よって、正しく運用する上での難易度が圧倒的に高い。故に＜風系統＞は＜使い手＞を選ぶ……そう言った太公望はさらに語り続けた。

「我が国では、古来より＜風＞は叡智の象徴とされています。＜風＞は、知恵を運び、人を導くものである……と。そういった意味では『教師』という『道』を選択したギトー先生は、まさにその体現者ということになりますな」

ピクリ……と、ギトーの口端が上がる。思わず笑みを浮かべそうになったのを、必死でこらえているといった表情だ。それを見た太公望は、まとめにかかった。

「そう……＜風系統＞とはまさしく『知恵ある者』の象徴！」

バンッ！　と、机を叩いて力説する太公望に、隣の席に座っているタバサが同意するように、コクコクと頷いている。ギトーの両手がプルプルと震えている。その他、風系統に属する生徒たちも皆一様に胸を張っている。

「万物の事象を学び、そしてそれを元に知恵を出すことによって！　他系統に比べ圧倒的な汎用性を誇るが故に！！　たとえ元の＜力＞が弱くとも＜使い手＞次第でいくらでも『最強』に近付くことができる素晴らしき系統！　それが＜風＞ッ！！」

腕を高く挙げ、周囲を見回した太公望は、最終結論を叩き出した。

「つまりッ……＜風系統＞最ッ高！！！」

そう大声で叫んだ太公望。そしてそれにつられるように、教室内の＜風系統＞メイジたちが、次々と雄叫びを上げはじめた。

「風、最高！」「風こそ最高！！」「風は最高」「風！」「か～ぜ！！」

もはや大合唱となって教室中を包み込んだそれは、教師であるギトーまで巻き込んだシュプレヒコールとなった。『最強』ではなく『最高』という話に見事なまでにすり替わっているのだが、場の雰囲気に飲まれ誰も気がついていない。

そもそも、系統の強さは地形やその他状況によって常に変わるので、どれが『最強』であるのかを語ること自体がおかしいのだ。『最高』ならばあくまで好みの問題とでも言い換えられるので問題ないと判断し、無理矢理そういった空気を作った太公望であった。

……もっとも。メイジではなく、かつミリタリー系大好きな才人だけは、途中で太公望が行った論説のすり替えと聴衆のコントロールに気付き「閣下また煽りまくって遊んでるし」などと、ひとり呆れ果てていたわけだが。

だがしかし。当然の流れで……それに反対する者たちが現れる。
もちろん――他系統に属するメイジたちである。

「でも＜風＞って、あたしたち＜火＞に比べて地味よね」

ピタリ。文字通り、場の空気が止まった。

「地味……だと……！？」

ゆらり……と、太公望を始めとする＜風系統＞に属する者達の身体から、黒い何かが立ち上り始める。だがしかし。この流れは止まらない。

「そうよ！　＜火＞には＜風＞にない華やかさがあって最高だわ！！」

「＜土＞はあらゆるものを生み出す。これこそ最高の＜力＞だ！」

「＜水＞には、全てを包み込む寛容さがあるわ。＜水＞こそが最高よ！！」

こうなってしまっては、もう収集がつかない。そして、各系統ごとに固まっての大論戦が始まる。と、いってもあくまで子供の口喧嘩レベルで。

「よろしい、ならば＜風＞が最高たる所以を証明してみせよう」

「地味？　このわしに地味と言ったな！？」

「オホホホホ、情熱の＜火＞。火傷じゃすみませんことよ」

「ぼくの『ワルキューレ』の本気をみせてあげるよ」

「＜水＞って結構面白いことができるのよね……フフ」

……で。ならばチーム戦で勝負をつけようではないかという話になり。そして――まだ＜系統＞がいまいち定まっていない人物の取り合いが始まった。

「ルイズはわしが育てた。よって＜風＞チームへ来るのだ」

「歓迎する」

「あら。＜爆発＞だから＜火＞が相応しいのではなくて？」

「いやいや、あの見事な＜土煙＞の＜錬金＞があるのだから＜土＞だよ」

「『箒星』のルイズ。その二つ名はもともとは『彗星（すいせい）』から来ているわ。つまり、彼女は＜水＞こそが最適なのよ」

「いや最後強引すぎだから！！」

思わず無関係な才人がツッコミを入れるほど、場はもうぐだぐだだった。

……それにしても太公望、ギトーとタバサという学院内の＜風＞メイジ2強に加え、さらに自分という極悪な＜風使い＞が所属しているにも関わらず、さらにルイズをチームへ勧誘するあたり、本当

に容赦がない。

さて。そんなぐだぐだかつとんでもない大騒ぎをしていれば、当然の如く他のクラスにとっては大迷惑以外の何者でもないわけで。

この、あまりのやかましさにとうとう堪忍袋の緒がブチ切れた、隣のクラスを受け持っていた『赤土』シュヴルーズが乱入。全方位に向けて粘土弾を解き放つという暴挙の末――ようやく教室内は静まり返り。その後には。

「なあ、実はあの『赤土』先生が『最強』じゃね？」

と、いう才人の感想の呟きと共に、ギトーの授業時間は終わりを告げた。

――なお、この『事件』がきっかけで、生徒間におけるギトーの評価が「実は結構ノリのいい先生？」というものに書き換わった結果、授業を受けるものたちの空気がやや穏やかなものとなり。

それに気をよくしたギトーの態度もまた、少しずつ柔らかくなっていくという……お互いにとって良い意味での『風の循環』が発生することとなった事実をここに記す。

第３４話　最高　対　最強（後書き）

もうだめだこのクラス……はやくなんとかしないと……。
すみません、一度こんなぐだぐだな話をやってみたくて、つい……
で、やってみたら本当にぐだぐだってレベルではなくなってしまっ
たという。平和な日常編ということで。

風属性最高！　属性選択可能なＲＰＧではいつも最初に取得します。
汎用性ってイイヨネ。ちなみにコルベール先生は乱入してきません
でした。期待していた方は申し訳ございません。

さて、いよいよ次のイベントが発動します。もちろん、待機してい
たアレです。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正
２０１１／１０／０２　誤字脱字修正

第35話　雪風、軍師へと挑むの事

「何故、ハルケギニアのメイジは＜力＞を蓄えておかないのだ？」

これは、数日前に『瞑想』を始める準備の最中に、太公望がポロリと零した言葉である。最初、それを聞いたタバサは、彼が何を言っているのか理解できなかった。

「蓄える……とは？」

「いや、そのままの意味なのだが。普通に『パワースポット』とかあるではないか。何故利用しない？」

太公望曰く。世界の各地には『霊穴（パワースポット）』と呼ばれる＜力＞の溜まり場が存在し、そこで『瞑想』を行うことにより、自身の根源たる＜力＞の回復を、普通に眠るよりも圧倒的に早く行うことができるのだという。

さらに、そこにある＜力＞を取り込み、自分が持つ本来の＜力の器＞の中とは別に＜予備＞として体内に循環させておくことで、より大きな事象を発生させることができるのだ……と。

「そもそも、わしがずっとこの塔の上で『瞑想』をしておるのは、ここがその『パワースポット』に相当するからなのだ。おそらくだが、魔法学院を建てようとした人物が、この地が＜力＞の溜まり場であることに気付いていて、その上でこのような設計をしたのであろう」

――魔法学院の５つの塔。そしてその周囲に張り巡らされた外壁

が、大地から効率よく＜力＞を吸い出す形――五芒星に見立てられたそれ――に沿って建てられており、そして中央塔に、集められた＜力＞が結集しているのだ――と。

「そういえば、このあいだガリアへ行ったときに、上空を通り過ぎた湖……たしか、ラグドリアン湖といったか？　あそこからも強い＜力＞を感じたのう」

今度、暇なときにでも、あそこで釣りをしながら＜力＞を蓄えるというのも悪くない……そんなことを言いながら『瞑想』の準備に入った太公望。だが……その隣で、タバサは驚愕のあまり打ち震えていた。

＜力＞を『蓄えておく』などという考えは、そもそも現在のハルケギニアには存在していない。あくまで、精神力の最大量は本人の資質と、メイジとしてのランクアップによって増加するものだと考えられてきた。だが、彼にはそれができるのだという。さらに、この魔法学院が、それを前提にした上で設計されていたという事実に驚いていたのだ。

それはつまり……過去、ハルケギニアにもそういった『技術』が存在していたが、何らかの理由で失われてしまったということだ。当然のことながら、タバサはそれに飛びついた。

「教えてほしい……＜力＞の蓄え方について」

「な、なんだ、まさか本当に知らんかったのか！？　別にかまわぬが……」

そう言うと、ちらりと下のほう――食堂の方向に目を向ける太公

望。

「本日の日替わりデザートを進呈する」

「よしわかったこのわしに全て任せろ」

――こうして。遙かなる昔に失われた『技術』は、その価値にも関わらず、実に安い値段でハルケギニアの地へ復活することとなった。

○●○●○●○●

そして――いよいよ3日後。ついに念願の『対戦』が叶う。太公望が、ようやく準備が整ったと通達してきたからだ。

だが……その日が近付くにつれ、タバサの胸に不安が押し寄せてきた。今のわたしが、まともに彼と戦った場合、そもそも勝ち目があるのだろうか？

――わしの本気だ。覚悟はいいか？

タイコーボーは、あの時……確かにわたしにそう言った。しかも、これまで見せてこなかった『切り札』を、わたし限定で開示するつもりらしい。あの用心深い彼が『異端』とまで言うからには、相当変わったものであると覚悟しておかなければいけない。

そう考えると、タバサはより心配になってきた。そもそも、タバサは頑なに＜力＞を追い求めてはいるが、別に戦い自体が好きというわけではない。あくまで、自分の実力を上げたいがために、太公

望との模擬戦を求めただけなのだから。

「こんなとき、彼……タイコーボーならまずどうするだろう」

ふと、そんな考えがタバサの中に浮かんだ。そして、あの日……彼が元総軍司令官であるという驚愕の事実――一部思い出したくないこともあったわけだが――とともに語ってくれた『戦う前に行うべき基本事項』を思い出した。

『戦が避けられないとなった場合は、その前にまず自軍の戦力を確認する』

自軍……つまりこの場合は、現在のわたしが持つ戦力。今回は1対1限定のため、あくまでわたしひとりを対象とする。

そして、タバサは徹底的に自己分析を始めた。手持ちの＜魔法＞について。太公望から教わった『力のプール方法』によって、これまでの＜精神力容量＞に加え＜予備＞によって増強されているため、通常よりも手数が増やせることを念頭に置きつつ。

……そして。彼女は次の段階へ移行する。

『次に、相手の情報を徹底的に集め、精査する』

敵軍……タイコーボー。ここまで判明しているのは、

・鋭い敵観察能力、及び解析能力を持つ

・元軍人、総軍司令官の経験有り（単独戦闘も可能）

・＜風＞の『スクウェア』

・触媒があれば＜火＞も『トライアングル』レベルで使用可能

・＜魔法＞を、ハルケギニアの常識とはかけはなれた形で使用する

・＜念力＞使用で風竜以上の速度で飛行可能

・同時に４つまでの＜魔法＞を展開可能（さらに多い可能性有）

・超高速でのルーン詠唱が可能

・正面以外の方向から『空間座標指定』による攻撃が可能

・『瞑想』によって＜力＞をさらに蓄えている可能性大

・近接格闘技の達人（飲酒によって何故か強化される）

・非常に高い回避能力を持つ（トリッキーな動きで翻弄）

・出身地特有の＜フィールド＞で相手の＜力＞の流れを感知可能

・現在に至るまで本気を出していない。つまり全能力上昇の可能性大

・本気時に使用する『切り札』が存在する（能力不明）

……改めて書き出してみて、タバサは絶句した。

「これで才能がない……シュウのメイジはみんな化け物……？」

タバサは本気で頭を抱えてしまった。正直、まともに彼と戦った場合――現時点で集めうる情報だけでも勝てる気がしない。

まず飛ばれた時点でアウト。間違いなく空中から＜魔法＞を撃たれる。しかも『複数同時展開』持ちかつ『高速詠唱』で、こちらがルーンを唱え終える前に完封される可能性が大。

次に、接近されたらアウト。間違いなくあの格闘術で『杖』を奪われ終了。

さらに、距離を取られてもアウト。これは空中戦とほぼ同義。

おまけに、先手を取れても避けられた時点でアウト。怖ろしいまでに強固な＜エア・シールド＞を持ち、盾なしでも本人の回避能力がとてつもなく高い。

仮に、不意打ちをしようとしてもまずアウト。ほぼ間違いなく接近を察知された挙げ句、反撃を受ける。下手をすると『座標指定』でこっちが先に不意打ちをかけられ倒されてしまう。

最後に、正面からの力押しもアウト。そもそもメイジとしてのランクが違う。

「タイコーボーなら、たとえエルフと正面から戦っても、普通に完封しそうな予感がするのはわたしだけ……？」

タバサは改めて戦慄した。自分の＜使い魔＞たる彼の能力に。し

かも、戦いが基本的に嫌いであるため、本気を出していないのだというから怖ろしい。ハッキリ言って、この世界において、彼に対抗できるメイジがいるとしたら、それは『烈風』カリン――ハルケギニアの歴史上『最強』と謳われた『伝説』の＜風＞メイジその人くらいではなかろうか……と。

「こういう圧倒的強者を相手に戦うとき、彼ならどうする？」

タバサは、さらに考えた。と――ここであることに気がついた。彼の基本。

『戦わずに勝つ』『まずは交渉から入る』

今回については、前者の条件はありえない。ただし、後者は――！

○●○●○●○●

「よし、気がついたな。まずは第一段階合格だのう」

部屋へ戻ったあと、タバサは早速太公望へ『交渉』の申し入れをした。それに対する彼の返答がこれであった。

「あきらかに格上であるわしに対して、普通に挑みかかろうとする時点で間違いだからのう、その選択は正しい。で……どういった話がしたいのだ？」

「ハンデ戦を申し込みたい」

そう頭を下げたタバサへ。

「内容は？　そして、それに対する対価はなんだ？」

太公望は、静かに答えた。どうやらハンデの内容と対価によっては受け入れてくれるらしい。それならば、まずは彼が持ち、かつハルケギニアのメイジにとっては驚異的なあれを封印してもらおう。対価については……デザートでいいのだろうか？　いや……ちょっとここは彼を見習って、出方をうかがってみよう。

「『同時展開』の封印。対価は……第一段階合格の、わたしへのご褒美」

それを聞いた太公望は、目を見開いた後……大声で笑った。

「面白い！　わしはそういうやりとりが好みなのだ。受け入れよう。第二段階合格だな。で……他にはもうないのかの？　あ、わかっているとは思うが、同じ手はもう通じぬぞ」

うまくいった。下手にあそこでデザートを材料に出すよりも、こういうやりとりのほうが彼の性格的に喜ぶのではないか。そう考えた末の発言に、うまく乗ってくれた。それならば、次に……。

「『座標指定』による魔法展開を封印。対価は……明日のデザートを1個追加」

「よし、受け入れよう」

これで、だいぶ楽になった。さすがにもう受け入れてはくれなさそうだ。それでは、次に改めてルールの確認を。そうタバサが思ったとき、太公望はふいに口を開いた。

「では……今度は、こちらから交渉を申し込みたいのだが」

「内容と、対価による」

「うむ。試合開始前の条件として、お互いの距離を２００メイル以上あけること。なお、これに対する対価は……あとふたつだけ、わしに備わっていると思える＜能力＞のうち、いずれかを封印しても構わぬ」

この内容に、正直タバサは驚いた。距離を開けるだけであと2つ封じていいのか……ここは飲むべき？　いや、よく考えよう。

ここで重要なのは数じゃない。あの彼がここまで言うということは、つまり距離を重視しているのだ。それならば……。

「条件付きなら受け入れる」

「ほう、それはどのような？」

「距離を１００メイルにしてほしい。ただし、封印する能力は１つで構わない」

それを聞いた太公望は、顎に手をやり……少し考え込んでいた。やはり、距離がポイントで正解だったのだろうか。

「ん……まあ、よかろう。では、封印したいと思う＜能力＞を提示するのだ」

太公望は、腕を組んで考え込んでいる。思った以上に『距離』が

重要だったらしい。最初の『２つ』という数に乗らなくて正解だった。最後のひとつ……ハッキリ言って断られる可能性大。でも……やってみる価値はある。

そしてタバサは、踏み込んだ。

「あなたの＜風＞魔法を封印してほしい」

この申し入れに、太公望は破顔した。そして笑いながらこう答えた。

「そりゃまあ、そうくるのが当然だろうの。あきらかにわしが持つ最大の＜能力＞だ。よかろう、受け入れようではないか。これで交渉は終了だ……改めてルール確認に入ろうかの」

タバサは驚いた。まさか受け入れられるとは思わなかったのだ。しかも、あきらかに彼の中では想定していた内容らしい。

でも……これで、本来彼が苦手とする属性にして、限定条件つきの＜火＞の『トライアングル』として戦わせるに等しい条件まで落とすことができた。これならば、最も怖いのは彼に接近されることだけだ。それに気をつければ何とか戦いに持ち込めるだろう。

――そして、彼らはルールの設定を行った。

・１対１で戦う
・互いの地形に不利が生じないよう、見通しのよい平原で行う
・制限時間はなし
・相手を降参、あるいは気絶させたら勝利とする
・開始時、お互いの距離を１００メイル開ける

・交渉によって決めた封印を破った場合は太公望が即座に敗北となる
・お互いに、位置についたらいつ仕掛けてもよい

――設定の結果。以上が、今回のハンデ戦条件となった。

交渉終了後。部屋を出て行ったタバサを見て、太公望はニヤリと笑った。

「ふぅむ……以前に比べて、だいぶ成長しておるようだが、まだまだ甘い……今回の『交渉』における最終段階合格は、残念ながら出すことはできぬな」

○●○●○●○●

――そしてハンデ戦当日の夜。

誰にも見られていないことを確認したふたりは、前もって探しておいた場所――開けた平原であり、かつ近くに民家などがない地形――へと移動した。

そんな中で、タバサにはひとつ気になったことがあった。

「タイコーボー。それは何？」

太公望の腰に、布袋が４つ――しかも、何故かそれぞれ赤・青・黄・緑の可愛らしいリボンがあしらわれたそれ――が、くくりつけられていたからだ。

「ああ、いわゆる『錘（おもり）』だ。別に、これを使って戦ったりするわけではない。心配ならば、中身を見てみるかの？」

「興味ある。見せてほしい」

「中身を取り出してもかまわぬが、ちゃんと元入っていた袋へ戻すのだぞ」

「わかった」

タバサが早速中身を取り出すと、そこには『煉瓦（れんが）』が入れられていた。全ての袋に、それぞれ1個ずつ入っている。

「＜ディテクト・マジック＞を試しても？」

「もちろんかまわぬぞ、試合前に確認するのは当然だからのう」

本人の了承を得て、タバサは早速＜ディテクト・マジック＞を唱えた。2つの煉瓦には何の反応もなし。残り2つに＜固定化＞がかけられている他は、本当に何の変哲もない煉瓦であった。

念のため、腰の布袋についても調査したが、こちらもただの袋であった。

なんのために、わざわざ『錘』などくくりつけてあるのだろう……そう訊ねたタバサであったが、さすがにそこまでの情報は開示してもらえなかった。つまり、何らかの理由があって、太公望はそれを持ち込んでいるのである。

それにしても。あんなものを4つもくくりつけているということ

は、近接格闘をする上でも、全体のスピードも相当落ちてしまうはず。もしかして、さらにハンデを背負ってくれようとしているのだろうか。

思考の海へ沈み込もうとしていたタバサへ、太公望が声をかけた。

「それでは、そろそろ始めるかのう。お互い位置につこうではないか」

――そして、試合は始まった。

太公望は、精神を集中し……『打神鞭』を構える。そして、その先に取り付けられた宝玉――彼最大の切り札・スーパー宝貝『太極図』に＜力＞を集める。

フィィィイイ……ン。静かな音と共に『太極図』が起動する。そして、そこからサァァァ……ッと、文字――当然、ハルケギニアのそれではありえないもの――が列をなし、螺旋を描き、宙へ向けて……流れるように書き記されていく。

「太極図よ！　支配を解き放て！！」

太公望の号令と共に、並んでいた文字列が太公望を中心に、渦巻き状になって地面へ染み渡る。そして――彼だけの＜魔法＞にして＜フィールド＞は完成した。その範囲は約５０メイル。

「ククク……相手との距離が１００メイルもあれば、さすがにこの程度の範囲展開は余裕だの。さてタバサ……どうくるつもりかのう」

一方のタバサは。太公望が、宙に向けて『何か』をしているのはわかったが、周囲が暗い上、距離があったために詳細まではわからなかった。何やら光のようなものが彼の周囲に消えていったところまでは見えていたのだが……しかし。

このまま仕掛けるのは危険だろう。少し様子を見たほうがよさそうだ。そう考えたタバサであったが……その『何か』以降、太公望は、左手に持った杖を天に向けて掲げたまま、その場から全く動かない。

「おそらく……あれが彼の＜フィールド＞。あそこに、何かがある」

それならば。そこから彼を出してしまえばいい。タバサは＜エア・ハンマー＞のルーンを紡ぐ。そして、太公望へ向けて打ち下ろした……だが。それは、彼に届くどころか……はるか手前で『消えて』しまった。

「どういうこと!?」

太公望は、相変わらずその場から動いていない。そして、当然のことながら『風の流れ』など変わっていない。

「それなら……＜氷の矢＞！」

再び遠距離から、今度は＜氷の矢＞を打ち出した……だが。これは……空中で、まるで砂の山が崩れるように、さらさらとかき消えた。

太公望のほうはというと、あいかわらずその場から移動してはい

ないが……左手の『杖』をまるで指揮棒のように軽く振りながら、何かを口ずさんでいる。そう……唄うように。

タバサは、慎重に近付いていった。そして、地面をよく見て気がついた。そこに何かが描かれていることに。もしや――これが彼の言っていた切り札にして＜フィールド＞なのか。

――絶対にこれを踏んではいけない。彼女の、これまでの『経験』と、それによって磨かれた『直感』がそう語っていた。よって、タバサは距離を取ったまま＜魔法＞を打ち続けた。しかし、それらはやはり、これまでのものと同様、全て＜フィールド＞に入った途端かき消えてしまった。

「まさか……ありえない」

もしや……これは『遠距離からの＜攻撃＞を届かせないための場』なのか。それならば納得がいく。たしかにハルケギニアでは『異端』とされる可能性がある。そして、彼があそこまで体術を鍛えている理由も。

……何故なら、彼と戦うためにはこの不思議な＜フィールド＞を踏まずに側へ近寄り、近接攻撃を仕掛ける以外にないからだ。

『自分のペースに巻き込む』

そうだ、召喚初日から、一環して彼が見せ続けてきたスタイル。まさしく、この＜フィールド＞は、それを体現したものなのだろう。

わたしは、お世辞にも近接攻撃が得意だとは言えない。しかし、ここまで来てそんなことは言っていられない。それなら――！

「イル・フル・デラ・ソル・ウィンデ……」

タバサは＜フライ＞のルーンを紡ぎ出した。そう……空を飛び、太公望の側まで近づき＜ブレイド＞で仕掛けるために。

そして彼女は、１メイルほどの高さに浮き上がり、高速で太公望へ向かって飛びかかろうとした……しかし。＜フィールド＞の範囲へ入った瞬間。全身が、まるで鉛のように重くなって墜落。全身を激しく地面へと叩き付けられた。

――そして、そのままタバサは意識を失い、気絶してしまった……。

第３５話　雪風、軍師へと挑むの事（後書き）

ようやく実現した、タバサ対太公望。いかがでしたでしょうか。

……書いていて思った。やっぱえぐいわ太極図。それ以前に太公望の能力やばすぎだろうっていう。

ちなみにあの「かわいい袋」の秘密につきましては、この次の話で詳しく行います。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正
２０１１／０６／３０　誤字・脱字修正

第３６話　軍師、計略の成果を確かめるの事

「タバサ、大丈夫か？」

ふいに目が覚めた時。タバサは、自分の目の前に太公望の顔があることに驚いた。そして、彼が自分の身体を抱き起こしていたことに。

「試合は」

「おぬしの気絶により、わしの勝ちだ。どうだった？　わしの『本気』は」

「……よくわからなかった」

カッカッカ……と、笑い声を上げながら太公望は言った。

「そうであろうな。初見であれを見切れる者はまずおらんからのう。まあ、それはともかく……部屋に戻って、反省会をしようかの」

「反省会？」

「うむ。今日行った試合の内容について、話し合いをするのだ！　そして、何が良くて、どこがいけなかったのかをしっかりと確認する。そのための模擬戦であろう？」

確かに……と、タバサは頷いた。今まで行ってきた『任務』では、たとえやろうと思ってもこういったことはできなかった。太公望が召喚される前は常にひとりで戦い続けてきたし、前回一緒に着手し

た『任務』では、状況が状況だっただけに、そういった話し合いが持ちづらい雰囲気だったからだ。

そういう意味でも、試合を行った価値がある。タバサは、了承し……立ち上がろうとして、ふいに気がついた。あれほど激しく地面に叩き付けられたというのに、どこにも怪我がないどころか、痛みすら感じていないことに。

立ち上がって、自分の身体を改めて確認してみる。全く異常はない。むしろ……なさすぎるといってもいいくらいに。

「ああ、心配することはないぞ。おぬしの傷は、わしが全部癒しておいたからのう」

どこも痛んだりはしていないであろう？　そういって笑う太公望に、タバサは問うた。彼女は本気で驚いていたのだ。

「あなたは……＜治癒＞も使えたの？」

「＜火＞以上に、怖ろしく厳しい限定条件つきだが使えるぞ。ただし！　条件が満たされている場合においては、国元でもこのわしを越える＜癒し＞の使い手は、誰もいなかったのだ」

そう言って、再び笑う太公望の顔を見ながら、タバサは思った。

まさか……彼が＜水＞まで扱えるとは。しかも、これほど完璧な＜治療＞が行える上に、国元で一番の＜使い手＞とは。おまけに、彼には全く消耗している様子がない。なるほど彼の国の元帥が、身を挺して守るだけのことはある。親友という以上に……戦場において、この＜治癒＞を含め――彼の価値は絶大であるからだ。

そして気付いた。彼は＜風＞だけではなく＜水＞の『スクウェア』に相当する実力を持ち合わせていたということに。なるほど、ハンデとして＜風＞を封じられても、なんとも思わないわけだ。

……しかし、これで才能がないとか……タバサはなんだか泣きたくなってきた。そして思いを馳せた。彼の国は、どれほど酷い戦禍に見舞われていたのだろうか――と。

「ところで、そろそろ部屋へ戻らぬか？　ちと冷え込んできたことだし、厨房へ寄って暖かい茶と、何か菓子でも用意してもらおう」

――タバサは頷いた。そしてふたりは、自室へ戻るべく空へと舞い上がった。

○●○●○●○●

「準備の仕方が間違っていた」

「ふむ。　それはどういう意味でだ？　タバサ」

「あなたの実力を完全に把握していなかったにも関わらず、調査が足りなかった」

ニッと笑った太公望は、ポンポンと軽くタバサの頭を叩いた。

「その通りだ。まあ、そもそもわしはわざと自分を『見誤らせる』ように行動しておるから、奥まで見抜くのは難しいだろうがな」

ニョホホホ……と、笑って言う太公望。現在、タバサの部屋では『反省会』が開かれている真っ最中である。

「まあ『交渉』を考えついたところまでは正解だったのだが……残念ながら、話の持っていきかたが、ちと悪かったのう」

厨房からもらってきた紅茶とお菓子を楽しみつつ、太公望は答えた。

「話の持っていきかた、とは？」

「うむ、さっきタバサが自分でも言っておったであろう？　わしに関する調査が足りなかった……と。そう感じていたのならば、何故聞かない？」

「えっ？」

「タバサは、いままでわしを見てきた結果から、自ら『ハンデ戦』を申し込む必要があるくらいに差があることに気がついていたわけだ。さらに、未だわしが『さっぱり効果がわからない切り札』を持っていると明言していた。ここまではよいな？」

コクリ、とタバサは頷く。それを見て、一口茶を啜ると太公望は先を続ける。

「ならば！　そこでいきなりハンデ戦を申し込むのではなく……わしが持つ＜能力＞について『今まで見せてもらっているもの以外についての情報を、ある程度開示してくれ』と切り出すべきだったのだよ」

タバサは唖然とした。まさか、そういう方向からの指摘を受けるとは思わなかったのだ。いや、そもそも……。

「聞いたら、教えてくれたの？」

そのタバサの問いに、太公望はニヤリと笑って頷いた。

「交渉の内容次第ではな。もちろん、対価や話の持っていきかたによって、開示される情報の量は大きく変化したわけだが」

もしもそういう交渉に来たら、ある程度教えるつもりでいた。これはあくまで『模擬戦』なのだからな。そう語る太公望。タバサは頭を抱えてしまった。正直、敵対する相手が情報を教えてくれるなど想像の埒外であったからだ。まあ、普通はそうだろう。タバサの反応が正常なのだ。

「わしの『切り札』を体験してみて、どう思った？」

「驚いた」

「それ以外には？」

「……怒らないでほしい。正直、怖かった」

俯いて呟いたタバサに、うむ……と呟き返した太公望は、こう言った。

「相手のことを知らないということが、いかに怖ろしいか。今回のことで改めて理解できたのではないか？」

頷くタバサ。『任務』においても、そういった経験を積んできたから。

「逆に言えば、自分のことを出来うる限り悟らせないということ……そして周囲、また現状をしっかりと把握しておくことで、そのぶんだけ恐怖を抑えることができ――さらには敵から自分の身を守る効果を高めることができるのだ！」

「自分をよく知り、敵についてできるだけ情報を得る……それが大切」

「敵だけではないぞ。周りの地形、状況、その他にもよりたくさんの情報を持ち、かつ自分の手札を隠す巧みさ、それを活かせる力量を持つ者こそが、最後には勝利する。たとえ、お互いの実力に差があっても……だ。ちなみにこれは、別に戦いに限ったことではない。取引交渉などでも同様だ」

まあ、交渉も一種の戦いではあるが……そう言った太公望は、さらに語る。

「戦の場合においてだが、これは多人数で行うものであるわけだから、当然情報を集めることに特化したものがおる。敵国に潜り込んだり、あるいは敵陣に潜入したりする専門の者たち――彼らを情報斥候、スパイという。彼らの手で集められた情報を整理し、精査する。そしていかに戦うかを検討し、実行するための準備を整える。これが『指揮をする者』にして『勝利をもたらす者』に最低限必要な能力だ」

そして……太公望はさらに続けた。

「戦争以外の場面においても、情報は別に自分で集める必要はないのだよ。もっとも、その場合、正誤の見極めを行う判断力が必要となるわけだが。そうだな、例えば今回の場合であれば……自分の印象だけでなく、他人……特に、わしと直接戦闘経験のある才人から話を聞くだけでもだいぶ違ったであろう」

その言葉に、タバサは衝撃を受けた。確かにそうだ。今回は、つい自分の手持ちの情報だけで判断してしまっていた……太公望についていちばん知っているのは自分だからという思いが、心のどこかにあったからかもしれない。

「ああ、ちなみに例の切り札の件だが。あれについては申し訳ないが、これ以上の情報を開示するわけにはいかんので、以後聞かれても絶対に答えないからそれだけは覚えておいて欲しい」

「異端の可能性があるからという以上に……それを隠すことによって、あなたが勝利する確率を上げる、そういうこと？」

タバサの問いに、太公望は破顔した。

「そうだ。こればかりは、たとえ身内といえど教えられない。それほどのものなのだ。もっとも、そうでなければ『切り札』とは言えぬであろう？」

「理解できる」

「よし。では、もう1点。最後の取引でわしに提示した『封印してほしい＜能力＞』についてだ」

わたしが駄目元で封印を依頼した『＜風＞魔法』。それがいけな

かったのだろうか。タバサは頭をかしげた。

「もっとよく、わしの言った『言葉』について考えるべきだったのう。わしは『わしに備わっていると思える＜能力＞』と言った。もしも、わしが同じ交渉を持ちかけられたら……さて、なんと言うと思う？　ちょっと考えてみるのだ」

タイコーボーなら、なんと言う？　それを考えろ……？　タイコーボーの能力……彼なら……いや、まさか、さすがにそれはないだろう。でも……！

「＜魔法＞を封じてほしい。そう持ちかけていた、と？」

「その通りだ。もしも、その申し入れがあった場合、わしは限定条件をつけることで受け入れる用意があった」

タバサはある意味、ここまでで一番の衝撃を受けた。まさか、そんな交渉まで想定していたのか、彼は……と。

「ちなみに、その条件は？」

「『切り札』のみ使用してもいいなら、他の魔法は一切使わないというものだ」

……確かに、あの＜フィールド＞と格闘術があれば、並大抵の者では勝てないだろう。確かにあれは『切り札』だ。タバサは、がっくりと肩を落としてしまった。

「まあ、そんなわけで。今回については最終段階合格は与えられなかった」

惜しかったのう。そう言って笑う太公望。だが……タバサは、今彼が発した言葉の意味に、気がついていた。

「今回？　つまり、また試合を受けてもいいということ？」

「よし、ちゃんと今の言葉に気がついたな！　会話に神経を研ぎ澄まし、その『咄嗟の言葉の意味に気付く力』をさらに磨くのだ。やはりおぬしには、その『才能』がある」

満足げにうんうんと頷いた太公望は、彼女にご褒美を与えることにした。

「以後『切り札』なしで挑戦を受けよう。もちろん、事前交渉もそれに含まれる。まあ、1ヶ月にせいぜい1～2度程度にはしてもらいたいところだがのう。あと、今月はもう終わりということで頼む」

「了解した」

では、今夜はこのあたりで休むとしようか。その言葉で『反省会』はお開きになったのだが――タバサは、試合の内容についてはともかく、非常にためになるやりとりだったと満足してベッドに入り――そして、すぐ寝息を立てはじめた。

○●○●○●○●

――タバサが眠ったことを確認した後。太公望は寝床から抜け出した。

そして取り出した。例の『赤・青・黄・緑』のリボンがあしらわれた、ちょっと可愛らしい『布袋』と、その中に入れられていた『煉瓦』を。

「ふむ……なるほど、こういう結果になったか。赤は……うん、元通りの形に戻っておるな。青は……ふむふむ。黄色は……」

……そう。太公望はハルケギニアの＜魔法＞に対する『太極図』の効果の詳細を確かめるべく『平民の手によって作られた煉瓦・2つ』『錬金で作られた煉瓦・2つ』を用意し、さらにそれぞれ傷をつけてみたりと、色々実験していたのである。

彼が必要としていた『準備』は、これら――袋と煉瓦――を揃えることだったのだ。ちなみに、そのために学院のメイドにして顔なじみであるシエスタに対し、

「これこれこういったものを用意してもらいたいのだ。材料については、当然こちらで交通費他の全費用を負担するので、申し訳ないが購入してきてもらえないだろうか。量があるので、数名一緒に連れて行ってもらった上で、手伝ってもらってくれ。そうだのう……手伝いは3人もおれば足りるであろう。人選はシエスタに頼んでもよいかの？」

それに笑顔で答えたシエスタ。

「わかりました。無料で街へ行けるなんて、他の子も喜びますし」

「ちなみに、袋については、悪いが絶対に＜魔法＞のかかっていない材料で全て手作りしてほしい。当然、別途報酬を支払うことに

よって礼をさせてもらう」

そう申し入れた太公望に、慌てたのはシエスタのほうであった。

「え、そんな、そこまでしていただかなくても……」

「何を言う。普段とは別の仕事をしてもらうのだ。礼をするのは当然であろう？」

と……太公望は、ポンと手を叩いてさらに続けた。

「わしとしたことが、肝心なことを言い忘れておった。この仕事や報酬については、他の者たちには絶対秘密にしておいてもらいたいのだ。つまり、口の堅い者を選んで連れて行ってもらいたい。頼んだぞ」

そして、シエスタは喜んでそれを受け――同僚のメイド3名を伴い、トリスタニアの街へ出かけ、言われた通りの仕事をして太公望を喜ばせた。

――なお『手伝い』をしてくれた者たちに申し入れた報酬の内容はというと。

『金貨5枚』『トリスタニアの街で流行っている店の最高級デザート』

であった。はっきり言って破格の報酬である。どのくらいの価値があるのかというと、金貨（エキュー）１２０枚でひとりあたりの1年間の生活費がまかなえる、と、言えばおわかりになるであろうか。

さらに、貴族御用達の店のデザートつき。普段の彼女たちには到底口にすることなどできないものである。当然のことながら、喜んで飛びついた女性たちであった。むしろ、また何か仕事を頼んではもらえないかと期待している節すらあった。

ちなみに、報酬のデザート購入時。ついでに自分とご主人さまの分まで確保してきた太公望であった。そう……言うまでもないことだが、彼は、甘味に対してとてもこだわりがあるのだ。

「やれやれ……〈魔法〉については、今まで見てきた内容からして、まず間違いなく無効化できるとは思っておったが『癒やしへの転換』もちゃんとやれて一安心だ。地球にいたころとほぼ同様の使い方ができそうで良かったわ」

――まあ、結論を述べるならば。この男、ご主人さまとの『模擬戦』にかこつけて、『太極図』の試し撃ちをしていたわけである。仙人界Ｎｏ．１の腹黒と謳われていたのは伊達ではない。あいかわらず容赦のない太公望であった。

だが、しかし。ひとつだけ彼にも解けない謎が残った。

「ここまでの結果を見るに〈サモン・サーヴァント〉の意思疎通能力と〈コントラクト・サーヴァント〉のルーンは消えとってもおかしくないはずなのだが……両方とも普通に残ったままなのは何故なのだろうか。これはもう少し検証が必要かのう」

このふたつが消えなかった理由。それは――『魔法』でも『科学』でも解き明かせないもの。それについては――追々物語の中で語らせていただきたいと思う。

第３６話　軍師、計略の成果を確かめるの事（後書き）

以上、反省会編でした。

まあ、太公望だよなあ……という久々に腹黒なお話でした。でも、タバサの為にもなっているので、報酬扱い、ということで。

次回から、とある節目となるイベントが発生します。そして……あっちのコンビがいよいよ再登場！　おたのしみに！！

ところで「活動報告」に、以前感想コメント欄で書いていた「没ルート」を掲載しています。あまりにも太公望らしくないので没った案でしたが、ああ、こういう可能性もありえたんだ……と、いうことで、興味のあるかたはごらんになってみてください。ただし、いつもの雰囲気ではないのでご注意を。没になるだけの理由があるということです。

あれ太公望じゃなくて別の何かだわ的な黒さが全体的に付きまとっています。これは本編にはやはり出せませんでしたということで。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正
２０１１／０７／１１　誤字脱字修正

第37話　蒼姫、鏡の世界に興ずる事

――タバサと太公望による『ハンデ戦』が終わってから、約1週間後。場面は、ガリア王国・首都リュティスの街、その郊外の一角に広がるヴェルサルテイル宮殿のさらに一角。プチ・トロワへと移る。

宮殿内部の一室で、そこの主人にしてガリア王国の王女イザベラ・ド・ガリアは、昼餐を摂っていた。

「この酒に料理……なんてまずいんだい。もう飽き飽きしてしまったよ」

彼女は、そう言って形の良い眉を寄せた後、脇の小テーブルに置かれていた豪奢な羽根扇子――最近、彼女がお気に入りとして常に持ち歩き始めたそれ――を手に取ると、口元を隠すように広げた。

「そうだねえ……どれにしようか」

側に控えた女官や召使いが、小さくひっ……と、怯えた表情を見せた。もしや、また虫の居所が悪いのであろうか、と。

そう、この王女。機嫌が悪い時に見せる態度が本当にロクでもないのである。と……そのイザベラが、周囲に控えるものたちを見回し始めた。そして。

「そこのお前と、そっちのお前。こっちへ来な」

イザベラによって『ご指名』を受けた侍女ふたりは、真っ青にな

った。周囲の者達は、同情の視線を送っている。

「まずそこの前。そこの奥にある果物籠と……焼き菓子全部。それを、わたしの部屋へ運びな。そっちのお前は……厨房からしぼりたてのフルーツジュースを冷やして、ピッチャーで持ってきな。グラスは……4つだ。王女たるものが何度も同じものを使い回したくなんてないからね」

そう言って、イザベラは席を立つ。指名された者も、それ以外の者達もほっとした。どんな難題を持ちかけられるかと戦々恐々としていたのである。

と――部屋の外へ出ようとしていたイザベラが、再び口を開いた。

「そうそう、残った昼餐の料理は、お前達でたいらげな。いいかい、残したりしたら承知しないよ？　なにせ、国中から集められた腕利きのコックたちが作った料理なんだ。本来なら、あたしたち王族しか口にできないものなんだからね。わかったかい？」

そして、今度こそイザベラは外へと出て行った。

「いやはや……どんな難題が持ちかけられるかと冷や冷やしたよ」

「まったくだ。こんなすごい料理を残さず食べろ、なんて話なら大歓迎だ」

テーブルの上に並べられた昼餐は、それはそれは豪華で……しかも、今ここにいる人数では食べきれないほどの量があった。

「だったら、そこに立ってる衛兵さんも呼んで、みんなで食べな

いか」

「それはいい考えだ」

――そして、召使いたちは思わぬ役得に預かったと心から喜んだ。

「あっはっは！　まったく意地汚い連中だねえ」

イザベラは、グラスに注いだフルーツジュースを片手に、昼餐会場を眺めていた――自分の部屋であって、そうではない場所から。そこへ、奥のほうから声がかかった。

「なぁイザベラよぉ。ちとこっち来て見てみろよ。面白ぇコトになってんぜ」

「え、本当？　どれどれ……」

イザベラは、声のしたほうへ向かうと……その先にある『窓』を覗き込む。

「おほ！　おほ！　おっほっほ！！」

「な？　傑作だろ！？」

「なによ、あれ！　あははははっ！！　積んだ皿を手で滑らせて全部割っただけじゃなくて……おまけに隣の棚にぶつかって……くくっ……中で食器が雪崩起こして……」

イザベラを呼んだ者――青白い顔に、長い耳を持った少年は、器

に盛られた焼き菓子を手で掴めるだけ掴み取り、口へ放り込むと……それをバリボリと噛み砕きながら言った。

「その前はもっとすごかったんだぜぇ！？　あのガキ、厨房のど真ん中ですっころんで、器の中身全部ぶちまけやがってよぉ。しかも、そいつがまた見事に料理長の顔面にクリーンヒットしやがってな……ククククッ」

「うそー！　もうっ、最初からそっちを見ていればよかったわ！！」

「ってまたやりやがったぜあいつ！　見てて本当に飽きねぇなぁオイ！！」

「あっはっは……あはははっ！！」

○●○●○●○●

――時は、半月ほど前まで遡る。

「そう怖がらなくていいんだぜ……オレは、お前の味方だ」

突如引きずり込まれた部屋の中で、イザベラは目の前の『エルフ』にそう言われた。はじめは、何を言われているのかわからなかった。

「あの『窓』を開けてオレを呼んだのは、オメーだろう？　オレぁこんな姿だからよ、怖がって騒がれちゃ面倒だと思ってな、こっちへご招待させていただいたと。まぁそぉいうわけだ」

『窓』？　ひょっとして、このエルフは……わたしの＜サモン・サーヴァント＞のことを言っているの？

「でだ。ちと話を聞かせてくれねぇか？　教えて欲しいことがあってな。もちろんタダでなんて言わねぇ。オメーさえよければ、オレの＜力＞を貸してやってもいい」

イザベラは、だんだん落ち着きを取り戻してきた。もともと王族としての教育を受け、さらに『裏』仕事を一手に任される程の実力を持つ彼女である。状況判断は早かった。

この『エルフ』は、少なくともわたしを今すぐどうこうするつもりはないようだ。それに――わたしさえよかったら＜力＞を貸してくれるとまで言っている。あの、強大な＜力＞を持つといわれるエルフが……だ。

イザベラは、改めてソファーの中央へ座り、姿勢を正すと――目の前の少年に向き直った。そして、自ら名乗った。

「わたしは、ガリア王国の王女。イザベラ・ド・ガリア。あなたを呼んだ者よ。よろしければ、お名前を教えていただけるかしら？」

「へぇ……本物の『眠り姫』さまだったわけか。オレの名前は王天君。まぁよろしくたのむぜ。ククク、だいぶ落ち着いたみてぇだな。話……させてもらってかまわねぇか？」

イザベラは、頷いた。

そうして、ふたりはお互いに語り合った。イザベラは＜使い魔＞を召喚するため、それ専用の『ゲート』を開くための＜魔法＞を唱

えたこと。

王天君は、突如現れた『窓』によって攫われた、自分の『弟』――『半身』というとややこしいのと、王奕（おうえき）がベースである自分のほうが当然年上なので、太公望を『弟』ということにした――を探している。この世界のどこかにいるのは間違いない。そこで＜力＞を貸す見返りに、しばらく食料などの提供を頼めないか？　部屋はこんなふうに自分で用意できるから……と。

そして、イザベラは王天君の＜力＞を見た。部屋中に現れた、たくさんの『鏡』。いや、正確にいうと『自分の姿が映らない窓』だろう。その中には……王宮のあちこちで繰り広げられている光景が映し出されていたのだ。

「これが、オレの＜力＞だ。この部屋は、誰にも見えない。だが……こっちからはこうやって、好きな場所を、好きな時に『窓』からのぞき見ることができる。しかも、相手の声も筒抜けだ。どぉだい？　オメーが気に入ってくれたんならいいんだがな」

『＜使い魔＞は、自分の目となり、そして耳となる』

これは……すばらしい『目』にして『耳』ではないか。イザベラは、すぐさまこの価値に気がついた。そして……取引することにした。自分が呼び出した、この素晴らしい＜力＞を持つ者……王天君を相手に。

そして、ふたりは取引をした。お互いを『パートナー』として認めることを。食料の提供については全く問題ない。その見返りとして、イザベラは職務以外の時間に、こうして王天君の部屋でいろいろな場所を見せてもらうことを条件とした。

「オレは、絶対にこの『部屋』から出ない。理由は……」

「その姿が目立つから、よね？」

「そうだ。ああ、できれば口元と耳が隠れるような扇子を用意しておきな」

「それは何故かしら？」

「オレが気付いたことがあったら、オメーの耳元に小さな窓開けて教えてやれる」

「そんなことまでできるなんて……あなたって最高よ、オーテンクン！」

「イザベラよぉ。オメーもなかなか見所があるぜ。どうだ？　オレ達は……」

「ええ、いいパートナーになれそうね。よろしく頼むわ」

こうして、彼らは手を取り合い『パートナー』となった。ただし、お互いを尊重するという意味合いで＜コントラクト・サーヴァント＞は行わないこととした。

「もしも、どっかのバカが『姫様にも＜使い魔＞が必要でしょうな』とか言い出しやがったら、オレが『楕円の窓』開けて、そっからフクロウでも飛ばしてやるよ」

「あら、それはいい考えね。その時はお願いするわ。ところで…

…あなたの好物って何かしら？　この国でいちばん腕のいいコックに作らせて運ばせるわ」

――こうして、似た者同士……結構すぐに打ち解けたふたりであった。

……で、時は現在へと戻る。

『窓』の中を見てひとしきり爆笑した後、イザベラは、以前から疑問に思っていたことを王天君に聞いてみることにした。

「ねえ、オーテンクン。思ったんだけど……あなたの＜力＞で、もっと遠い場所を見ることはできないのかしら？」

そう。現在『窓』の中に映るのは、このプチ・トロワの中だけなのである。

「できなくもねぇが……まだ『網』を広げてる最中でよぉ」

「『網』って何かしら？」

イザベラの質問に、爪を噛みながら王天君は答える。

「ああ、蜘蛛の網……っつってもお姫様にはわかんねぇか……この『窓』を開くには、そのための準備が必要でな。今、少しずつそれを作ってんだ。もうちっとでこの城だけじゃなくて、グラン・トロワ全体まで見えるようになるから楽しみにしてな」

「そうだったの……準備が必要だったなら、当然ね。楽しみにしてるわ」

……と、その時だった。とある『窓』から、おかしな声が聞こえてきたのは。

「ん……なんだ？」

「あれって……侍女のひとりと……花壇騎士の男、よね」

『窓』の先に映し出された光景は、所謂「身分の差に屈しない愛」と称した、男と女のラブゲーム。誰もいない部屋の暗がり。ひっしと抱き合うふたり。その先には寝台が――。

「ここで、更に先の展開を見続けることもできるけど……これ以上セクシーな場面を実況したら、ここの年齢制限的にヤバくなくて？　オーテンクン」

「ダメ」

「はあ……やっぱりそうよねぇ……つらいわぁ～」

「って、オイ。オメーの部屋に誰か向かって来てんぞ？」

「あらやだ。お父様の伝令係だわ。何か指令書でも持ってきたのかしら」

それじゃあ仕事に戻るわね。そう言って、イザベラは『王天君の部屋』から外の部屋へと出て行った。

「王族ってなぁ大変だねぇ。ま、オレは今のうちに『網』広げておくか」

そして、ふたりはなすべき仕事に取りかかった。

○●○●○●○●

――いっぽうそのころ。トリステイン魔法学院の一室では。

金色の巻き毛と、青い瞳を自慢としている少女――モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシは、自室でとある＜魔法＞のポーションを調合していた。やせぎすで小柄なその身を椅子にあずけ、夢中で壷の中の薬をかき回している。

現在彼女が調合しているのは、ただのポーションではない。それは、禁断の秘薬。国の法律で、作成と使用を禁じられている『ご禁制の品』である。

「まったく、あいつが悪いのよ……な～にが『君が空を舞う姿は、まるで流れ星のようだ』よ！　あれだけわたしに愛してるだの、永遠の奉仕者だの言ってたくせに……よりにもよって……！！」

あいつが浮気性じゃなかったら、こんなものを作る必要なんてなかったのに。

そして。滑らかにすり潰した粉薬や竜硫黄やマンドラゴラの中に、肝心要の秘薬――必死になって調合した『香水』などを売ることで、こつこつ貯めたお金で購入した――７００エキューもした高価なそれを、こぼさぬよう、細心の注意をはらって、少しずつ壷の中へとたらしていった。

「……ついに、完成したわ」

モンモランシーは、できあがったポーションを、慎重に手持ちの香水瓶の中へと注いでいく。そしてそれは、余すことなく瓶の中へ収まった。

「さて、と。あとは、これをどうやって使うか、よね……」

彼女は、作戦を立て始めた。最も自然で、かつ効果的なそれを――。

第３７話　蒼姫、鏡の世界に興ずる事（後書き）

ようやく来ました新シリーズ。そして、ひさびさに登場のイザベラ＆王天君組です。なにやってんだこいつら的な。結構気が合うと思うんです、このふたり。あと、やはり少年誌的……もとい、この作品でセクシー展開はダメなのでよろしくお願い致します。

そして……最後のコレは例のイベントです。さて本作の犠牲者は一体誰になるのか！？　次回おたのしみにっ！！！

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正

第３８話　掛け違いと呼び覚まされし者

――モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシは、浮気性の彼氏に悩まされていた。

彼氏の名はギーシュ・ド・グラモン。ふたりが付き合っていることはほぼ公然の秘密状態なのであるが、彼女はギーシュと交際していることを頑なに認めようとはしなかった……それは何故か。本人のプライドも当然あるのだが、それ以上に問題なのが、

『ギーシュの浮気性』

であった。ふたりっきりで風当たりの良いベンチに腰掛け、愛の言葉を囁いてもらう。そんな時でも彼は、目の前を通り過ぎた女性に視線を移した上に、なんと声までかけてしまうのだ。

可愛い女の子が近くにいたら、つい目をやってしまうのが男の性だから、ある程度は仕方がないとはいえ……時と場合、状況によってそこはグッと耐えねばならないのである。ギーシュは、そのあたりがまったくもってわかっていなかった……いや、ハッキリ言って、それ以前の問題であった。

しかも……である。

「アイツ……最近、やたらとルイズと一緒にいるのよね……」

そう。彼女であるはずの自分よりも、クラスメイトの少女・ルイズと過ごしている時間のほうが長いのだ。

……あえてここでギーシュの擁護をするとするならば、彼は『ルイズといる』のではなく、その＜使い魔＞にして護衛である『サイト』と『訓練のために一緒にいる』、単にそれだけなのであるが……。

「なにが流れ星よ！　なにが箒星よ！！　あの浮気者～！！！」

恋する乙女は盲目とはよく言ったものではある……が。この場合、モンモランシーは同情されてしかるべきであろう。ハッキリいって9割方ギーシュが悪い。残り1割はモンモランシーの、トリステイン貴族特有のプライドの高さ故の『距離を縮めたいのに、プライドが邪魔して邪険にしてしまう』性格のせいであろうが。

そして。モンモランシーは、ここ1週間ほどギーシュの行動を観察した上で考え出した作戦に満足していた。そう、これなら自然に……かつ、さりげなく『目的の物』を口にさせることができる……と。

――彼女は、作戦を実行すべく行動を始めた。『それ』を手にして。

○●○●○●○●

――放課後・トリステイン学院中庭。

ここ半月ほど、彼ら――太公望、タバサ、ルイズ、才人、キュルケ、ギーシュの6名は、この場所に集ってそれぞれの訓練を行っていた。

才人は、おもにギーシュと剣の訓練、その後太公望との組み手を。

タバサは、それを見て『空間の感覚』を磨くべく神経を研ぎ澄ませ。

ルイズは、箒よりも重い物――現在はふたりがけのベンチを浮かせ。

キュルケは、最低限の＜精神力＞で、以前と同威力の＜魔法＞を撃つ。

そして、それらが一段落、あるいは休憩している者は、側に置かれたベンチ――ルイズが浮かせているものとはまた別の――に腰掛け、他の者の様子を見ていた。

「ギーシュが休憩に入ったら、さりげなくこのワインを持って行けば……うふふ、我ながら完璧な作戦だわ」

――そう。運動後で喉が渇いているであろうギーシュに、例のポーション入りワインを手渡す。これがモンモランシーの考えた『作戦』であった。

現在ベンチに腰掛けているのは、タバサとミスタ・タイコーボーのふたりだ。いつもなら、ギーシュが戻ってくるのと入れ替わりにタイコーボーは訓練に入る。狙うのは、そのタイミングだ。モンモランシーは、虎視眈々とその機会をうかがっていた。

「いよっしゃあ！　これで俺の勝ちだ」

「くうっ！　もう一撃入りそうだったんだがね……次こそは！！」

そんなことを言いながら、ギーシュが戻ってくる。今だ！　モンモランシーは、グラスを傾けたりしないよう、細心の注意を払いながらベンチへと近付いていった。ところが……ここで、彼女にも。そして当人にも想像だにしていなかった事態が発生する。

「ふむ。だいぶ動きが速くなったのう、才人よ」

「へっへっへー、だろう？　お前の顔面に一撃入れるまでもうすぐだ！」

「ワハハハハ、バカめ！　そううまくゆくものか！！」

……と、太公望は答えたものの。ここ数日の才人の伸びは実際凄まじいものがある。「こやつ、本当に武成王の血を引いているんじゃなかろうか」などと、捏造かました太公望ですら疑いはじめたほどのレベルで成長している。

未だ顔面どころか、クリーンヒットすら受けていないが、さすがにそろそろお灸を据えてやらないと、また調子に乗り出すかもしれない。最初から泥酔拳で行きたいところだが、今日は酒を持って来ることが出来なかった――厨房の警戒レベルが上昇したからだ――はて、どうしたものか。

と、そこへ。ひとりの少女が近付いてきた。手にワイングラスを持って。

「おぬし、それはワインではないか!?　悪いがちょっともらうぞ」

そう言って、太公望は少女――モンモランシーの手にあったグラスを素早く横取りすると、中身を一気に飲み干してしまった。

「ああーっ！！」

思わぬ事態に悲鳴を上げたのはモンモランシーだ。しかし、まずい。このままここにいたら……『アレ』を飲んだ彼に自分の顔を見られてしまう！　彼女は、慌てて逃げ出した。

「いったいどうしたというのだ？　いきなりで驚かせてしまったかのう」

ぽかんとした様子で、モンモランシーが走り去る姿を見送った太公望。

「どうしたの？」

そこへ声をかけてきたのは、先程まで隣に腰掛けていたタバサであった。

「ああ、それがの……ッ！？」

タバサと目を合わせた瞬間。太公望はその場で硬直してしまった。身体から力が抜け、手に持っていたワイングラスを取り落とす。そしてグラスは、そのまま地面へ落ち……パリーン……と、乾いたような音を立てて割れた。

「ううっ、こ、これ……は……」

覚えがある、この強引に精神を塗り替えられるような感覚。そし

て、鼻孔に漂ってくるような甘い痺れ……これは、まさしくかの女狐が得意とした〈魅惑（テンプテーション）〉の術！　まさか、さっきの娘が持っていたものは――！

突然、その場へと蹲り、頭を激しく振り始めた太公望の様子に、周囲の者たちはただならぬものを感じて駆け寄ってきた。

「おい、大丈夫か!?」「タイコーボー！」「何があったんだね」「ちょっと、しっかりしなさいよ」「いったい、どうしたっていうのよ」

太公望は、必死に〈魅惑の術〉に抵抗しようともがいた。だが、体内に取り入れるという形でかけられてしまったせいか、普段の状態なら耐えられるそれに、うまく対応できない。このままではまずい。せめて、タバサに……彼女なら、もしこのまま自分が倒れたとしても、うまく対処してくれるであろう。そう、望みをかけて。

「何か薬……おそらく魅惑系……精神を……書き換え……さっきの娘……」

――そこまでなんとか言い残した後、太公望の意識は闇へと落ちた。

○●○●○●○●

「惚れ薬ぃ!?」

「ば、ばか！　大声出さないでよ……禁断の薬なんだから」

ベンチに太公望を寝かせ、キュルケに介抱を頼んだタバサとそれ以外のメンバーは、太公望が言い残した言葉『さっきの娘』という一言を手がかりに、即座にモンモランシーを追い掛け、身柄を確保。現場へと連行した。

そして、洗いざらい事情を吐かせた。取り調べを担当したのはタバサである。その身に纏う、荒れ狂う吹雪のような雰囲気に飲まれたモンモランシーは、あっさり全てを語った。

ギーシュの浮気性に悩んでいたこと。そして、高額の秘薬を手に入れ調合し、ご禁制の『惚れ薬』を調合したこと。それを飲ませれば、彼の浮気が一時的にでも治るかもしれないと考えたこと。しかし、ふとした事故で、それを太公望が口にしてしまったことを――。

ギーシュは感動していた。まさか、彼女がそこまで自分を想っていてくれたとは。

「モンモランシー、そんなにまでぼくのことを……」

「ふんっ、別にあなたじゃなくても構わないのよ！　暇つぶしに付き合っていただけ。ただ、浮気されるのが嫌なだけなんだから！」

その台詞に呆れたのは才人とキュルケであった。

「暇つぶしの付き合いに、メチャクチャ高い、しかもご禁制の薬使うんだ？」

「これだからトリステイン貴族は……プライドだけ高くって、自分に自信のない女って、困ったものよね。そうは思わなくて？」

しかし。そんな彼らのやりとりとは裏腹に……タバサの纏う冷気はどんどん強まっていた。そう……彼女は、あるトラウマを抱えているのである。そういう意味で、今回の事件はまさしく『地雷』そのものであったのだ。

「それで？」

聞く者全てが凍えるような声で、タバサは呟いた。

「それで、って……？」

「彼が飲まされた薬には、具体的にどんな効果があるのか詳しく述べよ」

モンモランシーは、心の底から震え上がった。こんなタバサの姿は、これまで全く見たことがなかったから。

「の、飲んだ後、いちばん最初に目を合わせたひとに強く魅了される効果があるわ。それ以外は、一切目に入らないほどに」

「……最初にミスタと目を合わせたのは誰だね？」

「おそらくわたし。それから彼は倒れ込んだ」

そう呟いたタバサの声に、才人は青くなってしまった。

「おい、それマズくねーか。あいつロリコンになっちまうぞ」

「ロリコンって何かしら？」

才人の言葉が聞き慣れない言葉だったため、質問したキュルケ。

「ロリータ・コンプレックスの略。小さな女の子しか愛せない男のこと」

うわぁ……と、周囲の空気がなんともいえないものに変化する。しかし、唯一事情を知らないモンモランシーがぽかんとした顔をしていた。

「え？　でもミス・タバサと彼って、1つか2つしか違わないでしょう？」

このモンモランシーの言葉を聞いた彼らは、互いに目を見合わせ……そして、頷き合った。事情が事情だ、この際仕方がないだろう。

「彼は見た目通りの年齢ではない」

「子供みたいな顔してるだろ……あれで27歳なんだぜ……」

馬鹿ねえ、人を担ぐのもたいがいにしなさいよ。そう言って軽く笑ったモンモランシーは、周囲の様子に気がついた。皆、一様に黙り込んでいる。

「冗談……よね？」

「冗談だったらどれだけ良かったか」

「嘘よおぉぉおおおお！！！！」

……と、そんなモンモランシーの大声で気がついたのか、太公望がベンチの上で身じろぎすると、ゆっくりと上半身を起こした。

「なぜだ……？　どうしてわしはこんなところで寝ておったのだ」

うげ、起きちゃったよ……そんな空気が辺りを支配する。だが。

「どうした？　みんな揃って。わしの顔に何かついておるのか？　しかし、いつのまに寝ておったのだろう……最近の疲れが溜まっておったのだろうか」

そんな彼の様子は、普段と全く変わりがないように見える。

「もしかして、効いてない？」

「そんな馬鹿な！　わたしは調合に失敗なんてしてないわ！！」

試しにタバサが近付いてみても。

「うーむ。今日は早めに休んだほうがよさそうだ。かまわぬか？」

などと聞いてくる始末。どこからどう見ても、普段と変わらぬ太公望だ。

「もしかすると、ミスタのことだから＜抵抗＞に成功したんじゃないかしら」

安心したわ……と続けたルイズの言葉に、全員が心から同意した。だが……その穏やかな空気は、太公望が発した次の台詞によって粉々に打ち砕かれることとなる。

「そろそろ日も陰ってくるであろう。さあタバサ、兄と一緒に部屋へ戻るのだ」

――ん？　今、タイコーボーさん何て言いましたカ？　全員が石になった。

「タイコーボー、今、何て言ったの？」

タバサは、震える声でそう訊ねた。

「む？　どうしたのだタバサ。いつもは兄様と呼んでくれるではないか。それはともかく、部屋へ戻ろう。おぬしが風邪でもひいたら困る」

……全員、石から青銅に変化した。そんな空気を察することなく、どうしたのだ、皆も早く戻ったほうがいいと思うぞ。などと言葉を続ける太公望。

「あきらかに惚れ薬が効いているみたいね……方向性がおかしいけど」

キュルケの言葉に、相変わらず嘘よー！　と、絶叫するモンモランシー。と……そこへまた才人が余計な一言を付け加えた。

「まさか、タイコーボーってシスコンだったのか……！？」

唖然とした才人。これまた聞き慣れない言葉に、今度はギーシュが反応した。

「シスコンとは何だね？」

「シスター・コンプレックスの略。妹とか姉のことを溺愛する奴のこと」

そんな言葉をよそに、タバサへ向かって「安心してよいぞ、全てこの兄に任せるのだ！」などと言い続けている太公望を見た一同は、こう思った。

「……シスコン？」「シスコン……」「シスコン！！」

だがしかし。タバサだけが、その流れに乗っていなかった。

――今、わたしの目の前にいるタイコーボーは。いつもの彼ではなくなってしまった。よりにもよって……『薬』のせいで。

タバサの心は凍り付いた。その後……激しい怒りに囚われた。これまでに、感じたことのないほど大きなそれに。この瞬間。モンモランシーが踏んだのは『地雷』から『大型地雷』……いや『核地雷』へと変化した。

「早く彼を元通りにして」

静かに。だが、内に激しい怒りを込めてモンモランシーへ通告する。

「い、いいじゃない別に。優しいお兄さんができたと思えば……ひっ」

タバサの纏う空気が変化した。そして、彼女は＜ルーン＞を紡ぎ

始める。

「か、解除薬を作るには、とっても高価な秘薬が必要で……」

顔を引きつらせながら後ずさるモンモランシー。だが、そのときタバサの呪文が完成する。彼女の得意なそれ……＜ウィンディ・アイシクル＞。これまで3本まで撃つことができていたそれ。しかし――今、彼女の周囲に漂っているのは……その数なんと２０本。

そう。タバサはこの怒りで『スクウェア』へのランクアップを果たしたのだ。

「で、でも、それを買うだけのお金がないのよ！　本当よ！！」

「いくら必要なの」

「ご、５００エキュー……」

その言葉に、いまいち金銭感覚のない才人以外の者たちは戦慄した。

「大金じゃないか……ぼくらの小遣いじゃ、とても足りないよ」

「たしかに、ぽんと出せるような金額じゃないけど……なんとかしないと、あなたタバサの『アレ』で穴だらけにされるわよ？」

「だ、だからね、効果が切れるのを待てば……」

「それはいつ？」

＜ウィンディ・アイシクル＞を待機させたまま、タバサは問うた。

「個人差があるから……だいたい1ヶ月か……1年ぐらい」

「長すぎだろオイ！　なんとかしろよモンモン！！」

「誰がモンモンよ！！」

――結局。この場にいる全員から借金をして必要な材料を購入し「解除薬」を作る。そうタバサと約束をしたことによって『穴だらけ』になることを逃れたモンモランシーは、涙した。どうしてこんなことになったのだろう……と。

最終的に、そんな彼女に「全部あんたのせいよ！」という叫びと共に、頬を張られたギーシュであったが……これはある意味自業自得であろう。

○●○●○●○●

――いっぽう、そのころ『王天君の部屋』では。

「なんだ、その紙っ切れはよぉ」

「ああ、お父様から寄越された指令書よ。なんでも領内にあるラグドリアン湖っていう湖の近辺で、精霊が悪さをしているみたいだから、それを鎮めてこられるような部下を出して対処しろ、ですって。ふふん……これはあの『人形娘』にピッタリな『任務』だわ」

ほくそ笑むイザベラに、王天君は訊ねた。

「なんだぁ、その人形娘ってぇのは？」

「ああ、まだ言ってなかったわね。あたしの従姉妹なんだけど……今は部下として使ってやっているの。人形みたいに表情がない娘でね、ちょっと＜魔法＞が上手いからってそれを鼻にかけて、しかも周りにちやほやされていい気になってたのよ。だけどね……」

ププッ……と吹き出したイザベラへ、怪訝な表情を浮かべた王天君。

「＜サモン・サーヴァント＞に失敗して、なんと『人間』を呼び出しちゃったのよ。それも……異国のメイジをね」

あれはおかしかったわ。いつもひとを見下してたくせに、いい気味！　そう言って笑うイザベラに、王天君は静かに語りかけた。

「なあ……イザベラ。その人形娘とやらが呼び出した『人間』について、オレに詳しく教えてくれねぇか」

――そして。歴史の道は、再び交差するべく動き出した。

第３８話　掛け違いと呼び覚まされし者（後書き）

コマンド？　……ピッ。
『さくせんへんこう』→『たいこうぼう』→『みんなまかせた』→『タバサだいじに』

……と、いうわけで犠牲者はまさかの太公望でした。女の子組を期待していた皆様ごめんなさい！　自分に、というか太公望にラブコメさせるのは無理であります！！　ネタならともかく。

ちなみに例のシスコンネタがやりたくて組み込んだなんて言えない！　ここに書くけど！！　タバサ覚醒のためなんだ……それだけは本当なんだ……すまない……ッ。

地雷を踏み抜いたことにより、タバサが原作よりも大幅に早くスクウェアに覚醒。さて、原作の展開では「ああなる」のですが……果たしてどうなるのでしょうか。次回をお楽しみに！

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正・及び本文修正
２０１１／０７／１１　誤字脱字修正

第３９話　女王たるべき者への目覚め

――太公望が『惚れ薬』を飲んでしまってから、２日が過ぎた。

解除薬を作るべく、モンモランシーとその手伝いとして連れ出されたギーシュは、材料を求めてトリスタニアの街を駆けめぐっていた。今の太公望から目を離すと危険ということで、それ以外のメンバーは学院に残っていた。

そして、その太公望はというと。

タバサのことを『妹』だと思い込んでいるような行動をとる以外は、とりたてて問題を起こしたりするようなことはなかったのだが……２日目の放課後。ほぼいつものメンバー――太公望、タバサ、キュルケ、ルイズ、才人――が集まって、中庭に置かれたテーブルにつき、午後のお茶を楽しんでいた時に、それは起きた。

それまでは、単なる世間話をしていただけだったのたが……その際に、

「タイコーボーの国の話を聞いてみたい」

と、いう流れになり。そこで、キュルケがタバサに頼み事をしてみたのだ。

「ねえ、タバサ。もちろん彼が話せる範囲でいいから、何か聞いてみてよ」

……と。

タバサは困った。今わたしが何かを頼めば、きっと彼は嘘をつくことなく何でも教えてくれるだろう。しかし、それは彼女にとって本意ではない。『惚れ薬』の効果を利用して何かを聞き出すなど、絶対にしたくはなかった。

とはいえ、親友の頼みを邪険にするわけにもいかないし、正直なところ、彼の国に対して興味がないといったら嘘になる。それならば……話しても全く問題がないような、当たり障りのない内容を聞いてみればいいだろう。

「タ……兄様。お願いがある」

「なんだ？　タバサの頼みなら、わしはなんでも聞いてやるぞ」

この言葉、実は初日から太公望の口から出続けているものなのである。『惚れ薬』が、国の法律で作成及び所持を禁止されるわけだ。ある意味、飲ませた者を完全に『操り人形』にしてしまうのだから。

よって、その恐ろしさに早々に気付いていた彼らは、絶対に太公望が明かしたくないであろう内容に踏み込むような真似はしていなかった。

「兄様は、ここへ来る前に旅をしていたと聞いた。その時の話をして」

タバサの願いに、周囲も賛同した。

「あっ、それはいいわね！　あたしも是非お願いしたいわ」

「オレも！　それならタイコーボーも話せるだろ？」

「あたしも、東方の話を聞いてみたいわ！」

彼らの声に、笑顔を見せた太公望は、それならもちろん構わないぞ――と、前置きをした上で、当時の話をし始めた。

「そうだのう……あちこち見てまわったのう……知り合いの両親に挨拶回りをしたり、果樹園に潜り込んだり、最強の＜雷＞の使い手に一騎打ちを申し込まれそうになったり……」

思い出すように語る彼の話に、身を乗り出す一同。

「ああ、そうそう。王宮も見に行ったな、そういえば」

「へえ、いいわね」

「いやあ、愉快であったぞ。久しぶりに王や補佐官たちの顔を見にいったのだがな、滅茶苦茶忙しそうだったので、連中の執務室の隣に敷物をしいて自分専用コーナーを作ってな、そこで思いっきりごろごろだらだらしてやったのだ。見せつけるようにのう」

ついでに食い物まで要求してやったわ。そう言って、ワハハハハハ……と、大笑いする太公望の言葉に、全員が固まった。

「いや、ちょっと待て」

「なんだ才人」

「王の前でだらだらって……怒られるとかそういうレベルじゃね

ーだろ？」

なあ？　と、全員に賛同を求めるように視線を動かす才人。激しく何度も首を縦に振る一同。だが、しかし……太公望の口から出たものは、まさしくそんな彼らをあざ笑うような内容であった。

「馬鹿をいうでない！　あやつがこのわしを怒ったりなどできるものか！！」

ニヤニヤと笑いながら、太公望は続ける。

「そもそも、あやつが即位する以前から、わしはさんざん面倒を見てやっていたのだ。あの男は、昔っからとんでもない女好きでな！　王位を継ぐ前は、しょっちゅう城を抜け出しては、そこらじゅうの娘をナンパしまくりおって……いやはや、わしをはじめとした王宮にいた者は、さんざん手を焼かされたのだ」

遠い目をして、空を見上げる太公望。他の者たちは、声を出すこともできない。

「そのうち怒るのもアホらしくなったので、一緒に街へ出かけるようになったのだ。で、屋台をひやかしてみたり、賭けレースに興じたり、民たちと一緒に居酒屋巡りをしたり……そこへ武成王殿が、息子たちを引き連れてやってくるのがお約束になっていたほどなのだ。もちろん、混ぜろと言ってな。そうしてみんな一緒に、飲めや唄えの大騒ぎをしていたのだよ」

「ず、ずいぶんフランクなかたでしたのね、お国の王は」

ようやく声を絞り出すことに成功したキュルケに、太公望は「あ

あ、うちは堅苦しいのが嫌いな連中が集まっていたのだ」と、答えた後、再び語り始めた。

「で、宴もたけなわというあたりになると、ようやくわしらが城からいなくなったことに気付いた宰相殿がすっ飛んできてな。特大のハリセンで酔ったわしら全員をはり倒して、城まで引きずり戻す……と。これが、ある意味街の名物行事になっておったのだ」

もしやすると、あの宰相殿こそが国内最強であったのかもしれぬのう。いやはや懐かしい……そんな風にあきらかにヤバイ昔話を語る太公望に、待ったをかけたのはタバサであった。

「に、兄様もういい。ありがとう、楽しかった」

「そうか、それならばよかった」

にっこりと笑った太公望は、それきり話をやめると、ふいにタバサのティーカップが空であることに気がついた。

「む、茶がないではないか。どれ、このわし自ら厨房へ取りに行ってこよう」

そう言って席を立った太公望の後ろ姿を見送った残りのメンバーは、あまりのことに呆然とした。

「い……いまの話……本当なのかしら」

「タバサが聞いたことだから、たぶん本当なんだろうナ」

カタカタと震えるルイズと、その横で固まっている才人。確か、

元は王の相談役だったという話は聞いていたが……まさか、そこまで親しい仲だとは思ってもみなかったのだ。と、いうかそれが普通だ。

「ねえ、タバサ……今更なのかもしれないけれど」

口を開いたキュルケの顔は、真っ青だった。

「彼、実はものすごく身分の高い方なんじゃないかしら？　まさかとは思うけど……ロバ・アル・カリイエの王の身内……それも王弟殿下なんてことは……それなら、あの若さで中将ってことも、さっきの話にも納得できるんだけど」

……ありえる。タバサは思った。そもそも、あの『くすぐり刑』で、彼が真実を全て語っていた保障などないのだ。

むしろ、今回聞いた内容のほうが『薬』の作用があるぶん信用が置ける。彼が王族ならば、あの驚くべき教養の高さも、聴衆をコントロールする話術の巧みさについても全て納得できる。

そんな人物が、王の相談役にして、若くして軍最高司令官の座につき、国の元帥にその身を庇われたというのは……ある意味当然といっていいことなのだ。タバサは、なんだか目眩がしてきた。

「な、なあ、みんな。治るまで、閣下に話聞くのやめようぜ」

「心から賛同する」

「そうしたほうがいいと思うわ。話を振ったあたしがいうのもなんだけど」

「あたしも賛成……なんだか怖くなってきたわ」

――そこらじゅうに散らばった、しかも目に見える『地雷』をわざわざ踏み抜きたくない。今聞いた話は、他の人間には絶対内緒にしておこう……そう呟いた彼らは、以後静かになった。太公望がティーセットを持って戻ってきた後も、それは変わらなかった。

しかし……そんな彼らの気持ちをあざ笑うかのように、事件は起きた。

それは――空からやって来た、一羽の伝書フクロウ。タバサのもとへ舞い降りたその足には、書簡がくくりつけられていた。タバサの顔が、瞬時にこわばる。そして……書簡の中身を見た途端、凍り付いた。

「しばらく留守にする……兄様、いっしょに来て」

「うむ、わかった」

立ち上がり、部屋へと戻ろうとした彼らふたりだったが、ふいにタバサは後ろを振り向くと、キュルケたちにこう頼んだ。

「モンモランシーたちが戻ってきたら、急いで『解除薬』を作るよう、見張っていてほしい。わたしたちは、どうしても行かなければいけない用事ができた」

「そ、それはかまわないけど……」

太公望を連れて行っても大丈夫なのか？　そう言いたげな彼らへ

タバサは答える。

「彼が指名されている。どうしても連れて行かなければならない」

そして、タバサと太公望は急いで部屋へ向かい、準備を始めた。

学院から少し離れた場所に、迎えの風竜が到着するという時間まで……あと少ししかない。改めて『指令書』を見たタバサは、それを手でグシャッと強く握りつぶした。

そこに書かれていた命令、それは。

『出頭せよ。その際、件の＜使い魔＞を同行させること』

○●○●○●○●

――ガリア王国・ヴェルサルテイル宮殿内の一角に建つ小宮殿プチ・トロワ。その謁見室で、イザベラは従姉妹姫・タバサの到着を待ちわびていた。

いや――正確に言うと、彼女が＜使い魔＞とした男の到着を。

……時は、少しだけ遡る。

「ひょっとすると……そいつが、オレが探し求めていた相手かもしれねぇ」

『王天君の部屋』の中で、その部屋の主がそういったとき……最初は、彼が何をいっているのか、イザベラにはわからなかった。だが。

「オメー、そいつの顔……見てるんだろ？」

「え、ええ、もちろん。それが――――ッ！？」

イザベラが全てを言い終える前に、王天君はそれまで被っていた帽子を脱いで見せた。それが故に……イザベラは、先を続けることができなかったのだ。

長い耳に、青白い肌。だが……彼の顔をよく見てみると。それ以外の部分は、あの従姉妹姫が連れていた＜使い魔＞と瓜二つ――まさしく合わせ鏡のようであったから。イザベラはそもそも王族。よって、他人と接することが多く、また、ひとの顔を覚える必要がある。だからこそ、しっかりとその特徴を記憶していたのだ。

「ま、まさか、あ、あの男って……」

「やっぱりそうか。そうだよ、そいつこそがオレの『弟』なのさ」

イザベラは、驚愕した。あの……まるで害のなさそうな、それでいて礼儀しらずな田舎者と馬鹿にしていた男が、自分の『パートナー』の言っていた『弟』だとは。だとすると……。

「気がついたみてぇだな。そう、あいつはオレと同じだ。『人間』じゃねぇんだよ。ま、見た目はあの通りだから、だぁれも気付いてねぇようだがな」

「まさか＜魔法＞で姿を変えているというの？」

「いや、素の姿があれなんだよ。だから、いつもあいつが『表』

にして『光』。外に出て、前面に立って仕事をする。そして、オレが『裏』にして『闇』。あいつの影に徹して、背後から手伝う。長ぇことそうやってきたんだ」

そう言って、深いため息をついた王天君を見たイザベラは思った。どうして彼と、こんな短期間で打ち解けることができたのか、ようやく理解できた。彼は、わたしと同じく、いつも『表舞台』を支える『裏の世界』にいたからなのだ。

――まばゆく輝く『光』を羨む『闇』として。

「一時は、なんであいつばかりがイイ思いをするんだ、そう思って恨んだこともあったよ。だがなぁ、今じゃあもう和解して、それなりにうまくやってたんだ。にも関わらずよぉ、どっかの『人形姫』とやらが、いきなりあいつを……オレから引き剥がしやがったんだ」

ギリッと爪を噛み、怒りを顕わにする王天君。

「もっとも、あいつのことだから『ご主人様』にも正体隠してすっとぼけていやがるんだろうが。ともかく、犯人はわかった……だが、一応確認しておきてぇな。これからその女を呼ぶんだろ？　その時、一緒にあいつを連れてくるように命令してくんねぇか？」

「ええ、わかったわ。わたしとしても警戒しないといけないし」

そのイザベラの言葉を聞いて、王天君は高笑いした。

「ああ、オメーに危害を加えるとか、そういう警戒をする必要はねぇぜ。あいつはマジでイイコちゃんでな、戦争ごっこが大嫌いときてる。特に、人間同士の戦いになんか絶対干渉しやしねぇよ。そ

れだけは保障しといてやるぜ」

――ただし、裏ではいったい何考えてるのかわからねぇけどな。

そう、王天君は心の中で付け加える。

「それにしても……まさか『失敗』じゃなかっただなんて」

「通常は人間が呼び出されるなんて、ありえねぇ……ってぇ意味か？」

「ええ。だからこそ『失敗』とか『事故』だって思い込んでいたのよ。念のため、トリステインに潜り込んでいる間諜に、気取られない程度に噂を集めさせていたんだけど……その情報によると、学院側も『事故』扱いしていたのは間違いないわ」

「……ってことはだ。やっぱりあいつ、正体隠してやがんな」

「じゃあ、彼もあなたと同じエルフで……見た目通りの年齢じゃないのね」

「オレたちはエルフとやらじゃねぇよ。ただ、見た目通りの年齢じゃないってぇのは正解だ。少なくとも、あいつは１００年近く生きてるぜ」

「う、嘘おッ！！」

あたしと同じかそれ以下にしか見えなかったのに！　そう言って慌てるイザベラの姿を見ながら、王天君は笑って告げた。

「オメーのことだからわかってるたぁ思うが、念のため言っとく

ぜ。こっちが気づいてるってことを、向こうに悟らせんなよ？」

「ありがと。忠告、しっかりと受け止めておくわ」

「ククッ……それでいい。やっぱオメー見所あるぜ」

「あら、あなたこそとっても素敵よ？　オーテンクン」

そう言って笑い合ったふたりは、従姉妹姫に送る指令書の文面を検討し始めた。

○●○●○●○●

――そして現在。謁見の間にて、イザベラは従姉妹姫到着の報を受け取った。

そして見た。問題の男を。やはり似ている……イザベラは、驚きの表情を表へ出さぬよう気を引き締めた上で、そっと例の羽根扇子を広げた。

「どう？　間違いない？」

「ああ。だが……なんだか様子がおかしい。探ってみてくれ」

イザベラは、改めて王天君の『弟』を見た。確かに、前回見たときのそれとは違っている。あんなに落ち着きのない態度を見せていた彼が、今はただ……静かに従姉妹姫の後ろへ、まるで付き従うように控えている。

「あら、どうしたんだい＜使い魔＞さん。今日はずいぶんと静かだね」

だが。彼は全く反応を見せない。じっと静かに、そこへ立っている。

「どうしたの？　もしかしてご主人さまに遠慮しているのかい？」

そう言っても、彼は全く答えようとしない。

「なぁ、前もああだったのか？」

「まさか。めちゃくちゃ五月蠅かったわよ」

小声で確かめてきた王天君へ、これまた小さな呟きで返すイザベラ。その返事を受け、王天君は改めて己の『半身』――太公望を確認した。たしかに奴だ、それは間違いない……だが。その顔を、いや、正確には目を見て王天君は心の底から驚いた。何故なら、太公望の瞳に宿っていた『光』が――完全に消えていたからだ。

「もしかして、ここには人間の心を操るような＜魔法＞があるのか？」

「あるわ。禁呪扱いになってるけど」

「ありえねぇ……あいつ、精神系の攻撃にはめっぽう強ぇんだぞ!?　なのに、あきらかに操られて、完全に正気を失ってやがる。そこをちっとつっついてみな。『人形姫』さまに」

その言葉を聞いたイザベラは驚いた。だが、それを外へ出さぬよ

う必死に抑えると、他人に見えないよう王天君に頷き、今度はタバサへと言を向ける。

「あら？　彼……ずいぶん大人しくなったじゃないのさ。どうやって『しつけ』をしたんだい？　是非今後の参考のために聞かせておくれよ、シャルロット。まさかとは思うけど……＜制約（ギアス）＞でも使ったのかい？」

その言葉に、ビクリと震えるタバサ。彼女は、ここにきてようやく悟った。この城に立ち入る前に、太公望へ頼んだ『お願い』が完全に裏目に出てしまった――と。

「兄様、お願いがある」

「なんだ？　何でも聞いてやるぞ」

「お城の中にいる間は、何があっても絶対に静かにしていて欲しい。たとえ、わたしが何をされても。お願い」

「……わかった。タバサがそういうのなら、そうする。ただし、命に関わるような危険があった場合は、その限りではないからな」

「その時はお願い」

「わかった、全てこの兄にまかせておくのだ」

……そして。太公望はタバサの言うとおりに静かにしている。イザベラから質問を受けても、何一つ答えない。今から『お願い』を変えたところで、もう遅いだろう。

「おや……まさか、本当にやっちまったのかい？」

騒然とする室内。側に控えていた召使いたちが、驚いているのだ。それも当然だろう、なにしろ＜制約＞は禁呪である。法律で、使うことを禁じられているほどなのだ。そんな様子を見て、イザベラは再び小声で王天君に語りかける。

「どうやら当たりっぽいわ」

「マジかよ……あいつを操ってるだとぉ！？　クソッ……許さねぇぞあの女」

怒りを含んだ声で呟いた王天君は、すぐさまイザベラに何やら耳打ちをする。それを聞いて思わずニヤついたイザベラは、彼の言った言葉を、そのままタバサへと投げつける。もちろん……憎らしいまでに満面の笑みを浮かべて。

「ふうん……『人形姫』らしい振る舞いだねぇ。『おともだち』が欲しくなったから、いうことを聞くように『感情』を奪ったってことかい」

「違う。＜制約＞なんかじゃない。これは『事故』で……」

「へえ、また『事故』。よく続くもんだねえ」

――そのイザベラの発言に、タバサは思わず反応してしまった。

「わたしが飲ませたんじゃない。今、元に戻すよう手配している」

「飲ませた！？　まさか……よりにもよって『魔法薬』を！？」

再び謁見の間がざわめいた。これも当然である。

『魔法薬を飲まされて、正気を奪われる』

これは、タバサの身内――彼女の母親が、ガリアの国王・ジョゼフ一世によって行われた厳然たる事実であり、また、一部貴族や王家に仕える者たちの間では有名な話だ。それと同じことを、ジョゼフ王の娘にして王女たるイザベラの従姉妹姫であり、その被害者シャルロット姫が行うなどありえない。実際に事故なのであろう、だが……。

騒然とした室内の中で、タバサはひとり小さな身体を震わせていた。いつもは全く感情を見せなかった彼女の瞳から……ぽろぽろと涙が流れ落ちる。

そんな彼女の姿を見たイザベラの脳裏に、ふと閃くものがあった。先程の王天君の言葉、それに繋がるものを。そして、実に嫌味ったらしい声で、それを解き放った。

「なるほどねえ。『感情』のない『ガーゴイル姫』は、呼び出した＜使い魔＞から『心』を奪い取って、自分のものにした……そういうわけかい。『パートナー』として、実に素晴らしい対応じゃないか、ねえ？　お前たちもそう思うだろ！？」

そう言って謁見の間を見渡すと、高笑いするイザベラ。

「ククッ……いい追撃じゃねぇか。オメーやっぱセンスあるぜ」

「お褒めにあずかり恐縮ですわ、ジェントルマン」

小声でやりとりする王天君とイザベラ。このふたりが組むのは実に危険である。ある意味、それを象徴した場面であった。

そして、涙を流す従姉妹姫の姿を思う存分堪能したイザベラは…

…タバサたちに『任務』を言い渡した。

『ラグドリアン湖の水位が上がった件について、調査の上それが元に戻るよう働きかけよ。水位が戻らない場合は＜水の精霊＞との戦闘を行いこれを鎮めること』

――そして。いい仕事した！　と、自分の部屋へ戻ったイザベラへと、王天君が『自分の部屋』から呼びかけた。

「おい、オレぁこれからあいつらを追い掛ける。オメーもついてくるか？」

「えっ、そんなこともできるの!?」

「ああ、あいつが側にいるからな。どうする？」

「もちろん！　こっちからお願いするわ」

――こうして。『部屋』から新たな『道』を展開した王天君は、イザベラを伴い、太公望たちの後を追うこととなる。事態は突然、まるで傾斜の厳しい坂道を転げ落ちるように、急展開を遂げていった。

第３９話　女王たるべき者への目覚め（後書き）

パパラパッパッパラッパー！

イザベラ　は　レベル　が　あがった！
イザベラ　は　あたらしいあそび　を　おぼえた！
イザベラ　は　おうてんくんのことばぜめ　を　みにつけた！

王天君とイザベラさんマジドＳ。

えー、以上、書いている本人の胃が痛くなるシリーズ・第二弾をお送り致しました。いや、ほんとタバサごめん……マジごめん……次の章でいいことあるから今回はマジ許してほんとごめん。タバサファンだと言っても信じてもらえんのと違うかこれは。あとなにげに太公望の身分がとんでもないことに。

つか順調にイザベラ様が女王様（もちろんＳ的な意味で）への道を駆け上がっている……たいへんだ……はやくなんとかしないと……実はデビロット姫とか最高だと思っている筆者でした。悪の姫で、めちゃくちゃ年上の、しかも敵対勢力の老騎士に憧れてお城を飛び出すとか素敵。そのくせ思いっきり悪の道を突き進むのがまた素晴らしい。以上、わるいひめさまだいすきがたりでした。

２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正

第４０話　六芒星の風の顕現、そして伝説へ

「おのれーッ、なんなのだ、あの娘は！！」

新たに受けた『任務』、その舞台となる『ラグドリアン湖』へと向かう道すがら、跨った風竜の上で――太公望は怒り狂っていた。そう、彼は先程まで王宮の謁見室で繰り広げられていた光景に、心から憤っていたのである。

「もしもタバサに『静かにしていて欲しい』と頼まれておらなんだら、あの憎たらしい姫を、わしの＜風＞の最大出力でもって、城ごと次元の狭間まで吹き飛ばしてやったというのに！！」

ぐぬぬぬぬ……と、両手を固く握りしめ、悔しげに何度も何度も唸りを上げる太公望を見て、タバサは思った。あのような結果になってしまったが、やはり静かにしておいてもらって正解だったのかもしれない……と。

――いっぽう、それを追いつつ『窓』を眺めていたイザベラと王天君はというと。

「ね、ねえ。人間に危害は加えないんじゃなかったかしら？」

少し青ざめた顔で、そう訊ねたイザベラに。

「まぁそうなんだけどよぉ……今は操られておかしくなっちまってるからなぁ」

あいつがあんなに怒るところなんて、久しぶりに見たぜ……王天

君は、さすがに驚いていた。あの太公望が、あそこまで我を忘れて怒り狂うなど、めったにないことだったのだ――自分がちょっかいをかけた時を除けば。

「城ごと吹き飛ばすとかいってるけど、まさか……冗談よね？」

そんなイザベラを見て、王天君は意地の悪い笑みを浮かべた。

「……あいつが本気で暴れたら、城どころか、リュティス全体が1時間以内に、跡形もなく消し飛ぶぜぇ？　そのくらいの＜力＞の持ち主なんだ」

「そ……そんな、嘘よね！？」

「嘘なもんか。実際、あいつがちょろっと起こした竜巻で、森がまるごど吹っ飛んだことがあるくれぇだぜ？　ま、そういうわけだ。普通の状態なら絶対そんなこたぁやらねぇだろうが、今は別だ。落ち着くまではあんまり突っつかないほうがよさそうだ」

ある意味珍しいものが見られるし、それはそれで面白ぇかもな？　そう言って暗い笑いを浮かべた王天君を見て、イザベラは震え上がった。彼らはエルフではないと言っていたが、もしかすると、より強力な亜種なのかもしれない。イザベラは誓った。

――あの男の前で、シャルロットを虐めるのはほどほどにしておこう、と。

「見えてきた」

『窓』の外から聞こえてきたタバサの声で、ふたりは眼下を眺め

た。その先には――ハルケギニアでも名高い名勝にして、最大の湖『ラグドリアン湖』が広がっていた。

○●○●○●○●

――タバサたちがラグドリアン湖へ到着した翌日、魔法学院では。

「解除薬が、作れないですってぇ――!?」

「仕方がないじゃない！　秘薬がどこへ行っても売り切れだったんだもん！！」

キュルケとモンモランシーが、大声で怒鳴り合っていた。なんでも『惚れ薬』を解除する薬を作るために絶対に必要な秘薬『水の精霊の涙』が、全ての店で完売。しかも、入手は絶望的なのだという。

「ちょっと待ちなさいよ、それじゃあ、まさか……」

ミスタ・タイコーボーは、最悪1年近くあのままだっていうの！？　ルイズは顔を真っ青にして訊ねた。例の『もしかすると彼は東方の王弟殿下かもしれない』説を聞いていた彼女にとって、それは恐怖以外の何者でもない。それがなくとも、自分の恩人の、あのような姿を見ているのは耐えられなかった。

「なあ、モンモン。これが国のエラーイひとに知られたら、どうなるだろうな？　他国の人間に、ご禁制の薬を飲ませたとか。間違いでしたじゃ済まねぇぞ？」

静かに、モンモランシーの側へ近寄り、彼女の肩をポンと叩いて

才人は聞いた。

「臭いメシ食うか？　モンモン。それとも、何かいい方法はないのか？」

禁制の薬を作ったのは間違いない事実なのだ。モンモランシーは、改めて自分のしでかしたことの恐ろしさに、震え上がった。彼女は必死に何かを思い出そうとした……そして。

「あるには、あるけど……危険かもしれないわ」

「なに、このぼくが付いていていけば怖いものなどないよ、モンモランシー」

気休めにもならないわ、あなた弱っちいし。そう言って、肩を抱こうとしてきたギーシュを振り払うと、モンモランシーは改めて全員に向け語り始めた。

「水の精霊に、直接交渉することができれば……なんとかなるかもしれないわ」

「それは、どこに行けば会えるんだ？」

「トリステインの国境付近にある……ラグドリアン湖よ」

そして――彼ら全員は頷き合った。

○●○●○●○●

――少し時間が遡った、ラグドリアン湖岸にて。

「危険なことはない。兄様は、お願いだからここで待っていて」

＜魔法＞で湖の中に入って偵察してくる。そう言った途端、どうしても着いていく！　と言って大騒ぎをはじめた太公望を、タバサは仕方なく『お願い』することでなだめた。

「大丈夫、本当に危険はない。ただ、湖の中に入って様子を見てくるだけだから」

「そうか、それならばわしはここで釣りをして待っているぞ」

太公望は渋々ながらそう言うと、懐から針と糸を取り出した。だが……。

「それが……釣り針？」

タバサが疑問に思うのも、無理はない。なにせ、その針は『まっすぐ』で、鉤の部分がない。そう……どう見てもただの『縫い針』なのである。

「うむ。これはな、わしの親友からの贈り物なのだ。釣り好きなわしへくれた、とても大切な……思い出の品なのだよ」

「でも、その針では魚が釣れない」

ああ、そのことか。太公望は『打神鞭』の先に、釣り糸をぐるぐると括り付けつつ、タバサに説明を始めた。

「わしは、魚を食べない。それなのに、普通の釣り針を使って魚を釣ってしまったら、傷をつけてしまうであろう？　だから、このまっすぐな針を水に垂らしておるだけなのだ。まあ、これも一種の『瞑想』だのう」

タバサは思った。ああ……このひとは、本当に優しい、争いごとが嫌いなひとなのだ。魚を傷つけることすら躊躇い、それを知る友人が、あのような針を贈るほどに。そんな人物が先頭に立ち、軍を率いるなど……いったいどれほどの苦痛だったのだろうか、と。

――そして『部屋』の中では。

「……な？　ああいうやつなんだよ、あいつは」

「本当にイイコちゃんなのね……」

そして彼らは見守った。タバサが『湖』の中へと入っていく姿を。

○●○●○●○●

――そして、その翌日。再びラグドリアン湖岸にて。

「ここがラグドリアン湖か！」

丘から見下ろしたラグドリアン湖の青い色は、眩しかった。その湖面は陽の光を受け、キラキラと輝いている。

「本当に綺麗ね。次は、みんな揃ってピクニックでもしに来ましょうよ。モンモランシー、もちろんあなたも含めて、ね？」

そういって、モンモランシーにウィンクするキュルケ。そして、彼女へ向けてそっと小声で呟いた。

「まあ、今回のこれは事故だから。あなたも、あんな彼氏を持って大変よねえ」

そう言ってキュルケが視線を向けた先では、ギーシュが湖面の水をバシャバシャとかき混ぜて、大騒ぎをしていた。

「か、彼氏なんかじゃ……！」

「そうやって意地張るから、彼が嫌われてると勘違いして他に目移りするのよ」

うっ、もしかするとそうなのかも……恋愛上手で有名なキュルケが言うことだし、説得力があるわ……今後は……難しいかもしれないけど、もうちょっとだけ、そう、少しだけ、自分の気持ちに素直になってみようかしら……そんな風に考えるモンモランシーであった。

「ねえ、早く『水の精霊』にお願いしてみましょうよ」

ルイズの呼びかけに、はっと気がついたモンモランシーは、顔を上げ答えた。

「そうね、それじゃあ、みんなちょっと下がっていてくれるかしら」

そういうと、モンモランシーは腰につけた小袋から何かを取り出

した。それは、鮮やかな黄色に、黒い斑点がいくつも散っている、一匹の小さなカエルであった。カエルは、モンモランシーの手のひらに乗り、大人しく、忠実な僕のように彼女の瞳を見続けている。

カエルが苦手なルイズが、小さくひっ、と悲鳴を上げたが、モンモランシーはそれを無視して湖岸へと近付くと、今度は小さな針を取り出して、自分の指先を突いてほんの少しだけ血を出した。そして、それをカエル――どうやらモンモランシーの使い魔で、ロビンという名らしい――に、一滴垂らす。

その後、ロビンへ向かって何事かを呟くと、湖へと放った。

「これで、水の精霊はわたしのことがわかるわ……覚えていてくれたら、だけど。昔は、この湖を管理するのはわたしの一族の人間だったのよ。いろいろあって、今はその役目から降ろされてしまっているんだけれどね」

それからしばらくして。突如、湖の水面――現在才人たちがいる場所からはやや離れた位置――が、光を放ち始めた。どうやら、目的の『水の精霊』が現れてくれたようだ。

湖からロビンが上がってきて、ぴょんぴょんと跳ねながらモンモランシーのところまでやってくる。そんな己の＜使い魔＞を愛おしそうに手で包み込むと、モンモランシーは礼を言い、そして現れた『水の精霊』に語りかけた。

「わたしはモンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。水の使い手にして、古き盟約の一員の家系よ。カエルにつけた血に覚えはおありかしら？　ございましたら、わたしたちにわかる言葉とやりかたで返事をくださいな」

モンモランシーの言葉が終わると共に、水面から『何か』が現れた。才人たちは、それを驚きの目で眺めている。現れた何かは、最初は只の水の塊だった。

しかし、それはぐにゃぐにゃと姿を変え――モンモランシーのそれと同じになった。ただし――何も身につけていない、生まれたままの姿ではあったが。水の精霊は、その姿を維持したまま、モンモランシーの元へと近付いてきた。その様は、まるでクリスタルガラスの彫像のように、美しく煌めいている……。

そして『彼女』は静かに声を紡ぎ出した。

「覚えている、単なる者よ。貴様の体内に流れる液体を、我は覚えている。貴様に最後に会ってから、月が52回交差した」

「覚えていてくれて、よかった。実は、今日はお願いがあるの」

そしてモンモランシーは交渉を開始した。身体の一部である『水の精霊の秘薬』をどうか分けてもらえないか、と。だが、精霊はにべもなくそれを断った。そこにいる全員で頭を下げたが、精霊は静かな光を湛えたまま、何も答えない。

……と、そこで才人が前へ一歩進み出て、土下座した。

「頼む！　この通りだから!!　俺の大切な友達を救うために、どうしても『水の精霊の秘薬』が必要なんだ、お願いだ……助けてくれ!!」

すると、必死に頼む才人に向けて、水の精霊が静かに語りかけた。

「お前は……『ガンダールヴ』だな。よかろう、ならばこちらの出す条件と引き替えに、我が身体の一部をわけてやってもよい」

水の精霊に知られているなんて、コイツ何者なのよ！　ガン……なんとかって名前は知らないけど。モンモランシーの驚愕をよそに、才人は飛び跳ねて喜んでいる。

「本当か!?　いったい俺は、何をすればいいんだ?」

「昨夜から、我が領域に侵入を試みようとする者たちがいる。奴らを退治せよ。さすれば、我が身体の一部を、そなたに分け与えよう」

水の精霊曰く、その『侵入者』はこの先にある森のほうから、夜になると水の中へ侵入してくるという。それなら、遠くから待ち伏せして攻撃しよう。全員は頷くと、戦いへ向けて英気を養うべく、その場で食事と休憩をとることにした。

○●○●○●○●

――そして、その夜。

タバサと太公望は、昨日の場所から少し離れた湖岸へと移動していた。もちろん今夜も、湖の様子を探るために……だ。

と――ふいに、そんな彼らの元へ、突然、何の前触れもなく巨大な火球が襲いかかってきた。だめ、かわしきれない！　タバサが思わず顔を伏せる。しかし……最後の瞬間は、いつまでたっても訪れ

なかった。顔を見上げたタバサの視線。その先には――。

『杖』を前へかざし、目の前で火球を止め……まるで捏ねまわすように、大きく練り上げている太公望の姿であった。

――それと、ほぼ同時刻。

「ねえ、あれじゃないの？」

森のほうから現れた、２つの人影。相手の姿はよく見えないが、おそらくあれが水の精霊が言っていた『侵入者』であろう。

「そうだね。よし、ここはまず様子を見て……」

そう呟き、全員に指示を出そうとしたギーシュであったが……それに反対したのはキュルケだった。彼女は実に不満げな声を漏らす。

「なにを言っているの、あっちには気付かれてないのよ！？　だから……ここは先制攻撃をかけるべきよ！！　＜フレイム・ボール＞！！」

全員が制止する間もなく、キュルケは＜魔法＞を完成させ、怪しい２人組に向けて解き放った。ああ、これであの怪しい奴ら終わったネ……そこにいた皆がそう思った……だが。キュルケが放った火球は相手に当たって燃え上がるどころか、なんと空中で停止してしまったのだ。

「え、う、うそ……」

不測の事態に、彼らは呟くことしかできない。そしてキュルケが

放ったはずの火の玉は……みるみるうちに巨大化していく。と……ふいに、その巨大な炎の塊は、突如囂々と周囲の空気を食い荒らすような音を立てながら、彼ら全員を飲み込まんと、襲いかかってきた。

＜魔法＞を跳ね返すなんて、ありえない。いや……それはあくまで＜メイジ＞に限ってのことだ。確か、エルフがそういう技を使うと、何かの本で読んだことがある。あれは、まさか――！！

「か、カウンター！？」

その声に、その場にいたメイジ全員が硬直した。それも当然である。エルフは彼らの天敵にして恐怖の対象。まさしく、蛇に睨まれたカエル状態に陥ってしまったのだ。しかし、そんな彼らに対して、巨大な火の球は、情け容赦なく迫り来ていた。にも関わらず……彼らはそこから動くことができなかった。

そんな中、たったひとりだけ……行動することができた者がいた。才人である。彼は、これまでの人生――ごくふつうに、ひとりの学生として生きてきたそれ――では感じたことのないほどの、激しい恐怖を感じ……震えていた。

だが、彼にとっての『畏れの対象』は、目の前の火球には向けられていなかった。才人が真に怖いと感じていたこと――それは。今ここにいる、大切な友人たちが失われてしまうかもしれないという『迫り来る現実』に対してだった。

しかし、いつしかその恐怖は怒りへと変わっていった。先程まで感じていた恐怖に比例するように強く、まさに『激情』といっていい程に激しい感情が、才人の身体全体を支配する。すると……指ぬ

きグローブの中へ巧妙に隠されていた＜ガンダールヴ＞のルーンが、突如激しい光を放ち始めた。握った拳に＜力＞が宿る。

「嫌だ！　こんなところで……みんなを死なせてたまるかよォ！！」

その魂の底から捻り出された声に……彼の相棒が反応した。

「お、思い出した……相棒、俺様を抜け！　そしてあの火球を切り裂くんだ！！」

それは、反射的な行動であった。才人は、勢いよく背負っていたデルフリンガーを鞘から抜き放つと、飛んでくる巨大な火の球へ向けて走り出した――そう、人間には到底不可能な、まさに神速とも言うべきスピードで。

そして――勢いよく振り下ろした刀身は、突如強烈な光を放つと――なんと火球を全て、その身に吸い込んでしまったではないか！

一同は――才人も含め、あっけにとられていた。いったい、何が起きたのかわからない……そんな顔をしていた彼らの元へ、まるで……長雨の後、久しぶりに陽を浴びた喜びを隠しきれずに、はしゃいでまわる子供のような声が聞こえてきた。

「いやあ……嬉しいねえ！　この姿に戻れたのは。懐かしいねえ、思い出したよ。そうだ、俺っちは＜ガンダールヴ＞の『左手』にして『盾』たる者『デルフリンガー』。６０００年前のあのときも、あいつに握られていたんだよ。ちゃちな＜魔法＞なんか、全部吸い取ってやるぜ」

そう、嬉しげに呟いたデルフリンガーは――――眩く白い輝きを放ち……神々しいまでの姿を衆目に晒していた。その刀身からは全ての錆が消え失せ、まさに今磨き上げられたばかりの鏡であるかのように、驚いた才人の顔を刃の表面に映し出していた。

いつもの才人なら『レベルアップイベント来たー！！』などと大騒ぎしていたことだろう……だが、今はそれどころではなかった。

彼は全身をぷるぷると震わせ、己の相棒をしっかりと握り締めながら大声で叫んだ。

「そういうことは早く言えー！！！」

一斉にズッコけるメイジ一同。そして相棒にツッコまれたデルフリンガーは「俺っちも今まで忘れてたんだ」と、とぼけた声で答え……場に安心感が漂い始めた。だが……そんな和やかな空気が突如かき消されたのは、それから間もなくのことであった。

――＜魔法＞を……自分の＜力＞で練り直して、相手に撃ち返した！？

タバサは、驚きのあまり硬直していた。こんなこと、ハルケギニアの常識ではありえない。だが、本に書かれたエルフの得意技『カウンター』ともまた違っている。彼には、いったいどれだけの隠し技があるというのか。

すると……突然、彼女を庇うように立っていた太公望の周囲から、静かな……それでいて、浴びた者を心の奥底から凍り付かせるような気配がゆらり……と立ち上った。彼は『杖』を左手で握り締め、

ふるふると身体を震わせている。

「おのれ……わしの大切なタバサに、あのようなものを向けおって……！！」

タバサは、はっとして太公望の顔を見た。そして、震えた。今までに見たことのない、彼の貌。そこに浮かぶ……激しい憎悪の色に、彼女は恐怖してしまった。

「あのときとは違う。わしはもう……無力な子供などではない。タバサよ……もう二度と、おぬしを……何も出来ずに、妹を死なせたりするものか……！！」

わたしを……妹を死なせない？　もう、二度と……？　まさか、彼は――！！

「『打神鞭』・最大出力！！！」

太公望の叫び声と共に、彼とタバサを中心にして――巨大という言葉では生やさしい程の、大竜巻が出現した。

「な、な、なによ、あれ……」

『部屋』からタバサたちを観察していたイザベラは、震え上がった。『スクウェア』などというレベルどころではない巨大な竜巻――天空まで貫かんばかりにそびえ立つそれ――が、一瞬で周囲の森を消し飛ばした場面を見てしまったのだ、それも当然だろう。一方の王天君は、爪を噛んでタバサを睨み付けていた。

「オイ……あの女、よりにもよって太公望を、自分のことを妹だと思い込ませて操ってんのかよ……最悪じゃねぇか」

あれじゃ、怒り狂うのも当然だ。そう呟いた声にイザベラが反応した。

「どういうことかしら？」

「妹を……いや、家族が隣国の奴らの手で皆殺しにされてんだよ」

あの女……治す用意をしていると言っていたが、もしも太公望が元に戻らなかったら、ただじゃあ済まさねぇぞ。そう言って凄む王天君の姿は、まさしく『死神』そのものであった――。

そして、その巨大竜巻の顕現を見た才人たちのほうはというと――。

「な、な、な、なななんだアレは」

「あれは……まさか＜ヘクサゴン・スペル＞!?」

「『王族』にのみ許された、伝説の＜魔法＞……この目で見る日が来るなんて」

あまりのことに、メイジたちは完全に腰が抜けてしまって動けない。＜魔法＞で逃げることすら思いつかない。だが、そんな彼らを叱咤したのは――その＜魔法＞が使えない才人であった。

「馬鹿野郎！　早く逃げろ!!　俺があれを食い止めている間に

！！！」

そう言って、デルフリンガーを片手に竜巻目掛けて駆け出した才人。その後ろ姿を見たルイズの心は――完全に凍り付いた。彼が行ってしまう。あたしたちを助けるために、たったひとりで、あの……巨大な暴風の渦中へ。

そして彼女は絶叫した。嫌、あたしの＜使い魔＞、ううん違う……あたしの『護衛』、あたしの『道』、あたしの……大切な……！！！

「いや――ッ！！　行かないで、サイト――――ッ！！！」

そのルイズの叫び声……いや、悲鳴に気がついたのは、タバサだった。まさか、この声は……いや、間違いない。このままではいけない。彼らを……よりにもよって太公望が、その手で死なせてしまう！

タバサは、急いでルーンを紡ぎ出し、それは完成した。

「＜スリープ・クラウド＞！！」

背後から、突如眠りの雲に覆われた太公望は、そのまますぐ意識を失い――それと同時に、顕現していた巨大な竜巻は……そこにあったことが、まるで嘘だったかのようにふい……と、かき消えた。

第４０話　六芒星の風の顕現、そして伝説へ（後書き）

以上、書いている作者の胃が痛くなるシリーズ・第3弾でした。

ここでまさかのデルフリンガー覚醒です。ある意味、タバサと才人のパワーアップのために太公望に惚れ薬を飲んでいただいたといっても過言ではない。すまん太公望。

あと、ヘクサゴン・スペルと見せかけた、打神鞭・最大出力。ラグドリアン湖っていったら、これがないとネ！

と、いうわけで次回は合流編です。どうぞお楽しみに。

２０１１／０５／０７　追記：コメントにて＜ヘクサゴン・スペル＞に関する「キャラクターが誤解して王族にしか使えないと思い込んでいるのかもしれませんが、実際には練習さえすれば可能」というご指摘がありましたので、念のため追記します。この指摘をいただいた方の推察通り、キュルケたちは「王族にしかつかえないものだ」と、誤解をしているだけで、実際にはロマリア聖堂騎士団の賛美歌詠唱他、合体魔法は、練習して息を合わせれば使うことができます。ただし相当な努力が必要らしいですが（原作より）。以上、ご指摘ありがとうございました。

２０１１／０５／０２　２３：５０　一部加筆修正、並びに伝言削除
２０１１／０５／０３　章編成によるタイトル修正
２０１１／０５／０４　デルフリンガー覚醒イベントを加筆修正

第４１話　放置による代償、その果てに

「まって欲しい、こちらにはもう攻撃の意志はない」

大竜巻が消えたあとも、油断なくデルフリンガーを構えていた才人の耳に、どこかで聞いた覚えのある声が飛び込んできた。これって、まさか――――？

声と共に現れたのは、自分がよく知る少女――――タバサであった。

「ラグドリアン湖の水位があがった件について、調査してたァ！？」

現在の時刻は、深夜2時頃であろうか。湖面には2つの月が映し出され、幻想的な雰囲気を醸し出していた。湖のほとりに作った簡易キャンプ――――申し訳程度につくられたたき火と、座るために持ってきていた布製のシートの上に座り、タバサの説明を聞いた『解除薬作成チーム』メンバーの背中には、いやな汗が流れていた。

まさか、水の精霊が『侵入者』と呼んでいた相手が顔見知り、しかも友人たちだとは思ってもみなかったのだ。ちなみに現在＜スリープ・クラウド＞によって眠らされた太公望は、彼らのすぐそばに、その身を横たえられている。

「みんな……本当にごめんなさい。あたしが先走ったばっかりに、一歩間違えたら大変なことになるところだったわ」

そう言って全員に頭を下げたキュルケの全身は、震えていた。

「まあ……ぼくも、ちゃんと止めることができなかったからね」

「今回はなんとかなったことだし、次からは注意すればいいんじゃないか？　俺が言ってもあんまり説得力ないかもしれないけどさ」

そんなギーシュと才人の言葉に、みんなで気をつけよう……と、頷く一同。

「ところで、あなたたちは……もしかして『精霊の涙』を？」

そのタバサの問いに答えたのはモンモランシーだ。

「ええ。『惚れ薬』の『解除薬』を作ろうとして町中を探し回ったんだけど、全部売り切れだったから、精霊に直接お願いをしにきたところだったの」

そして、お互いに改めてここまでの経緯――もちろん、タバサは任務云々の話は出さずに――と情報の交換を開始した。

――そこから遠くでもあり、間近でもある『王天君の部屋』の中では。

「ハ……ハハハッ……こいつぁ傑作だぜぇ！！」

「も、もう駄目……わたし……涙が……くっ……」

ガリアの王女イザベラと、そのパートナーたる王天君が、しっかりとその場面を見ていたわけなのだが――。

「惚れ薬を誤飲しただぁ!?　馬鹿かよあいつは！　意地汚ぇ真似すっからだ」

椅子に座り、のけぞりながら高笑いする王天君。いっぽうのイザベラはというと。

「あの禁断の……＜魅惑＞の秘薬で、妹……恋人じゃなくて妹認定……おほ……おほほほほほほっ！　駄目、やっぱりわたし、もう……笑いで涙が……溢れて止まらないっ！　あの子たちってば、ふたり揃って本当に面白すぎるわぁ～！！」

豪奢な絨毯の上を、文字通りゴロゴロと転げ回って大笑いしていた。

１０分ほど経過して、ようやく笑いの発作から解放されたふたりは、改めて見知った情報に関する整理を開始する。

「解除薬があれば、彼は間違いなく元に戻るわ。その点は安心していいわよ」

「そいつぁよかった。おかげで死体をひとつ増やす手間が減った」

「冗談にしても笑えないから、それだけは勘弁してもらえないかしら……さすがに今あの子が『任務』以外で死んだりしたら、ガリア国内で間違いなく内戦が勃発するわ」

まあ、それはそれで面白ぇんじゃねぇか？　などと言ってしばしイザベラをからかっていた王天君は、『窓』の外で静かに寝息を立てている己の『半身』を改めて見た。そして断定した。この連中の

話から察するに、あの野郎……やっぱりオレのこと、衣食住に釣られた挙げ句、完全に放置してやがったな……と。

……そぉいぅコトならなぁ、こっちにも考えがあるぜぇ太公望ちゃんよぉ。

王天君は、すぐ隣で「うーん、モンモランシ家が没落せずに、まだ湖の管理を任されていた時期だったら、これをネタに色々できたと思うんだけど……」などと物騒なことをブツブツと呟いているイザベラに向かって、声をかけた。

「あいつがきっちり治るってわかったことだし、そんじゃぁ城へ戻ろうや」

これに驚いたのはイザベラだ。

「えっ？　あなたの弟が元に戻ったら、一緒に故郷へ帰るつもりじゃなかったの？」

寂しそうだった顔を一変させたイザベラを見た王天君は、ニヤリと笑ってこう答えた。

「最初はそのつもりだったんだがよぉ……ちょっと気が変わった。もうしばらくお前んとこでやっかいになっててもいいか？」

「本当!?　もちろんよ!　ずっといてもらいたいくらいだわ!!」

「へぇ……このオレを受け入れる度量があるたぁ……やっぱりオメーは」

「いいえ、あなたこそ」

「わかってるぜ」「素晴らしいわ」

――亜空間の中へ、ひとりで放置され続けていたことに対して、王天君は自分自身が想像していたよりも、遙かにイラッときていたのだった。

○●○●○●○●

――そしてたき火の側では。

タバサたち『調査チーム』と『解除薬作成チーム』は、たき火を囲み、夜を徹して語り合っていた。そして、太公望に関して非常に大切な協約を結んだ。その内容とは。

「彼の『妹』に関することは、絶対に触れないこと」

これであった。当初はタバサに事情を尋ねようとしたギーシュとモンモランシーであったが、それを他のメンバーが必死の形相で食い止めた。

「他人が知られたくないと思うことに、無理に踏み込もうとするのはよくない」

――と。ここ数回の失敗で、さすがにその行為が、たとえ太公望以外の者に対してでも大変失礼かつ、それがとんでもない『地雷』たりえることを思い知っていたからだ。

「確かに。他人の事情を根掘り葉掘り聞くのは、貴族としてどうかと思うね」

「でしょう？　やっぱり、そういうのは、その、よくないわ」

心なしか声が震えているルイズの姿を見ながら、才人は口を開いた。

「あと、さっきの＜魔法＞関係についても、聞かないほうがいいんじゃないかな。言いたくないから隠してるんだろうし」

その言葉に、全員が頷いた。モンモランシー自身は、これまで特に太公望と仲が良かったというわけではないが、今回の件で迷惑をかけてしまったという自覚から、それについても了解した。

そんな彼らを見て、才人は思った。色々あったけど、こいつらと会えて本当によかった……と。そして、静かな寝息を立てている『友人』に視線を向けた。

俺……こいつには、ここへ来てから世話になってばっかりだ。もっと強くなってからならともかく、今の俺の実力だと借りを返す機会がないもんな――。

――そして、太公望を除く全員が眠れぬまま明けた翌朝。

『兄様は夢を見ていただけ』というタバサの説明をあっさりと受け入れた太公望は、普段と変わりない様子で、才人たちがここにいる『目的』を聞いていた。

「なるほど、特別な薬をつくるためにその『精霊の涙』とやらが必要なのだな。その条件として『侵入者』を止めろ、こう言われたと。ならば『交渉』の余地があるな」

「わたしもタイコーボーに同意する。その際に、水の精霊が水位を上げている理由を知ることができれば、こちらとしても助かる」

確かにその通りだな、と、一同は頷く。

「ふむ……タバサよ。おぬしなら、交渉役として誰を選ぶ？」

その太公望の振りに、タバサは即座に返答した。

「まず、モンモランシー。精霊に声をかけてもらうために必要。続いて、サイト。もともと『交渉』を実現できたのは、彼のおかげ。そのサイトの補佐として兄様についてもらいたい」

指名された3人はその場で頷き、交渉役となることを了解した。そして、全員で交渉のための案を出し合い……そして、それは始まった。

モンモランシーは、湖岸に立つと昨日と同じように湖へと＜使い魔＞を放った。すると、朝靄の中――水面の一部が再びぐにゃぐにゃとうねり、固まり、そして水の精霊が姿を現した。

「呼び出しに答えてくださって感謝します、水の精霊よ。それでは改めて、昨日あなたから依頼された内容について、彼らがお答えします」

そう精霊に語りかけたモンモランシーは、一歩右横へ移動する。そして、ガラス製の瓶を持ち、後ろに控えていた才人と、太公望のふたりが前へと進み出た。

「俺のことを、覚えていてくれましたか？　水の精霊よ」

その声に、水の精霊が答える。

「覚えている……『ガンダールヴ』よ。して、結果は？」

「ありがとう、水の精霊。それについて、彼が説明するので聞いてほしい」

そして才人は、モンモランシーとは逆。左側へ一歩移動すると、太公望に前へ出てくるよう促した。

「わしは今回の報告をさせていただく太公望と申す者。以後お見知りおきを」

すると、その言葉を聞いた水の精霊が輝きを増した。

「話を聞こう『生命の道を極めし者』よ。そなたならば信用できる」

この呼び名に、太公望は一瞬ピクリと片眉を上げた。こやつ、わしが何者であるのかわかっておるようだ――もしやとは思っていたが、やはり精霊とは『星の意志を宿す者』か。これは、しっかりと話を進めねばなるまい、と。

いっぽう、控えている者たちは皆一様に不思議そうな顔をしてい

た。普通、水の精霊は自分たち人間を全て『単なる者』と呼ぶ。だが、才人のことは『ガンダールヴ』、そして今、交渉のテーブルへついている太公望のことを『生命の道を極めし者』と称した。

ふたりを除く者たちは思った。やはり、彼らは普通の＜使い魔＞などではないのだ――と。

「ありがたい。では、まず依頼のあった『侵入者』の件についてだ。彼らは、この湖の水位が何故上がってしまったのかを調査するために現れた」

太公望は、身振り手振りを交えつつ、精霊と会話を続けている。

「そして、可能であれば水位を下げたいと願っている。よって、水の精霊殿が何故水位を上げているのか、その理由を教えてはもらえないだろうか。それがわからぬ限り、彼らは今後、幾度となく現れるであろう……最悪の場合、数が増えるかもしれん」

その言葉に、水の精霊が反応した。

「『生命の道を極めし者』よ。我が水位を上げ続けている理由を教えることで、そなたは何をしようというのだ？」

「うむ。内容によっては、わしらが水の精霊側に対して協力することで、彼ら『侵入者』を完全に排除できるやもしれん。よって事情をお教え願いたい」

その言葉を受けた水の精霊は、再びぐにゃぐにゃと形を変え、蠢いている。もしかすると、みんなで話し合ってたりするのかも？などと才人が考えていると。

「『ガンダールヴ』と『生命の道を極めし者』が共に在るならば、我らが動くよりもよい結果が出るだろう。我らはお前たちを信用し、話すこととする」

そして、水の精霊は語り始めた。2年ほど前に、水の精霊たちが守っていた＜秘宝＞を、人間によって盗み出されてしまったのだと。そして、それを探し出すために、少しずつ湖の水かさを増やし、感知できる範囲を広げているのだ――と。

「ずいぶんと気が長い話だな」

「『ガンダールヴ』よ、我とお前たちとの間では、時に対する概念が違う。よって、いつか＜秘宝＞に届くまで、水の領域を増やしていくだけだ。しかし……」

そう言って、水の精霊は太公望のほうを向いた。

「このまま領域を広げ続けることで、再び『侵入者』が現れるというのならば……それを阻止せねばならぬ。『生命の道を極めし者』よ。そなたは我らに協力できると申し出た。よって、我は依頼する。期限は一切問わぬ。今すぐ水位を下げ、我が身体の一部を授ける代わりに、我らが＜秘宝＞『アンドバリの指輪』を取り戻してきてほしい」

期限を問わず……それは助かる。そんな風に呟く周囲の者たちの声を聞きながら、太公望は内心で呪詛の言葉を紡いだ。おのれ、精霊どもめ。わしが何者かわかった上で期限なしという設定をつけおったな！　つまり絶対取り返してこいという意味か！！

……とはいえ、これを飲まねば『薬』のほうはともかくタバサが困る。う～む、こればかりは面倒などとは間違っても言えぬのう……。

「ふむ……そういうことであれば、何か手がかりがほしいところではある。水の精霊殿は、盗人について何か記憶していることはないだろうか。また、秘宝がどんなものであるのかを教えて欲しい。どんなに細かいことでも、一切漏らさずにだ」

――そこから得られた情報は。

盗人の中に『クロムウェル』と呼ばれていた者がいたということ。

『アンドバリの指輪』には、死者にかりそめの命を与え意のままに動かし、その指輪に触れた＜水＞を飲んだ者の心を、思うがままに操る＜魔法＞が込められているということだった。

そして、それを聞いた者たちの反応はというと。

「それはまた……えぐいシロモノだのう」「クロムウェル……？どこかで聞いたような」「死者を操るなんて、趣味が悪いわね……」「ゾンビのほうが可愛いだろそれ」

と、いったようなものだった。ある意味想定内のリアクションである。

「詳細は了解した。では、取引終了ということでよいだろうか？」

太公望の問いかけに対して、返ってきたのは『輝く水の塊』であった。それは、才人が持っていたガラス瓶の中を目掛けて飛んでゆ

き、きれいに収まった。おそらく、これが『水の精霊の涙』であろう。

そして、ごぼごぼと水音を立てて水の精霊が姿を消そうとしたその時、突如タバサがそれに待ったをかけた。

「待って……水の精霊よ。あなたにひとつ聞きたい。あなたは『誓約』の精霊とも呼ばれている。その理由が聞きたい」

「『単なる者』よ。おそらくは、我の存在自体がそう呼ばれる理由と思う。我に決まった形はない。しかし、我はお前たちが目まぐるしく世代を入れ替える間も、ずっと変わらぬ形で、この湖と共に在った」

――それ故に、お前たちは変わらぬ何かを祈りたくなるのだろう。

その言葉を最後に、今度こそ水の精霊は湖の中へと姿を消した。

そして。その言葉を聞いたタバサは、膝を折り、目を瞑って手を合わせた。ただ一心に……何かを祈るように。そして、心に秘めた誓いを改めて確認するか如く。

周囲の者たちが、なにやら「誓いなさい」だのなんだの騒いでいたようだが、それはタバサの耳には届かなかった。その熱心な祈りによる強い『願い』が、思わぬ形で届くのは――彼女が想像していたよりも、遙かに早かった。

○●○●○●○●

「できたわ――！　しっかし、やたらと苦労したわね――！！」

トリステイン魔法学院の一室。モンモランシーの部屋の中で、見守っていた一同から歓声が上がった。そう……ようやく『解除薬』の調合が終わったのだ。

モンモランシーは、額の汗をぬぐうと、どっかと椅子に腰掛けて、大きく息を吐いた。かなりの重労働だったのであろう。そして、部屋の隅に置かれたテーブルの上には、苦労の結晶ともいうべき『薬瓶』が乗せられていた。

「これは、そのまま飲ませればいいの？」

「ええ」

タバサは早速その薬瓶を手に取ると、太公望の元へ持ってゆく。だが、あきらかに苦そうな香りがするそれを、彼の顔へ近づけた途端。太公望は、ふいっと後ろを向いてしまった。

「兄様、これを飲んで」

「やだ！」

……即答である。しかも『タバサのお願い』すら無効化している。

「わしは苦い薬はいやなのだ。甘いシロップか糖衣でなければ飲まぬ！」

その場にいた全員が、あきれ果てたように呟いた。

「ガキかよ……」「27歳にもなって……」「情けない」「大人なのに」

彼らは、顔を見合わせると……頷いた。そして、後ろから一斉に太公望へ飛びかかると、ジタバタともがく彼を押さえ込んで強引に口を開け、薬瓶を傾けた。

「飲まんかい、われ――ッ!!!」

そして、そこへドバドバと注ぎ込まれる『解除薬』。

「――――――――ッ!!!」

無理矢理飲まされた『薬』の苦さに、むせかえったような声を出しつつ、苦いのはこれだからいやなのだ――!!　などと叫びながらゴロゴロと床を転げ回る太公望。だが、突然その動きがピタリと止まる。

「効いた……かな？」「た……たぶん」

やがてむくりと起き上がった彼は、周囲をきょろきょろと見回した。そして。

「ここは……どこなのかのう？　確か、中庭でワインを飲んで、それから急に頭が痛くなったところまでは記憶にあるのだが……」

わしはいったい何をしていたのだ？　そんなことを言いながら、太公望は首をひねり、うんうんと唸っている。

もしかして『薬』が効いていたときの記憶がないのか？　まあ、

確かに覚えてたらアレはキツイだろうなあ……忘れていて良かったよ。でも、余計なこと言うの禁止な。集い、そう囁きあっている関係者一同。

と……太公望の元へ、おそるおそるといった様子でタバサが近付いていった。

「タイコーボー、もう大丈夫なの？」

「どうしたのだ？　タバサ。頭痛のことなら、心配ないぞ」

「わたしのこと……どう見える？」

「どう……とは？　いつも通りのタバサだ。特に変わったところは見受けられんが……あ、いや……ちと髪が乱れておるようだな。念のため、自分の目できちんと鏡を見て確かめるのだ」

わしは鏡など持ち歩いてはおらんからのう、どっかの美形と違って。などと言いながら笑う太公望。だが……その笑みは、突如困惑の表情に取って変わった。何故なら――彼の目の前にいたタバサの瞳から、ぽろりと一筋の涙が零れたからだ。

――そして彼女は太公望の胸に飛び込むと、大声を上げて泣きはじめた。それも……魂の奥底から迸るような、それでいて聞く者全てを困惑させるほどに、切実な声で。

「どうしたのだ、タバサ!?　いったい何があったのだ！　誰でもいいから状況を説明してくれ、頼む!!」

部屋の中には、慌てた声で叫ぶ太公望と、タバサの泣き声だけが

響いていた――。

第４１話　放置による代償、その果てに（後書き）

作者の胃が痛くなるシリーズ、これにて終了です。本当に太公望とタバサには申し訳なかった……。

ようやく太公望が元に戻りました。伏羲さん登場を期待していた皆様、申し訳ありません。王天君はしばらく様子を見ることにしたようです。イラッとしたので。イザベラ様は大いに喜んだ模様。

次回、状況説明編＋αとなります。

第４２話　雪風、その運命に縋るの事

「なるほどのう、よくわかった」

『解除薬』を飲んでから約3時間後。泣いていたタバサをようやく落ち着かせ、その上で改めて『ここまでの事情』を聞かされた太公望は、頭を抱えていた。

今回、説明役にまわったのはキュルケである。太公望がタバサをなだめている間、それ以外のメンバーたちは、彼の『記憶が飛んでいる』もっともらしい言い訳を検討した。その上で、モンモランシーが『惚れ薬』を作った経緯を説明し、謝罪をするということでまとまっていた。

……ちなみに、その言い訳とは。

「今まで3日間、太公望は意識を失っていた。さっきは、ようやく解除のための薬ができあがったため、モンモランシーの部屋へ運び込んでいたのだ」

――と、こういうものであった。その上で、

「惚れ薬が効かなかった理由は、自分たちにはよくわからない」

と、説明することで信憑性を増そうというのが、彼らなりの作戦だ。

なお、この『言い訳』については前もってタバサへ説明しようとしたものの、彼女が太公望から離れようとしなかったため、実現し

なかった――それはさておき。

「おぬしたちには、大変な心配と迷惑をかけてしまった。それについてはこのあと改めて謝罪したい。だが、その前に……」

そういうと、太公望は立ち上がり……『惚れ薬』の作成者であるモンモランシーの前に立った。そして、なんと深々と頭を下げたのである。

「わしの軽率な行動のせいで、モンモランシー殿には大変な損失を与えてしまった。それに関しての弁済はこのあときちんとさせていただくとして、その前にまず謝罪したい。どうか許して欲しい」

この行動に、部屋にいた全員が驚いた。

「え、あ、あの、ミスタ？　わたしがあなたに『薬』を飲ませて」

頭を下げたまま、自分の前から動こうとしない太公望に対し、モンモランシーはどう対応していいのかわからなかった。

「本人の了解も得ず、勝手に『奪って』『飲む』という行動を選んだのはこのわしであって、それにより意識を失ったのは完全に自業自得なのだ。しかも、７００エキューもする『薬』をだいなしにしてしまった」

そう言って、本当にすまなかった。そう謝罪する太公望へ、モンモランシーはとにかく頭を上げてくれ、そう告げるしかなかった。

「わたしは『惚れ薬』を作ったという罪があるから」

「いや、それとこれとは話が別。謝罪を受け入れてもらえるだろうか？」

「わ、わかったわ。だから顔を上げてちょうだいミスタ・タイコーボー！　あ、あと、わたしのことはモンモランシーと呼んでくれないかしら。それと、普段どおりに喋って。お願い！」

その言葉に、心底ほっとしたような表情で顔を上げた太公望。

「おぬしの寛大さに感謝する。では、遠慮無く……モンモランシーよ、『解除薬』を作るのには全部でいくらかかったのだ？　交通費込みで」

そう言われて、急いで自分の財布の中身を確認するモンモランシー。

「ええっと……精霊の涙を取りにいったぶんの馬車代も含めると……うん、全部で１５０エキューかしら」

「了解した、では、それについては話が終わり次第、すぐに全額返金する。しかし『惚れ薬』の代金７００エキューを即金というのはさすがに無理だ。よって、分割にするか……あるいは、対価を支払うことによって弁済とさせてもらいたいのだが」

「え、ちょ、ちょっと待って！」

慌てて太公望を遮るモンモランシー。周囲にいたルイズ、才人、ギーシュ、キュルケの４人も、あまりのことに呆然としている。タバサも、びっくりした顔で太公望を見つめていた。被害者である彼がここまでする理由が理解できなかったからだ。

「む、やはり不足であったか」

「いや、そうじゃなくて！　どうしてそこまであなたがする必要が？」

モンモランシーのその言葉を聞いて、不思議そうな顔をして彼女を見つめる太公望。その表情は、まるで心底意味がわからない……そう言っているようだ。

「何を言うのだ。してしまったことに対する謝罪をするのは当然であろう？」

……と、こう返すのみであった。

いっぽうのモンモランシーはというと、まあ、わざわざ弁償してもらえるならそれに越したことはないし……それに、対価というのも気になる。そう思い直し、改めて質問することにした。

「そ、そこまで言ってもらえるなら、わたしとしても悪い気はしないわ。ところで……対価って、いったい何なの？」

「それなのだがな……おぬし、わしらが毎日放課後集まって、何かをしていることを知っていたであろう？」

「ええ、もちろん。内容はわからなかったけど」

彼女の言葉を聞いた後、にっこりと笑って太公望はこう告げた。

「実はな、おぬしをその『仲間』として迎え入れる用意があるの

だが」

は？　それが対価！？　思ったよりつまらないわ……モンモランシーがそう口に出そうとする直前。その場にいた全員が大声を上げた。

「モンモランシー！　君も是非『仲間』に加わるべきだよ」

「７００エキューなんて、あれに比べたら安いものだわ！」

「わたしも、現金よりこちら側に加わることを勧める」

「こっちに来たほうが将来的に絶対得だぜ、モンモン！」

「お金に換えられることじゃないわよ、これ！　あなたすごくラッキーよ！？」

太公望を除く、その場にいた全員が、一斉にモンモランシーの側へ近寄ってくる。しかも、口々に『仲間になること』を奨めながら。モンモランシーは、あまりのことに目を白黒させて言った。

「ど、どういうことなのかしら？」

その言葉に、ふむ……と、考え込んだ太公望は『生徒たち』に声をかけた。

「ルイズよ。おぬしは『仲間』になって、どうなった？」

――その声に、笑顔で答えるルイズ。

「誰にもわからなかった＜爆発＞の謎が解けて、空が飛べるようになったわ！」

「……えっ！？」

「才人よ、おぬしはどうだ？」

――右腕に力こぶしを作り……ニカッと笑って答える才人。

「素手での格闘技の腕が上がった！　今ではワルキューレ7体とも戦えるぜ」

「……えええっ！？」

「キュルケよ。おぬしは？」

――キュルケは、オホホホホ……と、声を上げて笑ったのちにこう答えた。

「＜フレイム・ボール＞を撃てる数が、以前の1．5倍になりましてよ」

「……えええええっ！？」

「ギーシュ。おぬしはどうだったかの？」

――薔薇を咥えて、優雅にお辞儀しながらギーシュは答えた。

「ワルキューレ操作の幅がとても広がったよ。しかも『ライン』が見えている」

「……ちょ、ちょっと待って」

「最後に……タバサ。おぬしの成果は？」

――タバサはくいっと眼鏡を直すと、こう呟いた。

「『スクウェア』にランクアップ。さらに独自に教わった技術で＜精神力＞の最大容量が１．５倍にまで膨らんだ上に、回復速度が最大５倍まで上昇。しかもわずか１日の訓練で身についた」

「ちょっ」「ねえタバサ何それ！？」「ぼくはまだ聞いていないよミスタ！」

自分たちにもそれを教えて欲しい！　そう言って詰め寄る『生徒たち』を、まあまあ……と、抑えている太公望。

「待って、ちょっと待ってよ！　どういうことなのよ、みんな！！」

この短期間で、そこまで＜力＞が上昇するなんて、常識ではありえない。そう叫んだモンモランシーに、全員が満面の笑みを向けた。

「わしはな……独自の技術で、その人物が持つ『素質』を見抜くことができるのだ。それに合わせた訓練を行った結果が……今の彼らだ」

その言葉に、全員が首を何度も縦に振る。じつにいい笑顔で。

モンモランシーは驚愕した。そんな馬鹿な……ううん、ちょっと

待って。そういえばミスタ・タイコーボーは東方ロバ・アル・カリイエのメイジ。たしか、東方では魔法技術がハルケギニアと比べて、ものすごく進んでるって噂を聞いたことがある。まさか、それを放課後に教えてもらっていたから、みんな――！

「ひょっとして、わたしにも、その方法を、教えてもらえる……とか？」

――もしもそうならば、たしかに７００エキューなんて安いものだ。

「その通りだ。これは学院長公認の課外授業でな。ただし、他の人間に授業内容及び、開催していることを漏らさないという絶対条件付きだが。ちなみにこれを逃した場合、わしは今後『生徒』を増やす予定について、余程のことがない限りありえないと考えてもらいたい」

こっちにおいでよ！　まるでそう言うように手招きのジェスチャーをする他の者たち。それを見て、ようやくモンモランシーは悟った。これに参加していたから、ギーシュはいつも放課後あそこにいたのだ。ルイズと二股をかけていたわけではなかったのだと。

と、そこへ太公望からさらなる追撃が飛んできた。

「ちなみに、今ならもれなく特典がつく」

「えっ！？」

まだなにかつけてくれるの！？　あまりのことに驚きすぎたモンモランシーは、口を開けたまま声が出ない。そして、それは周囲の

者たちも同様だった。なんだ特典って!?　と、ざわついている。

――ちなみに才人だけは「テレビの通販かよ!」などと思っていたのだが。

「そもそもだな……この『事件』が発生した理由は、ギーシュの浮気性が原因なのであろう？　モンモランシーよ」

「そ、その通りよ」

「この特典をつけるにあたって、念のため確認しておきたいのだが……もしギーシュが一切浮気をしなくなったら、おぬしは本気で彼とつきあうつもりがあるのか？」

「ぼくは浮気なんか」「おぬしはちと黙っておれ」

ギーシュの発言は、モンモランシーの耳には入っていなかった。何故なら、

『ギーシュが本当に浮気をしない男になったとしたら』

それをシミュレートすることだけで、彼女の頭の中はいっぱいだったからだ。

そうね、彼……なんだかんだで結構優しいし、気が利くわ。頭も……調子にさえ乗っていなければ、そう悪くない。顔については文句なし。ちょっとエッチなところはあるけれど、男の子だったら誰だってそうだと思うし。おまけに家柄は名門の軍閥貴族。う～ん、わたしだけに尽くしてくれる、そんなギーシュ……。

すうっ……と、モンモランシーの顔が朱に染まる。

「どうやら答えは出ておるようだのう。そこで提案なのだが……まずは、お試しで数ヶ月ほど付き合ってみるのだ。その上で、もしもギーシュがまた浮気をしたらだな」

「彼が、浮気をしたら？」

モンモランシーの問いに、悪魔のような微笑みでもって答える太公望。

「3回だ」

「……3回？　何が？」

「このわしに、やつが浮気をしたと言うのだ。そうすれば、わしの＜風＞でもって、その場でギーシュを天まで吹き飛ばしてくれるわ……3回までな。ちなみにわしの＜風＞に関する実力だが……タバサよ」

「彼は＜風＞の『スクウェア』メイジ」

ふたりの解答に、モンモランシーは天使の微笑みでもって応じた。

「とてもいい特典ね」

「そうであろう？　もし3回わしの＜風＞を食らっても浮気癖が治らないようなら、キッパリと別れてやればいいのだ。そのための『お試し期間』というわけなのだよ」

「そうね、ミスタの言う通りだわ」

頬を染め、両手で軽くそこを抑えながら、実に可憐な笑顔で受け答えを続けているモンモランシーの態度に、ギーシュが慌てた。

「ちょ……ちょっと待ってくれたまえミスタ・タイコーボー」

冷や汗をかきながら抗議しようとしたギーシュに対し、太公望はぐりん！　と、首を回し、顔だけを向けて凄んだ。

「おぬしが浮気をしなければいいだけのことであろう？」

「その通りよ」「まったくだわ」「タイコーボーの言はもっとも」「お前また二股する気なのかよ、懲りねェなあ」

――結局。次の『虚無の曜日』から、モンモランシーは『仲間』に加わることをもって『惚れ薬』の弁済とする旨を承諾し……ギーシュは、彼女との関係を公にすることとなった。とんでもない枷つきで。

○●○●○●○●

――そして、その夜。

夕食を取りながら、近くで食事をするいつものメンバーの顔をちらちらと眺めつつ、太公望は考え込んでいた。あやつらには、とんだ借りができてしまったのう……と。

そう、実は……太公望は、全てを覚えていたのである。『惚れ薬』

を飲んでしまってから起こしてしまった、自分の行動を。ハッキリ言って、失態などというレベルの問題ではない。

今……どこか遠く、誰もいない空間に自分だけが居たとしたならば、その場で頭をかかえつつ、転げ回って叫び出したい心境であった。

「このわしがシスコンとか！　あきらかに問題となる言葉を、さらっと口にしてしまうとか！　しかもタバサに不安を抱かれるような発言をした挙げ句に『打神鞭』最大出力かますとか、いちばんありえんわ！　このわしへの信頼が、威厳が壊れてゆく――ッ！！」

……と。

だが、彼らはそれを黙っていてくれた。そして、自分を気遣ってくれた。だから、太公望はあえて彼らの『策』に乗ったのだ――あきらかな穴があるのを見越した上で。

「あいつら……わしが他人に事情聴取をするとか、誰かから、なんだかこの3日間は様子がおかしかったね、とか言われる可能性について考えつかんかったんかい……そもそもだな、3日も倒れていたのなら、誰かが見舞いに飛んでくることだってありえるのだぞ！？　穴だらけではないか！！」

――『事情説明』直後に彼が頭を抱えていたのは、実はこれが原因だったのである。

「しかし……ある意味あの娘、モンモランシーを『こちら側』へ引き込めたのは成功であった。わしが対抗しきれないほどの『薬』を作れる『調合師』など、そうはおらぬ。将来は、秘薬による＜治

癒＞のエキスパートとして役に立ってくれるであろう」

……そう、実はあの謝罪。単なる弁済と見せかけた、太公望のスカウトだったのである。太公望、あいかわらず転んでもタダでは起きない男であった。

――ちなみに、ギーシュに対する『枷』は、原因を根本から絶つ……と、いうよりも。今回の件に関する太公望なりの仕返しである。彼はもう浮気などできないであろう。

○●○●○●○●

――それから数時間後。思わぬところから『運命』の時は訪れた。

モンモランシーへの支払いを終え、部屋へと戻った後……太公望は思わずぼやいた。その一言が、タバサにとって、とてつもない意味を持っていたことも知らずに。

「まったく……自業自得とはいえ、１５０エキューとはとんだ出費だ。もしもわし以外がアレを飲んだとしたら、最長でも２日以内で治してやれたものを」

その代金で、新作デザートが買えたのにのう……その、囁くようなぼやき声を、まさに『運命』といって差し支えないその言葉を、タバサは聞き逃さなかった。

「どういうこと？」

「む、どういうこと、とは？」

タバサの顔色は、劇的に変わっていた。必死の形相で太公望へ詰め寄っていく。

「あなたは、今『惚れ薬』の症状を2日以内で治してやれたと言った」

「ああ、そのことか。実はな……」

そして、太公望は語り始めた。国元に、ハルケギニアでいうところの＜先住魔法＞の使い手にして凶悪な妖魔が多数存在していたこと。

そして、それらの中に＜魅了＞の術を含む『人為的に精神を塗り替える』ものがいくつもあったことから、彼の国では、それに対抗するための＜技術＞が発達しているのだということを――実際には太公望限定技術だったりするのだが、そこは伏せている。

「でも、あなたはあのとき……あのフリッグの舞踏会中に、わたしがした質問の中で、心の病は治せない――そう言った」

ああ、そういえばそんなことがあったな……と、思い出しながら太公望は告げた。

「そうだ、自然にかかってしまった『心の病』は治せない」

だが……と、続ける太公望。

「今回のような『魔法薬』や＜マジック・アイテム＞。または＜魔法＞の類によって『人為的に』『強制的に歪みを発生させられているようなもの』ならば、わしが『解析』して＜解呪＞することが

可能だ」

――そして、さらに彼は先を続ける。

「もちろん、現れている症状によって解析にかかる時間や、解く方法は変わるが。ちなみに、わしに『惚れ薬』の効果が正しく現れなかったのは、おそらく無意識にその『解析』を試みたせいで、それが薬効に割り込んだからであろう。そういう＜抵抗＞のための訓練も、国元では行われておるからのう」

そう答えた太公望へ、タバサはしがみついた。そして、小さく震えながら訊ねた。

「あなたなら……どのくらいの時間で……どれくらいの確率で治せるの？」

その真剣な問いに、太公望はこちらも誠実な態度でもって応えた。

「時間については、症状によって異なるが……早ければその場で数秒以内に。長期の場合は約１年程かかる。治せる確率に関しては……ほぼ１００％だ」

――１０分後。太公望はタバサを背に乗せ、トリステインの国境側から見てラグドリアン湖の対岸にあるその場所――タバサの『運命』の場所へ向かって空を駆っていた。その『運命』と、戦うために。

第４２話　雪風、その運命に繋るの事（後書き）

前半は某ジャ○○ット風通販番組的にお送りしました。今回の太公望によるモンモン勧誘は、

「購入者Ａさん：１ヶ月で１０キロ痩せました」「購入者Ｂさん：今まで着られなかった服が今ではあっさり袖を通せます！」的なアレです。おまけに『お試し期間』つきという。

そして、ついに来ました、タバサの『運命』そのうちの１つです。しかし、戦うためには前準備が必要で……以後、次回更新にて！

２０１１／０５／０５　本文大幅加筆修正

第４３話　雪風、始まりの夢を見るの事

――太公望が、タバサを背に乗せて飛び立った……ほんの数分前のこと。

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストー。人呼んで『微熱』のキュルケ。帝政ゲルマニアでも有数の富豪として知られる大貴族の娘にして、恋多き女として学院内でも有名な彼女が、珍しくたったひとりで夜空を眺めていた。

実際、これは異常事態と言って差し支えない。いつもならば、彼女が付き合っている彼氏たちが、毎時間のように部屋を訪れている。そして、彼らがダブル、あるいはトリプルブッキングによる騒ぎを起こすことなど、日常茶飯事なのであるからして。

冠せられた『微熱』の二つ名は、そんな彼女を的確に表す象徴のようなものなのだ。

しかし、今日は間違ってもそんな騒動は起こりようがなかった。何故ならキュルケは、全ての予定をキャンセルした上で、自室の窓枠にもたれかかり、その手にワイングラスを持って、静かに空の月を見上げていたからだ。

彼女の足元には、その＜使い魔＞火竜山脈に住まうサラマンダー『フレイム』が寄り添うようにして、伏せの姿勢を取っている。

キュルケの心は、今――ぷすぷすと燻り続けていた。そのことを思い、ふっとため息をついたその時だ。彼女の目に、太公望とタバサのふたりが遠い空へと舞い上がっていく姿が映り込んだのは。

「はあ……元気になったから、ふたりで夜空のデート……ってところかしら」

そして彼女は、足元に控えるフレイムの頭をそっと撫でた。フレイムは、ウルルルル……と声を上げ、気持ちよさそうに目を細めている。

「あたしね、あなたのことが気に入らないわけじゃないのよ。むしろ、当たりを引いたと思って、喜んでいるくらいなの」

実際、火竜山脈のサラマンダーといえば、このハルケギニアにおいては所謂『ブランドもの』に相当する、レアかつ強力な＜使い魔＞なのである。間違いなく『当たり』といっていいだろう……例年ならば。

「ええ、もちろんわかってるわ、あなたが悪いんじゃないのよ。でもね……」

そう言って、キュルケは再び空の月を見上げた。

「あのふたりの＜使い魔＞さんは、大当たりどころじゃないのよおぉお！！」

……そう。彼女の胸の内には、今……とあるふたりの人物に対する想いで、小さな『葛藤』という名の炎が燻り続けていたのだ。

――ひとりは彼女の仇敵。ルイズの使い魔『サイト・ヒリーガル・ブセイオー』。

最初はただの平民と侮っていたが、実は東方ロバ・アル・カリイエの大貴族にして元帥。そして＜東方最強のメイジ殺し＞と謳われた大将軍の息子だった。

魔法は一切使えないが、彼のまさに神速ともいうべき『剣』の腕は、『ドット』では最強レベルといっても過言ではないギーシュの『ワルキューレ』全力攻撃を持ってしても止められない。しかも、剣がなくても素手で殴り倒してしまうほどの強さを誇る。並のメイジでは、彼に勝つことなどできはしないであろう。

そして昨夜。彼は、巨大な炎に飲み込まれそうになっていた自分たちを救うために、たったひとりで剣を振るった。そこで判明した事実。彼の持つ剣は、なんと『始祖』ブリミルを護りし『光の盾』。『魔法吸収能力』を持つ、紛う事なき国宝級の＜インテリジェンス・ソード＞だったのだ。

突如顕現した＜ヘクサゴン・スペル＞にまで、光り輝く剣一本で立ち向かわんとしたその姿と勇気は、まさしくお伽噺に登場する『伝説の勇者』イーヴァルディそのもの。人間の営みに無関心であるはずの、水の精霊にすらその名が届いていたほどだ。

にも関わらず、普段はいたってふつうの男の子。誰にでも公平に接し、お調子者だが明るく、強さをひけらかすことなく、心根も優しい。あの気難しいルイズですら笑わせてしまった……まさに太陽のような輝きを放っている存在だ。

――もうひとりは彼女の親友。タバサの使い魔『リョボー・タイコーボー』。

はじめは、ただのお子ちゃまだと思っていた。だが、その実態は。

サイトと同様ロバ・アル・カリイエ出身のメイジにして元軍人。しかも、中将という高い地位に就いていた将軍様だったのだ。年齢も、自分より１０歳年上の２７。

深い知識を持ち、その目に映るもの全てを解析する能力は、まさしく『率いる者』。あの『ゼロ』だったルイズの才能を見抜き、たった１週間で空を飛べるまでに成長させた。キュルケ自身も、彼の薫陶によりどんどん実力が上がっているのを実感している。

そして、その彼が『薬』の効果で語った真実。国王ですら、自分を叱ることなどできはしない――つまり、そういう『血筋』であるということだ。本来穏やかな性格であるため、戦いの毎日に疲れ、ついには身分を捨てて旅をしていたらしい。

とはいえ、メイジとしての腕は超一流。世界中にその名を轟かす伝説の＜風＞メイジ『烈風』カリンとも互角に戦えるのではという程だ。さらに、昨夜顕現した、天を貫かんばかりにそびえ立つ大竜巻は『スクウェア』などという枠には到底収まらない。話に聞く『ヘクサゴン』級の偉容を誇っていた。

＜ヘクサゴン・スペル＞は『王族』以外には絶対に使用できない伝説の魔法である。『東方の王弟殿下ではないか』という自分の推測は、当たりか……あるいはそれに近いものなのだろう。

どうにも掴み所のない性格で、かつ「面倒くさい」が口癖の、ただの怠け者のようにも見える。しかし、今日のモンモランシーに対する対応。ただ事実のみを追求し、己の過ちを認める姿は、立派な大人の男性だった。まさしく『上に立つ者』として相応しい。にも関わらず、過去の身分を笠に着て偉ぶったりしないところも好感度が高い。シスコン疑惑はともかくとして。

サイトを太陽と称するならば、タイコーボーは、ひとの隣で静かに輝く月だ。

キュルケは、残っていたワインをひといきで飲み干すと、さらにテーブルの上に置かれていたボトルから、グラスへなみなみと赤い液体を注ぎ入れた。

「サイトは、クラスの子たちと変わらないか、それ以下の恋愛スキルしか持ってない初心（ウブ）な男の子。はあ……『伝説の勇者』を自分色に染められる……なんて考えたら、あたし……」

そして、新たに注いだワインも、これまたひと息に口へ流し込んだキュルケは、深いため息と共に声を出した。

「ミスタ・タイコーボーは、子供みたいな見た目の中に、包容力のある男を感じさせる、あのギャップが魅力よね。彼となら、大人の恋愛や駆け引きを楽しめそう、なんだけど……」

キュルケは、腰をかがめてフレイムの首周りをぎゅっと抱き締めながら呟いた。

「ミスタは、タバサの『パートナー』だから論外として。サイトなのよね……問題は。フォン・ツェルプストー家の者としては、仇敵ヴァリエールの『相手』を奪うのが流儀のはず、なんだけど……なんだけど！」

突然、キュルケは立ち上がって声を上げた……隣に聞こえるので控えめに。

「どうしてルイズの『いちばん』になっちゃったのよおおお！　あたしはね、どんなことがあっても、そのひとの『いちばん』は取らない主義なのよ！！」

……そして、彼女はテーブルの上に突っ伏して、ぼそりと呟いた。

「神の剣を持つ勇者様と、身分を捨てた流浪の王子様が、自分の目の前にいるのがわかっているのに手が出せないこの葛藤！　『微熱』の名が泣くけど、この心は届かない……ああ、このあたしの運命の『パートナー』は、いったいどこにいるのよ……ッ」

――実は、結構近くに『運命のパートナー』がいたりするのだが、彼女がそれに気がつくのは、もうしばらく先の話。

……このように、彼女の中にある『誤解』が、現在進行形でとんでもない方向へ走り続けていることを知らせる意味で、その葛藤をここに記載しておこう。ただし、本人はそれらの内容について、一切他者へ口外するつもりはないということも、併せて記す。

○●○●○●○●

――キュルケが、ワインのあおりすぎでテーブルで寝息を立て始めた頃。

ガリアとトリステインの国境から馬車で１０分ほどの場所に建つそれ。旧い、立派な屋敷の門を、タバサの後ろに付き従うようにしながら、太公望は通り抜けた。

その門に刻まれた紋章――交差した２本の杖、そして『さらに先

へ』と刻まれた銘は、まぎれもないガリア王家の紋章。だが、その上には、大きな×印が刻まれていた。『不名誉印』と呼ばれるそれは、王族でありながらその権利を剥奪されたという意味を持つ。

彼らが玄関の前へ到着すると、ひとりの老僕が現れ、恭しく頭を下げた。

「お嬢さま、お帰りなさいませ。失礼ですが……そちらの方は？」

「……事情を知ってる」

タバサのごく小さな呟きに、老僕はピクリと身体を震わせると、すぐさまふたりを屋敷内へと案内した。そして、改めて太公望へ恭しく礼をした。

「このオルレアン大公家の執事を務めさせていただいております、ペルスランと申します。どうぞ、よろしくお願い申し上げます」

「わしは太公望と申す者だ、よろしく頼む」

「彼を客間へ案内して。わたしは、まず母様の様子を見てくる」

「承知いたしました、では……こちらへ」

客間――ホールへと案内された太公望は、ソファーに座ると……慎重に周囲を覗い始めた。感覚を研ぎ澄ます。大丈夫だ、どこかから見張られているような気配はない。屋敷へ着く前にも偵察を行ったが、このあたりに間諜の類は一切いないようだ。太公望は、ほっと息を吐いた。

と、先程のペルスランと名乗った老僕が、茶と菓子を持って現れた。

「こちらのお屋敷は、ずいぶんと歴史あるものとお見受けするが、おぬし以外の人間は……ひとりしかいないようだ。幸いなことに＜魔法＞で見張られているということもなさそうだのう」

「失礼ですが、どこまで事情をご存じでいらっしゃいますか？」

「タバサ……シャルロット殿下が、病気の身内を人質に取られ、王家の為に命がけで汚れ仕事をさせられている。また、その人質の病気が『魔法薬』によって引き起こされたものである、患者がこの家にいる。ここまでは承知している」

そこまで一気に話した太公望は、改めて自己紹介をする。

「ペルスラン殿については、既にシャルロット殿下より伺っている。偵察により間諜がいないことが判明したため、改めて自己紹介させていただく。わしの名は、太公望。使い魔召喚の儀で、東方ロバ・アル・カリイエより殿下によって呼び出された＜使い魔＞だ」

ペルスランは、驚いた。使い魔召喚の儀で人間が呼び出されるなど、これまで聞いたことがない。しかも、ロバ・アル・カリイエからとは！　だが、次に続いた太公望の言葉で、老僕は『始祖』の導きを感じることとなる。

「わしは『魔法薬』によって『心』を壊された者を、ほぼ確実に治すことができるのだ。もしやすると、殿下の強い『願い』が、わしをこの地へ呼び寄せたのかもしれぬ」

「そ、それでは……ま、まさか……」

震える声で訊ねる老僕に、太公望は笑顔で答えた。

「左様……わざわざこんな夜分に参ったのは、王家の者に気取られることなく、奥様の診察を行うためだ」

ペルスランは、その場に崩れ落ちた。その両目からは、滝のような涙がしたたり落ちている。そして、彼は語り始めた――この家に起こった悲劇を。

かつて、ガリア王家にはふたりの兄弟がいた。ひとりは長男ジョゼフ。現在のガリア国王。もうひとりは、次男のシャルル。タバサ――シャルロットの父親である。

シャルル王子は、魔法の才能と人望に溢れていた。いっぽうのジョゼフ王子は宮廷の人々から『暗愚』『無能』と称されていた。何故なら、王家に生まれたにも関わらず＜魔法＞が一切使えなかったからだ。

「なるほど、それで『無能王』……か」

「左様でございます。外国……しかも東方のお方には、何故その二つ名が冠されたのかはおわかりになりにくかったでしょうが」

「確かにその通り……失礼、話を続けていただけるだろうか」

「承知いたしました、それでは……」

そして、いつしか『才能のあるシャルル王子こそが次代の王とし

て相応しい』とする動きが宮廷内に持ち上がり、いっぽうで『長兄であるジョゼフ様が王位を継ぐのが伝統であり、国法で定められた決まりである』として反対した一派と対立。

ついには、シャルルが暗殺されるという形で、この継承権争いは幕を閉じた……。

「しかし、悲劇はこれで終わりではなかったのでございます」

流れ落ちる涙を拭くことなく、老僕は先を続ける。

ジョゼフ王と彼を擁する一派は、争いの禍根を断つべく、今度はシャルルの娘であるシャルロット姫に狙いを定めた。そして、母娘を宮廷へ呼び出すと、酒肴を振る舞った。そこで、シャルロット姫に差し出されたワイングラス。その中には『心』を狂わせる『魔法の毒』が盛られていた。だが……。

「奥さまは、それに気付いておられました。そして、ジョゼフ王へ必死の思いで命乞いをなさったのです。自分がこれを飲むかわりに、娘の命だけは助けてほしい……と」

その日以来。シャルロット姫――つまりタバサの母であるオルレアン公夫人は、その心を狂わされ……小さな人形を、自分の娘だと思い込むようになってしまった。そして、人形を胸に抱き締めたまま、まるで繰り返す夢の中へ閉じこめられたように、虚ろな瞳で、ただひたすらに同じ言葉を呟き続けているのだと。

――シャルロットは、このわたくしが守る。誰にも触れさせはしない……と。

にもかかわらず夫人は、命を賭して守ろうとした自分の娘――タバサの顔すらわからなくなってしまった――。

『魔法の毒薬』を飲む寸前で救われたシャルロット姫は、それ以降――王族の地位を剥奪され、真の名すら奪われた。そのときから、彼女は母が護っている人形につけられた名前『タバサ』を名乗るようになり――時折ガリア王家から無理難題ともいえる『任務』を申し渡され、しかし母の『心』を人質に取られているが故に逆らうことすらできず、今も命がけで戦い続けている……。

全てを語り終えたペルスランは、どうか奥さまをよろしくお願いいたします。そう告げると、部屋を出て行った。

「なるほど……そういうことであったのか……」

太公望は、ひとり残された部屋の中、思考の淵へと沈み込んでいた。タバサが『薬』を飲まされた自分を見て怒り狂い、そして治ったとわかった時に流した大粒の涙の理由。彼には、それがよく理解できた。できてしまった。

……絶対にタバサの母を治してみせる。たとえいかなる手段を使おうとも。

――それから30分後。

部屋の外から『患者』の様子を一通り観察し、その後タバサに『今は＜力＞を温存しておきたい』と告げて、母親へ＜スリープ・クラウド＞をかけてもらった後、改めて状態を確認した太公望は、不安げに見守っているタバサとペルスランのふたりを伴い、客間へと

戻った。

「結論から言おう。わしの手でほぼ間違いなく治せる」

その答えを聞いたふたりは、身体を小刻みに震わせ、静かに涙を流した。その様子を見た太公望は、静かに頷くと、彼らが泣き止むのを待った……そして。

彼らが落ち着きを取り戻したところで、改めて説明に入る。

「そこでだ。『ほぼ』ではなく『確実』にするため、おふたりの力を借りたい」

「どうすればいい」「わたくしにできることなら、なんなりと」

ふたりの答えに頷いた太公望は、再び説明を開始する。

「失礼ながらいつも通りに呼ばせてもらう。タバサよ、ひとつ確認したいのだが、おぬしは自分に対してだけ＜スリープ・クラウド＞をかけられるか？　たとえば、身体を寝かせた状態で」

その質問に、ちょっと考えたタバサは可能であると答えた。

「うむ、それならば確実だのう。では、つぎにペルスラン殿にお願いしたい」

「はい、なにをすれば？」

「奥方様の隣に、敷物かクッションのようなものでかまわないので、ふたりが横たわれるだけの場所を用意してきていただけるだろ

うか……できれば早急に」

承知いたしました、そう答えたペルスランは、早足で客間から出て行った。自分への質問と、今のペルスランへの指示から、おそらく『眠り』に関する何かをしようとしているのだろう。ただ、その意図がわからない。だからタバサは、太公望へ質問することにした。

「いったい、なにをするの？」

「見にいくのだ」

「それは……なにを？」

「おぬしの母上が見ている『夢』を、だ」

○●○●○●○●

――ペルスランが準備が整ったことを伝えに客間へ戻ってくると、太公望はふたりを伴い、タバサの母が眠る部屋を訪れた。

「タバサよ、母上はあとどのくらい眠り続けるかわかるか？」

「最短でも3時間、長ければ5時間ほど」

タバサの声に、うむ。と頷いた太公望は、ふたりに向き直って説明を開始した。

「まず最初に言っておく。タバサは時折見ていたからわかるであろうが……今回、ここでわしがしようとしていることは、ハルケギ

ニアではほぼ間違いなく『異端』とされる内容だ。よって、他者には絶対に漏らさないでいただきたい」

タバサと老僕は、互いに目を見合わせると、すぐに太公望へ強く頷いた。

「それでは、タバサよ……母上に近いほうへ身体を横たえるのだ。右手側に『杖』を持ってゆくのだぞ」

タバサは、言われた通りに並べられたクッションの上へ身体を横たえた。そして、その隣――タバサの左側――へ、太公望が移動する。

「これから、わしの＜技＞でもって、奥方様の『夢』の中へタバサを誘う。もちろん、このわしも同行する」

この発言に、タバサもペルスランも驚いた。そんなことができるのか――と。

「つまり、わしらはふたりとも完全に無防備となってしまう。ペルスラン殿」

「はい」

「1時間だ。タバサが眠りに入ってから1時間経過したら、わしらを即座に起こしてもらいたい。また、もしも誰かこの家にやってくるようなことがあれば、経過時間に関わらず教えていただきたい。同時に、部屋の見張りをお願いしたいのだが」

その言葉に、ペルスランは礼をもって応えた。

「ではタバサ……わしが合図をしたら、自分に＜スリープ・クラウド＞をかけ、眠りにつくのだ。よいか？」

「わかった」

タバサの返事を聞いた太公望は、左手に『打神鞭』を持って彼女の横へ座り込むと、自分も身体を横たえた。そして、右手でタバサの左手を軽く握り締める。

と……タバサは、太公望の手から、なにか暖かいものが自分の中へ流れ込んでくるのを感じ取った。これは、いったいなんだろう……？

「タバサよ、それに逆らってはだめだ。よいか、流れに身をゆだねるのだ」

小さく頷いたタバサ。そして、太公望は彼女に＜スリープ・クラウド＞をかけるよう命じて、自分も目を閉じた。

――その後、ペルスランは見た。ふたりの身体から、何か薄く光る珠のようなものが浮かび上がったかと思うと、奥で眠る『患者』の中へ吸い込まれて、消えたのを。

○●○●○●○●

――ここはどこだろう。

タバサが気がつくと、そこは暗闇の中であった。どちらが上で、

下なのか、それすらもわからないほどの闇。手にした『杖』の先に＜ライト＞で明かりをつけようとしたその時。どこからか、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「明かりを灯す必要はない」

この声は……？

「すまぬ、わしとしても正直これは想定外であったのだ。よって『いい部屋』に案内できなかった。迎えにゆくから、少し待っていてくれ」

すると。タバサの前に、突如光り輝く長方形の『鏡』、いや……『窓』のようなものが現れた。そして……その強い光を放つ窓の中から、ズル……と、誰かが出てくる。

＜サモン・サーヴァント＞の『鏡』？　いや違う。これは、もしかして……タイコーボーがよく言っていた『空間ゲート』の出口……！？

タバサは『空間ゲート』の中から現れた人物を見た。『窓』から差す光が強すぎて、その顔はよく見えない。黒いマントを羽織り、同じ色のフードを被った、その人物は――！

「た……タイコーボー！？」

「――誰のことだ、それは？」

その言葉と共に、闇に包まれていた空間に、ボウ……と、淡い光が現れた。そして彼は名乗りをあげる。

「我が名は伏義(ふっき)！　『始まりの人』が一人である！！」

……それから１０秒ほどの間を置いて。男はバッ！　とフードを取り去った。

「な――んてのう！　ニョホホホホ……」

タバサは、黙って『杖』を振り上げると、太公望の頭をポカポカ殴り始めた。

「や、やめんか！　悪かった！！　『夢』の中でも痛いものは痛いのだ！！」

その言葉に、タバサはハッとした。そうか、ここは『夢』の中なのだ、と。

「その姿は……！？」

「説明はあとあと。とりあえず、このしみったれた場所を出ようや！」

その言葉と共に、太公望の『杖』の先に、ぴっと光が灯った。すると、太公望はその『光』で、空中に大きな円を描き始めた。そして。

「じぇい！！！」

と、いう叫び声と共に、その円を蹴飛ばして『中を打ち割って』『穴を開けて』しまった。足が通り抜けるという予想をしていたタ

バサは仰天してしまった。いや、いくら『夢』の中とはいえ、これはないだろう……と。

「ほれ、こっちへ来るのだ！」

穴の側で、太公望が手招きをしている。と、彼は穴へ飛び込んでしまった。

「ではお先に！」

あっけにとられていたタバサだったが、その『穴』がじょじょに小さくなっていくのを見て、慌てて彼の後を追って、その中へと飛び込んでいった――。

第４３話　雪風、始まりの夢を見るの事（後書き）

この太公望、ノリノリである。
と、いうわけでキュルケの誤解、タバサの回想、そしてまさかの伏義登場！　ふふ……ここで出ると予想していた方はいらっしゃるのでしょうか。感想欄ですっとぼけ続けてすみませんでした。まさか「ああもうすぐ出ますから！」とは言えなくて！！

ちなみに、あくまで『夢』限定、しかも太公望的には想定外の出来事だったということで。『夢』は『イメージ』で変わるという例の封神演義イベントから引っ張ってきてみました！

ところで、感想欄で「今回、王家に対しての伏線云々を明かす」と書きましたが、少しきりが悪いので次に回させていただきます。申し訳ありません。

２０１１／０７／１１　誤字脱字修正

第４４話　雪風、幻夢の中に探すの事

――そこは、不思議な『部屋』だった。

白くつややかな――それでいて、大理石ではない――見たこともないような素材で作られた壁。同じもので造られた床の中心には、透明のガラス板が張られている。その中には魚影らしきものが動くのが見えた。もしや水槽だろうか。

そして、部屋の奥には大きな窓がついている。タバサは、太公望（伏羲）の後を追う際にちらっと、その窓の中を見た。そこには……なんと何処までも続く、星の海が広がっていた――。

「さあ、こっちへ来るのだ」

いけない、思わず星の輝きに見とれてしまっていた。今は、母さまを助け出すことを第一に考えなければいけないのに。

……案内された奥の部屋は、もっと不思議だった。

丸い光の玉が、いくつもふよふよと室内を漂っている。ランプの一種らしく、部屋全体を、まるで昼間のように明るく照らしている。部屋の隅にはベッドと、机……そして、見たこともないような品々が、棚の上に所狭しと並んでいる。

伏羲は、机の側にあったこれも不思議な形の一人がけ用のソファーに腰掛けると、タバサを手招きした。

「質問したいことがたくさんあるだろうが、今は時間がない。ま

ずは、ここにいるうちに、タバサのお母上の『魂魄』がどこに囚われているか当たりを付けねばならぬ」

いやはや、この姿で調査できて助かった。『夢』に入る前のわしだったら、最悪当たりづけだけで終わってしまう可能性があったからのう。などと呟きながら、伏義は机の上を片付けている。

――この姿。いま、彼はそう言った。

いつもマントの内側に着ている橙色（だいだいいろ）の胴衣と、それと同じ色の手袋。だが、それ以外は全て黒を基調とした服装をしている。頭にいつもの白布も巻かれていない。代わりに、左頬を守るような形の、不思議な装飾品を身につけている。

幾重にも折り重ねられた肩当てに、皮のような、そうでないような不思議な素材で作られた胸当て。そして、何かの文様のような細かい意匠が施されたフードがついた、足元まで届く、黒く長いマント。それは中心から先が3つに割れている。そのマントは、肩当てのところに、金や銀とは明らかに違う、それでいて高級感の溢れた鈍い光沢を放つ金属でできた、複数のボタンによって留められていた。

そして、そのマントも含め、胸当てを除く全てが――まるで最高級の絹のように上品な光沢を放つ、不思議な布地で作られている――。

そんなタバサの探るような視線が気になったのだろう、伏義は苦笑して答えた。

「ああ、これはな……軍にいた頃の服装なのだ。おそらく、当時

の記憶が強いため『夢』に入り込んだときにこうなってしまったのだろう。おかげで『空間操作』が使える。これは正直嬉しい誤算だ」

……と、さっきまでは何もなかった床の上に、落ち着いた色のソファーが現れた。

「さあ、タバサよ。それに座るのだ」

言われた通りにソファーへ腰掛けると、タバサは気がついた。さっき、彼は『今は空間操作が使える』と言った。ひょっとして――。

「タイコーボー、ここは……！」

「そうだ。これが『自分の部屋』というものだよ。前に話した、わしらの本拠地である星の海を征く船、その船室のひとつをイメージしてわしが作り出した『小さな異世界』。『夢』の中でもそれは可能なのだ」

……いや、『夢』の中だからこそできたのか。伏義はそう独りごちた。

伏義は、隣の一人掛けソファーに腰掛けたタバサと話しながら、机の上に、薄緑色をした、幾つものガラスとは異なる透明の板――なにやら文字が書かれているが、ハルケギニアのそれではない。付随して複雑な図形の類が描き出されているものを、何枚も空中に並べている。

「よし、タバサよ。それではこれからお母上の『魂魄（こんぱく）』……すなわち『心を構成する魂』が、『薬』の影響で『夢の中のどこに囚われているのか』を探し始める」

その言葉で、タバサの顔がより引き締まったものとなった。

すると、タバサの目の前に4枚の『鏡』――いや、姿が映らない『窓』が現れた。そして、その中にはいくつもの景色が映し出されている。

「左から……1、2、3、4。これらの『窓』に、このあと色々な場所が映し出される。そのなかで、タバサと母上にとって思い出深い場所。あるいは、例の『薬』を飲まされたであろう舞台の景色が映ったら、その番号を言ってくれ」

伏義はそうタバサへと説明しながら、自分の右手にある板――タバサには何だかわからないが、実は記録操作用のパネル――を片手でいじっている。

「その景色の近くに、お母上が閉じこめられている可能性が高い。ちなみに、お母上自身を見つけた場合にも、同じく番号を教えて欲しい。映っている窓がひとつもなかったら、次、と言ってくれれば映し先を変えるからの」

「わかった」

コクリと頷いたタバサへ、優しい笑顔で答える伏義。

「では、始めるぞ。ふたりでお母上を捜すのだ」

――そして『調査』は始まった。

○●○●○●○●

――調査は約４０分に及び、その末に伏義は、タバサの母の『魂魄』らしきものの居場所を、ほぼ特定することに成功した。

そう……彼女はとある扉の前――何故か、蔦のようなもので固く封印が施されているそれ――に、扉ごと全身を縛り付けられていたのだ。おそらくあの『植物の枷』が彼女の『心を縛り付けている物』なのだろう。

……そして、その扉の奥に、彼女を狂わせている『原因』があるのは間違いない。

「あれが、タバサのお母上で間違いないないか？　もしもそうならば、何かおぬしの身体に不思議な感覚が現れるはずなのだが」

「身体を包み込まれるような感じならある」

「それだ！　よし……間違いないな。この２つほど手前の部屋の『座標』を記録しておけば、次に来たときに危険なく入り込めるであろう」

その言葉に、タバサがえっ！？　というような顔をした。

「今日は、治せないの……？」

「うむ、おぬしも承知の通り『心』は複雑なものだ。よって、その在処を特定したのちに、丁寧に処置を行う必要がある。そうでなければ本当に壊れてしまう危険性があるからのう。診断の結果は悪いものではないので、外に出てから改めて説明しよう」

その言葉に、タバサは深々と頭を下げた。

「お願いします」

「なんなのだ、いきなり改まって。調子が狂うから、いつも通りで頼む」

慌てたような口調でそう告げた彼の姿がなんだかおかしくて、タバサはつい笑みを浮かべてしまった。そして気付いた。こんな笑みを浮かべたのは、いつ以来だろうか……と。

「さて、それではわしは、今後の治療のためいろいろとしなければならない作業があるので、おぬしは部屋の中を見学してきてよいぞ」

「あなたの作業を見ていてもかまわない？」

「見ておっても、おぬしには何が何だかさっぱりわからんと思うぞ？」

「それでもかまわない」

「ならば、おぬしの好きなようにしてくれてかまわぬ」

――それから１０分ほど経過して。行うべき作業を終えたふたりは、突如『夢』の世界から引き戻された。そう、指定していた『目覚め』の時間が訪れたのだ。

起き上がったふたりを見て、ペルスランは涙を流していた。

「おかえりなさいませ、お嬢さま。そしてタイコーボーさま」

お疲れでしょう、すぐに軽い食事と飲み物をご用意致します。そう言った老僕は、ふたりを客間に通した後、急いで屋敷の奥へと戻っていった。

――そしてさらに１０分後。

太公望は『診察』のより詳しい結果を、ふたりに話していた――ペルスランの手によってカットされた林檎を咀嚼しながら。ちなみに、当然ながら伏義の姿ではなく、現在は太公望のそれに戻っている。

「それで治療にかかる時間だが、おそらく最長で2週間。ただし、まる1日を全て治療に費やすことができれば、ほぼ1日で終えられると思う。基本は3日程度と考えておいてもらいたい」

ふたりは頷いた。

「とはいえ、ここは敵地。つまり……」

太公望の言葉を継いだのは、タバサであった。

「この屋敷で、長時間の治療を行うのは危険。あの無防備な姿を晒すのはだめ」

「その通りだ。よって、おふたかた共に、安全な場所へ移動していただいてから、治療を行うのが最善だと思われる」

その言葉に慌てたのはペルスランだ。

「お待ちください、わたくしどもがこの屋敷を出るのは無理でございます。時折見回りの兵がやって来ますし、なにより、我らがいなくなってしまったら、叛意ありとみなされ、お嬢さまはもちろん、シャルル派の生き残りが粛正されてしまう可能性が」

そんな彼を頼もしそうな表情で見遣った太公望は、まあまあ……と、両手でペルスランを落ち着かせると、説明を続けた。

「それについては問題ない。おふたかたが『逃げた』と思われぬとっておきの『策』がありますゆえ。それについては、逃亡当日になってから改めてご説明しますが、その他の関係者に迷惑をかけるようなことはありませんのでご安心を」

「承知いたしました。で、迎えはいつごろに……？」

「早くて2週間。遅くとも一月以内には参ります。もしもそれ以上かかる場合は、必ず前もって、ふたりで報せに来ます。今回のように、夜半過ぎに」

「伝書フクロウは気取られる可能性があるので出せない、ということですな」

「その通りです。では、本日はこれで……」

――そして。老僕ペルスランにに見送られながら、太公望とタバサのふたりは、夜が明ける前にオルレアン公邸をあとにした。

○●○●○●○●

――魔法学院へと戻る道すがら、太公望とタバサのふたりは『逃亡作戦』について、詳細を煮詰めていた。

「逃亡先だが……できればゲルマニアが望ましいのだが」

「キュルケに土地勘がある、から？」

「それもあるが、実はわしの手のものをヴィンドボナへ放ってあるのだ」

その言葉にタバサは仰天した。今日は、いったい何度……彼に驚かされただろう。

「時折、わしの元へ伝書フクロウが飛んできていたことを？」

「知っていた。でも訊ねるべきではないと判断した」

その判断はありがたい。そう言って、太公望は先を続けた。

「あれはな、わしがスカウトした情報斥候からの調査報告書なのだよ。非常に有能でな、おかげで色々と助かっておる」

いつのまにそんなことをしていたのだ、このひとは……タバサは頭を抱えた。まさか、自分の『パートナー』が、個人的にスパイを雇っていたなどとは思いもよらなかった。

「でだ、その者に、輸送の際の案内協力と風竜の手配をしてもら

う。海外の人間だから、ガリア経由で足がつくこともない。逃亡先については、できれば誰の手も借りたくはないのだが、キュルケならば信頼できる。彼女はなんだかんだで口も堅いし、気が利く娘だからのう」

「それは全面的に同意する。では、キュルケに場所の確保、あるいは推薦を依頼するということで」

「うむ。次に、ひとがいなくなってしまう、おぬしの屋敷についてだが」

「あなたが何をしようとしているのか、だいたい理解している」

「そうか……この件については、ユルバン殿と男爵夫人に感謝せねばならぬな」

太公望の言葉に、タバサはその背の上で頷いた。かつて共に戦った老戦士――いや、『老騎士』ユルバン。その彼を守るべく造られた村を去る時、かれらはロドバルド男爵夫人の魂を宿した者から、2つの人形を手渡されていた。

その人形は――血を吸わせることで、その人物の姿形を写し取るだけでなく、性格や記憶までコピーした上に、意志を持った個人として完全自立行動まで可能。かつ、年を追うごとに老化までするという、魔法研究の進んだガリア首都でも絶対に手に入らないほど、非常に優秀かつレアな＜マジック・アイテム＞だ。

おまけに＜ディテクト・マジック＞にすら反応しない。メイジを写し取った場合はその限りではないが、むしろそのせいで入れ替わりに気付くのは至難の業であろう。

似たような効果のアイテムで『スキルニル』というものが存在するが、それの完全上位版といって差し支えない。これを使うことによって、しばらく――最低でも数年間――は時間稼ぎが可能であろう。

「あとは、逃亡後の生活資金かのう」

「確かに、屋敷から何か持ち出したりしたら怪しまれる」

「まあ、それに関してはちょっとわしに当てがある。そのかわり、タバサだけではなく、例の『仲間』たちに協力を依頼する必要があるが」

「当てとは……いったい何？」

「ふっふっふ……懸賞金つきの討伐依頼受領を兼ねた……『宝探し』だ」

○●○●○●○●

――キュルケは、夜明け前ふいに目を覚ました。

「う……テーブルで寝ちゃってたなんて……か、身体が痛い……」

とりあえず立ち上がって、伸びを……そう考えたキュルケが、偶然窓の外へ目をやると。なんと太公望の背に乗って、タバサが共に舞い降りてきたではないか。

「あらあら……とうとうふたりで一晩過ごしちゃった!?　これは……！」

是非ともふたりに突撃しないと。キュルケはにんまりとして、急いで身支度を調えると、タバサの部屋へと急いだ。

キュルケが足音を忍ばせて、タバサたちの部屋の扉に耳をつけ、外から様子を伺うと……中から「今日は授業を休む」だの「いや、仮眠だけ取って出席せねば怪しまれる」などという、実に想像力をかき立てられる台詞が飛び交っている。

「やっぱり、タバサってば大人になっちゃったのね」

ここで突撃しないでいつするのだ。燃える恋愛を至上とするツェルプストーの者としては、どうしてもやらずにはいられない。いや、やらねばなるまい。

そして、キュルケはいつものように（校則違反の）＜アンロック＞を唱え、勢いよくタバサの部屋の扉を開いた……すると。

「いいところへ来たキュルケ！」「あなたに頼みがある」

ふたりの思わぬリアクションに、固まることしかできないキュルケであった。

――そして、タバサは改めてキュルケに事情を語った。もちろん、彼女を信頼した上で、全てを。そして依頼した。どうか母と忠実な老僕が一時的に過ごすための、安全な場所の確保をお願いできないか――と。

全てを聞いたキュルケは、泣いていた。しかも＜サイレント＞がかかっているにも関わらず、声をあげずに。内容が内容だけに、間違っても聞かれてはいけない。そんな思いに駆られているのだろう。

そして、彼女はタバサの元へ近付くと、親友を優しく抱き締めた。

「大丈夫、あたしに任せて。うちの実家なら、いくつも別荘があるわ。そこのひとつを貸し出してもらえるよう、お父様にお願いしてみるから」

「ありがとう……」

タバサとキュルケのふたりは、声もなく泣いた。そして、そんなふたりを見守っていた太公望は、彼女たちが落ち着くのを待って、その後改めて話を切り出した。

「お父上への報せだが、念のため直接にではなく、中継点を通して送りたい。よって、のちほど手紙を書いて、わしに預けてもらえないだろうか。ちなみに預かっていただきたい人数はふたりだ」

「わかったわ。急いで連絡用の手紙を用意してくる」

そう言って部屋へ駆け戻っていったキュルケを見送ったふたりは呟いた。

「タバサよ、素晴らしい友を持ったな」「……うん」

――実は、キュルケが覗き兼冷やかし目当てに部屋を訪れたなどとは、全くもって気付いていない太公望とタバサであった。

○●○●○●○●

――時は、昨夜の時点まで戻る。場所は、魔法学院のルイズの部屋。

「盾……かあ」

才人は、考え込んでいた。それは自分の相棒の真の姿について……ではない。

「あんな攻撃、1発だけならともかく……全体にこられたら、どうしようもない可能性があるよなあ……デルフが頼りにならないってわけじゃないんだけど」

その声に、デルフリンガーが反応した。

「まァな。さすがに広い範囲で、しかも多人数で＜魔法＞を撃ってこられたりしたら、いくら俺っちが優秀でも守りきれない可能性があるぜ」

「そうだよなあ、確かにデルフはすごいと思うんだけど、それとこれとは……ん？　盾……広範囲を守る……いや、もしかすると……！？」

才人は、ルイズから紙とペンをもらうと、早速そのアイディアをさらさらと紙に書き込んでゆく。あまり上手とはいえない『絵』ではあったが、イメージをするための助けにはなるだろう。

「ふっふっふっ……これは……実現したら、ある意味スゴイ武器になるぜ……！」

平賀才人。地球人にして日本国籍を持つ彼が、またしてもハルケギニアではありえない何かを閃いた、その瞬間であった。

第４４話　雪風、幻夢の中に探すの事（後書き）

今日は診察のみでした！　治療準備はきちんとしてからでないと危なくてやれません、ということで。ちなみに『伏義の部屋』は、宇宙船蓬莱島の内装イメージ＋ファンタシースターポータブル２・インフィニティのマイルームを想像しながら書いたものです。……うちの太公望さんは、フォース（魔法使い）のくせに拳で殴るんだぜ……あ、タバサつれて歩いているのはここだけの秘密だよ！！　あと、ペットはドラゴンの四不象デス。

そして！　察しのいいみなさまはお気づきになられましたでしょうが、原作イベントのひとつに予約が入りました。そして才人がまたなにかキュピーンときています。さて、それは一体なんでしょうか!?　次回をお楽しみに～。

ところで、キュルケがらみでいろいろ書いていますが、基本的に「恋愛」関係をこの作品で展開するつもりはありません。ただ、キュルケでそれ系にふれないのはあまりに違和感があるので、こんな感じで出てきている、そうご理解いただければ。

２０１１／０５／０７　誤字・脱字修正

第４５話　軍師、農耕を奨めるの事

その日の夕方。新たに『仲間』に加わったモンモランシーを含めたいつものメンバーは、中庭に集まっていた。そこで、太公望が『そろそろ初歩の応用授業に入りたいと思う』と切り出した際に、その内容を聞いた全員から返ってきた言葉がコレである。

「畑仕事ォ！？」

「うむ。と、いっても別に野菜を作れというわけではない。実は、本来次の『虚無の曜日』から参加してもらうはずだったモンモランシーを呼んだのも、それが理由なのだ」

いっせいにモンモランシーを見る一同。だが、見られた本人も、いったい何故自分が呼び出されたのかわかっていなかった。

「それは、どういうことかしら？　ミスタ」

「うむ。実はな……＜魔法＞の応用訓練を兼ねて『薬草畑』を作ってみたらどうかと思いついてのう」

「薬草畑！？」

「そうだ。そこでな、傷薬などによく使い、かつ育ちがよい植物について、モンモランシーならば詳しいと思っての。それを教えてもらいたかったのだ。もちろん、対価はきちんと用意してある」

『対価』という言葉にピクンと反応したモンモランシー。実際、先日太公望が提示してきた別件の『対価』は、非常に魅力的かつ良

いものだった。彼がわざわざもちかけてきたことなのだ、悪いものではないだろう……と。

「しかし、ミスタ・タイコーボー。なぜ『畑』なんだね？」

ギーシュの、ある意味当然とも言える質問に、太公望は笑顔で答えた。

「うむ。それについては『畑』の作り方の説明を行う際に詳しく話そうと思う。そうすれば、どうしてそういう選択になったのかが理解できると思う」

……そして、太公望は説明を開始する。

「ここから5リーグほど離れた場所に、水場が近く、かつ割と開けた場所があるのだ。そこは、学院が管理する土地なのだが、これまで特に使われていなかった。そこで、オスマン殿に『対価』を申し出ることで、わしら一同だけが利用できるよう許可をいただいたのだ」

わざわざ学院長に許可まで取ってあるのか。その声にざわめく『仲間』たち。

「でな、まずは才人とギーシュ」

「ん、何だ？」「何だろうか？」

「お前たちはな、そこを『耕す』のだ。才人は『鍬（くわ）』を使え。ギーシュはあえて『ワルキューレ』を操作し、同じく『鍬』を持たせて耕すのだ」

ええーっ！　と、いかにも嫌そうな返事をするふたり。まあ、そうだろう。今まで毎日戦闘訓練をしてきたというのに、いきなり畑仕事をやれと言われて喜ぶ男の子がいるならば、今すぐその顔を見てみたい。

「気持ちはわからんでもない。だがな。鍬で耕すのは、武器を振り下ろす訓練にも繋がる。つまり、ただ素振りをするよりも『お得』なのだよ」

「ああ、なるほどな。軍事訓練と食料……っと、この場合は薬草か。それの確保を同時にやろうってことを言いたいんだな？」

太公望の言葉に才人がそう答えると、いままで無関心そうだった周囲の者たちの目に、興味の色が現れてきた。

「その通りだ。そして、ルイズはその『畑』に『薬草の種をまいて』そののち『水をやる』のが主な仕事だ」

「＜念力＞で桶に水をくんで、って意味かしら。もちろん種まきも」

ルイズの答えに、満足そうに頷いた太公望。

「よしよし、よくわかっておるな。たしかに貴族らしい仕事とはいえんかもしれぬな。だが、みんなの役に立つ上に、しかも＜魔法＞の練習になると思えば苦にならぬであろう？」

その言葉に、コクリと頷くルイズ。

「そしてタバサとキュルケは、畑に生えた『雑草』を＜念力＞でむしるのだ。これは、いかに効率よく＜魔法＞を使うかの訓練を兼ねている。また、小さな石などをどけて、植えたものの成長を妨げるものを排除するのだ。特に細かい＜力＞調整が必要のため、今後間違いなく役に立つであろう」

「ちょっと面倒そうだけど、訓練なら」「……やってみる」

「ああ、そうそう。草むしりは才人とギーシュも手伝うのだぞ。そのころには、もう耕す仕事も終わっているはずだからの。才人はもちろん手で、ギーシュは『ワルキューレ』でもって行うのだ。才人のほうは体力増強に役立つ。ギーシュは、もちろんより細かな『操作』の練習だ」

了解した、という顔で頷く才人とギーシュ。

「うむ。それで、最後にモンモランシーなのだが……おぬしには、この『畑』全体の監督を行ってもらいたいのだ」

「監督、っていうのは？」

「畑に植えるのに相応しい『薬草』の選定、そして、育て方……たとえば正しい世話のしかたや、植える場所の選定など、これらを図書館で調べた上で、全員に指示を行う仕事だ。作業の分担振り分けもな。これは、おぬしの『調合』の知識を深める上で必ず役に立つであろう」

その上で……と、太公望は続ける。

「畑で作った『薬草』を使って、傷薬を調合してもらいたいのだ。

そして、それがわしを含む全員にそれぞれ１０個ずつ行き渡ったら……」

「行き渡ったら？」

「残りの薬は、全て売り払っておぬしの小遣いにするのだ。ちなみに、買い取りは学院側が適正価格で行ってくれるので、特に商売を行う必要はない。これが学院側に提示済みで、かつおぬしに提案する『対価』だ」

ええーっ！！　と、全員が大声を上げた。

「ちょっと待って！　モンモランシーだけなんでそんな」「ひとりだけお小遣いって不公平感が」「傷薬は確かにありがたい。わたしは歓迎する」「あー、俺も薬があると助かるな」「ぼくも、訓練で使えるなら身体が鍛えられるしいいと思うよ」

当然のごとく一部から沸き上がった不満の声を、まあまあ……となだめることによって静めた太公望は、改めてこれに関する説明を追加しはじめる。

「不満はもっともであろう。だがな……わしが何故『傷薬』を指定しているのか、それを聞いたらちょっと意見が変わると思うぞ？」

「どういうことだよ？」

才人の言葉に、太公望がニヤリ……と笑ってこう答えた。

「ククク……もうすぐ夏休みだ。この機会に『胸躍る冒険』をしたくないか？」

『胸躍る冒険』。その言葉に、ピクリと反応したのは才人とギーシュ。

「しかも……困っている領民を助け、彼らに感謝されてしまうようなものを」

これにピククッ！　と反応したのはルイズ。

「さらにだ……喜ばれた上に、多額の懸賞金までもらえてしまう」

懸賞金という言葉に大きく目を見開いたのはキュルケ、モンモランシー、そして訳ありのタバサの3人だった。

「おまけに！　そこには、このわしが自ら厳選した情報によって！　いくつかの＜マジック・アイテム＞が確実に眠っていることが明らかとなっている！！」

……全員が静まり返った。

「領民を苦しめる妖魔……と、いっても今回はみな初陣なのでそれほど強くないものを選んであるが……それらを『訓練の成果』をもって倒し、さらに＜マジック・アイテム＞を手に入れ、懸賞金までいただいた上に、ひとびとから感謝の言葉を受ける。どうだ？　わくわくしてこんか！？　これが、畑完成後のわしからの褒美だ！！」

――そして、一瞬の間をあけて。生徒たちの間から大歓声が上がった。

「ちなみにだ……わしは、そこに安置された、とある＜マジック・アイテム＞のみ入手できれば、その他についての分け前は必要ない。懸賞金もな。ああ、ちなみにその懸賞金は総額５０００エキューだ。そこから経費を差し引いたものを、参加者全員で山分けだからの」

この太公望の言葉で、再び歓声が上がる。

「ご、５０００エキュー!?　ちょっとしたお屋敷が買える値段じゃないのよ!」「げ、マジかよそれ!」「そんな大金がもらえるのかい!?」「山分けでも、それだけあれば新作の服が、あれも、これも……」「あたしも、新しい秘薬が買えるわ……」「それは助かる」

口々に、冒険終了後の展望を語り合う子供たち。

「そうそう、わしの＜術＞をつかうことによって、まいた種をすぐに芽吹かせることが可能だ。よって、選んだ薬草によっては、夏休み前に全て収穫できるであろう」

「そんなことまでできるの!?」「東方のメイジってすごいのね……」

もちろん内緒だからな!?　太公望はそう言い置いて、さらに言葉を続ける。

「でだ。薬草収穫後は畑が空くわけだが。そのあとは監督のモンモランシーが好きなものを植えてよい。そして、収穫したものを使って調合したものを売るなりなんなりして、その成果を全員に分配する。うまくやれば、安定した収入源となるであろう」

訓練になる上に、みんなが得をする。もう、誰も文句を言う者はいなかった。

「なお、この畑の運営については、わしは一切口を出さない。当然ながら出た利益もわけてもらわなくて構わない。よって、最初に指定したやりかた以外で、もっと効率のよい運営法や、植えるものに関する選定を、全員で知恵を出し合って考えるのだ。これが『応用訓練』と言った理由である」

……と。ここで、才人が手を挙げた。

「質問があるんだけど。そこって、結構広いのか？　畑は何面くらい作れる？」

その質問に、ふむ……と、手を顎にやって考え込む太公望。

「そうだな。一般的サイズの畑ならば3面……いや4面いけるかもしれぬのう」

その答えに、才人は満面の笑みを浮かべた。

「だったら、薬草だけじゃなくて他にもいろいろできるんじゃないか？」

「ああ、それもそうね」

「途中で畑を休ませることもできるし」

この才人の言葉に、ビクンと反応したのは太公望。その他のメンバーの中で、ああなるほど……という反応をしているのはルイズ、

タバサ、モンモランシー。ギーシュとキュルケのふたりはぽかんとしていた。

「休ませる、ってどういうことなのかしら？」

キュルケの質問に、サイトが反応した。

「ああ。え……っと、なんていったらいいかな……」

頭を掻きながら、考えをまとめる才人。少し間を置いて……いい例えがみつかったのか、身振り手振りで話しはじめる。

「土の中には、魔法で例えると＜作物を育てる魔力＞みたいなものがあるんだ」

「ふんふん……」

「でな、その＜魔力＞のおかげで、野菜とか畑の作物は育つんだよ。けど、同じ場所でずっと芋とか作り続けてると、だんだんその＜魔力＞がなくなっていくんだ」

その説明に、補足を入れたのがタバサだ。

「わたしたちの＜精神力＞回復と同じで、たまに休ませてあげないといけない」

そこへ、さらに説明をくわえたのがルイズとモンモランシーだ。

「タバサの言うとおりよ。そうじゃないと、土地がどんどん疲れていって、しまいにはなんにも生えない場所になってしまうわ」

「だから、サイトは全部で4面の畑を作って、そのうち3つに薬草を植えて、1つは何も植えずに交代で休ませたほうがいい、って言っているのよ」

ほぅ……と、感心するキュルケとギーシュ。さすがは本の虫タバサ、座学トップのルイズ、薬調合の名人モンモランシー。ただ、何故か太公望はひとり眉根を寄せていた。そんな中、どうにもその説明に納得のいっていない人物がいた。キュルケである。

「でも……それなら森とかの木や草は、どうして枯れないの？」

彼女の質問はもっともである。ここで、タバサ、ルイズ、モンモランシーが脱落した。だが……才人はそれに関する解答もちゃんと持っていた。

「森とかには＜育てるための魔力＞を回復する仕組みがあるんだ」

……と、ここで太公望が口を挟んだ。

「それはひょっとして『食物連鎖』のことを言っておるのかの？」

「さすが閣下！　そういや『自然科学』勉強してたって言ってたもんな」

「閣下って何かしら？」

意味がわからない、という顔をしているモンモランシーはとりあえず無視し、ギロリと才人を睨み付けた太公望。さすがの才人も、その表情を見て口元が引きつった。ついクセで……と、片手で拝む

ようなポーズで謝罪する。

「まったく……ああ、すまん。モンモランシーにはとりあえずあとでちゃんと説明するから、才人はこのまま先を続けてくれ」

俺よりタイコーボーが説明したほうがいいんじゃないかな……と、思いつつも才人はできるだけかみ砕いて説明した。『食物連鎖』について。

木が落とした枯れ葉が腐って土となり＜魔力＞に変わる。そして草を食べた虫がフンを落とし、それが肥やし……つまりこれも＜育てるための魔力＞になる。さらにその虫を食べた鳥が落としたフンも同様なのだと。

そして今度はその鳥を食べたより強い動物が、フンを落としたり、何らかの理由で死ぬと、その死骸が腐っていつしか土に還り、これも土に宿る＜魔力＞に変わる。この＜魔力＞が新しい草や木を育て、また葉を落とし、虫に食べられ、それが再び鳥に狙われる……世界には、こういった『循環』があるから病気にでもならない限り森が枯れたりはしない。でも畑にはそれがないから、土地の＜魔力＞が枯れてしまうのだ……と。

「ロバ・アル・カリイエって本当にいろんな研究が進んでるのね……」

才人の言葉と、それを明らかに知っていたとみられる太公望の反応を見たその他全員が感心している。特にモンモランシーは、授業初参加だけあって驚きもひとしおだ。

「とりあえず＜育てる魔力＞についてはそれはいいよな。ところ

で……」

説明を終えた才人は、今度はモンモランシーに言を向けた。

「モンモンって二つ名が確か『香水』だよな？　ひとつの畑は、花畑にするとかどうだ？　香草もありだな！　んで、それで香水作って学院の女の子たちに売るんだ。わざわざ材料買いに行かなくても済むぜ」

「すっごくいいわそれ！　採用！！」

「でさ、肥料用に厨房から、いつも捨てられてるだけの残飯をタダで引き取ってきて、少し腐らせてから畑にまけば、金かかんない上に、植えたものの育ちもよくなると思うんだけど……畑休ませる期間も大幅に減らせるし。どう思う？」

「素晴らしいわ！　うまく調整してあげれば、収穫も早まるでしょうし」

「……まてまてまて」

盛り上がりまくるふたりを制止したのは、太公望であった。

「のう才人よ……おぬしは何故『農業』や『自然科学』に関して、そこまで詳しいのだ？　まさかそれも『高校』とやらで習うのか！？」

「いや、『食物連鎖』は母さんに教わったんだけど……子供の頃に」

ついにはフリーズしてしまった太公望。母親から、子供のころに『食物連鎖』を教わる……!?　どういう家庭に育ったのだ、こやつは……！

――日本のどこにでもいる、単なるちょっと教育熱心なお母さん。本当にそれだけなのだが、さすがにそんなことまでは太公望にはわからない。

そして。しばらくの後ようやく硬直から解けた太公望は、改めて質問を再開した。

「才人よ……もしやとは思うのだが、おぬしの母上は、実は国でも有名な植物……あるいは農業関係の学者だったりするのか？」

「いや、ごく一般的な母親だと……って、いや、普通じゃないかも。いきなり『頭が良くなる機械』なんておかしな物持ってきて『お前はヌケてんだからこれで頭を良くしてあげる！』とか言って電撃流されたことあるし」

その言葉に、太公望はついに頭を抱え……がっくりと膝をついてしまった。なんだなんだと騒ぎ出す生徒、そして「俺、なんかおかしなこと言ったか？」という風情でぽかんとしている才人。

いったいなんなのだこやつの国……いや、母親は！　頭がよくなる機械に、電撃だと!?　もしや、わしの腕にいつのまにかマジックハンドなんぞを仕込みおったイロモノ3人衆の如きマッドな学者だとでもいうのか！　ようやくわかった。それならば、才人のあの奇抜な閃きも『血筋』と『教育』ゆえのものだと納得できる……！

……太公望の個人評価を、おかしな方向に軌道修正されてしまっ

た才人であった。

ちなみに、この『頭がよくなる機械』は、彼の母親が怪しげな通販で購入したシロモノである。『電撃』に関しては、その装置がショートした為に起こった現象だ。ある意味『この親にしてこの子あり』を実証した例の1つといえよう。

――その後。せっかくだからマンドラゴラ（地面から引き抜くときに、魂が凍り付くような絶叫をあげる魔法植物。その声を聞いた者は絶命する。故に収穫が難しく超高価）とか育てたいわ！　などど物騒なことを言い出したモンモランシーと、それを必死で止めようとするギーシュ。

逆に賛成側に周り、収穫時に畑の周りに＜サイレント＞をかけて、外から＜念力＞を使えば、呪いの叫びを聞かずに済むのでは？　などといったアイディアを出したタバサに「その発想はなかったわ」と、目をキラキラさせて賛同するキュルケとルイズ。

そんな感じで全員が知恵を出し合い続けた結果、しまいには揃って図書館まで移動して、調べ物を始めるほどの盛り上がりを見せることとなり……そして。

最終的に、とんでもなくカオスな『畑』完成予定図ができあがったのは、既に日がとっぷりと暮れた頃であった――。

「わし……ひょっとして、とんでもない提案をしてしまったのではなかろうか」

……珍しく、とてつもない敗北感で胸がいっぱいになった太公望であった。

ちなみに、この図書館での話し合いの最中に才人が『ハルケギニアの文字が読めない』ことが判明し、主人であるルイズが自ら、彼に文字を教えることとなった。

○●○●○●○●

――いっぽうそのころ。ルイズの実家ラ・ヴァリエールの領地にて。

「まもなく、魔法学院が夏休みに入りますわ。あなた、例の件について、こちらの用意は調いました。そろそろ『使い』を出したいと考えているのですけれど、そちらの準備はいかがかしら？」

「あなた」と呼ばれた男――白くなりはじめたブロンドの髪と、立派な口髭をたくわえた人物。ルイズの父親にしてラ・ヴァリエール公爵は、目の前に立つ己の妻に向かって頷くと、用意していた手紙を手渡した。

「今月末……たしか、ダエグの曜日を最後に、学院は休みに入るのだったな。いまのうちに『使者』を――それも、絶対相手に失礼にあたらない者へ、その手紙と共に伝言を託そうと思うのだが、おまえはどう思うね、カリーヌ？」

カリーヌと呼ばれた――４０歳をやや過ぎたくらいに見える、目つきの鋭いその女性は……ふっとその瞳の色を和らげ、ヴァリエール公爵……つまり自分の夫に答えた。

「そのことですが、エレオノールに任せようと思うのですが。ル

イズには、その前に伝書フクロウを送っておきますわ」

「そうか、さすがはカリーヌ。それなら問題なかろう。では、よろしく頼む」

平和な学院に、突如として巨大な嵐の前触れが訪れようとしていた――。

第４５話　軍師、農耕を奨めるの事（後書き）

さあ、よりにもよってこの大切な時期に空気読めないひとが割り込んできました！　果たして巻き込まれる者たちの運命やいかに！

あと才人ですが。さすがにこの程度の知識は出てきます。それと…自分で書いておいてなんだけど、香草（ハーブ）は危険だ！　罠だ！　それはやめろーｗ　あれははびこると大変なことになったりするんだーｗｗ

２０１１／０５／０７　１８：００　誤字・脱字・表記ミスの修正、イロモノ三人衆がイマイチわかりにくいというご指摘があったため、具体的に太公望が受けた被害を記載（あと他にもいろいろやられてますが、指先から水が出るとか。そのあたりまで書くとくどいので１文のみで！）

２０１１／０５／０８　カレンダー作り直したら、日付ミスに気がついた！　夏休み開始が一週間ズレちゃった！　たいへんだ！！　よって来月から夏期休暇に入るよう修正。

第４６話　継がれし血脈と炎の前夜祭

――時は、ちょうどひと月ほど遡る。その日の朝方。

ゲルマニアとの国境に位置する、広大な領地を持つラ・ヴァリエール家の書斎。その奥から、そこの主たる者の渋みがかったバリトンが響き渡った。

「カリーヌ！　カリーヌよ！！」

「まあ、いったいなにごとですか！？　公爵ともあろうお方が、そのような大声を出すなどとは。わたくしに用があるのならば、使用人を呼べばよいではありませんか」

カリーヌと呼ばれた熟年の女性は、その鋭い目に炯々とした光を湛え、公爵――己の夫へ抗議した……だが。彼の顔に浮かんだ、抑えようにも抑えきれないといった風情の笑みを見てしまっては、これ以上口を挟むわけにはいかなくなってしまった。

「ルイズだ。ルイズからな、今しがた手紙が届いたのだよ！」

……確かにあの子から手紙が届くなど、実に半年ぶりではあるのだけれど。そこまで大げさに騒ぐほどのことであろうか。子は、いつしか親元から離れてゆくもの。あの子にも、その自覚が芽生えてきているのだと、カリーヌはむしろ喜んでいたくらいなのだ。

と……ヴァリエール公爵は、妻に『それ』を差し出した。

「読んでみるがいい、カリーヌ！」

言われるまま、差し出された『手紙』に目を通すカリーヌ。すると……いつしかその瞳に宿した光が、やわらかいものへと変化した。それを見た彼女の夫は、妻の手を取り、自分の胸元へと引き寄せると……その身体を強く抱き締めた。

「かつて『烈風』と呼ばれた君の血を、最も濃く受け継いでいたのは、あの子だったのだ！　いや、まさか……『才能』がありすぎて、普通のやりかたでは＜魔法＞が使えなかったなどとは思いもよらなかったぞ！　しかも、目覚めたのは＜風系統＞。素晴らしい報せではないか！　なあ、カリーヌ。わたしの愛しいカリン！！」

夫の熱い抱擁に身をゆだねていたカリーヌ、別名カリン――かつて『伝説』とまで謳われたハルケギニア最強の＜風＞の使い手にして『烈風』の二つ名を持つ者。王の側近くに仕える魔法衛士隊がひとつ、マンティコア隊の『鋼鉄の規律』にして元隊長。女人禁制とされていたその衛士隊の隊長は、そのあまりの美しさが故に、もしや男装の麗人なのでは、とも噂されていた。

そう。実は……その噂は真実であったのだ。若かった頃のカリーヌは『騎士』に憧れ己の名を『カリン』と偽り、男として魔法衛士隊の見習いとなった。その後、すぐに頭角を現し、トリスタニア中央の広場で、大勢の観衆が見守る中。なんと、当時の国王自ら『騎士（シュヴァリエ）』に任じたほどの活躍を見せた。

だが、彼女は――いま、自分を掻き抱いている男――愛する夫との結婚を境に、魔法衛士隊を引退。最後までその正体を明かすことなく、現在に至る。その事情を知る者は、家族と当時の友人たち、そして今も王宮に残る……わずかな者のみとなっていた。

「それにしても……わざわざ東方、ロバ・アル・カリイエからルイズのために優秀な＜風＞メイジを招いてくれるとは……あの子は、本当に良い友達を持ちましたね」

気丈な彼女にしては珍しく、少し震えた声で夫の抱擁に応える。その目には、うっすらと光るものが浮かび上がっていた。

「まったくだ。あの子は……ルイズは本当に幸せ者だ。そして、わが娘を目覚めさせてくださったというメイジ殿や学院の先生方に、我々はどのようにして報いればよいのだろうか」

やや名残惜しそうに、ゆっくりと愛する妻の身体から離れながら、ヴァリエール公爵は唸った。今すぐにでも使者をやり、我が家で歓待したいところだが……相手にも都合というものがある。そのようなことをしては、かえって失礼にあたるというものだ。

「そうですわね、あなた。来月、魔法学院は夏休みに入ります。その際に……わが娘の成功を、わざわざ宴を開いてまで祝ってくださったという皆様、そして東方の＜風＞メイジ殿と友人……いえ、我が家の恩人たるお二方を、揃って我が家へお招きし、歓待する……というのはいかがかしら？」

妻の素晴らしい提案に破顔した公爵は、再び彼女を抱き締める。

「素晴らしいよ、カリーヌ。では、そのように手配をしよう。だが、その前に」

「ええ、あなた。わたくしも賛成です」

頷いて、夫人は答えた。そんな彼女を心から愛おしそうな目で見

つめたヴァリエール公爵は、同じく頷き、ベルを鳴らして家令を呼び出した。そして、すぐさま現れた老齢の男に申し渡す。

「今宵は、家族で盛大な祝いの宴を催す。もちろん、このわしも参加する。ワイン蔵の奥に寝かせてある、最高級のタルブ１６年ものをそこで１本開けたい。急いで準備に取りかかってくれ」

タルブの１６年もの。トリステイン王国いちばんのワイン産地タルブの最高級品。それは、愛娘ルイズが生まれた年に買い求めた３本のうちの１本だ。残る２本のうち１本は娘が嫁ぐ際に嫁入り道具のひとつとして持たせ、もう一本は、その結婚式の夜に、夫婦揃って飲もうと決めていた。

「かしこまりました、旦那様」

恭しく一礼した彼は、落ち着いた足取りで廊下へと姿を消した。

「早速、ルイズに宛てて返事を書かねばならん。今日の執務は全て後回しとする」

「まあ、あなたったら！　『鋼鉄の規律』としては、そのような無法を許すわけには参りませんことよ」

「ふふふ、厳しいな！　わたしのカリンは」

「あなたこそ、娘に甘すぎですわ」

ふたりはひとしきり笑った後、愛しい娘に宛てた手紙を書くための時間を捻出すべく、全力でもってその日の仕事に取りかかった。

そして翌日――ルイズの元に、父、母、そしてふたりの姉たちから祝福の言葉と共に、夏休みになったらお世話になった皆様を連れて帰省するように、との旨がしたためられた手紙が戻ってきた。期日が近付いたら、改めてこちらから使者を出すから……と。

だがしかし。ルイズは、その言葉を伝えることをすっかり忘れてしまっていた――そう、その日。はじめて箒に乗り、空を飛べるようになったことで有頂天になっていたルイズは――祝いの言葉以外の文面を、聡明な彼女としては珍しく――右から左へと受け流してしまっていたのだ。

○●○●○●○●

――そして、1ヶ月後。

一台の馬車が、ゴトゴトと整備の甘い山道を、一路トリステイン魔法学院へと向けて移動していた。その車体に刻まれたるは、ヴァリエール公爵家の紋章。

馬車に揺られていたのは、美しく輝くブロンドの髪に、見る者全てに知的な印象を与える眼鏡をかけた若い女性。彼女の名はエレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。ルイズの姉にあたる人物である。

「魔法学院まで、あと2日……と、いったところかしら。まったく……」

アカデミーの研究が大詰めで忙しいわたくしを、わざわざトリスタニアから呼び寄せたと思ったら、魔法学院への使者に立て、とは

あんまりなのではないか。

トリステイン貴族としての格式を重んじるというのならば、当然の如く手元に相応の支度ができるだけの用意がしてあったのだ。よって、手紙と馬車だけ寄越してくれればいい。にもかかわらず、わざわざ自分を一度屋敷に戻したのは――。

「まったく、お父様ときたら……おちびには本当に甘いんだから！　厳しいふりをしていたところで、このわたくしには全てお見通しなのよ！」

ぷりぷりと、その美しい頬を膨らませて呟くその姿は、まるでルイズの気の強さを煮詰めて固め、そのまま成長させたようである。

「だいたい、東方のメイジなんて。そのような、どこの馬の骨かもわからないような相手に、わざわざこの大貴族の娘たるわたくしが礼を尽くすなど……！」

ぎゅっと握った拳を、膝元に乗せて、エレオノールは口惜しげに呟いた。

「もちろん、ルイズを＜系統＞に目覚めさせてくれたことには感謝しているわ。だからといって、ここまでする必要があるのかしら」

……ここで、念のため彼女の擁護をしておこう。現在、彼女はまさに不幸のどん底にいたといっても過言ではなかった。もしも普段の――不運の深淵に沈み込んでいないときのエレオノールであれば、可愛い妹の恩人たる相手に対し、ここまで露骨な嫌悪を抱くようなことは間違ってもなかったであろう。

実際、ルイズが＜魔法＞の行使に成功したという報せを受けたときの彼女は、我がことのように喜んだのだ。そして、そのきっかけとなった＜風＞のメイジに心からの感謝と……ほんの少しだけ、嫉妬を覚えていたほどなのだ。

伝統ある、トリステイン国立アカデミーの主席研究員たる自分にすら原因のわからなかったおちび――彼女は、ふたりいる妹のうち、より年下のルイズをこう呼んでいる――の『失敗』の原因を、ほんの少し見ただけで解き明かし、さらには＜風系統＞に目覚めさせたという人物。機会があれば、一度ゆっくりと語り合ってみたいとすら考えていた。

――ところが、そんなときだった。彼女の身に……いや、その周辺に、突如大きな異変が巻き起こったのは。

「もう限界」

そのひとことだけを告げ、彼女の婚約者たるバーガンディ伯爵が、突如自分との関係を白紙に戻すと言い出し――理由もわからぬまま、エレオノールは婚約を破棄されてしまったのだ。

よって、彼女の機嫌は現在……最悪の最悪の最悪。最悪の底を突き破ってなお突き進むほどに悪化し続けていたのだ。

『今現在、不幸をその背に負う者は、その言動にくれぐれも気をつけよ。なんとなれば、それはさらなる不運をその肩に乗せる理由となりえるからだ』

誰が残したのかもわからぬその言葉。これは、まさしく彼女に対する警告たりえる言葉であろう。だが、やはり不運であった彼女に、

それは届かなかった――。

○●○●○●○●

――同日午後。

魔法学院のとある教室では、その教壇に『炎蛇』のコルベールが上がっていた。彼は学問を愛していた。そして、生徒たちに授業を行うのが大好きだった。何故なら、そこは自分の愛する学問、そして『研究成果』を披露できる舞台でもあったから。

今日の彼は、教室に現れた途端、授業開始の挨拶もそこそこに満面の笑みを浮かべ――でんっ！　と、教壇の上におかしなものを乗せた。

「それはなんですか？　ミスタ・コルベール」

生徒のひとりが質問した。

それも当然である。そこに置かれた物体は、謎に満ちあふれたものであったからだ。長い、円筒状の金属の筒に、これまた金属のパイプが伸びている。それはふいごのような物体に繋がっており、円筒の頂上にはクランクがついていた。クランクは、円筒の脇にある車輪に繋がっていた。

そして、さらに。その車輪は、扉のついた箱に、歯車を介してくっついている。

「えー、誰かこのわたしに＜火系統＞の特徴を開帳してくれない

かね？」

すると。『微熱』の二つ名を持つ＜火＞の『トライアンングル』メイジであるキュルケが、立ち上がりすらせず、何故か気怠げな口調でこう答えた。

「情熱と破壊。それこそが＜火＞の本領ですわ」

「そうとも！」

『炎蛇』の二つ名を持つコルベール自身、優秀な＜火系統＞のメイジである。にっこりと笑って、その答えを受け入れた。

「だがしかし……『情熱』はともかく＜火＞が司るものが『破壊』だけでは寂しい。わたしはそう考えます。＜火＞は……」

と、そこまで言葉を紡いだコルベールは、ふとキュルケのすぐ側――正確には常に彼女の隣に座っている、タバサの横の席に着いている太公望に視線を移した。

そういえば、以前同僚にして後輩である『疾風』のギトーが、面白いことを話してくれた。あの青年――いや、既に27歳。中年手前といって差し支えないであろう彼が＜風系統＞をして『知恵ある者の象徴』と断じたのだ――と。

コルベールは、太公望の見識の深さをよく知っていた。だから訊ねたくなった。そんな彼は＜火系統＞に対して、どのような意見を持っているのだろうか。

「そうですね、ミスタ・タイコーボー。あなたは本来＜風系統＞

のメイジですが＜火系統＞についても、非常に優秀な＜使い手＞であると学院長から伺っています」

そのコルベールの言葉に、教室中がざわついた。いっぽうの太公望はというと「あのクソ狸……まだ引きずっとったんかい……」と、内心で強烈なまでの呪詛を込めた恨み言を放っていた。

ハッキリ言おう。引きずっていたのはコルベールであって、学院長は悪くない……この場において、という意味では……だが。

「ミスタ・タイコーボー！　君は＜火＞も扱えたのかい！？」

教室の各所から、驚いたように質問が飛んできた。そして太公望が、ふう……と、ため息をつき、まあの。と答えると、室内はさらに湧いた。

キュルケは驚いた。まさか＜風＞を至上としている（と、彼女は思い込んでいる）彼が、実は＜火＞まで操れたとは。確かに、フーケ捕獲作戦のときに学院長がそんなような話をしていた覚えはあったのだけれど……。

その学院長自らが、わざわざ『優秀』と言うからには、最低でも『トライアングル』に相当する実力があるのだろう。いや、もしかするとそれ以上に――！？

くっ……どうしてあなたは、あたしの＜召喚＞に応えてくれなかったの……キュルケは、思わず手元のポーチから取り出した未使用のハンカチーフを、ギリギリと噛み締めながら呻いた。

「コルベール先生、少し長くなっても――？」

「もちろん構いません。是非、君の意見が聞きたい」

「わかりました。それでは――」

例の『風最高』事件で放った彼の発言は、実に面白かった。もっとも、生徒たちにとって本当に楽しかったのはその後の展開だったのだが、それ故に教室の注目が一斉に太公望に集まった。あのおかしな物体も気になるが、まずはコイツの話を聞いてみよう――と。

注目を集めていた太公望のほうはというと、顎に手を当て、なにやら考え込んだような様子を見せたあと、ぽつりと言った。

「わしは、こう思うのです。人類ではじめて＜火＞で『肉』を焼き、さらにそれを『食べた』人物は――『神』として崇められてしかるべき存在なのではないだろうか、と」

なんかまた変なこと言い始めたよこの男は！　生徒達の心は、その瞬間ひとつとなった。だが……コルベールだけは、その目を輝かせて彼の発言に聞き入っている。

「そもそもだ……『火』の側にいけば暖かい。そして、触れたら痛い目を見る。ここまではわかるのだよ……だが、そこでどうしてそんなものの中に、彼――もしやすると彼女かもしれんが――大切な食料である『肉』を入れようと考えたのだろう？」

太公望は語る。まだ＜魔法＞も、いや、狩りのための道具すらろくなものがなかった時代――肉を取るために、人間はどれだけ苦労したのであろう。そんな当時に、どうしてそのような考えに至ったのであろう――と。

「狩りの途中で、寒くなってたき火にあたってたら、偶然そこに肉が転げ落ちたとか……案外そういうオチかもしれないぞ？」

そう呟いた才人の声に、そうかもな。と、答えた太公望は、さらに続けた。

「だが……何故それを『食べよう』としたのか。まあ、単にもったいないと思った結果、口にしてみた。そうしたら思いのほか美味かった。それだけなのかもしれんがの」

そう言って、周囲を見回した太公望は、自分の意見を押し出した。

「でもな。その人物は、もしやすると集団は――その『発見』を自分たちだけで独占しなかった。結果『火に肉を入れて食べると美味い』『食べても腹をこわさない』『そうすれば死ににくくなる』事実が、世界中に広まった。この功績で、どれほどの人間が救われただろう？　そして、その偉大な『発見』は、文字通り『世界を変えた』のだ。これを見つけた者を『神』と呼ばずして、なんとする」

コルベールは、震えていた。そうだ、彼が聞きたかったのはまさしくこういうことであったのだ。常日頃から『破壊だけに火を用いるのは寂しい』そう思っていたから。

「そして＜火＞は、人間にさらなる繁栄をもたらした。水を汲んだ器を＜火＞にくべ、湯をわかす者が現れた。森の木を切る代わりに＜火＞を用いて『焼く』ことで、切り倒すよりも遙かに簡単に、そこをひとが住まう場所――平地に変え……結果、その土地で産み育てられる子供の数が増えた。そうして人間はさらに増えていった」

身振り手振りを交えながら、持論を展開していく太公望。＜風＞のときとは違って、ちょっと哲学的だよな……などと思いながら、才人はその言葉に耳を傾けていた。

「もちろん＜火＞は、破壊をも司る。戦で使われれば、それは簡単に人間を焼き殺す、怖ろしい武器となる。だが……これまで語った通り＜使い手＞次第で、人間を大きく『繁栄』させることも可能な……文字通り『世界を変える＜力＞』なのだ」

――世界を変える＜力＞。それはなんと素晴らしく、怖ろしいものであるか。

「以前、わしが＜風系統＞をして『知恵ある者の象徴』と例えたことを覚えている者もいると思う。今回は、同じように＜火系統＞がいかなる者の象徴であるのか、わしなりの意見を述べさせていただきたいのですが、コルベール先生……よろしいでしょうか？」

コルベールは、大きく頷いた……何度も。それを見た太公望は、結論した。

「＜火系統＞のメイジとは『自ら道を切り開く者』。使い方次第で、周りを暖かな光で満たすことも、破壊の権化として君臨することも可能。よって『使い道』を、自分自身で……常に選び、そして己の判断のみで『道』を切り開いていかねばならない……その大きな＜力＞故に、振り回されたが最後、それは破滅の『道』へしか繋がらないからだ」

誰かが、ごくりとつばを飲み込む音が……やけに大きく室内に響き渡った。

「故に＜火系統＞の者は、心せねばならぬ。その＜力＞は、自分のみならず周りをも巻き込む。幸せな旅路にも、絶望の底へも、一緒に……だ。以上が、わしの個人的な＜火＞に対する見解である。長々と失礼した」

パチ、パチ……と、拍手の音が聞こえた。コルベールであった。そして、それを契機に教室の各所から同意するかの如く拍手がわき起こった。そして一礼した太公望は、再び席に着いた。

――そして、場が落ち着きを取り戻した頃。コルベールは授業を再開した。

「いやはや……あのような話を聞いたあとに、これを出していいのか正直迷いましたが……まだまだ時間がありますので、改めて公開しましょう」

そうだ。さっきの話にも興味があったけど、今はあのおかしな物がなんなのか、そっちのほうが気になる。いっきに生徒たちの感心が、教壇の上へと移動した。

「コルベール先生、それはいったいなんですかの？」

質問を投げてきたのは、先程の話の主、太公望だった。彼は、これを見たらなんと言ってくれるだろう。コルベールは、なんだかそれがとても楽しみになった。

「うふ、うふふ。よくぞ聞いてくれました！　これは私が発明した……油と＜火＞の魔法を使って、動力を得る装置なのですぞ」

そのコルベールの言葉に、大きく目を見開いた太公望。そして、

なんだかそれに見覚えがあるような気がして、注目した才人。

そして、彼らは見た。その『装置』を。彼が何の知識もなく、地力で考え出した――その『奇跡の象徴』を。

『ふいご』によって気化された油が、円筒状の筒の中へと放り込まれた。

コルベールが唱えた小さな＜火＞の魔法が、断続的な発火音を生み出し、そしてそれは、気化した油へと燃え移り、そして爆発音に変わった。

「ほら、見てごらんなさい！　この円筒の中では、なんと気化した油が爆発する＜力＞で上下にピストンが動いているのですぞ！」

興奮したようにまくしたてるコルベールとは対照的に、生徒達の感心は冷めていった。だから、それがいったいどうしたのだ？　動かすだけなら、全部＜魔法＞でやればいいじゃないか――と。

だが、そんな中で。たったふたりだけ……食い入るようにその装置を見続けている者たちがいた。太公望と才人である。

太公望は、思わずつばをゴクリと飲み込んだ。まさかとは思ったが――！

そんな彼らの様子に気付くことなく、コルベールの独演は続いた。円筒の上にくっついていたクランクが動き出し、車輪を回転させた。回転した車輪は箱についた扉を開き……それはギアを介して、中からぴょこぴょことヘビの人形が、顔を出したり引っ込めたりしている。

「や、やはり……！」「あ、もしかしてタイコーボーも気がついた、よな？」

ふたりは顔を見合わせ、頷き合う。そして大声で叫んだ。

「内燃機関だ！！」「エンジンだ！！」

そして、ふたりはドタドタと足音を響かせながら、教壇前まで走り寄る。

「ゼロからこれを生み出されたのですか！？　コルベール殿！！」

「すっげえ！　コルベール先生はやっぱり『天才』だよ！！」

「才人のいう通りだ！　この発想力、そして応用力……正真正銘の『天才』だ」

取り残された生徒たちは、興奮してまくし立てるふたりを、ただぽかんとして眺めていた。いまいちよくわからないが、あのふたり……とくに、ミスタ・タイコーボーがあそこまで褒めているんだから、ひょっとしてアレはスゴイものなのかもしれない……と。

コルベールは感動していた。ロバ・アル・カリイエから来たふたり。かたや柔軟な発想で＜魔法＞の常識を覆す使い方を提案してくる少年。かたや、先程まで『持論の行き着く先』とも言える論説を聞かせてくれた、東方の元・元帥にして、王の相談役まで務めたほどの知恵者。

そんなふたりが、目を輝かせて自分の発明を見てくれている。し

かも、こんなに興奮しながら褒め称えてくれるだなんて。コルベールは、なんだか胸の奥底に暖かな火が灯った……そんな気がした。だが、事態はそれに留まらなかったのである。

「なんと素晴らしい……コルベール殿。さっきわしが言った言葉を覚えておられますか？　『火は世界を変える＜力＞』だと」

「え、ええ、もちろんですぞ」

戸惑うように口を開いたコルベールに、追撃をかけたのは才人だった。

「先生！　この発明は……本当に『世界を変える＜力＞』だ！　しかも『人類を繁栄させるもの』なんだよ！！」

――今は授業中ゆえ、のちほどお時間があるときに、改めて先生のお話を伺いたい。太公望はそう言い置いて、興奮する才人と共に席へ戻っていった。そんな彼らをぼんやりと見送ったコルベールの頭の中で、さきほどの太公望と、才人の言葉が繰り返し再生され続けていた。

「これは『世界を変える＜力＞』だ。『人類を繁栄させるもの』なんだよ！」

――この罪深き私の＜火＞が、世界を変え、人類を繁栄させる――！？

そののち、コルベールはどうやって授業を終え、いつのまに自室まで戻ったのか、一切覚えていなかった――。

○●○●○●○●

――その夜。キュルケは、今夜もひとりで飲んだくれていた。

「はあ……アンニュイな気分だわ……トリステインの国立魔法学院で、アンニュイな学院生活。略して国立アンニュイ学院！　なーんてね……うふふ」

もうだめだ。完全に出来上がってしまっている。

「本当に……どうしてあたしの＜召喚＞で、彼が来てくれなかったのよ」

まさか＜風＞＜火＞系統のメイジだとは思わなかった。炎を使った占いの噂は聞いていたけれど、まさかそこまでの＜使い手＞だったなんて……！！

ぐったりとテーブルに身体を預けながら、キュルケは杯をあおる。すると……隣の部屋から、何やら妙な声が聞こえてきた。

（馬鹿……力入れすぎだろ。それじゃ入らないって）

キュルケの酔いが、この瞬間一気に冷めた。この声は……もうひとりの＜大当たりの使い魔＞。サイトのものだ！！

（ち、ちがうわ……もう少し……そう……上に）

そして、次に聞こえてきたのはルイズの声だ。これはまさか……！！

（馬鹿、声が大きいぞ。隣に聞こえちまうぜ）

（そ、そんなこと……言われたって……）

これは……間違いない。今度こそ……『アレ』だ。葛藤のあまりブレイク寸前なあたしの心臓（ハート）を癒やすため、彼らには生け贄になってもらおう。

キュルケは急いで部屋の外へ出て、隣――ルイズの部屋の鍵に（毎度おなじみ校則違反の）＜アンロック＞を唱えると、彼らの『現場』へと勢いよく飛び込んでいった。

――すると、そこには。

「もうちょっとでうまくいきそうな気がするんだけど……」

「やっぱり、イメージが難しいのかなあ」

などと言いながら、床一面に広がった紙――なにやら図形のようなものが書き込まれたそれ――を見ながら、うんうんと唸っているルイズと才人のふたりがいた。

そして、ふたりは同時に扉のほうへ振り返った。

「ちょっと、ツェルプストー！　＜アンロック＞は校則違反だって……」

「いや、だからお前の声がでかすぎだったんだって！」

「う……ご、ごめんなさい。ちょ、ちょっと騒ぎすぎちゃった、かも」

そして、揃ってぴょこっと頭を下げたふたりを見て、キュルケの『心』は文字通り砕け散った。あの子たちといい、こっちの連中といい……！！

「あ、あんたたちなんか……」

ぷるぷると震えながら、キュルケは叫んだ。

「爆発しちゃえばいいのよ！！！！！」

走り去っていったキュルケを呆然と見送ったふたりは、ぽつりと呟いた。

「やっぱ、夜は騒いじゃだめだよな、ウン」「そ、そうね……」

――嵐は、まだここまでは届いていなかった。

第４６話　継がれし血脈と炎の前夜祭（後書き）

さあ、やばい人々が接近しつつあります。かわいい公爵夫婦を意識してみましたが、いかがでしたでしょうか？

＜火系統＞に関する、個人的見解を述べてみました。火って偉大だよねっていう。といいますか、実際なんで火に肉を入れようと思ったんでしょう？　いつも布団の中でそういうことを考えているせいか、あっさりと眠れます。

……そして爆発しろ宣言なキュルケ。まさか「この直前に出したネタ」をやろうとした瞬間に感想がそれ系で溢れるとは……イロモノを先に出したのは失敗だったか！？　本来明日の昼ＵＰ予定だったのに、急遽徹夜で全部書き上げてしまいました……やられた……ッ！！　筆者完全敗北ッ！！

スポーツマンシップー。インターハイー。ポートボールさ……。

２０１１／０５／０８　また爵位ミスが発覚したため修正。ご指摘ありがとうございました！

ところで、へんなブログをつくりました。

★サイ・ナミカタの気まぐれ画像日記★
ｈｔｔｐ：／／ｓａｉｓｈｏｔ２０１１．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／

この物語の「詳細なタイムテーブル」をカレンダーにして貼り付けています。今日のところはあえて召喚された月のものだけですが……今後、現在までの進行をはりつけていこうかなと思います。さす

がにこれを挿絵にするわけにはいかなかったので窮余の一策……あ
あ、こうなってたのね、というのをみていただければと！

第47話　全てを防ぐ盾、そして選択の時

――時は、再び数日前まで遡る。

才人は、自分の閃きをご主人様に説明していた。

「でさ、ルイズ。こんな感じなんだけど……お前どう思う？」

「たしかに、もしもあたしに『これ』ができたら……」

ルイズは、あのときのことを思い出していた。巨大な竜巻に、剣1本。たったひとりで自分たちを救うために駆け出した才人の後ろ姿を。

もしも自分に『これ』ができていたら……あんな真似は、絶対にさせなかっただろう。そして、全員が助かったかもしれないのだ。

あのうるさい剣――デルフリンガーは、たしかに凄かった。でも、あの剣1本で立ち向かえる相手など、限られているということを思い知った。だから、ルイズは決意した。

「わかったわ。やってみる！」

「よし！　じゃあ、もっといろいろな絵を描いてみるよ。そのほうが、ルイズにもイメージしやすいだろ？」

「お願いするわ！　えーっと……忠実なるわたくしの＜使い魔＞よ」

「かしこまりました、お嬢様……このわたくしめにお任せあれ」

ルイズの『命令』にあわせて、ちょっと気取ったポーズでもって返礼する才人。ふたりは、顔を見合わせてひとしきり笑いあうと……出来る限りの紙とペンを入手するために、部屋中を奔走した。

――それから4日後。

途中でキュルケに（きっと夜に騒ぎすぎたせいで）乱入されたりしながらも、ようやくそれは『形』になった。

「いってーっ！　やっぱコレを手で殴っちゃダメだな」

「ちょっとサイト！　大丈夫!?」

右手をひらひらと、まるで水滴を払うかのようにブンブンと動かしたサイトは、大丈夫、問題ない。と、答え……改めて『成果』を報告する。

「な、なんとか。『ワルキューレ』よりずっと固いんじゃないか？　コレ」

ふたりは、ここ数日かけて行っていた『実験結果』におおむね満足していた。

「なら、コレの強度は問題ないわね。将来的にはもっと固くできると思うわ。ところで……どうしてこんな『形』にしたの？　わたしはこうしたほうが、もっと簡単に『作れた』と思うんだけど」

ルイズは、自分の『イメージ』を才人に伝えるべく、新しい紙とペンを取ると、そこにさらさらと1つの図形を書き込んだ。

「ああ、実はそれなんだがな……」「う、な、なるほど」「だろ？」「ええ。あたしひとりで練習しなくてよかったわ……」「あぶねーなオイ！　やるなら、せめて俺かタイコーボーがいる時だけにしとけよ！？」「そ、そうするわ……」

こんな風に、毎日『練習』の成果を確認しあった結果。ついに『それ』は完成した。そして『自分たちの努力の結晶を体験してもらう』ために……彼らは早速準備に取りかかった。

○●○●○●○●

――6月第4週・イングの曜日。

太公望は、いつものように訓練場所としてほぼ定着していた中庭へと向かうべく、部屋で準備を整えていた。すると、扉をコン、コンッと誰かがノックする音がした。

「む、シエスタではないか。何かわしに用があるのかの？」

扉の外に立っていたのは、メイドのシエスタだった。太公望と才人、そしてこのシエスタは、全員見事なまでにつややかな黒い髪の持ち主である。以前、ルイズが『この国で黒髪はすっごく珍しい』と言っていたが……1箇所に3人も揃っていると、正直あまり説得力がない。

「はいっ！　実は、ミス・ヴァリエールから伝言を言付かりまし

て。新作のデザートをホールでいただいたから、今日は皆さんとお茶をご一緒しませんか？　中庭の、いつもの場所でお待ちしています……とのことです」

新作のデザート！　突如太公望の表情が、キリリッ！　と、引き締まった。

「了解した、伝言感謝する……と、これはお礼だ」

そう言って、しきりに恐縮するシエスタへ銀貨を1枚握らせると、太公望はいつもの如く内側から扉に鍵を閉め、窓を開け放って外へと飛び立った。

その後まもなくして。いつもの場所に降り立った太公望は、そのまま中庭へと移動を開始する。と――その視線の先に、綺麗な彫刻が施されたテーブルと椅子――おそらくはギーシュの＜錬金＞で作られたそれ――が並べられており、そこでルイズ、才人、タバサ、キュルケ、ギーシュの5人が談笑していた。

……ちなみに、モンモランシーは図書館に籠もるから、と言って、今日は誘いには乗らず、ひとり資料探しに奔走していた。それはともかく。

そんな彼らのいる場所を見た太公望をして、最も注目させたのは――そのテーブルの上に、でででんっ！　と置かれた『大きなデザート』であった。季節の果物が所狭しと飾り付けられ、そこには彼の好物である『桃』もあしらわれていた。文字通り、食い入るようにそれを見つめていた太公望へ、才人が声をかけた。

「おーい閣下！　早く来いよ。さっきからルイズの目が怪しいん

だよ……先に食べはじめていいわよね!?　とか言っててさ」

「ちょ、ちょっと！　あたしはそんなこと……」

「まあ、たしかに君の視線はデザートにしか向いていなかったね」

「ギーシュまで！」

「たしかに、あの様子は危険領域に突入しようとしていた」

「そうよね～。まだまだ色気より食い気だものね、『箒星』のルイズは」

その場にいた全員から一斉攻撃を受けたルイズは、ぷんぷんと怒っている。そして、そんな彼らの様子を見た太公望はというと、両手をぷるぷると震わせていた。

「新作のデザートを、ルイズひとりで食べるだと……そんな真似はこのわしが許さん！　全ての甘味はわしのものだ――ッ！！」

大声を出し、テーブルへ向けて突撃してゆく太公望。そう……くどいようだが、彼は甘味に対してとてもこだわりがあるのだ。

――そして、テーブルまであと2メイルという位置まで迫った、そのとき。

べっちーん！　と、いう……実にいい音を立てて、太公望は『見えない何か』に正面衝突し……わずかな時間それに張り付いた後、ずるりずるりと滑り落ちた。

「うはははははっ！　成功！！　大成功ッ！！！」「なるほど、これが囮作戦なのだね」「完璧な誘導だった」「どうかしら、あたしの『壁』は」「そ……そうね、なかなか、面白……プッ……あははははッ！」

地面に倒れ伏した太公望を指差し、げらげらと笑う生徒たち。そう――彼女たちの前には『目に見えない壁』が展開されていたのだ。

いつつつ……と、呟きながら、おもいっきり強打してしまった顔を押さえつつ立ち上がった太公望は、自分が衝突した『何か』を、指でコンコンと叩いてみた。

「これは……まさか『Ａ．Ｔ．フィールド（Ａｂｓｏｌｕｔｅ Ｔｅｒｒｏｒ ＦＩＥＬＤ）』！？　いや『＜力＞の防御壁（バリアー）』か！！」

――そう。才人が思いついたもの。それは、透明な障壁にして＜力＞の＜盾＞。バリアーであった。才人的には『Ａ．Ｔ．フィールド』をイメージしていたのだが、性質がよくわからない今の段階で『絶対領域』を展開するのは絶対に危険だと判断、簡単な形で展開できるエネルギー障壁のイメージ図を描き、ルイズに手渡していたのだ。

うぬぬぬぬ……太公望はうめいた。これは、間違いなくルイズと才人の仕業だ。アイディア出しが才人で、実行者がルイズということか。それにしてもあの娘、いつのまにここまで＜力＞の使い方を覚えたのだ！　まったくもってこれだから『天才』というやつは……！！

『太極図』を使えば解除は容易であろう。だが、さすがにそんな

真似をするほど強力な障壁だとは思えない。そう判断した太公望は、懐から『打神鞭』を取り出すと、早速＜ルーン＞を唱える『ふり』をする。

そして、呪文は完成した。

「＜エア・カッター＞！！」

だがしかし。かなり手加減していたとはいえ、太公望の放った＜エア・カッター＞こと『打風刃（だふうば）』は、あっさりとその壁の前にはじき飛ばされる。

「な、ななな……なんだと……！？」

思わぬ事態に、呆然としている太公望。そんな彼の姿を見て、才人以下『仕掛け人』たちは、相変わらず爆笑し続けている。

「うぬぬぬぬぬ……」

「閣下！　降参したほうがいいぜ！　その壁は、デルフじゃなきゃ切れないぞ」

そう、才人が笑顔で降参を促すと。

「あたしの＜フレイム・ボール＞にもビクともしませんわよ」

「ぼくの『ワルキューレ』でも突破できなかった」

「わたしの＜ウィンディ・アイシクル＞もはじき飛ばす、おそるべき立方体の壁」

全員が、突撃結果を報告し……改めて太公望へ『警告』する。はやくしないと、俺たちだけでデザート食べちゃうぞ～！？　などという言葉を投げかけつつ。

――だが、その言葉を聞いた太公望は。突如くるりと後ろを向くと、俯き、ふるふると肩を震わせ始めた。

「あれ……ひょっとして、やりすぎちゃった……カナ？」

彼の姿を見て、思わずそう呟いた才人。しかし、次の瞬間……太公望はゆっくりと振り返った。全身にどす黒い気配を身に纏い、その顔にはまさしく悪魔と呼んで差し支えない、邪悪な笑みを張り付かせて。

そして、一歩前へ足を進めると、太公望は両手を広げ……こう宣告した。

「クックック……この悪ガキ共が、遊ばせておけばいい気になりおって……！　だが、それももう終わりだ。己の無力さを、その身でもって思い知るがよいわ……！！」

そして、太公望が『打神鞭』を軽く振ったその直後。ルイズを除く全員が＜風の縄＞で全身を縛り付けられ、さらに1メイルほど宙へ舞い上がった。

「ちょ、ちょっとー！」「無敵の＜盾＞じゃなかったのかい！」
「な、なんだこりゃ！？」「……動けない」

慌てて拘束を解こうとした彼らであったが、じたばたしようにも

手足が全く動かない。それほどに、太公望が創り出した＜風の縄＞は強く全身を縛り付けていた。いっぽう、ただひとり取り残されたルイズはというと、その場で見事に硬直している。

「おろかものどもめ……このわしに『空間座標指定』能力があったことを忘れたか！」

あ！　と、全員の表情が強張る。そう……この『防御壁』は、外側からの攻撃にはかなりの強度を誇るものの、内側からの攻撃に対しては完全に無防備であったのだ。

そして太公望は、縛り上げた全員をまっすぐに立たせ……再び『杖』を縦に振る。と、その動きに合わせて彼らは飛び上がり……そして『見えない天井』に頭を打ち付けた。

「ぎゃんっ！！」「痛ぁいーッ！」「……っ！」「ちょ、やめて閣下ッ！」

相当痛かったらしい。悲鳴を上げた彼らの声に、ルイズの口元が引きつった。

「今のは警告だ……さあ、ルイズよ。その『防御壁』を解くのだ」

うっ……と、言葉に詰まるルイズ。今、＜念力＞で作ったこの壁を解除したら、どうなるかわからない。しかし、このままでは……友人たちが大変なことになってしまう。それだけは理解していた。

「ちょ、ちょっと！　た、確かに悪戯したのは認めるけど」

「……けど？」

「人質を取るなんて、卑怯だわ！！」

「卑怯？」

この言葉はさすがのミスタにも堪えたようね……ルイズは、内心で勝利を確信した……だが。彼女は、太公望という男の本質を、まったくもってわかっていなかった。

太公望は、顔に貼り付けた暗い笑みをさらに大きく広げると、こう言った。

「卑怯……ククク、実にいい褒め言葉ではないか」

そして、再び『人質』の頭を、ガンッ！　と壁の天井に打ち付ける。悲鳴を上げる子供たち。

「そういえば、おぬしたちにはまだ教えていなかったな……このわしに、国元でつけられた多くの『二つ名』を」

そういえば。全員がその事実に気がついた。タバサだけは、彼が自分の二つ名を『軍師』――おそらく、軍を使う者という意味だろうと彼女は推測していた――と例えていたことを思い出したが、それ以外の者たちには当然気付かない。

「そ、その『二つ名』が、な、なんだっていうのよ！」

ルイズの言葉に、口端を上げ、実にいやらしい笑みでもって応えた太公望は、高らかに名乗りを上げた。かつて、自分に投げかけられた『それ』を。

「『腹黒』『ペテン師』『詐欺師』『悪魔』『卑劣』『釣り師』『逃走名人』『ある意味最も敵に回したくない男』……ちょっと思いついただけで、この程度の数がすぐに出てくるほどなのだ」

「威張って名乗る『二つ名』か――ッ！！」

「素晴らしい『二つ名』であろう？　わしの誇りだ」

「そんなもん誇るな――ッ！！」

そんな彼らの反応を、楽しげに、嗤いながら見つめる太公望。その身体全体に纏う闇の気配が、徐々に周囲へと広がってゆく。そして、おそらくは自分で発生させているのであろう＜風＞によってバサバサとはためくマントと、その凶悪なまでの微笑み。

――今の彼の姿は、悪魔ではなく……『魔王』そのものであった。

太公望は、これまでと違って、ゆっくりとした口調で問いかけた。そう……まるで『闇の魔王』が、『光の勇者』たちへ、毒のしたたる甘言を放つが如く。

「そういうわけだ……このわしに『卑怯』だの『正々堂々』などという言葉は一切通用しない。さあ、ルイズよ……再びおぬしに問おう」

「な、な、なによ」

『杖』を構えたまま、思わず立ち上がったルイズに、太公望は告げた。

「素直にバリアを解くならば……まあ、許すことを考えてやってもよい」

「う、ううう……」

ルイズのうめき声を聞いた太公望が、再び『杖』を振る。ゴチンと壁に頭を打ち付けられ、悲鳴を上げる『仲間』たち。

「ルイズよ……いいのか？　このままでは、おぬしの大切な『おともだち』全員の頭が、間違いなくタンコブだらけになるであろう……！」

「ううう……そんなっ」

ルイズは戦慄した。目の前にいる男は、悪魔――いや間違いなく『魔王』だ。おそらくは、ためらいなくそれを実行するであろう。

「わ、わかったわ。みんなの頭の無事には代えられないもの……」

その言葉と共に『防御壁』を解いたルイズ。だが！　その時を待ち望んでいたかの如く、猛烈な勢いでもって彼女へ突進した太公望は、その頭上へ拳を振り上げながら叫んだ。

「バリアさえ消えればこっちのもんだ――ッ！！」「ギャ――ッ！！」

ゴッチーン！！　と、いう詰まった音が周囲に響くと共に、ルイズの意識は暗闇へと落ちていった。

○●○●○●○●

「ダーッハッハッハッ！　わし！！　完・全・勝・利！！！」

ゲラゲラと笑いながら、テーブル上のデザートを『ひとりだけで』食べ尽くし、お茶を楽しむ太公望。その足元には＜風の縄＞で縛られた者たち――ルイズもそこに加わった――が、転がっていた。

「ひ、ひどいじゃない！　あんた、許すって」

縛り付けられ、涙目で抗議するルイズに対し、太公望は……まさに邪悪という言葉を体現したかのような笑みでもって応えた。

「ダァホが！　わしは許すことを『考えてやってもよい』と言ったのだ。ちゃんと考えてはみたぞ？　だがな、タチの悪い悪戯をした子供に罰を与えるのも大人の役目。そう思って、実行した。ただそれだけのことだ」

うははははは……と、茶を飲み終え、高らかに勝ち鬨をあげながら立ち上がった太公望は――床に這い蹲る面々を見回すと、こう言い放った。

「まったく、タバサまで一緒になってこのわしをたばかるとは……とりあえず、あと３０分もすれば、その拘束は外れるであろう。それまでは、その姿のままでよ～っく反省するがよい」

わし！　最ッ強！！　そんなことを叫びながら、遠ざかっていく太公望の背中をただ見守るしかなかった一同のうちのひとりにして、彼の主人であるタバサは……小さく呟いた。

「あなたのそれは『最凶』の間違いだと思う」

その言葉に同意する一同。ただ、ひとりだけ全く違うことを考えていた者がいた。

「ロバ・アル・カリイエって、『A・T・フィールド』まであるのかよ……うわー、リアルで見てみたいな！　いつか絶対みんなで行くぞ！　これは決定だからな！！」

――ある意味当然のことながら、それは才人であった。

なお、練習中にルイズが提案し、才人が危険だと判断したものとは……。

「ねえサイト。これ、どうしてわざわざ『箱の中』をくりぬくイメージをしなきゃいけないの？　＜力＞の塊で、立方体をそのまま作ったほうがずっと簡単なんだけど」

「ああ。わかりやすくいうと『かべのなかにいる！』状態になるんだ」

「う……なるほど。埋もれて息ができなくなっちゃう可能性があるのね……危険だわ」

ある意味、的確でわかりやすい説明をしていた才人であった。例えに用いたものはともかくとして。実際にそうなってしまうのかどうかは実験してみないとわからないが、危険回避の意味では正しい解答だったのは間違いない。

○●○●○●○●

――そして、それからちょうど２０分ほどが経過した頃。

太公望は、実にいい気分で校門付近を散歩していた。だがしかし……それは、突如現れた、豪奢な馬車から降り立った人物より投げかけられた一言によって、遮られることとなる。

「ちょっと！　そこの……あなたでいいわ」

太公望が振り返ると、そこには。自分よりも長身の、眼鏡をかけた金髪の若い女性が、仁王立ちをしていた。その後ろには、おそらくは彼女付きの小間使いかなにかなのであろう、さらに若い女性が付き従っていた。

金髪の女性は、顎をくいっと動かす。ふむ、わしに何かをさせようというのか？　いったい何者であろう……ずいぶんとキツそうな娘だが、はて、誰かに似ているような……？　太公望は、その女性と、彼女の周辺に微かに視線を動かしつつ、よく観察しはじめた。

まったく……なんなのかしら、この察しの悪い平民は！　金髪の女性――エレオノールは苛立っていた。学院へ到着した直後、馬車から降りたところで見かけた少年。おかしなマントをつけてはいるが『杖』を持っていない。腰に下げてもいない。

おそらくだが『貴族』の身分を剥奪され、学院に雇われた落ちぶれメイジだろう。そう当たりをつけた彼女は、付近に誰もいなかったことを理由に、その『子供』に道案内をさせるべく、声をかけた。だが、戻ってきた反応はいまいち要領を得ないものであった。

その態度にいらつきを覚えたエレオノールは、彼を怒鳴りつけようとした。だが、その直前――問題の少年は、ポンと手を打ち、口を開いた。

「おお！　そうでしたか、あなたはルイズ嬢の姉君……たしか、お名前はエレオノール殿、でしたな？　お噂はかねがね聞き及んでおります。なかなか気がつかず、大変失礼した」

まあ、このわたくしを知っていたの!?　もしかして、我が領内の住民だったのかしら。でも、気になることを言っていたわね。エレオノールは、その美しい眉根を寄せ、目の前の、おかしな子供に尋ねた。

「わたくしの噂……とは？」

もし例の婚約破棄関係の話だったら、馬車に積んである鞭でしこたま打ってやる。そこまで考えていたエレオノールは、続いた言葉に、思わず絶句した。

「はい、いつも妹君が口癖のように話しておったのです。あたしの姉さまは、国立アカデミーに勤める、主席研究員なの！　あたしの自慢の姉さまなのよ!!　……と」

おちびが！　あの、生意気な妹が――学院内で、そのような事を話していただなんて!!　機嫌が最悪の底の底にあったエレオノールは、この発言で少し立ち直った。そして、さらに質問を続けた。

「そ、そう……ほかに、あの子は何か、い、言ってはいなかった、

かしら？」

「そうですな……まだ＜魔法＞が使えなかった頃の話ですが、よく『姉さまはあんなに優秀なのに、どうしてあたしは『ゼロ』なのかしら』そう嘆いておりましたな」

まだ＜魔法＞が使えなかった頃。この平民は、そう言った。つまり、下々の者にも伝わっているほど確実に、おちびは＜魔法＞が扱えるようになったということだ。しかも、このわたくしと自分を比べて、ずっと落ち込んでいたとは……。

――エレオノールの中で、ルイズに対する評価が数段上がった瞬間であった。

ちなみに、太公望は嘘は言っていない。表現をやや誇張しているだけだ。そして彼は、さらに言葉を繋げた。

「と、これは失礼致しました。わたしは太公望呂望と申す者。何か、ご用件がおありのようですが……エレオノール殿とお供の方を、学院内のどちらかへ案内せよ……ということでよろしいのでしょうか？」

あら、ちゃんとわかっているじゃないの。ひょっとして、わたくしのことを知っていて、正しい対応を検討していたから、あんなに反応が遅かったのかしら。それならば、きちんと導いてあげるのが貴族たる者の務めだわ。

「わかっているようね。よろしい、では、わたくしを学院長室へ案内しなさい」

その言葉に、太公望は一礼して応えた。

「承知致しました、では、こちらへ」

――エレオノール・アルベルティーヌ・ル・ブラン・ド・ラ・ブロワ・ド・ラ・ヴァリエール。彼女にとって、これはある意味『運命』の出会いとなった、そのはじまりであった。

第４７話　全てを防ぐ盾、そして選択の時（後書き）

才人の閃き第2弾（正確にいうと3つ目？）。その名も『防御壁（バリアー）』。ちなみに、『Ａ．Ｔ．フィールド（Ａｂｓｏｌｕｔｅ　Ｔｅｒｒｏｒ　ＦＩＥＬＤ）』と共に封神演義に登場します。どんどんルイズがパワーアップしていくわけですが、果たして彼女の運命やいかに！　ちなみに＜念力＞の＜力＞を放出して＜厚い壁＞を創り出して＜箱型＞にしているというものです。なので、デルフでさっくり切られます。

そして太公望とエレオノールが出会いました。運良く？　太公望が超ごっきげん！　モードだったので、初対面で衝突せずに済みましたが……さて、彼女の運命やいかに！　……あと３０分早かったら、大変なことになっていましたね、きっと……。

【追記】感想欄にていただいた質問、

★何故ルイズのバリアを丸くしなかったのか。

ｈｔｔｐ：／／ｓａｉｓｈｏｔ２０１１．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／ａｒｔｉｃｌｅ／２００１５３８４９．ｈｔｍｌ

に、お答えしてみました。また、今回使用されたバリアについて少々、設定が書かれております。

２０１１／０５／１０　誤字・脱字修正。デザート周りの表現を改訂、一部加筆修正

第４８話　研究者たちの晩餐会

「大変恐縮ですが、本日滞在されるお時間を教えていただけますか？」

学院長室へと向かう道すがら、エレオノールは案内役を命じた少年に尋ねられた。

「そうね、最低でも1時間。最高で……3時間を見込んでいるわ」

「さようですか。では、ご夕食の手配を致します。当学院では、かつて王宮に務めていた腕のよいコックが、学院長の強い要望によって雇われ、現在料理長を務めております。よって、ヴァリエール家のお方にもご満足いただけるかと存じますが」

いかがでしょう？　そう、言外に訊ねてくる少年に対する評価を、エレオノールは初対面の時のそれより、大幅に修正していた……もちろん、上方向へ。

わたくしが、この学院の生徒として学んでいた当時とは別の料理長が就任しているようね。懐かしい味を楽しめないのは少し残念だけれど、王宮で腕をふるっていた料理長の作るものならば、わたくしの身分にも、そして舌にも充分叶うものに違いないわ。

「ならば、そのように手配しなさい。それと……」

「はい、お供のかた……侍女殿と、御者のおふたりにも、別途食事と待機するための部屋をご用意させていただきます。ところで学院長との会談中も、侍女殿はお側近くに控えておられるのでしょう

か？　もしそうでなければ、最初から控え室のほうに案内させますが」

全てを語るまでもなく、こちらの意図をくみ取る。この年齢でこれだけの気配りができる者ならば、たとえ今は落ちぶれてはいても、いつか身分の高い貴族の執事長として請われるか、あるいはこの学院の平民を取り纏める者となるだろう。エレオノールは、眼鏡の位置を直しながら、案内を務める少年に対して、そのような評価を下していた。

「この娘は控え室に通しておいてちょうだい。それで、今、学院長は？」

「現在の時刻ですと、職員室で会議をなさっておられるはずです。よって、誠に申し訳ございませんが、エレオノール殿には、来客用の部屋にて少々お待ちいただくことになるかと。もちろん、すぐにもご来訪を伝えて参りますので、できる限り早く面会の準備を整えさせていただきますが」

それは仕方がないわね。こちらが到着予定時刻を伝えていなかったのだから。少しくらいなら、待ってあげてもかまわないわ。エレオノールは、不機嫌の極みにあった１０数分前までとは一転。少しだけ寛大な気分になっていた。

「お待ちいただいている間のお飲み物などで、何かご希望はございますか？」

「そうね、暖かい紅茶をお願い。砂糖壷と……レモンを添えて」

「かしこまりました」

そして少年は、歩きながら近くで作業をしていたメイドや下働きの者たちに、てきぱきと指示を与えている。数名の者たちが、全く別の方向へ早足に移動してゆく。さすがは国立魔法学院、下々の者への教育が行き届いていて、大変よろしい。しかも、昔より遙かに良くなっている。

このような環境を整えた学院長オールド・オスマンの手腕はやはり確かなようね。時の経過で、あのセクハラもなくなってくれていればいいのだけれど……。

そして、来客室――たとえ王族が訪れても失礼にあたらないよう整えられたそこへ通されたエレオノールは、ひとつ気になっていたことを――案内役を務め終えた子供へ、聞いてみることにした。

「あなた。この学院に来てどのくらい経つのかしら？」

これだけの『仕事』ができるのだ。最低でも数年はここに勤めているのだろう。そう考えたエレオノールだったが、少年は彼女にとって想定外の答えを返してきた。

「ちょうど2ヶ月ほどです。海外からの留学生として、こちらの学院へ通われている主人の世話役として請われ、お側に仕えさせていただいております」

よって、学院の案内役としては不慣れであるため、不手際などございましたら誠に申し訳ございませんでした。そう言って頭を下げた少年を見たエレオノールは、絶句した。ちなみに、この発言は太公望なりの『仕返し』である。もちろん、それを顔に出したりはしないが。

まさか……学院の者ではなく、他国の貴族の従者だったとは。学生の身で従者をつけられるなど、本来ならばありえない。トリステイン最大の貴族の娘であるエレオノールや、ルイズにすらついていなかったほどなのだから。

彼は、おそらく――相当身分の高い、しかも大貴族の従者なのであろう。

このわたくしとしたことが、苛ついていたとはいえ、トリステイン貴族として……いや、ヴァリエール家の長女としてなんと迂闊な真似をしてしまったのだろう。彼の変わった形のマントを見て、すぐに異国出身であることに気付くべきだったわ……。

「いえ、こちらこそ失礼したわね。あなたの案内に、不備などなかったわ。そちらの御主人様に、よろしく伝えていただけて？　素晴らしい従者をお持ちですわね……と」

そのエレオノールの言葉に、彼女の目の前にいた少年は実に爽やかな笑顔を見せ、深々と一礼すると……静かに部屋を出て行った。

そのわずか３０秒後、すぐさま届けられた紅茶――これの味も素晴らしかった――を楽しみながら、エレオノールは考えていた。

「ある意味、できた従者に声をかけられただけでも幸運だったと思わなければいけないわね……おかげで、少し気分も落ち着いたし」

到着時のように、苛立ったまま『使者』の役目を果たしていたら、さきほど以上の失態をしてしまったかもしれない。エレオノールは、名も知らぬ大貴族の主従に感謝した。

――既に『失態』などというレベルではすまないことをしでかしてしまっていたことには、当然のことながら、彼女は気がついていなかった……。

○●○●○●○●

「いやはや、さすがに姉妹というだけのことはあるのう」

エレオノールの『案内』を終えた太公望は、苦笑いしながら自室――タバサの部屋へと向かっていた。彼の計算では、そろそろ例の『拘束』が解けて、戻ってきているはずだから。

「しかし、このような時刻に、いったい何の用件であろう？」

どこかへ出かけていたついでに立ち寄った、という雰囲気ではなかった。あきらかに、なんらかの『使者』としての役目を請け負っていた。そうでなければ、あそこまで馬車も、付随する馬や馬具が綺麗に整えられているはずがない。まあ、この国いちばんの大貴族ゆえ、常に見た目に気を配っているだけのことかもしれぬがのう。

そんなことを考えながら、部屋へ戻り中へ入ると……そこには、何故かモンモランシーを除く例の『仲間』全員が勢揃いしており、さらに、その中にいたルイズが、何かに怯えた子猫のように、全身を震わせている。

まさか……さっきの件でやりすぎてしまったか？　ついつい『昔のクセ』で悪ノリしてしまった……そう反省した太公望が口を開こうとした、その前に。ルイズが震え声で彼に報告した。

「あ、あ、あた、あたし、た、た、たいへんなことを、わ、わ、忘れてて」

ぶるぶると身体を震わせながら、必死で言葉を紡ごうとするルイズに深呼吸をさせながら、太公望は言った。

「どうしたのだルイズ。落ち着いて話すがよい」

ほれ、もう一回深く息を吸い込んで、ゆっくり吐くのだ！　と、笑顔で促しながら。それでようやく少し落ち着いたのか、ルイズはポツリ、ポツリと語り始めた。

以前、はじめての＜魔法＞が成功した際に、家族へ報告の手紙を――もちろん、言ってはいけない内容は伏せた上で――書いたこと。

その手紙への返信に、夏休みになったら、お祝いをしてくださったお友達全員と、お世話になった先生方、そして、ルイズの＜魔法＞を成功に導いてくれた恩人おふたかたをヴァリエール家総出で歓待したい旨、お伝えしておくように……と、書き記されていたこと。

そして、夏休みが近付いてきたら、あらためて先方の都合を伺うべく使者を出すから――そのように申し伝えられていたことを、ここ最近の日々があまりにも楽しかったがために、すっかり忘れてしまっていたのだと。

「そ、それで……さっき伝書フクロウが来たの。でね、たぶん今日にでもその『使者』が来るって手紙に書いてあって……」

――ああ、なるほど。そういうことであったか……。

ならば、先程の対応はある意味まずくもあり、良くもあったな…
…いやはや、情報がない、あるいは途中で滞るというのは、やはり
怖ろしいものだのう。太公望は、それを改めて実感していた。

「ルイズよ。その使者だがな」

「な、何かしら」

「今、おそらく来客用の部屋で紅茶を飲んでおる」

「ど、どうして、ミスタが、そ、そんなことを、知っているの、
かしら？」

ふっ……と小さく息を吐き、疲れ切ったような顔をして太公望は
呟いた。

「……おぬしの姉君に、学院長室までの案内を頼まれたからだ…
…すごい剣幕で」

そう伝えた彼の言葉を聞いたルイズは凍り付き……その後。

「イヤアアアアアアアアアア――ッ！！！」

ルイズのとんでもなく大きな叫び声が、部屋中にこだました。だ
が、幸いなことに、とても気の利くタバサが咄嗟に展開した＜サイ
レント＞のおかげで、寮塔に響き渡るという惨事は未然に防がれて
いたが。

そして、しばし部屋の中には、なんともいえない雰囲気が漂って

いた――。

――数分後。

「まあ、とりあえずルイズが受ける『被害』をできるだけ抑える方向で考えよう」

「よ、よろしくお願いします……ミスタ・タイコーボー」

その答えに、うむ。と頷いた太公望は、全員に指示を飛ばした。

「総員！　時間がない。これから会談が終わるまでの間、わしの命令通りに動け。まずはルイズ、キュルケ、タバサ。わしの前に、自分の部屋にあるありったけの紙……できれば１０枚以上。ひとりあたり３０枚あればそれで充分。大至急持ってくるのだ！！」

その言葉を受けた３人が、即座に立ち上がって行動を開始する。

「才人は椅子を全員が向き合って座れるよう配置！　その後、蓋を閉めた状態のインク壷を１つ用意！　ギーシュは『薔薇の杖』で羽根ペンを５本、急ぎ作成してくれ。余力があれば、紙も疲れを残さぬ程度の枚数を作成せよ。以上、かかれ！！」

太公望の言うとおり、一斉に動き始めた者たち。それから３分後……テーブルに座る太公望の前に、羊皮紙・計６０枚と、羽根ペン５本。そしてインク壷が置かれ、メンバー全員が着座した。

懐から『打神鞭』を取り出した太公望は、それを左手に持ち、かるく振った。すると……置かれていた紙のうち５枚が宙に浮き上が

り、同時に羽根ペンが一斉にインク壷目掛けて飛んでいく。目を丸くしてそれを見つめていた一同に、太公望が再び指示を飛ばす。

「ルイズ。今からわしが行う質問に、できるだけ詳しく答えよ。いいな？」

「わ、わかったわ」

「ギーシュ、そしてタバサ。いまからわしが行うことをよく見ておけ。才人はその場で待機。キュルケは少しだけドアを開けて外を見張り、だれかが使いにきたら、ルイズがいいというまで時間を稼いで引き留めておいてくれ。ルイズはわしの合図でそれを行うのだ」

「わかった」「了解」「わかったわ」「了解であります！」

全員の返答に頷き返した太公望は、ルイズに質問を始めた――そして、そこから。ハルケギニアの常識でも、そして地球上でもまず考えられない、とんでもない光景が繰り広げられることとなる――。

○●○●○●○●

――太公望のすぐそばで、彼の質問に答え続けるルイズ。彼らのすぐ横……テーブルの上にふよふよと浮いている紙と羽根ペンが、まるでダンスを踊るかのようにくるくると動いていた。

いや、正確にいうと……浮いた紙に、羽根ペンで何かがどんどん書き付けられていっているのだ……しかも、全て違う内容が。そして、そのさらに上空では、既に何かがびっしりと書き込まれた紙が、ぐるんぐるんと回転している。おそらく、インクを乾かしているの

だろう……タバサは、そう当たりをつけた。ギーシュは、口をあんぐりと開けて、紙とペンによる『舞踏会』を、ただ見守っていた。

と……乾いたとおぼしき『紙』が、ふわりとギーシュ、タバサ、才人、ルイズ、そしてドアの側に待機していたキュルケの前に、舞い落ちてきた。ちなみに、ここまで約３０秒。

「全員、まずはそれを読みながら聞け。才人、おぬしはまだ字を習い始めたばかりなので、おぬしのものだけ可能なかぎり簡単な言葉で記載しているが、読めるか？」

「な、なんとか大丈夫そう」

「わからないところがあったら即座に聞いてくれ」

その言葉に「おう」と声を出して頷いた才人は『紙』に記された文字に集中する。

「わしの第一印象と、今聞いた内容を元に、これから行われるであろう会談に関する内容を、時間内で想定できうる範囲、タイプ別に分けた上でマニュアル化した。残りについても急いでまとめるので、それらを全て頭に叩き込め！　よいな！！」

……ここまでで１分経過。

「全員！　内容への疑問や、追加事項があったら即座に教えてくれ。他の者が何か発言していても、遠慮なくわしへ向かって言うのだ。ただし、どうやってここまで分析したのか、これはいったいなんの＜魔法＞なのかといった類の質問は、会談終了後に受け付けるので今は禁止だ。以上！」

真剣……いや必死の形相で『マニュアル』に目を通す参加者たちと、彼らと質疑応答を行いつつ、さらに書類を積み重ねていく太公望。

そして、15分後。全員がその内容をほぼ完璧に理解し、覚えた頃……学院長の使いとして、コルベールが現れた。もちろん、彼は即座に部屋の中へ通された。

「さすが狸、いい仕事をする。コルベール殿、実はかくかくしかじかで……最後に」

「了解」

太公望の簡単な『指示』を受けた後、即座に書類に目を落としたコルベール。その顔は、まるで別人のように引き締まっていた。

そして学問方面における正真正銘の『天才』コルベールは、太公望がまとめた書類の内容を1分以内で全て暗記すると窓を開け、全員分のそれをすぐさま『杖』から生じた＜蛇のような形をした炎＞で、あっさりと燃やし尽くした――部屋の中を一切焦がすことなく、灰すらも残さず。そう、彼は見かけによらず＜火系統＞の『使い手』としても、非常に有能であったのだ。

――『炎蛇』の二つ名は、伊達ではないのである。

そのあまりの早業に、生徒たちは仰天した。実戦経験が豊富なタバサですら驚いている。彼らは、あの温厚で、かつ変わり者として有名なコルベール先生が、ここまで見事な＜炎＞の使い手だったとは思いもよらなかったのだ。いっぽう、太公望はこれがさも当たり

前であるかのように振る舞っている。

「では、参りましょうか」

表面には笑みこそ浮かんではいるが、その瞳の奥に宿すものは、暖かみに満ちた普段のそれとはまるで別物――例えるならば、静かに……だが、より高熱で燃える青き炎であった。しかし、軽く眼鏡を直したコルベールは、その直後にいつもの見るからに温厚そうな『彼』に戻ると……全員に移動を促した上で、静かに学院長室へ向けて歩き出した。

その後ろ姿を見た、赤毛の娘の心……その奥底に、ほんの少しだけ。そう、ごくごくわずかな『微熱』が生じていたのだが……彼女はまだ、周囲にある『葛藤の炎』のせいで、それに気付いてはいなかった――。

○●○●○●○●

――そして現在。

「ほう……『始祖の像』を作る研究……ですか」

来客室では、会食――と、いっても内容は学院の普段の夕食＋α程度だが――を終え、ワインを楽しみつつ食後のたわいない会話が続いていた。

これより2時間ほど前。エレオノールは、ここ最近己の身に降り

かかり続ける『災厄』に、あやうく心が折れる寸前であった。

『始祖』ブリミルよ。何故、あなたはこうもわたくしに試練をお与え続けるのでしょうか……エレオノールは、もしもそれが可能であるならば、今すぐアカデミーの研究室に駆け戻り、これまで作った『始祖』ブリミル像全てに向けて、問い詰めたい気持ちでいっぱいだった。

すぐ側に腰掛けている、相手の特徴をしっかりと伝えてこなかった妹の頬を、思いっきりつねりあげてやりたい衝動に駆られたが『使者』としてこの場にいる以上、そんな真似ができるはずもなく。

まさかだ。まさか……よりにもよって、例の『子供の従者』が、自分の妹を＜系統＞に目覚めさせてくれた『恩人』にして、両親からくれぐれも失礼のないようにと申し伝えられていた『お客様』のひとりだなどとは、思いもよらなかったのだ。

慌てて彼と、その主人たるタバサに謝罪しようとしたエレオノールを……だが、しかし。彼らは即座にそれを制した。

「わたしがエレオノール殿と同じ立場だったとしたら、同じことをしたかもしれません。ですので、そのように恐縮なさらないでください」

「主人の申す通りです。エレオノール殿は、こちらの卒業生と伺っております。妹君と同じか、それ以下の『後輩』に見える相手に案内をさせるのは、ごくごく普通のことではありませんか？」

目の前の主従――タバサと名乗る貴族の少女と、その従者はなんと笑顔でそう言ったのだ。エレオノールはこの学院に通っていた『

先輩』なのだから、それがごく当たり前の感覚なのではないのですか？　どこの国でも、そういったことはほぼ同じです――と。実際は後輩などではなく、彼の横に座っている少女の『従者』であるため、それには該当しないのだが。

エレオノールは、その言葉の意味をすぐに察した。なるほど……そういうことにしよう――と、提案してくれているわけね。やはり、彼は頭の回転が速い子だわ。そしてその主人たる目の前の少女も。ならば、有り難くその好意に乗らせてもらいましょう。

「まったくお恥ずかしい限りですわ。けれど、そのようにおっしゃっていただけて感謝致します。タバサ様は、とても良い従者殿に恵まれましたわね。彼の『案内』は、まさしく完璧でしたわ」

自分だけでなく、連れの者たちに対する細かい配慮が有り難かった。あれほど気の利く者は、我がヴァリエール家の家臣団にもおりません。会談開始当初よりも、少しやわらかくなった表情で、エレオノールはそう答えた。そして彼女は、改めて『使者』としての役割にとりかかる。

「なるほど……タバサお嬢様だけならともかく、わたくしのような者にまで、そのようなご配慮をいただけるとは、光栄です」

「あなたは、理由のわからない＜失敗＞にずっと苦しんでいた妹を救ってくださったのです。このくらい、トリステインの貴族として……いえ、家族として当然のことですわ」

そしてエレオノールは、改めて『彼ら』の予定について確認する。その質問に、太公望は懐からスケジュール表を取り出して、さっと目を通すと……視線をエレオノールに戻し、改めて答えた。

「アンスールの月フレイヤの週と、第3週から第4週については、1ヶ月前からどうしても外すことができない予定が入っておりまして……妹君に、前もってそれをお伝えしておくことを失念しており、申し訳ございません。ヘイムダルの週でしたら、これといって用事はございませんが」

「いえ、あくまでこちらは、お招きする皆様のご都合に合わせたいと考えておりますので……学院長殿と、ミスタ・コルベールのご予定と、お友達の皆様についてはいかがですの？」

「わしらはふたりとも問題ない」

ルイズの『おともだち』も、全員問題ありません！　お招き感謝致します……と、輝かんばかりの笑顔で答えた。やや声が震えているのは、大貴族の屋敷へ招かれることに対する緊張かしら？　エレオノールは、目の前にいた子供たちが、なんだか少し可愛らしく思えた。わたくしにも、このような時期があったのよね――と。

「左様ですか。では、ヘイムダルの週、ユルの曜日から当方へおいでいただく形でよろしいでしょうか？　もちろん、全員分の竜籠を出させていただきます。わずか数日の歓待となってしまい申し訳ございませんが」

「とんでもありません、こちらこそ恐縮です」

――そして、予定と参加人数（もちろん才人も含まれる）が決まったということで、客室内にて小規模ながら晩餐会が開かれる運びとなった。そして、コース料理の全てが出揃い、最後にデザートを……といった段になった辺りで突如、太公望がハルケギニアのメイ

ジ達にとって、非常に面白いことを言い出したのだ。

「いやはや、こちらに来てから驚きました。魔法体系はほぼ一緒であるのに、ハルケギニア……ロバ・アル・カリイエから見て西側のため、以後『西方』と言わせていただきますが……お互いに『存在する魔法』と『そうでないもの』があり、大変興味深いです。その最たるものが＜錬金＞ですな」

この発言に最も食いついたのはエレオノール。それはある意味当然である。なにしろ彼女は、優秀な＜土系統＞のメイジにして＜錬金＞を得意とする、アカデミーの主席研究員なのだから。もちろん他の＜系統＞に属する出席者たちも、見事に釣られたという意味では同様だ。

……ちなみに、現在才人だけはエレオノールの従者たちとは別の控え室で待機しつつ、豪華な料理に舌鼓をうっている。これは、もちろん太公望による指示だ。

「まあ！　東方には＜錬金＞がありませんの！？」

「それは驚きですぞ！」「そうだったんですか！？」「それは知らなかった」

「はい、ですから初めて実物を見せていただいたとき、本当に驚きました。このようなことが可能であったのか……と」

さも驚いた！　といった顔で、そう答える太公望。

「ところで……失礼ですが、エレオノール殿は優秀な＜土系統＞のメイジであると、ルイズ嬢から伺っております。国立アカデミー

の研究内容とのことで、詳しくはお話いただけないでしょうが、差し支えのない程度、開示しても大丈夫なものに関して、是非お話を伺ってみたいと、常々考えておったのです」

ゆっくりとワイングラスを傾けながら、太公望は語り続けた。

「実は、妹君も姉上のお仕事に興味があったようですが、わたくしと同様アカデミーの研究内容を聞き出すのは、姉に迷惑がかかるかもしれない――そう考えてずっと遠慮していたらしいのですよ。それだけに、失礼ですが……余計に気になりまして。知的好奇心が強いというのは、こういうときに問題がありますな」

――で。冒頭のやりとりに繋がるのである。

『始祖の像』を作る研究。

そもそも、このハルケギニアにおいて『始祖』の姿を描写するということは、大変畏れ多いものだという考えが浸透している。よって『ブリミル教』の礼拝堂などで、一般的に置かれている『礼拝用』の始祖像は、

『両手を前に突き出した人型のシルエット』

……という非常に曖昧な姿のみで再現が許されている。

よって、像自体の形状に関しては、このシンプルな表現のみを用いなければいけない。この制約の中で、いかにして『始祖』ブリミルの偉大さを感じ取らせることができるか。

エレオノールは、この難しいながらも遣り甲斐のある『課題』に

全力でもって着手してきた。そして彼女はこの『仕事』に誇りを持っていた。だが、同僚たちも……彼――元婚約者であるバーガンディ伯爵に、どれほどこの研究が大切なものだと訴えても、ついに最後まで理解してもらえなかったのだ。

「え、ええ……ミスタには、取るに足らない内容かと思いますけれど」

これがどんなに素晴らしく、かつ大変意義のある研究であるのか、誰もわかってくれない。エレオノールは、その言葉だけはかろうじて内心で隠し、そう答えた。

……だが、太公望はある意味エレオノールにとって、予想外の返答をしてきたのだ。

「いや、それはとても重要な研究なのではないのですか？」

ピクリ……と、エレオノールの片眉が動いた。

「それは……どうしてそのように思われましたの？」

エレオノールの問いに、太公望は笑顔で答えた。

「つまりですな……『始祖』の偉大さを、多くの人々……それも、遠い後の世にまで、可能な限り伝えるための研究だと判断したからです」

そう言って、さらに言葉を続ける太公望。

「たとえば、本で伝えようとした場合、字が読めなければなりま

せん。言葉でも、耳が聞こえなければ伝わりません。ですが……『像』という形にすれば、誰でも『始祖』の御姿に触れ、触覚によってそれを、実体あるもの……つまり、始祖の偉大さをこの身で感じることができると。そういうことではないのですか？」

しかも、大きさによっては常に持ち歩くことすらできる。他にも、光を当てる角度や置き場所を考えることによって『見える者』にはさらなる始祖の慈愛を感じさせることも可能である……など、持論を展開する太公望。この答えに、全員がなるほど……それは確かに素晴らしい研究だ！　と、エレオノールに注目し、拍手を送った。

エレオノールは驚いた。実際、そういった理由で彼女はこれまで努力をしてきたのだ。全ての人々に『始祖』ブリミルの偉大さ、素晴らしさを伝えるためのそれを。だが、これと似たような話をして説明しても、誰もわかってくれなかった。

ところが……この異国の貴族の従者殿にして恩人たる少年は、すぐさま自分の研究における本質を見抜き、さらにここにいる者たち全員が、その従者殿の話を聞いただけで、それを理解し、自分を評価してくれた。

……ふと、エレオノールが自分のかたわらに座っていた妹を見ると、彼女は何故か顔を赤らめて、うつむいてしまっている。

『エレオノール姉さまは、あたしの自慢の姉さまなのよ』

そうか、おちびは……この妹は、わたくしの研究内容をきちんと理解した上で、姉たるわたくしが褒められたことを喜び……照れているのだわ。

――エレオノールのルイズに対する評価がさらにアップ。そして、件の従者殿とその主人に教師2名、ルイズの友人たちに対するそれも同様に上昇した。

そして内心感謝した。彼らが力を合わせて、わたくしの大切な妹を救ってくれたのだ……と。これは、相当気合いを入れて歓待せねばなるまい。だが、その前に。

「ところで、ルイズ。よかったら『練習』の成果を見せてもらえないかしら？」

エレオノールは、そういって目の前にある空のワイングラスを指差すと、ルイズを促した。その言葉に、ルイズはすぐさま『杖』を取り出すと、小声で、かつ素早く呪文を完成させる。すると……側に置かれていたワインボトルがすうっ……と浮かび上がり、エレオノールのグラスに赤い液体を注ぎ込んだ。まるで、専門のソムリエが行うかのごとく、実に優雅な動きで。

「まあ！　こんなに＜レビテーション＞が上手に扱えるだなんて！　想像以上だわ」

「あ、その……姉さま、みんなが、いろいろと、教えてくれたから」

そう言って、再び顔を赤くした妹は……なんだか、以前よりも大人びて見えた。自分の努力よりも周囲の協力を強調するだなんて、この子も成長したものね。エレオノールには、それがとても嬉しかった。

そして、その後の歓談は『東方』と『西方』の魔法の違いについ

て大いに盛り上がり、研究者としての血が激しく騒いだエレオノールは、普段の彼女からは想像もつかないほど饒舌で、かつ非常に機嫌が良かった。彼女の笑顔は、まさしく輝いていた。

○●○●○●○●

――そして、5時間後。

なんと。全員が想像以上に＜魔法＞の話題で盛り上がり、滞在予定時間を大幅に過ぎてしまったばかりか、これから戻るには遅すぎる時間帯になってしまった。

「エレオノール殿。もし君さえよければ、来客用の宿泊設備もある。または、ひさしぶりに可愛い妹と同じ部屋で、一緒に夜を過ごしてはどうかね？」

そのオスマン学院長の言葉に、エレオノールは有り難く乗せてもらうことにした。久々に会った妹には、まだまだ話したいことがあったから。もちろんお説教などではなく……これまでの学院生活や、練習方法などについて。

「では、ありがたくそうさせていただきますわ。ルイズ、ひさしぶりにわたくしと一緒に寝ましょうか」「ええっ！」

そ、そんな、この年になってまで姉さまとだなんて、恥ずかしいですわ……そう言ってもじもじと手を動かす妹は、なんだかいつも以上に愛おしかった。

すると、学院長が使用人のひとりを呼び出し、何事か指示をする。

どうやら明日の朝食について話をしているらしい。さすがにそこまでは……と、遠慮したエレオノールであったが、ここまで引き留めてしまったのはわしら一同じゃからの……と、笑う学院長。

そして部屋から出ようとした直後……ノックの音と共に、声が聞こえてきた。

「失礼致します。お客様方の護衛に参りました」

扉を開けると――そこには、整った……それでいて清潔な服に身を包み、腰にレイピアを下げた黒髪の少年が佇んでいた。

「ご苦労、では、こちらにおわすエレオノール殿とルイズお嬢様を、部屋までお送りしてくれ。そののち、こちらへ戻ってくるのだ。今夜は、部屋の前で番をするには及ばない」

この言葉に仰天したのはエレオノールだ。『平民』の護衛!?しかも、話を聞く限りでは、毎日扉の前で警戒をしているらしい。

と……そんな彼女の疑問に答えるべく、太公望が笑顔でエレオノールに告げた。

「彼は、わたしと共にこの地を訪れた者でしてな。残念ながら＜魔法＞は使えませんが、武芸に秀でております。実際『ライン』程度のメイジでは、まず彼には勝てないでしょうな」

自慢げに胸をそらす太公望に、エレオノールは仰天した。まさか、こんな子供が＜メイジ殺し＞だというの!?　いえ、それよりも、どうしてわざわざルイズの護衛など……。

「実は、よく個人的に『手紙』を送る関係上、妹君の＜使い魔＞を時折お借りしておりましてな。そのお礼を兼ねて、ルイズ嬢から＜使い魔＞をお借りしている間、護衛をさせておるのですよ」

『目』『耳』にして『盾』たるものをお借りしているわけですから。その解答に、エレオノールは感心した。まあ！　本当に気が利くのね……この子。それに、ルイズの＜使い魔＞はフクロウだったのね。確かに＜風系統＞らしいわ。

「過分な礼を尽くしていただいて、感謝しますわ。それにしても……まだルイズと同じ年頃なのに、よくぞここまで気が回るものですね。驚きましたわ」

これは、エレオノールにとって、最大級といっていいほどの賛辞だった。しかし……その言葉に、なんだか目の前の少年の表情が陰ったような気がするのは何故だろう。

「あ、あの……姉さま？」

「どうしたの？　ルイズ」

「えっと……ミスタは、その……今年、２７歳で」

目を見開いて、己の妹と……目の前の『少年』を何度も見返すエレオノール。

「いや、よいのです……子供扱いされることには、もう慣れておりますゆえ。もう何度も、繰り返し皆様には申し上げておりますが、これは＜フェイス・チェンジ＞ではなく素顔ですので……」

ハハハ……と、力なく笑う少年……いや、自分と同い年の『男性』にして、ルイズを導いてくれた優秀な＜風＞のメイジ。そして、今まで誰にもわかってもらえなかった自分の研究に対する価値を、即座に理解してくれた人物。

――それから数秒後。

「おちび！　どうしてそれを、先に言わなかったの！！」

「いでででで、あでざば、ごべんなざい……わるがっだでずゆるじでぐだざあ」

まだ全員がその場に残っていたにもかかわらず、ルイズの頬が豪快につねり上げられたのは、ある意味当然の流れだったのかもしれない――。

第４８話　研究者たちの晩餐会（後書き）

タバサの部屋が作戦司令室になりましたｗ　太公望のマニュアル作成は、きっとあんなふうに行われているにちがいない。でなければ『悪の教本』とか、合戦直前にあれだけの数量の本書き上げられないよ！！　……という想像のもとに捏造された演出でした。以前とりあげた「複数思考」というやつですね。

そして、エレオノールとの会談はこうなりました。レモン希望。あとさりげなくコルベール先生がカッコつけております。『命令』されると昔のクセがつい！　的な。

時間指定投稿して出かけます。ようは時間稼（以下略

２０１１／０５／１１　２１：４５　追記：ブリミル教における始祖の像のありかたについて、原作小説の設定からより詳細な内容を追記しました。この設定は、原作をよほど詳しく読み返していらっしゃらない限り、偶像崇拝禁止と感じ取られる可能性があることを感想欄での質問により気付けたため、新たに説明文を書き起こしてみました。ご質問ありがとうございました！

及び、一部加筆修正、誤字脱字を修正しました。

第４９話　参加者たちの後夜祭

「……凄かった」

タバサは、ただ一言……そう呟くのが精一杯であった。

ルイズとエレオノールが出て行った後、学院長室へと集合した残りの者たちは、才人が戻るのを待っている間――さきほどまで繰り広げていた『舞台劇』についての感想を述べていた。

「いやはや……実際とんでもないマニュアルでしたぞ、あれは」

と、感嘆の声を上げたのはコルベール。

「完璧なまでに予想通りの流れだったよ、ミスタ」

ギーシュは、呆然とした声を上げ。

「うーむ……わしも是非読んでみたかったのう」

実に残念そうな表情で、素直な感想を述べる学院長に。

「でも、あれを残しておくわけにはいきませんわ」

キュルケが、真顔で告げた。

――そう。あの一連の『会話』の流れのうちほぼ全てが、太公望によって作られたマニュアル通りに操作されていたのだ。しかも、どこかで話が本流から大幅に逸れそうになった場合の『対応策』ま

で完璧であった。

おまけに、裏で才人にわざわざ部屋を片付けさせたり（特に自分用の荷物を一時的に別の場所へ移動するなど）、衛兵詰め所から豪華でなくてもよいので、吊り下げタイプの細い剣を借りてくるよう指示するなど、各方面にわたっての行動が、タイムテーブルつきで記されていたのである。

ただし、エレオノールの研究内容についての詳細など、盛り上がりを見せた『歓談』部分についての返答については、さすがに最初から予想できる内容などではないので、そういった箇所は全て太公望によるアドリブだ。

おまけに、ルイズが姉のそばで緊張のあまり『マニュアル』の内容を忘れそうになり、それが恥ずかしくて要所要所で顔を赤らめながら必死に思いだそうとしていたことや、最後に彼女が姉に頬をつねられるところまで、見事に計算の上台詞が配置されていた……もっとも、これらルイズに関する情報まで完全に開示されていたのは、唯一タバサのみだったのだが。

「大切な情報を留め置いたおしおきなのだ。ルイズには黙っておれよ」

……というメッセージつきで。それを知っていたが故に、タバサは「凄かった」の一言しか口にできなかったのである。

だが、その演出家本人はというと……実に不本意そうな顔でこうのたまった。

「あれのどこが凄いというのだ。１０分だ、１０分近くも計画時

間をオーバーしておったのだぞ！？　軍の指揮において、これほどの遅れを発生させるなど、致命的ともいうべき失態だ。まったく……このわしとしたことが、直前に遊びすぎて、頭が完全にボケておったわ」

一瞬なんとも形状しがたい空気になりかけた場を救ったのは、ふたりの案内を終えて戻ってきた才人であった。彼は、とりあえず近くにいたギーシュに説明を求めると、うは……と、思わず声を上げ、太公望に向かって質問を投げた。

「なあ……まさかとは思うけど、ひょっとして、閣下の国の将官クラスって、みんなこのくらい当たり前にこなしちゃったりするものなのかな？　カナ？」

そんな国、絶対相手にしたくねェ！　全員の顔が引きつった。だが、その後太公望が放った言葉のおかげで、彼らは心の底から安堵した。

「やれる奴がいてくれたなら、わしがあの当時、軍にいる必要などなかったわ」

「まあ、そりゃそうだよな」

即座に納得する才人と、その他一同。そう……彼らは、本来太公望が『戦いを好まない』ことを既に充分わかっていたから。

――自分以外に適任がいなかったから、本来は『政治』や『シゼンカガク』という学問のほうが得意であるにも関わらず、軍に所属し、総軍司令官になるしかなかった。

そういえば、彼はそんなことを言っていたな……と、コルベールは思い出す。そして心の中で嘆いた。なんと勿体ない……戦争とは、これほどの才能をも容赦なく飲み込んでしまう、本当に罪深き行為なのだ……と。

「タイコーボー。あなたほどの『知将』を相手にしなければいけなかった敵軍に、わたしは、ある意味において心から同情する」

「タバサよ……一部気になる発言があったのだが？」

「気のせい」

「まあよい。これはハッキリ言って自慢だが……『知謀』という面にだけ限って言えば、自軍、および同盟諸国において、このわしに敵う者は誰一人としていなかったのだ」

お前みたいな奴、そんなに大勢いたらたまんねーよ……心の中で呟いた才人、そしてそれとほぼ同様の感想を持っていた一同であったが、そんな彼らをして、太公望が次に放った言葉には仰天した。

「だがのう……そんなわしにも、たったひとりだけ、どうしても勝てない『敵』がいたのだ。＜力＞はもちろんのこと、『知略』『謀略』『政治』『戦略』『戦術』『読み合い』『騙し合い』……常に、全て上を行かれた。建国史上一番の大合戦の時でさえ、もしもあやつがおかしな気まぐれを起こして引かなければ、こちらが押し負けて、最悪国が滅亡していたかもしれん」

彼よりも全てにおいて上の存在がいる!?　タバサは、この話に興味を持った。それは、この場に集う全員がそうだったのだが……しかし。

「話してもいいの？」

たまに、彼はうっかりとんでもないことを漏らしてしまう。それを心配したタバサだったが、太公望は苦笑すると、彼女の頭を軽く撫でた。

「大丈夫だ、問題ないと思っているから話している。気遣い感謝するぞ、タバサ」

どうやら聞いてもいい内容らしい。それならば……と、タバサは遠慮なく質問しようとした……のだが、その前に。

「あ、タイコーボーが話してもいいって思うなら、俺も聞きたい！」「わしもじゃ」「私もですぞ」「あたしも！」「ぼくも、是非お願いしたいであります！」

――全員が一斉に突撃を敢行したために、収集がつかなくなってしまったのだった。

○●○●○●○●

――そして数分後。さっそく太公望への質問大会が始まった。

「ミスタ。ちなみに、どのくらいの合戦規模だったのですか？」

ギーシュの問いに、太公望は、茶を飲みつつ何でもないようにさらっと答えた。

「ああ……両軍併せて１００万の大軍がぶつかりあった、文字通りの『国の存亡を賭けた大決戦』だ。その時は、わしら『同盟軍』側の総軍司令官が、うちんとこの国王でな。わし自身は中将位の軍人として同盟軍の参謀本部長、戦況次第ではわしについてくれていた副官に参謀本部を任せ、自ら軍団（数万～十万程度の軍勢）を率いる指揮官となるべく参戦しておった」

実際には『軍師』――情報精査から作戦の立案、軍全体の指揮など、その人物の能力によって幅広い行動が求められる役職にして、総軍指令を兼ねることもある非常に重要なポジション。軍の規模にもよるが、最低でも大将～大元帥位に相当する――として参加していたのだが、現在の太公望は『元退役中将』という設定で動いている。

そして、どうやらハルケギニアには『軍師』という役職がないようなので、太公望は似たようなそれ――戦場における情報を精査し、作戦を検討した上で司令官を補佐する『参謀』のトップ、ただし『軍師』と異なり指揮権は持たない――に就いていたという説明をしていた。何故なら、そうでないと解説が困難になるからだ。

しかし１００万というのは……はっきり言って、ハルケギニアの常識では考えられない大軍である。トリステインがもし今の時点で軍を出したとしたら、陸・空軍併せてせいぜい３万がいいところであろう。

それを思い、戦慄したハルケギニア組。あれほどの『魔法技術』と『知識』を持つロバ・アル・カリイエでは、それほどの大規模会戦があったというのか。それでは『技術』が発達するのも当然だ……と。

もっとも、軍の構成自体が違うので――数の少ないメイジ主体のハルケギニアと、平民主体＋仙人という構成の周及び同盟諸国――ある意味当然ではあるのだが、それを知らずに数だけ聞けば、彼らが驚くのは無理もない。

いっぽうの地球出身・才人はというと「三国志とか、そのへんの時代っぽい数？」というような感想を持っていた。残念才人！　舞台は合ってる。だが時代がもっと前だ……！

「で……問題の『女狐』が、敵……『帝国軍』の参謀本部長だったのだ」

「ええーっ、その『敵』って、女将軍だったの！？」

これに驚いたのはキュルケだ。これまたハルケギニアでの常識になるのだが、戦場は男のものであって、女が出る幕はない。たとえ従軍を希望しても、鼻で笑われるのがオチなのだ。にもかかわらず、そんな大軍の参謀本部長などという重要なポストに、女性が就任できるなんて！

「実力のあるなしに、男も女も関係ないであろう？」

「つまり、実力さえあれば家柄なんて関係ないのね？」

「まあ、なくはないが……それでも、この国のようにガッチガチではないのう」

「へえ～。あたしたちゲルマニアに近い考えなのね。戦争がなければ、きっといいところなんでしょうね……ミスタの国って」

そのキュルケの発言に、太公望は破顔でもって答えた。

――ちなみにこの時点での才人の思考はというと。

あいつんとこ、確か『宇宙船』があって、しかも本拠地が『スペースコロニー』なんだよな!?　おまけに『同盟軍』対『帝国軍』とか……うは！　スペースオペラたまんねえ!!　などという、ちょっと不謹慎な方向へ移行しつつあった。まあ、その気持ちはわからなくはないし、戦争というものを実感できない日本人にとってはある意味仕方のないことではあるのだが。

「ところで……その女性の将軍は、どんなひとだったの？」

タバサの問いに、腕を組み……当時を思い出すように語る太公望。

「ああ……まずは見かけから言うと、いわゆる『傾国の美女』というやつだな。実際とんでもなく美しい女でな。ただしその本質は『魔性』。側に近寄っただけで骨抜きにされる者たちが多数。その『美の信奉者』も数万人単位。うちの国王なんぞ、事前知識があったにも関わらず、たまたま戦場ですれちがった時に、鼻血吹いて馬から転げ落ちたくらいなのだ」

そこまでかい！　是非一度、その姿を拝んでみたい！　……思わず叫んでしまったオスマンと、それをあきれ顔で見つめる生徒たち。そんな中、キュルケが実に鋭いツッコミを入れる。

「ふ～ん。もしかして、ミスタ・タイコーボーも誘惑されたクチ？」

「……初対面の時クラッといきかけたのは否定せんが、それ以上

は何もないからな」

もちろんこれは、太公望が『女狐』と称した相手が持つ宝貝（パオペイ）『傾世元禳（けいせいげんじょう）』に当てられかけた時の話だ。これは射程範囲内にいる者全てを魅了し、完全に操り人形にしてしまう〈魅惑の術（テンプテーション）〉を放つ凶悪なアイテムである。

使い手たる『女狐』自身の美しさと実力が相まって、とてつもない威力を発揮。最大で１００万人以上の人間を操った、怖ろしい『兵器』だ。もっとも、さすがにそこまでの情報は開示しない太公望であった。また、彼女との『因縁』についても一切話すつもりはない。

もっとも、そのおかげで「彼って別にシスコンとか、女に全然興味がないってわけじゃないのね、よかったわ」……と、キュルケに持たれていた変な誤解が解けていたので、結果オーライである。

「まあ、そんな話はさておいてだな……」

――そして太公望は語った。いかにして自分がその『女狐』に戦いを挑み、そして返り討ちに遭ってきたかをハルケギニア流にわかりやすく直しつつも、全般的に抑え気味に、かつとても聞かせられない内容（因縁がらみのものや、女子供に聞かせるには厳しいものも含め）は、きっちりと排除しながら。

「……と、いうわけでな。もう散々あの『女狐』の掌の上で転がされ、弄ばれまくったのだ。まあ、ある意味今のわしがあるのは、あやつの薫陶の賜、といっても過言ではないかもしれんのう」

どうだ、とんでもないであろう？　疲れたような顔で、ボソッと

呟いた太公望。

「君がそこまで出し抜かれ続けたというのだから、正真正銘の実力者だったんじゃの」

「上には上がいる」

「まったくだよ。世界とは、本当に広いものなのだね」

「女性の将軍かあ……しかも『傾国の美女』とまで言われる美人だなんて、あたしはちょっと憧れるわ。おまけに、実力だけでそこまでのし上がったわけでしょう？　すごいじゃないの」

「まあ、実際とんでもない『女狐』だったわ」

と……今の言葉に疑問を抱いたのはタバサだ。

「……だった？　もしかして」

「ああ……彼女も、既にもういない。あやつは『土に還った』のだ。まったく……完全に勝ち逃げされてしまったわ。しかも、わしがひとりであやつを追っていた時に、よりにもよって、見せつけるように目の前で命を散らしていきおって……あれでは、恨み言のひとつも言えないではないか……」

「あらミスタ、ひょっとして戦場で芽生えた『禁断の愛』とか、そういう……？」

こういった『空気』に敏感なキュルケが、すかさず茶化す。その言葉に、タバサも……他の参加者たちを含む全員が身を乗り出して

きた。

「あっちはどうだか知らんが、自分についてはよくわからんな。なにせ、常に命の取り合いをしていた相手だからのう……いや、こっちが一方的にやられておったから、常に取られそうになっていた、の間違いか。おかげで逃げ足だけは本当に速くなったのだ」

そんな彼らに苦笑して答える太公望の目は、なんだか遠くを見ているようだった……しかし。そのわずか数秒後。彼の瞳に映るそれが、ふいに悪戯っぽいものに変化した。

「どうだ？　わしの『魔王』演出なんて、その女に比べたら可愛いものであろう？」

太公望は、ふふん……と鼻で笑いながら、生徒たちを見回す。赤くなって俯く生徒たちと、何が何だかわからない教師陣。そこで、太公望はさきほど行われた『悪戯』について、学院長たちに話した……『おしおき』の内容まで含め、詳細に。

「まあ、きっちり締めてはおいたので、停学にまではしなくてもよいと思うが」

「では、反省文を書いて提出させるというのはどうでしょう」

「それもありか。ふむう、枚数をどのくらいにするかじゃが……」

などと、視線を交わしつつノリノリで『罰則』について話し合っていた『教師陣』３人とは対象的に、才人を含む『生徒側』は、既に全員顔が真っ青である。それをよく観察していた大人たちは「もう勘弁してやるか」といった視線を交わし合う。そして。代表とし

て太公望が口を開いた。

「まあ、とにかくだな。悪戯に関してはまだいいとしてだ。才人よ」

「は、ハイ」

「ああいった閃きがあったら、まずはわしに、またはコルベール殿に必ず相談してくれ。あれはな、最悪の場合、展開した瞬間におぬしとルイズ、ふたりの命を奪ってしまった可能性だってあったのだぞ？」

「『いしのなかにいる！』状態になる、ってことだろ？」

ああ、そのあたりは気付いていたのか……と、思いつつも念のため追加する太公望。

「それなんだがな。もしあの壁が＜念力＞をといた後も、実体化したまま残っていたとしたら？　うまく調節できず、だんだん縮んできて、中の者が潰されたら？　使い手が気絶したら、割れて崩れ落ちてきたら？　もし中が真空だったら？　と、まあ……こういった可能性も充分にありえたのだよ」

「う……そこまでは考えてなかった」

「おぬしのアイディアは、確かに面白い。だが、何事にも最初は危険がつきまとうのだ。考えてはいけない、ということではない。あくまで、実行する前に声をかけてほしいだけなのだよ。もちろん、これはおぬしたちを心配してのことだ。わかってくれるかの？」

「よくわかりました……」

ガックリとうなだれる才人。実際、命の危険があったのだと聞いて、さすがにお調子者の彼でも血の気が引いていた。

「まあ、あれだけ痛い目に遭わせたのと、ルイズへの指示書に『防御壁の使用及び口外については、以後許可が出るまで禁ず』と書いておいたので、しばらくは大丈夫だと思うが、この件については、念のためしっかりとおぬしの口から伝えておいてくれ」

『あれ』の弱点については、全員が揃っているところで改めてやっておくかのう……と考えた太公望は、とりあえず夜も更けてきたのでそろそろ解散しないか？　と、学院長に提案する。そして、一同解散と相成った。

――なお、翌日エレオノールは上機嫌で朝食をいただいた後、足取り軽くヴァリエール領に向かって帰っていった……緊張のあまり、彼女の後ろ姿が見えなくなった途端、その場へ崩れ落ちたルイズを残して。

○●○●○●○●

「……凄かったわ」

昼食時。食堂でこぼしたルイズの一言は、タバサのそれと同じものだった、しかし……その先の内容については、全く異なるものであった。

「あのエレオノール姉さまが、あたしに……あんなに嬉しそうに

話をしてくれるなんて、初めてだった。あんなふうに笑ってるのも、見たことなかった。本当にみんなのおかげよ、ありがとう」

そう言って、笑顔で全員に礼を言うルイズ。どうやら、夕べは緊張こそしていたものの、姉妹の会話自体は相当盛り上がっていたようだ。

「それにしても……ミスタ・タイコーボーは凄かったわ。あの気難しいエレオノール姉さまと、あそこまで話ができるなんて」

「そうかのう？　単純に、研究の話をしただけなのだが。研究者というものは、自分のしている研究について、他の研究者と話し合い、お互いに刺激しあう関係になりやすいものだからな」

もちろん、性格にもよるがのう。太公望は、そう言いながら、サラダのハシバミ草をよけてそろりとタバサの皿に乗せている。いっぽうのタバサは、代わりにフルーツを1品これまたこっそり提供していた。

「そんなにすごかったんだ？」

その場にいなかった才人へ簡単に事情を説明したルイズは、そこでこれまでひとつ気になっていたことを、太公望へ質問してみることにした。

「それ以外でも、ぽんぽん話が続いてたじゃない。あたしだったら、あそこまでできないわ。なにか、コツでもあるのかしら？」

その疑問に対し、太公望はちょっと考えると……実例を示してみることにした。

「そうだのう……モンモランシー」

「な、何かしら？」

ギーシュの隣にちょこんと座っていた彼女は、突然話をふられて驚いていた。

「あのな、これからちょっとした『見本』のためにギーシュを借りる。これは、あくまで『演習』なので、浮気ではない。よって例の数にカウントしないでやってくれ」

「……ミスタ、あなたはぼくに何をさせようというのかね」

思わず椅子を引いて後ずさったギーシュに、太公望は笑顔でこう命じた。

「キュルケを褒めつつ、できるだけ会話を引き延ばしてみるのだ」

「……は？」

「キュルケは、これ以上会話を続けたくないと感じたら『終了』と言うのだ」

この命令に、面白そうだ！　という顔をする面々。そのなかで最も期待に満ちあふれた表情をしていたのは、指名されたキュルケ自身であった。

「ほれ、やってみろ。おぬし『全ての女性、美しき薔薇の信奉者』なのであろう？」

ならば、キュルケが喜ぶような会話ができて当然。さあ……！
と、太公望から促され、ふむ……と、少し考えたギーシュは、彼女へこう切り出した。

「キュルケ……君のその髪は、まさに炎のようだよ。二つ名に相応しい」

「はい終了」「え～」「早いなオイ」

さすがに気の毒に思った才人がツッコむと「だって、ちっとも面白くなさそうなんだもの！」と、がっくりしているギーシュに、追撃をかけたキュルケ。さすが＜火系統＞だ、実に容赦がない。

「では……次にわしがやってみようと思うのだが、かわまんかの？」

「あら、それは楽しみね」

「今から始めるぞ。ふむ……その、爪に塗られておるものは……何といったか」

「この『マニキュア』がどうかしまして？」

「ほう、それは『まにきゅあ』というのか。実はな、ちと気になっておったのだが……何故、今日はいつもと色が違っておるのだ？」

「えっ？　あたし、いつも変えてるわよ？」

「あ、いやそういう意味ではなくてだな。おぬし、今月に入って

から、曜日によって決まった色をつけておったであろう？　にもかかわらず、今日はそれらの法則に合っていなかったのが気になってな」

この発言に、聞いていた一同が驚いた。逆に、キュルケは満面の笑みを浮かべている。

「さすがね、そこまで細かく見てくれていたなんて。これはね、実はゲルマニアから届いたばかりの新作なの。初めて使う色だったんだけど、思ったより発色が良くて気に入ったわ」

そう言って、自慢げに爪を見せびらかすキュルケ。

「おぬしは、そういう『新作』といった流行に敏感だのう」

「女として当然よ。ゲルマニアだけじゃなくて、トリステインのものもチェックしてるんだから」

オホホホホ……と、上機嫌で笑うキュルケ。仲間内以外で周囲にいた者……特に女性たちが、彼女の爪に注目する。そして、たしかにいい色ね……とか、思ったより上品な感じよね、キュルケにぴったりの色だわ……などという囁き声が離れた場所から聞こえてくる。キュルケは、その声を聞いて、とても気分がよくなったようだ。

「それでだな……そんなおぬしに聞きたいことがあるのだが」

「あら、ミスタが……あたしに？」

「うむ。実はな……」

そう言って、ちょっと視線を下に向けると、右手の指で頬をかきはじめる太公望。それを見て、キュルケは彼が何を言いたいのか、おおよそのところを理解した。そして、柔らかな笑みを浮かべてこう言った。

「なるほどね……だいたいわかったわ」

「さすがはキュルケ、察しが良くて助かる。でな、それに相応しいものを教えてもらいたいと」

「オホホホホ、このあたしに任せておけば大丈夫！　まあ、たしかにこれは殿方だけじゃ難しい問題よね。ところで……」

そう言って、視線を太公望の目に合わせるキュルケ。

「もちろん、相応の対価は用意させてもらう。そうだのう、今度トリスタニアの街で……」

「あら、いいわね。実は、美味しいデザートを出すお店の噂を聞いたんだけど」

「ほう……それはとてもいい話だ」

にっこりと笑った太公望に、これまた笑顔で応えるキュルケ。

「でしょう？　でも……」

「ふむ？　何か問題でもあるのかの？」

「あら、ミスタにしては察しが悪いわね。その件について、あた

しの部屋でゆっくりと……ふたりっきりでお話を……そうね、今夜にでも」

ごぃん！　ごぃんっ！！　大きな木の杖の先が、ふたりの頭にクリーンヒットした。突如衝撃を受けた頭を押さえ、テーブルの上に突っ伏したキュルケ、そして太公望。

「いった～い！！」「何故わしまで殴るのだタバサ……」「なんとなく」

……まさに風の如き素早さで杖を仕舞うと、再び着席するタバサ。

「つーかまるっきりナンパ……口説いてるみたいだったぞ」

すごいものを見た！　とでも言わんばかりの才人に、うんうんと同意する一同。

「違うわ！　おぬしら、話の内容をちゃんと聞いておらんかったのか！！」

うがーっ！！　と周囲を威嚇する太公望。だが、支援は思わぬところからやってきた。

「ミスタ・タイコーボーは、キュルケに、誰かへのプレゼントを見繕う手伝いをしてもらいたい、対価に街で何かを奢るから……っていう話をしていたのよね？」

こう援護してきたのはモンモランシー。その言葉に、ようやく全員が、あ……！　という反応をする。

「そういうことだ。途中で話がおかしな方向へ流れてしまったが、ちゃんと軌道修正の用意もあったのだ」

「え～、あたしは結構本気で」

ごぃ～ん!!　タバサ会心の一撃がキュルケの頭を捉えた。再び突っ伏すキュルケ。

「でも、同じように褒めているのに、ぼくはあっさり会話を切られたのは何故だい？」

当然ともいうべきギーシュの質問に対し、最初はキュルケがそれに答えようとしたのだが……それを制して太公望が説明する。

「キュルケは、何か自慢したいようなことがあったとき、いつも髪を掻き上げるであろう？　これは、つまり自分の髪の毛に自信があるということだ。わし以外にも、それに気付いている者は当然いる。よって、髪については『褒められ慣れている』のだ」

と、ここまで言ったところで、キュルケに補足を依頼する。

「そういうこと。だから、これ以上ギーシュと話しても面白くなりそうもないって思ったの。でも、ミスタは気付くひとがめったにいない、あたしの『マニキュアへのこだわり』を突いてきたわ。だから、あそこまで盛り上がったのよ」

しかも……と、キュルケは続ける。

「わざとそれっぽい仕草で、あたしに頼み事があるように見せかけて、誘導してたわ。それに興味があったから、あたしも乗ったっ

てわけ」

「まあ、キュルケはこのように察しのいい女性だから、今の『技』が通じたのであって、常にこれが可能であるとは限らない。よって、相手をしっかりと見極めた上で、より好みそうな内容を提示すれば、このようにお互いに楽しく話ができるわけだ」

少し冷めてしまった茶を口に流し込みながら、太公望は説明する。

「かつ、やりかた次第で、さっきキュルケがわしにしようとしたように、自分が望む方向へ話題そのものを誘導することも可能なのだ……が」

そこで突然太公望は、会話を中断してしまった。当然、何事だ？といぶかしむ一同だったが……ふと周囲を見て、絶句した。

「なぜこんなにひとが集まっておるのだ……」

彼らの周りには、大量のひとだかり……特に男子生徒、さらには教師までが集まって、ぐるりと輪を作っていた。

「いや……なかなか興味のある話でしたので」「面白そうだったから、つい」

口々に言い合う野次馬たちに、呆れたような口調で問う太公望。

「あのな……おぬしら。ひとから何か話が聞きたいのなら、せめて『気を利かせる』べきであろう？」

そう言って、彼はじっ……と、自分の空っぽになったデザート皿

を見つめた。途端にドタバタと走り出す少年少女。積み上がってゆくデザート、そしてフルーツ。そんな様子を満足げに見ていた太公望は、ふと、ある人物に目を留めた。ほほう……なかなか面白いではないか。これは……！

そして、会話のテクニックを昼休み終了まで披露し続けた太公望は、それが終わると同時に、先程目を留めた『人物』に、こっそりと声をかけた。その後――夕刻。

いつもの時間、いつもの中庭。だが……そこには、これまで存在していなかった、ひとりの人物が新たに加わっていた。

「ミスタ・タイコーボー。何故彼がここにいるのかね？」

「よほどのことがない限り『仲間』は増やさないんじゃなかったかしら？」

ギーシュとモンモランシーの問いに、太公望は満面の笑みでもって応えた。

「その『よほど』があったからなのだよ。理由はこのあとちゃんと説明する」

そして、太公望は問題の『人物』に視線を移した。その先には――金色の髪を短めに揃え、丸い眼鏡をかけた、青い瞳を持つ生徒。タバサたちの隣のクラスに所属している少年、レイナールが立っていた――。

第４９話　参加者たちの後夜祭（後書き）

よし、これでアルビオン前に集めておきたかったメインメンバー揃ったー！　ここで出ました輜重担当、近接もオッケーなレイナール！！　やっと部隊構成できたぜ……ふう。　マリコルヌすまん。このチーム＜風＞が強すぎるので、属性がかぶる君は出にくいんだ……ッ。

ところで……原作やパーフェクトブックをいくら読んでもレイナールの系統とフルネームがわからないんですが、掲載されている資料など、ご存じのかたはいらっしゃいませんでしょうか？　ない場合は、確定せずに進めるつもりではあったのですが、わかるならそのほうが当然いいので……イメージでは、水か土っぽいんですけどね、支援系だけあって。

ちなみに、例の「いしのなかにいる！」ですが、別バージョンで「かべのなかにはいってしまった！」も存在します。よって、あえてわけてみました。

２２：００　軍師の説明について補足。誤字脱字修正

……帰宅しながらゼロ魔１３巻読んでいて気がついた。レイナール、さりげなく風のムチ使ってた……お前も＜風＞なのかー！　まあいいや……。

２０１１／０５／１５　最終決戦時の参戦人数を修正（ご指摘感謝です）

第５０話　仲間達、水精霊として集う事

――レイナールは、目の前の好機に、どう動くべきかを考えた。

タバサたちとは隣のクラスに所属していた彼――レイナールは、ここ１ヶ月ほど前から中庭で行われていた『あること』が気になっていた。最初は、他のクラスメートたちも同じように思っていたようだが、彼らはたったの数日で、あっさりと興味をなくした。

何故なら、そこに『平民』が混ざっていたからだ。

「平民と貴族がなれ合うだなんて、どうせロクなことじゃない」

そう言って笑って去った彼らについてはどうでもいい。しかし……あれは一体なんなのだろう？　日に日に動きが良くなっていくゴーレムの集団も凄いのだが、それらをなんと素手で殴り倒し、あるいは剣１本で薙ぎ払う平民の少年。

この１年間『ゼロ』と笑われていた少女が、箒に乗るという、常識では考えられない方法を採ってはいるものの、通常の＜フライ＞よりもずっと早く、軽快に空を舞う姿。

同じ＜フレイム・ボール＞を唱えているはずなのに、何故か毎回違う大きさで発動するそれや、異国風のマントを纏った、これもたぶん同世代のメイジと共に、何かに祈るような姿勢で芝生に座り込む眼鏡の少女。

そして、ついに昨日――見てしまったのだ。決定的な『それ』を。

『見えない壁』。そこに次々と投げかけられる＜魔法＞。だが、それはまるで＜盾＞のように全てをはじき飛ばした。とはいえ、書物で学んだエルフの＜カウンター＞とは異なっているようだ。そう……あんな＜魔法＞は、このハルケギニアには存在しない！

……そういえば。レイナールは気がついた。あの、異国風の装いをしているメイジ――名前はタイ……なんとかというらしい彼は、隣のクラスの『雪風』に『召喚事故』によって呼び出されたという、東方ロバ・アル・カリイエのメイジではなかったか！？

もしかすると……彼らはみんな、東方の＜魔法＞を教えてもらっているのでは！？

ようやくそこに考えが至ったレイナールは、胸の高鳴りが抑えられなかった。それも当然だろう、そもそも東方諸国とのやりとりをしている商人自体がごくごくわずか。かの地に関する情報は、はっきり言って無いといっても過言ではない。

ハルケギニアと同じように、杖をふるって使えているということは、やり方についてはほぼ同じ。それが、技術開発がさかんであると噂される東方流にアレンジされているのか、それとも東方オリジナルなのか。

彼らに聞いてみたい……そして、もっと見てみたい！　でも、ぼくは彼らとの交流を一切持っていない。だいたい、あそこに揃っているのはみんなトリステインでも有名な貴族たち。ぼくのような、せいぜい中流貴族では、そもそも相手にしてもらえるような相手ではないのだ。

だが、意外にもその翌日――思わぬ好機がやってきた。

アルヴィーズの食堂、中央のテーブル付近になにやら人だかりができている。いったいなんだろう……？　そう思って、席を立って奥を覗き込んだレイナールは、びっくりした。例の東方から来たメイジと、ゲルマニアから来た留学生――たしかキュルケだったか？　彼女が繰り広げた『会話』に。

そして、会話終了後に彼の――ミスタ・タイコーボーと呼ばれていた――していた『解説』に興味をそそられた。なんと、今のやりとりは『技』だというのだ。ひとの興味を引き、それによって会話の流れをコントロールするものなのだと。

興味を引く、か……レイナールが考え込もうとした矢先、その声は聞こえてきた。

「あのな……おぬしら。ひとから話が聞きたいのなら、せめて『気を利かせる』べきであろう？」

『気を利かせる』。つまり、彼の興味を引くような何かが、ここでできれば――！

途端にドタバタと走り出す、自分以外の少年少女。そして問題の『彼』の前に積み上がってゆくデザート、そしてフルーツ。彼らと同じことをしては意味がない。と――レイナールは、あることに気がついた。そうだ、もしかすると、これなら――！

それから約２０分後。レイナールの前に『彼』が立っていた。

「わしの名は太公望。さきほどの気遣い、感謝する」

これは……予想通り、どうにか興味を持ってもらえたようだ。ここからうまくきっかけをつかめれば！

「こちらこそ。ぼくはレイナールだ。あの話、すごく興味深かったよ」

「ふむ、レイナールというのか。おぬし……時折、こちらを見てはいなかったか？」

気付かれていた！？　けど、責めるような口調ではない。なら正直に答えよう。

「さっきの件では、ないよね？」

この返しに、どうやら彼は満足してくれたようだ。にっこりと笑って、ぼくにこう言ってくれた。

「おぬし……『こちら側』へ来る気はないか？」

「これから授業が始まるから、放課後からでいいかな？　その……いつもの場所で」

目の前の男――太公望はニヤリと笑い、そして頷いた。

――そして今。念願の『仲間入り』を果たしたレイナールは、彼らが集うテーブルの一角に並んだ椅子に座り、太公望の話を聞いていた。

「実はな、さっきの話をしている途中、人だかりができたであろ

う？」

「ええ……それが、どうかしたのかしら？」

太公望の言葉に、首をひねって疑問を呈すモンモランシー。

「そのとき、わしは『ひとの話が聞きたいなら、気を利かせろ』と言った」

「覚えている」「あ、俺も」「デザートたっくさん集まってたものね」

口々に、そのときの様子を語る少年少女。彼らが静まるのを待って、太公望は続けた。

「そこでな……たったひとりだけ、他と違う行動をした者がいたのだよ」

そう言って、視線をレイナールへと向ける。当然のことながら、全員の視線が彼へと集まる。レイナールは、なんだか照れくさくなって、頭を掻いた。

「他のものが、周りと同じようにデザートや果物を持ってくる中で……彼はたったひとり、食堂のメイド3人が集っていたところへわざわざ歩いていってな、そこにいたシエスタに声をかけ、新しい茶を、わしを含む『仲間』全員に出すように命じていたのだ」

「えっと、言いたいことがよくわからないのだが」

ギーシュの疑問に、太公望はそれならば……と、詳しく答えはじ

める。

「まずはだ……彼は、わしが飲んでいた茶が、なくなりかけていることに気がついた。しかも、時間の経過で、冷めていることにも目が行った。まだわしの話は続く、しかも長くなりそうで、さらには食べ物はたくさんあるのに飲み物がない。これに気付いたのは、あの中で彼だけだったのだよ」

そして、太公望はレイナールに言を向けた。

「どうだ、わしの推測は当たっておるかの？」

「はい、その通りです」

「あら、気が利くのね。だからあたしが頼む前に、新しいティーセットが届いたのね」

キュルケの言葉に、うっすらと頬を赤くしたレイナール。彼女ほどの美人に褒められたら、男ならば誰だって悪い気はしないであろう。

「では、次だ。レイナール、おぬしに聞きたい。あそこで、わざわざ立ち上がって、しかもシエスタに依頼を行ったのは、いったい何故だ？」

「それは……側に使用人の子がいなかったということもあるけど、それ以上にあの黒髪のメイドは、そこにいる彼……ええと、あとで名前を教えてもらえるかな」

そう言って、レイナールは才人に視線を合わせ、軽く右手を挙げ

る。才人は、そんな彼と同じように手を挙げた後、笑顔で頷く。

「彼と、よく食堂で話をしていたよね？　だから彼女に頼めば、ぼくが自分でお茶の種類を選んで頼むよりも、ずっと君たちが好むものを出してもらえる……そう考えたんだよ。でも、それが確実とは限らないから、念のため本人のところへ確認をしに行ったんだ」

おおーっ！　と、声を上げる一同。ニヤッと笑い、レイナールの肩の上にぽんっと手を置いた太公望は、どうだ！　と、言わんばかりに周囲を見渡した。

「素晴らしいであろう？　他の者たちがただ周りを真似するだけであった中、彼……レイナールだけがここまで考えて行動していたのだよ。しかも、よりよい結果が得られるように。こんな人材に声をかけないで、どうするというのだ！」

確かに、彼が好みそうな人材ではある。タバサは納得顔でレイナールを見た。

「こういう真面目なタイプはな、軍では参謀や後方任務を、内政面では行政官の補佐などを任せると、非常に頼りになる存在なのだ。気が利いて、しかも働き者。おまけに考え方も悪くない」

と……この話に、ある軍人の話を思い出した才人が、挙手の上、口を開いた。

「あのさ、おれたちの国じゃなくて、昔同盟を組んでいた国の偉い軍人さんが言っていた話なんだけどな……今のタイコーボーの言っていたことにちょっと似てるんだけど、話してもいいか？」

「ほう？　それはどんなものなのだ？」

「えっと『軍人は４つのタイプに分けられる。有能な怠け者、有能な働き者、無能な怠け者、無能な働き者だ』っていう格言」

「面白そうだな」「確かに」「それは聞いてみたい」「ぼくも是非」「わしもだ」

一同の催促に気をよくした才人は、それじゃあ……と、言葉の意味を解説する。

「えっと……ひとつめの『有能な怠け者』は指揮官向き。怠け者だから、どうすれば自分が楽に勝利できるかを考えて、しかも有能であるがためにそれを確実に行える。部下の力を見抜いて、いちばんいい位置に配置した上で、存分に力を発揮させることができるのがこのタイプである……と」

その場にいたほとんどの者の視線が、太公望に向けられる。

「なるほど」「理解できる」「すっごくわかりやすいわ」「本当ね」「ああ、納得できる話だね」「ギーシュ！　おぬしがそれを言うか！　おぬしどう見ても指揮官タイプであろうが！！」

ああ、たしかにそうかも……と、納得したのはタバサ。ギーシュ本人は目を白黒させているが。

「続けていいか？」「ああ、もちろん」

それじゃあ……と、咳払いをして才人は続ける。

「で、ふたつめが『有能な働き者』。これは参謀や後方支援向きである。理由は、真面目だから全て自分で考えて、全部やろうと無理をしてそのままでは潰れてしまう。だから、部下を率いるよりは参謀として司令官を補佐する方が、本人を極端に疲れさせることなく、かつ有効に活用できる。あと、裏方仕事の大切さがわかってるから、補給とかを絶対に軽視しないので、後方支援に回すと頼りになるタイプ。だったかな」

これを聞いて全員が盛り上がる。

「ああ、ヴァリエールとかタバサがそうかしら？」

このキュルケの発言に、ルイズとタバサが反応を見せた。

「え、え、あたし!?　あたしが、有能で、参謀に向いてる!?」

「わたしが有能な働き者……」

「うむ。わしからいわせてもらうと、ルイズは参謀、タバサは指揮官・参謀共にこなせるが、ふたりとも後方支援にはあまり向いていないと思われる。もちろん、やること自体は可能だとは思うが、特にルイズは真面目にやり過ぎて、潰れてしまいそうだから正直任せられんわ」

と……そこに、ギーシュが自分の意見を述べる。

「後者はどちらかというとレイナールやモンモランシーに該当するんじゃないかい？」

「うむ、ギーシュの言う通りだの。ただ、補足するとレイナール

とキュルケは両方こなせると思う。モンモランシーは、例の畑への取り組み方などを見ていると、やはり後方支援タイプであろう。ついでにいうと、才人もこのタイプに該当するかもしれんな。ただし参謀限定だが。一度剣を置いて、そっちを試してみても面白そうだ」

「それ、ほんとうかい！？　ぼくが両方こなせるタイプ……」

「マジ！？　俺参謀タイプだったのかよ！　兵士とかそっち系だと思ってたのに」

「もちろん、兵士としての適正についてはピカイチだ。わしが言っておるのは、あくまでおぬしの言っている例に当てはめた場合の話だぞ？　もっとも、才人の場合は、カッとすると周りが見えなくなるのがな……それさえなければ、指揮官でもやっていけそうなのだが。よって、才人は剣を置いているなら参謀という判断をしたのだ。指揮権がないからのう」

「あたしも！？　ミスタはそんなふうに見てくれていたのね！」

「おぬしはもともと気が利くタイプで、頭も悪くないからのう。参謀は問題なくこなせるであろうし、それ以上に後方支援を任せるにはうってつけだ。ただ、おぬしの場合はその火力が貴重であるため、実際にはまた違った配置になりそうではあるが」

わいわいと、テーブルを囲んで会話をする面々。そして早くもレイナールがとけ込み始めた。だが、彼にはまだわからないことがあった。何故、太公望がここまで軍関係の会話にからんでくるのかが。よって、聞いてみることにした。

「ミスタ・タイコーボーは、どうしてそこまで軍関係の話に詳し

いんだい？」

その質問を待っていた！　といわんばかりの笑みで、太公望は訊ね返す。

「レイナールよ、ここに加わる上での重要事項はさきほど話したと思うが」

「うん、絶対口外無用って件だよね」

「うむ。あれだけの判断ができるおぬしならば話しても構わない。それと、モンモランシーにもまだ打ち明けてはいなかったのう。実は、わしはな……」

――只今説明中です。しばらくお待ち下さい――

「東方軍のた、退役中将……！？」

口をあんぐりと開けているレイナールに、才人が追い打ちをかける。

「冗談みたいな話だろ……おまけに、この顔で27だぜ……？」

「やっぱりそれ、嘘じゃない、の……よね？」

顔を引き攣らせてるモンモランシーを見て、太公望はため息をついた。

「わし……この1ヶ月で、もう何度同じ答えを返したんだろうか……＜フェイス・チェンジ＞なんぞは一切使ってないからな？　もちろん＜マジック・アイテム＞もだ。ついでにいうと、元参謀総長だ。軍団指揮の経験もある」

「えええええええ！！！」

この言葉を聞いても、まだ信じられないといった風情のレイナール。そして、同じくここで初めて太公望が元軍人であることを知ったモンモランシーは、揃って半信半疑といった表情を浮かべていた。

「まあ、それが普通の反応であろうな。いきなり納得されるほうが、ある意味怖いわ。と……すまん才人、話の腰を折ってしまった。続きを頼めるか？」

「オッケー！　じゃあ次な」

腕を組み、胸を反らして得意げな表情で語り始めた才人。

「みっつめは『無能な怠け者』。これは単なるお飾りの総司令官とか、連絡将校、下級兵士タイプ。自分で何にも考えない上に怠け者だから、上の言うことを素直に聞くし、トップにいた場合も余計な指示を出さないため、下の人間が自力でなんとかするしかない。これにより、意外と軍はうまく廻る」

この発言に、鼻で笑ったのは太公望である。

「ハッ！　そんな者を、このわしが『仲間』としてスカウトするわけなかろう！？　もちろん、軍の編成時に部下として雇う……ということなら話は全く別だ。そもそも、連絡将校を含む兵士たちが

いてくれなければ、軍隊というものは成り立たないからのう」

そう語る太公望に、ギーシュが賛同した。

「そりゃそうだね」

「そういう意味では、あたしたちって『選ばれた』者ってことかしら」

「あんまり調子に乗るでないぞキュルケ。一歩間違えたら、おぬしはこのタイプに分類される危険性があるのだからな」

「え～」「確かに」「それはあるかもね」「ちょっとひどいわよあんたたち！」

ぎゃんぎゃんと騒ぐ女性陣をとりあえず無視し、才人は最後のタイプを説明する。

「で……最後は『無能な働き者』。無能なのに無駄に働くから、間違いに気がつかないで、事態をどんどん悪い方向に持って行く可能性が高いタイプ。だから、こういう軍人は処刑するしかない……っていう」

これを聞いた全員の顔が、どんよりと曇ったのはいうまでもない。

「極論だが間違ってはおらんな。軍では特にいてほしくないタイプだのう……」

「確かに、それは嫌だ……」

「うん……だけど、どこにでもいるんだよね、こういうひと……」

……その、まるでお通夜のような雰囲気を回復したのは才人であった。

「と、まあこんなところかな」

「なかなか面白い理論であった。聞かせてくれて感謝する」

太公望の言葉と共に、聴衆がいっせいに拍手した。思わぬ反応に照れまくる才人。

「ところで……ここにいる全員に提案があるのだが。実は、そろそろこの『仲間』について、チーム名を決めたいと思うのだが、どうであろう？」

「賛成！」「いいわね」「たしかに『仲間』は言いづらかった」

異議なし！　とばかりに拍手する面々に、満面の笑みでもって太公望は話しかけた。

「ちょうど全体の編成も、ほどよく揃ってきたしのう。何かよい案はないか、みんなで話し合ってみるのだ」

そう太公望が促すと、全員が一斉に案を出し始めた。

「トリステイン守備隊！」「留学生もいるんだけど？」「マンティコア隊とか」「いやそれ実在するから」「赤い彗星騎士団」「ルイズの親衛隊作るわけじゃないのよ」「アンリエッタ姫ファンクラブ」「いやこれそういう集まりじゃないから」

喧々囂々の論争を続けるメンバー。いつまでたってもまとまりそうになかったため、ついつい口を出してしまう太公望。

「なかなかまとまらんのー。どうしても決まらないなら、わしが昔臨時で組んだ、敵本拠地潜入用・特殊チームの名前をつけてしまうぞ？」

「え、それどういう名前？」

『敵地潜入用』『特殊チーム』という響きに興味を持った一同であったが……。

「ドドメ・チーム！」

――この太公望の言葉で、参加者全員が一斉に脱力した。

「却下」「てかなんでドドメ」「意味わかんないんだけど」

……彼らの疑問はもっともである。沈痛な表情で、太公望はチーム名の由来を告げた。

「いや、くじ引きでチーム分けしたら、わしのところでドドメ色の玉が出てきてな」

「特殊潜入チームをくじ引きなんかで決めるなよ！」

「もちろん、わしだってそんな真似はしたくなかったのだよ！にも関わらず、組み分けで明らかにモメそうな状況だったから、仕方がなかったのだ！！」

「ずいぶんとフリーダムだなお前の国の軍隊」

このぐだぐだな雰囲気を、なんとか元の流れに戻してくれたのはモンモランシーだった。

「ねえ……ちょっと思ったんだけど、トリステインは＜水＞の国よね。だから……『水精霊団（オンディーヌ）』とか、どうかしら？」

「あら、それいいじゃない」「素敵」「うん、悪くないね」「覚えやすい」

――こうして。後に『水精霊騎士団』と呼ばれ……トリステインの歴史上において、王国近衛部隊の伝説となる、その原型となったチームがここに誕生した――

○●○●○●○●

――その夜。

太公望とタバサ、そしてキュルケはタバサの部屋に集まり、小声で話し合っていた――もちろん、厳重な＜ロック＞と＜サイレント＞をかけて。

「タバサ、そしてキュルケよ……すでにわかっていると思うが」

「母さまとペルスランを救出する決行日程について」

「うむ。キュルケのお父上からの連絡が届き次第、行動を開始す

る。こちらは、既に逃亡用の風竜の手配準備及び、航路地図を入手済みだ」

「早ければ明日朝、遅くとも明後日昼にはあたし宛てに届くと思うわ。来たら、こっそりミスタへ渡すわね」

「ありがたい。しかし、ヴァリエール家からの招待は思わぬ僥倖だ。ついでにゲルマニア見学へ行くとでもすれば、言い訳が立ちやすい。そのあたりは、まずはこのメンバーで詳細を詰めていこう」

「了解。ところでタイコーボー、ガリアへの手紙には、友人に招かれてヴァリエール家とツェルプストー家に出かけるという報告と、実施の日程を正直に書くつもりだけれど、問題ない？」

「うむ、下手に誤魔化すよりはそのほうがいいだろう、念のため推敲だけはさせてくれ」

「ところでミスタ、まずはこのメンバーで、って言ってたけど、誰か増やすの？」

「その通りだ。3名追加を検討している。もちろん、全員顔見知りだ。今はまだ明かさないでおく」

「了解」「そのほうがいいわね」

――静かに、だが確実に歴史は動いていた――

○●○●○●○●

――いっぽうそのころ、ガリア王国の首都リュティス、プチ・トロワを拠点とする王女イザベラと、その『パートナー』たる王天君はというと。

「イザベラよぉ……もうわかってると思うが」

「ええ、大丈夫……しっかりと掴んだわ」

「自信持っていいぜ。オメーならやれる」

王天君の声にしっかりと頷いたイザベラは、目の前に用意された『窓』と、そこに映し出された光景ををしっかりと見据えた――そして、いっきに『仕事』にかかる。

「ああ――ッ！　ここに置いておいた、クッキーの皿がないッ！！」

直後『窓』の外から響き渡った大声に、ふたりはゲラゲラと大声を上げた。

「やったわ！　見事にクッキー皿入手成功よ！！」

「ククク……やっぱりオメーはセンスあるぜぇ」

――とんでもなくしょうもない『窓』の使い方による、厨房からのつまみぐいを覚えていた。

第５０話　仲間達、水精霊として集う事（後書き）

レイナール加入と、各メンバーのタイプ別説明。そして水精霊騎士団の原型が結成されました！　この後、少しの訓練及び準備期間を経て、宝探しイベントへと向かっていきます。

追記：実際の戦闘スタイルについては、宝探しイベントで行います！　今回はあくまで才人の例にならったタイプ分け……と、いうことでお願い致します。

２０１１／０５／１３　２３：４０　本文一部加筆、及び誤字脱字修正
２０１１／０５／１４　０８：００　本文一部加筆修正
２０１１／０５／１４　２１：００　厳重なアンロックで全開にしていた扉を閉じる修正
２０１１／１０／０２　誤字脱字修正、本文加筆修正

第５１話　皆は一人の為に、一人は皆の為に

――ニューイの月・ティワズの週、ダエグの曜日。

明日は、トリステイン魔法学院が夏休みに入る前の、最後の『休日』。せっかく仲間が増えたのだから、みんなで集まって、どこかで歓迎会をしようじゃないか。それを言い出したのは、ギーシュであった。

「歓迎会!?　ぼくたちのために?」「あら、それ素敵な考えだわ、ギーシュ！」

この言葉を聞いて喜んだのは、新たに『仲間』――『水精霊団（オンディーヌ）』に加入したばかりの、眼鏡をかけた少年・レイナールと、ギーシュと正式に付き合いをはじめたばかりである彼女・モンモランシーだ。

「あ、それいいな！　みんなでどっか行こうぜ」「あたしも賛成！」「わしも参加するぞ」「あたしも!」「わたしも参加したい」

賛成で全員一致である。で……どこへ出かけるかという話になったとき、当初はトリスタニアの街へ出かけないか？　という案が出たのだが、ここで別案を出してきたのがキュルケであった。

「ねえ、せっかくだから『ラグドリアン湖』でピクニックなんかどう？　厨房で何か用意してもらって。いまの季節だと、過ごしやすいし、眺めもいいと思うんだけど。それに……」

キュルケは、モンモランシーを見て、こう告げた。

「チーム『水精霊団（オンディーヌ）』結成祝いには、ぴったりだと思わない？」

当然のことながら、反対する者など誰もいなかった――。

「じゃあ、厨房へはあたしが頼みに行ってくるわ」「わたしも行く」

そう言ってキュルケとタバサが席を立つ。

「それじゃあ、俺は厩舎に行って、明日の馬車予約してくる」

彼女たちと同じく、立ち上がって厩舎へ向かうべく歩き出そうとした才人を止めたのは、太公望であった。

「いや、それには及ばない」

「なんでだよ？　馬車ないと、あんなに遠くまで行けないだろ？」

「馬車ではなくてだな……そろそろおぬしが考えた『あれ』の試運転をしてみようと思うのだ」

その発言に、驚いたのはルイズと才人だ。他のメンバーは、なんの話をしているのかさっぱりわからないので、ぽかんとした表情で彼らを眺めている。

「で、でも、まだあたし、浮かせることしかできないわ」

「そうだよ。おまけに結構人数いるし、荷物だってあるだろ！？」

彼らの答えを聞いて、してやったりとばかりに太公望は笑った。

「浮かせることができるのなら、もう充分だよ。わしに、いい考えがあるのだ。それを試してみて、もしも駄目なようであれば、改めて馬車を借りに行けばよい」

――それから30分後。周りの目が一切ない裏庭、その奥に位置する場所へ『それ』はでででんっ！　とばかりに置かれた。

「これ……ベッド？」「ベッド……よね？　おかしな形をしてるけど」

そう。以前才人が太公望とコルベールにひとつのアイディアを披露し、それを元に検討を重ねて作成された、題して……

『空飛ぶベッド』（折りたたみ式、バラして持ち運び可能）

である。ちなみにこれは当初のものから改良を重ねた『弐号機』（才人命名）で、試作品である『初号機』は現在、ルイズの部屋で才人が寝起きをするために使われている。

「これで、なにをするの？」

不思議そうな顔をして訊ねるタバサに、太公望は答えた。

「全員でこれに乗って、空を飛ぶのだよ」

「えええぇぇぇぇぇぇぇぇぇ――――――――ッ！！！」

その答えに、全員が驚きの声をあげる。それはそうだろう、一見、なんのへんてつもない――いや、前後と両脇におかしな手すりのよ

うなものが取り付けられているから、珍しい形ではあるのだが――ベッドに乗って、空を飛べる!?　しかも、これだけの人数を乗せて……!?

「これ、もしかして東方の＜マジック・アイテム＞なのかい？」

思わず眼鏡に手をやりながら、まじまじと問題のベッドを見遣るレイナールと、その発言に目を輝かせた一同。しかし、才人の答えはあっさりとしたものだった。

「これは、コルベール先生が作ってくれた特別製なんだ。けど、魔法は＜固定化＞以外かかってないぜ」

「そうなの？　だったら、どうやって……」

モンモランシーの質問を途中で遮った太公望は、実際にやってみせるから……と、ルイズと才人のふたりを手招きし、耳元に何かをゴニョゴニョ、ゴニョリ、ゴニョリータ……と囁いた。この提案に、目を見開いて驚いたふたりは、思わず顔を見合わせると……直後、同時に太公望へと向き直って、こう答えた。

「なるほどな、それならいけそうだ！」「ええ、やってみるわ！」

……そして『試運転』は始まった。

まずは、ベッドの中央にルイズが座る。前方には太公望。そして後ろ側に才人がつく。

「では、ルイズよ……まずは、３０サントほど浮き上がらせてみるのだ」

「まかせて！」

ルイズは『杖』を取り出すと、早速＜念力＞でベッドを浮き上がらせた。少し重さがあるためか、最初はさすがに少しふらついたが、それでも指定通りの高さまでふわりと持ち上がった。

「では、ルイズはそのまま浮き上がらせ続けてくれ。次は、わしの番だ！！」

そして、太公望が『打神鞭』を取り出して、軽く一振りすると……なんと、ベッドがゆっくりと前へ移動しはじめたではないか。当然、見守っていた全員が驚きの声を上げる。

「ルイズ、まだ大丈夫か？」

「ええ、ぜんぜん問題ないわ」

「よし、ならばもう少しスピードを上げるぞ！」

その言葉で、ぐんと速度を上げた『空飛ぶベッド』は、中庭をぐるぐると飛び回り始めた……最初は徒歩程度の速さだったそれは、すぐに駆け足よりも速くなり……そしてついには、馬車並の速度まで到達した。

「すげえ！　閣下の言った通りだ！！」

大声をあげながら興奮する才人に、太公望は大笑いしながら答えた。

「そうであろう？　何も全部をひとりでやる必要はないのだ。このように『浮かせる』者と『動かす』者を複数名で分担してやれば、ひとりではできなかったことも可能となるのだよ」

そして、ワハハハハハ……と、毎度おなじみ得意げな高笑いを上げながら、しばらく裏庭を低空遊覧飛行していた太公望たちは、呆然とそれを見守っていた残りのメンバーの前に降り立つと、それはそれはもう得意げな笑みを浮かべ、こう言った。

「どう？」「これが俺のアイディアだ」「それをわしがアレンジし、コルベール殿が実現したのだ」

見たか！　と、胸を張るルイズ、才人、太公望の3人の前へ、全員が一斉に駆け寄ってきた。

「ちょっと何これ！」「着想が面白いね！」「すごいな！　君たちは」「これ、みんな一緒に乗れるの！？」「たしかに、これなら馬車で行くよりずっといいわね！！」

ワイワイと盛り上がる一同。だが、唯一心配そうな顔をしたのはタバサだ。そして、彼女は自分の考えた案が実現可能であるかどうか、太公望へ聞いてみることにした。

「でも、ルイズとタイコーボーへの負担が大きすぎるように思う。そこで、サイトを除く乗員全てが＜レビテーション＞や＜フライ＞などで少しだけ浮いた状態で、ベッドに掴まることを提案する」

「うむ、実はそれを前提とした乗り物なのだよ。だから、このように手すりがついているのだ」

なるほど、そこまで考えてあったのか。全員は、改めて『ベッド』に注目する。

「みんながほんの少しだけ身体を浮かせれば、ルイズやわしにはほどんど負担がかからない。もしも誰かが途中で疲れたら、交代しながら進めばよい。移動に関しては、ルイズがもっと操作に慣れるまでは、わしが全て担当する」

では、早速試してみよう！　と、いうわけで早速全員が乗り込んだわけだが。

「……スピードを上げすぎると、向かい風がきついね、これ」

レイナールが、ぼさぼさになってしまった髪を手櫛でかるく直しながらぼやいた。そう……この形式だと、馬程度の速さならば問題ないが、それ以上に速度を上げると、向かい風で転げ落ちそうになるのだ。

「ふむ……では、ここで問題を出そう。誰か、解決案はないか？」

その太公望の問いに、レイナールが確認を取る。

「問題……ということは、解答があるという意味だよね？」

「その通り。当然、解決策が存在する。さあ、全員で考えてみるのだ」

と……この答えにすぐに気付いたらしいタバサが、ちらりと太公望に視線を合わせる。

「む、タバサはもう気が付いたようだな。まあ、ある意味当然ではあるな。タバサよ、すまんがおぬしは発言を控えていてくれ。これは他の者に、自力で答えを出してもらいたいのだ」

「わかった」

タバサは、コクリと首を縦に振った。

「向かい風で問題になるのはなんだろう、まずはそこから考えないと」「髪が乱れるわ」「そんなことはどうでもいい」「え～」「振り落とされるのはまずいよね、メイジのぼくたちはともかく、サイトが落っこちたらたいへんだよ」「ベッドにしがみつくしかないか？」「ベッドだけに寝ころんでみるとか」「いやそれ根本的な解決になってないんじゃないか？」

様々な意見が飛び交うが、なかなかよい解答を出すには至らない。と……ここで、キュルケがふと、あることに気が付いた。

「ルイズの『盾』が使えたら解決しそうなんだけど、ルイズは『浮かせる』役目があるし……」

「いや、ちょっと待ってくれないか」

と、このキュルケの言葉に反応したのはレイナールだ。

「そうだ『盾』だよ！　誰かひとりが『風』を受け止めるのではなくて、うまく受け流すことができる『盾』を、ベッドの前に出すことができれば……」

この発言に、一瞬反論をしかけたのはギーシュだ。

「しかし、それほどの『盾』を作れるとしたら『トライアングル』以上の……あっ！！」

会議に加わっていた全員が、いっせいにタバサのほうに向き直る。

「そうか！　＜風＞の『スクウェア』のタバサに『盾』を担当してもらえばいいのか！！」

「えっ！　彼女、いつのまにランクアップしていたんだい！？」

隣のクラス所属のレイナールにとって、当然そんなことは初耳だ。

「あ……ええ、つい最近……」

思わずあのとき――例の惚れ薬事件――のことを思い出して、冷や汗を流すモンモランシー。そして、彼らの答えに満足したらしき太公望とタバサは、揃って拍手した。

「その通り、それが彼の考えていた計画」

「よし、それでは答えが出たところでだな……全員にまだ＜精神力＞に余裕があるのなら、どのくらいの速度が出せるのか、限界に挑戦してみようではないか！」

「お――ッ！！」

――結果。竜とまではいかないが、相当な速度が出せることが判明し、全員が興奮した。もっとみんなの息が合ってきたら、さらに『上』を目指せるのではなかろうか――と。

　こののち、才人の出身世界風に表現するならば、まるでモータースポーツ――フォーミュラ・カーのセットアップが如く、効率のよい『盾』の展開方法やら、加速について。さらには技術開発担当者としてコルベール氏が招聘され、ベッドに使用されているパーツ各種の軽量化を行うなど、どんどんと改造と工夫が続けられていくのだが……それについては、もうしばらく先の話になるので、今回はあえて触れずにおこうと思う。

○●○●○●○●

――そして翌日、虚無の曜日。

　雲一つない晴天の中『空とぶベッド』でゆうゆうと――他人の目につくとさすがにまずいので、かなりの上空を飛行して――ラグドリアン湖に到着した一行は、美しい湖畔の側で、大きな布製の敷物を広げ、バスケットいっぱいに詰め込まれたお弁当に舌鼓をうちながら、実に楽しい時間を過ごしていた。

　いよいよ、来週からは念願の夏休み。そして『胸躍る冒険』と題した実戦演習にして討伐任務が待ちかまえている。レイナールにもその話は伝えられていて、彼は喜んで参加を申し込んだ。

　『畑』の運営についても順調で、明後日には最初の『薬草』が収穫可能となっていた。モンモランシー曰く、新規加入メンバー分の『傷薬』を作ってもまだかなりの余裕があるから、少し多めにストックしておいた上で、残りの『薬』を売り払い、そのお金で新しい種を購入する予定だそうだ。

ちなみに、夏休み中の畑の世話は、学院の庭師に依頼することになっていた。これについての代金は、学院側が『実習費用』ということで負担してくれるらしい。よって、この期間中に植えるのは、それほど育成に手間がかからない、香水用の『花』にしておこうということで、全員の意見が一致している。

「俺、こんなに楽しくっていいのかな……」

才人は『仲間たち』の顔を見ながら、誰にも聞こえないほど小さな声で呟いた。彼がこのハルケギニアに『召喚』されてから、もう3ヶ月以上が経過している。突然自分がいなくなったことで、両親も、学校の友人たちも、きっと心配しているだろう。

才人自身も、残してきた家族や向こうの友達に会いたくないといったら嘘になる。だが……今、こうして自分の目の前にいるのも、やっぱり大切な『仲間』で。しかも、過ぎゆく日々をごくごく普通の、どこにでもいる高校生として、ただ漠然と過ごしていたあの頃とは違い――毎日が、本当に充実している。

父さん、母さん……ごめん。俺、まだもうしばらくこっちにいたい。いつか必ず帰るけど……もう少しだけ、わがままを許してほしいんだ。戻ったら、土下座なんてもんじゃないくらい、とにかく謝るから。

と……そんな彼の様子に気が付いたのか、ルイズが声をかけてきた。

「どうしたの？　サイト。なんだか、元気がないみたいだけど」

「あ、いや……なんでもないって！　ほら！　俺こんなに元気い

っぱい！！」

さっきまでうっすらと感じていた望郷の念をルイズに悟らせまいと、無理にポーズをつけようとした才人は、連続でバック宙を――もちろん指ぬきグローブ効果による＜ガンダールヴ＞の＜力＞の無駄遣いである――繰り返す。が、調子に乗りすぎてしまい、ばっしゃーん！　……と、激しい水音を立て、思いっきり湖の中へ飛び込んでしまった。

「ちょ、ちょっと何やってんのよあんた！！」

「ぶはっ……湖が近すぎたッ……この俺としたことが、失敗したッ！！」

湖面から顔を出した才人を、その場にいた全員が指を差してゲラゲラと笑っている。そして、びしょ濡れになってしまった彼の周りに＜風＞の使い手たちが集まって服を乾かし、そして＜火＞のメイジが焚き火を作って、風邪をひかないように早く身体を温めるよう、才人を促す。

――やっぱいいなあ、こいつら。みんなで馬鹿やって、楽しくて。俺、ここに呼ばれて良かった。最初はどうなることかと思ったけどさ……。

と……才人がそんな思いにふけっている時、キュルケがふと呟いた。

「それにしても、例の『空とぶベッド』もそうだけど、こうやって、みんなで＜力＞を出し合うことで、いろいろなことができるのね。みんなと……『水精霊団』に入るまでは、こんなこと考えても

みなかったわ」

みんなで＜力＞を出し合う。この言葉に、ピクリと反応したのはタバサであった。そう……彼女は、今までずっとひとりで戦い続けてきた。母を助けるために、自分の身を守るために、そして――父の無念を晴らすために、ただ、孤独な道を歩み続けていた。

それがどうだろう。ほんの数ヶ月で、自分の周りは劇的に変わってしまった――もちろん、思いも寄らぬ、良い方向へ。まもなく、母を助けるための準備も整う。そのための手はずも、ほぼ揃った。今日は、その緊張をまぎらわすための大切な『心の休日』だ。自分の『パートナー』はそう言って、今日だけは全部忘れて、楽しく過ごせと言ってきた。

この湖を挟んだ向こう側――対岸に建つ屋敷で、母さまと……忠実な老僕が待っている。もうすぐわたしが助けに行きます、心を許せる仲間と共に。そんな思いを抱きながら、彼女はキュルケの呟きに賛同した。

「わたしも……こんな風に過ごせるなんて、思ってなかった」

そして、そのタバサの声に気付かされたのは、ルイズだった。ずっと＜魔法＞の才能『ゼロ』と馬鹿にされ、誰からも期待されず、ただひとり、殻に閉じこもっていた自分。それが、今ではこんな大勢の気を許せる友人達と共に、ピクニックを楽しんでいる。

しかも、彼らを運ぶための乗り物は、自分の＜魔法＞で浮かせたものだ。そして、みんなが『君はすごいんだなあ』そういって、褒めてくれた。それが、ルイズには本当に嬉しかった。だから、彼女はタバサの言葉に、心から同意した。

「あたしもそうよ。もしも、みんなと出会えなかったら……そんなこと、考えたくもないわ」

なんだか少し、しんみりとした空気になってきたなあ……まあ、俺もわからなくもないけど。そんなことを考えながら、才人はきらきらと輝く湖に視線を移した。そして、ふと思い出した……この、湖に住む精霊のことを。そして、彼らが何と呼ばれている存在であるのかを。

さらに……もうひとつ、全く別のことを思いついた。それは、子供のころ母親から読んで聞かせてもらった絵本。中学に上がってから、それが元々は子供向けのお伽噺などではなく、海外の有名な作家が書いた、ロマン溢れる冒険物語が元となっていたことを知った。才人は、その物語の中に登場する、非常に有名な……とある『言葉』について、みんなに話したくなった。

「あのさ、みんな……ちょっといいかな？」

才人の言葉に、一斉に振り向く『水精霊団』の面々。彼がいったい何を言い出すのか、期待しているといった表情が、ありありと見て取れた。

「みんなと……この湖を見ていて思い出したんだ。俺が住んでいた国の、ずっと西にある王国の――『伝説』の騎士団に伝わる言葉なんだけど」

本当は、物語の中のことなんだけれど……それは伏せておこう。そう思いながら、才人は語り続けた。

「そこが、まだ弱小騎士団だって周りから馬鹿にされていた頃から所属していた4人の『騎士』が――ある事件を＜力＞を合わせて解決したことがきっかけで、すごく仲良くなって……そのあと、永遠の友情を誓うために、天に向かって剣を掲げてな。そんで、全員で掲げた剣を交差させながら、こう言ったんだ」

才人は、背負っていたデルフリンガーを引き抜くと、空に掲げてその『台詞』を高らかに叫んだ。

「みんなは、ひとりのために！　ひとりは、みんなのために！！」

その台詞と同時に、まるで見計らったかのように、一筋の陽光がデルフリンガーに差し込み、反射した。その輝きによって、まるで後光が差したような才人の姿は『宣誓を行う勇者』そのものであった。

「4人の騎士たちはその固い友情を武器にして、次々と襲いかかってきた困難を＜力＞を合わせて乗り越えて、ついには国王陛下直属の近衛隊になるほどに騎士団の名前を高めたんだ。そして、弱小って笑われていた騎士団は、いつしか『伝説』になった」

その言葉を聞いて、まず立ち上がったのは太公望であった。

「みんなで＜力＞を合わせる……いい言葉だのう」

続いて立ち上がったのは、タバサ。

「みんなで困難を乗り越え『伝説』になった……」

次に立ち上がったのは、ルイズだ。

「みんなは、ひとりのために……ひとりは、みんなのために。いい言葉ね」

その後に立ち上がったのは、ギーシュ。

「そういえば、ここは『誓約の精霊』が住まう場所……だったと思うんだがね」

彼の言葉に、全員が頷く。そして、まだ座っていた者たちも立ち上がり、才人の側へ集まると……『杖』を抜いて、天に掲げ、そして交差させた――デルフリンガー『自身』も、そこに加わる。

――そして、彼らは大きな声で『誓約』を行った。『水精霊団』のメンバーとして。

「みんなは、ひとりのために！　ひとりは、みんなのために！！」

輝く湖畔は、そんな彼らの姿を、ただ静かにその水面へ映し出していた――。

第５１話　皆は一人の為に、一人は皆の為に（後書き）

『皆は一人の為に、一人は皆の為に』

「三銃士」に登場する、非常に有名な言葉です。これはもちろん、かの『烈風の騎士姫』の元ネタとなった作品としても有名です。

子供の頃にアレクサンドル・デュマの「ダルタニャン物語（三銃士）」を読んでわくわくした世代としては、カリンの冒険についついニヤついてしまうのはどうしようもありませんでした。ああ、あったなあこんな場面……的な意味で。

あと、ゼロ魔キャラは結構ここから名前が採用されていたりするので、元ネタと比較すると楽しかったり。ミセス・シュヴルーズとかw　と、いうわけで逆輸入してみました的なお話でした！　珍しく最後まで真面目に締めました。

どうでもいいんですが、この物語のせいで、ある程度大きくなるまで枢機卿のリシュリューってただの悪人だと思っていたのは秘密です……（枢機卿、というポジションをなんだかわるいものだと思い込んでいたというさらなる恥ずかしさ爆発な黒歴史もあったり）と、いうかとんでもない敏腕政治家だったんですよね、リシュリュー枢機卿って。

以上、知らないこと、思いこみって怖いよという子供のころの体験談でした。

第５２話　水精霊団、暗号名を検討す

「暗号名（コードネーム）で行動するゥ！？」

ラグドリアン湖で『友情の宣誓』を終え、一段落がついた頃……突然、太公望が「例の『冒険』中は、本名は明かさず暗号名（コードネーム）でもって行動する」と通告したのである。これに驚いた全員の反応が、先述の台詞である。

「どうして！？　それじゃ、意味がないじゃないのよ！」「まったくだ！」

と、反対するルイズ、キュルケ、モンモランシー＋デルフリンガーの４名。それも当然であろう。自分の名前をを名乗らなければ『名』を上げられないという考えがあるからだ。

「ぼくは暗号名に賛成だな」「俺も！」「ぼくもそのほうがいいと思うね」「わたしも賛成側にまわる」

一方、タバサと残りの男子生徒陣は暗号名採用に賛成した。

「ふむ。では、賛成側にまわったものは、順番に理由を言うのだ」

「下手に本名を使うと、不都合が生じる可能性があるからね」

そう答えたのはレイナールだ。曰く、着手する『任務』によっては、身分を明かしてはいけない、あるいは貴族であることが逆に枷になる可能性があるから……と。ギーシュとタバサも、レイナールとほぼ同意見であったが、そこにギーシュが自分なりの補足を入れ

た。

「ぼくの家は、トリステインでは結構有名な軍閥貴族だからね。家名に泥を塗るような真似は絶対にできないのさ。『命を惜しむな、名を惜しめ』というのが家訓のグラモン家の人間が、いったい何を言うんだと思われるかもしれないけれど、できれば保険をかけておきたい……というのが正直なところなのだよ」

さらに、タバサが意見を述べた。

「わたしも彼らとほぼ同意見。ただ、名前を隠すことによるメリットもある」

その言葉に、全員が注目した。

「どういうことかしら？　タバサ」

「名前を隠すことによって『家名』に頼らず、実力のみを見てもらえる。あの家の人間なのだから、この程度できて当たり前、逆に、あんな低い家柄の者なのだから、できるわけがない。そう思い込まれる可能性がなくなるということ」

ああ、なるほど……と、反対側にまわっていた者たちが納得しかけたその時。さらなる追撃をかけた者がいた。それは……太公望である。

「彼らの言う通りだ。それにだな……一切家名に頼らないということは、すなわち『実力の証明』となり、それは、自分自身の大きな『自信』に繋がるであろう。だからこそ、わしは暗号名採用を推すのだ」

自分だけで勝ち取った『実力の証明』。なるほど、これは自信に繋がるだろう。反対に回っていた者たちも、この言葉で完全に納得した。

「ところで……才人は、何故賛成にまわったのだ？」

「えー！　だってさ、コードネームってなんか響きがカッコイイじゃん！！」

「おぬしに聞いたわしが間違っていた」「閣下ひでえ！」「いや、いまのは君が悪い」

――と、まあこんなやりとりがあり、気持ちのよい湖畔で暗号名を考えてみよう、という、いまいち噛み合わないシチュエーションの中、太公望がひとつの提案をする。

「そうだのう……できればで構わないので、その名前を聞いたら、いったい誰を指すのか。それが仲間内ではすぐわかるようなものが望ましいのだが」

「二つ名みたいなものかしら？」

ルイズの質問に、その通りだ！　と答えた太公望。と……ここで才人がふと閃いた。

「あのさ、みんなの『二つ名』か＜系統＞を、俺の国で使われてる言葉に直すっていうのはどうだ？」

「ふむ……具体的には？」

「そうだな……たとえばルイズなら『コメット』。これは『箒星』の別名なんだ」

……別名というか別言語なのだが、そのあたりはさすがに伏せる才人であった。

「あら、可愛い響きじゃない？　それ」

笑顔でそう言ったルイズに、だろう？　と、得意げな表情でもって応えた才人は、続いてタバサに目を向けた。

「あとは……そうだな、タバサなら『スノウ』とか。これは『雪』って意味」

「……悪くない。わたしはそれでいい」

このやりとりに、残る全員が面白そうじゃないか！　と、食いついてきた。

「なるほど。サイト、それだとぼくの『青銅』はどういう名前になるんだね？」

「『ブロンズ』だな」

「あたしの『微熱』はどうなのかしら？」

「キュルケの『微熱』はちょっと難しいなあ……どっちかっていうと『フレア』とかのほうがカッコいいかな。太陽の炎のことをそう呼ぶんだけど」

「あら、それいいじゃないの！　あたしの＜系統＞や＜情熱＞の象徴に、太陽の名は相応しいわ！」

実際には炎ではなく、太陽で起こる爆発現象のことを指すのだが……才人は、わかっていてもあえてそこには言及しないことにした。

「ぼくは、風と火の両方が使えるんだけど。近接攻撃も、クラスの中では上位だよ」

「それなら『ブレイズ』とかどうだ？　火炎と、刃（ブレイド）をかけてるんだけど」

あ、ちょっとかっこいいかも。レイナールはその名前について検討し始めた。

「あたしはどうかしら？」

期待に溢れる顔で聞いてきたモンモランシーに対しては。

「モンモンでいいんじゃないか？」

「ちょっと！　それはひどいんじゃないの！？」

「冗談だって！　……ええっと『香水』はなんだっけかな……あ、フローラルな香りなんてよくテレビとかで聞くから『フローラル』とかどうかな？」

「てれ……なんとかはよくわからないけど『フローラル』は悪くないわね」

「ちなみに……わしの場合はどうなるのだ？」

タイコーボーの場合か。たしか、こいつの二つ名って『腹黒』とか『悪魔』とか、ぶっちゃけヤバイのばっかりだったような気が。まさか『魔王』とか『閣下』って呼ぶわけにもいかないし……なら系統が安全かな。才人は地雷原を避け、無難なほうへ流れることにした。

「それなら『ウインド』かな」

「＜風＞の初歩魔法そのままじゃないか」「わしは別にそれでもかまわんのだが」「まぎらわしいから却下」「まあね、ちょっと混乱するかもしれないわね」

これまで順調にきていたにもかかわらず、思わぬところで躓いてしまった。

「えっと……それじゃ、閣下がいちばん気に入ってる『二つ名』って何だよ？」

「それなら決まっておる。『太公望』だ」

「ああ、そうなんだ……って、えええええ！！！」「ちょっと待って！」「それ『二つ名』だったの！？」「ずっと名前だと思ってたんだけど……」「わたしも聞いてない」「普通に本名だと」「ぼくもそう思っていたよ」

「召喚された時にちゃんと名乗ったはずなのだが……『太公望』呂望……と。まあ、わしはこの二つ名以外にも名前がたくさんあっ

てな。全部並べると、とんでもなく長くなってしまうので、師匠からいただいた二つ名で、かつ国内で最も有名な『太公望』これを普段から名乗りの際に使っておるのだよ」

厳密には『二つ名』とはちょっと違うのだが、意味合いは同じようなものなので、そのように説明する太公望。名前については「呂望（りょぼう）」「王奕（おうえき）」「伏義（ふっき）」さらには、本人すら忘れている「羌子牙（きょうしが）」という名前もあったり、歴史上に記された名も多数存在していたりするのだが、それは割愛する。

「ちなみに、その『太公望』というのはどういう意味？」

タバサが発したその質問に、太公望は答える。

「１０年程前……わしの師匠がな、当時まだ『大公国』だったわが国の、老いた大公様から依頼を受けたのだ。自分の年若い息子を＜力＞だけではなく、将来的に軍事や政治などの面で補佐できるような、素質のある若い＜使い手＞を紹介してくれないか……とな。そこで白羽の矢が立ったのが、このわしだったのだよ」

わしの師匠と既にお亡くなりになられた大公様は、旧知の間柄だったのだ。そう説明を入れつつ、太公望は先を続ける。

「数多くいた師匠の弟子の中で、わしは＜術者＞としての＜力＞は中の上という程度であった。だがその他の能力――つまり『軍学』や『政治学』については他を寄せ付けぬ程だったことと、わしが大公様のご子息と年齢が最も近かったのが、選ばれた理由らしい」

できれば他の者を選んでもらいたかったのだが……師匠も本当にお人が悪い。太公望はそう言うと、ため息をついた。

「その際に、師匠から『これからは、大公の望むような人物として相応しい振るまいをするべく、さらに研鑽を続けよ』という意味で『大公望（のぞむと書いてボウと読む）』という名をいただき、以後それを名乗るよう命じられた。これが、わしの『二つ名』の由来なのだ」

……またも大嘘をついているのだが、だいたい合っているので違和感がない。そして、これは例の『くすぐり刑』と『惚れ薬』による効果で発してしまった『国王がわしに文句を言えるはずがない』『国王の相談役』といった強烈な内容をある程度打ち消す効果があると同時に、自分に対して気を遣って『内緒』にしていてくれた彼らに対するフォローを兼ねている。

「ああ、なるほどね……やっと理解できたわ」「同じく」「あたしも」

そういうことならば『二つ名を常に名乗る理由』として納得できる。そして……これまで彼が行ってきた言動についても。今まで色々な意味で心臓に負担がかかっていた者たちは、なんだか少しだけ気分が楽になったような気がした。

それにしても、１０年前ということは……つまり彼は１７歳で、王宮に出仕するようになったということか。わたしは、いま１５歳だけれど……２年後は、いったいどうなっているのだろう。タバサは、自分の『将来』について、思いを馳せた。

ただ、今の話を聞いていて、ひとりだけ頭の中に引っかかりを覚えた者がいた。才人である。あれ、なんだっけ……似たような話を、どこかで……？

「それで……だ。才人よ、こういう場合はどうなるのだ？　わしはそもそも職を辞して、身分も捨て、大陸を渡る風のように、気ままな旅を続けていた『風の旅人』だ。いわば『世捨て人』、『隠者』といっても差し支えないのだが」

「あ、ああ、そうだな……悪い、ちょっと考えるから待ってくれよ」

太公望による、ある意味絶妙なタイミングで発せられた質問により、ついさっき生まれた疑問が一瞬で吹っ飛んでしまった才人。そして、彼は本来の役目であった「太公望に合いそうな暗号名」を検討し始める。

「うーん……旅人だと『トラベラー』でなんかイマイチだし、世捨て人だとよくわかんねーし……って、隠者!?　ああッ、そうだ確か……!!」

ふいに、才人の脳内に閃いた名前。ある意味、太公望にはぴったりかもしれない！

「あのさ……『ハーミット』ってどうだろう？　『隠者』の別名なんだけど、これには『隠れる者』以外に『助言する者』とか『迷い人を正しい道へ案内する賢者』っていう意味もあるんだ」

「彼にぴったりの名前」「あたしもそう思うわ！」

即座に賛成するタバサとルイズ。彼に『助言された者』としては当然である。他の者たちも、いいんじゃない？　といった感じで、賛意を示している。言われた太公望本人はというと、

「いや、それはちと格好が良すぎるというか……」

などと、珍しく照れたような表情をしていたりしたのだが、結局全員に押し切られてしまい。暗号名は『ハーミット』で確定してしまった。

「ところで、おぬし自身の暗号名はどうするのだ？」

「……あっ！」

これに答えたのは、キュルケであった。

「ヴァリエールの『盾』にして『剣』なんだからそこから考えてみたらいいんじゃなくて？　いつも、つきっきりで守ってあげてるでしょう？　サイトは」

「ちょ、ちょっと、えと、あの」「あ、いや、ちょっと、待って」

真っ赤になってゴニョゴニョと何かを言おうとしているふたりを、これは今後からかい甲斐がありそうだわ……と、思わぬところで、遊んだら面白そうなおもちゃを発見した子供のように、ニヤニヤ笑いを続けながら見守るキュルケ。

結局『ナイト（盾から連想）』は騎士と混同されるといろいろと不都合なため『ソード（剣）』と、いうシンプルながらもそれっぽい名前に落ち着いた。なお、この名前にはデルフリンガーも満足した。まるで俺っちと一体化しているみたいじゃないか、相棒に相応しい……と。

そして、彼らがどう呼び合うようになったのか。以下はその一覧表である。

・太公望『ミスタ・ハーミット』
・タバサ『ミス・スノウ』
・ルイズ『ミス・コメット』
・才人『ソード』（メイジではないため、ミスタがつかない）
・キュルケ『ミス・フレア』
・ギーシュ『ミスタ・ブロンズ』
・モンモランシー『ミス・フローラル』
・レイナール『ミスタ・ブレイズ』

以上、彼らが任務についている際に名乗る『暗号名』だ。

全員分の『名簿』をまとめた太公望は、にっこりと笑って頷いた。

「ふむ、これでほぼ『冒険前』にやるための準備はほぼ整ったな。あとは……ちょうどこの『ラグドリアン湖』に来ているので、おぬしたちにあることを教えておけば、ほぼ完璧であろう」

「あること……というのは？」

タバサの問いに、太公望は改めて全員を見回しながら答えた。

「前に、タバサには話したことがあるのだが……ここ『ラグドリアン湖』は『霊穴（パワースポット）』と呼ばれる＜力の溜まり場＞なのだ。しかも、ここは特に強い＜力＞が溢れている。ここで、あることをすることによって……＜精神力＞の最大量を増やすことができるのだよ」

……一瞬の間の後。

「えええええっ！！」「精神力の最大量が増やせる！？」

驚くのも無理はない……タバサは、大騒ぎしている仲間たちを眺めていて思った。自分も、初めてそれを知ったとき、驚愕したのだから。でも、どうして今、ここでそれを……？　彼のことだから、何か理由があるのだろうけれど。

「タバサには既に教えてあることなのだが、わしらの国に伝わる『瞑想』という技術を使うことにより、ただ眠るよりも圧倒的に早く精神力が回復できる。さらに、それを応用することによって、体内に＜予備の精神力＞を常に循環させておくことで＜精神力の器＞の最大量を1．5倍……修行を積めば、さらに多くの＜力＞を溜め込むことができるようになるであろう」

念のため確認するが、教えてもらいたい者は手を挙げよ。太公望の問いに、当然のことながら全員が一斉に手を挙げたのはいうまでもない。

「よしよし、おぬしたちはメイジとしての修行をきちんと積んであるから、1時間もあれば『回復』と『循環』の両方ができるようになるはずだ。そして……ギーシュ」

「な、なんだね？　ミスタ」

「おそらくだが、これを覚えることによって、おぬしは『ドット』から『ライン』へのランクアップを果たすことができるであろう。既に、壁を破る直前まで到達しておったからのう」

おおーっ！！　と、全員から声が上がった。ギーシュは、嬉しさ

のあまり、喜びを全身で表すかのようにぴょんぴょんと飛び上がっている。

「ちなみに才人。おぬしもこれを覚えておくといい。これは、メイジに限らず、精神を落ち着かせ、かつ体力の回復に役立つことなのだ。もちろん、おぬしについては基礎から教えるからな」

「もしかして＜気＞のコントロール、ってやつか!?」

「そうだ。よく知っておるではないか」

「……ひょっとして＜気弾＞が出せるようになったり、しちゃったり、して?」

「その＜気弾＞とやらのことはよくわからんが……どれ、ちとやってみせようかの」

全員、少しの間、静かにしていてくれ。そう断りを入れた太公望は、湖のほうへ向き直って座り込むと、両手で＜印＞を結び、体内の＜力＞を集中させる。そして、湖面の一点へ向け気合いを発する。

「ほッ!!」

――と、それまで静かだった湖の水面に、いきなりに高さ数メイル程度の水柱が、まるで噴水のように勢いよく立ち上り、その後バシャン!　と音を立てて潰れた。

「……と、まあこういう＜術＞なのだが」

「うは!　＜水遁（すいとん）の術＞!!」「な、ななな、なに今の」

まさか＜先住魔法＞！？　そう言って怯える子供たちを落ち着かせると、太公望は改めて説明を開始する。

「これは、体内を巡るもうひとつの＜力＞、人間だけではない、全ての生物が宿す＜気＞というものを利用した＜術＞だ。よく『気配を消す』などというであろう？　これは、この＜気＞を一時的に断つことで、相手に存在を気取られぬようにしておるのだよ」

おおーっ！　という声を上げる参加者たち。タバサにも、それには覚えがある。なるほど……わたしは無意識に、その＜気＞というものを扱って、相手の気配を探ったり、身を潜めたりしていたのか……。

「＜魔法＞と違い、こうして＜印＞を結ぶだけで展開可能だ。杖も、ルーンも、精霊との契約も必要ない。ただ、ハッキリ言うが、見た通りたいした威力は期待できない。おまけに習得には＜気＞を扱うセンスと、長い修行時間が必要である割に対費用効率が悪い。それなら＜魔法＞を使ったほうがよいであろう？　わしらの間でも、わざわざこれを覚える者はほとんどいないのだ。わしが扱えておるのは、単なる師匠の趣味だ」

まあ＜メイジ＞以外の者が、これを利用して土煙を発生させれば、逃げたりする時に便利かもしれんが。そう補足した太公望の言葉に、才人が「＜木の葉隠れ＞とか＜土遁（どとん）＞もできるんじゃないか！？　コレ」と、ひとり興奮している。

「ちなみに、才人にこれを教えるのは、体力の回復を早めることと、敵や味方の気配に敏感になってもらうことが目的なのだ。＜術＞については難しすぎて、そうそう簡単に習得できるものではない

ぞ？　わしだって数年かかってようやくあの程度なのだ」

その言葉に、一瞬がっくりと落ち込みそうになった才人であったが、逆に時間をかければいつかできるようになるという意味だとわかると、真面目にやってみようという気になるから不思議なものだ。

「ねえ。これって、もしかしてあたしに＜魔法＞の感覚を教えてくれたときの……？」

「その通りだルイズ。あれは、あくまで流れだけだがのう。だからあのとき『ルイズは特別な感覚を持っているから、掴める。他のメイジには意味がない』と言ったのだよ」

やっぱり、ミスタ・タイコーボーは『ハーミット』ね。ルイズは、彼をこの地へ呼び寄せてくれたタバサと『始祖』ブリミルに、心から感謝した。

「では、さっそくやりかたを教えよう。だが、これはタバサには既に教えてある内容なのだ。よって、タバサは少し休憩をしていてくれ」

そう言って、太公望はタバサを除く全員に水際まで移動するよう伝えると、全員がそちらへ向かうのを確認した後、タバサへ向けて小声で囁いた。

「タバサ。＜偏在（ユビキタス）＞は何体出せる？」

「まだ2体」

「よし。その2体を彼らから見えない場所に出し、そして、その

＜偏在＞と自分自身の中に『瞑想』によって＜力＞を蓄えるのだ。そして絶対誰にも気取られぬよう、付近の森に待機させておけ」

「つまり、これは」

「そうだ、例の件が動き始めている。だからこそキュルケにここへ来るよう誘導してもらったのだ。決行は明日の夜。心のほうは落ち着いているか？」

「みんなのおかげ。だいぶ、落ち着いた」

「よし。ここでの『瞑想』は、魔法学院で行うそれよりも遙かに効果が高い。＜偏在＞2体と自分の中に＜力＞を蓄えておくことで、このあと動きやすくなる」

「わかった」

「では、わしは向こうの者たちに教えてくる。おぬしは」

「瞑想しながら、待っている」

――頷き合ったふたりは、それぞれの準備をすべく立ち上がった。

第５２話　水精霊団、暗号名を検討す（後書き）

ジョゼフも好きだけど、ジョセフも大好きです！　「ハーミットパープル！！」と、いうわけでコードネームを決めてみました。一部を除く者たちが、いろいろと間違った解釈で名づけられていますが。とはいえ、これを多用するわけではありませんのでご安心ください。どちらかというと太公望の名前の由来を出すための言い訳に引っ張ってきたようなものでして……。

そして、ようやく才人が「何か」に引っかかりを覚えました。気のコントロールについては、さすがに気弾撃たせたり忍術覚えたりはしませんｗ　あくまで回復用、及び気配察知、隠形用ということで。これは＜ガンダールヴ＞の＜力＞の回復にも関係してきます。

次回は、いよいよ救出ミッションスタートです。

２０１１／０５／１８　誤字・脱字修正

第53話　交差する歴史の大いなる胎動

――救出作戦開始数日前。帝政ゲルマニアの首都・ヴィンドボナ。

『上司』から依頼された仕事の手配を行い、さらに次の段階へ進むための準備を整えた『土くれ』のフーケ――今は、かつて魔法学院の秘書として振る舞っていた時の名前である『ミス・ロングビル』を名乗っている女性は、鏡の前に立ち、ため息混じりに呟いた。

「身の安全のためと、わかっちゃいるんだけど……やっぱり、違和感があるねえ」

かつて、初夏の新緑のようであった彼女のつややかな緑色の髪は、その準備のために赤みの強い茶色へと変化していた。『魔法の染料』で、ゲルマニア人に多い赤毛に染めたのである。

これで、さらに肌を小麦色に染める、あるいは焼けば完璧にゲルマニアの人間にしか見えなくなるのだが、指示書にはそこまではしなくてよいという注釈がついていたので、ロングビルはそれに甘えることにした。

そして、髪を梳き、最近ゲルマニアで流行しているアンティーク調の洒落た髪留めでアップにまとめると、それだけでこれまでとは全く別人のように見えた。まるで、以前行っていた『裏の仕事』をしていた頃のように。

「つまり、それだけ重要かつ難しい仕事ってことよね。今回の依頼は」

これまた普段とは異なる上品な銀縁の眼鏡に、首元には、同じく銀の細工物をあしらった皮ごしらえのチョーカーをつけ、唇に薄くルージュを引いた鏡の中の『別人』は、妖艶に微笑んでいた。

そう……彼女は、期待をしていたのだ。ここまで、彼女の上司たる太公望は、彼にとって何か重要な情報を送った、あるいは通常よりもちょっと難しい依頼をこなした後、決まって『ボーナス』と称した追加料金を支払ってくれていたから。しかも、最初に『ボーナス』が支払われた際に、

『今後も、こういった特別な仕事を依頼した場合は、給与とは別に追加料金を支払う』

と、いう契約書と、仕事の難易度別に、より具体的な金額を記した追加料金表つきの一覧を送って寄越してきたのだ。これで俄然やる気になったロングビルは、これまで以上に精力的に仕事をこなすようになっていた。

「風竜3頭の手配に、手紙の中継。それと、送迎及び護衛。よっぽど重要な『荷物』らしいねえ……中身は詮索しないけど、これは期待ができそうね」

ロングビルは、小さく呟いた後……いつものそれとは違う、やわらかな微笑みを浮かべた。彼女が多くの貴族を敵に回してまで＜マジック・アイテム＞を盗み、それを高値で売り払っては、金やその他の品物に変えていたのには理由がある。それは――故郷に、たくさんの家族を残してきているから。

彼女は、故郷の近くにある小さな村で、孤児院のようなものを運営していた。そこには、一部の貴族たちが起こした反乱によって、

家族を失った大勢の戦災孤児たち、そして――ロングビル、いや『マチルダ』にとって『妹』のような存在が、彼女の仕送りを頼りに生活していたのだ。

子供たちはまだ皆幼く、稼げるような仕事の口がない。妹同然の娘には特別な事情があって、村の外へは出られない。つまり、家族の中で働けるのは自分だけ。よって、彼女がたくさんお金を稼ぐことができたなら、それは子供たちと、大切な『妹』に人並みの生活をさせてやれることに繋がる。

「最近は、みんなが毎食しっかり食べられるようになった、おまけに全員分の新しい服までつくることができたって手紙を、あの子は寄越してきたわ。本当に、新しい上司さまさまだ……って、今までだったら素直に喜べたんだけどねえ……」

そう……ようやく軌道に乗り始めたと思えた新しい生活に、またもや陰りが見えはじめているのだ。仕事に関することではない。それは『マチルダの妹』から届いた手紙に書き添えられた一文にもあった内容。

――レコン・キスタ。

最近になって、ここゲルマニアにも噂が届くようになったその『名』を掲げる集団は、なんでも「ハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて結びついた有能な貴族の連盟にして『聖地』を取り戻すべく、その旗頭となり世界に革命を起こす者たちである」などと、嘯いているらしい。

そもそも『ブリミル教』の信者――つまりハルケギニアに住まう、ほぼ全ての人間たちにとって『聖地』とされる場所は、エルフによ

って奪われてから幾百年の時が流れている。そして、幾度となくそこを奪い返すべく、王族たちは軍を率い、彼らに戦いを挑んできた。だが……エルフたちの行使する＜先住魔法＞は強力無比で、さらにその文明は、ハルケギニアのそれよりも遙かに進んでいる。

よって、王族だけではなく、ハルケギニアに住まう者たちは皆エルフを恐れ、戦いを挑むことの愚を嫌というほど学んできたのだ。にも関わらず、彼らは再び立ち上がろうとしているのだ――その手始めとして、彼女の故郷にして、妹たちが住まう国『アルビオン王国』の王権を打破すべく、彼らはとある事件をきっかけに反乱を起こした貴族たちと手を結んだのだ。

世が世ならば、もしかすると自分自身も『レコン・キスタ』に身を投じ、彼女とその家族の立場を貶めた、憎き『アルビオン王家』に復讐すべく、共に立ち上がっていたかもしれない。だが、今の彼女には、大勢の守るべきものたちがいる。間違っても、そんな真似はできない。

今は、まだ戦況が膠着しているようだが……この先どうなるかわからない。よって、もしもそれが可能であるのなら、妹や子供たちを、この安全なゲルマニアまで呼び寄せたい。でも、それには様々な問題が……。

と……そこまで考えて、ロングビルはふと思いついた。駄目元で、上司に現状を報告し、相談してみようか、と。あの切れ者ならば、ひょっとすると自分には思いつかないような、いい手を考えてくれるかもしれない。

「もし、それを実現してくれたなら……わたしは、彼に生涯の忠誠を誓っても構わない。やれと言われた仕事なら、たとえどんなも

のでもやってみせるわ」

わたしのような者をも抱え込んだ、懐の深い彼ならば『妹』の持つ特異性を理解した上で、いい案を出してくれるかもしれない。その思いに望みを賭け、ロングビルはペンを取ると……詳細な『相談事』を羊皮紙に記し、伝書フクロウへと託した。

――その後、全ての支度を終えた彼女は、改めて上司から指定された場所へと赴くべく、これも上品かつ目立たない色のマントをその身に纏い、隠れ家を後にした――。

○●○●○●○●

――そして救出作戦当日の夕食後、タバサの部屋。

「あの『土くれ』のフーケを雇ったですってェ！？」

そこには……驚愕の叫び声が響き渡っていた。もちろん、それはタバサが展開していた＜サイレント＞の効果によって、外に漏れ出るようなことはなかったわけだが。

「ククク……そうだ。国の上のほうに『交渉』を持ちかけてな」

いわゆる『政治的取引』というやつだよ。邪悪といって差し支えない笑みを貼り付けたまま、そう嘯く太公望に、キュルケ、そして彼の『パートナー』たるタバサは、驚きと恐れがないまぜとなった顔を向ける。

「彼女は、チェルノボーグの監獄へ送られたはず」

タバサが震え声でした質問に、太公望はまるで息をするような気軽さでもって答えた。

「ああ、その通りだ。だが『蛇の道は蛇』といってな。『裏』には、色々な世界が広がっておるのだよ。そして、そこでは様々な事件が、つねに発生しておるのだ」

その言葉が発せられた直後、窓から差し込んだ双月の淡い光が、椅子に腰掛けていた太公望に昏い影を落とす。その影が、一瞬『闇の衣』のように見えたのは、彼女たちの錯覚であったのだろうか、それとも――？

「そう、たとえば……多額の賄賂を受け取っていた証拠だの、請け負うべき役目をおろそかにして、浮いた金で贅沢三昧をしておった件についての証言者が複数現れた……といったような取り返しのつかない失態が、突如わんさと表に出てきてしまった、気の毒かつ愚かな男がいるらしくてのう。本来ならば彼女が入っていた牢屋の中へ、代わりにぶち込まれておるらしいのだ」

その証拠に、これまでフーケが既にチェルノボーグの外にいるなんて噂は、一切表に出てこなかったであろう？　そう言ってクツクツと小声で嗤う太公望を見て、タバサは文字通り頭を抱えてしまった。有能な『情報斥候』を雇ったという報告を受けてはいたが、まさかそれが、自分たちの手で捕らえた『土くれ』だとは、思ってもみなかったのだ。いや、普通なら想像すらしない。

しかも、彼が『裏』から手を回した結果、あの難攻不落の牢獄にして、平民たちは勿論のこと、貴族からも恐れられている『チェルノボーグの監獄』から彼女を脱獄させた上、それを悟らせてすらい

ないとは。おまけに、いつのまにか『トリステイン王国の上層部』との繋がりまで持っている……。

……そういえば、彼本来の専門は『政治学』だと言っていた。実際、この手腕は半端ではない。

「『ある意味最も敵に回したくない男』って二つ名は、伊達じゃないってことね」

青い顔で呟いたキュルケに、タバサは心の奥底から同意した。太公望は、味方に対しては篤すぎるといっていいほどに義理堅い面を持ち、争い自体も好まない。実力さえあれば、今回のフーケのように、一度敵対した相手すら取り込む度量をも持ち合わせている。

だが……いったん『攻撃対象』と認識した相手に対しては、たとえ女子供であろうとも一切容赦がない。それは、例の『防御壁事件』で、タバサそしてキュルケのふたり共に、その身でもって理解している。おそらく、その『愚かな貴族』とやらは『平和的交渉』を持ちかけた彼の、まるで無邪気な少年のような見た目と振る舞いに騙され、侮った結果――そのような事態に追い込まれたのだろう。

――彼を敵に回すような真似だけは、絶対にしてはいけない。タバサとキュルケは、揃って固く心に誓った。

……実際のところ『国の上のほう』とは『国立トリステイン魔法学院』の長。よって、太公望は嘘をついているわけではない。そして『政治的取引』の相手はというと、その学院長たるオールド・オスマンその人を指し、『交渉』はフーケ本人と直接行ったものである。その彼女を実際に逃がしたのも、チェルノボーグへ送られる道中。しかも太公望が実行犯なのではなく、これまたオスマンの仕業

だ。

そして『愚かな貴族』は、ある意味自業自得で転落人生を歩んでいるだけであって、彼の処遇に関して、太公望はもちろんのこと、フーケも、そしてオスマンも一切手を出してはいない。これは『言い方ひとつでここまで持たれる印象が変わる』という、ある意味好例……いや、悪い印象を受ける最たるものであろう。

「そういうわけで、今回の『救出作戦』には彼女――『ミス・ロングビル』に参加を依頼している。一見してわからぬよう変装をしてもらっておるが、おぬしたちの眼力ならば一発で見抜くであろうから、先に情報を開示することにしたのだ。いざという時になって争いになったりしたら、目も当てられぬからのう」

「まあ、確かにあたしたちなら……ね」「その情報開示については理解できる」

納得した、と、頷くキュルケとタバサ。確かに、かの大怪盗『土くれ』が『逃亡計画』に協力してくれるというのは非常に心強い。

実際、あの『学院襲撃事件』の際に太公望が居合わせなかったら、最悪の場合『破壊の杖』を盗まれた上、死人が出ていた可能性すらあったのだ。それほどの実力者がこの大事に味方になってくれるというのは、正直なところ、今のタバサにとっては千人の兵を得るよりも有り難い。

「でだ……彼女の件についてはこれでよいとして、今夜、双つの月が真上に到達する時刻より作戦行動に移るわけだが……タバサよ、おぬしが現在偵察に出している＜遍在＞の様子はどうだ？」

「1体目『スノウ』は、予定通り昨夜のうちに、誰にも見られることなく『目標』と接触することに成功。周囲に見張りはいないが、警戒は怠っていない。2体目『フレア』は、風竜到着第一ポイントにて近隣を哨戒中。現在異常なし。何かあったらすぐに報告する」

昨日決めたばかりの「暗号名（コードネーム）」、それもタバサ本人とキュルケのそれを＜遍在＞に利用している。そして、彼女の淀みない答えに満足した太公望は、彼女に黙って頷くと、続いてキュルケに向き直った。

「おぬしは、今回の作戦の『鍵』だ。ツェルプストー領内までは、3体の風竜を乗り継いで、かつ直線ではなく特別な航路をとって移動する。これは、竜の手配先をそれぞれ分けることにより、逃亡ルートをできるだけ割り出されないようにするための措置だ。そのぶん時間がかかるため、道中辛い思いをさせることになるであろう。にもかかわらず、それをわかった上で協力してくれることに感謝する」

そう言って、太公望はキュルケに頭を下げた。タバサも、彼と同様に礼をする。

「ふたりとも、今更何を言っているのよ。親友を助けるのに、理由なんて必要ないでしょう？　お父様も、あたしの行動を喜んでくださったわ。だからこそ別荘なんかじゃなくて、うちの屋敷の一角を提供してくれたのよ。それに、哨戒兵を増やすような真似もしていないわ。普段と違う行動をしたら、怪しまれるものね」

クスリと笑ってキュルケが言うと、太公望は改めて彼女に一礼し、タバサは……彼女がこれまで一度も見せたことのなかった、晴れ渡る空のような笑顔でもって、それに応えた。ある意味、この顔を見

られたのが今回最大の報酬かもしれないわね……キュルケは、内心そう思った。

「タバサは＜遍在＞でなんとかなるが、キュルケの不在については隠しようがない。下手に病気などと偽って、見舞いが来ても面倒だ。よって、戻ってくるまで『知人が突然倒れた。父からその報せを受け、慌てて見舞いに出かけた』という設定で行動する。内容を聞かれた場合は＜先住魔法＞の使い手によって呪われたらしい、ということにしておいてくれ。学院を休む旨の報告は、紙に『急いで親元へ行かなければならない』とだけ書いて、わしに託して欲しい」

「ずいぶん具体的だけど、当然理由があるのよね？」

「もちろんだ。これは、ヴァリエール領での歓待が終わった後、おぬしの実家へ移動するための『言い訳』として使う。あくまで、移動理由について訊ねられたとき、あるいは何らかのトラブルが発生した場合に限るが。その場合、わしが＜解呪師＞という話を出すので、覚えておいてくれ」

「＜解呪師＞？　それって何かしら」

キュルケの疑問に、即座に答える太公望。

「タバサには既に説明してあるが、わしらの同盟が敵対していた『帝国軍』には＜先住魔法＞の使い手たる妖魔が大勢いたのだ。そのため＜魅了＞や＜呪縛＞といった人為的な＜呪い＞に対抗するための専門家がいる。わしは、そのひとりでもあるのだよ」

……実際はまたしても太公望の捏造設定なのだが、彼は真顔でそれっぽい雰囲気を演出する。

その太公望の言葉に、タバサが補足する。

「実際、彼の腕は確か。母さまの『魔法薬』の効果を取り除く方法は、ガリア国内でも『フェニアのライブラリー』でも発見できなかった。にも関わらず、彼は簡単な診察だけでその原因と対処法を発見してくれた上、治療の準備まで既に開始してくれている。例の『惚れ薬』についても、もしも彼以外の人間が飲んでいたら、秘薬なしで＜解呪＞できたと聞いている」

「うそっ！　それ、本当なの！？」

「うむ。おかげで１５０エキューも損をしてしまったわ。まあ、自業自得なのだが」

そうだったの……キュルケは、なんだか納得できてしまった。彼がタバサの『召喚』によってこの地へやってきたのは『事故』なんかじゃない。タバサの強い願い――お母様を助けたいという思いが、奇跡を生んだのだ、と。やっぱり『運命』なんじゃないの、このふたり……。

――これにより、彼女の中で燻っていた『葛藤の炎』のうち一柱が完全に消えることとなる。

「でだ、キュルケと共についてゆくのは『スノウ』とする。本当ならば、タバサ本人が一緒に行きたいであろうし、キュルケのご実家に対し礼儀にもとる行為ではあるのだが……この先は、言わずともわかるであろう？」

「ええ、もちろん」「もし移動中に『任務』で呼ばれたら、言い

訳ができない」

ふたりの解答に、真剣な顔で頷く太公望。

「その通りだ。よって、タバサ本人については、わしと共に学院に戻ってもらう」

「事情の説明は、このあたしに任せて。だいたい、お父様はそんな理由で怒るようなひとじゃないわ」

――そして、3人はその後さらに詳細な計画を練り、話し、確認しあうと――行動に移った。

○●○●○●○●

――刻は動き……深夜、トリステイン国内・風竜到着第一ポイント。

「ちょっとミスタ、大丈夫!?」

「う、うむ……少し息を整えれば大丈夫だ」

ラグドリアン湖から約3リーグほど離れた場所にある森の中の、少し開けたポイントまで、ほぼノンストップ……しかもふたりという『大荷物』を抱えて飛んできたのだ。タバサに＜エア・シールド＞である程度向かい風への対策を手助けしてもらってはいたものの、さすがに重労働だったのだろう。太公望は、血の気が失せたような顔をして、おまけに肩で息をしている。

「まあ、このために『ここ』を中継地に選んだのだ」

「ここを、選んだ？」

顔に疲れの色を出しながらも、ニヤリと笑って『打神鞭』を掲げた太公望は、その握り手部分にある丸いボタンをポチッと押す。すると、ポンッ！　というちょっと気の抜けたような音と共に『杖』の先から、1枚の『旗』が現れた。

「きゃっ！」「それは？」

突然現れた『旗』に驚くふたりへ、悪戯が成功して喜ぶ子供のような顔で答える太公望。

「フフフ、かっちょいいであろう？　これは『パワースポット』からエネルギーを吸い取って、あっという間に＜力＞を回復してくれる『杏黄旗（きょうこうき）』という＜マジック・アイテム＞なのだ」

……かっこいい……のかしら？　おまけに＜力＞を回復……！？

そんな疑問に満ちた目で『旗』を見ていたキュルケであったが、その『旗』をひらひらさせていた太公望の顔色が、みるみるうちに良くなっていくのを見て仰天した。

「なによそれ……！　とんでもなく価値のある＜マジック・アイテム＞じゃないの！！」

キュルケの出した感想はもっともである。昨日の『瞑想』による＜精神力回復＞だけでもびっくりしていたのに、今日はそれの数倍の効果がある（と、思われる）アイテムが登場したのだ。驚くなというほうが無理だ。

「ただ、ちと大きな副作用があるので、多用はできぬのだ」

「副作用……とは？」

「ああ、反動でな……以後1週間ほど＜力＞が極端に低下してしまうのだ。その間は、当然この『杏黄旗』は言うに及ばず『瞑想』での＜蓄積＞すら不可能となる。便利なものには、それなりの代償が必要……というわけなのだよ」

……実はそんな副作用などないのだが、さらりとハッタリをかます太公望。もちろん、多用させられてはたまらないという意味で、そんなことを言っているのである。なにせ、身体の疲れ自体はこの宝貝（ぱおぺい）では取れないのだから。

ちなみにこの宝貝『杏黄旗』の本来の効果は『＜生命力エネルギー＞を＜特定の場所＞から取り込み、自分のそれへと変換。強大な＜力＞に換え、より大きな事象を発生させる』というものである。

念のため、太公望は前もってここ『ラグドリアン湖』と『魔法学院』で効果を試してみたところ、学院を対象として選んだ際には残念ながら発動せず、この湖では効果を発揮した。おそらくだが、このハルケギニアの地においては＜星の意志の力＞を特に強く宿す場所から、その＜力＞を取り込むことができるのだろう。そう、彼は結論していた。

「……さて、待ち人が来たようだのう。素晴らしい、時間ぴったりだ」

――振り仰ぐと、空の上から一頭の風竜が舞い降りてきた。

「あら、お嬢ちゃんたち、お久しぶり……と、いっても驚いてはいないみたいね」

以前とは全く別の姿に変貌を遂げた『土くれ』のフーケこと『ミス・ロングビル』は、タバサとキュルケのふたりへ、にこやかに微笑んで見せた。どうやら『上司』から前もって説明を受けているようだね。さすがに抜かりがないわ……ロングビルは、内心で舌を巻いた。

「あなたのことは、彼から聞いている。今日はよろしくおねがいします」

そう言って、タバサはペコリと頭を下げた。続いて、キュルケも。

「ふふっ、ちゃんとそこの彼からもらうものはもらってるから、気にしないでちょうだい。それにしても、貴族の娘のあんたたちが、わざわざ頭を下げるなんてね。わたしも偉くなったもんだわ」

思いもよらぬ、ロングビルの柔らかな声にタバサは驚いた。『土くれ』は仮の姿で、実は……これがこの人物本来の姿なのではないだろうか……と。

いっぽうキュルケのほうはというと「例の女将軍といい、ルイズのお姉さんと盛り上がっていたことといい、このフーケの姿といい……ミスタって、やっぱり知的な女性がタイプみたいね。なら、タバサなら充分資格ありだわ。あと何年か待てば……っていう条件つきだけど」などという、相変わらず場にそぐわぬ感想を持っていたわけだが。さすが『恋愛を至上』とするツェルプストー家の名は伊達ではない。

タバサはともかく、キュルケからそんな感想を持たれているなどとはつゆとも知らぬ太公望は、早速彼女、ミス・ロングビルに労いの言葉をかけていた。

「苦労をかける、ロングビル。では、これから『目標』を回収してくるので、キュルケと共にこの地で少し待っていてくれ」

その言葉に、全員の緊張が引き締まった。

「承知しましたわ、ご主人様」「ふたりとも、気をつけてね」

頷いたふたりは、揃って空へと舞い上がった。なお、この間周囲警戒のために『フレア』が第一ポイントと屋敷の中間地点を見張っている。

「周辺、異常なし」「おなじく、このあたりから怪しい気配は感じられぬ」

互いに警戒しながら屋敷へと向かったふたり。そして、それを見送ったキュルケとフーケは、同じく辺りに注意しつつ、それぞれ全く別の意味で、ふたりの無事を祈り、その帰還を待った――。

○●○●○●○●

――オルレアン大公邸に無事到着した太公望とタバサのふたりは、老僕ペルスランに客間のホールへと案内されると、早速脱出のための準備を開始する。

ホールのソファーでは、既に『スノウ』の＜スリープ・クラウド＞によって眠らされたオルレアン大公夫人――つまりタバサの母が、静かな寝息を立てていた。

その彼女を起こさぬよう、髪を1本、そして指先にほんの少し傷をつけて血をひとしずく手に入れたタバサは、太公望が持ってきた特別製の『小さなガーゴイル』1体に、その髪を埋め込み、血を垂らす。彼女は、全く同じように、幼いころから忠実に自分たち家族に仕え続けてくれた老僕から髪と血をもらうと、処置を行った。

すると、2体の人形は少しずつその姿を変え……やがて、ふたりとそっくりの姿になった。

「では『新しいペルスラン』殿。これからの仕事についてはわかっておるな？」

『新しいペルスラン』と呼ばれたガーゴイルは、深々と一礼した。そのお辞儀をする姿まで、本人と全く同じ、そして見た目も……そこに宿る一部の『魂魄』までもが生き写しであった。

そもそも、かの男爵夫人の造ったこの『特別製のガーゴイル』は、太公望の『本気』の眼力を持ってしても若干の違和感程度しか覚えられず、彼自身が直接触れてみて、はじめて身体に宿る『魂魄』の儚さを感じ取り、ようやくその正体に気がつけた程に精巧な『人形』なのだ。到底ハルケギニアのメイジに真の姿を見破れるようなシロモノではない。特に鋭い感覚を持つ者が、せいぜい『若干の違和感を覚える』程度であろう。

「『新しい奥方さま』は……すまん、タバサ」

タバサは、すぐさま『彼女』に＜スリープ・クラウド＞を唱える。悲しいまでに、彼女のそれは『薬』の症状が現れているとき、つまり……これまでと変わらぬ状態そのままであったから……。

ある意味誤魔化しやすくはあるのだが……タバサには、辛い思いをさせてしまったのう。小さくため息をついた太公望は、眠ってしまった『新しいタバサの母』を寝室へ運び終えた後、改めて全員に対して素早く指示を行った。

「よし、ここからが本番だ。タバサよ。外へ出たら『スノウ』と共に＜フライ＞でそれぞれ一人ずつ手を取り、浮かび上がれ。できるだけ広がりすぎないようにしてな。それをわしが引っ張って、第一ポイントまで全速力で連れて行く」

ここに来るまでの間、ふたりの間では既に何度も確認した内容だ。つまりこれは、どちらかというと老僕ペルスランに対しての説明である。

「『新しいペルスラン』殿。おぬしたちにとって本来食料は必要ないであろうが、これまでと変わらず入手し、消費してくれ。もし可能であれば、そのうちの一部は保存のきくものとし、屋敷の奥に貯蔵しておくのだ。敵に違和感を与えない程度の少量をな。また、生活習慣についても一切変えることなく行動してほしい。ここで変えてしまうと、王家に気取られてしまう可能性があるからの」

我々も、これから時折顔を見せる。その時も、普段と変わらぬ対応を頼む。そう頼んだ太公望とタバサに対し『新しいペルスラン』は簡潔に答えた。

「承知致しました」

そして深々と頭を下げた『彼』へ頷き返した太公望は、屋敷内で最後の指示を出す。

「外に気配はない。さあ……出発だ」

愛する母を抱え、太公望の手を取り空へと舞い上がったタバサは、一度も後ろを振り返らなかった。ただ、謝罪し……そして願った。『ガーゴイル』に置き換わった『新しい母』の手元に残してきた、小さな人形――今は自分と名前を交換し『シャルロット』と呼ばれているその娘に。

――母さまは必ず救ってみせる。だから、どうか……このわたしたちの身代わりとなってくれた、そのひとたちを守ってあげてください……と。

そして、この夜から……オルレアン大公邸宅は、完全なる人形屋敷となった――。

○●○●○●○●

――タバサたちが、オルレアン大公邸宅を後にしたのと、ほぼ同時刻。

ガリア王国の首都・リュティスの中を流れる『シレ川』の左側に建つ巨大な宮殿・ヴェルサルテイル。その一角に位置する特に大きな建造物『グラン・トロワ』。

ガリア王族の象徴たる『青い髪』にちなみ、それと同じ色の煉瓦

によって造られた宮殿の一番奥に位置する部屋に、青みがかった髪と髭によって彩られ、見る者をはっとさせるような美貌を持つ――ガリア王国千五百万の頂点に立つ人物が居た。

今年で４５歳になるはずであったが、未だ３０過ぎ程度にしか見えないその男――ガリア国王ジョゼフ一世が、一見その地位に似つかわしくないと思われるものの前に立ち、にこやかに笑っていた。

彼の前に置かれたそれは……差し渡し１０メイルはあろうかという、巨大な箱庭。国中から腕利きの彫金師を集め、数ヶ月の時をかけて造られた――ハルケギニア全土を模した、壮大な模型であった。

そして、そんな彼のすぐ側には、美しく長い黒髪と、紅く眩る瞳を持つ……まさしく妖艶という言葉を体現しているといって差し支えない、美しき女性が控えていた。

「ミューズよ。余の愛しいミューズ！　その話はまことか！？」

「はい。まさかこのハルケギニアで『彼』の名を聞こうとは、思いもよりませんでした。イザベラ様からの報告書を拝見した際には、まさかと思いましたが」

「ふむ、新たな『指し手』となる可能性がありそうだ……少しは楽しませてもらいたいな！　だが……今は、作りかけの『玩具』がようやく動き出したばかりなのだぞ？　いやいやいや、これは困った。まったくもって困ったものだ！」

ジョゼフ一世は、心底参ったといったような表情で、目の前の箱庭を見た。そこには……ひとつの大陸――その上に乗せたものまで全てを精巧に再現した模型――が配置されていた。それは『白の国』

とも呼ばれ、世界に宿る＜風の力＞の結晶たる『風石』によって天空に浮かぶ巨大な陸地――『アルビオン大陸』。

「だが、そんな困りごとならば、余はいつでも大歓迎だぞ！　それに、どうせ果実をもぎ取るならば、きちんと熟れてから行ったほうが、より美味しく食べられるというものだ。違うか？　ミューズ」

ミューズと呼ばれた黒髪の女性は、その問いに微笑みをもって応えた。

「それに……成長の途中で、多少の『障害』を与えたほうが、より甘みを持つ。まずは、例の屋敷を見張る者たちの『質』を上げておいてやるとするか。それと……最近どうも面白い『遊び相手』を手に入れてはしゃいでいる様子の我が娘に、この父が！　自ら指示を出してやるとしよう！！」

そう言って手を出したジョゼフの手に、黒髪の女性は指示を記載するための紙とペンを差し出した。それを受け取った国王は、何事かをさらさらと書き記すと、呼鈴を鳴らして伝令兵を呼び出し……それを手渡した。

――そして、その伝令兵がイザベラの部屋へと向けて移動を開始しはじめた頃。

ある意味、間一髪。見張りの『質』が上がる直前に『作戦行動』に移ることができたタバサたちは、無事第一ポイントへ到達すると、彼らの到着を今は遅しと待ちこがれていたふたりと1体の前へと降り立った。

そして、一路ゲルマニアへと『逃避行』を開始しようとしていた一行が、第二ポイントへ向かうべく離陸する直前。太公望は、信頼を寄せている己の情報斥候たるミス・ロングビルへ向けて、こう告げた。

「頼まれた例の件についてだが、おぬしが無事この仕事を終えて『宿』に到着する頃、あの『仕事』にかかる前に必要なマニュアルが届くよう、既に手はずを整えてある。それにかかるであろう費用も併せて、だ。つまり……絶対にこの仕事を成功させてくれ。頼んだぞ」

それを聞いたロングビルの目が大きく見開かれ……そして彼女は、力強く頷くと……風竜の手綱をとり、彼らから託された者たちと共に、空高く舞い上がっていった。

○●○●○●○●

――翌朝。『王天君の部屋』の中。

そこの主たる者と、そのパートナーは、与えられた『指示書』を見て呆然としていた。

「オメーの親父……ずいぶんとおっかねぇなぁ、オイ」

「なるほど……これは確かに効果的な『鎖』よね」

さすがは、一国の王……しかも、これだけ栄えている国の長だ。考えることが、実にえげつねぇぜ。ひょっとして、オレの存在にも気が付いてんじゃねぇか？　おぉ、怖い怖い。せっかくぐうたらで

きる生活を手に入れたと思った矢先に、こんなのを相手にするハメになるのかよ、太公望ちゃんは。

「まぁ……身から出た錆ってヤツだ。ククッ……せいぜい頑張ってくれよな」

「どうかしたの？　オーテンクン」

「いや……なんでもねぇよ。さ、とっととソイツを送りつけてやんな」

「ええ、もちろんそのつもりよ。でもね……これを見たふたりがどんな顔をするのか、すぐ側で見られないのが本当に残念だわ」

そう言って、しょんぼりとした――だが、口端が微妙に上がっている――顔を見せたイザベラに、王天君がこれまた実に無念そうな――しかし、その目に実に愉快げな色を湛えた――表情で答えた。

「下手に『繋ぐ』と、アイツに気取られる可能性があるからよぉ……ここはぐっと我慢しねぇとな」

正直、オレだって現場が見たいんだ。そう言ってニヤリと嗤った王天君に、イザベラも嗤い返す。そして彼女は、その『手紙』を出すべく伝書フクロウを手配させる。

ガリア国王ジョゼフ一世が自らしたためた指示書にして『親書』。そこには、こう書かれていた。

――我が姪、シャルロットが起こした『召喚事故』により、貴君にはまったくもって大変な迷惑をかけてしまった。

にも関わらず、不出来な姪を影から支え、その＜技＞でもって困難な『任務』を達成するに至った貴君に報いるため、我がガリア王国の『騎士（シュヴァリエ）』の地位、及び勲章を授ける。

我が姪とその家族のためにも、是非ともこれを受けていただきたい。なお、先行して略章のみで申し訳ないが、この手紙に同封するので、早速身につけてくれたまえ。きっと貴君に似合うものと思う。

配属については『北花壇警護騎士団』とするが、貴君が既に知っての通り、これは本来存在しないとされているものであるため、通常は『東薔薇花壇警護騎士団』へ所属している旨、宣言することを差し許す。もちろん、そのための席次及び、騎士団章も用意する。

正式な受勲及び、両団長への面通しをするために、是非一度こちらへ出向いてくれたまえ。日時は追って連絡する。現在の東薔薇花壇警護騎士団団長は、若いがなかなか見所がある男だ。期待してくれて問題ない。

なお、学院内及び、公式の場、並びに他家に訪問する場合において着用するマントについて『騎士』を示す刺繍を必ず入れた上で、服に『ガリア王国・東薔薇花壇警護騎士団』の騎士団章あるいは略章を身につけること。このあたりの『規則』に関する詳細はわが姪に聞いてくれれば理解できるかと思う。ただし『北花壇騎士』としての任務中及び、それ以外の場所で身につけるものについては貴君の自由とする。

側にいる友人たちに自慢するためにも、是非とも服とマントを新調してくれたまえ！　そのための費用は、当然のことながら送金させてもらう。

遠く『東の大陸』よりハルケギニアへと来訪された、親愛なるミスタ、タイコーボー・リョボー・シュヴァリエ・ド・ノールパルテル（北花壇騎士）へ――ガリア国王・ジョゼフ一世

第５３話　交差する歴史の大いなる胎動（後書き）

知っているか……？　大魔王からは逃げられない……！！

救出ミッション、無事成功！　だがしかしその直後、ある意味とんでもない『鎖』を投げつけられた太公望・タバサ組。果たして彼らの道行きに希望はあるのか！？　待て次号！！

以上、いかがでしたでしょうか？　これまでの停滞とは一転、そこらじゅうでフラグが立ちまくりました。ついに情報として出てきた「アルビオン」そして「レコン・キスタ」。おまけにハルケギニアの大魔王まで現れて、さあ大変！　身内逃がしたと思ったら、こんどは周りを人質に取ってやるぞとも取れる言動を投げかけられ……と、いったところで今回は終了であります。次は新章・宝探し編……まずは準備から！　でございます。

ところで北花壇騎士はノールパルテルという記述があるんですが、東花壇騎士の場合は「シュヴァリエ・ド・エストパルテル」でいいのでしょうかね？　フランス語ですし。原作に記述あったかなあ……？　あとガリアの騎士団勲章及び略授、略章に関する資料欲しい……これもフランス基準でいいのだろうか。ううむ。情報をお持ちのかたがいらっしゃいましたら是非感想欄へお寄せくださいませ……。

２０１１／０５／１８　２２：００　本文誤字脱字、及び加筆修正

第５４話　軍師と雪風、鎖にて囚われるの事

――無事、目的地に到着した。現在学院へ向け帰還の途中である。

ゲルマニアへ向けて旅立った一行と共に居た＜偏在＞によって、その報せを受けたタバサは、安堵のあまり全身の力が抜けてしまい、その場で崩れ落ちそうになった。幸い、すぐそばにいた太公望によって身体を支えられた結果、床に倒れ込むという事態をまぬがれることはできたが。

その後は、これまた気が抜けてしまった太公望と共に、しばしふたり揃って部屋の床に敷かれた、ふかふかの絨毯の上に転がっていた。これで、母さまとペルスランはもう大丈夫。そして、母さまが元に戻った姿を確認できたなら、あとは――残るもうひとつの目的を果たすだけ。

でも、今はただ、みんなの無事を喜ぼう……そんな想いにふけっていたタバサを奈落の底へと突き落とす使者――灰色の羽を持つ伝書フクロウが飛んできたのは――それからほんの１時間後であった。

ジョゼフ一世から届けられた、太公望への『親書』と見せかけたタバサへの『脅迫状』、そして共に送りつけられてきた２つの略章――『騎士（シュヴァリエ）』と『東薔薇花壇警護騎士団』のそれ――を見た時……タバサは、申し訳なさと無念さのあまり、血が滲むほどにギュッと唇を噛みしめた。

聡い彼女は、すぐさま理解してしまった。一見すると、正体不明の異国人である太公望に対し、過分ともいうべき報奨が――最下級ではあるがガリア貴族としての身分保障と、さらには入団するだけ

で名誉とされる、花壇騎士団に席を用意されたようにしか見えない文章。その奥底に潜む『狂王』ジョゼフ一世の、強烈なまでの悪意を。

母さまとペルスランを、無事逃がすことに成功した。でも……それと引き替えに、よりにもよって彼を、ガリア……いや『わたし』から逃げられないよう、『鎖』で縛り付けられてしまった――！

彼のことだ。最悪の事態に陥った場合、自分のことなら心配ないからひとりで逃げろ。そんなことを言い出しかねない。しかも、わざと追っ手を自分のほうへ引きつけた上で。

そんなことはさせない。いざという時には、たとえ自分がどうなろうとも、タイコーボーだけは無事に逃がしてみせる。それが、本来無関係の彼を『召喚』してしまったこのわたしが、果たすべき責任……。

しかし、そんなタバサの気持ちとは裏腹に、同じく『親書』を読んだ太公望には……心の奥底に、彼女とは全く別の不安が沸き上がっていた。しかもそれは……彼だけでなく、タバサとその家族、そして最悪の場合――この世界全てを巻き込む可能性があった。

「タバサよ……確かめたいことがあるのだが」

静かな、それでいて落ち着いたその問いを聞いたタバサの身体が、ビクッと震えた。

「わたしに、わかることでいいなら」

彼は、きっとわたしの覚悟を聞いてくるつもりだ。タバサは、そ

れを確信し、次の言葉を待った。だが……太公望から発せられたそれは、彼女をして全く想定外のものであった。

「初めてイザベラ姫殿下に会ったあの時期についてだが……あのキツめの娘には＜使い魔＞がおったかのう？」

こんな時に、いったい何を……！？　思わず、そう口に出しそうになったタバサであったが、状況的に、彼が意味のないことを言い出すはずがない。すぐにそれに気が付いた彼女は、自分の知りうる限りの情報を頭の中で整理した上で、太公望へと告げた。

「いなかった。少なくとも、わたしが知る限りは」

「なるほど……ちなみに、ジョゼフ王のほうはどうだ？」

「彼は、そもそも＜魔法＞が使えない。だから＜サモン・サーヴァント＞を執り行うこと自体が不可能と判断する」

「ふむ。果たして本当にそうなのだろうか？　しかし、ならば国王側についた可能性が４割。イザベラのところに６割……といったところかのう」

「どういうこと……？」

太公望は、名残惜しそうに絨毯の上から起き上がると、タバサへと椅子への着座を促す。そして、テーブルに置かれていたティーセットで器用に茶を淹れると、改めて口を開いた。

「まずは、その話をする前に……伝えておかねばならぬことがいくつかあるのだ」

両手でカップを受け取ったタバサの身体は、小さく震えていた。既に初夏。先程までは若干の蒸し暑さすら感じていた室内が、今は嵐吹き荒ぶ平原のように冷え切っている。

「これは、今まで誰にも言っていなかったことだ。その必要もないと思っていた。だが……あの手紙を見てしまった以上、話しておかねばならぬ」

今までになく真剣な表情をして話す太公望。その顔を見たタバサは、居ずまいを正す。

「わしが、職を辞して旅をしていたという話は、既にしたと思う。その時……わしは、たったひとりで旅をしていたわけではないのだよ」

「つまり、連れがいたと？」

「まあ、そのようなものだ。でな……例の事故の際、当然ながらあやつはわしの側にいて……わしが『光の道』に飲み込まれていく姿を見ていたわけだ」

そして太公望は、さらに先を続けた。自分の想定している『最悪』に向けて。

「ここからは、わしの最悪の予想だ――その『連れ』が、イザベラ。あるいはジョゼフ王に＜召喚＞されて＜使い魔＞となり、敵側に回った可能性が高い。敵味方はともかくとして、いずれかの側におるのは確実だろう」

その言葉に、タバサは仰天した。いや、そもそも……。

「あれは天文学的な確率で起きた事故だと、あなたは……」

「そうだ、それは間違いのない事実なのだ。しかしだな……わしの『連れ』は、天才的な『空間使い』。あの男ならば、例の『光の道』によってわしが『誘拐された』と判断した上で、その行き先を辿るであろう……間違いなくな。わしが、召喚直後から今まで平然としていられたのは、いつか必ず迎えがくることを、確信していたからなのだよ」

彼の落ち着きはらった態度には、そんな裏付けがあったのか……！　しかし、それならば何故そこにイザベラの＜召喚＞が関わってくるのだろう？　タバサは、当然ともいうべきその疑問を、太公望に対して投げかけた。

「それなのだがな……タバサよ。もしもだぞ、あのキッツい姫がおぬしの『召喚失敗』。つまりわしという『結果』を見たら……そのあと、どう動くと思う？」

イザベラが、わたしの召喚事故を知ったらどうする？　もちろん、父王に報告するだろう。そして、周囲に喧伝するはずだ。いや、でもその前に――！

「＜サモン・サーヴァント＞を試す！？　わたしに、自分の成功を見せつけるために」

その言葉に、黙って頷く太公望。そして彼は改めて口を開いた。

「おそらくな。でだ……『連れ』は、前にお母上の夢の中で見せ

た『窓』のようなもので、わしを誘拐した『道』と同種のものを探し続けていたに違いない。そして、発見したのだろう……おぬしに近しい者が創り出した『道』を。そして、無理矢理それを自分のいる『座標』に接続したのだ」

「そんなことが……できるの！？」

「わしにはできぬ。だが……あやつならば、間違いなくやってのけるであろう。それほどの実力者なのだ」

空間を曲げるのは、とてつもない＜力＞を必要とすることなのだと、彼は以前話していた。にもかかわらず、遠い場所から開いた＜サモン・サーヴァント＞を感知しただけでなく、自分の元へ導いた……！？　それが本当ならば、その『連れ』というのは……。

そんなタバサの内心を見透かしたかのように、太公望は言った。

「そうだ、それほどの＜力＞の持ち主なのだよ。あの手紙の最後に、こうあったな？　遠く『東の大陸』よりハルケギニアへと来訪された――と。わしは、イザベラに対して『大陸から来た』などとは一言も言ってはおらぬ。にも関わらず、それを知っているということは……イザベラの＜使い魔＞から伝えられたか、あるいは……ジョゼフ王の＜使い魔＞から情報がもたらされた可能性が高い」

――太公望の推測は、ほぼ当たっている。だが、彼は例の手紙のせいで『連れ』……王天君がジョゼフの＜使い魔＞となり、こちらと敵対している可能性を考えてしまった。よって、イザベラの＜使い魔＞である可能性を6割としてしまっているのである。

「怖がらせてしまうかもしれぬが、ここからは、今まで以上にし

っかりと聞いておいてくれ。わしの『連れ』はな……わしにとって、ある意味最も敵に回したくない相手でもあるのだ」

『ある意味最も敵に回したくない男』これは、太公望が自身に冠された二つ名のひとつとして、誇りに思っていたほどのものである。それほどの『政治家』が、敵に回したくない存在……。

「どういうひとなの？」

「名前は『王天君（おうてんくん）』という。以前話したことのある『女狐』が手ずから育てた愛弟子でな。当然のことながら、かつては敵対……それこそ、命の取り合いをしておった。だが……ある事件がきっかけで、お互いの『正体』を知るに至り――以後、行動を共にすることになったのだ」

正体を知ってからは、行動を共にするようになった!?　つまり、本来は味方であるということ。しかも……ここまでの話から判断するに、タイコーボーが『必ず自分を助けに来る』と確信していたほどの信頼関係を築いている人物。にも関わらず絶対敵に回したくないとは、どういうことだろうか？

顔中に疑問符を浮かべているタバサを見て、思わず苦笑してしまった太公望は、改めて説明を再開する。もちろん、核心となるような情報は完全にぼかし、表現を変えた上で。

「王天君はな、お互いの存在を知らぬほどに幼かった頃……『帝国側』に停戦協約、いや正確にいうと従属契約のようなものだな……そのための人質として送り込まれていた、わしの『双子の兄』なのだよ」

――双子の兄弟。ガリア王家には、かつて双子の兄弟が起こした内戦による悲劇を繰り返さぬため、王家に双子が生まれた場合、後に生まれた者を『忌み子』としてその命を奪う、あるいは二度と戻れぬ遠い異国へ流すという習慣がある。中には『東方』へ送られた者もいたという噂だ。

タイコーボーの兄も、そのような扱いを受けたのであろうか。しかし……。

「双子なら……顔を見ればすぐにわかるはず」

タバサの疑問に、それなのだが……と、深いため息をつきながら、太公望は言った。

「王天君はな、こちらでいうアカデミーのような場所で、人体実験の材料とされ……肌の色も、見た目も……人間のそれからは大きくかけ離れた姿に変えられてしまっていたのだ。わしの肌を青白くして、書物で読んだエルフのように長い耳を持たせたような姿だと思ってもらえば、イメージがわきやすいと思う。おまけに、その実験の副作用で『心』までもが壊されていた」

だから、出会った後も……しばらく互いの関係がわからなかった。沈んだ顔でそう語る太公望の言葉に、タバサは戦慄した。そういえば、彼は妹を戦乱で失っていたはず。まさか、実の兄までがそのような目に合っていたとは。しかも、出会った時は敵同士……。

戦いを好まないはずの彼が何故『軍学』を学んだのか、タバサには嫌というほど理解できてしまった。形こそ違え、自分も……大切な家族を『戦い』の末、失っていたから。治療の見通しこそ立ってはいるものの、現時点では、まだ母の『心』も壊されたまま……元

に戻っていない。

＜サモン・サーヴァント＞は、自分の『属性』に合う相手を自動的に選び出すという。だとしたら――この出会いの、なんという皮肉なことか。わたしたちの境遇は、あまりにも似すぎている……。

身体の震えを抑えきれないタバサをよそに、太公望の説明はまだ続く。

「わしを『指揮官』『政治家』とするならば、王天君は『暗殺者』にして『策謀家』。あの女狐に徹底的な教育を受けたあやつは『裏』の仕事に関していえば、このわしなど及ぶところではない。事実、あやつの『罠』によって多くの仲間たちが殺された……武成王殿も、そのひとりだ」

その名前には、覚えがある。そう……タイコーボーの身代わりになって死んでいったひと。彼の親友にして、父とも慕っていた人物。そんな存在を死に至らしめたのが、実の兄――タバサは『神の加護』などというものは、やはりこの世にはないのだと実感した。そのようなものが本当に存在するならば、彼がこんな酷い運命に翻弄され続けることなど、あったはずがないではないか。

「でだ。そんな『兄』が、あるとき偶然……帝国軍内に残されていた、とある資料に目を留めた。そして知ったのだ……自分に双子の『弟』がいたことを。そして探し続けていたのだよ……たったひとり生き残っていた肉親を。まさか、その相手がわしだとは思いもよらんかったようだが。もっとも、それはお互いさまだがのう」

「どうして、お互いのことがわかったの……？　姿も、何もかも変わっていたのに」

震え声で訊ねたタバサに、太公望は断言した。

「それは……『魂魄』が共鳴したからだ。例の『夢』への移動などでタバサも見たであろう？　わしらは『魂』を視る術を持つのだ。だから、お互いに理解してしまったのだよ……目の前にいる相手が、間違いなく『魂の双子』であることをな」

そして、彼らは互いをより深く理解するため、語り合い、そして知った。自分たちが、特に過酷な運命を強いられ続けていた『兄』が――長い戦いのせいで、心身共に疲れきっていたことを。

「だから、当初は葛藤こそあったものの……最終的にわしらは過去の因縁を捨て、手を取り合って戦乱を鎮めるべく戦ったのだ。そして、全てを終えた後、疲れを癒やすための旅に出たのだ……」

遠い目をして語る太公望を見て、タバサは悟った。そういうことか……と。数奇な運命の末、ようやく平穏を取り戻したと思っていた兄弟。その弟が突然『誘拐』されたとなったら……当然、兄は怒り狂うだろう。そして、その犯人を追い詰めようとするに違いない。

「あやつは、間違いなく怒っておるだろう……」

ああ、やはりそうだ。だから、わたしの『敵』になった可能性がある。そう、タイコーボーは言いたかったのだ。だから、怖がらせてしまうかもしれないという注釈をつけてくれていた。タバサは、太公望から発せられるであろう次の言葉を覚悟して待った。

あの彼をして『絶対に敵に回したくない男』と言わせるほどの兄。そんな相手に狙われて、無事に済むはずがない……と。

だが、次の言葉は。彼女の想像をして、斜め上どころか次元の彼方を越えていた。

「絶対長い間放置しとったわしのことを恨んでおる……しかも相当根に持っておるに違いない！　あの手紙を見れば、わしには一目瞭然なのだ！　ものすごくあやつ好みな、心の端っこから、こう……キリキリと何かを削り取っていくような嫌がらせの数々ときたらもう……！！」

「……え？」

「悪かった！　確かに、すっかりあやつのこと忘れて、こっちでひとりぐうたらしておったことは認める。だが、タバサを巻き込んでしまったのは、わしの本意ではない！　これだけは信じて欲しい！！」

「……えっ？」

あああああ……！　と、うめき声を上げながら、頭を抱え、机に突っ伏してしまった太公望を見て、タバサは完全に思考停止してしまった。いったいどういうことなのか……さっぱり意味がわからない、と。

「怒らないで聞いて欲しい……あのな、たぶんなのだが……例の『惚れ薬』事件の時だ。あやつ、苦労して見つけたわしが、こんな豪華な部屋で、ひとりぐーすか寝ているところを見てしまったのだ」

――実際のところは、おそらく『惚れ薬』で操り人形のようになってしまっていた自分を、あの宮殿の中で見てしまったのだろう。

もしも、あのとき自分が正気であれば『見られていた』ことにすぐさま気付けていたはず。そう……『魂の共鳴』で、互いが近くにいれば、その存在を察知できるから。

発見した直後は、タバサに怒りが向いたに違いない。ただ、すぐさま異常に気付き、様子を見ていたのだろう。にも関わらず、正気に戻った今になっても、まだ連れ戻しに来ないということは……『自分の部屋』に閉じこもり、こちらに察知されないようにしているということだ……それはつまり。

「それでもって……『オレが苦労して探してやってたっつうのによぉ……オメーときたら、こぉんなにいいお部屋でおねんねかぁ！？　そーかい、そっちがそぉいうつもりならなぁ、オレにだって考えがあるぜ』……とか言って、あっちについてしまった可能性が大なのだ……！」

――さすがに『半身』のこと。ほぼ完璧にその思考を読みきった太公望であった。

なるほど、彼の兄弟……『双子の兄』。確かに、そうなのかもしれない。思考パターンがどこかタイコーボーと似通っている。しかも、どうやら『弟』以上に容赦のない性格をしているらしき『兄』が、よりにもよってあの『薬』を飲んだ彼の姿を見てしまっていたとしたら……間違いなく敵に回る。タバサは、頭がくらくらしてきた。

「ただ、今現在『王天君の部屋』から見られていないことは保障する。もしも『窓』がわしの近辺に繋がっていたら、すぐに魂が共鳴するはずだからのう。もちろん、昨日の作戦行動中にも、それらしき気配は感じられなかった。と、いうことは……おそらく今は、

王宮を拠点に『部屋』を作り、潜んでおるに違いない」

王宮に潜んでいる……最悪ではないか。間違いなくタイコーボーがおかしくなっていたところを見られている。タバサの精神は、既に崩壊寸前のところまで追い込まれていた。

「そういうわけでだ、タバサよ。おぬしには本当に申し訳ないことをしてしまった……わしがうかつな真似をしたせいで、こんなことになってしまうとは……痛恨の極みだ。ああ、ちなみに『兄』はタバサに対しては絶対に怒ってはおらぬ。その点については安心して欲しい」

「どうして、そう言い切れるの？」

かろうじて残った気力を振り絞り、タバサは解答を求めた。

「もしも『兄』が、タバサにほんの少しでも怒りを向けていたら……その時点で、間違いなくおぬしが死んでいるからだ。言ったであろう？　あやつは天才的な『空間使い』にして『暗殺者』だと。わしと違って躊躇ったりなどしない。おぬしの背中側に『窓』を開け、そこから刃を、こう……」

ズブリ……それで終わりだ。暗い顔をして、手刀を自分の心臓に突き立てる真似をした太公望を見たタバサは、そのまま――すうっ……と、気が遠くなっていくのを感じた。そして彼女は、そのまま翌朝まで目を覚まさなかった……。

○●○●○●○●

――いくらなんでも、脅かしすぎてしまったかのう。

そもそも王天君は、いきなり背後から刺したりするような真似はしない。どちらかというと、その策でもって相手を精神的に追い詰め、自滅させるような戦い方を好むからだ。今回の発言は、タバサが太公望に対して持ってしまった『罪悪感』を、別方向へ向けるための方便だ。正直やりすぎだった気がしないでもないが……。

「しかし、我ながら迂闊であったわ。虎穴に入って虎児を得るつもりが、虎の尾を踏んでしまったらしい」

そう。彼は、イザベラと会おうとした時点で、この事態を想定しておくべきだったのだ。タバサとその血が連なる存在が＜サモン・サーヴァント＞を使ったら、どうなるかを。そして、もっと早く気が付くべきだったのだ……自分の『魂』が、ごくごくわずかではあるが、ざわめきを覚えていたことに。

「まあ、王天君がわしだけに怒りを向けておるのは間違いなかろう」

それだけが不幸中の幸いだ。太公望は、改めて『手紙』の文面を見直した。たしかに『らしい』手紙ではあるのだが、王天君のそれにしては、芝居がかりすぎている。とはいえ、助言を与えている可能性がなくもない。

「騎士団章と略章の着用規則については、一応タバサから確認をとらねばならぬが……マントへの刺繍は裏地の内側にでも入れておけばよかろう。場所の指定はないわけだからな。文句があるなら、次は裏地の表に。まだ何か言ってくるようであれば、小さ～く、目立たないのをどこかに入れればいいのだ。大きさの指定もされてお

らんのだから」

確かに、刺繍に関するこの解釈は間違ってはいない。いないのだが……ハッキリ言って『セコイ』と言われても反論できないレベルの反撃である。

「面通しのときに、どっちについておるのか探りを入れてみるかのう……イザベラのほうについていてくれれば早々に停戦協定を結ぶことも可能であろうが、問題は国王についとった場合か」

太公望は、改めてその場合周囲がどう動くかを計算し始める。

「もしもこの文章を考えたのが国王単独であるならば、その危険さを王天君も察しているはず。いくらなんでもわしを見殺しにしたりは……たぶん……しない……と、思うのだが……本気で怒っておった場合、この『肉体』が滅びるのを待った上で、わしの『魂魄』だけ回収に走る可能性がなくもない……うむ、ここは念のため確認せねばならぬな！」

両腕を組み、うんうんとひとり納得する。さっきタバサに言った『後ろからグサリ』の件だが、自分に適用される可能性がないわけでもないのだ。いくら彼が『不老不死』たる仙人とはいえ、肉体が滅びるときの苦しみは、耐え難いものがあるのだ。よって、さすがにそれは避けたい太公望であった。

「それにしても、タバサを巻き込んでしまったのは迂闊であった……」

いや、最悪の場合は彼女だけではなく『側にいる友人たち』にまで累が及ぶかもしれない。彼らに出会う以前の太公望であれば、と

っくに面倒になって、逃げ出しているところだ。しかし……それをするには、もう……彼らにも、この地に対しても『情』が移りすぎていた。

「わしはただ、おかしな義務に縛られず、静かにぐうたら過ごしたい。気の合う仲間たちと馬鹿なことをして、のんびりと暮らしたいだけなのだ。できれば王天のやつも含めてな。にも関わらず、こうも立て続けに問題が起こるというのは、いったいどういうことなのだ！？」

マチルダの家族の件といい、水精霊からの依頼といい、この件といい……やはり、この世界の『始祖』に出会ったら『打神鞭』の最大出力、いや。王天君と融合した上で、改めて『太極図』攻撃形態でもって挑んでくれるわ……！！

自分の失策を完全に棚に上げ、ハルケギニアの『始祖』に対して、再び呪いの言葉を吐く太公望。

――ある意味とんでもないものを呼んでしまったブリミルこそ、いい災難であった。

○●○●○●○●

――そして翌朝。

目を覚ましたタバサへ改めて謝罪の言葉を述べた太公望は、今後どうするかについて相談を持ちかけた。略章は基本、左胸の上のほうへつけるとのことなので、それは現在のマントならばうまく隠れる位置につければいい。そう思って一瞬胸をなで下ろした太公望で

あったが……まだ手元にない『騎士団章』については、どうにもならなかった。

何故なら……それは『マントを留める形』で使うのが規則とされているからだ。そう……ルイズやタバサたちが身につけている、五芒星のタイピンのように『マントの前面』に、目立つように身につけるものなのだという。しかも鎖状の紐付き。これではどこにも隠しようがない。

「と、なると……わしがガリアの貴族になったことは、遠からず知れ渡るな」

「シュヴァリエの紋だけならともかく『騎士団章』を、それもほとんどの場面で身につけろと書かれているのは痛い。北花壇騎士（ノールパルテル）なら『存在しない存在』だけに必要ないけれど、東花壇騎士（エストパルテル）はそうもいかない」

「と、なると……例のヴァリエール家の歓待の際には、下手に隠さぬほうが得策か」

タバサの正体が知れる可能性が高まるが、構わぬか？　心底申し訳なさそうに聞いてきた太公望に、タバサは一言「問題ない」と答え、さらに補足した。

「もともと、この髪の色で気付かれる可能性が高かった」

「なるほど。ならばマントのほうはともかく、略章は見える位置につけることにしよう……学院内では、もう少し隠しておくがのう。それにしても……実に面倒なことになったものだ」

そう言ってため息をついた太公望へ、同じように沈んだ声で告げるタバサ。

「受勲に関する唯一の慰めは、共に所定の年金……合計１２００エキュー程の額が毎年手に入ること」

それを聞いた太公望は、がっくりとうなだれた。

「年金なんぞいらんから、騎士団章の着用をナシにしてはくれんものかのう……？」

この言葉に、タバサは驚いた。何かというと『対価』を求める彼のことを、実のところ少々金銭的に五月蠅い人物だとばかり思っていたからだ。タバサが素直にそれを告白すると、太公望は笑ってこう答えた。

「わしは、生活に困らない……たまに甘味を味わっても普通に暮らせる程度の金さえあれば、あとはどうでもいいのだ。わしが対価を求めるのはな、それが『交渉の成果』として目に見えて理解できるからだ。それがひとつ」

「ほかにも理由があると？」

「うむ。これは、どちらかというと他者との関係を円滑にするためであるのだが……見返りなしに物事を行い続けると、それが当たり前だと受け取る者が出始める。その結果、自分を安売りすることとなり……最終的に、相手から見下されることに繋がる。これは、とくに『上に立つ者』がやってはいかぬ……絶対にだ」

たとえば、自分の国がどこか別の国へ寄付を行う。これは、一見

『見返りがない行為』であるように思えるが、他国からの評価が上がる、寄付した国から感謝を受けるなど、見えづらいながらも『対費用効果』がしっかりと見込める。

ただし、同じ相手に対して繰り返し……それも一方的に行い続けると『それが当たり前』と受け取られるようになり……最終的に、寄付を止めた途端、一斉に批判を受けたりする。正直おかしな話だが、それが『他者との関係』というものなのだ。

よって『あれをしてあげるから、これをしてくれ』という『等価交換』は、人間関係に線を引いているように見えるが、実は互いにほどよい距離と信頼関係を築いてくれる。

「見返りナシで何かをさせよう、などというのも自分の評価を落とす行為であるな。このハルケギニアでは、よく『名誉』がどうこうなどという話が出るが、これもハッキリ言って、上が下の者を無料、あるいは格安で働かせるための方便にすぎない。忠義に対して、正しく報いておらんのだよ」

『名誉を与える』という甘美な響きに騙されて、命がけでタダ働かさせられているだけだ。もちろん、それに値するだけの褒美――たとえば、領地がもらえる、年金がしっかり支払われるなどというのであれば、話はまた別だがのう。と、いう注釈をつけつつ太公望は持論を語る。

――そう、この考えがあるから、太公望は報酬をケチったりしないのだ。

「そういう意味では、働いた内容相応の対価と名誉を与えつつ、こっちを縛ってきたガリア国王は実に巧い。だいたいだな……タバ

サよ。おぬし、まだトリステインから『精霊勲章』もらっておらんだろう？」

学院長は、とっくの昔に申請を出しておる。本来ならば、既に受けていてしかるべきなのだよ。例の『政治的取引』とこれとは完全に別件なのだから……そう太公望に言われて、タバサはようやく思い出した。そういえば、そんな話がフーケ捕縛のときに出ていたな……と。

「まあ、トリステインの場合は、王政府がまともに機能しとらんからのう。そのせいで、単純に申請書類が埋もれているだけかもしれぬが」

――トリステイン王国の王政府が機能していない理由。それは、先王崩御の後、本来であればその責務を引き継ぐべき王妃が喪に服したまま、なんと数年間もの長きに渡り、国の頂点に立つ者としての役割を、一切果たしていないからだ。

現在は、先王の片腕として宰相職に就いていた『鳥の骨』マザリーニ枢機卿が政務全体を取り仕切り、なんとか現状位置に留めているのが精一杯――王権を持たないため、下への統制が取りきれないからだ――という状態である。これでは、国が衰退するのも無理はない。

ロングビルからの情報や、自分なりの解釈で、既にハルケギニア各国の情勢をある程度把握している太公望。このあたりは、さすがに元政治家である。

「わしの見立てだと、マザリーニ枢機卿ひとりで保っておるようなものだぞ？　この国は。もしも彼がいなくなったら、最悪の場合、

国が割れる。それに比べて、ガリアのあの栄えようといったら……あれだけの手腕を持つ国王を『無能』などと本気で思っている貴族がいたとしたら、そやつはただの馬鹿だ」

タバサも、それには当然気が付いていた。だいたい『魔法の腕』だけで『王』になれるなら、父は今も生きていて、グラン・トロワの中でガリア国王として立ち、政治の杖を振るっている……と。しかし、それでも感情というものは、そう簡単に割り切れないものなのだ。

――特に、復讐という情に動かされているのであれば、なおさらだ。

「今回の手紙の件といい、油断ならん相手だぞ。それをきちんと理解しているな？」

おぬしは、そういう相手と事を構えようとしているのだ。彼……タイコーボーは、やはりわたしの『目的』を見抜いている……その上で、言外に注意を促してきているのだ。

「わたしは……色眼鏡で『今の王』を見ていたことを否定することはできない」

「それでいい。そして相手を知らないのであれば……調べる努力をすればよいのだ。ただ、あくまでわしの主観だが……あのジョゼフという男は、それをさせてくれるほど甘い相手ではないかもしれぬ」

そのあたりは、例の『受勲』と『面通し』の際に、ある程度見ることができるであろう。直接会えればいいのだがな……そう言って

タバサに向け微笑んだ太公望であったが、その目は一切笑っていなかった。

第５４話　軍師と雪風、鎖にて囚われるの事（後書き）

ハルケギニアの勲章関連に関する資料が足りない……白毛精霊勲章とか、杖交差勲章とか、詳細受勲条件がわかりません……あと、騎士団章についても。基本フランスでいいのだろうか。ちなみに今回出した『タイピン』『騎士団章の形状』及び、前回の手紙で出した各種略章の件は、完全に捏造で、原作設定にあったものではありませんので予めお断りしておきます……。

それと、ガリアの花壇騎士団。

「北花壇警護」「東百合花壇警護」「南薔薇花壇警護」まではタバサの冒険に記載されていますが、どなたか「西」についてご存じのかたはいらっしゃいませんでしょうか？　探し足りないだけなのかもしれませんが、みつからなくて困っております。そのあたりに言及しなければいいだけの話なのですが、せっかくのガリアルートに、そういった騎士団の話が出せないのも、残念なので。

そして、イザベラとしては（王天君としては予想通りに）意外なポイントから、王天君の存在に太公望が気付きました。さてどうなるか。

次こそ宝探しスタート予定です。アルビオンの前にアレが来てしまいます……ええ、もちろんアレです。

２０１１／０５／２０　追記　原作及び、お寄せいただいた情報で「東薔薇騎士団」「西百合騎士団」の存在も確認できました。カステルモールが東薔薇でした。百合と間違えてましたｏｒｚ　つまり、騎士団は全部で方位対応４つだけではなく複数なのですね。理解で

きました！　東に薔薇と百合、南が薔薇（青いのもある場所）、西に百合……ほかの花もあったりするのかな、などと考えてみたりすると楽しいです。

２０１１／０５／２０　１１：００　誤字脱字修正、本文加筆修正

第５５話　団長は葛藤し、軍師は教導す

――ガリア王国東薔薇花壇騎士団長バッソ・カステルモールは静かに憤っていた。

練兵場での訓練中、突如国王ジョゼフ一世から届けられた一通の命令書。彼は、その内容に憤慨していたのである。国王の側近くに仕える花壇騎士の団長として、そういった感情を覚えるというのは……たとえ表に出していないとはいえ、不敬ではないのか。普通ならば、そう取られてしかるべきなのだが――。

……カステルモールが現在仕えている国王ジョゼフ一世が『普通』ではないのである。

彼にとって、現国王ジョゼフ一世は『簒奪者』であった。本来であれば、第一王子とはいえ『無能』として国内にその名が知られていたジョゼフなどではなく……天才的な＜魔法＞の才を持ち、周囲からの人望に篤かったシャルル殿下こそが、王座に在るべき人物だったのだ。そう……心から信じていた。

「お前は、まだ若いのに見どころがある」

そう言って――当時、家柄もそれほどではなく、まだ２０歳をいくらも出ていなかった自分のことを引き立ててくれたシャルル王子への恩を、カステルモールは決して忘れてはいなかった。

……とはいえ、表立ってそれを公言することで、恩人の忘れ形見である大公姫・シャルロット姫殿下の身に危険が及ぶようなことがあってはならない。

そう考えた彼は、影から彼女を支援すべく、賛同する者たちを、少しずつ自分の元へと集め……そして現在。この『東薔薇警護騎士団』全員が、シャルロット姫殿下に対し、表に出せぬ忠誠を誓う騎士団へと変貌を遂げていた。

にも関わらず……そんな彼の努力をあざ笑うかのような命令書が届いたのだ。

「よりにもよって……あの『異邦人』を、この騎士団の末席に加えろ、とは……！」

『異邦人』。問題の人物を、彼のみならず……この東薔薇花壇騎士団員たちはそう呼んでいた。

彼らが本来仕えるべき主が、留学先であるトリステイン王国の魔法学院で執り行なった『使い魔召喚の儀』。そこで『失敗』してしまった結果にして、異物的存在。直接その姿を見た者によれば、貴族に対する礼儀もろくに知らないような、学のない流浪の民。ハルケギニアには珍しい黒い髪をした、碧眼の少年。

東方ロバ・アル・カリイエから＜召喚＞されたという、その得体の知れない子供を……よりにもよってこの伝統ある花壇騎士団に所属させた上に、自分の配下として扱えとは。

彼ら騎士団員は身をもって知っていた。その『召喚失敗』により、それまでシャルロット姫に忠誠を誓っていたものたちが、掌を返すように多数離反してしまったことを。そして、それを憎きジョゼフの娘――シャルロット姫の従姉妹にして上司――北花壇騎士団長のイザベラが、派手に周囲へと喧伝した上で、嘲笑っていることを。

その少年を恨むのは筋違いだとは理解している。彼とて、わざと呼ばれて来たわけではないのだ。しかし、それでも……悔しいと思ってしまうのは事実。もっと、姫君に相応しい――たとえば、風竜などが召喚に応えてくれていれば、今の苦境はなかったに違いない。

とはいえ、基本は『北花壇騎士団』に配属されるらしい。あくまで、この騎士団への所属は偽装に過ぎないようだ。しかし、それでも一度は面通しの為に『異邦人』と顔を合わせねばならない。そのとき、自分は己の胸に秘められた怒りを抑えることができるのだろうか――？

○●○●○●○●

――いっぽう、そんな理不尽な怒りを向けられつつあった当人はというと。

「で、でも、わたし、そんなこと……」

「もう！　シエスタったら……いつまでもウジウジしてたら、欲しいものは手に入らないのよ！　ここは押して押して押しまくるべきよ！！　そうは思いませんか？」

「いや……あやつの性格からすると、押しすぎると逆に引いてしまうと思うのだが？」

……厨房の隅にある休憩所で、メイドたちと暢気にお茶を楽しんでいた。

「ほら、ローラ！　タイコーボーさまもそうおっしゃってるじゃないの」

「えーっ、でも……落としたい相手に迫るのは当たり前じゃない！」

ローラと呼ばれた、眩い金髪を持つメイドの娘は、頬をぷうっと膨らませ、不満げに口をすぼめている。ふたりの意見が気に入らないのであろう。

「押すのが悪いと言っておるわけではない、程度というものを考えねばならぬのだ。やりすぎて、万が一『ストーカー』なんぞと勘違いされたら、目も当てられぬぞ？」

「すとおかあ……って、なんですか？」

「実はな、昔……こんなことがあったのだよ……」

シエスタの問いに、太公望は暗い顔をして語り始める。かつて、知り合いの娘に一目惚れをした男が、彼女のことを一方的に『運命の相手』だと思い込んで暴走。異常なまでの行動（ストーキング）を繰り返した結果……その娘に決定的なまでに嫌われたばかりか、ついには命を落とす結果になった事件の顛末を。

「ずっと後ろをつけてこられるとか、めちゃくちゃ怖いんですが……」

「何をしていても見られてるとか、想像しただけで鳥肌が立ってくるわ……！」

両手で自分を抱え込み、ガタガタと震えるメイドたち。

「で、あろう？　もしもそんな輩と勘違いされてしまったら……」

「た、確かに。押しすぎは問題ね……わたしも考えて行動しなきゃ」

……などという実に緊張感のない会話をしている太公望。昨日の今日でもうこれである。まあ、今の時点でじたばたしても焦るだけで意味がないということと、彼なりにちゃんとした理由があって、この場へと訪れていたわけだが。

……と、そんなところへ、その理由たる厨房の主・マルトーが顔を出した。

「待たせたな！　頼まれた件についてはもちろんオーケーだ。しかし、本当にいいのか？　男連中を連れていったほうが、役に立つんじゃねえか？」

「いや、申し出はありがたいのだが、そもそも危険なことや荷物持ちをさせるつもりはないので、男手は必要ないのだ。それに、シエスタは土地勘があるからのう」

「そういや、タルブへ立ち寄るって言ってたっけな」

――タルブ村。トリステイン最大のワイン産地にして、シエスタの故郷である。

太公望は、学院が夏休みになった翌日から、水精霊団に所属するメンバーたちと共に『宝探し』に出る予定であった。最初の目的地

は、深い森の奥にある、とある事情で廃村となった場所。そこへ同行してくれる、山歩きができて、かつ野外での調理が上手いメイドをひとり、厨房へと探しに来ていたのである。

偶然、その次の目的地としていた『タルブ』がシエスタの故郷だったこともあり、彼はシエスタを1週間ほど借り受ける旨、学院長にまず確認した上で、さらに現場の責任者であるマルトーへ依頼をしに来たのである。ついでに、当日昼の弁当の注文を兼ねて。

「ちょうど、シエスタも再来週から休みに入るところだったんだ。少し早い里帰りだな！」

「は、はいっ！　ありがとうございます！」

笑顔で許可を出してくれたマルトーに、シエスタは感謝した。もちろん、早めの帰郷は嬉しい。でも、それ以上に彼女にとっては、ありがたいことがあった。そう……今回の『旅』には、彼女が以前からちょっと気になっている男の子が同行することを知っていたからだ。

「それじゃ、例の件は頼んだぜボウズ」

「ククク……任せておけ！　タルブのいいのを数本、見繕ってきてやるわ。まあ、どうせまたわしがこっそりいただいて飲んでしまうわけだが！」

「ヘッ、守備隊を、そう何度も突破できるものならしてみやがれ！　なあみんな！！」

「我々は、防衛ラインを突破させない！」「させない！！」

手の動きは一切止めず、ぐるりと首だけ休憩所方面へ向け、唱和するコックたち。

――料理長マルトーと、厨房で働くコックたち一同。

気さくで豪快な性格をしたマルトーは、学院内の平民たちの間で、大の『貴族嫌い』として知られる存在であった。だがマルトーは……＜メイジ＞であるにも関わらず、威張り散らしたりしない太公望と、その主人たるタバサのことは結構気に入っていた。そして、それは厨房に務めるコックたちも同様であった。

何故ならば。タバサは、彼らコック達が精魂込めて作った料理を絶対残したりしない。彼女はいつも、全部綺麗に食べてくれる。しかも、体調が悪いときなどは、前もって量を減らしてくれるよう自分から頼みにくるほど、自分たち厨房の人間や、食べ物に対して気を遣ってくれるからだ。

太公望については、全く貴族らしくないその態度と……マルトー率いる『厨房最終防衛ライン』を巧みに突破しては、ワインをちょろまかしたり、つまみぐいをしていく『いたずらっ子』として認識しているためだ。

最初のうちこそ腹を立ててはいたものの、最近ではいかに彼に見つからないよう、秘蔵の品々を隠し通すか。それを考えることが、厨房で働く者たちにとって一種の娯楽に成り果てている。彼を引っかけるための罠について、わざわざ定期的に作戦会議を開いているほどだ。ちなみに、その会議には才人もたまに出席していたりする。もちろん、太公望には内緒で。

――なお、これまでの最高傑作は、才人が作成した『ぴたごらすいっち』なる罠である。

目標『太公望』が、人気のない夜に、こっそりと厨房へ忍び込み……ワインのある戸棚を開けた瞬間。裏側に取り付けられていた『糸』が引っ張られ……フライパンの大演奏会だの、そこらじゅうの扉の連続開閉だのが発生した挙げ句、何が起きたのかわからず混乱していた『目標』の頭上へ、棚の上に仕掛けられていた金属製のタライが落ちてきて実にいい音を立てたあの時は、隠れて見ていた厨房の者たち全員が、大いに湧いた――と、まあそんなことはさておき。

週明けの早朝……つまり、夏休み初日の朝、所定の場所へ集合ということを告げた太公望は、厨房を後にした。さりげなく果物を2つほど、懐に忍び込ませながら。

○●○●○●○●

――そして夕方、最近ではすっかり水精霊団の溜まり場となっている中庭。

「と、いうわけで食事の手配その他諸々は済んだ」

太公望の言葉に、わっと歓声を上げ水精霊団メンバーたち。そう……もうすぐ夏休み。彼らが楽しみにしていた『胸躍る冒険』が、目前に迫っていたからだ。

「なお、最初にこれだけは言っておく。今回行われる『冒険』について、わしは一切手を出さない。たとえ戦闘になっても、あくま

で見ているだけとする。おぬしらだけでなんとかするのだ」

全員が、この発言に驚いた。

「どうしてかね？　ミスタは我が水精霊団の最高戦力なのだよ！？」

「だからだよ。わしが手を出してしまったら、おぬしらの『経験』にならぬであろう？　もっとも、誰かがどうにもならない危険にさらされそうになった、などという場合はちゃんと手助けはするが……」

「するが？」

タバサの問いに、太公望はあっさりと答えた。

「その場合、全員が減点対象となるので、危険な状況に陥らないよう注意するのだ」

「減点対象ってなんだよ！？」

才人のツッコミに、太公望は、懐から一冊のメモ帳を取り出して見せた。皮ごしらえの表紙で、単なるメモ帳にしてはなかなかに立派なシロモノだ。

「これは学院長から預かった、全員分の『考課表』だ。冒険中、おぬしたちの行動についてわしが評価の上、点数をつける。そしてこの点数は、学院の『実技』における成績表に加算されることになっておるのだ」

「つまり……テストの成績が悪かった場合、ここで頑張れば取り返せるってこと？」

これまで、魔法の『実技』がボロボロだったルイズが訊ねる。最近はともかく、以前のマイナス分がここで取り返せるというのは、彼女にとってありがたいことなのだ。

「そういうことだ。なお、冒険中は『授業に出ている』とみなされ、そのぶんの日数を別途休日として申請できるよう、学院長にかけあって承諾をもらっている」

もっとも、そのかわりにわしがしっかり考課表をつけねばならんのだが。まったく面倒な……と、ぼやく太公望。そんな彼の発言に、レイナールが補足を入れる。

「つまり、教導官つきの実戦訓練みたいな扱いになると？」

「そういうことだ。才人については学生ではないので、冒険後にもらえる報酬が増減すると考えてくれ。ただし、手を貸さないというのは、あくまで今回のみの措置だ。以後、難易度が上がっていくに従って、わしも参加するようになる……かもしれん。まあ、状況次第だのう」

本格的にゲーム始める前の、チュートリアルみたいなもんだな！　才人は、そう受け取った。それにしても、夏休みに教導官つきの冒険ができるとかマジ贅沢だよな、召喚されて良かった！　……と。

「教導官って何かしら？」

そう聞いてきたモンモランシーに、ギーシュが答えた。

「軍隊における教官……つまり、先生のようなものだよ。当然のことだけれど、実戦経験が豊富で、かつ指揮能力の高い人物が、特別に選ばれて任官することがほとんどなのさ。なにせ『実技』や『指揮』を教えるんだ。そんな大切な役目を、実力のない者が果たせるはずがないからね」

「そういうことなら、ミスタは適任よね」

そのモンモランシーの言葉に、タバサを除く全員が、太公望の左胸……マントの部分につけられた略章を見る。『騎士（シュヴァリエ）』の身分と『ガリア王国東花壇騎士団（エストパルテル）』に所属することを示すそれを。

――そう。タバサと色々と話し合った結果、まずは水精霊団のメンバーに、他より先行して略章のお披露目をすることにしたのである。もちろん、ヴァリエール家の歓待前の準備、及びジョゼフ王の『目』がどこまで届いているのかを確認するための措置である。

当然ながら、才人を除く全員が驚いた。才人も、説明を受けてびっくりした。

それはそうだろう、最下級の地位とはいえ、出自もわからぬ異国の民が『貴族』の身分を手に入れ、しかも名高い『ガリア王国花壇騎士』に叙せられたとあっては、驚くなというほうが無理だ。先進的な意識を持つ帝政ゲルマニアならばともかく、他国ではまずありえないような厚遇である。つまり……この略章は、太公望の『実力』を大国ガリアが認めた証拠なのだ。

余談だが……この『略章』を見たオスマン学院長が、内心で悶絶していたことをタバサと太公望のふたりは知らない。「うまいこと、

ふたりともトリステインに取り込めれば……」そう考えていた彼の目論見が、ガリアの素早い行動で、あっさりと覆されてしまったからだ。

ところで。ヴァリエール家の招待について、ルイズは後から加入した『おともだち』２名を追加して欲しいとの旨を実家に問い合わせた上、了承をもらっている。もちろん、ふたりに予定の確認を取った上で……だ。思わぬ役得に、モンモランシーもレイナールも、二つ返事で頷いていた。

……閑話休題。

「そういうわけで、わしの立ち位置については理解してもらえたと思う。さて……それでは、いよいよ今回の『冒険』について、その内容を説明したいと思う」

この言葉に、顔つきを変えた子供達。そして太公望は、その内容を説明し始めた。

「現場は、トリステインとガリアの国境付近にある廃村『ジャコブ村』。そこに巣くうオーク鬼５０体の殲滅、及びその村の開放だ。達成時に支払われる懸賞金は、合計で５１２５エキュー。現地で手に入れた各種アイテムについての取り扱いは、こちらに一任されている」

おおっ！　と歓声を上げたメンバー。だが、タバサだけが何かしっくりこないような顔をしている。その理由は簡単だ。何故なら……。

「オーク鬼５０体……たしかに、それなりの賞金がかかる相手。

でも、５０００エキューを越える懸賞金が出るような討伐任務ではない。せいぜい、５～６００エキューが相場」

その問いに、よくぞ聞いてくれました！　とばかりに太公望が答える。

「ああ、それなら簡単だ。懸賞金をかけていた団体が、複数あったからだよ」

これを聞いた才人がピンときた。

「ああ、そっか。なるほどな！　クエストの重複受諾か！！」

「クエスト……という言葉の意味を、わしが正しく理解しているかどうかはともかく、才人の言うとおり重複して依頼を受けたのだよ。村を捨てなければならなかった者たち、その地を治めていたものの、手持ちの駒が足りずに困っていた領主と……」

指折り数えながら『依頼主』を挙げ続ける太公望。

「近辺の街道を、かつて他国との近道として利用していた商人たち。村の近くにある石切場から、良質な石を切り出していた石工の組合。そして……オーク鬼そのものにかけられた、トリステイン王国の賞金。これらを合計した額が、５１２５エキューになった、と。そういうわけだ」

王国を除く全てと交渉し、重複受諾をすることを前もってきちんと明かした上で、通常よりも遙かに安い金額で討伐依頼を請け負ったという彼に対して、才人を除く一同は声も出ない。

「まあ、よくあることだよな。お互い得だし、全然アリだろ。おまけに、複数の団体に俺たち『水精霊団』の名前を売るチャンス。うまくやれれば、依頼が入ってきやすくなる……そういうことだよな？」

ネットゲームなどにはよくある話である。同じ『場所』を指定されている『クエスト』……つまり、依頼を複数同時に請け負うことによって、効率よくお金やアイテムを稼ぐのが、この『クエスト重複受諾』だ。よって、才人はすぐにその利点に気がつけた。

「その通りだ。これら『交渉』や現地偵察を行った報酬として、例の＜マジック・アイテム＞ひとつをわしがもらい受け、その他の懸賞金については、経費を差し引いた上で全員に分配する……と。どうだ、誰も損をしてはおらぬであろう？」

確かに、誰も損をしてはいない。むしろ、通常よりも安く依頼を請け負ってもらえた者たちや、自分たちにとっては得しかない。ただ……あえて気にすることがあるとするならば。

「ところで、ミスタが欲しがっている＜マジック・アイテム＞って、どういうものなんですか？　わざわざ交渉までしたのに、賞金いらないからそれだけもらえればいい……だなんて」

レイナールの疑問に、全員が「そういえば……」という顔をして太公望を見る。

「うむ、実はそれなのだが……この冒険を終えた後に立ち寄る予定である『タルブ村』に伝わる伝説のアイテムと、似たような名前を持つものなのだ。ただし！」

そう言って、彼は左手の人差し指をぴんと立てて注釈を入れる。

「触れた者を、砂に変えてしまうという……呪いのアイテムでもある」

「うげ、なんだそれ」「なんでそんな危険なものを欲しがるのよ……」

思わず引いてしまった才人とルイズ、そしてその他のメンバー。ただし、タバサだけが違った意見を持っていた。何故なら……彼女の『パートナー』たる彼が、似たような処置を施した『杖』を持っていたから。

「それは……もしかして、あなたの『杖』と同じ呪いがかけられているの？」

その問いかけに、満足げに頷いた太公望。

「その通りだ。例の『破壊の杖』が才人の住む国の近くから『召喚』されたと聞いてな。ひょっとすると、わしの国から来ているものがあるのではと思い、色々と調査していたのだ」

所持者以外が手に入れようとすると呪われ、生命力を吸い尽くされるという盗難防止用の措置が施された『杖』。そう……太公望の持つ『打神鞭』と同様のそれがかけられているというアイテム。もちろん、それが初耳だというメンバーたちは驚き、そして当然ともいうべき質問を太公望へ投げかける。

「所有者以外が手にすると、呪われるってことは……危険なのではないのかね？」

その問いに、うんうんと頷く一同。だが、太公望はこともなげに切り返す。

「それについては問題ない。わしの推測が間違っておらなんだら……一度、それに触れ……手に入れたことがあるアイテムと同じものだからのう」

それなら、わしが呪われることは絶対にありえない。そう断言した彼に、タバサは疑問を呈した。

「それは、いったいどういうもの？」

タバサの質問に、それでは……と、もったいぶったような口調で答える太公望。

「先に、依頼のあった村とタルブ村において、そのアイテムがなんと呼ばれていたか教えよう。ひとつは『竜の羽衣』、もうひとつは『天使の羽衣』。共に、空から舞い降りてきたという、曰く付きの＜マジック・アイテム＞だ」

「空から舞い降りてきた……」

「曰くつきの、アイテム……かあ」

その姿を想像し、空想の彼方へと飛び立っていった子供たち。

――空に関係する、２つの＜マジック・アイテム＞。こうして、本来交わるはずのなかったふたつの歴史は、改めて交差することとなった――

第５５話　団長は葛藤し、軍師は教導す（後書き）

布団の中から更新です。みなさまこんばんは。

ついに来ました、羽衣伝説。『竜の羽衣』についてはゼロ魔原作をご存じのみなさんでしたら、すぐに想像がつくアレです。一方の『天使の羽衣』。これは……おまちかねの宝貝第一弾でございます。これまた封神演義を最後までお読みになっているかたでしたら、容易に想像がつくとは思いますが……どうか、それに関するネタバレ的内容については、新章終了までの間、感想欄への書き込みをご遠慮いただければ幸いです。

なお、ここで名前が登場した「ジャコブ村」は原作には登場しないオリジナルとなりますので、予めご了承ください。

第５６話　舞い降りた天使の物語

――ジャコブ村。今は廃墟と化しているその村は、かつて良質な粘板岩が切り出せる『石切場』への足がかりとして、あるいはトリステインとガリアの国境へ向かう商人たちの休息所として栄えていた地であった。

また『天使が舞い降りた地』という伝説があったため、その『証拠』とされている羽衣を拝みにやってくる観光客が後を絶たなかった。それほどの村が、何故廃村となってしまったのか。

それは、２０年ほど前のある時……血気に逸った冒険者の集団が、自分たちの実力もわきまえず、ジャコブ村から十数リーグ離れた場所に存在していたオーク鬼の巣窟に突撃を敢行。返り討ちに遭い……ほうほうの体でジャコブ村へと逃げ込んだ結果――村がオーク鬼たちに『新たな餌場』として目をつけられてしまったからである。

近年では、オーク鬼たちは自分たちの巣を元いた場所からジャコブ村へと移転。何も知らずに近くの道を通りかかる商隊や、旅人たちに襲いかかってくるのだという。もちろん、村を追われた人々は領主に掛け合った。

だが……残念ながら、現在の領主に、それを追い払えるだけの兵力がなかった。王軍に訴え出るも、返事はなしのつぶて。仕方なく村人たちは故郷を捨て、別の場所に移り住むしかなかったのである。

そして、現在――その廃村で、複数の足音と怒号が響き渡っていた。

「くっそ、しつこいな、こいつら！　ま、だからこそ作戦が上手くいくんだけどな！」

コードネーム『ソード』こと才人は、ひたすら目的地に向かって走っていた。そこは、前もって全員で決めていた『攻撃ポイント』。そう……全員の中で最も足の速い彼が、特定の場所までオーク鬼数匹をおびき寄せる、囮役を務めているのだ。

「スノウαより報告。『ソード』ポイント1を通過。東側の路地を曲がり、現在ポイント3へ向けて駆け足にて移動中。どうぞ」

仮設司令部に待機しているスノウことタバサが、α（アルファ）と名付けた＜偏在＞の目を通して見た現状を、周囲に報告する。

「こちらブレイズ、了解した。ブロンズ司令！　ここは、作戦『プランB』への切り替えを進言します」

現況を聞いた参謀役――ブレイズことレイナールが、司令官に声をかけた。

「ブレイズの進言を採用する。コメット、フレア。聞こえたかい？」

「任せて！」「こっちもオーケーよ」

ふたりの声の後に、今度はβ（ベータ）と名付けたもう1体の＜偏在＞の視点を確認しつつ、タバサが小さく声を上げた。

「スノウβより報告。『ソード』まもなくポイント3に到着。作戦切り替えに伴う進路変更のための合図を発信します」

その声と共に、廃屋の屋根の上からチカッ、チカッと＜ライト＞の光が発せられる。それを見た才人は、すぐさま作戦変更があったことを知る。そう……これは『信号』なのだ。

「点灯2回ってことは……『プランB』に変えたのか。だったら、この先の角を曲がった先でよかったはず……俺が巻き込まれないように考えながら、うまいことこいつらをおびき寄せないとな！」

才人は、ぐんっと足に力を入れた。これまでよりも、ほんの少しだけ走る速度を上げる。だが、彼を必死に追い掛けるオーク鬼たちは、それに気付かない。

そして。ついに『プランB』を実行するための『目印』を見つけた才人は、大きく跳躍した。その直後。彼を追い続けていたオーク鬼たちは……その場で、突如何かに足を取られたように転んでしまった。そう……足場に、大量の油が撒かれていたのだ。

「今だ！　撃て――ッ！！」

ブロンズ司令こと、ギーシュの合図と共に、フレア……キュルケの＜フレイム・ボール＞数発がオーク鬼の集団目掛けて飛んでいく。

油まみれになっていたせいで、あっという間に業火に包まれ、悲鳴を上げるオーク鬼。その場から逃げだそうと暴れたが、袋小路へと追い込まれている上に、何故か『見えない壁』に遮られて、外へ出ることもできない。

そして遂には……断末魔の叫び声を上げて、どうと崩れ落ちる。生き残りの一部が、司令たちのいるバリケードを発見して突撃して

きたが、司令官ギーシュが操るワルキューレの『盾』に行く手を阻まれ、さらに参謀レイナールの＜風の鞭＞によって転倒。情報斥候として＜偏在＞を使い、周囲を観察しつつ司令部で連絡係に徹していたタバサの＜ジャベリン＞によってとどめを刺された。

「やったあ！　うまくいったぜ！！」

「ねえ、見た！？　あたしの＜炎＞。素晴らしかったでしょう？」

大喜びで駆け寄ってきた才人たちに、タバサが冷静な声で告げる。

「喜ぶのはまだ早い。今の音で、ここを察知された模様。遠くから雄叫びが聞こえた」

「むむ、それはいけないな。では、次の拠点へ移動するとしようか。ブレイズ、スノウと一緒に撤退ルートの割り出しを頼む」

ギーシュの言葉にレイナールは頷くと、早速手元の地図を見ながら、タバサと相談を始める。

「あたしの『壁』に、こんな使い方があるなんて思わなかったわ」

自分の＜力＞の意外な使い方に、驚きを隠せないルイズ。

「ワルキューレに『盾』を持たせるという考えから思いついたのさ。君の可能性をね」

……そう。今回の『作戦プランＢ』とは、袋小路になった通路へオーク鬼を誘い込み、ギーシュの＜錬金＞で作った油で転倒させた上で、キュルケの炎で焼いてしまうという、少々残酷なそれであっ

た。

逃げ道を塞いでいたのは、以前ルイズが才人と共に開発した『＜力＞の防御壁』。今回は、１枚の壁を作るだけにとどめ、消耗を抑えていたのだ。これを思いついたのは、今回の司令官・ギーシュである。

「みんな、怪我したりはしていない？　痛むところがあったら、すぐに言ってね」

ミス・フローラルことモンモランシーが、薬箱を持って駆け寄ってきた。

「怪我は大丈夫。飲み物があったら、少しもらえないか？」

その才人の言葉に、モンモランシーは手持ちの水筒から、コップ一杯分の液体を注ぎ、彼へと差し出した。

「はい！　ハーブ入りの特製ドリンクよ。気持ち程度だけど、疲れが取れると思うわ」

「サンキュー、フローラル！」

笑顔で特製ドリンクを受け取った才人は、それを一気に飲み干した。タバサの作り出した＜氷＞で冷やされたそれは、モンモランシーの調合の腕も手伝って、このうえもなく美味であった。

「ルート検索が終了したよ。さあ、みんな。移動を開始しよう」

「了解！！」

――昼前から開始されたこの討伐作戦は、こんな調子で繰り広げられ……なんと、夕方には全てのオーク鬼殲滅に成功するという、とんでもない快挙を達成するに至った。

なお、この戦いにおいて才人が傷を負ってしまったが、それは曲がる角を間違えた結果、壁に激突したためである。オーク鬼による攻撃を受けたものは、幸いにして誰もいなかった。

「いやあ、それにしても見事に作戦がハマったよな！」

全員で凱歌をあげながらキャンプ地へと戻る道すがら、才人は上機嫌でレイナールへと語りかけた。

「うん、ギーシュ……じゃなかったブロンズ司令の指揮も良かったし」

「スノウを情報斥候にしよう、って言い出したときは、どうなることかと思ったけどね」

キュルケのその発言に、全員が頷いた。そう……実は、今回の作戦指揮は、ギーシュが指揮官となり、全員で綿密な作戦を練った上で執り行われたのである。

教導官である『ハーミット』こと太公望は、最初に「今回はギーシュが指揮官だ。あとは全部任せる」と言ったきり、作戦会議中はキャンプ内に引きこもる宣言をして、本当に天幕の中で横になってしまった上、なんといびきまでかいていた。

行動開始後は、一応上空で警戒兼観察をしていたのだが……それ

でも、一切手を出す必要がないほど、全員の統制が取れていたことに、太公望は満足していた。一部、連絡統制関係での不備（作戦変更時の連絡不徹底など）は見受けられたが、そのあたりは後ほどの反省会で指摘すればいいだろう。

そう判断した太公望は、手元の考課表にその旨を書き記した。総合的な成績評価は８０点といったところであろうか。ギーシュ惜しい！　あと一歩が足りなかった。

なお、今回の布陣は以下の通りである。

・教導官　太公望

・総指揮官　ギーシュ（兼妨害工作兵）
・作戦参謀　レイナール（兼本拠地守備隊）
・情報斥候　タバサ（兼本拠地守備隊）
・突撃兵　才人
・砲撃兵　キュルケ
・砲撃兵　ルイズ（兼妨害工作兵）
・看護兵　モンモランシー
・糧食担当　シエスタ
・工作兵　ヴェルダンデ

さすがはトリステイン国軍元帥を父に持つギーシュである。メイジの配置方法についてはほとんど問題がなかった。そこに、太公望の軍学マニュアルから得た知識、さらに詳細な廃村の地図及びオーク鬼の生態に関する情報が加わって、見事なハーモニーを奏でていた。

特に『スクウェア』メイジであるタバサを、あえて攻撃に回さず

＜偏在＞による情報斥候として配置したことは、特筆に値する。通常ならば、その攻撃力に目がくらみ、狙撃手として配置していたことだろう。あと、さりげなくギーシュの＜使い魔＞にして、ジャイアントモール（巨大モグラ）の『ヴェルダンデ』が工作兵――落とし穴作成要員――として参戦していたことも見逃せない。

また、ルイズの＜爆発＞も上手に利用していた。当初本人は嫌がったのだが、彼女の＜爆発＞によって、瓦礫を撤去、あるいは敵をそれに巻き込むのに使いたいというレイナールの案に「それなら……」ということで参加したのだが、これが『防御壁』以上に上手くいって、本人も、提案した者も驚きの結果となった。

シエスタはキャンプで食事の用意をしていたので、実際の戦闘現場には立ち会っていないが、それにしても凄まじいとしか言えない戦果を聞いた彼女は、おおはしゃぎで全員を迎え入れた。

「すごい！　すごいです、みなさん！　あの凶暴なオーク鬼を、こんなに早くやっつけて戻ってこれちゃうだなんて！！」

「いやあ、まあ、それほどでもあるけど！」

デルフリンガーについたオーク鬼の血を、ぼろ布で拭いつつ、得意げにシエスタへ語る才人であったが……実は、その言葉とは裏腹に、声と手が少し震えていた。

初の実戦。しかも、生き物の命を奪ったのである。さっきまでは興奮で忘れてたけど、やっぱり、ゲームなんかとは全然違う……これは、本物の……命のやり取りなんだ。一歩間違えていたら、あそこで倒れていたのは自分だったかもしれない。才人は、改めてそれを実感していた。

そんな才人の様子に気が付いたシエスタが、大丈夫ですか？　と、心配げに声をかけてきた。その心遣いが有り難かった。

周囲のみんなは、この世界で生きている住民だけあって、こういった状況に慣れているのであろう、ケロッとした顔をしているが…たとえ相手が人食いの習慣を持つ凶悪な妖魔とはいえ、正直なところ、生き物の命を奪うというのは気分のいいものではなかった。そんな彼の心の揺らぎを察したのであろうデルフリンガーが、才人に語りかけた。

「まあ、これが初めての実戦だしな。オレっちを使うってなぁ、こういうことさ。すぐに切り替えろ、なんて言うつもりはねぇが、戦いの途中に迷っちゃいけねぇぜ？」

「剣のお前にそんなこと言われるのも、なんだか不思議な気分だけど……ありがとな、デルフ！」

「いいってことよ！　なんたって、相棒のためだかんね！！」

最近、ちょっと手入れサボりがちだったけど……帰ったら、もっとちゃんと磨いてやろう。一通りデルフについた汚れを拭い終えた才人は、そう決心した。

「才人さん、気分転換しませんか？　お食事の用意ができましたから」

そう言ってシエスタは、キャンプ横に作られた焚き火の上にくべられた鍋から、シチューをよそってめいめいに配り始めた。実にいい香りが、全員の鼻孔をくすぐる。肉が食べられない太公望のため

に、わざわざ小鍋が用意されているのがまた泣ける。

「うわあ、いい香り！」「外で食べる食事が、こんなに美味しいだなんて」

手渡された料理に、舌鼓を打つメンバーたち。全員が貴族の子女であるが、そんな彼らの舌をも満足させたこの料理は、もちろんシエスタの作である。彼女は、みんながオーク鬼討伐に出かけている間……山中を歩き、わなを仕掛けて野ウサギを捕まえたり、山菜やキノコ、香草といった素材を集め、シチューを作っていたのだ。

「シエスタって、器用なんだなあ」「あ、その……山育ちですから」

才人の褒め言葉に、思わず照れて俯いてしまうシエスタ。そんなふたりを面白くなさげな顔で見つめるルイズと、それをニヤニヤと見比べているキュルケ。

「香草の使い方が独特。これは、なんという料理？」

「あ、はい！　これはわたしの村に伝わる『ヨシェナヴェ』というシチューなんです」

タバサの質問に、慌てて答えるシエスタ。実にいいタイミングで発せられたその言葉に、グッと親指を立てて称賛するルイズと、残念そうに首を振るキュルケ。ここに、微妙なトライアングルが形成されつつあった。

「ほう、ということは、タルブの料理か！　わしは気に入ったぞ」

「俺も。なんでかな……ちょっと、懐かしい味がするっていうか……」

「本当ですか！？　でしたら、みなさんがタルブにいらっしゃった時に、もっと本格的なものをお出ししますね！」

そう言って微笑むシエスタの顔に、才人はなんだか親近感を感じた。今、手元にあるこのシチューにも、同じように、遠く離れた故郷を思い起こさせる何かを感じさせられた……だが、それが何故なのか、今の才人には、まだその理由がわからなかった……。

○●○●○●○●

――そして、翌朝。

改めて、先程の廃村へ向かうべく、全員が準備を始めた。何故なら……そこに、例の『天使の羽衣』と呼ばれる太公望の目的である＜マジック・アイテム＞が残されていたことと、夕食後に発した才人の一言、

「なあ。あんまり気持ちのいい話じゃないかもしれないけど……オーク鬼の装備の中に、いくつか金属製の棍棒とか胸当てなんかがあったよな？　あれって、どっかで売ったりとかできないのか？」

と、いう貴族にとっては目から鱗が落ちるような発言があったからである。

「その考えはなかったわ……そのままじゃ無理かもしれないけど＜錬金＞でインゴットにしたら、そこそこのお金になりそうね」

「いやはや、君はいったいどこからそんなことを思いつくんだね？」

「や、それほどたいしたことじゃ……」

感嘆するキュルケやギーシュに、才人は照れくささと恥ずかしさの入り交じったような顔で答える。正直『ゲーム』ではドロップアイテムを集めて売るのがお約束』となどということは、この場面では言いづらいであろう。

……とはいえ、この思いつきが、後々にまで渡って結構な額の『資金』や錬金のための『材料』を集める、大きなきっかけとなったのは確かだ。

――そして、再び廃村・ジャコブ村。

オーク鬼が駆逐され、すっかり静けさを取り戻したそこは、どこもかしこも荒れ果て……牧歌的な雰囲気すら漂っている。

持ち帰れる限界の金属装備を＜錬金＞でインゴットに変え、さらには売り物になりそうな品物をより分け終えた『水精霊団（オンディーヌ）』一行は、最後の目的たる『天使の羽衣』を手に入れるべく、村の最奥にある石造りの建造物――屋根の上に天使を模したのであろう石像が配置され、両開きの大扉によって封印が施されたそこの前へ立っていた。

念のため罠の類がないかどうかを調べた後、タバサが＜アンロック＞の呪文を唱えた。

「どれ……では、念のためわしが先頭に立って中へ入ってみよう」

そう言って、扉に両手をついてぐっと力を込めた太公望。かなり重い扉らしく、彼はぐぎぎぎ……と、うめき声を上げながら全力で押し開いていく。

と……何故か、キュルケが突然小さく身体を震わせはじめた。

「どうしたの？」

タバサの問いに、キュルケは小さく呟いた。

「い、いやっ、よくわからないんだけど……めくるめく笑いの予感が……！」

「む、なんの予感がするというのだ？」

キュルケの発言に、ただならぬものを感じたのであろう太公望が、思わず振り返った……そう、よりにもよって、重い扉を押し開けようとしていた真っ最中に、振り返ってしまったのだ。

当然のことながら、ギィィ……と、鈍い音を立て、再び閉まりそうになる大扉。

「いかん！　また扉が閉まる！！」

必死になって、扉の動きを止めようとする太公望。だがしかし、勢いのついてしまったそれは止まらない。ぐおー！　とか、ぐぎー！　とか言いながら抵抗するのだが……。

「あ、危ないわよ、ハーミット！」

「止まれっ、止まるのだっ！！」

やっぱり扉は止まらない……そして。

「ギャ――――ッ！！」

ゴーン……という、鈍い音と共に、扉は中途半端な形で閉ざされた。そう……無理矢理中を覗き込むような形で、扉を開けようとしていた太公望の『頭』を挟み込んだ状態で。

「でゃはははははははっ！！！」

そんな彼を指差して大爆笑するキュルケ。

「わ、笑っちゃ悪いわよ、ツェル……フレア」

そう言って注意したルイズの口端も、ヒクヒクと激しく動いている。

「……クスッ」

「わ、笑っちゃいけない、いけないんだけど……でもッ……あはははははッ！！」

必死にこらえていたが、つい吹き出してしまったタバサと、我慢しきれなくなったレイナール。後方では、モンモランシーやギーシュ、そして一緒についてきたシエスタまでもが悶絶している。彼らは既に、苦しすぎて笑い声すら出せないといった風情だ。

「か、閣下って、頭良いクセに時々とんでもなくバカだよな……！」

これまた腹をかかえて笑い転げている才人。彼も、時々とんでもなく失礼な男である。

「……」

だが、この状況では、正直何も言い返せない太公望であった……。

――5分後。なんとか『扉』から助け出された太公望は、改めて奥へと進んでゆく。

と……その奥に、うっすらと光る何かがあった。

それは……1本の木。＜固定化＞をかけられたためであろう、このような陽の差さぬ場所に立っているにも関わらず、枯れもせず青々とした針葉を茂らせている。

そして、そこから伸びた一本の枝に……それは掛けられていた。

「あれが、天使の羽衣……？」「綺麗……」

繻子（しゅす）のような、美しい光沢のある半透明の――まるで帯のような形状をした薄い布地。その両端には、レース織りのような白い飾りがつけられていた。まさしく天使が纏うに相応しいその姿を、衆目に晒している。

だがしかし。その下に落ちているものを見た一同は、その場で固まってしまった。なんと、複数の『砂山』が、羽衣を中心に積み重なっているのである。

「ひょっとして、あれが例の『呪い』ってやつ……？」

「た、たぶん……」

触れた者を、砂に変えてしまうという『呪い』。前もってその情報を伝え聞いていた彼らが尻込みしてしまうのは当然であろう。しかし、そんな中……平然とその羽衣の側へ歩み寄っていく者がいた。もちろん太公望である。

そして彼は『羽衣』の下へたどり着くと……へなへなと崩れ落ちるように膝をつき、そして、全身の力が抜けてしまったような声で呟いた。

「こっちへ来ていたのが、予想していた通りのモノで本当に良かった……万が一アレだったら、シャレになっとらんかったわ」

……と。

そして、まるで年老いた老爺のようによぼよぼと立ち上がると、全員が声を出す間もなく『羽衣』を手にする太公望。すると『天使の羽衣』は、突如鈍く眩い光を放ち始めた。まるで彼が到着するのを待っていたかのように……。

「うむ……やはり、わしを覚えていてくれたようだのう」

そう言って、光る羽衣をさっさと畳んで懐へと仕舞い込んだ太公

望は……唖然としている一同を見回して、こう告げた。

「これで、ここでの依頼は終了だ。依頼人のひとりであり、今日の宿泊地でもある『ジャコブ新村』の村長宅へ向かうとするかのう。そうそう、みんなよく覚えておいてくれ。わしがいいと言うまで、この『羽衣』を手に入れたことについて、絶対内緒にしておいてもらいたいのだ」

片手の指をぴっと立て、そう言った太公望の瞳には……悪戯っぽい色が煌めいていた。

○●○●○●○●

「なんと、あのオーク鬼どもを全て駆逐してくだすったと!?ありがたい……!!」

一同を出迎えたジャコブ新村――廃村となっていた旧村との区別のため、この名称が用いられている――の村長にして、壮年の神父・ジャコブが、水精霊団全員の手を取って感謝の言葉を述べた。

どこにでもある、寂れた小さな山村。ジャコブ新村は、その程度の印象しかなかった。と――そこへ、肩に桶をかついで、山の下のほうから村へと入ってくる人々の姿が目に留まった。神父曰く、この村で生きていくためには、なんと毎日村から１０リーグ以上も離れた場所にある川から、ああして水を運んでくる必要があるのだという。

「この村の近くには、水源がないのです。井戸を掘ろうにも、その知識を持つものもおらず……皆さんが解放してくださったかつて

の村にでしたら、すぐ側に泉があったので、このような不便はなかったのですが」

そう言って苦笑する神父。だが、その瞳には溢れんばかりの笑みが零れ出していた。

「しかし、皆さんのおかげで、私たちは再びあの村に帰ることができます。復興までに数年はかかるでしょうが……きっとまた、かつての賑わいを取り戻してみせます。さあ……皆さまお疲れでしょう？　何もない村ですが、今日は精一杯の歓待をさせていただきます。どうぞ、こちらへ……！」

そして、案内された先――村長の家で、水精霊団は盛大な……村にとっては精一杯の歓待を受けた。そしてそこで、彼らは『天使の羽衣』についての伝説を聞くこととなったのである。

――６０年ほど前のこと。とある老いた傭兵が、故郷の山村へと戻るべく、山道を歩いていた。彼は、長年にわたる身体の酷使で、疲れ切っていた。そこで、せめて最後は故郷で迎えたいと考え、重い身体を引きずるようにして旅を続けてきたのである。

そんなとき、彼は子供……それも、少女と思われる者の泣き声を聞いた。こんな山奥で、どうして子供の声が！？　そう考えた彼は、声がするほうへと歩み寄っていった。

すると……大きな木の下にひとりの少女が座り込み、しくしくと泣いていた。だが……それは、普通の子供などではなかった。何故ならば、その背には、白く輝く……美しい翼が生えていたからだ。

みつからない……まにあわない……そう呟きながら泣いている少女の切なげな声に、思わず同情し、彼女のそばへと近寄っていった老兵。だが、そんな彼の姿を見た彼女は、きっと恐れを抱いたのであろう。はっとした顔をして、翼を広げ、空へ舞い上がっていった。その時だ、彼女が身につけていた『羽衣』が、側にあった木の枝に引っかかってしまったのは。

だが、相当慌てていたのであろう『天使』は、そのまま天へと昇っていき……ふいと消えてしまった。そして、枝には『羽衣』が、静かな光を湛えたまま、残されていた……。

――しかし、そこで起きた奇跡はそれだけではなかった。

老兵は、いつのまにか自分の身体が、まるで羽根のように軽くなっていることに気が付いた。そして、自分の手を見た彼は驚いた。皺だらけだったはずのそれに、瑞々しさが戻っているではないか。慌てて、近くにあった泉に己の姿を映してみると……なんと彼は、１０代そこそこの若者の姿となっていたのである――！

「ええ……信じられないかもしれませんが、この私こそが、その老いた傭兵……天使様の御力で、新たな人生をやり直す機会を与えられし者なのです」

彼は、なんと既に１００歳を遙かに越えているのだという。その告白に驚いた一同。なにしろ、ジャコブ神父は、まだ６０歳程度にしか見えなかったからだ。

そして、彼は告白した。ただ老いさらばえ、朽ちていくのを待つばかりであった自分に、新たな人生が与えられたのは、きっとあの『羽衣』を守るためだと。そのために、一生を捧げることを誓おう

――と。

「私は、その天使様が『ジャコブがみつからない』と嘆いておられたのを聞いておりました。ですから、いつか天使様がお戻りになられた時……あるいは、その『ジャコブ』というおかたがこの地に現れたときに、気が付いてもらえるのではないかと……この名を名乗るようになったのです」

名を変えた元老兵――現在は神父となっている彼は『羽衣』を神聖にして不可侵のものとし、守ろうと誓った。しかし……ひとりではどうしても限界がある。そう考えた末、急いで故郷の村へと戻った。

はじめは世迷い言と信じなかった村人たちであったが、ジャコブの昔を知っていた者がいたことと、実際に『天使の羽衣』を見た一部の者たちがその話を信用し――また、水源が側にあったことから、そこに新たな村を作り、その村の名を『ジャコブ村』とした。

しかし……あるとき、欲深い者が『羽衣』を売り飛ばそうとした。その不届き者は、夜半過ぎに警戒の網を抜けて『羽衣』へ近づくと……手を伸ばし、ぎゅっと握り締めた。だがその瞬間。魂消るような悲鳴と共に、欲深者は乾いてゆき……崩れ、そして砂になった。

それを『罰』だと考えたジャコブは――金を支払い、土メイジに依頼して木に＜固定化＞をかけると、近隣の石切場から切り出した石を用いて、その周囲を覆うように建造した、石造りの建物でもって『天使の羽衣』を封印した。そして、建物の頂上に天使様の姿を模した像を掲げた。いつかそれが、あの天使様の目に留まるよう、祈りながら――。

「私は、明日の朝いちばんに、天使様の羽衣を確認しに参ろうと思います。みなさまは、ゆっくりとこの村で疲れを癒やして行ってください」

全員を寝所となる家屋――村で最も大きな家を1件開けたそこ――へ案内し終えたジャコブ神父は、そう言うと、何度も何度も頭を下げ、自宅兼小さな教会となっている場所へと戻っていった。

「ねえ……いいの？　あの羽衣って、すごく大切なものだったんじゃない？」

そう言って、咎めるような視線を太公望へと向けたルイズ。その他メンバーの意見もほぼ同様であるようだ。しかし……。

「まあいいから、明日の朝を楽しみにしておくのだ」

太公望は一切取り合わず、疲れたから今日はさっさと寝るのだ！と、全員を促した。

――そして、明けた翌朝。朝陽が昇る直前のこと。

朝のお勤めを終え、早速「旧村」へと向かおうと、教会を出たジャコブ神父だったが……ふいにその足が止まった。何故なら……今は誰もいないはずの教会のほうから、カラーン……カラーン……と、美しい鐘の音が響いてきたからだ。

「こ、これはいったい……？」

思わず、振り返った神父。そして、朝早くに突然鳴り始めた鐘の

音に驚いて、なんだなんだと集まってきた村人と……水精霊団のメンバーは見た。村に一陣の風が舞った直後……教会の屋根に、ひとりの少女が現れ……佇んでいるのを。

そして、ゆっくりと昇る朝日に照らされ……少しずつ少女の姿が顕わになってゆく。

歳の頃は、１０歳前後といったところだろうか。長い金髪を三つ編みにして、一本にまとめて後ろへと下げている。きらきらと輝く宝石をちりばめた、丈の短めな黒いドレスを身に纏い、腰には白く輝く、細い雲の如き、あの『天使の羽衣』が巻き付いている。肩には、晴れ渡った空のように清んだ、青い色のケープを羽織っていた。

まるで、朝、昼、夜……全ての空の姿を模したかのような装いをしている彼女の背には……白く、美しい翼が生えていた。

「お……おお……天使様……！」「天使だ」「天使様だ！」

跪いて祈る村人たち。そんな彼らを優しげな微笑みで見つめた天使は、可愛らしい、まるで綺麗な鈴の音のような声で、彼らへと語りかけてきた。

「神父さん、ありがとッ☆　キビの羽衣、見つかりッ☆」

ちょっと独特？　な喋り方でもって嬉しげに語る天使は、陽の光を浴びて輝いていた。跪き、祈りを捧げていたジャコブ神父は、その声を聞いて涙を流した。

「おお……おお……！　やはり、あのときの天使様であられるのですね」

「うんッ☆　ジャコブにも会えりッ☆　神父さんと、みんなのおかげッ☆　だから……キビは、この村のみんなに、お礼をしッ☆」

そう言うと、『天使』は懐から一本の『杖』を取り出し、くるくると空を舞い始めた。

「まほ～のじゅもん～☆　ロリロリロリッタ～☆　ロリロリ……リン☆」

きらきらと、星の輝きを纏いながら唄い踊る天使。

「天使だネ」「うん、天使だ」「まさしく天使だよ君」

ちょっとダメな方向で感激している才人、レイナール、ギーシュの馬鹿男共。幸いにして、そんな彼らの声は、同じく外へ飛び出してきていた女性陣の耳には届かなかった。彼女たちは、村人たちと同様……ただ、その可憐な天使の姿に魅入っていた。

すると……ドンッ！　という音と共に、村はずれの一角から、噴水のように勢いよく水が噴き出した。それは、徐々に小さくなってゆき……最後には、ただ静かに、こんこんと清んだ水が湧き出る泉となった。

「はいッ☆　と～っても美味しいお水だよッ☆　これが、キビにできるお礼ッ☆」

輝かんばかりの笑顔でそう告げた天使は、そのままくるくると村の上空を舞い飛びながら、高く空へ、天へと昇っていった。

「神父さんのことも、村のひとたちのことも、ずっと、ず～っと、忘れないッ☆　水精霊団のみんなも、ホントに、ホントに、ありがと――ッ☆」

そして『キビ』と名乗った天使は、空の彼方へと消えてゆき――

しかし、見守っていた村人たちと、水精霊団の一同は、しばらくの間、その場を動くことができなかった――

第５６話　舞い降りた天使の物語（後書き）

解答編。今回登場したのはみんなお待たせっ☆

……の「如意羽衣」でした！　ただ、この後の「解明編」に繋がりますので、舞い降りてきた彼女についてや、如意羽衣の使い道や効果などについて、もうちょっとだけ感想欄への予想書き込みはご遠慮ください。（前回は、みなさんご協力くださり誠にありがとうございました！）

序盤の冒険編から、終盤の伝説編までいっきにあげてしまいました。本当は解明編もまとめて挙げようかと思ったのですが、これが結構な量のため、あえて分割しました。

それにしても……ハマったなあ、この編成。役割分担がしっかりしているからブレない。この調子で成長していけば、彼らは名のある冒険者として成長していくことでしょう。なんか目的が変わっている気がしますが！

２０１１／０５／２３　２０：００　誤字脱字修正、本文一部加筆修正

２０１１／０５／２３　２３：４０　ドロップ品、及び太公望の考課表関連文章を一部修正

２０１１／０５／２４　０８：３０　誤字脱字修正

第57話　雪風と軍師と時空を駆ける妖精

「皆さんのおかげで、役目を果たすことができました。このご恩は一生忘れません」

涙を流し、何度も水精霊団一同へ頭を下げるジャコブ神父と村人たち。あなたたちがオーク鬼を退治してくだすったおかげで、我々はなんと天使さま自らの祝福を受け、素晴らしい『泉』をいただくことができた。これで水汲みの重労働から解放されるばかりか、旧村の復興速度も大幅に上がることでしょう……と。

ちなみにだが、例のオークが持っていた装備の一部から作り出したインゴットは＜錬金＞によって、スコップなどの今後復興に必要と思われる工具となり、村で買い取ってもらっている。

当初は無料で贈ると言っていた水精霊団の一同であったが、これ以上お世話になるわけにはいかない……と、しきりに遠慮する神父たちの間に太公望が立ち、相場よりも安い価格で引き取ってもらうという申し出をすることによってその場を収めた。村は格安で今後必要な道具が手に入り、水精霊団は重い荷物のかわりにお金を入手する。お互いに得となる取引であった。

そして――別れの時がやってきた。水精霊団のメンバーは、村人総出の見送りに手を振り返しながら、空飛ぶベッドに乗って、ふわり……ふわりと上空へと舞い上がっていく。

彼らの胸は、感動でいっぱいになっていた。オーク鬼退治で上げた想像以上の大戦果と、ジャコブ神父……そして大勢の村人たちか

ら投げかけられた感謝の声で。さらに早朝に見た天使降臨という奇跡が、彼らの心の中を暖かいもので満たしていた。

ただ、タバサには……どうしても腑に落ちないことがあった。村を立ち、しばらく飛んでゆけば……昼の休憩地として予定されている川岸へ到着する。そこで、改めて彼に聞いてみよう――あの『天使の羽衣』にまつわる、本当の謎について。

――それから30分ほどで、タルブ村との中間地点に位置する『休憩ポイント』の川辺へ到着した一行は、慎重にベッドを降ろしていく。無事に着陸した後は、村人たちが持たせてくれたバスケットいっぱいのお弁当を広げ、川のせせらぎを聞きながら、冒険中の話を繰り返しつつ、のんびりとした時を過ごしていた。

そんな中……唐突に、タバサが口を開いた。

「タイコーボー。あなたに、聞きたいことがある」

彼女の質問を、待っていたとばかりに受け付けた太公望。

「うむ、そろそろ聞かれる頃だと思っていた。例の羽衣の件であろう？」

彼らのやりとりに、一同の視線が集まる。そう……やはり全員が気になっていたのだ。何故なら、あの『天使の羽衣』は、確かに太公望が入手して、自分の懐へと仕舞い込んでいたはずだ。にも関わらず、わざわざそれを内緒にしろと全員に口止めを指示していたこととといい、その羽衣を、例の天使様が身に纏っていたこととといい……はっきり言って、謎が多すぎた。

「ふっふっふ……」

そんな彼らの顔を、ニヤニヤと、実に悪い笑顔でもって見渡した太公望は……ちょっと離れた場所まで移動すると、懐に手を入れ、そこに入っていたモノをささっと取り出して羽織ってみせた。そう……それは、間違いなくあの『天使の羽衣』であった。

「ウハハハハッ！　胡喜媚（こきび）に＜変化＞ッ！！」

ボウンッ！　という音と共に、太公望の周りを煙が包み込む。突然のことに、思わず仰け反ってしまった水精霊団のメンバーたち。と……立ちこめていた煙が徐々に消えてゆき……そこに立っていたのは。

「喜媚ちゃん登場ッ☆　ロリッ☆　ロリッ☆」

なんと、軽快なステップを踏み踊っている……『天使様』であった。

「えええぇぇぇぇえええええ――ッ！！！」

それまでは静かだった川辺に、驚愕の叫び声が響き渡った――。

○●○●○●○●

「これはッ☆　如意羽衣（にょいはごろも）と呼ばれるッ☆　纏った者をッ☆　変身させる＜力＞を持ったッ☆　＜マジック☆アイテム＞なのだッ☆」

「やめて！　その喋り方と姿はもうやめてッ！！」

相変わらず『天使様』の姿で解説を続ける太公望と、半泣きでそれを止める、才人を含む男子生徒陣。そりゃあ泣きたくもなるだろう、今朝方、その可憐な姿で村人や自分たちを魅了し、感動を与えてくれた少女の正体が……実はその本性をよく知っている、イイ歳をした男だったわけだから。

「不覚ッ……ゴスロリ天使というだけで萌えてしまっていた自分が情けない……ッ！」

ぎりぎりと拳を握り締め、悔し涙を流す才人と、それに追随するギーシュにレイナール。

「現実とはッ☆　いつも残酷なものなのだッ☆」

「イヤァァアア――ッ！！」

さらに、そこへ追加攻撃をかます太公望。この男、ノリノリである。昔、自分が最も信頼を置く副官にして親友たる青年が似たようなことをした際には、その姿を見て笑いまくっていたにも関わらず……いざ自分がやるとなったらこの始末だ。

――そして、それから数分後。ひとしきり彼らをからかって満足したのであろう太公望は、元の姿へ戻った途端、こうのたまった。

「……と、まあこういうわけだったのだよ」

「どういうわけなのか最初から説明しろ――ッ！！」

全員の声が川辺に木霊（こだま）した。まあ、彼らのツッコミはもっともで

ある。これだけで理解しろというほうが無理だ。まったく、面倒だが仕方がないのう……などと、ぼそぼそと呟きながら、太公望は説明を始めた。まずは、先程の『天使』について。

「あの『天使』と呼ばれていた娘は……名を胡喜媚（こきび）という。あの姿を見てわかる通り、人間ではない。あれは、わしの国に住んでおる『雉鶏精（ちけいせい）』という妖精の一種でな……時間と空間の狭間を行き交う、伝説の＜力＞を持つ者なのだよ」

――あえて『妖怪』と言わなかったところに、彼なりの優しさを感じていただきたい。

「時間と空間を行き交う……伝説の妖精……？」

「うむ。そして、その妖精が舞い散らす『涙』と『羽根』に触れた者は……時間的退行を引き起こす。最悪の場合、生まれる前にまで戻されて、存在そのものを消されてしまうのだ」

それを聞いた一同の顔色が変わる。あんなに可愛らしい姿をしているが、実はそんなに怖ろしい＜力＞を持つ『妖精』だったのか……と。そして、彼らは気が付いた。そう――あのジャコブ神父が若返りを起こした理由に。彼は、あのコキビという妖精の＜力＞をその身に浴び、肉体のみが時間的に逆行しまったのだ。

「あの神父さまは、１０歳くらいまで若返った程度で済みましたけど、もしも運が悪かったら……赤ちゃんの姿にまで戻されてしまっていた可能性もあったってことですか？」

「ううん、それどころか『生まれなかった』ことになってしまうってことよね？」

シエスタとモンモランシーの問いに、重々しく頷く太公望。それを見て、改めて戦慄するメンバーたち。

「若返りは、あたしたち女にとっては共通の夢だけど……」

「失敗したら、この世から消されちゃうっていうのは……さすがに、ねえ？」

「あまりにもリスクが高すぎる」

と……ここで、ふとあることに気が付いた者がいた。タバサである。

少なくとも、タイコーボーとあの妖精は知り合いらしい。しかも、互いの名前を知っていて……持ち物を贈られる程度には。そして彼女は、改めて自分の『パートナー』を見た。２７歳という年齢の割には、驚くほど若い――１５～６歳、もしかするとそれ以下といっても通用するかもしれない姿。まさか――！

「タイコーボー。ひょっとして、あなたはその妖精の＜力＞で、今の姿に……！？」

タバサの言葉に、一斉に反応する一同。思わぬことで全員の注目を浴びてしまった太公望は、仕方がない……とでも言わんばかりの表情で、ぽりぽりと頬を掻きつつ答えた。

これは、ある意味では――特に、自分の姿について納得できるそれらしき理由付けとして提示するには良い機会なのかもしれぬ……などと考えながら。

「わしとしたことが、うっかり失敗して、あの娘を泣かせてしまってのう……結果、ジャコブ殿と同様『時間的退行』を受けてしまったのだ。まあ、今では死なずに済んでよかったと前向きに考えることにしておるのだが……」

「なるほど……それで、身体は子供、頭脳は大人状態になってしまったと」

太公望の答えを聞いて、タバサが頷いた。そして、そんな彼女の呟きを聞いた才人が、思わずぼやく。

「その例え、すっげえわかりやすいんだけど……どっかで聞いたような覚えが……」

改めて太公望の姿をまじまじと見た一同は、それで完全に納得してしまった。なるほど、彼の見た目が実年齢よりも遙かに若いのは、あのジャコブ神父と同じように、妖精の＜力＞に触れてしまったせいなのか――と。

まあ、例によってキュルケが、内心で「それなら、精神的にはともかく年齢は釣り合うじゃないの！　よかったわねタバサ……」などという、またしてもそっち系の感慨を抱いていたわけだが、当然のことながらそんなことに太公望が気付くわけもなく。

――なお、太公望が胡喜媚の『時間的退行』を受けたことがあるのは事実である。ただし、彼の見た目の若さと「それ」は、直接的な関係は一切ない。若いうちに＜生命＞の極意である『不老不死の秘法』を極めて仙人になることに成功し、年齢不詳となった。それが、外見に関するたったひとつの真実だ。

「でも……何故その妖精を泣かせるような真似をしてしまったの？　少なくとも、わたしが知っているあなたなら、そのような失策をするようには思えない」

そのタバサの言葉に、苦い顔をする太公望。彼は、少し考えると……ちと長くなるが構わぬか？　と、前置きをした上で、当時の事情を全員に語り始めた――もちろん、いつもの捏造設定大幅込みで。

「実はな、かつてわしには＜使い魔＞がおってな」

「ミスタにも＜使い魔＞がいたのかね!?」

あなた自身が＜使い魔＞なのに!?　という言葉を危うく飲み込んだギーシュだったが、幸いにも、太公望はそれに気付いた様子もなく言葉を続ける。

「うむ。喋る……風竜の子供なのだ」

――空飛ぶカバと言わなかったところに、彼なりの思いやりを感じていただきたい。

ちなみに、ここで太公望が＜使い魔＞という表現でもって説明しているのは、彼がかつて騎乗していた霊獣・四不象（スープーシャン）のことである。その姿は一見するとカバのようだが、頭には立派な角とたてがみがある。また、1時間限定だが――まさしく東洋風の竜（ドラゴン）と呼ぶに相応しい姿『戦闘形態（バトルモード）』に変身する能力を持つ。その他にも様々な能力があるのだが、ここでは割愛する。

「喋る風竜って……まさか、韻竜の幼生体!?」「それは珍しい」

「と、いうより……韻竜はとっくに絶滅したとばかり思っていたよ」
「ぼくも」「あたしも……」

口々に感想を言い合う若者たち。それも当然である。ここハルケギニアにおいて、喋る竜――韻竜という存在は、既に伝説の彼方にしか存在しないとされている程なのだ。もっとも、太公望が騎乗していた四不象自体も、非常に珍しい霊獣である。その背に跨っているだけで『ステイタス』とされる程に。

「で、話を元に戻すが……胡喜媚は、わしの＜使い魔＞『スープー』のことをひと目見ただけで、非常に気に入ってしまったようでのう。気だてのよい、可愛い竜であったから、気持ちはわからんでもない。だが、問題はその後だ……なんと胡喜媚は『自分が勝ったら、スープーとの結婚を許してほしい』と、わしに決闘を申し込んできたのだよ……よりにもよって、衆人環視の中で」

心底疲れたといった風情で語る彼に、驚きと同情がない交ぜとなった視線を送る一同。

「決闘!?　あの小さな女の子が!?」

「あきらかに、結婚の意味がわかってないわよね、それ。決闘についても」

「周りに大勢ひとがいたところで、それは……正直対応に困るわよね」

「で……うっかり泣かせちゃった、と？」

彼らの発言を肯定するかのように、がっくりと項垂れる太公望。

なるほど……それはきつい。もしも自分が似たような状況に陥ったら、間違いなく対処に困る。きっと、なんだかんだで人の良い彼は、きっぱりと断ることもできず……その過程で妖精の少女を泣かせてしまったのであろう。その場にいた全員が、太公望へと同情の視線を向けた。

「でだ、結局わしの負けということにして『婚約』だけ許してやったのだが……お互いにまんざらでもなさげに仲良くしておるので、それならば……と、以後はスープーには騎乗せずに、胡喜媚と一緒に遊ばせてやることにしたのだ。なにせ、両方ともまだ小さな子供だからのう」

――そのスープーを含む、仲間たちの捜索の目から逃げ回っていたとは言わない。

……ついでにいうと、胡喜媚との決闘は『負けということにした』のではなく『手も足も出ずに完封されかけた挙げ句、その後弄した策も失敗。彼女に完敗した』のである。

もちろん、そんなことは間違っても言えない……おもに、自分の威厳を保つ的な意味で。よって、それについては完全に黙っていることにした太公望であった。

「と、ここからは推測になるのだが……おそらく胡喜媚は、自分を置いて旅に出てしまったわしのことを探して欲しい……と、スープーに頼まれたのだ。あやつは寂しがりやだからのう。で……彼女は『空間ゲート』を開き、このハルケギニアの地へと舞い降りて来たのであろう。妖精だけにその＜力＞は、人間のそれを遥かに上回る。そのくらいは朝飯前であろうな」

「なるほど。泣かせたりしなければ、害のないエルフ……のような存在なのだね」

ギーシュの言葉に、太公望は頷いた。

「何故60年ものズレが発生していたのかまではわからぬが……強い＜力＞を持っていても、まだまだ子供だからのう……おそらくだが、何らかのミスで、別の時間軸に出現してしまったのであろうな。なにせ『時と空間を渡る妖精』だからのう」

この言葉に、ふと閃いたのはルイズだ。

「じゃあ、もしかして『ジャコブ』っていうのは……」

「うむ。間違いなくわしのことだ。厨房で、わしのことを『ジェイコブ』と呼ぶ料理人がおるし、才人の姓である『平賀（ひらが）』を『ヒリーガル』と発音する者がいるくらいなのだ。あの神父殿も、おそらくそんな風に彼女の言っていた名前を聞き間違えたのであろう」

タイコーボウ……タァイコゥボゥ……ジェイコブ……ジャコブ……なるほど。『ジャカルタの芋』が、いつのまにか『ジャガタラ芋』に変わって、そこから『じゃが芋』って呼ばれるようになったようなもんか……と、妙な方向で納得してしまった才人であった。

「と、まあ『天使』についてはこんなところかのう。ちなみに、あの『水』についてはたいしたことはしてはおらぬ。もともと、あそこに水質のよい地下水脈があるのはわかりきっておった。だから、最も相応しい場所に＜エア・ニードル＞で穴を開けてやったに過ぎない」

そもそも、現在こうしてくつろいでいる川の水源は、ラグドリアン湖である。廃村に泉があったこともあり、その中間地点に位置する新村付近に、水質のよい地下水脈があるのはほぼ間違いない……と、昨夜のうちに、全員が寝静まったのを確認した上で、ひとり調査を済ませていた太公望であった。

ただ、そんな彼にもいくつかわからないことがあった。それは……あのジャコブ神父が言っていた言葉。胡喜媚が呟いていたという『まにあわない』という一言や、それに関連すると思われる出来事についてである。

６０年もの時間軸のズレ。そして、この世界『ハルケギニア』を既に発見しているにも関わらず、今だ太公望の前に誰も――まだ姿を見ていない王天君や、如意羽衣を残した胡喜媚を除き――現れないこと。彼女が残した言葉は、それらに関連しているような気がするのだが……正しい答えを導き出すためには、今はまだ情報が不足しすぎていた。

そして、そのまま思考の淵に囚われそうになっていた太公望をすくい上げたのは、キュルケであった。彼女は、興味津々といった表情で、羽衣を見つめている。

「ところで……その羽衣って、あの妖精の子にしか変身できないの？」

その問いに、太公望はどう答えるべきか考えた。自分にできるのは、せいぜいよく知る他者か……あるいは特定の物体に＜変化＞すること。それが精一杯であろう。本来の持ち主たる胡喜媚の＜変化＞には到底及ばない。それでもあえて説明をするとするならば、実

際にやって見せるのが手っ取り早い。もちろん……実験も兼ねて。

「そうだのう……キュルケに＜変化＞ッ！！」

再び、ぼうんっと巻き起こった煙に包まれた太公望。だが、煙が晴れた後、その姿は……キュルケのそれと瓜二つに変わっていた。

「才人に＜変化＞ッ！！」

再び、大声で変身を宣言する太公望。そして、その宣言通り、彼が才人の姿に変わったのを見た子供たちは、大歓声を上げた。

「うわあっ、面白いじゃないか！」「ちょっとよく見せて！！」「俺にも貸してくれよ！」「わたしも！！」「わたしも見たい」「あ、これ！　触ってはいかんと……！！」

そして、わいわいと駆け寄ってきて羽衣に触れてしまった彼らはその瞬間。電撃のような衝撃を受け「きゅうんっ！」という、散歩中にうっかり打ち水を掛けられてしまった子犬のような悲鳴を上げ、その場に崩れ落ちてしまった。

だが……その中に、無事だった者たちがいた。『呪い』についてよく覚えていたため、羽衣に触れなかったルイズとレイナール、貴族さまの持ち物に触れるだなんてとんでもない！　と、遠慮していたシエスタ。この3人については、まあいい。問題は……。

「さわり心地は、上質の絹のよう……でも、何か不思議な＜力＞を感じる」

一斉に崩れ落ちた周囲の様子が、全く目に入らず……それどころ

か、まるで羽衣に魅入られてしまったかの如く、ただひたすらそれに触れ続けているタバサである。

「た、タバサよ……おぬし、こ、これに触れて、なんともないのか……？」

太公望は、驚愕していた。これはあきらかにおかしなことなのである。『如意羽衣』は、れっきとした宝貝（ぱおぺい）の一種。本来であれば、仙人以外の者が触れた場合、よくて気絶。長く手に取り続けた場合……その＜生命力＞全てを吸い尽くし、ミイラのように乾いた状態にしてしまうという、怖ろしい『道具』なのだ。

「ん……特には」

と……ここで、ようやくタバサは周囲の様子に気が付いた。自分の周囲にいた者たちのほとんどが、その場に倒れていることに。とりあえず、無事だった者たち全員で、倒れた彼らを1箇所に集めて寝かせると、太公望は改めて検証を開始した。

「何故だ!?　これは、本来わしの国の＜術者＞にしか触れられぬはず。そのための厳重な感知用プロテクトがかけられておるからだ！　現に、彼らは気絶しておるというのに……」

慌てふためく太公望に、声をかけたのは……ルイズであった。

「感知……？　ねえミスタ、ひょっとして『感覚の共有』じゃないかしら？」

「む……ルイズよ。それはどういうことなのだ？」

「えっと……本来＜使い魔＞は、主人と視覚や聴覚を共有することができる……ってことは、もう知っているわよね？」

そのルイズの言葉に、はっとする太公望。

「そうか！　わしはタバサの＜使い魔＞だから……！」

「ええ。もしかすると、ミスタとその『感覚』を共有できているんじゃないかしら」

太公望は考えた。わしの『仙人』としての『感覚』を、タバサが＜使い魔＞のラインでもって共有している！？　まさかとは思うが、もしもそれが事実であるならば……試してみる価値はありそうだ。

「ふむ……タバサよ。ちとこの羽衣を纏ってみるのだ。そのマントは邪魔になるだろうから、とりあえずいったん外して、だぞ」

言われた通りにするタバサ。やはり直接『如意羽衣』に触れても、なんともないようだ。それどころか、羽衣は彼女のことを『所有者』として認めてしまったようだ。その証拠に、初めて太公望が触れたときと同じように、淡い光を放っている。

「では……頭の中で、その羽衣に向かって念じてみよ。『浮かべ』……とな」

タバサは、太公望の言葉通りに念じてみた……＜魔法＞で空を舞うときのようなイメージで。すると、彼女の身体は、ふわりと宙へ浮き上がった。まるで＜フライ＞で飛んでいるかのように。

「と……飛んでる！」「浮いた！　浮いたよ！！」「す、すごい

……」

――そう。『如意羽衣』には、変身以外にも『宙を舞う』能力がある。＜フライ＞で空を飛び慣れている彼女なら、ひょっとすると……と考えて実行させてみた太公望であったが、予想以上に馴染んでいるその姿に驚いてしまった。

そして、太公望は改めて脅威を感じた。これは……ひょっとすると『打神鞭』に触れても大丈夫かもしれない。だが……かの宝貝に取り付けられている『太極図』は、タバサにとってあまりにも危険すぎる。

何故ならば『太極図』は、宝貝の中でも特に強い＜力＞を秘めた『最強の7つ』その一画を占める特殊な宝貝なのである。太公望も、初めて手にした時、ただそれだけで気を失ってしまった程なのだ。

太公望は、現在の自分自身の状態についても確認してみた。如意羽衣へ＜力＞が吸い取られているような感覚は一切無い。つまり、あくまで＜生命力＞の供給は、タバサ自身のそれから行われているのは間違いないだろう。よって、下手に『太極図』へ触れさせてしまったら……最悪の場合、それだけで彼女を死なせてしまう可能性がある。そう判断した太公望は、急いでタバサ本人の状態を調べることにした。

「ふむ……タバサよ。ちと確認させてもらいたいのだが……『それ』の正しい使い方が、わかるか？　そうだのう……例えて言うならば、頭の中に、使い方の説明が入り込んでくるような『感覚』はあるか？」

タバサは、首を横に振った。なるほど、飛行能力については利用

できるが、現時点では変身するほどの＜生命力＞がないため、羽衣自身の判断でもって封印を施しているのか。そう判断した太公望は、改めて補足をしておくことにした。彼女に危険が及ばぬように。

「以前、全ての生物には＜気＞と呼ばれる＜力＞が宿っている…という説明をしたと思う。その『羽衣』は、実はその＜気＞……別の言い方をすると＜生命力＞を変換することで、奇跡を起こすアイテムなのだ。よって、使いすぎれば当然のことながら死に至る危険性がある」

その言葉を聞いて、あわてて地上へ降りてきたタバサ。心なしか、その顔は青ざめていた。それを見て、これは少し驚かしすぎてしまったか？　と、焦った太公望は、改めて＜気＞に関する説明を追加した。

「そう慌てなくても大丈夫だ。＜気＞が減るということは、身体が疲れるということだ。よって、すぐに限界が判断できる。まずいと思ったら、単に使うのをやめればよいだけなのだから」

と、タバサはその太公望の言葉を聞いて、非常に有益なことを閃いた。これは、ひょっとすると……！

「もしかして、この羽衣で空を飛びながら＜魔法＞を使うことが……？」

彼女の言葉を肯定するように、太公望は頷いた。

「うむ。使い慣れれば＜フライ＞の倍近い速度で飛びながら＜魔法＞を使うことすら可能となるだろう。おまけに＜精神力＞を消費せずにな。ただし、それには『複数思考』の訓練が必要で、かつ『

瞑想』と『空間座標指定』の修行をさらに先へと進める必要がある。もちろん＜生命力＞つまり体力の増強も必須だ。おぬしは……」

「もちろん、その訓練を受ける」

その答えに、聞くまでもなかったのう……と、満足げに頷いた太公望は、こう言った。

「そうか、ならばその羽衣はおぬしにやろう。ただし、わしが使いたいと申し入れたときには、貸し出してもらいたい。それでもかまわぬか？」

「本当に……？」

予想だにしなかった太公望の申し出に、目を輝かせたタバサ。それは当然だろう、こんな貴重な＜マジック・アイテム＞をもらえるというのだから。

「それをおぬしに贈るのは、修行の役に立つということと、そもそも女性用に作られた『羽衣』であるので、男のわしが身につけるというのはおかしな話だからなのだ。ただし、例の『呪い』の件があるから、他者が絶対に触れないような形で所持しないといけない。それだけは、くれぐれも気をつけるのだぞ」

その言葉に、タバサはコクコクと、激しく頭を上下することで応えた。だが、実際のところ、太公望は『敵』の多い彼女の護身用具として『如意羽衣』を手渡したのだ。もしも『杖』を奪われたとしても、最悪この羽衣さえ持っていれば、空を飛んで逃げることが可能であろうから。

「確かに、羽衣といえば女性的な印象がありますよね」

そう言って、本当に素敵な布地ですわ！　と、褒め称えるシエスタ。

「それ、すっごく綺麗よね……タバサが羨ましいわ」「おまけに＜精神力＞を使わずに＜フライ＞と同じ効果が得られる＜マジック・アイテム＞か……同じく羨ましい」

例の『呪い』さえなければ、是非自分たちにも貸してもらいたいのに……そう、しきりに羨ましがるルイズとレイナール。

そして……太公望は非常に重要なことを彼女に言い渡した。

「タバサよ。ちなみにだが、わしの『杖』にかかっている『呪い』も、感覚の共有で無効化してしまうかもしれん。だが、間違ってもあれに触れてみようなどとは思うでないぞ？　あれは、ただの『杖』ではないのだ」

そう言って、懐から『打神鞭』を取り出して見せる。

「この『杖』……『打神鞭』は、複数の＜マジック・アイテム＞を内蔵し！　かつ、わしの師匠が手ずから作成してくださった、わし専用にカスタマイズされた特別製なのだ。よって、その如意羽衣とは比べものにならぬほど強力な＜封印＞を施してある」

そう言われてタバサは思い出した。そういえば、母さまを助けにいったあの晩、彼は『杖』の先から、不思議な『旗』を広げていた。なるほど……あれ以外にも、何か別のアイテムが取り付けられているのか。それならば、盗難防止のために強力な『呪い』をかけてお

くのも頷ける。

そして……どうして彼が＜マジック・アイテム＞の入手に関して、わざわざあの『土くれ』を雇ってまで各地の情報を集め、なおかつ懸賞金を簡単に放棄するほどの執念を燃やしているのかについても理解した。

何故なら、この羽衣のようなアイテムを複数組み合わせ、使いこなすことができれば……それはとてつもない＜力＞になるからだ。事実、あのときの『旗』も、この『羽衣』も、実際に見てわかったが、間違いなく『秘宝』と呼ぶに相応しい＜力＞を持っている。その価値は、当然のことながら懸賞金などには替えられない。

「今はまだ飛ぶことしかできぬようだが……修行が進むにつれ、わしと同じように＜変身＞が可能となるやもしれぬ。その時がきたら、その羽衣が教えてくれるであろう」

――遙かな時を越えて訪れた『妖精』は……『雪風』に新たなる可能性を示した――

第５７話　雪風と軍師と時空を駆ける妖精（後書き）

使い魔との感覚共有。その設定を、ピンチではなくここで使わせていただきました！　太公望を＜使い魔＞にすることにより、なんと限定的ながらも宝貝の使用が可能となったタバサ！　これはある意味＜虚無＞以上にとてつもないアドバンテージとなって彼女を助けてくれることとなる……はず！　あ、太極図はいくらなんでも無理です。打神鞭だけならいけるかもしれませんが！　杏黄旗は……内緒ということで。

なお、如意羽衣についてですが。本文でも触れております通り、太公望では胡喜媚のような自由極まりない＜変化＞はできないという設定です。伏羲に戻っても、彼女ほどの変身はおそらく不可能でしょう。筆者自身、あれは胡喜媚ならではの＜能力＞だと受け止めております。

ちなみに「ジャコブ」は「ジェイコブ」のフランス語読みだったりします。微妙にいらない豆知識でした。

２０１１／０５／２６　誤字脱字修正、本文加筆修正（生命力周りの説明、羽衣を渡した経緯についての追加他）
２０１１／１０／０２　誤字脱字修正、本文加筆修正

第５８話　伝説、大空のサムライに誓う事

――魔法学院に勤めるメイドの少女シエスタは、空の上で困っていた。

水精霊団の一行に混じって『空飛ぶベッド』に乗り、故郷であるタルブの村へと向かっていた彼女は、空の上で流れる雲に感動している最中……よりにもよって、

『タルブに鎮座する秘宝、竜の羽衣について知っていることがあれば教えて欲しい』

そう、太公望から申し入れをされてしまったからである。

『竜の羽衣（りゅうのはごろも）』。それは、シエスタにとって特別なものであり――ある意味困惑の種となっていたものだった。何故ならば……それは、彼女の曾祖父が村に持ち込んだ『まがいもの』にして『インチキの塊』だったから。

『竜の羽衣を纏う者は、自由に空を飛ぶことが叶うであろう』

そう、言い伝えられている品ではあるのだが……明らかに、それは嘘なのだ。にも関わらず、地元の人間の中には、そんなガラクタをありがたがって寺院に祀った上に、さらには拝んでいる者さえ存在する。しかし、あれはあくまで……どこにでもある、名ばかりの『秘宝』なのだ、と――幼い頃から、祖父からも……父からも繰り返し言われ、シエスタは育ってきた。

だからこそ、言いづらい。しかも、ついさっき本物の『羽衣』を

見ているだけに、余計にその思いは強くなるばかり。だが……下手に隠し立てをするよりも、はっきりさせておいたほうがいいだろう。そのほうが、貴族の皆さまの期待を膨らませずに済むだろうから。

そう考えた彼女は、ぽつり、ぽつりと語り始めた……『竜の羽衣』の由来について。

「ずっと昔……今から、60年くらい前の話です。ずーっと東の地にある国から『竜の羽衣』に乗って、わたしのひいおじいちゃんはタルブの村へやってきたんだそうです。でも、誰もそれを信じませんでした。ひいおじいちゃんは頭がおかしかったんだって、みんな言ってます」

何故ならば。村人が『なら、それで飛んで見せてみろ』そう問い詰めたとき……彼女の曾祖父は、飛べなかったのだという。しかも、何やら言い訳をして、そのまま村に居着いてしまったのだと。よって、当然のことながら、その場にいた者たち全てが『あれは偽物、インチキだ』と、断定した。

ただ『竜の羽衣』に関すること以外については、彼女の曾祖父はいたって普通。おまけに働き者で気の利く男だったため、彼はいつしか村にとけ込み……そして、所帯を持ち、最後はこの地に骨を埋めたのだという。

「ひいおじいちゃんにとって、あの『羽衣』は、たとえまがい物でも宝物だったらしいんです。だから、一生懸命働いて、お金を貯めて……貴族さまに御願いして、わざわざ＜固定化＞をかけてもらってまで、大事に大事にしてました」

期待している皆様には、申し訳ないのですが。そう言って、寂し

げに笑うシエスタだったが……その他の一同は、笑っていなかった。
それどころか、真剣に彼女の話に聞き入っていた。特に……最初に話を振った太公望と、才人のふたりが。

「なあ……閣下、どう思うよ？　『東』ってのがポイントだと思うんだけど」

「うむ。しかし、わしの国の＜マジック・アイテム＞ではない可能性が高い。何故ならば、例の『呪い』が発動しておらぬからのう。だが……初めてその『情報』に触れたときに、これは『破壊の杖』と同じなのではないかと感じたため、今回のタルブ訪問を決めたのだ」

「やっぱりアレ系か。とりあえず、実物を見ないと何とも言えないけどな」

「うむ。全ては『竜の羽衣』を見てから、だのう」

そう言って、頷き合った……奇しくも、自分と同じ黒い髪を持つふたりの少年を、シエスタは実に複雑な心境で見守っていた――。

○●○●○●○●

――タルブの村、その近くに建てられた寺院。

それは、草原の片隅にぽつんと存在していた。

丸木を組み合わせて建てられた門。それは、朱色に塗られていた。
そして、トリステインによくある石造りのそれではなく、板と漆喰（しっくい）

で作られた壁と、木の柱。枯草で編まれたのであろう『縄』と、それに着けられた紙の飾り。

「これ……神社だ……あの、門……鳥居だよ……間違いない」

才人は、胸の高鳴りを抑えることができなかった。それも当然だろう、まさかこんな異世界に来て『神社』を見ることができるなどとは、思ってもみなかったのだから。

「ねえ、サイト。あんた、この建物を知ってるの……！？」

いつもの落ち着かない態度とはまるで違う、その場に立ち尽くしたまま小刻みに身体を震わせ続けている才人に、ルイズは不安げに話しかけた。理由はわからない……だが、彼がついとそこからいなくなってしまうような……そんな気がして。

そんなルイズの想いとは裏腹に、まるで、意識がどこか遠くへと旅立ってしまったかのように虚ろな表情をした才人は、そのままよろよろと『鳥居』へ近付くと、その柱に手を触れ、感触を確かめながら呟いた。

「間違いない。これは、俺の国の……神様を祀るための建物だ」

その呟きに答えたのは、シエスタだった。

「これが……？　サイトさんの国の、神様をお祀りするための建物……なんですか！？」

曾祖父が自ら設計し、建造したというこの寺院が……目の前にいる彼の国の建造物だという。まさか……それが本当だとするならば、

ひいおじいちゃんと、サイトさんは――！

「中、見せてもらっても構わないか？」

そう言って、これまでになく真剣な眼差しを向けてきた才人に、シエスタは、ただ……黙って頷くことしかできなかった。

――鍵が掛けられ、閉じた格子戸の奥に『竜の羽衣』は安置されていた……いや、正確に言うならば『羽衣』を包み込むように寺院が建てられていたといったほうがいいだろう。板敷きの床の上に、くすんだ濃緑の塗装をされたそれが。＜固定化＞のおかげであろう、錆ひとつ浮いていない状態で。６０年以上前に作られた、当時そのままの姿を『竜の羽衣』は残していた。

才人は、それに覚えがあった。子供の頃、彼の祖父が買い与えてくれたプラモデルの外箱に描かれていたイラストそのままだったから。そして、完成品は彼のお気に入りでもあった。東京にある自宅の部屋が、現在も変わらぬ状態であったなら……今も、机の脇にある棚の上に、透明のケースに入れられて、飾られているはずだ。

才人は、まるで何かに憑かれたかのように『竜の羽衣』を見つめ続けていた。あまりにも彼が真剣に眺めていたため、水精霊団の一同も、改めて観察してみたのだが……。

「うーん。サイトには悪いけど、あんなモノが飛ぶとは思えないわ」

キュルケの言葉に、うんうんと頷くモンモランシー。

「＜ディテクト・マジック＞にも＜固定化＞以外には一切反応なしだ」

眼鏡の位置を直しながら、レイナールが呟く。タバサも、彼と同様の反応を示した。

「あれは、カヌーか何かだろう？　その側面に鳥の翼のような形をした板を取り付けただけにしか見えないな。これじゃ、羽ばたくことなんかできやしない。つまり、飛べない。あなたもそう思わないかね？　ミスタ」

格子戸から覗き込んだ直後。自分の持つ、素直な感想を述べ……彼らの中で、最も博識であろう太公望にそう問いかけたギーシュであったが……そこから戻ってきた反応は、彼の予想を大きく裏切るものであった。

「いや……あれは、間違いなく飛べる。そのように造られている」

その太公望の言葉に、才人を除く全員が振り返った……そして、その声に追従するかのように、先程まで黙り込んでいた才人が呟いた。

「おい……これ、なんかの皮肉か！？　『ゼロのルイズ』に召喚された俺の目の前に、よりにもよって……コイツが現れるなんてさ」

久しぶりに聞いた『ゼロ』の二つ名。ルイズは、当然のことながらそれに反応した。

「ちょっとサイト！　それ、どういう意味よ！？」

ぷりぷりと怒る彼女に……才人は、乾いた笑みを浮かべながら、こう返した。

「アイツはな……俺の国の軍隊が、昔使っていた『大空を飛んで戦うための武器』なんだよ。でもって、名前は……『零戦（ゼロせん）』っていうんだ」

「サイトの国の……空で戦う……『ゼロ』！？」

戸惑ったようなルイズの声に頷いた才人は、改めてシエスタに向き直り、こう聞いた。

「なあ、シエスタ。お前のひいおじいちゃんが残したのは……この『ゼロ戦』だけか！？　他に……何かなかったりはしないのか？」

「え、そ、そんなにたいしたものは……遺品が少しと、あとは……お墓だけです」

「頼む。それを見せてくれ」

そう言って頭を下げた才人に、シエスタはただ困惑するばかりであった。

○●○●○●○●

――タルブの村・共同墓地。

シエスタの曾祖父の墓は、その一画に建てられていた。白い幅広の墓石が並ぶ中、ただ……その『墓』だけが、趣を異にしている。

黒い石で造られた、才人にとって、見覚えのある形――。

その墓石には、墓碑銘が刻み込まれていた。ハルケギニアのそれとは異なる文字で。

「ひいおじいちゃんが、死ぬ前に自分で造った墓石なんだそうです。異国の文字で書いてあるんで、村の誰も読めなくって。きっと、ひいおじいちゃんの国の字なんでしょうけど……サイトさんには何て書いてあるか……わかりますか？」

そう問いかけてきたシエスタに、才人は頷き……答えた。

「大日本帝国海軍少尉・佐々木武雄（ササキタケオ）、異界ニ眠ル」

その解答に、シエスタは目を丸くした。それは……祖父から聞かされていた墓碑銘の読み方、そのままであったから。と、いうことは、つまり……！

「なあ、シエスタ。その髪と目。ひいおじいちゃん似だって、よく言われるだろ？」

「えっ！？　ど、どうしてそれを……いえっ、じゃあやっぱり、サイトさんは……！」

震え声で、問いかけるように声をあげたシエスタに、才人は頷き返した。

「ああ、そうだよ。俺は、シエスタのひいおじいちゃんと同じ国から、このハルケギニアに＜召喚＞されてきたんだ。ここに眠ってる佐々木武雄さんが生きていた頃は『大日本帝国』……今は『日本』

って呼ばれている、西側に大きな大陸があって……それを挟んだ海のさらに東にある……島国からな」

この答えに、全員が驚きの声をあげた。そして……その中でもタバサは驚愕していた。

『東の大陸』。そう……太公望が、ここにやってくる前に居たという国『周（シュウ）』。そこは、遙か東の『大陸』の中にある国なのだと彼は言っていた。

そして、タバサは改めて太公望と……才人、そしてシエスタを見た。このハルケギニアでは珍しい、黒い髪。そして、黄色がかった肌と……顔の造形。瞳の色こそ違えど、彼らの間には、あまりにも共通点が多すぎる。サイトの国から見て『西側の大陸』……『竜の羽衣』は、ハルケギニアの東からやって来た……これは……まさか！

……でも、サイトの『世界』には＜魔法＞がない。月も、ひとつしかないらしい。

……けれど、タイコーボーの『国』には＜魔法＞がある。月の数は、わからない。

……にもかかわらず、ふたりとも『竜の羽衣』は間違いなく飛べると言っている。

……そして。全く同じ時間軸、６０年ほど前に現れた『天使の羽衣』『竜の羽衣』というふたつの『羽衣』の名を冠する秘宝。偶然というにはできすぎている。

わからない。これらが意味するものは、いったいどういうことな

のか。タバサは、再び自分の側に立つ太公望の顔に視線を移した。彼は、黙って墓石に視線を這わせている。

静かに考え続けるタバサをよそに、周囲のざわめきは収まることを知らなかった。だが、何かを決意したかの如く紡ぎ出されたシエスタの声により、それは突如中断した。

「皆さん、今日の宿は既にお決まりだったはずですが……もしよろしければ、荷物を置いた後で結構ですので……わたしの家にいらしてはいただけませんか？　サイトさんに、見てもらいたい物と……会ってほしいひとがいるんです」

――1時間後。一同は、シエスタの生家に集合していた。

そこに、シエスタが会ってほしいと言っていた人物――彼女の父親が、驚愕を顔に貼り付けたといった風情で彼らを……中でも、才人の到着を待ちわびていた。

彼は、予定よりも1週間以上早く、愛娘が勤め先から帰ってきたことにも驚いたが……それ以上にシエスタから、

「ひいおじいちゃんのお墓に書かれている文字を読めるひとが現れた」

そう告げられたことに衝撃を受けていた。まさか本当に現れるとは思ってもみなかった。だが、実際にやって来たというのならば……その人物に、お渡しせねばならないものがある。それが、彼の祖父……つまり、シエスタの曾祖父が残した遺言だったから。

そして……彼は、それをそのまま才人に告げた。

「本当に俺が、あの『竜の羽衣』をもらってもいいんですか！？」

「はい、それが祖父の遺言だったのです。もしも、あの墓碑銘に書かれた文字を読める者が現れたなら、その人物に『竜の羽衣』を渡した上で、これをお見せするように……と」

シエスタの父が差し出したそれは。飛行眼鏡（ゴーグル）と、飛行帽。そして、絹でできた白いマフラーに……手元に残しておいたのであろう、階級章。

「桜が1個……うん、これ間違いないよ、大日本帝国海軍の階級章だ。たしか、佐々木さんは少尉でしたよね……たぶんですけど、シエスタのひいおじいちゃんは、結構お金持ちの家の出で……おまけに、ものすごく頭がいいひとだった、と、思います」

「そこまでおわかりになるんですか！？　もしや、あなたは」

「いや、親戚とかってわけじゃありません。ただ、この階級章をもらえる地位に就いて、しかもあの『竜の羽衣』を手にするためには、滅茶苦茶難しいテストに合格しなきゃいけないんです。それこそ……何千人もいる志願者の中で、たった数人しか受からないような難しい試験に」

才人は語った。その試験に合格しなければ入れない『士官学校』を卒業して、ゼロ戦のパイロット……つまり、あの『羽衣の使い手』になるまでには、詳しくはわかりませんが、すごくお金がかかるらしいってどこかで聞いた覚えがあるから……シエスタのひいおじいちゃんの家は、きっとお金持ちだったんじゃないかと思った……それだけなんです、と。

そんな風に、自分の父へ熱心に説明する彼を見ていたシエスタは、不思議な感慨に囚われていた。貴族さまが、何かの間違いで呼び出してしまったという、自分と同じ平民。のちに、実はミスタ・タイコーボーの国の、とてもえらい貴族さまの妾腹の息子さんだと耳にした。なにか深い事情があって、母親と一緒に、そこからは遠い国……母親の祖国で暮らしていたのだという噂もあった。

ひいおじいちゃんの国と、そのサイトさんのお母さまの祖国が、まさか同じ場所だったなんて。やっぱり〈魔法〉は凄い。こんな奇跡を起こしてしまうのだから……！　シエスタは、ただただ、その『魔法の奇跡』に驚いていた。

「俺のじいちゃんが、昔……よく言ってました。ゼロ戦のパイロットは『大空のサムライ』なんだ。自分たちにとって、憧れだったんだ……って」

「それです！　そのサムライ……という言葉、祖父も言っていました。でも、私には意味がよくわからなかったのです。よろしければ、教えていただけませんか？」

目を輝かせて続く言葉を待っているシエスタの父に、才人はどう答えようか悩んだ末……こう切り出した。

「えっと、この国風に言うなら……『騎士（シュヴァリエ）』。祖国と、誇りと、名誉のために戦い抜いた孤高の戦士。俺のじいちゃんが言うには男子たるものかくあるべし……って、お手本にされるようなひとたちだったらしいです。もっとも俺は、そんな凄い人間なんかじゃありませんから、期待されても困りますけど！」

それを聞いて、最も強い反応を示したのはルイズだ。

「ちょっと待って！　大空を舞う騎士ってことは……竜騎士みたいなものってこと！？」

「うん、竜騎士の実物は俺、まだ見たことないけど……そういうことになるのかな。シエスタのひいおじいちゃんは、つまり……ハルケギニア流に例えるなら『竜の羽衣を纏って戦う騎士』だった、ってことだ」

『騎士（シュヴァリエ）』……貴族としては最下級ながらも、実力がなければ絶対に得られない称号。＜魔法＞が使えない平民でありながら、彼女……今はメイドをしているシエスタの曾祖父は、それを持っていたのだ。少なくとも、トリステインではありえないことだ。

でも、サイトが今更そんなことで嘘をつくとは思えない。ルイズは、改めて彼の出身国に興味を覚えた。あとで、また話を聞かせてもらいたい……できれば、そう、いつも一緒にいるあたしの部屋じゃなくって、いつもと違う別の場所で、ふたりっきりになれたときにでも。

あ、うん、その国に興味があるだけであって、サイトと雰囲気の違う場所で話がしたいとか、そういう理由じゃないのよ。そうなの。ええ、そういうことなのよ。そんな、ルイズの微妙な心の変化に誰も気付くことなく、彼らの話は続いていた。

「祖父が、ニホンという国の騎士様……と、いうことは……なるほど。ようやく祖父の遺言の意味がわかりました。祖父は、亡くなる前に繰り返し呟いていたのです。『もしもあの墓碑銘が読める人物が現れたら『竜の羽衣』を渡した上で、こう伝えてくれ。なんと

してでも、これを陛下にお返しして欲しい』……と。祖父の言う陛下とは、あなたの国の……王様のことなのですね」

「いや、王様じゃなくて、天皇陛下……えっと、こっちでいうと『皇帝』かな？　ただ、お祖父さんの言っていた『陛下』はもうかなり昔にお亡くなりになっていて、今はその息子の皇太子殿下が即位して、新しい天皇になっているから……もし、あれを持ち帰ることができたとしても、佐々木さんが言う『陛下』には、お返しできないと思います」

――皇帝と天皇は、実は似ているようで全く異なるものなのだが、それを説明すると長くなるので、あえてわかりやすく例えた才人であった。

「それは仕方がないことでしょう。なにしろ、６０年以上経っているわけですから。しかし、その新しい陛下にお返しするにしても、あれが飛ばないことには……」

困り果てたというようなシエスタの父に、才人は切り出した。

「もしよかったら、あれに触らせてもらってもかまいませんか？　もしかしたら……俺なら、どうして『竜の羽衣』が飛べないのか、わかるかもしれません。あれは、俺の国の『武器』ですから」

才人は、思わず左手――指ぬきグローブの下に隠された＜ガンダールヴ＞のルーンを右手で押さえるようにして、立ち上がった。そう……この＜力＞があれば、もしかすると本当に『理解』できるかもしれない。全ての『武器』を使いこなす、ルイズがくれたコイツなら。

○●○●○●○●

――タルブの村・羽衣神社。

なんとなしに、そう名付けた才人は、今……『竜の羽衣』の前に立っていた。そして、彼の後方で、シエスタと、彼女の父と、水精霊団の一同――そして、貴族さまがやってきたという話を聞きつけて、おっとり刀で現れたタルブの村長が、その一挙一動を見守っていた。

深緑に塗られたボディ。翼に描かれた、赤い丸印。これは国籍標識……日の丸だ。そして、黒いつや消しのカウリング（エンジン部分を覆うカバー）に、白い文字で抜き出すように書かれた『辰』という文字。これは佐々木氏が所属していた部隊を示す識別印（パーソナル・マーク）か何かだろうか。

「じゃあ、ちょっと『診せて』もらいますね」

そう宣言した才人は、手袋はそのままに『ゼロ戦』の胴体に触れてみた。途端に、彼の脳内にスペックが流れ込んでくる。

――三菱・零式艦上戦闘機５２型（Ａ６Ｍ５）……全長／９．１２ｍ……最高速度５６５ｋｍ／ｈ（高度６０００ｍ）……武装／７．７ｍｍ機銃×１、１３．２ｍｍ機銃×１、２２ｍｍ機銃×２――

……うわ、６０年経ってんのに、武装全部生きてやがる。＜魔法＞恐るべし……そんなことを考えながら、さらに『竜の羽衣』を調査する才人。その間にも、左手のルーンは……彼に、このゼロ戦の詳しい操縦法やその他内部構造を伝えてくる。そして、才人は気が

付いた。何故、この『羽衣』が飛べないのか。

「ガス欠だ……燃料が切れたせいで、飛べなくなったんだよ、この『羽衣』は」

「やはり、これは内燃機関でもって空を舞う『飛行機械』であったか」

そのための燃料が切れているということだな？　そう問うた太公望に、才人は頷いた。

「内燃機関というのは、もしかして、このあいだミスタ・コルベールが授業中に見せてくれた『ヘビのおもちゃ』が、扉から出てくる、あれのこと？」

彼らにそう声をかけてきたのは、タバサであった。それを聞いた、レイナールを除く――彼はクラスが違うので、まだその授業を受けていなかった――生徒たちが驚いた。

「そうだよ、あの先生は本物の天才だよ！　なんにも知らない状態から、この『竜の羽衣』を飛ばすための『エンジン』……それの原型になるものを生み出したんだから」

こいつは、なんと風竜の3倍以上の速さで飛べるんだぜ！　目をきらきらと輝かせ、満面の笑みでもってそう宣言した才人。それは素晴らしい！　と、同じく……こちらは好奇心で瞳をきらめかせた太公望。

そんな彼らの言葉に仰天したのは、その場に残っていたシエスタとその父親だ。彼女たちは、まさか、この『竜の羽衣』が、そんな

とんでもない『秘宝』だとは、想像だにしていなかったのだから、当然だ。彼らはこれまで、ずっとただのガラクタだと信じつつも、家族の形見だから……と、複雑な思いで『寺院』を守っていただけだったのだ。

そして、水精霊団のメンバーたちも、まさしく開いた口がふさがらない状態となっていた。風竜の3倍の速度で飛べる……？　それが話半分だとしても小型の『フネ』としては凄まじい性能ではないか。しかも……＜魔法＞なしでそれを実現しているなんて！　おまけにこれは、以前コルベール先生が嬉しそうに披露していた『ヘビのおもちゃ』と同じ原理で動いているという。だとしたら、それを無の状態から作り出せたコルベール先生は……。

「……冴えない先生だと思ってたんだけど、実は結構すごいのかしら？」

目を丸くしたまま呟いたキュルケに、うんあの先生間違いなく凄い！　と、断言する才人と太公望。このふたり……特に太公望がそこまで言うならば、間違いないのだろう。そう判断したメンバーたちは、改めて『ゼロ戦』を興味津々といった表情で見始めた。

そして、そんな彼らの反応に満足した才人は、太公望を手招きすると……燃料タンクの元へと歩み寄り、コックを開いてみせた。

「ほら見ろ、ほとんど空っぽだよ。ここに『ガゾリン』を入れないと、飛べない」

「がそりん……ふむ、この感じからすると、相当に揮発性の高い油だな？　ただ、これを実際に精製するとなると、相当な技術力と知識が必要となると思われるが……すまんが、技術畑ではないわし

には無理だ。おそらくそれを実現できる者がいるとしたら、このハルケギニアにはただひとりしかいないと思うのだが、才人よ……おぬしはどう思う？」

ニヤリと笑って、自分の目を覗き込んできた太公望へ、これまたイイ笑顔で見つめ返す才人。

「さすがは閣下、話が早くて助かるぜ。俺も、コルベール先生にしかできないと思う。かといって先生をここに呼び出すわけにもいかないし……となると、問題は、こいつをどうやって学院まで持って帰るかだよな。いくらルイズと閣下が凄くても、こんなデカくて重いモノ浮かせるのは無理だろ？」

「無茶苦茶なこといわないでよ！」「わしらを殺す気か！！」

……たぶん、ふたりで相当頑張ればできないことはないと思うが、色々な意味で死ねる上に面倒この上ない。即座にそう判断した太公望と、絶対無理だと即断したルイズが声を張り上げた。

「と、いうか……本当にこれ、俺がもらって帰ってもいいんでしょうか？」

ひょこっと『神社』の内部から顔を出し、シエスタの父とタルブ村長の顔を見つめて問うた才人に、彼らは笑顔で頷いた。そもそも管理が大変であったし、自分たちではこれを生かすことができない。ならば、これを持ち込んだ人物と同じ国からやってきたあなたがお持ちになるのが、いちばんでしょう……と。

「それなら、ぼくの父上……グラモン元帥に、このあとすぐに伝書フクロウで頼んであげるよ。父上なら、運送専門の竜騎士隊を出

動させることができるからね。ただ、運搬費はちゃんと彼らに払ってもらわなければならないが、それでもかまわないかね？」

「ああ、それならば『経費』で落とそう。これは、わしら『水精霊団』にとって、のちのちまで役に立ってくれる……そんな予感がするからのう」

ギーシュの申し出に、太公望が頷いた。

「サイト殿。では、これも一緒に『大空』へ持っていってやってください。そのほうが、祖父も喜ぶでしょう」

シエスタの父親は、後ろに控えていた娘に笑顔で頷くと『それ』を才人の元へと持ってこさせた。そう……佐々木少尉が身につけていたゴーグルと、飛行帽。そして、絹でできた白いマフラー。そして……『帝国海軍少尉』の階級章を。

才人は……それを見て、日本流の『敬礼』をする。と……シエスタの父は、満面の笑みでもって『敬礼』を返してきた。おそらく、彼も祖父である佐々木少尉に教わっていたのであろう。才人のように。

「この村へ来るときに見ました。あの草原……あそこなら、きっとこの『ゼロ戦』を着陸させることも……たぶん離陸もできると思います。だから……この『羽衣』がまた飛べるようになったら、真っ先に、その姿を見せに来ます！」

そう言って才人は、前へ進み出てシエスタの元へ近寄っていった。

「シエスタも、このあと……夏休み中はずっとここにいるんだろ

？　もし、それまでに間に合ったら……お前のひいおじいちゃんが残したものがどれだけ凄いのか、この村からしっかりと見てやってくれよな！」

「はいっ！　わたし……ここで『竜の羽衣』が飛んで来る日を待ってます。それと……もしよかったら、是非一度、乗せてくださいね！」

そう言って笑ったシエスタの手から、佐々木氏の形見の品々を受け取った才人は、早速飛行帽を被り、マフラーを巻き、ゴーグルをつけてみせた。そして、彼が建物の外へ出たその瞬間。赤い夕日が……あの『ゼロ戦』に描かれた丸い印と同じ色をした輝きが、すっと頭上を照らし……ゴーグルのレンズが反射光で眩い光を放った。

――６０年という永き時を経て。

異界ハルケギニアより新たなる『大空のサムライ』が生まれようとしていた――

第５８話　伝説、大空のサムライに誓う事（後書き）

誰がなんと言おうと、今回はサイト回でございます！　筆者の趣味全開！　執筆中のＢＧＭは「エースコンバット・ゼロ　ザ・ベルカン・ウォー　オリジナル・サウンドトラック」でございます！　しかもＭｉｓｓｏｎ１８　－ＺＥＲＯ－　ループ！　やっぱり燃えるわこの曲～！！

ご覧の通り、いろんなフラグがバッキバキに折れーの、立ちーのしております。コルベール先生、お待たせ！　ゼロ戦がもうすぐ到着するよ！！　けどその前にくうきよめないひとの招待受けてるから、すぐには研究時間取れないね……炎蛇の生殺しだ！！

ええ、なんか、ものすごく朝早く目が覚めて、キュピーンが来てしまったので予定より大幅に早い更新でございます。誰だ土日更新とか書いていたのは！　自分だ！！

すみません只今ＢＧＭのせいでめっちゃくちゃテンション上がっていていろいろおかしいです。大変失礼致しました。

ちなみにですが、才人が言っている「パイロットになるのにはお金がかかる」について、これは士官学校とは関係がなく、あくまで一般的なイメージを語っているにすぎませんので、ねんのため……。

それと、ゼロ戦の型式はたぶんコレ！　というアタリをつけて書いておりますが、原作にそれらしき記述がない（と、思われました）ので、正解かどうかはいまひとつ自信がございません。もしご存じのかたがいらっしゃいましたら、情報をお寄せいただければ幸いです。

２０１１／０５／３０　本文誤字脱字・一部加筆修正
２０１１／０６／０５　本文加筆修正（才人のゼロ戦知識周辺関連補足）

第59話　双月とふたつの惑星

夜。宴席となってしまった夕餉の最中に「飲み過ぎてしまった」そう言い訳をして外へ抜け出した太公望は、独り、タルブ村の側に広がる草原に立ち、そよぐ風に頬を嬲られながら……空を眺めていた。

――彼の視線の先には、双つの月が、これまでと変わらず輝いていた。

気が付いたのは、あの『墓』を見た時だった。全てを読み取ることはできなかったが、太公望……いや、かつて『繰り返す歴史』を見続けてきた地球の『始祖』伏羲（ふっき）には、あそこに書かれていた文章の一部が読めた。何故ならば、墓碑銘に書かれた文字は……彼の切り札『太極図』によって紡ぎ出されるそれと、非常に似通っていたから。

確信したのは、その文字を才人がすらすらと読んだ後に……シエスタに語ってみせた話を聞いてからだ。

「思えば、ヒントになるようなことはたくさんあった……だが、このわしともあろうものが、先入観に惑わされた結果、今まで気が付かなかった。何故、これが『ありえる』ことに考えが至らなかったのであろうか」

まだ、多くの謎は残っている。だが、ここまでに揃えた『情報』という名のパズルのピースは、彼に……それが明確な『事実』であることを語っていた。

「＜魔法＞のない世界。にも関わらず、何故わしらの間ですら廃れかけていた＜術＞が『おとぎ話』などという形で残っているのか。どうして＜気＞のコントロールなどという言葉が出てくるのか。『科学技術』が民の間で大きく発展していたこと……そして、月がひとつしかない惑星の話。わしと同じ、黒い髪と、肌の色……そして良く似た顔の造形。全く同じ時間軸に現れた、２つの『羽衣』と、大陸の話。これらが示す事実は、ひとつしか考えられない」

太公望が、思わず口に出してしまったその思考は、本来であれば……誰にも聞かれることなく、風と共にこの地を去るはずであった。しかし……いつのまにか太公望のすぐ側に集っていた、４つの人影によって、受け止められていた。

タバサとキュルケ。そして、才人とルイズであった。

双月の光を背に、ゆっくりと振り返った彼は……おどけたように、こう言った。

「どうやら……宴の主役が、こちらへ移ってきたようだのう」

その声に、まずタバサが答えた。

「あの『黒いお墓』を見て、サイトの話を聞いてから……あなたの様子が、どこかおかしくなった。そして、わたしも疑問に感じていた。タイコーボー、あなたとサイトには、共通点がありすぎる。おそらく、わたしにしか開示されていないと考えられる情報と、これらを合わせて検討したとき、わたしは、あるひとつの考えに至った」

その解答に、小さく笑った太公望。そして思った。この娘は……

やはり聡い。偶然の『事故』とはいえ、このわしを＜召喚＞できただけのことはある、と。

いや……もしやするとこれは『必然』だったのかもしれぬ。タバサは、わずかな手持ちのカードだけで、このわしと同様の答えに行き着いたのであろう。しかし、ならば残りの3人は何故現れたのだろうか。タバサの性格からして、この状況下で彼らを連れてくるとは思えない。

そう考えた太公望は、残る3人に向けて、こう聞いた。

「で……おぬしらは、どうしてわしらの後をつけてきたりしたのだ？」

あえて「タバサの」とは言わない。何故ならば、自分たちふたりが――時間差はあったにしても――揃って出て行ったがために、彼らは興味を抱いたのであろうから。

太公望の問いに、気まずげな顔をしてうつむく3人。やはりそうか……思考に囚われるあまり、彼らの接近に寸前まで気が付かなかった自分にも非はある。それに。これは、この世界の『始祖』とやらが導いた結果なのかもしれない。ここに集う者は――わしを含む『最初の5人』。

――タバサによって、この世界に＜召喚＞された。

――新たな世界を見ようとしたときに、才人との＜出会い＞があった。

――キュルケの呟きという橋渡しによって、大きな＜縁＞が生ま

れた。

――ルイズが流した涙の光で、彼女が背負おうとしている〈運命〉を知った。

「これも、ハルケギニアの『始祖』ブリミルの導き……というやつなのかもしれぬ。よって、もしもおぬしたちが聞きたいと望むのならば、全て話そう。ここではない、別の世界。このわしがやってきた『国』……いや『星』のはじまりと『始祖』と呼ばれる者たちの物語を」

どうする？　そう、瞳で語りかけてくる太公望に、全員が黙って頷いた。

○●○●○●○●

「タバサは既に知っていることだが……わしは東方ロバ・アル・カリイエの出身者ではない。あまりにも自国が遠く離れていたがために、そのように言って誤魔化すよう、オスマン氏から勧められていたのだ」

最初に、そう断りを入れた太公望。そして、それに驚いた3人。先程、彼は『別の世界』と言った。まさかとは思うが、彼は――。

「ミスタ……もしかして、あなたもサイトと同じように『別の世界』から〈召喚〉されたの……？」

ルイズの問いに、頷く太公望。これには、タバサも驚いた。

「違う『世界』……やっぱり、あなたも……なの！？」

そう……彼女は、彼の出身地がロバ・アル・カリイエではないと知りつつも、これまでハルケギニアと『同じ世界』にある遠い国から彼を呼び出したとばかり考えていたのだ。だからこそ、才人との共通点を見出しつつも、そこから先に進めず、彼に話を聞きに来たのだ。

「ああ、そうだ」

「ねえ、どういうこと！？　『別の世界』って……いったい」

困惑していたのはキュルケだ。それもそうだろう、彼女は太公望はロバ・アル・カリイエの出身者。ずっとそう思い込まされ続けてきたのだから。

「キュルケも……そして他の者たちも、質問したいことが山ほどあるであろうが……それをするのは、どうか今からわしがする話が終わるまで、待っていてほしい」

そう断りを入れると、太公望は改めて語り始めた。はじまりの……はじまりについて。言っても構わない範囲で、かつ――才人に関して、とある確認をするために、事実と……そうでない話を交えながら。

「かつて。広大な星の海の中に、大いなる『叡智』によって、栄華を極めた『惑星』……つまり、生物が住まうことのできる『世界』があった。そこは、例えるならば『科学』と『魔法』。このふたつの＜力＞を合わせた、非常に高度な文明によって栄えていた。その繁栄は……永久に続くと思われていた」

――しかし。それは唐突に終わりを告げた。今でも、その理由はわからない。

「その世界は、突如滅んでしまった。国が滅ぶなどという程度の生やさしいものではない。文字通り、世界が――いや『星』が、爆発し――消えてしまったのだよ。偶然、星の海……『宇宙』に出ていたわずかな者たちだけが難を逃れた。だが、そのままではいずれ彼らも『星』と同様、消えてなくなってしまう。そう考えた生き残りし者たちは、それぞれが乗っていた『宇宙船』で『新たな世界』を発見すべく、星の海の彼方へと飛び去っていった」

神話を紡ぐ語り部の如く、朗々とした声で話を続ける太公望。

「そのうちのひとつ。強い＜力＞を持つ5人の人間を乗せた『星の海を征く船』が、何万年もの長い旅の末に、宇宙の果てで……美しい、青き星を発見した。そして、彼らは船を下り『新しい大地』に『降臨』した。彼らこそ、その『世界の始祖』。わしのいた世界の『はじまり』を造った者たちだ……例えていうならば、このハルケギニアに６０００年前に現れたという『ブリミル』と同様の存在だの」

そう語る太公望の瞳は、まるでその場面を見てきたかのように、遙か遠くを見つめている。タバサも、ルイズも、キュルケも……驚く以前に、戸惑っていた。そして、空を見た。あの輝く星々の中に、このハルケギニアのような『世界』がたくさんある……そんなことは、彼女たちにとって、今まで思いもよらぬことだったから。

いや、ルイズとタバサに関しては、サイトという前例があっただけに『異世界』というものが実在することを知っていたが……それ

にしても、太公望の話は、あまりにも荒唐無稽なものに感じた。もしも、これが彼と出会ったばかりの頃であれば、何を馬鹿なことを。そう言って斬り捨てたに違いない。

でも、彼女たちは既に聞いて知っていた。以前彼が住んでいた場所が『星の海』『月の側』にあったことを。特にタバサは、夢の世界のこととはいえ、その『星の海を征く船』を実際に見ていたから。

才人は、何故か不思議な胸の高鳴りを覚えていた。そう、あの『ゼロ戦』と出会ったときと同じようなそれを。理由はわからない。でも、この話を最後まで聞いたら、わかるかもしれない。だから……彼は、黙って太公望の話に聞き入っていた。

「その大地は美しく、彼らが住むには適していた。だが、人間はもちろんのこと……まだ知的生命体と呼ばれるようなものは一切存在していなかった。そこで5人の『始祖』は話し合ったのだ……『自分たちは、ここでは異邦人。この美しい星を、自分たちの思うように作り替えるには忍びない。しかし、長い旅をしてきたせいで、我らはもう疲れてしまった。だから、最後にこの星と融け合うことで『星の意志と力の源』となろう』……と。そして、彼らは光の粒となって、世界中に霧散した」

――ある者は、風に乗って世界の隅々まで広がっていった。またある者は、土に宿りて、細かな砂粒の1つに至るまで、その＜力＞を分け与えた。水に溶け、世界を慈愛で満たした者もいた。＜力＞の塊となり、暖かき炎となった『始祖』も存在した。そうして、彼らは『星に宿る力』となり、消えていった――

「それからさらに数万年の時が流れ……青き星に、様々な知的生物が現れ始めた。彼らは進化を繰り返し、ついに『人間』が生まれ

た。そして、その人間たちの中に……ごくまれに、特別な＜力＞を宿した者たちが現れた。そう。『始祖』の流れを汲み、その＜力＞を発現させた＜力在る者＞。ハルケギニア風にいうならば＜メイジ＞の原型となる者が誕生したのだ」

その言葉に、全員が一斉に反応した。つまり、太公望はその世界に生きていた＜メイジ＞なのだ、と。

「いっぽう、人間以外……たとえば、巨大な木。意志を持った岩石。人間ではない生き物たち。それらにも＜意志＞と＜力＞を持つ者が現れた。彼らは＜妖怪＞あるいは＜妖精＞などと呼ばれ、基本的に好戦的で……人間よりも遙かに強い＜力＞を宿していた。こっちで言うなればエルフや妖魔、亜人たちがそれにあたる」

世界の誕生を語る吟遊詩人・太公望の声と話に、集う者全てが、いつしかぐいぐいと引き込まれていった。

「そして彼らは、それぞれに『文明』を作り、発展していった。そんな中……とある＜力＞を持つ者が現れた。それは、わしらの生きる時代にも存在するもの。『過去の歴史を視る』＜力＞だ。そして、その＜力＞によって知ったのだ。かつて青き星に散った『始祖』の意志を。そして＜力在る者＞たちはひとつところに集い、語り合ったのだ……『始祖』について。結果、彼らは『始祖』の御心を継ぐ決心をした。その決定とは……」

そこまで言った太公望は、ふいに言葉を止めると、こう告げた。

「なにやら、ここの＜メイジ＞たちを非難するような話になるので申し訳ないが……これはあくまで『価値観』の問題なので、どちらが正しいとか、そういったことを語る意図はない。よって、怒ら

ないで聞いてほしいのだが……」

そう注釈を入れ、自分たちの世界の＜力在る者＞が決定した内容を話した。

『＜力在る者＞が＜持たぬ者＞を支配してはならない。それは＜星の意志＞に反することだからだ。だが、このまま同じ場所に住んでいれば、いずれ衝突するのは間違いない。だから、自分たちは＜別の世界＞を作り、そこに移ろう』

「……とな。そして、かすかに残る『始祖』たちの『科学』や『魔法』を代表する『超文明の叡智』を生かし、人工的に『空飛ぶ街』や『空間を隔ててそびえる山脈』、『雲間の大陸』を造り＜力在る者＞と＜持たぬ者＞。つまりメイジと平民……お互いを隔て、それぞれの上層部……王族や代表者。また、特別な許しを得た者以外は、一切の交流を断ったのだ」

だが――と、太公望は続けた。そして、彼はここからさらに……お得意の捏造設定を、より大幅に加えることにした。そうしないと、彼にとっていろいろと不都合なことが発生するからだ。特に『不老不死たる仙人』であることを悟られると、色々とまずいことになるが故に。

「そんなことをしては、血が濃くなりすぎて、やがて生物としての限界が訪れてしまう。事実、それによる弊害があった。また、地上にはまだ『星の意志』を継ぐものが誕生し続けていた……ごくわずかにだがな。そこで『天界（てんかい）』――さきほど語った『人工的な別世界』を、以後こう言わせてもらう――で『千里眼』と呼ばれる『世界を見通す目』を持った者たちが、地上を監視し……＜力在る者＞が現れたとき、使いをやって『スカウト』を行うようになった」

この言葉に反応したのがルイズだ。

「まさか、その『スカウト』って、前にあたしに言ってた……」

彼女の言葉に、太公望は笑って頷いた。

「そうだ。わしらは、ここの＜メイジ＞たちほど数が多くないからのう。だから『天界』それぞれの『島』でスカウト合戦が繰り広げられたのだよ。ルイズなら……いや、今ここにいるおぬしたち全員が、間違いなく『天界』に誘われる……しかも取り合いになるほどの高い素質を備えておるよ」

「お、お、お、俺も！？」

興奮して自分を指差す才人に、苦笑しながら太公望は答えた。

「ああ、もちろんおぬしも含まれる。『武器による攻撃を得意とする能力者』扱いでな。わしのところでは『杖』を持ち＜魔法を操る＞ことだけが＜力＞の全てだとは見なされないのだ。『専用の武器』を手にすることで、体内に眠る＜力＞を引き出し、戦う者たちが大勢いる。武成王どのの息子が、その最たる例だ」

なるほど、彼がハルケギニアのメイジには考えられないような＜力＞の使い方をするのは、そのあたりにも由来するのかもしれない。タバサはそう考えた。

「だがな……その『スカウト合戦』から悲劇が始まったのだ」

そう言って、太公望は再び真剣な顔をして語り始めた。

「スカウトによって、人間やそれ以外の者が大勢集えば……当然のことながら『派閥』が生まれる。そして、姿が違えば考え方も変わってくる。やがて……天界にあった3つの『島』には、それぞれに異なる考えを持つものたちが集うようになり……対立が始まった」

太公望は、左手指を1本立てた。

「ひとつは＜崑崙（こんろん）＞。空に浮かぶ山脈。これはわしが所属していた派閥にして、人間出身者が集う山脈だ。『始祖』の意志を継ぎ＜力在る者＞がそうでないものを虐げることはあってはならない。そう考える者たちが集う場所」

そして、指をもう1本立てる。

「ふたつめは＜金鰲（きんごう）＞。空を飛ぶ街。ここはおもに妖怪などの亜人が住まう街だ。わしら＜崑崙＞よりも遙かに文明が進んでいた。彼らの多くが『強い者が弱い者を支配して何が悪い』そう考えていた。もちろん、そうではない者たちもおったがな」

再び、指を立てる太公望。これで3本目だ。

「そして最後の＜桃源（とうげん）＞。雲間の大陸。ここは、完全中立地帯。どちらにも所属せず、地上と関わることすらしなかった。最後の最後までな」

と、いうよりもトップからして＜桃源郷＞は他者との関わりを持ちたがらなかったからのう……過去を思い出し、ため息をつきそうになるのをこらえつつ、太公望は言葉を紡ぎ続けた。

「やがて＜崑崙＞と＜金鰲＞の対立は激しくなり、ついに戦争が勃発した。当然、そんなことになれば互いの監視が弱まる。その隙を見て……一部の者たちが、ついに地上に干渉をはじめてしまったのだ。そう……その強大な＜力＞でもって、平民たちの王の側へ現れ、彼らの野心をかき立てた。そして、地上に戦の種火がまき散らされた――それから数百年ほど経ったある時。長き動乱の時代を迎えていた＜地上世界＞に、わしは生まれたのだよ。小さな領地を持つ……領主の息子としてな」

話の中に知り合いが登場すると、その内容は俄然面白くなってくる。それが、よく知る人物ならば、なおさらだ。一同は、息を潜めて太公望の話を聞いていた。

「当時、わしは、自分の中に＜力＞が眠っていることを知らなかった。だが……神童などと呼ばれ、賢い子供だと、両親には喜ばれ……まだ小さかった妹には、兄様、兄様……と、なつかれていた。何も知らなかったあの頃は、毎日が幸せであった。だが……わしが12歳になったあの日……唐突に、その平和な日々の終わりがやってきたのだ」

……少し、周囲で吹く風が強くなってきた。

「あの日……わしは、父に任されていた仕事で、偶然領地を離れていた。簡単ではあったが、既に領主としての仕事を一部任されるほどに知恵があった。それがわしの命を救った……奇跡的にな。何故なら、わしが離れていたほんのわずかな間に、街は不可侵条約を結んでいたはずの隣国の軍勢によって蹂躙され尽くし……そこにいた者たちは当然の如く皆殺しにされ……全てが、紅蓮の炎に包まれていたからだ」

その言葉に、全員が息を飲む。彼が壮絶な人生を歩んでいるというのは知っていたが、そこまでとは思っていなかった者も……既に知っていた者も。そして、彼らは気が付いてしまった。太公望が、とある事件で口にした『薬』の影響で、自分のパートナーを『妹』だと思い込んでしまった……その理由に。

「わしが屋敷に戻ったとき、そこにあったのは……わずかに焼け残っていた家の柱だけ。家族の形見になるような品すらも、一切残っていなかった……」

――タバサは震えた。12歳の誕生日。それは、彼女の幸せな日々の終わりと、現在の始まり。大きなケーキを前に、母と共に父の帰りを待っていた、あの時。玄関の扉を開けて現れたのは、優しい父親ではなく、彼が暗殺されたという知らせを持った使者だった。太公望の運命が変わったのも、タバサと全く同じ12歳。皮肉にも程がある。

だが、そんな彼女の思いをよそに、太公望の独白は続く。

「しかし、そんな中。たったひとりだけ生き残りがいてくれた。長年我が家に仕えてくれていた従僕の老人がな。だが……その彼も、既に瀕死の重傷を負っていたのだ。置いて行かないでくれと泣いて縋るわしに、彼はただ一言、こう告げて世を去った」

『＜力在る者＞が支配する……この世の中全体を変えなければ、悲劇は繰り返されるでしょう。どうか、我らの無念を晴らすため、復讐してください。この『世界』に……そして『戦争』に』

「わしは、憎かった。家族と領民たちを奪った戦争が。そして、地上の王たちに野心を吹き込んだ＜力在る者＞たちが！　だが……

皮肉なことに、そのときの強い怒りと悲しみによって、わしは目覚めたのだよ。己の内にあった＜力＞にな」

――また同じだ。タバサは、両手の拳を握り締めた。醜い宮廷の争いによって、父は殺され、母は狂わされた。そして、当時まだ『ドット』だった彼女は『討伐任務』と称した処刑宣告を受けた。

その時出逢った、狩人の女性がタバサに向けて放った言葉と、その女性を襲った悲劇。そしてタバサの前に横たわった、とてつもない苦難と深い悲しみが『雪風』を生み出した。そう、メイジとして大きくランクアップを果たした……つまり、己の内に眠っていた＜力＞に目覚めたのだ。

「そして、その＜力＞の発現が故に、彼らの目に留まった……＜崑崙＞の『千里眼を持つ者』に。彼は、わしを迎えにやってきた。そしてこう言ったのだ」

『お前の持つ＜力＞は、さほど強いものではない。だが、その＜頭脳＞は既に、大人のそれを越えている。＜天界＞でそれを磨くのだ。そして、お前にやってもらいたい仕事がある。それは、お前が望む復讐を達成するためのものだ』

「……とな。だから、わしは復讐することにしたのだ。世の中と、戦争にな」

――やっぱり、同じだ。彼も、わたしと同じ復讐者だったのだ。タバサは戦慄した。＜サモン・サーヴァント＞が起こした、皮肉というにはあまりにも重い、自分たちの巡り合わせに。

「そして＜崑崙＞の理念を知り、それに殉ずることで、世に平和

を取り戻すため……あらゆることを学び、全ての原因となった〈金鰲〉との対立を収めるべく、ただひたすらに邁進した。本来すべきでない『地上への干渉』も行った。そう……地上の『王』に仕え、軍を率いたのだ。わしは争いごとが嫌いだと、つねづね言っていたと思う。それは『戦争』を憎んでいるからなのだよ」

確かに、彼らは同じ復讐者。だが……タバサと太公望の間には、ひとつ決定的な違いがあった。そう、復讐の『対象』だ。タバサは『個』つまりジョゼフ一世を憎み、復讐を決意していた。だが、太公望は『全体』。戦争と、その原因たる派閥を憎み、全てを収めようとしたのだと、タバサは知った。そして、疑念を持った。

わたしの復讐の方法は――本当に今のやりかたで問題ないのだろうか？　そう思った瞬間。彼女の胸の内に……水の精霊に誓ったそれの片隅に、ごくごく小さなヒビが入った。

……実際のところ、太公望の復讐心は――当初、ひとりの『女狐』だけに向けられていた。だから、彼女さえ倒せば全てが終わるという、タバサとほぼ同様の考えを持ち、実行に移そうとした。

だが、後にそれが大きな間違いであったことを、その身をもって体験していたため、あえてこのような話し方をしていたのだ……そう、自分の聡い『ご主人さま』に、何かを悟らせるために。

復讐をやめろとは言わないし、言えない。何故なら、彼も結局は復讐者だったから。

「で、結果として……おぬしらにはさんざん話していた通り、戦争は終わった。わしら〈崑崙〉側の勝利でな。そして、地上にも平和が戻った」

遠い目をして、太公望は語る。

「後に＜金鰲＞も、実は一部の強行派が＜力＞や＜薬＞によって、反対者や全てを束ねていた代表者を＜洗脳＞していた事実が判明し……これは対外的な話ではなく、本当のことだ……それによって無理矢理対立させられていたと知った我々は、和平交渉に応じた。だが、その時点で＜崑崙＞も＜金鰲＞も、激しい戦いによって荒れ果て……生き物が住める状態ではなくなってしまっていた」

そんなとき――まるで、それが定められていたかのように『始祖』の遺産が発見されたのだ。そう呟いた太公望は、天を指差した。

「始祖たちが乗ってやってきた『星を征く船』。『スターシップ蓬莱』。そこは、われら＜力在る者＞全てが住まうにたる広さと、環境が整っていた。そして過去の過ちを繰り返さぬために、人間だけではなく……妖怪や妖精、亜人に至る者たち全てがそこへ移り住み、さらに『亜空間ゲート』と『力の障壁』によって、自分たちの『世界』を、青き星から遠く隔てた。そこは……たったひとつだけの『月』の側。以後、われら＜力在る者＞はずっと地上界を……ただ見つめているだけとなった……こうして。ごくまれに、下界へ降りても絶対に悪さをしないと認定された者のみが、特別な許可を得てそこを訪れる以外＜力在る者＞は完全に地上から消えた」

――この時、その世界での『神話の時代』が、終わりを告げたのだ――

そう告げた太公望は、遂に核心へと迫るべく、話を進めた。

「それでも、ごくごく稀に＜力＞に目覚める者や、眠らせている

者が地上に現れる事実は変わらない。よって、スカウトは変わらずに継続されている。人知れず……な。そうして『天界へ昇りし者』は事情がない限り、二度と地上には戻らない。戻れるのは、厳しい適正審査を受けたごく一握りの者に限られる……だから、いつしか＜力在る者＞の存在は忘れ去られ、ついには……お伽噺や物語の中にだけ存在するようになったのだろう」

太公望は、すっとその場に立ち上がった。そして見つめた――自分と同じ色の髪と肌を持つ少年を。そして、決定的な言葉を解き放った。

「わしをはじめとする＜力在る者＞たちが見守る、月がひとつだけしかない、その美しく青き星は――かつて『始祖』たちによって、こう呼ばれていたのだ。もちろん、わしの知る今でも。銀河系に属する恒星『太陽』の周りを回る星。太陽系第三惑星『地球』とな」

太公望の言葉に、才人が強烈な反応を見せた。彼は勢いよく立ち上がり……太公望の襟元を掴んで叫んだ。

「おい、今の『星』の名前……もう一回言ってくれ！！」

「ああ……何度でも言ってやる。青き星『地球』。そこがわしと……おぬしがいた『世界』だ。違うか？　＜力在る者＞平賀才人よ。まだ＜力＞に目覚めていないうちに『異界へ呼ばれし者』よ」

……一陣の風が――タルブの草原を吹き抜けていった。

「嘘だよ！　ありえねぇよ！　だって、俺たちの世界で、そんな＜魔法＞での戦争なんか……」

「ああ、既に＜魔法＞が神話の彼方へ消えていたのだろうな。何故ならば、そうなるように＜表の歴史＞が操作されていたからだ。そして、ここからはあくまで仮定だが……おぬしとわしは、呼び出された『時代』が違う可能性が高い。もしも胡喜媚（こきび）が現れてくれなかったら、それに気が付けぬままだったかもしれぬのう」

呼び出された時代が、違う――！？　才人は、その言葉に引っかかりを感じた。

「才人よ……あの墓に書かれていた文字だがな。全てではないが、このわしにもある程度読むことができたのだよ」

「日本語をか！？」

「ニホンゴ……というのか。だいぶ簡略化されていたが、天界に伝わる文字――正確に言うと＜力を宿す記号＞そう、ルーンのようなものによく似ていたのだ。そして、おぬしの黒い髪と……住んでいた国の側にある、大陸……それらの情報をふまえた上で、才人よ……改めておぬしに問う。どうやらおぬしは、軍隊やその組織についてそれなりに詳しいようだが……その『大陸』に関する軍の歴史についての知識はあるか？」

その唐突な質問に、戸惑いを覚えた才人だったが……今、目の前にいる男が、意味のない質問などするはずがない。すぐにそういう結論に至れるだけの信頼を、彼に寄せていた。だから、才人は素直に答えた。

「詳しいってほどじゃないけど、有名どころならだいたい抑えてる」

その言葉に、満足げに頷いた太公望――いや伏羲の半身たる者は、遂に究極の問いを才人へ投げかけた。そう、本当にその大陸の『戦に関する歴史』、その基本を抑えている者ならば、絶対に答えられるであろうそれを。

「ならば聞こう。おぬしの知る『中国大陸』の歴史において、３人。代表的な『軍師』の名を……その所属していた国名と、功績などを共に挙げてみてくれ」

その質問に、才人はすぐさま解答した。

「それなら……ひとりめは、やっぱり三国志！　蜀の『諸葛亮孔明』だろ。赤壁の戦いとか、天下三分の計とか、子供でも知ってるぜ。孔明の罠だ！　なんて有名な言葉が残ってるくらいだし」

得意げに持論を語る才人。ミリタリー好きを自認するだけあって、さすがに基本は抑えている。だが、最後の一言は余計だし、色々と間違っている。

「つぎは……漢の『張良』だな。高祖劉邦に仕えて、漢の国を建国する立役者になった天才軍師だ！　大陸史上、屈指の名軍師だって言われてる」

「ほう……ずいぶんと詳しいではないか。それでは、最後のひとりを挙げてみよ」

「オッケー。最後はやっぱりコレだよな。周の軍師『太公望』。後世の軍学に絶大な影響をもた……ら……」

そこまで言った才人は、ふと、目の前の『少年』の名を思い出し

た。いや、そんなバカな。だが、その相手は。ニヤリと嗤ってこう言った。

「最後の名前……国名と一緒に、もう一回言ってはくれぬかのう？」

「……周（しゅう）の国の……太公望（たいこうぼう）」

それを聞いて驚いたのは、残る女性陣だ。そう……彼女たちは＜使い魔召喚の儀＞に立ち会った上で……彼の出身国の名前を聞いていたのだ。

「ちょっと！」「シュウって……」「やっぱり、サイトとあなたは」

だが、才人はやっぱり信じられなかった。目の前で笑っている少年……いや、実際には妖精の＜力＞で子供にされてしまったらしい２７歳の男なのだが……それでも、絶対にありえないと何度も首を横に振り続けた。

「嘘だッ！　だって、伝説の軍師・太公望がいたのって……たしか３０００年以上前のはずだぞ！？」

その才人の言葉に、太公望は驚愕した。才人が呼ばれた時代からずれているとは考えていたが、まさか、そこまでの開きがあるなどとはさすがに想定外だったからだ。

「３０００年だと！？　そ、そんな未来……いや、おぬしらからすると、過去か……そこまで離れた時代から＜召喚＞されてしまったのか、わしは！　どおりで王天君と胡喜媚しか現れないわけだ…

…」

そう言って、がっくりと膝をついてしまった太公望を見て、才人は戦慄した。

――そうだ、かの大軍師『太公望』は『伝説』なんだ。他のふたりと違って、生まれも……いつ死んだのかもよくわかっていない、謎に包まれた人物。周の建国だけでなく、その他にも数々の功績を残しながらも、ほとんどその実体が掴めなかった理由は……そうか、そのせいだったのか。

――才人は、月に向かって……魂が裏返るかのような大声でもって叫んだ。

「よりにもよって『地球の英雄』を過去から呼ぶんじゃねえよ！ファンタジー！！」

第59話　双月とふたつの惑星（後書き）

さあ、たいへんなことになって参りました！

ええ……当然のことながら、あんな『文字』で書かれた墓を見たら、太公望は気が付きますよね……というお話。そして、始祖の導きを感じたと。

またしても長い過去語りになってしまいましたが、これをやらないとどうにも進まなかった為、このように相成りました……あちこち捏造設定が入っているのは、太公望的に都合が悪い（特に、不老不死云々のくだりが）ため、このような事態に陥っておりますので、ご理解をいただければと。

そして……才人の扱いがこうなりました。本当にそうなのかについては……この先のお話にていずれまた語らせていただきたく。

ところで、原作読み返したら、ジョカさんが「スターシップ蓬莱島」って言ってました。どっちでも良かったんですネ……良かった、勘違いじゃなかったんだ……！

なお、感想欄にていただきました「太公望が日本語（漢字）を読めるはずがない」というご指摘につきまして、これは当然のことと思います。こちらについては本来であれば後書きに記載し、かつそれらしき理由をきちんと本文にて記載しておくべきでした。

既に修正版にて記載致しましたが「フジリュー封神演義の世界」とクロスしていて、かつ「繰り返しを見守ってきた伏義の記憶があるために読めた」というのがその理由です。太極図にも漢字（本文

中ではルーン扱いとなっています）が使われておりますので。後者は本文に追記させていただきました。その他にも色々あるのですが、それはまた後ほど。ご指摘ありがとうございました！　こういった記載漏れを指摘いただけるのは本当に助かっております。

２０１１／０５／２９　１４：００　始祖の人数記載ミスの修正、その他誤字脱字、加筆修正、文字が読めた理由を追記

２０１１／０６／２５　誤字脱字修正、本文加筆修正（タバサ関連）

２０１１／０９／２３　誤字脱字修正、本文加筆修正（表記その他）

第６０話　重なりし道筋、交わされる言葉

――人間が想像できることは、人間が必ず実現できる。

これ、昔どこかで聞いた覚えのある言葉なんだけど……どこだったかな。才人は、ぼんやりとそんなことを考えながら、今現在自分が置かれている立場も忘れて、周囲の様子に魅入っていた。

「さすがに冷えてきた。場所を変えて話を続けよう」

異世界ハルケギニアに来て、はじめてまともに『会話』してくれた＜魔法使い＞の正体が、実は中国の……間違いなく英雄のひとりといって差し支えない人物だという衝撃の事実が――当然のことながら、才人は今だそれを完全に信じたわけではない――判明してから、その『太公望』が申し入れてきたのが、この提案だ。

いったん自分の部屋へ戻り、他の者たちが寝静まるころ、改めてわしの部屋へ集合せよ。敷物と、枕を持ってな。そう指示して、スタスタと宿のほうへと歩いていってしまった太公望を、才人をはじめとする全員が必死で追い掛けた。

そして、言われた通りに集まった一同は、何やらよくわからないうちに眠らされ……気が付いたら、その不思議な部屋の中にいたのである。

その部屋の光景に心を奪われていたのは、才人だけではなかった。ルイズは、窓の外に煌めく無数の星々の美しさに、完全にその心を囚われていた。キュルケは、見たこともない調度品や、ふわふわと浮かぶランプに興味を示していた。そして、タバサは……床に設置

された、ガラス板の奥で泳ぐ、不思議な魚を熱心に眺めていた。

「どうやら『わしの部屋』が気に入ってくれたようで、なによりだ」

プラスチックみたいな安物じゃない。けど、大理石とも違う……才人にも正体がわからない材質の丸テーブル。その周囲に並べられた椅子のひとつに腰掛けていた男が、そう声を投げてきた。

『太公望』呂望。それが、声の主。だが……その姿は、これまで見慣れていたそれとは違っている。黒い髪と、青い瞳は変わらない。ただ、それまでとは雰囲気が一変しているのだ。高級感あふれる、黒を基調とした服装だけではない。顔や、体つきが今までとは違う。そう……明らかに、それまでの姿よりも年齢を重ねているように見えるのだ。

「あとで、部屋中ゆっくり見学させてやる。だからまずは、話をしようかの」

そう言って、苦笑していた彼の表情は、かなりの童顔ではあるが、一応年齢相応程度には見えた。ひょっとすると、こっちが本来の姿だったのかもしれないな。そんなことを考えながら、才人は大人しく椅子のひとつに腰掛けた。他の女の子たちも、テーブルの周りに集まってきた。

「ねえ、ミスタ……ここって、もしかして『自分の部屋』なの？」

窓の外に見える星のように、きらきらと目を輝かせながらルイズが訊ねる。

「ああ、そうだ。いや……厳密には違うな。これは『魂魄移動』の初歩の初歩。『夢渡り』と『空間操作』初歩の初歩『亜空間調整』を使い、わしが作り出した『イメージ世界』だ。つまり、今……ここにいる全員が、同じ『夢』を見ているのだよ」

だが、基本は『自分の部屋』と変わらない。これが、以前おぬしに示した『道の先』だ。そう説明する太公望の言葉を聞いて、ルイズは再びきょろきょろと周囲を見回し始めた。つまり、努力さえすれば……いつかあたしも、これができるようになる可能性があるのね！？　そう、嬉しげに声を弾ませながら。

「ああ、ちなみにこんなこともできるようになるぞ」

そう言って、太公望が『杖』を一振りすると……突然、周囲が草原に変わった。

「これが『空間操作』だ。イメージを膨らませることで、いくらでも自分の好きな『内装』にできる。ほれ……こんなふうにだ」

太公望――現在は伏羲の姿に変わっている――が杖を振るたびに、周囲の光景が変わる。あるときは、全面がガラス張りの『水槽』に囲まれた、まるで海の中にいるような部屋になった。また、あるときは豪奢な家具に囲まれた、オリエンタルな風情の一室に変化した。何もない空中に、彼らだけが浮かんでいることさえあった。

最後に、元の『宇宙船の船室風』だった場所に戻ってきたときには、全員の胸はもう、好奇心ではちきれんばかりに膨らんでいた。

「どうだ、面白かったか？」

「すごく」「こんな刺激はじめてよ！」「あたしも！」「俺もデス！！」

それはよかった。そう言って太公望は微笑むと、再び口を開いた。

「どうだ、才人？　地球の＜力在る者＞も、なかなかのものであろう？」

「あ、はい……俺たち、普通の地球人が知らなかっただけなんだ……地球にも、昔は＜魔法＞があったってこと。いや、今もあるのかな。そっか……だから、世界中に＜神話＞だの＜魔法使い＞の伝承が残ってたんだ。なんにもない場所から、突然生まれたわけじゃなかったんだ」

そうだよなあ……『A．T．フィールド』まであるくらいだもんな。才人のリアクションは、事ここに至っても相変わらずであった。

「そういうことだ。全ての事象には何らかの『理由』があるのだ。『理由がない』と考えられることも、中にはあるかもしれない。だが、実はそれ自体が『理由』となる」

「でも、まさかあの伝説の軍師『太公望』が、まさかたったの２７歳だったなんてなあ……てっきり、７０代越えてると思ってたのに。まあ、もともと生年も没年も完全に謎だったけど。しかも＜魔法使い＞！？　……いや、中国だから＜霊幻道士＞とか＜呪術師＞なのかな？　＜仙人＞だっていうのは絶対ありえないし」

この才人の言葉を、太公望は好機と見た。わしが＜仙人＞ということは絶対ありえない？　これはどういうことであろう。とはいえ、いきなり核心をついてしまっては怪しまれる。まずは外堀から埋め

させもらうとするか。

「ふむ……おぬしたちの『伝承』では、わしら＜力在る者＞はそんな名前で語られておるのか？　もしよかったら、説明してはもらえぬだろうか」

「は、はい。でも、あくまで全部おとぎ話の知識ですよ？　えっと＜霊幻道士＞っていったけど、これは＜道士＞っていう、中国の＜術者＞の一種で……幽霊や死霊を操ったり、逆に退治したりする専門家です」

幽霊。この言葉に、一瞬顔を青ざめさせるタバサ。そう……実は彼女は「オバケ」の類が苦手なのだ。今でこそだいぶ恐怖心は薄れていたが、子供の頃は、それこそ夜中にカーテンの端がちょっとめくれただけで、執務中の父親の部屋に駆け込んでしまったくらいの恐がりだったのだ。

……ちなみに『霊幻道士』とやらに関する知識は明らかに間違っているのだが、当然のことながらここに集う者たちに、そんなことがわかるはずもない。

「次の＜呪術師＞。これは＜まじない＞を扱う＜術者＞です。占いをしたり、敵を呪い殺したり……逆にそれを防いだりする専門の＜術者＞だって言われてます」

必死に、自分の中の知識……おもに漫画やゲームのそれを引っ張り出す才人。

「ちなみにですけど＜呪い＞は、それより強い＜力＞で＜呪い返す＞ことで、倍以上の威力にして跳ね返すことができるそうです。

だから＜呪い合戦＞は、相手の力量見てやらないと自滅するっていう危険があります。似たような＜術者＞に＜解呪師＞がいて……これは、名前の通り＜呪い＞を解く専門家です」

……どう考えても一部日本の『陰陽師』と勘違いしているのだが、それはさておき。才人の語った＜解呪師＞という言葉に、タバサとキュルケが反応した。

「＜解呪師＞って、たしかミスタがそうだったわよね？」「しかも凄腕」

その言葉に、太公望が頷いた。

「うむ。タバサとキュルケは既に知っておることだが、わしは＜解呪＞のエキスパートなのだ。ちなみに、さっき出てきた＜呪い返し＞もできるぞ。相手が放ってきた＜魔法＞の＜力＞を支配し返して、威力を増大させた上で撃ち返す技だ。ただ『見切り』と『解析』に失敗すると、当然のことながら全部まともに食らってしまうので、あまりやりたくないことではあるのだが」

――真名・Ｂクイック。本来ならば、太公望とその親友が組んで行う合わせ技である。

……ああ、そういえばラグドリアン湖でそんなことがありました。

当時を振り返って、キュルケが冷や汗をたらした。放った＜フレイム・ボール＞が、倍以上の大きさになって戻ってきたあの衝撃は、今でも忘れられない。アレって、実はエルフの＜カウンター＞よりも質が悪かったんじゃないの！　サイトのおかげで助かったけど、もしあたしひとりだったら……！　正直想像したくもない。

……ちなみに太公望は、当然それを覚えていて、わざと口にしているのである。あんなこと、次にやったら承知しないぞ!?　的な警告を送る意味で。

「それ以外に、ふつうの＜道士＞っていうのがいます。これがいちばんハルケギニアの＜メイジ＞に近いかな？　風を吹かせたり、雷を落としたり、雨を降らせたり、火を起こしたり……あとは医者みたいに万能薬を作って、病気を治したり」

この言葉に大きな反応を示したのはルイズだ。

「ミスタは、もしかするとこの＜道士＞に近いのかしら？」

「話を聞く限りではそのようだのう。ただし、わしは『薬』の類は一切作れぬし、医術の心得もない。修行不足だとよく師匠に怒られていた」

さすがに、そこまで上手くいくとは限らないのね……ルイズは思わず肩を落とした。実は、彼女には重い病を患っている家族がいる。太公望ならもしかすると……と、彼女は期待したのだが、残念ながら、その願いは叶わなかった。

「あとは＜仙人＞だけど……これは、なるための条件が滅茶苦茶厳しいんです。ちょっと……言ったら悪いんですけど、太公望さまがなれるとは思えなくて」

心底申し訳なさそうな顔をしている才人に、こちらは実に不満げな表情で答える太公望。

「のう、才人よ。さっきから気になっておったのだが、おかしな敬語と様づけなんぞやめてくれぬか！？　正直言って、薄気味悪い。前にも言ったが、わしは堅苦しいのが苦手なのだ。今まで通りに対応してくれ」

「いや、でも……」

「今更、何を遠慮しておるのだ。わしがかまわぬと言っておるのだから、かまわぬ」

「かといって、かの軍師・太公望さまを『閣下』って呼ぶのはおかしいですし」

「そもそも『閣下』自体やめてもらいたかったわけだが……まあ、そこまで気にするのなら、太公望（スース）師叔、または師叔とだけ呼べばよい。これは、わしらの間で使われている、目上の者に対する敬称のようなものだ。ハルケギニアの『ミスタ』より上位、かつ『閣下』とほぼ同等だ」

――本来であれば、才人が太公望を『師叔』と呼ぶのは、拝師制度の観点からすると正しくない。だが、これ以上閣下だの様づけだので呼ばれることに不都合を感じた太公望は、あえてこのハルケギニアには存在しないそれで呼ぶよう、提案することにした。かつて、武成王の息子のひとりが自分をそう呼んでいたことも、それを後押しした。

「わかりました……じゃなかった、わかったよ、太公望師叔」

「うむ、それでよい」

満足げに頷いた太公望と、ほっとした顔を見せた才人。まあ、まだ完全に信じ切れていないとはいえ、いきなり『伝説』に出会ってしまったのだから、パニックになるのも当然だろう。むしろ彼は落ち着いているほうだといっても過言ではない。

そんな彼らのやりとりを聞いていた女性陣……代表してタバサが、とある疑問を投げかける。それは、当然といってもよい問いかけであった。

「サイト。タイコーボーは、あなたの世界ではそんなにすごいひとだったの？」

「すごいとかっていうレベルじゃねーから。こっちで例えるなら『始祖』ブリミルを、無理矢理過去から呼び寄せちゃったのと同じくらいとんでもない話だから」

その話を聞いて、改めて太公望を見る彼女たち。いや、まさか……彼が凄いのはよく知っているけれど、さすがに『神』と同列に扱われるほどの人物だとは思えない。

――歴史が語る『太公望』単体の功績だけならば、ブリミルは正直言い過ぎである。だが、伏義（ふっき）の半身……地球の『始祖』を呼んでしまったという意味では当たっているから始末に負えない。もっとも、そこまでは太公望は語っていないし、才人も知らないわけだが。

「これこれ、いくらなんでもブリミルなどと……そこまでご大層なものではなかろ？　あれだけの知識を持っていた才人のことだ、既に知っておるだろうからぶっちゃけてしまうが、わしは『周』の『軍師』……ハルケギニアでいうところの、総軍司令官と参謀総長、そして軍務関連全般において国王陛下を補佐する役割。これら全て

を担う地位に就いていた。軍隊でいうなれば、元帥のさらに上。大元帥というやつかのう」

その言葉に、うえっ！　という声を出してしまったキュルケ。ルイズとタバサは既に知っていたことだが、キュルケにとっては完全に初耳だったからだ。

そこへ、才人が追撃をかける。

「確か、殷打倒に大きく貢献した功績で、斉の大公になってなかったっけ？」

「ああ、表向きの歴史ではそういうことになっておるな。周の王からもそのように打診はされたが、例の＜崑崙＞の掟があるから、世の中が平和になった以上、わしが大陸の政治に関わるわけにはいかぬ」

そう言って、手をひらひらさせてみせる太公望。彼は息をするが如く嘘を吐く。

「よって、斉の地は信頼できる＜地上世界＞の部下に任せ、地上に降りる許可を＜崑崙＞から得た上で、のんびり旅をしていたのだよ。その後、斉や周がどうなったのかまでは知らぬ。たまに王宮に顔を出すことはあったが、口は絶対に挟まなかったしな」

大公の地位に就いていたかもしれない人物……そんなところまで似なくてもいいのに。タバサはもう、本気で頭を抱えるしかなかった。しかも、彼はサイトの世界では、３０００年もの時を経てもなお語り継がれているほどの『伝説の英雄』らしい。そんな相手を『世界と時代を越えた先』から呼び出してしまったとは……！

確かに、タバサは心のどこかで憧れていた。いつか、自分を救い出してくれる『伝説の勇者様』が現れてくれる……そんな夢に。そう、子供の頃、母に繰り返し読んでもらった絵本『イーヴァルディの勇者』のような人物が、過酷な運命を強いられている自分を助けに来てくれたらどんなにか素晴らしいだろう……と。

――ところが、そんなタバサの＜召喚＞に応えてくれたのは『勇者』ではなく『魔王』だった。ただし……何故か甘いものが大好きで、争いごとが大嫌い。その言動や姿は一見すると子供っぽく「味方には」という注釈をつける必要はあるが、とても心優しい『魔王様』だ。

うっかり敵対すると厄介極まりないが、味方につけると非常に頼もしい存在。そんな『パートナー』に、タバサは不満など全く――いや、たまに心臓に悪いことをするので、それだけは正直勘弁してもらいたいとは思っているが、それ以外の点については文句などない。最近では、逆に今のままではこちらが彼とは不釣り合いなのではないかと不安になってしまうほどだ。だから、彼女は以前よりもさらに熱心に、勉学や修行に励むようになっていた。

そんなタバサの複雑な思いとは裏腹に『魔王』は話を元に戻そうと奮闘していた。

「で、結局＜仙人＞とやらになる方法とは、いったいどんなものなのだ？」

「ああ、えっと……＜仙人＞は中国の＜魔法使い＞最高位の存在、かな。ただ、なるまでがとにかく大変なんだ。まず、最初は肉と魚を食べちゃいけなくなる。で……それから数ヶ月したら、今度は特

別な薬しか口にできない。最終的には水しか飲んじゃいけなくなるんだけど……それを何年も続けて、最後には『肉体』を捨てて『魂』だけの存在になったのが＜仙人＞っていう状態らしい」

『肉体』を捨てて『魂』だけになった状態だから、不老不死だ。当然、何も食べなくても生きていける。その才人の説明に、太公望は深いため息をついて答えた。

「甘味と桃と酒のない生活などわしには無理だ」「デスヨネー」

太公望は思った。なるほど、途中までは『不老不死の秘法』を習得するための技法にあてはまっておるが、さすがに正確な伝承は残っておらぬか。まあ、あれは『仙人界』の秘中の秘だからのう……しかし『肉体』を捨てた状態になるというのは、まさしく神界にいる、かつて『封神』された者たちのようではないか……と。

――よし。ならば、この情報を少し利用させてもらおう。太公望は、即断した。

「ふむ……わしが肉と魚を食べないというのは＜崑崙＞の掟によるものだ。特別な薬や水がどうこうなどという話は聞いたことがない。ただ『魂の操作』については、ある程度だがやれないことはないぞ。実際、今こうして全員の『魂魄』を『夢渡り』によって、ひとつところに集めているのだから。そのあたりがいろいろと混じり合って、伝承として残っておるのかもしれぬな」

「あ、そういえばこれ『夢』なのよね」

ルイズの呟きに、太公望は頷いた。

「そうだ。だが、覚めてもしっかり記憶として残る。おまけに身体は眠っておるから、体力も通常通りに回復する。しかも、外の者に聞かれる心配もないから、夜に行う密談用にはうってつけの＜術＞なのだ。わしのような『空間使い』が行使した場合は、このような快適空間を提供することもできる」

「だから、みんなを『夢』に招いたの？」

「そういうことだ。なかなか良いものであろう？　とはいえ、面白くてついハマりすぎると、うっかり数ヶ月間眠り続けてしまったりするので、近くに監視役を置いてこないと危ないのだが、それについてはタバサが＜偏在＞を出して外に置いてくれとるから心配ない」

ああ、だからここに入る前に＜偏在＞を出せと言っていたのか。タバサは納得した。

――と。ここで『夢』に関することで、あることを思い出した者がいた。才人である。

「ああ、そうだ。夢で思い出した。師叔……釣りが趣味ってマジ？」

「何故夢が関連してくるのかわからぬが、本当だ。今も懐に、針と糸を持ち歩いておる」

太公望はそう言って、懐から糸と……例の『縫い針』を取り出して見せた。以前、ラグドリアン湖でタバサに見せたそれと、同じものを。

「げえっ！　伝説そのまんまの『針』じゃねえかよおおおお！！」

やっぱり本物の『釣り師』太公望なんだ！　そう言って椅子から立ち上がり、突然床の上で頭を抱え、叫びながらゴロゴロと転がりはじめた才人に、タバサが声をかけた。

「サイト、お願い。その伝説について教えてほしい」

タバサの依頼に、息も絶え絶えといった風情で才人は語り始めた。

「ピクニックに行ったとき、師叔の二つ名の由来を聞いたけど……あのとき、なんかどっかで聞いたことがある話だと思ったんだよなあ……畜生！　えっとな……昔、まだ大公国だった周の、年を取った大公さまが夢の中で……神様のお告げを受けたんだ。明日、お忍びで近くを流れる川辺を歩け。そこで初めて出会う人物こそ、お前が心から欲しいと望む人物だ、って」

……夢の中。その言葉を聞いて、全員がピクリと反応した。

「でだ。実際、大公さまは悩んでた。殷（いん）の下についていたけど、とにかく酷い圧政受けてて、このままでいいのか……ってさ。そこにお告げを受けたもんだから、もう藁にもすがるような思いで、わざわざ変装してまで……夢で言われた通りにお忍びで、川へ向かったんだ。んで……そこで、おかしな『釣り人』に出会った」

「おかしな……って？」

ルイズの問いに、才人は答えた。

「うん、釣りをしてんのに、魚籠を持ってない。おまけに……川

から数サント上に糸を垂らして、針を水の中に入れてなかった。しかも……その針は、魚を釣るための『鉤つきの針』じゃなくて……まっすぐ伸びた『縫い針』だったんだ」

「それはたしかにおかしいわね」

キュルケの反応に、そう思うよな？　と、返した才人は、さらに言葉を続けた。

「そんで、当然興味を持った大公さまは、ついお告げのことも忘れて、その釣り人に話しかけたんだ。釣れますか……？　って。そうしたら、釣り人は、にっこり笑ってこう言ったんだ」

『はい、大物が釣れました。あなたさまのような大人物が』

「……ってな。そう、その釣り人は、一発で大公さまの変装を見破ったんだ。大公さまも、この人物が夢のお告げにあったお方であるのか!?　そう思って、いろいろ話を聞いてみた。そしたら、その釣り人は……とんでもない賢者だった。で、大公さまは大喜びでその釣り人をお城に連れて帰ったんだ。『あなたこそ、大公たる我が望む人物だ』って。その日から、釣り人は『大公が望んだ人物』。それを縮めて『太公望（たいこうぼう）』って呼ばれるようになった……そういう伝説」

前に聞いた話とだいぶ違うみたいなんだけど、そこんとこどうなの師叔？　と、聞く才人に、太公望はいけしゃあしゃあと答える。

「ふむ、だいたい合っとるな。あのときは、釣りの話をすると混乱させるかと思って、あえて出さなくとも不自然にならぬように一部脚色したわけだが……しかし、誰かが夢枕に立ったというのは初

耳だのう。策を用いて大公……姫昌殿がわしに興味を持った上で、わしがいつもいる川辺に来るように、さりげなーく誘導しただけに過ぎないのだが。いや、案外わしの師匠あたりが、何かやらかした可能性も否定できんのう」

――『歴史の道標』の操作かもしれぬが。そう考えた太公望だが、当然表には出さない。

「うわ、本当なんだ！　やっぱり『釣り師』って二つ名もそこからか！　ちなみに俺んところでは、釣りの名人に贈られる称号が『太公望』になってるくらいなんだぜ！　ゲームの中でもらえる、一番いい釣り竿の名前にも、大抵『太公望』の名前がついてるし。そんで弓矢は『与一』ってのがお約束」

「なんだその称号は！　しかも後半の意味がさっぱりわからぬ！！」

「まあ、それはいいとしてさ。周軍１０万で、殷の軍７０万撃破したっていう話は？」

それを聞いて、女性陣全員が顔を引きつらせた。どんな怪物指揮官だそれは……と。

「これ才人、経過を端折るな！　準備に数年をかけ、たくさんの仲間たちに手を借してもらい、できる限り戦を仕掛けることなく、軍備を増強しながら周辺諸国と同盟を結び、なんとか周軍・同盟側２５万に加えて援軍５万を最終決戦までに用意した。その上で、周囲の地形を利用した策を用いて、７０万おった殷側を実質１０万程度しか動けない状態に持ち込み、黄河の中へ押し込んで、ほとんどの敵兵を降参させることに成功したのだ」

「ゴメン、どの程度まで本当なのか知りたくて。スゲエ……歴史の本に書かれてる内容そのまんまだわ。しかも、そんだけ数の不利があったのにしっかり勝ったわけだろ！？　数よりも質を上げて、自信満々で仕掛けたってところなのか？」

「いや、実のところ自軍２５万・対・敵軍２０万……最大でも同数での合戦規模を想定していたところへ、例の『女狐』が国中から即座に人員かき集めて、なんと７０万も用意してきおったのだ。あのときは、内心『わしも周も同盟軍もまとめて終わったかもしれぬ』なんて一瞬考えてしまった。まあ、今だから言える、ここだけの秘密だ」

「……本当に容赦がなかったのね、例の女将軍」

「いやはや、正直なところあれは危なかった……自軍本陣の国王んとこまで突っ込まれて、しかも王が槍で腹を貫かれてしまってのう。あの大怪我で、よくぞ最後まで生き延びてくださったわ」

当時を思い出したのであろう、青ざめた顔で語る太公望。

「わし自身も、例の女狐に＜力在る者＞として絶対回避できぬ一騎打ちを仕掛けられた結果、自力では動けなくなるほどの大怪我を負わされて、戦線離脱を余儀なくされてしまったのだ」

実際のところは、彼女の＜術＞に対抗するために＜力＞を使いすぎて、体内が限界までぼろぼろになってしまったというのが正解なのだが、ハルケギニアのメイジたちや才人にはわかりにくい概念なので、あえて『怪我』という表現を用いた太公望であった。

「あれでよくもまあ勝てたものだよ。わしに何かあったときのために、念のため作戦指揮用のマニュアルを配っておいたのが功を奏した。おまけに女狐の奴が、己の＜術＞でわしを一方的にズタズタにしてくれよった直後に『いやぁ～ん！　太公望ちゃんがいじめるのぉん！　紂王さま助けてぇ～ん！』とか意味不明なことを叫んで、指揮権その他諸々を殷の王に返して戦場から消えてくれなかったら……わしは黄河のほとりに屍を晒しておったかもしれぬ」

「ああいうマニュアル、合戦でもやっぱり用意してたのね……」

「さすが抜け目がない」「てか、なんなんだよその女……」「本当に意味がわからないわ……」

口々に感想を言い合う少年少女に、太公望は実に苦々しげな声で呟き返した。

「あやつの考えについて、わしに聞かれても困る。とにかく、やることなすこと本当に意味不明！　そういう実に気まぐれな女だったのだよ。実力は間違いなく全軍……＜力在る者＞の中でも最強の＜力＞の持ち主にして最凶の『策士』だったのだがな」

そう言ってガックリと肩を落とした太公望を見て、キュルケは思った。なるほど、例の女将軍って、そういう趣味だったのね……おまけに、対象の彼がニブすぎるから余計いじめたくなっちゃう的な？

せっかく頑張って倍以上の兵士つれてきて、気に入ってる彼を驚かせた。でもって、威圧して、わざわざ一騎打ちまで仕掛けて、降伏させて……自分のモノにしようとした。でも、メイジとしては格下のミスタが、圧倒的に上の＜力＞を持ってる自分に対して全力で抵抗してきたから、へそをまげちゃったんじゃないの？　彼女。

だいたい、本気でミスタを倒すつもりなら、とっくにとどめを刺してなきゃおかしい状況じゃないのよ、それって。で、気に入ってる彼を死なせたくない、でも自分が作り出した圧倒的な数的有利は覆らない。だから……万が一を考えて、わざと彼を戦線離脱させるように仕向けたとしか思えないわ。

う～ん、ミスタって、頭はいいけど女性関係は結構奥手なのかしら……と、彼女はまたしてもそっち方面におかしな想像をかきたてている。だが、これがツェルプストー家の通常運転だ！

それにしても……と、太公望は改めて才人を見た。

「おぬし、ずいぶんと詳しいのう」

その素直な感嘆に、才人は照れくさそうに頭を掻く。

「いや、殷周革命戦争でそこまで覚えてるのは、最後の『牧野の戦い』だけだよ。少ない兵力で、大軍を打ち破るとか、男のロマンっていうかさ。ネットでそういう資料見るのが好きだっただけで。ま、その戦いが＜魔法大戦＞だったっていうのはさすがに知らなかったけどさ」

「正直なところ、あれは、わしとしては不本意極まりない戦いだったのだがな。前に言ったかもしれぬが、勝てる状態まで自軍を整えてから兵を動かすのが本来の在りかたなのだ。にもかかわらず、女狐に完全に裏をかかれてこのていたらく。情けないにも程があるわ」

「大軍師・太公望にも天敵がいたんだなあ……俺が知ってる歴史に、その女将軍の名前が残ってないのが不思議だよ」

「あれほどの策士の名が全く残っておらんのか！　まあ……殷を滅ぼした『傾国の美女』だから、後世の歴史に残したくなかったのだと考えたにしても……不自然だのう」

……実際には才人の世界の歴史にもちゃんと女狐の名は残っているのだが、将軍扱いではなく、あくまで『王を誑かし国を滅ぼした悪女』といった形になっているので、単にそれを才人が知らないだけである。

「しかし……こうして改めて話し合ってわかったことだが……才人よ。おぬし、案外本当に武成王どのの血を引いておるのかもしれぬな。『武器』を扱う『能力』といい、普段の性格といい……話に聞いた、若い頃の彼と、そっくりだ」

そう感慨深げに言葉を紡ぎ出した太公望は、噂で聞いた武成王・黄飛虎の若き日の話を彼らに披露した。明るく、豪快で、お調子者。だが筋を通す為ならば、たとえ自分よりも身分の高い者――なんと上司の将軍や国王までをも殴り倒してしまったほどの熱血漢。

とはいえ、別に乱暴者というわけではなく、普段は誰にでも分け隔て無く接する、心優しい青年であったのだという。若いうちに軍学を修めた彼は、後に政治についても学び……大人になるに伴って、お調子者だった性格はだんだんと影を潜め、大武将・大貴族のそれに相応しい風格が現れてきたのだという。元来の豪放さは最後まで変わらなかったが。

「なんだか、食堂でギーシュにつっかかっていった時なんかと被るわね、その話」

ルイズの言葉に、そうであろう？　と、頷く太公望。才人本人を除く他の面々も納得顔だ。

「実際、それならば才人が＜召喚＞されたことについて、色々と納得がゆくのだよ。彼の血縁者には＜力在る者＞それも『武器』の扱いに長けた特殊な＜能力者＞が多く現れるという特徴があったからのう。ちなみにいうと、武成王殿はとてつもない愛妻家でな。奥方一筋。本来であれば、妾をもつなどということは絶対にありえない話なのだ」

……よって、もし彼が存命中に『才人が実は武成王の妾腹の息子』などという作り話を流したりしたら、わし、彼の持つ『飛刀』で背中から刺されても、絶対に文句など言えなかったのだ。そう語りながら、ブルブルと身体を震わせる太公望を見て、全員が笑い声を上げた。

「俺、本当にその武成王……黄飛虎さんの子孫だったらいいなあ。大軍師太公望の親友にして、恩人か。ふたりは轡を並べて戦ってたんだろう？　師叔にとって戦はもちろん嫌なものだったんだろうけど……そりゃ、俺だって戦争するのなんか嫌だけどさ……少しだけ憧れるな、そういう関係」

「その気持ちはわからぬでもないよ。しかし、本当にそうだとしたら……奇縁だのう」

「だよなあ」

本来であれば、絶対に交わることのなかった『道』。それが＜サモン・サーヴァント＞という奇跡によって、こうして重なり合った。

「そういう意味では、ここハルケギニアと地球の『繋がり』にも縁を感じるのう」

「それは、どんな……？」

「たとえば、ラグドリアン湖。あそこには＜星の力＞が満ちあふれていた。それも……地球にあったそれと、全く同質のものが、だ。わしが、この世界の＜魔法＞と同じ奇跡を起こせるのも、世界に溢れる＜力＞が同質であるがゆえのこと。実は……例の『星の始祖』と同じ『滅びた世界』から来た者たちが、この世界を創世したのかもしれぬな。そののちに、地球から＜力在る者＞『始祖』ブリミルが『降臨』し……＜系統魔法＞を＜メイジ＞に授けた。そう考えると、楽しくなってこんか？」

わしらがいた世界『地球』から、様々な品が召喚されてくる。その事実から考えると、この推測は案外間違ってはいないのかもしれぬぞ。そういって微笑んだ太公望――伏羲は、ついと『打神鞭』を振り、星の海が広がっていた『窓』を『切り替えた』。

――新たに映し出されたのは……どこまでも青く、美しい天体と……その側にある衛星。

「師叔。これ、地球だろ……！？　隣にあるのは……」

「そうだ才人。ハルケギニアには２つあり、わしらの世界には１つしかない月だ」

それを聞くなり、窓の側へ駆け出していった才人と、それを追い掛けていった少女たち。そして彼らは見た。眼前に広がる、煌めく青い宝石のような『世界』の姿を。

「綺麗……これが『惑星』という『星』の姿……」

タバサが、魅入られたようにそれを眺めながら呟けば。

「ここが、サイトの故郷なの？　あの、青い部分はもしかして空かしら？」

ルイズが、早速疑問点を才人に尋ねる。

「いや、あれは水……つまり海だ。そんでもって、白いのは雲だよ」

それに、指を差しながら答える才人と、不思議な感慨を抱きながら『世界』を見るキュルケ。

「ひょっとすると、ハルケギニアも外から見たら、こんな姿をしているのかしら」

ずっと、世界は平らで……端っこに行ったらどこまでも落ちていくものだと考えていた。そう告白したキュルケに、こればかりは実際に見てみなければなんとも言えぬと答えた太公望は、その直後。とんでもない発言をして、場にいる者たちを驚かせた。

「しかし……今のわしでは、せいぜい中間圏界面への到達が限界だ。さすがに生身で大気圏を突破して『宇宙遊泳』をするのは難しすぎるから、実証することができぬ」

「オイ待てや！　そんな高さまで＜魔法＞だけ……しかも生身で行ける時点でおかしいだろどう考えても！　地上から５０リーグ以

上の高さで！　おまけにマイナス９０度とかの世界だぞ！　てか宇宙遊泳が『無理』じゃなくて『難しすぎる』なのかよ！！」

「＜風＞をうまく操れば、なんとかなるものなのだよ」

「ならねーよ！」「ならないわよ！」「普通ならない」「なによその超世界！！」

全員による総ツッコミもなんのその。太公望は、さらりと爆弾発言を追加する。

「わし、実際に中間圏までなら出たことがあるぞ。髪と服の一部が凍り付いてしまったが。あの時ほど、切実なまでに暖かい湯につかることを望んだことは、未だかつてない」

「あるのかよ！　てか、なんでそれだけで済むんだよ！！」

「だから＜風＞を操ったと何度言えばわかるのだ！」

「おかしい！　地球の＜魔法使い＞絶対どっかおかしい！！」

「才人よ、おぬしもその＜力＞の一端を担っておる可能性があるのだが？」

「そうだったあぁぁあッ！　俺の中の常識がッ、もはやブレイク寸前だッ！！」

「ふぬう。才人よ、おぬしの『時代』の常識とやらも、できればいろいろと聞いておきたいのだが」

「あ、それは聞きたい」「あたしも！」「あたしにも聞かせて！」

――こんな感じで、彼らは夜が明けるまで様々なものを見、聞き、そして話し合い……結果。これらの事実……つまり、太公望と才人の正体や出身地に関する情報は、もうしばらくの間――ここにいる『最初の５人』だけの秘密にするということで決着した。

第６０話　重なりし道筋、交わされる言葉（後書き）

以上、ダベり回でした。才人の、太公望への閣下呼びかけが遂に師叔へと変化。「太公望師叔」と書けるようになるまで６０話。どういうことなの……姿はさりげなく伏義なんですが。

才人の常識がリミットブレイク寸前ですが、彼ならきっとすぐに馴染むさ！　ハルケギニアですら、あそこまで受け入れた彼だもの！！

さて。次回は、学院へ戻ります。ゼロ戦を見たコルベール先生がきっと喜びます。

ところで、感想欄などでこれまでに何度かお答えしております通り、この世界には「フジリュー版封神演義」が存在しません。また、才人は「封神演義」の存在を知りません。あくまで、太公望という大軍師と、その存在が伝説であることを知っているだけです。ですので、彼が仙人であるという発想には、彼の知識からは絶対にたどり着きません。

おまけに、仙人に対する認識が太公望とは違うので（封神演義ではなく、伝説の仙人の話です。才人の説明にはツッコミどころはあちこちありますが、実は中国の仙人に関するお伽噺は総じてこんなかんじで、肉体があったりなかったりします）太公望が不老不死であるという結論に達することもできません。予めご了承ください。

太公望の釣り伝説についても、数ある伝説のいくつかが混ざり合っています。針を浮かせていた、縫い針だった……エトセトラ。プラスフジリュー封神演義が重なっているので超カオス。でも、以外

と違和感がないという言葉のマジックでした。

２０１１／０５／３１　２：００　追加

才人が太公望を師叔と呼ぶことについて、本来の使い方としては完全に間違っているのですが、それを承知の上で、あえて本作ではこう呼ばせていただきたく存じます。

これは、太公望を呼ぶなら、ミスタや閣下よりもやはりスースだろう、という筆者のこだわりによるものです。また、他で師叔呼びができるキャラクターが存在しない&出す予定が全くないというのも理由のひとつです。本作をお読みいただいている皆様には大変申し訳ございませんが、何卒ご了承ください。

と、いうわけでその理由も本文に追記いたしました。

２０１１／０５／３１　２：３０　キュルケなりの妲己ちゃん考察を追加

第６１話　微熱は取り纏め、炎蛇は分析す

――なるほど、だいぶ情報がまとまってきたのう……。

『自分の部屋』の片隅で、才人から『地球の常識』話を聞きながら、太公望――伏義は、現時点までに集まった情報を、頭の中で整理していた。かなりの手札を晒す必要があったが、その価値は充分にあった。

３０００年の時代のズレ。彼らには『自分は過去から呼び出された』とは言ったものの、実際にはどうなのかわからない。何故なら、あの青き星は……幾度となく繰り返す歴史に翻弄され続けてきたのだから。

――繰り返す歴史。

かつて『歴史の道標』と呼ばれた強大な神。『地球の始祖』のひとりにして最大最強の＜力＞を持つ存在。唯一『星の意志』となることを頑なまでに拒否し、あの青き星を故郷そのままに作り替えようとした者。結果、他の『始祖』たちの手で、固く封印されていた神は、その＜力＞故に、ある時復活を遂げてしまった。

見かけだけをそっくりに作り替えるだけならまだいいだろう。だが、かの者は……復活した後、地球が『滅びた故郷と全く同じになるように』全てを調整するという暴挙を行い、それをひたすらやり続けてきたのだ。人の営みや、それが辿る歴史までをも。

そして、ほんの少しでもそれらが道から外れた場合、全てを破壊して最初からやり直した。まるで、子供の砂遊びが如く――。

よって、実際には太公望のほうが、数千年――いや、数万年後の未来から呼び出されている可能性もあるのだ。何せ、あの星では『同じ歴史』が、億を超える長きに年月に渡って、何度も何度も繰り返されてきたのだから。

わざわざ中国大陸の軍師の名を挙げさせたのも、太公望の過去の業績を喋らせるよう才人を誘導したのも、それを確認するためだ。何故ならば、過去の中国大陸の歴史上、ほとんど全ての場合において、3人の軍師といえば必ず同じ人物の名が登場してきたからだ。

ただひとり『道標』を監視するために『星の意志』とならずに残った『始祖』伏義の半身――その記憶も＜力＞も、全て失い、何も知らないひとりの人間に生まれ変わって地上世界に降り立った、今この場にいる『太公望』だけではない。

それ以外の歴史で、同じ『太公望』の名を授かった者たち全てが、それに該当する。例外は絶対にありえない。何故なら、もしもそのうちの誰かが誕生しなかった場合……その直後、再び地球の歴史は『道標』の手によって、最初からやり直されていたから。

ただ、少なくともふたりが『同じ地球』から呼び出されているのは、これで確定した。そして――彼、平賀才人の辿ってきた『歴史』の流れが『今の太公望』が知る道順に、極めて近いことも判明した。胡喜媚の降臨だけでは、もう一歩足りない。同じ『道』から来たことを確定するには、もういくつかの判断材料が欲しいところだ。

――そして、その才人少年が持つ＜力＞について。

才人には、あえて＜力在る者＞とは言ったが……実際には、彼に

は＜仙人骨＞つまり、仙人として宝貝を使う能力はない。何故なら、あの『如意羽衣』に触れたとき、たったそれだけで気絶してしまったからだ。よって、現時点の彼には＜仙人＞になれる素養はないことが確定している。彼はどこにでもいる、ごく普通の少年だ。

もしも本当に＜仙人骨＞を持っていたら、奇跡は起こせないまでも、瞬時に気絶するなどということはありえない。せいぜいが極端に疲れる程度で済むだろう。だいたい、彼からは＜仙気＞が一切感じられない。タバサが宝貝に触れてもなんともなかったことで、太公望があそこまで慌てふためいたのは、彼女にもそれがなかったからだ。＜使い魔＞の感覚共有、いや＜コントラクト・サーヴァント＞恐るべし――！

ただし、わざわざ異世界人の才人が＜ガンダールヴ＞に選ばれたことから考えるに、ルーンの＜力＞を借りてはいるが、潜在的に各種戦闘や、軍務に関して非常に高いセンスがあるのは間違いない。実際に才人と何度も拳を交えてみて、また、これまで話を聞いてみた感じから、太公望はそれを実感している。

また、ルイズとの間に何か特別な繋がりがあるのも間違いないだろう。そのあたりの詳細については、今後さらに情報を集めた上で、検証を進めていく必要がある。これは、自分とタバサにも言えることだ。

地球出身、しかも隣国にいた以上――彼が武成王・黄一族の血を本当に引いている可能性もゼロではない。今後の修行次第では、かの偉大なる殷の太師のように、身体の内より＜力＞が現れるかもしれない。

ただ……それには、数十年の長きに渡り、血を吐くような厳しい

修練が必要となる。本人の意志で行うならばまだしも、太公望にはそれを押しつけるようなつもりは一切ない。

――また、このハルケギニアと地球について。

間違いなく、なんらかの関連性がある。それがどういったものかはまだ確定できないが『水の精霊』の存在や『杏黄旗』が正しく起動したことによって、世界に満ちる＜力＞が、地球のそれと完全に同質であることが証明されたからだ。

さらに＜召喚＞や何らかの理由によって、地球から呼び出され続けている『アイテム』や『人間』。ひょっとすると、他にも引き寄せられているモノがあるのかもしれない。

これらが、ほぼ地球からの一方通行であることも気になる。胡喜媚については自力帰還を果たせたか、あるいは＜仙人界＞の協力があったのかもしれないが……それ以外については帰還できたという情報が一切ない。

これについては、正直なところもっとたくさんの情報が欲しい。特に『東』に関するものが。可能であれば、ロングビル以外にも有能な情報斥候を増やしたいところではあるのだが、そう簡単に使える人材が発掘できるわけもなく。

……さらに、このハルケギニアという世界そのものについても、大きな疑問がある。地球の歴史を『繰り返される世界』と称するならば、ここは『輪に閉ざされた世界』だ。

ひとつの文明とその歴史が、６０００年以上も滅びずに保ち続けられているなど、通常ならば考えられないことなのだ。実際、あれ

ほどの叡智を備えた『滅びた世界』でも、過去にいくつもの文明が滅びては生まれ、それを糧にして成長を続けていたのだ。

だが、ここは……まるで意図的に作られた箱庭のようだ。そう……『魔法文明』という『輪』によって、外へ出ることを禁じられた、進歩を止められた世界――。

と、ひとり情報整理に努めていた太公望に声をかけてきたのは、キュルケだった。

「あら、どうしたのミスタ？　やっぱりああいう話には興味がない？」

「いや、才人の国の『学校』に関する話が面白いから、聞き入っていたのだ」

実のところ、彼は全く別のことを考えていたのだが……話自体はしっかりと聞いていたので、淀みなくそれに答える太公望。それに、義務教育を含む学校全般のシステムは、彼の興味を引きつけていた。

「そんなに面白いか？　そういや、古代中国って学校はなかったんだよな」

「うむ。だいたい師匠に弟子入りして学ぶ、といったことが多かったのう」

「へえ～。じゃあ、サイトが言っていた『制服』みたいなものはないのね。サイトの国が羨ましいわ。学校によって着る服が違っていて、しかも、すごく可愛いのがいろいろあるんでしょう？」

「ああ、近くに学校があるのに、憧れの制服が着たいからって、わざわざ隣の町まで行くやつらもいたんだぜ!?　女子なんかは、特にそうだったな」

その言葉に、オシャレ好きのキュルケが強く反応した。

「すっごくわかるわ、その気持ち！」

「ちなみに、学生だけじゃなくて、職業によってはやっぱり格好いい制服があったりするんだ。女の子ならスチュワーデス……飛行機の案内役とか、男なら電車の車掌とか、警察官。パイロットスーツだな！　もちろん制服がない仕事もあるけど、やっぱり憧れの服があるのは間違いないよ」

「制服に憧れるっていう気持ちは、あたしもわかるわ！　将来は魔法衛士隊の制服が着たい！　って男の子がたくさんいるもの。それと同じようなものよね？」

「そういうところはどこも一緒ね。あたしとしては、どんな制服があるのか是非見てみたいわ！　制服だけじゃなくって、もちろんほかの服やアクセサリーにも興味あるわ」

「おう！　いつかみんなが日本に来たら、俺があちこち案内してやるよ！　女の子なら、服屋とか小物の店とかに興味あるのが当たり前だしな！　すっげえたくさん揃ってるぜ。こっちみたいにオーダーメイドで最初から造るんじゃなくて、いろいろな服が見本でずらーっと並べて展示されてて、それを見ながら好きなデザインを選べるんだ。試しに着てみることだってできるんだぜ？」

「なにそれ、面白いわね！　是非見に行ってみたいわ！」

「あたし、もっと魔法の練習頑張って、早くサイトが家に帰れるように努力するわ。あっ……べ、べつに、あんたの世界が見てみたいだけで、そ、それ以上の意味は、な、ないんだから！」

「頼んだぜルイズ！　俺も練習には協力する。そしたら、絶対みんなで行こうな！」

――日本の常識の話だったはずが、いつのまにか制服談義になってしまっているのは……才人の才人たる所以であろう。

と、そこに口を挟んできたのはタバサだ。

「そういえば、タイコーボーの着ている服も、何かの制服？　前にそんな話を聞いた」

そう、以前着替えの服を仕立てる際に、太公望はタバサに対して簡単にだが『道士服』の説明をしていた。特に制服というわけではないのだが、ある程度の法則はある。

太公望は思った。ならば、こちらのシステムを解説するにあたって丁度いいので、少し話をしておくか。知られて問題のある内容でもないし、互いの信頼を深める意味でも、こういった会話が人間関係の潤滑油になってくれるのは、間違いのない事実であるからと。

「うむ、制服……というほど厳密ではないが、一定の法則は存在する」

「やっぱり、そのマントかしら！？」

「てか、どうなってんだよその服の構造。さっぱりわかんねーぞ」

――伏義の黒衣をジロジロと眺めて指摘する才人。確かに、かなり複雑怪奇な造りだ。

「それをわしに聞くな！　自分で造ったわけではないのだ！！……まあ、それはともかくとしてだな、身につける物に関する法則について話すには、わしんとこの＜崑崙＞に関する話をある程度せねば理解できぬのだが、してもかまわぬか？」

「むしろ聞きたい」「あ、俺も」「あたしも」「是非お願いしたいわ」

好奇心でいっぱいです！　といった瞳を自分へ向けてくる子供たちの視線に思わず苦笑してしまった太公望は、いつものおなじみ若干の捏造設定――主に組織情報に関して――を交えつつ、話をすることにした。

「まだキュルケには話していない内容だったのだが……例の『スカウト』には、2種類あるのだ。ひとつは通常のスカウト。もうひとつは『幹部候補生』としてのスカウトだ」

「あ、それ前にあたしなら『幹部候補』になれるって言ってくれてた……？」

ルイズの問いに、太公望が頷く。

「現時点で判断するならば、ルイズ、タバサ、キュルケの3名は幹部候補としてスカウトされる可能性が高い。才人については、通常のスカウトになるな。もっとも、その後の努力次第で幹部になれ

る素養は充分に持っているが」

「幹部とは、具体的にどのような者を指すの？」

タバサとしては、国の運営をする者たちという認識があったのだが、もしかすると違うかもしれない。よって、念のため彼に確認すべく質問を投げる。

「うむ。わが＜崑崙＞の幹部……つまり、組織の運営をする者のことだ。各部署の運営はもちろん、後に続く人材育成を任される。ただし、後進の育成を一切行わず、研究や運営だけに専念する者もいる。わしは、完全に後者の部門運営専念タイプに属していた」

「部署というのは？」

「そうだのう、魔法でいえば＜系統＞ごとに教師が違うであろう？　また、国の組織にも、衛士隊だけではなく、財務管理や外交、その他の役割があるのと同じで、こちらにもさまざまな専門家がいるのだよ」

顎に手を当て、相応しい言葉を探しながら説明する太公望。

「たとえば、開発部門。これは、いわゆる＜マジック・アイテム＞を造ることを専門とした者たちが集まる部署だ。トリステインの王立アカデミーのような研究所になっておってな。各種アイテムを造るだけでなく、どのようにすれば効果的な運用ができるか等の研究を日々行っている」

ふむふむ……と、説明に聞き入る子供たち。

「そして情報管理部門。ここは、例の『千里眼』や『過去視』などの＜力＞を持つものや、そこから得られた情報を精査して、役に立てるために存在する部署だ。非常に高い『解析』『分析』能力を持つ人材が集中しておる。わしも『解析』に関してはそれなりに高い能力を持つが、ここはさらに上の＜能力者＞が集う場所だ」

「師叔より高い解析能力持ってる連中が集まってるってどんだけだよ、崑崙……」

「専門か、そうでないかの違いだよ。と、まあこんな感じで、おおまかに分けると全部で１２の部署が存在する。ここに所属するためには『幹部候補』としてスカウトされる、あるいは所定の昇格試験を突破する必要がある非常に狭き門だ。もっとも、せっかく候補生として＜崑崙＞へ来ても、途中で脱落する者も存在するがのう」

「そうよね、エリートばっかり集まるんですもの、そういうことはありえるわね」

「うむ。単なる派閥とはいえ、一応は国家規模の組織だからのう。でだ……その各部署ごとに、リーダーが存在する。全１２部門のため、当然同数の１２名だ。この者たちは＜最高幹部・崑崙１２卿＞と呼ばれ、これに選出されるのは、大変な名誉とされている」

――あえて＜崑崙１２仙＞という真名を出さない太公望であった。もちろん、これは才人に自分が仙人であるという可能性に到達されることを、万が一にも避けるためである。

「ちなみに補足するが、最高幹部に昇格するためには＜力＞だけでは絶対に不可能だ。組織を運営するに足る頭脳や知識が当然のことながら求められる。また、人格もだ。よって、単純に＜力＞が強

いからといって幹部になれるとは限らない。逆に＜力＞が弱くても、リーダーに相応しい人格と能力を備えていれば、トップに立つことも可能なのだ。そこに家柄だのなんだのは一切関係ない。あくまで実力重視だ」

「最高幹部の上には、さらに上がいるの？」

そのタバサの質問に、満足げな笑みを浮かべた太公望は、さらに説明を続ける。

「うむ、この最高幹部のさらに上にいるのが……＜崑崙＞の長たる＜教主＞。この人物が『始祖』の意志の代弁者として、全てを取り仕切っている。ハルケギニア流にいうなれば、ロマリアの＜教皇＞のような存在だ。この＜教主＞は、各派閥ごとに存在するので、全部で3名。＜崑崙＞では最高幹部の中から選出されるのがほとんどだのう」

――これも嘘である。実際は＜教主＞が取った弟子が＜次期教主＞となるのだ。本来であれば、太公望がその最たる例になるはずであったのだが、彼はそれを辞退して……いや、副官にして親友たる青年に全部押しつけた上で、地上へ逃げてしまった。もちろん、面倒だったからだ。

「ふうん、教皇のすぐ下についているひとたちってことは……つまり、ブリミル教の司教枢機卿みたいなものよね？　その『最高幹部１２卿』って」

「教皇も枢機卿議会選挙で選出される。そういう意味なら理解しやすい」

「ああ、言われてみればたしかに似てるわね。ということは、幹部っていうのは『司教』に相当するのかしら」

ルイズの呟きに、タバサとキュルケが納得したように追随した。いっぽう、それを聞いていた才人はというと「この世界にも枢機卿団みたいなもんがあるのか」などと、地球とハルケギニアの宗教の相似について思いを馳せていた。

「仕事の内容は全く違うが、まあ組織としてはそのようなものだ。で、ようやく本題に入るのだが。崑崙における服装に関してだ。まずはマント……というよりも外套に近いものだが、もう隠しても仕方がないので話してしまう。また、これも今更だが、わしの元の身分がどうこうでいちいち悩むなよ!?　この、先の割れたタイプの外套は最高幹部以外には絶対に着用が許されない」

「本当に枢機卿みたいね……」

ちなみにこれは大嘘である。マントの形状に関して、特に規約のようなものはない。

「で、また少し脱線するのだが。12名の最高幹部は『崑崙山脈』の最上部にある『円卓の座』に着くことを許される。ここで＜崑崙＞全体の意志が決定されるのだが……この席の数は、12ではなく……全部で13個あるのだ」

と、これを聞いた才人がぴくりと反応した。

「うお、なんか『円卓の騎士』（ナイツ・オブ・ザ・ラウンドテーブル）みたいだな、ちょっと格好いいかも！」

「なにそれ？」

「ああ、俺たちの世界に『伝説の騎士王』が率いた近衛騎士団があってさ。そこに所属する騎士たちしか着席を許されなかった『円卓』があるんだ。その席もやっぱり１３個あって、普段は１つ空いてるんだ……って、悪い。続けてくれ」

頷いた太公望を横目に、ひょっとして、何か関係があったりするのかな……だったら面白いな、地球に帰ったらネットで調べてみよう。そんな感想を抱いた才人であった。

「普段、この『１３個目』の椅子は空いている。だが……有事の際、より指揮系統をハッキリさせて事に当たるため、最高幹部全員を束ねる責任者が１名＜教主＞によって選出される。これは当然最高幹部の中から選ばれるのだが、そうすると席がひとつ空いてしまうため、幹部の中から新たにひとり『円卓の座』に昇格してくる」

なんとなく、その先の展開が予想できてしまったタバサであったが、あえて黙っている。できればそれだけは外れて欲しい……そう願いながら。

「この＜束ねる者＞は、崑崙の軍最高司令官を兼任する。過去の歴史において、この座に着いた者は、わずか数名しかいない。ちなみに先代の＜束ねる者＞は＜崑崙＞の歴史上最強の＜炎＞の使い手であった。非常に正義感が強い人物でな、長く続いた地上の戦乱に激しく心を痛めておられたため、自らの持つ指揮能力ではなく、戦闘能力を生かすほうが世界の為になると判断した上で、あえて他者に後を任せ……人々を守るべく、青き大地へと降りて行かれた」

「なるほどな、正義の味方ってヤツか。俺、そのひとの気持ち、

なんとなくだけど理解できるな。せっかく自分に困ってるひとを救えるだけの＜力＞があるのに、黙って見てるだけなんて嫌だし」

「あたしも、そのひとの気持ちがよくわかるわ。そんな状況で、領民を見捨てて、ただ椅子に座っているだけだなんて……貴族としてあるまじきことだもの。自分にそんな＜力＞があるなら、なおさらだわ」

才人とルイズの反応に、太公望は内心苦笑した。本当にこいつらは似た者主従だのう……勇者気質というか。総司令官が、ただ安全な場所で座っているだけだと思われるのは、正直心外なのだが……まあ、まだ子供である彼らにとっては、仕方のないことかもしれぬな。そんなことを考えつつも、先を続ける太公望。

「もちろん彼は、その考えに同意した＜教主＞からちゃんと許可を得た上で、あえてその地位を捨て、最前線にその身を投じたのだ。事実、彼の加入によって、自軍や民の犠牲者が大幅に減ったのだよ。伊達に＜束ねる者＞を務めていたわけではない。その『切り開く』判断力はピカイチであった」

「まさしく『道を切り開く』＜火系統＞に相応しい使い手だったのね、その彼」

キュルケの感想に、強く頷く太公望。

「実際、熱い男であったよ、かの御仁は。でだ……彼と＜教主＞は、後任として、よりにもよって当時まだ最高幹部に昇格して間もないわしを＜束ねる者＞に指名した。＜崑崙＞全ての幹部の中でも、このわしが最年少であったにも関わらずだ」

実に苦々しげな顔でそうのたまった太公望を、全員が思わず見返してしまった。最年少の最高幹部、しかもそれを束ねる立場に指名されたのに、どうしてそんな顔をしているのか……と。そんな彼らを見て、深いため息をついた太公望は、こう切り出した。

「あのな、わしはその時点で既に＜地上世界＞で周の『軍師』を務めていた。その上、さらに＜天界＞では＜束ねる者＞をやれとか。あんな無茶をやらされては、あまりの激務に仕事を終えた時点で身体がボロボロだ！　とっとと辞任したくもなるだろうが！！」

ドン！　と、テーブルを叩いて力説する太公望。

「そんな状態で次の＜教主＞してやるとか言われても、絶対無理に決まっておる！　だいたいそんな面倒な地位になぞ就いてたまるか！　いや……そうか。わしの性格を見抜いた上で、わざとか！　わざとやらせおったのだな!?　あのクソジジイめが！！」

ウガーッ！　と、口から火を吐かんばかりに興奮する太公望を見て、タバサは自分の予想が当たっていたことを察した。やはり派閥内でもかなりの要人だったのだ、彼は。ブリミル教で例えるならば司教枢機卿、しかも次期教皇候補。元の身分など気にするなとは言われたものの、そこは元王族たる彼女のことである、当然ながら心臓にキてしまう。

「ああ、思い出すだけでも腹が立つわ！　ともかくだ。その＜束ねる者＞に就くことは、わしとしては不本意極まりないことではあったものの、一応名誉なことであるのは事実。よって相応の給金と紐章のようなものが贈られる。それが、わしが普段マント留めに使っている、文様の入った金属のプレートなのだ」

ああ、あれってそういう意味があったのか……実は制服っていうより軍服なんだな、あれ。今度、もっとよく見せてもらおう！　ミリタリー好きを自認する才人は、新たな好奇心の対象を発見して、胸が躍っていた。

「と、まあ……そういうわけでだ。これらの服装を見れば、一発で身分がわかる。よって、地上で飲食店に入れば肉と魚が入っていない＜崑崙＞専用の食事が用意されるし、大抵の国の関所はフリーパスで通れるのだ。と……ずいぶん長い説明になったが、あれが制服といえば制服のようなものかのう。たとえ退役しても、理由がない限りは＜力在る者＞であることを周知するために、着用が義務づけられる。ただし、普段着ているものはあくまで略式のもので、正装や礼装となるとまた異なってくるのだが」

「だから、同じものを仕立てたいと言っていたの？」

「その通りだ。まあ、着慣れているので楽だということもあるが」

と、ここでキュルケがとあることを思いついた。

「ふうん、制服ね……ちょっと良い考えがあるんだけれど、みんな、いいかしら？」

――翌日、タルブ村からの帰り道。

「ねえ、水精霊団専用の制服を作らない？」

風竜の背の上で、キュルケは突然全員に向けてこんなことを言い出した。ちなみに、この風竜はギーシュの父であるグラモン元帥が、

例のゼロ戦＋折りたたんだベッドを運ぶついでに、全員の足に……と、気を遣ってわざわざ用意してくれたものである。

「制服？　学院のものを着ればいいのではないかね？」

ギーシュの疑問に、キュルケはしたり顔で答える。

「それがいけないっていうのよ！　せっかく暗号名まで決めて自分たちの正体を隠そうとしているのに、学院の制服を着てたりしたら、知ってるひとが見たらバレバレじゃない！」

その意見に、モンモランシーとレイナールも納得顔で頷いた。

「そうね、キュルケの言う通りだわ。あたしは賛成！」

「ぼくも賛成だな。ただし、活動用だから動きやすいものにしないといけないと思う」

彼らの相づちに、キュルケは実に満足そうに微笑んだ。うまくいった……と。ミスタ・タイコーボーも制服には賛成で、しっかり経費で落としてくれるって許可をくれたし、せっかくだから、オシャレな服を作りたいわね！　サイトの国には、ハルケギニアにはないデザインがたくさんあるみたいだし、色々参考にさせてもらえば、きっとあたしが気に入る『制服』ができあがるに違いないわ！

――オシャレ好きなキュルケならではの閃きと提案であった。

そして才人は才人で、彼女の考えにいたく共感し……せっかくだから、女子は動きやすさと可愛らしさを重視して、男子は東方の軍服風にしないか！？　実際にデザイン画見て、気に入ってくれたら

でかまわないから。という意見を出し……全員がこれに賛成した。

結果、日本の（才人好みな）あらゆる制服……セーラー服からブレザーなどの女子高生の制服（リボンの大きさや靴、ソックス・タイツの長さまでが細かく指定されたもの）や、ＯＬにバスガイド、スチュワーデスに婦人警官、そしてナース服に巫女装束。果てはアニメやゲームに登場するそれまでが飛び出してきて……風竜の背の上という、まさしくとんでもない場所で、彼のオタク趣味全開なイメージ画が一般公開された。

男子生徒のほうに関しては、軍服……佐々木少尉への敬意を込めて、大日本帝国海軍のそれを筆頭に、他国の（またしても才人好みな）軍服（もちろん階級章などの小物もバッチリ付属だ）や、フライトジャケット。さらにこれまたアニメやマンガに登場する某帝国軍や某惑星連合宇宙軍、とどめに某自由同盟軍のそれまで網羅と、実に幅広くチョイス。

セーラー服など、一部は残念ながら――特に、才人にとっては非常に口惜しいことだったのだが、マントと合わせにくいと思われるデザインのものは、初期段階で外されてしまったのものの、いくつかの候補が残り……特に、首にスカーフやマフラー等を身につけやすいタイプのものを重視して――さらに、そこから夏装備と冬装備を選んで、再び冒険の機会が訪れる、その日までに全員分を揃えよう！　と、いうことで話はまとまった。

この夏休みは、彼らにとって一生忘れられない思い出となるだろう。色々な意味で。

……ところで。才人は、このハルケギニアに来てからというもの、絵を描くスキルが以前と比べて極端に上がっている。自分の想像し

たものを、こうやって描いて説明する機会が増えたせいなのだが……それだけに、描写力が特にアップしているのだ。地球帰還後は、基礎をしっかり学び直せば、美大にも進めそうな勢いである。

○●○●○●○●

――彼は、後にこう述懐している。あのとき『夢』が舞い降りてきたのだ、と。

『炎蛇』のコルベール。この年で42歳になった彼は、トリステイン魔法学院に教員として勤めはじめてはや20年。現在独身、只今嫁さん募集中。そんな彼の趣味と生き甲斐は、学問と、それを生かした発明及び研究である。

多くの教員が、夏休みということで交代制の休暇をとって帰郷する中、コルベールだけはひとり自分の研究室に閉じこもり、相変わらず謎の薬品だの、設計図とにらめっこする生活を続けていた。そんなある日、彼は……ふと窓の外を見たときに、空から風竜たちによって運び込まれようとしていた『物体』を見て、椅子の上で跳ね飛んだ。そして、部屋から駆け出して、それが『降臨』した学院外の広場に、文字通り飛んでいった。

そして。その『物体』が、地面に降ろされようとしている様を見守っていた子供達……特に、荷下ろしの指揮をしていた少年が才人であることを知ったとき、彼の胸はもう、知的好奇心ではちきれんばかりになっていた。

「サイト君！　こ、こ、これは一体なんだね！？」

君さえよければ、是非説明して欲しい。顔中をきらきらと輝かせて側に寄ってきたコルベールを見て、これまた大きな笑みを浮かべた才人は、このハルケギニアで最も頼もしい『発明家』の手を取って、こう言った。

「俺のほうこそ、これを先生に見てもらいたかったんです！　是非お願いします！！」

「なんと……私に！？」

そして、才人は説明した。この『物体』が飛行機と呼ばれる、彼の国の空飛ぶ乗り物であることを。そして、空を舞うためには一切の魔法を使っていないこと、プロペラや翼の役割……そして。

「エンジン……もしや、以前私が作った、あの……愉快なヘビ君に使っていた……」

「そうです！　先生が見せてくれた、あれが発展したのが、この『ゼロ戦』に取り付けられている機械……エンジンです！　太公望師叔があのとき言っていた、内燃機関なんですよ！！　だから、俺たちはコルベール先生に是非見てもらいたかったんです」

私の夢が、それが形になったものが、今……現実に、目の前にある――？

「そ、それで、これは今すぐ動かせるのかね！？」

「それなんですよ、先生に一番相談したかったことは」

そして、一端解散した水精霊団のメンバーの中、才人と太公望だ

けが残り――ここからは非常に専門的な話になることと、プラス汗で汚れた身体を風呂で洗い流したかったルイズとタバサは、あとでわかる範囲で教えてもらえるよう、それぞれの『パートナー』に頼んでこの場を去っていた――改めて『飛行機』に関する説明が始まった。

――そして、場面は移り……コルベールの研究室。

燃料タンクの底に、ごくごくわずかに残っていたガソリンを壷の中に入れて、研究室へと持ち込んだコルベールは、早速それの分析に取りかかっていた。

「ふむ、嗅いだことのない臭いだ。おまけに、随分と気化しやすい性質を持つ油だな。これは、爆発したときに相当な力を出すのではないかね？」

「その通りです。そのために作られた、特別な油ですから。幸い＜固定化＞がかけられていたおかげで、ぜんぜん変質してないみたいで、本当によかったです」

なるほどなるほど……そうぶつぶつと呟きながら、コルベールは手元にある羊皮紙に、さらさらとメモを書き込んでいく。そして、その姿を頼もしげに見守っている才人と太公望。

「わしには、これが『非常に気化しやすい油』ということまでは理解できたが、残念ながら＜錬金＞によって同じものを精製するだけの技術や、その性質すべてを分析するだけの能力がない。しかし、コルベール殿ならばできるであろうと考えた末、学院へ持ち帰ってきたのだが……どうやら、その判断は間違っていなかったらしい」

ニヤリと笑って言う太公望と、うんうんと頷く才人。そんなふたりの声を聞いて、研究者としてのプライドをいたく刺激されたコルベールは、大張り切りで、部屋中から秘薬を引っ張り出したり、アルコールランプに火をつけたりしながら声を上げた。

「あんな素晴らしい『宝物』を、しかもこの私の技術を信頼して持ち込んでくれたとは！　私は実に幸せ者だ！　その期待にお応えするためにも、全力でもってこの『油』の精製に取り組ませてもらいますぞ！！」

それを聞いた才人は、顔を輝かせて叫んだ。

「お願いします！　もし、精製に成功したら……いちばん最初に先生に乗ってもらいます！　操縦は俺じゃなきゃできないけど、後ろに乗ってもらえば大丈夫ですから。ゼロ戦はもともと一人乗り専用だから、めちゃくちゃ狭いかもしれないですけど、すみませんがそこはなんとか我慢してください」

これは、学院への帰還中に、水精霊団の中で話し合って決めていたことであった。研究者たるコルベールに、対価も兼ねて実際に体感してもらう。それが、さらなるインスピレーションを彼にもたらすであろうという太公望の意見に、一同全員が賛成していた。

ちなみに、２番手の権利を獲得したのは才人のご主人様であるルイズであり、３番手は『ゼロ戦』をこの世界に持ち込んだ佐々木少尉の曾孫シエスタだ。最初に精製したガソリンに余裕があれば、彼女の父にも、祖父の持ってきた『竜の羽衣』の素晴らしさを体験してもらう。これについても、全員納得済みである。

その相談内容を、全く飾らずに、そのまま伝えた太公望。そして、それを聞いたコルベールは感激していた。自分への信頼も、もちろん嬉しい。だが……それ以上に＜魔法＞を一切使っていない＜飛行機械＞に乗せてもらえる。それも、この世界ハルケギニアで一番最初に、なんと自分が体験できる！　その事実が、彼を激しく興奮させていた。

「ああ、コルベール殿。だからといって、徹夜などをされては困りますぞ？　せっかく飛べる状態になった時に、コルベール殿が研究の疲れで倒れてしまっていては、本末転倒ですからのう」

その太公望の言葉に、手で自分の額をぺしっと叩いてコルベールは笑った。

「おっと、それはいいことを聞きました。ついつい、我を忘れて研究にのめり込みそうでしたから！　では、しっかりと体調に気をつけながら、できるだけ急いで分析した上で、精製しましょう。で……分量的には、どの程度必要なのでしょう？」

その問いに答えたのは、当然『ゼロ戦』の操縦者たる才人だ。

「そうですね、まともに飛ばすには最低でも樽5本。できれば6本以上欲しいです」

「なんと！　かなりの量が必要なのだな……せめて、この油がどんな成分からできているのか、そのヒントでもいいからわかれば、だいぶ作業工程を減らせると思うのだが……サイト君、何か知らないかね？」

コルベールの言葉に、才人は必死に自分の知識を総動員させた。

学校で習ったはずだ……ガソリンの成分。あれは石油から作られている……石油は、何から出来ていた？　確か……！

「バクテリア……ええっと、確か微生物の化石が、油状になったやつ……原油が原料。たぶんですが……いちばんそれに近いのは、木の化石……つまり石炭だと思います。ハルケギニアにもありますか？　すみません、俺の知識だとそこまでしかわからなくて」

畜生、インターネットに接続できればなあ！　才人は、地球の便利な文明世界を懐かしく思った。彼が持ち込んでいるノートパソコン。今は既にバッテリー切れで動かなくなっているが、もしもそれでネットさえ使えれば、すぐにでも答えがわかるのに……と。

「なんと、石炭がこの油に近しいもの!?　それなら、この研究室内にもありますぞ。ゲンユというものについては残念ながらわかりません。ですが、調べてみれば、それらしきものに行き当たる可能性はありますな。それがあれば、今後の＜錬金＞はずっと容易になるでしょう。それがなくとも、石炭ならば調達はそれなりに可能ですぞ」

……と、その才人の解答に、コルベールだけではなく太公望も反応した。

「なるほど、原油か！　それならばわしも知っておる。ただ、実際の調達方法や、ハルケギニアにもあるかどうかまではさすがにわからぬ。まあ、ほぼ間違いなく存在するとは思うが。才人よ……もしも、原油が出やすい地質などの具体的な特徴を知っていたら、わしに教えてくれぬか？　万が一、何らかの理由で染み出しているような場所があれば、もしやするとわしの情報網に引っかかるやもしれぬ」

「ゴメン師叔、さすがにそこまでは無理！　地球ならある程度わかるんだけどなあ」

「そうか。ならばわしは、石炭の取引価格や容易な調達方法について調べてみよう。その際に、うまくすれば原油についての情報が何かしら引っかかるやもしれぬ」

「それでは、私はこの油と石炭の成分を比較するところからはじめてみます！　分析が終わって精製に入れたら……それが正しいかどうかの実験をしないといけないので……そうだな、ワインの瓶１本くらいの量だけ試しに作ってみるが……サイト君。それで足りるかね？」

「いや、たぶん２……いや、３本くらい必要になると思います。申し訳ないんですが」

「いや、正確な分量がわかっているほうが助かるんだ。こっちこそ、ありがとう！」

そう言って、才人と太公望に向かって右手を差し出したコルベール。彼らふたりは、揃ってその手をガッチリと握り締めて頼んだ。

「よろしくお願いします！」

そんな彼らに、任せなさい！　と、胸を拳でドン！　と叩いて応えたコルベールは……早速研究に取りかかり……なんと、その翌日の昼前に分析と精製を終え、才人のところへ飛んできた。

――そして。見事エンジンの始動が確認され、それによって正し

く『ガソリン』が作り出せたことを実感できたコルベールは、即座に量産体制に取りかかった。彼は、ただひたすらに感動していた。初めて見た＜火＞によって作り出された『夢』が起こした振動と、音と、その力強き回転に。

本来、さほど得意とは言えない＜土＞系統。だが、彼の中に沸き上がる『喜び』の感情が、そんな不利を吹き飛ばしてしまったかのように、次々と新たな油が樽の中へ注ぎ込まれてゆく。彼の中に生じた＜情熱＞は嚢々と燃え盛り……その夜、眠る前までに初飛行に必要な量以上――なんと樽7本分を作成するまでに至った。

最後の樽がいっぱいになったのを見届けたコルベールは、成果が外へ漏れ出したりしないよう、しっかりと相応しい処置を施した後……実に満足げな笑みを浮かべて、ベッド代わりのソファーへと倒れ込み、翌朝まで目を覚まさなかった。

いっぽうの才人はというと、そんなコルベールの熱気に当てられて、必ず初フライトを成功させねばと張り切った。工具の類が残っていなかったので、残念ながら＜ガンダールヴ＞のルーンによる不具合調査と、各部を磨くくらいしかできなかったが、それでも、その心は既に空へと舞い上がっていた――。

第６１話　微熱は取り纏め、炎蛇は分析す（後書き）

と、いうわけで、実は本格情報分析はこの話でした。才人に『仙人骨』を期待していた皆様には誠に申し訳ありませんが、彼は原作通りの彼から一切変わっておりません。そこを変えてしまったら、個人的なゼロ魔原作へのこだわりが消えてしまうことに繋がりましたので。

ごくごく普通……ただしミリタリー好きのアキバ系オタク、かわいい彼女がほしい高校生男子。少々頭に血が上りやすく、一本気なところのある少年が、持ち前の好奇心とちょっとヌケた性格が仇となり、突然異世界への『道』に引っ張り込まれた。これが、個人的にとても大切なポイントだと思っております。

よって、本当に武成王の血を引いているのかについても、ご想像にお任せしますということに留めさせていただきました。だったらいいよね、という。だからこそ、ここまで太公望には一切断言はさせませんでした。あくまで『可能性』『目覚めていない』という言葉に留めて。才人に戦闘センスがあるのは間違いのない事実ですので。魔法は（原作の展開次第ですが）使えないけど、やる気次第で、普通の人間でも戦えるんだ！　という象徴、それが才人。まあ、ガンダールヴもってる時点で普通ではありませんが！

そして、制服。才人、というよりも自分のヲタク……というか制服趣味が全開になっている気がします。なんというかスマン才人ｗ

でも、君。セーラー服とブレザーとスチュワーデスのコスはしっかり原作内で見せてくれたよネ！　と、いうわけで水精霊団の制服は作られるのでした！　首に絹のスカーフ（実はオシャレじゃなくて止血用なんですけどねアレ）というのがさりげなくポイントです。

あと伏羲の服！　本当にどうなってんだアレは！

さらに、元祖シスコ……いや某熱い人のお話をからめた、またしても崑崙がらみの超絶捏造話が炸裂しております。ちなみに太公望がいっきにここまで情報を流しているのは、

「1回だけしか起こらないから奇跡。でも、それが2回あれば偶然になり、3回起きたら当然と化す。何度も繰り返されたら常識になる」

と、いう個人的な思いと、大量に情報を流し込まれることで脳内にオーバーフローを発生させ、無理矢理相手を納得させるという、ちょっとよろしくない方面の手法を利用しているが故です。だから、わざわざ草原から場所を変え『夢の世界』という、自分のフィールドへ彼らを引っ張り込み、立て続けに不思議体験をさせているわけですね。なんという魔王。

次回は、ゼロ戦フライト……そして、制服づくりなお話です！
お迎えは、そのあとです！　台風くるぞー！！

２０１１／０６／０２　２３：００　制服の中に、とてもたいせつなナース服と巫女装束が入っていなかったので追加。
２０１１／０６／０３　０：３０　原油関係の記述を修正
２０１１／０９／１６　２１：３０　経過年数関連の記述を修正

第６２話　空を舞う竜神と２つの道筋

「それにしても狭いなあ」

ゼロ戦のコックピットを改めて見回しながら、才人はぼやいた。本当に一人乗り専用だ。これ、ルイズやシエスタはともかく、コルベール先生が一緒に乗るには相当キツイんじゃないか？

せめて、座席部分をもう少し後ろへ下げられないものか。そんな悩みを抱えていたところへ、スタスタと足音を響かせて現れた者がいた。ルイズ、そして太公望とタバサの３人であった。

「それで、どうなのよ？　明日は、ちゃんと飛べそう？」

ルイズの問いに、才人は顎に手をやりながら答える。

「ああ、計器の類には問題ないし、エンジンの調子も良好！　ちゃんと飛べるのは間違いないんだけど……」

そう言って、彼はコックピットを指差した。

「あたしとサイトなら乗れそうだけど」「……狭い」「正直これは苦しいのう」

口々に感想を述べる彼らに、だろう？　と、これまた困り顔でぼやく才人。そう……この『ゼロ戦』は、もともと一人用に設計されたものだ。無理矢理詰め込めば、なんとか２人が乗れなくはない……とは思うのだが。可能であれば、もうちょっと広さを確保したいところであった。

「その座席部分の後ろには、何が取り付けられておるのだ？　もしも不要なものであるのなら、それを取り外して、後ろに下げることができそうなのだが」

「あッ、そうか！　それは考えてなかったな！　たぶん、ハルケギニアでは不要なものだと思うんだけど、念のため調べておくか」

太公望の提案に、才人は＜ガンダールヴ＞のルーンを起動させた。そう……スペック確認のためにチェックしたときに、これは、この世界では残念ながら使えない。そう判断しつつも、取り外してしまうということまでは考えていなかったのだ。

「うん……機能自体は生きてるけど、ここじゃ使いようがない。外すか！」

ギーシュに頼んで、取り外しを手伝ってもらおう。そう言って、ゼロ戦の側から離れようとした才人を、太公望が引き留めた。

「ちょっと待て才人。その前に、念のため確認しておきたいのだが」

「ん、何？」

「機能は生きているが、不要とは……いったいどういうことだ？」

ああ、そうか。こいつ……いや、この人物。太公望はこういう慎重な人間だった。正確にいうと、使いたくても使えない物なんだけど、説明だけはしておくか。宇宙船に乗っていたくらいなんだし、機能の説明はしなくてもわかるだろう。そう考えた才人は、たった

一言だけ『それ』について語った。

「ああ、無線機だよ。基地とかと通信するための機材だけど、ここじゃ使えないし」

だから、外そうと思うんだ。そう笑って答えた才人を、太公望は必死の形相で引き留めた。

「これ待て才人！　それはとんでもなく大切な機材ではないか！　それを外すだなんて、とんでもない！！」

「え、でも、通信相手なんていないんだから……」

お前だって、そのくらいわかるだろ？　そう返した才人に、太公望は黙って自分の懐へ手を突っ込み、そこからとある＜アイテム＞を取り出すことで応えた。

……その『道具』は、才人にとって非常になじみ深い形をしていた。片手で持つには少々大きいサイズのそれは……いわゆる『コードレス電話機』の子機そのまんまであった。

「……ヲイ。それって、まさかとは思うけど、携帯電話だったりしないよな？」

「いや、これは広域通信機だ。前に話した＜崑崙＞の＜軍務・政治部門幹部＞及び＜地上世界＞の国王に配布される。あの広大な中国大陸で軍事行動をするにあたり、ホットラインを繋げておかねば、不便極まりないであろう？」

――これは本当である。太公望のいた歴史では、実際に王や諸侯、

そして太公望を含む＜崑崙＞の仙人たちが、軍勢が合流する前まで、これを使って互いの状況を報告しあっていたのだ。

ちなみに才人の祖国風に言うと、なつかしの黒電話受話器タイプ――太公望や周の若き王が持っているのがコレだ――から、設置式大型電話機風、小型折りたたみ式メタリックコートガラケー他諸々という、実に幅広いデザインが採用されており、それらは所持する者の趣味が大いに反映されたものとなっていた……それはさておき。

「てか、携帯電話で意味通じるのかよ！　おまけに、古代中国にホットラインとか！　もうだめだッ、俺の中の常識リミットゲージが限界に達しているッ！！」

地面に膝をついて頭を抱え、上半身を仰け反らせながら、うがあああっ！　と、叫ぶ才人と。あの『部屋』を見ているくせに、今更この程度で何をそんなに驚いているのだ？　という態度で彼を見つめる太公望。そして、ふたりの間に、何が起こっているのかさっぱりわからないルイズとタバサ。

「気持ちはわからんでもないが、これが現実というものなのだ……受け入れろ才人！　周波数のチューニング諸々の設定はこの通信機側から行えると思うので、例外がない限り、特にそっちで何かをする必要はないぞ。あ、ただし定期的に変更はしたほうがいいかもしれぬのう。訓練も兼ねて」

――王天君に拾われる可能性がゼロではない以上、気をつけておいたほうがいい。これは本来＜崑崙＞専用ラインだが、万が一ということもある。そこまで細かく才人に話したりはしないが、さすがに抜かりはない太公望であった。

と、そんなことを言いながら、雑巾などの掃除用具が雑多に置かれていた小テーブルの上を簡単に片付けた太公望は、早速その上に『通信機』を横向きに置くと、そこに取り付けられていたスイッチをプチプチと操作し始めた……すると。『子機』の上に、小さな鏡のようなそれが、３枚現れた。

その瞬間、ぎゅむぬんっ！　と、飛び上がって側に駆け寄る才人。常識及び精神のリミットブレイクよりも、持ち前の好奇心のほうが遙かに強かったらしい。

「うおっ！　タッチパネル……じゃないよな、立体映像式のビジュアルフォンか？」

ＳＦ系のアニメやゲームではおなじみのそれを、実際に見ることができた才人の顔が、きらきらと輝いた。

「その通りだ。本来ならば、相手の顔を見ながら会話可能なのだが……あの飛行機械に搭載されている機材には、残念ながらモニターらしきものはない上に、わしの知識ではレーダー機能……たぶんあれにもあると思うのだが、そこへのリンクまでは無理なので、せいぜい通信状況のモニタリングや拡声機能しか利用できぬがのう」

タバサには、既に見覚えのある『窓』。以前、母を診察してもらったときに使われていたそれとは形状がちょっと違うが、雰囲気その他はほとんど同じだ。初見のルイズも、どうやらサイトと太公望の世界にある＜マジック・アイテム＞らしいと当たりを付け、もっとよく見てみようと近付いてきた。

「すっげえな＜崑崙＞！　ところで、これも例の『呪い』がかかってんのか？」

「うむ。これはわし専用にと配布されたものだからのう。タバサよ……ちと試しに、この『窓』に触れてみてくれぬか？　おそらく、おぬしならばわしとの＜感覚共有＞で問題なく触れると思うが、念のため、指先で軽く突く程度にとどめるのだ」

「……わかった」

言われた通りにしてみたタバサだが、やはり異変が起きたりはしない。一見、何かの幻のようにも見える『窓』に、触れることができる。それは何だか不思議な感覚だった。その様子を見た太公望は、よしよし……と頷いている。自分以外にこれを『取れる』者がいるのは、実際問題助かるのだ。

「ここに書かれているのは、あなたの国の文字？」

タバサの質問に頷く太公望。見たことのない字だわ……と、いうルイズと、あ！　確かに日本語とちょっと共通点あるかも……あと数字とかもかなり近い！　と、感動している才人。

「才人、確認するが、ここに映し出されている文字が読めるか？」

「ええっと……２５６……えむ……？　そのあとの文字は……しん……なみ……？」

「よし、やはり近い文字を使っておるな！　少なくとも、数字だけはほぼ同じらしい。それ以外も、読みについてはだいたい合っておる。才人よ、今度余裕があるときにでも、互いの言語を軽くすりあわせておかぬか？　それと、できれば『ハルケギニアの言語』を覚えておいてもらいたいのだが」

その太公望の言葉に、才人は驚いた。何故ならば、ここに至ってようやく自分が『異世界の言葉』を違和感なく耳にしていたことに気が付いたからだ。文字が違う時点で、それに気が付いてしかるべき問題だったにも関わらず……だ。みんな、日本語を喋っている。彼は、今に至るまでそう思い込んでいたのだ。

「ひょっとして師叔……今『ハルケギニア語』で喋ってるのか？」

「そうだ。いや正確にいうと『ガリア語』だな。時折実験のために『古代中国語』や『天界語』それに『滅びた世界に伝わる言語』も併せて使っているが＜サモン・サーヴァント＞の翻訳機能によって、全て正しく意思疎通ができておる。いやはや、実際あれはとんでもない＜魔法＞だよ」

そういって、やれやれ……といった風情で首を振る太公望。

「できれば『エルフ語』や『ロバ・アル・カリイエ語』その他の比較用資料も入手したいところなのだが、そっち方面の本は、残念ながら『フェニアのライブラリー』にすら全く存在しないのだ。＜先住魔法＞関連ならばそれなりに置いてあったのだが……ひょっとすると、ガリア語が共通語（コモンワード）なのやもしれぬ。まだ確定ではないが」

それを聞いて、うわあ……という顔をしている才人と、翻訳機能ってどういうこと!?　と、混乱しているルイズに答えたのは、タバサだった。

「タイコーボーは、召喚翌日に『ハルケギニア』と『シュウ』の言語体系が異なっていることに気付き、同時に＜サモン・サーヴァント＞に翻訳機能がついていることを証明している。だから、わた

したちは放課後ほとんどの時間を図書室で過ごしていた。今では、ガリア語だけではなく、コモンルーン、古代ルーン、地方訛りに至るまで網羅している。わたしもすごく勉強になった」

……そう。実は、太公望の勉強につきあっていたタバサも、各種言語の解読能力が極端に上昇していた。これのおかげで＜魔法＞への理解度がさらに深まったといっても過言ではない。なにしろ＜魔法＞は『力ある言葉』ルーンによって紡がれるものだからだ。

「すごいわね……あたしも、古代ルーン語なら習得してるけど、ふたりほどじゃないわ」

「フッフッフ……これは例の『複数思考』のおかげだの。ちなみに、その訓練のためにわざと別言語の、しかも全く内容が異なる本を同時に読んで書き写す、という方法がある。実は、タバサに課そうとしていた次の訓練課題がそれなのだ」

『複数思考』。これは、例の『魔法同時展開』に必須といえる技能である。さらに、先日の冒険で太公望からもらった『如意羽衣』を使う上でも重要だ。ついに、それを教えてもらえる！　タバサは、思わずぎゅっと両手拳を握り締めた。

「俺……勉強は嫌いだけど、日本語とハルケ……じゃなくてガリア語の、簡単な単語表とか作っておいたほうがよさそうだな。挨拶とか、ふだんよく使うようなやつだけでも。ただ……ガリア語って、日本語よりも英語に近い感じだから、比較がちょっと大変そうだな。そういう意味では、太公望師叔のところの文字のほうが、割と早く覚えられるかも」

首をかしげ、モニタの文字を見ながら答えた才人に、太公望が確

認する。

「それは『文字そのもの』に意味がある＜天界＞の言葉と『複数の文字を組み合わせて意味を形作る』＜ハルケギニア言語＞の違い……という認識で間違いないか？」

「そそ！　それそれ。みんなのコードネームに使った『コメット』『スノウ』『ハーミット』は、全部その別言語から取ってきたんだ。俺の時代では、国ごとにほとんど別の言葉とか文字が使われてるから、覚えるのがマジで大変なんだよ……英語は、学校で習うからちょっとした会話くらいならできる。ちなみに古代の中国語は駄目だけど、近い文字使ってる＜天界＞のルーンなら、少しは読めると思うぜ」

「それはありがたい。ならば、隙を見てお互いに『日常会話』用の単語表を作ってみるか。そうすれば、のちのち助かるであろう？」

――のちのち助かる……それはつまり。

「いつか、みんなで『地球』に行くときに……だよな？」

ニヤッと笑った才人に、同じく笑顔で頷いた太公望。それを聞いたルイズとタバサの顔は輝いた。そうか、もしも『翻訳機能』が使えなくても、彼らの言葉を覚えておけば……そこに行った時に、不自由がないではないか。しかも『複数思考』の訓練にもなる。いいことずくめだ！

こんなふうに何かを勉強しようとすることが楽しいだなんて、今までであっただろうか？　目指すものがあるだけで、気持ちって変わるんだな。才人は、なんだか一歩だけ大人に近づけたような気持ち

になった。

いっぽう、そんな会話をしつつも、太公望のほうの作業は着々と進んでいた。元同僚にして＜崑崙最高幹部・開発部門長＞たる技術畑の『天才』が作り出したこの『通信機』。常に懐に入れてあったのだが、何度か試しに使っただけで仕舞いっぱなしになっていた。そう……彼は、ハルケギニアにきてから間もなく、念のために回線状況を確かめていたのだ――ひょっとすると、逆探知される可能性があったから。

とはいえ、万が一を考えると、捨てるわけにはいかない。よって、常に持ち歩いていたわけだが……チェックの結果は常にオフライン。今現在も、それは変わらない。半径最大５００リーグはカバーするこの携帯通信機が機能しないということは、つまり、その近辺には接続先が一切存在しないということだ。

「まさか、こんなところでこれの出番がくるとは思わなかったぞ。簡単なセットアップは済んだから、実際に『飛行機』を起動させた後、そっちのスイッチさえオンにしてもらえれば、すぐにでも交信可能だ」

「俺だって、まさか＜魔法使い＞と無線で会話できるなんて思ってなかったよ。って、無線通信!?　そっか、そうだよ！　あのさ師叔。頼みがあるんだけど……」

○●○●○●○●

――そして翌昼、トリステイン魔法学院の外にある広い平地にて。

そこには、水精霊団全員が勢揃いしている。そして、一部残っていた教員――学院長のオスマンだけではなく『疾風』のギトーやその他数名と、使用人の平民たち……マルトーをはじめとする厨房の者たちが集っていた。教員たちはともかく、彼らがここへ来ている理由、それは。＜魔法＞を一切使わずに空を飛ぶことができるという『道具』を……彼らお気に入りの才人が持ち込んだという噂を聞きつけたからだ。

「ミスタ・タイコーボー。あれは、もしや＜風＞の流れを利用して飛ぶのではないかね？」

「仰る通りです、ギトー先生。ただし！　＜固定化＞を除く一切の＜魔法＞が使われていない、東方の非ッ常に！　貴重な宝物『竜の羽衣』です。ですが、今日は特別に！　皆様＜ディテクト・マジック＞をお試しください！」

広場に設置した管制用の席――ギーシュのお手製テーブルに着いた太公望が答える。その言葉に、一斉に＜ディテクト・マジック＞を試すメイジたち。なるほど、確かに彼の言うとおりだ。＜魔法＞を使わずに空を飛ぶなど、正直半信半疑だが、技術が進んでいるという噂のロバ・アル・カリイエ由来の『秘宝』ならば、もしかするとそれが可能なのかもしれない。

「ついでにいうと、今わしの目の前に置かれているコレも、そのひとつ。あの『空飛ぶ秘宝』と同様、東方の『通話の秘宝』と呼ばれるもので、かの秘宝に乗る人間と会話が可能となる『道具』です。こちらにも＜魔法＞はかけられておりませぬが、唯一泥棒対策の『呪い』が込められておりますので、直接触れたりはしないよう、重ねて申し上げておきます」

また適当な名前で通信機を例える太公望。実際、これに＜魔法＞はかかっていない。ただ、今後を考えると、オスマンあたりに＜固定化＞をかけてもらったほうがよいであろう。そんなことを考えながら、太公望は調整作業に追われていた。

いっぽう、才人と……体調万全、心は既に空の上！　な、コルベールは、ゼロ戦の最終チェックを終え、いよいよコックピットに乗り込もうとしていた。

「それじゃ、行きましょう先生！」

シエスタの父から譲り受けた飛行帽にゴーグルと、絹のマフラー。そしてポケットには日本海軍少尉の階級章を入れ、手には『俺っちなら操作の補助ができるから連れてけ！』と、五月蠅いデルフリンガーを持った才人が、既に夢見心地になっていたコルベールに声をかけた。

そして彼らは、６０年前にこの世界にやってきた『竜の羽衣』に乗り込んだ。やっぱり狭いし、キツイ。だが、なんとか乗り込むことができた。あとは、正しくこれを操作するだけだ。そう＜ガンダールヴ＞のルーンに向かって念じた才人の頭の中に、再び詳細な操作方法が流れ込んでくる。

「コルベール先生、それじゃプロペラを＜魔法＞で軽く回してください！」

「任せてくれたまえ！」

才人は、各部の操作に取りかかった。ルーンの＜力＞で、流れるようにそれらの作業が進んでいく。さらに、本人（剣？）のいうと

おりデルフリンガーの説明も堂に入っていた。彼もまた『伝説』を担う者なのだ。

と――ピ……ガガッ……という才人にとっては、映画やゲームなどでおなじみとなっている音と共に、無線機から声が飛んできた。

『あー、メーデー、メーデー。こちら太公望。各機応答せよ』

「こちら才人！　てか、なんで救難信号なんだよ！！」

『おぬしがよく言う、お約束というやつだよ』

「縁起でもねェからやめてくれよな！　ついでに言うけど、これ一機しかねーよ！！」

『ウハハハハハ、まあこれで通信テストは終了だの。次の連絡を待て』

ガ……ピッ。という音と共に途切れた太公望の声に、思わず才人は苦笑する。いっぽう、準備中にこの『通信機』の話を聞いていたコルベールの胸は、さらに高鳴った。＜魔法＞を一切使っていない、遠距離に声を届ける『道具』が見せてくれた、もとい聞かせてくれた奇跡に。コックピットの窮屈さなど、もはや彼の頭の中から完全に抜け落ちていた。

――そして。いよいよ発進準備が整った。コルベールの＜魔法＞によって、ごろごろと重たそうに回っているプロペラを見ていた才人は、しっかりとタイミングを見計らい、右手でエンジンの点火スイッチを押し、左手で握ったスロットル・レバーを心持ち倒して開いてやる。

バス、バス……という燻ったような音が聞こえた後、プラグの点火でついにエンジンが始動した。勢いよくプロペラが回り始める。車輪のブレーキをかけていなかったら、走り出してしまうところだ。

と、そこへ待っていた通信が入る。そう……才人が頼んでいたアレである。

『こちら、水精霊団空軍特殊航空部隊（オンディーヌ・エア・フォース）ＯＡＦ所属・トリステイン魔法学院上空特別飛行空域管制官＜ハーミット＞。ドッグ・ゼロへ通達。周辺空域及び滑走路に異常なし。初フライトにはよい空だ。各種計器類及び装備を確認の上、離陸準備を開始せよ』

才人は、念のため再びルーンで各種計器や装備を確認した。全て正常だ！

「ドッグ・ゼロ、パイロット＜ソード＞了解！　全計器及び装備確認。こちらの視界、及び各種計器にも異常なし！」

『了解した。ドッグ・ゼロ、離陸を許可する』

「ソード、管制官の指示に従い、離陸体勢に入る」

そして、才人はブレーキをリリースした。ごろごろという――おそらく車輪が地面の上を転がるそれだ――音を立て、ゼロ戦が動き出す。それを見て、驚きの声をあげる観衆たち。だが、その声はエンジン音にかき消され、コックピットまでは届かない。もっとも、それがなくとも才人とコルベールの耳に、それらは入ってこなかったであろう。何故なら才人は、離陸点に向かって移動させる操作に集中していたし、コルベールは、各計器や移動する景色に目を奪わ

れていたからだ。

離陸ポイント、到達。才人は、ゴーグルをしっかりとつけ直した。ブレーキを踏みしめる。カウルフラップ全開！　ピッチレバーを離陸上昇に合わせた。そしてブレーキを弱め、スロットル・レバーを開くと、まるで弾かれたように、ゼロ戦が勢いよく加速を開始した。

操縦桿を軽く前方に押してやると、尾輪が地面から離れた。ゼロ戦は平野を滑走する。

「相棒（バディ）！　今だ！！」

デルフリンガーの声で、才人はいっきに操縦桿を引きながら叫んだ。

「ドッグ・ゼロ、テイクオフ！！」

その声と同時に、ブワッとゼロ戦が浮き上がり……そのまま、どんどん上昇を続ける。

『ドッグ・ゼロ、高度制限を解除……グッドラック！』

無線機から飛んできたハーミット管制官こと太公望の声で、機内がわっと湧いた。

「飛びました！　飛びましたぞ！！」

「うおー！　おもれえな！！」

コルベールとデルフリンガーが、興奮極まったといった風情で騒

ぐ。

「そりゃあ、飛びますよ！　飛ぶように出来ているんですから」

内心の安堵と、興奮を隠して才人は答えた。本物のゼロ戦を操縦できた。しかも、空軍（もちろんでっちあげのイメージで名付けたものだが）管制官のコールつきで、である。ミリタリーファン、特に空軍系が好きな人間にとっては、ハッキリ言って感涙ものだ。

そして、こういうノリに付き合ってくれる――おまけに、一切噛まずにあれほどの台詞をいっきに発してくれた太公望に、心の底から。もう本気で感謝しまくった才人であった。さすが総軍司令官、半端ないぜ……と。

そして、そんな彼の気分を更にノセてくれる通信が入ってくる。

『＜ハーミット＞より通達。今回の作戦目標は、技術官ミスタ・コルベールを乗せた上での、高度５０００メイルまで達する試験フライトである。ドッグ・ゼロ、作戦を開始せよ』

「ソード、作戦内容了解！　先生、見てくださいよ……この『羽衣』の凄さを！」

――『ドッグ・ゼロ』と名付けられた『ゼロ戦』は、その濃緑の翼を陽光に煌めかせ、風を切り裂いて、異世界の空を駆け上った。建物や周囲に悪影響がない高度で、何度か学院の周りを旋回するように飛んだそれは――いっきに雲の上を目指して飛んでいった。

○●○●○●○●

――いったい、これをなんといって表現したらいいのだろう。

あえて言うなれば……そう＜フライ＞とは全然違う。身体の重さはしっかりとその場に残っているのに、何か壁のようなものに身体を押さえつけられつつも、力強い何かによって高く持ち上げられていくような不思議な浮遊感。心理的な意味ではない、もちろん肉体的な感覚だ。

そして、眼下に広がる光景。どんどん小さくなっていく学院。それは、激しく流れる河のように遠ざかっていったと思ったら、再び近付いてきた。この＜機械＞を操縦しているサイト君曰く、これは『ユウランヒコウ』というものらしい。私に見せるため、わざと学院の周りを回ってくれているのだそうだ。なんと素晴らしい心遣いだろうか！

狭い室内には、ブーン……という、なじみのない音が響き渡っている。これは、例の『エンジン』が生み出し、前方の『ぷろぺら』が出す音なのだそうだ。以前作った『愉快なヘビくん』のそれよりも激しい連続爆発を起こすことによって、これを実現しているそうだ。

それに、サイト君が時折触っている……小さな何か。この複雑でありながら、美しく滑らかな動作に、私はすっかり魅入られてしまった。時折針が揺れたりしているのは、なんとこの機械の調子を教えてくれているのだと説明された。このような精密な部品を作り出すことなど、今のトリステイン……いや私では絶対に不可能だ！

そして、本当に驚いたのはその後だ！　なんとこの＜飛行機械＞は、雲の上まであっという間に到達してしまった！　『フウボウ』

というらしいガラス窓の外を流れゆく雲の速さといったら！　おまけに、これでまだ全力を出していないらしい。あくまで様子見でこの速度を……しかも＜魔法＞を一切使うことなく実現するとは！

しかも、これは彼の国で６０年以上前に作られたという。以前、彼らの同盟国には、現時点で『魔法なしで月まで到達できる船』があるという話を聞いている。つまり……今は、もっと性能の高いものが存在している可能性があるということ。それを聞いたら、サイト君は、

「その通りです！　音より速い＜飛行機＞だってあるんですよ」

そう答えてくれた。音より速いとはどういうことだろう？　その質問にも、彼は親切に答えてくれた。以前、ミスタ・タイコーボーが話していた『遠くで雷が落ちた後、光るよりも雷鳴が遅れて聞こえてくる理由』を説明してくれることによってだ。それを聞いたとき、私は文字通り雷鳴にうたれたかの如き衝撃を受けた。

光や音に、伝わるための速度があり、それぞれの速さが異なっているなど、ハルケギニアにはなかった概念だ。いや……疑問に思ったことはあったが、そこまで深く考えたことはなかった。これが『シゼンカガク』という学問なのか！

確かに、それらを学んだ上で＜魔法＞を使えば、より効果が高くなるだろう。事実、私が使う＜炎＞がそうだ。周囲の空気を燃やし尽くす、今は封印している忌むべき魔法。だが、あれも実は『シゼンカガク』を学ぶ上での『入り口』だったのだ。

『なぜ』『どうして』『それ』が『起こる』のか。全てに『理由』があるという。以前それを教えてくれた青年の声が、既に１０リー

グ以上離れた学院にいるはずの彼の声が『ムセンキ』というものを通じて聞こえてくる。サイト君も、ミスタ・タイコーボーも、まるでこれが当たり前であるように受け答えをしている。つまり、両者共にこの『技術』が身近にある国に住んでいるということだ！

「なあ、サイト君」

「どうかしましたか？　先生」

私は決めた。絶対、いつかそれを実現してみせると。

「いつか、私は君やミスタ・タイコーボーの出身地に行ってみたい。そして、見てみたい！　こんな素晴らしい技術がある国を、自分の目で確かめたいんだ」

その私の声に、彼は力強く頷いてくれた。

「はい、俺も先生に是非一緒に来てもらいたいです！　みんなで行きましょう。もちろんデルフも！　ルイズ達には、もう約束してるんです。こっちに来たら、いろいろな場所を案内するって」

彼曰く、私が好みそうな『機械』を、実際に手に取って眺めることができる店や展示場所などがたくさんあるらしい。なんと画期的な！　いや、そのような場所があるからこそ、こんなことを実現できる技術が生まれるのだ！

「これは……夢などではないのだね。いやはや、私は、もうこのままずっとここに居たいくらいだよ」

「いや、さすがにそれはできませんよ先生。燃料と、順番待ちが

……って、夢！？　そうだ、そうだよ……もしかすると……うん、ちょっと確かめてみます」

……いきなり、彼は何を言い出すのだろう。確かめる、とは？私は、思わず窓から視線をサイト君に移した。

「こちらドッグ・ゼロ。ハーミット、応答せよ」

『こちらハーミット。何か問題でも発生したか？』

「いや。お客様は大変満足してくださっている。そこでドッグ・ゼロから確認だ。彼にそちらの『夢』を見せることはできるか？」

そちらの夢？　彼は、いったい何を言っているのだろうか。少しの間があった後、ハーミット……どうやら、彼らが『暗号名』として使っている名前らしい、ミスタ・タイコーボーからの返答があった。

『もともとそのつもりだった。あとで、ご招待する。当然のことだが……』

「ああ、わかってる。地上へ戻ったら、本件について改めて話し合おう」

その声を最後に、ミスタ・タイコーボーの声は途切れた。そして、サイト君が言ったのだ。

「先生、近いうちに……太公望師叔がいいものを見せてくれるそうですよ！」

――私が、そのサイト君の言葉の意味を理解したのは……わずか数日後だった。

○●○●○●○●

――それは、大きな音と一緒に、空から舞い降りてきた。

タルブ村の片隅にある生家の庭で、幼い兄弟たちを遊ばせていた黒髪の少女・シエスタは、上空から響いてきた謎の音に、思わず天を振り仰いだ。なんだろう？　ずっとずっと遠くから聞こえてくる、あれは。雷……？　ううん、違う。あれは、そんな音じゃない。

それは、最初は小さな影だった。しかし、だんだんと大きくなってきたものの姿を目の片隅で捉えたシエスタは、息を飲んだ。そして、自宅に駆け込んだ。

「お父さん！　お母さん！　外を見て！！」

彼女の、せっぱ詰まったような……それでいて、嬉しげな声を聞いたふたりは、庭へと出て行った。同時に、空から響いてくる音に気が付いた村人たちが、なんだなんだと家の外へと飛び出してくる。

そして、彼らは見た。空を切り裂くように飛んでくるそれを。雄々しく宙を舞う、翼を広げた、力強き『大空のサムライ』にして『タルブの守護神』の勇姿を。

「竜の羽衣だ……！」

村人の誰かが発した声に、その場に居た全員が跪いた。６０年前、

遙か東から舞い降りてきたという伝説の羽衣。つい数日前まで、村外れの神殿に安置されていたそれ。多くの者たちが、偽物だと信じ切っていたあのおかしな小舟。だが……今、それは確かに空を飛んでいた。猛々しい叫びを上げながら、村の上空を……まるで、自分がお前たちを守護してやるといわんばかりに舞い踊っている。

そんな中、シエスタの父は思い出した。あれを渡した少年の言葉を。

『あの草原になら、竜の羽衣をチャクリクさせることができます』

「みんな！　あれは草原に降りてくる。危ないから、安全が確認できるまで近寄るな！」

その声に、跳ね上がるようにして立ち上がった村人たちは、我先にと草原近くに向かって走り出していった。もちろん彼らは、言われた通り……草原に立ち入るような真似はしなかった。そして、待った。タルブ村を守護する『竜神』がそこへ舞い降りてくるのを。

そして、その時は来た。うなり声を小さくしながら降りてきたそれは……草原の上を、ほんの少し跳ねるような格好で走ったかと思うと、ゆっくりと足を止めた。その中から出てきたのは……シエスタの曾祖父の形見を身につけた黒髪の少年と……彼の主人である、桃色の髪をした少女であった。

「すごい、すごいですサイトさん！！」

シエスタは、興奮していた。確かに彼と約束していた。いつか、この『竜の羽衣』に乗せてほしいと。だが、まさかそれが、こんな

に早く実現するなど……いや、守られるなどとは、本気で考えてはいなかったから。

才人を信じていなかったというわけではない。ただ、この『羽衣』はずっと偽物だ、空を飛べるわけがない。幼い頃から、そのように両親や身内から教えられ、育ってきたシエスタが、そう思い込んでしまうのは……正直仕方のないことだと言わざるをえない。

「どうだ？　シエスタ。お前のひいおじいちゃんが持ってきた羽衣は！」

「すごい、すごいです、こんなにすごいなんて思ってませんでした！！」

先程から、ただひたすらに「すごい」しか言わないシエスタの言葉とは全く別の意味で、才人はとある凄さを実感……もとい『体感』していた。

シエスタって、痩せてるように見えたんだけど……実は、脱いだらすごい？　狭いコックピットの中。背中に押しつけられる『それ』に抵抗すべく、才人は必死に戦っていた。比べてしまっては大変申し訳ないのだが、わが愛しのご主人さまが持つあれとは比較にならない。彼我戦力差……計測不能ッ！！

……正直なところ。健康的な高校生男子として、これはごくごく当たり前の反応である。どうか、生暖かい心と目でもって、彼の戦いを見守ってあげて欲しい。

「もうちょっと余裕があるから、シエスタのお父さんにも乗ってもらおうと思ってるんだ。シエスタの兄弟は、まだちっちゃいから

危なくてダメだ。もっと大きくなってからだな！」

うん、シエスタは本当に大きく育ったんだネ。自分の発した言葉によって被弾。別方面の――おもに自前のスロットル・レバーに大ダメージを受けてしまった才人。そして、しばし空中での戦闘行動は続き……再び草原へと着陸した頃。彼のライフゲージは、既にゼロまで落ちる寸前となっていた。

――その後、シエスタの父を乗せてしばし遊覧飛行を行った『竜の羽衣』は、夕日を背に学院へ向けて飛び立った。その後ろ姿を、シエスタを含む村人たちは、ある者は手を振り、またある者は大地に膝を付けて祈りながら見送った――

○●○●○●○●

――竜の羽衣ことゼロ戦『ドッグ・ゼロ』が学院へと帰還した、ちょうどその頃。

自領内にある屋敷で、ひとりの男が……ふたつの『道』を前に、苦悩していた。

彼の名はジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。当年２６歳。貴族としての身分は子爵。若くしてトリステイン王国衛士隊のひとつ『グリフォン隊』の隊長まで、その実力でもって上り詰め、今では宰相を務めるマザリーニ枢機卿の信頼を得るまでに出世した、美髭の持ち主。

だが、他者が羨やむほどの地位を得た彼は、現状に満足していなかった。何故ならば、彼が持つ真の願いを叶えるためには、もっと

強い＜力＞が必要だったからだ。『閃光』の二つ名を持ち『スクウェア』メイジまでなっている彼には、それでも＜力＞が足りなかった。それほどに……達成するのが難しい願い……いや、悲願といっても過言でないそれを、彼は胸の内に抱えていた。

そんな彼の元に、1通の手紙が届けられた。それは「ハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて結びついた有能な貴族の連盟」そう『レコン・キスタ』と呼ばれる者達からの誘い。そこには、数多くの有力貴族が所属しているという噂がある。彼は、すぐさまそれへ飛びつこうとした。

しかし……加入の返事をする直前に届けられた、もう1通の手紙が、彼に衝撃を与えた。それは……かつて親同士がいつのまにか、酒の席で決めてしまった『婚約者』が＜風＞の系統魔法に目覚めたという報せと。それを祝い、かつ娘を目覚めさせた東方のメイジを招いて行う祝宴への招待状であった。

「そんな馬鹿な！　あの小さなルイズは……」

＜風系統＞であるはずがない。そう……彼女の＜魔法＞について、かつてワルドはわざわざ王立図書館に通い詰めて調査したのだ。失敗によって原因不明の＜爆発＞を起こす。通常、魔法が失敗したときに、そのような現象が発生することなどありえない。だから調べた。幼く、可愛かった妹のような存在の＜力＞について。そして、とある結論に達していた。それは『春の召喚の儀』で確定できるはず。

何か事情があるのか、学院内の情報を得ることはできなかったが……彼女が呼び出した＜使い魔＞を見れば、きっとそれがわかる。もしもその推測が当たっていたとき、彼は『ふたり』を連れて『レ

コン・キスタ』へ走るつもりであった。もちろん……彼らを手土産にして。

「僕の推測は間違っていたというのか……いや、待て。東方の、メイジ！？」

そうだ、道を選ぶ前に、まずは見極めよう――自分がどちらを選ぶべきか。

そして、ワルドはしたためた。祝宴に喜んで出席する旨を答えるための、手紙を――。

第６２話　空を舞う竜神と２つの道筋（後書き）

あれ、制服談義の続きのはずがフライトと閃光フラグによって阻止された！　ふしぎ！

通信関係その他、またしても趣味全開で申し訳ございません。ＢＧＭは相変わらずエスコンだ！　ちなみに、太公望の例の持ち物について、ここまで伏せていて申し訳ございませんでした。これをバラしてしまうと、絶対展開バレになると思いましたので……本当にすみません！

機体名が『ドッグ・ゼロ』なのは……地獄の番犬の影響ももちろんありますが、才人の『犬』から来ています。ほんとですって！　こじつけじゃないんですってば！　ＯＡＦとか悪ノリしすぎなのは認めますけど！！

コルベール先生談・ゼロ戦のフライト感覚は、昔海外旅行に行った際に乗ったセスナ機の遊覧飛行と、かなり昔に、某駐屯地で開催されたイベントで試乗したヘリコプターの感覚からきています。だって、ゼロ戦乗ったことなんて当然ないんだもの！

プラス、ゼロ戦があんなに何度も整備も補給もなしで離着陸、飛行できるわけがない。その他ツッコミどころ満載かとは存じますが、どうかここはご勘弁を……！　そっち方面の知識不足であるのは実感致しておりますので。

なお、大変申し訳ございませんが、感想欄にて今後の展開予想をされるのは、どうかご遠慮願います。質問という形でも、ちょっと受け付けにくいです。基本的に「ナイショです」としか返せない。

または嘘をつくのは、こちらとしても本当に心苦しいので……どうか、ご理解いただければ嬉しいです。普通の感想や、過去の疑問点などのご指摘については、全く問題ございませんので、念のため……。

２０１１／０６／０５　誤字脱字修正、ＷＡＦ→ＯＡＦに修正、本文加筆修正

２０１１／０６／２２　言語関連の記述を修正（一部ガリア語に調整）

第６３話　輪の内に集いし者たち

――その夜。ルイズは夢を見ていた。幼い頃の、小さな思い出の夢を。

「ルイズ、ルイズ。どこへ行ったのですか！？　お話はまだ終わっていませんよ！」

ラ・ヴァリエール家の屋敷。その広大な庭にある迷宮のような植え込みの中を、小さなルイズはただひたすら逃げ回っていた。いくらやっても＜魔法＞がうまくいかず、母に叱られることに……これ以上、耐えきれなかったのだ。

いちばん上の姉は、とても出来が良かった。もうひとりの姉は、病弱故に多用こそできないが、それでも＜魔法＞が全く使えないなどということはなかった。なのに、どうしてあたしには……みんなにできることが、普通にやれないんだろう？

＜メイジ＞そして『貴族』としての根深い悩みが故に、酷く傷つき……ついには植え込みの中で蹲ってしまったルイズの側に、誰かが近寄ってきた。おそらく使用人たちだろう、母に頼まれて、自分を探しにきたに違いない。そう考えた彼女は、即座にその場で息を潜めた。

彼らは、ガサゴソと植え込みの中を探っている。口々に文句を言いながら。

「まったく、ルイズお嬢様にも困ったもんだ」

「本当だよ。エレオノールお嬢様も、あのお身体が弱いカトレアお嬢様でさえも……ちゃんと＜魔法＞がおできになるのにねえ」

ルイズは悔しくて……悲しかった。反論したくてもできない。彼らが言う通り、自分は一切魔法が使えないのだから。だが、そんな彼女の思いをよそに、草木がこすれる音がだんだんと近くなってきた。このままでは彼らに見つかってしまう！

――小さなルイズは、その場から逃げ出すと、お気に入りの場所へと駆け込んだ。

ルイズ自身が『秘密の場所』と呼んでいる中庭の池は、普段はあまりひとが寄りつかない場所であった。その周りには、いつも季節の花が咲き乱れ、水面には一艘の小舟が浮かべられていた。

以前は、ここに家族の皆が揃って、よく舟遊びをしていた。しかし、ふたりの姉たちは大きくなり、父親は領地を治める仕事で忙しく、母は娘たちの教育に熱をあげるばかりで……いつしかこの場所から、彼らの足は遠のいていった。

そんな、忘れ去られた場所にぽつんと浮かぶ小舟が、幼いルイズにとって……ただひとつの安心できる『避難所』だった。何故ならば、その小舟を気に掛ける者は、今ではルイズただひとりだけであったから。

ルイズはそっと小舟の中に忍び込んだ。そして、用意してあった毛布にくるまり、身を横たえる。そして彼女は、ぎゅっと身体をすぼめて呟いた。

「あたしは、ずっとここにしか居られないのかしら……」

だって、あたしは魔法ができない。だからきっと、みんなと同じようには生きられない。小舟の中……ただひとり、頭の内をそんな思考の渦によってぐるぐるとかき回されていた彼女の頬を、いつしかすうっとひとすじの涙が伝って落ちた。

すると……そんな彼女の様子を、まるで外から見計らっていたかのように、池の中にある小さな島の岸辺に誰かが姿を現した。その人物は……立派なマントを羽織り、大きなつばと羽根飾りのついた帽子を被った、若い貴族であった。

「泣いているのかい？　ルイズ」

声の主の顔は、大きな帽子の影に隠れて、よく見えない。だが……ルイズには、声の主に覚えがあるような気がした。そう、どこかで聞いたはずの、あの響き……。

ルイズは、現れた人物の姿をもういちどよく見直してみた。背格好からして、年の頃は16〜7前後であろうか。夢の中のルイズは幼く、6歳くらいの背格好だったので……その相手がとても大きく感じた。

目の前の人物は、小舟の中で蹲っていたルイズに、岸辺から手を差し伸べてきた。

「ミ・レィディ。手を貸してあげよう。ほら……掴まって」

「でも……」

ルイズは、躊躇った。大きく、暖かく、そして頼りがいのありそ

うな手が……自分のすぐ目前に差し出されている。でも、本当にあたしは……この手を取ってもいいのだろうか？　こんなにちっぽけで、おちこぼれの自分が。

「怖いのかい？　心配しなくても大丈夫だよ。みんなが一緒にいるのだから」

みんなが、一緒にいる……？　その言葉に、ルイズははっとした。そのとき、突如吹いてきた強い風が、彼女の前に立っていた若い貴族の帽子を吹き飛ばした。

「あ……！」

現れた顔を見て、ルイズは小さく驚きの声を上げた。そして、いつのまにか現在の……16歳になった、自分の姿にびっくりしてしまった。ここが、夢の中の世界であることも忘れて。

「な、な、なによ、あんた……」

――帽子の下から現れたのは、彼女の『パートナー』である才人の顔であった。

「さあルイズ。おいで」

才人は、その顔に満面の笑みを浮かべて、ルイズに向け手を伸ばしている。

「おいでじゃないわよ！　なんであんたがここにいるのよ！！」

「それはこっちの台詞だ！　約束してただろ！？　みんなで一緒

に行こうって」

立派な貴族の格好……それも、ルイズがよく知るマンティコア隊の古風な制服を身につけた才人が、不機嫌そうな声でぼやく。約束？　いったい、何の……？

すると。才人の後方に、どこまでも広がる青い空と、広々とした草原が現れた。そこには、あの『竜の羽衣』が、どでんっ！　と置かれている。そして……その側には、彼女がよく知る人物たちが集い、全員が笑顔で彼女たちを見守っていた。

自分に『道』を示してくれた恩人、ミスタ・タイコーボーが、仁王立ちをしながらふんぞり返っている。

彼を＜召喚＞によってハルケギニアへ招いてくれたタバサが、そのすぐ隣に座って本を読んでいる。こちらをちらちらと伺いながら。

仇敵だったはずのツェルプストーが、腰に手を当て、笑みを浮かべて立っている。

気取ったポーズで薔薇を咥えたギーシュが、彼と腕を組み、頬をほんのりと染めたモンモランシーと共に、こちらを見つめてくる。

眼鏡の位置を直しつつ、手元のメモ帳に何かを書き留めていたレイナールが、その手を止めて笑いかけてくる。

髭をしごき、上機嫌といった風情の学院長が、にこにことルイズに微笑みかけてきた。

愛おしそうに『竜の羽衣』を撫で続けていたコルベール先生が、

突然振り返って、ルイズに向けて頷いている。

――そうだ。あたしは、みんなと大切な『約束』をしているんだった。ルイズは被っていた毛布をはね除け、急いで立ち上がろうとしたのだが……そこは安定しない小舟の上。ぐらりと身体がよろめいてしまった。しかし、そんな彼女を力強く逞しい腕がしっかりと支えた。それは、もちろん……すぐ側にいた才人の手だった。

「ヲイ！　舟の上でいきなり動くなよ、危ないだろ!?　ったくしょうがねえなあ、お前ってやつは……」

才人はため息をつくと、そのままルイズを抱きかかえようとした。

「ちょっと！　やめてよ、ばか!!」

あまりにも突然の事態に、顔を真っ赤にして抗議したルイズであったが……その声は、さほど大きなものではなく。しかも、何故か暴れるような真似もできなかった。

「うまく立てないんだろ!?　強がるなよマイ・レィディ。俺のルイズ」

「誰があんたのルイズなのよ!!」

ぽかぽかと彼を殴りながら抗議するルイズ。だが、才人はそんな彼女の様子など、まるで気にしていないかのように、軽々と目の前の少女を両腕で抱きかかえてしまった。

「やめてよ！　なんでこの夢に出てくるのがあんたなのよ!!」

真っ赤になって抗議するルイズであったが、才人は気にせず、にこにこと笑いながらルイズを――所謂お姫様抱っこ状態で――仲間たちのところへ連れて行こうとする。そんなふたりに、ひやかしの声が飛んでくる。

ルイズは、それが恥ずかしくてたまらず、必死に才人の腕から降りようとするのだが、何故か身体に力が入らない。それに……態度とは裏腹に、彼に抱きかかえられていることで、妙に気分が高揚しているのも確かで……それが、夢の中のルイズをさらに困惑させるのであった。

――そして翌朝。

チチチ……という小鳥のさえずり声で目覚めたルイズは、先程まで見ていたのが夢であることに気が付いた。どうして今、あんな夢を見てしまったんだろう……彼女は、完全に混乱してしまっていた。

何故ならば、これまで何度も繰り返し……あれと同じ『夢』を見ていたはずなのに、今回に限って、その内容や登場人物が大きく変化していたからだ。

以前までは、あそこに別の人物が迎えにきてくれていたはず。今は、その顔も声も、よく思い出せないひと……10年前、ふいに自分の前から姿を消してしまった、とある人物が。そして、その相手に抱きかかえられ、不安と安心がないまぜとなった気持ちで夢から覚める……それが、繰り返し見てきた夢の『筋書き』だった。

ふいに、彼女は部屋の反対側に置かれた折りたたみベッドの上に目をやった。すると……そこでは、新しい夢の中で彼女を迎えに来

てくれた人物が、うんうんとうなり声をあげている。どうやら何かにうなされているらしい。夢の世界ではあんなに自信満々だったのに……思わずぷっと吹き出してしまったルイズは、彼を起こさぬよう、そっと近付いていった。

と……壁に立て掛けられていたデルフリンガーが、そんな彼女に気付き、声をかけた。

「どうしたんだ？　娘ッ子」

ルイズはデルフリンガーに向き直ると、口の先に指を1本立てた。

「黙ってろってか？　まあ……実に面白そうな夢見てるみたいだからなあ、相棒は」

鍔をカチカチと、小さく鳴らすデルフリンガー。どうやら笑いを堪えてるようだ。ルイズは、そんな彼に笑顔でグッと親指を立てて――これは才人がよくやるポーズだ――見せると、そっと才人が寝ているベッドの脇へと立った。

すると、突如才人が寝返りをうち「う～ん……」と、声を上げた。それに驚いて、思わず声を上げそうになったルイズであったが、かろうじてそれを押し止める。

「も、もうダメだ……これ以上の被弾には……耐えられねェ……こんなに……狭いのが悪いんだ……もうこのままじゃ俺、墜落する……許してくれ、ルイズ……戦力差が……」

ルイズは、まるで＜固定化＞の魔法をかけられたかの如く固まってしまった。しかし、才人はそれだけを呟くと、すやすやと寝息を

立てはじめた。悪夢が過ぎ去ったのであろうか。彼の寝顔を見たルイズは、思わず安堵のため息を漏らした。

「なんだ寝言か。何かと戦ってる夢でも見てるのかね？　相棒は」

デルフリンガーの感想に、ルイズは頷いた。

「しかも、あたしに何か謝ってたわよね……」

もうダメだ……許してくれ、ルイズ。その言葉を思い出して、ルイズははっとした。まさか、サイトはあたしを命がけで守ろうとして、何者かに倒される夢を見ていたのだろうか。そこまで考えた彼女の頬が、すっと朱に染まる。

「俺っちは剣だから、人間の男女関係についてはよくわかんね。けど、これだけは言える。今のお前さん……顔が真っ赤だぜ？　なあ！？」

ルイズはさらに顔を紅潮させ、デルフリンガーをポカポカと殴る。しかし、相手は『剣』である。鞘の上からとはいえ、ダメージを受けたのは自分の手のほうであった。

痛む手をさすりつつ、ルイズは考えた。デルフリンガーが放った言葉の意味を。

人間の男女関係……いや、そんなはずがない。サイトは確かにあたしの大切な『パートナー』だ。それ以上でも、以下でもない、はず。だいたい、自分たちふたりは身分だって違いすぎる、たぶん。けれど、だったら……今朝見た夢と、この胸の高鳴りは、一体なんなのだろう……？

ルイズは、再びベッドの上ですやすやと寝息を立てている『パートナー』を見た。

「まったく……主人より遅くまで寝てる＜使い魔＞なんて、あんたくらいよ」

その愛らしい頬を膨らませながら、ルイズは才人の頬をつんつんと突っついた。

――実際のところ、才人は昨日のフライト中に行われた『戦闘』の夢を見ていただけなのだが……ルイズがそれを知らなかったことは、両者にとって本当に幸いなことだったといえよう。

○●○●○●○●

「いやあ、わざわざ私にまで声をかけてくれてありがとう！　すっかり忘れていたから、本当に助かったよ」

トリスタニアの街中を歩きながら、コルベールが太公望をはじめとする水精霊団一行に感謝の言葉を述べていた。そう……彼らは、来週行われる『ヴァリエール家の歓待』に備えるべく、街へと買い物に繰り出してきていたのである。何故ならば、大貴族の歓待――それも、数日間にわたるそれを受けるとなれば、相応しい準備というものが必要になるからだ。

「お礼といってはなんだが、買い物が済んだ後の食事代は私が出そう」

そのコルベールの発言に、全員が歓声をあげた。そして彼らは、太っ腹な教師から見えないよう、出かける前に彼へ声をかけることを提案した太公望に向けて、小さく親指を立てて見せる。『竜の羽衣』を研究することに夢中になっていて、歓待のことなど絶対忘れているに違いない。太公望が立てたその予測が、見事なまでに当たっていたからだ。

……ちなみに、オスマン学院長にも念のため声をかけてみたのだが、さすがは元王宮勤め経験者、そのあたりの準備には一切抜かりがなかった。それはさておき。

例の『討伐懸賞金』が全額支払われるのが今月末ということと、そもそもこういった席で極端に見栄を張るような真似をするのは、かえって相手方に対して失礼にあたるということもあり。全員がそれぞれの身の丈にあった支度をしようということを前もって話し合っていた一行は、夕食前になったらトリスタニアの広場前にある噴水に集合する約束を交わすと、それぞれの目的地に向けて散っていった。

――そして、夜。約束の刻限。

手ぶらで――荷物は学院に向けて送り届けるよう、既に手配を済ませていたからだ――広場の噴水前に集合した彼らは、早速食事へ出かけようとしたのだが……そこで、ギーシュがひとつの提案をした。

「実は、最近面白い店ができたという噂を聞いているんだがね」

「へえ……どんな？」

才人の言葉に、その質問を待ってました！　と、ばかりに、得意げに胸を反らすギーシュ。そんな彼が出した提案とは。

「可愛い女の子が、大勢でお出迎えをしてくれ……」

「ミスタ・タイコーボー。恐縮ですが『1回目』をお願いしますわ」

「了解した」

笑顔で――ただし目が笑っていないモンモランシーのリクエストに応え『打神鞭』を取り出した太公望は、即座に＜ウインド＞のルーンを――毎度のことだが唱える『ふり』をする。そして、それが完成したと同時に……ギーシュは、文字通り空の彼方まで吹き飛ばされた。

「ギーシュって……やっぱバカだろ」

お前、この状況でそれを言うか！　普段はそこそこ頭イイのに、どうしてあいつは女の子がらみになると、こうもダメになるんだろう……と、自分のことをすっかり棚に上げ、心底呆れたといった声で才人が呟けば。

「まったく。サイトの言うとおりだわ！　友達だけで集まって行くならともかく、少なくとも本命の彼女が一緒のときにチョイスする店じゃないわよね、明らかに。おまけに、今回はコルベール先生が一緒にいるのよ！？」

キュルケが、もっともだとそれへ追随する。もしもこれが、水精霊団だけで来ているというのならば、その店へ行ってみるというの

も案外面白かったのかもしれないが――さすがに学院の教師同伴、しかも先生のおごりという状況でそれを言うのはおかしい……と。

……いっぽう、その他のメンバーはというと。たったいま目撃した＜風＞に対する見解を、それぞれの視点から述べていた。

「それにしても、ただの＜ウインド＞であそこまで飛ぶとは驚きですな」

「しかも、周囲に一切被害を出していない。これも『複数同時展開』の利点」

目の前で、自分の生徒が吹っ飛ばされたにも関わらず、淡々と……事実だけを冷静に述べたコルベールの声に、補足を行ったのはタバサだ。さすがは『炎蛇』と『雪風』のコンビ、その二つ名に相応しく、実に容赦のないコメントである。太公望がやったことだから大丈夫だろうという信頼感があったにしても……だ。

「ミスタの＜風＞は、うちのお母様といい勝負だわ……」

そうポツリと口にしたルイズは、内心衝撃を受けていた。彼がサイトの世界の『伝説』だという話は聞いていたが、あれはやはり本当のことなのだ……と。

「なるほど、ルイズのお母様も相当な凄腕なんだね」

ルイズの呟きを聞いて、即座に彼女の母親に対する分析を始めるレイナール。まさか、その『お母様』がトリステインのみならず、各国にその名を轟かす伝説的存在だということまでは、今の彼にはわからない。何故ならば、これはヴァリエール家と、それに近しい

者だけに知られている『秘密』だったから。

「頼んだわたしが言うのもなんだけど、ギーシュ、無事かしら……」

「打ち上げの高さや落ちる位置はきちんと計算しておる。心配しなくても大丈夫だ」

太公望が＜風＞の『スクウェア』だという話を聞いていて、かつラグドリアン湖であの＜ヘクサゴン・スペル＞を見ていたモンモランシーは、改めて彼の『実力』を目の当たりにして、強い不安を覚えてしまった。つい悔しくなって、軽い気持ちでお願いした『1回目』だったが、あれをまともに受けたギーシュは、本当に大丈夫なのだろうか……と。

思わず天を仰ぎ『始祖』ブリミルに対し、彼氏の無事を祈ってしまった彼女の思いがたぶん通じたのであろう。それからしばらくして、くるくると回転しながらギーシュが落ちてきた。もっとも、彼は完全に気を失っている状態ではあったが。

とはいえ、そこはさすがに太公望のこと。落下Gその他の要因でギーシュがダメージを受けたりしないよう、しっかりと周囲に＜風の壁＞を作って守っている。ギーシュは、謂わば命綱つきでバンジージャンプを体験したようなものだ。もっとも、通常のそれとは比ぶべくもない程に長距離のそれではあったが。

そのギーシュが地面に到達する2メイルほど手前で、慌ててモンモランシーが＜レビテーション＞を唱え、必死の思いで受け止めた……その瞬間。突如周囲から、嵐のような拍手が巻き起こった。

まあ、それも当然である。トリスタニア最大の広場、しかも噴水前という目立つ場所で、こんな大道芸のような真似をした時点で、野次馬が集まるには充分だ。しかも、遙か空の彼方へ吹き飛ばされたはずの『芸人』が無事な姿で戻ってきたとくれば、盛り上がるに決まっている。

「やるなあ兄ちゃんたち！」「いやあ、いいモン見せてもらったぜ！」「ご夕食はまだですか？　よろしければ、当店へ……もちろん、お代はサービスさせていただきます」「いや、是非うちの店にいらしてくださいよ」「待った！　皆様をお招きするのは我が店に決まっている！！」

――ある意味、身体を張ったギーシュの発言によって、思いも寄らぬ歓待を受けることになった水精霊団一同であった。ただし、この一件でいちばんトクをしたのは、原因となった本人ではなく、間違いなくコルベールだったわけだが。

○●○●○●○●

――あんなに生き生きとしたエレオノール姉さまを見るのは、久しぶりだわ。

使用人たちの先頭に立ち、来週頭に開催される『歓待』のための指揮をとる姉の姿を見ながら、儚げな空気をその身に纏う娘は……その顔に、今にも零れ落ちそうな微笑みを浮かべた。

カトレア・イヴェット・ラ・ボーム・ル・ブラン・ド・ラ・フォンティーヌ。この日、ラ・ヴァリエール公爵家の次女たる彼女は、普段療養のために暮らしているフォンティーヌ領から外へ出て、実

家であるヴァリエール公爵家の屋敷に戻っていた。もちろん、例の祝宴を兼ねた客人の歓待に顔を出すためである。

名門・ヴァリエール家の次女であるにも関わらず、彼女だけ名字が違っているのは……カトレアが幼い頃から原因不明の病を患っており、それを不憫に思った父親のヴァリエール公爵が、自領の一部――彼女が療養するのに最も相応しい環境の整った場所――を、王家に許可を取った上で『領地』として与えたからである。

つまり、カトレアはヴァリエール三姉妹のうち、唯一の領主たる存在であった。

もっとも、彼女にとって、それは嬉しくもなんともない事実であろう。健康的な残るふたりの姉妹と違い、カトレアはこれまで一歩たりともヴァリエール領を出ることが叶わなかった。そのため、学院での寮生活を送ることなど……専用の竜籠で自宅から通うことすら、彼女には到底無理な話であった。

もちろん、両親はできうる限りの努力をしてくれた。腕のよい水メイジがいると聞けばすぐに呼び寄せ、よく効くという薬の情報を得られた際には、それがどんなに高価なものであろうとも手に入れてくれた。しかし……そんな家族たちの必死な思いもむなしく、彼女の病が癒えることはなかった。

そもそも、現在に至るまで、病の元がなんなのかすらも判明していない。姉であるエレオノールの伝手で、国立アカデミーへの問い合わせをしてもらったこともある。だが、やはり原因不明であるとの解答しか戻ってこなかった。

しかし……カトレアは身体のそれとは反対に、非常に強い心を持

った女性であった。そんな自分の境遇を一切嘆くことなく――少なくとも、人前では――いつも柔らかな笑みを浮かべ、家族の誰からも、そして領地に住まう人々からも好かれていた。なんと動物たちにすら懐かれて、彼女の屋敷はまるで動物園さながらといった風情である。

そんな彼女の前では、全ての者が心を開いてしまう。ルイズはもちろんのこと、家族のみならず、社交界やアカデミーの研究員たちの間で、その性格の苛烈さが有名になっている姉・エレオノールですら例外ではない。

そのカトレアですら、ここ数年間見たことがないほどに、喜びと生命力に満ちあふれているように感じるのだ……現在のエレオノールの姿は。

「まったく……あの娘ときたら。魔法学院へ出かける前は、不機嫌を隠そうともしなかったというのに。帰ってきたら、本当に嬉しそうにルイズのことを話してくれたのよ」

カトレアのすぐ側に座っていた、彼女の母・カリーヌが苦笑しながら、娘へそう語る。

「しかも、ですよ？　あの研究一筋だったエレオノールが、アカデミーに1ヶ月の休暇願を出してまで、この『歓待』の指揮を執るとまで言い出したときは、さすがのわたくしも驚きました。例の『お客様がた』のおかげで、ルイズは本当に成長していたようね。あの子に会うのが、本当に楽しみですこと」

そんな母の意見に、カトレアは笑顔で頷いた。

「はい、わたしも楽しみですわ！　あの小さなルイズが、どんなふうに大きくなったのか。それ以外にも、気になることがありますけど」

「例のお客様のことかしら？　エレオノールの話を聞く限りでは、どうやら『学者』のようですね」

そう答えた母親の声が、ほんの少しだけ落胆しているように聞こえたカトレアは、くすくすと笑い声を上げた。それを聞いたカリーヌは、小さく眉根を寄せる。

「もう、お母さまったら！　例のお客様が『東方』の優秀な＜風＞のメイジと聞いて、つい『そういう』期待をされておられたのでしょう？　だって……」

――お母さまは、かつて『最強』の名を欲しいままにした『騎士』だったのですから。

その言葉を、カトレアは口に出さない。既に、その目で語っていたから。

「まあ、代わりといっては可哀相ですが、別の＜風＞メイジも招待していることですし、久しぶりに彼の様子を見てあげることにします。ワルド子爵に会うのは、本当に久しぶりですからね。それにしても……わざわざルイズの婚約者である彼を呼ぶよう、エレオノールが言い出したということに、わたくしはいちばん驚きました。自分の身に、あんなことがあった後だというのに」

「ええ……本当に。実は、わたしもそれを気にしていたのですが、お姉さまはもう大丈夫みたいですわね」

「突然のことで、あの子も精神的に参っていたでしょうに。さて……それでは、わたくしも手伝ってくることにします。さすがに、我が家の恩人をお迎えするにあたって、公爵夫人たるわたくしが何もしないというのは、礼にもとる行為ですからね」

あなたは、あまり長い時間ここにいてはいけませんよ。辛くなったらすぐにベッドへ戻りなさい。そう言って立ち去った母を見送るカトレアの瞳に浮かんだ色を、正確に読み取れる者は……今はこの場所のどこにも存在していなかった――

第６３話　輪の内に集いし者たち（後書き）

感想欄にいただいたコメントを見て、さんざん「みんな、ひどい……ｗ」と、言い続けてきた筆者がいちばんワルドに酷いことをしているっていう。

いや、自分は彼、結構好きなキャラなんですよ？　だって、すごく人間くさいじゃないですか。ああいう味のあるキャラクターは好みなのです。たとえ敵だとしても、です。だからこそジョゼフ大好き！　を公言して憚らないわけですが。

そのわりに、ルイズの夢に登場するのがグリフォン隊の制服じゃなくてマンティコア隊（カリンさんとパパ所属）のそれという。うん……自分ひどいｗ　と、いうわけで今回の冒頭は原作２巻の逆パターンでした。ルイズではなく才人のほうが寝ている的な意味で。また、時期的に魅惑の妖精を期待した皆様には、こんな結果で申し訳ございませんでした！

さて、次回からついに皆様お待ちかね？　の『ヴァリエール家艦隊』もとい歓待編がスタートします。カトレア姉さまも登場し、さて。話はいったいどう転ぶのでしょうか！

第６４話　祝賀と再会と狂乱の宴

――さすがは公爵家。しかも、国内でも大きな権勢を誇る家柄だけのことはある。

竜に四隅を持ち上げられた巨大な籠（かご）――竜籠に揺られ、上空から遙か下に広がる光景を眺めながら、太公望は内心舌を巻いていた。自分の向かい側の席に腰掛けている才人などは、これを見て、

「日本の市くらいの大きさって……ルイズんち、金持ちとかってレベルじゃねェだろ」

などと、ぶつぶつと呟いている。

「それはそうであろう。ヴァリエール公爵家は、トリステイン王家の傍流にして、国でいちばんの大貴族だ。所謂本物のお姫様、というやつなのだよ。彼女は」

その太公望の言葉を聞いた才人は、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「これ見るまでは、イマイチ実感できなかったんだけど……ルイズって……」

才人は思った。本物の貴族だのお姫様だの、地球にいたころの俺にとってはテレビの中でしか見ることのない、遠い世界に住んでいる……それこそ現実味のない存在でしかなかった。でも、これを見て実感しちまった。なんとなくだけど、理解できた。ルイズは『そういう世界』にいる人間なんだ……と。

彼は元々、そういった者たちとは縁遠い『現代日本人』である。正直なところ、それが本当にわかったとは言い難いであろう。だが、今まで見てきたルイズの態度や、その他の事情が……ストンと頭の中に落ちてきた。ありていにいえば「しっくりきてしまった」。

才人は、思わずため息をついた。もしも馬車で来ていたら、学院からここまで、なんとまる2日もかかっていたらしい。しかも、領地に着いてから屋敷にたどり着くまで半日以上かかるのだという説明を受けていた。大貴族って怖ろしい……才人は、だんだん緊張してきた。そして、彼はその最大の理由を、目の前の男に対して開示することにした。

「ううっ、俺……こっちのマナー？　とか、いちおうルイズに教わってきたんだけどさ……なんだか自信なくなってきた。師叔はこういうの慣れてるんだろうけど」

「いや、わしだってハルケギニアの細かい流儀などわからぬ。よって……」

ゴソゴソと懐を探る太公望。その手には、2冊の本が掴まれていた。

「タバサに教わった街の本屋で、一般的な訪問に関するマナー本を購入しておいた。念のため、2冊用意しておいてよかったわ。簡易版のほうをおぬしに貸してやるので、今のうちにおさらいをしておくのだ」

「うは、助かるぜ！　てか、いつも思うんだけどさ。その懐のどこにそんだけの物が入るんだよ？　ひょっとして、内側に亜空間に繋がってるアイテムでもつけてあんのか！？」

――四次元ポケットみたいな？　と、いう才人の言葉に、太公望は頷いた。

「おぬしの予想は大当たりだ。着脱式の、亜空間収納用ポケットがついておるのだ。箪笥の引き出し程度の小さな空間……例の『自分の部屋』の簡易版のようなものに接続するための道具だと思ってくれれば間違いない」

――縮めても最低５０サントはある『打神鞭』がまるごと収まる上に『携帯通信機』入り。さらにはワインが１本、瓶で出てきたこともある『恐怖の懐』。その謎の一端が明かされた瞬間であった。

「便利だなそれ！　って、いつもだったら見せてくれって言いたいところなんだけど！」

「うむ。わしも再度確認しておきたいので、本に集中させてもらう」

最初は、籠に乗るメンバーの組み合わせで少しモメたみたいだけど、太公望師叔と一緒の組になれて本当に良かった！　既にハルケギニア語を『読む』ことについては問題なくできるようになっていた才人――もちろん、これはルイズ先生による猛特訓の賜だ――は、必死にマナー本のページをめくり始めた。

ちなみに、いったい何をモメたのかというと。本来『お客様』という扱いであった太公望が乗る籠についてである。当初は、もっと良い籠に……というのが、今回の案内役であるエレオノールが提示してきた案だったのだが、これに太公望が異を唱えたのだ。

「お気遣い感謝致します。ですが自分はあくまで従者でございますので、身分相応の籠に乗らせていただきたいのですが……その、恥ずかしながら落ち着きませんので」

……と、しきりに恐縮しながら。

その結果、全員の中でいちばん身分が低い（と、いうよりも唯一メイジではない）才人と同乗することになったのだ。もっとも、太公望はこれを最初から狙っていたのだが。おもに、自分と才人のマナー復習時間を稼ぐ的な意味で。

――それから数時間後。

夕日を背に受けながら、竜籠はラ・ヴァリエール家の『城』に近付いていた。屋敷ではない。完全にお城というべき建造物ある。周囲に何もないせいか、トリステインの王城よりも巨大に見えるそれは、高い城壁によって囲まれ、周囲には深い堀が巡らされている。その壁の向こうには、高い尖塔がいくつも見えた。

と……先頭をゆく籠のそばへ、巨大なフクロウがばっさばっさと羽音を立てながら近付いてきた。中に乗っていたタバサは一瞬それに驚いたが、ほんの僅かに眉を動かした程度で内心の動揺を抑える。

フクロウは、竜籠につけられた窓枠部分に止まると、優雅にお辞儀をする。

「おかえりなさいませ、エレオノールさま」

喋るフクロウ。どうやら、ヴァリエール家の誰か……ひょっとす

ると、わたしの目の前に座っているエレオノールさんの＜使い魔＞なのかもしれない。けれど、彼女は確か＜土系統＞だったはず。タバサは、フクロウを見つめながら、そんな他愛のないことを考えていた。

「トゥルーカス、準備のほどは？」

エレオノールの言葉に、トゥルーカスと呼ばれたフクロウは淀みなく答える。

「はい、全て整ってございます。旦那様も、奥様も、皆様の到着をお待ちかねです」

「そう。では、まもなく到着すると伝えてちょうだい」

「かしこまりました」

再び一礼したフクロウは、城を目指して飛んでゆく。

お堀の向こうに、城門が見えてきた。それから間もなく、客人たちが乗る全ての竜籠が、その上をゆうゆうと越え……城壁の内側へと向かっていった。

着陸地点と思われる場所には、大勢の召使いたちが控えている。もちろん、彼らの到着を待っていたのであろう。竜籠が降り立つと、彼らはいっせいにその周りに取り付いた。竜使いの一同がそれぞれの竜をなだめている隙に、籠につけられた扉が開かれ、その先には緋毛氈（ひもうせん）が、ばっと入り口前まで敷かれた。

自ら従者である、と宣言していた太公望と、その連れという役柄

である才人が、急いでタバサの元へ駆け寄ると、すぐ側に控える。ちなみに、今日の才人は指ぬきグローブではなく、白い布手袋をはめ、腰にレイピアを下げ、従者に相応しい礼服に身を包んでいる。デルフリンガーは、可哀相だが荷物の中で解放を待っている。

地面に敷かれた赤い絨毯の左右には、ずらりと召使いたちが並んでいる。彼らは、一斉に「お待ち致しておりました」という歓迎の挨拶を述べ、頭を下げた。

と……そこへ、王族もかくやと言わんばかりの豪奢な装束を身につけた、初老と思われる貴族が近付いてきた。白くなりはじめたブロンドの髪と髭を揺らし、左目には片眼鏡（モノクル）をはめている。

それは、ルイズの父であるラ・ヴァリエール公爵であった。なんと、彼自らが『お客様』を出迎えに来たのだ。これは正直なところ、異例といって差し支えない歓迎ぶりである。娘の恩人に対し、自分自身が出向くという最高の礼をもって接する。これが、公爵が出した答えであった。

○●○●○●○●

――エレオノールから話を聞いたとき、もしやとは思っていたが。

ラ・ヴァリエール公爵は、自分たちの予想が当たっていたことに即座に気が付いた。自ら出迎えた少女が持つ、特徴のある青い髪。これは、ガリアの青と呼ばれる、ガリア王家の血筋にしか現れない色だ。たとえ魔法の髪染めを使っても、これだけは絶対に再現できない。もし実際にやれたとしても、不敬罪で即刻重い裁きを受けるであろう。

しかも……その側に仕える『東の客人』とおぼしき人物が身につけている略章は、名高い『ガリア王国東花壇騎士団（エストパルテル）』の略章と『騎士（シュヴァリエ）』のそれである。

本来であれば、こういった席には略章ではなく、礼装一式でもって参加すべきところを、あえてこのような選択をしているということは……つまり、目敏い者以外には彼女の身分を知られたくない。そして、可能であればそれを明かしたくない。だが『法』を守るため身につけないわけにもいかない……という、彼らなりの苦肉の策。我々へ宛てたメッセージなのだろう。

わずか数秒にも満たない時間で、そこまで察したラ・ヴァリエール公爵は、タバサたちをあくまで『娘の恩人に対する礼』でもって迎えた。いっぽうのタバサもそんな彼の気遣いを察し、公爵にしか気付かれないよう、彼の素晴らしい歓迎に対する感謝の言葉とは別に、その件についてごくごく小さな声でもって礼を述べた。ご厚意感謝致します……と。

それを耳にしたラ・ヴァリエール公爵の瞳の奥に、まるで一生懸命仕掛けた悪戯が、うまく成功して喜ぶ子犬の目のような煌めきが、ほんの一瞬だけ現れた後……消えた。

そして彼らは、豪奢な……それでいて品のある調度や絵画が飾られた部屋をいくつも通り抜け、晩餐会場である巨大なホールへと通された。中庭を臨むその部屋には、複数の丸テーブルが置かれ、奥にはずらりと使用人たちが控えていた。

季節の花や、魔法の灯りによって飾り付けをされたそこは、大貴族たる者の品位というものを、より具体的に表したらどうなるかと

いう見本そのものであった。

……そんな場所で、彼女たちは待っていた。

待ち人のひとりは、ラ・ヴァリエール公爵夫人カリーヌ。そう、ルイズ達の母親である。桃色がかったブロンドの髪をアップでまとめ、落ち着いた雰囲気のドレスにその身を包んでいたが、放つオーラが半端ではない。日本流に例えて言うなれば、アスファルトの遙か上空で、ギラギラと輝く真夏の太陽の、肌の奥まで刺し込んでくるような鋭い日差し……といったところであろうか。その迫力に思わずたじろいでしまった才人を、太公望が見えない角度からこっそりと指でつっついた。

彼女からの歓迎の挨拶後、その後ろに控えていた娘が前へと歩み出てきた。それは、見た者全てが、思わずはっとするような可憐さを顔中に滲ませた娘であった。蕩けそうな微笑みを浮かべているその娘が纏うのは、母とは反対に、まるで雪解けを誘う、春の柔らかくも暖かい陽光だ。ルイズにそっくりな顔をした、その女性の名はカトレア。ヴァリエール家の次女であると自己紹介をした。

――だが、その暖かい空気の中で、唯一困惑している者がいた。

太公望は戸惑っていた。この娘が纏う＜気＞は、いったいなんだ……？　＜仙気＞の類とは似て異なる、これは。内心の驚きをひた隠しにしながらも、いつものように『観察』を開始しようとした太公望であったが、それは彼女の家族たちによる再度の挨拶と礼、そして歓迎の宴開催を告げる声によって妨げられた――。

○●○●○●○●

――その後、歓待の宴は実に和やかな空気で進んでいった。

その流れを突如変えたのは、さきほどカトレアと名乗ったルイズの姉であった。

「わたしの小さなルイズ！　もしよかったら、あなたの＜魔法＞を見せてもらえる？」

そう言って、彼女は中庭を――既に夜になっているが、魔法のランプによって照らされて、幻想的な雰囲気を醸し出しているそこを指差した。

「カトレア！　まだ宴の最中よ」

「まあ、お姉さまったら。でしたら、どうしてこのような円卓を複数置くような配置を……しかも、庭が見渡せるようになすったんですの？　わたしはてっきり、皆様と一緒に、あの子の成長を見たかったのだとばかり思っていましたわ」

ころころと笑いながら行われた妹の指摘に、エレオノールは薄く頬を染めた。実は、その通りなのである。もっとも、彼女としては……他にも理由があって、この『席の途中移動ができる』形式を採用したのであるが。

ルイズは戸惑った。練習の成果……しかも、家族たちが見守っているという、彼女にとっては実に緊張する状況下で、いったいなにをすればいいのだろう……と。

と、そこへ声をかけてきたのは彼女の『恩人』たる太公望であっ

た。

「ルイズ殿。よろしければ、そちらの中庭で空を飛んでみるというのは如何でしょうか。そうですな……池の上を何度か周回してみれば、皆様に練習の成果を見ていただくにはちょうど宜しいかと」

この声に、ピクリと反応したのはルイズの両親であった。あの……失敗続きであったルイズが＜フライ＞を使う。しかも……既に、自分たちの目の前で、あの池の周りを飛びまわってみせられるほどに上達していると！？

「……わかったわ」

その太公望の提案に、ルイズは杖を取って立ち上がった。そして、ゆっくりと中庭へ続くバルコニーから外へ出た。しかし、彼女が極端に緊張しているのは、誰の目から見てもあきらかであった。

――失敗したらどうしよう。

屋敷の中庭。幼い頃、毛布にくるまって隠れていた小さな小舟は、まだあの池にある。そう――ここは、ルイズにとって思い出の場所でもあり、己の過去を強烈に刺激されるトラウマのひとつでもあった。

だが。そんな彼女の心の内をまるで見透かしたように、太公望が声をかける。

「いつも通りにやればよいのです、ルイズ殿なら絶対に大丈夫。何せ＜風＞の『スクウェア』である我が主人に＜空＞で追いつくことができるのは、今や学院内の生徒たちの中では、ルイズ殿だけで

はありませんか！　それは、本日お招きに預かった全員が知るところです」

途端に、おおっという声があがった。ルイズの家族、そして宴席の後ろに控えていた召使いたちの声であった。ルイズは、その声を聞いてまた心臓が飛び跳ねそうになったが……にこにこと笑いながら促す太公望の顔を見て、きゅっと手を握り締めた。

そうよ、あたしはもうやれるのよ！　小舟の中に蹲って、ただ隠れていることしかできなかった『小さなルイズ』じゃないの。箒に乗れば、あのタバサにだって負けない。乗らなくても……彼女と、ほとんど同じ速さで飛べるじゃない！　自信を持っていいんだわ。

そして、彼女は宴席側へ背を向けると、中庭に視線を移す。杖を指揮棒（タクト）のように構え、学院で……放課後に行っている特訓のときと同じように、その『呪文』を唱え始めた。

「イル・フル・デラ・ソル……」

小さな声で紡がれたそれは、最後までは続かない。何故ならば、彼女がこれから行おうとしているのは＜フライ＞に見せかけた＜念力＞による飛行だから。

『＜念力＞はコモンだ。よって、口語で＜術者＞が好きなようにワードを指定することができる。己のイメージを手助けするために、自由にな。なればこそ、将来＜念力＞以外の＜魔法＞を使えるようになるそのときまで、あえて使いこなせるようになった自分をイメージし、途中まで＜呪文＞を唱えて止め、やがて必ず訪れるその時に向け、備えるのだ』

その太公望の言に従い、ルイズはこれまで＜念力＞による空中での物体操作を行うためには＜レビテーション＞のルーンを途中まで唱えて停止させるようにしていたし、単独で空を飛ぶときは、同様に＜フライ＞のルーンを紡いでいた。もちろん、最後まで詠唱を続けず止めている。

……実のところ、これはイメージトレーニングなどではなく『念力で空を飛ぶ』ことに対して、一部頭の固い連中が文句をつけてくるのではないか？　と、危惧していた太公望なりの策である。事実、自分が同じように『唱えるふり』で誤魔化しているからこそ、あえてこの措置を採ったともいえる。

そして、もしもこれが『ふり』であることを正直に伝えていた場合。生真面目なルイズの性格ならば、間違いなく葛藤したに違いない。だからこそ、あえて『将来のイメージをつくるため』というもっともらしい理由づけをして、彼女の注意を本質から逸らしてしまった太公望であった。

――そして、ルイズの『呪文』が完成した。マントをたなびかせ、ゆっくりと宙へ舞い上がった彼女は、振り返って自分の家族と友人、そして先生たち全てに愛らしいとしか表現しようのない笑顔を見せると、そのままぐんっと空高く飛び上がった。

そうして、華麗に宙を舞い続ける彼女の姿は、数多くのランプの灯りにぼんやりと照らされて……まるで、物語の中から抜け出してきた、妖精のようであった。

＜風＞の『ライン』……いや、たとえ『トライアングル』でも到底できない高速での＜飛行（フライ）＞。どんな魔法を使っても＜爆発＞させ

てしまっていたあの娘が……あの手紙をもらってから、こんなわずかな間にこれほど自由に空を飛ぶことができるようになっていたとは！

娘の成長を目の当たりにしたラ・ヴァリエール公爵は、ふいに目頭が熱くなるのを感じた。わしの可愛い、小さなルイズが……あのような姿を見せてくれるとは。わしは父親として、苦しんでいたあの子に何もしてやれなかったというのに……わずかに目を離していたすきに、いつのまにかこんなに大きくなってくれていた！

「すごい、すごいわルイズ！　あの小さなルイズが……お姉さま、ご覧になって？」

「ええ、もちろん見ているわよカトレア」

手を叩いてはしゃぐ歳の近い妹を微笑ましく思いながら、エレオノールは改めておちび……末の妹が舞い踊る姿に視線を移した。以前見せてもらった＜レビテーション＞も素晴らしかったけれど、まさか＜フライ＞までこんなに上達していただなんて！　おそらく、このわたくしでもあの速さで飛ぶことはできないわ。これが『東方流』の『教育』による『成果』なのね。

それを行った彼……ミスタ・タイコーボーは、わたくしの＜錬金＞や研究内容に強い興味を示していた。東方にはこれらの概念がないので詳しく教えていただきたい……と。

そうよ、言い換えれば『西方』ハルケギニアと『東方』ロバ・アル・カリイエのどちらがより優れている、などという観点で語るのは、いち研究者として間違っているのよ。それどころか、お互いの知識を交換しあうことで、双方に大きな利益がある。今のおちびの

姿が、まさしくその象徴だわ！

おちびの学友や、オスマン氏、そしてミスタ・コルベールたちとの会話も知的水準の高いものだった。歓待は、この1週間続く。よって、彼らと話をする時間はたくさんある。自分の研究も大切だけれど、これはそれ以上に得難い、大変に貴重な機会。彼らと話をして、もっともっと自分を高めたいわ。

そう。実は『途中で席の移動ができる円卓』を彼女が用意した、もうひとつの理由がこれなのである。

――今まで、名門貴族の出であるという極端に高いプライドが邪魔をしていたが故に、自らが作る『始祖の像』とは異なり、己にも……他者に対しても厳しい姿しか示してこなかった『彫像』エレオノールの中に『研究者魂』が込められた、記念すべきその瞬間であった。

「あれが……ルイズの＜フライ＞ですか」

ヴァリエール公爵夫人・カリーヌは、その微妙な違和感に戸惑っていた。『伝説』とまで謳われた＜風＞の使い手だからこそ、離れていても僅かに異なる＜風＞の流れに、すぐさま気が付いた。

確かに、紡がれたルーンは＜フライ＞のそれであったようだけれど……＜マジック・アイテム＞の類を使っているわけではないことも、自分の『感覚』で正確に掴める。あれは、間違いなくルイズの内から生み出されたものだ。では、この感覚の隅に引っかかるものは、いったいなんなのでしょう……？

そんなとき、飛び回っていたルイズと、一瞬だけ目が合った。

……いいえ。可愛い娘にあのような顔を見せられてしまっては、もう……わたくしからは何も言えませんわね。

顔いっぱいに喜びを溢れさせ、たくさんの灯りに照らされながら中庭の池上空を舞うルイズの姿を見ていたカリーヌの目に、たとえ家族の前でも滅多なことでは見せない、優しい光が宿っていた。

――それからしばらくして。

もうじゅうぶん見てもらえただろうと判断したルイズは、優雅にバルコニー前へと舞い降りた。途端にわっと巻き起こる歓声と拍手。家族と、友人と、先生……そして、使用人達。その場に集っていた全員によって祝福された彼女は、幸福の絶頂にあった。

と……そこへ、先程までは居なかった人物が、拍手の輪に加わってきた。

それは、長い口ひげが凛々しい、精悍な顔立ちをした貴族であった。幻獣グリフォンの刺繍が胸に施された黒いマントを羽織り、礼服を着たその青年の歳のころは、25~6といったところであろうか。

「ルイズ！　小さなルイズ！　素晴らしかったよ」

彼の姿には、もちろん覚えがあった。ルイズは一瞬、歓喜の叫びを上げそうになる。だが、それはすぐに戸惑いの感情によって打ち消された。何故ならば……現れた青年は、その顔に誰が見ても明らかな程、深い疲れの色を浮かべていたからだ。

「ワルド子爵！　いや、済まなかったね……せっかく来てもらったのに、いきなりで」

ラ・ヴァリエール公爵が、何やら申し訳なさそうな声音で、その青年――ワルド子爵を労うと。

「まったくですわ！　この日のために、わたくしがご招待致しましたのに」

と、赤い縁つき眼鏡の端をキッと持ち上げながら、エレオノールが声を上げた。ただし……その内心で「うふふ……計画通り！」などと考えていたことは、誰も気付いていない、そのはずであった。

「ええ、本当に」

追従するかの如く、困ったような表情を浮かべたカトレアだけが、姉の真意に気付いていた。もちろん、彼女はそれを口に出すような真似はしない。

そんな彼らの声を聞いて、思わず小さく俯いてしまったのは公爵夫人カリーヌである。その様子を見て、ルイズは察してしまった。場の空気が読めないことで仲間内では有名な彼女が、である。お母さま……ワルド子爵に『稽古』をおつけになられましたわね？　それを目だけで語る娘に、小さく視線を外すことで応えたカリーヌ。だが……ルイズに解明できたのは、そこまでであった。

そう……自分の母の気性を嫌というほど理解していたエレオノールは、ワルドには本当に気の毒だとは思いつつも、母が間違って『客人』に対して何かをしでかさぬよう、かの青年を『生け贄』に選

択したのである。彼が末の妹ルイズの婚約者であるという事実によって、自爆する危険を覚悟をした上で――そのルイズ本人すら忘れかけていたような事柄を、わざわざ表に引っ張り出してきたのだ。

まあ、この母にしてこの娘ありといったところだろう。場に置かれた手札の中で、唯一オープンしていたカードが＜風＞の『スクウェア』であるというのも、それを後押ししていた。

――もっとも『墓場送りの対象者』として選択されてしまったワルド子爵にとっては、正直たまったものではないであろうが。

と……そんな＜風＞向きを突然変えたのは、その気遣いによって被害を免れた客人・太公望であった。彼は、まじまじとワルド子爵を見つめると、さも心配げな声でこう言った。実際、彼は本当に気を遣っていた。

「新たにお越しの客人殿は、何やら大変お疲れのご様子。そこでひとつご提案があるのですが……このわたくしめが、ハルケギニアへ参ってから新たに作成した、我が国で祝賀の席でのみ使われる＜マジック・アイテム＞を解放することによって、ルイズお嬢様へのお祝いと、こちらの客人殿の疲れを癒やして差し上げたいと愚考致したのですが……如何でしょうか？」

東方の＜マジック・アイテム＞？　この発言に、もっとも興味を示したのはエレオノールであった。ワルドも、一瞬だけ片眉を動かしたのだが、すぐにそれを元に戻した。

「ま、まあ。ミスタ、そ、それはどのような由来の品ですの？」

「はい、我が国には『御振る舞い』という風習がございましてな。

王侯貴族にのみ許されたこの風習は、こちら『西方』でいうメイジが『桃』に数ヶ月間＜力＞を込めることで作られる、特殊な＜アイテム＞を池に投げ込み、キーワードを唱えることで、水を『とあるもの』に変えるというものです」

またさらりと嘘八百を並べる太公望であったが、アイテムの効果や見た目などに関しては一切嘘をついてはいない。しかし、当然のことながらその場に居合わせた者たちが、それを判断できるわけもなく。ただ、唯一才人だけがなんとなく理解していた。

「ああ……桃か。確かにそれっぽい」

「む、才人よ。さすがに知っておるようだな？　何に変えるか言ってみるがよい」

「はい師叔。それは……『酒』ですよネ？」

その通りだ。と、頷いた太公望に、周囲から驚きの声があがる。そして、彼は懐から1つの『桃』を取り出してみせた。一見するとただの桃にしか見えないそれを、高々と掲げながら太公望は言い放った。

「この『桃』は、王や高位の貴族に対する『貢ぎ物』として、その部下が献上する特別な品です。これによって、水は一晩だけ『酒』に変わります。王侯貴族は、その家族や領地内で大きな祝い事があった時だけ、自らの屋敷にある池にそれを投げて効果を解き放ち、屋敷にいる者……家族や招待客のみならず、使用人全てにまで振る舞うのです」

ふむふむ……と、聞き入っている観衆に対し、得意げに語り続け

る太公望。こうなってしまったら、もう完全に彼のペースである。

「この酒は、いくら飲んでもほろ酔い気分になるだけで、依存性はなく身体に一切の害を及ぼしません。しかも！　体力増強、疲労回復の効果があり！　さらに、その身に浴びれば肌が若返る効果がある上に、魔法による強い浄化作用があるため、もしも池に誰かが飛び込んでも、一切汚れが残らないという優れモノなのです！！」

そして太公望は、どよめく一同を尻目に公爵へと向き直ると、一礼し……こう告げた。

「大変差し出がましいことであるとは承知の上でございますが、この『桃』を、そちらの池に解き放ってもよろしゅうございますか？」

うむ、よきにはからえ。頷くことで了承の意を伝えるラ・ヴァリエール公爵。実のところ、彼も内心、少年のようにどきどきしていたのである。

「それでは早速！」

公爵の許可を得た太公望は、そっと池の中へ桃を沈めると、いつかラグドリアン湖でやったように、池の岸辺に座り込むと、気合いを発した。

すると、突如中庭の池全体から、勢いよく複数の水柱が立ち上った。そして、眩い閃光が一瞬辺りを包み込んだと思うと――水は静まり、ほのかな光と微香を放つものへと変化していた。

使用人のひとりからグラスを受け取った太公望は、まず自分でそ

れを飲んで害がないことを示した後、新たなグラスに『仙酒』を注いで、恭しく公爵へと手渡した。ヴァリエール公爵は、受け取ったそれをワインテイスティングをするかの如く扱うと、一口だけ含んでみた。

「これは……香りといい、口当たりといい……まろやかで、舌の上でさらさらと蕩けるようだ。そして甘い。ワインとは全く異なる味わいだが……非常に高級な酒だということは理解できる」

うんうんと、実に満足げに頷いた公爵は、早速執事長を呼びつける。

「ここにいる、全員分のグラスを早急に用意せよ。もちろん……お前たち使用人を含む全てに行き渡る数を、だ。これは、そういう『酒』なのだろう？　東方からのお客人」

命令をしつつ、そう確認してきた公爵に、嬉しげに頷いた太公望。

――そして、次の瞬間わき起こった歓声が、狂乱の宴の開始を告げる、鬨の声となった。

○●○●○●○●

「こんな高貴な風味のお酒、今まで飲んだことがないわ！　香りも素晴らしいし」

「王侯貴族が、祝いの席でしか振る舞わないというだけのことはあるね」

ほろ酔い加減で言うモンモランシーに、ギーシュがそう答えていた席のすぐ側には。

「身体中に英気がみなぎってくるというか……しかも、深みのあるこの味わい。依存性はないと言われたが、正直クセになりそうだ」

「本当ですわ！　わたしも、身体の調子がいつもよりずっと良くなっておりますもの」

「まあ、あなたたちったら！　あまり飲み過ぎては……いえ、たしかこれはどんなに飲んでも害がないどころか、身体に良いお酒でしたわね。でしたら、規律も何も関係ありませんわ。カトレア、あなたは特にたくさんお飲みなさいね」

「はい、お母さま！」

笑顔でグラスをあおるヴァリエール夫妻と、それに追従する……彼らの二人目の娘であるカトレアの姿があった。

それはそうだろう、家族の成長を目の当たりにできた上に、普段であれば絶対に手に入らない東方の……しかも王侯貴族にのみ出すことが許された酒を飲みながら、その姿を思い返すことができたとあれば、親としても、貴族としても上機嫌になれないほうがおかしい。しかも、病弱な娘の健康に良いとくれば最高の気分になれることうけあいだ。

「さっき、池に手を浸してみたら……ほら！　お肌がピカピカのスベスベになりましてよ！　最高品質の化粧水でもこうはいかないわ。これがたったの一晩しか保たないというのは、本当に残念なことですこと！」

「ええっ！　そんな効果が！？　それはあたしも是非試してみないと！」

「今日のお風呂に、この『お酒』を使うよう、使用人に手配させてあるから大丈夫ですわよ」

「まあ、なんて素晴らしいご配慮ですこと！　痛み入りますわ」

池のほとりでは、あのエレオノールが、よりにもよってヴァリエール家の仇敵たるツェルプストーの娘たるキュルケを相手にそんな報告をしていた。これが数ヶ月前であったなら、絶対にありえない光景だ！　と、周囲が恐れおののくような光景が、今まさに繰り広げられている。

「……すごくおいしい。でも、いつのまにあれを用意したの？」

「なに、いつものように厨房から桃をパク……もとい頂いて、この1ヶ月間毎日＜力＞を込めていただけのこと。良い機会でしたので、この場で解放したまで」

「あなたは『薬』の類は一切作れないと言っていたはず」

「はい、作れません。これはあくまで＜マジック・アイテム＞でございますから。ついでに申し上げておきますと、自作できるのはあれだけです」

「前に依頼した件といい、本質を正しく伝えることが重要であることがよくわかった」

「さようでございます。下手な壁を作るのは、正しく物事を伝える上での障害にしかなりませぬ」

「なるほど、それは実にためになるお話ですね。情報伝達の正しさは……と」

グラスでは物足りないと、ピッチャーを拝借した太公望が『ご主人さま』であるタバサに、酌をしながら説明と講義の言葉を囁いている。そしてその隣では、彼らと同席していたレイナールが、メモ帳を取り出して、今の物事を伝える際に云々という発言を書き留めている。

国内でも非常に（外見その他の意味でも）レベルが高いメイドたちが、働きつつも交代でお酒を飲む姿を見ながら、目尻を下げているオスマン学院長。懐に入れてあった試験管に、こっそりと『酒』を注いでいるコルベール。彼が、あれを一体何に使おうとしているのかについては、あえて追求しないであげてほしい。

――このように、誰も彼もが浮かれ騒ぐこの雰囲気の中、ただひとり……どんよりと暗い空気を纏う者がいた。彼は、池のほとりに座り込み、ちびちびとグラスを傾けながら、じっとある1点を見つめ続けていた。中庭の池、その中央にある――小さな小島。そこに立つ、ふたりの姿を。

「この酒……弱すぎて、いくら飲んでも酔えねェな。たしかに、酒の味なんかわからない俺でも、これがスゴイものだってことくらいはわかる。けど……どうしてか、ちっとも美味く感じねえよ」

そう小声で呟いたのは、才人であった。

彼は、つい先程、目の前で繰り広げられた光景に、激しいショックを受けていたのだ。

「トリステイン王国魔法衛士隊・グリフォン隊隊長……ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドと申します。二つ名は『閃光』。どうか宜しくお見知りおきのほどを」

太公望が提供した酒の効果で、すっかり元気を取り戻した彼――ワルド子爵は、ラ・ヴァリエール公爵から改めて来客者たちに紹介された。そこで突如飛び出した単語が、才人を激しく動揺させたのだ。

「ルイズの……婚約者!?」

才人の口が、あんぐりと開いた。こいつが!?　この立派な服を着た、髭の貴族がルイズの？

彼の身体……いや、全てが瞬時に硬直した。

「ワルドさま……」

その男の名を呼ぶルイズの声が、震えている。

「久しぶりだな、ルイズ！　僕のルイズ！！」

ワルドさま、と彼女に呼ばれた若い貴族は、人なつっこい笑みを浮かべながらルイズの側まで駆け寄ると、その身体を軽々と、逞しい両腕で抱え上げてしまった。

僕のルイズ!?　なにそれ。呆然としていた才人の目に映ったル

イズの顔は、ほんのりと朱く染まっている。君は、相変わらず羽根のように軽いよ！　などと言って笑う男と、彼女は視線を交わし合っていた。

それを見ていた才人は、なんだか居たたまれなくなって――彼を気遣ってくれようとした仲間達の手を振り払い、その場から逃げるように立ち去った。

……そして、現在へと至る。才人が醸し出す空気のせいで、仲間の誰もがそばに近寄れない。いや、今あそこへ行ってはいけないと判断した結果、あえて普段通りの『別行動』を取っていた。

「婚約者、か……」

婚約者。コンヤクシャ。もちろん、その言葉の意味は知っている。そして、彼はそれを充分理解している年齢に達している。そう、彼はルイズと結婚の約束をした相手……ということだ。そうか、そうだよなあ……再び池の『酒』をグラスに継ぎ足しながら、才人は思った。

でかい城に……街どころか市レベルの土地持ち。由緒あるお家柄。ルイズは本物のプリンセスなんだ。日本にいた頃、自宅の居間に置かれた液晶テレビに映っていた――にこにこと笑顔を振りまきながら、黒塗りのゴツイ車に乗って、ＳＰだの報道陣だのを大勢引き連れていた外国の女王陛下や、自国の皇族たち。一般庶民である才人にとって、彼らは液晶画面の向こう側にしかいない……別の世界の住人だった。

本当に、別の世界――俺にとって異世界の人間だったんだな、ルイズは。

――最初は、可愛い顔はしてるけど、ひとの話を一切聞かないイヤな女だと思った。その考えが少しだけ変わったのは、ギーシュとの決闘の時だった。自分の名を呼びながら、笑顔で駆け寄ってきた彼女を見て、こんな顔もできるんじゃねェか……と、心の片隅が暖かくなった。

――それが憧れに変わったのは、フーケのゴーレムを見たときだ。たったひとりで、あの巨大な化け物相手に立ち向かおうとした。それが貴族の務めだから……そう言って振り返った彼女の顔は、凛々しくて、美しかった。あのときはじめて、手助けがしたい。そう思った。

――役に立ちたい。そう感じたのは、あの日……舞踏会で、ダンスに誘われてからだ。踊ってくれませんこと？　そう言って差し伸べられた手は、白くて、か細かった。絶対コイツを手伝ってやる。そう誓った。

――絶対一緒に行く。そう決意したのは、あいつが初めて＜魔法＞に成功した日だった。彼女に示された『道』は、俺が手助けすることで開かれる。そう教えられた時……俺の胸は高鳴っていた。

「わかってたけどさ……こうやって確認しちまうと、なんだかなあ……」

答えなんて、あの時点でもうとっくに出てたんじゃないか。けど、それを口にしたら全部壊れそうで、言えなかった。なあにが『伝説』だよ。誰が『神の盾』ナンデスカ？　そんなご大層な名前貰っちまった俺は……ほらこの通り、ただの臆病者じゃねェか。

『竜の羽衣』を纏って空で戦う『大空のサムライ』？　笑っちまうぜ。あのとき、シエスタの父ちゃんに言った通りだ。俺は、そんな立派な男なんかじゃない。その証拠に、こんなところで、いつまでも未練がましくあいつを見ながら、ウジウジグダグダしてやがる。

「俺……やっぱり、ルイズに惚れてたんだな」

そう、口には出さず、己の胸に問う才人。そうだよ、だから『厳しい現実』ってヤツを突き付けられて、こんなにショック受けてんだ。畜生。再び手にしたグラスを池に突っ込んで、なみなみとそれを満たした才人は、いっきに飲み干した。

しかし、酔えない。いつもならば、ワイン瓶を半分も開けたらもう視界がぐるぐる回り始めるくらい、酒に弱いはずだった自分が、潰れたい時に限って、それができない。と……ここに至って、ようやく才人は思い出した。これがどんなに飲んでも『ほろ酔い』程度で止まってしまう『魔法の酒』だったことを。

「畜生……あんまりだぜ、東の『英雄』さんよ……」

それがとんでもない八つ当たりだと、自分でもわかっている。だが……才人は、この世界に来てはじめて出来た友人を、この日――心の片隅で恨んだ。

第６４話　祝賀と再会と狂乱の宴（後書き）

エレオノールのターン！　ドロー！　自分の場に伏せられたカード、オープン！

『閃光のワルド』『東のマジックアイテム』『伝説の勇者サイト』

ワルドの効果は＜風＞の『スクウェア』！　オープンしたと同時に『烈風カリン』の持つ先制攻撃を無効化！　ただし、効果が発動すると同時に『カードの墓場』へと送られる！

『烈風カリン』の先制攻撃妨害成功で、条件が満たされた『東のマジックアイテム』起動！　その効果とは、直前に『墓場』に送られたカードが、オープン状態で場に復活できるもの！　さらには場に出ている全カードのＨＰ及びＭＰを回復！　ただし『伝説の勇者サイト』に『意気消沈』の効果がかかり、６面ダイスを振って出た数値分のターン、一切の行動が不能となる！

……さて。そんなわけで、サイトにとってある意味最大のライバルにして巨大な障害の登場です。せっかく出てくる前にダメージを被っていたにも関わらず、太公望先生が珍しく（？）心からの善意で行った行動によって、防がれていたかもしれない精神攻撃を豪快に受けてしまったサイトに明日はあるのか！？　待て次回！！　（現時点で次回分３０％執筆中）

と、いうわけで続きは早ければ明日ＵＰ予定でございます。なお、重ねてお願い申し上げますが……この先の展開に気が付いた皆様。誠に申し訳ございませんが、感想欄への各種バレ及び、予想書き込

みは、どうかご遠慮くださいませ！　重ねてお願い申し上げます。

と、忘れておりましたが例の「ポケット」は自分の捏造設定ですので念のため。いや、封神演義の原作で、いつもあれだけの物量が入っているにも関わらず、一切膨らんでいない彼の懐について納得するにはこれくらいしかないのではないかと愚考した次第であります。そして、桃はピタゴラスイッチと防衛ラインを突破した先にあったものをパクって、自作しておりました！　原作でも、こっそり作ってましたしね……太公望さん。

２０１１／０６／１１　誤字脱字修正
２０１１／０８／１３　誤字脱字修正

第６５話　閃光、多くの道に迷うの事

――ラ・ヴァリエール公爵家の屋敷、中庭の池にある小島にて。

ルイズは、困惑……いや、沈痛といったほうが適切かもしれない表情を顔に浮かべながら、目の前で笑うワルド子爵の身体を気遣っていた。

「ワルドさま、本当にもう大丈夫ですの？」

「ははは、心配性だな僕のルイズは！　いただいた『酒』のおかげで、この通りさ」

そう言って、再び自分を、その逞しい両腕で抱きかかえてみせてくれたワルドに対し、彼女は本当に申し訳ない気持ちでいっぱいになっていた。

かつて……よくこの屋敷を訪れては、小さな自分の遊び相手になってくれていた、憧れのひと。いつもの夢の中、小舟に隠れていた自分を見つけ出しては手を差し伸べてくれていた、歳の離れた兄のような存在。

――ワルド子爵。彼は、ヴァリエール領と隣接するド・ワルド領の現領主にして、ルイズの婚約相手である。と、いっても友人同士であった彼らの親が、口頭で交わした約束だ。証文の類があるわけではない。

ただ、貴族の『約束事』というものは、軽々しく行われるものではない。実際、何気なく放ったつもりの一言が、生涯を賭けて果た

すべき誓いと化した……などという例が星の数ほど存在するのだ。

それを充分に心得ているであろう、ラ・ヴァリエール公爵は……当時、本気でふたりを結びつけようと考えていたといって差し支えないだろう。現在はどうなのかというところまでは、正直なところ伺うべくもないが。

事実、１０年前――ワルド青年を突如襲った悲劇さえなければ、状況的に考えて、彼らは既に結ばれていてもおかしくはなかった。そんなふたりの『道』が突然違えてしまった最大の理由とは……彼の父が、戦場に散った為だ。

既に母を病で亡くしていた彼は、躊躇わなかった。すぐに父親の爵位と領地を継いだ後、ワルドはヴァリエール家を訪れ、その目に涙をいっぱい溜めた幼いルイズに対し、こう言ったのだ。

「いつか立派な貴族になって、君を迎えに来るからね」

その一言を最後に、ルイズに背を向けた彼は――王都トリスタニアへ出て騎士見習いとなった。年に数度、ヴァリエール家を訪れることはあったものの、その間、ルイズはあまり彼と顔を合わせられなかった。ワルドに避けられていたのではない、彼女が彼から逃げていたのだ。

何故ならば。屋敷を訪れるたびに出世していたワルドと比べ、自分は幼いころと変わらぬ＜爆発＞しかできないおちこぼれメイジのままだったから。

そのうち、ワルドはだんだんと訪問の数を減らしてゆき……いつしか、トリステインの中でもエリート中のエリートしか所属できな

い女王陛下の近衛部隊にして、全男子生徒の憧れたる魔法衛士隊・その隊長を任されるまでに出世していた。

だからこそ、当時のルイズはこう思い込んでいたのだ。もう、婚約など反故にされてしまったに違いない……と。だから、ワルドさまは遠慮して、屋敷へいらしてくださらないのだ。おちこぼれメイジなど、グリフォン隊の長の隣に立つには相応しくない。

それを、直接あたしや父さまに仰らないのは、きっとお優しいワルドさまなりの思いやりなのだわ……そう自分の中で結論していた彼女は、とっくに諦めていたのだ。

――ワルドさまは、もう自分の手が届かぬ、遠いところへ行ってしまわれた。さようなら……幼いころの憧れ。

……しかし。つい先程の『事件』を思い起こしたルイズは、とあることに思い当たったのだ。そこで、彼女はおそるおそるといった表情で聞いてみることにした。

「ワルドさま。お聞きしたいことがあるのですが」

「なんだい？　ルイズ」

「こ、子供の頃は、恥ずかしながら気付いてい、いなかったのですが……も、もしや、騎士見習いになった後に、や、屋敷へ、い、いらしてくださっていた際に、その……き、今日のよ、ような？」

その言葉を聞いたワルドの全身が、瞬時に硬直した。そして、ギギギ……と、まるで間接部に油を差すのを十数年間忘れていた、さび付いた金属製の甲冑を身につけているかのようなぎこちない動き

でもって、腕に抱えていた少女をそっと岸辺に降ろすと、頭を押さえて蹲ってしまった。

「や、や、やっぱり……！　お、お、お母さまったら……！」

衝撃の真実を知ってしまったルイズは、ぷるぷると身体を震わせ、その場で叫びそうになるのを、必死にこらえた。まさか。まさかとは思っていたが、よりにもよってワルド様がいらっしゃるたびに『稽古』をおつけになっておられたのですか、お母さま！

一切〈魔法〉ができないおちこぼれの娘に、来訪のたびにとんでもない稽古を押しつけてくる姑がもれなくついてくる。そんな状況で、あたしがワルドさまに婚約を破棄されないほうがおかしいですわ！！

……そう。ルイズとしては、もう婚約はとっくに『破棄されたもの』だという認識があった。今回、彼が『婚約者』として紹介されたのは、あくまで儀礼上のことだと考えていた。

さらにいえば、姉エレオノールが最近婚約破棄をされたばかりという事実があり、連続してそのような事が表沙汰になったら家の恥となる。だから、優しい彼はきっとそれに乗ってくれているのだ。彼女は、心からそう思い込んでいたのだ。

「い、いや、そんなことは気にしないでくれ、ルイズ。正直なところ、君のお母上に科していただいた『訓練』のおかげで、今の地位に就けたといっても過言じゃないんだ」

元トリステイン王国衛士隊・マンティコア隊隊長『烈風』カリン。その苛烈さと『鋼鉄の規律』とまで呼ばれた厳しさが故に、かの者

が隊長職にあった時のマンティコア隊は、各国にその名を知られる精強な騎士団であったといわれる。

当然、彼らに科せられた『訓練』も、他部隊のそれとは一線を画すものであった。事実、当時を知る現マンティコア隊隊長など、未だに現役を引退したカリンのことを夢に見る程に恐れている。そう、本当にいろいろな意味で。

――かつておちこぼれであったルイズは、その内容を誰よりもよく知っていた。それだけに、自分のあずかり知らぬところで、かつての『憧れの君』がそんな目に遭っていたことも、それを知らなかった自分自身にも腹が立った。

「相変わらずお優しいのね、ワルドさまは」

そう言って頭を下げようとしたルイズを、ワルドは押し止めた。

「ま、まあ確かに厳しい訓練ではあったけれど、僕は本当に気にしてなどいないよ。むしろ感謝しているくらいさ。逆に、申し訳ないくらいだよ……出世のためとはいえ、こんなに長い間、君のことを放っておいてしまった」

そう言って、ワルドは申し訳なさそうに顔を伏せた。それを聞いたルイズの頬が、恥ずかしさのために朱く染まる。知らないとは本当に罪なのだ……と。

……実のところ。口ではああ言ってはみたものの……彼にとって、あの『訓練』は正直思い出したくないレベルのトラウマなのである。

「婿殿。このわたくしが自ら、ヴァリエール家の娘を迎えるに相

応しい訓練をして差し上げます」

将来母上と呼ぶことになる存在が、まさかあの『烈風』殿だなどとはつゆ知らず。

「はっ！　ありがたき幸せ！」

などと答えてしまった、若き日の自分を……後ろから羽交い締めにしてくびり落としてやりたい。ワルドが今日の祝宴に招かれた際に、最後の最後まで出席するか否かを迷わせたもの。それが、予想通り執行された『訓練』であったなどとは、間違っても口には出せない。もちろん、男の意地的な意味でだ。

とりあえず、話を変えなければ。それに、ずっとここに居るのは状況的によろしくない。そう考えたワルドは、すぐさま用意していた会話パターンのうち、ひとつを取り出すことにした。

「それにしても、素晴らしかったよルイズ。あんなに華麗に飛べるようになっていただなんて！　ひょっとすると、僕よりも速いんじゃないかな」

「いえ、そんな……あたしなんて、まだまだですわ」

そう言って笑顔を向けてきた少女には、かつての面影がはっきりと残っていた。ワルドは、過去を――静かにだが、穏やかに時が流れていた昔を、ふいに思い出した。

ワルドさま、ワルドさまと、小さな手を精一杯伸ばして、自分にまとわりついてきた、幼いルイズ。兄弟のいない自分にとっては、本当の妹のような存在だった、小さなルイズのことを。

しかし、彼はその美しい思い出を、必死に頭から振り払った。駄目だ、この娘に情を移してはいけない。何故ならば、僕には絶対に果たさねばならない誓いがあるからだ。それは、たとえどんな手を使ってでも達成せねばならない悲願。彼女は、そのために必要な『駒』でしかない。そう考えろ！

その笑顔とは裏腹に、どす黒い情念で心を満たしていたワルドは、彼女の口からあることを確かめるべく、その内に深く踏み込んだ。

「いや、実際驚いたよ。＜フライ＞を使わずに、あんなふうに飛べるのは、君くらいじゃないかな」

ルイズの鳶色をした両目が、驚愕によって見開かれる。その顔を見て、やはり……と、ワルドは思った。たとえ疲れ切っていたとはいえ、優れた＜風＞のメイジである彼は、時間こそかかったものの、彼女の周りにある＜風＞が＜フライ＞のそれではないことに気が付いた。だが、どうやってそれを実現しているのかまではわからない。

――やはり、彼女は『そう』なのか……？　ワルドは、さらなる一歩を踏み出した。

「お父上からいただいた招待状に、東方から来た＜風＞メイジが、君の＜魔法＞を見てくれた、と書かれていたんだ。もしかして……あれは、彼が教えてくれた『東』の魔法なのかい？」

「いいえ。あれは、その……」

ルイズは悩んだ。果たしてこれを言ってしまってもよいのかどうか。だが……別に『念力で飛んでいる』ことを隠しているわけでは

ない。喋ってはいけないと念押しされてもいない。そもそも、クラスメイトだって、自分が＜念力＞で『箒』を浮かせて飛んでいることを知っている。

お忙しいのに、こんなちっぽけなわたしのお祝いに、わざわざ危険を顧みず駆けつけてくれたワルドさま。そのひとに、嘘をつくなんて貴族としてあるまじきふるまいだわ。そう判断した彼女は、ワルドさまだけにこっそりお教えいたしますわ、と念を押した後……答えを言った。

「実は＜念力＞で浮いていたのです。あたしにそれを教えてくださった『先生』がおっしゃるには、もっと慣れれば＜フライ＞よりも楽に、しかもずっと速く飛べるのだそうですわ。ひょっとすると……ワルドさまも、練習すればすぐおできになるのではないかしら？」

なん……だと……！？　まさか＜念力＞で空を飛ぶなどとは！　少なくとも、ハルケギニアにはない概念だ。ひょっとして、東ではこれが『普通』なのか！？

いや待て、時間がない。今いちばん聞きたいのはその件じゃないんだ。気になるのは事実だが、それは後ほど、改めて教えてもらえば……ああ、しかし＜フライ＞より速く飛べるとは……。

『閃光』の二つ名を冠する者としては、正直なところ、ものすごく心惹かれるものがある。だが、その内心の葛藤を必死に押さえ込んだワルドは、もうひとつ確かめたかったことを口にした。その詳細をぼかしつつも。

「いや、驚いたよ……例の『酒』といい、東方とは実に興味深い

場所なのだね。もっと別の〈魔法〉や〈マジック・アイテム〉があったりするのだろうか。いつか、君とふたりだけで彼の地を旅してみたいよ、ルイズ」

――いつか、君とふたりだけで彼の地を旅してみたいよ。

この言葉に、ルイズは激しく動揺した。何故ならば……数日前に見た夢のワンシーンを思い出したから。

『約束してただろ!?　みんなで一緒に行こうって』

いつも、ワルドさまが現れていた夢の中。でも、あのときわたしの手を取ったのは別のひと。どうして、今になってあんな夢を見たの？　あれは、憧れが書き換わったから……？　ううん、まさか。そんなはずは。

俯いてしまったルイズを見て、ワルドは思った。長い間会っていなかったが……まだ、彼女の心は僕に向いている。だからこそ、ふたりで旅をしようという言葉に動揺してしまったのだろう、と。確認したい言葉は聞き出せなかったが、まだ方法はある。

「さて、いつまでも主役の君をひとりじめしているわけにはいかないし、ホールへ戻ろうか。もしよかったら、君のお友達と『先生』を紹介してもらえるかい？」

そのワルドの問いに、ルイズは黙って首を縦に振るのが精一杯であった。

○●○●○●○●

――かっこいい。ああ、そうだねこいつかっこいいヨ。

並べられた円卓を囲み、歓談する者たちの中で。才人は、ただひとりの男だけを、じっと見つめ続けていた。

鋭く光る、鷹みたいな目。男らしさを強調する形のいい口髭。おまけに＜魔法使い＞のくせにがっちりした身体つきしてやがる。しかも、イイやつだ。俺のことを『平民』とか言って見下さなかっただけじゃなく、ルイズが世話になっているそうだね！　なんて笑顔で肩叩きやがった。おまけに、超エリートらしい。

才人は、悔しかった。どこを取っても、自分が勝てそうな要素が見あたらない。

しかも、さっきからルイズに取ってる態度！　ちょっと酒が減ったら注文してやったり、魔法を使った後だから疲れただろうなんて言って、足元に置くクッションだの、柔らかそうな膝掛け持ってこさせたり。これが貴族のたしなみってやつですカ！？　いや、モテる男の秘訣ってトコ？

そうか、ルイズはこいつと結婚するのか。そう考えた途端、才人は自分の胸の奥に、大きな穴がぽっかり開いたように感じ……がっくりと首を垂れた。

そんな才人の態度を横目で見ていた太公望は、さすがにこのままではまずいと思った。よって、彼の脇腹を軽く――現在、タバサ、太公望、才人の順で並び腰掛けている。従者に対する扱いとして、これは異例中の異例だ――肘で小突いた。それがまた、才人を苛つかせた。

いいですよネ、アナタは。ねえ？　伝説の英雄サマ。なにせ、本物ですから！　何かの間違いで呼ばれた俺なんかと違って！　……もう完全に八つ当たりでしかなのだが、気分が底の底のどん底まで落ちてしまっていた才人は、そこで、よりにもよって恨みの矛先を太公望に向けてしまった。

……もしも。ワルドが次に発した言葉がなかったら。才人は、その僻みを口に出してしまっていたかもしれない。だが、閃光の如く繰り出されたそれによって、ある意味才人も、太公望も大変な窮地から救われた。

「ミスタは、何故ルイズに＜魔法＞を教えてくださったのですか？」

ワルド本人としては、単なる探りとして提示したに過ぎないカードだったのだが。太公望から戻ってきた反応は、彼にも……そして、それを聞いていた周囲の者たち――ヴァリエール公爵家の人々、もちろん学院関係者全てを含む――にとって、完全に想定外のものであった。

「いや……まあ、お恥ずかしい限りなのですが。人ごととは思えなかったのですよ。我が主人よりも2つか3つほど若かった頃……小石ひとつ、まともに動かすことができなかった『おちこぼれ』の＜魔法使い＞としては」

――小石ひとつまともに動かせなかった『おちこぼれ』。

当然のことながら、周囲はざわめいた。どん底にいた才人ですら、ピクリと反応した。

ちなみにだが、これは真実である。いい加減、太公望は参っていたのだ。ここまで手札を晒しすぎたことによる弊害に。

英雄だのなんだの言われることも、届かない領域にいるような目で見られるのも、全員から頼られすぎるのも……はっきり言って、今後を考える上では迷惑極まりないことであった。自分にとってもそうであるし、なにより、今のままでは将来ある者達の成長を阻害してしまう。

もともとは自分の不注意から晒すことになってしまった『正体』であったが、これを機に、ある程度リセットさせてもらおう。実際問題、彼らと同年代であった頃……自分に＜力＞がなかったのは間違いのない事実だから。

ワルドの言葉を『仙桃の礼』として受け取ることにした太公望は、それを策に変えた。

「ミスタが『おちこぼれ』！？　嘘よ、信じられないわ！」

そう言って、思わず立ち上がったのはルイズである。それはそうだろう、誰よりも速く空を飛び、複数の＜風＞魔法だけでなく＜火＞系統すら使いこなす『天才』。ルイズの目には、太公望がそのように映っていたのだから。

「生まれ落ちたばかりの赤ん坊が、いきなり＜魔法＞を使えたりするわけではないのと同じですよ。歴史上『伝説』と呼ばれる者たちですら、例外ではありません。そこに至るまでの『道』を歩んでいるからこそ、彼らはそのように語り継がれる存在となったのです。無の状態……原初からある『伝説』などないのです」

なにやら思うところがあったのであろう、ヴァリエール公爵がうんうんと頷いている。

そして――才人が再び反応した。無からある『伝説』など存在しないという、彼の言葉に。ただ、今回向いた方角はいつものそれではなかった。才人はとことんネガティブ思考に陥っていた。なに？　ひょっとして俺の心読まれてる！？　さっすが伝説すごいデスネ……ってなにそれ超怖い。

もちろん太公望に仙術的な意味での＜読心術＞の心得などない。だいたい、そんなものがあったら、例の女狐相手にあそこまで苦労していないだろう。もう、そんなことを考える余裕すらない才人であった。

「わたしにも信じられない……あなたが、おちこぼれだった！？」

思わず声を出してしまったタバサと、それに同意するように頷く魔法学院関係者。その反応に「釣れた！」と実感しつつも、内心とはまるっきり正反対の表情――眉をしかめてボソッと呟く太公望。

「ご主人様までそれを仰いますか！？　さんざん申し上げてきました通り、わたくしには本当に＜メイジ＞としての才能がなかったのですよ！」

彼はわざとらしくため息をつき、がくっと肩を落としながら言葉を続ける。

「同期の者たちが、自在に＜火＞や＜水＞を操る中で……小石１個、数サント＜念力＞で持ち上げただけで倒れてしまうような貧弱

者でした。そのせいで、周囲から完全に邪魔者扱いされていたことすらあります。もしもあのとき『師』に巡り会えなければ、わたくしは、あそこで潰れていたかもしれませぬ」

――もしそれが本当なら、あたしに近い状態だ。ルイズは思った。何をやっても＜爆発＞してしまっていた自分と。いいえ、気絶しなかったぶん、あたしのほうがずっと恵まれていたのかもしれない。そして想像した。もしも自分が、彼に巡り会えなかったら……どうなっていたのかを。だから、彼女は問うた。

「ミスタの先生って、どんな方だったの？　どうやってあなたは変わったの！？」

その問いに、重々しい雰囲気でもって頷き、答える太公望。

「そのかたは、わたくしの『根本』となった『自然科学』の教師にして、国内でも高名な＜マジック・アイテム＞の制作者でした。師は、ある日……なぜ、自分は他人と同じように＜魔法＞が使えないのかと嘆いていたわたくしに、こう仰ったのです」

そして、大きく息を吸い込むと。彼は自分の師をそっくり真似た口調で怒鳴った。

『お前には最初っから＜メイジ＞としての才能なんぞ一切期待しとらんわ！　自分でもわかっとるだろ！？　だが、いつまでもわしの屋敷でぐうたらさせておくわけにもいかんのだ、このたわけが！　＜魔法＞の才能が足りないぶんは、その狡い頭でなんとかせいボケ！！』

「……と」

――見事なまでに、場が凍った。一部、テーブルに突っ伏した者まで存在した。

太公望に＜メイジ＞としての才能がないのは当然である。そもそも彼は、仙人なのだから。よって、嘘は言っていない。ちなみに、師の言葉も後半末尾に限っていえばほぼそのまんまである。

「そもそも、わたくしは『頭の回転の速さ』を買われてその師に紹介された者でしたので……＜魔法＞面に関しては全く期待されていなかったのですよ。ですが、それでもやはり＜力＞に憧れる年頃でしたから、周りと自分を見比べながら、いつもこう思っていたのです」

……自分も、みんなと同じように＜魔法＞が使えるようになりたい。

「そこで、我が師に教えを請い出ましたところ……蹴り一発で気絶させられた挙げ句、襟首を掴まれて、師の住まう屋敷の外へと引きずり出されたのです」

――この話が本当に本当なら、ミスタはあたしと同じだったんだ。ただ、みんなと同じようになりたかっただけ。でも……それを願い出ただけで気絶させられるなんて！　彼の先生は、自分の母親よりも数倍苛烈かもしれない。ルイズは思わずその光景を想像し、身震いしてしまった。

なお、太公望が師の部屋から蟷螂拳で吹っ飛ばされるのは一種のお約束である。

「で……そのまま図書館に連れ込まれましてな。『自然科学』の棚にある＜本＞の内容を、連日徹底的に叩き込まれました。その上でより効率化を計るため『速読』『分析』『解析』『複数思考』を習得したわけですが……これらを身につけるまでの数年間は一切＜魔法＞の修行どころか、練習すらさせてもらえませんでした」

と……ここで、ワルドが手を挙げた。

「失礼。先程から何度か『シゼンンカガク』という言葉が出てきておりますが、初めて耳にする言葉です。それは一体どんなものなのでしょうか……？」

「簡単に申しますと……自然の成り立ちや在り方を『法則』として導き出し、理解するための学問です。たとえば……そうですな、魔法によらない自然の＜風＞は何故吹くのかを簡単にご説明します」

『風は何故吹くのか』。＜風＞メイジにとっては、とてもわかりやすい内容である。

「これは、温度によって空気の重さが異なることが根本的な理由です。身近でわかりやすいものとしては、そう……太陽の光によって『暖められ軽くなった空気』が、海の水に触れることで『冷えた重い空気』になり、それらが重さの違いによって、上がったり、下がったり……ぐるぐる『循環』しているのが、自然に＜風＞が吹く『法則』のひとつとして挙げられます」

この説明に、即座に『自然科学』の意味が理解できた！　という表情を見せたのは＜風＞メイジ全員と、オスマン氏、コルベール、エレオノール。才人に関しては、学校で既に習っている内容のためメンバーからは除外する。

「魔法でも＜循環＞を意識することで、より効率的に＜風＞を吹かせられますからな」

納得したという顔でそう口にしたワルドに、太公望は笑顔で頷いた。

「その通りです。つまり、師は……もともとの＜力＞が弱かったわたくしに、そういった『法則』を徹底的に学ばせることで、少ない＜力＞で効率的に事象を発生させるための『知識』と『応用力』を叩き込んでくださったわけです」

――事象を学び……効率的に、かつ計算して＜魔法＞を使う。コルベールは思い出した。これは、今まで彼がよく口にしてきた言葉だ。たしかに、この『学問』を修めているか否かで、メイジとしての実力に相当な差が出ることは確かだろう。

事実、コルベール自身がそうだ。自己流だがこの『自然科学』の扉を開け放ち、入り口どころか、既に玄関から廊下へ上がりかけている彼は、通常の『トライアングル』では為し得ない事象を発生させることに成功している。その積み上げてきた『知識』によって。

そんな彼らの思いとは裏腹に、太公望の弁舌は続いていた。

「ハルケギニアにも、これと非常に近しい学問があるのですが……自分の立場では、まだ『フェニアのライブラリー』に収められている、ごくわずかな資料にしか触れられません。そのため、ハルケギニアにおける正式な学問としての名称がわからないのです」

実に残念だ。そう言いたげな顔をしていた太公望に答えたのはエ

レオノールだ。なにしろ彼女は、この手の話がしたいが為に、わざわざ休みを取ってまでこの場を用意したのだから、それも当然だろう。

「それは、各国立アカデミーの最先端レベル。しかも、首席研究員になって、ようやく着手できるような機密性の高い内容ですもの。一般に出回っているはずがありませんわ。学問の名に関する総称についても確定しておりませんし」

「やはりそうでしたか！　もっとも、総称以外についてはわが国でもほぼ同様の扱いです。先程の図書館も、師がいたればこそ入館を許されたような、一般人立ち入り禁止の場所でして……本来であれば、自分のような若輩者が読める書物ではなかったのです」

そして、太公望は場を締めるべく……動いた。

「そして、それらのあらゆる自然現象に関する『法則』『事象』を学んだ後……師が、この『杖』をわたくしに授けてくだすったのです。そして、ここからは、我ながら少しお恥ずかしい話となるのですが……」

左手で懐から『打神鞭』を取り出し、空いた手で頭を掻きながら太公望は言った。

「以前『疾風』ギトー先生の授業で言った台詞なのですが……実は一部、我が師の受け売りなのですよ。この杖を渡されるときに、こう言われたのです」

『わしはお前に＜風使い＞としての『道』を示す。お前は、時間をかけ万物の事象を学んだ。それを元に知恵を振り絞れ！　＜風＞

はな、使い手次第でいくらでも化けることができるのだ！　そう…
…たとえ元の＜力＞が弱くとも＜使い手＞次第でいくらでも『最強』
に近付くことができる！　その汎用性の高さが故に』

「……と。それと併せて、複数の＜マジック・アイテム＞を卒業
の祝いとして贈られました。残念ながら、わたくしには師のような
＜アイテム作り＞の才能はなかったのですが、師曰く、お前は制作
者にとって完全に想定外の使い方をするから面白い、その発想力を
生かせ！　などと言われましてな」

この『アイテム作りの才能』が云々は、半分本当である。勉強し
ようとおもえば、きっと出来ただろう。しかし、太公望は、その手
のことが実はちょっと苦手……と、いうよりも覚えるのが面倒で、
サボりまくっていたからだ。

彼からすれば、自分などがやるよりも、身近に『天才技術者』が
いるのだから、全部そっちに任せればいい。そういう考えがあった
のだろう。

――任せきった結果、いろいろと弊害もあったのだが、ここでは
割愛する。

ちなみに。ここでわざわざそれらしくアイテム云々の話を出した
のは、彼が今後しようとしていることに関する『前置き』だ。あり
ていにいえば、このハルケギニアで『異端』とされてしまうような
事柄――特に宝貝で起こす一部の奇跡――について『アイテム使っ
てやってます』という誤魔化しをするためである。

ちなみにこの案は、例の『夢の部屋』でキュルケから提示された
ものだ。『打神鞭』から飛び出した『杏黄旗（きょうこうき）』の効果を見ていた彼

女は、その見た目にそぐわぬ＜力＞が強い印象として残っていた。

よって、アレを使って誤魔化せばいいのではないか？　と、いう彼女の提案に太公望は賛意を示し、いろいろと膨らませようと考えていた。と……話を戻そう。

「それで、あなたは＜マジック・アイテム＞を集めることに拘るの？」

タバサの言葉に、太公望は頷いた。それを聞いたワルドの表情が、ごくごく僅かに強張ったことに気が付いたのは、周囲に気を配っていた太公望と、彼の顔をずっと見続けていた才人だけだった。

「さようです。卒業から１０数年、こつこつと積み上げて、ようやく現在の段階までたどり着いたわけですよ。ですが、まだまだ力不足であることを実感しているために＜マジック・アイテム＞でそれらの補助をしているわけです」

――あれで力不足なのかよ。どんだけ師叔はとんでもない戦いを潜り抜けて来てんだよ。パソコンで見た数字と、直接聞いた言葉だけじゃ想像がつかない。ウン、なるべくしてなった伝説なんだよな。ほらみろ、やっぱり俺はダメなんだ。オケラ以下だ。いや待て、オケラって結構凄くなかったっけ。じゃあそれより下だ。ミミズ？　嗚呼、ボク、モグラに食われるヨ。

もう、完全に思考の『悪循環』にはまり込んでしまった才人は、ひたすらに自分を貶める作業に取りかかってしまった。普段の姿からはあまり想像がつかないが、実は彼、非常にアップダウンの激しい性格をしているのである。

いい意味でも悪い意味でも、風の循環そのものだ。現在、彼の空気は冷え切ってしまっているのだ。一度こうなると、彼はなかなか自分の世界から戻ってこられない。ちなみに、才人がここまで激しい落ち込みを経験したのは、ハルケギニアに来てから初めてであった。そう……太公望によって彼は周囲から守られ、心が折れるという経験を、ほとんど積めなかったから。

――これも太公望が危惧していた、ひとつの弊害かもしれない。

「と、まあ……そういうわけで、ルイズ殿の＜魔法＞を拝見しましたところ、我が国で『戦いの天才』と謳われし＜火＞の使い手が、若い頃にしていたと伝えられていた失敗と非常に似通っておりましたので、これはもしやと思い、改めて調査させていただきましたところ、まさしく！　その彼と同じ『才能がありすぎる』が故に＜魔法＞の枠に収まりきらずに＜爆発＞させてしまっていたことが判明致しまして」

そして、現在に至ります。と……これで締めようとしていた太公望だったが、それは＜火＞それも『戦いの天才』と聞いて黙っていられなかったキュルケによって阻まれた。

「ミスタ！　ひょっとして、その使い手って、前に少しだけおっしゃっていた東方最強の＜火＞メイジのお話ですの？」

「はい、その通りです。彼は＜火＞と＜風＞を同時に操る、戦の申し子。勇者と呼ばれる存在と伝えられております。しかし彼は、その才能に驕らず、無駄な殺生は一切行わず、人々を救うためだけにその＜力＞を振るった、高潔な魂の持ち主だったとのことです。そう……よくルイズお嬢様が仰る『貴族たるものかくあるべし』を、体現しておられた方ですな……わたくしが知る伝説によれば、です

が」

「伝説によれば……と、いうことは、そのかたはもう……？」

ヴァリエール婦人の質問に、太公望は頷いた。

「なにしろ、３０００年以上前の話でございますから。ただ、その功績は我が国の歴史に記されております。ある意味では、ルイズお嬢様の『道』は、彼に近しいものとなるのかもしれませぬな。あくまでも、お嬢様がそう望まれるのであれば……ですが。ただ、個人的にはもっと穏やかな方向へ進んでいただきたいと考えております。なにしろ、お嬢様は学問に関しても優秀であらせられますから」

その解答に、ルイズの父親であるラ・ヴァリエール公爵は満足した。たとえ才能があっても、愛する娘を戦に出すなどという真似はしたくない。一瞬危うい方向へ話が進みそうであったが、少なくとも娘を目覚めさせてくれた人物は、穏やかな道を提示している。彼としても、それには大賛成であった。

そして公爵は、一瞬だけちらと愛する妻の顔を見た。そして気が付いた。ほんのちょっとだけ、彼女の顔に残念そうな色が浮かんだのを。果たして、その＜火＞の使い手と戦いたかったのか、娘が自分と同じ道を歩んでくれないことに対する反応であるのか。

妻の持つ気性に、思わずため息をつきそうになったラ・ヴァリエール公爵であったが、彼はなんとかそれを押し止めることに成功した。

「なるほど。学者らしいご意見ですこと。ルイズ……よい方に巡り会えましたわね。そして、ミス・タバサ。彼を娘に引き合わせて

くだすったこと、改めて礼を申し上げます」

ルイズは、母の声で思い出した。そうだ――彼は、遠く離れた時代からタバサが呼んでくれたんだ。しかも、サイトの知っている歴史の中の英雄。そんな人物を、３０００年も前の時代から――世界を越えて引き合わせてくれた。

ミスタ・タイコーボーが『おちこぼれ』だったという話は、今の彼からは正直想像がつかないけれど……でも、そう考えると、あたしに魔法を教えてくれようとしたときに……ミスタがあそこまで不機嫌になってしまった理由が、少しわかる気がする。

自分と同じ『おちこぼれ』だと思って同情してくれていたのに、実は彼の世界で『最強』の火メイジと同じ才能がありました。それがわかったとしたら……もしも、あたしが彼と同じ立場だったら……確かに、悔しかったと思うもの。

ルイズは、立ち上がった。そして……改めてタバサと太公望のふたりに感謝を述べた。本来なれば、そこで話は終了するはずだった。太公望が、そのように『流れ』を導いていたからだ。しかも、トリステインでも有数の大貴族相手に、自分の素性を『学者』として認識されたという、太公望本人にとって思わぬ副産物を手に。

……だが、残念ながら話はそう上手く運ばなかった。

もしも、この物語がハルケギニアではなく地球上で繰り広げられていたならば、太公望はこの時を振り返って、こう例えたかもしれない。

――『歴史の道標』の介入か？　と。

○●○●○●○●

――僕の推理した内容は、ほぼ確定だろう。

ワルドは、自分が見聞きしたことにより、とある答えに行き着いていた。かつて、王立図書館へと通い詰め、ルイズの＜魔法＞を調べていたときに行き着いた結論。彼女の＜真の系統＞について。

ほぼ間違いなく、彼女――いや『彼』は隠しているのだ。そう、かの人物が……僕がたどり着いた『答え』たる存在であるならば、自分の主人が如何なる存在かにすぐさま気づき、間違いなくそれをひた隠しにするだろう……そう＜念力＞を使って飛んだ彼女に、それを開示させず――わざわざ『フライのふり』をさせたように。

……おそらくだが。彼女は、まだ自分の＜系統＞を知らされていないのだ。

ルーンについても、何らかの方法で見えないようにしているのだろう。何故ならば、かの存在であることが間違いないのであれば＜マジック・アイテム＞を自在に扱う＜力＞を、主人から与えられているはずだから。

いや、結論を焦ってはいけない。なにせ『ひとり』かと思っていたら『ふたり』の可能性が見え隠れしているのだから。そう――『伝説』４体を率いたという前例があるのだ。彼女が2体呼び出していたとしても、何の不思議もない。

そして、自分たちの正体を知った片方が――主人と、自分にとっ

て信頼のおける『友人』にその身柄を託した。それが、あのタバサという少女だ。

『神の本』『導く者』『助言する者』。もうひとりは確定できていないが――剣を差していることから考えるに『輝く左手』『神の盾』である可能性が高い。『盾候補』のほうは、さっきからずっと僕を伺っているが……主人を心配しているのかもしれない。だとしたら、好都合だ。

いっぽうの『本候補』いや、ほぼ確定している彼がその名の通りの存在であるなれば――ひょっとすると＜力＞を貸してくれるかもしれない。道に迷う僕を、導いてくれるかもしれないのだ。よって、彼に杖を向けるような真似をしてはならない。

そもそも、彼自身が語っていたように『本』は『盾』と違って直接的な攻撃力を持っていないはずだ。それを知識と＜マジック・アイテム＞で補佐するのが本来のスタイルなのだから。だいたい、あれほどの価値を持つ『本』を破壊しようなど、馬鹿げている。

胸の高鳴りを抑えながら、ひたすらに平静を装った口調でワルドは声を上げた。

「東方の学者殿のお話、大変興味深く拝聴させていただきました。機会がありましたら、是非またご意見を伺いたい。いやしかし……残念です。もしも貴君が学者ではなく軍人であったなら、是非一度手合わせをお願いしたいところだったのですが。なにせ東の方と杖を交える機会など、まずありませんからね」

既に、彼の年齢についてはエレオノール殿から聞き及んでいる。２７歳。僕の１つ上。ルイズと同じくらいにしか見えない。普通な

ら、あの姿に騙されて、油断してしまうところだ。絶対に何らかの〈マジック・アイテム〉を使って姿を変えているに違いない。ひょっとすると、年齢に関しても偽装かもしれないな。

そんなワルドの推測をよそに、太公望が口を開いた。

「いやいや……このわたくしめが現役の近衛隊隊長殿と！？　そんな、とんでもない！　しかし、すっかりお元気になられたようで本当に良かった。こちらにいらした際には……まるで、そう……どなたかと一戦交えた後のようなお姿をされていましたからな」

ワルドの身体が、一瞬固まった。誰も教えていないはずだ、かの夫人の正体も……僕との『稽古』についても。少なくとも、あの小島でさりげなく様子を伺っていたとき……彼は、ヴァリエール公爵家のひとびとの側には、近付いていなかったはず！

切るべきカードを間違えてはいけない。やはり、彼に杖を向けてはならない。ならば！

「いえいえ、突如発生した問題を解決するために、予定よりもこちらへ出向くのが遅くなったまで。貴君のおかげで、すっかり回復しました、感謝します。そこで……感謝のついでなどと言っては大変失礼なのですが、実はひとつお願いがございまして」

「む……わたくしに、ですか？　やはり杖を抜いてくれ、などと言われては困りますぞ！」

慌てふためくようにあとずさる太公望の姿を見て、ワルドは確信した。やはり、彼に戦闘能力はない。先程から念のため確認していたが、ずっと隙だらけだっだ！

あの『シュヴァリエ』と『ガリア王国花壇騎士団』の略章は、あの少女のものなのであろう。あの歳で『スクウェア』に至れる才能を持ち、ルイズ、そして彼の信頼を得たほどの実力者。隠れ蓑にはもってこいだ。

「そんな、とんでもありません。僕がお願いをしたいのは……あなたの連れである『彼』です。東方の剣士にして＜メイジ殺し＞であると伺っています。もしもよろしければ、互いを高め合う意味での手合わせ……模擬戦の許可を頂きたいのですが」

もし彼が『盾』ならば、僕の実力を『本』に示せるかもしれない。そう考えていたワルドが指名したのは――太公望の横に座っていた、才人であった。

――新たな風が、場を支配しようとしていた。

第６５話　閃光、多くの道に迷うの事（後書き）

深読みのしすぎは危険です、いろいろな意味で。

さあ、いろいろとたいへんなことになっていますが。みんな頑張れ、超頑張れ（投げっぱなしジャーマン）。とりあえずモグラとオケラは出せた。

苦難の甲斐あって、なんとワルドメイン回。そしてこの流れ。果たして彼はどうなってしまうのでしょうか！？　ちなみに、ワルドが時折屋敷を訪れていたのは事実です。彼は、１０年間ルイズを完全に無視していたわけではないのですよ……まあ、でも正直なところ、あれはほったらかしと変わらないよなあ……。

と、いうわけで次回をお楽しみに！

２０１１／０６／１２　循環の説明に補足

第６６話　古き風と新しき風の饗宴

――場に、一陣の風が吹いた。ただし、それはあまり心地よいものではなかった。

それに当てられて、内心で頭を抱えていた者たちが大勢いた。彼らは、まずは現状を整理すべく己の脳みそをフル回転させる。そして、最初のひとりが事態を収拾すべく、基本的な確認作業に取りかかった。

「ワルド子爵。失礼ですが、念のため確認させていただいてよろしいでしょうか？」

そう切り出したのは、太公望である。

「はい、何でしょう？」

「その模擬戦の実施日程というのは……いつをご希望で？」

ワルドは、太公望の確認を聞いて内心でぐっと拳を握り締めた。こんなことを言ってくるということは、許可する気があるということだ。そう思った彼は、解答を口にした。

「実は、明日昼にはこちらを立たねばなりませんので……このあと、すぐに」

やはり、これはまずい。模擬戦云々ではない――それ以前の問題だ。即座にそれを判断した太公望は、いったん彼から視線を外すと、場の責任者たるラ・ヴァリエール公爵に言を向けた。

「閣下。大変ぶしつけとは存じますが……本日の進行予定についてお伺いしても？」

「うむ。ただし、今回の歓待については、わが娘エレオノールに総責任者として全般を取り仕切らせておるので、そちらから説明をさせよう。さ、エレオノール」

そう言って娘に役目を引き渡したヴァリエール公爵の片眼鏡の上、形の整った眉がごくごくわずかに動いたのを、太公望は見逃さなかった。いっぽう、父親から指名を受けたエレオノールの口端がひくひくと動いていたのは、誰の目にも明らかであった。

「はい。あと３０分ほどで、皆様をお部屋へご案内させていただくこととなっております。なお、現在全ての客室に備え付けられた浴槽に、湯を張る支度をさせておりますので、本日の疲れをそちらで癒やしていただければと。なお、この風呂は先程ミスタがご用意くだすった『水酒』を使わせていただいております」

「丁寧なご説明、痛み入ります。質問を重ねるのは失礼と承知しておりますが……この場から、模擬戦が可能であると思われる平地、可能であれば練兵場に移動するまでに、どのくらいの時間がかかるか、お教え願えますか？」

この太公望の質問に答えたのは、公爵夫人カリーヌであった。彼女の眉は見事に吊り上がっている。

「馬車で１時間ほどの距離に練兵場があります。庭では被害が大きすぎますので……よって、本日『模擬戦』を行うのは、事実上不可能です」

彼らのやりとりを聞いて、ワルドは硬直してしまった。つい、目の前に置かれた『宝物』に心を奪われてしまい、彼は一番の基本を怠っていたのだ。

……そう、本来であれば。ホストたるラ・ヴァリエール公爵にまずお伺いを立ててから切るべきカードを、焦って早く場に出し過ぎたのだ。しかも、前もって『本』が日時の確認をしてくれるという気配りを見せてくれていたにも関わらず、直後を指定するという致命的なミスを犯してしまった。正直、これはとんだ失態である。

「ありがとうございます。では、これらの状況を確認させていただいた上で……ご主人様」

「あなたの裁量に任せる」

即座に切り返すタバサ。伊達にこの数ヶ月間太公望と過ごしていたわけではない。このあたりの意思疎通については見事なものである。

「承知致しました。ワルド子爵が模擬戦を希望されておられるわけだが……才人よ。おぬしはどうだ？　彼と一戦交えてみたいか？」

この発言に、周囲がどよめいた。そして、ワルド自身も驚いた。これは……もしかすると、日時を改めて設定してくれるということだろうか!?　と。だが、そうは問屋が卸さなかった。

「ミミズはね、土壌を改良できるすごいヤツなんだ。うん、エライ。俺とは大違い。つまり俺はミミズ以下。微生物。小さな小さな存在です。生まれてきてごめんなしゃい」

『盾候補』が、何やら下を向いてぶつぶつと意味不明なことを呟き続けていたからだ。

「うーむ……ワルド子爵には誠に申し訳ないのですが、本人がこの調子でございますので、さすがに模擬戦の申し入れはお受けできかねます」

ワルドは、内心頭を抱えて蹲りたいのを、必死に堪えるだけで精一杯という状況まで追い込まれた。あれを『盾候補』だと思っていたが、それは間違いだった！

『勇猛果敢』と謳われる者が、この後に及んで怖じ気づくというのはほぼありえない。彼は『神の笛』か『記すことすら憚られる者』いや、何の能力もない『本』の従者である可能性が高い！　完全に騙された！！

いや、それよりも。ワルドは怖ろしい事実に思い当たった。そう……今の自分は『模擬戦』を希望するくらいにまで回復してしまっている。さらに、この大失態。それが導き出す答えはただひとつだ。彼は、そっと恐怖の対象に視線を向けようとしたのだが――それをするまでもなかった。何故ならば、相手からとてつもない威圧感を伴うオーラが突き付けられていたから。

――すまない、母さん……僕は、もうだめかもしれない。

○●○●○●○●

――なんだこやつ？　いったい何を探ろうとしておるのだ……？

最初に円卓についてから即座に持った疑念を、太公望は一切表に出さなかった。彼はずっと気になっていたのだ。時折、ちらちらとこちらを……自分だけではなく、才人をも伺うような視線を、先程紹介された若者が何度も向けてくることが。

本人は悟られていないつもりであろうが、彼とワルドの間に横たわっている『観察』に関する経験の差は、到底埋め難いものがある。

彼は、あきらかに自分と才人に何らかの興味を持っている。それはいったいなんだ？

そこで、太公望は会話を進めつつ、ワルドの様子を……もちろん、本人には一切気取られることなく伺い続けていた。そして気付いた。彼が『東』と＜マジック・アイテム＞という単語に反応してくることに。通常の者ならば気が付かないだろうが、彼だけを見ていた者ならば、かろうじて違和感を覚えたであろうレベルのそれが、引っかかった。

彼は、ルイズの婚約者だと聞いている。だが……正直なところ、仲の良い兄妹といった印象しか受けない。特に、ルイズの態度に、それが顕著に表れているように見受けられる。

貴族同士の政略結婚などよくある話なので、それについては――才人には気の毒だが、こればかりは自分が手を出すべきではない案件であるため――別に構わないとは思うのだが……いくらなんでも、ルイズよりも自分たちを気にしすぎだ。黒髪が珍しいからなどというつまらない理由で、ここまでしつこく観察し続けてくるわけがない。

そして、彼が模擬戦を申し込んできたとき――太公望は確信した。ワルドが何かに焦っていること。そして、才人を試そうとしている事実に。また、自分に対して何らかのアピールをしてきているのも間違いなさそうだ。何故そんな真似をする？

そもそもこの世界の＜メイジ＞からしたら、たとえ＜メイジ殺し＞などという異名を取っていたとしても、＜魔法＞が使えない平民とされている才人と模擬戦がしたい、などという発想がでてくるのはおかしい。それも、近衛隊を率いる長が、突然そんなことを言い出すなど、不自然にも程がある。

そして、ここにも『東』が出ている。つまり……彼、ワルド子爵はかの地、あるいは方角に強い関心があるということだ。東にはロバ・アル・カリイエと呼ばれる世界の他には、何があっただろうか？　そうだ、確かエルフと呼ばれる種族が支配しているという土地と――ハルケギニアの民の間に広がっている、宗教という概念。それを信ずる『ブリミル教徒』にとって、何故か重要視されている場所だ。

ここまで思考を巡らせ、ようやく太公望はそれに思い至った。ずっと以前――ルイズの＜運命＞を知ったあの日。オスマンから聞いた才人の持つルーンと……自分がそうなっていないのが不思議だと称されていた存在について。

その日から約1ヶ月後。ハルケギニア語を、古代文献に至るまで、ほぼ完璧に読み取れるようになっていた太公望は、改めて資料を持っていたコルベールに依頼し……目を通していたのだ。『始祖の使い魔たち』について書かれた書物に。『フェニアのライブラリー』にも、ごくわずかにしか残っていなかったそれらの本から、彼は重大な情報を得ていた。

――それは、かつて『始祖』ブリミルが使役したとされる＜使い魔＞に関するもの。

『あらゆる武器を使いこなす、神の左手＜ガンダールヴ＞』

『あらゆる魔法具を使いこなす、神の頭脳＜ミョズニトニルン＞』

『あらゆる生物を乗りこなす、神の右手＜ヴィンダールヴ＞』

『最後のひとりは、記すことすら憚られる者』

最後の一文がいろいろと不吉なものを連想させるが、それ以外の者についてはだいたいのところを把握した。

もっとしっかりと情報を残しておかぬかブリミルめ！　などと、またしても恨み言を吐き出していた太公望であったが……ともかく『伝説の使い魔』とやらが全部で４体いて、かつて『始祖』ブリミルがこれらを使役していたらしきことを確認した。

また『ひとり』という単語から、彼らが人間である可能性を示している。あるいはそれに近しい存在であることも念頭に置いていた。実際に才人が人間であることから、この推測はほぼ正しいのであろう。

――そこから導き出された、太公望の答え。それは、

『自分が＜ミョズニトニルン＞という存在と間違えられている』

これであった。だからこそ、ワルドはあそこまで＜マジック・ア

イテム＞という単語に反応するのであろう。自分の「おちこぼれ」発言にも何故か興味を持っていたようだが、それについては、正直まだ判断しかねる段階だ。

さらにいえば……ワルドが、ルイズの＜系統＞について気が付いている可能性が高い。そして、最悪の場合……彼女が＜伝説の使い魔＞を2体呼び出したと認識しているのだろうと当たりをつけた。

何故最悪なのか。理由は簡単だ。ルイズと才人、そして自分とタバサが、現在の治世に不満を持っている者たちにとって都合のよい御輿として祭り上げられるという危機が、目の前に迫ってきているからだ。

もっとも、太公望やタバサが黙ってそんな状況に甘んじているわけがないが――先に挙げたふたりに関して言えば、戦争の厳しさを一切知らない子供だ。彼らの性格からして、下手にちやほやされたら舞い上がってしまうかもしれない。そして――戦の道具として利用される。

ならば、公爵家に対して失礼のないよう対応をしてから、情報を取得してみるか。あんなことを言われたら、今の才人のことだ……普段の性格からして、ほぼ間違いなく模擬戦を受けるだろう。ならば、あえてぶつけることも念頭に置いていたほうがいいだろう。

そう考えた太公望は、念のため本人の意思を確認しようとしたのだが……結果はごらんの通りである。才人は、ルイズと自分の間に突如現れた巨大な壁にぶち当たって、それを打ち破ろうとするどころか地面に深く潜り込んでしまった。これは、正直予想外の事態であった。太公望は、内心敗北感に打ちのめされていた。

「こやつ、ここまで精神的な面で打たれ弱かったのか……わしとしたことが、完全に失敗した。才人の性格を見誤っておったわ。武成王のような、常に前向きで豪快なタイプだと思い込んでおった」

人物観察眼の鋭い太公望としては、正直珍しい部類の失策である。ただ、彼は昔からこういうポカをやるクセがある。特に、自分の『正しさ』あるいは『勝利』を確信しているときに、それは顕著となる。

才人についてはあとで何とかするとして……まずは早急に、目の前の男が何者なのか見極めなければならない。何故ならば、放置しておいた場合、自分のみならず周囲に大きな危険をもたらす可能性があると判断したからだ。よって太公望は――手札を1枚切ることにした。

「ワルド子爵は、どうやら東方にたいへん強い興味をお持ちのようですし……連れが模擬戦をお受けできなかった代わりといっては失礼ですが、互いに風呂を頂戴した後に、そうですな。夜も遅くなってしまいますが、2～3時間ほどでもよろしければ、かの地の話などを披露させていただこうと考えておりますが、如何でしょう？」

タバサからの了承を得たのちに、そう切り出してきた太公望の申し出に、ワルドは目を見開いた。そして考えた。先程『酒』を出してくれたことといい、模擬戦への気配りといい、会話の機会を申し出てくれていることといい――ひょっとすると、彼は何かを察しているのではないか？　と。

そして、恐れた。本当に彼が『神の本』＜ミョズニトニルン＞であるならば、自分の心の奥底など、簡単に見通してしまうのではなかろうかと。いや、既に自分の『迷い』を見破っているからこそ、

この提案をしてきてくれているのではないか？　これはずいぶんと都合のいい考え方ではあるが。ワルドは内心自嘲した。

＜ミョズニトニルン＞は『導く者』だ。万が一、彼が『本』ではなかったとしても……あの知識が何かの役に立つかもしれない。そう考えたワルドは、虎穴に飛び込む覚悟を決めた。

「それはありがたい申し出です。実は、個人的に確認させていただきたいことがあるのです」

そう言うと、ワルドはヴァリエール公爵家の者たちと、タバサたち招待客に向けて深く頭を下げた。同じ失敗を繰り返さないためにも。

「どうか、ミスタとふたりで話し合う機会と、場所をご提供願えませんでしょうか？」

○●○●○●○●

――それから2時間後。

中庭を臨む客間のひとつを提供されたふたりは、揃って部屋を訪れた。そして中に入った直後、ワルドは軍杖を軽く一振りすると同時に、ルーンを紡ぎ出した。すると、光の粉が部屋に舞った。

「ふむ……＜ディテクト・マジック＞ですか」

太公望の問いに、ワルドが頷いた。

「その通り。どこに目が、耳が光っているかわかりませんので」

その後、彼は再び＜魔法＞を展開した。それは太公望にも馴染みのある＜サイレント＞であった。そして、揃って対面に着座したと同時に、太公望はずばりと切り出した。

「それで？　これほど警戒をして、あれほどに焦った上で――このわしの『頭脳』に頼りたい……いや『道の先導』を強く願う者よ。さあ……おぬしはいったい何が知りたいのだ？」

ワルドの背筋に、いきなり冷たい刃が差し込まれた。少年のようにしか見えない男から、突如放たれた言葉にワルドは絶句してしまった。纏う空気こそ、先程までとは変わらぬ穏やかなもの。だが、これまでとはまるで別人のような眼差しと語り口に……彼は一瞬、気圧されてしまった。

「どうした、何か相談事があるのではないか？　それともわしの見込み違いであったのか？」

やはりそうだ。彼は、こちらの迷いを見抜いた上で、機会を作ってくれていたのだ。しかし……何のために？　時間がないが、焦ってはまた失敗してしまう。まずは、それを確認すべきだろう。そう判断したワルドは、背筋を伸ばし、改めて口を開いた。

「君……いや、まずはあなたの正体について、教えていただきたい」

そのワルドの素直な質問に、太公望は小さく笑った。

「なかなかまっすぐな男だな、おぬしは。嫌いではないぞ、そう

いう性質は。ただ……そこに至るための、試験をさせてもらいたい」

まっすぐと自分の目を見据えてくる男の眼光を受け止めながら、ワルドは考えていた。試験？　どういう意味だ!?　だから、ここは素直に聞くことにした。

「試験、とは？」

「ククク……内容は実に簡単なものだよ。さあ……答えるがよい。おぬしは、このわしをいったい何と見立てて『交渉』に乗り出してきたのだ？」

何と見立てて『交渉』に来たのか。つまり……自分が何者であるのかを、正確に答えろ。それによっては＜力＞を貸してやってもよい。そう言っているのか。ワルドはそう判断した。

「僕は『本』と判断しています」

「ふむ、面白い見解だ。で？　ワルド子爵。おぬしは、それを『どこで』『何を見て』『なにをして』判断した？　端的に述べよ。これに答えられた場合、正式に『交渉』のテーブルにつくことを検討してやってもよい」

この男、用心深い……いや、そうでなければ『神の頭脳』などという名を冠せられたりはしないだろう。もしも予測が外れていても、手駒にできたら使えそうな存在だ。いや、頭脳や知識面で言えば、悔しいが自分よりも間違いなく上の存在だ。ならば、それを認めた上で答えよう。そして、ワルドは解答した。

「かつて、この屋敷でルイズの＜失敗＞を見て、あきらかにおか

しいと感じました。よって、王立図書館で多くの書物を見、調べたのです。そして、彼女の＜系統＞に関係あると思しきものに行き当たりました。ですので、それを確認すべく本日の宴に出席し、観察した上で、貴君を彼女の＜使い魔＞であると推測し、最終的に『本』と判断しました」

――ワルドの言葉を聞いて、太公望は笑みを浮かべた。

学院に間諜を入れていたわけではないのだな。確かにそれらしき気配はなかった。噂を聞きつけたというわけでもなさそうだ。しかし、その可能性を除外してはならない。

それに王立図書館か。いいことを聞いた。ひょっとすると学院の『ライブラリー』よりも情報が集まっておるかもしれぬのう。なんとか滑り込みたいところだが、狸ジジイにこれ以上借りを作るのもなんだし、歓待の期間中になんとかラ・ヴァリエール公爵と親しくなれぬものか……。

自分が『始祖を導いた存在』だと信じかけつつある対談相手が、裏でそんなことを考えているなど、もちろんワルドにはわからない。

「なるほど、おぬしは『本』に手をかけておるようだな。ならば最後の質問だ。わしの＜ルーン＞と二つ名を知りうる限り……そしてルイズの本当の＜系統＞は、何であるのか。おぬしの予測がいかなるものか答えてみよ」

ここまでは、どうやら正解らしい。しかも『ルイズの本当の系統』というヒントまで出してくれた。うまくいけば……『神の本』を紐解くことができる。己の信念のため、ワルドは最後の一歩を踏み出した。

「始祖ブリミルが使役した＜伝説の使い魔＞のひとり＜ミョズニトニルン＞『神の頭脳』『神の本』『知恵のかたまり』『導く者』『助言する者』。ルイズの真の＜系統＞は失われしペンタゴンの一画＜虚無＞であると判断します」

なんともはや皮肉なものだ。太公望は、その場で笑い出したくなった。ほぼ自分の予測通りの結果にではなく――才人が自分につけてくれた暗号名『ハーミット（隠者）』と同じ。『導く者』『助言する者』その名を冠する＜使い魔＞と認識されていたとは、実に面白いではないか。

ここまでの話を聞くに、少なくともこのワルドという名の貴族は『閃き』と『直感』そして『情報収集能力』及び『情報精査』に関して、非常に有能であることは間違いない。

ただ、何かを焦るが故に、自分が見たいものだけを見てしまう傾向があるように思える。そのせいで、周囲の状況を的確に判断できなくなっているのだろう。明日帰らなければならないから、などという程度の焦りではない。もっと根深いものだ。

とはいえ、これほどの『直感力』を持つ相手に初対面で踏み込みすぎると、不要なことまで悟られる危険性がある。そう認識した太公望は、より用心深く、相手の陣地へと攻め込んでいった。

「不正解だ……と、いっておこう。今はな」

牢獄で死刑執行を待つ囚人が、遂にその時がきたか――といった時に浮かべるような表情をほんの一瞬だけ見せたワルド。だが、直後にいきなり無罪放免の報せを受けたかの如く顔色を変えた。ちょ

っと待て。よく考えろ。彼は何と言った？

『今はまだ不正解だと言っておこう』

今は不正解。つまり、この場では『まだ』正体を開かせないということか！？　そこへ思考が至ったワルドは、次の言葉で全身が震えた。

「久しぶりだよ、その名を聞くのは。そして……その結論を導き出すことができたのは、おぬしが初めてだ。わしの『本当の主人』ですら、未だそこへ到達できていないというのに。見事だ、新しき＜風＞よ。わしは、おぬしを『交渉』の価値ある相手であると認める」

その名を聞くのは久しぶり。そして『本来の主人』よりも早く、自分の正体に気が付いた。つまり、ルイズは彼が何者であるのかをまだ知らない。そして、彼は＜ミョズニトニルン＞と呼ばれたことがあるということだ！

そして、ワルドは改めて見た。焦りが故に、目の前の男を……相当の高確率で『始祖を、その叡智でもって導いたとされる＜伝説の使い魔＞』であると認識してしまった。

――これは、オスマンから『＜ミョズニトニルン＞にならなかったのが不思議』と言われたことと、召喚数日後に図書館の蔵書で『本来の主人』たるタバサと一緒に、自分の左足の裏に刻まれたルーンを調べた際に、たった1文字……ありきたりな＜知恵＞を象徴するそれであることを突き止めていること。これらを言い換えただけに過ぎない。

ついでにいうと、ルイズの＜系統＞に関しては正解なのだが、太公望のルーンについては完全に外しているため『不正解』と言っているだけだ。よって、ワルドに嘘をついているわけではない。毎度のことだが所謂『言葉のマジック』というやつである。

ちなみにだが。太公望が自分ひとりだけで、改めてこのルーンを『フェニアのライブラリー』で調べた際に、面白いことが判明している。彼に刻まれたモノは……とある事情により、時代によって意味が少しずつ変わっていたのだ。その文字は、千年前には＜知恵＞と＜天啓＞を象徴していた。

だが、三千年前に記された『使い魔に刻まれたルーン』に関する詳細を記述した文献を見つけたとき――彼は思わず呻いてしまった。かつて、それは＜神＞を示す文字とされていたのだ。『地球の始祖』つまり、神にも等しい存在である伏義（ふっき）の『半身』たる太公望にこの文字が刻まれたというのは、ある意味『大当たり』といって差し支えないだろう。

そう。『ブリミル教』という宗教上の観点から見た際に、大変に恐れ多い、あるいは都合が悪いとされたそのルーンは――時が流れるに従って、着々と……意図的にその意味を書き換えられていたのだ。

つまり、このルーンは言い方を変えれば＜神の頭脳＞よりも上位たる存在とも受け取れるのだ――よって、太公望はこの事実をタバサには明かしていないし、ワルドは＜頭脳＞どころか＜神＞と直接対話する＜幸運＞に恵まれたともいえる……閑話休題。

「迷いし者よ。まだ、お互いに出会ったばかり。即座に自分を信用しろなどとは、間違っても言えない。だが……もしも、少しでも

よい。わしの言葉に耳を傾けてくれる気があるのならば。話してもよいと感じてくれているならば。わしの持つ＜知識＞を開示しよう。さあ……新たな＜風＞よ。いったいどんな『道』で迷っているのだ？　簡潔に、事実だけを述べよ。そこに推測はいらない。何故ならば、それは『迷い道』の奥に踏み込む罠たりえるからだ」

静かに、深い＜叡智＞を湛える瞳を向けてきた少年に、ワルドは賭けてみようと思った。何故ならば、無風であるはずの部屋の中。彼から自分に向かって吹いてくる＜風＞が、直感的に神聖なものであるように感じられたから。自分を全面的に信じろ、などと言ってこなかったのも、その判断をする上で助けになった。

――ワルド青年は、かつて自分が犯してしまった罪の意識に、強く縛られていた。

それが故に＜力＞を求め、邁進していた。贖罪のために、全てを失っても構わない。周りを犠牲にすることも厭わないと決意していた。故に……彼は告げた。言われた通り、簡潔に。それは、まだ引き返せる『分岐点』にいたからこそできたこと。もしもあと1日遅れていたら、明かせなかった事実だ。

「国境を越えた貴族連盟『レコン・キスタ』から誘いを受けています。彼らは東の『聖地』を取り戻すため、現在『アルビオン貴族派』と同盟を組んで、まずは『白の国アルビオン』を本拠地とすべく動いています。僕は、ある理由があって『東』の『聖地』に至るための＜力＞が欲しいのです。ですが、本当にこの同盟に加わってよいものか、迷っているのです。そしてこれは、明日までに返答をしなければなりません」

その言葉に深く頷いた太公望は……レコン・キスタに関する、現

時点での見解を述べることにした。それが、彼の迷いを打ち払う材料になると確信した上で。

「なるほど、そのために『伝説』を欲したか。当然の帰結であるな。そこまで明かしてくれたのならば、答えよう。わしから言わせてもらえば『レコン・キスタ』なる者どもは、本気で『聖地』を取り戻す気などない、あるいは、その程度も判断できぬ無能者の集いである。何故ならば、彼らは『聖地』に対する戦を仕掛ける上での前提条件からして間違っているからだ」

「それは、いったいどういうことですか!?」

思わず立ち上がって怒鳴ったワルドを手で制し、やれやれ……といった風情で首を左右に振った太公望は、まずは焦るワルドを落ち着かせるべく、声をかけた。

「その若さで、女王陛下の側近くに仕えるに至ったほどに優秀な軍人であるおぬしが、何故気付かない？　焦りとは怖ろしいな。では、ヒントをやろう。まずは、ハルケギニア全土の地図を頭の中に浮かべるのだ。次に『聖地』と『浮遊大陸アルビオン』の位置関係について考えてみるがよい」

そう言われたワルドは、考えてみた。そして、すぐにその結論に至った。

「補給線が伸びすぎる！　上位者との意思疎通も大きな手間となる！」

「正解だ。しかもだ……浮遊大陸だぞ!?　おまけに『王家を打倒して聖地を取り戻す』と宣言しているということは、つまり！」

「飛び地で、孤立状態になる。いや、そうさせられる可能性が高い」

「そうだ、ほれみろ。おぬしはちゃんとわかっておるではないか。やはり、焦りは禁物だな。どうだ？　ワルド子爵よ。たったこれだけの事実で『本気で聖地奪還をする気がない』とわしが判断した理由になるであろう？」

その通りだ。何故、こんな簡単なことに気付かなかったのだろう？　ワルドは戦慄した。危うく、とんでもない泥船に乗り込みそうになっていたのだ、自分は！

そんな彼に追い打ちをかけるべく、目の前の『頭脳』はとんでもないことを言い出した。

「もしも、わしが『レコン・キスタ』を率いる長だったとする。その上で『聖地』を取ろうと本気で考えた場合……まずは『ゲルマニア』と同盟を結ぶ。その上で、皇帝に『世界征服』という名の甘い蜜をちらつかせ、籠絡する。この程度のことができない者に『聖地』を取り戻すことなどできぬ」

「それは、立地条件と国力があるから、という意味ですか？」

「それもある。だが『頼りにならない王家を打倒する』というご立派なお題目を唱えるには、ゲルマニアが最適であるからだ。なにせ、由緒ある『王家』の血を引いていないのだからな。まあ、わしならそんな馬鹿な宣言はしないがな。もっと上手くやる。たとえば『世界を平和に導くため』などという綺麗事を並べてみてもよいな」

ワルドは唸った。面白い……『聖地』を取り戻すための戦争への理屈付けとして『世界平和』などと言い出せる人物に、純粋に興味を持った。少なくとも、頭の固い、普通の貴族に出せるような台詞ではないと。そこで、念のため確認してみることにした。別の可能性を。

「立地条件はやや厳しくなりますが、ロマリアではいけないのですか？」

「よいところに気が付いたな。そう、一見するとロマリアでもいいように思えるかもしれぬが、あそこは却下だ。これは立地だけではなく、あくまで現時点において。未だ『皇国連合』などという状態で、あんな小さな領域すら、ろくにまとめきれない無能な坊主どもに、そんな真似ができるとは到底考えられぬからだ。国力もない。論外だ」

「しかし、ブリミル教は強大ですよ！？」

「うむ、だから絶対に彼らとは敵対しない。面倒だがな。よって2番目に同盟を組み、味方につけるのだ。適当な貢ぎ物でも贈ってな。ああいった連中は、やりすぎると調子に乗るのでほどほどに。しかるのち、彼らの口から！　現王家はブリミル教をないがしろにしている。何故聖地を取り戻そうとしない。そう言わせるよう仕向け、世界の＜風向き＞を変える。そのあいだに、ゲルマニア国内を完全に掌握し、さらに国力を増強し……ガリアと同盟を結ぶ準備を進めながら、トリステインとゲルマニアに『血』を通わせる、そして……」

次々と『本』から飛び出してくる『案』に、ワルドは目眩を覚えた。だがしかし、これはあくまで理想論。机上の空論に過ぎない。

実現できなければ意味がないのだ。よって、彼は訊ねた。

「失礼かと存じますが、あなたにはそれができるというのですか？」

その質問を、太公望は別の角度から斬り返した。

「3ヶ月だ」

「はっ？」

「わしが、ハルケギニアに＜召喚＞されてから3ヶ月目にして、既にこのヴァリエール公爵家及び、グラモン家。没落しているとはいえ名家たるモンモランシー家。それ以外にも多数のトリステイン有力貴族との繋がりを作っている。さらに、ゲルマニアの有力貴族ツェルプストー家、アルビオンの――名は明かせぬが大貴族に連なる者との『交渉』に成功している。さらに……これだよ」

そう言って、ぐいっと親指で『ガリア王国花壇騎士団』の略章を指し示す。

「わしが、現在『主人』と呼んでいる少女を、見なかったのか？」

そう言われたワルドは、思い出した。タバサと呼ばれていた少女を。あれは――！

「ガリアの青……王家の御落胤!?」

「その通り。だから彼女は偽名を使っておるのだよ。あの娘を通じ、わしはガリア王家との接触にも成功している。その上で、知力

面での実力を認められて『東薔薇花壇騎士団』への入団を請われたのだ。どうだ？　これらの事実は、おぬしにとって、わしが＜力＞になると判断するには足りないか？」

利用できるものは、それが何であろうとも平然と利用する。彼はそういう男であった。

「ここまで明かしたのは、おぬしの＜力＞を認めたからだ。その上で……『交渉』したいのだが？」

「内容にもよります」

「即座に了承しないところも、気に入った。では、まずひとつめ。ラ・ヴァリエール公爵に言った通り、わしはルイズを戦の道具にするつもりなど一切ない。彼女が心から望むならば話は別だが、できうることならば、そっとしておいてやりたいのだよ。『伝説』の肩書きは、あの小さな身体には重すぎる」

そう言ってふっとため息をついた太公望は、視線をまっすぐにワルドへと向けた。

「よって、わしやルイズ、そして現在主人と呼んでいる娘及び各関係者に関する情報を、完全なる極秘事項として扱って貰いたい……それを厳守してくれるのならば、今後できる範囲内でわしの『知識』をおぬしに開示してやろう。急ぎの用件ならば、魔法学院を本拠とするわしに宛ててフクロウを飛ばしてくれてもよい。どうだ？」

彼の『知識』。これは間違いなく自分の＜力＞になる。たったの3ヶ月でこれほどのコネクション――少なくともガリアほどの大国で、ゼロの状態からこれほどの短期間で叙勲を受けることなど、自

分には到底できないことだ。ワルドは、了承のかわりに頷いた。

……トリステイン魔法学院で暮らしているからこそ、そこに通う貴族の『子供たち』と結べたコネクションなのだが、そこはあえて黙っておく太公望であった。なお、アルビオンの有力貴族とは当然、彼についている有能な情報斥候『土くれ』のことである。頭に『元』がつくが、有力貴族の出であり、交渉を行ったのは間違いのない事実だ。

「うむ……助かる。おぬしを信頼して、あえて証文の類は作らずに交渉を進めることとしよう。ではふたつめ。おぬしの軍人としての実力とその情報収集能力を見込んで依頼する。あえて『レコン・キスタ』に潜入してもらいたい。所謂二重間諜というやつだ。いや、わしを含むから三重だな」

補足を入れつつ、顎に手を当てて考え込むようなそぶりを見せつつ彼は語る。

「既に無能と判断しているが、奴らの本当の目的を絞り込むには情報が足りないのだ。少し考えればわかるような、愚かな戦をしかける理由。正直『富の再分配』だとは思うものの、それ以外の可能性も捨てきれないため、確証を得たいのだ」

「その……対価は？」

「おぬしが、どちらについても問題のない策を、最後の交渉後すぐに授ける。それにより、トリステインでの基盤を確立し、万が一の場合にも自領を保護できる。かつ、もしも『レコン・キスタ』に、実は本当に『聖地』を取り返せる実力があった場合、そちらについてもらっても一向に構わない。おぬしならば、あちら側についても

すぐ上へ行けるはずだ。わしの『助言』は、そのどちらに対しても行う用意がある」

「最後の交渉の前に、その『策』を授けていただくわけには？」

「当然の疑問だな。やはり、おぬしに話を持ちかけて正解であった。実は、その最後の交渉……今から話す内容に関連するため、これを受けてもらえなかった場合、わしは第2及び第3の交渉自体を諦める必要があるのだ。もっとも、第1の交渉については、おぬしがどちらを選ぶにせよ有効である」

つまり『レコン・キスタ』の情報よりも、ルイズを守ることを優先しているというわけか。それが第2の交渉に関わってくると内容いうことは……考えろ！　ワルドは、必死にここまで開示されている情報を整理しはじめた。そして……気が付いた。

「ルイズとの婚約を破棄しろということですか？　僕の身に万が一……つまり、間諜であることが相手方、あるいはトリステイン側に悟られた場合、彼女を巻き込まないために？」

ワルドの解答に、太公望は拍手でもって応えた。

「その通りだ。ああ、誤解してもらいたくないのだが……わしは別に、彼女やその姉妹のいずれかと結婚して、ヴァリエール家を乗っ取ろうだなどという、いかにも三流な策士が好みそうなことを企んでいるわけではない。これは絶対だ。なお、この条件を飲んでくれた場合。おぬしにさらなる『上』を見せてやる。ルイズの＜フライ＞もどき＞を見たであろう？」

この言葉に、ワルドは硬直した。通常の＜フライ＞よりも、遙か

に速く飛べ、しかも慣れさえすればずっと楽に宙を舞うことができるという『アレ』を教えてもらえるというのか!?　『閃光』として、これは聞き逃せない。

「あれを、僕に授けていただけると!?」

「いや、その前段階だ。この交渉と、例の策の説明が終わった後……1時間でおぬしの＜精神力の器＞の大きさを1．5倍にし、さらに＜精神力＞の回復速度を通常の5倍にするための『東』の秘技を授けよう。もしもこれが実現できなかった場合には、相応の対価を別途用意させてもらう」

ワルドは驚愕した。自分のメイジとしての＜力＞をさらに上げられる……!?　しかも、失敗しても別の対価を用意できるとは。

正直なところ、ルイズは彼にとって妹のような存在であり、結婚すること自体は好ましいことであるのだが――自分にとっての最優先事項は『聖地に至る可能性』を高めること。彼の提示してきた内容と、ルイズとの婚姻を天秤にかけた場合……どちらに傾くかは、自明の理であった。

「ルイズとの婚約破棄については、受け入れましょう。僕としても、今から辿ろうとしている『道』に彼女を巻き込みたくなどありませんから。ただ……第2の策を受け入れる前に＜精神力の器＞を大きくする方法だけでも先に教えていただけませんか？　それ次第で、受けるか否かを検討させてもらいたいのです」

「いいだろう……いや、むしろ＜力＞を求める者として当然の提案だ。ますます気に入ったぞ。幸いにも、現在あの中庭は＜パワースポット＞に近しい状態になっておる。わしが解放した＜アイテム

＞の効果でな。では……早速」

――それからわずか３０分後。ワルドは新たな＜力＞を手に入れ、歓喜した。まさしく彼は『助言する者』だ。いや、もしも彼が＜ミョズニトニルン＞でなくとも関係ない。彼との接触自体が、まさしく自分が求めていた＜力＞だから。そして、ワルドは受け入れた。全ての交渉を……そして得た。さらなる＜力＞を。

全ての交渉を終え、実に満足げな笑みを浮かべて部屋を後にしたワルドを見送った太公望は、思わずため息をついてしまった。

「わしは本当に甘いのう。わざわざ面倒な条件を飲んだ上で、いちばん厚い壁を壊してやるとは。ただ……実際に乗り越えるまでの手助けなどは、一切してやらぬぞ。だいたい、そっち方面は管轄外なのだ。ここから先は自力でなんとかせい。ふたりとも……な」

――重要な情報の取得に、身内の保護。自分の懐に影響を及ぼさない情報斥候の確保。ついでに、才人の前に立ちふさがっていた最大の壁を叩き壊すことに成功した太公望。彼は、結局『仲間』に対してとことん甘い男であった。

第６６話　古き風と新しき風の饗宴（後書き）

前回、さんざん才人対ワルドと見せかけた挙げ句、あっさりながしてすみません。正直なところ、現在の才人はひとの話が耳に入る状態ではないので、挑発云々はもう関係ない状態になってしまっているのですよ。そのかわりといってはなんですが、とあるフラグが立ったのですが……さて何でしょう？　だいたい皆様予想はつくと思いますが！　あと、さすがにここからは自力でがんばってくれ才人。難易度相当下がったよ！？

ワルドさんの扱いは、多くのひとが予想していたとおり、こうなりました。ただし、二重ではなく三重。その意味は、次回明らかになります。

ここにきて遂に明かされた太公望のルーン。「Ａｕｓｕｚ（アンサズ）」。１文字です。やっと出せました……！　感無量。

これは、古代ゲルマンルーンのひとつ『主神オーディン』の象徴です。＜神＞＜知恵＞＜天啓＞＜英雄＞＜防御＞＜幸運＞＜歌＞などを表し、現代の占いなどでは＜メッセージ＞を意味するルーンとされています。ちなみにこれは、始祖の使い魔＜ガンダールヴ＞などに使われている「アングロサクソンルーン文字」の起源とされているようですが、自分の知識及び手元の資料が少ないので、確定できるほど正確な内容ではございません。予めご了承ください。もしも詳しいかたがいらっしゃったら、是非教えていただきたいです！

２０１１／０６／１５　誤字脱字修正

第67話　軍師と烈風の邂逅、その序曲

あの小さなルイズに……『伝説』の可能性がある!?　ラ・ヴァリエール公爵とその妻は、その話を聞いて、まるで魂全てが凍り付いたが如き衝撃を受けた。

――歓待2日目の早朝、日の出前の時刻。

昨夜遅くに、ルイズについてどうしてもお二方へ内密の……しかも、早急にお伝えせねばならないことがあるため、大変恐縮ではありますが、翌朝朝食前に1時間ほどお時間をいただけませんか？

血の気の失せた顔で、かつふたり以外の誰にも見られないよう細心の注意を払い、そう申し入れてきたワルド子爵の様子にただならぬものを感じた夫妻は、それに応じた。

そこで、ワルド子爵からこう告げられたのだ。

「彼女は＜フライ＞を使って飛んでいたのではありません」

彼の言葉に、即座に反応したのはカリーヌ夫人だ。そう、彼女もルイズの＜フライ＞に強い違和感を覚えていたのだ。あのときは、娘の笑顔を見てそのまま流してしまったが……わざわざ子爵が伝えてきたのには、当然理由があるのであろう。それを夫に説明した後、彼女は続きを促した。

「では、娘はいったいどうやって空を飛んでいたのです？」

「はい、それなのですが。実は＜念力＞を使っていたそうなので

す。しかも、例の『教師』に『将来に備えるため、途中まで＜フライ＞のルーンを唱えることで、飛ぶ練習をしなさい』と指定されて」

そして、ワルドはさらに説明を続けた。＜念力＞はコモンの口語。よって、メイジが自分のイメージの手助けをするために、自由に＜キーワード＞を指定することができる。そのようにルイズは教えられていたのだと。

「＜念力＞が口語……確かにそうだ。我々も、窓を開くときにそのイメージを強く描くため『我が＜力＞よ、窓の戒めを解き放て』などと唱え、カーテンを開いて窓を押し開けたりしている。だが、それをあえて＜ルーン＞に当てはめるという発想はなかった！　だが、いったいどうしてそんな真似をしているのだろう。普通に＜フライ＞を使えばよいはずなのに」

公爵の疑問に、ワルドは深く頷いた。

「実は、僕も閣下と全く同じ疑問に辿り着き……気が付いてしまったのです。その前提として申し上げておきます。実は、小さなルイズが、大きくなってもまだ失敗を繰り返していると知ったとき、僕はなんとかあの子の力になってやりたいと思いました。そのため、この数年間、暇を見つけては王立図書館へと通い詰めていたのです」

それを聞いたヴァリエール夫妻の顔が、わずかに綻んだ。知らなかった！　この青年は、娘のためにそこまでしてくれていたのか……と。

「そして＜系統魔法＞について詳しく調べてゆくうちに、気が付いたのです。ルイズの＜爆発＞が＜系統魔法＞のそれでは再現できないという事実に」

「それは、どういうことかね？」

「はい。ルイズの＜爆発＞には、ある特徴があったのです。そもそも＜爆発＞という現象を＜系統魔法＞で実現する場合、まず＜土＞で油を錬金し、次にそれを＜火＞の熱で気化させ、さらにもうひとつ＜火＞を重ね、そこに引火させるという手順が必要となります。最初にそれを知ったとき、ルイズは最低でも＜火＞＜土＞の『トライアングル』なのではないかという考えに至りました」

ラ・ヴァリエール公爵は唸った。言われてみればその通りだ。失敗という事実に囚われすぎていて、自分たちは、娘が＜爆発＞という、とてつもなく『技術』と『才能』を必要とする＜魔法＞を、無意識で使っていることに気が付けなかった。

「では、ルイズは＜火＞系統なのですか？　あなた、確か……！」

「うむ。わしの父の＜系統＞が＜火＞であった。戦にまみれる、罪深き＜系統＞だ」

沈痛な表情を浮かべたヴァリエール公爵に、ワルドは果たしてこれ以上告げるべきか……と、葛藤するような顔で、さらなる衝撃を彼らにもたらした。

「それが＜火＞ではないのです。ルイズの＜爆発＞には、特異性がありましたから」

「その特異性とは？」

「熱が一切発生していないのです。もしも＜火＞＜土＞によって

発生している＜爆発＞ならば、ルイズが失敗したときに、その余波で火災が起きていてもおかしくなかったにも関わらず、せいぜい机が壊れる程度でした。ルイズ自身も、火傷など一切負っていませんでした。こんな＜魔法＞は＜系統魔法＞には存在しません」

それを聞いたカリーヌ夫人が、はじけたように立ち上がった。

「確かにその通りですわ、あなた。あの子が失敗したときに、何かが焦げたなどということは一切ありませんでした。それは、実際に教えていたわたくしがいちばんよく知っています」

＜系統魔法＞では再現できない爆発。＜先住＞ではありえない。ならば、残るは……！

「ま、まさか……あの子の＜系統＞は、始祖の系統たる＜虚無＞だと……？」

公爵夫妻は、心の奥底が冷えていくように感じた。もしもその推測が当たっていたならば。最悪の場合、トリステインはふたつに割れてしまう。いや、ロマリアの介入を受けるかもしれない――と。

何故ならば、本来＜虚無＞は『始祖』ブリミルの直系、つまり王族にしか現れないとされている『伝説』の系統だ。ヴァリエール公爵家は、王家の傍流。その主人たるラ・ヴァリエール公爵は、トリステインの王位継承権第3位を持っている。つまり＜虚無＞が出てもなんらおかしくない家系。

……そんな家から『始祖』の＜虚無＞が出たと知れたら。

『始祖の血を最も強く受け継ぐ、ヴァリエール家こそがトリステ

インの正統な王室だ』

などと言い出して、彼らを担ぎ出そうとする者たちがほぼ間違いなく現れる。そんなことになれば、当然国内を二分した戦争が始まる可能性が高い。しかも、現在のトリステイン王家の玉座は空位。最悪の場合、ルイズを傀儡にすべく擁立しようと、宮廷内で暗躍が始まる恐れすらあるのだ。

少なくとも、ラ・ヴァリエール公爵にそんなつもりはない。彼は、王家に強い忠誠を誓っている。もっとも、現在トリステインの乗っ取りを企んでいると噂されるマザリーニ枢機卿の動き次第では、あえて立ち上がることも視野に入れなければならないが。その場合、現王家が公爵家という扱いとなる。ただ、この場合も当然のことながら内乱が発生する危険性が高いため、慎重に動かなければならない。

そして、それ以上の最悪は、ロマリア皇国連合――『ブリミル教』総本山の介入を受けることだ。そう、ルイズを『虚無の巫女』などと祭り上げ、聖地奪還運動を開始しようとするかもしれない。ルイズに危険が及ぶだけでなく、絶対に戦争を回避できなくなるという意味ではこちらのほうが重大だ。

青ざめた顔で自分を見つめる夫妻に、ワルドは同じく血の気が失せた表情で告げた。

「僕も、当初はそう考え、身震いしました。ちょうどそのときです、閣下から『ルイズが＜風系統＞に目覚めたので、その祝いの宴に出席して欲しい』という招待状が届いたのは。それを見たとき、僕は心の底から安堵しました。良かった、彼女は『そう』ではなかった。それどころか、夫人や僕と同じ＜風系統＞だったのだと。し

かし、あの＜フライ＞を見てしまったとき、心臓を鷲掴みにされたような衝撃が僕を襲ったのです」

「念力による＜フライ＞を騙った、あれ……ですか」

「ええ。あれを見たとき、疑念が恐怖に変わりました。そしてルイズに訊ねたのです。それを教えてくれたのは、いったい誰だい？と。結果、行き当たったのです。かの『東』の学者殿に」

ワルドは、その顔に沈痛ともいうべき色を浮かべ、語り続けた。彼からどうしても、その真意を聞き出さねばならないと決意したのだ、そう夫妻に告げた。だが、時間がない。かといって、ガリア花壇騎士の略章を身につけた彼に杖を向けたりしたら、最悪国際問題になる。

そこで、よくよく相手を観察したところ――彼は疲れていた自分を気遣って、非常に高価な＜マジック・アイテム＞を惜しげなく使い、騎士でありながら戦いを望まぬ、穏やかな『教師』であることを感じた。

よって、かなり強引な手段ではあったが、公爵家への礼儀にもとる行為とは承知の上で、あえて彼の連れに『模擬戦』を申し込んだ。彼ならば、ほぼ間違いなくそれを阻止し、その際にうまく事を運べば、個人的な話し合いの機会が持てるのではないかと考えた上で……と。

「今考えると、もっとよい手段がいくつもあったのですが……あのときは恐怖と焦りのあまり、とんだ真似をしてしまいました。改めて、お詫び申し上げます」

しきりに恐縮するワルドに、まったく困ったものだ……それであのようなことをしでかしたのか！　と、その事態の深刻さにも関わらず、夫妻は思わず苦笑しながら話の続きを促した。

「幸い、うまく会談の機会を得ることができました。そして、直接訊ねたのです。彼女の特異性について僕は既に気付き、調べもついている。その上で、貴君は彼女の真の＜系統＞を知っているのではないか？　だからあのような教え方をしているのではないか！？　と。すると、彼は僕の手を取ってこう言ったのです。やっと話せる人物に巡り会えた。これも『始祖』のお導きであろう……と」

――そしてワルドは語った。例の祝宴の席で語られた『炎の勇者』の話を。

「かの勇者は、その業績にも関わらず……どこから来たのか定かではないのだそうです。彼の国の伝承によれば、西の彼方――彼曰く『東方』から見た『西』つまり、このハルケギニアからやってきたのではと考えられていたのかもしれない、ということです」

ワルドは、必死に『学者』の言葉を思い出そうと、手を顎に当て言葉を紡ぐ。

「そして。その勇者が使う＜魔法＞は、確かに＜火＞と＜風＞のように見えてはいたものの……ハルケギニアの＜系統魔法＞では説明できない、不思議なものも数多く存在したのだとか。そのひとつが＜熱のない爆発＞だったのだと」

「つまり……ルイズの＜爆発＞と同じもの、だね？」

「はい。当初は＜失敗＞とされていたらしいのですが、後年、彼

は意図的にそれを＜攻撃＞に使うようになったのだとか。＜系統魔法＞よりも遙かに簡単に、しかも短い詠唱で起こせる＜爆発＞は、彼にとって最大の武器だったのだと、彼の国の伝説に残されているそうです」

「その彼の＜系統＞に関する伝承は、残っていなかったのかね？」

「はい、そこまでは。あえて伏せられていたのかもしれない、と、かの学者殿は仰っておられました。その上で、ルイズの＜魔法＞を見た彼は、すぐさま彼女と『勇者』の関連性に思い当たり、同時にその危うさに気が付いたため＜系統＞に関係なく使えるコモン・マジック＜念力＞によって、それらしい『事象』を発生させ、彼女に『疑い』がかけられることがないよう偽装し、誰にも……自分が仕える主人やガリア王家はもちろんのこと、ルイズ本人にすら明かさず、これまで沈黙を守ってくれていたのだそうです」

それを聞いたラ・ヴァリエール公爵は、深く頷いた。

「確かに、かの学者殿が、ルイズ本人に＜系統＞の可能性について全く打ち明けていないというのは正しい判断だ。わしでもそうする。あの子は潔癖すぎて、上手く嘘をつくことなどできないからな。それは貴族としての美点ではあるのだが、時と場合による」

夫の言葉に、妻も同意を示す。

「その上で＜風系統＞に見せかけていただけではなく、本当に＜風系統＞だった場合についても備えてくれていたとは。想像以上に思慮深い方ですのね、かの学者殿は。おまけに、騎士として忠誠を誓うガリア王家にすら一切情報を開示していないとは。まだ確定に至らない段階にも関わらず、これほど娘と我が公爵家を気遣ってく

れていたなんて」

さらにワルドは言った。この歓待期間を、彼は待ち望んでいたのだと。そして閣下と夫人にのみお伝えしようと決意してはいたものの、どうやってその機会を作るかで悩んでいたらしいのだと。

そんな時、自分以外の誰にも辿り着けなかったルイズの『可能性』に気付き、その身を心から心配しているとおぼしき僕が現れたため、彼は縋るような思いでメッセージを託してくれたのです――と。

「なるほど。それで、あのとき『炎の勇者』の話を持ち出したのだな、彼は」

「おそらくは。もしもご家族のうち誰かが、その話で気付いてくれれば、そこから秘密裏に直接会談の機会を得られるのではないかという考えに、学者殿は至ったのではあるまいかと、僕は考えます」

「わたくしたちは、かの学者殿にも、あなたからも大きな恩を受けました。どうやってこれを返したらよいのでしょう？　本当に、よくぞ発見し……そして話してくれました」

「まったくだ。まだ可能性に過ぎないが、もしも、我々が知らないところでルイズが＜失われた系統＞に目覚めてしまったとしたら……それを考えただけで、ぞっとする」

「ええ。僕のような疑念を持つ者や、かの学者殿のような優秀な『研究者』が再び東の地からハルケギニアを訪れるというような『奇跡』が起きてしまった場合。しかも、それが学者殿のような分別を持たぬ者だとしたらどうなるか……結果は見えています」

「そうですね。復活の可能性がある以上、わたくしたちはそれに備えねばなりません」

――それに備えなければならない。これは、ワルドが待ち望んでいた言葉であった。そして、彼は踏み出した。『本』との契約。そして己の信念のために征かねばならぬ『道』の第一歩目を。

「僕もそう考えます。そこで、念のため確認させていただきたいのですが。閣下は『レコン・キスタ』に関する情報を、どの程度お持ちですか？」

「例の『国境を越えた貴族連盟』とかいう連中か？　『王権打倒』『聖地奪還』などという世迷い言を抜かして、アルビオンの反乱勢力と手を組んだらしいな。最近、その影響でアルビオン王党派がやや押されぎみになってきているようだ」

そこまで言うと、ラ・ヴァリエール公爵は深いため息をついた。

「本来であれば、同盟国である我がトリステインから援軍を出すべきか否か、早急にアルビオン王家へ確認すべき案件なのだが、宮廷の一部愚か者共が反対しておる。そのほかにもいくつか気になることはあるのだが……それが、どうかしたかね？」

ワルドは素直に感心した。さすがはラ・ヴァリエール公爵、周囲が見えておられる。しかも『本』が得ていない情報を、既にいくつか手に入れているらしい。

「申し訳ございません、それにつきましては、今少し情報をいただいてからお答えしたいのですが……閣下が他にお気になさっていることとは、いったいなんでしょう？」

ラ・ヴァリエール公爵は、立派な髭をしごきながら口を開いた。

「ふむ……君が無意味な質問をするとは思えんし、話しておこう。実はな、やつらと同盟を組んでからというもの、王党派から反乱軍・貴族派に寝返る者が増えておるらしいのだ。理由はわからん。だが、単純に全体の数が増えたから、などというようなことではなさそうだ。探りを入れておきたいところだが、内部に潜らせることができるほど優秀な間諜が手元には……」

ここまで言ったラ・ヴァリエール公爵は大きく目を見開いた。

「まさか、ワルド子爵！　君は……！」

「はい。その『レコン・キスタ』に潜り込むつもりです。実は……つい最近、連中からの接触があったのです。僕を優秀な貴族と見込んで、仲間に加えたいと」

「馬鹿な！　何故そのような危険な真似をする！？　いや、そうか。君は！」

「はい。もしもアルビオンが落とされた場合、次の標的となるのは我が祖国トリステインでしょう。さらに、やつらが都合のよい『御輿』として＜失われた系統＞について調査していないとも限りません。この時期に、わざわざ向こうから接触してきたのは、ある意味『始祖』のお導きではないかと僕は考えたのです」

カリーヌ夫人の瞳に、強い光が宿った。

「本気ですか？」

その目をまっすぐと見返し、ワルドは答えた。

「はい。自分が未熟者であることは充分に承知しておりますが……それでも、やらねばなりません」

その答えに、ラ・ヴァリエール公爵は苦悩に満ちた目を向けると、天を仰いだ。

「君以上に優秀な二重間諜をこなせうる者など、このわしがトリステイン中を探し回ったとしても、見つけ出すことなどできんよ。だが、そんなことをしたら……！」

「わかっております。万が一を考えると、ヴァリエール公爵家にご迷惑をおかけするような真似はできません。よって……ルイズとの婚約を破棄させていただきたく存じます。ルイズには……数年前に、既に婚約は破棄されていたと伝えてください。何故か、あの子はそのように信じ込んでいるように……僕には、感じられましたから」

もしかすると、既に誰かが心の中に住んでいるのかもしれません。長い間、彼女を放っておいた自分が悪いのですが。そういって自嘲するワルドに、カリーヌは思わず叫んだ。

「何故です？　どうしてあなたが、そこまでする必要があるのですか！？」

カリーヌの問いに、ワルドは寂しげな笑みを浮かべて答えた。

「父が亡くなったあと、僕はトリスタニアに出て、すぐに騎士見

習いとなりました。その後、異例といっても過言ではない速度で出世できました。閣下は何も仰いませんが、裏で何かと手助けをしてくださっていたのではないですか？」

ラ・ヴァリエール公爵は何も言わない。だが、瞳がそう語っていた。

「ご恩返しをさせてください。このようなことをいうのはおこがましい限りですが、閣下と夫人を、僕は今まで本物の両親だと思っておりました。そして、小さなルイズやエレオノール殿、カトレアのことは……大切な姉妹だと。僕は、家族を守りたいのです」

しばしの沈黙のあと――最初に口を開いたのは、ラ・ヴァリエール公爵であった。

「ワルド子爵領についての心配はいらん。活動資金について不足があれば、遠慮なく申し出たまえ。ただし、秘密裏にな。いや、君にこのようなことを言うまでもないか」

「あなた！」

「ご配慮痛み入ります。自領の民と、昔から僕に仕えてくれている、従僕たちのことだけが心配だったのです。これで、後顧の憂いなく、やつらの根城へ潜入できます」

そのワルドの言葉に、しばし立ち尽くしていたラ・ヴァリエール公爵は……ゆっくりと彼に近寄ると、その身をしっかりと抱き締めた。

「ワルド子爵。いや、ジャン。わしも、お前を本当の息子だと思

っている。できれば……お前に、ヴァリエール公爵領を継がせたかった。いいや、継がせたいという思いは変わらない。だから、絶対に無事戻ってきてくれ。それが、わしから唯一出す命令だ。これを違えることはまかりならん」

「わたくしもです。なればこそ――あそこまで厳しくあなたをしつけて参りました。朝食後に、最後の『稽古』をつけてあげます。ただし……いつもよりずっと軽めに、ですが」

ワルドは、内心で呻いた。しまった、ヴァリエール公爵夫人の件も『本』に話しておくべきだった！　まだまだ僕は詰めが甘い……もっと研鑽を積まなければいけないな。でも、全力でこられるよりはまだましだ。前向きに考えよう……。

――ヴァリエール公爵家の一画。従者たる太公望と才人に用意された客室にて。

「ククク……見事に演じきったようだな、ワルド子爵は。このわしが見込んだだけのことはある。しかし、稽古とはなんのことだ？　彼らの声音から判断するに、策を見破られたわけではなさそうだし、やはり作法がらみであろうか？　昨日は、えらくやらかしてしまったからのう」

守袋に入れ、ワルドに手渡した『超軽量・小型集音宝貝』によって集められた内容を『通信機』を介して受け取っていた太公望は、策がうまくはまったことに安堵していた。

一部気になる発言はあったものの、それについては改めて調査すればいい。本来ならば、このままアレを持たせておきたいところだ

が、何者かに見つかると極めて厄介なことになるので、予定通り朝食時に回収しよう。太公望はそう独りごちた。

……そう。ここまでの彼らの会話は、全て太公望が書いた脚本によるものである。ルイズの＜使い魔＞についての情報を出さずに、かつワルドの立場を一切貶めず『レコン・キスタ』への潜入を実現させるために書かれた筋書き。かつ、ヴァリエール公爵家に迫る危機『＜虚無＞の目覚める可能性』を、より自然に伝えるための『策』。

さらに『婚約破棄』を『ルイズなどいらない』といった拒絶の意味ではなく『家族を守りたいから』という献身的なそれとしてヴァリエール公爵夫妻に納得させ、かつ彼らの強い好意と信頼をワルドに向けさせるためのもの。これが『第2の交渉』を受け入れた彼への『対価』にして『大逆転のカード』だ。

そしてこれは、トリステインの内乱を避けるため、ラ・ヴァリエール公爵の『戦を好まない』性質を太公望がわずかな期間で見抜いた上で、ルイズの＜系統＞について彼女の両親にのみ警告を行いつつ、ワルドを金銭及び心理的な意味で、裏から支援させるという大技を決めた瞬間であった。

もちろん、太公望が『炎の勇者』云々などという言葉が飛び出してくる、正直三文芝居じみた『策』を練ったのには然るべき理由がある。この『脚本』を与える前に、彼はワルドへこう助言していた。

「ワルド子爵。おぬしには『政治家』として必須ともいうべき才能がある。それは『演技力』だ。宮廷に勤めているだけあって、各種所作が洗練されておるし、何よりも嫌味がない。これは、ある意味＜魔法＞よりもずっと希有な能力だぞ？　時間があるときに、軍

事だけではなく政治、特に外交についてより詳しく学んでおくがよい。それは将来、必ずおぬしの役に立つであろう」

太公望からこう告げられたとき、ワルドは驚嘆していた。何故なら国を構成する『駒』のひとつとしてだけではなく、盤面全てを動かす者を目指せ。お前にはそれができるだけの才能がある。そう言われたに等しいからだ。しかも『神の頭脳』とおぼしき存在から。

「もしも、怪我などで軍人でいられなくなった場合――政治家として身を立て『聖地』を目指せばよい。そのためにも、ヴァリエール公爵家との繋がりを強く残しておく必要があるのだ。そのため、あえて高い『演技力』が必要となるこの『策』を、既にそれができるだけの実力を持つおぬしに授ける」

この太公望からの『助言』にして『策』は、ワルドにとって非常に大きかった。おもに、彼の焦りやすい精神を安定させるという意味あいで。実際、これはとてつもない保険であろう。何故ならば『聖地へ至る道』という先が見え辛い状況の中で、なんと４つもの『最善の道』を選ぶことができる可能性を、彼に与えたことになるのだから。

さらにいえば、常に陰謀渦巻くトリステインの宮廷内で叩かれ、鍛え続けられてきた彼の『演技力』は、事実相当に高いものであった。

そして、ワルドは太公望の期待に見事応え、国内でも有数の『目利き』であるラ・ヴァリエール公爵夫妻を相手に、彼らの本当の目的を一切悟らせないという、とてつもない偉業を達成した。いくら太公望の脚本があったとはいえ、演技の下手な大根役者では、こうはいかなかったろう。

――それから間もなくして。部屋を後にしたワルド子爵の後ろ姿を見送りながら、ラ・ヴァリエール公爵夫妻は、共に深いため息をついた。

「ジャン、いやワルド子爵ならば、きっとこの困難な任務を達成してくれるだろう。しかし……問題は、これを伝えてくれた学者殿についてだ。主人やルイズに対する気遣いなどを見ても、彼が分別を持った人物であろうことは間違いないとは思うのだが、全てを信用するにはまだ時間が足りないな」

「わたくしもそう思います。用心に越したことはありません。なにしろ家族のみならず――トリステイン王国全体に関わる重要事なのですから」

そう言って、自分を見返してきたカリーヌ夫人の目の中に、ラ・ヴァリエール公爵はなにやら不穏なものを感じ取った。そこで、彼は先手を取るべく動いた。

「カリーヌ。わしは彼と『話し合い』の機会を持とうと思うのだが、どう思うかね？」

「ええ、そうですわねあなた。彼を見極めるためにも、それは必要なことでしょう。その上で『杖』をもって解決するのが、我ら古い貴族というもの」

「い、いや、そうではなくてだな……！」

こうして。ラ・ヴァリエール公爵家書斎にて『トリステインの古

き伝説』が立ち上った。『力強き風』『烈風の騎士姫』『鋼鉄の規律』。彼女がいったんこうと決意したら、もう誰にも止められない。そう、家族どころか王妃様や姫殿下ですら不可能だ。

「た、頼むから、国際問題にまでは発展させないでくれよ……」

妻に見られないよう、そっとマントに縫いつけてある内ポケットから、ごく小さな薬瓶を取りだしたラ・ヴァリエール公爵は、その中に入っていた液体を、ぐいと口内へ流し込んだ。末娘のみならず、妻のことでも深い心労を重ねてしまった彼の胃には、いい加減安らぎが必要であった――。

○●○●○●○●

――朝食の時間になった。

だが、才人はどうにも起きる気になれなかった。そこで、同室の太公望へ体調が悪いから……と、仮病を使って朝食会への出席を断った。

そして、やわらかいベッドの上で、肌触りの心地よい掛け布団を肩のあたりまで掛け、ぼんやりと天井を見つめていた。彼は、唐突に東京の自宅二階にある自分の部屋のそれを思いだそうとしてみた。だが……思い出せない。才人は、なんだかせつない気持ちでいっぱいになった。

それから３０分程して。扉を軽くノックする音がしたと思うと、部屋に誰かが入ってきた。太公望が戻ってきたにしてしては早すぎる。だが、なんとなく他人と顔を合わせるのが嫌だった才人は、布

団の奥に潜り込んだ。

なにやら、カチャカチャと音がする。陶器と、金属が微かにふれあうような音。どうやら、誰かが気を利かせて才人のぶんの朝食を部屋へ運んでもらうよう、頼んでくれたらしい。こういうことをする人物が誰であるのか、彼には心当たりがあった。

その気遣いまでも、今の才人にはなんだか寂しく思えてしまい――食べてなんかやるもんか！　と、意地を張り、ふてくされたように寝返りを打った。

しかし、その瞬間。空気中を漂い鼻孔をくすぐった香りが、彼の胃腸を刺激した。ぷんと漂う、ほんの少し焦げた腸詰めと、いい塩梅に溶けたバター。そして焼きたてのパンの香りが、彼の脳を、鼻を通じて直撃した。

からっぽの胃袋が、唾液の溢れた口が、早く寄越せと騒ぎ始める。ちょっとした意地と本能的欲求が葛藤を続けた結果……5分程度で、重かった才人の身体を起き上がらせることに成功した。

「なんか悔しいけど、うめェ……」

朝食は一日の活力。全てを腹におさめた後に飲んだお茶が、なんだか身体中を巡っていた淀んだ気持ちを、その潤いによって流し出してくれたような気がして、落ち込んでいた才人の気持ちが、ほんの少しだけ回復した。

「外で身体動かしてくるかな」

少しは気晴らしになるかもしれない。そう考えた才人はいつも学

院で着ている従者用の平服――指ぬきグローブを含むそれ――に着替え、デルフリンガーを背負うと――そっと部屋を後にした。

実のところ。ほんの少しだけ、彼に元気を取り戻すきっかけを与えたこの朝食を用意させたのは……太公望ではなくルイズだったのだが、このときの才人はまだ、それを知らなかった。

○●○●○●○●

――そして、朝食とは思えぬほど豪勢な食事を終えてから約1時間後。

『東方から来たという貴君に、ハルケギニアの＜魔法＞に関する見解が聞いてみたい』

と、いうラ・ヴァリエール公爵からの申し入れを、快く受けた太公望は、傍聴を希望する者――突如元気をなくしてしまい、欠席を申し出たルイズと、そもそも朝食会に出席していなかった才人。そしてカリーヌ夫人と連れ立って移動したワルド子爵を除く者たち――を前に、あくまで個人的な見解で申し訳ございませんが、という断りを入れた上で、それを述べていた。

ちなみに、この父の発言に、露骨なまでに大きな喜びの反応を示したのは、当然の如くエレオノールであった。彼女は、わざわざ大量の紙と羽根ペンを用意して『講義』に参加している。同じく、コルベールもほぼ同様の装備で、この得難い機会に備えていた。

「まず、結論から述べさせていただきますと。『始祖』ブリミルは、そう為るべくして『神』と崇められる存在となった。これに尽

きますな」

いきなり、自分の研究対象たる『始祖』がらみの発言。＜魔法＞を語る以上、ある意味当然の内容ではあるのだが、この言葉にエレオノールの眼鏡がキラリと光る。

「それはいったい、どういった意味で、ですの？」

「はい。こちらへ来てから、改めて『ブリミル教』の教義や、過去の歴史書などを調べたところ『西方』における＜系統魔法＞は『始祖』ブリミルの手によって、現在のような形で＜メイジ＞たちの間に広められたとされておりました」

ニッ、っと笑って片手指を1本立てながら、さらに続けた。

「つまり、裏返せば『始祖降臨』以前は、全ての＜魔法＞が＜力在る文字＞『ルーン』ではなく、コモン・マジックのように、全て口語によって行使されていた。いや、そうする必要があったという可能性が考えられるからです」

その発言に、場がどよめいた。

「口語の必要があった！？」「それは＜先住魔法＞ということですか？」

コルベールたち研究者の質問に、太公望は首を横に振る。

「いいえ。そもそも＜先住魔法＞は、場に存在する＜精霊＞と契約することで発動するものです。そうではなく、世界に溢れる粒状の＜小さな力＞を、メイジが持つ＜力＞と＜力在る言葉＞『ルーン

語』を併せて用いることによって操作する。これが『西方』において〈系統魔法〉とされるものです」

「世界に溢れる〈小さな力〉とは？」

エレオノールの質問に、しごく真面目な表情で答える太公望。

「我が国において、研究が進められている〈星の意志〉と呼ばれるもののことです。これらは、肉眼では到底見えないほどにごくごく小さなもので、この世界のあらゆる場所に溢れております。特に『霊穴（パワースポット）』と呼ばれる場所に強く宿っており、具体例として『ラグドリアン湖』『トリステイン魔法学院』などが挙げられます」

水の精霊が住まうラグドリアン湖はともかく、魔法学院にそのような〈力〉がある!?　当然、それを聞いたラ・ヴァリエール公爵家のひとびとは驚いた。だが『お客様』たちには一切動揺が見られない。何故ならば、彼らは既に『魔法学院がそれを前提とした設計によって建てられている』事実を知らされていたからだ。

これは、あくまで個人的な見解なのですが……と、前置きをして、太公望は持論を展開し始めた。

「ルーンが『始祖』ブリミルによって発明、あるいは持ち込まれる以前は、たとえば簡単な〈風〉を起こすのにも〈念力〉を使い、しかも非常に難解な、自然の『法則』に関する知識……そう『自然科学』の理論を学んだ者でなければ、まともに吹かせることなどできない状態だったのではないかと、わたくしは愚考致します」

〈念力〉で〈風〉を起こす。この発言を聞いたラ・ヴァリエール公爵は、太公望と視線を合わせて頷いた。それに視線だけで応えて

きた相手を見て、公爵は理解した。自分が発したメッセージ――『魔法の話が知りたい』というそれを、彼が正しく受け取ってくれたという意味だと。

「それが劇的に変わったのが６０００年前。そう『ルーン』の出現によって、です。『始祖』ブリミルは、この＜力在る文字＞を組み合わせることで＜力宿る言葉＞とし、＜メイジ＞としての才能を持つ者たちならば、簡単に＜魔法＞を行使できることを『発見』あるいは『知らせ』たのです」

太公望は、例の如く『打神鞭』を手に持ち、教壇に立つ教授が如く説明を続ける。

「しかも！　それを自分の家族……つまり現王家だけで独占せず、メイジたちの間に等しく広めた。これほど度量が広く、かつ慈愛に満ちた存在が『神』として崇められるようになったのは、至極当然の成り行きなのではないでしょうか」

再びどよめく講義会場。それはそうだろう――このような角度から見た＜系統魔法＞及び『始祖』に関する理論は、ハルケギニアにはこれまで存在していなかったのだから。そして、彼らは改めて『始祖』の偉大さと慈愛に感謝した。

「ただ……あえて欠点を述べるとするならば。汎用性を持たせすぎたが故に＜力＞が足りない。あるいは＜力＞がありすぎる者が＜系統魔法＞を扱おうとすると、何も起きない。または＜力在る文字＞の、組み合わせによる枠内に収まりきれず＜爆発＞を起こしてしまうのです」

太公望はそう言って、頭を掻きながら言葉を紡ぐ。

「本来であれば＜魔法＞というものは＜力＞のコントロールを前もって身につけてから扱うべきものですが、何故か『西方』からは、この技術が失われてしまっているようですな。その理由まではわかりませぬが」

「つまり、あなたの国にはその技術が残っているということですわね？」

「そのとおりです、エレオノール殿。それが故に＜爆発＞させてしまうほどに強い＜力＞を持つ妹君に『コントロール』の方法をお伝えし、まずは＜系統＞が一切関わらない＜念力＞を用いることによって、基礎から徹底的に学び直していただきました。なお、これについては、そちらにおられるミスタ・コルベールの尽力が大きいのです」

必死に講義内容をメモしていたコルベールは、突然の指名に驚いた。だが、すぐに立ち直ると、かつて自分が生徒たちに行った講義――つまりコモン・マジックに関する歴史的発見に関する理論を発表した。

なお、ここには、それを調べるに至った経緯は含まれなかった。何故ならば、それは＜伝説の使い魔＞をルイズが＜召喚＞していることに触れてしまうからだ。

「まさか＜ライト＞が＜火＞の＜系統魔法＞だったなどとは！」

と、驚愕の声をラ・ヴァリエール公爵が発すれば。

「＜ディテクト・マジック＞については、とてもよくわかります

わ。流れを解析するための魔法が＜水＞に属するというのは、わたしにも理解できる説明です」

その娘、カトレアが研究に対する理解を示すと。

「おそらくじゃが、われわれ＜メイジ＞の『感覚的』な『慣れ』によって、特に簡単な初歩の初歩である一部の＜系統魔法＞が、長い年月を経てコモンに組み込まれたのだと、わしは考えておる」

このように、コルベールの上司たるオスマン氏がそれを後押しした。

「ミスタ・コルベール」

「はい、何でしょう？」

ラ・ヴァリエール公爵の呼びかけに、視線を向けたコルベールは仰天した。何故ならば、公爵が立ち上がって自分の元へ近寄り、その両手をがっしりと掴んだからだ。

「貴方の発見は、娘を救ったのみならず、歴史的な意味でも大きな成果だ。もしよろしければ、それを論文に纏めてわしに預けてはもらえないだろうか？　わしが直接、王室に対して献上しよう」

ラ・ヴァリエール公爵の言葉に、コルベールは目を大きく見開いた。

「心配されることはない。もちろん、貴方の名前でだ。わしの名誉を賭けて誓おう。これは、我が国にとって大変に価値ある発見だ。

何故なら、子供達に教える最初の〈魔法〉として、もっとも適切なものがなんであるのかを、完全に確定できたということなのだから。これはまさしく大手柄。王家から直接、勲章どころか領地を下賜されてもおかしくない程の働きだ」

それに賛意を示したのはエレオノールだ。

「わたくしもそう思いますわ。これは国内の教育レベルを上げるという意味において、大きな一歩となる発見ですもの。ただ……もしもアカデミーを通した場合……その、お恥ずかしい話ですが、誰かに研究成果を横取りされる危険があります。お父さまから直接でしたら、間違いなく王家に宛てて届けられますから」

「そ、そんな恐れ多い！　そもそも、私は研究一筋で、領地を切り盛りするような器量はございませんし、だいたいですな……」

心底慌てたといった口調でそう言ったコルベールは、視線を太公望に向けた。と、その相手は彼を制すると、こう言って『発明家』の後押しをした。

「でしたら、年金が出る勲章をいただいた上で、それを今後の研究費に充てるというのは如何でしょうか？　これならば、領地運営の手間もなく、しかも毎年決まった額のお金が受け取れるので、予算が組みやすいとわたくしは思うのですが」

その案に、ラ・ヴァリエール公爵が同意の頷きを返した。

「それは良い案だ。万が一、勲章が出ない。あるいは功績に相応しくないものが与えられるようなことがあった場合、ラ・ヴァリエール公爵家の当主として、ミスタ・コルベールの歴史的大発見に相

応しい額をお支払いしよう。貴方は娘を助けてくれた、大恩人たる存在だ。親として、そしてトリステイン貴族として相応の礼をさせて頂く」

ラ・ヴァリエール公爵は、心の底からコルベールに感謝していた。もしも彼が＜念力＞に関する発見をしてくれていなかったら……最悪の場合、ルイズは未だ＜魔法＞が使えずに、その才能にも関わらず潰れていたかもしれない。いや、それ以上に『東の学者』が彼女の＜真の系統＞に思い当たっても、その正体を偽装をしてくれる余裕が生まれなかった可能性すらあったのだ。

と、そのやりとりを聞いていたオスマンが、ぽんと手を叩いた。

「そういえば！　勲章で思い出したのじゃが……わしがルイズ君の大手柄について王家に申請した『シュヴァリエ』の勲章は、いまだ受勲に至っておりませんな！」

「オスマン殿、わしのところにはそのような話は来ておりませんが。だいたい、その『大手柄』の件についても初耳なのですが？」

そのラ・ヴァリエール公爵の発言にオスマンは「そんな馬鹿な、あれほどの話がお耳に入っておりませなんだか！」と、驚きつつも、例の『土くれ』捕縛に関する件を話した。もちろん、一部の学院や自分に関して都合の悪い点はぼかしつつ。

それを聞いたヴァリエール公爵家の一同は、嘆息した。勲章云々に関することではない。末の娘が行った無謀な行いに対して、肝が冷えたからだ。

「まったくあの娘ときたら……自分から、しかもまだ＜魔法＞が

ろくに使えなかった時期に、そのような危険に飛び込むとは！」

「正直、あの子らしいことですけれど……さすがに驚きましたわ」

「おちびったら、もう！　確かに、お母さまはよく『貴族たるもの、背中を見せてはなりませぬ』などとおっしゃいますけど、それは自分から危機に飛び込めという意味などではないわ！」

この言葉を聞いた太公望は、ピクリと眉を動かした。何故ならば、自分の身に関することで、とてつもなく嫌な予感が襲いかかってきたからだ。

背中を見せてはいけない。つまり戦いから逃げるなという意味だ。そのような教えを『息子』にならばともかく『娘』に対して行う母親……そして、今朝耳にした『稽古』という言葉。そういえば、あのルイズを１０倍キツめにして小瓶の中に無理矢理詰め込んだような気配を放つ母親からは、確かに隙が伺えなかった。まさか――！

――彼の予感は、それからわずか数時間後に当たることとなる。

「まさかとは思うが、どこかで申請書類が握りつぶされているのか！？　それは追々調査するとして……やはり、コルベール殿の論文は、わしが直接、手ずから王室へ届けたほうがよさそうだな」

「ええ。ルイズの『シュヴァリエ』だけではなく、外国のかたにも関わらず、トリステインのために働いてくだすったミス・タバサとミス・ツェルプストーに対しても一切連絡がないだなんて！　トリステイン貴族の一員として、本当にお恥ずかしい限りですわ」

顔を赤くして――それぞれ、怒りと羞恥という別方向のものだが

――声を上げた公爵とエレオノール女史。そして、彼らの間でおろおろするコルベール。そんな彼らの元に、まもなく昼餐会の時間であることを執事が伝えに来たのは、それから約３０分ほど後のことであった。

○●○●○●○●

――才人は、またしても道に迷っていた。

このお屋敷、とにかく大きいのである。初めてそこを訪れた者が、うっかり庭へ出たりすると、まるで迷宮のような植え込みにやられてしまう。

ずっと同じ部屋で寝ていたり、最近では同じテーブルについて食事をしていた才人であったが、こうやってルイズの実家を見てしまうと、それらがまるで幻想だったように感じてしまう。

大金持ち。大貴族のお嬢様。いや、本物のお姫様。自分には、このハルケギニアの身分制度など一切関係ないはず。今まで、彼はそう思って過ごしてきた。だが……昨晩のような豪華な歓待や、この屋敷、いやお城を見てしまっては、ルイズと自分との間に歴然とした『壁』があるのは仕方がないことなのだと、なんだか納得してしまった。

彼女との、厳然たる『身分の差』というものを、初めて思い知らされたようで――才人は再び落ち込みそうになった。だが偶然、彼の視線が捉えた者の姿が、それを救った。

池に浮かんだ小さな小舟。その中で、桃色の髪をした少女が蹲っ

ていた。

ルイズだ。彼は、いつものように彼女へ声をかけようとして、思いとどまった。どうせ、俺とあいつじゃ身分ってやつが違いすぎるんだ。そう感じてしまった。だが……遠目からもわかるほどに沈み込んだ彼女の姿が、彼の背中を押してくれた。

――ルイズは、思い出の中庭。その池の中に浮かぶ小舟の上から、静かに水面を見つめていた。

朝食前に告げられた、ワルド子爵との『婚約破棄』の知らせ。とっくの昔に覚悟はできていたはず。でも、やっぱり彼は、ルイズにとっての憧れだった。

自分の父親から、お前には本当に可哀相だとは思ったが、己の判断によってワルドの将来性を考え、数年前に彼との婚約をあえて破棄していたのだ。そう教えられて、ルイズは落ち込んでいた。

もしもの可能性。もしも、ミスタ・タイコーボーがもっと早くハルケギニアを訪れてくれていれば。いや、もしも自分が入学前に＜サモン・サーヴァント＞を試してさえいれば。もしかしたら、あたしはワルドさまの隣に立つことができていたのかもしれない。

でも……それなら、どうして涙が出てこないのだろう？　それに、どうしてあんな知らせを受けたあとなのに、あたしの心は落ち着いているのだろう？　ルイズは、その事実が不思議であった。落ち込みはするけれど、悲しくない。それは、どうして……？

そこへ、中庭の土を踏みしめる音が聞こえてきた。しかし、ルイズは振り返らなかった。すぐに足音は、池の中央にある小島へ続く、

木の橋を渡るそれに変わった。それでも、ルイズは動かなかった。

「泣いてるのか？　ルイズ」

声の主の顔は、強い日差しによる逆光のせいで、一瞬わからなかった。だが、そこにあったのはよく知ったそれ――彼女の＜使い魔＞にして『パートナー』である、才人のものであった。

「泣いてなんかいないわ。あんたこそ、もう身体の具合はいいの？」

何かに沈みつつも……自分を気遣う言葉をかけてくれたルイズの態度に、才人の胸は温かいもので満たされた。だから、彼はそれに応える勇気が持てた。

「ん、まだあんまり。それより、なんだよお前！　元気ねェな」

普段のルイズであったなら。本当にデリカシーがないわね、あんたって！　などと八つ当たりしていたかもしれない。だが……このときの彼女は、違っていた。素直に、その理由を答えた。それがどうしてなのか、ルイズ本人にもわからなかった。

「あたしの婚約ね……とっくの昔に破棄されてたらしいの」

覚悟はしてたんだけどね。あたし、おちこぼれだったから。そう言って寂しげに笑うルイズの姿は、まるで幻のように儚げであった。

今、俺が手を差し伸べなければ……このままルイズは消えてしまう。そんな予感に囚われた才人は、彼女の前に、すっと手を伸ばした。

「ほら！　手、貸してやるよ。行こうぜ。そろそろ昼飯だろ？」

「でも……」

あの夢と同じだ。ルイズは躊躇った。大きく、暖かく、そして頼りがいのありそうな手が……あの夢と同じように、自分のすぐ目の前に差し出されている。でも、本当にあたしは、この手を取ってもいいのだろうか？

「なんであんたがここにいるのよ？」

ルイズの口から思わず飛び出した言葉は、本心からのものであった。どうして今、才人がここにいるのだろう。

「道がわからなくなっちまったんだよ！　そしたら、お前のこと見つけてさ。なあ、一緒に来てくれよ。じゃないと、俺……また迷っちまう」

俺ってやつは……またコレだよ！　ふくれっ面とは裏腹に、そんなことを考えていた才人であったが、ふいに己の手に伝わってきた暖かさが、それをかき消してしまった。

「勝手に出歩くからでしょ！　しょうがないわね……あたしが案内してあげるわ」

そして、ふたりは手を取り合い――屋敷へと戻っていった。

第６７話　軍師と烈風の邂逅、その序曲（後書き）

さて。さりげなく……いや、予定調和ともいうべきフラグがドカンと立ち上がったわけですが。さあ、我らが軍師・太公望の運命やいかに！

そして、こっそりと別の意味で立ち上がったふたりがいますが。彼らについても今後どうなるのか……！　次回をお楽しみに。

ところで、例の『炎の勇者』がらみの話は例によって太公望の捏造設定ですので、ご了承くださいませ。あと、こっそり持ち歩いていたマイク。これは武王の演説その他でも使われていたアレという設定でございます。

それと、個人的にワルド最大の才能はこの『演技力』だと思っています。２王家だけでなく、かのマザリーニまで騙しきった彼は、正直只者ではないのではないかと。

２０１１／０６／１４　２３：００　誤字脱字、本文加筆修正

第６８話　軍師　対　烈風　－ＢＡＴＴＬＥ　ＳＴＡＲＴ－

――彼は、困惑していた。目に映る……今の自分を取り巻く環境に。

抜けるような青い空と、どこまでも広がる荒野。それはいい。遙か後方に控えている子供たちと、小さな笑みを浮かべて彼らと同席している教師ども。沈黙を守っている公爵と、その傍らで震えている金の髪の娘と、戸惑いの表情を浮かべたその妹。

自分の正面、５０メイルほど離れた場所に立つ、幻獣の姿を模したとおぼしき刺繍入りの黒いマントを羽織り、羽根飾りつきの帽子を被っている女性。顔の下半分を鉄の仮面で覆ったその人物についても、まあ……すぐに理解できるであろう。だが……。

「何故に、わしはここにおるのかのう……」

……しかし、その疑問に答えてくれる者はなく。

「元トリステイン王国・国王陛下付＜近衛魔法衛士隊＞所属、マンティコア隊隊長カリーヌ・デジレ・ド・マイヤール。二つ名の由来は『強く、激しく吹き荒ぶ風』。『烈風』カリン」

ただ、目の前に立つ人物による、名乗りの声が響くのみであった。

――今から、約2時間ほど前のこと。

朝よりも、更に豪奢な料理が並べられた昼餐会――ここには、カ

リーヌ夫人及び、先程まで席を外していたルイズと才人も参加していた――が終わり、食後の談話……おもに、ハルケギニアの＜錬金＞に関する基礎を、歓待の総指揮者たるエレオノールが太公望に対して詳しく解説していたときに、それは起きた。

話の切りがよいところで、カリーヌ夫人がこう切り出したのだ。

「ミス・タバサ。ひとつお願いしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

彼女の言葉に、ラ・ヴァリエール公爵が一瞬凍り付いたのだが、タバサにはそれが見えなかった。何故なら……完全に公爵夫人にのみ視線を向けていたから。

「わたしにできることでしたら」

タバサの返事に、優しげな微笑みを浮かべたカリーヌは、彼女にこう申し出た。

「ありがとうございます。実は、そちらの従者殿のお話を伺って、大変興味がわきましたの。そこで、もしよろしければ、場所を変えて語り合いの機会をいただければと思いまして」

その言葉に、昼餐会場にいた召使いたちの間に漂っていた空気が固まったのだが、彼らは客人席の後方に控えていたため、これまた残念なことに、さすがのタバサにも気が付けなかった。

「もちろんわたしは構いません。タイコーボー」

そう言って、タバサは太公望の顔を見た。すると……何故か、彼

の表情は見事なまでに硬直していた。いや、視線だけが、あちこちを彷徨っている。

「タイコーボー、どうかしたの？」

太公望はタバサの問いには答えず、額に汗をたらしながら、夫人へ確認を取った。

「失礼ながら、その語り合いとは……いったい、どのような？」

彼の言葉に、ヴァリエール公爵家の長女と三女が引き攣った。

「あ、あの、お、お母さま？　ま、ま、まさか」

ルイズが、顔中を引き攣らせながら母に問うと、夫人はキッと娘を見据えて答えた。

「わたくしが語り合いたいといえば、決まっております。ルイズ、あなたも知っていることでしょう？」

場のただならぬ雰囲気に、ようやくタバサは気が付いた。いったい彼らは何を言っているのだろう？　そう思って周囲をよく見てみると、先程まで控えていた召使いたちが、そそくさと部屋を後にしている。執事長など「私、用事を思い出しました」などと言って、真っ先に退出してしまった。

「そ、そんな、お、お母さま？　お、お客様を相手に、そ、そのようなことを、な、なさるというのは……ねえ？　カトレア」

明らかに作り笑いとおぼしき笑みを浮かべたエレオノールが、そ

う妹へ話を振ると。

「わ、わたしもそう思いますわ」

カトレアも、普段はめったなことでは動じず、おっとりした性格の彼女としては珍しく、本当に困ったような声で、それに答えた。ラ・ヴァリエール公爵はというと、上品なハンカチーフで額の汗を拭っている。

そんな彼らの様子など一顧だにせず、カリーヌ夫人は太公望を見据え、こう言った。

「娘を＜魔法＞に目覚めさせてくださった方が、どのような人物であるのかをしっかりと見極める。これは、親としての責任です」

そして、公爵夫人カリーヌは席から立ち上がった。その表情は先程とは変わらず笑みを浮かべたままだ。しかし……その身体から、強烈な何かが吹き出してくる。

「あ、あの、公爵夫人。わたくしめは、その」

あわてふためく太公望の言葉は、無慈悲にも途中でかき消されてしまった。突如起こった轟音によって。パラパラと、テーブルの上に埃が舞い落ちてくる。なんと、先程まで昼餐会場に存在していた壁が、完全に消失していた。実になんとも強烈な＜風＞である。

杖を構えていたカリーヌは、ふう……と、ため息をついた。

「これ以上弱く放つのは難しいわね……まあ、なんとかなると思いますが」

「か、カリーヌ！　だ、だからそれはだな……！」

ガタガタと震えながらも、必死の覚悟で妻を止めようとしたラ・ヴァリエール公爵であったが、そんな彼の思いも空しく、彼女が止まることはなかった。その二つ名が如く。

「お受けいただけますわよね？　従者殿」

○●○●○●○●

――ラ・ヴァリエール公爵家・屋敷の一画にある客間のひとつにて。

「ルイズのお母さまが、あの『烈風』カリン……」

しきりに頭を下げ、恐縮した様子のエレオノールが立ち去った後……タバサを含む招待客全員が、ルイズの口からその驚愕の事実を知らされていた。

「なあ、その『烈風』カリンっていったい何のことだよ？」

例の『婚約破棄』と、ルイズと手を繋いで歩いたことの影響か、精神的にだいぶ立ち直った才人がそう訊ねると、その場にいた全員――ただし、まるで魂が抜け出たような顔をして、ソファーの背もたれの中に埋もれている太公望を除く――が、口々にその『伝説』を語る。

曰く、トリステイン王国のみならず、ハルケギニア始まって以来

の＜風＞の使い手。

曰く、ひとりでドラゴンの群れを退治した『勇者』。

曰く、大公が反乱を起こした際に、たったひとりで全てを鎮圧してのけた『英雄』。

曰く、若き日のグラモン元帥が、一個連隊（１５００～２０００名規模の軍勢）を率いてとある戦に赴いた。しかし、彼らが到着した時点で、既に敵軍はカリンひとりの手によって鎮圧されていた。

曰く、隣国ゲルマニアの軍と、国境付近で小競り合いになった際『烈風』出陣の報が戦場に届いた瞬間、敵軍が全てを捨てて逃げ出した程の『伝説』。

「ヲイ、なんだよそれ……どんな化け物だよ！」

思わず、そう口にしてしまってから、しまった！　ルイズの母さんのことなのに、とんでもなく失礼な事を言っちまった。その考えに至れた才人は、おそるおそる、その『娘』を見たのだが……彼女は、ただカタカタと小さく震えているばかり。もはや、それどころではないといった風情だ。

「あの『烈風』だけは絶対相手にしたくない。これは、父上の口癖のようなものだよ」

話の中に出てきたグラモン元帥、その実の息子であるギーシュの言葉に、モンモランシーが追従する。

「とっても美しい方だって聞いてたわ。昔から、カリン様は男装

の麗人じゃないかって噂もあったんだけど」

「ええ、私もその噂は耳にしています。まさか本当だったとは、驚きましたぞ」

コルベールは、額に浮かんだ汗を拭きながらそう呟いた。

そんな彼らの様子と、埋もれた『パートナー』太公望の姿を見ながら、タバサは後悔していた。何故、もっと夫人のいう『語り合い』について、その内容を詳しく聞かなかったのだろうか、と。

既に、彼の『主人』として振る舞っているタバサが、それに応じてしまった以上――取り消すことなどできはしない。そして、立場上タバサの『従者』とされている太公望が、上位者による申し入れを断ることなど、絶対にできないのだ。

ルイズから、この事実はヴァリエール公爵家の親族及び、近しい者にしか明かしてはならないとされている『秘密』だから、絶対に言えなかった。そう聞いてしまっては、彼女やその家族を非難するわけにもいかない。実際問題、女人禁制とされている『トリステイン王国魔法衛士隊』の『伝説』が女性であるなど、到底明かせない事実だろう。

それにしても。タバサにはどうしてもわからないことがあった。そんな彼女の思いを代弁してくれたのは、彼女の親友キュルケであった。

「だけど、なんで『烈風』ともあろうお方が、いきなりミスタに決闘を申し込んできたりしたのかしら？　直感で、彼のことを強力な＜風＞メイジだって知ったのだとしても、不自然よね？」

「まったくじゃ。一体、カリーヌ夫人に何が起きたというのだろうか？」

そう言って、太公望に視線をうつしたオスマン。実は……彼だけは知っていたのだ。何故こんな事態が発生したのか、その理由を。そう――とある伝手により、ラ・ヴァリエール公爵夫妻にのみ、ルイズの＜系統＞について警告できたということを、太公望から聞いていたからだ。

もともと、太公望かオスマンのいずれかが、歓待期間中にそれを行う予定であった。そのための打ち合わせも、前もってしっかりと行っている。

今回、ルイズについて既に警告を発したという件については、朝食前にわずか一瞬、彼と接触した時に伝えられた『ゼロ成功』の一言のみだったために、詳しい状況はまだ聞けていないが、おそらく、公爵側から何らかのコンタクトを受けたため、彼から話すことになったのだろう。オスマンは、そのように判断していた。

ちなみに。オスマンは『烈風』の正体を知ってはいたものの、これはトリステイン王国の秘事といっても過言ではない『極秘情報』である。よって、太公望にその事実を明かしてはいなかった。もしも、太公望がそれを知らされていたならば、もっと別の『道』がありえたのかもしれないが……残念ながらそうはならなかった。

「まあ、頑張れとしか言いようがないのう」

そう声をかけてきたオスマンに、

「おのれ狸ジジイが……人ごとだと思って、気軽に言ってくれる……！」

こう呟き返すのが精一杯の太公望であった。

正直なところ。太公望は本気で困っていた。自分への評価をリセットしようとしていた矢先にこの災難。よりにもよって、このハルケギニア『最強』を謳われる、まさしく『伝説』のメイジから挑戦を受けるなど、想定外にも程があるのだ。

ルイズやワルドに文句を言おうにも無理だ。そもそも、これは外に出してはいけない情報だ。そういう意味では、ワルドに対する『口の堅さ』に関しての個人評価は高まる。ただ、単純に忘れていた可能性や、初対面である太公望に対する警戒が故に黙っていたことを考えると、まだ保留せざるを得ない。

もしタバサが断ってくれたとしても、受けざるを得なかったであろう。なにせ、あんな情報を伝えた直後なのだ。相手の人格を見極めるために、何らかの手段を取ってくるのは間違いない。

現に、ラ・ヴァリエール公爵は『魔法の話を聞く』という、やや迂遠な手段でもってコンタクトを取ってきている。おそらく、すぐに直接会談の機会が来るであろう。そう予期していた太公望であったが、夫人がこんな手を打ってくるというのは、はっきり言って『策』を練った段階では、予想の埒外であった。

しかもだ。これは『人格を見極める』ための一戦である。太公望お得意の搦め手は、絶対に使えない。かといって、自分を『おちこぼれ』と話した直後に、全力で戦うという選択肢も取れない。そもそも、余程のことがない限り、そんなつもりなどさらさらない。

――これらの条件を満たしうる『策』を検討せねばなるまい。まったく面倒な！

この状況では、誰も頼りに出来ない。自分だけでなんとかせねばならぬ。ソファーの柔らかさだけに安らぎを感じながら、太公望は、必死に己の最大の武器たる脳を回転させる作業に戻った。

○●○●○●○●

「あのふたり、何者かしら？　ハルケギニアの人間じゃないわよね。なんだか、根っこから違うように感じるの。とっても不思議だわ」

大きなワゴンタイプの馬車に乗って練兵所へと向かう道すがら、カトレアから投げかけられた質問に、タバサとルイズは心から驚いていた。ちなみに、この馬車の中には４人……カトレア、エレオノール、タバサ、ルイズが乗り合わせている。これは、カトレアたっての希望であった。

妹からのおかしな問いかけに、エレオノールは首をかしげた。東方からの客人なのだから、ハルケギニアの人間でないことはわかりきっているだろうに。何故、カトレアはこんなことを言い出したのだろう？

ただ、エレオノールは自分の妹が『特別』であることを知っていた。だから、訊ねた。

「それは、どういう意味かしら？　カトレア」

「ええと、何ていったらいいのかしら？　あのふたりは、とても近い場所から来ているんだけれど、でも、わたしたちとはすごく遠く離れた……そうね、まるで別の世界から来たような、そんな感じがするの」

静かに微笑みながら語るカトレアに、エレオノールは心底困ったといった顔を見せた。

「ねえカトレア。あなたって、すごく勘が鋭いから、ちょっと試しに聞いてみたけれど。わたくしには、何を言っているのかさっぱりわからないわ。別の世界？　もしかして、東方の端から来たという意味かしら？」

眼鏡の端を押さえながら確認してきた姉と、不思議そうに自分を見つめるふたりの少女に向かって、カトレアは、まるで謎かけをする女神のような表情で、こう言った。

「そこまではわかりませんわ。そんな気がしただけで。特に、あの方！　ルイズの＜魔法＞の先生は、まるで神話の時代からいらっしゃったみたい。あらいやだ、ごめんなさいね。わたし、すぐに間違えるのよ。もう気にしないで」

そう言って、ころころと笑うカトレアの顔を、タバサは驚愕の思いで見つめた。そして、姉の不思議な＜力＞について良く知るルイズも驚いていた。

……そう、彼女の言葉は、完全に当たっているのだ。ハルケギニアとは別の世界。『地球』という『星』から＜サモン・サーヴァント＞によってやって来たふたり。

そして、その片方は、その『世界』における『神話時代の終わり』から、３０００年の時を越えて呼び出された英雄。このひとは、一体何者だろう？　タバサは考えた。これは、勘が鋭いとなどという次元を遙かに越えている。

このことは、念のためあとで太公望へ伝えておいたほうがいいだろう。胸の中でそう呟いたタバサは、ふいにそこが、どきどきと高鳴りはじめたことに気が付いた。そうだ。これから行われるのは『伝説』と『神話』の戦いなのだ！

――ハルケギニアの『伝説』にして、歴史上最強を謳われる＜風＞『烈風』カリンと。

――別世界・地球の『伝説』にして、永きに渡り語り継がれる＜風＞『軍師』太公望。

戦いを好まぬ彼には、心から申し訳ないとは思う。思うのだが……実際問題として。こんな対戦は、本来ならば、どんなに見たいと望んでも絶対に実現しない、まさしく夢のカードである。

一瞬たりとも、彼らの戦いから目を離してはならない。タバサは、そう心に決めた。

○●○●○●○●

――そして舞台は、ラ・ヴァリエール公爵領・練兵場へと移る。

屋敷から、馬車で１時間ほどの距離にあるそこは、正直なところ

『荒野』といって差し支えないような有様であった。地面のあちこちがでこぼこしている。その『傷跡』から察するに、ごくごく最近使われたばかりなのであろう。

「太公望師叔なら大丈夫だろ！？　英雄様の戦いってやつを見せてもらうぜ」

などと、バシバシと自分の背中を叩きながら言ってくる才人に対し、ずいぶんと元気になったではないか。元はといえば、おぬしが原因とも言えるのだぞ！？　と、怒鳴りつけてやりたいのを必死に堪えながら、太公望は馬車を降り、練兵場の中央へスタスタと歩いていった。

そして、ふたりの『英雄』は、５０メイルほど互いの距離を開けると、向かい合った。

「大切な恩人にして学者でもあるあなたに、このような真似をするのは、本来礼にもとる行為であることは、充分に承知しております。ですが、これは親として。いいえルイズの母として！　成さねばならぬ試練とお考えくださいまし」

既に避難……もとい、高台に位置する観客席へ移動した者たち全てに聞こえるよう、高らかに宣言したカリーヌ夫人。色あせた――しかし、一切手入れを怠っていないマンティコア隊の制服に身を包んだ彼女に対し、太公望はこれまた大音声でもって応えた。

「わかっております。わたくしと致しましても、ここで逃げるわけには参りませぬ。最下級ではありますが、ガリアより貴族の称号を得た、貴族のはしくれ。そして、わたくしはこう考えます。＜魔法＞が使える者を貴族と呼ぶのではありませぬ」

『打神鞭』をグッと握り締め、太公望は高らかに叫んだ。

「敵に後ろを見せない者を、貴族と呼ぶのだ！」

その宣言に、満足げな笑みを浮かべるカリーヌ。いっぽう観客席では。

「どうしてかしら。今の宣言を聞いたら、なんだかイラッとしたんだけど」

「奇遇ですな、ルイズお嬢様。わたくしめも、全く同じ気持ちに襲われたところです」

一段高い席に腰掛けて、そう呟いたルイズに追従したのは、側に控える才人であった。

「学者の身でありながら、良い覚悟です」

気に入った。そう言いたげな顔をしながら呟いたカリーヌへ、太公望はニヤリ……と笑いかけた。

「カリーヌ夫人。なにやら誤解をされておられるようですが、わたくしめは『学者』などではございませぬ」

不敵に笑いかけてくる相手に、怪訝そうな表情を見せる夫人。学者ではないのならば、彼はいったい何者なのであろう？　だが、そう問いかける前に、夫であるラ・ヴァリエール公爵の声が響いてきた。

「双方、それぞれ名乗りをあげた後に、わしが『はじめ』と声をかける。それをもって試合開始の合図とする。ふたりとも、よいか？」

その声に、しっかりと頷くふたり。そして時は、本文冒頭・後半へと戻る。

「元トリステイン王国・国王陛下付＜近衛魔法衛士隊＞所属、マンティコア隊隊長カリーヌ・デジレ・ド・マイヤール。二つ名の由来は『強く、激しく吹き荒ぶ風』。『烈風』カリン」

せっかく『学者』で誤魔化し通せると思っておったのに。だが、万が一ばれた時のことを考えると、ここはある程度の情報を開示しておかねばならぬ。

まったく……何故に、わしはここにおるのかのう。太公望は、内心で再び『始祖』ブリミルへ呪いの言葉を吐いた。前もって、タバサたちと打ち合わせをする時間が持てたのが、唯一の救いか。そう考えた彼は、高らかに名乗りをあげる。目の前の『伝説』にあわせ、トリステイン風に、かつハルケギニア調で。あえて、現在ではなく過去のそれを大声で叩き付けた。

「大陸中央同盟国軍・周国＜崑崙＞所属、元同盟軍参謀総長、リョホー・タイコーボー退役元帥。二つ名の由来は『大公より知恵を望まれし賢者』。『太公望』呂望」

――ラ・ヴァリエール公爵領内の練兵場を、風が吹き抜けていった。

「今、彼はなんと言ったのかね？」

同盟軍とか、元帥とか、なにやら不穏な単語が聞こえてきたような気がするのだが？　広場に立つふたりをいったん制した後、そう訊ねてきたラ・ヴァリエール公爵の声に、タバサは簡潔にこう告げた。

「彼は、軍を退役済みの元帥。総勢２５万にのぼる同盟軍の参謀総長まで務めた、正真正銘の『軍学』の天才。指揮官としても超一流です」

その発言に、観客席が凍り付いた。その中で、もっとも早く起動に成功したのはギーシュであった。彼は、タバサのほうを向いて、叫んだ。

「退役元帥！？　彼は、確か中将ではなかったかね！？」

「それは、単なるわたしたちの推測。かつて師団を率いた経験があるという彼の言葉を聞いて、勝手にトリステイン流に当てはめて中将と予測した上で……そう思い込んでしまっていただけ」

そのやりとりを聞いたラ・ヴァリエール公爵は、慌てて広場にいたふたりを呼び寄せると、改めてタバサに訊ねた。彼はいった何者なのですか？　よろしければお教え願いたい……と。

ラ・ヴァリエール公爵の問いに頷いたタバサは、こう切り出した。

「実は、つい最近までわたしも知りませんでしたが……とある情報筋によって確証を得ました。彼は、大陸における『伝説的参謀』なのだと」

その上で……と、タバサはさらに先を続けた。

「彼の名声が大陸中に響き渡ったのは、強襲をかけてきた敵軍７０万に対し、自軍側は２５万しか用意できなかったにも関わらず、ほとんど損害を出すことなく相手を封じ、逆に降参させるという作戦を、総軍司令官へと提言し、成功させたことがきっかけです」

その功績で元帥杖を与えられ、参謀総長の地位を不動にしたのです。そう淡々と語るタバサを見ているラ・ヴァリエール公爵の背中を、汗が伝い落ちていった。

「彼は、軍人でありながら、まず相手に『交渉』を持ちかけることを信条とし、できる限り平和裏に、話し合いによって事態の解決を目指すという変わり種としても知られていました。多くの者たちから『臆病者』との誹りを受けながらも、兵士や民の血を流さずに済むのならば、それがいちばんだ。敵を倒すことだけが軍人の仕事ではない。そう言って意志を曲げず、退役するまでそれは変わらなかったそうです」

この言葉に、大きな反応を示したのはカリーヌ夫人だ。『話し合いによって平和裏に事態の解決を目指す』確かに軍人らしくないのだが……。

「とはいえ、本当に臆病なのかといえばそうではなく、高級将校にも関わらず、戦況に応じて前線に立つことも厭わなかったそうです。そして、周辺諸国に平和が戻った後、その絶大なる功績と、無駄に血を流さぬ戦いぶりを国王から評価され、大公の地位を打診されていたにも関わらず『そんな面倒くさい地位など不要』と、あっさりそれを蹴って軍を辞め、引き留める者全てを振り払って旅に出

てしまったという……別の意味での『伝説』まで持っているそうです」

これが本当ならば、確かに伝説になってもおかしくない。ラ・ヴァリエール公爵夫妻は、まずタバサを見……次いで、オスマンに視線を移した。

「オールド・オスマン。あなたは、彼の正体を……？」

ラ・ヴァリエール公爵は、やや固くなった声でオスマンにそう問いかけた。

「ええ、まあ……ただ、知ったのはごくごく最近でしたがの。例のフーケ事件の指揮ぶりを見て、これはと思い調査しましたから。何故か、彼は元の身分を晒すのを極端に嫌がっておりましたので、黙っておったまでですじゃ」

こんな状況にならなければ、わしとしては本人の意志を尊重し、伏せておこうと思っておったのですが。そう言って、深いため息をつくオスマン。それを見たラ・ヴァリエール公爵は、その場で崩れ落ちるのを必死になってこらえるのが精一杯であった。

ガリアの姫君が持つ情報網と、トリステイン最高のメイジにして、魔法学院という『卒業生』からの情報を確保しやすい位置にいるオスマン氏が調査の上で知っているということは、彼が『東の伝説』とやらであるのは、ほぼ間違いのない事実なのであろう。そう悟らざるを得なかったからだ。

――名乗りの際に正体を一部バラすので、話を合わせておいてくれ。これが、太公望からタバサとオスマンに、前もって依頼してい

た『策』のひとつであった。太公望が『伝説』であるのは間違いのない事実である。ただ、出身地が公爵の想定と違っているだけで、彼らは一切嘘はついていない。

もっとも、オスマンはタバサが語った『提言』や『大公の座を蹴った』ことに関しては、完全に初耳だったわけだが、それでもきっちり話を合わせられるのは、流石である。

ラ・ヴァリエール公爵は考えた。そうか、彼はガリア経由でハルケギニアへやって来たのか。その上で、何らかの手柄を立て、晴れてガリアの『シュヴァリエ』となり、その後になって彼の正体を知った者が、ミス・タバサ……いや、かのオルレアン大公の忘れ形見たる『シャルロット姫殿下』に従者として付けたのであろう。

そして、トリステイン魔法学院という『隔離された場所』に、姫と共に送り込まれたのだ。『ガリア王国東薔薇花壇騎士団』に入団させたのも、そうしておけば『姫に名誉ある騎士をつけているのだ』あるいは『東の伝説をわざわざ大公姫につけた』と、内部反対勢力、つまり『シャルル派』と呼ばれる反国王の派閥を抑えるための、都合のよい言い訳にしやすいからだろう。

公爵はさらに検討を重ねる。逆に、現国王『ジョゼフ派』に対抗すべく、国外勢力の手を借りるため『シャルル派』の手によって、有力貴族とのコネクションが作りやすい、留学生の多い魔法学院へ遣わされた可能性はないだろうか？

……いや、その可能性は低いだろう。もしもそうならば、ここまで彼らが正体を伏せてきた理由がわからない。ルイズの件があるのだから、なおさらだ。おそらく、カリーヌがこのような行動に出たこと自体が、姫にも、彼にとってもほぼ想定外の事態であるはず。

にも関わらず、わざわざ名乗りを上げた理由は……考えるまでもない。自分たちの身を守るためだ。おもに、カリンの手から。わしでもそうする。

そもそも、彼……大公の地位を蹴った上で国を捨て、旅に出たミスタ・タイコーボーが、ガリア王国に仕えようと考えた経緯。そしてガリアの姫君に、従者にまで身を貶めてまで付き従っている理由が全くわからない。何故そのような真似をしているのだろう？

――そんな風に、ラ・ヴァリエール公爵が深い思考の淵へと沈み込んでいたのとほぼ同時刻。『烈風』カリンこと、カリーヌ公爵夫人は、遠い昔を思い出していた。

まだ若く、恐れを知らなかったあの頃。情熱に浮かされるまま、立ち向かうもの全てに＜力＞だけで突撃し――失敗してしまった、あの時のことを。

幾度も上司たちから、今は作戦を立てている最中だから、こちらから絶対に手を出すなと忠告を受けていたにも関わらず、それを『臆病者』『騎士として相応しくない』と、なじった上に無視した結果、敵の奸計によって捕らえられてしまった。

あのときは、幸いにして衛士隊の仲間達が助けてくれたからよかったようなものの……最悪の場合、彼女はトリスタニアの広場で、敵の策略により、街の住民たちから罵声を浴びせかけられる中、公開処刑されてしまうところだった。事実、彼女は処刑台に乗るところまでいってしまっていたのだ。

カリーヌは、自分の慢心を自覚せざるを得なかった。ガリア王家の血を引く姫君に仕えているとはいえ、ただの従者。しかも、貴族

として最下級の地位である『シュヴァリエ』しか持たぬ者。おまけに、相手は本ばかり読んでいるような学者で、元おちこぼれ。自分が名乗った上で、ほんの少しだけ脅かしてやれば、その性格を掴めるだろう。怪我さえさせなければ問題になどならない。そう考えていたのだ。

ところが。相手は自分の名を聞いて怯えるどころか、正々堂々。なんと真正面から受けて立ってきた。そこまでは良かった。だが……彼は学者どころか元軍人。それも、あの若さにして東方では『伝説』とすら呼ばれるほどの知謀を持つ、参謀総長であった。同盟国を含むとはいえ、２５万の軍勢を用意できる国の『大公位』を与えられるほどの手柄を立て続けてきた『頭脳面』における天才。

カリーヌは頭を抱えてしまった。彼自身が、そう語っていたではないか。自分は＜魔法＞を期待されていない。『頭脳面』でのみ評価されていた――と。それを完全に失念してしまっていた。自分が余計なことをしなければ、彼はこんな風に正体を明かしたりはしなかったはず。もちろん、国際問題に発展する可能性があるからだ。

にも関わらず、彼がわざわざ自分の正体について名乗りを挙げたということは……母親として、娘を案ずると言い放ったカリーヌの気持ちに応えてくれた……と、いうこともあるだろう。だが、それ以上に『烈風』と戦うという危険から、自分の身を守ろうとしたのだ。全てを知ってしまった今、もう彼と杖を交えることなどできはしない。昔ならばいざしらず、経験を積み、守るべきものが増えた今――彼女は、そこまで無謀な真似をするほど愚かではなかった。

うわあ……どうしよう。わたしってば、またやっちゃった。まるで騎士見習いであった当時のように、カリーヌはどんよりとした気持ちで、その場に立ち尽くしてしまった。

そんな彼らに、さも心配げな声をかけてきたのは、問題の主たる太公望であった。

「あの……わたくしめは、名乗りこそしましたものの、別に元の地位がどうとか、今更そんなことを気にしたりは致しませぬぞ。今は、あくまでタバサさまにお仕えする、ただの従者なのですから。ささ、いざ尋常に勝負！」

実に爽やかな――だが彼をよく知る者たちにとっては、嘘くさいとしか言いようのない笑顔でもって公爵夫人へ語りかける彼を見たタバサは、やっぱり彼は『勇者』じゃなくて『魔王』だ。そう思った。

いっぽう、主人から正式に『魔王』認定された太公望のほうはというと。もしもこのまま戦いになっても構わない。いや、現段階に限っていえば、むしろ戦ってみたい……そこまで考えていた。何故ならば『ハルケギニア最強のメイジ』がどの程度であるのか、自分で直接見極めることができる機会など、他ではまず訪れないから。

つまり、戦いではなく観察がしたい。それが太公望の本音であった。よって、どちらに転んでも構わない。そう……戦いになっても、相手が『手加減せざるをえない』『自分が本気を出さなくてもよい』状況を作り出したのだ。

このような策をあえてとったのは――観察以外にも目的がある。そう、彼女がもしも『バトルマニア』であった場合、歓待期間中が彼にとっての地獄になる可能性があったからだ。それを阻止するための牽制。もしも戦いになってしまった場合は、１回見られればそれで充分。そう、太公望は考えていた。

だが。そんな『魔王』の驕りといっても過言ではない考えの『隙』をついた者がいた。それは『勇者』ではなく……かよわき『姫』たる存在であった。

「あの……ミスタ？　失礼ですけれど、ご無理はなさらないほうがいいと思いますわ。どうやって姿を変えていらっしゃるのかはわかりませんけど、本当はもう、８０歳をとっくに越えたお年寄りなのでしょう？」

――驕れる『魔王』の時を止めたのは、か弱き『姫君』カトレア嬢であった。

第６８話　軍師　対　烈風　－ＢＡＴＴＬＥ　ＳＴＡＲＴ－（後書き）

この内容、自分の力量では１話にまとめきるなんて到底無理！
よって、２話に分割します。カリンさんとのバトル前哨戦のようになってしまいましたが、ちゃんと戦います。ここを流したりはしませんのでご安心を！

さて、ついに「ある意味、太公望にとって妲己ちゃんよりも相性の悪い相手」（性格ではなく能力的な問題で）カトレアさんが天然爆弾を炸裂させてくださいました。そのせいで、いろいろ大変なことに……！

それでは次回を、おたのしみに！

２０１１／０６／１７　１３：００　誤字脱字・本文加筆修正
２０１１／０６／２０　２３：００　タイトル変更
２０１１／０７／１１　誤字脱字修正

第69話　軍師　対　烈風　－INTERMISSION－

――ルイズの姉カトレアには、幼い頃から不思議な『声』が聞こえる。

彼女がそれに目覚めたのは、両親から『杖』をもらい、初めて＜魔法＞を使った、その時であった。ごくごく簡単なコモン・マジックである＜ライト＞を成功させたとき、母がこう言ったのだ。

「初めてなのに、きちんとやれましたね。ですが、これが始まりです。これからも、しっかりと勉強を続けて、立派なメイジになるのですよ。わかりましたか」

彼女の母であるカリーヌ夫人が、実際に口に出したのはこの言葉だけであった。しかし……カトレアには、もうひとつ、やわらかな声が聞こえていたのである。

『こんな簡単にやれてしまうだなんて、本当に素晴らしいこと！今日は、はじめての＜魔法＞成功の記念に、この子が好きなものをたくさん用意して、家族みんなでお祝いしましょう』

カトレアは、目を見開いた。ちょっと怖くて苦手だった母が、こんなに優しい声で、そんなことをわたしに言ってくれるだなんて！幼いながらも、それが本当に嬉しかったカトレアは、素直にそれを口にした。

「お母さま！　ありがとう。カトレアは、これからもがんばりますわ」

だが、これを聞いたカリーヌは、カトレアが自分の教えについてお礼を言っているのだと思った。なんてけなげな娘だろうと、彼女は思わず娘を抱き締め、頬ずりをした。

「ええ、ええ。わたくしといっしょに、頑張りましょうね」

『わたくしの娘！　かわいいカトレア。あなたたち娘は、母の宝物です』

「はい、お母さま。カトレアに、いっぱいおしえてください」

――だが、それからしばらくして。突如カトレアの身を悲劇が襲った。

それは、原因不明の病に罹ってしまったことだ。＜魔法＞を使うと、激しく咳き込む。特に強い呪文を唱えたときに、それがより顕著となる。

最初のうちは、少し身体が弱いくらいだ。そう考えられていた。しかし、そのうち＜魔法＞を使わなくても体調不良を訴え始めたカトレアは、どんどん弱ってゆき……ついには、一日のうちのほとんどを、ベッドの上で過ごさざるを得なくなった。

そして、何人もの＜水＞メイジが、彼女を診に屋敷へと訪れた。

「すぐに良くなりますからね、カトレアお嬢様」

それが彼らの決まり文句。だが、カトレアは彼らの『本音』を『聞いて』いた。

『さっぱり原因がわからない。だが、なんとか原因を見つけないとクビだ』

もしかすると、わたしは……死ぬまでこのお城――ラ・ヴァリエール公爵領から、外の世界へ出ることは叶わないのではないだろうか。普通のひとと同じように、ただ生きていくことすらできないのかもしれない。カトレアは、それを思うたびに酷く心が乱れた。

そんな、己の心情を表へ出したように寒々とした真冬のある日。ベッドの中で、今まさに絶望の淵へと飲み込まれそうになっていたカトレアは、唐突に……窓の外で、ふたつの『声』が飛びかっていることに気が付いた。

『もっとごはんがたべたいな』『たべたいねえ』『はやく春にならないかなあ』『ならないかねえ』『お花が咲いたらごはんがふえるのになあ』『ふえるのにねえ』『たのしみだなあ』『たのしみだねえ』

窓の外には、誰もいないはず。では、あの声はなんだろう？　そっとベッドから起き上がり、窓を開けたカトレアは『声』の正体を知って驚愕した。

『ヒトが出てくるよ』『こないよ』『どうして』『あのヒトはいつもそうだ』

それは、ピチュチュチュ……というさえずり声。窓の外にある木の枝に止まった、2羽の小鳥。なんと、そのさえずりと共に『声』が聞こえていたのだ。

「小鳥さんたち。わたしの言葉がわかる？　わかったら、お返事をして」

カトレアは、彼らを驚かさないよう、窓からそっと声をかけてみた。それは、彼女なりのちょっとした冒険心。まさか、通じるわけがない。でも、もしも彼らとお話ができたら、なんてすばらしいことかしら。そんな、儚い願望から出た声だった。

『うん、わかるよ』『わかるに決まってるじゃないか』『わたしたちの言葉もわかるのかい？』『わかるのかしら』『めずらしいヒトだね』『そうだね』

端から聞いていたら、ただの小鳥のさえずりにしか聞こえない。たが、カトレアはしっかりと『彼ら』の『声』を受け止めることができたのだ。

――その日をきっかけに、カトレアの世界が、ほんの少しだけ広がった。

しばらくの刻を経て――彼女はこの＜力＞について、おおよそのことを理解するようになった。これは、人間でも動物でも関係なく、彼らが発する「外の声」と『中の声』が、感覚的に理解できるというものなのだと。

その後＜魔法＞の本を読んでいた時に『＜サモン・サーヴァント＞によって呼び出された＜使い魔＞は、人間の言葉を理解し、話すことができるようになることがある』という記述を発見したカトレアは、もしかすると自分に聞こえている『声』は、これに関係しているのではないか、そう考えた。

そのため、最初はメイジならば誰にでもできることなのだろうと思っていた。しかし、それを両親に話した直後。病弱なカトレアには妄想癖があるのではないか、もしや心の病に罹っているのではと不安視され、ベッドに縛り付けられてしまった。そして彼女は知った。これは、自分だけに在る特別な＜力＞なのだと。

カトレアは、それ以降この＜力＞について、誰にも話すことはなくなった。何故ならば、話しているつもりのない『心の声』が聞かれてしまっていると知れば、周囲の人々が自分のことを畏怖し――離れていってしまうかもしれない。それが何よりも怖かったから。だが、いつしか彼女はこの＜力＞が故に、

『非常に勘の鋭い娘』

と、いう認識を、家族に持たれるようになった。さらに彼女は、時を経るにつれ相手の『気配』『本質』にも敏感になった。たとえば＜フェイス・チェンジ＞で顔を変えた者の正しい姿をイメージで見破ったり、心の動きに敏感になり、嘘や悪意を直感的に見抜くなど、どんどんその＜力＞が強まっていった。だが、それと比例するかのように、身体の具合も悪くなっていった。

――そして、時は現代へと移り……ラ・ヴァリエール公爵家で執り行われた歓待の宴・その当日。彼女は出会った。とても面白い人物に。

父に案内されてやってきた、主人とおぼしき少女の側に控えている、黒い髪の小柄な従者。どう見てもルイズと同じ年頃だとしか思えないその少年は、カトレアの姉であるエレオノール曰く、なんと27歳なのだそうだ。

そんな彼が、母と挨拶を交わしたときに聞こえた声が、彼女の興味を捉えた。

「太公望呂望と申します。わたくしめのような者にこのお気遣い、感謝致します」

『ルイズを10倍キッツくして無理矢理瓶詰めにしたような母親だのう。瓶口から威圧感が溢れ出しておる』

カトレアは、思わず吹き出しそうになるのを必死に堪えた。自分の母親を恐れる人間は多数いたが、このひとは、怖がるどころかあっさりとそれを受け流しただけでなく、とんでもなく面白い評価を下している。

わたしとの挨拶では、どんなことを言われるのかしら。カトレアは、期待した。だが、その時に聞こえてきたものは、彼女にとって全く想像外のそれであった。

「ルイズ殿の姉君ですか。どうぞ、よろしくお見知りおきを」

『この娘が纏う気は、いったいなんだ……？　仙気の類とは似て異なる、これは？』

なんだろう、このひとは。何を言っているのかわからない。＜センキ＞とは一体？　ひょっとして、わたしの＜力＞について何かを感じたのかしら？　これをきっかけに、カトレアは、その面白い従者さんに興味を持った。

その後、カトレアは太公望の言葉へ特に注意して耳を傾けるよう

になっていた。

「この『桃』は、王や高位の貴族に対する『貢ぎ物』として、部下が献上する品です」

『本来は、国王の座にある者ですら、まず口にすること叶わぬ超貴重品だ。わしは、いつも師匠の隠し棚からパクっておるがのう。ケケケ……』

カトレアは、もう笑いをこらえるだけで精一杯であった。少なくとも――それがたとえ心の内側だとしても――こんなに面白いことを言うひとは、自分の近くにはいなかった。それに、嘘をついてはいるけれど、悪気はまったく感じられない。本気でワルド子爵の身体を気遣い、妹の成功を喜んで、あれを使おうとしてくれていることが……彼女独特の勘で理解できたから。

そのひとがくれた『お酒』も、本当に美味しかった。そして、飲むたびに自分の身体が、まるで羽根のように軽くなっていくのを感じた。今ならば、どこまでも飛んで行けそう……そう感じる程に。父も母も、いや家族みんなを笑顔にする＜魔法＞。たった一晩の夢かもしれないけれど、この時間をくれた彼に、カトレアは感謝した。

そんな彼女が、より彼に注目するようになったのは、ルイズにどうして＜魔法＞を教えてくれたのか、その理由を話してくれた、その時であった。

「いや……まあ、お恥ずかしい限りなのですが。人ごととは思えなかったのですよ」

『あんな涙を見せられてしまっては、いくらなんでも無視できる

か！』

「小石ひとつ、まともに動かすことができなかった『おちこぼれ』としては」

『小石どころか、砂粒１つ動かせなかったのう。修行を始めたばかりのころは』

本当に＜魔法＞ができなかったのだ、このひとは。だから、ルイズの涙を見て、余計に放っておけなくなったのね。そう考えたカトレアであったが、次の言葉で驚愕した。

「生まれ落ちたばかりの赤ん坊が、いきなり＜魔法＞を使えたりするわけではない」

『わしがいったい何年修行したのか知らぬからのう、このガキどもは。６０年と言ったらさぞ驚くだろう』

６０年！？　彼が？　思わず太公望の顔を見つめたカトレアであったが、どう見てもそんな年齢には見えない。ならば、彼は亜人なのであろうか。しかし、そういう感じもしない。彼は、ある意味『人間らしい人間』だと感じる。＜フェイス・チェンジ＞でもなさそうだ。なら、どうやって？

「そこに至るまでの『道』を歩んでいるからこそ、彼らはそのように語り継がれる」

『自分より遙かに格上の化け物どもと何十年も戦い続けておれば、嫌でも腕が上がるっつーの。弱いから命だけは助けてください、そんなことが通用するような、甘っちょろい世界ではなかったからの

う』

たしか、お母さまは『学者のようだ』とおっしゃっていたけれど……ひょっとして軍人さんなのかしら。少なくとも、学校を卒業してから何十年も、妖魔討伐を経験していらっしゃるのね。

「＜魔法＞面に関しては全く期待されていなかったのですよ」

『わしはハルケギニアでいうところの『ドット』か？　現時点で。周りがとにかく『天才』だらけだったからのう。あれ、わし以外の者だったら絶対途中で挫折しとったぞ』

素晴らしい＜風＞のメイジだと聞いていたのだけれど……実は『ドット』メイジ？　ひょっとして、周りが『スクウェア』だらけだったから、自分を完全におちこぼれだと思い込んでしまったのかしら、このかたは。カトレアは、そう受け取った。

そして、その後＜マジック・アイテム＞をたくさんもらったという話を聞いたカトレアは、考えた。もしかすると、それを使って『子供のふり』をしていらっしゃるのかしら。確かにそのほうが、お年寄りの姿よりもミス・タバサの側に仕えやすいわよね。特に、学院にいる間は……と。

だが、次の発言が、彼女にさらなる驚愕をもたらした。

「３０００年以上前の話でございますから。ただ、その功績は我が国の歴史に記されております」

『はあ……３０００年か。まったくブリミルのやつめ、よりにもよって、そんな離れた時代から＜召喚ゲート＞なんぞでこのわしを

ハルケギニアなどという異世界くんだりまで引き寄せおるとは！
そういえば、あの炎の勇者や他の仲間たちは、あのあと、どうなったのであろうか』

３０００年前から＜サモン・サーヴァント＞で喚ばれた！？　しかも、異世界！？

と、いうことは彼はミス・タバサの従者ではなくて＜使い魔＞だというの？　いえ、そんなことよりも……今から３０００年前から喚ばれただなんて。しかも、別の世界の……勇者様の仲間！　まるで、絵物語に出てくる『神話時代の英雄』のようだわ。

こうして聞こえてくる『声』には、決して嘘がない。カトレアはこれまでの経験で、それを嫌というほど実感している。だから、彼のいうことは絶対の真実。彼女の胸は、高鳴った。

もっと続きが聞きたい。だが……そっと迎えに来た侍従の言葉で、彼女はそれを最後に席を立たざるを得なかった。そう、ベッドへ戻らなければいけない時間になったからだ。ある意味、これは彼女にとっても、その場にいた全ての者たちにとっても＜幸運＞だったのかもしれない。

○●○●○●○●

――そして練兵場……現在よりも、少しだけ前に戻る。

そんな『神話の英雄』に叩き付けられた、母の『語り合い』。少なくとも、申し込まれた時点での彼は、本気で戦いを嫌がっていたように感じた。姉や母が『学者』だと評したように、実際問題、彼

は『勇者様』の補佐をするような役目を請け負っていた人物なのだろう。そう思って母を止めようとしたカトレアだったのだが……。

「娘を＜魔法＞に目覚めさせてくださった人物がどんな方であるのかを見極める。これは、親としての責任です」

母の言葉には、内外共に完全に同一。一切の迷いがなかった。嘘の一欠片もない。いったい、何が母をここまで駆り立てているのだろう？　悩んでいるうちに、昼餐会場の壁が消失した。

そして、彼の名乗りを聞いて、カトレアは本気で仰天したのだ。

「大陸中央同盟国軍・周国＜崑崙＞所属、元同盟軍参謀総長、リョボー・タイコーボー退役元帥。二つ名の由来は『大公より知恵を望まれし賢者』。『太公望』呂望」

『さらに詳しく述べるならば！　＜崑崙山教主＞が一番弟子にして最高幹部１２名を束ねし総軍司令官、リョボー・タイコーボー退役大元帥だ。さあ、これを聞いてもなお、わしに立ち向かってくるか！？　カリーヌ夫人よ。やるとしても、全力を出すことなど絶対にできぬであろう！？　フハハハハハ！』

……彼は、名乗りよりも、ずっと上の地位にいる。領内に閉じこもりきりで世間知らずのカトレアにも、そのくらいはわかる。何かの理由があって、全てを明かさないようにしているのだろう。

その後。彼の『ご主人さま』であるミス・タバサの言葉にも衝撃を受けた。

「彼は、大公の地位を『そんな面倒くさい地位など不要』と、あ

っさり蹴って旅に出てしまったのです」

『おまけに、彼の世界でいう＜次期教皇＞の地位まで約束されていたのに、それまで蹴った、とんでもないひと』

カトレアは、ここまでの情報を整理した。つまり、彼は３０００年前の、しかも異世界から＜サモン・サーヴァント＞で呼び出された『勇者さまの元仲間』で。６０年以上修行を積んだ元おちこぼれの＜メイジ＞。とても偉い元軍人さん。

＜魔法＞を教えてくだすった先生から離れてから戦いに赴いているから……少なく見積もっても、現在８０歳以上のお年寄り。おまけに、ハルケギニアでいうなれば『ロマリア』の＜教皇＞の座についていたかもしれない大賢者さま！

いきなりこんな突拍子もない話をされても、絶対に誰も信じないだろう。だから、彼はわざと自分を低く見せようとしているんだわ。わたしが、自分の＜力＞を隠しているのと同じように。

なのに、わざとそれを名乗ることで、お母さまを止めようとしている。やっぱり、彼はできることなら戦いたくなんてないのだわ。だって、本当はかなりのお年なんですもの……無理したくないのは当然のことよね。カトレアは、そのように結論した。

だからこそ、彼女はその『お年寄り』が次に放った言葉に、居ても立ってもいられなくなった。

「ささ、いざ尋常に勝負！」

『ま、どっちに転んでもかまわぬ。あれだけの名乗りをした後な

のだ、本当に戦いになっても、さすがに手加減してくるであろう。ハルケギニアの『伝説』とやらがどの程度なのか、見てみるのも悪くない』

カトレアは焦った。なんて無茶をするおじいさまなの！　そういえば、エレオノール姉さまにもこういうところがあるわ。すごく知りたいことがあると、無理を通してしまう……これが『研究者気質』というものなのかしら。でも、このおじいさまは、お母さまの『強さ』を全く知らない。このままでは絶対に怪我をしてしまうわ。なんとか止めなくては！

そして、カトレアは声を上げた。それが、戦いどころか周囲全ての時を止めてしまうことも知らずに。

「どうやって姿を変えていらっしゃるのかはわかりませんけど、本当はもう、８０歳をとっくに越えたお年寄りなのでしょう？」

○●○●○●○●

――彼が、８０歳を越えたお年寄り！？

それを聞いたとき、タバサは一瞬頭の中が真っ白になった。だが、さきほど馬車の中であった出来事。そして、これまでの事件などが、彼女の頭の中でパズルのピースとなり、瞬時に組み上がった。

そして、タバサは太公望を見た。完全に硬直してしまっている。これは……どうやら、彼としては絶対に隠しておきたかった事実らしい。そう推測した。その上で彼女は思い出した。以前、サイトが『夢の部屋』で語った、太公望に関する伝説の一部を。

『太公望が、たったの27歳だったなんて。70代越えてると思ってたのに』

そうだ。タイコーボーは一度たりとも自分を27歳だと断言してはいない。わたしたちが、そう思い込んでいただけのことだ。そして、このカトレアというひとは、どうやってそれを知ったのかはわからないが、彼の真の年齢を『感覚』で見抜いてしまっている。下手な嘘をつくのは逆効果。ならば、わたしの役目を果たすまで。そう……今こそ、彼を守るために動く。いつも、彼がしてくれているように。

――チェックメイト寸前。『聖なる女王(クイーン)』から『魔王(キング)』を救うために、颯爽と立ち上がったのは『雪風の騎士(ナイト)』タバサ。

「彼は『時と空間を駆ける能力』を持つ『伝説の妖精』の＜力＞によって、子供に戻されてしまったのです。だから、今はこんな姿をしています。わたしは、彼が本当は70代の老人であると伝え聞いております。嘘ではありません。お疑いでしたら、タルブ領の側にある『ジャコブ』という村に問い合わせてみてください。彼と全く同じ『祝福』を受けた人物がいますから」

カトレアは、口を半開きにして、タバサをじっと見つめた。そして、にっこりと笑顔を浮かべる。

「まあ、まあ、まあまあ。やっぱり！　わたし、妙に鋭いみたいで、そういうことがわかってしまうんです。ええ、ええ、あなたが本当のことを言っているのも確かだわ。世界には、不思議なことがあるものなのね！」

そこまで言ったカトレアは、くいっと首をかしげてこう呟いた。

「でも、７０代ってことは……いやだわ、わたしったら計算を間違えたのね。あのかたは６０年間＜魔法＞の修行をして、何十年も妖魔討伐をなさっておられたみたいだから、最低でも８０代だとばかり」

わたしはそこまで聞いてない。思わず太公望を見てしまいそうになったタバサだったが、ふと考え直した。このひと相手に、タイコーボーが何かを伝えていたことなど、一切なかったはず。さすがに、深夜まで彼と一緒にいたわけではないが、いくらなんでもそんな時間帯に、彼女のところへ行くような真似はしていない……はず。たぶん。

「それで、彼を止めてくれたのですか？」

「ええ……あ、ごめんなさい。これ、秘密にしていたことなのでしょう？　わたし、つい……」

心底申し訳なさそうに、しゅんとしてしまったカトレアに向け、タバサは小さく首を横に振った。

「いいえ、カトレア殿は、わたしの従者の身を案じてくださったのですから、気に病まないでください。よくあんなふうに、わたしの心臓に悪いことをするので……かえって助かりました」

タバサは、心の底から感謝した。実際問題、太公望の行動は本気で心臓に悪いのだ。

「本当にごめんなさいね。従者のおじいさま……あ、今は若返っ

ていらっしゃるのだから、おじいさまなんて言ったら失礼ね。彼にも悪いことをしてしまったわ」

いっぽう、そんな彼女たちのやりとりを聞いていた太公望はというと。ようやくブルースクリーン表示の完全フリーズ状態から起動画面まで戻り、現在までの情報を精査する作業に取りかかっていた。

当初は、かつて彼に『太極図』を授けてくれた――カツアゲして奪ったと言ってはいけない――老子のように、相手の心を読む『読心術』の使い手なのかと思い、警戒した。だが……それならば、タバサが『７０代』といったことに対して『計算を間違えた』などという返答をするのはおかしい。それに、彼女が本当に『心』を読めるならば、８０代どころか、伏義の……それこそ億を越えた数値が出てくるはずなのだ。

おまけに、普通なら質の悪い冗談としか思えないような胡喜媚（こきび）の話を、完全に信じているといった様子だ。相手の嘘を見抜く『能力』を持っているのか？　いや、違うな……だいたい、わしは自分が６０年間修行をしていた話など出しては――ちょっと待て。これは、ひょっとすると――！？

「あ～失礼、お嬢様がた。ちょっとよろしいですかな？」

相変わらず時間停止から立ち直れない一同を尻目に、太公望が一歩を踏み出した。

「カトレア殿。わたくしの推測が間違っていたら申し訳ないのですが。ひょっとして、あなたは『声』を聞き分けることができる『聴覚』をお持ちなのではないですかな？」

『もしもそうならば、聞こえますと答えてください。この声が聞こえていればですが』

カトレアは、驚いた。目の前の『少年に戻った老人』は、自分の＜力＞を知っている。

「ええ、聞こえます」

太公望は、思わず手で顔を覆った。なるほど、やはり彼女は『読んでいる』のではなくて『聞き分けている』のか？　ならば、もう少し実験させてもらおう。そして、１０秒ほど無言でじっと彼女の目を見つめた。

『この声は聞こえていますか？　聞こえているならば、はいと答えてください』

だが、それには無反応であった。

「なるほど、だいたい理解できました。カトレア殿がお持ちの＜力＞について」

『他人の表向きの声と、心の声の両方が同時に聞こえるのですな？　ひょっとして、動物と話すこともできませんか？　もしもそうならば、どうしてわかるのですか？　と、答えてください。違うのでしたら、それ以外の言葉で教えてください』

「どうしてわかるのですか？」

やはりそうか。太公望は納得した。カトレアの能力について。これは『読心術』などではない。「外に出す声」に付随してくる『思

考』を、表側の声と同時に『感覚』で『掴み取り』その上で『理解』することができるという＜力＞なのだと。

「知り合いに『聞ける』『話せる』人物がおったのですよ。どうやら、カトレア殿は、ルイズ殿以上に鋭い『感覚を掴む』能力をお持ちのようですな。ひょっとして、聴覚だけではなく、他の感覚も極端に鋭くありませんか？　ひと目見ただけで、相手の持つ＜雰囲気＞を完全に察してしまうような？」

『嘘をついているかどうか、姿を偽っているかどうか。そういったものも含めて』

この問いに、カトレアは驚いた。家族にも話していなかった事実を、ほぼ完璧なまでに理解されている。

「え、ええ……その通りですわ」

「それは、自分の意志でコントロールできますか？　探りたくないものがあった時、つまりですな……あえて、それを止めることはできますか？　それとも、常に鋭いままですか？　わたくしには後者のように感じるのですが」

難しい顔をして問うてきた太公望に、カトレアは困惑した顔で答えた。

「ある程度方向を絞ることはできますけど……止めるというのは考えたことがありませんでした」

ずっと、自分は部屋に閉じこもったまま一生を過ごすのか。そんな切ない思いが、彼女の＜力＞の範囲を広げていたのだ。そうすれ

ば、世界に溢れる＜声＞が聞こえるから。たとえ、外へ出ることが叶わなくても。

「やはりそうでしたか！　初めてお会いした時に、お身体から不思議な＜力＞が漏れ出しているのを見て、何事かと思ったのですよ」

太公望は、まっすぐにカトレアを見据え、断言した。

「もしも自分の意志で止めることができるならば、すぐに止めたほうがよろしい。そうでないと、全身から＜生命力＞と＜精神力＞が漏れ出すことによる影響で、どんどん身体が弱っていきますぞ」

その言葉に、これまであまりにもあまりな展開が続いていたが故に、停止した時の住人となっていた人々――特に、ラ・ヴァリエール公爵家の者たちが再起動を果たした。特に大きな反応を示したのは、ラ・ヴァリエール公爵であった。

「ミスタ。それは、いったいどういうことかね！？」

「はい。あくまでわたくしの見立てで、確証は持てないのですが……カトレア殿は、そう。例えていうならば、何らかのきっかけで、底に穴が開いてしまった『湖』なのです」

今度は、ラ・ヴァリエール公爵の目をまっすぐと見ながら答える太公望。

「穴が開いているから、どんなに水を注いでも、いっぱいにならない。だから、住んでいる生き物が減っていく。つまり、衰退していく。逆に、穴を塞げば生命力に満ち溢れる、美しい湖に戻るでしょう」

「つ、つまり……病気が治る、そういうことかね!?」

震え声で問うたラ・ヴァリエール公爵。それはそうだろう、どんな名医に診せても病名が一切わからなかった娘。＜魔法＞でも『薬』でも治してやれなかった。その重大な問題を、いま、自分の目の前にいる男が解決できるかもしれないというのだから。

「病気？　いや、カトレア殿は健康体ですよ。病人特有の＜気の乱れ＞がありませぬから。だから、わたくしも今まで気が付きませんでした。つまり、ただ単に＜力＞が常に外へ漏れ出してしまっているがために、それが原因で身体が弱っているだけです。カトレア殿は＜魔法＞を使うと、息が苦しくなったりしませんか？」

「なります！　苦しくて、咳き込んで……熱が出たりします」

カトレアは、思わず声を上げた。わたしが、病気じゃなくて健康体!?　どんなお医者さまも匙を投げてしまった、このわたしの身体が……!?

「やはりそうですか。では、その『感覚』の『網』を身体の中に戻して、使いたいと思ったときだけ、ほんの少しだけ出すようにすればよろしい。そして、美味しいものを食べて、１ヶ月ほど養生し、その後改めて外に出て毎日ごく軽い運動をすれば、数ヶ月で体力や筋力がつき、元気になれるでしょう。＜魔法＞も、ほかのメイジたちと同じように使えるようにはなると思いますが、無理は禁物ですからな」

もしも『網』の戻し方がわからないというのであれば、このわたくしがお教え致しますから。そう言って笑った太公望に、

「おじいさま、ありがとうございます！」

と、泣きながら叫び、ぎゅっと抱きついたカトレアの姿を見て、思わず杖を抜きそうになったラ・ヴァリエール公爵を＜ウインド＞で空の彼方まで吹き飛ばしたカリーヌ夫人と。その、あまりの早業に止める間もなく呆然とするしかなかった様子のエレオノール。

大好きな次姉が、実は病気などではなかったと知って喜ぶルイズの側で、あんな美人に抱きつかれるとか羨ましすぎる……などとうっかり呟いて、当然の如くご主人さまから踵落としをお見舞いされた才人と、彼と全く同意見ながらも年の功でそれを表に出さなかったオスマン。ラ・ヴァリエール公爵の飛んでいった方角と距離を、冷静に観測するコルベールとレイナール。

相変わらず、事態の推移についていけずに固まっているギーシュとモンモランシー。

タバサって……妹どころか、もしかして孫みたいに思われてた！？　そんなことを考えつつも、ひょっとして例の『女狐』さんって、実はエルフみたいな長命の亜人だったりとか！？　それならミスタと＜力＞の差がありすぎるって意味が理解できるんだけど……などと、微妙に鋭い感想を持っていたキュルケ。そして。

聞かなければいけないことが、また増えた。そう思って杖をぎりぎりと握り締めるタバサ。そして、彼女の『事情聴取対象』とされた太公望本人はというと――埋もれて窒息寸前に陥っていた。いったいどこに埋まっていたのかは、あえて言うまい。

もう、正直戦いどころではないほどに、場の雰囲気は乱されてい

た――。

○●○●○●○●

――そして、ラ・ヴァリエール公爵が天界（ヴァルハラ）から戻り、ようやく場が落ち着きを見せ始めた頃。

席についていたオスマンが、長い髭をしごきつつ、太公望を見てボソッと呟いた。

「まったく。妙に枯れたジジイみたいな発言が多いと思うとったら……本物のジジイじゃったのか」

「やかましい！　１００歳越えとるおぬしにジジイとか言われる筋合いはないわ！」

漫才のような掛け合いをしている老人ふたり――片方は完全に少年にしか見えないが――を尻目に、才人は頭を抱えていた。ルイズの綺麗な踵落としによって受けたダメージのみならず、新たに判明した衝撃の事実によって。

「いやマジで、ショタジジイとか本当に誰得なんだよ！」

「ショタジジイって何だい？」

聞き慣れない言葉に、レイナールが疑問をぶつけると、律儀に才人は解答した。

「俺の国の言葉で、外見子供で中身が爺さんのこと」

「なるほど、ショタジジイ……と」「いやメモらなくていいからそんなこと」

そんな彼らを尻目に、太公望は改めて『自分の年齢』について語り始めた。カトレアが近くにいるので、うかつなことは喋れない。それを念頭に置いた上で。心からの本音を全員にぶつけた。

「これまで黙っていたことについては申し訳ありません。ですが！　ここに来たばかりの時に、もしも本当のことを話していたら、わたくしは妖魔や亜人と間違われて、追い回されていたかもしれませぬ」

メイジたちは考えた。確かに、カトレア嬢がおらず、この『少年』にしか見えない彼の年齢が、何かの拍子に表へ出ていたら――誰かが、討伐に向かっていたかもしれないと。

「ついでに申し上げておきますが。ここにいる生徒たちは、わたくしにとっては孫みたいなもの。そのような存在が、自分の目が届く場所で、一切相手の実力を計ることなく正面突撃するような真似をしでかしたら、その場でパッタリと心臓が止まりそうになるというのは、ご理解いただけますでしょうか？」

特に、完全に無策で『土くれ』のゴーレム相手に特攻かまそうとした者たちのこととか！？　と、顔を引き攣らせながら紡ぎ出された太公望の言葉に、該当者3名――タバサは、きちんと策有りで動いていたので数には入らない――が、顔を赤くして俯いた。

「学院の者たちには散々話しておることなのですが、ラ・ヴァリエール公爵閣下並びに、ご家族のかたへも、念のためお伝えしてお

きます。わたくしは、戦争というものが大嫌い……いいや。憎んでいるといっても過言ではないのですよ。軍に所属したのも、元はといえば数百年に及ぶ、我が国周辺の戦乱を終わらせたい。ただ、その思いが強かったが故にです」

そう言った太公望は、静かな笑顔でラ・ヴァリエール公爵と、その家族を見つめた。

「よって、わたくしに杖を向けたから戦争だ！　などという愚かな選択は、少なくとも我が祖国にはございませぬのでご安心を。ガリアについても、いち従者に対して『試合』を申し込んだ程度で、公爵家相手におかしな真似をする程の愚か者はおらぬでしょう。少なくとも、わたくしどもは内密にします」

彼の言葉に、タバサは小さく頷きながら答えた。

「わたしも、本国へ報告したりは間違っても致しません」

そして。そのタバサの発言を受けた太公望はその後……ある意味で、一同にとっては完全に予想外のことを言い出した。

「カトレア殿はわたくしの年齢を察して、それを心配されたが故に試合を止めてくだすったわけですが……そのおかげで、長年病気と思われていた、体調不良の原因がわかった。これはまさしく僥倖といって差し支えないでしょう。それはさておき。このあと、改めて『烈風』殿に試合を受けていただきたい。なに、ご心配なさらずとも、肉体年齢に関しては見た目の通りですから」

その言葉に、一同はどよめいた。さっきまでは、あきらかに戦いを避けようとしていた彼が、何故に突然このようなことを言い出す

のかと。

「実際問題、こんな機会は二度とありますまい？　かの『烈風』殿と杖を交えるなど。おまけに、年齢がバレてしまった以上、わたくしが長期間修行をし、戦い続けてきているという事実が、全員の目の前に横たわっておるわけですよ。つまり『あいつは天才だからあそこまで戦える』などというような、わたくしにとっては不本意極まりない評価を受けずに済みます」

そう言って、改めてカリーヌ夫人へ向き直ると、太公望はしっかりとした言葉でもって『試合』を申し込んだ。

「よろしければお相手願えますかな？　『烈風』カリン殿。まあ、わたくしは自力で空を飛べるようになるまで、まるまる１０年以上かかった『おちこぼれ』のため、ご満足いただけるかどうかはわかりませぬが」

お嬢様の不調の原因をほぼ特定した礼ということで、是非お願いします。その申し出に、鋭くも――笑みを湛えた瞳で答えたカリーヌ夫人。そして、ふたりは改めて練兵場の中央で向かい合うと、名乗りを上げた。

その後、ラ・ヴァリエール公爵の開始合図と同時に、彼らは揃って杖を構える。

「ふふッ……６０年間の修行の成果とやらを、見せていただきましょう」

そう言って微笑んだ『烈風』に、『軍師』は不敵な笑みでもって応えた。

「その余裕、いつまで続くかのう？」

太公望は、その言葉と同時に、裂帛の気合いを込め『打神鞭』を一振りした。カリーヌ夫人――いやカリンの真横、数メイルほどの場所目掛けて。

「疾――ッ！！！！」

巨大な風刃が、超速でカリンの横を駆け抜けていった。しかも、地面をガリガリと凄まじい音を立てて抉りながら。そして、彼女は見た。自分の真横にできた、長大な地割れを。それは――今、目の前に立つ『少年』が放った＜エア・カッター＞が作った傷跡。その幅は、全長約５０メイル。深さは……わからない。底が見えない。

「なっ……！？」

先程までの涼やかなそれとは一変。まるで大蛇の如く絡みつく、力強き＜風＞を全身に纏った男が、絶句した彼女を見据え……こう言い放った。

「おちこぼれが、いつまでも弱いままでおるとは限らぬよ。さあ、本気で来い『烈風』よ！！」

――こうして。『伝説』と『神話』の戦いは、幕を開けた。

第６９話　軍師　対　烈風　－ＩＮＴＥＲＭＩＳＳＩＯＮ－（後書き）

ある意味、カトレアさんのおかげでガチバトルに持って行くことができた軍師ｖｓ烈風。勝つのはどっちだ！？

原作を読んだ上で、あくまで個人的な解釈を加えたカトレアさんの能力と、不調の原因。いかがでしたでしょうか？　実は健康。ただ、魔法に目覚めたときに、小さな穴が開いてしまったという設定です。

声を聞く能力などは微妙に封神演義もクロスしていますが、ほぼゼロ魔原作のままの彼女を維持しています。彼女の『見抜く』能力の由来は、こんなかんじなのではないかなあと。燃燈さんを勇者として引っ張り続けたが故に、彼の姉である竜吉公主と同じものを期待していた皆様、申し訳ございません。

そして、騎士タバサの援護で救われた太公望。彼女の判断力と即決力がどんどん伸びてきて、筆者である自分がいうのもなんですが、今後が楽しみです。

さて、２回で終わらせるといいつつ３回目に突入してしまって申し訳ございません。おかげで（？）記念すべき第７０話がＢＡＴＴＬＥ２になりました。では、次回をお楽しみに！

２０１１／０６／１９　１９：３０　誤字脱字修正、カトレアの能力について詳細補足他、本文加筆修正

第７０話　軍師　対　烈風　－ＢＡＴＴＬＥ　ＯＶＥＲ－

ラ・ヴァリエール公爵領の練兵場。その高台にある観客席から、通常ならば到底信じられないような光景を目の当たりにした観客たちは、あまりのことに言葉を失っていた――ただし、一部の者たちを除いて。

「い……今のは＜エア・カッター＞だよね！？」

顔を引き攣らせながら呟いたレイナール。彼が驚くのも無理はない。なにせ『ドット』スペルとされる＜エア・カッター＞によって５０メイルを越える地割れができるなど、常識ではありえないことなのだ。

日本風の表現で言うなれば、これは『かまいたち』。本来であれば目には見えない、空気の刃。ごくごく普通のメイジが唱えた場合、せいぜい鋭いナイフですっぱりと切られる、その程度の威力を出すのが関の山なのである。

以前、ラグドリアン湖で例の＜ヘクサゴン・スペル＞こと『打神鞭・最大出力』（ただし、全開前にタバサの手で強制停止）を目の当たりにした面々はともかくとして、太公望の＜攻撃魔法＞を初めて見ることになったオスマン・コルベール・レイナールの３名と、ルイズを除くラ・ヴァリエール公爵家の人々が仰天するのは当然だ。

と、それに追従するような形でエレオノールが補足を入れた。

「な、何なのよあれは！？　お母さま並の＜力＞じゃないの！！」

その声に、ルイズの母ちゃん――つまり『烈風』カリンもあのレベルなのかよ！　と、内心でツッコミを入れる才人他、ヴァリエール公爵家の者以外の面々。さらに、そこへ追い打ちをかけたのは、太公望の『主人』たるタバサだ。

「以前、彼と実戦形式の模擬戦を行ったことがあります。そのときのわたしは＜風＞の『トライアングル』でしたが、錘（おもり）を持つなど、多数のハンデを背負ってもらったにも関わらず、全く歯が立たないどころか、完封されました。『スクウェア』にランクアップした今でも、真正面から彼に挑んだ場合……正直、全く勝てる気がしません」

そのタバサの言葉に、一同は驚いた。特にびっくりしていたのが学院メンバーである。

「ちょっと、タバサ！　あなた、いつのまにミスタと模擬戦なんかやってたのよ」

どうしてみんなを誘ってくれなかったの、あたしも見たかったわ！　そう問い詰めてきたキュルケに、

「観客なしという条件で受けてもらった試合だったから」

と、いつものようにほとんど表情を変えずに回答したタバサ。ちなみに、ここでいう『実戦形式』というのは『各種交渉』の類も含まれている。実際に杖を交えたのは、まだ1度きりだが、あの戦いは、その前後も含め――彼女にとって大きな糧となっていた。

「こ、コルベール先生。質問いいっすか？」

「なんだね？　サイト君」

「俺、魔法使えないからわからないんですけど……メイジって、６０年間修行して、何十年も実戦経験積めば、誰にでもあんな、とんでもない魔法が放てるようになるもんなんですか？」

その問いに、青ざめた顔で首を横に振るコルベール。彼の＜メイジ＞としての実力は相当なものだが、魔法であそこまでの破壊力を出すことなど絶対に出来ない。

いや、研究一辺倒で鈍りつつある身体と勘を鍛え直した上で、かつ『スクウェア』にランクアップすれば、彼がその危険性故に『封印した火魔法』と『科学知識』を併用することで、可能となるかもしれないが……コルベールにはそんな気はないし、そのつもりもない。

「まあ、わしくらいのメイジならやれないこともないのじゃが……あれだけの規模の＜エア・カッター＞を撃つとなると、一発だけで、かなりの＜精神力＞いや、どっちかというと体力のほうを消耗してしまうのう。いい加減、歳じゃし」

ええのう、本当はジジイのくせに、あんなに若い身体を取り戻せているというのは。などとボソリと呟いたオスマンに対し、あんたもできるのかよ！　てか、ただの偉そうなスケベジジイじゃなかったのか、このひと！　などと内心でツッコんでいたのは、ラ・ヴァリエール公爵とカトレアを除く全員だ。

全体評価はさておき、さすがは『トリステイン最高のメイジ』の称号を持つオールド・オスマン。その名は正直伊達ではないのだ。もっとも、寄る年波には勝てないようだが。

――いっぽう、実際に『戦場』に立っているふたりのほうはというと。

『烈風』カリンは、勇猛果敢なことで知られる彼女としては珍しく、完全に身体が固まってしまっていた。それはそうだろう、これまでさんざん『おちこぼれ』だの『頭脳面のみの天才』という前情報を叩き込まれていたのだ。しかも、彼女の目に映っていた決闘直前までの太公望は、軍人という割には、完全に隙だらけとしか思えなかった。

それがどうだ。今、目の前に立っている男は！　自分が全力で放つそれと変わらない威力の＜魔法＞を平然と飛ばしてきただけではなく、息一つ乱れていない。しかも、全身にごく自然な＜風＞を纏っている。

それは、威圧感を伴う類のものではない。例えるならば、何もない平原でごく稀に発生する、渦巻き状の小さな＜つむじ風＞だ。いや……だからこそ、カリンは驚いたのだ。相対する人物が、完全な自然体であることに。ハルケギニアの歴史上最強とまで謳われる自分を前に、完全なる平常心を保てるほどの相手を警戒するのは『騎士』として当然だ。

これまで、いくつもの戦場を経験してきたカリンだからこそわかる気配。彼は、間違いなく強敵だ――それも、これまで戦ってきた、誰よりも。

「来ないのか？　ならば、こちらから行くぞ！」

わずか数秒にも満たなかったカリンの硬直。それを、太公望は見

逃さなかった。大声でそう宣言した後、彼は即座に前傾姿勢を取る。それを見たカリンは、すぐさま杖に＜風＞を纏わせた。＜刃（ブレイド）＞の魔法である。夫ほどではないが、彼女は近距離（ショートレンジ）戦も得意としている。

「受けて立つ！」

そのカリンの反応を見た太公望は、ニイッと笑みを浮かべると、＜風＞と共に……人間業とは到底思えないほどの超速度で猛然と走り出した――正面を向いたまま、後方へ。

カリンが見事にずっこけた。観客席にいた者たちも、ほとんど全てが崩れ落ちかけたのだが……。

「絶対何かやると思った。相変わらずおかしなところで器用」

「いや……だから、感心している場合なのかね、これは」

平然と。こういった場面での太公望の行動など、もうわたしにはお見通しだとばかりに呟くタバサと、以前似たようなシーンを見ているので、なんとなく予想はしていたものの、やっぱり呆れるギーシュ。そして、太公望の大声宣言時に聞こえてきた、

『ウハハハハ！　ついて来られるかな!?　このわしのバック走に！！』

と、いう『付随してきた中の声』による予告で、既に吹き出しそうになっていたカトレアの合計3名だけが、これに耐えきった。

「ふ、ふざけるなあああッ！！」

大声で叫び＜風＞を纏うと、＜ウインド＞を駆使して飛び出すカリン。彼女は、それと同時に＜エア・カッター＞を、呆れるほどの超高速で後退していく太公望へ向け、毎回……数枚単位で飛ばしまくったのだが、全部ひらりひらりとかわされてしまう。それも、紙一重で。

太公望が行っているこの回避行動は、ハッキリ言って、とてつもない技量を必要とする『超高等技術』といって差し支えない程のものなのだが「うひゃー」とか「ごひゅー！」「どひぇー！」などという叫び声が一緒についてくるので、締まらないことこの上ない。

「逃げてばかりいないでちゃんと戦いなさい！　敵に後ろを見せないというのは、嘘だったのですか！？」

「嘘ではない！　その証拠に、全部前を向いたまま避けておる！！」

「ひとはそれを屁理屈というのです！！」

「ハッ、屁理屈だろうとなんだろうと、事実であることには変わりあるまい！！」

練兵場の中で乱れ飛ぶ＜エア・カッター＞そして＜ストーム＞。そこは既に暴風域へと達していた。これらの現象を起こしているのはカリンのみ。太公望は、ただひたすらに回避するばかりである。しかも、だんだん余裕が出てきたのか、いつもの邪悪なワハハ笑いまで飛び出している始末だ。口調まで、敬語ではなく元通りになっている。

「それにしてもさ、マジでとんでもねえ威力だよなあ、ルイズ…

…お嬢様の母上が使う＜魔法＞は」

地面、もうボロボロなんじゃねェの！？　そう呟いた才人の声に、ルイズが追従した。

「そうなんだけど……なんだかお母さまが凄いのか、全部避けているミスタがとんでもないのか、あたしにはもう、わけがわからなくなってきたわ」

そう。ここまで＜エア・カッター＞はもちろんのこと＜ストーム＞＜カッター・トルネード＞他、相当な数の長距離用（ロングレンジ）＜魔法＞が乱れ飛んでいるのだが、なんと一撃たりとも太公望に当たっていないのだ。擦りすらもしていない。ついでにいうと、太公望は全く反撃を行っていない。

何故カリンが放つ＜魔法＞がロングレンジ系ばかりなのか。理由は簡単である。彼らが、試合開始以降ずっと追い掛けっこを継続しているからだ。それは、いつしか楕円を描くようになっていた。ぐるぐると、まるで陸上のトラック沿いに走るが如く後退を続ける太公望を、カリンが追従するような形で。

――なるほど、そういう意図なのだな。

ラ・ヴァリエール公爵は、内心唸った。そう……彼は、いち早く気が付いたのだ。太公望の狙いに。最初の一撃以降、太公望は一度たりともカリンに対して攻撃を仕掛けていない。いや、正確にいうと、彼からはもう、一切仕掛ける気がないのかもしれない。そう判断した。

彼は、ヴァリエール家の家督を継ぐために魔法衛士隊を辞す以前

は、カリンと同じマンティコア隊に所属しており、その『頭脳』たる役割を果たしていた。ついでにいうと、妻の気性――怒ると完全に冷静さを失う――を良くわかっている公爵は、こう考えた。

「彼は、カリンの＜精神力＞が切れ、倒れるのを待っているのだ」

……と。

そして、そのまま試合を終えるのが目的なのだろう。平和裏に事を解決するために。公爵はそのように受け取った。確かにカリンのパワーは凄まじい。だが、あれほどの冷静さを欠いた状態の彼女と、彼の驚異的な回避能力を併せれば、それが可能であるという判断の上で。

と、ここまで思考を進めたラ・ヴァリエール公爵はふいに疑問を覚えた。何故、彼はこんな回りくどいことをするのだ？　そもそも、事を荒立てたくないのならば、最初から試合など申し込まなければよいではないか。にも関わらず、こんな真似をするということは、何か他に理由があるはずだ。それは、いったいなんだ？

――いっぽう、ラ・ヴァリエール公爵が太公望の行動理由について首を捻っていた、ちょうどそのころ。カリンは若い頃を思い出していた。騎士見習いになる前、とある人物と出会ったときのことを。

カリンは、驚いていた。彼女は『伝説』と呼ばれるほどに優秀な騎士である。内面では、とっくに冷静さを取り戻していた。若い頃ならばいざしらず、戦士としても、公爵夫人としても。そして母としても経験を積んだ今では、長年連れ添った夫にすら怒り狂っているように見せかける程度の『演技』をすることなど、どうということはない。とはいえ、最初は割と本気で怒っていたわけだが。

彼女は、まるで道化師のように振る舞っている目の前の対戦相手が、これほどの『技巧派』だとは想像だにしていなかった。自分と同じ＜力押し＞を得意とするメイジだと、完全に思い込んでいた。いや、最初の一撃で『そのように思い込まされた』のだということを、カリンは嫌と言うほど実感していた。

この男は、避けているだけではない。幾重もの＜風＞で受け流しているのだ。しかも、こうして戦っているわたくし以外の者に悟られない程度の、ごくごく小さな＜風の流れ＞を作り出すことによって。優秀な＜風＞の使い手たるカリンには、それが手に取るようにわかる。

戦いの最中だというのに、カリンはつい微笑んでしまった。幼さが故に、無茶ばかりしていたあの頃。初めて『あのひと』と出会ったのも、そんな若さからくる無謀な行いがきっかけであった。大怪我をしていたにも関わらず、それを隠して自分という『子供』から挑まれた『決闘』を受けてくれたひと。あの当時も、こんなふうに簡単にあしらわれてしまったわね。

『烈風』カリンは、ずっと孤独であった。家族や血縁者、友人がいないという意味ではない。その＜強さ＞が故に、敵――そう。彼女にはライバルと呼べるような相手が、全く存在しないのだ。

もちろん、昔はそんなことはなかった。数多くの年上の騎士や妖魔達によって簡単にあしらわれ、何度も悔しい思いをしてきた。しかし＜力＞が強まるにつれ、少しずつカリンの相手ができる者が減っていき……いつしか、ずっとその背中を追い続けてきた『あのひと』をも、追い越してしまった。

終いには、ただ『出陣した』という一報が流れただけで敵軍が逃げ去ってしまうほどに、彼女の名声は高まってしまった。そして、まともに戦うことすらできなくなり――ついには、ひとりになった。

今朝方、ワルドに稽古をつけたとき。カリンは、突如変貌した彼の姿に驚いた。おそらく『国と家族を守る』という強い決意が故に、ワルドは――息子のように可愛がっていた青年は、壁をひとつ越えたのだ。昨日よりも明らかに＜力＞が……それも、数段上がっていた彼が、いつの日か自分と並び、そして追い越していってくれる日を楽しみに待っていよう。そう考えていた。

ところが。そんな期待が胸に宿ったその日のうちに、それ以上の……しかも、最低でも自分と同等の威力を持つ＜風＞を放ち、かつ明らかに戦闘スタイルが異なる相手が現れた。『騎士』いや『戦士』として、これほどの幸せがあるだろうか。いや、絶対に無い！

息子が大きな壁を越えた。長年病弱だと思われてきた愛娘は、実は病気などではないとわかった。そして今――自分の目の前にいるのは。数十年以上探し、求め続けてきた、自分の好敵手たりえる存在。今日は良き日だ。わたくしは一生忘れないだろう。

「嬉しい。やっと本気で戦える相手に出逢えた」

カリンは喜びの感情を爆発させ――戦場に本物の『烈風』が顕現した。

――ルイズの母親は、本当に『人間』か！？

いつもの如く、自分のペースに巻き込んで、相手を『観察』していた太公望は、突如＜力＞を爆発させた『烈風』カリンの変貌ぶり

に、ただただ驚愕していた。

『あの』ルイズの母親である。相当な＜力＞の持ち主であろう。そう当たりをつけてはいたが、まさか、これほどとは！　この威圧感、そして溢れ出てくるエネルギーは、かの偉大なる『古き時代の風』殷の太師を彷彿とさせる。

さすがに、あそこまでの＜力＞はないものの、もしも彼女が＜仙人界＞に在ったなら、現時点で間違いなく幹部に――いや、今後の修行と心得次第では、間違いなく『最高幹部』の座に就ける程の＜器＞の持ち主だ。

太公望は、歯ぎしりした。相手はただの人間。そんな驕りが、自分のどこかにあったことは否定できない。だから、わざわざ試合などを申し込んでしまったのだ。

本来であれば、回避できたであろうそれを、よりにもよって、わざわざ自分から行ってしまったのだ。上げすぎた評価をリセットするために利用する！？　『おちこぼれ』なりの戦い方を見せて納得させようとした、だと？　笑わせるな！

もっとちゃんと考えてさえいれば、他にも策が。ずっとよい方法があったはずなのだ。まったく……これでは、わしも＜力＞を発揮せざるを得ないではないか。このわしとしたことが、なんという馬鹿な真似をしてしまったのだろうか。太公望は、そう自嘲した後に改めて気を引き締めると、立ち止まった。

そして『打神鞭』を構え直した太公望は、カリンへ向き直ると――こう言った。

「わしも、本気で戦おうと思う」

○●○●○●○●

――それは、まさに『神話』の戦いであった。

『烈風』が唱えた＜魔法＞によって現れた、１６人の＜遍在（ユビキタス）＞の突撃を、『軍師』が左手に構えた『打神鞭』の先から発生させた、総数２０本もの＜風の鞭＞によって迎え撃ち、払い退ける。

その＜鞭＞をかろうじて避け、懐へとかいくぐった、わずかに残る『近衛隊長』の＜遍在＞を、全身に、まるでバネような形の＜風＞を纏った『参謀総長』が、それだけで一撃必殺となりうる強烈な多段蹴りと、突き上げた拳によって空中へと打ち上げると、頭上に発生させた円輪状の＜エア・カッター＞を投げつけ、切り裂いた。

そして、先程のお返しとばかりに本体へ近接（クロスレンジ）での戦いを挑むべく、足元に＜強風＞を吹かせることで実現した、超高速の前進を仕掛けてくる『拳士』を、手に持った軍杖に纏わせた＜風の刃＞を盾のように広げることで牽制する『剣士』。

遙か彼方、天空まで届くほど長大な竜巻に乗って空を舞う『騎士姫』を、全く同じ規模の大竜巻を纏った『魔王』が迎え撃ち、練兵場の中央で、轟音と暴風をまき起こしながら大激突を繰り返す。何度も、何度も。

トリスタニア中央部にある大劇場『タニアリージュ・ロワイヤル座』の演目にはもちろんのこと、書物にすら存在しない程の、激しくも、凄まじい＜台風＞ふたりの戦いを前に……観客席に座った一

同は、既に畏怖すらも通り越して。ただその場で、見惚れることしかできなかった。

「ま、まさか、あ、あのカリンの『本気』と互角に撃ち合える、だと……！？」

観客席の肘掛けに乗せた手を握り締め、ラ・ヴァリエール公爵がかろうじて喉の奥からしわがれた声を絞り出すと。

「撃ち合いなどではない、あれは『従者』殿が受け流した上で、その＜力＞を利用し、反撃しようとしておるのじゃ！　だが『夫人』の＜力＞が強過ぎるが故に、流しきれずに受け止める形になっておる。それ故に、双方決定打を繰り出すことができない。これはそういう戦いじゃよ」

『烈風』にその座を奪われるまで、トリステイン王国最高の『天才』と呼ばれたメイジにして、実力者たるオールド・オスマンが、公爵の言葉に反論する。

「これは、まさに『力（パワー）』のミセス・カリンと『技（スキル）』のミスタ・タイコーボーの決戦。そういうことですな！」

コルベールが、興奮した声で上司の言葉に補足を入れる。

「烈風殿のほうが強い。これはわかりきったことだよ！」

「絶対、太公望師叔だ！　経験の差でこっちが勝つ！」

ギーシュと才人は、手に汗を握りながら、揃って応援合戦に興じている。他の観戦者たちも、彼らと似たようなものだ。『西』異世

界・ハルケギニアと『東』地球・中国大陸の『英雄』同士が繰り広げる『東西異世界大決戦』。普通ならば、どんなに望んでも決して見ることなど叶わない、正真正銘『黄金の試合（カード）』だ。

そんな中。ふたりの『姫』が、おかしなことに気が付いた。

「なぜ、これほどの＜風＞がぶつかりあっているのに、ここまで届かないのかしら」

――そう感じていたのは、その純粋さが故に身体を損なっていた『春風の姫君』。

「どうして、あの＜風＞は2つあるのだろう」

――疑問を覚えたのは、その過酷な運命が故に心を閉ざしてきた『雪風の姫君』。

戦いの均衡が崩れたのは、その直後。カリンが放った巨大な＜エア・カッター＞を、それまで同様、極小の＜風の盾＞で受け流そうとした太公望が、足元の小石に足を取られた、わずかな時間。そのタイムラグが故に……弾く角度にごく僅かなズレが生じた。瞬時にそれに気付いた太公望が、大声を上げる。

「守りきれぬ！　才人、デルフで！！」

観客席に迫る＜エア・カッター＞。だが、太公望の声と主人の危機に即座に反応した＜ガンダールヴ＞平賀才人が、背にした大剣を瞬時に抜くと。＜風の刃＞を、その刀身でもって粉砕し、全てを吸収した。

「みんな、大丈夫か！？」

――左手に、煌めく剣を持つその少年の姿は、まさに仲間を守る『勇者』にして『神の盾』。彼の手によって救われた人々は、口々に感謝の言葉を述べた。

そして、決戦に赴いていたふたりの戦いは、そこで終わった。

「わたくしの……負けです」

『烈風』カリンが、手にしていた軍杖を落とし……そう宣言したことによって。

○●○●○●○●

「わたくしは、ただ戦うことだけに夢中になっていたというのに、彼は観客席まで気に掛けていました。攻撃を逸らす際に、絶対にそちらへ＜風＞がいかないよう、細心の注意を払っていたのです」

全員の前で、そう言って力なく笑うカリーヌ夫人。その言葉を補足するかのように、確かに、こちらへは一切の＜風＞が届いていませんでした。そう呟いたカトレアの声に、一同は驚いていた。

タバサとレイナールの『風系』生徒と、オスマンとコルベール、ラ・ヴァリエール公爵の『大人組』は、それを薄々は感じ取っていたものの、いまいち確証が持てていなかった。だが……夫人の口からそれを聞いたことによって、彼らは自分たちの直感が間違っていなかったことを悟った。

「それと。彼がどうして自分を『おちこぼれ』などと言うのかも、理解できました」

こう言って『烈風』カリンから、ラ・ヴァリエール公爵夫人カリーヌへと戻った女性は、太公望のほうへ向き直ると、その目をじっと見て聞いた。

「あなたは＜風＞の『スクウェア』メイジなどではありませんね？　それどころか……『ドット』がせいぜい。何故ならば……＜念力＞と＜ウインド＞この2種類の＜魔法＞しか使えない。違いますか？」

その発言にざわめく一同。あれほどの戦いを繰り広げた達人が『ドット』!?　だが、彼女の発言にいち早く反応を示した者がいた。コルベールだ。

「そうか！　私には、不思議でならなかったのです。どうして彼が＜遍在＞を使わないのかと。使いたくても使えなかった。そういうことだったのですな!?」

さらに、そこへ補足した者がいた。太公望の『パートナー』タバサだ。

「夫人の言葉で、納得できました。先程の戦いで、彼が使う＜風＞が、普通のものと、そうでないもの……何か、別種の＜力＞が込められたような2つの＜風＞であることに気が付いてはいたのですが、わたしの『感覚』では、残念ながらそこまでしか判断がつきませんでした」

タバサの発言に、こればかりは実際に両方の＜風＞を何度も受け

ないとわからないでしょう。そう言って微笑んだカリーヌ夫人は、再び太公望へ向き直った。

「最初は、手加減をされているのかと思いました。でも、あなたの＜風＞にそのようなものは感じませんでした。そして、あの『守りきれない』という声で確信したのです。あなたは＜遍在＞を出せないと。でも『トライアングル』レベルでは到底扱いきれない＜風＞を纏っている。これはいったい何なのかと、わたくしは疑問を覚えたのです」

まっすぐと自分を見返してくる太公望の視線を受け止めながら、カリーヌは続けた。

「吹いてくる＜風＞の質が、どこか普通のものと違っている。そこでようやく気付いたのです、あなたの『詠唱速度』が異常なまでに速いことに。そこまで考えるに至って、やっと分かったのですよ。あの竜巻は＜ストーム＞に見せかけた＜ウインド＞。刃は＜エア・カッター＞のように形作られた＜念力＞。あなたは＜力＞を偽装していた」

まるで、事件を解明しようとする名探偵が如く、カリーヌ夫人は持論を展開する。

「あなたは、2種類の＜魔法＞を使い分けることによって、自分の＜力＞を大きく見せかけていたのでしょう？　昨夜語ってくれた『自然科学』の知識と知恵、そして磨き抜かれた＜技＞を駆使し、いろいろな形の＜風＞を吹かせることによって。そう……最小限の＜力＞を用いて最高の＜威力＞を発揮させる。あなたの先生は、正しい『道』を示されていたのですね」

カリーヌ夫人の『最後通告』に、太公望は片手で顔を覆った。

「完敗です、カリーヌ夫人。まさしくその通りです。わたくしには、それしかできないのですよ。これまでずっと隠し通してきたというのに……参りました」

『動かすこと、力を込めること、吹かせることしかできないというのがより正確なところであるが』

内側の『声』を聞いていたカトレアも、これで納得した。あのとき聞こえてきた言葉は、内心での比喩的表現ではなく、事実だったのだ。『ハルケギニアでいうところのドット』。本当に、彼は『ドット』メイジだったのだ。しかも……＜念力＞と＜ウインド＞しかできない『ドット』にすら届いていない存在。一般的なメイジの感覚からいえば、完全に『おちこぼれ』だ。

「待ってよ！　ミスタは＜火＞の『トライアングル』以上だって、前に学院長が……！」

そのルイズの発言に、太公望は首を横に振った。

「確かに、その気になれば＜火＞も扱えます。ですが、わたくしは自力で＜魔法＞による＜火＞を灯すことができないのですよ。杖で薪を叩いて＜火花＞を起こしたり、松明でつけた＜火＞に＜風＞を重ねることによって、ようやく＜火＞メイジのような事象を起こすことが可能となるのです」

そして、今度はタバサを見て、こう言った。

「以前、ご主人さまが怪我をなさった時に、わたくしが使った＜

治療（ヒーリング）＞に関しては、さらに厳しい前提条件を満たすことが必須となります。これは国外には絶対に出せない、極秘の『自然科学』及び関連知識がからんで参りますので、大変申し訳ありませんが、たとえガリアの国王陛下から直々に教えろと言われても、絶対にできませぬので、どうかご承知おきください」

その言葉に、タバサは頷いた。たとえ教えてもらえたとしても、それほどまでに貴重な知識を――よりにもよって、彼女の父を殺害したとされているガリア国王ジョゼフに明かすつもりなど、一切ない。

ちなみに、太公望が語ったこれらは全て事実である。＜治療＞は『太極図』の『魔力転換効果』を使って行われたものであるし、かの宝貝はある意味『自然科学』の塊であるから。そもそも、太公望以外であれを使える人物がいるとしたら、現時点では王天君しか存在しない。たとえ＜感覚共有＞があっても、タバサの＜生命力＞では絶対に不可能だ。

太公望は、その発言の後……カリーヌ夫人に向けて頭を垂れた。

「と、いうわけで……この勝負はわたくしの負けです、カリーヌ夫人。退役済みとはいえ、一度は国から軍を任された元帥。しかも参謀総長たるわたくしが、よりにもよって自軍の『作戦』と『戦力』を完全に見抜かれてしまった。これは、戦争でいえば絶対的な敗北に等しいことですから」

だが、カリーヌ夫人はその言葉に異を唱えた。

「なにを言うのです。わたくしは、国や民を守るべき『騎士』でありながら、その本分を忘れ、戦いの楽しさに酔ってしまった。あ

なたが負けだというのなら、わたくしこそが真の敗北者です」

わたくしの負けです。いいやわたくしめが。そう言い合うふたりに、座席から立ち上がり苦笑しながら近寄っていったのはラ・ヴァリエール公爵であった。かれは、さも難しげな顔をして彼らを見比べると、こう告げた。

「さて、これはどうしたらよいものか。ふたり揃って負けを主張するとは」

そう呟いて、オスマンをちらりと見る。その視線に、オスマンはまるでいたずらっ子のような目を向けて、これは難問だ……などと呟き、何かを考えるようなそぶりを見せた。

「まったくもって、難しい問題じゃの。あれほどの名勝負が繰り広げられたというのに、目の前にいるのが敗者だけだというのは。これは、あってはならないことだとわしは思うのじゃが、どうかね？　ここにいる皆はどう思う？」

答えを聞くまでもなかった。何故ならば、彼らの顔はみんな輝いていたから。それを見たオスマンは、ラ・ヴァリエール公爵に向けて、笑顔で頷いた。そして、公爵は高らかに宣言した。

「この勝負に、勝者も敗者もない。よって……引き分けとする」

○●○●○●○●

――そして、夕食後。

「まさか、ミスタが『ドット』だとは思わなかったよ」

未だ興奮冷めやらぬといった様子で、声をかけてきたギーシュに対し、太公望はこう言った。

「おぬしは、最近『ライン』に上がったからのう。とうとう追い抜かれてしまったわ。教え始めた頃は、わしにいちばん近いタイプの＜メイジ＞だと思っておったのに」

＜錬金＞による、ゴーレム7体の複数同時操作。言われてみれば、今日太公望が見せてくれた＜風の鞭＞２０本の『同時展開』も、実は＜ウインド＞によって行われていた。

同じ指揮官タイプでもあるし＜系統＞や手法こそ違えど、戦い方自体はそっくりだ。いつか、自分もあの＜鞭＞のように、たくさんのゴーレムを扱えるようになるのだろうか。そんなことを考えていたギーシュに声をかけてきたのは、カリーヌ夫人だ。

「あなたはグラモン伯爵のご子息でしたわね？　お父様も、ゴーレムの同時操作がとてもお上手ですもの。やはり、血筋なのでしょうね」

わたくしが見習い騎士だった頃、彼は『トライアングル』だったのよ。そう言って笑顔を見せたカリーヌ夫人は、今までとはまるで別人のように柔らかな表情をしていた。

「それにしても。あんなに多くの＜風の鞭＞を出せるメイジなど、今まで見たことがありません。わたくしでも、同時に１６体の＜遍在＞が限界です。やはり、あれは訓練と実戦によって磨かれたものなのでしょうね」

「それもありますが『自然科学』の知識が大きいですな。それと『複数思考』。これを組み合わせて……現時点で、＜鞭＞だけでよい状況ならば、最大２４本はいけるかと」

「まあ！　では、残りの４つは……ああ＜盾＞と＜風移動＞それと＜円輪＞に回していたのですか」

「その通りです。この域に達するまで、実に６０年かかりました……」

老メイジならではの熟練した＜技＞。正直なところ、カリーヌは、天使の『祝福』によって若返り、人生のやり直しができているという太公望が羨ましかった。しかし、彼女はすぐに思い直した。今のわたくしは、過去によって築かれたものだと。

そこに、新たな声が加わってきた。ラ・ヴァリエール公爵だ。

「ところで、ひとつ聞きたいことがあるのだが……かまわんかね？」

「どういった内容でしょうか？」

太公望の返事に、うむ。と、頷きながら公爵が口を開いた。

「君が本気を出す前。あの戦い方の意図だよ。最初は、相手の＜精神力＞切れを待つ作戦ではないかと考えたのだが、それならば、最後まで貫き通せばよかったはず。にも関わらず、それをせずに真っ向勝負を仕掛けたのは何故だね？」

その質問に、太公望は思わず苦笑して答える。

「最初のあれはですな、夫人の『実力』を測らせていただいていたのです。＜魔法＞の威力、攻撃が届く範囲、得意な戦法、逆に苦手なものは何なのか。まず相手を徹底的に調べる。これは、戦いの基本ですからな。国元で『回避だけなら史上最強』などと陰口を叩かれたほど、逃げ足には定評があるわたくしだからこそ取れる戦法ですが」

ラ・ヴァリエール公爵は感心すると同時に、呆れた。まさか、そんな意図で『最強』を挑発するような真似をしたのか、この男は……と。しかし、ふとそこに至るまでの太公望の言動を思い返す。確かに、カリンと全力で杖を交える機会などまず訪れないし、その実力を見ることで、今後の指針とする。そこまで考えていたのか。

素直にその考えを口にしたラ・ヴァリエール公爵に、太公望は頭を掻きながら、恥ずかしそうな顔をして言った。何故あのような真似をしたのか、その経緯を。

「自分が臆病者などではない、勇敢なのだということを、周りに証明したくてたまらない年頃に……戦場で、おちこぼれにも関わらず、しかも、ろくに相手の実力を測らぬまま一騎打ちを受けて立ってしまったことがありましてな。で、結果は完敗。敵軍に捕えられて、そのまま敵城にある処刑台まで引っ立てられていったという経験がございまして」

この発言に、全員がぎょっとした。カトレアなど、

『あの時のことは、未だ夢に見るわ……』

などという『付随する声』を同時に聞いてしまい、身震いした。

「いや～あの時は本当に、もう自分の一生はこれで終わったのだと絶望したのですが、幸いなことに、今まさにこの命を奪われるという寸前で、仲間が――今、わたくしの横に座っている才人の親族たちが、決死の覚悟で刑場へと乱入し、助け出してくれたお陰で……命を救われたのですよ」

その言葉に、全員の視線が一時才人へと向かう。先程の『剣技』といい、持っている＜マジック・ウェポン＞とおぼしき剣といい……この少年只者ではないと思っていたが、ひょっとすると彼の家に仕える＜メイジ殺し＞の一族があり、そこの出身だったりするのか！？　などと判断したラ・ヴァリエール公爵。

既に『武成王一族』の話を聞き及んでいた才人を含む学院メンバーは、これが例の救出劇の詳細か！　と、大人しく話に聞き入っていた。

そして公爵夫妻は、しばし絶句した後、互いに目を見合わせた。何故なら、彼らはかつて、ものすごく似たような話を、どこかで聞いた……いや、実際に体験した覚えがあったからだ。

「彼ら一族に窮地から救い出される前。わたくしは処刑台の上で、こう思ったのです。どうして自分は、負けたときのことを考えなかったのだろうかと。なぜ、相手を知らずに戦いを受けるなどという愚かな真似をしたのだろうかと。そして死の足音が聞こえてきた時になって、ようやく気が付いたのです。勇気と無謀は別物なのだ……と」

そう言って、深いため息をついた太公望。

「そんなわけで、学院の生徒たちに無謀がどうこう言える筋合いはないのですよ、そういった意味では。まあ、とにかくそれ以来、わたくしは事に当たる前に必ず、徹底的に情報を集めるようになりました。そして、それを元に有利に戦いを進めるための術を学んできたのです。ですから、あのような戦法を採った次第でして」

そういって自嘲する太公望を、その場にいた全員が見つめた。ああ、だからあそこまで徹底的に情報集めをしようとするのか。そう考える者たちと。彼にもそういう時期があったのだなあ、最初から今のような判断力があったわけではないのだ。と、少しだけ親近感がわいた者たちと。負けたときのことを考える、その意味を深く胸に刻んだ者もいた。

よりにもよって、処刑台に引っ立てられるとか、無謀な決闘とか……彼はまるで、自分の若いころにそっくりではないか。そう思い、なんだか目の前の男に共感を覚えてしまったカリーヌ夫人は、再び若い頃を思い出していた。『あのひと』の口癖。若さ故に無茶ばかりするわたくしを諫めるために、よく口にしていた言葉。

『勇気と無謀は別なんだ』

彼は、自力でそこに辿り着いたけれど、わたくしは……どうだったろう？　そう思ったカリーヌ夫人は『あのひと』との過去に思いを馳せた。最初は騎士になることが目的だった。次は、彼に追いつくことが目標になり、いつしか、その隣に立ちたくなった。

と……ここで彼女は、ふいにあることを思いついた。そして、それを行うために必要な条件を確認すべく、探りを入れる。『烈風』カリンらしく、真正面から――まっすぐに。

「ところで、あなたは今……お独りですの？」

ピクリ。このカリーヌ夫人の発言に、その場にいた全員の神経が耳へと集中した。

――これは、まさか『あの手』の話か。太公望は即座に気が付いた。

太公望は、敵対する公爵家の長女を策によって陥れ、彼女と交際する意思など一切ないにも関わらず、自分に惚れさせてしまった時のことを思い出した。

いくら人質を取られ、彼らの命がかかっていたとはいえ、こんな手段をとったこと自体は到底褒められたものではない。だが、まさしく自業自得というべきか……この件をきっかけに、太公望はその『美の女神』を自称する娘から、ひたすら追い駆け回されるようになってしまったのだ。もちろん『恋人』として。

その後、娘の兄である公爵を打ち倒した際に、よりにもよってその公爵は、末期の言葉として『妹たちを頼む』などと言い残して昇天してしまい……そのせいで、太公望は『自称・美の女神』から完全に『婚約者認定』され、以後ずっと彼女を含む3姉妹全員に付きまとわれるようになってしまったのだ。

性格は、ものすごく良い娘なのだがなあ……つい、当時の彼女たちを思い出し、血を吐きそうになった太公望は、当然の如く警戒した。違う可能性もあるが、もしもソレ系の話題だったら本気で困ると。よって、こう切り返した。カトレアに『掴まれ』ないよう、真実のみを出すことによって。

「3人娘には土地屋敷と財産を残して参りましたし、曾孫同然の娘は周の国王陛下の元へ嫁いでゆきましたから、あとはのんびりと、ひとり悠々自適の楽隠居生活を送るだけだと。こう考えております。見た目はともかく、この歳ですから」

これは事実である。こういうところは意外と義理堅い太公望であった。国王のところへ行った親戚筋の娘については、彼女が自分の意志で嫁いでいったので、太公望自身は関係ないのだが。

「なぬっ!?　娘3人に孫だけでなく曾孫までおったのか！　いやはや……君は正真正銘のジジイだったんじゃのう！」

「だから、おぬしのような狸ジジイにジジイ呼ばわりされる筋合いはないと、何度言わせればわかるのだ！」

オスマンのボケに、ツッコミ返す太公望。もはや完全に漫才である。

だが、これを聞いてしょんぼりしてしまったのはカリーヌ夫人だ。さすがに、母親としては子供3人……おまけに曾孫までいるような『男』に、可愛い娘を嫁にやるわけにはいかない。たとえ相思相愛だとしても。何故ならば、相手の家族に関することで、苦労するのが目に見えているからだ。かつて、夫であるラ・ヴァリエール公爵と、

『カトレアの病を治すことができる男がいたら、娘婿にしてやってもいい』

などという話を、戯れにしたような覚えがあったのだが、これで

は無理だ。もしもカトレアにその意志があったとしても、彼自身にその気がなければ話にならない。カリーヌが女親であるからこそ、これは余計に自分の娘には持ちかけたくない『縁談』だ。同様の理由で、長女エレオノールに対しても、到底言い出せない内容である。

――彼が自分の『息子』になってくれれば、毎日あのような楽しい戦……いや、素晴らしい訓練ができるなどと、わずかに、いや、少し。そう……ほんのちょっとだけ考えてしまったカリーヌは、深く反省することにした。でも、歓待中あと1回くらいなら……などと考えているあたり、彼女はやはり懲りていないのであった。

まあ、そもそも齢９０を過ぎ、既に枯れたジジイ（ハルケギニア風に言うところの＜使い魔＞談）である太公望は、元々そっち方面に関しては、全くといってもいいほど興味がないのだ。

……というよりも。そういう時期はとっくに過ぎ去ってしまっているので、こういう話を持ちかけられること自体が面倒極まりないことであるのだが、周囲はそう取らないから困ったものである。おもに、親友を応援している赤毛の娘が。

「タバサ。障害は多いほうが燃えるものよ？」「……意味がわからない」

それにしても。太公望は思った。完全に結果オーライ。今回行った『本気の戦い』以降については、観客席の防衛と＜盾＞による＜魔法＞の受け流し以外、ほぼ無策と言ってよかったにも関わらず、この結果。カリーヌ夫人に試合を申し込んでいたおかげで、色々助かったわ……と。

あの＜生命力を込めた風＞と＜普通の風＞の『使い分け』を見抜

かれたのは正直痛かったのだが、逆に言えばカリーヌ夫人以外には見破れなかった。それがわかったのは、太公望にとって大きな収穫だ。今後『微調整』をかければ、より分かりづらくできるであろう。また、これのおかげで『おちこぼれメイジ』という自分の印象を＜力＞以外の角度から持ってもらうことができた。

さらに、なんと自分が『ドット』メイジであるという印象を、関係者全員に深く刻み込むことができた。しかも、自分の＜力＞や知識全般を『年齢』による熟練の＜技＞によるものだと、ある程度納得させることができた。これは、いくら自分が言葉で言っても、そうそう信じてもらえないような内容だっただけに、この結果は嬉しすぎる。

しかもだ。あの『勝負』によって、自分が軍人でありながらも『他者を常に気遣う』『戦いよりも守りを優先する』性格であるという印象を、ラ・ヴァリエール公爵家の者たちに持ってもらうことができた。おかげでつい先程、例の『ルイズの系統』に関連すると思われる会談について、秘密裏に持ちかけられている。正直、これは有り難い。

おまけに。あの＜エア・カッター＞を打ち消した剣技のおかげで、才人の評価まで上がった。このハルケギニアでは＜魔法＞を使えない者を蔑視する者たちがいるが、少なくともこの公爵家において、以後才人がそういった扱いを受けることはないだろう。なにしろ、ラ・ヴァリエール公爵自ら声をかけ、礼を述べていたくらいなのだから。

あとは、老齢による精神的疲労から『頼られすぎる』のがもう嫌なのだ、といった＜空気＞を作り出し、蔓延させることができれば最高だ。それに関しては、改めて検討を重ねておくこととしよう。

今度こそは慎重に。

――ようやく1個、借りを返してもらえたな。正直助かった。太公望は、この世界に来てはじめて『始祖』ブリミルに対し、心の中で、感謝の言葉を述べた。

第７０話　軍師　対　烈風　－ＢＡＴＴＬＥ　ＯＶＥＲ－（後書き）

ついに、ねんがんのカリンさん対太公望のバトルが書けました！
自分がバトル描写をするとこんな感じになってしまうわけですが、いかがでしたでしょうか？　さりげなく不真面目系（観察）と大真面目（ガチ）の二段構え（シコ）になっております。さらに今回は、ゼロ魔というよりも『烈風の騎士姫』とのクロスっぽい感じになっております。

執筆中のＢＧＭは、以前活動報告のほうでも書きました通り「ドラゴンボールＺ　Ｓｐａｒｋｉｎｇ！　ＭＥＴＥＯＲ　ＯＰ　Ｓｕｐｅｒ　Ｓｕｒｖｉｖｏｒ」です。どうしてこうなった。

『太極図』なし、かつ『スーパーハイテンション』状態であるならば、ガチレベルで『打神鞭ＮＥＷ』持ちの太公望とも戦える。これが本作カリンさんの強さでした。

これで瞑想なんぞ覚えたらどうなるんだっていう。ただし、あくまで時間制限ありです。今回は、途中で刃が逸れたためこういう結果になりましたが、長期戦になったら太公望に対抗しきれなくなるというのが個人的な見解です。

次、最後にラ・ヴァリエール公爵家相手に残った大仕事を終えたら、タバサメインのストーリーへと突入致します。そして、いよいよ……と、いうところでおやすみなさいませ。

２０１１／０６／２１　１４：３０　誤字脱字修正、本文後半加筆修正
２０１１／０６／２１　２０：３０　誤字脱字修正、本文加筆修正
２０１１／０６／２２　１：３０　ビーナス及び才人がらみの加筆

修正

２０１１／０７／０１　０：３０　誤字脱字修正、本文加筆修正

第71話　歴史の重圧　－REVOLUTION　START－

「現在のメイジランク評価の方法は、本当に今のままでよいのでしょうか」

ラ・ヴァリエール公爵家での歓待3日目の昼食後。異国から取り寄せたとされる、高級なお茶を楽しみながらの歓談中に、コルベールがそう呟いた。

それを聞いて、思案顔になったのはカリーヌ夫人やオスマン氏をはじめとする『大人組』である。

「確かに、ミスタ・コルベールの言う通りじゃ。昨日のアレを見てしまってはのう」

オスマンの言う『昨日のアレ』とは、つまり。＜風＞の『スクウェア』である『烈風』カリンと、同じ＜風＞メイジの『ドット』以下である太公望の試合についてである。

その意見に、研究者であるエレオノール女史も頷いた。

「ええ。これまで疑問に思うことが少なかったのですが……あの戦いを実際に見てしまっては、認めざるを得ないと思いますわ。これまでの常識では『ドット』が『スクウェア』と互角に戦える、しかも、あの＜エア・カッター＞のような高出力の＜攻撃魔法＞が撃てるなど、考えられないことでしたから」

「まあ、アレは例外としてじゃな……それ以上の問題は、同じランクにあるメイジに＜力＞の差がありすぎる場合、より正確に評価

するための土台が一切ないことじゃよ。学院の実技テストでは、１つの＜呪文＞ごとに、その巧みさを評価することで点数をつけておるが『精神力の大きさ』については測りようが……」

オスマンは、ここまで語ると、近くの椅子に腰掛けていた太公望へ視線を向けた。それを「説明してくれ」という合図と受け取った彼は、口を開いた。

「ハルケギニアでは、我が国のように個人が持つ＜力＞の量を測るための技術が失われている、あるいは存在しないようですからな……かといって、わたくしの持つ手法をお教えしようにも……と、すみません。ここから異端すれすれの内容になってしまうのですが、お話をしても……？」

異端、と聞いてラ・ヴァリエール公爵はピクリと眉を動かしたが、あくまで「すれすれ」であるということらしいので、話を続ける許可を出した。

くどいようだが、このハルケギニアでは生活と宗教が密接しているため『異端』つまり『神の教え』から外れるような行為は、大きな『罪』であると認識されるのである。公爵の反応は、これでも大人しい部類だ。相手によっては、その場で吊し上げられかねない。異端とは、それほどに恐れられているものなのだ。

「ありがとうございます。わたくしどもが持つ＜場（フィールド）＞という技術があるのですが。そのひとつに、普段は目に見えないものを『視える』ようにするといったものがあります。実は、これのおかげでルイズ殿の『失敗』の原因を完全に特定することができたのです」

なるほど、といった風情でエレオノールが頷く。

「つまり、あの子の＜精神力＞が大きすぎる状態であるということを、その＜フィールド＞というものを使うことで、目で見ることができたから……と、いうことですわね？」

「その通りです。そして実は、カトレア殿の体調不良についてわたくしが『掴めた』のは、この＜フィールド＞を展開する上で必要な技術と知識、その初歩を会得していたからです。これは、本来戦闘用、かつ相当な実戦経験を積まなければ覚えることが困難であるため、取得を希望する、一部生徒にのみ教えるに留めております」

この一部生徒とはタバサのことである。現在太公望が彼女に教えている『力の流れを掴む』『流れを視る』技術がそれだ。最近では、本人の努力の成果が実り、そろそろ実戦投入できるのでは？　と、いうくらいにまで『掴む』能力が上がっている。カリンと太公望の戦いを観ていた者の中で、彼女だけが太公望の『使い分け』をしっかり感じ取れていたのがその証拠だ。

――ちなみに、この技術の「初歩の初歩」が『瞑想』であり「初歩の初歩」が『力の蓄積』にあたる。

「できれば、この技術をわしにも教えてもらいたいくらいなのじゃが……本当に異端すれすれであるため、さすがに学院内で、大々的にこれを使って授業を行うわけにはいきませんのじゃ。実に勿体ないことですわい」

オスマンの言葉を聞いて、一斉にため息をつく一同。この技術が学院の教師たちにあれば、もっと生徒たちの教育レベルを上げる……すなわち大幅な国力増強の役に立てられるのである。ため息のひとつもつきたくなるであろう。

このあたりは、ある意味『ブリミル教』の＜力＞が強すぎるが故の弊害ともいえるだろう。もしも『異端』などという概念がなければ、即座に採用したいほどの技術であるのだから。

「ちなみに、わしが以前見せてもらったところによると、ミス・タバサとミスタ・タイコーボーの＜精神力＞の大きさは同等。いや、ミスタのほうが少し大きかったわけじゃが……ミスタの『感覚』だと『烈風』カリン殿のそれは、どの程度と視た？」

オスマンの発言に、全員の視線が太公望へと集まった。確かにこれは気になる内容である。そのリクエストに、太公望は額に汗を流しながら応えた。

「いやあ……正直、あれには鳥肌が立ちましたぞ。『烈風』カリン殿が本気になられた際の＜精神力＞の大きさは、なんとルイズお嬢様と全く遜色ございませんでしたので」

しかも既に、かなりの量を消耗した状態で。そう語る太公望の言葉に、当時ルイズの＜大樹＞を視ていた者たちは仰天した。

「なんですと！」「あれよりでかいってことかい！？」「さすが烈風殿だ！」

彼らの反応に、何事かという表情をするラ・ヴァリエール公爵家一同。そして、彼らはオスマンの口から説明を受けて驚いた。

なんと、ルイズの＜精神力＞は、現在トリステイン魔法学院の生徒の中で、唯一の『スクウェア』にして実技試験最優秀であるタバサの１０倍を軽く越えるほど大きなものだという。そして、カリー

ヌ夫人が本気を出したときは、それすら越えているのだとか。

「つまり、ルイズはわたくしを越える可能性を秘めているというわけですわね？」

そのカリーヌ夫人の言葉に、強く頷くオスマン。

「だからこそなのです。それほどの才能を持つミス・ヴァリエールの＜力＞を正しく評価することができず『おちこぼれ』扱いをしてしまっていた、現在の評価方法に疑問を覚えたのは。それが確信に変わったのが、昨日の『烈風』殿と、ミスタ・タイコーボーの戦いです。本当に、このままであってよいものかどうかと」

苦悩に満ちたコルベールの言葉に、一同が沈黙した。確かに、本来であれば＜爆発＞などという現象を起こせるのは、相当に優秀な＜火＞＜土系統＞のメイジだけなのである。他系統でも、膨張による＜破裂＞を起こすことはできるかもしれないが、それには高度な知識と技術が必要となる上に、そもそも＜破裂＞であって＜爆発＞ではない。

最初に声をあげたのは、エレオノールであった。

「ミスタ・コルベールの仰る通りですわ。先程出た、ミス・タバサとミスタ・タイコーボーの＜精神力＞がほぼ同等という話に象徴される通り『ドット』でも『スクウェア』級の＜器＞を持っているということがあり、さらに同じ『スクウェア』同士でも、個人差があるにも関わらず、４段階しか評価がつけられないというところに問題があると、わたくしも感じますわ」

そう。エレオノールの母である『烈風』カリンが良い例なのだ。

同じ『スクウェア』であるタバサよりも、明らかに＜精神力の器＞が大きいのだ。正確に測ってはいないが、おそらくワルド子爵よりも数段上であろう。

エレオノールの言葉に、オスマン氏が同意の声を上げ、さらに補足する。

「彼女の言葉に、重大なヒントが隠されておるような気がするのう。従来の『ドット』『ライン』『トライアングル』『スクウェア』を＜魔法の技量＞を示すランクとし、将来＜精神力＞を測る技術の採用が可能になった際に、新たな指標を作っていければよいと、わしは思うのじゃが……」

と、ラ・ヴァリエール公爵が顎に手をやり、何かを考えるような顔をする。

「ふむ……確かに異端すれすれの内容ではあるが、考慮に値する内容ではあるな。オールド・オスマン、そしてミスタ・タイコーボー。後でそれに関する話を聞きたいのだが、構わないだろうか？内容が内容であるため、できればわしを含む3人だけで。そうだな、今夜……夕食後に」

本当はもっと早く聞いておきたいのだが、これから公務があるため、席を外さなければならないのだよ。ラ・ヴァリエール公爵が、実に残念そうな顔をしてそう言うと、ふたりは了承の意を伝える。公爵は、さらにタバサにも太公望を借り受ける旨確認を取ると、彼女は、もちろん構いません。という返事でもってそれに応えた。

なお、エレオノールが、その会談にものすごく混ぜてもらいたそうな顔をしていたのだが……国営に関わる内容だと推測されるため、

残念だが許可は得られないだろう。そう判断した彼女は、自分の希望を口に出さずにいた。それを見たカトレアが、くすくすと笑っている。

カトレアは、例の『感覚の網』の調整方法について、早速太公望から教えを受けており、既に『完全に引っ込める』『周囲数メイル程度にだけ展開する』術を会得していた。

さらに練習を積むことで、より細かく『網』の大きさや方向を調整できるようになるだろう。という話を聞いたカトレアは、身体が完全に治ったら、それを改めて教えて貰いたいという希望を出すことによって、ちゃっかり太公望と再会の約束を取りつけていた。

――なお、それをすぐ側で聞いていたエレオノールが、太公望退出後、同じく部屋へ戻ったカトレアを追い掛けて「よくやったわ！」とベタ褒めし、再会時の同席を依頼して、妹から快くそれを認められたことで、がっちりと握手を交わしたのは……姉妹ふたりだけの秘密である。

○●○●○●○●

――夕食後、ラ・ヴァリエール公爵家の一角にある談話室にて。

「ハハハ、実に自然な会話の誘導でしたな。さすがはオールド・オスマン」

「ま、そのためにミスタ・コルベールに、あえてそれらしい話題を、わざわざ前もって振っておいたからのう」

「お陰で助かったわ。わしとしても、これでだいぶ話しやすくなった」

……そう。この対談への流れは、実はオスマンとラ・ヴァリエール公爵による合作だったのである。そこに太公望が誘われた結果、非常に自然な形で『密談』の約束を取り付けることができていた。

ところで、この会話において、太公望が例の胡散臭い敬語を使っていないのは、ラ・ヴァリエール公爵の許可……と、いうよりも要望によるものだ。

さすがはトリステイン最大の権勢を誇る大貴族である。例の身分と年齢バラシ以降、太公望があきらかに無理をして、いかにもそれらしく喋っていることに気が付いた公爵は、普段通りの形で語り合おうという提案をし……全員同意のもと、それが行われていた。

なお、公爵は例の『天使の祝福』について、昨日練兵所から屋敷へ戻った後、すぐに問い合わせの高速フクロウ便を『ジャコブ新村』に宛てて送り、今日の夜――つまり現時点で、既に返事を貰っている。いくらカトレアの『勘』が尋常ではないとはいえ、それを鵜呑みにして、全てを信じるわけにはいかないからだ。このあたりは、さすが公爵家当主。一切抜かりがない。

よって、彼は本当に『祝福』の存在があることを知った。そして、目の前の『少年』が実際には自分よりもずっと高齢であることを素直に受け入れることができた。何故ならば、カトレアには絶対に『嘘』が通用しないことを知っていたから。つまり、タバサが語っていたことが真実であるということを、ジャコブ村からの『情報』と、これまでの経験により信じたというわけだ。

これらを前提とした上で、彼らは改めて語り始めた。ルイズの＜系統＞について。そして、ラ・ヴァリエール公爵は驚愕の真実を知ることとなった。

「そんな……！　彼と、あの少年が＜使い魔＞だというのかね！？」

「そうじゃ。ミスタ・タイコーボーの場合は、あくまでお互いの＜魔法＞が、何らかの理由で衝突したという『事故』によって、無理矢理呼び寄せられてしまったわけじゃが……サイト君は違う。ミス・ヴァリエールが＜サモン・サーヴァント＞によって、ここハルケギニアに呼び出した＜伝説の使い魔＞にして『神の盾』＜ガンダールヴ＞じゃ」

オスマンの言葉に、思わずゴクリと唾を飲み込んだラ・ヴァリエール公爵。それはそうだろう、まさか自分の娘が『人間』を＜召喚＞していたなど、思いもよらなかったのだ。しかも、それが『伝説』と呼ばれる＜使い魔＞であることなど、想像の埒外にあった。

「オールド・オスマン。その＜ガンダールヴ＞とはいったい、どのような……？」

「うむ。かつて『始祖』ブリミルが使役したとされる＜使い魔＞のことじゃ。『あらゆる武器を使いこなす』能力を持ち、その左手に握った＜魔法＞を吸収する＜インテリジェンス・ソード＞『デルフリンガー』の補佐を受け『始祖』の身を守る『盾』として働いた『勇者』的存在だと伝えられておる」

あの『光の剣』は間違いなく『始祖の盾』だ。オスマンからそれを聞いたラ・ヴァリエール公爵は、身体が冷えていくのを感じた。

『可能性』であってほしかったそれが『現実』となって近付いてくる。その足音が、ゆっくりと聞こえてきたから。

観客席を襲った流れ弾を、たったの一撃で切り裂いた『剣技』。そして、あの『烈風』カリンが全力で放った＜エア・カッター＞を『吸収』した『光り輝く剣』。かの少年は、まさしく『神の盾』に相応しい存在であったではないか。

しかも、彼の左手――現在は手袋によって隠されているそこに刻まれたルーンと同じ＜ガンダールヴ＞を持つ者を使役していたのは『始祖』ブリミル。つまり……。

そんな公爵に追い打ちをかけたのは、太公望だ。

「時間がなかったため、オスマン殿にはまだ話していなかったのだが……ここで打ち明けておく。実は、ごく最近の調査で判明したのだが。わしと才人は、なんと海を隔てた隣国から呼び出されておったのだ。しかも、才人は本当に、例の『武成王一族』の血族である可能性が高い」

「なんじゃと!?　それはいったいどういうことかね!」

そして、太公望は語り始めた。『異世界』『時代の違い』ということは伏せ、あくまで隣国であることを強調した上で……例の＜力在る者＞つまり仙人たちの考え方を説明した。地球の『始祖』については、当然のことながら話さずに。また『東の全域』ではなく、あくまでこれは『自国と近隣諸国限定』であるという保険をかけることにした。

「なんと……！　君の国や近隣諸国のメイジたちは『始祖』の考

え……つまりあらゆる者に分け与えられた慈愛を『平和と平等の意志』と受け取り、そしてそれを尊重した上で『平民』を＜魔法＞で支配することを由とせず、あえて『浮遊大陸』へ移住するなどという『選択』をしたのか……！」

メイジ――つまり＜力在る者＞たる貴族が平民たちを支配する。これを当たり前として生きるハルケギニアの民としては、正直なところ、脳天を木槌で叩き割られるほどに衝撃的な『価値観』であった。

「そうか！　じゃからサイト君は、自分たちの国や同盟国には『魔法が存在しない』と完全に信じ込んでおったのじゃな！　それに『スカウト』か。それならば魔法が秘匿され続ける理由も、彼が魔法がないと言い続けてきたことも納得できる」

魔法が存在しない世界。どこかに『違う世界』がある、ということについてはまだしも、魔法がないというただ1点についてどうしても信じられなかったオスマンは、これでサイトの言動や、例の『竜の羽衣』について完全に納得してしまった。特定の者にしか魔法に関する情報が開示されていないのであれば、知らない者たちが『魔法のない生活』を送っているのは、ある意味当然であるからだ。

「だが、結局はそのせいで、長きにわたる『大陸』だけでなく『地上』をも巻き込んだ戦乱の時代が始まってしまったことを考えると……ここハルケギニアのメイジと我ら諸王国、いったいどちらの選択が正しかったのか？　そんな比較をすること自体、おこがましいことであると、わしは考えておる」

それをふまえた上で……と、太公望はさらに語る。『武成王一族』について。また、本来才人は＜仙人骨＞も＜力＞も持たないごく普

通の少年ではあるものの、ルイズと何らかの『縁』があるのは確かであるし、将来＜始祖の盾＞という重要な役割を任される可能性を考慮し、不当な扱いを受けたりしないよう、念押しの意味で説明を加えた。

「武成王の一族には『武器』の扱いに長けた、特殊な＜力＞を宿す者が多く現れるという特徴があるのだ。よって、才人が＜ガンダールヴ＞に相応しい存在として＜サモン・サーヴァント＞に選ばれた可能性が非常に高い。また、かの少年は非常に発想力が豊かだ。実は、ルイズ殿がたったの1週間で空を飛べるようになったのは、才人の補佐があってこそなのだよ」

太公望に、オスマン氏が同意する。

「確かに、サイト君の発想はメイジの常識を覆すようなものが多い。『＜念力＞で箒を浮かせ、そこに座ることで空を飛んでみたらどうか』などという発言が飛び出してきたときは、全員が驚愕しましたぞ」

いや、あの発想はなかったわ。などと言いながら、顔を見合わせうんうんと頷くオスマンと太公望を見て、公爵は仰天した。確かに、そんな発想は普通なら出てこない。

「当初は、まだ＜爆発＞の危険があったからこそ、安全策として才人が出してきた案なのだが、あれのおかげで、ルイズ殿の実力がいっきに伸びた。魔法が使えないからこそ、わしらの常識からかけ離れた案が出せる上に、どうやら母親が研究者らしくてな。思いも寄らぬ知識を提示してくることがあるので、補佐役としてもあなどれぬ少年なのだ」

さらに太公望は、以前学院の特別課外授業ではじめた『畑』の話を出した。ラ・ヴァリエール公爵はこれを聞いて唸った。才人の知識に関することだけではなく、畑を使って＜魔法＞の練習をする。そのように見せかけられた、この授業における本来の目的に……彼はすぐさま気が付いたからだ。

開墾から始まり、育成、生産、管理、収穫、売却の流れ。そして全体の監督。一見『畑仕事』という平民がするような仕事にも見えるが、全体を考えた場合、これは『領地運営』の縮図といって差し支えないではないか。まさしく『上に立つ子供たち』の将来を見越した教育である。公爵はそのように受け取った。

そしてラ・ヴァリエール公爵は、この教育方法を考え出した太公望の見識と、即座にそれを採用したオスマンの眼力に着目した。このふたりが、それぞれの分野で『伝説』と呼ばれたのは、ある意味必然であったのだな……と。

「なるほど、よくわかった。彼に対して貴族と同等の扱いをするというのは無理だ。周囲の目があるからな。そんなことをしたら、逆に目立つことになる。だが、決して無碍には扱わないことを約束しよう。『始祖』の補佐役たる『神の盾』を鍛え、磨くのもわしら大人の仕事だろうからな」

その言葉に、オスマンと太公望が頷いた。そして太公望はこう言った。

「ハルケギニアでは＜魔法＞が使えない者は全て『平民』扱いだが、わしの国では、才人、そしてカトレア殿のような＜魔法＞以外の＜特殊能力を持つ者＞もメイジと近しい存在であるとされている」

この言葉に、ラ・ヴァリエール公爵大きく反応した。彼は、改めて太公望にカトレアに関する礼を述べると、当然ともいうべき質問を投げてきた。

「カトレアの＜能力＞というのは……？」

「うむ。カトレア殿の場合は元々メイジだ。また＜特殊能力＞のほうについても、効果範囲が極端に広いだけで＜力＞自体はさほど強くはないのだが……まずはひとつ目の『動物との会話』。これは、動物が何を言っているのか『感覚』で『理解』できてしまうという＜能力＞だ」

そう言われて、ラ・ヴァリエール公爵は思い当たった。そういえば、カトレアはよく動物たちの声に耳を傾けている。動物たちも、カトレアには非常によく懐く。その理由が完全に理解できた。

「次に『超感覚』。これは、相手が嘘を言っているのかどうか。実像を偽っていないかどうかなどを『鋭い感覚』によって見破る＜力＞だ。これのせいで、わしの実年齢が見事にバレたと。そういうわけでのう」

太公望は、あえて『心の声』については語らないことにした。この＜力＞については、あきらかにカトレアが隠していたことを察していたからだ。それに……能力の詳細を知られた場合、あの心優しい娘が、深く傷つくであろうことが、彼には容易に想像できた。

「なるほど。カトレアはその＜力＞の抑え方がわからず、常に使い続けていたが為に、身体が弱ってしまったのだな。一日中＜魔法＞を使い続けていたようなものか。それでは医者に診せても、薬でも治るわけがない」

「まさしくその通り。しかし、本当に危なかった。あと数年わしが来るのが遅れていたら……最悪の場合、カトレア殿は寝たきりになってしまったかもしれぬ。実際、わしの師匠の知人がそうなってしまってのう。とてつもない『超感覚』の持ち主なのだが、その＜力＞を使い過ぎてしまったが故に、今では年に数度しか目覚めることがない程にまで弱ってしまわれた」

――ただ単に、その『師匠の知人』が、ぐうたら大好きな太公望ですら怒り狂う程に、超ド級の怠け者なだけなのだが……さすがに、それは言わないでおく太公望であった。

「警告感謝する。カトレアには、その＜力＞を使い過ぎないよう、注意しておこう」

彼には、とてつもない恩を受けてしまった。ルイズの＜魔法＞のみならず、カトレアの命まで助けてくれたのだ。かの人物は、まさしく家族を救ってくれた大恩人だ。もしも彼に何かあった場合、総力でもって支援せねばならぬ。そう決意したラ・ヴァリエール公爵は、太公望の手を取り、再度礼を述べた。

「随分と長くなりましたが、ここまでの話をふまえて……オスマン殿」

太公望の言葉に頷いたオスマン氏は、公爵に非情な宣告を下す。

「ミス・ヴァリエールの＜系統＞は、ほぼ間違いなく失われしペンタゴンの一角＜虚無＞じゃろう。＜系統魔法＞を失敗し続けてきたのもそれが理由じゃ。自分に合わない＜系統＞の＜魔法＞を使うのは、大人でも難しいことじゃからの」

それを聞いて一気に顔を青ざめさせた公爵に、太公望が追い打ちをかけた。

「実は、オスマン殿から＜ガンダールヴ＞の話を聞いた時点で、もうルイズ殿の＜系統＞については、ほぼ特定が済んでおったのだ。しかし、万が一それを誰かに知られてしまった場合、彼女は間違いなく戦の道具にされる。そう考えたわしらふたりは、才人が＜使い魔＞であること、そして彼女の真の＜系統＞について秘匿し続けてきたのだ」

ワルド子爵に尋ねられたときも、彼のような好青年に対して申し訳ないことだとは思いつつも、完全に信用を置くには、正直まだ時間が足りなかった為＜ガンダールヴ＞については完全に伏せておいた。そう呟いた太公望に、ラ・ヴァリエール公爵は頷いた。そして、彼の用心深さに感謝した。

もしもワルドが軽率な男であった場合……今頃、宮廷内で貴族たちの暗躍が始まっていたかもしれないからだ。公爵自身はワルドを深く信頼していたが、彼を知らない太公望が、突然近付いてきた者を警戒するのは当然である。そう判断した。

「さて……ここからの話については、トリステインの国家運営に関する、特に秘匿すべき重要な内容を開示する必要があるため、大変申し訳ないのだが、ミスタ・タイコーボーには遠慮していただきたい」

そう言って部屋からの退出を促したオスマンに、太公望は頷いて立ち上がる。そして、ドアへ足を向けたその時。彼は、ふと何かを思い出したかのように立ち止まると、振り返ってこう言った。

「すまぬ、お二方にとてつもなく大切なことを伝え忘れておった。これは、ルイズ殿やわしの主人の『問題』には全く関係のないことなのだが、ガリアだけではなく、トリステイン王国にも関連するであろう重大な内容なのだ。それを話しておきたいのだが、かまわぬだろうか？」

トリステイン・ガリアの両国に関する重大事項。かつ、ガリア大公姫の抱える『問題』には抵触しない内容。これは聞いておくべきだ。そう判断したオスマン氏とラ・ヴァリエール公爵は重々しく頷いた。

「実は、先日『ラグドリアン湖』で、このようなことがあったのだよ」

そして太公望は『事件』について語り始めた。先日、タバサを連れてラグドリアン湖へ気晴らしに行った際に、自分たちのマントを見て『貴族』だと判断した近隣の住民たちから、ここ2年ほどの間ずっと湖の水位が上がり続けており、家屋や土地の水没による被害が後を絶たないのだという訴えを聞いた。

しかし、彼ら湖畔に住まう民たちが、現在湖の管理をしているトリステインの貴族に、何度それを報告してもなしのつぶてで困っていると。その上で、もしも可能であるならば、早急にトリステイン王家へとお知らせして欲しい。この際、対岸のガリアにでも構わないと、涙ながらに住民たちから頼られたのだ……と。

「急ぎの用件にも関わらず、トリステイン王家には伝手がない。よって、誠に申し訳ないとは思いつつも、わしのご主人様から、その日のうちにガリア王家に対して報告をしていただいたところ、ガ

リア側でも急ぎ調査はするが、もしも原因を特定できたら報奨を与えるという返事があったので、色々と調べてみたのだよ。そこで判明したのが『秘宝の盗難』だ」

ラグドリアン湖の底に安置されていた『水』の秘宝『アンドバリの指輪』。湖の水位が上がっていたのは、なんとこの秘宝の行方を捜索すべく、水の精霊が自分たちの行動可能な領域を広げていたせいなのだと。

「でだ。水の精霊から『今すぐ水位を戻してやるから、指輪を取り戻して来い。期間と手段は問わぬ』などという無理難題を押しつけられてしまってのう。おかげで水難については何とかなったのだが、わしは、ご主人様の側から離れて指輪を探しに行くことなどできぬ。そもそもこれは、個人でやれるような仕事ではない」

がっくりと肩を落とし、ため息をついた太公望。

「よって、まずはガリア王家に、事件についての詳細を連絡した。その上で、ラ・ヴァリエール公爵閣下に依頼したい。どうかトリステイン王家へ、この『アンドバリの指輪』盗難の件についてお伝え願えないだろうか？」

これを聞いたラ・ヴァリエール公爵は顔色を変えた。それも当然である、本来であればこのような重大な案件は、国が早急に対処すべき内容なのである。にも関わらず、湖の管理者が責務を完全放棄しているせいで、全く上に情報が上がってきていないどころか、平民たちがよりにもよって、対岸の国ガリアへ救助を依頼したというのだ。これは由々しき事態である。

おまけに、ラグドリアン湖の水位が上がっていたなどという報告

は、一切公爵の手元に来てはいない。彼のような真面目な為政者にとって、他貴族が管理する領地のこととはいえ、これは正直許し難い所行なのだ。

「よくぞ報告してくれた。そして水難の解決について、トリステイン貴族として感謝する。ところで、もしも『秘宝』を盗んだ者や、指輪の特徴などについて、水の精霊から聞き及んでおられたら、そちらも開示してもらえると助かるのだが……今後の捜索のためにも、是非頼む」

公爵の返事を聞いて、太公望は胸をなで下ろした。あちこち嘘情報が混じってはいるものの、トリステインの民の訴えが結果としてガリアにまで届いたことや、水没その他は事実であるし、実際問題『アンドバリの指輪』回収は、彼の手に余る案件だったのだ。

いくらフーケが＜マジック・アイテム＞調査の専門家でも、彼女ひとりだけでやれるような規模の仕事ではない。とはいえ、放置するには危険すぎる『道具』である。よって、この歓待中になんとか公爵へ相談しようとしていたのだが、それが見事に通ってくれた。

さすがは、あの真面目なルイズの父親だ。太公望は、心の底から安堵した。

「やはり、公爵閣下に相談して正解であった。盗人は複数人。その中に『クロムウェル』と呼ばれる者がいたことと、その『アンドバリの指輪』には、死体をまるで生きた人間のように操る能力。そして、指輪の効果を解き放った『液体』を飲んだ者を、意のままに操るという、かなり性質の悪い＜魔法＞が込められておるとのこと。これが、現在までに得られている情報だ」

――死体を、まるで生きた人間のように操る能力。

ラ・ヴァリエール公爵は、再び顔色を変えた。何故ならば……かつて、彼は似たような事件に遭遇したことがあったから。よって、公爵は即座に調査を開始すると太公望へ返事をし、改めて彼に礼を言った。

○●○●○●○●

――太公望が、部屋を退出した後。

「まったく……モンモランシ家が没落せず、今もラグドリアン湖の管理をしてさえおれば、このような問題は発生しておらなんだものを！　いったい今は、どこの家の持ち回りなのじゃ！？」

おそらく、その『報奨』とやらが『シュヴァリエ』と『ガリア王国花壇騎士団章』の受勲なのであろうと当たりをつけたオスマンは、それを一切声には出さず、歯噛みして悔しがった。その予想は、だいたい当たっているが真実は違う。もちろん、オスマンがそんなことを知るよしもないが。

オスマン氏は、本気でタバサと太公望のふたりを、揃ってトリステインへ迎え入れたい、状況さえ許せば、彼らを自分の『養子』に迎えてでも取り込みたい。そこまで考えていた。にも関わらず、その不心得な貴族のせいで、完全にガリアへ持って行かれてしまったのだと、内心で怒り狂った。『烈風』とのやりとりを見た後だけに、その無念さは計り知れない。

「いや、オールド・オスマン。今はそれよりも考えるべき重大な

ことがいくつかある。まず、今の『アンドバリの指輪』の話だ。盗人の名前は、たしか『クロムウェル』というらしいですな？」

「ふむ、公爵閣下には、何かお心当たりでも？」

左目にかけていた片眼鏡（モノクル）を外し、懐中から取り出した布でその表面を拭きながら、公爵は答える。

「最近『レコン・キスタ』という連中があちこちで暗躍しているのをご存じで？」

「うむ。『王家打倒』と『聖地奪還』を唱える馬鹿者たちのことじゃろう？」

「その通りです。そして、その首魁の名は『オリヴァー・クロムウェル』。これは偶然と言って片付けることなど、正直できない案件だと思うのですが……如何ですかな？」

ラ・ヴァリエール公爵は、内心でさらに推理を進めていた。ワルドに語った『何故か、レコン・キスタが合流してから王党派の裏切りが増えた』という事実。まさかとは思うが、用心に越したことはない。念のため、ワルド子爵には指輪の件だけでも伝えておいたほうがいいだろう、そう考えた。

「うむ、確かに。ところで実は公爵閣下。これからわしがお伝えしようとしていたのも、実はとある『指輪』に関係することなのですじゃ。ただし、これは各王家に伝わる品の話ですがの」

「それは、もしや『水のルビー』の話ですかな？」

公爵の言葉に頷いたオスマンは、改めてその件について語り始めた。トリステイン王家だけではなく、3王家とロマリアに伝わる4つの『秘宝』について。

それらは、全て『指輪』と『対』になっており『始祖』の時代から連綿と受け継がれてきたものなのだと。ちなみに、この情報を報告してきたのは『土くれ』のフーケである。これを受け、内容を精査した上でオスマンへ手渡したのが太公望だ。

「ミス・ヴァリエールの＜系統＞について思い当たったとき、もしやと思い、王家に関連する歴史を調べ、情報を集めてみたのじゃ。その結果、これらの『秘宝』に行き当たったのじゃよ。その上で、わしは……これこそが『鍵』なのではないかと考えたのじゃ」

「鍵……とは？」

「もちろん『始祖』の＜力＞を解放するための『鍵』じゃ。『始祖の祈祷書』は白紙の書物。『始祖のオルゴール』は奏でても何も聞こえない。『始祖の香炉』は焚いても香りがしない。『始祖の円鏡』は何も映し出さない。何故このような無意味な＜マジック・アイテム＞が６０００年もの長い間、王家に伝えられているのか？何事にも理由がある。おっと、これはあの子供の姿をしたジジイの口癖じゃったわい」

――『始祖』ブリミルの＜力＞を解放するための『鍵』。それは、つまり。

「それが＜虚無＞に目覚めるための『鍵』。そうおっしゃりたいのですかな？」

「うむ。さすがに持ち出しは不可能であろうが、王宮で触れさせてもらう程度ならばできるのではないかな？　もしも、それでミス・ヴァリエールに何らかの反応があった場合……」

「ほぼ確定……か。恐れ多いことではあるが、もしも娘がそれで＜真の系統＞に目覚めるのであれば、わしの目が届くところで試すに越したことはない。ただ……あの秘宝を、閲覧だけとはいえ、借り受けるとなると……」

机に両肘をつき、まるで神への祈りを捧げるように呟く公爵。

「女王マリアンヌ陛下、そしてマザリーニ枢機卿の許可が必要となる」

その声に、暗い声でオスマンが応える。

「3年以上、お亡くなりになった国王陛下の喪に服し、頑なに女王への即位を拒否し続けておられるマリアンヌ様の許可、ですか。最近では、このわしですらお目通りも叶わぬ状態じゃ……ところで公爵閣下は、現在の王室をどうご覧になっておられる？　わしとしては、正直なところを聞いておきたいのじゃが？」

その言葉に、ビクリと両肩を震わせたラ・ヴァリエール公爵。彼は、現在のトリステイン王家に絶対の忠誠を誓っている。だが……。

「いや、わしは……」

「忠義と盲信は完全に別物じゃぞ？　もしや、そこをはき違えてはおらんかね？　ラ・ヴァリエール公爵閣下」

――忠義と盲信は別物。その言葉を受けたラ・ヴァリエール公爵は、身じろぎもせず、しばし考え込むようにした後。机に視線を落としたまま、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「マリアンヌ様は、国王陛下の崩御によって、そのお心を病んでしまわれた。これは、わしだけではなく宮廷の者たち、ほぼ全ての認識となっている」

そう言うと、ラ・ヴァリエール公爵は深いため息をついた。

「この数年間、あのお方は政治に口を出さないだけではなく、毎日ただ静かに喪に服しておられるばかり。このわしだけでなく、グラモン伯爵やその他大勢の有力貴族たちが揃って、何度もご自身のことや、アンリエッタ姫殿下の即位について持ちかけても、首を横にお振りになるだけだ。かつて、王城を抜け出して、外へ遊びにゆくほどに快活であられた頃の面影はもう……欠片も見あたらない」

宮廷付きの医師たちによる見立ても、わしとほぼ同様だ。そう、心の底から吐き出すような呻きをあげたラ・ヴァリエール公爵の声に負けぬほどに、重々しい声でオスマン氏が答える。

「この国は、現在マザリーニ枢機卿によって動いておる。いや、生かされていると言っても過言ではない。もしも彼がいてくれなかったら、トリステインはとっくの昔に空中分解しとってもおかしくないわい。フーケ事件のこととといい、先程のラグドリアン湖の件といい、王政府の機能が正常に働いておらん証拠じゃ」

その言葉を聞いた直後、両方の拳で、机をダンッと叩いたラ・ヴァリエール公爵。

「わかっている。マザリーニ枢機卿がトリステインの乗っ取りを企んでいるなどと、あちこちで噂されておるが……もしも、本当に彼がそのような野心家であれば、ロマリアの教皇選出会議の際に行われた、帰国要請を断ったりなど、絶対にしなかったはずだ」

公爵の言葉に、頷いたオスマン氏。彼も、同じ結論に達していたからだ。しかし、ラ・ヴァリエール公爵はその頷きを見てはいない。未だ、視線を机上へと落とし続けていたからだ。

「何故？　簡単な話だ。こんな国庫のみならず、民心までもが傾きかけた小国を奪うよりも、ブリミル教の＜教皇＞の座についたほうが、遙かに強大な権力を振るうことができるからだよ！　ああ、そうだ。わしにはわかっているのだ、そのようなことは！！」

マザリーニ枢機卿は、未だ４０代にも関わらず『鳥の骨』などと民から揶揄されるほどに痩せ衰え、白髪が目立つ外見をしている。それは、国のため激務をこなし――トリステインに対し、ただひたすらに忠義を尽くしてきたためだ。ラ・ヴァリエール公爵は、それがわからぬ程、愚かな男ではなかった。そして、再び祈るような仕草で呟きはじめた公爵の姿は、実に痛々しいものであった。

「長きにわたる王座空位によって生じた宮廷の腐敗により……現在のトリステインは、貴族だけではなく、平民たちからの信頼まで失いかけている。同盟国であるアルビオン王国からさえも。かの王国が窮地であるにも関わらず、我が国へ救援要請を出さない理由。援軍を出そうという声に、反対する者が大勢いるだけでなく、その声に全く抗えないこと自体が、その象徴といえるだろう」

アルビオンが陥落したら、次に狙われるのは間違いなく我がトリステインだというのに！　そんなことすらわからない愚か者共、も

しくはアルビオンの貴族派や『レコン・キスタ』に袖の下を掴まされた者が、我が物顔で宮廷を跋扈している！　そう叫んだ公爵に、オスマンは静かに声を掛けた。

「とはいえ、アンリエッタ姫殿下はまだ17歳とお若い。おまけに、蝶よ花よと育てられ、外の厳しさを一切知らぬ温室で暮らしておられた。国内情勢が安定している時ならばよいじゃろう。だが、今即位なされても、この混乱を乗り切るだけの実力があるとは、わしには到底……」

そう言って首を左右に振ったオスマンに、公爵は小さな声で、囁くように訴えかけた。そう……まるで人智を越えた何者かに、縋るように。祈るように。

「……オールド・オスマン。お聞きしたい。わしは、これから何をすべきなのかを」

オスマンは……しばしの沈黙の後、こう切り出した。

「マリアンヌ様は、既に王位継承権第1位を放棄しているといって差し支えない。そして、第2位の継承権を持つアンリエッタ姫殿下は、求心力こそあるかもしれんが、早急に国内の乱れを正し、立ち直らせるための実力を、まだ持っておられない。成長を待つだけの時間もない。トリステインは、荒れ狂う嵐の中で、完全に行き先を見失っておる。じゃが、王位継承権第3位を持つ者が先導すれば、あるいは……」

まさに＜天啓＞を受けた神官のような顔をして、ラ・ヴァリエール公爵はゆっくりと顔を上げた。彼の脳裏には、様々な思いが駆け巡っていた。若き日の思い出。国王陛下に絶対の忠誠を誓う近衛騎

士として戦った、あの頃。まだ幼かったマリアンヌ姫を護衛した日々。大勢の仲間たちとの出会い、そして――現在。

小さな娘が、その肩に『伝説』という錘を乗せようとしている。

頼りになる息子は自分に全てを託し、家族を守るため、敵陣へとその身を投じた。

彼らが、心から安らげる家を。そして、戻るべき場所を――後の歴史家、いや……たとえハルケギニアに住まう全ての者たちから『逆賊』と罵られようとも。その大切な住処と民たちを、今。命だけではなく、全てを擲ってでも守るという重大な覚悟と、使命を背負うべき者は、いったい誰だ――？

公爵は……ゆっくりと、静かに口を開いた。

「重いな……歴史の重圧（おもみ）で、潰れてしまいそうだ」

そして、彼は立ち上がった。世界の全てを背負うが如く、力強きその両足で。

「……だが、これがわしの天命なのかもしれない」

――歴史の追い風が、ラ・ヴァリエール公爵の背に向けて、吹き荒れた。

後世の研究者たちは語る。このふたりの会談が、長く続いたトリステイン王朝の終わりの始まりにして、ヴァリエール王朝の誕生を導いた＜風＞である。その初代国王となったひとりの男が、苦難の

『道』を歩み始めた、歴史的第一歩だと。

その死後『賢王』『鎮静王』『救世王』と称された、偉大なる初代国王が残した言葉。

「次の歴史を作る若者たちのために、道を開いておきたいのだ。長きに渡って続いてきた伝統を壊すという大罪の責任を負うのは、わしひとりだけで充分だ。そう……末期の灰をかぶるのは、年寄りの仕事なのだよ」

――トリステイン王国・ヴァリエール王朝　初代国王
サンドリオン（灰かぶり）一世

……なお。この歴史的会談の直前に関わっていたひとりの男については、そこにいた事実さえも一切知られてはいない。ただ、世界に吹いた＜風＞のみが、それを記憶しているだけである――

第71話　歴史の重圧　－REVOLUTION　START－（後書き）

はい。後半に、いきなり超展開きました。最後は封神演義・姫昌の名セリフとのクロスです。

これは、もしもの歴史です。もしも、アルビオンが落ちる前。ラ・ヴァリエール公爵の前で、ルイズが＜虚無＞に目覚めていたとしたら。彼なら、ほぼ間違いなく娘と家族、そして民を守るため、立ち上がっただろう。個人的にはそう考えます。故に、この展開を書きたくなり……それを最大の理由として、アルビオン潜入編を極端に後ろへと移動しました。

アンリエッタ姫が悪いという話ではなく、激動の時代に、政務未経験、しかも王（王族ではなく、国王）としての教育をほとんど受けていないと思われる温室育ちの娘を放り込むという、貴族たちの『選択』が、その後トリステイン王国をとてつもない苦難と、血塗られた道へと導いてしまった。そしてそのツケが、ルイズと……異世界から呼ばれた、本来であれば無関係の『勇者』才人に回ってきてしまった。それが、アルビオン戦役～撤退戦。自分は、あくまで個人的にですが、そのように受け取っています。なので、同じく若いルイズが初代女王という選択も＜虚無＞ありでもナシになります。

逆に言えば、そんな状態に放り込まれながらも、アンリエッタは相当頑張っているんじゃないかと。自分なら正直いって無理です。若さ故のミスは多いですが、マザリーニの補佐で成長していく女王。そりゃあ、たまには恋のひとつもしてみたくなりますがな。これも個人的見解ですが。

若い女王を相手にすればよかったはずのレコン・キスタ、ゲルマニ

ア、そしてガリアが対するのは、トリステインの良心にして経験豊富な頭脳『灰かぶり王』ラ・ヴァリエール公爵。メイジとしての属性も＜水＞であるため、水の王国を継ぐには文句なし。彼が、今後どのようにして『国を割ることなく』王権を得ていくのかについては、今後改めて語らせていただきたく。

と、これはあくまでオスマンの言葉と公爵の意志による結果です。太公望の策ではありませんので念のため……なので、太公望が「この場」の歴史に記されていないのです。

次回から、いよいよタバサメインの話に戻ります。その前にちょっと前置きを挟む必要はあるのですが。

２０１１／０６／２４　２：００　追記
ラ・ヴァリエール公爵の即位後の名前が「サンドリオン一世」になっておりますが、これは自分への自戒と決意を込めて、若き日に偽名として名乗っていた「サンドリオン（灰かぶり）」に戻ったという、ある種の決意表明（歴史いう名の燃えかす、つまり灰をかぶるのは自分だけでいい）です。

よって、これは公爵の本名ではございませんので、念のため……。
コメントくださった方、どうもありがとうございました！

２０１１／０６／２４　１２：００　才人がらみの記述を大幅加筆修正

第７２話　学者達、新たな道を見出すの事

――ラ・ヴァリエール公爵家での歓待・６日目の夜。

「そもそも＜錬金＞とは、どういった魔法であるのか」

最初に太公望がこの言葉を発したとき、エレオノールは思わず声をあげそうになった。それはそうだろう。なにせ、この歓待期間中、彼女は太公望に対して＜錬金＞がいかに素晴らしい魔法であるのか、また、どれほど生活に欠かせないものであるのかを、散々説明し尽くしていたからである。

だが、エレオノールは家柄だけではなくその実力でもって、国立アカデミーの首席研究員まで上り詰めたほどの才媛である。すぐさま、彼の問いには何らかの意味がある。そう判断した。

「それは、どういった意味で……ですの？」

「はい、それなのですが。才人よ」

いきなり話を振られた才人は、ビクッと身体を緊張させた。何やら小難しい、しかも自分にはあまり関係のない＜魔法＞の話を延々と聞かされていた彼は、半分意識が飛びかけて――つまり、居眠りをしそうになっていたからだ。

「な、なんですか太公望師叔」

「魔法学院の『赤土』先生を覚えておるか？」

「ハイ、もちろん。あの、ものすごい数の粘土飛ばしてきた女の先生ですよネ？」

あの先生が、一番最強に近いんじゃないかなあ。アレが口に入ったら、呪文唱えられないし。そんなことをブツブツと呟いていた才人に対し、太公望は、さらに質問を続けた。

「初めてあの『粘土』の魔法、つまり＜錬金＞を見たとき、どう思った？」

「びっくりしました」

「……質問の仕方が悪かった。あれを『科学的』に見た場合、どう感じた？」

カガク的。この言葉に、エレオノールだけではなく、コルベールも強く反応した。彼らは、これから展開される会話が、以前聞いていた『自然カガク』ひょっとすると、これに近いものではないのか？　そう判断したからだ。

「あれ『質量保存の法則』とか、どうなってんだ！？　とは思いましたです、ハイ」

粘土だけじゃなくて、ただの石から鉄作るんならまだわかるぞ？けどな、真鍮みたいな合金変化とか、常識的に考えなくてもめちゃくちゃ難易度高いだろ！　あれ、いったいどうなってんだよ！？等と呟き続ける才人に、太公望は再び質問を投げた。

「ふむう……おぬしの言う、その『法則』とは『物質の状態が変化しても、質量は変わらない』という意味で合っておるかの？」

「ハイ。合ってます」

「すまぬが、その法則について、簡単に説明してはもらえないだろうか？」

俺なんかよりも、太公望師叔のほうが詳しそうなんだけどなあ……そう呟きながらも、才人は『質量保存の法則』について説明を開始した。これは、彼の故郷である日本ならば、中学までに理科の授業で習う、ごく簡単な化学知識である。

「ええっと、そうだな……たとえばコップ1杯の水と、スプーン1杯の塩を用意して、重さを量る。そのあと、水の中に塩を入れて溶かして、その重さを量ると、溶かす前と全く同じ重量になる。つまり、前後で『質量が変わっていない』ってことになるよな。塩が水に溶けてなくなったように見えるけれど、実はなくなってなんかいないんだ。溶けた塩は、ちゃんと水の中に残ってる。重さが変わらないのがその証拠だ」

その他にも『質量』に関する説明や、各種実験の際の注意事項を挙げ、必死に脳内の知識を手繰り寄せながら『質量保存の法則』について説明する才人。思考が完全にそちらへ向いてしまったため、喋り口調が完全に普段のものに戻ってしまっているのだが、聞いている者たちは、誰もそんなことには気が付いていない。

魔法学院に所属するメンバーたちについては、才人が時折こういう『知識』を出してくることに対し、既に何の疑問も持っていない上に、彼の口調や普段の態度にも慣れているからこそなのだが……ラ・ヴァリエール公爵家の人々は、そもそも『平民』の従者である才人に、こんな学があるということに驚いていたため、礼儀がどう

とかいう些細な問題など、頭の中から消え失せていた。

特に才人の『正体』について知らされている公爵は、内心で唸っていた。母親が研究者であるらしい、とは聞き及んでいたが、自分の子供に対してこれほどの教育を施したその人物は、間違いなく高名な学者に違いない。彼の『補佐』でルイズの＜魔法＞が伸びたというのは、間違いのない事実なのだと納得できた。

そして、ラ・ヴァリエール公爵家の中でも、特に礼儀作法に五月蠅いエレオノールですら、静かに才人の話へ聞き入っていた。何故ならば、今才人が語っているのは、初～中級とはいえアカデミーク ラスの学術講義に等しいものであったからだ。もはや、彼が平民であることなど、彼女の頭からは完全に抜け落ちてしまっていた。

「これが『質量保存の法則』ってやつだ。ちなみに、金属が錆びると重くなるのは、表面に『錆』をつくるための物質がくっつくからだ。そのぶんだけ重くなる。これは例の法則とは関係ないし、酸化とかの説明を入れると少しややこしくなるから、ここまでで構わないよな？」

その才人の問いかけに、太公望は頷いた。

「うむ、よくわかった。大変よい説明であった。では……再び質問だ。それをふまえた上で、才人よ。おぬしは、あの『粘土』が、いったいどうやって、空中の『何もない場所』に現れたと考える？『魔法だから』で思考を停止せず、科学的見解を述べよ」

――『魔法だから』で思考を停止するな。この言葉に、エレオノールは目を見開いた。今、わたくしはとても大切な何かを掴まえようとしているのではないだろうか？

いっぽう、才人は必死に『空中に粘土が現れる』理由を、自分なりの視点から解明しようとしていた。そして、それらしき解答を提示してみた。

「どこか別の場所から『粘土』を＜転送＞してきてるんじゃないか？」

これに反論を述べたのはオスマン氏だ。

「いや、それはない。あれは彼女が＜錬金＞で創り出したものじゃ」

「そうなんですか！？　それじゃあ……う～ん。空中に『全く何もない』ってことはないよな。空気とか埃とか、いろいろなものがあるんだから……あ！　ひょっとして、それを何かの方法で『粘土』に変えてるのかな？　でも、そうなるとやっぱり、質量が絶対的に足りないんだよなあ」

そこに突っ込んできたのがエレオノールだ。

「その『足りない部分』を補っているのが、魔法。つまり＜精神力＞を対価に発生させている事象ということなのでは？」

彼女の『解答』に、拍手を送った者がいた。太公望である。

「おそらく、エレオノール殿のおっしゃる通りでしょうな。あくまでわたくしの推論ですが、彼女は空気中に漂う埃を『核』にして、その周囲に＜精神力＞を用い、作用させることで、何らかの補填……つまり『必要な質量』を補うための事象を起こし『粘土』を創り

出しているのです。これこそが＜錬金＞という魔法の根源のひとつに繋がるものなのではないかと、わたくしは考えます」

ところが、その意見に真っ向から対抗してきた者がいた。才人である。

「いや、それだと説明つかないことがあるんだけど？」

「ほう、具体的には？」

太公望の質問に、才人がこれまでいちばん疑問に思っていたことを述べた。

「ギーシュの『ワルキューレ』だよ。いや、あの小さな粘土くらいの大きさなら、俺でもまだ理解できるぞ？　けど『ワルキューレ』って人間よりちょっと大きいくらいのサイズがあって、しかも7体同時に出せるんだぜ！？　『核』が薔薇の花びらだとしてもさ、ギーシュってあんまり＜精神力＞多くないんだよな？」

なのに、どうしてあんな凄いものが作れるんだ？　中が空洞でも、質量的にありえないだろ！？　その才人の疑問に、思わず反応してしまったのはラ・ヴァリエール公爵である。ただし、それは才人の投げかけた『謎』に答えるものではなかったが。

「ちょっと待ってくれ。ギーシュ君は＜錬金＞で『ゴーレム』を作り出しているのかね？　＜クリエイト・ゴーレム＞ではなく？　何故わざわざそんな真似を！？」

彼の父であるグラモン元帥は＜クリエイト・ゴーレム＞を使っているのだが？　そう問いかけてきたラ・ヴァリエール公爵に答えた

のは、激論の対象たるギーシュ・ド・グラモン少年本人である。

「父上や兄上たちはともかく、ぼくは昔から＜精神力＞があまりなかったんです。つい最近まで『ドット』でしたから。それで、子供の頃に戯れで＜錬金＞を使って小さな『ゴーレム』を造り、動かしてみたら、これが結構上手くいきましてね。それからは、ずっと＜錬金＞で……」

この言葉に動揺したのは、同じ＜土系統＞であるエレオノールだ。

「いいえ、それはおかしいわ。だって＜錬金＞に『ゴーレム』を操作する効果なんてないはずよ！？」

言われてみればその通りである。ギーシュは、自分のことにも関わらず頭を抱えてしまった。彼は、これまで何の疑問も持たずに＜錬金＞で『ワルキューレ』を創り出していたが、その後の操作については、ほぼ無意識に行っていたからだ。

そのとてつもない『謎』を解明してくれたのは、ルイズであった。

「ねえ。ひょっとして……無意識に＜念力＞で動かしてるんじゃない？　たしか、ギーシュが『ワルキューレ』を突撃させるときって、必ず号令をかけてるわよね？　あれが＜念力操作＞発動のキーワードになってるんじゃないかしら？」

「それだあああぁぁぁぁああッ！！！」

ルイズの意見に、全員が賛同の声を上げた。

「さすがは＜念力＞の名手ルイズ。これで大きな謎がひとつ解け

た」

こう呟いたのはタバサだ。

「ギーシュの『ワルキューレ』を見て、いつも疑問に思っていた。他の生徒が作った『ゴーレム』は、彼のものと比べて、動きが全体的にぎこちない。これまでは技量の問題だろうと考えていたけれど、彼が＜念力＞を使って動かしていたというのなら、あのなめらかな動作についても理解できる」

＜クリエイト・ゴーレム＞で作り出されたゴーレムには、使用者が操作を一時放棄しても大丈夫なように、最初からある程度の『自由意識』が付加される。馬車の御者用などに作成される、所謂『作業用』のゴーレムなどにそれが顕著だ。細かな動きをさせるのには向かないが、これらはある程度放置していても、忠実に『命令』を実行してくれるようになっている。

ところが、ギーシュのゴーレムは、畑の細かい草むしりなどの『指先操作』まで完璧にこなす。そのうち、縫い針の穴に糸を通すことすらできるようになるのでは？　というくらいに繊細な動きまで可能としている。これは、普通の＜クリエイト・ゴーレム＞では到底実現不可能な操作なのだ。

「ギーシュが、どうしてあそこまで＜力＞のコントロールが巧いのか、やっとわかったわ。まさか、そんな難しいことを、無意識にとはいえ、子供の頃からずっとやっていただなんて！」

そうぼやいたのはキュルケである。彼女は、つい最近まで、ひたすらコントロールの練習をしてきた。にも関わらず、未だギーシュのそれには到底及ばないのだ。

自分の『ワルキューレ』に関する『謎』の解明と、そこへ付随してきた称賛の言葉に、ギーシュはもう鼻高々である。だが、その後太公望から発せられた言葉に、彼はさらなる衝撃を受けることとなる。

「操作については、ほぼ解明されたようだが、まだ才人が出した『質量』に関する『謎』が残っておる。これについてなのだが……実はギーシュの『薔薇の杖』が、それを解明するための重要な『鍵』となっておるのだ」

思わせぶりな太公望の言葉に、戸惑ったような顔でギーシュは聞いた。

「それはどういうことだい？　ミスタ」

「逆に、おぬしへ問いたい。その『薔薇の杖』を最初に持たせたのは、いったい誰だ？」

最初に、この杖をくれた人物。ギーシュはもちろん、その相手をよく覚えている。

「ぼくの父上だよ。たとえ戦場にあっても華を忘れてはならない、って」

「やはりそうか。おぬしの父上が元帥位に就かれている理由がよくわかった。おぬしが持っているその杖にはな、いくつもの利点があるのだ。それはなんだと思う？」

『薔薇の生け花』をベースに作られた『杖』の利点。太公望の言

葉から察するに、元帥位に就けるほどの軍人である、ギーシュの父親がわざわざそれを渡したという『事実』にこそ、隠された『謎』を解明するに至る秘密が隠されているのだろう。そこまで考えるに至ったコルベールは、その直後。即座に解答へと到達し、立ち上がって大声を上げた。

「ミスタ・グラモン。ひょっとして、君は自力で『杖契約』を完結できるのでは？」

「え、ええ……もちろん。１５分もあれば」

コルベールの剣幕に、思わずたじろいでしまったギーシュ。だが、彼の答えを聞いた、その他一同の反応は大きく違っていた。

「最初から最後まで、たったひとりで自力契約できるのかい！？」

「普通できないわよ、そんなこと！」

「な、なんでそんな短時間で、契約まで行けるのよ！？」

「それって、とんでもなく難しいことですわよ！？　あなた、もしかしてわかっていないのかしら！？」

レイナールをはじめとした生徒たちだけでなく、エレオノールまで驚いていた。

――普通『杖』との契約は、数日間かけて行われる。それも、ひとりで行うのではなく、複数の手が入ってようやく実現するものなのだ。

それは『杖を作る職人』と『契約の儀式』を整える者。そして『杖を使う本人』による『杖を自分になじませる行為』という名の『契約』。これが、基本的なメイジの『杖契約』に関する常識なのである。これらは、個人差こそあるものの、通常はだいたい数日から数週間かけて行う必要があるという、実に時間のかかる行為なのだ。

ところが、ギーシュの場合はこれらを全て、自分だけでやれるというのだ。しかも、たったの15分で完結できるという。どうして、彼がここまで『杖契約』を短時間で完結可能であるのか。それは、彼の戦闘スタイルとポリシーに由来する。

そう。『薔薇の杖』を使って『ワルキューレ』を7体出すと、花びらが全て散ってしまうため、戦闘終了後はその都度新しい『杖』に持ち替える必要があるからだ。

もちろん、花びらがなくても＜魔法＞自体は使えるし、その気になれば＜錬金＞で花びらを取り付けることも可能だ。なにせ彼は、＜錬金＞を使うことで、薔薇の花吹雪を起こせるくらいに器用なのだから。

だが、自分で作った花びらを、わざわざ『杖』につけなおすという行為が『美しくない』ため、ギーシュはあえて生け花に＜固定化＞をかけることで、毎回持ち替えているのである。そして、そんな彼の部屋には、常にスペアとなりうる『薔薇の花』が大量に飾られているし、マントの内側にも数本差してある。

「ある意味、グラモン伯爵らしい発想だよ。『常に華を忘れてはならない』これは、昔から彼の口癖なのだ。軍人が『杖』をなくすということは、即座に死へと繋がる。すぐさま、代わりを用意しなければならない。だから、自分の息子に、あえて管理が難しい『生

け花で作られた杖』を持たせることによって、それを学ばせていたのだな」

ラ・ヴァリエール公爵の補足に、感嘆のため息をもらす一同。

「杖をなくすということは、即座に死へと繋がる……」

タバサは、ふと自分の手元にある杖を見た。ごつごつとした、自分の身長よりも長く無骨なそれ。かつて、自分の父親が使っていたこの杖は、形見の品でもあり、彼女の愛用品でもある。その大きさが故に、教師たちから『持ち替えたほうがよいのでは』と言われたこともあったが、タバサは頑なに、その杖を持ち続ける事にこだわってきた。

しかし、このラ・ヴァリエール公爵の発言により、新たな発想が生まれた。何も手放す必要はないのだ。いざというとき代用品となりうるものを、どこかに持っていても良いのではないか？　タバサはそう考えた。

『杖契約』の性質上、複数の杖を持ち歩くのは難しい。だが、絶対にできないことではない。その証拠に、タバサの父親は常に複数本の杖を所持していたからだ。彼女の持っている杖も、そのうちの1本だ。

そこまでやるのならば、自力で『杖契約』が完結できるよう、各種手順についても学んでおいたほうがいいかもしれない。そんなタバサの決意を知ることなく、太公望は『ギーシュの杖』に関する『追加解答』を述べようとしていた。

「それ以外にも、利点がある。それが『花びら』だ。その花びら

が『地面』に触れたと同時に『地面』から『ワルキューレ』が作製されている。つまり『花びら』は『核』ではなく、精製のための＜精神力＞を運ぶための＜触媒＞なのだよ。これのおかげで『空間座標指定』ができないギーシュが、より少ない＜力＞でゴーレムを創り出すことができていたというわけだ」

そうなのだ。通常『地面』からゴーレムを作製する場合――いや、それに限らず普通のメイジは、魔法を発動させる際に、杖から発動場所へ＜魔力＞を運ぶ誘導用の＜糸＞を必要とする。

この＜糸＞には、誘導距離が長ければ長いほど、途中で＜魔力＞の一部を『蒸発』させてしまうという、有り難くない副産物がある。また、この＜糸＞は詠唱終了後に全て霧散するため、当然のことながら、そのぶん余計な＜力＞を消耗しているということになる。

よって、この＜糸＞は細ければ細いほど、かつ、短いほうが良い。何故なら、表面積を小さくすることで、それだけ『蒸発』を抑えられるからだ。また『空間座標指定』ができるメイジは＜糸＞を作成するために必要な＜精神力＞の消耗がなくて済む。これは大きなメリットだろう。

「つまり、ギーシュが持っている『杖』から落ちる『薔薇の花びら』は、その中に＜錬金＞発動のために必要な＜魔力＞を溜め込んで、＜錬金＞のための材料となる『地面』へと散ることにより＜糸＞を使わずに＜魔力＞を誘導でき、かつ着弾時の『起動スイッチ』の役割も果たしているという、複数の効果を持っておるのだ」

そう解説した太公望の言葉に、コルベールが補足する。

「さらにいうと、薔薇の刺ですね。これで、ほんの少し指などに

傷をつけることによって、契約に必要な分量の『血液』が出せる。『杖契約』のために必要なものが『薔薇の花』という、ただそれひとつだけで揃ってしまう。これは実に合理的な考えですぞ」

ギーシュは、自分の『杖』を手に取り、まじまじと見た。まさか、この『薔薇の杖』に、そんな深い意味が隠されていたなどとは、これまで思いもよらなかった。そして、父親の考えにも思い至らなかった。

「なるほどなあ。それならギーシュの＜錬金＞でも、あんなに大きなものを、たくさん作れるはずだよな。昔、俺が通ってた学校の先生が『科学は、知らなければ魔法のように見える』って言ってたけど、あれって本当だったんだ」

うんうんと頷く才人。どうやら彼なりに納得できたらしい。ただ、後半の言葉については解釈の仕方が思いっきり間違っているのだが、それについてはあえて触れないでおく。

「と、まあ……このように、あらゆる事象の『なぜ』『こうなる』を理論的に解明し、それによって蓄積された知識や経験を体系化した学問のことを、我々の間では総じて『科学』と呼ぶのです。『自然科学』は、その名の通り『自然』の事象を『自然科に分類した事象を解明するための学問』なので『自然科学』。今までの会話は＜錬金＞そして、ギーシュの『杖』を『科学』したもの。そういって差し支えないでしょう」

そう言って、太公望はぴっと指を一本立てた。

「なお、この学問をさらに細かく分類するならば、今回の話題は＜錬金＞による『物質の変化』を詳細に解明するもの、すなわち『

あるモノが別のモノに化ける理由を、より詳細に突き詰めるための学問』これは『化学（かがく・ばけがく）』と称されます。このように事象について追求し、深く分析していけば……魔法について、もっと色々なことがわかってゆくはずです」

そう語る太公望の言葉を聞きながら、エレオノールは思った。ああ、なんて楽しいのかしら。まさか＜錬金＞がこんなに面白く、興味深いものだとは思ってもみなかった！

あまりにも魔法が身近にありすぎるため、これまで深く考えたことがなかったが、こうして少し『中』を覗いてみただけで、こんなにたくさんの『謎』が詰まっているだなんて！　それを考えただけで、彼女の胸は躍った。＜錬金＞の『入口』ひとつ取ってみただけでもこれなのだ、もっとずっと奥まで覗き込んだら、果たしてどれほどの『不思議』が詰まっているのであろうかと。

そして、エレオノールはついに理解した。この『中身を奥深くまで覗く』という行いが『科学』という学問なのだと。そして、気が付いた。この行為は『始祖』ブリミルの慈愛に、より近付くための最善の方法でもあるのだと。

何故ならば、今まで『起きて当たり前』だと受け取られてきた＜魔法＞の根本を、より詳しく調べることによって、それを『当たり前にしてくれた』者に対する、深い感謝の念が生じるからだ。しかも、その理由全てを、自分が知ることによって、より明快に相手へと伝えられる。

これまで『始祖の彫像』を造り、研究することで、偉大なる『始祖』ブリミルの慈愛と業績を後世へ伝えるべく努力していたエレオノールだったが、悲しいかなその成果は、ごくごく一部の者にしか

認められず、年々予算を削られていくばかりであった。

しかし『魔法』を『科学』するというこの研究手法は、創立からずっと始祖の御心を知るための研究を続けている、我が国立アカデミー全体の意志に沿うもの。そして、なんといっても、このわたくしの知的好奇心を徹底的に満たしてくれる、素晴らしき学問にして命題だわ！

――後に、エレオノールは……彼女が新たに開いた『道』に続く、大勢の研究者たちから、敬意を込めて、こう呼ばれることとなる。

『魔法科学の母』『エレオノール・第一号魔法科学博士』

これは、ハルケギニアという世界で初の『魔法科学』という学問と、その創始者にして母親たる存在が誕生した『運命』にして記念すべき瞬間であった。

○●○●○●○●

――時は少し遡り、歓待の数日前。タバサの部屋にて。

最初に、太公望からこれを打ち明けられたとき、キュルケは彼の正気を疑った。

「ミスタ・コルベールに、タバサのお母上の治療を手伝って貰う」

コルベールは＜火＞系統の使い手である。正反対の属性である＜水＞の＜治療（ヒーリング）＞は、たとえできたとしても、相当の＜精神力＞を消耗するであろう。

そう、意見をしたのだが……太公望は笑って言った。

「いや。これには、彼の『切り開く力』たる＜火＞が必要不可欠なのだ。そういう意味では、キュルケよ。おぬしにも、同じ＜火＞系統の使い手として、治療の手伝いを頼みたいのだがのう？」

出会ったばかりの頃ならばいざ知らず、今のおぬしならば確実に頼れる。そう言われたキュルケは、正直悪い気はしなかった。しかも『破壊と情熱』を司る＜火＞で、親友の母の病気を治す手伝いができるというのだ。救出時のみならず、そんな重要な役割を任せてもらえるというのは、彼女にとって誇らしい『依頼』であった。

だから、彼女は胸を反らせ、髪を掻き上げながら、高らかに笑った。

「そういうことなら任せてくださいな。親友のお母様を助けるために、あたしの＜火＞が役立てるだなんて……こんなに嬉しいことはなくてよ」

「……ありがとう」

彼女の手をぎゅっと握り締め、感謝の言葉を述べたタバサの身体を、これまたぎゅっと抱き締めたキュルケは、こう言った。

「で……それは、いつミスタ・コルベールに依頼するのかしら？」

「うむ。例の歓待期間中に、その機会を作り『部屋』へと招待するつもりだ」

「そこに、わたしたちも？」

タバサの問いに、太公望は少し悩んだ後、こう返した。

「ひょっとすると、途中で退出してもらうかもしれぬが……それでも構わなければ」

「わかった」「わかったわ」

タバサとキュルケは、了承の印に強く頷いた。

――そして、現在へと至る。

＜錬金＞に関する、思いも寄らぬ話を聞いたコルベールは、興奮していた。『科学』とは、まさしく自分が現在行っている研究方法そのものではないか！　あれをもっと深く知りたい！　学びたい！　そう呟きながら、自室へ戻ろうとした彼に声をかけたのは、太公望と、ふたりの女子生徒であった。

「でしたら、先生の部屋で、これから少しお話など如何でしょうか？」

普段のコルベールならば、夜に女子生徒を部屋に招くなどとんでもない！　などと反論していたかもしれない。だが……知的好奇心が、そんな『教師』の常識を吹き飛ばしてしまった。

そして――彼は見て、悟った。以前、空の上で才人が告げた、その言葉の意味を。

『近いうちに……太公望師叔がいいものを見せてくれるそうですよ』

――コルベールは、それを見て、文字通り驚喜していた。

ガラスでも、水晶でもない球体。それが、一定の高さを浮遊して、部屋の中を照らしている。全て、手の中にすっぽりと収まる程度の大きさだ。にも関わらず、こんな小さなランプ3つで、これだけ広い部屋を真昼のような明るさに維持できるというのは、いったいどういう仕組みになっているのだろうか。

これは、そのものが発光する物体であるのか。あるいは、中に光苔のような光源となりえる物質が詰め込まれているのだろうか。それとも、常に＜光源（ライト）＞の魔法を発し続ける＜マジック・アイテム＞なのであろうか。時折、球体外側の表面に、謎の記号が浮かび上がるが、これはいったい何を示すものなのだろう。

部屋の入り口に浮かんでいた『光源』を発見したコルベールが、早速『分析』に入ってしまったのを見た太公望は――現在は、再び『夢の部屋』にいるので、伏羲の姿になっている――思わず苦笑してしまった。彼は、やはり根っからの『研究者』なのだと。少なくとも、現時点においては。

そんな彼に、この『仕事』を依頼してよいものかどうか迷ったのだが、正直なところ、彼以上の適任者が、どうしても見つからなかった。本来であれば、才人も一緒に連れて行く予定であったのだが、これから行く先は『経験者』でないと厳しい。あの『心の弱さ』を見てしまった以上、残念ながらまだ力不足であると判断せざるを得なかった。

そういう意味では、キュルケがいちばんの不安材料ではあるものの、今の彼女であれば、暴走する心配はまずあるまい。それを防ぐための準備は、充分にしてきた。

もしも可能であれば、オスマンの協力を得たいところではあったのだが、彼ほどの大物を他国へ動かしてしまうと『敵』に察知される危険性があるため、これについては即座に却下した。

「コルベール殿。『わしの部屋』の見学は、あとでたっぷりしていただいてよいので、まずは話を聞いてはもらえないだろうか？」

――そして30分ほどして。タバサの持つ事情を聞き終えたコルベールの両手は、ぶるぶると震えていた。

「私の＜火＞を、頼りたいと？　技術ではなく……？」

「その通りだ。より詳細な＜治療＞方法については、かなり特殊な内容であるため、大変申し訳ないが、現場に行くまでは打ち明けられないのだ……どうであろう？　このような大変に不躾な依頼ではあるが、どうか引き受けてはもらえぬだろうか？」

技術ではなく、自分の＜火＞つまり『炎蛇』たる者の＜力＞が借りたい。即座に、これはそういう依頼だと理解したコルベールは、躊躇した。それも当然である、彼は、かつて犯した罪の意識に苛まれ続けているが故に、現在の姿をとっているのだ。

俯き、押し黙ってしまったコルベールを見て、キュルケはフンと鼻を鳴らした。彼女は失望していたのだ。『炎蛇』などというご大層な二つ名を冠しているにも関わらず、普段からのんびりとしてい

て、いかにも本の虫といった風情の彼が、何故破壊を本領とする＜火＞系統を司るメイジであるのか、理解できなかったからだ。

だが、そんな彼にわざわざ太公望が『依頼』をしたということは、それ相応の理由があるはず。そう信じていたキュルケにとって、コルベールの反応は単に『臆病者が、当たり前のように怖じ気づいた』。そのようにしか映らなかった。

いっぽう、タバサは疑問に思っていた。以前、とある事件の際にコルベールの＜炎の蛇＞を見たとき、彼女は背筋に鳥肌が立ったのだ。もしも、あれが自分に向けられていたら……反撃する間も与えられず、瞬時に焼かれていただろう。

いや、あの＜炎＞だけではない。呼吸、動作、それら全てが、彼を相当な達人……しかも対人経験のある熟練者であることを匂わせていた。おそらく、本気を出したコルベールに『不意打ち』を受けたらまず助からない。それどころか、襲撃を受けたことに気付かないうちに燃やされているだろう。それほどの『戦士』が、何故躊躇うのか。臆病というわけではなさそうだ。何か、深い理由があるに違いない。

タバサは、そこに悲しみを見た。だが、あえて一歩踏み込むことにした。

「先生は、いつも授業で仰っていました。『破壊だけに＜火＞を用いることは寂しい』と。その言葉を発するとき、先生はどこか悲しそうでした。その理由は聞きません。でも、もし……＜火＞を『壊す』のではなく『切り開く』ために使うことを躊躇わないのであれば、どうか力を貸してはいただけないでしょうか」

タバサの切なる言葉に、コルベールの心が震えた。そして、彼は思い出した。

――＜火系統＞のメイジとは『自ら道を切り開く者』。

そうだ。私は決めたではないか。自分の＜火＞で、ひとびとを幸せにするための道を切り開いてゆこうと。破壊の権化ではなく、暖かな光になりたい。そう願っていたではないか。自分に助力を願う、この小さな瞳から視線を外すことは、その決意に砂を掛けるに等しい行為ではあるまいか。

だが……コルベールはまだ躊躇っていた。しかし、それ以上にタバサの真摯な眼差しに、心を打たれた。だから――自らに、試練を課すことで、それに応えるための準備をしようとした。

「私は……君たちが思っているような、立派な『教師』などではないのだよ。重い……いや、そんな言葉では軽すぎるほどの罪を背負う咎人（とがびと）だ。ミスタ・タイコーボーは、それを既に知っているか、或いは予想しておられるために、私に助力を請うてきたのでしょう？」

全身を黒の装束――現在は伏義の姿をとっている太公望は、頷いた。

「詳細までは知らぬ。聞き出そうとも思わぬ。だが、召喚されたあの日のうちに、気付いていた。コルベール殿が、いったい何者であるのか。だが少なくとも、あの場での、あの反応は……間違いなく、子供たちを守る『教師』たりえる姿であったよ」

その言葉に、キュルケが反応した。

「ミスタ。それはどういうことですの……？」

太公望は、黙ってコルベールの目を見た。その視線を受けたコルベールは、頷いた。それを了承の判断と受け取った太公望は、静かに語り始めた。

「ミスタ・コルベールは、あの『使い魔召喚の儀』でわしが現れたとき、瞬時に動いた。自然に、実にさりげなく。相手を警戒させない滑らかな動作でもって、生徒たち全てを守れる位置についた。あれを見たとき、わしは即座にこの男は只者ではないと判断した。彼は間違いなく軍人。それも、相当な手練れであると」

コルベール先生が、軍人!?　キュルケは、即座に反論しようとした。そんなはずはないと。だが……彼女は知っていた。太公望の『解析』能力が、常人のそれとは比べものにならない程に正確なものであると。そして、彼がサイトの世界で『伝説の英雄』として語り継がれる大将軍であることを聞き、かの『烈風』と互角に戦えるほどの技量を持つ『超技巧派』のメイジであることを見せつけられていた。だから、舌を動かせなかった。

「トリステイン魔法学院は、有力貴族の子弟のみならず、海外からの留学生が多く集まる場所。考えようによっては、常に『火種』を抱える巨大な火薬庫たりえる存在だ。コルベール殿は、その『番人』として、生徒を守るという特殊任務を、国から与えられた軍人である。わしは、そう捉えていたのだが……違いますかのう？」

実際、わしを除く水精霊団全員が、一斉にコルベール殿へ挑みかかった場合――見通しのよい平野ならばともかく、市街地や森などで地形を有効活用されたら、ほぼ間違いなく全員揃って完封される

であろう。そう告げた太公望の言葉に、キュルケとタバサは驚愕した。特にタバサは、コルベールの実力をある程度把握してはいたものの、さすがにそこまでの腕利きだとは思っていなかった為、激しい衝撃を受けた。

先生は、自分の『パートナー』太公望と同じなのだ。完全にコルベールの見た目や言動に騙されていた。それを理解したが故に、タバサは凍り付いた。

いっぽうのコルベールは、内心で苦笑していた。目の前の人物――太公望が持つ甘さに対して。こんな罪深き私すら、彼は守ってくれようとしている。この人物は、本当に事情を知らないのかもしれない。だが、こちらの力量を、ほぼ正確に把握しているということは……私が、どのような性質を持つ『軍人』であるのか、当然わかっているはずだ。

そして、この依頼を受けるということは、それを開帳する必要に迫られる可能性があるということだ。だから、コルベールは話すことにした。あえて生徒たちがいる前で――自分が犯してきた罪を。

「いいえ。私は、そのような立派な存在ではありません。ただ、かつて軍人であったことは事実です。それも……王国の＜特殊魔法実験小隊＞を率いた、指揮官でした」

キュルケは、思わずコルベールを見つめた。そして、おののいた。今の彼は、いつものどこか間の抜けた教師などではなかった。纏う空気が完全に違う。それは、味方すらも焼き尽くすと称される、ツェルプストー家生まれのキュルケですら感じたことのない熱気。彼に触れれば火傷する。燃えて、灰すら残さず＜消滅＞する。

オーク鬼退治という『実戦』を経験したキュルケだったが、あれはあくまでも『保険つき』の戦いであった。命を賭けた本物の戦いなど、これまで体験したことはない。だが、コルベールが発する気配は違う。まさしく、戦場を駆け抜けた者だけが持つ、独特の雰囲気を漂わせている。それは肉が焼け、死そのものを感じさせる香りであった。

「なあ、ミス・ツェルプストー。君さえよければ＜火系統＞の特徴を、この私に開帳してくれないかね？」

そう言って視線を向けてきたコルベールの瞳は、まるで獲物を狙う爬虫類を思わせるようなものであった。彼の静かで優しげな声を聞いたキュルケは、自分の耳へと達したその声音とは裏腹に、生まれて初めて。純粋な死を感じさせる、恐怖の旋律を聞き取った。

その畏れは『炎の女王』とまで称された赤毛の少女から、瞬時に全ての『熱』を奪い尽くした。そう……空気中の酸素を含め、そこに存在する全てを燃やし尽くしたあとに訪れる、完全なる無の空間を生じさせたが如く。

「……情熱と破壊が、＜火＞の本領ですわ」

震えながらも、小さく発せられたキュルケの言葉に、コルベールは静かに頷いた。

「情熱はともかく、破壊こそが＜火＞の本領。そうだ、若い頃の私は、それを信じて疑わなかった。だからこそ、軍に所属して、立ちふさがる者全てを焼いた。顔色ひとつ変えず、何もかも、全てを破壊し尽くしてきた。いつしか、そんな私についた二つ名が『炎蛇』。蛇のように静かに這い寄り、＜炎＞という、確実に死に至る『毒』

を敵対する者に与える――非情の＜使い手＞だと」

ふと顔をあげたコルベールの瞳に、太公望の顔が映った。彼は静かに、小さく首を横に振っている。それ以上語らなくともよい、そう言いたいのであろう。だが、コルベールは頷かなかった。

「その考えが変わったのは、２０年前だ。とある村に、疫病が発生したと、上から告げられた。全てを焼き払い、病の蔓延を防げ。そう命じられ、任務を遂行した。その時は、そう信じていたし――何より、上からの命令を忠実に実行するのが軍人の役目だ。なんの疑問も持たずに、私は村を焼き払った。そう、家屋だけでなく、動くものたちをも含め、全てを灰にした」

疫病の蔓延を防ぐために、動く者全てを焼く。つまりは――そういうことだ。キュルケとタバサの背中に、冷たい何かが伝い落ちていった。全体を救うために、個を犠牲にする。よくあることだと言われてしまえば、それまでだろう。だが、それはあくまで『する側』の理論である。『される側』にとっては、たまったものではない。

「だが、後に仕事で軍の資料庫を訪れた際に……知ってしまったのだよ。その任務に隠された、真の意味を。あれは、疫病を防ぐためのものではなかった。ただの『新教徒狩り』だったのだよ。しかも、一部貴族と寺院が癒着した結果、自分たちの利権を守るためだけに行われた、欲望の果ての虐殺だったのだ！」

――新教徒。ブリミル教の長い歴史の間で、一部の有力者との癒着や、祈祷書の内容を自分たちの都合のいいように解釈する神官が多数現れ、それがために寺院の腐敗が進んでいる。そんな現状を変えようと、百年ほど前にロマリアでひとりの司教が立ち上がったのが、後に『実践教義運動』と呼ばれる宗教運動の始まりである。

ブリミル教を、本来のあるべき姿に戻そう。この運動と教義を信じる者は『新教徒』と呼ばれ、かなりの＜力＞を付け始めている。当然のことながら、旧来のブリミル教徒……特に、甘い蜜を吸っている司教や寺院たちからしてみれば、この状況が面白いと思えるはずもなく。それらは『弾圧』という形でもって表へ出た。コルベールが任務と称して行わされたのも、そのひとつである。

苛烈を極めたこの弾圧は、教皇が変わった現在では禁止されているが、今でも『旧教徒』が『新教徒』に対する偏見は根深く残っている。ガリアなどでは、その対立を恐れるが故に『実践教義』を国法によって禁じたほどである。

いつしか、部屋の中はしんと静まり返っていた。ただひとりの口奥から漏れ出る、嗚咽混じりの声を除いて。

「私は、それからずっと罪の意識に苛まれ続けてきた。私のしたことは、到底許されることではない。任務だったから、軍人だから、知らなかったから。そんなものは言い訳にもならない。炎に包まれた、あの村を――私の＜火＞で焼かれていった彼らの悲鳴を、私は一度たりとて忘れたことなどない。だから私は、軍を辞めた。そして二度と＜火＞を破壊に使うまいと誓ったのだ」

コルベールの唇が、強く噛みしめられた。そして、そこから流れ出た血を見たキュルケは――それを、燎原を静かに這い進む、炎の蛇のようだと感じた。

「そのまま罪の意識に押し潰され……自ら地獄へ続く道に墜ちてゆこうとしていたあの時。私は、ひとりの老人に出会ったのだ。彼は、放っておいてくれ、このまま死なせてくれと願う私を制し、大

声で怒鳴りつけた。死んでどうなる？　自分だけ。たったひとりの命で、全てを償うことができると思うほど、君は傲慢な人間なのか？　とね」

そう自嘲したコルベールの瞳に映っていたのは、闇などではなかった。それは、もっと別の何か。

「その老人こそ、トリステイン魔法学院の学院長たる、オールド・オスマンだったのだ。そして、彼は、ただ自分の犯してしまった大罪を前に、嘆くことしかできなかった私に向かって、こう言ってくれたのだよ」

『＜火＞が司るものが『破壊』だけでは寂しい。そうは思わんかね？　君の手には、もっと別の何かが乗せられている。わしは、そう思えるのじゃよ。本気で罪を償いたいと願うのならば、その＜力＞で、新たなものを生み、育ててみてはどうかね？』

「彼の言葉は、私にとって＜天啓＞と呼ぶに相応しいものだった。その後、私はオールド・オスマンの口利きでトリステイン魔法学院の教師となったのだよ。子供たちが、私と同じ間違いを繰り返すことのないように。＜火＞の『道』にも、壊す以外に別のものがある。それを教え、指し示すために」

同時に『＜火＞で何かを生み出すことができないか』それを追い求めるが故に、コルベールは学問に走ったのだと語った。そして彼は知ったのだ、＜火系統＞の持つ、破壊以外の可能性を。だから、彼はひたすら学問に殉じた。そして、オスマンの依頼で学院の生徒たちを影から守ることも行っていた。

学院の宝物庫の番を、コルベールただひとりが真面目にこなして

いたのも、それが理由だ。また、フーケ討伐隊に志願しなかったのは、したくてもできなかったからだ。オスマン氏の強い視線によって、制されていたから。

「私の手は、たくさんの血に濡れている。この手にかけたひとびとの命は、もう戻ってはこない。だが、オールド・オスマンと出会い……こんな私を、地獄の底から救ってくれた彼の理想を手伝うことこそが、この私に科せられた使命のひとつである。今でも、そう信じているのだ」

そう言って、コルベールはじっとタバサの目を見つめた。

「本当に、こんな私の＜火＞を借りたいと、そう言うのかね？ミス・タバサ」

その問いかけに、タバサは力強く頷いた――そこへ、一切の迷いを見せずに。

「ならば、私の＜火＞を貸そう。オールド・オスマンの理想。それは、生徒たちを正しい道へと導くこと。困っている子供たちに、手を差し伸べることだから」

そう言って、目の前へ差し出された、コルベールの節くれ立った手を、タバサはしっかりと握り締めた。そのか細く、小さな両手で。

――それから、数時間後。ふたりの女子生徒が退出し、自室へと戻った後。『夢の部屋』に立ち、窓の外に映し出された景色を眼下に眺めながら、コルベールが呟いた。

「私は、やはり卑怯者です。あれでは、彼女たちを脅迫したも同然ではありませんか。今になって思うのです。自分の罪を誰かに打ち明けることで、楽になりたかった。ただ、それだけの気持ちで、あんな話をしてしまったのではないかと」

そう言葉を紡いだコルベールの瞳には、再び涙が溢れていた。

「罪を自覚して悩む。それが、新たな道を征くための第一歩なのだとわしは思う。かつて、とある敵将に、こう問われたことがある。お前は、地に平和をもたらすために働いていると言うが、結局は本来不要な争乱を巻き起こし、憎むべき『自分の敵』と同じように軍を率い、罪なき民を大勢巻き込んでいるだけなのではないか？　……と」

コルベールの隣に並び、同じように窓の外を眺める太公望。その視線の先には、彼――いや、伏羲の故郷たる滅びた惑星を模した大都市が、宵闇の中、煌々とした無数の灯りによって、照らし出されていた。

「わしは、言葉に詰まってしまった。何故なら、その将軍の言うとおりだと思う自分が、心の中に居たからだ。本当にわしは、この道を歩んでも良いのだろうか。これは正しい道なのであろうかと、ずっと悩み続けた」

――戦を好まぬその気性が故に、総軍司令官として軍を率いるという矛盾を抱えることになった男の話を、戦うことの意味を知ろうとしなかったが為に、ひとりでは到底抱えきれぬ大罪を背負うことになった男は、ただ静かに聞いていた。

「だが、周囲にいた仲間たちが、わしを支えてくれた。道に迷う

わしの背中を、皆が押してくれた。だから、前へ進むことが出来た。たとえ、どんなに傷つけられようとも、この手を血に染めようとも」

そのとき、彼らの眼前で、一機の宇宙船が力強く飛び立って行った。天高く、煌めく星の海へと向けて。囂々と輝く炎を噴きながら、遙かな天上の世界へと旅立ってゆくその船を見たコルベールは、ぽつりと呟いた。

「私の＜火＞も、いつかあの船のように、飛び立てるのでしょうか」

遠い星の海を目指す船。それは、あの『ゼロ戦』と、どこか似た姿をしていた。

「あれは、おぬしが今歩んでいる『道』の遙か先に在るものだ。必ずとは言えない。だが……迷わず進めば、いつか届くかもしれぬ。あの星々にさえも。少なくとも、おぬしの周りには、その手助けをしてくれる者たちがおる。そうであろう？　コルベール殿」

その言葉と共に、すっと差し出された手を、コルベールは無言で握り返した。

――こうして『炎蛇』は＜火系統＞の使い手として、再び立ち上がった。破壊のためではなく、自分の守るべき者たちの目指す『道』を切り開く為に。

第７２話　学者達、新たな道を見出すの事（後書き）

ゼロ魔世界の＜錬金＞を、筆者なりに科学してみました。いや、より正確にいうと屁理屈を並べ立ててみました。こういうことを語り、あるいは書き始めると、滅茶苦茶長いんですごめんなさい。

ギーシュが＜錬金＞でゴーレムを作る理由と、薔薇の杖に込められた意味。毎度おなじみの、ものすごい独自解釈ですが、こんな感じになりました。如何でしたでしょうか？　ちなみに筆者の科学知識は、いいところ高校レベル。現役離れて久しい今、せいぜいその程度しか覚えておりません。質量保存の法則とか、書いていてすごく懐かしくなった的レベル。

ちなみに。何故エレオノールが第一号の『科学者』なのか、コルベールではないのかという疑問があると思います。これは、彼は根本が『発明家』だからです。同じ学者でも、エレオノールとコルベールの差はそこにあります。探求し、その道を究めようとする者が『研究者』、いっぽうそれらの道を頼りに、あらたなモノを生み出そうとするのが『発明家』であると考えます。よって、彼らの目指す『道』は、似ているようで大きく異なるのです。

さらに。この作品において、よく『シゼンカガク』というように、カタカナ表記になっている箇所と、そうでない場所があると思います。これは、ハルケギニアにないと思われる言葉、あるいは、近いものはあるが、理解されていないものという文章表現です。よって、それをちゃんと理解している人物のセリフ中だと『自然科学』という漢字表記に置き換わります。今回の序盤に『自然カガク』という場所があり、中盤に『科学』に変わった箇所があります。これは、そういう意図でもって、わざとおかしな変換をしていますので、さ

りげなく探していただけたりすると、面白いかもしれません。

同様の理由で、才人が『タイコーボー』呼びから『太公望』に変わったのは、正体がわかったからです。単なる筆者のお遊びなのですが！

この次からは、本文でも予告されております通り、いよいよ「タバサの母」病巣解除ミッション発動です。相も変わらず独自解釈な展開となりますが、どうかお楽しみに！

２０１１／０６／２７　質量保存の法則について修正

第７３話　黄金の帚星、白の国より流れるの事

咎を背負うふたりの男が、星の海を征く船を見送っていた――ちょうどその頃。

ラ・ヴァリエール公爵家の一画に用意された客室のひとつで、タバサは寝間着姿のまま、じっとベッドの上に腰掛けていた。その手には、どこへ行く時にも――たとえ、風呂へ入る時にですら手放すことのない、節くれ立った長い杖を握っている。

既に、就寝時間を過ぎている。だが、彼女はどうしても横になる気になれなかった。とある考えが、ずっとタバサの頭の中をぐるぐると巡っていたせいだ。と、そんな彼女の部屋に近付いてくる足音が聞こえてきた。聞き慣れたブーツの音。それはタバサの親友が立てる足音だ。

それからすぐに、部屋の扉がノックされる。入室の許可を出す間すらなく開かれたそこに現れたのは、赤毛と褐色の肌が眩しい少女――タバサの親友であるキュルケだった。

「やっぱり、まだ起きていてくれたわね」

そう言って、キュルケはゆっくりとタバサの元に近寄り、両手を広げると――その身体をぎゅっと抱き締めた。

いつも通りの親友の態度。だが、タバサはその中に、とあるものを見出した。だから、タバサはキュルケの頭を優しく掻き抱いた。いつも……彼女が自分にしてくれるように。

そんなタバサの態度に、キュルケは一瞬だけ驚いたような表情を浮かべ……そして、涙を浮かべた。彼女が、このような顔をするのは珍しい。いや、かつてなかったことだと言っても過言ではない。

「ありがとう、タバサ……」

普段のキュルケの姿を良く知る者が、今の彼女を見たら……これは夢なのではないかと驚くだろう。それほどに、現在のキュルケの姿は小さく――そしてか弱く見えた。

「おかしいわよね、このあたしが怖いと思うだなんて」

そう呟いたキュルケの頬を、一筋の涙が伝い落ちた。そしてキュルケは、まるで幼子が母親にするように、その顔をタバサの膝に埋めた。

「でもね、本当に怖かったの。コルベール先生のことじゃないわ。ううん、先生が怖くなかったっていうのは嘘ね。すごく怖かったわ、先生が纏う空気も、あの話も――でも、そうじゃない。あたしが一番怖かったのは、自分がなんにも知らなかったことなの」

タバサは小さく頷くと、涙を零し続ける親友の頭を、やさしく撫でた。

「＜火＞は情熱と破壊の象徴。偉そうに、あんなことを言っていた自分が恥ずかしい。あたしは＜火＞がどんなものなのか、自分がどういう＜系統＞を背負っているのか、ちっともわかっていなかったのよ。あの話を聞いた今でも、本当に理解できたのかどうか、怪しいものだわ」

――全てを燃やし尽くす。それがいったい何を指すのか。どういう意味を持つのか。

「それに引き替え、コルベール先生はすごいわ。＜火＞の怖さをちゃんと知っていて、それでもタバサの……ううん、あたしたち生徒のために、自分の持っている知識を生かそうとしてくれているんだもの」

もしも知らないままだったら、あたしも若い頃の先生と、同じような『道』を歩んでいたかもしれない。そう言って震えるキュルケの頭を、タバサは……ただ優しく撫で続けていた。

「わたしも、全然知らなかった。知らないということの怖さを。わかっているつもりになって、得意になっていた」

静かに涙を流し続けながら、キュルケはタバサの言葉を聞いていた。

知らないことの怖さ。タバサは、太公望との『模擬戦』や、今日まで続けてきた彼とのやりとりの中で、それらを完璧に学んだつもりでいた。だが、まだまだ自分の持つ考えが甘いものであったということを、今回の一件で思い知らされた。

コルベールの過去について、ではない。彼の背負う咎について……でもない。コルベールがこれまで見せてきた姿――お人好しで、好奇心旺盛な、どこか間の抜けた教師。それが、彼のごく一部――コルベールという男を形作る一面でしかなかったものを、完全に『真実の姿』だと決めつけていた自分の見通しの甘さが、ただひたすらに怖かった。

それだけではない。自分の『パートナー』に対する評価が甘過ぎたことも、彼女が抱く畏れに拍車をかけていた。以前、太公望と行った模擬戦の前に、タバサは彼の実力について、こう評していた。

『彼に対抗しうるのは、伝説の＜風＞烈風カリンそのひとくらいではなかろうか』

……と。

だが、実はその判断すらも生温かったのだ。何故ならば――他の誰も知らない、タバサだけが知っている、彼女と太公望だけの秘密。それは、太公望が自分最大の『切り札』だと言っていた、彼の出身地特有の＜技＞である＜フィールド＞の存在。以前、これを使うときが、自分の『本気』なのだと彼は語っていた。

にも関わらず、それを一切見せぬままに、ハルケギニア最強と称された『烈風』との戦いは、両者引き分けという形で終わってしまった。これが意味することは、ひとつだけしか考えられない。

『自分のパートナーの実力は、あの『烈風』すらも上回っている可能性がある』

そして。それほどの実力を持つ彼が、ハルケギニアの基準では『ドット』に分類されてしまうという驚愕の事実が、タバサを打ちのめしていた。

同時に２４個もの魔法――公爵夫人とのやりとりから察するに＜ウインド＞を唱えるだけで、２０本の＜鞭＞と１枚の＜盾＞そして、移動の＜補佐＞と、攻撃用の＜風刃＞２枚を創り出し、かつ『同時展開』する程の知識と実力があるにも関わらず、現在の基準では『

おちこぼれ』扱いをされてしまう、この不条理は一体どうしたことか。

だが、それ以上に。タバサは、思わず声を上げてしまった。それを認めざるを得なかったが為に。溢れる感情を止められなかったが故に。

「そしてわたしは、知らないうちに……自分の『パートナー』が持っている大きな＜力＞に嫉妬していた」

そう――タバサは、これまで全く自覚していなかったのだが……いつのまにか、太公望に対して激しい嫉妬心を抱いていたのだ。

いくつもの＜魔法＞を同時に展開し、学院の教師たちはおろか、アカデミーの首席研究員すら凌駕する『知識』を数多く有し、若干２７歳という若さにして、国軍を率いて王の隣に立てるほどの『頭脳』を持ち――さらには、３０００年という時を越えて、なお語り継がれる程の戦果を挙げていたとされる、異世界の『英雄』に。

「あの＜力＞がわたしにあれば、自分の『目的』を達成することなど、容易であるはず。そんな風に考えつつあった、自分の心に気が付いた時……ぞっとした」

本来は一切無関係の太公望を、自分を取り巻くガリア王宮の醜い権力争いになど、絶対に巻き込みたくない。そう考えていたにも関わらず、タバサは無意識に、その＜力＞を欲してしまっていた。そんな、自身の心の無自覚な変転も怖ろしかった。

「自分には才能がない。そう言い続けてきた彼が、どれほど努力して今の＜力＞を手に入れたのか、ちっともわかっていなかった。

ルイズのお姉さまと、お母さまが気付いてくれなかったら……わたしは、彼こそが本物の『天才』だと信じ込んで、真実を知らないまま、ただ嫉妬して……最後には僻んでしまっていたかもしれない」

――＜念力＞と＜ウインド＞しか使えない『おちこぼれ』のメイジ。

普通のメイジの視点で太公望を見た場合、確かに魔法の『才能』は皆無といっていいだろう。にも関わらず、彼はそのハンデを『知識』と『応用』で覆し、さらには自分を『スクウェア』メイジであるかのように見せかけていたのだ。タバサだけでなく、周囲の者たち全てが、それに騙されていた。

もしも『烈風』カリンが、その秘密を見破ってくれなかったら……タバサは太公望の『偽りの背中』を追い掛けようとして、途中で挫けてしまっていたかもしれない。

――人間よりも遙かに格上たる妖魔と何十年も戦い続け、その中で生き残った。

例の試合後に、タバサはルイズから教えられたのだ。彼女の姉であるカトレアが、実はひとの心の奥底までも見抜くことができるのでは？　そう信じてしまう程に、凄まじい『勘』の持ち主であるということを。

タバサは、もちろんそれを受け入れた。ルイズは、そういった類の嘘を言うような人間ではないし、事実カトレアは、太公望やサイトが『異世界』から来ていることや、太公望の年齢や経歴を、ほぼ完璧に見抜いていたからだ。

そんな＜超能力者＞によって暴かれた『パートナー』の真の姿とは。２７歳どころか、７０を越える老齢のメイジにして、歴戦の勇士。自然のあらゆる法則を学び、妖魔と戦い続けるという、文字通り命がけの試練を受けることによって『才能のなさ』を跳ね返した、まさに『努力』のひとだった。

妖精の＜力＞で若返り、１５～６歳の身体を取り戻しているとはいえ、その努力の量だけではなく、経験すらも、到底自分の及ぶところではない。彼があそこまで用心深い性格をしている理由についても、タバサはようやく理解できた気がした。

あれはきっと、彼がまだ若かった頃――現在ほどの『技術』が無かった時代に、自分の圧倒的不利を隠すために造り出した、一種の仮面（ペルソナ）だったのだ。

わずか１５歳にして、メイジとして最高位の『スクウェア』へと至ってしまったタバサにとっては、到底思い及ばぬ程に、苦難に溢れた『道』を――最下級ランクたる『ドット』メイジである太公望が歩んできたのは間違いない。

そして、タバサの思考は――遂にそこへと辿り着いた。従姉妹姫であるイザベラが、いつも自分へ向けてくる視線の意味に。あれは、わたしの＜魔法＞の才能に対する嫉妬であったのだと。同様に、ジョゼフ王が自分たち家族に向けてくる、強烈なまでの悪意についても理解できた。

『スクウェア』の自分ですらこれなのだ。周囲から徹底的に『無能』扱いされてきたジョゼフが、才気溢れる弟やその娘たる自分に向けていた嫉妬の念は、いかほどのものであったのだろうかと。もっとも、それを理解することはできても、父を殺され、母を狂わさ

れた事実まで許す気にはなれなかったが。

そんなタバサの独白を聞いたキュルケが、ぐいと自分の顔を拭うと、口を開いた。

「あたしね……もしかすると、見つけたかもしれないわ。自分の『道』を」

そう言って、今度はキュルケがタバサの頭を掻き抱いた。

「まだ、本物かどうかはわからない。だからね、もう少し見てみようと思うの。知ろうとすることの大切さが、あたしにもちょっとだけわかったから」

そうは言っても、無理矢理に奥まで踏み込んじゃいけないわよね。そう笑うキュルケの顔には、先程まで浮かんでいた苦悩の色は、もう見られない。

「先生のこともびっくりしたけど。ミスタの年齢にも驚いたわよね。けど……あたしね。ひとつ、彼の言動について、気が付いたことがあるのよ。タバサはどうなのかは知らないけれど」

「タイコーボーについて、気付いたこと……？」

彼の実年齢が、最低でも７０を越えていて、かつ１００歳以下であるというのは、オスマンやカトレアたちとのやりとりを聞いたことで、タバサにも把握できている。それ以外に、何かあるというのだろうか？

不思議そうな顔をして自分を見つめてくるタバサに、キュルケは

まるで面白い玩具を見つけた子猫のような顔をして、こう答えた。

「ミスタが、何かについて断言しないときって……ほぼ間違いなく、その近辺にとてつもなく大きな隠し事が紛れ込んでいるのよね。年齢のこともそうだったし、それに……」

「それに……？」

「うふふ。それは、タバサが自分で気付かなきゃダ・メ。いいこと？　彼の言葉をよ～っく思い出してごらんなさいな」

キュルケはそう言うと、ふたたびタバサを抱き締め、そして立ち上がり……自分の部屋へと戻った。その道程で、彼女がポツリと呟いた一言は――誰にも届くことはなかった。

「彼……自分自身に娘と曾孫がいるだなんて、一言も言っていなかったのよね。あれは『婚約の申し出』を遮ろうとする言い訳としては、正直なところ、ちょっとばかり迂闊な言動だったんじゃないかしらね？」

絶対に、あたし以外にも気付いているひとがいると思うんだけど。ミスタって、実年齢は高いのかもしれないけれど、男女関係の機微については、ほとんど子供と同じだわ。

たぶん、だけれど……修行や仕事で毎日が忙しくて、そっち方面については、手をつける暇が全然なかったんじゃないかしら。そんな彼が、妖精の『祝福』でタバサと同年代の子供にまで戻された。これって、ある意味面白い状況よね。

――この手の会話に強いキュルケならではの、実に鋭く正確な分

析であった。

○●○●○●○●

――キュルケが、用意された自室へ戻ろうとしていたのと、ほぼ同時刻。

3人のうら若い女性が、白の国アルビオン――トリステインから見て、北西の方角で周回を続けている浮遊大陸の、とある山中を……黒い衣装を身に纏い、分け入るように進んでいた。

「こんな真夜中に山歩きなんかさせちゃって、本当にごめんなさいね」

そう呟いたのは、銀縁の眼鏡をかけた女性。深く被ったフードの隙間から、理知的な素顔が覗いている。『土くれ』のフーケことマチルダであった。彼女は、現在ミス・ロングビルを名乗り、一行の先導をしていた。

「わたしは、雇われの傭兵だ。来いと言われれば、どこへでもついてゆく」

そう呟いたのは、マチルダとほぼ同年代と思われる、若い女性だった。短く切った金色の髪と、ややつり目がちな青い瞳が印象的な彼女の腰には、一本の剣が差してあった。

「わたくしもです。これは正式に請け負った『仕事』なのですから」

そう言って微笑んだ女性は、黒衣の奥に聖職者の装束を身につけている。彼女は『始祖』ブリミルに仕えるシスターであった――あくまでも、表向きは。

そんな彼女たちの返答に、満足げな笑みを浮かべたマチルダは、再び目的地へ向けて歩き出した。シティ・オブ・サウスゴータと港町ロサイスを結ぶ街道から少し外れ、西の山を分け入った先にある――ウエストウッドと呼ばれる、ごく小さな村。そこは、彼女にとって第二の故郷であり、大切な者たちを残してきた場所であった。

――今から、半月ほど前。

マチルダが、彼女の『主人』から託された『荷物』たちを無事送り届け、根城へと戻ったその翌日。茶色い羽根のフクロウが、なんと全部で１０羽も、時間をおいて彼女の元へと飛び込んできた。

その全てが、以前藁にも縋る思いで託した『主人』への願い、その回答であった。

ひとつは『パターン別・要人救助マニュアル』と記された、詳細な救助用の手配についてびっしりと記された文書。それは、８羽のフクロウの両足に、それぞれ括り付けられていた。

そう。マチルダの『妹たち』を、安全にアルビオンからゲルマニアへ移送するために必要な手配に関して、あらゆる状況を想定したマニュアルが送られてきたのである。しかも、そこにはミッション開始準備から救助後の移送方法に至るまで、パターン別・しかもフローチャート付きで細かく記載されていた。

そして。残りの2羽に託されていたものを見て、マチルダは息を飲んだ。それは、なんと総額２０００エキュー相当の宝石に加え、

『金額が不足している場合、３０００エキューならば即座に送付可能だ。それに加え、最大2万5千エキュー。つまり、合計3万までならば何とか用意できる。これは宝石ではなく、手形での発行も可能だ。金が必要になった場合は遠慮せず、早急に連絡されたし』

という但し書きが記されたメモであった。

２０００エキューもあれば、トリスタニアの郊外に、ちょっとした庭付きの家が購入できる。３万エキューともなれば――小さな城が手に入るほどの大金だ。

「まったく……ふざけんじゃないよ！　なんだって、こんな……貴族の資格を剥奪されたこそ泥なんかに、ここまでしてくれるっていうのさ!?　そんなに、あの荷物が大切だったってのかい？　アハハハハッ、まったく……傑作だよ！」

マチルダは、大声で笑いながら、送られてきた『マニュアル』に目を通そうとした。だが……何故か両目が霞んでしまい、何度眼鏡を外して拭いても、まともに読み進めることができなかった――。

――それから。マチルダは必要な準備をすべく、まずは最大の問題点の解決に動いた。それは、彼女の妹が持つ特異性を隠すための行動である。

彼女の妹――正確には、妹ではないのだが――には、他人には決して知られてはならない特異性があった。それは、彼女がハルケギ

ニアの民の天敵たる『エルフ』の血を半分引く者、つまり『ハーフエルフ』であることだ。

見た目は、ほぼ人間と変わらない。だが、マチルダの妹には、唯一他者と違っている箇所があった。それが『耳』。本物のエルフのそれに比べればずっと短いものの、長く尖ったそれを見られたら、即座に『人類の敵』と見なされ、抹殺の対象とされてしまう。

事実、彼女の母親は『エルフだから』ただその1点だけで殺された。無害どころか清らかで心優しく、最後の時を迎えるその時までも、一切の抵抗を行うそぶりすら見せなかったにも関わらず……だ。

さらに、そんな親子を庇った者たち全てが『敵』として粛正され、貴族の地位を剥奪された。その中には、マチルダの家族も含まれていた。

にも関わらず、マチルダはエルフの母娘を恨むどころか、屋敷の隅に隠れていた幼い娘を救い出し、これまでずっと、自分の妹として可愛がってきた。ハーフエルフの娘も、そんなマチルダを本物の姉として、心から慕っている。

妹を外の世界へ連れ出してやりたい。マチルダが＜マジック・アイテム＞の調査を始めたのは、元はといえば、そんなささやかな願いが切っ掛けだった。装着者の『顔形』を変える＜フェイス・チェンジ＞の効果を持つ道具さえ手に入れば――自分の可愛い妹は、お日様の下で、誰憚ることなく過ごすことができる。当初、彼女はそう考えていたのだ。

だが＜フェイス・チェンジ＞の魔法は、そう簡単に＜アイテム＞に込められるようなシロモノではない。トリステイン魔法学院には、

全身を映すことで、一時的に別の者に変身できるという効果を持つ〈姿鏡〉もあったのだが、大き過ぎて、持ち歩くことなど絶対にできなかった。

そのうち、目的が手段と化し、いつしか『土くれ』のフーケが誕生した。そう――変身のためのアイテム捜索が、家族を養うための方策になってしまったのだ。それは、やがて貴族社会への鬱憤を晴らすものへと変化していった。その結果――現在に至る。

つまり、現時点で『土くれ』の情報網をもってしても〈フェイス・チェンジ〉の効果を持つ〈マジック・アイテム〉は見つかっていないことになる。たとえどこかにあったとしても、それは相当高位の貴族が極秘裏に使用しているだけに過ぎない、超貴重品だろう。

そこで、マチルダは別の手段を使うべく『土くれ』であった頃の伝手を頼ることにした。『裏仕事』の依頼を請け負う者に、コンタクトを取ることによって。

それによって、即座に動けて口が堅く、かつ〈フェイス・チェンジ〉の魔法が使える『裏』の人間を確保できた。マチルダは、ここに一番金をかけた。太公望から受け取った『マニュアル』に、

『人材確保と移動時の予算については、絶対にケチってはいけない。かといって、最初から大金をちらつかせてもいけない。足元を見られるからというよりも、交渉相手におかしな警戒心と、下手な好奇心を持たせてしまうからだ。とにかく目立つ行動を避ける、これを最優先に行動すべし』

そう書かれていたが故に。太公望が信頼を置く敏腕秘書にして、情報斥候たるマチルダは、素直に『マニュアル』に従い『交渉』を

巧く運んだ。よって『裏』を仕切る者も、非常に良い人材を紹介してくれた。

次に、護衛の選択である。これについては、裏ではなく表側で人材を捜し、最も信頼の置けそうな者1名を雇い入れた。メイジではなかったが、逆にメイジだけで周囲を固めてしまうと怪しまれることと、何より『女性』であることが、マチルダの目に叶った。

何故ならば、マチルダの妹が美しすぎるからだ。そんな『女性』の身柄を、荒事を商売にして生きる『男』の傭兵に託すというのは、できるだけ避けたい。マチルダ自身も相当な美人であるのだが、彼女の妹はそれを数段上回る、神々しいといっても過言ではない美麗さを兼ね添えていたから。

移送用の足や、逃避行の際に利用する宿泊所についての目星もつけた。その後の住処についても用意を済ませた。これらの作業を終え、詳細を連絡するために、妹と家族へ向けてフクロウを飛ばしたマチルダは――早速行動に取りかかった。

現在膠着中であるアルビオンの戦争が、いつ激化するか全くわからない。家族たちを脱出させるのは、出来うる限り急ぐに越したことはないのだ。

――そして、現在。

彼女たち『救助チーム』は、遂に目的地へと辿り着いた。村はずれにある、小さな家の扉を、マチルダは小さくノックする。前もって、フクロウに持たせた手紙に書いてあった通りの回数を。

すると、中から同じように扉を叩く音が聞こえてきた。それに被せるように、マチルダが再度ノックをすると、キィ……と、ごく小さな音を立て、静かに扉が開いた。

中から現れたのは、流れる星の河のような金髪を持つ、美しい少女だった。

「お帰りなさい。待っていたわ、姉さん」

3人の女性は周囲を見回し、誰にも見られていないことを確認すると、即座に家の中へと滑り込んだ。そこには、10名を越える子供達が待ち受けていた。全員、背負い袋をかつぎ、目をらんらんと輝かせている。それは、これから行われる『大冒険』について、既に知らされている証であった。

「全員、揃っているわね？」

そう確認するマチルダに、金の髪の少女が頷いた。その少女は、真夜中……しかも部屋の中にいるにも関わらず、頭が半分以上隠れてしまうような帽子を被っていた。

「紹介するわ。この子はティファニア」

「あ、あの、はじめまして。ど、どうか、よろしくお願いします」

ティファニアと呼ばれた少女は、もじもじと恥ずかしげな仕草で、お辞儀をした。どうやら彼女は人見知りをするタイプらしい。マチルダの影に隠れるような位置へ立ち、そっと、見知らぬ女性ふたりに視線を投げかけている。彼女こそが、マチルダの『妹』にしてエルフの血を引く少女であった。

「テファ。このふたりが、手紙に書いておいた『護衛』よ。ふたりとも、相当な腕利きだから安心してちょうだい。時間がないから、手短に自己紹介を頼むわ」

マチルダの言葉に、ふたりの女性は頷いた。

「わたしの名はアニエス。ミス・ロングビルに雇われた傭兵だ。魔法は一切使えないが、剣の腕と……これには、少々自信がある」

そう言って、アニエスと名乗った女性は、笑顔でそっと黒装の中に隠されていた、細い筒状のなにかをティファニアに見せた。それは、彼女の切り札にして、最高の相棒たる『銃』であった。

次いで、もうひとりの女性が名乗りを上げた。

「わたくしは、リュシー。シスター・リュシーと呼んでください。『スクウェア』スペルを扱えるため、この『仕事』に同行させていただくことになりました」

だが、その名乗りを聞いたティファニアは、ひうっ……と、何かに酷く怯えたような声を上げ、マチルダの後ろへ完全に隠れてしまった。

「大丈夫だよ、テファ。彼女は、テファを『異端審問』へかけにきたわけじゃない」

怯えるティファニアを、マチルダは抱き締めて慰めた。そんな彼女に応えるように、シスター・リュシーは静かに頷いた。だが、その顔には、聖職者と呼ぶにはあまりにも不釣り合いな笑みが浮かん

でいた。それは、例えていうならば――燃えるために必要な空気を求め、ひたすらに彷徨う炎。

「ええ。あなたの事情は聞いていますよ。怖がることなどありません。なにしろ、わたくしは『ブリミル教』など、欠片も信じてはいないのですから」

そう言うと、リュシーは懐から杖を取り出した。

「さあ、もう時間がありません。まずは、あなたの『顔』を変えさせていただきます。そのためにこそ、わたくしはここまでやって来たのですから」

そして、シスター・リュシーはティファニアへ向け、ゆっくりとルーンを紡ぎ始めた。それは、もちろん＜フェイス・チェンジ＞と呼ばれる＜水＞と＜風＞のスクウェア・スペルであった。呪文が完成すると同時に、ティファニアの顔と髪の色、そして耳の形は――完全にこれまでとは別人のものへと変化した。

……こうして。ウエストウッドと呼ばれた小さな村は、この日を最後に、誰一人住む者のない廃村と化した。そして、そこにいた最後の住民たちの行方を知る者は、ごく限られた人物――彼女たちの救出作戦を練った太公望と、その資金を全額捻出した、オールド・オスマンのふたりだけとなった。

これは、太公望の仲間を厚遇する姿勢と。オスマン氏による、彼女たちの事情を知るが故の同情。それらが合致した結果、実現した――総額2万5千エキューもの大金が、表と裏で動いた大救出劇である。

だが、そんな救出劇を影から支えた彼らにも、まだ知らされていないことがあった。それは――まるで、金色の尾を引く流れ星のように、白の国から降りていった少女が持っていたもの――現時点では、まだ明かすことのできない重大な秘密にして、本人すら知らない運命について。

既に『帚星』の名を冠した桃色の髪の娘のそれと、全く同じものを背負ったハーフエルフの少女ティファニアは――ここで、一旦舞台裏へと消えてゆくのだが――後に、本来の歴史とは全く違う形で、再び表舞台へと、その姿を現すこととなる。

○●○●○●○●

――黄金の流れ星が、無力な幼子たちを抱えて動きだそうとしていた、ちょうどその時。同国内にある、レコン・キスタ本部にて。

「おおおお！　ミス！　ミス・シェフィールド！　そ、それはまことかね！？」

司教の衣に身を包んだ、３０代そこそこということ以外に、これといって特徴のない痩せぎすの男が、まさしく感に堪えないといった風情で、自分の目の前に立つ女性に向け、喜びの声を、割れんばかりの音量でもって届けていた。

「はい、クロムウェル閣下。これが、その証文にございます」

シェフィールドと呼ばれた女――黒い装束を身に纏い、フードを深く被っているため、その表情はうかがい知れない――が、つ……と、男に一通の便箋を手渡した。

クロムウェルと呼ばれた司教姿の男は、受け取った便箋に目を通し、歓声を上げた。

――男の名は、オリヴァー・クロムウェル。元はロマリアの地方司教職に就いていた彼は、とある事件をきっかけに頭角を現し、現在は反王党貴族連盟『レコン・キスタ』の総帥として、その頂点に君臨している。だが、その輝かしい実績とは裏腹に、彼はどこにでもいるような、貧相な顔立ちの中年男であった。

そして、その立ち居振る舞いも、見た目にそぐわぬものであった。

「トリステインの近衛衛士長が、我が『レコン・キスタ』へ加盟してきたと！　かの国へはそれなりの伝手があったとはいえ、あくまでもあれは裏方。しかし、ワルド子爵は違う！　これは、女王の喉元に杖を突き付けたに等しいことだ。素晴らしい、実に素晴らしいぞ。さすがはミス・シェフィールドだ！」

クロムウェルは、椅子から転げ落ちるようにしてシェフィールドの元へ近寄ると、その手を取った。まるで、貴人のそれに触れるが如く。だが、そんな彼の態度を窘めるように、シェフィールドは首を振った。

「閣下。あなたは、もう……うらぶれた街の小さな酒場で、独りくだを巻いているような、ちっぽけな存在などではないのです。聖地を回復するために立ち上がった神の戦士。レコン・キスタの総帥にして、全てを統べる者なのです。その自覚を持って頂かなければ困りますわ」

その言葉に、クロムウェルは身体をビクリと反応させ、背筋を伸ばした。

「そう……その通りだ、ミス・シェフィールド。忠告感謝する」

クロムウェルの言葉に満足したのか、シェフィールドは満足げな笑みを浮かべた。それは、双月に照らされて、怪しげに輝いていた。

――造られし歴史の舞台は、着々と整いつつあった。

○●○●○●○●

――舞台裏で、黒装束の女参謀が微笑みを浮かべてから、わずか数分後。ガリア王国の首都・リュティスにある小宮殿プチ・トロワの一画では。

「知らないっていうのは、本当に怖いことだわぁ～。そうは思わなくって？」

「クックッ……あァ、オメーの言うとおりだぜ。ッたく、本当に馬鹿な奴らだ」

自室であり、そうでない場所。亜空間と呼ばれる場所に創られた、特別な『部屋』の中。目の前にあるたくさんの『窓』の前で、その『部屋』の創造者である、黒装束に身を包んだ少年と、彼の『パートナー』たる蒼い髪の姫君が、揃って笑い声を上げていた。

現在『窓』の中に映っているのは、とある貴族たちの集まりであった。

「こぉ～んな夜中に、わざわざ詰め所の中で集会とか。自分たち

が、今ここで密談してますって、喧伝しているようなものじゃないのさ！」

そう言って、蒼い髪の姫イザベラが嘲笑すれば。

「おまけに＜サイレント＞もナシときた。どこまで笑わせてくれるんだかなァ」

青い肌の少年、王天君がそれに追随する。

「どこか別の場所から聞かれている、見られているだなんて、欠片も疑ってないんでしょうから。なにしろ、自分たちをとぉっても優秀なメイジだと信じ込んでいる連中ですものねェ。みぃんな、魔法がすっごくお上手な、お貴族サマですから～。おほ！　おほ！　おっほっほ！」

現在、彼らふたりの前で繰り広げられている『舞台劇』。それは『北』と『東薔薇花壇騎士団』のふたつを除く、王国騎士団内部に潜む『隠れシャルロット姫派』と称する騎士たちの、今後の指針を決める上での『密談』であった。

こんな真夜中に、あえてグラン・トロワ内にある衛士詰め所でそれを行えば、事が表沙汰になることなどないだろう。そんな思惑でもって秘密会議を開いたシャルロット姫派貴族達であったのだが……その結果はご覧の通り。このふたりにはそんな計画など、完全に筒抜けであった。

そんな貴族たちが、現在話題にしているのが『異邦人』。つまり……タバサの＜使い魔＞太公望のことである。

現在、ラ・ヴァリエール公爵家で歓待を受けており、来週からゲルマニアのツェルプストー家へ移動する――これらの内容は、ガリア王家へ、タバサの元から詳細な日程も含め報告されている――問題の人物は、正式にガリアの『騎士（シュヴァリエ）』となる際に、配属先となる『東薔薇花壇騎士団』の団長及び『北花壇騎士団』の長たるイザベラとの面通しを行うことになっている。

この面通しの日程は、彼ら一行がゲルマニアから戻った後――来月早々に予定されている。その時に見た『異邦人の態度』次第で、彼らは今後の方針を決定しようという相談をしているのだ。わざわざ、夜半を過ぎた――こんな時間帯に。

「ハハッ、せいぜい頑張んな。コイツらのことだ、どーせ太公望の上っ面だけ見て『人形姫』から『イザベラさま』に乗り換えようって腹づもりなんだろうからなァ」

手元の菓子入れをがさがさと漁りながら、王天君は呟いた。

「魔法的に『無能』なジョゼフ王に仕えるってなぁ癪に障る。だから、ちょびっと魔法が使えて、若ぇから自分たちの言うことをよぉく聞いてくれそうな『オヒメサマ』に対して忠実にお仕えする。そぉんな忠誠に溢れかえりまくった貴族のミナミナサマを、オメーならどう扱うよ？」

そう言を向けてきた王天君に、イザベラはフンと鼻を鳴らして答えた。

「ええ～ッ！　わたし、いらないわぁ！　あ～んな目が利かないどころか、密談場所の選定すらまともにできない連中なんて。あ、いや、ちょっと待って！　ああいうお馬鹿さんたちにしか任せられ

ないようなお仕事を、いかにも重要な任務みたいに見せかけて、放り投げてあげればいいのかしらッ？」

たとえば、最近発生してる新教徒による爆破予告関連の一斉捜査とか。そう呟いたイザベラの声を聞いた王天君は、ゲラゲラと大きな笑い声を上げた。

「おいおい、爆破予告が重要じゃねェとかよぉ！　仮にも一国のお姫さまが言うことかァ？」

「だってぇ、犯人のことなんて、とっくの昔にわかってるんですもの。だからって、捜査をさせなかったら王家の看板に傷が付くわ。仕方がないから、彼らに任せてあげようっていうのよ？　わたしって本ッ当に優しい王女だわ。そうは思わなくって？」

新教徒による爆破予告。これは、なんと父王に申し出て許可を得た上で、イザベラ自身が仕掛けた『ガス抜き』なのである。現在の王室に不満を持つ者や、抑圧されている新教徒の鬱憤を晴らすために、自前の工作員を使って、わざとそれらしい動きをさせているに過ぎない。

実際に、いくつかの家屋や軍施設を爆破してみたりもしているのだが、これらは全て、近日中に廃棄予定の国営施設に限定されており、かつ、そこから出た怪我人とおぼしき者たちも、全てイザベラ配下の工作員。そう、つまり……これは完全な自作自演。この『作られた混乱』を見せることによって、本物の内乱を抑えるという一種の荒技なのだ。

さらに。もしも『工作員』に接触してくる者がいた場合、それはそれで別組織の動きを掴む機会を得ることが可能になるという、一

粒で二度美味しい『策』なのである。

「昔のわたしは、ここにいるのが嫌で堪らなかった。日が差さない裏側。眩しい表舞台になど絶対に出られない、影たる自分が。でも、最近『裏』も悪くないんじゃないか、そう思えてきたのよ」

「まァ、住めば都って言うからなァ。本気でやってみると、案外面白ぇモンだろ？」

「ええ。あなたが教えてくれなかったら、気が付かなかったかもしれないわ」

この『窓』の中にいる、わたしの＜魔法＞しか見ていない愚かな連中と、あなたは根本から違う。そう独りごちたイザベラへ、王天君は、満足げな笑みを返した。

「それにしても……あの連中！　あなたの『弟』を『いらない』とか、よく言えるわよね。知らないって、本当に怖いことだわぁ。巧くやれば、とんでもない逸材が手に入るかもしれない機会だっていうのにねェ！」

――とんでもない逸材が、手に入るかもしれない。

そう……イザベラは、ラグドリアン湖で太公望が発生させた、巨大という言葉などでは、到底表しきれないほどの竜巻を目にしていた。にも関わらず、彼女はその＜力＞について、父王には一切報告をしていなかった。それは、自分の『パートナー』たる王天君に対する遠慮もあったのだが、それ以上に――とある考えを持っていたからである。

そんなイザベラの考えを、まるで読んでいたかのように、王天君が口を開いた。

「なあイザベラよぉ。間違っても、太公望を言いくるめようだなんて思うなよ？　いくらオメーにそっち方面のセンスがあるっつっても、ヤツに対抗するのはまぁだ早すぎンぜぇ？　まぁ、んなこたぁオレが言うまでもなくわかってると思うけどよ」

「忠告ありがと。あたしも、そこまで思い上がってなんかいないわ。なにせ初対面の時、完ッ璧に騙されちゃったんだから！　オーテンクンがここへ来てくれなかったら、今も騙され続けていたはずよ。でも、だからこそ……やりようがあると思うの」

そう言ってニッと笑ったイザベラに、王天君は実に小憎らしい笑顔でもって応えた。

――時は、ひとりの無知な少女を、知る大人へと変貌させつつあった。

第７３話　黄金の帚星、白の国より流れるの事（後書き）

パパラパッパッパラッパー！

イザベラ　は　レベル　が　あがった！
イザベラ　は　あたらしいあそび　を　おぼえた！
イザベラ　は　おうてんくんのじさくじえん　を　みにつけた！

たいへんだ……はやくなんとかしないと……！

え～、今回のテーマは「知らないことの怖さ」そして「流れ星の如くリレーしてゆく後ろ側」でした。お楽しみいただけましたでしょうか。

物語冒頭のシーンは、タバサの冒険第2巻「タバサと軍港」から採用しています。そして！　それが次のリレーである「黄金の帚星」本邦初登場のティファニア嬢を救うためにやってきたメイジ「シスター・リュシー」と、コルベールと浅からぬ因縁を持つ「アニエス」（本作では、現時点でまだ貴族になれていません。タルブ戦役が発生していないからです）登場の呼び水となりました。当然のことながら、彼女たちの運命は、原作ゼロ魔のそれとは大きく異なっていきます。

さらに、シェフィールドさんとクロムウェル閣下。とどめにイザベラさまと王天君のやりとりまで繋がります。歓待の後ろ側で、これだけの人々が動いております。

ああ、もうだめだイザベラさまがどんどんレベルアップしていってるよ！　もちろん、わるいほうこうへ！

さらっとキュルケが特大の爆弾を投下しているのもポイントです。どうするんだ筆者！　これではいつまでたってもしゅうしゅうがつかないぞ！

次回こそ、タバ母治療開始です。引っ張ってすみません。

追記：土くれのフーケ誕生についての話は、完全に筆者の捏造設定です。原作にはございませんのでご注意ください。

２０１１／０７／０１　誤字脱字修正、本文加筆修正

第７４話　雪風と人形、夢幻の中で邂逅す

――１週間にも渡る、ラ・ヴァリエール公爵家での歓待が終了したその日。

公爵家から借り受けた風竜の背に乗り――フォン・ツェルプストー家との関係や国境警備上の都合により、竜籠を出せないことを詫びる公爵に、過分の気遣いに対する感謝の言葉を述べたタバサたち一行は、一路帝政ゲルマニアの地へと向け飛び立とうとしていた。

当初は、コルベールが彼らに同行することと、見知らぬ他国への好奇心から、一緒に連れて行ってくれるようしきりに頼み込んでいた才人であったが、

「あら、あなた。ルイズとふたりっきりになれるチャンスをふいにするの？」

と、いう耳元で囁かれたキュルケのアドバイスにより、ルイズの『護衛』として――例の、太公望がルイズから＜使い魔＞を借りている際に警護役を務めているという設定を生かし――ラ・ヴァリエール公爵家に残ることとなった。

「ゲルマニアへの道中、くれぐれも気をつけるのじゃぞ」

そう言って、タバサたちを見送るオールド・オスマンは、この後ラ・ヴァリエール公爵と国の教育機関に関する重要な話があるとのことで、あと１週間ほど、かの屋敷へ残留することが決まっていた。

「もしも、夏休み中に次の『冒険』が決まったら、必ず連絡をく

れたまえよ」

「あ！　もちろんその時は、是非ぼくも参加させて欲しいな」

「あたしも！　実家にいるから、声をかけてね？　絶対よ！」

ギーシュ、レイナール、モンモランシーの3名は、夏休みの間はそれぞれ実家へ戻ることになっている。公爵家から沢山の土産を持たされた彼らは、この歓待期間中の話題も含め、しばらくの間家族との会話に困ることはないだろう。

「ゲルマニアでの御用がお済みになられたら、是非また当家へお越し下さい」

『次は、体調を万全にした上で、かつ最高の状態で、是非あの戦いの続きを……！』

「まあ、お母さま。そう何度も、我が家へ長逗留をしていただくわけにはいきませんわ。皆さまには、他にも大切な御用がおありになるんですから」

カリーヌ夫人は、太公望へ再会という名の次回挑戦状を叩き付けようとしていたものの、その行動を完全に見抜いて……もとい『掴み取って』いたカトレアによって、前もって阻止されていた。若き頃と相変わらず、彼女は本当に懲りていないのであった。

……そのせいで、ラ・ヴァリエール公爵が、常に自分の懐へと忍び込ませている薬瓶の数が増えたのは、公爵本人だけが知る秘密だ。

いっぽう、今回の歓待総指揮を務めたエレオノールは、そんな妹

に心の中で喝采を浴びせつつ、さりげなく太公望と、再び談話を行う機会の取り付けに成功していた。タバサたち主従が、トリステイン王立図書館への立ち入り許可証を得るための『交渉』を手助けするという理由を持ち出すことによって。

「それでは、タバサ殿。来月末にトリスタニアでお会いしましょう」

「ご配慮、痛み入ります」

その申し出に、感謝の意を述べるタバサ。大の読書好きである彼女が、外国人であるにも関わらず、トリステインの王立図書館に立ち入りが可能になるというのは、本当に喜ばしいことなのである。

太公望にとっても、この『許可証』取得に関する助力の申し出は、情報取得の範囲がさらに広がるという意味で、本当に有り難かった。よって、彼は心からの感謝を持って、エレオノール女史へ礼を返した。

なお、そのエレオノールが、内心で「計画通り！」などと叫び声を上げながら両拳を握り締めていることは、彼女の妹であるカトレアしか知らない極秘事項である。

そう、エレオノールは――この歓待期間中に、完全に『恋』をしてしまっていたのである。『科学』という名の、異国よりもたらされた学問に。よって、それを知る太公望と会話する機会をできるだけ多く持ちたい。彼女がそう考えるのは、自明の理であった。

そんなエレオノールの行動を、本人とカトレア、そして太公望を除く周囲が、全く別の意味に捉えてしまい――渦中の者たちにとっ

て、いろいろと面倒な騒動が持ち上がってくるのだが……この時はまだ、そのようなことは誰も……想像だにしていなかった。

○●○●○●○●

――その翌日、アンスールの月第3週・ユルの曜日。

帝政ゲルマニア――トリステインとの国境沿いにある、フォン・ツェルプストー家の屋敷内の一画に、ベッドの上で静かな寝息を立てている、ひとりの中年女性がいた。

その女性とは、オルレアン公夫人。そう、タバサの母親である。出所不明の『魔法薬』を飲まされ、強制的に心を狂わされてしまった彼女は、現在＜スリープ・クラウド＞の効果によって、深い眠りに落ちていた。

ベッドのすぐ側に置かれたふたつの椅子には、夫人の娘である青髪の少女タバサの＜遍在＞と、オルレアン公家の忠実な従僕ペルスランが腰掛け、患者と――治療に赴くため、彼女の『夢』の中へと旅立っていった者たちが『眠り』から覚めるのを、ただ静かに……神に祈るような面持ちで見守っている。

……そして、オルレアン公夫人の『夢の世界』の内部に構築された『伏義の部屋』では、夫人の治療方針と、その理由について、詳細な医療説明会議（カンファレンス）が開催されていた。

一人掛けのソファーに腰掛けた伏義――現在は、太公望からこの姿になっている為、本編においては以後こちらの名前で記述する――が、正面に展開した大きな『窓』を、参加者――タバサ・キュル

ケ・コルベールの3名に見せながら、患者の状態その他について詳しく解説している。

現在『窓』に映し出されているのは、蔦状の何かによって固く封印を施された、両開きの大扉の前に、同じくそこから細かく枝分かれした蔦のようなもので、全身をくまなく、がっちりと括り付けられている中年女性の姿であった。

「なるほど。たしかに、これは＜火＞系統の者にしかできない仕事ですな」

最初に、この患者の＜解呪＞に関する簡単な説明を受けたコルベールは、その時点で何故＜火＞系統である自分が、＜治療（ヒーリング）＞という本来＜水＞メイジの独壇場に呼ばれたのかを即座に理解した。だが、同じ＜火＞の使い手たるキュルケは、いまいちその『理由』に納得がいっていなかった。

「＜火の刃（ブレイド）＞で、焼き切る必要があるというのは、どうしてですの？」

そんな彼女の質問に答えたのは、太公望ではなくコルベールであった。

「戦場などの治療施設が整っていない場所で、早急に止血が必要となったときに、応急手当として＜火刃＞を使うことがあるんだ。これは、切断面を＜火＞で焼くことによって『血管』の断面を塞ぎ、それ以上の出血を防ぐ効果が見込めるからなのです」

そういうことですよね？　そう確認を取ってきたコルベールに、伏義は頷いた。

「この『蔦』が、奥方の『魂魄』を絡め取り、彼女に繰り返す悪夢を見せ続け、偽りの記憶に縛り付ける元凶たる、いわば『鎖』のようなものだ。一見すると、単純にこれだけを取り除いてしまえば良いように思えるであろう？　ところがだ……！」

そう言って、伏義が『打神鞭』を一振りすると――患者の身体の一部分が大写しになった。それを見た参加者全員が、思わず息を飲んだ。何故ならば、その『蔦』が、タバサの母親を縛り付けているのみならず、その体内に深く食い込んでいたからだ。

「この『薬』の性質の悪さはここにある。魂魄――つまり、患者の本質を構成するモノの奥深くに食い込んで、その記憶を利用することにより、精神を狂わせつつも、生命活動には一切の影響を及ぼさぬように工夫されておる。つまり、彼女をあえて生かさず殺さずの状態に保ち続けておるのだよ」

「一般的な『解除薬』で治すことができなかったのは、このせいなの？」

タバサの問いに、伏義は首を縦に振った。

「この蔦を枯らす専用の効果を持つ『除草薬』ならばともかく、これだけ複雑に絡みついているものを、通常の手段で解きほぐすのは無理であろうの。わしの手持ちの＜技能＞には、こういったモノを一気に＜解除＞する術も存在するのだが……今回の症状に対しては、正直危なすぎて使えないのだ」

「差し支えなければ、その理由を教えていただいてもよろしいですかな？」

眼鏡の位置を直しつつ、質問を飛ばしてきたコルベールに、伏羲は頷いた。

「コルベール殿の疑問はもっともだ。実は、その＜技能＞で強制的に『蔦』を解除してしまうとだな……奥方の身体を『魔法薬』を飲む前の状態にまで『完全回復』してしまうのだ。つまりだ……『薬』を飲まされる直前の状況まで、奥方の『記憶』と『心』を含め、全て元通りの場面にまで巻き戻してしまうのだよ」

それを聞いたタバサの顔から、ざあっと血の気が引いた。あの日――自分の身代わりとなって、ワイングラスの『毒』をあおり、宮殿の床へ倒れ込んだ母親の姿は、今でも彼女の脳裏に強く焼き付いていたからだ。

そんなタバサの様子を見たキュルケは、どうして彼の＜技能＞によって＜完全解呪＞してはいけないのかを、即座に悟った。

「なるほどね。つまり、その時の恐怖とか思い出がいっきに蘇ることによって、タバサのお母様の心を、根本から破壊してしまうかもしれない。だから危なくて使えない……ってことでいいのかしら？」

「そういうことだ。心というものは、それほどに繊細なものなのだよ」

キュルケの解答に頷きつつ、伏羲は先を続けた。

「さらに言うとだな、あの蔦は、まるで『血管』のように、奥方の記憶を『扉』の奥深くまで流し、巡らせている。よって、焼き塞

ぐ効果を持つ＜火系統＞以外の＜刃＞で無理矢理切断してしまうと、その切り口から、奥方の持つ『記憶』が大量に外へと漏れ出してしまい……これまた心を破壊してしまう危険性があるのだ」

＜刃（ブレイド）＞の魔法は、使用者の＜系統＞によって、刀身に纏う＜基本属性＞が変わる。あえて属性を纏わせずに＜力の刃＞だけにして戦う者もいるが、基本は自分に合った＜刃＞をそのまま出すほうが＜精神力＞の消耗を抑えられるのだ。

そういう意味では、ルイズに＜ブレイド＞の魔法を使わせることによって、彼女の＜系統＞を完全に絞れたかもしれないのだが……失敗による＜爆発＞の危険があることと、＜虚無の刃＞が一体どんなものであるのか全く不明であった為、オスマン氏との話し合いの結果、ルイズに＜ブレイド＞を使わせるのは禁止したという裏事情がある。

「かといって、普通の小刀を持ち込んで、熱して使うというわけにもいかぬ。この大事に、慣れない道具を用いるのは危険であるし、なにより、ここは『心』と＜精神力＞つまり、手に持っている、それが可能であるといったような＜イメージ＞を強く描き出す能力。それこそが最も重要な『夢』の世界であるからだ」

ここまで語った伏義は、ふうっと大きなため息を吐いた。

「本来であれば＜魔法的事象＞を断つ剣『デルフリンガー』の＜使い手＞たる才人にも、この場へ同行してもらいたかったのだが……ルイズの護衛や、その他諸々の事情があるため、依頼することができなかった」

ここ『夢』の世界は、強い『心』のイメージを具現化する＜フィ

ールド＞でもある。よって、心の弱い者が下手に関わろうとすると、最悪の場合、心や記憶だけではなく、魂魄ごと壊れてしまう危険性がある。

そのため、伏義は現在参加している者たちや『魂を持つ剣』デルフリンガーはともかく、この＜壊れかけた夢＞の世界に、精神的逆境に弱い才人を連れてくることに対して、危険を感じてしまったのだ。

「よって、この切り離し作業に関しては優秀な＜火＞系統の使い手たるコルベール殿と、キュルケのふたりに頼みたいのだ。事ここに至るまで詳しい事情を説明できず、大変申し訳なかった」

そう言って頭を下げた伏義に対し、コルベールとキュルケは、気にするなといわんばかりの笑顔を見せ……強く頷いた。

「わたしは、何をすればいい？」

自分も、母を助けるために何かがしたい。そんな切なる思いが込められたタバサの声に、伏義は真剣な顔で答えた。

「わしは、彼らに対してどの『蔦』を、いかにして切ればよいのかを伝える『指示役』に回らねばならぬので、タバサは、ふたりが効率よく切断作業ができるよう、彼らの側について補佐してやってほしい。これは、相当に根気が必要な作業であるので、それを手伝ってくれる人間が絶対に必要なのだ」

「わかった」

そして、伏義は再び手元の『窓』を見た。そこには、以前の診察

時に記録したデータが保存されている。それを、現在映し出されている画像と重ねると――あきらかに『蔦』の本数が増えているのが見て取れた。

「この『蔦』は、奥方の『記憶』を象徴するものなのだ。よって、新しい記憶が増えれば増えるだけ、蔦の本数も増えてゆく。できれば、今日中に全て魂魄から切り離したい」

伏羲の言葉に、全員が頷いた。

「それと……これは、今ここにいる者たちならば、既に充分承知しておることとは思うが、念のため言っておく。治療中、あるいは治療前に、なんらかの妨害が入る可能性が高い。ここは『夢』という他者が支配する〈場（フィールド）〉だ。何が起こっても不思議ではないので、決して警戒を怠らぬよう頼む」

そう告げた伏羲の言葉へ、コルベールがさらに補足すべく口を開いた。

「いいや……むしろ、絶対に妨害が入る。そのぐらいの心づもりで事に当たったほうがよいでしょうな」

頼もしい先達の言葉に、女子生徒ふたりも了解したとばかりに首を縦に振る。

「あの扉の奥については、開けてみるまで何があるかわからぬ。だが、間違いなく『薬』の根幹となっているモノが居座っておることは確かであろう。総員、最後まで決して油断することのないよう、常に周囲を警戒の上、行動せよ。また、何らかの異常を発見した場合は、即座にわしへ知らせること。以上！」

伏羲の号令に、全員が了承の意を表明し――そして、彼らは患者の処へ向かった。

○●○●○●○●

――それから数分後。

幸いなことに、タバサの母が捕らわれている場所まで何事もなく到達することができた。伏羲は、手元にいくつかの『窓』を展開すると、コルベールとキュルケのふたりに、早速指示を与える。

もしも、この場面を才人が見ていたとしたならば。彼らをして、

「医療ドラマに出てくる、主治医の先生と執刀医みたいだ」

そう評したかもしれない。

実際、彼らが行っている＜治療＞は、心臓（オペ）外科手術のようであった。魂魄を傷付けないよう、杖の先に極細の＜炎刃＞を出現させて、患部を慎重に切り進めるコルベールが執刀医である。

「ミス・ツェルプストー。右後方部位『蔦』の細部切り離しが完了した。同箇所残りの範囲については、君の＜炎＞で焼いてくれたまえ。くれぐれも慎重に」

「承知しました、ミスタ・コルベール」

そんな彼に付き従うように作業を進めているキュルケが、執刀助

手たる存在だ。

「コルベール殿。次は、その隣の『蔦』を切り離してくれ」

「今、ミスタが指差している、この『蔦』ですな？」

「そうだ。食い込みが先程の箇所より酷い。難しい箇所だが、やれそうか？」

「任せてください。こういう細かい作業は、得意中の得意ですからな」

手元の『モニター兼拡大鏡』を見ながら、彼らに指示を飛ばす伏義が主治医兼指導医たる存在である。

いっぽう、タバサはというと。彼らが切り離した『蔦』を部屋の隅に片付けつつ、周囲の警戒を行っていたのだが……少々手持ち無沙汰になっていたことは否めない。＜遍在＞が出せるぶん、余計にそう感じてしまうのだろう。

他にも、わたしにできることはないのだろうか？　そう考えたタバサは、周囲警戒の手を緩めることなく、作業を行っているコルベールたちを詳細に観察した。彼らは非常に細かい手業を要求される上に、長時間ずっと＜火＞を使っているせいか、全身がぐっしょりと汗に濡れている。

それを見たタバサは、はたと思いついた。今、自分にできることを。

「タイコーボー。ふたりの身体を、魔法で冷やしてあげてもいい

？」

そのタバサの言葉に、伏義はもちろんのこと、コルベールとキュルケも破顔した。

「もちろんだ。ただし、彼らの手元を狂わせないよう、そっとだぞ」

「わかった」

その声と共に、執刀医たちの元へ、冷たい＜風＞がぶわっと吹き込んだ。小さな雪粒が混じったその風は、彼らの火照った身体を適度に冷やしてゆく。

「おおっ、これは素晴らしい！」「すっごく涼しいわ！　ありがと、タバサ」

ふたりから飛んできた感謝の声に、タバサはぽつりと……喜びの感情を込めて呟いた。

「これが、いちばん効率がいいから」

涼しい風に煽られ、作業ははかどった。特に、コルベールの＜炎刃＞が冴え渡ってきた。＜火＞を実戦で扱うための勘が戻ってきたこともあるのだろう。だが、それ以上に。

「私の＜火＞に、こんな使い道があるとは！　やはり、オールド・オスマンが指し示してくれた『道』は正しかった。そして、ミスタの『切り開く』という言葉も」

このような変則的な使い方をする機会など、変わり映えのしない日常生活の中では、まずありえないことだろう。だが、それでも。再び＜火＞の担い手として立ち上がったばかりの『炎蛇』のコルベールの背中を押す＜力＞となるには、充分であった。

「壊すことしかできなかった私の＜火＞が、まさかこんな風に…ひとを癒やすための役に立てるとは、思わなかった！」

『蔦』を焼き切るたびに、患者の顔色が目に見えて良くなっていくのだ。もっと早く、このひとを助け出してやりたい。コルベールの手技は、さらに鋭く輝きを放ち始めた。

「あたしも、ずっと＜火＞は破壊と情熱の象徴だと信じていましたわ。でも、使い方次第でこんなふうにひとを助けることもできるんだって、知ることができました」

キュルケの言葉に、コルベールは実に嬉しそうな声で同意した。そんな彼の貌からは、以前垣間見えた暗い影は、跡形もなく消え失せていた。

「そうだな、ミス・ツェルプストー。君の言う通りだ。だから、私はもっと学び続けようと思う。＜火＞には、破壊以外にもたくさんの可能性が詰まっていることが、改めて証明されたのだから」

「ええ、わたしも、これからはもっと真面目に授業を受けようと思います。先生に教えていただきたいことも、たくさんありますし」

「そうか、そうかッ！　君の学問に対する『情熱』に＜火＞がついたのだね。実に素晴らしい！　私が知っていることでよければ、いつでも教えてあげよう。熱心な生徒は、大歓迎だ！」

コルベールの答えに、キュルケは妖艶かつ意味ありげな笑みを向けた。それを見たタバサは、親友の心に別の＜火＞が灯ったことを察したのだが……小さく微笑んだだけで、何も言うことはなかった。

……いっぽう『炎の女王』に目を付けられたコルベールのほうはというと。

そんな彼女たちの心の移り変わりには一切気付かず、『夢』へ持ち込んでいたスペア――2本目の杖を併用し、なんと二刀流で＜炎刃＞を扱い始めた。

その杖捌き……もとい＜炎刃＞捌きは、まるで舞踏の名人が行う、煌びやかな剣舞のようであった。もともと、繊細な手業を要求される各種科学実験を、それこそ毎日のように繰り返していた『発明家』コルベールにとって、こういった細かい作業は、まさしく独壇場だといっても差し支えないだろう。

水を得た魚……もとい酸素を得た炎の如く、彼の手とその指先は、文字通り踊り狂った。指示をする伏義など、それを見て、

「ぬおおおッ！　回転が早すぎて、次の径路指定が追いつかぬわッ！　これでは『炎蛇』ではなく『炎刃（エンジン）』のコルベールではないかッ！」

などと、慌てふためきながらモニタと格闘している程だ。

それから。ごく稀に、極限の集中による疲れから、キュルケの手元が狂いそうになることもあったが、その度に他の全員がフォローに周り、結果――計8時間ほどで、魂魄の切り離し手術は無事、成

功した。

○●○●○●○●

……そして。

「皆、ご苦労であった。これにて魂魄の摘出作業は完了である。魂の癒着……つまり、再び『扉』に繋がれることのないよう、いったん『わしの部屋』へ移送の上、保護する。そこで全員一旦休憩だ」

長時間に渡る作業のため、疲れ切った――だが、達成感に溢れた『治療チーム』全員の顔を見渡しながらそう宣言した伏義が、切り離したオルレアン公夫人の魂魄を『自分の部屋』へ運ぼうとした途端。突如夫人の側に現れた闖入者によって、その行動を遮られてしまった。

その闖入者は――ふたつの＜光＞であった。

片方は、夫人の魂魄、その手元から飛び出した……冷たく青い＜光＞。

もう片方は、切り離して隅に片付けてあった『蔦』の中から現れた、暖かい＜光＞。

それらは、いつしか人間の姿に変わり――ふたりの小さな少女となった。

ひとりは、赤い上衣と純白の乗馬ズボンを身につけた、年の頃は１１～１２歳程度の幼い娘。短く切り揃えた青い髪と、凍り付いた

湖の如き色の瞳から、真冬の冷気のように刺し込んでくる視線を、侵入者たちに向けてきた。

もうひとりは、傍らの少女とは真逆。真っ白な上衣と纏い、深紅の乗馬ズボンを履き、腰まで届く青い髪を揺らしている。だが、その目に宿る光は、純真無垢といって差し支えない輝き。こちらは、思いも寄らぬ来客に、好奇心を抑えきれないといった風情で、オルレアン公夫人の側にちょこんと座り込んでいる。

ふたりの少女のうちのひとりが、夫人の上に覆い被さるようにして、伏義たち全員が近寄ろうとするのを遮った。

「このひとをつれていかないで！　いじめないで！」

全身に冷気を纏う少女がそう叫ぶと、先程まで陽光のような笑顔を振りまいていた少女が、ふいにその顔を曇らせた。だが、その口が開かれることはなかった。代わりに、くいっと首をかしげて、隣にいる少女を見つめる。

「このひとたちは、きっとおかあさまをいじめにきたのよ」

真冬の冷気を纏った少女がそう言うと、陽光のような笑みを浮かべていた白衣の少女も、一緒になって伏義たち一行を睨み付けてきた。改めてよく見ると、ふたりの顔は全くといってよいほど同じに見えた。そう……彼女たちは、まさしく双子の姉妹といって差し支えない程にそっくりであった。

この思いも寄らぬ闖入者に、さすがの伏義も困惑した。彼女たちから悪意の類は一切感じられない。かといって、この＜フィールド＞を支配する『空間使い』というわけでもなさそうだ。それに……

この少女たちの顔には、見覚えがあった。それもそのはずである。

「この子たち、ひょっとして……昔のタバサ？」

キュルケの声に、全員が改めて少女たちの顔を見た。確かに、タバサの姉妹――いや、本人と言っても過言ではないほどに、彼女たちの顔立ちはよく似ていた。彼女たちに眼鏡をかけさせて並べたら、間違いなくタバサの血縁者であると判断されるであろう。

「なるほど、この娘たちは奥方の『過ぎ去りし記憶の欠片』であるのか！？　いや、ちょっと違うな。これは、ひょっとすると……？」

闖入者を分析していた伏義の横から、一歩前へと進み出た者がいた。それは、タバサであった。

「だめッ！　つれていっちゃだめ！」

ふたつの瞳に、涙をいっぱいに溜めた『冬風』の少女は、大声でそう叫んだ。『陽光』の少女も、声こそ上げないものの、全身を震わせながら、ついには夫人を庇うように身体を投げ出した。いや、実際庇っているのであろう。

タバサは、もちろんその少女たちの姿を見知っていた。いや――ある程度、感覚と過去の記憶によって、理解をしていたといったほうが正しいだろう。だから、タバサは伏義たちを静かに制すると、一歩前へ進み、少女ふたりに声をかけた。

「そこをどいて、シャルロット。わたしたちは、母さまを助けに来たの」

その名前を聞いた少女たちは、目を大きく見開くと、口を開いた。

「あなたのおなまえは？」

「タバサ」

「うそ。だって、それはわたしの……ほんとうのなまえなのよ？」

今度は、それを聞いたタバサの両目が見開かれた。そうか、この子たちは！　母の魂を守ろうとしている者たちの正体に気が付いたタバサは、振り返って仲間たちを視線で制すると……改めて彼女たちへと向き直り、ふたりに聞かせるに相応しい回答を提示した。

「知ってる。わたしたちは、名前を取り替えっこしたから」

「じゃあ、あなたはほんとうのシャルロットなの？」

「そう」

――人形には、本当に魂が宿るのだ。タバサは、心の内でそう呟いた。

かつて、太公望と共に任務で訪れたガリアの山村。そこは、人形たちの住まう巨大な箱庭であった。その村を出るときに、自分の『パートナー』が呟いた言葉。あそこに宿る魂魄は、全て本物であったよ――その言葉が、鮮やかにタバサの脳裏へと蘇る。

『魔法薬』によって狂わされた母が、娘だと思い込んで守り続けた者。今、わたしの目の前にいるのは……彼女が、かつて自分の本

当の名前を託した相手。フェルト生地で造られた、手のひらほどの小さな人形。その『魂』なのだ。

「ありがとう。あなたは、ずっとこうして母さまを守ってくれていたのね」

今から3年ほど前――当時まだ『ドット』メイジであったシャルロット姫に下った『討伐任務』。それは、実質処刑宣告に等しいほどに厳しく、そして険しいものだった。だが、その逆境を跳ね返したことが、ただ泣くことしかできなかった無力な少女に『雪風』を纏わせた。

その『雪風』を畏れた従姉妹姫イザベラの手によって、新たな役職『騎士（シュヴァリエ）』の地位を与えらた時。『北花壇騎士（ノールバルテル）』と一員となったシャルロット姫は、その名前を捨てろと迫られた。お前は、もう王族ではないのだからと。

そこで彼女は、狂わされた母が掻き抱いていた『人形』の名を名乗ろうと決めた。何故なら、母はその人形を自分だと信じて疑わず、ひたすらに守ろうとしてくれていたから。自分の『心』は、あの人形と共に在るのだ。そう思い込むことによって、全ての感情を――己の内側に封印することを決意したのだ。

そして。名前だけではなく、大公姫の地位をも剥奪された12歳の少女は、感情のない『人形姫』タバサになった。過去の幸福な思い出を、自分の本当の名前と共に全て――その小さな人形『シャルロット』に託して。

『シャルロット』は、あのときわたしが願った通りに、母と共に在ってくれたのだ。封印した過去を思い出したタバサの瞳から、一

筋の涙が零れて落ちた。

そんなタバサの姿に驚いたのであろう『シャルロット』と、もうひとりの少女は、立ち上がってととと……と、小走りに彼女の元へ走り寄り、顔を覗き込んで、なんと袂でタバサの涙を拭いた。

「なかないで。ねえ、ほんとうに？　ほんとうのシャルロットなの？」

「どうすれば、信じてもらえる？」

その問いに、冬風の少女――小さな人形の魂は、質問を返すことによって答えた。

「わたしは、なあに？」

「母さまが買ってくれた、可愛いフェルト製のお人形」

「つぎのしつもん。わたしのからだは、いまどこにいるの？」

「オルレアン領のお屋敷。『新しい母さま』を守ってくれている」

「さいごのしつもん。ほんとうに、おかあさまをたすけてくれる？」

「絶対に救い出す」

その答えに『シャルロット』は心から満足げな微笑みを浮かべ、立ち上がった。

「なら、わたしはタバサのなかにもどる。あなたも、シャルロットにもどるのよ」

そう呟いた『人形』は、タバサの元へ駆け寄ると、その胸目掛けて飛び込んできた。その柔らかな身体をしっかりと受け止めたタバサは、彼女をぎゅっと抱き締めた。

すると――『人形』の魂は、再び笑顔を見せ、そして＜光＞の粒となり、半分がタバサの中へと消えてゆき――残りの半分は、遙か天上へと飛び去っていった。その去りゆく姿は、まるで流れ星のようであった。

「ありがとう……タバサ」

自分の中に『感情』を戻し、オルレアン公家の屋敷に在る『本体』に戻ってゆく『人形』に、タバサ――遂に『シャルロット姫』としての心を取り戻した少女は、ただ静かに礼の言葉を述べた。

そして。残るもうひとりの少女は、そんなふたりを寂しげに見つめると、こう呟いた。

「おねえさま、おねがい。おかあさまをたすけてあげてね」

その呟き声に、タバサは驚いた。何故ならば、この少女は自分自身――かつて捨て去った、シャルロット姫の記憶の残滓だと思い込んでいたからだ。だが、彼女は確かに自分をこう呼んだ。

「おねえさま」

……と。

「あなたは、いったい誰?」

震える声で問うたタバサへ、陽光の少女は悲しげな眼差しを向けると……再び＜光＞となり、オルレアン公夫人の中へと消えていった。

○●○●○●○●

――それから、約1時間後。

蔦を切り離した扉から薬効が漏れ出さぬよう、厳重な封印を施したのちに、改めてタバサの母親の魂魄を、安全地帯である『自分の部屋』に用意したベッドへと寝かせた伏義は、＜外＞で待っている従僕ペルスランへ＜遍在＞を通して治療状況の報告するようタバサへ告げると、残りの2名へ睡眠を取るよう申し伝えた。

「夢の中で眠るだなんて、なんだか不思議な気分だわ」

などと言っていたキュルケであったが、参加者全員の中で最も早く眠りに落ちた。部屋に戻った当初は、新たに提供された『ベッド』その他に興味津々といった風情であったコルベールも、さすがに疲れには勝てなかったのであろう。自分用に用意された寝床に入ってから、早々に寝息を立て始めた。

そしてタバサの治療経過報告が済んだ後、念のため、先程の少女ふたりに関する最終確認を行うことにした。扉を開けた後、同じような乱入者によって作業を妨害されてしまっては、非常に面倒だからである。たとえ、敵対の意志がないにしても……だ。

「片方は、間違いなく例の『人形のタバサ』に宿った魂魄の片割れであった。おそらくだが、タバサが自分の『心』と『感情』を封印しようと決意したとき、その強い＜意志＞によって魂魄の一部が『分割』され、新たな魂となって、人形に乗り移ったのであろう」

だが……と、伏義は先程見た『陽光』の少女を『窓』に映し出す。

「問題は、彼女だ」

その言葉に、タバサも頷いた。『人形』の魂でも、自分の記憶の残滓でもないのであれば、あの寂しげな陽光の少女は、果たして何者なのであろうか。だが、タバサが過去の記憶の奥底まで振り返ってみても、全く覚えがなかった。

「少なくとも、わたしは知らない」

「そうか。奥方の『記憶の欠片』から現れたこと、そして魂魄の色から察するに、奥方とタバサに非常に近しい存在であることは間違いない。念のため聞くが、おぬしには姉妹……あるいは、イザベラ姫以外にも従姉妹がいたりするのかのう？」

伏義の問いに、タバサは静かに首を横に振った。

「ふぅむ……わしと王天君のように、タバサの『魂の双子』というわけでもなさそうだのう。何故ならば、現時点までの分析結果から鑑みるに、彼女はおぬしに非常に近しい存在ではあるものの、明らかに別個の『魂魄』を持つものであるからだ」

それを聞いたタバサは、首をかしげながら呟いた。

「もしかすると、母さまの親戚なのかもしれない」

「うむ、その可能性は充分あるのう。敵対者でないことは確かなようであるし、彼女の詳細については、奥方が回復されてから、改めて尋ねてみればよかろう」

伏羲の言葉に、タバサは頷いた。確かに彼の言う通りだ、いま最も優先すべきことは、母さまを完全に治すこと。それに集中しよう。

そして、彼らは夢の中で休息に入った。さらなる戦いに備える為に。

第７４話　雪風と人形、夢幻の中で邂逅す（後書き）

タバサの母治療ミッション第１段をお送り致しましたが、如何でしたでしょうか？　Ｄｒ．Ｋ大活躍（コルベール）の段。

何故＜火＞系統が治療に携わる必要があったのか、実はこんな理由からでした。できれば才人を連れてきたかったのも、太極図で解除しなかったのも、こういった事情（トラウマのフラッシュバックを予防するため）があったためです。

ちなみに今回の「幼いタバサ」が着ている衣装は、タバサの冒険第３巻「タバサの誕生」にて、はじめての討伐任務時、及びシャルロットの名を捨てたときに身につけていた服です。

何故２段分割したのかは、次のお話をご覧いただければたぶんご理解いただけると思いますので、ここでは省きます。

さて！　既に活動報告をご覧くださっているかたはご存じかもしれませんが……なんと！　この『雪風と風の旅人』の表紙風イラストを頂いてしまいました！　いやはや、ありがたいことです。おかげさまでテンションがＭＡＸまで溜まりました！

「クロスＳＳ」（ハチモク様・画）

ｈｔｔｐ：／／ｓｅｉｇａ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｓｅｉｇａ／ｉｍ１２３８５１６？ｔｒａｃｋ＝ｏｗｎ

と、いうわけでテンションだだ上がり状態で次話がりがり執筆中でございます！　なお、治療は次回で終了となる予定でございます。

ではまた！

２０１１／０７／０３　１９：００　本文加筆修正（イメージ、薬効封印など）
２０１１／０８／２８　２２：３０　誤字・脱字修正、一部構成の修正

第７５話　雪風、物語の外に見出すの事

――オルレアン公夫人の魂魄病巣切除成功から、１０時間ほど後。

夢の中で充分な休息をとった一行は、再び例の大扉の前に立っていた。

「おそらくだが、扉の奥にはこの＜夢（フィールド）＞を支配する存在が居座っておる。よって、わしらを近づけぬよう、何らかの罠が仕掛けられているのは間違いない。よいか？　総員、絶対に気を抜くでないぞ」

伏義の言葉に、全員が杖を抜くことによって応えた。

それを確認した伏義は、前日に施した封印を解くべく『打神鞭』を一振りした。昨夜の手術が終わった後、伏義は『空間宝貝』を使うことによって、薬効が表へと漏れ出さないよう、空間を隔てることによって扉を封印していたのだ。

両開きの大扉に、鍵はかかっていなかった。

伏義とタバサ、コルベールとキュルケがそれぞれ左右に分かれ、中から何かが飛び出してきた場合にすぐ対処できるよう、身構える。

「我の行く手を阻む、大扉よ……その封印を解き放て」

全員が位置についたことを確認したタバサが＜念力＞で強く押すと、大扉はギィィィイ……ッと、軋んだような音を立てながら開いた。

開いた扉の奥に見えた光景は――タバサにとって、覚えのある場所だった。

長く続く廊下、そしてその両脇に複数並ぶ、片開きの扉。そう、ここはタバサの実家――つまり旧オルレアン公邸を、在りし日の状態そのままに再現した、まさしく『夢の世界』なのであった。

今、自分たちが立っているのは――いつもならば、従僕のペルスランが笑顔で迎えてくれる玄関口の前。だが……当然のことながら、彼は現在ここには居ない。夢の外で、タバサたちが無事帰ってくるのを、祈りながら……ひたすらに待ち続けてくれている。

タバサは、自分の身長よりも長く、節くれ立った木の杖を右手に下げ、大きく深呼吸した。そうでもしなければ、心の内から溢れ出てくる怒りの感情で、どうにかなってしまいそうだったから。

「この奥は、わたしが子供の頃に住んでいた屋敷そのもののように思われる。だとすると、目の前の廊下をまっすぐ行った突き当たり、横の通路いちばん右奥にある部屋が最も怪しい。そこが母さまの寝室だから」

タバサの言葉に、伏義が呟いた。

「ふむ、見覚えがあると思ったら、やはりそうか。ならば、案内を頼んでもよいか？」

「わかった」

伏義の言葉に、タバサは即答した。その返事を聞いたコルベールが、ふいに目を細めると、注意深く周囲を観察し、その後ぎりぎり

全員に届く程度の小声で報告した。

「通路左右の扉の奥から、複数の気配を感じます。ただし、人間のものではありません。どうやら、守護者（ガーディアン）の類が多数配置されているようですぞ」

コルベールからの報告を受け、伏義がタバサへ確認を取る。

「タバサよ、あれらの扉の奥には、別の場所への通路があったりするか？」

「無い。わたしの記憶通りなら、全て何らかの部屋への入口になっている」

「わかった。ただし、あくまで夢の中であるため、別個に通路が存在する……つまり、その先から敵が現れることも想定した上で行動したほうがよかろう。総員、作戦会議のため一旦後ろへ引くぞ。ただし、中が見えるよう扉は半分だけ開けた状態でな」

「了解」「わかった」「わかったわ」

玄関を出て、入口扉外まで戻った４人＋α（タバサの遍在）は、それぞれ前１・中３・後１の隊列――前衛にスノウ（遍在）、中軸にコルベール・キュルケ・タバサチーム、後衛役は伏義という編成――を組んだ。

その上で、改めて『玄関』周辺を警戒しつつ、タバサから内部の基本構造を聞き取った上で、伏義はできるだけ小さな声で全員に指示を伝える。

「念のため注意しておく。狭い通路や小部屋などで、爆発を伴う性質がある魔法……つまり＜フレイム・ボール＞のような殲滅系の魔法を使うのは危険だ。よって、移動中は＜風の鞭＞＜風の刃＞＜氷の槍＞＜氷の矢＞＜炎の蛇＞＜炎の鞭＞＜炎の刃＞以外の魔法は、その使用を厳禁とする。ここまではよいか？」

全員から了承の返答を受けた伏義は、さらに続けた。

「ただし、廊下左右に並ぶ片扉の奥。つまり、部屋の中に大量の敵が潜んでいる、または例の『蔦』のようなものがあった場合、即座に＜火＞の魔法を撃ち込んで、焼き払ってもらいたい」

キュルケとコルベールの目を見て、伏義は念を押すように言葉を紡いだ。

「あの扉の奥は独立した『病巣』であるので、奥方の身体や心に悪影響はない。よって、一切の遠慮はいらぬ。ただし、爆燃気流（バックドラフト）等が生じる危険性があるため、実行前には必ず合図をするように。この作業については、キュルケとコルベール殿に担当してもらう」

その指示に、コルベールが補足意見を述べた。

「ならば、着火を含む室内殲滅の指揮については、この私が執りましょう。そのほうが燃焼規模や範囲の調整がしやすいですから」

そう告げたコルベールの声には、一切の迷いがなかった。昨日の＜炎刃＞を用いた手術経験が、彼を＜火＞の使い手として、完全に立ち直らせることに成功していた。

そして、それを聞いた伏義は心から安堵したように言った。

「それは助かる！　ならば、そちらについては完全に一任する。そもそも＜火＞に関しては、コルベール殿のほうが、わしなどよりも遙かに巧く扱えるからのう。キュルケは、彼の指示に従って動いてくれ」

「わかりましたわ。先生、よろしくお願いします」

キュルケの返事に、コルベールは力強く頷いた。

「それでは最後の確認をするぞ。室内の殲滅はコルベール殿とキュルケが担当し、廊下に現れた敵については、基本的にわしとタバサが受け持つ。なお、移動中並びに殲滅中の防衛、つまり＜盾＞の展開は、特別な指示がない限りわしに任せてくれ。スノウは索敵及び周囲警戒、タバサは攻撃のみに集中するのだ」

「了解した。あなたの＜盾＞が、全員の中で最も強固。そのほうがいい」

タバサの言葉に、全員が同意を示す。その後、質疑応答などを行ってさらに細かい点を詰めた伏義は、最終確認へと移った。

「ただし、あくまでこれらは基本であって、緊急時はその限りではないからな。総員！　いざという時は夢の外へ待避、つまり目覚めることも念頭に置いて行動してくれ。ここでの『死』は、最悪の場合、心の消滅に繋がる。よいな？　夢の中だからといって、絶対に無茶なことをしてはならぬぞ」

この伏義からの忠告に、全員が頷いた。

「よし、では総員突入ッ！」

伏羲の号令で、特殊潜入『治療班』は一斉に行動を開始した。

○●○●○●○●

全員が、慎重に屋敷の奥へと続く廊下を歩いてゆくと――すぐに、その時は訪れた。左右の扉が全て一斉に開き、中から多数の＜木枝の矢（ブランチ）＞が先頭を進む『スノウ』目掛けて、勢いよく飛来してきた。

しかし、既に伏羲が展開していた＜風の盾＞によって、それら＜木矢＞は全て明後日の方向へと逸れていった。と、その矢がまるで挨拶代わりであったかのように、部屋の中から不格好な兵士たちがぞろぞろと姿を現した。それは、樹木でできた魔法人形――ガーゴイルであった。

もしも、ここを訪れたのが並のメイジであったなら、その不気味な姿に腰を抜かすか、あるいは一度に襲いかかってきた十数体の木製ガーゴイルが持つ棍棒のような腕によって、あっという間に昏倒させられていたかもしれない。

だが、今ここにいるのは。トリステイン魔法学院――いや、国内でもトップクラスの使い手と呼んで差し支えない者たちである。伏義が展開した＜風の鞭＞１０本が、あっという間にガーゴイルたちをはじき飛ばすと、タバサがそこへ２０本の＜氷の矢＞でもって追撃。全てを射貫き、ばらばらにした。

「前方１時方向扉内、炎による殲滅作戦を行う。ミス・ツェルプストー！　＜フレイム・ボール＞準備！　着弾目標、指定の扉奥。

現在位置から5メイル先！」

「了解ッ！」

コルベールの指示で、キュルケが呪文の詠唱準備に入る。いっぽうのコルベールは、なんと懐から取り出した手鏡に、目標とした室内の奥を映し出し――それと同時にキュルケが構える姿を確認しながら＜錬金＞で揮発油を精製している。

これを目撃したタバサは、手鏡でこんなことができたのか！　と、素直に感心すると同時に、コルベールに対する内心の評価を大幅に上昇させた。やはり彼は、自分よりも遙かに経験豊富な軍人であったのだ、と。

「＜フレイム・ボール＞発射5秒前……4……3……2……1……今ッ！」

キュルケが放った＜フレイム・ボール＞が部屋へ飛んでいったのとほぼ同時に、伏義が全員の身体を＜風の盾＞で防御する。途端に響き渡る轟音。燃え上がるガーゴイル達。

「＜火球＞着弾確認！　爆燃気流、及び延焼の可能性、極めて軽微！　残敵有り、2体出てきます！」

目が熱やその他のものでやられぬよう、鏡を使って慎重に扉内部を確認していたコルベールの声と同時に、火のついたガーゴイルが2体、ふらふらとよろめきながら出てきたが、双方共にタバサの＜風の刃＞によって切り裂かれ、ぱらぱらと床に舞い散った。

「正面1時方位・室内の敵、全滅。また、内部の鎮火を確認しま

した。火炎治療班、次に備え待機します」

「了解した。総員、陣形を立て直せ！　周囲確認の後、前方へ移動する！」

「了解！」

号令と同時に、即座に陣形を立て直す一同。見事なまでに息ぴったりである。

「次！　正面１１時方向扉奥、殲滅準備にかかる！　ミス・ツェルプストー、何か問題はないか！？」

「大丈夫！　まだ１０発以上……いえ、１４発撃てますわ！」

「残弾数了解した！　大変よろしい。では、行きますぞ！」

こんな調子で、ずんずんと廊下を進んでゆく『治療班』。

……どう見ても屋内殲滅部隊以外の何者でもないのだが、これは正真正銘、誰がなんと言おうと『治療班』なのである。だが、現在の彼らの進軍状況を見たら、並の使い手ならば対峙はおろか、側に近寄ろうなどとは間違っても思わないであろう。

ガリア王国の裏組織『北花壇騎士団』闇の騎士七号『雪風』のタバサ。

夢の中で＜力＞を取り戻している、地球の『始祖』伏義の半身『軍師』太公望。

元トリステイン王国＜特殊魔法実験小隊＞指揮官『炎蛇』のコルベール。

水精霊団が誇る最大火力砲台にして、炎の女王『微熱』のキュルケ。

彼らの行く手を遮るものは――何もない。全てが、塵と化し風に乗って消えた。

○●○●○●○●

――そして、一行はついに最後の部屋。タバサの母の居室前に立った。

その扉には、魔法的な罠も、鍵すらも掛かってはいなかった。中に何かがいるのは確かだが、殺気立っているような雰囲気はない。

そこで、タバサの＜遍在＞スノウが先頭に立ち、そっと観音開きの扉を引いてみた。奥にはベッドと小机が見える。双方共に、タバサにとって見慣れたものたちであった。母の部屋にあったものと、全く同一。

部屋の周囲には、本棚が並んでいた。その前に……ひとりの男が立っている。おそらく、この者こそが＜夢（フィールド）＞の支配者にして、この『薬』を調合した者の＜意志＞が具現化した存在だろう。そう判断した伏義は、冷静に『解析』そして『分析』を開始した。

かの存在は、薄茶色の――ハルケギニアではあまり見かけない形の、ゆったりとした造りの長衣を身につけ、室内にも関わらず羽根飾りのついた、つばの広い帽子を被っている。その帽子の隙間から

は、腰まで届く長い金髪が垂れていた。

男の＜意志＞は、扉側に背を向けたまま、本棚に向かって何かをしているようだ。パラパラというページをめくる音が聞こえてくることから察するに、どうやら本を読んでいるらしい。

いくら夢の中とはいえ、すぐ側に他人――それも、明らかに敵意を持つ者が近付いてきているにも関わらず、全くそれを気にすることなく書を読み進めているというのは、余程肝が据わっているのか、それとも自分に自信があるのか、あるいは――。

と……その＜意志＞が、背を向けたままふいに口を開いた。

「この『物語』というものは、実に素晴らしいな」

思わぬ言葉に、その場にいた全員があっけに取られた。

「歴史や社会現象に、独自の解釈を織り込み、一種の娯楽として昇華させる。それを読み手が受け取ったときに、書き手が望む感情を喚起させ、己の主張を理解させるのか。我が種族にはない文化だが、それ故に面白い」

異国風の長衣を纏った金髪の＜意志＞は、全く敵意を感じさせない――まるで、ガラスで造られた鐘のように澄んだ声音で、さらに続ける。

「老人は尋ねた。『おお、勇者イーヴァルディよ。そなたは何故、苦難にあえて立ち向かうのだ？』少年は答えた。『わからないよ、ただ……ぼくの中にいる何かが、歩みを止めることを許さないんだ。自分の内側にいる誰かが、ぐんぐんとぼくを引っ張っていくんだ』

と。このやりとりなどは、不思議と勇気を呼び起こす作用を持つ」

伏羲は、思わず顔をしかめて呟いた。口端がぴくぴくと引き攣っている。

「何だ、このロマンティックで微妙に場の空気が読めない男は」

その言葉に、同行者たちが次々に疑問を呈した。

「薬の元凶……なのではないの？」

「ミスタがわからないのでしたら、専門外の私では完全にお手上げですぞ」

「まあ、空気読めてないのは確かよね」

「いや、そういうことを言いたいのではなくてだな……！」

排除を目指す敵を前にしているにも関わらず、そんな暢気なやりとりをしていれば……当然のことながら相手に悟られる。男は、手にしていた本をそっと本棚に戻すと……静かに。くるりと優雅な動作で振り向いた。

「薬の元凶……なるほど、お前たちは侵入者か」

正面を向いた金髪の男は、線の細い……一般的な観点でいえば、まさしく美形といってよいであろう涼やかな顔立ちをしていた。切れ長な目の奥に光る瞳は、深い海の底を思わせる群青色。だが、全く年齢がわからない。幼年とも老齢とも取れるような、不可思議な気配を漂わせている。

「ふむ……この＜場＞に侵入するのみならず、人形を配置した廊下をも無事抜けてきたのか。なるほど、蛮人にしては相当に強き＜力＞を持つ者たちと見える」

「……蛮人？」

自分自身も、最初の段階でかなり失礼な発言をかましていたにも関わらず――思いっきりそれを棚に上げて呟いた伏義に、心底不思議そうな顔を向けた男の＜意志＞は、ようやく何かに気付いたような声でこう言った。

「もしや、我を蛮人と勘違いしているのか？　これは失礼した。お前たち蛮人の間では、初対面の挨拶をする際には、帽子を取るのが作法だったな」

男は、全く裏表のない声でそう言うと、帽子を脱いだ。

「わたしは、この場を管理する者だ」

さらりとした金髪の隙間から、尖った長い耳が突き出している。

「え、エルフ……！？」

キュルケは、思わず声を上げてしまった。

男――調剤者の正体は、ハルケギニアの東に広がる砂漠（サハラ）に住まう長命種にして、人間の天敵。強力な＜先住魔法＞の使い手たる種族、エルフであった。

ハルケギニアに住まう全ての人間にとって、エルフとはまさしく恐怖の象徴である。人間の数倍の寿命を持ち、高度な文明と長い歴史を持つ彼らと立ち会うなどという無謀な行いは――少なくとも単独では、絶対にしたくない。これは、全てのメイジ――いや平民も含めた、住人全体に共通している認識なのだ。

彼らハルケギニアの民は、エルフの強さ、恐ろしさを魂の根幹にまで刻み込まれている。何故ならば、数千年もの長きに渡って、彼らエルフと人間たちは『聖地』を巡って戦い――敗北の歴史を積み重ね続けてきたのだから。

ハルケギニア連合軍が勝利を収めた、数少ない例外もあるのだが――なんと連合側７０００に対して、エルフ側５００という圧倒的な戦力差があったにも関わらず、大きな損害を受けている。エルフと人間の力量差は、それほどに大きいのであった。

杖を握るタバサとキュルケの手に、力が籠もる。その指先は、恐怖で細かく震えていた。だが、そんな彼女たちの前へ、ひとりの男が庇うようにすっと立ち塞がった。

彼女たちの＜盾＞となったのは、コルベールだった。彼の額からは、幾重もの汗が流れ落ちている。先程までの戦いぶりを見る限り、間違いなく歴戦の勇士といって差し支えない彼にとっても、やはりエルフは怖ろしい存在であるようだ。しかし……少なくとも彼の背には、一切の迷いがなかった。

――生徒たちを守る。コルベールの熱意は、既に『魂の天敵』を相手にしても一切揺らがぬほどに強く篤い剛炎の壁となり、護るべき者たちの前へそびえ立っていた。

その背中を見たキュルケは、自分の胸の中に、これまで感じていたものとは全く違う、燃え尽きる程に熱く……それでいて柔らかに踊る＜炎＞が灯るのを感じていた。

だが、そんな彼らの目の前に立つ――現在はエルフの姿を取っている＜意志＞は、まるで気の毒な者を遠い場所から見つめるような態度で、こう告げた。

「お前たちに要求したい」

もしも、この場にいたのがメイジだけであったなら、その言葉だけで震え上がっていたかもしれない。だが、幸いにしてここに居合わせたのは、メイジだけではなかった。

「なかなか面白いことを言う。『交渉』ではなく、いきなり『要求』なのか」

……そう。エルフの存在を何とも思わない者、伏義であった。

彼からしてみれば「耳が長い妖怪なんぞ、別に珍しくもなんともない」程度の認識しかない。宗教的な縛りも、刷り込まれたものもない。だいたい、己の半身たる王天君も細く長い耳を持っている。よって、伏義が無条件にエルフを畏れる理由など、一切ないのである。

だが、エルフの＜意志＞には、そんな伏義の反応が思いのほか面白く感じられたらしい。彼は、ふっと表情を緩めると、伏義に向けて口を開いた。

「これは失礼した。この部屋へ至る『道』を＜力＞でもって突破

してきた蛮人たちに、まさか話して通じるとは思ってもみなかったのだ。我は、無益な争いを好まない。よって、このまま大人しく引き下がってはもらえないだろうか。もちろん、あの女性の＜意志＞も、元の場所へ戻してもらいたい」

その『要求』を聞いた伏義は、持っていた『打神鞭』の先端を、掌でぽんぽんと弾ませながら、心底呆れたといわんばかりに、目の前の……エルフの姿形をとっている＜意志＞に尋ねた。

「わしも、戦いは正直好かぬのだがのう。おぬしが申し出てきているそれは、話し合いとは呼べぬものだと思うのだが？」

自分たちが求められているのは、一方的な『要求』であって、交渉どころか話し合いですらない。だが、その言葉を聞いた男は、ふっとため息をついた。

「やはり、蛮人と話し合いをするのは無理なのか。我としては、できる限り穏やかに事を済ませたかったのだが」

ふざけるな。タバサは激しく憤った。母の＜夢＞を無理矢理ねじ曲げた挙げ句、一方的な要求をつきつけておいて、穏やかに事を済ませたい？　相手は単なる『薬』に込められた＜意志＞だ、本物のエルフではない。畏れるな！　エルフと対峙するという恐怖を、逆る怒りの感情が上回った。

杖を構え直し、一歩前へ出ようとしたタバサを、しかし伏義が遮った。

「念のため確認しておきたいのだが。おぬしにとって、それらの要求は一切相譲れぬものであるのか？」

その問いかけに、エルフの姿をしたモノは、小さく首を縦に振った。

「我は、この世界を保つためだけに造られた、かりそめの＜意志＞だ。よって、それを外れることはできない」

いっぽう、伏義の後方で身構えているタバサ、そしてキュルケとコルベールは心底驚いていた。彼はエルフ……いや、薬に込められた＜意志＞とすら交渉するのか、と。

と……少し考え込むような素振りを見せた伏義が、再度口を開いた。

「最後に、もう一度だけ聞くぞ？　どうしても……なのか？　戦わずに、ここからおぬしが去るわけにはゆかぬのか？　こちらが何らかの条件をつけて、おぬし自身を解放することも、一切不可能であるのか？」

その言葉を聞いても、エルフの＜意志＞は頑ななまでに動かなかった。

「そうか、残念だ。わしとしても、できれば戦わずに済ませたかったのだが」

その言葉を合図に、全員が杖を構えた。しかし、エルフの＜意志＞は畏れるどころか、顔色ひとつ変えずに、ただ静かにその場に佇むのみであった。

絶対に母さまの心を治す。たとえ、そのために戦わなければなら

ない相手が天敵エルフであろうとも、ここで引くわけにはいかないのだ。タバサの心が、強い感情で震えた。そして、彼女は杖を構え、呪文を詠唱する。

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ……」

タバサが最も得意とする呪文＜ウィンディ・アイシクル＞が完成した。合計２０本の＜氷の矢＞が、エルフの＜意志＞目掛けて飛んでゆく。しかし、彼女が放ったそれは『敵対者』の胸の前でぴたりと停止すると……そのまま床に落ちて、キィン……という澄んだ音と共に砕け散った。

直後に叩き付けられたキュルケの＜炎の鞭＞も、タバサの＜ウィンディ・アイシクル＞と同じように壁のようなものに遮られて、男の身体には届かなかった。

「なるほど……これが＜先住魔法＞。エルフの＜反射（カウンター）＞か」

杖に＜炎の蛇＞を纏わせたコルベールがポツリと呟くと、それを聞いた少女たちの身体が完全に硬直した。自分たちが相対している敵が何者であるのかを、改めて思い知ってしまったが故に、彼女たちは、魂に刻まれた恐怖によって縛られてしまった。そんなふたりと同じように、コルベールと伏義のふたりもその場から全く動かない。

「先住魔法……何故、お前たち蛮人は、そのような無粋な呼び方をするのだ？」

金髪で細身の身体を持つ＜意志＞の瞳には、怒りどころか、敵意の欠片すら浮かんではいなかった。タバサは……いや、キュルケと

コルベールも、その瞳に宿るものの正体に気付いて愕然とした。

そこにあるのは、戦わねばならないことに対する悲しみではない。哀れみですらない。なんと『無関心』であった。そう――彼は、タバサたちを未だに敵と認めていないのだ。いや、そんな認識すらないのかもしれない。

彼らエルフや妖魔が使う＜先住魔法＞は、メイジたちの＜系統魔法＞よりも、遙かに強力であると、いにしえより伝わる書物などには記されている。その真偽の程は定かではないが、少なくとも目の前の男が、自分たちを『敵』どころか、単なる置物程度にしか見ていないのはあきらかであった。伏義を含む全員が、思わず後じさった。

「蛮人よ。我は争いを好まない。だが、敵対するというのならば＜精霊の力＞をもって、この場から強制的に排除する。それが、我に課せられた使命だからだ」

そう言って、エルフの＜意志＞が片手を前にかざし、タバサたちがいる場所へ向けて、一歩前へと足を踏み出した――その時。

「タバサ！　＜風の盾＞で全員を包み込め！」

伏義のかけ声と共に、突如＜意志＞の足元に八角形の輝きが出現する。

「かかったな！　宝貝『誅仙陣（ちゅうせんじん）』！！」

タバサが＜盾＞を展開し終わったのと、ほぼ同時。突如周囲の風景が塗り替わった。

つい先程までタバサの母の居室であったそこは、いつのまにか荒涼とした原野に変わっていた。その空は、深く暗い闇に包まれていた。そして、光る糸状の何かが、まるで鳥籠の如く、格子状に周辺全域へ張り巡らされている。

「これは……！？」

突然のことに、さすがの＜意志＞も驚いたのであろう。その瞳に、彼らと対峙してから初めて別の色が浮かんでいる。それは、わずかながらの焦り。そんな彼の様子を見た伏義が、実に嬉しそうな顔をしつつ、大声で嗤った。

「ダァホが！　わしが、ビビって動けないのだと思っていたようだが、違うわ！　タバサとキュルケがおぬしの気を引いてくれている間に、自分の＜陣（フィールド）＞を構築しておったのだよ！」

タバサは驚いた。さっきから彼が一切手を出さなかったのは、これの準備をしていたからなのか！　でも、以前見せて貰った『切り札』とは明らかに違う。これは、いったい何だろう……？

――実は。最初に『要求』という言葉を聞いた時点で、交渉が一切通じない可能性があると判断した伏義は『打神鞭』を掌の上で弾ませるという、一見何気ない仕草を装いながら、こっそりと、この空間宝貝『誅仙陣』を展開する準備を整えていたのだ。

「なるほど。隙を見て『罠』を張っていたということか。しかし、我に通用するようなものでは……」

そう言って＜精霊の力＞を行使しようとしたエルフの＜意志＞で

あったが……次の瞬間、叫び声を上げた。

「そんな馬鹿な！　蛮人め、いったい何をした！？」

「なるほどのう。やはり＜先住魔法＞とは、そういう性質のものであったか。そして、どうやらおぬしたちエルフは『空間使い』と戦った経験が、一切ないとみえる」

先程とはまるで別人のように取り乱し始めたエルフの男とは対照的に、伏義の顔は冷徹な『観察者』そのものに変化していた。

「確か、エルフや妖魔が使う＜先住魔法＞は、場に宿る精霊と契約して行使されるものであったな？　では、ここで質問だ。その＜場（フィールド）＞が何者かによって書き換えられてしまった場合。精霊との契約は、果たしてどうなるのであろうか？」

その伏義の言葉に、調剤者の＜意志＞が凍り付いた。

「そんな！　『薬』を一切使わずに、＜夢＞を塗り換えたというのか！？」

「そうだ。あの部屋の周辺だけだがのう。＜夢＞は、無限の宇宙に例えられるほどに広大な＜別世界＞だ。自分の夢ならばともかく、他者の＜世界＞を全て書き換えられるほど強大な＜力＞など、わしは持ち合わせておらぬのでな」

夢を塗り換える。タバサは、驚嘆した。そういえば、夢の中だからこそこのようなことができると、以前太公望が言っていたではないか。実際に『彼の部屋』の内装が書き換わるところを何度も見せて貰っている。

「ありえない！　＜場＞を書き換える魔法……こんなものが……ッ！」

慌てふためくエルフの＜意志＞に、伏義は追い打ちをかけた。

「おぬしのおかげでよい実験ができた。書物だけではいまいち確定できなかった＜先住魔法＞の性質について、これで確証が持てた。感謝するぞ」

聞いた者全てが凍てつくような声でもって、そう告げた伏義の姿は、まるで――開発中の薬品によって、大きな被害を受けた被験者たちを前にして、ただ静かに実験結果のみを報告する、冷徹な研究者のようであった。

そんな彼らのやりとりを聞いて、タバサは気付いた。そうか、これが実戦における『空間操作』の扱い方なのか……と。

タバサだけでなく、キュルケも一緒になって周囲を見渡した。これが、太公望がよく話していた＜フィールド＞にして、彼や才人が住む異世界のメイジ＜力在る者＞の一端を担う『空間使い』が最も得意とする戦法なのかと、驚きを顕わにした。確かにこれは、ハルケギニアでは『異端』扱いされてしまうだろう。見知らぬ他者が大勢いるような場所で、簡単に使える類のものではない。彼女たちはそう受け取った。

そして、先程からこの＜フィールド＞をつぶさに観察していたコルベールも、初めて見た＜魔法技術＞に驚嘆していた。＜系統魔法＞に一切の悪影響を及ぼさず、それでいて簡単に＜先住魔法＞を封じてしまったこれが、いかに有用な技術であるのか――彼には即座

に理解できたからだ。しかし……彼の驚きは、それだけでは終わらなかった。

それは……ふいに、空から落ちてきた。小さく白いものが、ふわりと宙を舞う。

「あ……！」「これは……？」「雪だ！」

思わず＜風の盾＞から外へ手を伸ばしてしまった一同を、伏義が慌てて制した。

「いかん、その雪に触れるでない！」

どうして！？　そう問おうとした彼らであったが、その答えはすぐ目の前で公開された。なんと、粉状の雪に触れた＜意志＞の手が、ジュッという音と共に、溶け崩れてしまったのだ。それを目撃した全員が、慌てて＜盾＞の中で身を縮めた。

「なにッ！？」

調剤者の＜意志＞は、急いで＜反射＞を展開しようとした。しかし、書き換えられてしまった＜フィールド＞内に存在する精霊との契約を、最初からやり直すほどの時間は、残念ながら――既に残されてなどいなかった。

「お、おのれ蛮人……ッ。このままでは済まさぬぞ！」

口では強気な発言をしてみたものの。＜意志＞は内心焦っていた。この＜フィールド＞に留まっているのはまずい。精霊との契約を完全に無効化されてしまったのみならず、この雪に触れ続けていれば、

自分は完全に消失してしまうだろう。

調剤者の＜意志＞は必死の思いで、外への出口を探した……しかしそれは、どこにも見当たらなかった。『薬』そのものに植え付けられた＜意志＞たる彼には、目覚めによる自力脱出も不可能であった。

「これは、魂魄を溶かす雪。そして、ここはわしが支配する＜フィールド＞だ。記憶の欠片、その一片すら逃がさぬよ」

静かに降り続ける粉雪は、ごく細かなそれから、大粒の綿雪へと変化してゆき――しまいには、囂々と唸り猛る豪風を伴う吹雪となって、エルフの＜意志＞に襲いかかった。

「深深（しんしん）と……溶けるがいい」

そう告げて、天を仰いだ伏義の横顔からは――普段の暖かみのある表情が全て消え去り、真冬……いや、生きとし生ける者全てが強制的に活動を止められる、絶対零度の冷気が全面に貼り付けられていた。

「貴様……まさか＜悪魔（シャイターン）＞……ッ！」

調剤者が注いだ＜意志＞に、初めて怯えの色が浮かんだ。だが、全ては遅すぎた。

「う……くッ、やめてくれッ！　や、や……め……」

全身から煙を噴き上げながら、悲鳴をあげて逃げまどう＜意志＞の姿を見ても、杖をかざしたまま、全く動じずにその場に佇む伏義

の様子は――これまでタバサたちが見知っていた彼とは、完全に別人のようであった。

――その姿は、まさしく『雪風の魔王』。主人の持つ『二つ名』に相応しい、極寒の空気と闇の衣を纏いし者。

そして。エルフの＜意志＞も。悲鳴すらも。ジュウジュウという魂魄が溶ける音はおろか、全てが無音の闇に消えたその後に現れたのは……澄んだ青空と、暖かな春風。そして全面に広がる美しい花畑――。

「お……終わった……の？」

タバサの言葉に、伏義は頷いた。

「うむ。病巣は跡形もなく全て消え失せた。おぬしの母上は、これで元通りになる」

その言葉に、全員が歓声を上げた。しかし……伏義の顔は、どこか陰っていた。

「これは、わしの親友の口癖なのだが……」

ふうと大きなため息をついた伏義は、小さな声で、それを口にした。

「言葉を交わすことができるにも関わらず、わかり合えぬとは。本当に悲しい事だな」

○●○●○●○●

――タバサは、未だ夢の中にいた。

そこは……幼い頃に住んでいた、ラグドリアン湖の湖畔に建つ、懐かしいオルレアン公邸。晴れ渡った青空の下、屋敷に住まう家族全員が、庭に用意された小さな丸テーブルを囲み、楽しそうに笑っている。

優しげな笑みを浮かべた両親は、揃って料理を摘みながら、談笑していた。

タバサ――いや、幼いシャルロット姫は、母が手ずから買い与えてくれたフェルト地製の人形『タバサ』を椅子に座らせ、絵本を読んで聞かせている。

本のタイトルは『イーヴァルディの勇者』。小さな少年が、剣を手に怖ろしい試練に立ち向かうという――貴族平民を問わず、子供たちの間で大人気となっている冒険譚だ。

この本に記された『イーヴァルディ』とは、地名やその他を示す単語ではない。物語の主人公たる少年の名だ。にも関わらず、この本の表題が『勇者イーヴァルディ』ではなく『イーヴァルディの勇者』と表記されるのは、何故なのだろうか。

幼い頃は、疑問に思いつつもその意味がわからなかったタバサであったが、今なら理解できる。『イーヴァルディ』とは、勇者の名前ではない。かの少年の心奥に住まう『衝動』や『強い決意』といった概念を『勇気ある者』つまり『勇者』と表現しているのだ。

現に『イーヴァルディの勇者』の主人公は、いつも同じ少年とは限らない。それは女性であったり、時には年老いた老爺として描かれることすらあった。そして、それら全ての主人公たちに共通しているものがある。それは――『前へ進む勇気』。

幼いシャルロット姫が手に取って、人形へ読み聞かせている本の主人公も、巨大な＜力＞を持つ怖ろしい魔王によって捕らわれた姫君を救うべく、剣一本と勇気だけを頼りに、たったひとりで魔城の奥へ奥へと進んでゆく少年だ。

ハルケギニアの子供たちは、幼い頃――この『イーヴァルディの勇者』に憧れる。みな、この絵本を読んで、イーヴァルディのような『勇者』になる、あるいは彼のような者に付き従う『騎士』となり、共に世界を救う英雄となることを夢見るものなのだが――幼い頃のタバサ……シャルロット姫は違った。

彼女は、怖ろしい『魔王』に連れ去られた姫君に憧れた。『勇者』によって救い出され、新たな世界を知ることができた……か弱き少女に。そして、楽しいながらも退屈な日常から自分を連れ出して、未知の世界へと案内してくれる勇者様が現れ、その手を差し伸べてくれる日を待ちわびた。

やがて、成長したシャルロット姫は囚われた。魔王にではなく……過酷な運命という名の鎖に。そして、期待が全て絶望へと変わる牢獄の中に閉じこめられた。だが――本に書かれた姫君ように、自分を助け出してくれる勇者が現れることはなかった。

そう――物語の『勇者』は、彼女の前に現れてはくれなかったのだ。

「お嬢さまの客人がお見えになられました」

ふいに聞こえた従僕ペルスランの声に、タバサははっとした。そして、自分の姿を見て驚いた。人形の『タバサ』に本を読み聞かせていたシャルロット姫は、もうどこにもいなかった。今の自分は『雪風』を纏った、北花壇秘密騎士（ノールパルテル）。ずっと孤りで戦い続けてきた、氷でできた人形。

やはりあれは夢だったのだ。時の彼方へ消えていった、幸せな時間の記憶――。

夢の中で夢を見ていたことに気付いたタバサは、思わず苦笑した。何故、あんな夢を見ていたのだろう。あのように笑いかけてくれる父は、もういない。優しく微笑みかけてくれる母は、怖ろしい『薬』で――。

「まあ、シャルロットのお友達？　ペルスラン、急いでお通しして」

飛び込んできたのは、間違いなく母の声であった。タバサは思わず振り返った。そこにいたのは、先程まで丸テーブルについていた母ではなかった。少し歳を重ね、より表情の柔らかくなった……眠っている時にしか見ることのできない、穏やかな顔つきをしたオルレアン公夫人が、椅子に腰掛けて微笑んでいた。

「母さま……」

「どうしたの？　ほら、お友達の出迎えをしていらっしゃいな」

そう言って笑う夫人の顔には、あの怖ろしい『薬』の影響など、

どこにも見られなかった。そして、笑い声と共に近付いてきた足音に、タバサは振り返った。

屋敷の庭に、魔法学院の仲間たちが現れた。

ギーシュとモンモランシーが、揃って大きな花束を持ち、笑顔でタバサの側へ近寄ってきた。ルイズと才人が、照れたような笑みを浮かべながら、手に持った包みを差し出してきた。その中には、焼き菓子がたくさん詰まっていた。レイナールは、綺麗なリボンがかけられた本を、彼女に手渡そうとしている。

そして、彼女の親友である赤毛のキュルケが駆け寄ってきた。いつものように、笑ってタバサを抱き締めてくれた。友人が与えてくれる温もりは、何者にも代え難い。そんな彼女たちを見守るかのように、後方でオスマン学院長と、コルベール先生が微笑んでいた。

最後に現れたのは、太公望であった。

だがそれは、いつもの彼ではなかった。夢の世界でしか見ることのない――全身に漆黒を纏った姿。

「あなたが、みんなを連れてきてくれたのね」

そう言って椅子から立ち上がったタバサの手から、抱えていた『イーヴァルディの勇者』が、とすん……と滑り落ち、テーブルの上へ乗った。その絵本のページは、突如吹いてきた暖かな＜風＞によって嬲られ、ぱらぱらとめくれていく。

――わたしの前に現れてくれたのは、勇者様ではなかった。

開いたページに描かれていたのは。畏れる姫君の前へ悠然と立つ、魔王の絵姿。

使い魔召喚の儀式を執り行ったあの日。絶望の色を瞳に宿した姫君の前に現れたのは。彼女を自由な空へと案内してくれる、気高き竜ではなく……勇者様にお仕えする、聖騎士のような存在でもなかった。そう、あの時タバサが出逢った相手は。

――でも、わたしにとっては……きっと、これでよかったのだ。

どこまでも優しく、温もりに溢れた夢の中で……タバサはそう思った。

第７５話　雪風、物語の外に見出すの事（後書き）

タバサの母治療ミッション、これにて完了であります。いろいろと筆者の趣味が溢れる『爆炎治療班』の活躍はここまで。回復状態その他は次話にて。

前回の慎重なオペから一転、広域殲滅部隊と化した一行。このあまりの落差が故に、前編・後編で分けさせていただきました次第です。いや、我ながら変わりすぎだろうと。

なお、今回は「封神演義」十天君との戦い&伏義の（筆者的に絶対やりたかった）誅仙陣発動×「ゼロの使い魔」イーヴァルディの勇者編とのクロスという、怖ろしく豪華絢爛なイベントになりました。どれがどの場面か全て言い当てることができた貴方は、両原作の相当な『通』であります。

そして。ある意味＜先住魔法＞の使い手にとっての天敵。恐怖の『空間使い』をご覧頂いたわけですが……如何でしたでしょうか？そう……彼ら『行使手』は、王天君を含む十天君全員及び、伏義との相性がすこぶる悪いのです。

何故なら、彼らは自分の思い通りに＜場（フィールド）＞を書き換える＜能力者＞であるからです。精霊との契約追いつかないだろうっていう。特に、夢の中などの＜イメージ＞が色濃くあらわれる場所で戦うのは、もう相性最悪であるという。ただ、対応する空間宝貝と状況が噛み合うことではじめてこれらが実現するんですが。

最後に。薬の制作者については、あえてぼかしております。なんとなく彼ではないかと察しておられるかたもいらっしゃるとは思いま

すが、原作でそのあたりについて一切言及がなかったため、こんな形をとらせていただきました。あのひとは、解除薬制作にしか関わっていない可能性大ですしね。ああ、いちおう念のため……敏感肌な彼でもありません。

最後に。珍しく伏義（太公望）が攻撃的でしたが、ちゃんと「親友と同じように」３回確認してます。これだけでも、（伏義としては）だいぶ優しいと思います。

次回は、タバ母回復に関するエピソードその他、新章に向けての準備話と相成りますので、どうぞよろしく。

追記。後半部分に、誤字脱字その他いろいろあったため、大幅に加筆修正入れました。約２０００文字程度増量しております。

２０１１／０７／０５　２３：３０　こっそり誅仙陣を仕掛けるシーンをこっそり挿入
２０１１／０７／０７　本文大幅加筆修正・誤字脱字修正
２０１１／０７／１１　誤字脱字修正

第７６話　雪風、古き道を知り立ちすくむ事

――アンスールの月・ティワズの週、虚無の曜日。

つい先程まで、心地よい微睡みの中にいたタバサは……そこから突如追い出されたことに驚き、きょろきょろと周囲を覗った。ここは、親友のキュルケが用意してくれた屋敷の一画。今、自分がいるのは――その部屋に置かれたベッドの中だ。

ああ、そうか。さっきまでわたしがいた場所は、やはり夢幻の中だったのだ。それに気付いたタバサは、思わず涙を零しそうになった。だが……そんな彼女を、ふいに暖かなものが包み込んだ。

「どうしたの？　シャルロット。また、怖い夢を見てしまったのかしら？」

それは、オルレアン公夫人の柔らかい両腕であった。

「母さま……」

「大丈夫。今こうして、あなたの目の前にいるわたくしは、夢が創り出した幻などではありませんよ。あなたと、あなたのお友達が助けてくれた、正真正銘……本物の母です」

「母さま……ッ」

夢じゃない。わたしを包んでいるこの温もりは、正真正銘――本物なのだ。タバサは、目の前にいる母の身体を、自分の細い両腕で……ぎゅっと抱き締め返した。

タバサの母、オルレアン公夫人を『魔法薬』から救い出してから、既に6日が経過していた。幸いなことに、夫人には薬による後遺症などは一切なく、身体面についても――やや体力が衰えてこそいたものの、健康体といって差し支えない状態であった。

オルレアン家に仕える忠実な従僕、ペルスランの長きに渡る献身的な看護が、夫人がさらなる病魔に晒される危機から護っていたと言っても過言ではないだろう。

仲間たち、そしてフォン・ツェルプストー家の好意で、タバサたち母娘はあれからずっと寝所を共にしていた。これは、オルレアン公夫人とタバサ、双方の心身を安定させる上でも必要な措置であった。

「さあ、シャルロット。もうすぐ朝食の時間です、身支度を調えましょう。皆様をお待たせしてはいけませんからね」

「はい、母さま」

母娘は、もう一度だけ抱擁を交わすと、ベッドからゆっくりと起き上がった。

――フォン・ツェルプストー家の離れにあるダイニングルームで、仲間たち全員と従僕のペルスラン、そして焼きたてのパンから漂う香ばしい香りが、タバサたちふたりを出迎えた。

「奥様、お嬢様。どうぞこちらの席へお着きください。本日の朝食は、焼きたての白パンと、きのこのシチューでございます。ワイ

ンのほかに、しぼりたてのミルクと発泡酒もご用意いただいておりますので、いつでもお申し付け下さいませ」

スッと椅子を引いて、ふたりに着席を促したペルスランがそう告げると、オルレアン公夫人は忠実な従僕の顔を見て柔らかく微笑んだ。そして、対面にいるキュルケとふたりの同席者――太公望とコルベールに向かって、改めて礼を述べた。

「ツェルプストー家の方々には、本当に良くしていただいて、感謝致します。そして、親子揃って食卓を囲むことができるのも、こちらにいる皆様方のおかげです」

オルレアン公夫人は、ゆっくりと……だが、確実に昔を取り戻しつつあった。香ばしいパンを口に運び、暖かなシチューで胃を満たすと、参加者全員の顔がほころび、自然と言葉が交わされる。

話題を周囲に振りまくのは、主にキュルケであった。タバサの過去などについては一切触れず、学院での思い出や、みんなでピクニックに出かけたことなど、楽しくも他愛ない話がほとんどであった。そして、そんな話を……オルレアン公夫人は、にこにこと優しい笑みを浮かべながら、実に嬉しそうに聞いている。

ゆったりと、静かで、幸せな時間が流れていた――。

しかし……いつまでもこの屋敷に、夫人と従僕の老人を留め置くことはできない。キュルケや彼女の父親は、ガリアの情勢が定まるまでの間、主従揃って屋敷に逗留してくださっていても構わないとまで言ってくれたのだが……だからといって、その好意に甘え続けるわけにはいかないのだ。

フォン・ツェルプストー家にこれ以上の迷惑をかけないためにも、出来うる限り早く、ここから立ち去ったほうがいい――母の治療にとりかかるずっと以前から、それを念頭に置いていたタバサは、太公望に相談した結果――ゲルマニアの首都・ヴィンドボナに母とペルスランの住処を構えるべく動いていた。

太公望曰く『木を隠すなら森の中』。こそこそしていては、かえって目についてしまう。もちろん、夫人とペルスランの身元がわからぬよう、ある程度の細工は必要であったが――ツェルプストー家の助力もあり、それら各種問題についても、既に解決の目処が立ちつつあった。

これで、母さまたちの安全は確保できた。あとは、残るもうひとつの目標――ガリア国王ジョゼフの首を討ち取りさえすれば、父さまの無念を晴らすことができる。そうすれば、全てが終わる。

笑みに溢れた母の横顔を見ながら、決意を新たにしたタバサであったが……しかし。それは、その夜語られたオルレアン公夫人の言葉によって、大きく揺らぐこととなる。

○●○●○●○●

――その日の夕刻。

タバサは、従僕のペルスランだけを伴い……体調への配慮から早めに夕食を済ませ、先に寝室へと戻っていたオルレアン公夫人の元を訪れた。

正統な王座だけではなく、その命までをも奪われた父の無念を晴

らしたい。でも、病から回復したばかりの母にそのようなことを告げて、心配をかけたくはない――。

当初はそのように考えていたタバサであったが、しかし。

「わたしがあなたのお母様だったら、話してもらえないことのほうが悲しいわ」

今後に関する相談を快く受けてくれた親友キュルケと、そんな彼女に――より現実的な意味で――同意した太公望とコルベールの勧めによって、自分の胸の内全てを母に打ち明けることを決心したからだ。

だが――そのオルレアン公夫人の口から告げられた衝撃の事実が、タバサを、そしてペルスランを徹底的に打ちのめした。

「簒奪じゃ……ない……？」

タバサは、思わず耳を疑った。何かの間違いだ、そう叫び出しそうになった。

「奥様！？　お嬢様の御身を気遣って、そのようなことを仰っておられるのですね！？　どうか、そうだと言ってください！」

母娘の側に控えていた従僕ペルスランも、その言葉を聞いて顔色を変えた。それはそうだろう、彼はずっとオルレアン大公家を襲った悲劇について、現在ガリア国内で流布している噂に加え、現国王ジョゼフ一世が＜魔法＞を使えないが故の逆恨みから行った非道であったのだと、これまでずっと信じ続けてきたのだから。

「シャルロット。あなたは、これまでいったい何と聞かされていたのです？　父上の死や、わたくしたち家族の処遇について」

憂い顔でそう問うたオルレアン公夫人に、タバサは震える声で答えた。

「ジョゼフ伯父が……オルレアン大公……父さまに、わたしや母さまを殺すと脅すことによって、王位を諦めるよう迫っていたのではないかと。でも、ジョゼフが王座についた後で……脅迫が明るみにでることを恐れたジョゼフとその一派の手にかかって、父さまは暗殺されたのだと……」

それを聞いた夫人は、悲しそうな顔をして、首を横に振った。

「いいえ、それはありません。もしもそのような事実があったのならば、あのひと……オルレアン公ならば、まずわたくしたちを保護するために動いたはずです。でも、そのようなことは一切ありませんでした」

「でも、御祖父様は、病床にありながら父さまを次期国王に指名したと」

必死に言葉を繋ぐタバサを、しかし夫人は言下に否定した。

「いいえ。あのとき間違いなく、陛下は皇太子ジョゼフ殿下を指名なされたのです。わたくしは、実際にそれを聞いています。ほかならぬ、オルレアン公そのひとの口から。次の王は義兄上に決まった、父上からそう告げられた……と」

タバサは、自分の足元が突然がらがらと崩れ去っていくような衝

撃に見舞われた。

何故なら彼女は、ずっと信じていたからだ。現ガリア国王ジョゼフ一世が――本来、王座に在るはずであったタバサの父親を暗殺して王位を簒奪したのみならず、怖ろしい薬によって母を狂わせ……さらには、自分たち家族に反逆者の汚名を着せ、その地位を徹底的に貶めた、正真正銘の『狂王』なのだと。

「そんな馬鹿な！　ならば、どうして罪なきご主人様が、ジョゼフ王の手によって害されねばならなかったのです！？」

泣き声といって差し支えない叫びを上げたペルスランに、夫人は静かに……まるで幼子を諭すかのように告げた。

「罪がなかったわけではありませぬ。あのひとは……自分が国王の座につくために、影で色々と動いていましたから。我が大公家でそれを知っていたのは、このわたくしだけです。実際、オルレアン公が行った裏工作のせいで、あのときのガリアは――勢力を二分した戦争が起こる寸前だったのですよ」

当時を思い出したのであろう、オルレアン公夫人の顔が暗く陰った。

「その証拠に、あのひとが亡くなった直後……大勢のシャルル派に属する貴族たちが、わたくしに決起を促してきました。おそらく彼らは、先王陛下の遺言状が読み上げられた直後から、挙兵の準備を進めていたのでしょうね。王位は魔法の才能溢れるシャルル王子こそが継承すべきである。そう宣言した上で、オルレアン公を旗頭に――ジョゼフ王を追い落とすために」

オルレアン公シャルルが暗殺された翌日。公邸周辺は、シャルル王子派の貴族たちが擁する大勢の兵士達で溢れかえっていた。前もって用意していなければ、あんなに早く兵を動かせるはずがない。そう淡々と告げる母に、タバサは震えながら問うた。

「御祖父様の……遺言状？」

「ええ。先王陛下の葬儀の席で、リュティス大司教が『始祖』の御名において読み上げた遺言状です。次王に皇太子ジョゼフを定めると。臣下の者たちは、これをよく補佐するようにと書かれていました」

「奥様！　その遺言状が、偽造されたものであるという可能性も」

ペルスランの必死の訴えを、しかし夫人は遮った。

「リュティス寺院の大司教が預かっていた、亡き国王陛下直筆の遺言状ですよ。そのようなものを偽造したとなれば、たとえ王族といえども大逆罪に問われます。遺言状が本物だったからこそ、これまで問題とされなかったのではないのですか？」

――先代国王直筆の遺言状。そんなものがあったこと自体、タバサは知らなかった。いや、正確に言うなれば、彼女は覚えていなかっただけなのだ。葬儀の当日……当時まだ幼かったタバサの心の中は、優しい祖父を亡くした悲しみで、いっぱいになっていたから。

もしも、遺言状の存在を知っていたら。タバサは真っ先に確認したはずだ。それが偽物だった場合――自分たちの正当性が増す。そう……現国王打倒のための、切り札にすらなりえたからだ。

そして、聡いタバサは気付いてしまった。母以外にも、その遺言状の存在を知る者たちは大勢いたはず。にも関わらず、今に至るまでそれらの話が、一切耳に入ってこなかったということは――つまり、それが本物だったがために――シャルル派に属する貴族たちが、現王に反旗を翻すための材料たりえなかったことになる。

「いいえ……うそよ……そんなことって……」

信じられない。いや、信じたくなかった。もしや、薬の後遺症で母はこのようなことを言っているのではないか。そこまで考えてしまったタバサであったが――しかし。首を左右に小さく振りながら、全身から一挙に血の気が失せてしまったかのように、ふるふると身体を震わせ続けている愛娘へ……オルレアン公夫人は静かな声で語りかけた。

「シャルロット。あの日……ジョゼフ王が座す宮殿へと向かう馬車の中で、母はあなたにこう言ったはずです。もしも、無事に明日を迎えることができたなら。その時は――間違っても、わたくしたち両親の仇を討とうなどと考えてはなりませぬ……と」

その言葉に、タバサはビクリと身体を震わせた。確かに、母からそう固く念を押されていた。だが……タバサはそれに従わず、復讐の道を歩むことを選択したのだ。それこそが自分が生きている意味だと、頑なまでに信じていたから。

「もしも、あなたが起てば……間違いなく、多くの血が流れることになるでしょう。なればこそ、わたくしは公の仇を討てと猛る貴族たちを鎮め、ジョゼフ王が催した酒宴に出席したのですよ。そうすれば……最悪でも、失われるのはわたくしたち家族全員の命だけで済む。そうなれば、国を分かつことなく……全てが終わると考え

たからです」

タバサは、脳天を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。母さまは――王族の一員として、国の安寧を維持するために……自分の身を捧げたのだ。娘であるわたしの命すらも。そうだ、あの時……母さまは、上座についていたジョゼフ王に、こう言ったではないか。

――わたくしだけでご満足ください。なにとぞ、娘だけはお救いくださいますよう。

オルレアン公夫人は、愛娘の側へゆっくりと歩み寄ると――その顔を、両の手で包み込むようにして……その中にある碧眼をじっと覗き込みながら、毅然とした声で告げた。

「誰かを恨むのならば……そのような選択をした、このわたくしを。夫の行為を知っていながら止めることができなかった、この母を恨みなさい」

そして夫人は、タバサの身体をひしと抱き締めると、涙声で訴えた。

「シャルロット。今のわたくしには……もう、あなたしかいないのです。どうか、愚かな真似はやめてちょうだい。もうこれ以上、大切なひとを失う悲しみを味わいたくなどありませぬ」

タバサは、母に抱かれながら、その声をただ聞いていることしかできなかった。

「わたくしは、国を乱すことなど望んではいないのです。この母を、臆病者だと憎んでくれても一向にかまいません……だから、お

願い……義兄上に復讐するなどとは、絶対に考えないで……」

母の言葉が全て真実ならば……わたしがしようとしていたことは――歩もうとしていた復讐の道は、根本から間違っていたということと？　そう思った瞬間。彼女の胸の内で……水の精霊に誓ったそれの中心に、大きなヒビが入った。

○●○●○●○●

――母から衝撃の告白を受けた、その翌日。

タバサは、全てを語った。親友たる赤毛のキュルケと、自分のパートナーである太公望、そして恩師たるコルベールに。その後、彼女が話し終えるまで……ただ黙って聞いていた太公望は、静かな声で尋ねた。

「それで……おぬしは、どうしたいのだ？」

父の仇を討つために、今までと同様にひたすら復讐の道を突き進むか。それとも、家族と共に平穏無事な生活を営むことを選ぶか。だが……タバサは、そのどちらに対しても、頷かなかった。

「わたしは、知りたくなった。この事件に隠された真実を」

タバサは、とつとつと語り始めた。ずっと昔……まだ幼かったころの思い出と、現在胸に抱いている想いを。

「ジョゼフ……伯父は、昔はとても優しかった。父さまとも仲が良くて、よくお屋敷の中庭にあったポーチで将棋（チェス）をやったり、一緒

にお酒を飲んだりしていた。大きな手で、わたしの頭を撫でてくれて……いつも、街で人気のお菓子をいっぱい、シャルロットへのお土産だって言って……持ってきてくれた」

綺麗な包み紙にくるまれたお菓子の山を置いて、笑顔で幼い自分を抱き上げてくれた伯父の力強い腕の感触を、タバサは思い出した。心の奥に封印していた、優しい記憶……。

「そんな伯父が、何故あんな風に豹変してしまったのか。どうして、父さまは死ななければならなかったのか。母さまの言葉が真実だとするならば、今までわたしが聞いてきた、多くの噂話はなんだったのか。いったい何が正しくて、どれが間違っているのか……わからなくなってしまった」

子供の頃はわからなかった父の姿。母の言葉が本当なら……タバサは俯いた。

「だからわたしは、知らなければならない。今まで、あまりにも無知なままだった。わたしは、復讐心だけに囚われて――目と耳を塞いでいたのだと思う。そのせいで、母さまが自分の命を賭けてまで行った……無駄な血を流さないための決断を、危うく台無しにするところだった」

俯きながら語るタバサの瞳は、いつしかじんわりと光るもので滲んでいた。

「できるだけ他人に迷惑をかけずに、父さまの仇を討つ。腕を磨いてジョゼフ王の側に近付けば、きっとそれができる。わたしはそう考えていた。そこで思考を停止させてしまっていた。実際には、関係のない大勢のひとを巻き込む寸前だったのに」

母の言葉が絶対の真実であるならば。確かに父は――国王への逆心ありと判断され、内紛を起こす前に処断されてもおかしくない。それだけのことをしているのだ。むしろ、今まで母と自分が生かされていたこと自体が奇跡にも等しい。

「それなのに……ジョゼフ伯父は、反乱勢力の御輿となりうるわたしを、どうしてあの宴の場で殺さなかったのか。あるいは、どこかへ軟禁しようとしなかったのか。何故母さまにあのような薬を飲ませたのか……わたしには、どうしてもわからない」

――もしも、それが肉親への情ゆえにということならば。今の自分たちへの扱いは、いったいどういうことなのか。

――そして、彼ら一族から向けられてくる悪意は、魔法の才能への嫉妬以外にも、ひょっとすると何かあるのではないか？

正直なところ、タバサにとって……ジョゼフ王の行動には謎が多すぎた。

「父さまが暗殺されたという事実は変わらない。でも、どうしてそれが行われたのか……わたしは、本当のことが知りたい。確かめたい。でも、直接ジョゼフ王を問いただすわけにはいかない」

何故ならば。母が娘可愛さのあまり、嘘を言った可能性も否定できないからだ。その真偽を判断するための材料が、現時点ではあまりにも少なすぎる。そう呟いたタバサへ、キュルケは言った。

「それなら、必要な情報を集めなきゃいけないわね」

コルベールもふーむ……と首をかしげながら同意した。

「しかし……相当な難問であることは確かですぞ」

キュルケ、そしてコルベールの言葉に、タバサはこくりと首を縦に振った。

「そのためには、北花壇騎士のままでいることが、逆に助けとなる。だから……」

タバサの言葉に、さもありなんと太公望は頷く。

「うむ。そういうことであれば、わしも東花壇騎士団へ所属できたことを、好機と捉えることができる。とはいえ、現状のままでは少々手詰まり感があるのも事実だ。まったくもって面倒なことではあるが、この機会にいろいろと探っておくとするかのう」

母親から告げられたことを、全て鵜呑みにはできない。いや、したくないと思う自分が心の中に住んでいる。だからこそ、わたしは真実を知りたいと願うのだ。そんな子供じみたわがままに、また彼らを巻き込んでいる。それを自覚したタバサは、深く頭を下げた。

「ごめんなさい。わたしは、本当に迷惑ばかりかけている」

だが、そんなタバサの心からの謝罪を、太公望とキュルケは笑い飛ばした。

「それはお互い様だ。そもそもこれは、わし自身の判断の甘さから生じた事柄でもあるからのう」

「ねえ、タバサ。あたしはね、好きでやっているのよ？　いまさら、そんなこと気にしないでちょうだい」

残るコルベールも、苦笑しながら彼らに追随した。

「新たな道を歩もうと決意した生徒を、こうして後ろから支えるのも……私たち教師の役目ですからな」

そう言って、3人はタバサに向けてすっと片手を差し出した。それを見たタバサは、今にも泣き出しそうなまでに顔を歪めると――その小さな両手で、頼もしき仲間達の手を取り……ぎゅっと強く握り返した。

――その日の夜。

与えられた部屋に籠もり、タバサたちは改めて情報精査を行った。

それは、もちろんオルレアン大公家と現王家の間に起こった衝突について、これまでに入手している情報に関することである。そして現在は……先日判明したばかりの重大な懸念事項について、検討を重ねていた。

「あれって本物のエルフ……よね」

そう。あの怖ろしい『魔法薬』に刷り込まれた＜意志＞は、間違いなくエルフの姿をしていた――それは何故か。

「わたしたちのような、侵入者を排除するため？」

そのタバサの発言に、太公望は首を横に振る。

「いや、あれはあくまで薬効を象徴するような存在であって、決して＜夢世界＞への侵入者を怯えさせるような意図で作られたものではなかろう」

そもそも、このハルケギニアには太公望が実行している＜夢渡り＞と同等の効果を持つ魔法は存在していない。それは、これまで太公望が行った調査によって、ほぼ確定している。その太公望の言葉に、タバサは考え込んでしまった。そして、すぐさまとある結論に辿り着く。

「まさか、ジョゼフ王はエルフと通じている……？」

タバサは、その考えを口にした後……初めて、ジョゼフに対して畏れを抱いた。

それならば、納得がいくことがいくつもあるのだ。母を狂わせた『薬』の入手先が一切わからなかったこと。そして、ハルケギニアでどれほど探し求めても『解除薬』の入手はおろか、作るための手がかりすら得られなかったことについても……エルフが関わっているとなれば、容易に説明がつくのだ。

……しかし、コルベールがその考えを遮った。

「いや、あくまでそれは推論ですぞ？　結論を焦ってはいけません。確か、ガリアの東はエルフの住まう土地と国境を接していたはず。私が実際にそこへ行ったわけではありませんが、その地ではごく僅かながら、東方諸国やエルフと交易をする商人たちがいると、書物で読んだ記憶があります」

タバサは小さく頷いた。

「アーハンブラ城。砂漠（サハラ）西端の丘にある都市。オアシスと隣接する、極東の交易地です」

それを聞いた太公望が、首を捻って呟いた。

「ひょっとすると、そこからの伝手で例の『薬』を入手したのかもしれぬな。だが、エルフと裏で何らかの取引をしている可能性も否定できない状況だ。そのどちらにせよ、ジョゼフ王が容易ならざる『手』の持ち主であることに変わりはない。気を引き締めてかからねばのう」

「ミスタの言う通りだわ。どんな状況でも動けるようにしておかなきゃいけないわね」

キュルケの言葉に頷いた太公望は、そういえば……と、手をぽんと叩いた。

「その件で思い出したのだが。例の娘御について、タバサの母君に念のため確認をしておいたほうがよかろう。そうでないと、あの者がどこかで人質になっていたからこそ、おぬしたちへの監視が緩かったという可能性を捨てきれぬのだよ」

――例の娘。夢の中で出逢った、タバサそっくりの少女。タバサを「おねえさま」と呼び、オルレアン公夫人の記憶の中へ消えていった謎の存在。

「わかった。このあと、聞きに行く」

そして、タバサはさらなる衝撃を受けることとなる。

○●○●○●○●

オルレアン公夫人は、最初にその話を聞いたとき……心の内に秘めた動揺を娘に悟られまいとするだけで、精一杯であった。しかし、その『陽光の少女』が最後に言い残したというメッセージを聞いた途端――両手で己の顔を覆い、首を左右に何度も激しく振った。

「おおお……そんな……まさか、あの子が、このわたくしを……？」

そして、オルレアン公夫人は、指の隙間から絞り出すような嘆き声を紡ぎ出した。

「許してちょうだい……いいえ、憎んでちょうだい。シャルロット……あなただけではなく、あなたの妹すら救ってやれなかった、この無力な母を……！」

ごめんなさい……ごめんなさい……。ひたすらそれだけを呟きながら、その両目からとめどなく涙を溢れさせる母を、タバサはただ静かに抱き締めることしかできなかった。

――それから、しばしの刻が流れ、ようやく落ち着いたのであろう夫人は、娘に語り始めた。タバサ――シャルロット姫が誕生した１５年前。ティールの月、ヘイムダルの週、エオーの日……８時１０分過ぎに起きた出来事について。

「シャルロット。あなたは、知っていますね？　ガリア王家の紋

章に隠された意味を」

「はい。交差した2本の杖は……遙か昔に、王冠を巡って共に倒れた双子の兄弟を慰めるための……」

そこまで言って、タバサは気が付いた。母が、これから自分に対して、何を言おうとしているのかについて。

「あの日、この世に生まれ落ちたのは……シャルロット。あなただけではなかったのです。あの運命の日。わたくしたち夫婦は、天よりふたりの子を授かりました」

――ガリア王家最大の禁忌、それは『双子』。かつて国内で起きた、血で血を洗うような内紛と悲劇を繰り返さぬため、もしも王家に連なる者に双子が生まれた場合、後に生まれた者の命を奪う……あるいは二度と戻れぬ遠い場所へ流すという習慣がある。

「ですが、ガリア王族の禁忌がゆえに……あの子の命を奪うか、あるいは決して他人の目に触れぬ場所へと流すか。そのどちらかを選ぶしかなかったのです！　何故なら、あのときのわたくしたちは、王族であることを捨てることすら許されなかったから！！」

オルレアン公夫人は、タバサの身体にしがみつき、大声で泣いた。

「ですから……わたくしたち夫婦は選んだのです。あなたの妹を、遙か遠い地へ捨てることを。あの子が、その後どうなったのか……どこへ流されたのかすら、わたくしは知りません。我が子の行方を尋ねることすら許されなかったのです……禁忌が故に」

滂沱の涙を流しながら、許しを請う巡礼者の如く、夫人は言葉を

紡いだ。

「それなのに……あの子は……名前すらつけてやることができなかったあの子が！　この非情な母を、ずっと、護って……くれて……おお、おおお……！」

泣きじゃくる母を胸に抱きながら、タバサは戦慄していた。わたしに、双子の妹がいた。しかも、その妹は……遠い地へ捨てられて、今は行方不明だという。

＜サモン・サーヴァント＞が、何故自分と太公望を結びつけたのか。タバサは、その理由がようやくわかった気がした。

12歳で劇的に変わった運命、同じ『雪風』を纏う者、復讐を胸に抱いて歩んだ壮絶な人生、そして――生き別れになった双子の兄弟との邂逅。もはや、偶然などという言葉では語れない。これはきっと、必然であったのだ。

――もしも、わたしが彼と出会うことなく、今の『道』をそのまま突き進んでいたら。

父を殺されたことに対する復讐だけではなく、王位の正当性を理由に軍勢を率いて、現王家を滅ぼすために動いていたのかもしれない。そして、その先に――きっと、血を分けた双子の『妹』と敵対する『運命』が待ち受けていたのだ。

その後ガリアは――太公望が住んでいた＜崑崙＞と同じように、大きく衰退し……ついには、ひとが住める場所ではなくなるほどに、朽ち荒れ果ててしまうのだろう。

でも、わたしたちガリアの民は、彼ら＜崑崙＞の民のように、移住可能な土地も……それを可能とする『星の海を征く船』も持ってはいない。だから、きっとその後に……ほぼ間違いなく、住む場所を失った民と、そうでない者たちの間で争いが起こる。このハルケギニア全土を巻き込んだ、大きな戦乱が発生するのだ。

この地に住まう全ての者たちが、自分が生きるための場所を確保するために、杖を……あるいは剣を持つ。それをきっかけに引き起こされる、世界規模の戦争。そんなことになれば、間違いなく大勢の血が流れるだろう。ひょっとすると……それだけでは収まらずに、エルフたちと争うのかもしれない。そして、最後には全てが滅んでしまう――。

だからこそ『始祖』ブリミルは、それを防ぐために『事故』を起こし、彼をわたしの元へ遣わしたのだ。わたしの個人的な復讐をきっかけに始まるガリアの衰退と、それに続く滅亡の運命を回避するために。彼の故郷と同じ……滅びへの『道』を歩ませないために。

ならば、わたしは歩むべき道を――ここで大きく変える。タバサはそう決意した。

「母さま、もう泣かないで。このわたしが……あの子を探し出してくるから。わたしにはわかるの。妹は……必ずどこかで、無事に生きているって」

「……え？」

娘の言葉に、オルレアン公夫人は顔を上げた。

「そのためにも、わたしは今のまま……北花壇騎士のひとりとし

て、現王家からの仕事を請負い続けます」

涙で潤んだ母の目をじっと見つめながら、タバサは言葉を続けた。

「でも、いまさらジョゼフ王に忠誠を誓うことはできません。こうして母さまたちを逃がしてしまってから、それを正直に明かしても……叛意ありと受け取られて、今度こそ、母娘揃ってヴェルサルテイル宮殿の城壁に……首を並べることになりますから」

あの『人形』とのすり替え工作が、絶対に見破られないなどという保障はどこにもない。だが……タバサは、それを隠した。そして、愛する母に向かって微笑んだ。

「シャルロット、あなた……何を言って……」

「だから、今までと変わらぬ態度で王家に仕え続けます。『北花壇騎士団』は、ガリアの裏へ通じる道です。あそこならば、きっと妹のもとへ繋がる何かが見つかるでしょう。そこで、あの子を見つけることができたなら……」

母を抱く腕に力を込めて、タバサは言った。

「家族揃って、仲良く静かに暮らしましょう。地位も、あの湖畔の屋敷も……何もかも捨てて、ガリアから遠く離れた……ここゲルマニアの地で」

「おお、シャルロット……！　おお、おおおお……」

――こうして。『雪風』を纏う少女は、本来歩むはずであった歴史から大きく逸れ……父の死に関する真実と、妹の行方を追うため

の道を歩み始めた。

第７６話　雪風、古き道を知り立ちすくむ事（後書き）

ついに、シャルル王子暗殺に絡む真相の一部がタバサと太公望に開示されました。ただ、これは「シャルルが殺された真の理由」ではないわけですが……。

オルレアン夫人の決意は当方の創作ではなく、原作で本当にあったことです。タバサの冒険3巻や、その他の場所で、これを匂わせる場面が多く見られました。王の遺言状も実際に原作に存在しており、読み上げられています。ですので……薬で狂わされたあとの彼女―王族の責任という衣を脱ぎ捨てた、オルレアン夫人の、母親としての本心のあらわれなのだと、個人的には受け取りました。

タバサの父であるシャルル王子が各方面に手回しして、裏で動いていたのも事実です。しかし、それがあまりにも巧妙だったが故に―あの鬼才ジョゼフに気付かれなかった。彼が知っていたら、その後の運命は大きく変わっていたことでしょう。しかし、夫が動いていたことを知っていたのはオルレアン夫人ただひとり。それ故に、後に続くガリア王家の悲劇、他国からの乗っ取り工作、タバサの双子の妹との敵対へと繋がってしまうという。

しかも、その妹との敵対（実際には、敵対というのとはちょっと違うのですが）も、オルレアン夫人が再び血が流れることを恐れるがゆえに、より大きくなってしまったという皮肉な面もあります。

その母親が、この時点で回復したが為に知った衝撃の事実。知らなかったが故に復讐のみを目指してしまったタバサに、運命の岐路が立ち塞がったわけですが……本作タバサは、このような道を選びました。

……何が言いたかったのかと申しますと。情報とその正確さは本当に大切なものなのです。知らないということは、実に怖ろしい、見たいものだけ見ていると痛い目に遭うという。

自分がまさに知らないことだらけであるが故に、余計にそう思う…

…今のところ青年な筆者による、魂の叫びでした。以上、終わり！

次回から新章突入です。

２０１１／０７／１０　１０：００　誤字脱字、本文加筆修正

２０１１／０７／１１　誤字脱字修正

第７７話　灰色の公爵、その手で輪を踊らせるの事

――雪風の姫君が、ゲルマニアで新たな道を歩み出したのとほぼ同じ頃。

トリステイン王国の首都、トリスタニアの街中央部を走るブルドンネ通り突き当たりにある王宮の一室で。ひとりの可憐な少女が、その顔と若さに似合わぬ、深き愁いを帯びた表情で、眼下に映る都市を眺めていた。

彼女の名は、アンリエッタ・ド・トリステイン。『水の王国の白百合姫』とも称されるその姫君は、御年１７歳。気品のある顔立ちに、水底のような淡い碧眼と高い鼻が目を引く、見目麗しい美少女であった。

水の国の姫君は、ほっそりとした手に水晶の飾りがついた杖を持っていた。先程から、その杖と都市を行き交う人々の姿を交互に眺め、アンリエッタ姫は、何度も何度も、繰り返しため息をついていた。現在、彼女は――政治。そして胸の奥に秘めた恋について、人知れぬ深刻な悩みを抱えているのであった。

と……そんなところへ、侍女のひとりが来客を告げる報せを持って現れた。それを聞いた姫君の顔が、ぱあああっと輝く。

何故ならば、その客とは……アンリエッタ姫が、その来訪を今か今かと待ちわびていた人物であったからだ。

「すぐにお通しして」

その言葉を受けた侍女が退出すると、アンリエッタは、ほぅ……と息を吐き出した。

「大丈夫、あのかたならば、きっとうまくやってくださったはず……！」

現在、この麗しき姫君が抱えている政治と恋の悩み。それは日を追うごとに状況が悪くなるばかりであったが、ごく最近になって――思わぬ場所から、彼女の心に安らぎを与えてくれる強力な支援者が現れたのだ。

そして、その人物が居室内へ通されてきたとき。彼女は思わず声を上げ、心の底から信頼できるその客人の元へ、たたっと駆け寄っていった。

「ラ・ヴァリエール公爵！」

――姫が待ちわびていた来客とは、ラ・ヴァリエール公爵そのひとであった。

「これはこれは、アンリエッタ姫殿下御自らお出迎えくださるとは、感激の至りでございます。老骨に鞭打って参内した甲斐がございました」

「まあ、公爵ったら！　わたくしをからかっていらっしゃるのね」

それを聞いたラ・ヴァリエール公爵は、大げさに両腕を広げ、首を左右に振った。

「そんな、畏れ多い！　このわたくしめが、殿下をからかうです

と!?」

そう言って、公爵はにっこりと姫君へ笑いかけた。アンリエッタは、その笑顔に思わず釣られて微笑んだ。そして、すっと左手を公爵の前へ差し出す。

ラ・ヴァリエール公爵は、姫君の前へ静かに歩み寄ると……片膝をついて、恭しくその手をとり、軽く口づけた。

「それで……首尾のほうはいかがでしたか?」

姫の言葉に、公爵の顔が少し陰った。

「正直なところ、芳しくありませぬ。相変わらず議会の意見は3つに割れており、今日も過半数を取れませんでした。アルビオンへの援軍供出の問い合わせをするというだけで、この始末。国内の一部有力貴族から、支援に関する協力を取り付けることはできましたが……まずはこれを通さぬことには、内政干渉と受け取られてしまいます」

それを聞いたアンリエッタ姫は、眉をひそめて言い放った。

「何故です! どうして、同盟国であるアルビオン王国へ、我が国からの協力が必要か否かの問い合わせをしようとするだけで、こんなにも意見が割れるのです!? 馬鹿なひとたち! もしもアルビオンが陥ちたなら、次に狙われるのは、ほぼ間違いなく我がトリステインなのですよ!?」

姫の言葉に、公爵は重々しく頷いた。

「まさに姫殿下の仰る通りです。彼らには、何故その程度のことがわからぬのでしょうか……はっきり申し上げて、このわたくしにも理解できませぬ」

深くため息をついた公爵に、アンリエッタは問いただした。

「ヴァリエール公爵、そしてグラモン伯爵とその一派が賛成側に回っているのは既に承知しています。現時点で、未だに反対を唱えているのは……いったいどの派閥なのです！？」

「おもに、高等法院に属する者たちです。彼らは、みな一様に『まずは国内の乱れを正すことが先決』そう触れ回っております。マザリーニ枢機卿とその周囲については中立を保っています。せめて、どちらか片方をこちら側へ取り込むことができれば、話は早いのですが……」

「かの『鳥の骨』を動かすことは、公爵の手腕をもってしても難しいと？」

それを聞いたラ・ヴァリエール公爵の片眉がピクリと動いた。

「姫殿下！　そんな、街女が口にするような『二つ名』で枢機卿を呼ぶなど！」

アンリエッタ姫の口先が、つんと尖った。

「これぐらい、別にいいじゃない。なにせこのトリステインの王さまは、マザリーニ枢機卿なのですから。ラ・ヴァリエール公爵は、街で流行っている小唄をご存じ？　トリステインには美貌はあっても杖がない。杖を握るは枢機卿。灰色帽子の鳥の骨……」

「姫殿下。わたくしを、これ以上困らせないでください」

苦笑いをする公爵を見たアンリエッタ姫は、それで少し気が晴れたのだろう。クスリと笑って先を促した。ラ・ヴァリエール公爵は、ごほんと咳払いをすると、現状報告を再開する。

「マザリーニ枢機卿は、現在隣国ゲルマニアとの軍事防衛同盟の成立を目指して動いております。ですから、彼は中立を保っているのです。わたくしの見立てですと、アルビオンが陥落した場合に備えて、先の先を読んで手を打つつもりなのでしょう。トリステインを生き残らせるための、まさに苦肉の策ですな」

「アルビオンが陥ちぬよう、先に手を打てばよいではありませんか！」

アンリエッタ姫が思わず発した抗議の叫び声を、ラ・ヴァリエール公爵はなだめるような口調で取りなした。

「常に複数の『道』を用意しておくのは、政治における基本です。わたくしと鳥の……ゴホン。枢機卿は意見こそ異なっておりますが、方策としては間違ってはいないので、責めるわけにも参りませぬ。ですから、攻め落とすのならば高等法院側なのですが……これがなかなかうまくいかずに困っております。まったくもって、力不足で申し訳ございません」

そう言ってうなだれたラ・ヴァリエール公爵に、アンリエッタは労いの言葉をかけた。

「いいえ、公爵は本当に良くやってくださっているわ。わたくし

など、何もできず……こうして公爵にばかり頼りきっている状態なのですから。いまわたくしの手元にあるのは、これこの通り……姫という名の、単なるお飾りの身分だけ」

両の手を合わせ、アンリエッタは小さく首を振り、自分の不甲斐なさを嘆いた。

「アルビオン王家のひとびとは、わたくしの親戚だというのに……彼らに手を差し伸べるどころか、声を聞くことすらできない。今のわたくしは、鳥籠……灰色の骨によって作られた檻に閉じこめられた、自由に鳴くことすら叶わぬ無力な小鳥です」

俯き、深いため息をついた姫に、ラ・ヴァリエール公爵は悔しげな呟きを漏らした。

「ああ……このわたくしめに、もっと＜力＞があれば……姫殿下に、そのような御顔をさせずとも済みますものを！　我が身の何たる不甲斐なさよ！　殿下におかれましては、誠に……誠に申し訳なく……！！」

床に崩れ落ちるようにして膝をつき、両手で顔を覆って無念を噛みしめるラ・ヴァリエール公爵の姿を見たアンリエッタ姫は――感極まったといった表情を顔全体に浮かべ、ラ・ヴァリエール公爵の手を取った。

「ああ、公爵！　ラ・ヴァリエール公爵！　そんなことを言わないでちょうだい！　母があのような状態である今……わたくしには、もうあなたしか頼れるひとがいないのです。同じ王家の血を引く、公爵だけが頼りなのです」

「姫殿下……ッ！」

公爵も、姫と同じく感極まったといった体であった。そんな彼の両目からは、滂沱の如き大量の水が、ぼろぼろと流れ落ちている。

「もったいのうございます。そのお言葉だけで、充分でございます。トリステイン王家にお仕えして幾星霜、これほど感激したことはございませぬ。姫殿下より頂戴したお言葉と信頼を無駄にせぬためにも、我が公爵家の総力を挙げて、かの議題を通してご覧に入れます」

「おお、ラ・ヴァリエール公爵……！」

アンリエッタ姫は、この頼もしき味方――幼い頃から伯父のように慕ってきた公爵の言葉に、心を打たれた。そう、遠縁でこそあるものの、彼は自分と同じ血族なのだ。このひとをもっと大切にしなければならない。

そうだ、亡き父がよく言っていたではないか。忠誠には報いるものがなくてはならぬと。アンリエッタ姫は、ラ・ヴァリエール公爵の忠誠に報いるために、今できることを考えた。そして彼女は決断した――それが、いったいどんな意味を持つのかを知らずに。

アンリエッタ姫は、右手の薬指に填っていたものをすっと引き抜くと、未だ床に蹲っているラ・ヴァリエール公爵の手に、それを乗せた。

「ラ・ヴァリエール公爵。これを受け取ってください」

己の手に乗せられたものを見たラ・ヴァリエール公爵は、目を剥

いた。

「こ、これは……！？」

もちろん、彼は知っていた。今、自分の手にある『指輪』が何であるのか。

「先日、母から戴いた『水のルビー』という指輪です」

静かに微笑むアンリエッタ姫と、手の中にある『水のルビー』を、ラ・ヴァリエール公爵は……まるで、信じられないものを見るような目つきで交互に眺めた。

「姫殿下！　わたくしが、このようなものを受け取るわけには参りませぬ！」

慌てて『指輪』を返そうとした公爵を、だがアンリエッタ姫は遮った。

「忠誠には、報いるところがなければなりません。嫌な話ですが、宮廷政治にはお金がかかるものと聞き及んでいます。いざというときは、それを売り払って資金に変えてくださっても一向に構いません」

それを聞いた公爵は、思わず息を飲んだ。そして、彼はすぐさま気が付いた。アンリエッタ姫は、この『水のルビー』にどういう謂われがあるのか、全く知らない――いや、教えられていないのだと。

「し、しかし……この『指輪』をいただくということは……」

本当に自分がこれを受け取ってよいものかどうか、公爵は迷った。彼の手の上では『水のルビー』が小さく踊っていた。何故ならば、ラ・ヴァリエール公爵の両腕が、両掌が……ふるふると震えていたから。

「これは命令です。返還はまかり成りませぬ」

その言葉を最後にぷいと横を向いてしまった姫君へ、ラ・ヴァリエール公爵は心底参ったといった声で呟いた。

「ならば……しばし、この『水のルビー』は当家でお預かり致します」

公爵が提示したその代案にも、アンリエッタ姫は頷かなかった。

「わたくしは、あなたに下賜すると申しているのです」

姫君の決意は固いようだ。ならば、ここは素直に受け取っておこう。ただし――後々のことを考えると、下手に流してしまうわけにはいかない。そう考えたラ・ヴァリエール公爵は、すぐさまこの突発事態に対応すべく、全く別の方向からアンリエッタ姫に反撃を加えることにした。

「さようですか……それでは姫殿下のご意志として、ありがたく頂戴致します」

そう言って、懐から取り出した絹布に、うやうやしい手つきでもってそれを包もうとしたラ・ヴァリエール公爵は、その前に改めて『水のルビー』と姫君の顔を交互に見遣りながら、こう言った。

「それにしても、姫殿下は思い切ったことをなさいますな！　わたくしは、この『指輪』は姫殿下が想い人と交わす『結婚指輪』として相応しい品なのではと、つねづね思っていたのですが。たとえば……そう、アルビオンのウェールズ皇太子殿下と」

それを聞いたアンリエッタは、目を丸くした。次いで、その白く透き通った頬をすっと朱に染める。

「ど、どうして公爵がそれを……？」

絹布で包み込んだ『指輪』をそっと懐中へと仕舞いつつ、まるでとびっきりの悪戯を成功させた子供のように瞳を煌めかせた公爵は、その表情とはまるで正反対の……実に重々しい口調でこう告げた。

「3年前……わたくしと共に、ラグドリアン湖畔で行われた園遊会に出席していた我が末娘ルイズの髪の色が、いつのまにか艶やかな栗色に染められておりましてな。いくら本人に問いただしても、あの子は頑なまでにその理由を話そうとしなかったのですよ」

――ラグドリアン湖畔の園遊会。それは、今からちょうど3年前。マリアンヌ王妃の誕生日を祝う……と、いうのは名目上のことで、実際には最愛の夫である国王を失い、ふさぎ込みがちであった彼女を慰めるために――世界各国から、多くの賓客を招いて執り行われた、社交と贅を尽くした席のことである。

……そこで、アンリエッタ姫はひとりの青年に恋をした。

彼の名はウェールズ・テューダー。白の国アルビオンの皇太子にして、今は亡き父王の実兄、現アルビオン王国国王ジェームズ一世の一人息子。つまり、彼らは従兄妹同士ということになる。

きらきらと水面輝く湖畔で、彼らは偶然と呼ぶには出来すぎた出逢いを果たした。いつしかふたりは惹かれあい、2週間もの長きに渡って――しかし恋するふたりにとっては短すぎる――園遊会の間、逢瀬を重ねた。

だが、よりにもよって一国の王女が、夜半過ぎに天幕を抜け出して外へ出ることなど、普通に考えたならば不可能だ。それを可能にしたのが――アンリエッタ姫の幼なじみにして、1つ年下の少女・ルイズの存在であった。

アンリエッタは、ルイズに自分の『身代わり』になってくれるよう頼み込んだ。他でもない姫様のご命令であれば……と、ルイズは素直にそれを引き受け、姫君が用意した魔法の染料によって、自分の髪をアンリエッタ姫と同じ綺麗な栗色に染めると――そのまま王女の天幕に詰め切っていた。

もっとも。ルイズ自身は、仲の良い姫君が気晴らしのために、夜の散歩を楽しんでいるだけだと思っていたのだが。

「娘は、ああ見えて頑固ですからな。それで、仕方なく殿下の天幕近くに我が手の者を複数名伏せておきましたところ……なんと！　フードを目深に被った姫様が、湖畔の方角へ走ってゆかれるのを目撃してしまったと。まあ、こういうわけでございまして」

アンリエッタの顔は、まるで熟れた苺のように真っ赤になった。見られていた！　よりにもよって、ラ・ヴァリエール公爵の手の者に、自分たちふたりが密会していた場面を！

恥ずかしさのあまり、アンリエッタは何とかこの空気を変えよう

と、必死に頭を回転させた。そこで、彼女ははたと思いついた。今の話からそれほど外れてはおらず、かつお互いにとって共通の話題があるではないか！

「こ、ここ公爵。ところで……その。ル、ルイズは、最近どうしていますの？　昔は、よく伝書フクロウを飛ばしてくれていたのですが……魔法学院へ入学してからというもの、すっかり交流が途絶えてしまって」

かなり無理矢理な話題転換であったが、公爵は顔色ひとつ変えず、真面目くさった表情で答えた。

「現在は、夏休みで我が屋敷へ戻っております。連日、我が妻カリーヌの指導を受け＜フライ＞の練習を繰り返しておりますが、これがなかなかの上達ぶりでしてな！　あまりの速さに、もうこのわたくしでは、ふたりに追いつくこと叶いませぬ」

表情は全く動いていないが、しかしどこか嬉しげな声で紡ぎ出されたその言葉に、アンリエッタの気持ちが一挙に華やいだ。わたくしのおともだちが！　あの、どんな＜魔法＞も失敗させてしまっていたルイズが、ついに＜系統＞に目覚めたのだと、心優しい姫君は、まるで我が事のように喜んだ。

「まあ！　元マンティコア隊のラ・ヴァリエール公爵が＜フライ＞で追いつけないですって!?　と、いうことは……つまり、わたくしの大切な『おともだち』は＜風系統＞に目覚めたのね」

「大切な『おともだち』などと……もったいないお言葉です。姫殿下がそのように仰ってくださったとルイズが知れば、さぞ喜ぶことでしょう」

先程までとは一転。笑み崩れた公爵の顔を見たアンリエッタは、小さく微笑んだ。ラ・ヴァリエール公爵が、3人の娘たちを目に入れても痛くないほどに可愛がっているというのは、宮廷内部でも有名な話であったから。

「わたくしは、ルイズが＜系統＞に目覚めたことのほうが嬉しいですわ。あの子は、ずっとひとりで苦しんでいましたからね。ああ、ルイズ！　ルイズ・フランソワーズ！　久しぶりに顔を見たいものだわ！」

と、姫君の言葉を聞いたラ・ヴァリエール公爵は、それでしたら……と、申し出た。

「夏休み期間は長いですからな。姫殿下のご都合がよろしい時に、わたくしが連れて参りましょう」

アンリエッタは、その公爵の申し出に飛びついた。鬱々としていた日々を過ごしていた彼女にとって、今……何よりも必要であったのは、気を許せる友人と、ただゆっくりと語らうことのできる時間であったから。

「わたくしの都合などと！　たとえ予定が入っていても、そのようなものは全て後回しにしてしまえばよいのです！」

「姫殿下！　王族たるもの、間違ってもそのようなことを申してはなりませぬ」

「まあ！　公爵。あなたまで枢機卿のようなことをおっしゃるのね！？」

心外だとばかりに口を尖らせた姫に、公爵は至極真面目な顔で切り返した。

「こうして苦言を呈しますのも、臣下として当然の務めでございますれば」

だがしかし。その言葉を発し終えた直後。ラ・ヴァリエール公爵は、その顔に大きな笑みを浮かべていた。

「で、ご都合はいかがですか？　アンリエッタ姫殿下」

それを見たアンリエッタ姫は、実に満足げに……見た者全てが傅くような優雅な微笑みでもって、こう答えた。

「ラ・ヴァリエール公爵は、明日も王宮へいらっしゃいますの？」

「もちろんでございます。アルビオンの件は、まさしく急務ですからな」

「それでしたら、明日一緒に連れてきてくださいな。久しぶりに、ルイズとお茶を楽しみたいわ」

「姫殿下の仰せとあらば、わたくしめに否などございませぬ」

その後、ふたりは揃って笑い声を上げた。

――それからしばらくして。

ラ・ヴァリエール公爵が退室した後。アンリエッタは、再び深い

ため息をついた。

「トリステイン王国で一番の権勢を誇る、あのラ・ヴァリエール公爵ですら議会を完全に纏めきれないだなんて。いったい、この国はどうなってしまうのかしら……」

ついつい憎まれ口のようなものを叩いてしまったが、マザリーニ枢機卿がよくやってくれていることは、アンリエッタ姫にもわかっている。もしも、今すぐ即位して彼と同じ事をしろと言われても、悔しいがまず無理だと思っていた。それこそ、国の崩壊を招きかねない。

それに。アンリエッタ姫の王位継承権は現在第二位。第一位の継承権を持つ彼女の母親は、数年前に亡くなった父王の喪に服し続け、多くの貴族たちから意見をされているにも関わらず、未だに即位しようとしない。そのため、ずっとトリステインの王座は空位のままとなっている。

「お母さまがご病気だというのは、やはり本当のことなのかしら……」

嫌でも耳に入ってくる、宮廷雀たちの噂話。そこでまことしやかに語られるのは、アンリエッタの母・マリアンヌ王妃が心の病を患っているという内容である。

曰く、国王陛下崩御の折に、あまりの悲しみに耐えきれずに心が壊れてしまったのだと。それが故に、国政に携わることはおろか、自室にただひとり閉じ籠もり続けているのだと。

確かに、ここ数年間の母の様子はおかしいと、アンリエッタはつ

ねづね思っていた。

快活で、笑顔に溢れていたかつての姿が、まるで幻であるかのように、今のマリアンヌ王妃は暗い影を帯びていた。娘であるアンリエッタが部屋を訪れても、ほとんど笑うことなどない。母はただ、寂しげに頷き……小声で挨拶の言葉を呟くだけだ。

ここ最近で、母に関して何か変わったことがあったかといえば――これは、もうあなたのものです。それだけを告げ、あの『水のルビー』を自分の右手薬指に填めてくれたことだけだ。

「このわたくしに、もっとできることがあればいいのに……」

そう呟き、再びため息をついたアンリエッタは、窓を開け――天に祈った。

「おお、始祖ブリミルよ。どうかこのトリステイン王国を、そして今は遠きアルビオンを、あまねく平和へとお導きください……！」

○●○●○●○●

――王宮からの帰り道。

ラ・ヴァリエール公爵は、竜籠の中で小さく震えていた。彼の手の中では『水のルビー』が、その名に相応しい深き水の如き色を湛え、静かに輝いている。

「まさか……このわしが『指輪』を継承することになろうとは……」

愛娘ルイズの＜系統＞を確定させるため、少しのあいだだけマリアンヌ王妃から借り受けることができればよい。ラ・ヴァリエール公爵は、そう考えていただけなのだ。

――水のルビー。それは、トリステイン王家設立の際に『始祖』ブリミルより賜ったとされる、伝説の秘宝である。それから６０００年の間、王家によって護られ……連綿と受け継がれてきた。

その秘宝を受け継ぐべき人物はただひとり『王権の継承者』。つまり、この『水のルビー』は本来『国王』が持つべき品であり、その『王権』を象徴する品なのである。これは、なにもトリステインに限ったことではない。ハルケギニアの三王家全てに共通することなのだ。

そう……本来であればこの『指輪』を持てる者は、その国の王。あるいは、次期王位継承者として、既に定められている者だけに限られるのだ。ただし、その価値が故に――その情報を知る者は王族、あるいはそれにごく近しい者。及びロマリア教皇と、ブリミル教会から各国家へと派遣されてきた枢機卿のみとなっている。

本来であれば、ロマリアの＜教皇＞も、代々『火のルビー』と呼ばれる始祖の指輪を継承するはずであったのだが……なんと１０数年前に盗難の憂き目に遭い、その行方は杳として知れない。

その『指輪』が。つい先日まで、マリアンヌ王妃がその指に填めていた王家の秘宝が。いつのまにかアンリエッタ姫の右手で静かに輝いていたばかりか、なんと自分の手元へ転がり込んできてしまった。

――ラ・ヴァリエール公爵は、突如のし掛かってきた重圧に打ち震えていた。

確かに、公爵はトリステインを護るために立たんとしていた。しかし、彼は……現王家を打倒して王座を奪おうなどとは、露ほども考えていなかった。アンリエッタ姫殿下の覚えを良くし、危機を乗り越えるまでは摂政として、マザリーニ枢機卿と共に政治の杖を振るう。

あるいは、議会を通じて――宮廷内で、王政府と国に対する危機感を大いに煽り、元王家から自然に王位を禅譲される方向で動く。そのために、グラモン伯爵をはじめとした信用のおける極々一部の有力貴族と内通し、いずれに転んでも問題がないよう、既に協力を取り付けることに成功していた。

「既にわかっていたことだが……やはり、マリアンヌ様はご病気であらせられるのだ……」

王権の象徴たる『水のルビー』を娘に手渡す。つまり、彼女は王位継承権を完全に放棄し――アンリエッタ姫にその義務を譲り渡したのだ。にも関わらず『指輪』に関する口伝を、次世代の継承者に一切申し渡していないとは。正気の沙汰とは思えない。

……だが、これは受け取り方によっては――アンリエッタ姫は、自ら王位継承権を放棄し、第三位の継承権を持つラ・ヴァリエール公爵へ、トリステインの王権を平和裏に禅譲したともいえるのだ。

少なくとも、マザリーニ枢機卿がこれを知れば――今後、ラ・ヴァリエール公爵と敵対することはなくなるだろう。いや、むしろ協力して事に当たれるに違いない。何故なら彼は、この『指輪』の意

味を良く理解しているはずだから。

「やはり、これは……わしに与えられた『天命』なのだろうな……」

正統な『王権』は、継承権を持っていた姫殿下が、自らの意志でもって公爵に『下賜』されたのだ。彼がこれから行おうとしていることは、断じて王位簒奪などではない。しかも、ラ・ヴァリエール公爵は、アンリエッタ姫に何度も意思確認を取っているのだ。

当初は受け取れないと。次に、当家でしばしお預かりすると。そして最後に――ならば意志を継ぎますと。

「この事実を、姫……そしてマザリーニ枢機卿を交えて再度確認するのがよかろうな。信頼のおける証人たちの前で」

だがしかし、その前にすべきことが山ほどある。公爵は、指輪を再び絹布に包んで懐中に仕舞うと、手元に置いてあった資料に目を通す。

「ふふッ、ジャンは……ワルド子爵は、早速期待に応えてくれた。なるほど、高等法院の参事官どもが揃って援軍供出反対を唱えるわけだ。あのリッシュモン高等法院長が『レコン・キスタ』と通じていたとなれば、それも道理だ」

――リッシュモン高等法院長。数十年の長きに渡ってトリステイン王家に仕える政治家にして、王国の司法権を担う機関『高等法院』の長である。

王国の各種法律を司る重職にありながら、その裏では金に汚い政

治家として名を馳せてきた。ラ・ヴァリエール公爵のような、誇り高く潔癖な貴族にとって、唾棄すべき行為をこれまで散々行ってきているのだが、しかし。いつもその証拠が挙がる寸前で見事逃げ切ってしまうという、実に狡猾な面を持つ人物でもあった。

その男が、今度は王家を他国へ売り渡すに等しい行為をしているのだ。これが明るみになれば、罷免程度では済まない。良くて投獄。普通に考えれば――火あぶりの刑は免れない。国家の安全機密を漏らすということ、これ即ち大逆罪であるからだ。

「とはいえ、現段階で奴を抑えるのは色々な意味で危険だ。むしろ、泳がせておいたほうがよかろう。各種情報、周囲の人間、そして金――あらゆる流れを見て……それからだな、あの男を処断するのは」

立派な口髭をしごきながら、公爵は独りごちた。

「いや、事と次第によっては、こちら側に取り込むことも考えておいたほうがよかろう。あれほど狡猾な男だ、使い方次第では間違いなく今後の役に立つ。毒も、少量ならば薬に変わる。政治というものは、残念ながら綺麗事だけでは済まないものだからな」

その程度のことができずして、荒れ狂う国の舵取りなどできるものか。公爵は、完全に腹をくくった。好き嫌いを言っている場合では最早ないのだ。清濁併せ飲むことができなければ、これから先が思いやられる……と。

そして、ラ・ヴァリエール公爵は……袖口裏の隠しポケットから、既に空となった目薬瓶を取り出すと――それを片手でいじりながら、善後策を検討し始めた。

○●○●○●○●

――公爵が、灰色に染まる覚悟を決めたのと、ほぼ同刻。

ガリア王国の首都に建つ巨大な宮殿・ヴェルサルテイル。その一画に在る国王の居室にて。ハルケギニア全土を模した壮大な模型を前にして、蒼き髪の狂王・ガリア国王ジョゼフ一世は、大声で嗤いながら――その両手でもって、何かを動かしていた。

「うむ。これで『白の国』での準備はほぼ整ったな。あとは、こいつをどう取るかだ！　本格的に面白くなってくるのは、ここからなのだ。よくよく考えて作戦を立てねばならぬな！」

現在彼が手にしているのは、黒曜石で作られた『フネ』の精巧な模型であった。

「艦隊旗艦『ロイヤル・ソヴリン』号。備砲は両舷合わせてなんと１０８門！　おまけに、竜騎兵まで積み込める巨大戦艦だ。いいぞ、実に素晴らしい！　まさしく『新たな皇帝』が乗るに相応しいフネだ！」

ジョゼフは、その『フネ』をそっと『浮遊大陸』の模型に載せると、かつかつと靴音を響き渡らせながら部屋を歩き回り、色々な角度からそれを眺め回した。

「ふ～む。いくつか候補はあるのだが……やはりここか！」

どうやら、お気に召す場所が見つかったらしい。模型の上に置い

た『フネ』の位置を微妙に変えると……ジョゼフは、すぐ側のテーブルから1体の人形を掴み取った。黒髪の、細い形をした女性の人形である。それを愛おしそうに撫で回したあと、ジョゼフはその耳元に口を近づけた。

「聞いているか？　余の可愛い女神（ミューズ）。おお！　そうかそうか、ちゃんと聞いていてくれたな！　例の件だがな、置き場所が決まった。そうだ、それだよ！　さすがは余のミューズだ、実に話が分かる」

ジョゼフは、嬉しげな笑みを浮かべると、人形の耳に向かって囁いた。

「その場所だがな。『レキシントン』にしようと思うのだ。なに？　お前も賛成してくれるのか！　そうかそうか！　実に喜ばしいことだ。では、早速その通りに」

と……そこで、ふいにジョゼフは口を噤んだ。人形から、何やら声が聞こえてきたからだ。それを聞いたジョゼフは、うんうんと頷くような仕草をしながら、声を上げた。

「ほう？　『水の王国』で妙な動き!?　ふぅむ……なるほど、なるほど。かの御仁は徹底的な保守派。それが何故か支援側に回っていると。さすがは余のミューズだ、よくぞ知らせてくれた。素晴らしい働きだ！　うむうむ、確かにおかしいぞ？　あの国で、何かが動こうとしているのか!?　ようやく白百合の蕾が花開くのか、あるいは……」

そこまで呟いたジョゼフは、目を見開いた。

「そうだ！　確か、例の『東大陸の伝説』が動き出していたな！

確か……次の移動先は、かの御仁が住まう場所であった！　まさかとは思うが、早くもこの遊技（ゲーム）に参戦してきたかッ！？」

そこまで言うと、ジョゼフは再びテーブルの上に手を伸ばした。そこには、小さな木箱――洒落た意匠を全面にあしらった、宝石箱のようなそれを取り上げると、蓋を開けて中身を取り出した。

――そこに入っていたのは、氷水晶（アイス・クリスタル）から造られた、親指大の人形2体であった。

1体は、節くれ立った杖を持つ少女を模ったもの。もう1体は、先がふたつに割れた異国風のマントを身に纏った少年の人形であった。数ある水晶の中でも、特に透明度の高い氷水晶で造られたそれらは、まるで酒杯に浮かべられた氷のように、冷たく……つややかな煌めきを放っていた。

ジョゼフは、ふたつの人形を取り出すと、もう用はないとばかりに宝石箱を放り投げた。床に落ちたそれは、カシャン……という鈍い音と共にばらばらになった。

「さあ！　先頃出来たばかりの『駒』を、ここに配置するぞ！」

そう言って、ジョゼフが嬉しげに人形を置いたのは、トリステイン国境沿いにあるラ・ヴァリエール公爵領が在る場所。

「おっと、余としたことが、ついうっかり忘れていた！　急いでかの御仁の『駒』も造らせねばならぬな！　仮に参戦してこなかったとしてもだ！　遊技の駒は、たくさんあって困るものではないからな！　ははははははッ！！」

――ハルケギニアの大いなる歴史は、静かに。だが、確実に胎動を始めていた――。

第77話　灰色の公爵、その手で輪を踊らせるの事（後書き）

さあ、またしてもたいへんなことになってまいりました。しらないってこわいなあ（棒読み）。

原作でも思ったんですけど、姫様……よりにもよって母上から譲り受けた魔法の指輪をあっさりと友人に渡しちゃうって、どうかと思うんです。これだけは、どう解釈しても言い訳できない。

もっとも、それの由来をちゃんと告げていなかったお母さんのほうに問題があったわけですが。前もって知っていれば、さすがに「売り飛ばしてもかまわない」なんて言わなかったと思うんだ……。

ところで『指輪が王権の象徴』というのは、本作オリジナルのように思われるかもしれませんが、実は違います。

ジョゼフが虚無に目覚めたのが、王位継承後に指輪と香炉を受け取ってからであること。風のルビーが、瀕死のアルビオン王から皇太子ウェールズに継承されていたことから取ったものです。始祖の祈祷書は、あくまで『婚姻』のときに使われる秘宝であるため、より重視されるのが『指輪』。オルゴールとか香炉にもそんなイメージがありませんか？　結婚式の引き出物的な。円鏡については、他と異なる使われ方をしていますが……ロマリアは王家とはまた別の道を歩んでますから。

ちなみに火のルビーに関しては……原作と同じく、あのひとが持っています。

指輪の『王権』そして、軍艦『ロイヤル・ソヴリン（王権）』が同

時に出て参りました。そう……本作ではまだ奪われていなかったのですよ！　この戦艦を失ったことがきっかけで、アルビオン王党派は徐々に追い詰められていくわけですが……さて、本作ではいったいどうなるでしょうか！？

なお、サブタイトルの「指輪易姓革命」ですが、本来の易姓革命とは違うのですが（易姓革命とは、本来中国の政治概念）、相応しいタイトルを色々と検討した結果、こうなりました。ちなみに、次点候補は「星降る夜に」でした。これは、もしかすると今後採用する……かもしれません。

第78話　成り終えし者と始まる者

――ふたつの国で、歴史が大きく動こうとしていた……ちょうどそのころ。

トリステイン王国東の国境にあるラ・ヴァリエール公爵家の屋敷の一画。そこの使用人居住区として割り振られている場所で、平賀才人がうめき声を上げていた。

「か、身体中の筋肉が、悲鳴あげてやがる……俺、もう動けねえ……」

ベッドの上に横たわりながら、才人は激しく後悔していた。こんなことになるのなら、やはり太公望たちと一緒にキュルケの実家へ遊びに行くべきだった……と。

……どうして、才人がこのような状態になっているのかというと。

歓待期間終了後――つまり、今からちょうど1週間前のことだ。ルイズの『護衛』としてラ・ヴァリエール公爵家へ残った才人に対し、ルイズの父である公爵がこう言い渡したからだ。

「大切な娘の護衛を任せる以上、それ相応の使い手になってもらわねば困る」

……と。そして、それからの一週間、才人は毎日のように――昼間はルイズママ、夜はルイズパパの手によって、たっぷりと『稽古』をつけられるハメに陥ったのである。

――稽古初日。

よりにもよって、あの『烈風』と剣を交える――しかも、デルフではなく訓練用の木刀を使ってそれを行うと知った才人は、当然の如く及び腰になったのだが。

「魔法が使えぬ平民相手に、無体な真似はしませんから大丈夫です」

そう告げたカリーヌ夫人に、練兵場まで無理矢理連れ出されてしまった。本人の声はもちろんのこと、護衛対象であるルイズの意見すら聞いてもらえなかった。

……ちなみに。

「いくらなんでも、あんなのと戦えるわけねーだろ！　ＲＰＧ始めて城から一歩外に出たら、目の前にラスボスが突っ立ってるようなもんじゃねーかよ！　クソゲーとかってレベルじゃねーぞ！？」

これは、よりにもよって『烈風』カリンと相対することになった才人が、稽古前に思わず漏らした本音である。

極端な喩えだが、あながち間違っていないものだから質が悪い。なにせ才人は、ごくごく最近――その『ラスボス』が実際に戦っているところを、すぐ間近で目撃しているのだ。実際、カリーヌ夫人の目から見た才人の姿は、さながら冒険開始時の『初期レベルの勇者』あるいは、経験値稼ぎのためにひたすら狩られ続ける『ザコモンスター』といったところであろう。

そして『稽古』が始まったのだが……確かに、カリーヌ夫人は手

加減をしてくれた。『剣士』である才人に合わせ、なんと自分も＜剣の魔法＞しか使わないという条件で相手をしてくれたのだ。

カリーヌ夫人が扱う＜風の細剣（レイピア）＞は、ただ速いだけでなく、思わず見とれてしまうほどに優雅でありながら、その動きに一切の無駄がなかった。

これまで、ギーシュの『ワルキューレ』やオーク鬼しか相手にしたことがなかった才人は、人間と――それも実戦経験者と『剣』を交えるのは、これが初めてだったこともあり……あっと思う間すらなく、握っていた木刀をはじき飛ばされ、喉元に切先を突き付けられた。近接格闘に持ち込む余裕など、どこにもなかった。

無理もない。才人の相手は、この世界最強と謳われた『騎士』なのだ。つい数ヶ月前まで、平和な国・日本でごくごく普通の高校生として生活していた才人が対抗できる相手などではない。いくら＜ガンダールヴ＞のルーンを持ち、太公望やギーシュと戦闘訓練を続けていたとはいえ……土台からして違い過ぎるのである。

幾度めかの掛り稽古の末、刀身で手首をしたたかに打ち据えられ――そのあまりの痛さに地面へ蹲ってしまった才人に対し、カリーヌ夫人は問いかけた。

「魔法を使えぬ身でありながら、これほどの速度で動けるとはたいしたものです。しかし、対人剣術についてはまだ素人の域を出ていませんね。もしや、これまで稽古の時ですら、本物の剣士と対峙したことがないのではありませんか？」

「は、はい、その通りです。格闘術については、太公望師叔から直接教えを受けているんですが」

素直に才人が答えると、やはりそうかと夫人は頷いた。

「あなたの動きには、規則性がありすぎるのです。今のままでは、戦い慣れた＜刃使い＞にはすぐにそのクセを見抜かれ、このように無力化されてしまうでしょう。まずは、そこから矯正せねばなりませんね」

そう言って、夫人は後方で稽古を見学していたラ・ヴァリエール公爵に振り返った。

「そういうわけですから……あなた」

と……その言葉を待っていたかのように、彼女の夫であるラ・ヴァリエール公爵が、杖を手に前へ進み出て来る。公爵は、才人の前へ立つと、呪文を口ずさみ……すっと杖を一振りした。すると、きらきらと輝く光の粒が才人の身体を包み込んだ。

「傷の具合はどうかね？」

公爵から問われた才人は、それでようやく気が付いた。カリーヌ夫人との打ち合いでつけられた傷が、全てふさがっていることに。まだ若干の痛みこそ残ってはいるものの、ほぼ完治しているといってよい状態であった。そう、ラ・ヴァリエール公爵は、非常に優れた＜水＞の使い手であったのだ。

「は、はい！　もう大丈夫です。ありがとうございます！」

タバサとかモンモンに＜治療＞してもらったことがあるけど、あれの数倍すげえ！　ルイズパパって、ひょっとしてＲＰＧでいうと

ころの＜治癒術師（ヒーラー）＞なのか！？　と、感激を顕わにする才人。だが、それは数分後に――衝撃へと変わった。

「よろしい。ならば、次はこのわし自ら相手をしてやろう」

それを聞いたとき、才人は心の底から安堵した。何故なら、再び『烈風』と剣を交えなければならないとばかり思い込んでいたからだ。これで、ようやくひと息つける……才人は、そう判断した。

まだ３０代といっても通用しそうな『烈風』カリンとは違い、ラ・ヴァリエール公爵は年寄りにしか見えない。奥さんよりも明らかに格下だと思われる――先日、カリーヌ夫人の＜ウインド＞で、抵抗する間もなく天空へ舞い上げられている――人物が出てきてくれた。おまけに、彼は＜水使い＞だ。

モンモンと同じで、たぶん＜攻撃魔法＞は苦手だろう。やっとまともな戦いができそうだぜ……そう考えた才人だったのだが。その認識は、カラメルソースとメープルシロップと蜂蜜の混合液に半日ほど漬け込んだスポンジケーキよりも甘かった。ラ・ヴァリエール公爵が素早くスペルを唱え『杖』を一振りした途端、なんと十数本もの＜水の鞭＞が出現したのだ。

――そして、すぐさま＜水の鞭＞は１箇所に収束し、幅広の両手剣（ブロード・ソード）となった。これぞラ・ヴァリエール公爵の得意技＜水流の刃（ブレイド）＞である。

その後才人は、気持ちを切り替える間もなく、流れるような動きでもって内へ斬り込んできた公爵の＜水流剣＞であっさりと木刀を絡め落とされ、指抜きグローブによる接近戦を挑もうにも、再び複数本の＜鞭＞に変化した＜水＞によって全身を縛り付けられてしま

い……全く身動きが取れなくなってしまった。

「普通の＜魔法使い＞は、同時に1個しか魔法使えないんじゃなかったのかよ！」

地面に転がされ、残る＜鞭＞で散々に打ち据えられた才人は、敬語を使うのも忘れ……思わず抗議の叫びを上げてしまった。

「かの『東の参謀』殿ほどではないのだがね、わしも＜鞭＞の『複数展開』を得意としているのだよ」

髭をしごきながら、得意げにそう告げた公爵の言葉に補足をしたのは、すぐ側で彼らのやりとりを見学していたカリーヌ夫人であった。

「＜剣＞と＜鞭＞による接近戦に限定するなら、我が夫はわたくしよりも数段上です」

つまり。ラ・ヴァリエール公爵は、状況次第ではハルケギニアの『伝説』よりも強いということになる。しかも、同時に十数本もの＜水の鞭＞を使いこなす超技巧派。剣か拳かの違いだけで、＜魔法＞ありの太公望と戦闘スタイルがほぼ一緒なのだ。すぐさまそれを理解した才人は、頭を抱えてしまった。

「そういうことは、早く言……ってくださいよ奥方様！」

「礼法に則った決闘ならばいざしらず、あなたは実戦の最中に、敵へ能力の開示を求めるというのですか？」

「うぐっ……」

才人は反論できなかった。カリーヌ夫人の言うことは、至極もっともだからだ。

「どうやら、あの『参謀』殿は……身内に対して甘すぎるようですね。まだ子供とはいえ、自分の従者にこの程度の軍事教育すら施していないとは。せっかくの機会ですから、このわたくし自ら鍛え直してあげます」

キリリと目をつり上げながらカリーヌ夫人が叩き付けるような声を出すと、ラ・ヴァリエール公爵が重々しく頷きながら、その意見に賛意を示した。

「細剣の扱いについてはカリーヌでいいとして……両手剣については、わしが鍛えてやろう。同じ剣でも、必要な動作が全くといってよいほど違うからな」

公爵がそう言うと、夫人は怪訝な顔をした。

「あなたには、宮廷での大切なお役目があるではありませんか」

「うむ、その通りだ。よって、昼はカリーヌに全て任せる。わしは、夜の実技担当を請け負うこととする」

それを聞いたカリーヌ夫人は、微笑みながら頷いた。

「では、そのようにいたしましょう」

「いつもすまないな、カリーヌ。では、よろしく頼む」

「俺の意志が入る余地は、全くないんですネ……」

にこやかに語り合う夫妻を尻目に、才人はがっくりと肩を落とした。

○●○●○●○●

――そして、現在に至る。

「しっかし……なんつう夫婦だよ。ひょっとして『烈風』カリンの伝説って……ひとりじゃなくて、あのコンビで作ったんじゃねーのか！？」

そう。実は、この才人の推測は当たっている。公式記録を含むトリステインの歴史に、カリンの名前だけが燦然と輝いているのは……夫であるラ・ヴァリエール公爵が目立つのを嫌い、自分の手柄をほとんど彼女に譲ってしまっていたからなのだ。

この事実について、規律と名誉を重んじるカリン本人としては、正直なところ不本意極まりないことであったのだが……本質的に控えめな公爵の性格をよく知る彼女は――最終的に、しぶしぶながらもそれを受け入れたという裏事情がある。

広域殲滅能力最強の妻と、近接限定なら伝説をも上回る夫。まさに歩く戦略兵器である。しかも、現役時代は今よりも数段強かったというのだから怖ろしい。そりゃあ、ルイズみたいな規格外の『天才』が生まれるわけだよなあ……と、才人はしみじみ思った。

ところで、その『最強夫婦』の愛の結晶であるルイズは現在何を

しているのかというと。＜念力＞を使って、才人の身体に冷たい水の入った袋をあてがっていた。

「ここ、このあたしが、ひ、冷やして、あ、あげてるんだから、かか、感謝してよね」

などと、才人とは絶対に目を合わせないよう、顔を背けながら。

「なあ、お嬢様。俺が、誰のせいでこんな目に遭わされてるんだか、口に出してハッキリ言ってみてくれるか？」

つい憎まれ口を叩いてしまう才人であったが、それはもちろん本心などではなかった。

惚れた女の子――しかもとんでもない美少女に、こんなふうにつきっきりで看病してもらえるなんて、男冥利に尽きるぜ……！　と、彼は内心の感動を必死に隠していたのだ。正直なところ、これがあるから俺はあの猛烈なまでの『稽古』に耐えられるんだ！　とまで思っていた。結局、才人は好きな女の子に対して、とことん弱い男なのであった。

「わ、悪いとは思ってるわよ！　でも……」

「でも、なんだよ？」

「あ、あんたは、あた、あたしの『護衛』なんだから、ああ、あたりまえで」

いっぽうのルイズも、そんなことを口にしつつも、内心では嬉しさを隠せないでいた。

彼女は、自分がおちこぼれであるが故に――ずっと、家族から見放されていると思っていた。ところが……そうではなかったとわかったから。

自分の成功を我が事のように喜び、それを手助けしてくれた友人や先生を招いて盛大な宴を開いてくれただけではない。来客たちが去った後――母親からこう言われたのだ。

「失敗という結果だけに囚われていたせいで、苦しんでいるあなたに何もしてやれなかったわたくしを、どうか許してちょうだい」

……と。そして、彼女はその後すぐに、学院長の言葉で知ったのだ。自分の父親が、ルイズが魔法学院へ入学する前に――わざわざオスマン氏の元を訪れ「どうか娘を目覚めさせてやって欲しい」と頭を下げてくれていたことを。

――かつてのルイズは、ずっとこの屋敷から外へ出たくて仕方がなかった。

父は、いつも自分のことには無関心で――近隣の領主との付き合いや仕事にしか興味がないように見えたし、母は娘の嫁入りのことしか頭になく「魔法ができなければ、よい家へ嫁げませんよ」と、公爵家の面子を重視するあまり、毎日厳しく叱りつけてくる。そう思い込んでいた彼女にとって、この屋敷はまるで出口のない牢獄のようなものだった。

だが、そうではなかった。両親は、自分に興味がなかったわけではなかったのだ。それどころか、ずっと心配してくれていた。それが、ルイズには本当に嬉しかった。ずっと、自分はとっくに見捨て

られているのだとばかり思い込んでいたから。だから、今は――この屋敷にいられることが、彼女にとっての大きな安息となっていた。

そんな、家族の想いと愛情を知るきっかけとなってくれた、目の前の『パートナー』に……ルイズは本当に感謝していた。もしも彼が＜召喚＞に応えてくれなかったら……未だに、魔法が失敗していた原因がわからないままだったかもしれないのだ。

そして、彼女の『パートナー』たる才人は、いつもルイズのことを考えてくれている。

空を飛べるようになったのも『箒星』という素敵な二つ名をもらうことができたのも、彼のアイディアがきっかけであったし――その後も、色々な案を提示してくれている。あの『見えない盾』も『空飛ぶベッド』も、才人が一生懸命知恵を絞り出し、提案してくれた。ルイズの＜力＞を最大限に生かすために。

それだけではない。彼は、ルイズを護るために強くなろうとしてくれている。あのワルド子爵すら恐れをなす『烈風』の稽古を、１日たりとも休むことなく継続しているのだ。

――あたしのために、サイトはこんなにも頑張ってくれている。

それは、これまでルイズが知らなかった、いや気付いていなかった『快感』であった。自分のことを真剣に考え、頑張ってくれるひとがいる――それが、これほどまでに快い気分をもたらすものであったとは。こんなこそばゆい気持ちになるのは、初めてだった。

もうちょっと優しい言葉をかけてくれれば、文句なんて出ないのに……などと思わなくもなかったのだが、才人はいつでもふて腐れ

たような口調でぶつくさ言いつつも、なんだかんだと手を貸してくれる。ルイズには、そんな彼の態度が……最近では、何故か不思議と心地よいものだと感じつつあった。

だが、それを素直に口にするのがなんだか恥ずかしくて、つい……心とは裏腹のことを言ってしまうのだ。いま、自分の内にあるこの感情が何であるのか――精神的に幼い彼女には、まだよくわかっていなかったから。

「だだ、だいたいね、ここ、こんなこと、ふつうなら、あ、ありえないんだから」

「ほほう。それはどういう意味でかネ？」

「あ、あたしは、ここ、公爵家の娘なんだから！　ここ、こんな看病……じゃなくて！　護衛のそばに、ひ、ひとりだけでつきっきりとか、ぜったいに、ああ、ありえないことなんだから！」

そんなルイズの言い訳じみた言葉を聞いていた才人は、口をへの字に曲げた。こいつ、本ッ当に変わんねえよなあ……と。実際には相当柔らかくなっているのだが、そっち方面の勘については、鈍感を通り越してドラム缶な才人は、それに気付けないのであった。

「へいへい。どうせ俺はしがない護衛でございますよ。ああ、左足のほうがなんか温くなってきた」

「えっ？　ちょっと待って、取り替えるから。他の場所は？」

「まだ平気。で、キミは悪いと思ってるだけなのカナ？　カナ？」

「だ・か・ら！　こ、こうやって、あたしが、かか、看病……じゃない、面倒見てあげてるでしょ！」

――主従揃って素直じゃない……と、いうよりも。実に面倒な性格をしているふたりであった。

と、そんなところへ。コツコツという、控えめなノック音が響いてきた。

「開いてますよ」

才人がそう言っても、ノックは続いている。これがルイズや友人たち、そしてこの屋敷で働いている使用人たちならば、すぐさま中に入ってくる。にも関わらず、自分で扉を開けないということは――。

「ひょっとして、やんごとないお客様か？」

そう言って立ち上がろうとした才人をルイズが制し、扉を開けた。そこに立っていたのは……彼女の姉、カトレアであった。

「ち、ちい姉さま！　あ、あの、えっと」

ルイズがわたわたしていると、カトレアはにっこりと微笑んだ。

「うふふ。やっぱりここにいたのね。　もしかして、邪魔しちゃったかしら？」

「んな、なななな」

なにをいってるんですかちいねえさまおじゃまとかよくわからないことをいってまたあたしをおどろかせようとかそういうはなしですかおねがいだからそういうことはやめてくださいわたしびっくりしちゃったんだから……と、息継ぎ無しで呟き続けるルイズに見えないよう、サイトに向かってぺろっと舌を出すカトレア。

それを見た才人は、胸がきゅーんと締め付けられた。ルイズの姉であるカトレアは、柔らかい目つきにふんわりとした笑顔が似合う、優しくとげのない表情の、おっとりした性格の女性であった。そんな彼女が見せた、思わぬいたずらっぽい雰囲気に、ぐっときてしまったのである。このお姉さん、可愛いよなあ……と。

「あ、あのっ、どういったご用件で……？」

ルイズがもう少し大人になったら、このお姉さんみたいな感じになるのかなあ……などと思いながら才人がそう尋ねると、カトレアは何が可笑しいのか、くすくすと笑いながら部屋の中へ入ってきた。

「お父さまがね、ルイズのことを探していたの。明日、王宮へ連れて行くからって。姫殿下が、久しぶりにルイズの顔が見たいとおっしゃっていたそうよ」

それを聞いたルイズの顔が、ぱっと綻んだ。

「姫殿下が！？」

「ええ。とても楽しみにしていらっしゃるそうよ。それと、サイト君も護衛として一緒についてくるようにって。だから、今夜の稽古はお休みよ」

才人の顔もきらきらと輝いた。稽古が休みというのは勿論嬉しい。だが、それ以上に楽しみなのが王宮見学である。仲間たちと、何度かトリスタニアの街へ買い物に行ったときに見かけた綺麗なお城。これまでは、外から眺めるしかなかったのだが、なんと中へ入れてもらえるというのだ。日本でいえば、皇居のいちばん奥まで入れるようなものだ、こんな機会など滅多にない。

だが、才人にはひとつだけ気になることがあった。

「あの……カトレアさん。質問いいっすか？」

「使用人に伝えるんじゃなくて、わたしが自分でこの報せを持ってきたことについて、かしら？　ひとつめは、これね」

ほんわかとした笑顔を浮かべながら、ベッドの側に近付いていったカトレアは、杖を取り出して呪文を唱えた。

「イル・ウォータル・デル……」

それは＜治療（ヒーリング）＞の呪文であった。みるみるうちに、才人の身体から痛みが引いていく。いつもは、夜の稽古前に公爵がかけてくれていたのだが、今日は急ぎの仕事が入ったらしく、カトレアがその役目を頼まれたのだという。

――そう、彼女は既に、魔法を使っても体調不良を訴えることがなくなっていたのだ。

「もう痛くないです！　ありがとうございます」

「ありがとう、ちい姉さま！　ところで、ふたつめって？」

妹に微笑みかけながら、カトレアは言った。

「うふふ。それはね、あなたたちふたりとお話がしたかったからよ」

にっこりと笑いながらそんなことを言われた才人は、どきっとしてしまった。

「え、あ、お話って、どういう……？」

このあいだの太公望師叔の件もそうだけど、めちゃくちゃ勘が鋭いひとなんだよなあ、このお姉さん。俺たち、いったい何聞かれるんだろ？　才人は、どぎまぎしながらカトレアの答えを待った。

「ルイズとサイト君って、いったいどういう関係なのかしら？」

「どど、どういう関係って……」「さ、サイトはあたしの護衛で……」

思わぬ問いかけに、揃ってわたわたするふたりを好ましげに見遣ったカトレアは、ころころと笑った。

「あら？　わたしは、あなたたちが恋人同士だなんてひとことも言ってないわよ。それなのに、どうしてそんなに慌てているのかしら」

カトレアの発言に、ふたりは真っ赤になった。恋人同士！？　違うわ、そんなんじゃないもん……そう心の内で必死に否定するルイズと、本当にそうなれたらいいんだけど……と、考える才人。

「うふふ。そうね、今のあなたたちは、まだ『お姫様』と『騎士（ナイト）』かしら。ミス・タバサたちが『お兄さん』と『小さな妹』みたいな関係なのとおんなじね」

ルイズと才人はどきりとした。ルイズは、やはりちい姉さまは鋭い……と。才人は、やっぱりこのお姉さんの勘、ハンパじゃねェ！と、驚愕した。

「ふたりとも、どうしてわかるんだって顔をしているわね。でも、わたしにはわかるの。なんだか、普通のひとよりも少し鋭いみたいで」

「や、少しってレベルじゃないと思うんですが」

「ちょっと、サイト！」

慌てて才人を遮ろうとするルイズの姿に、カトレアはまた笑った。そして、彼女は気が付いた。そう……彼らの『中の声』が聞こえていたせいで。

『師叔のこととといい……ホント、超能力者（エスパー）みたいなひとだなあ』

『まさか、ちい姉さま……サイトがあたしの＜使い魔＞だって、気付いてるのかしら』

カトレアは、内心で驚いていた。この男の子は、おじいさまの連れなんかじゃなくて、ルイズの……しかも＜使い魔＞だったのね……と。

才人が、太公望と同じ『異世界』から来ていることに関しては、既にルイズの声を『聞いて』わかっていた彼女であったが、さすがに＜使い魔＞ということまでは知らなかったのだ。そして、カトレアはこの件でもうひとつの事実に気が付いた。

やっぱり、おじいさまは……わたしの『声』を聞き分ける＜力＞について、誰にも教えていなかった。きっと、わたしがこの＜力＞を隠していたことに、気付いてくださっていたんだわ……それを思うと、カトレアは……心がほんのりと温かくなった。

つい先日。カトレアは、父親であるラ・ヴァリエール公爵から＜力＞をあまり使いすぎないよう、厳重な注意を受けていた。

「カトレア。例の参謀殿から詳しく聞いたのだが。お前が持っている＜力＞は、使いすぎると健康を損なってしまうのだそうだ。彼の国では、実際に寝たきりになった人間までいるらしい。少し使うくらいなら問題はないらしいが、絶対に無理をしてはいかんぞ」

『動物と会話する能力と、偽りの姿や嘘を感覚で見破る＜力＞か……まさか、カトレアにそのように不思議な能力が備わっていたとは。だが、間違っても多用させるわけにはいかん。体調を悪化させる＜力＞なれば、なおさらだ』

それを聞いたカトレアはすぐに察した。父親が、自分の＜能力＞に関する詳細について、太公望に確認を取ったのだと。だが、父の『声』を聞く限り、どうやら『心の声を聞く』ことに関しては開示されていないように思える。

ひょっとして、ほかの皆さんにも内緒にしてくださっているのかしら……？　期待混じりの不安を抱いていたカトレアであったが、

ふたりと会話をしたことによって確信した。やはり、心の声については誰にも話していないのだと。＜力＞の詳細を知られることを極端に畏れていた彼女にとって、これはとても有り難かった。

そんな内心の喜びを表には出さずに、カトレアは笑みを浮かべつつ口を開いた。

「あら、困らせちゃったかしら。ごめんなさいね」

「あ、いや、そんなことは……」

頭を掻きながら言葉を紡ぐ才人に、カトレアは再び尋ねた。彼女には、どうしても聞いてみたいことがあったのだ――彼女の生い立ちに関わる、強い好奇心が故に。

「実はね、あなたたちふたりに聞きたいことがあるの。ほら、前におじいさまが『炎の勇者様』のお話をされていたでしょう？」

「え、ええ。歓待の時よね」

『確か、ミスタがいた世界の歴史上、最強の＜火＞メイジだったはずよね』

「そんな話あったっけ？　俺は覚えてないんだけど」

『あんときは、ルイズのことだけで頭がいっぱいだったからなあ……俺』

「わたしね、昔から身体が弱かったせいで、ずっとお部屋で本ばかり読んでいたから……そういうお話に興味があって」

照れくさそうに話すカトレア。そう……彼女は、長い間部屋の中に閉じこもっていたが為に、外の世界に強く憧れていたのだ。故に、例の『勇者様』の冒険譚について、聞いてみたくてたまらなかったのである。

歓待期間中は、ハルケギニアの魔法談義ばかりで聞く機会がどうしても得られなかったが、ひょっとすると、彼らならば、何か教えられているのではないかと考えたのだが……『聞いて』みた限り、どうやらそれは正解だったらしい。カトレアは心密かに喜んだ。

「ああ、そういうことっすか！」

『うわあ……勇者に憧れるとか。やっぱり可愛いなあ、このお姉さん』

「えっと、あたしたちも、そんなにたくさん聞いたわけじゃないけど……領民たちを救うために、自ら前線に立った、真の英雄だったらしいわ」

『もとは軍を束ねる総軍司令官だったのに、後ろで指揮をするよりも自分の戦闘能力を生かしたほうが人々のためになるからって、後任をミスタ・タイコーボーに任せて、危険を顧みず前線で戦ったのよね。確か』

才人のほうはともかく、ルイズの声を聞いたカトレアの胸は躍った。まさしく『イーヴァルディの勇者』そのものではないかと。例の『炎の勇者』は正真正銘、本物の勇者様だったのだと。

「滅茶苦茶強かったらしいっすよ。そのひとが前線に立ったこと

で、大勢のひとが命を救われたんだって、師叔が言ってましたから」

『ひとを助ける＜力＞があったから、黙って見てるだけじゃなくて自分から動くとか、マジで勇気あるよな……思ってても、なかなかできることじゃねーし。俺はどうなんだろう……そういう時が来たら、ちゃんと動けるのかな』

「貴族として相応しい行動よね。ご本人にお会いできるものなら、ぜひ一度お目に掛かってみたいわ……！」

『彼の行動は、貴族の模範たるべき立派な振る舞いだわ。いつか、あたしも彼みたいな立派な貴族になれるように、頑張らなくちゃ！』

彼らの声を集めたカトレアの顔が、華麗に綻んだ。

「まあ！　やっぱり『伝説』になるべくして為ったおかたなのね」

手を打ち鳴らしてそう言ったカトレアの言葉に、何故か目の前の少年の顔が、一瞬だけ陰った。それが気になったカトレアは、理由を尋ねることにした。

「あの、わたし……何か悪いことを言ったかしら？」

自分を見つめながら、急に不安げな声を出したカトレアの様子に、才人は焦った。そのせいで……つい、表に出すべきではないことを口走ってしまった。

「いや、なんで俺なんかが＜伝説の使い魔＞になっちゃったのかなって……」

『伝説の英雄・太公望ならともかく、どうして俺みたいな普通の高校生が選ばれちまったんだろう……師叔は、まだ俺が目覚めてないだけだって言ってくれてるけど……ルイズパパとかママのこと見てたら、とてもじゃないけど俺なんかが『伝説』に相応しいとは思えないんだよなあ。はあ……マジで意味わかんねえ』

「伝説の……使い魔!?」

「ちょっとサイト!」「……あっ」

慌てて制したルイズであったが、時既に遅かった。

「まあ! あなた＜使い魔＞だったの!? それも、伝説って呼ばれるような?」

カトレアは、大げさに驚いた『ふり』をした——既に彼女は、才人が＜使い魔＞である事実を知っていたから。しかも、太公望の連れではなく、妹のルイズが呼び出した存在であることまで。

そんなカトレアに、才人は床に頭をこすりつけんばかりの勢いで哀願した。以前ルイズから聞いた『アカデミーで解剖されるかも』という言葉を思い出したからだ。

「あ、あの、すみません。これ、内緒にしてもらえませんか? 周りにバレるとまずいんで……お願いします! だいたい、俺……『伝説』なんて肩書きもらえるような、立派な人間じゃないんで……」

「内緒にするのは、もちろんかまわないけれど……」

＜伝説の使い魔＞とやらが何を指すのかまでは、さすがに知らなかった。だが……独特の『勘』により、いま目の前にいる少年が、その事実を重く感じていることを察したカトレアは、自分が思ったことを、素直に口にした。

「ねえ、あなたはひょっとして『伝説』って呼ばれるのが嫌なのかしら？」

「あ、いや。そうじゃなくて、なんつーか……相応しくないっていうか」

「それは、どうして？」

天使の微笑みといって差し支えない顔を向けてきたカトレアを前に、才人は、思わず抱えていた悩み事の全てをさらけ出してしまった。ずっと心の奥底に固まっていた、不安という名の氷山が、暖かな光によって溶け出したのだ。

「俺……これといって取り柄もない、どこにでもいる普通の学生ですから。毎日なんにも考えないで、ただ過ごしてただけの子供なんです。それが、いきなり『伝説』なんて言われても、ピンとこないっていうか」

その言葉を最後に俯いてしまった才人へ、カトレアは優しく声をかけた。

「それは……あなたが、これから『始まる』からなんじゃないかしら？」

カトレアの声に、才人はぴくりと反応した。

「これから……始まる？」

「ええ。おじいさまも言っていたでしょう？　無の状態からある『伝説』なんかないんだって。そう呼ばれる全員が、そこに至るまでの『道』を歩んでいるんだって」

顔を上げた才人に向けて、カトレアは微笑んだ。

「わたし、思うの。あなたは『伝説になる』ために選ばれたんじゃないかしら？　きっと、いまはその準備をしている最中なんだわ。だから、もう『伝説になり終えている』ひとたちと自分を比べて、落ち込む必要なんかないわ」

どうかしら？　そう言って笑いかけてきたカトレアの言葉は、とても暖かく……じんわりと才人の胸へ染み込んでいった。

そうか、俺は……いつか伝説になるために、ルイズに選ばれたんだ。本当になれるかどうかはわかんねーけど、いまは、そのための準備をしてるんだ。才人は、思わず手袋越しに――左手甲に刻まれたルーンへと視線を注いだ。

――『神の盾』ガンダールヴのルーン。

「そっか……そうですよね。お伽噺に出てくる伝説の勇者だって、最初から伝説だったわけじゃないんですよね」

ポツリと呟いた才人に、カトレアはにっこりと頷いた。

「勇者っていう称号も、自分から名乗るものじゃないわよね？

何かに立ち向かっていく姿を見た大勢のひとたちが、その勇気を讃えて『勇気ある者』つまり『勇者』って呼ぶようになるのよ」

――無の状態からある『伝説』など存在しない。『勇者』とは、自分で名乗るものではない。両方とも、そう呼ぶ者たちがいて初めて生まれるものなのだ。そのカトレアの言葉に、才人は思わず右手でぎゅっと左手の甲を握り締めた。

「でも、この家にいる『伝説』は、ホント厳しいですからね……俺、耐えられるかな」

「まあ……準備にしてはちょっと激しいわよね」

ルイズの呟きに、才人は猛烈な勢いで反論した。

「ちょっとどころじゃねーよ！　あれは『烈風』じゃなくて『台風』の間違いだろ!?　おまけに旦那は『激流』だよ!!」

そんなふたりのやりとりを聞いていたカトレアは、にこにこと笑みを零していた。

――『伝説』と呼ばれることを重荷に感じ始めていた少年は、心優しき姫君の助言を受けたことで、いったんそれを地面へ置くことにより――ようやく、はじまりの『道』を歩き始めることに成功した。

第７８話　成り終えし者と始まる者（後書き）

また太公望が出てきませんでした。今回の主役は、悩み多き少年・才人であります。

なんと、本作で彼に『剣』を教える師匠となったのは『銃士』アニエスではなく『烈風』カリンと、その夫であるラ・ヴァリエール公爵と相成りました。いきなり無理ゲーを強要される才人は、本当に気の毒だ……すまん。でも、ハイリスクだけどハイリターンだよ！

……原作では、単なる的にされていたというのにこの出世具合。まあ、原作での才人は、そこへ至るまでにとんでもないことやってますから、仕方ないっちゃ仕方ないんですがｗ

そして、癒し系姉カトレアさんの助言によって、才人は大切なことに気が付きました。これから（いろいろな意味で）たいへんな道を歩むことになる『新たな伝説』に幸あらんことを！

ちなみに本日の執筆中ＢＧＭは「涙の種、笑顔の花」（天元突破グレンラガン　－Ｍｏｖｉｅ　Ｅｄｉｔ－）でした！

２０１１／０７／１８　誤字脱字修正、本文加筆修正

第７９話　新たな伝説枢軸の始まり、その序章

――その日。ラ・ヴァリエール公爵家の晩餐は、いつもと様子が違っていた。

一家全員が揃う晩餐の席。そこでは、誰も言葉を発しようとしない。これについては、ヴァリエール公爵家においては、ほぼいつも通りの光景なのだが……今夜は、何故かいつにもまして雰囲気が重苦しいのだ。

その主な原因となっているのが、上座に着いているラ・ヴァリエール公爵と、来客用の席に腰掛けているオールド・オスマンである。彼らは揃って気難しい顔をしながら、ナイフとフォークを動かしている。だが……その動作は、どこかぎこちなかった。

――時を遡ること、１時間前。

ラ・ヴァリエール公爵家へ向かう竜籠の中で、オールド・オスマンは呆れ果てていた。

彼の膝には、１冊の古書が載せられていた。古びた革の装丁がなされたその本の表紙は既にボロボロで、うっかり落としでもしようものなら、中身のページを含め、ばらばらになってしまいそうだった。

「ふう……まさか、こんな簡単に手にすることができるとはのう」

嘆息しながら、オスマンは本のページをめくる。色あせた羊皮紙

には、何も書かれていない。およそ３００ページほどあるその書物は、どこまでめくっていっても無地――つまり白紙なのであった。

「これが、トリステイン王家に伝わる『始祖の祈祷書』か……」

この不可思議な書物『始祖の祈祷書』には、今から６０００年前、かの『始祖』ブリミルが、神に祈りを捧げる際に用いた呪文が記されているという言い伝えがあるのだが……こうして中を見た限りでは、魔法語（ルーン）はおろか、何の記載もない。染みのひとつすら残されていない。

そのため、まがい物なのではないかとの噂が、宮廷内でまことしやかに流されていたのだが――オールド・オスマンは知っていた。これが、まぎれもなく本物の『始祖の祈祷書』であることを。

＜魔法感知（ディテクト・マジック）＞にしっかりと反応するし、何よりこれは、トリステイン王家が婚姻の際に読み上げるという名目で代々受け継いできた、紛うことなき『秘宝』なのだ。

もっとも、その『まがい物』という噂のお陰で、オスマンが大きく手を患わせることなく、こうもやすやすと持ち出すことができたわけだが。

……実は、今日の夕方。王家の財産を管理する財務卿に、

「後学のために、是非一度『始祖の祈祷書』を閲覧させてもらいたい。もちろん、実際にお見せいただくのは枢機卿からお許しを得てからということにしますがのう」

と、申し出たところ。なんと、財務卿の裁量で――１週間という

期限付きだが――あっさりと貸し出してくれたのだ。

もちろん、これはオールド・オスマンの名声あってのことではあるのだが、それにしても王家に伝わる秘宝を、こうもあっさりと表へ出してしまうとは、いったいどうなっとるんじゃ……オスマン氏の胸の内は、忸怩たる思いでいっぱいになった。

とはいえ、オスマン氏にしても『土くれ』から各王家の『秘宝』に関する情報がもたらされていなければ、これを偽物と断定してしまっていたかもしれない。なにせ、この『始祖の祈祷書』は――その伝説が故に、贋本が世界各地に、しかも大量に存在しているのだ。それらを全て集めたら、専用の図書館ができるのではと言われているほどである。

「ま、おかげで仕事が楽になったわい。これで、今週中にラ・ヴァリエール公爵が『水のルビー』をマリアンヌ王妃から一時的にでも借り受けることができれば、ミス・ヴァリエールの＜系統＞をほぼ確定することができるじゃろう」

……と、まあそんなことを考えながら、ラ・ヴァリエール公爵家へ到着したオスマン氏だったのだが。まさか……まさかである。その『水のルビー』が、なんと姫君の手ずから公爵に下賜されていたとは、さすがの彼も想像だにしていなかった。

書斎の椅子にどっかと腰掛け、ふたつの『秘宝』を前にして、揃って顔を突き合わせたオスマンとラ・ヴァリエール公爵は……共に盛大な溜息をついた後、事のあまりの重大さに打ち震えた。

「どうやらわしは、自領の運営にばかり気を取られて、肝心の――トリステインの中央部全体に広がっている大きな歪みに、全く気

付いていなかったようだ。まさか、ここまで現体制が緩みきっていたとは……！」

「わしもじゃ。まさか『水のルビー』にそんな謂われがあったとは知らなんだ！　おまけに、その『王権』継承に関する口伝が、姫殿下まで届かず完璧に途切れておるとは……マリアンヌ王妃は、予想よりも遙かにお加減が悪かったのじゃな。もっと早く気付いてしかるべきであった」

公爵は顔をしかめ、オスマンはこめかみに指をあてながら呻いた。

「さて、期せずして『鍵』が揃ってしまったわけじゃが、どうするね？」

「不意打ちにも程がありますぞ。本来であれば、早急に試したいところなのですが」

ふたりは、揃って肩を落とした。

「明日、ミス・ヴァリエールが姫殿下とお会いする件……ですかの？」

「ええ。ルイズが、姫に対して嘘をつき通せるとは思えません。念のため、殿下にはあの子が＜風系統＞に目覚めたかのように錯覚するよう、話をしておきましたが――」

「姫にお会いする前に、万が一＜虚無＞に目覚めてしまった場合……そこで＜系統＞について問い詰められたら、うっかりぽろっと話してしまいそうだと？」

ラ・ヴァリエール公爵は、オスマン氏の目を見て頷いた。

「その通りです。他の者にならば黙ってもいられましょうが、相手はルイズが敬愛してやまぬ姫殿下ですからな。念のため、娘には＜念力＞で空を飛んでいることを絶対に口にせぬよう、釘を刺しておきます。系統についても、わしとカリーヌが＜風＞だと判断していると話します」

「それがええじゃろう。実際、彼女に＜風＞の素養があるのは事実じゃ。空という空間と、風の流れをきちんと把握できているからこそ、ミス・ヴァリエールはあれほどの速度で宙を舞うことが可能なのじゃから」

その後、さらに詳細を詰めるための打ち合わせを行っていたふたりは、執事長から食事の支度が調った旨の報せを受けて晩餐の席へと向かい――結果、ろくに味のわからぬ夕食を摂るはめになったのだった。

○●○●○●○●

――そして翌日。

ラ・ヴァリエール公爵家専用の竜籠に揺られてトリスタニアの街へと移動したラ・ヴァリエール公爵とルイズ、そしてお供の才人一行は、途中で豪奢な馬車に乗り換えると、一路王宮へと向かった。

歩きで中へ入るわけじゃないんだ、そりゃそうか、こんだけ広いんだもんな……そんな感慨を抱きながら、才人は窓の外に広がる光景を眺め、感嘆の溜息をついた。

王城の門をくぐると、そこには広い中庭があった。規則正しく植えられた生け垣は、全て竜に跨った騎士や幻獣などの形に刈り込まれている。なんだか今にも動き出しそうだ、才人はそんな感想を持った。

馬車寄せ中央にある池には、一定のタイミングでリズミカルに水を吹き出す噴水があった。ふと、その噴水の水がどこから来ているのか気になった才人は、よくよく周囲を観察してみた。すると、細い水路が王宮壁面側から延びてきているのがわかった。

見上げるほどに巨大な王宮は、幾筋もの水流が反射する太陽光によって煌めいていた。この水が、噴水となって噴き出しているのであった。

そういえば、トリステイン王家の象徴は＜水＞だってルイズが言ってたっけ。馬車を降りた後、そんなことを思いながらぼんやりとしていた才人は、既に王宮内部へ向けて移動を開始していたふたりに置いて行かれぬよう、あわててその後を追い掛けた。

到着した3人は待合室へは通されず、すぐさま姫の居室へと案内された。

アンリエッタ姫は、小さいながらも精巧な彫刻の施された椅子に腰掛け、机に肘をつきながら来客の到着を待っていたが――待ち人が来たという報せを受けるやいなや立ち上がり、彼らを迎えた。

「ルイズ・フランソワーズ！　本当にお久しぶりね」

鈴の音のように涼しげな姫君の声を聞いたルイズは、その場に膝

をついた。

「ラ・ヴァリエール公爵。今日は、彼女を連れてきてくだすって、本当にありがとう」

「勿体ないお言葉でございます。それでは、わたくしは公務がございますので……また後ほど」

そう言って笑顔で退出したラ・ヴァリエール公爵を微笑みながら見送ったアンリエッタは、彼の背中が見えなくなった直後。感極まったといった様子でルイズの側に駆け寄ると、彼女の身体を抱き締めた。

「ああ、ルイズ。ルイズ！　懐かしいルイズ！」

「姫殿下、いけません。臣下たるわたくしめに、このような……」

ルイズは、畏まった声でそう言った。

「まあ、ルイズ！　ルイズ・フランソワーズ！　そんな堅苦しい行儀はやめてちょうだい！　あなたとわたくしはおともだち！　おともだちじゃないの！」

「もったいないお言葉でございます、姫殿下」

アンリエッタは、その美しい眉根を寄せ、拗ねたような口調で言った。

「ああ、もう！　そんなよそよそしい態度はやめてちょうだい！　幼い頃、いっしょになって王宮の花壇の上を飛び回っていた蝶々

を追い掛けた仲じゃないの！　泥だらけになって」

姫の言葉を受けたルイズは、顔をはにかませて答えた。

「はい、そうでしたわね。お召し物を汚してしまって、ふたり揃って侍従長のラ・ポルトさまに叱られました。ふわふわのクリーム菓子を取り合って、大喧嘩になったこともございましたわ」

きらきらと輝くルイズの瞳を見て、アンリエッタは喜んだ。わたくしの大切な幼なじみは、昔と変わらず、今もおともだちのままでいてくれた！　それが、彼女には本当に嬉しかった。アンリエッタが心を開ける相手は……本当に限られているのだ。

「そうよ！　そうよルイズ。取っ組み合いの喧嘩をしたことだってあったじゃないの！　ほら、例の『アミアンの包囲戦』と呼んでいた、あの一戦よ」

「たしか、当時宮廷内で流行していたドレスを奪い合ったのでしたわよね。あのときはわたくし、姫さまの見事な一発をおなかに受けて、御前で気絶いたしました」

昔を思い出し、懐かしそうに笑い合うふたりの少女を見ていた才人は、呆然とした。いやはや、あのルイズの幼なじみとはいえ、一国の王女と聞いていたから、どんな深窓の令嬢かと思って期待していたのだが……とんだお転婆姫ではないかと。

と……その姫君の視線が、才人のほうに合った。

「ところでルイズ。そちらの彼は？」

「あ、はいっ。わたくしの護衛でございます」

アンリエッタはそれを聞くと、才人のほうに向き直り、小さく首をかしげた。だが、才人は相変わらずぽけっとしている。ルイズは慌てて口を開いた。

「な、なにぼーっとしてんのよ！　早く姫さまに名乗りなさい！」

失礼でしょう！？　というルイズの言葉で、ようやく才人は気が付いた。そうか、さっきお姫さまが首をかしげたのは、俺に名乗れっていうサインだったのか！　うわあ、貴族ってめんどくせえ……とはさすがに口には出さず、彼は深々と一礼した。

「平賀才人と申します。才人とお呼び下さい」

それは到底、宮廷内の礼法に適った態度とはいえないものだったが、アンリエッタ姫は、これといって気にしたりはしなかった。彼女はほうっと溜息をつくと、ルイズに椅子への着座を促し、自らも腰掛けた。

「あなたが羨ましいわ、ルイズ。お父上に、心から大切にされているのね。こんなふうに護衛士までつけてもらえるだなんて」

「なにをおっしゃいます。姫さまなら、護衛士など選び放題ではありませんか」

アンリエッタは、寂しげに首を振った。

「いいえ。何もかも、他の者が決めてしまいます。そこに、わたくしの意志はないのです。王国の姫などとは名ばかりで、籠に飼わ

れた小鳥も同然なのよ」

そんな切なげな姫の言葉に、才人はつい口を挟んでしまった。

「まあ、お姫さまってどこでも大変そうだよな。この国のことはよく知らないけどさ、王家の行事だの他の国との付き合いだので、分刻みでスケジュール決められたりするんだろ？　自由なんて全然なさそうだし」

「ちょっとサイト！」「あ、悪い……つい」

よりにもよって姫殿下を相手に、学院で生活している時と同じような態度で口を利いてしまった才人に、ルイズは心底慌てた。なんて無礼な真似をするのよ、この男は！　もっとしっかりマナーを叩き込んでおくべきだった。最悪の場合、打ち首だってありえるわ！

……と、肝を冷やした。

だが、その後に飛び出したアンリエッタ姫の言葉は、ルイズがしていた想像とは全く異なり、とても柔らかなものであった。

「まあ！　あなた、王族の実情について、それなりに詳しいのね。ひょっとして、異国の出なのかしら？　黒い髪なんて珍しいものね。いったい、どちらからいらしたの？」

「あ……ハイ。ずっと東の『日本』という小さな島国から来たんです。ハルケギニアでは、全部まとめて『ロバ・アル・カリイエ』って呼ばれている諸国のひとつってことになっているみたいですが」

例の、太公望が捏造かました設定に平然と乗っかる才人であった。このあたりは、前もってしっかりと口裏を合わせていたので、たと

え不意打ちを受けようとも、もはや彼らは一切動じたりしない。

「まあ、まあ！　ロバ・アル・カリイエですって!?　ルイズ、ルイズ・フランソワーズ！　あなた……魔法学院へ入学してから、わたくしの知らないことを、たくさん経験しているみたいね？　今日はせっかくの機会ですもの、いろいろと聞かせてちょうだい」

――アンリエッタ姫に促されるまま、ルイズは魔法学院での生活について、色々なことを話した。ただし、才人が＜使い魔＞であることや、出がけに、何故か絶対に話してはいけないと父から念入りに釘を刺されていた『念力を使って空を飛ぶ』ことに関連することを省きつつ。

そして、話が例の『オーク鬼討伐』に至った時、姫の目が見開かれた。

「あのジャコブ村を開放した『水精霊団』が、まさかあなたたちだったなんて！」

「えっ、あのっ、ひひ、姫さま？　どうしてその名前をご存じで……？」

心底驚いたといった様子のルイズの手を取り、アンリエッタはきらきらと瞳を輝かせながらこう言った。

「財務卿が、わたくしに書類の決済を求めてきたときに偶然耳にしたの。オーク鬼５０体を、半日で討伐してしまったのでしょう！？　それも、普通なら１０名以上の騎士が数日かけて行う討伐任務を、たったの８人でやってしまったんだって、デムリ財務卿ったら本当に驚いていたのよ！」

アンリエッタの言葉を聞いたルイズと才人は、口をあんぐりと開けてしまった。まさかあの戦いが、通常ならば騎士隊が数日かけて行うような討伐任務だったとは、思ってもみなかったのだ。なにせ彼らは、

「初陣だから簡単なものを選んだ」

と、太公望から何度も聞かされていたのだから。

それだけ自分たちの＜力＞が評価されていたのかと思うと、なんだか嬉しくもあるのだが……それにしても、とんでもないことであるのは間違いない。

……だがしかし、そのことを喜んでいる場合ではない。今はそれ以上の問題がある。それに気付いたルイズは、おそるおそる口を開いた。

「あ、あの……姫さま？　申し訳ございませんが、このことはご内密に願います」

「まあ、どうしてかしら？　素晴らしいことだと思うのだけれど」

「実は……」

ルイズは事情を語り始めた。この『水精霊団』は、全員が家名を出さずに『暗号名』で活動している、秘密部隊なのであると。自分たちの実力だけで勝負するために、全員一致であえてそのような措置を執っているのだと説明した。

「そういうわけで、家族にも内緒にしているんです。ですから……」

縋るような目で願い出てきた『おともだち』を見て、アンリエッタ姫はふと思い立った。ここで彼らと繋がりを作っておくことが、後に何かの役に立つかもしれないと。しかし、それとはまた別に……彼女にはちょっとした願いがあった。それは、自由に空を羽ばたくことを願う小鳥の、切なる想い。

「わかりましたわ。大切なおともだちのお願いですもの！　そのかわり……わたくしからも、ひとつだけ頼みがあります」

「は、はい、姫さまの仰せとあらば」

「その『暗号名』というものを、わたくしにもつけてはもらえないかしら？」

「は？」「え？」

「だって、とっても素敵じゃないの！　身分を隠してあちこち冒険するだなんて。わたくし、憧れてしまうわ！　共に行くことは叶いませんけれど、せめて名前だけでもあれば……どこかであなたたちの冒険譚を聞くたびに、一緒に旅をしているような気分になれると思うの」

ああ、本当にお寂しいのだわ、姫さまは……ルイズは思った。今まで想像したこともなかったが、この広いお城の中で、心を許せる友人もおらず、たったひとりだけで過ごしている姫君は――本当に孤独なのだろうと。

「サイト。姫さまの『暗号名』を考えてさしあげて」

「も、もちろん構わないけど……あの、お姫さま。二つ名か、得意な＜系統＞を教えてください。それを、東の言葉に直したのが俺……じゃなかった、わたくしどもの『暗号名』として使われておりますので」

アンリエッタの顔が、ぱっと輝いた。

「二つ名は特にありませんので……得意としている系統＜水＞を使ってください」

＜水＞かあ。『ウォーター』だとあんまり可愛くないし、何か女の子に似合いそうなものがあったかなあ……才人は、自分の中にある知識を総動員して、なんとか目の前にいる姫君の期待に応えようと努力した。

「それなら『マリン』か『アクア』というのはいかがでしょう？『マリン』は海洋のことで『アクア』は、たくさんの水という意味です。ちなみに、両方合わせて『アクアマリン』に致しますと、青くて綺麗な宝石の名前になります」

才人の提案に、アンリエッタは手を叩いて喜んだ。

「まあっ、どれも素敵な響きを持つ名前ですわね！　どうしましょう……ねえルイズ、どれがいいかしら！？　わたくし、迷ってしまうわ」

姫君の声に、ルイズは澄まし顔で答えた。

「姫さまは『王国の宝石』でございますから『アクアマリン』がよろしいかと」

「もう！　ルイズったら、わたくしをからかっているのね！？」

「そんな、畏れ多い！　このわたくしが姫さまをからかうだなんて！！」

「……あなた、本当にラ・ヴァリエール公爵とそっくりね」

「お褒め頂き、恐縮ですわ」

ふたりの少女は、顔を見合わせると――声を上げて笑った。

○●○●○●○●

――その夜のラ・ヴァリエール公爵家の晩餐は、昨夜よりもさらに重く沈んでいた。

昨夜同様、ラ・ヴァリエール公爵とオールド・オスマンが、沈痛といっても過言はでない表情を顔全体に貼り付けている。さらには、ルイズを除いた家族全員が、彼らと同じように何かについて考え込むように、深く沈み込んでいるのだ。これでは、せっかくの豪華な料理もだいなしである。

そんな、明らかに異様な空気が漂う夕食が済んだ後――ラ・ヴァリエール公爵は家族全員の顔を見渡しながら、重々しくこう告げた。

「カリーヌ、エレオノール、カトレア。今から1時間後に、礼拝

堂へ集まるように」

そして、公爵はオスマンと一瞬視線を合わせた後、最後にルイズへ申し渡した。

「ルイズは、1時間半後に護衛のサイトを伴って礼拝堂へ来なさい。そうそう。彼には、例の『光の剣』を持って来るよう、忘れずに伝えるのだぞ」

それだけ言うと、ラ・ヴァリエール公爵はオスマン氏と連れ立って、そそくさと席を立ってどこかへ行ってしまった。

「全員で礼拝堂へ来いだなんて……いったい何事かしら？　しかも、あたしだけ30分遅れて来いって、どういうこと？」

戸惑いの表情を浮かべて周囲を見渡したルイズであったが、しかし。その疑問に答えてくれる者は、誰もいなかった……。

――そして、指定された時間の5分前。

ルイズと才人のふたりは、ラ・ヴァリエール公爵から言われた通り、屋敷内にある礼拝堂へ続く廊下を歩いていた。才人の背には、言われた通り、しっかりとデルフリンガーが背負われていた。

「なあ、これから何があるんだ？」

才人は、顔中に疑問符を浮かべてルイズに問うた。今日の稽古は休みであると、前もって伝えられている。にも関わらず、わざわざデルフリンガーを持って来いとは、いったいどういうことなのかと。

「あたしにもわからないわ。ただ、お父さまがあんたとデルフを連れてきなさいって」

ルイズの言葉に、デルフリンガーは鍔をかちかちと鳴らした。

「俺っちも連れてこいだなんて、おかしな指定だねえ。まさかたァ思うが、今からみんな揃ってドンパチやるってか？」

「いくらなんでもそれはないと思うわ……たぶんだけど。家族みんなだけじゃなくって、オールド・オスマンも一緒に待っているみたいだから」

「たぶんなのかよ！　てか、学院長先生って、何で屋敷に残ってんだ？」

「お父さまと、毎日打ち合わせしてるのは確かなんだけど、何を話しているのかまでは、教えてもらってないわ。たぶん、国のお仕事に関係することだとは思うんだけど」

「ふうん……学院長って、偉い先生だったんだな」

……などという話をしているうちに、彼らはいつの間にか礼拝堂の前へ到着していた。そして、彼らは豪奢な装飾が施された観音開きの扉の前へ立った。移動中に乱れた服装を簡単に直したルイズは、才人のそれも手早く整えてやると、小さくドアをノックした。

すると――礼拝堂の大扉は、まるでふたりを迎え入れるかのように、静かに開いた。ラ・ヴァリエール公爵が＜念力＞を唱えたのだ。

扉の奥は、まるで教会さながらといった雰囲気を醸し出す、立派な部屋だった。床の中央に、まっすぐと奥まで伸びる赤い絨毯が敷かれており、部屋の最奥には立派な祭壇と『始祖』ブリミルのシンボルが置かれていた。左右には、木製の長椅子がずらっと並べられており、部屋の中は、魔法のランプの灯りによって煌々と照らされ、荘厳な雰囲気を醸し出している。

祭壇の奥に、オールド・オスマンが立っていた。そして、その左右にラ・ヴァリエール公爵と、カリーヌ夫人。そして、祭壇手前左右に、エレオノールとカトレアが待ち受けていた。だが、それ以外の人間は誰もいない。普段、大勢の使用人たちが側に控えていることを考えると、これは異常事態といって差し支えない状況であった。

この光景を見た才人は、一瞬「なんだか結婚式みたいだ」などと考えてしまい、思わず顔を赤らめてしまったのだが――そんな彼と一緒に居たルイズは『パートナー』とは全く違う気持ちでいた。

何故かはわからない。でも、この扉をくぐったら、その瞬間――自分の中で大きな何かが始まる。そんな予感が、彼女の胸に去来していた。それが、ルイズに一歩を踏み出すことを躊躇わせていた。

ルイズは、思わず隣――自分の右横に立っていた才人のほうを見た。すると、不思議なことに……それとほぼ同時に、才人が彼女のほうへと顔を向け――彼らふたりの視線が交差した。

「サイト」

「ん、どうした？」

「手……貸して」

言われるままに左手を出した才人は、差し出されたルイズの華奢な右手が、小さく震えているのに気が付いた。彼がその手をそっと握ってやると、ルイズはそれをきゅっと握り返してきた。

――そして、ふたりは手を取り合い……ゆっくりと礼拝堂の中を歩いていった。

礼拝堂に設置されていた祭壇は、白い大理石で造られていた。その周囲には細かな彫刻が施されており、壇上左右には豪奢な装飾が施された燭台が設置され、その上では蝋燭が、紅い炎を揺らめかせながら、周囲を静かに照らしていた。

その祭壇中央には、立派な壇上に相応しくない、古びた本が置かれている。

祭壇の前まで来たルイズと才人のふたりを、オールド・オスマンは交互に見遣ると、小さく頷き……ラ・ヴァリエール公爵を見た。

ラ・ヴァリエール公爵は、静かにふたりの前へと歩み寄ると、ルイズの前へ立った。

「ルイズ、右手を出しなさい」

ラ・ヴァリエール公爵が厳かな声で告げた。そこで初めて、彼女は未だ才人の手を握っていたことに気付き、慌てて彼の手を離すと……そっと父親のほうへ手を差し出した。

公爵は懐へ手を入れると、そこから絹の布に包まれた小さな『指輪』を取り出した。そしてルイズの手を取り、その指に填めてやっ

た。台座には、青く清んだ美しい宝石――まるで、昼間に王宮で才人が言っていた『アクアマリン』のような石が留められている。

「お父さま、これは……？」

「それは、これからわかることだ。さあルイズ……祭壇の前へ立ちなさい」

言われるまま、ルイズは祭壇の前に――オールド・オスマンと向かい合うような形で立った。すると、突如右手薬指に填められた指輪が淡く輝きを放ち始めた。それは、どこまでも蒼く透き通った光であった。

「ミス・ヴァリエール。この『本』を手に取るのじゃ」

ルイズは、心臓がどきどきと早鐘を打つように高鳴るのを感じていた。この不思議な家族の集いは、いったいなんなのかしら……？

不安げな顔をして周囲を見渡すと、全員が彼女に注目――いや、見守ってくれているのがわかった。彼らの瞳に湛えられた光に勇気づけられた少女は、そっと『本』を手に取った。その途端、指輪と本がまるで同調したかのように、輝く光輪に包まれた。

何かに導かれるように、ルイズは本を開いた。そして、光り輝く本の中に文字を見つけた。それは、古代ルーン文字であった。

もしも、これを見たのがごくごく普通の生徒だったなら……何が書かれているのか、さっぱりわからなかったかもしれない。だが、ルイズは非常に勉強熱心な学生だったので……その文字を、なんなく読むことができた。

ルイズは、光の中の文字を追い――そして、無意識にそれを読み上げた。

「――序文。これより、我が知りし真理をこの書に記す。全ての物質は、世界に宿りし小さな粒より為る。四の系統は、その小さな粒に干渉し、影響を与え、かつ変化せしめる呪文なり。その四つの系統は＜土＞、＜水＞、＜火＞、＜風＞と為す」

彼女の声を聞いた者たち――才人を除く全員が、小さく震え始めた。だが、ルイズはそれに全く気付かず、ひたすら文字を追い続けた。

「四の系統が影響を与えし小さな粒は、さらに小さな粒より為る。神は、我に四の系統よりもさらなる先の『道』を示された」

――＜土＞の先、此即ち＜支援＞。全ての『支柱』を司る道。

――＜水＞の先、此即ち＜生命＞。全ての『生死』を司る道。

――＜火＞の先、此即ち＜消滅＞。全ての『破壊』を司る道。

――＜風＞の先、此即ち＜空間＞。全ての『場所』を司る道。

ルイズは、まるで何かに導かれるように、本のページをめくり続けた。

「我が系統の『道』は、さらなる小さな粒に影響を与え、かつ変化せしめる＜力＞にして呪文なり。此、四の先にして、四に非ず。四にあらざれば零（ゼロ）。零すなわち此＜虚無＞。我は、神が我に示され

た『道』を『虚無（ゼロ）の系統』と名付けん」

ルイズは、ここに至ってようやく気が付いた。自分が今、何を知ろうとしているのか。

「虚無の系統……『伝説』じゃない。失われた、伝説の系統じゃないの！」

思わず叫び声を上げたルイズは、さらにページをめくる。胸の鼓動が高まった。そして、彼女は鈴を鳴らすようなその声で『始祖の祈祷書』を朗読し続けた。

――これを読みし者は、我の行いと理想、そして目標を受け継ぐものなり。＜虚無＞を扱う者は心せよ。志半ばで倒れし我とその同胞のため、異教に奪われし『聖地』を取り戻すべく努力せよ。

＜虚無＞は強力無比なり。また、その詠唱は長きにわたり、多大な精神力を消耗する。詠唱者は注意せよ、時として＜虚無＞はその比類なき強力さが故に命を削る。故に決して多用することなかれ。

その強力さが故に、我はこの書の『読み手』を選ぶ。たとえ資格なき者が指輪を填めても、この書は開かれぬ。選ばれし者は＜四の系統＞の指輪を填めよ。さすれば、我が＜虚無＞の呪文を紐解くこと叶うであろう。

――ブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリ――

そこまでルイズが読み上げた途端、今度は才人の背中――つまり、彼に背負われたデルフリンガーの鞘から、淡い光が漏れ始めた。

「サイト君！　デルフリンガーを抜いて、頭上に掲げるのじゃ！」

オスマンの声に応え、才人はすらりとデルフリンガーを鞘から引き抜くと、両手で掲げ持った。鏡の如き美しさを持つその刀身は『指輪』と『本』が放つ光を反射して、青白く煌めいた。

「いやあ、嬉しいねえ！　久しぶりだねえ！　『担い手』に出会えたのは！　思い出したよ、俺っちはブリミルの側に居たんだ！　さあ嬢ちゃん、ページをめくりな。ブリミルのやつは、きっと今の嬢ちゃんに相応しい呪文を用意しているはずだ」

ルイズは、言われた通りにページをめくった。だが、次のページには何も書かれていない。完全なる無であった。

「なんにも書かれてないわ！　真っ白よ！！」

「もっとめくりな。嬢ちゃんが心から必要としていれば、読める。いいか？　嬢ちゃんが本当にしたいと願うことを強く念じながら、ページをめくるんだ」

――あたしが、したいこと。ルイズは、ふいに思い出した……あの言葉を。

『いつか、みんなで一緒に行こう』

そして、彼女は才人を見た。そうだ……あたしは、サイトと一緒に行くって決めたのよ！　ううん、彼だけじゃなくて、仲間たちみんなと約束したんだ。あたしは、彼らと――どこまでも一緒に飛んで行くって！

ルイズは、必死にページをめくった。と……ようやく文字の書かれた場所を発見した。そして彼女は、そこに書かれていた古代文字を読み上げた。

「＜瞬間移動（テレポート）＞。『空間』の初歩の初歩の初歩。此、瞬きの間に『場所』を移動する呪文なり。汝が知る行き先を強く念じ、把握し、掴み、詠唱せよ。さすれば『空間』を渡ること叶うであろう。以下に、発動に必要となる魔法語を記す」

まるで熱に浮かされたようになったルイズは、さっと杖を取り出すと……そこに記されていた呪文を唱えはじめた。

「ウリュ・ハガラース・ベオークン・イル……」

呪文を解放したその瞬間、ルイズの身体は、彼女が思い浮かべていた場所――礼拝堂の入り口に立っていた。約５０メイルの距離を、たったの一瞬……文字通り、瞬きの間に飛び越えたのだ。

そして、彼女は瞬時に掴んだ。この呪文で『あそこ』にも行ける。

「ウリュ・ハガラース・ベオークン・イル！」

ルイズが思い浮かべたのは、才人の隣に立つこと。次の瞬間、彼女は眩い光と共に、才人のすぐ側に立っていた。全員が、驚愕を顔に貼り付けて彼女の姿を見つめていた。まるで――そこに女神が降臨したかの如く。

「これが『空間移動』……！」

声に出してそれを言った後、ルイズは遂に到達した。その結論に。

「これが……あたしの『道の先』なの？　＜虚無＞が……あたしの……系統……？」

彼女の小さな呟きを受け止めたのは、祭壇の前に立つ老人であった。

「そうじゃ……ミス・ヴァリエール」

「学院長は、知っていたんですね？」

オスマン氏は、その問いかけに重々しく頷いた。

「その可能性があるとは思っておった。だが、本当に知ったのは……今じゃよ」

それを聞いたルイズは、思わず乾いた笑い声を上げてしまった。

「ねえ……『始祖』ブリミル。あんた、これ……何かの皮肉なの？　あたしの、昔の二つ名は『ゼロ』。サイトの国から舞い降りてきた『竜の羽衣』の名前も『ゼロ』。おまけに虚無（ゼロ）の系統？　なんなのよ、これ。どうしても、このあたしを『ゼロ』に戻したかったっていうの……！？」

カリーヌ夫人は、両手で顔を覆い黙りこくっていた。エレオノールに至っては、額に手をやり、床に倒れてしまった。そんな姉を、カトレアが介抱し始める。

ラ・ヴァリエール公爵は、末娘の手を取り、その目を見つめなが

ら呟いた。

「可能性であってほしかった。だが……現実になってしまった。ルイズ……おまえは、やはり『始祖』の再来。『伝説』の＜虚無の担い手＞だったのだね」

父の言葉を聞いたルイズは、目を見開いた。始祖の再来？　伝説！？　このあたしが……？

「父さまも、知っていたんですか……？」

ラ・ヴァリエール公爵は娘に向かって重々しく頷くと、こう告げた。

「いいかね？　ルイズ。このことは、家族以外の誰にも話してはいけないよ。たとえ、王家の方々から問われたとしてもだ」

「どうしてですか？」

「＜虚無＞は『始祖』ブリミルしか扱うことができなかったと言われている『伝説』の魔法にして、本来であれば、その血を受け継ぐ王家の者にしか、絶対に現れないとされている＜系統＞だからだ」

「王家にしか現れない系統！？　だったら、どうしてあたしが」

「忘れたのかね？　ルイズや。我がヴァリエール公爵家は、王家の傍流だ。＜虚無＞が出ても、ちっともおかしくない家系なのだよ。そして＜虚無＞が出たということは……」

そこまで言われたルイズは、はたと気が付いた。

「つまり……トリステイン王家の正統が、ヴァリエール家に移る……と？」

娘の言葉を継いだのは、ラ・ヴァリエール公爵ではなく、その妻カリーヌであった。

「その通りです。現在、トリステインの王座は空位。もしも、これが外部に漏れたりしたら……最悪の場合、愚かな一部の貴族が、あなたを御輿に担ぎ出して戦争を起こそうと考えるかもしれません。ヴァリエール家こそが正統な王家である、よって杖を取り現王家を打倒せよ……と」

さらに、妹の介抱によってようやく立ち上がったエレオノールが追従する。

「もしも、ロマリア宗教庁にこれが知られたら、大変なことになるわ。おちびを『虚無の巫女』だなんて祭り上げて、大騒ぎするかもしれない。聖地奪還運動を再開することすらありえる……つまり、エルフと杖を交えることになるかもしれないということよ」

ルイズの小さな身体が、突如背負わされた『伝説』の重みで震え始めた。ラ・ヴァリエール公爵は、娘の側へ歩み寄ると、その身体を掻き抱いてこう告げた。

「わしは、おまえの＜系統＞を盾に王座につくことなど考えてはおらん。『虚無の巫女』だなど、もってのほかだ。大切な娘を、戦争の道具になどしてたまるものか！」

娘を抱く腕に力を込め、ラ・ヴァリエール公爵は宣言した。

「よって、ルイズ。これからおまえの系統を、今ここにいる者だけの秘密とする。幸いなことに、そのための準備は既に整えられている。かの『東の参謀』殿の手によってな」

「ミスタ・タイコーボーが……？」

彼女の疑問に答えたのは、オールド・オスマンだった。

「そうじゃ。そのために、彼はあのような指示をしていたのだよ。まずは＜念力＞を極めろと。そして＜力＞を発動するためのキーワードを、あえて＜系統魔法＞のルーンにあてはめ、唱えさせていたのだ。そう……ミス・ヴァリエール、君が持つ、真の＜系統＞を隠すためにな」

カリーヌ夫人は、まっすぐに末娘を見据えて言った。

「実際、彼の偽装は……ほぼ完璧です。余程の＜風＞の使い手でなければ、あなたが＜念力＞を使って空を飛んでいることも＜レビテーション＞を唱えるふりをして物を浮かせていたことにも、全く気付けないことでしょう」

母親が告げたその事実は、ルイズに衝撃を与えた。ミスタは、あたしにはそんなこと言わなかった。ただ、将来＜系統＞に目覚めたときに備えて、ルーンを途中まで唱えてイメージの練習をしなさいって――！　と、ここまで考えた彼女は気付いた。あたしの系統を隠すためにそんなことをさせていた！？　つまり、それって……。

「ミスタ・タイコーボーは、あたしの＜系統＞に気付いていたってこと……？」

「そうじゃ。フーケを捕縛したあの日……君が、ミスタ・タイコーボーに泣いて『解析』を頼んだあのあとすぐに、彼とわしは揃って辿り着いておったのだよ。ミス・ヴァリエール、君がほぼ間違いなく『始祖』の再来。つまり＜虚無の担い手＞であることにな」

だが……と、オスマンは申し訳なさそうに続けた。

「どうすれば＜虚無＞を目覚めさせることができるのか、あの時はどうしてもわからなんだ。なにせ＜虚無＞は、既に失われて久しい系統であったからのう。じゃから、わしらふたりは協力して調査に当たっておったのじゃよ。彼の持つ『解析』能力と、わしの伝手を利用することによって、徹底的にな」

「でも、ミスタが知っているってことは……タバサも？」

「いや、彼女は何も知らんよ。あの男は、自分の主人にすら完全に黙秘を貫いておる。何故なら……これは、言わなくてもわかるのではないかね？」

ルイズは、小さく頷いた。

「ミスタは、戦争が嫌い……ううん、憎んでいるから。あたしの＜系統＞が漏れたら、利用されて……戦争の道具にされるかもしれない、そう考えたから」

それを聞いたオスマン氏は、真剣な表情で首を縦に振った。

「その通りじゃ。くどいようじゃが、わしの口からも言わせて貰う。ミス・ヴァリエール、君の＜系統＞や、それを匂わすようなこ

とについて、決して外へ漏らしてはいかん。これには、当然サイト君のことも含まれる」

突然名前を呼ばれた才人は、ビクリと身体を震わせた。ブリミル教についてよく知らない彼は、現在の状況についてほとんど理解できていなかったのだが、それでも。自分だけではなく、すぐ隣にいる少女ルイズも、何らかの『伝説』を背負わされようとしている。そのことだけは気付いていた。

「ひょっとして、俺の＜ガンダールヴ＞にも関係してるんですか？」

「その通りじゃ。いや……正確に言うと、君という存在が、彼女の＜系統＞を導き出したのだよ。何故なら、かつて＜ガンダールヴ＞を使役していたのは『始祖』ブリミルだからじゃ。つまり……君たちふたりは、揃って『伝説』となるべく選ばれし者なのだ」

「あたしたちが……」「俺たちが、選ばれし者……？」

揃って声をあげた『伝説候補』に、オスマンは重々しい表情で告げた。

「ミス・ヴァリエール。君は今日から＜風＞になるのじゃ」

「あたしが＜風＞に……？」

「そうじゃ。幸いなことに＜念力＞で風を吹かせるコツを心得た男が、わしらのすぐそばにおる。今はゲルマニア見物に出かけておるが、来月頭には学院に戻って来ると言っておった。後ほど相談してみるといい。それまでは……」

オスマン氏は、どこにでもあるような、地味で目立たぬ装丁のメモ帳を1冊取り出し、ルイズに手渡した。

「今、君が手にしている『始祖の祈祷書』に記された呪文を、これに書き写しておくのじゃ。ひょっとすると、新しい＜呪文＞が読めるかもしれんから、それも合わせてな。そして、誰にも見られない場所で、さきほど習得した＜虚無魔法＞を練習しておくのじゃ」

続いて、ラ・ヴァリエール公爵がルイズに告げた。

「ルイズや。その指に填っている『水のルビー』は『始祖の秘宝』だ。万が一にも紛失してはならぬものである。よって、普段はこのわしが『祈祷書』と共に預かっておく。そして、毎朝おまえに貸し出す。そのとき新しい呪文を見つけたら、オールド・オスマンからもらった帳面に書き記すのだ。いいね？」

ルイズは、こくりと頷いた。そして自分の右手薬指に填められている『指輪』を見た。それは、まるで新たなる伝説の到来を告げる星のように、青白く瞬いていた――

第７９話　新たな伝説枢軸の始まり、その序章（後書き）

ささやき、えいしょう、いのり、ねんじろ。

３話続けてメイン主人公チームが登場しないってある意味すごいと思う今日このごろ。ちなみに、彼らは現在ゲルマニアで療養中でございます。

さて、お待たせしました！　ついにルイズの＜虚無＞覚醒イベント発動です。前回、前々回からの流れで、何となくそろそろ来るんじゃなかろうかと予想をされていたかたもいらっしゃるのではないでしょうか。

……アルビオンで来るだろうと思っていたかたには、予想を覆してしまってごめんなさいということで。

なお『始祖の祈祷書』の内容が、原作『ゼロの使い魔』のそれと異なり、虚無の種類について言及しています。これら種類についても、さりげなーく過去のテキストに紛れ込ませていたのですが、気が付かれておられたかたはいらっしゃいますでしょうか？

そして。ルイズが最初に習得したスペルは＜瞬間移動（エクスプロージョン）＞でした！
そう……ルイズだからといって最初に＜爆発＞を覚えるとは限らない……ッ！　また、いきなり＜世界扉（ワールド・ドア）＞もありえません。まずは初歩の初歩の初歩から！　そして積み重ね！　これは本作を構成する上で、一貫したテーマとなっております。

なお、いちおう原作にある＜虚無魔法＞の、どれがどの『道の先』であるのかは既に決定してあります（これはある意味当然なのです

が）。なお、今回は感想欄などでの予想書き込みＯＫであります！
ただし「これはどれに当てはまるの？」「どうしてそれに当てはめてるの？」的な質問については一切解答できませんので、どうかご了承ください。と、いうわけで。よろしければ是非考えてみてください！

ついでに。原作に名称は登場しないものの、存在している＜虚無魔法＞がいくつかありますが、これについても物語後半用に設定してあったりします。当然、原作に名前が登場してきたらそれに差し替えます。

では、次回をお楽しみに！

第８０話　空の王権の滑落と水の王権の継承

――アンスールの月、ティワズの週、ダエグの曜日。

ルイズが自分に課せられた＜運命＞について知らされてから、５日が経過した。しかし、彼女の生活はこれまでと一切変わらないものだった――少なくとも、表向きは。

これは、

「目立たないようにするためには、何も変えないのがいちばんだ」

と、いうラ・ヴァリエール公爵が打ち立てた方針によるものである。

本当にそれでいいのだろうか？　『伝説』の系統に目覚めた者として、もっとすべきことがあるのではないか。そう考えたルイズであったが、自分の目をただまっすぐに見据えてくる、威厳に満ち溢れた父親に口答えをすることなど……彼女にはできなかった。

――そんなルイズの新生活を紹介しよう。

朝、日が昇る前に目を覚ます。そして寝間着の上にガウンを羽織り、父親の書斎を――誰にも見られることのないよう＜瞬間移動＞を使うことによって――訪れ、その場で『指輪』と『本』を借り受け、新しい呪文が現れていないかどうかの確認を行う。

しかし＜虚無＞に目覚めた時のように『指輪』と『本』が光ることはなく、新たな呪文も一切みつからなかった。ラ・ヴァリエール

公爵とルイズは、嘆息しつつも――逆に、呪文が増えるときに光るのかもしれない。それをひとつの目安にしてもよいのではないか。そう結論した。

その後ルイズは、再び＜瞬間移動＞によって自室へ戻り、ガウンを脱いでベッドの中へ潜り込み、使用人が自分を『起こす』ためにやって来るのをじっと待つ。

現れた使用人の手で着替えを終えた後、今度はダイニングルームへと歩いて移動し、そこで家族揃って朝食を摂る。相変わらず無言のうちに過ぎてゆく食事を済ませた後『いつも通りに』大好きな次姉カトレアの部屋で、長姉エレオノールを交え、姉妹3人で優雅にお茶を楽しむ。

だが、実際に部屋の中にいるのは3人だけではない。才人がカリーヌ夫人と稽古をしている間、暇を囲っているデルフリンガーが、彼女たちとの会話に加わっている。そう、これは優雅なティータイムと見せかけられた『始祖』ブリミルと＜虚無＞魔法に関する研究のための時間なのだ。

あるとき、デルフリンガーがこの席でとんでもない発言をした。

「相棒が、嬢ちゃんのために絵図面描いてる姿がさ、なんだか不思議と懐かしかったんだ。そうそう、思い出した。ブリミルのやつと、ガンダールヴの嬢ちゃんに似てるんだよ。あいつらも、よくああやって一緒に新しい魔法を考えてたっけなあ……」

これを聞いて仰天したのはエレオノールである。

この時点で、デルフリンガーが『始祖』ブリミルを護る『盾』と

して使われていた、文字通り国宝級の＜マジック・ウェポン＞であり、才人がその『光の剣』の＜使い手＞として召喚された＜伝説の使い魔＞であることを、父親とオスマン氏から教えられていた彼女は、好奇心が溢れるあまりにぷるぷると震える両手を必死の思いで抑えながら質問した。

「あ、あなた、し、しし『始祖』ブリミルを、し、知っているというの！？」

「そりゃあ知ってるさ。なにせ俺っちは、ガンダールヴの嬢ちゃんに握られて、あいつを護ってたんだかんね。いやはや、懐かしいねえ。あいつらも、よくふたりで新しい魔法を創る実験をしてたっけなあ。相棒が、ルイズの嬢ちゃんに『見えない盾』の魔法を教えた時みたいにな」

新しい魔法を創る実験。なんとこの剣は、その場面に立ち会っていたのだという。この話を聞いたエレオノールは、歓喜のあまり、その場で飛び跳ねそうになるのをこらえるだけで精一杯といった体であった。それはそうだろう、なにせ魔法の開発秘話を聞くことができるというのだ。こんな機会は、得ようとして得られるものではない。

だが、カトレアはそんな姉とは全く別のところが気になっていた。

――ガンダールヴの嬢ちゃん。つまり……。

「まあ！　始祖を護っていらした『神の盾』は、女のひとだったの！？」

「ああ、そうだ。顔や名前は全然思い出せねーけど、やたらとキ

ツい性格の姉ちゃんだったってのは覚えてるぜ。懐かしいねえ……相棒とルイズの嬢ちゃんは、立場までそっくりだったっけ。ああ、普段のやりとりがって意味な」

「た、たとえば、どんなところが？」

「ああ、それなんだがな……」

ルイズの問いに、何やら含み笑いをしているような声で答えるデルフリンガー。

「いつも、ブリミルのやつが『新しい＜魔法＞を考えついたんだ。ちょっと試してみていいかい？』なんつって、嬢ちゃんを実験台にしようとするんだ。そのたんびに『ふざけないで！　この高貴なわたしを＜使い魔＞にできたんだから、もっと敬意を払ってしかるべきよ！』なんて怒鳴りつけられてな……いやあ懐かしいねえ」

カチャカチャと鍔を鳴らすデルフリンガー。どうやら笑っているらしい。

使い魔に怒鳴られる主人。エレオノールの中で、敬愛する『始祖』ブリミルのイメージが、がらがらと音を立てて崩れ落ちていったのは言うまでもない。

いっぽうルイズは、羞恥で顔を真っ赤に染めながらも――この話を聞いて、ほんの少しだけ肩の力が抜けた。

当初は『始祖の再来』などと呼ばれ、その重圧と使命感に打ち震えていたのだが、実はそのブリミル本人が――所謂、清廉潔癖で欠点など一切ない、完璧な偉人などではなく――どこにでもいる、ご

くごく普通の人間だったことを知ることができたからだ。

それに……『始祖』ブリミルと、かつての＜ガンダールヴ＞が、どこか自分たちふたりと似ていると言われたのが、ルイズには何故かとても嬉しく感じられた。

――しかし。それ以外には、たいした収穫は得られなかった。

エレオノールが＜虚無＞魔法を習得するためのより詳しい条件や、始祖がどこから来たのか等について、デルフリンガーをさんざん問い詰めてみたのだが、

「……知らね」「……忘れた」「……思い出せねェ」

と、いう答えしか返ってこなかった。カトレア曰く、

「デルフさんは、６０００年以上生きているんですもの。古い記憶が埋もれてしまうのは仕方のないことだわ」

とのことだったが、事実カトレアには、独特の＜能力＞で、デルフリンガーが嘘を言っていないことが感覚的にわかっていた。また、彼の『中の声』が『記憶の蓄積』らしきもののせいで、まるで分厚い防音壁に遮られているかのように――全く聞き取ることができないのも確かであった。

「何かきっかけさえあれば、思い出してくれるかもしれないわ」

カトレアの言葉に、エレオノールは嘆息した。

「そうね……今までの話を聞く限りだと、それは充分ありえるこ

とだわ。ひょっとすると、特定の場面やキーワードに反応するのかもしれないわね」

首をひねり、思いつく限りのいろいろな言葉を投げかけてみたエレオノールであったが、進展はなし。結局その日判明したのは、

・デルフリンガーは、かつて『始祖』の側に在った。制作者は不明

・６０００年前の『勇者』にして＜ガンダールヴ＞は女性だった

・『始祖』ブリミルと＜ガンダールヴ＞は大変親しい間柄であった

・『始祖』ブリミルは＜魔法＞の開発者であった

……たったのこれだけである。ただし『始祖』ブリミルが紛れもなく魔法の『創始者』であることを改めて確認できたエレオノールは、至極ご満悦であった。

昼食の後、ルイズは自室に籠もって＜魔法＞や『ブリミル教』に関する古い書物を紐解く。これらは、オールド・オスマンがわざわざ『フェニアのライブラリー』から特別に持ち出してきてくれた、１０００年以上も前の貴重な古書ばかりである。

その中には、当然『始祖ブリミルとその使い魔たち』に関するものも含まれていた。そこに記されていた内容を読むことによって、ルイズはようやく知るに至ったのだ。何故才人の存在が、自分の＜系統＞を導いたのかを。

そして、ルイズの中にとある疑問が浮かんだのだが……この時点

では、まだそれを口にすべきではないと判断した彼女は、自分の心の中に刻み込んでおくだけに留めていた。

夕方以降は、より厳しさを増した『稽古』を課せられた才人の看病――ルイズ本人の言葉を借りるならば『世話』をする。そこで何気ない会話をするのが、彼女にとって最大の楽しみになりつつあった。

いつもの通り、ふて腐れたような声で才人が何事かを呟く。話は必ずそこから始まる。

「おとぎ話なんかによく出てくる『伝説の勇者』ってスゲエわ。正直ナメてた」

「なによそれ。どういう意味？」

「突然お城に呼びつけられてさ。『おお伝説の勇者サイトよ！わしは、お前が現れるのを待っていた』とかなんとか言われるだけで、平然と旅立っちゃう。さすがは伝説格が違った。うん、勇者ってスゲエ。俺には真似できません」

「ちょっと、なんなのよそれ。ただ待ってるだけなの！？　その王様。使いをやったりして、勇者さまを探したり、手助けしたりはしないわけ？」

「ん……まあ、だいたい椅子にふんぞり返ってるだけだな。で、勇者は武器と小遣い程度のお金持たされて、悪いヤツをやっつけに行かされるんだ。魔王とかな」

「ず、ずいぶんと酷い話ね……お小遣い程度で魔王討伐って。そ

れで？　その勇者さまは、旅立った後はどうなるの！？」

「世界中を旅して、魔物を倒したりしながら経験を積んで、強くなって――そんで、最後に魔王を倒して、お姫様と結婚してハッピーエンドってのがお約束だな。ああ、魔王から『世界を半分やるから仲間になれ』なんて言われることもある」

「馬鹿な魔王ね！　勇者さまがそんなことで転向するわけがないじゃないのよ」

「いや……それが、実際に仲間になって世界半分もらっちゃったり、中には自分が魔王に成り代わっちゃうヤツもいたりするんだな、これが」

「ウソでしょ！？」

「いやマジで。けど、大抵ロクなことにならない」

「……サイトは、そんな『道』選んだりしちゃダメだからね？」

「それ以前の問題だよ！　俺、勇者になるの確定なの！？　確定なんデスカ！？」

「なによ！　勇者になるのが嫌だっていうの！？」

「普通がいい。お嬢様んちの『台風』と『激流』を体感して、俺はつくづく思い知りました。普通の人生って素晴らしい。地球にいた頃は、真面目に将来のこと考えたりしたことなかったけど、少なくとも俺の進路に『伝説の勇者』はありませんでした」

それを最後にむっつりと押し黙ってしまった才人に、ルイズは尋ねた。

「あんたは、その……元の世界に帰ったら、なりたいものがあるの？」

「やっぱりサラリーマンかな。普通に考えたら」

「サラリーマンってなに？」

「働いて、給料をもらうんだ。どんな仕事するかはよくわかんねーけど」

「あんたは、それになりたかったの？　よくわからない仕事をするものなのに？」

「本当になりたいってわけじゃねーよ。さっきも言ったけど、ここに来るまでは……あんまり、そういうこと考えてなかったし。で、お前は？　やっぱ立派な貴族か？」

それを聞いたルイズはしばらく黙っていたが……ふいにぽつりと呟いた。

「あたしはね、普通のメイジになりたかったの。父さまや母さまみたいに強力なメイジになんかなれなくてもいい、ただ、他のみんなと同じように……呪文を成功させることができるメイジになりたかった」

幼い頃から、どんな呪文を唱えても爆発させていたルイズの願い。それは、普通のメイジならばごくあたりまえにできることを、あた

りまえのようにやれるようになりたい。ただ、それだけだった。

「あのあと、学院長先生から聞いたの。あたしが＜系統魔法＞を失敗し続けていたのは、単に＜力＞が大きすぎるだけじゃなくて＜系統＞が合わなかったからなんだって」

「それ、どういうことだ？」

才人の疑問に、ルイズは身近な例を出すことによって答えた。

「メイジにはね、得意な＜系統＞とそうでないものがあるの。たとえば、お母さまは＜風＞魔法はものすごいけど＜水＞の＜治療＞なんは全然ダメ。お父さまは＜水流の盾（ウォーター・シールド）＞みたいな、身を守るための魔法は上手だけど＜攻撃魔法＞はあんまり得意じゃないわ」

攻撃のママに回復と防御のパパですか。怖ろしくバランスのいいコンビだなあ……やっぱふたりで『伝説』なんじゃねェのか！？そんなことを考えつつ、才人は言った。

「ああ……なるほどな。そういえば、公爵は＜水＞の魔法しか使って来なかったっけ。つまり、ルイズは＜虚無＞だったから、他の魔法ができなかったってことか」

「そういうことみたい。普通なら、自分の＜系統＞に目覚めたあとは、他の系統魔法もある程度使えるようになるものなんだけどね……エレオノール姉さまにもそう言われて、試しに＜錬金＞してみたんだけど、やっぱり爆発しちゃったわ」

「てことは、ルイズは母ちゃんと同じで『一点特化型』なのか」

無言のままコクリと頷いたルイズ。どうやら、他系統の魔法が一切使えないという事実が、彼女にとっては相当ショックだったらしい。

「あんたの言うとおりだわ。あたしも普通がよかった。どうして、よりにもよってこのあたしが『伝説』なんて肩書き背負っちゃったのかしら……」

楽しみだったはずの時間が、このように一転してどんよりとした愚痴大会と化し……『伝説』を背負った主従が、揃ってため息をつくこともしばしばであった。

晩餐の後は、再び自室へ籠もり、新たに覚えた＜瞬間移動＞を練習する。なお、ルイズがこの魔法をひとりで使用するにあたり、前もって才人から、

「必ず、行き先をしっかり決めてから使えよ!?　そうでないと、魔法が暴走してとんでもない場所に出る可能性があるからな」

……と、いう注意を受けていた。

「あんたのところの『伝承』にもある魔法なの？　これ」

「ああ。少なくとも、俺が知ってる＜瞬間移動（テレポート）＞は、滅茶苦茶ヤバイ魔法なんだ。最初に、行きたい場所をちゃんと決めて跳躍すれば全然問題ないんだけど……なんにも考えないで使うと、地面の中に出現してそのまま出られなくなったり、反動で何十リーグも上空に放り出されたりすることがある」

「うっ……そ、それは確かに危ないわね……教えてくれてありがとう」

もちろん、彼が語っているのはゲームやマンガなどで得た知識であって、本物の＜魔法＞に関する話ではない。だが、例の『防御壁』と同じく、可能性としては充分ありえることなので、念のため口にしておいた才人であった。

「いえいえどういたしまして。お嬢様を『補佐』するのも＜ガンダールヴ＞の役目でございますから。ああ、そうだ。もうひとつ注意点がある」

「な、何かしら」

既に顔を引き攣らせまくっていたルイズに、才人は真面目くさった顔で答えた。

「『空間の座標』つまり『場所』を指定して飛ぶのはいいんだけど『モノ』を指標にするのはできるだけやめたほうがいい。特に、動くモノの近くに跳躍するのはヤバイ。最悪の場合、移動した瞬間ソイツの『中』に出現して、揃って＜爆発＞なんて可能性もある」

特に『誰かの隣』なんていうのは、相手が絶対に動かないっていう保障がない限りはやめておけよ!?　そう才人から告げられて、ルイズはカタカタと震え出した。

「ヲイ。まさかとは思うけど、あのとき俺の隣指定して跳躍したとか？　とか？」

ふいっと視線を外したルイズを見て、才人は確信した。ああ、や

ってくれやがりましたねこのお嬢様は……と。しかし、何故彼女がそのような考えに至ったのかについては、全く気付けない。彼の鈍感ぶりは、筋金どころか鉄骨入りなのであった。

「頼むから、次からは絶対『やる』って宣言してから試してくれよ！　ふたり揃って大爆発！　なんて結末だけはゴメンだからな！？」

「わ、わかったわ……」

その後ルイズは、自主練習中に＜瞬間移動＞――いや＜虚無魔法＞について、非常に興味深いことに気が付けた。

自室でひとり練習をしている最中に、たまたま部屋を訪れた使用人のノック音に驚いたルイズは、思わず詠唱を停止してしまった。にも関わらず、彼女が当初から思い浮かべていた『ベッドの上』へ跳躍することができたのである。

そう――なんと通常の＜系統魔法＞と異なり＜虚無＞の場合は、呪文の詠唱を途中でやめてしまっても、必ず何らかの効果が発動するということを発見したのだ。

この件が引き金となり――ルイズは、初めて魔法が成功したときのことを思い出した。

――それは、太公望に教わった『掴み』『解き放つ』ための手法。

『よいか？　自分の＜中＞に意識を集中するのだ』

『＜魔法＞を紡ぎ終えるまでに＜力＞を廻し、巡らせ、集め……

そして唱え終えるのだ。くどいようだが、イメージが大切だからな』

この魔法の場合は、意識を向ける＜方向＞が逆なんだわ。ルイズは瞬時にそれを理解した。それに、あの『始祖の祈祷書』にも、こう書いてあったではないか。汝が知る行き先を強く念じ、把握し、掴み、詠唱せよと。

行き先……つまり、自分の＜外＞に意識を集中するのだ。そして、全身に＜力＞を巡らせる。ルイズは、自分の体内に独特のリズムが生まれてくるのがわかった。そして彼女は完全に把握し――掴んだ。

「ウリュ・ハガラース・ベオークン・イル……！」

呪文に＜力＞を込めれば込めるだけ、唱える文字の数を増やせば増やすだけ、跳躍できる距離が延びるらしい。そのとき彼女が『掴めた』範囲は、自分を中心とした半径最大1リーグの『空間』。それら全てに在るものが、鮮やかなまでに脳内へ『浮かんで』きたのだ。その動きに至るまで、余すことなく。

そして、彼女は跳躍した――誰もいない空間、屋敷の上空1リーグの高さへ。

当然のことながら、何もない場所へ出現したのだから……自然の法則に従って、彼女は落下を開始した。だが、ルイズには一切の動揺は見られない。

「ウリュ・ハガラース・ベオークン！」

さらに上へ。

「ウリュ・ハガラ！」

今度は、横へ跳躍した。繰り返し、繰り返し……彼女は、夜空を跳び続けた。

最後の跳躍で自室へ戻ったルイズは、ひとつの結論に達した。

「普通に空を飛ぶだけなら……＜念力＞のほうが速いし、疲れないわ」

そう――＜瞬間移動＞は、空を舞う手法としては、残念ながら……全くもって適していないのであった。

「それと……広い『空間』を掴むのも、できるだけやめたほうがよさそうね……行きたい場所だけを思い浮かべて、その周辺だけを把握したほうが＜力＞の消耗を抑えられるし――それに、飛べる距離を伸ばすこともできそうだわ」

考えついたことを、早速メモに取って残す。こういう几帳面なところは、やはり血筋というべきか、為政者として優秀な父や研究員である姉エレオノールとそっくりである。

……だがしかし。

「おちび！　このお馬鹿！　よりにもよって、こんな『上空』に飛び出すだなんて……もしも途中で＜精神力＞が切れたら、どうするつもりだったのよ！？」

「ひたいでふ、ぼうしばぜん！　あでざばやべでくだざひおでがいじばず」

実験結果によって判明したことを早速レポートに纏め、提出した途端――その姉の手で、頬を思いっきりつねりあげられてしまった。このように、行動の結果を全く考えず、まるで鉄砲玉の如く飛び出していってしまうようなところは、しっかりと母親の血を受け継いでいるルイズであった。

――と、こんな調子で日々を過ごすルイズ。今のところ、彼女の周辺だけに限って言えば……まだ世界は平穏であった。

○●○●○●○●

――トリステインの王宮に、アルビオン王国の都市『レキシントン』が『レコン・キスタ』と貴族派の連合反乱軍によって完全包囲されたという報せが届いたのは、その日の朝であった。

すぐに軍関係者や大臣、そして主立った貴族たちが集められ、緊急会議が開かれた。何故ならば、同都市はこれまでアルビオン王党派が抑えていた主要都市のひとつであり、その空軍基地がある場所だからである。

これまで王党派と貴族派の戦況が膠着していたアルビオン王国内の戦争が、今後の状況いかんによっては一挙に貴族派側に傾きかねない。よって、トリステインが国として王党派に援軍を出すならば、最早一刻の猶予もならない。急使を出し、アルビオン側の承認を得なければならない。

しかし、会議はいつもの通り似たような内容を、ただこね回すばかり。まずは大使館へ事と次第を問い合わせるべきだ、とか、情報

の流出を抑えて国内の混乱を防ぐべし、といった意見が飛び交っている。

会議室の上座には、珍しくアンリエッタ姫の姿もあったが――その表情は呆然としていた。無理もない、あまりに突然の事態急変に、その精神がついていけなかったのだ。

怒号が飛び交う中、アンリエッタはふいに傍らの席を見た。そこに腰掛けているのは、彼女が最も頼りとする人物、ラ・ヴァリエール公爵である。本来はゲルマニアとの国境防衛を任されている重鎮でありながら、この1ヶ月というもの、自領と国境の安定と昨今の国際情勢を鑑み、わざわざ王宮へ足を運び続けてくれているのだ。

ラ・ヴァリエール公爵は、トリステイン国内において、徹底した『保守派』として知られる政治家である。また、それは政治思想だけではなく、各種戦略・戦術の組み立てにおいても『守り保護す』即ち『防衛』を基本とする武将として名を馳せた存在だ。

現在では、年齢を理由にゲルマニア国境防衛軍の第一線からは退いており、実際に国境近辺の守護役を務めているのは彼の部下たちであるのだが、その『守護者』としての知謀は、未だ衰えてはいない。

そんなラ・ヴァリエール公爵が、大切な国境守護のみならず、領地運営までをも公爵夫人と部下に任せ、同盟国への援軍供出を議会に提出する。

その事実だけを取ってみても、いかにアルビオン王家が――いや、トリステイン王国が危難の淵に立っているのがわかろうというものなのに、何故、彼らはこんなくだらない論争を延々と続けていられ

るのだろう。でも、わたくしは……そんな家臣たちに、何も言うことができない。アンリエッタ姫は、我が身の不甲斐なさと無念さのあまり、きゅっと唇を噛みしめた。

――そして昼過ぎ。王宮の会議室に、急報が飛び込んできた。

「レキシントン、陥落しました！」

どよめく会議場の中で、ラ・ヴァリエール公爵の怒声が響いた。

「そんな馬鹿な！　あれほどの都市が、半日持たずに落とされただと！？　いくらなんでも早すぎる。通常の防衛戦ならば、単独で半月以上は耐えられたはずだ。これは一体どうしたことだ！？　他に、何か情報が入ってきてはおらぬのか！？」

温厚で知られるラ・ヴァリエール公爵の剣幕に、急報を伝えにやってきた使者は震え上がった。と、すぐさま次の伝令が舞い込んできた。

「アルビオン王党派空軍のうち半数が戦線離脱！　造反です！『レコン・キスタ』の旗を掲げ、貴族派の下へ走ったとの旨、報告あり！」

「王党派旗艦『ロイヤル・ソヴリン』号、レコン・キスタの強襲により占拠されたとの報告あり！　同艦に乗艦されていた、アルビオン王国王党派総軍司令・ジェームズ一世陛下の生死については、未だ不明であります！」

その後も、次々と凶報が会議室へともたらされたが、それでも意見は一向に纏まらなかった。もはや、王党派への援軍供出は間に合

わない。何故なら、既に貴族派の手によって戦略空域を抑えられてしまったに等しいからだ。

アルビオン王国は、ハルケギニア最強の空軍を擁する国である。いっぽうのトリステイン王国は陸軍を主体としており、空軍は毛が生えた程度にしか持っていない。そんな力関係にも関わらず、よりにもよってその『最強』の空軍のうち半数と、重要な基地のひとつを貴族派に奪われた。

そう、空を抑えられてしまったが故に、トリステインの『軍』を運ぶための運搬船を出すことができなくなってしまったのだ。たとえ出航したとしても、途中で撃ち墜とされてしまっては、援軍の意味がない。

この場を取り纏めるべき議長たる宰相マザリーニも、事態のあまりの急変に、議論すべき内容を出しかねていた。そもそも彼は、ブリミル教の司教枢機卿であって、軍人ではない。よって、現在の状況に対応しきれないのだ。トリステイン王国の内政と外交を一手に引き受け、こなしている敏腕政治家の彼にも、さすがに限界がある。

マザリーニだけではない。その場にいる貴族たちのほとんど全てが、右往左往しているといった状況であった。まるで戦場さながらといった怒号が飛び交う中に在って、アンリエッタ姫は気を失わず、その場で意識を保っていることだけで精一杯であった。これらの報せは、か弱き姫君にとって、あまりにも刺激が強すぎた。

と……そんな姫君に、ラ・ヴァリエール公爵が静かに声をかけてきた。

「姫殿下。今こそ、頂戴した『変わるための勇気』を使わせてい

ただきます」

「わたくしが与えた……変わるための、勇気？」

姫君の言葉に頷いたラ・ヴァリエール公爵は、懐中から絹布に包まれた『水のルビー』を取り出すと、それを自分の右手人差し指に填めようとした。蒼き指輪は、公爵が填めるにはあまりにも小さかったが――不思議なことに、それはすぐに適切な大きさになると、彼の指にぴったりと収まった。

そしてラ・ヴァリエール公爵は、大きく深呼吸をして立ち上がると、議会会場に向けて、戦艦主砲の砲撃音もかくやというほどの大音声を発した。

「静まれ！　殿下の御前である。静まるのだ！！」

彼は『指輪』を填めた右手人差し指でもって会場中央を指差すと、こうのたまった。

「この緊急時に、いったいなにをもたついているのだ！　既に援軍供出は間に合わぬ。そして、かの国で空域を支配されたということは、アルビオン王家の命運は、ほぼ定まったといっても過言ではない。この状況下において、我らが行うべきことなど、既に決まっておるではないか！」

突然何を言い出すんだ、議長でもないくせに偉そうに。そう反論しようとした貴族たちであったが……みな、声を上げることができなかった。

何故ならば、重職にありながら普段は控えめで、周囲の人間を立

てるといった穏やかな紳士であるラ・ヴァリエール公爵から立ち上っている、彼本来の身分――国内最大の権勢を誇り、伝統ある王家の血を受け継ぐ大貴族たる者に相応しい『威厳』という名の圧倒的な〈気配〉に、揃って気圧されてしまったからだ。

そんな中。ただひとり、ラ・ヴァリエール公爵の姿――いや、正確にいうと、その指に填っているものを見て、驚愕のあまり震え出した者がいた。それは、この国の宰相たるマザリーニ枢機卿そのひとであった。

何故だ!?　つい先日までマリアンヌ王妃殿下の指に填っていたはずの『王権』が、どうして彼の『導きの指』で輝きを放っているのだ!?　だが、マザリーニ枢機卿はすぐさまそこに見出した。優れた政治家にして、トリステイン『王国』の守護者たる彼は、そこにあるとてつもなく大きな利点に気が付けた。

――彼は、トリステインという国を護る上で、どうしても必要だった存在たりえる。血統だけでなく、その実力も折り紙付きだ。ブリミル教司教枢機卿は、静かに口を開いた。

「ラ・ヴァリエール公爵。確認させていただきたい」

「猊下。既におわかりかと思うが、事は急を要する。簡潔に願えますかな?」

「もちろんです。あなたは先刻、行うべきことは既に決まっていると仰った。我らは、果たして何をすべきかを、改めて発言願いたい」

ふたりの『政治家』の視線が一瞬交差した。ごくごくわずかな口

調の変化と、その動作だけで、彼らは互いの立場と、今為すべきことを即座に理解し、頷き合った。

「まずは不要な混乱が起きぬよう、国内における情報の統制を行うこと。流言飛語の類には、これまで以上に気をつける必要があります。レコン・キスタやアルビオン貴族派によって、トリステイン国内で煽動が行われる可能性がありますからな」

マザリーニ枢機卿は、重々しく頷くと――手元にあった羊皮紙に指示を書き留め、手元にいた伝令係にそれを手渡した。

「そして、早急に防衛体制を整えねばなりません。特にラ・ロシェール周辺空域の確保は、王都防衛の上での必須事項です。その上で、タルブ近郊に、竜騎兵を含む各種哨戒兵と伝令を配置します。かの地から上陸、兵を展開されると厄介ですからな」

「ラ・ヴァリエール公爵。ラ・ロシェール防衛の指揮及び伝令配置の責任者として、グラモン元帥を推薦したいのだが、問題はないだろうか？」

「最適の人選です、猊下。彼ならば、必ずその任を全うしてくれるでしょう」

頷き合ったふたりは、同じく会議に出席していたグラモン伯爵――ラ・ヴァリエール公爵の親友にして、古くからの盟友に向き直った。

グラモン元帥は、彼らの視線を受け止めると、しっかりと頷いた。それを見たラ・ヴァリエール公爵は、すぐさま次の確認に入る。

「枢機卿猊下が現在行われている、ゲルマニアとの軍事防衛同盟についての進捗状況をお聞かせ願えますかな？」

マザリーニ枢機卿は、ぐいと眉をしかめ、苦々しげに吐き出した。

「正直、芳しくない状況だ。認めるのは癪だが、国力でいえばあちらのほうが数段上だからな。しかし、このレキシントン陥落の報を皇帝に伝えることで、同盟のための条件を引き出しやすくなるだろう――ああ、伝令は報が届いた時点で既に送ってある」

「承知しました。では、そちらはそのまま進めてください。次に――いや、同時に行うべきことは、ガリアへの防衛同盟打診です。同じ『王権』を持つガリアは、我がトリステインと同様『レコン・キスタ』の標的となりえますからな」

「確かに。きゃつらが本気で『聖地』への進軍を検討しているとして……あえてゲルマニアではなく、ガリアを経由することも充分考えられますな」

これを聞いて顔色を変えたのは、高等法院に所属する、約半数ほどの――ワルド子爵の内偵調査により、レコン・キスタと通じていると判明している『裏切り者』たちだ。彼らは口々に公爵を非難し始める。そして、そんな声をまとめるかの如く立ち上がってきたのが、彼らの長たるリッシュモン高等法院長であった。

「ラ・ヴァリエール公爵。あなたほどの『知将』が、いったい何を仰るのですか！？　そんな目立つことをして、我がトリステインが『レコン・キスタ』の怒りを買ったら、真っ先に標的とされてしまうではありませんか！」

そうだそうだと口を揃える者たちを、ラ・ヴァリエール公爵は鼻で笑った。

「リッシュモン殿。この期に及んで、何を言っておられるのだ？まさかとは思うが、かの『レコン・キスタ』が、いったい何と言ってアルビオンの貴族派と手を組んだのか、あなたは知らないとでもいうのかね？」

「それは……しかし……」

「頼りない現王家を打破し、能力のある貴族が代わりに国を支配することで『聖地』奪還を目指す。それが彼ら『レコン・キスタ』が掲げる理念（スローガン）だ。つまり……次に狙われるのは、地理的にアルビオンから最も近く、聖地への通り道となり、かつ――現王家の中で最も国力が低い、我がトリステイン以外にはありえないのですよ」

以後、完全に黙り込んでしまった者たちを尻目に、ラ・ヴァリエール公爵とマザリーニ枢機卿、そして彼らに同調する者たちは、次々と今後の方策を打ち出してゆく。

アルビオンからの避難民受け入れや、輸出入に関する件について、国防に関する必要経費の捻出方法や国庫の現状に関する財務局への問い合わせなど、今までの停滞ぶりがまるで嘘のように、会議は激しく流れる川の如き怒濤の勢いでもって進行していった。

そして、いよいよ締めに入ろうかといった段階で、ラ・ヴァリエール公爵は再び行動に出た。彼にとって、今後絶対に必要となるものを、そこから引き出すために。

この機会を逃したら、次はいつになるかわからない。よって彼は、

あえてこの場で――後に『逆賊』と誹られることをも覚悟した上で、それを行った。

「アンリエッタ姫殿下におかれましては、これまでの件につきまして、何かご意見などございますでしょうか」

そう言って、ラ・ヴァリエール公爵はアンリエッタ姫と目を合わせると、その後『水のルビー』に視線を移し――小さく頷いた。それを見たアンリエッタは、思い出した。先日の会見の際に、ラ・ヴァリエール公爵が、自分に何と言ったのかを。

自分に、もっと＜力＞があれば。そう嘆いていた彼が――この無力なわたくしに、後押しを求めている。ならば、せめて……わたくしにできることをしよう。アンリエッタは立ち上がり、会議場を見渡すと――はっきりとした声で、こう告げた。

「マザリーニ枢機卿と、ラ・ヴァリエール公爵の良いようになさって下さい。ここまでの内容を聞く限り、おふたりが下した判断が最善であると……わたくしも考えます」

そして、その直後。清廉な姫君は決定的な一言を放ってしまった――その意味を知らずに。『灰色』に染まったラ・ヴァリエール公爵が、その言葉を泰然として待ち受けていたことも理解できずに。

「ラ・ヴァリエール公爵。わたくしが下賜したその『指輪』が、穏やかな『湖』であったあなたを『激流』に変えてしまったようですね。もちろんそれは……このトリステイン王国にとって良い変化だと、わたくしは思いますわ」

――アンスールの月、最後の日。水の王国の姫君が放ったこの言

葉が。永きに渡って続いてきた古き王家の『主流』たる＜血統＞の完全なる終わりにして、『傍流』による新たな王朝の始まりを告げる、鬨の声となった。

第８０話　空の王権の滑落と水の王権の継承（後書き）

さあ、ラ・ヴァリエール公爵が、国の危難にかこつけて、とんでもない賭け――ただし、勝算は十二分にある――に出て……見事勝利しました。もっとも、彼としては本来不本意な『道』を歩むことになってしまったわけですが、あえて『自分』を目立たせることによって、自ら矢面に立つことを選びました。家族のために。

ちなみに、右手人差し指に指輪を填めるというのは「導く」ことを示します。これが親指ですと「王者」「支配者」という意味に置き換わります。つまり、まだ公爵は『王権』を主張しているわけではないのです。あくまで、リーダーとして立ち上がっているわけです。それ故に、枢機卿から反感を覚えられずに済みました。このあたりについては、彼は当然計算済みです。

そして『王国の守護者』マザリーニ枢機卿ですが。彼はあくまで『王国』の守護者であって、王家を護っているわけではありません。現状で、王妃・姫・公爵のうち誰が王座についたほうが国にとって『利』があるかを即座に判断し、公爵とタッグを組むことを決意しました。宮廷内の躍動を期待された皆様には誠に申し訳なく。

また、ド・ポワチエさんではなく、グラモン元帥指名なところもポイントです。さすがにマザリーニ枢機卿、いくら軍事について疎いとはいえ、派閥はよくご存じです。

ちなみに、今回出てきたブリミルさんと初代ガンダールヴさんのやりとりは原作にも出てきます。実際はもっと過激ですｗ　蛮人すみません。

そして、ルイズ&才人組ですが。現在の彼らの心境はこんなかんじでした。特に才人が、11巻前後の「原作初期の興奮状態から、やや落ち着き始めた」彼に変化しつつあります。ルイズはまだちょっと不安定ですね。さて、これが今後のお話にどう影響してくるのか……。

さて、トリステインの方向が定まったことで、次回から新章スタートです。お休みは終わりですよ、太公望さん。

第８１話　軍師、未来を見据え動くの事

――ニィドの月、フレイヤの週、ユルの曜日。

ハルケギニアが最も暑くなる、８月の開始直後。太公望たち『治療チーム』の一行が、トリステイン魔法学院へと帰還する日がやってきた。

夏休みの間はそのまま実家に残ると思われていたキュルケも、彼らと共に魔法学院へ戻ることになった。

これは、タバサたちが療養している間に、ゲルマニアの首都ウィンドボナの観光を――もちろんキュルケの案内、しかも二人っきりでしてきたコルベールが、そこで見た冶金技術に大いに触発され、学院に戻って『ゼロ戦』をより詳しく研究したいと言い始めたからである。そう、彼女は燃える想いを胸に、彼の後についてゆくことを選んだのだ。

ちなみにその間、太公望はなにをしていたのかというと……あてがわれた部屋に籠もって、借り受けた本を片手にだらだらしていた。彼が観光に出なかったのは、キュルケの持つ雰囲気を察していたことと――万が一にも、他者にフーケとの繋がりを割り出されたくなかったがために、出来る限り街へ姿を現さないようにしようと考えていたからだ。

……単純に面倒だったという説もあるが、あえてここは前者を推す。

太公望にとって、三食昼寝付き、おまけに徹底的に気を抜くこと

ができたこの療養期間は、久しぶりに獲得できた、最高の休日であった。もうひとりの＜使い魔＞がこれを聞いたら、血の涙を流すこと請け合いである。

なお、オルレアン公夫人と従僕のペルスランは、フォン・ツェルプストーの城に残ったままだ。未だに新居や、移住のために必要な準備が整っていないからだ。

とはいえ、直接タバサたちが動くと数々の不都合が生じるため、現在『夏休みを貰って海外旅行中』である、太公望の秘書が戻ってくるのを待つ手はずになっている。それまで、彼ら元ガリア王族の主従ふたりは、この城へ滞在することが決まっていた。

愛する母と抱擁を交わし、涙を流す従僕の手を取って再会を約束したタバサは、改めてキュルケ、そして彼女の家族へ礼を述べると、ツェルプストー家が用意してくれた火竜――キュルケの実家は＜火＞を象徴する家であるため、騎乗用の竜までもが＜火系統＞なのである――の背に乗り込んだ。

――それから数時間後。

現在いる場所が空の上という、ほぼ完全なる『プライベートを保てる空間』ということを鑑み、一行は今後のために、より詳細な情報の交換を行った。

まずは、例の＜フィールド＞の件である。既に『夢の部屋』を何度も見せ、かつ『自分の部屋』に関する情報を公開していたことから、太公望は、改めて参加者たちにあれがどういうものなのか、説明をすることにした。

聞きたくてたまらなかったといった風情の一同は、当然それを歓迎した。

「もともと、あの『夢移動』は、わしの師匠の元同僚が開発したものなのだ。誰か、わしがタバサの母を治療している最中に口にした言葉を覚えておるかのう？　例の＜意志＞を封じ込んだときの話なのだが」

コルベールは少し考え、関連しそうな内容を思い出した。

「それは『夢とは、無限の宇宙に例えられるほどに広大な＜別世界＞である』という内容ですか？」

太公望は頷きながら言った。

「そうだ。『夢』とは、意志を持つ生物が、自らの持つ＜想像力＞と、自己の根幹たる＜魂魄＞を結びつけて無意識に構築する、完全なる＜自己世界＞なのだ。そのため、全生命体各個によって内容――大きさも、その形状までもが完全に異なる。そこに干渉するための＜技術＞を生み出したのが、先程挙げた人物なのだが……」

「だが？」

「三度の飯よりも寝るのが好きという困った人物でな、隙を見てはすぐに眠ってしまうのだ。しかも、一旦寝てしまうと、起こすのがとにかく大変で……まあ、それはさておき。そんな彼が『究極の眠り』を追求するために生み出したのが、あの技術なのだ」

「何か、問題でも？」「素晴らしい技術だと思うけど」「同じく」

げんなりした顔でぼやく太公望を、不思議そうな顔で見つめる一同。

「あの＜フィールド＞はな……前に、タバサとキュルケにはちらっと話したと思うのだが、自在に操れるようになると、ものすごく面白いのだ。そのせいで、放っとくと『夢』の中にいる者は、何ヶ月でも眠り続けてしまう。結果、周囲が大迷惑を被るのだ」

「寝ている間の食事や、その他の生理現象はどうなるのですか？」

「そこがまたうまいこと出来ていてな、あそこにいる間は、生命維持のために必要なエネルギー消費が、普通に眠っている時の数千分の一以下にまで抑えられるため、なんと1年近くもの間、完全に飲まず食わずのままでいられるのだ。筋力が落ちるなどの弊害もほとんどない。だからこそ質が悪いのだよ」

「……具体的には？」

「わし、その『開発者』に巻き込まれて、うっかり半年以上眠ってしまったことがあってな。現実に戻ったら、なんと『作戦行動中行方不明者（ＭＩＡ）』扱いだ！　おかげで、わしはそれまで数年掛けて整えていた大規模作戦行動から除外されそうになった上に、危うく主役の座から引きずり降ろされるところだったのだ！！」

ぷるぷると身体を震わせながら文句を吐き続ける太公望を、その他一同はなんともいえない表情で見守っていた。ちなみに、ここで太公望が言っている『主役』とは、軍の中心者という意味ではない。文字通り、その座を奪われる寸前であったのだ。

「誰か、起こしに来てくれなかったんですか……？」

額の汗を拭きながら尋ねてきたコルベールに、太公望は苦々しげに答えた。

「不幸中の幸い、もとい不幸中の不幸というか。その『開発者』の住居は、秘中の秘とされておってな。居場所を知る者が、自軍内に全くいなかったのだ。前もって知らせることすら禁じられておったしのう。おまけに『周』の外であるため、通信機の圏外で……わしの居場所を追うことすらできなかったらしい」

実際には、必死に彼を起こそうと努力していた者が、すぐ側にいたのだが――完全に『夢』に閉じこもっていた太公望は、その声で目覚めることはなかった。たとえ他の人物がいたとしても、それは変わらなかっただろう。

「自分で起きようとは思わなかったの？」

首をかしげながらタバサは問うた。

「それなのだが。あの＜フィールド＞に巻き込まれてしまうと、そこが『夢』であることをなかなか自覚できないのだよ。しかも、時間の経過が一切わからなくなる」

「そういえば、あたしも最初、あれが夢だとは思わなかったわ」

「私もです。もっともあそこは、別の意味で夢の世界でしたが」

ハルケギニアよりも遙かに進んだ技術によって造られているとおぼしき大都市を、彼方に見下ろす不可思議な『窓』や、奇妙奇天烈

な家具たち。青白い炎を吹きながら、星の海を目掛けて飛んでゆくフネの姿。『伏羲の部屋』は、新技術に目がないコルベールにとって、まさしく夢の光景そのものであっただろう。

「そうであろう？　おまけに、わしは例の『開発者』から、助力と技術の提供を請うために彼の居た国へ赴いていたため、自分が巻き添えで長期間眠ってしまっていたことに、全く気付けなかったのだ」

助力を得られなかった代わりに『太極図』を授けられ――くどいようだが、カツアゲしたと言ってはいけない――自分用にカスタマイズされたそれを使いこなすため、太公望は『夢』の中で激しい修行を行うことになったのだが……その際、外でどれほどの時間が経過しているのか、一切わからなかった。

結果『夢』の支配者に「安眠妨害になる」という理由で外へ叩き出されるまで、なんと9ヶ月も眠り込んでしまったというのだから怖ろしい話である。

「まあ、その夢の中で＜夢渡り＞を含む各種フィールドや『解析』のために有用な技術を教えてもらえたので、修行期間だと割り切ることにしたのだが……戻った直後は、部下たちや国王の視線が本当に痛かった」

「そりゃあ、半年以上も軍の最高責任者が行方不明になったら、ねえ……」

「まあのう。そういうわけなので、わしがアレを使うときは、必ず近くに起こしてくれる者を配置するようにしておるのだ。見張りにもなるしのう」

タバサは、納得したといわんばかりに頷いた。

「いくら生死に関わらないとはいえ、それほどの長期間寝たきりになってしまうというのは怖い。あなたが＜遍在＞を出せと言う理由が、改めてよくわかった」

「もしも、また『夢世界』を体験したいという場合は、申し出てくれれば展開しても構わぬ。わしの都合がつく時に限るがのう。ただ、あまりやりすぎると『夢』と『現実』の区別がつかなくなるため、もうしばらく時間を置いたほうがよい」

「なるほど、了解しました。ところで、もうひとつお伺いしたいことが……」

コルベールの申し出に、太公望はニヤリと笑った。

「例の＜先住魔法＞を封じたアレの件について、であろう？」

「その通りです。もちろん、軍の機密に関わるというのであれば結構です」

「あれは、ハルケギニアではほぼ間違いなく『異端』とされる技術であることと、今コルベール殿が言ったように、軍事機密に関わることでもあるので、申し訳ないが詳しく教えることはできぬ。ただ、これだけは言える。現時点のわしでは『夢』の中にいる時しか、あれを実行することができぬ」

「つまり、以前は『夢』以外でもできていた……ということですな？」

「そうだ。ただし……あれを『現実世界』で実際に行うためには、既にタバサには話してある、とある人物の助力が必須となるのだ。本来、わしひとりでやれるものではない」

タバサは、もちろんその人物について思い当たった。今後のことを考えると、念のためキュルケとコルベール先生にも話しておいてもらったほうがいい。そう考えた彼女は、小声で太公望に耳打ちした。

いっぽう、タバサの『助言』を聞いた太公望も、彼女と同様、事情を話しておいたほうがよいと判断した。彼の危険性を知らせるため、さらに――これまでに生じた、年齢その他に関する情報の齟齬を何とか誤魔化すといった意味あいで。

――そして、太公望は語り始めた。自分の『魂の双子』について。最悪の場合、その人物が現ガリア王家の＜使い魔＞になっている可能性があることも含めて。

○●○●○●○●

――太公望は彼らに語った。幼い頃、互いにその存在を知らずに生き別れとなった兄がいたこと。弟である太公望は表世界の政治家かつ軍人として、兄の王天君は裏世界の策謀家にして腕利きの暗殺者として、互いの正体を知らずに敵対していたことを。

そしてあるとき、ずっと天涯孤独であると思い込んでいた兄・王天君が、幾重にも重なった偶然により、自分に双子の弟がいると知ったことを。それから王天君は、ただひたすらに己の『半身』たる

弟のことを捜し求めていたのだと。

「ミスタ・タイコーボーにも、双子の兄弟がいただなんて……」

「お互いの関係を知らずに、命の取り合いとは……なんという……」

既に、タバサから現在行方不明となっている双子の妹について教えられていたキュルケとコルベールは、＜サモン・サーヴァント＞によって巡り会ったふたりの間に存在する、あまりにも多くの共通点に、戦慄を禁じ得なかった。

特にコルベールは、タバサについては事情を教えられていたものの、太公望が歩んできた『復讐の道』についてはそれまでほとんど知らなかったに等しかったため、驚愕した。そして、これを聞いた彼らは、タバサの選択についても大いに納得がいった。

だが、コルベールはひとつ疑問に思った。彼は、それを素直に口にした。

「しかし、双子であるからには、自然と姿形が似通うものだと思うのですが」

「普通はな。だが、わしと兄が初めて出逢った時、わしは既に『今の姿』になっていた。そのため、見た目と年齢が合わなかった。いっぽう、帝国軍によって肉体改造実験を施され、妖魔に変えられてしまった王天君に残っていたのは、人間であった頃の……わずかな面影だけだった。これでは、互いに気付けなかったのも無理はない」

それに……と、太公望は独白を続ける。

「わしの魂魄が飛びかけていた――つまり瀕死の状態となり、死の世界へ旅立つ直前だったからこそ、兄には『視えた』のだ。命の灯火を……今まさに消し去る寸前というところにまで追い詰めていた『敵』が、数十年間、手を尽くして探し続けていた――たったひとり生き残っていた肉親にして『双子の弟』だとな」

「ミスタをそこまで追い込むだなんて、とんでもない腕利きなのね、お兄さんは」

キュルケの言葉に太公望は深く長い溜息をつき、遠くを見据えながら続きを紡ぐ。

「もしも、あと一歩……いや数秒。王天君が、わしの『魂魄』が、自分と非常に似通っていることに気付くのが遅れていたら……わしは今、この場に居なかっただろう」

『如意羽衣』本来の所持者である妖怪の少女・胡喜媚（こきび）を相手に、人質を取るという卑劣極まりない策を仕掛けた挙げ句に完敗。その際に『時間退行』の呪いを受けて肉体を消失させられ、魂魄を飛ばされてしまったところを王天君に救われた――とは、さすがに言えない太公望であった。仙人の秘密云々以上に、自分の威厳を保つ的な意味で。

「まったくもって皮肉なことに――家族や領民、そして仲間たちの仇だと信じて戦い続けてきた『妖魔』のうちのひとりが。しかも、わしの天敵であった『女狐』がその才能を見出し、息子のように可愛がっていた『少年』が……自分の息の根を止めようとしていた、腕利きの『暗殺者』が。よりにもよって、生き別れの兄だったわけ

だ」

王天君曰く、かの女狐ですらそれを知らなかったらしい。そう言って寂しげに笑う太公望の顔を、残る3人は複雑な気持ちで見つめていた。話している当人の心は、さらに複雑怪奇な思いでいっぱいだなどということは、当然彼らにはわからない。

「有能な＜水＞メイジが、死者の肉体の一部を、別の者へ『移植』することに成功したという事例については＜魔法実験小隊＞に所属していた頃に、何度か聞いたことがありますが……身体そのものを、別種の生物に『改造』してしまうなどという、神をも畏れぬ所行については……さすがの私も、初めて耳にしました」

コルベールの声は、恐怖に震えていた。無理もない、彼はこの世界における『科学者』の走り的存在ではあるが、専門はあくまで『自然科学』と『機械工学』系である。生物に対してそのような行いをするなど、考えたことすらなかったのだから。

「戦争というものは、人間をどこまでも残虐なものに変えてしまうのですな」

吐き出すように紡がれた恩師の言葉を聞いて、タバサは思った。人間ではないモノに肉体を変えられる。それがいったいどれほどの恐怖を伴うものであるのか、想像もつかない。だからこそ、太公望の兄はそれに耐えきれず『心』が壊れてしまったのだろうと。

それから、しばらくして。ずっと黙り込んでいたキュルケが、ぽつりと呟いた。

「あたし、ずっと疑問に思っていたんだけれど……さっきの話を

聞いて、ほとんど確信に変わったわ。ねえ、ミスタ。例の『女狐』さんって、間違いなく妖魔か――エルフだったんじゃありませんこと？」

キュルケの発言に、タバサとコルベールはぎょっとした。しかし、太公望は動じるどころか、小さく笑って頷いてみせた。

「さすがだな、キュルケ……その通りだ。しかし、何故そう思った？」

キュルケは、その顔にどこか悲しげな笑みを浮かべながら答えた。

「だって、そうでもなきゃ説明がつかないんだもの。年齢のことはもちろんだけど、あの『烈風』カリンと互角に撃ち合えるほどの＜技術＞があって、しかも本物じゃないとはいえ、エルフを前にして怖がるどころか、完封しちゃったミスタが手も足も出ずに負けるような相手なんて……人間であるはずがないじゃない」

太公望は、キュルケの発したこの言葉を受けて、露骨に顔を顰めた。

「失礼な！　よりにもよって、このわしを化け物呼ばわりかい！」

「え～、だって……」

「キュルケよ。おぬし、どうもおかしな誤解をしておるようだが……本物の妖魔である、かの女狐はともかくとしてだな！　わしや『烈風』殿は、状況の持っていきかた次第で、いくらでも普通の人間が対抗しうる相手だぞ？」

そんな馬鹿な！　そう言いつのるキュルケとタバサに、太公望は思わず苦笑してしまった。実際、彼の言葉は嘘でもなんでもないからだ。

「そう難しいことではないよ。あの時、わしらが見せたような…馬鹿正直な真っ向勝負を仕掛けなければいいだけの話なのだから。そういう意味では、わしはコルベール殿とは間違っても敵対したくない。ある意味、彼は『烈風』殿よりも数段厄介だからのう」

トリステインの暗部である＜特殊部隊＞の元指揮官、つまり『裏側』の戦い方に精通している。おまけに『自然科学』の一部を理解し、それを魔法に生かすことのできる、ハルケギニアでは非常に珍しい類のメイジ。

そう――太公望の中で、現時点におけるコルベールの戦闘面に関する総合評価は、なんとあの『烈風』カリンよりも高かったのだ。

もちろん＜力＞に関しては、比べようもないほどにカリンのほうが上だ。しかし、騎士道精神に溢れ、真正面から堂々と仕掛けてくる彼女とは異なり、言い方は悪いが平然と『汚い』戦い方ができ、かつ、静かに這い寄って即死級の＜火＞を放てるコルベールのほうが、1対1という状況下においては数段怖ろしい。そう判断しているのだ。

と、そこへタバサがボソリと追従した。

「先生の杖2本同時持ちも、凄かった……」

タバサの言う『2本同時持ち』とは、例の治療時にコルベールが

行った、メインの杖とスペアの杖を用いて、左右両手に＜炎の刃＞を出現させたことである。

「いや、あれは文字通り『夢中』だったからこそやれた＜技＞であって、普段からできるようなことではありませんぞ！？」

慌てふためいたコルベールに、彼にとっては思いもよらぬ言葉が飛んできた。

「そんなことはないぞ、あそこでやれたことは、現実世界でも実際にできる。そもそも魔法とは、心の中でイメージすることが特に重要な＜技術＞なのだ。おそらく、あの手術を切っ掛けとして、コルベール殿は『複数同時展開』に目覚めたのであろう」

それができるだけの素養は充分にあったからのう。太公望からそう告げられて、コルベールは自分の両手をまじまじと見つめた。と……そこへ、さらなる追い打ちが来た。

「おそらくだが、今コルベール殿が『杖』を両方の手に1本ずつ持った状態で＜フレイム・ボール＞を唱えたとしたら……2個同時に＜火球＞が飛んでいくと思うぞ。しかも、それぞれ思い通りの場所へ……個別にな」

「ええーっ！　なにそれ！！」

「……コルベール先生も、やっぱり規格外だった」

驚きのあまり、あんぐりと口を開けた女子生徒ふたりに、太公望は言った。

「いや、規格外云々ではない。もともと『複数同時展開』とはそういう技術なのだよ。もっともコルベール殿は、わしと同じで戦いを好まぬ質であるし、そもそも魔法は戦闘だけに使うものではない」

魔法は、戦いのためだけに存在しているわけではない。その言葉を受けたコルベールは、改めて件の『2本同時持ち』について考え――そして、すぐさま自分にとって最善の解答に辿り着いた。

「そうか！　例えば、同時に複数の＜浮遊（レビテーション）＞を扱うことができれば……宙に浮かんでの観察中に、1本目の杖を使って自分を浮かせながら、2本目の杖で同時に、遠くに置いてある資料を手元へ引き寄せたりできます。複数同時展開か！　これは……頼りになる助手がひとり、手元についたようなものですな！！」

それを聞いた太公望は、嬉しげに頷いた。やはり彼は根っからの技術者なのだと。

「その通りだ、コルベール殿。ただし、杖2本ということは……当然、消費する＜精神力＞も2倍になる。そういった意味では、1本での同時展開を覚えたほうが効率がいい。もちろん、両方使いこなせれば選択の幅が広がるので、便利ではあるがのう」

＜炎の嵐（ファイア・ストーム）＞のような、属性を複数重ねる必要のある――『同時展開』が非常に難しい類の魔法を容易に複数個操れるというのは、とてつもなく貴重な＜技能＞だ。この太公望の言葉を聞いたキュルケは、思わず口を開いた。

「ねえ、ミスタ？　前に、あたしは一撃の威力を上げる才能があるから『複数同時展開』は諦めたほうがいいって仰ってましたけど……先生みたいな方法でも、やっぱり難しいんですの？」

キュルケの問いに、太公望は難しい顔をして答えた。

「残念だが、本来『二刀流』は、習得までに相当な努力が必要となる＜技能＞なのだ。展開へ導くための知識と技術、そして『複数思考』が要求される上に『杖との複数同時契約』と、体内における『力流の分割』いう別種の＜技＞まで必要となる。ハッキリ言うが、今から習得しようとしたとして……最低でも１０年はかかるぞ！？」

キュルケの肩が、がっくりと落ちた。何故かタバサまでうなだれた。

「……やっぱり、コルベール先生は規格外だった」

「これ、タバサよ。そのような誤解をしては、彼に対して失礼だ。あれは、コルベール殿がこれまで積み重ねてきた『経験』があってこそ可能となった技術なのだ。才能だけでどうにかなる程度のものでは、絶対にない」

「ちなみに、ミスタは『二刀流』が可能ですの？」

「いや、無理だ。そもそも、わしは杖１本での『複数展開』ができる上に、使える＜術＞の種類が少ない。よって、習得する意味がないのだ」

「ああ、そういえばそうでしたわね……」

「なるほど、理解できた。コルベール先生、申し訳ありません」

「いや、ミス・タバサ。気にしないでよろしい」

――太公望が『二刀流』ができない理由。それは、単純に『打神鞭』が1本しかないというだけのことなのだが、もちろんそんなことは口に出さない太公望であった。

「代わりといってはなんだが、キュルケには『込める』才能がある。これは、あえて通常より多くの＜精神力＞を魔法につぎ込むことにより、威力を大幅に増強するための技術だ。以前と比べて＜力＞のコントロールが格段に巧くなっておるので、そろそろそっちへ修行内容をシフトしようと考えていたところなのだが、夏休み中に試してみるか？」

「もちろん！」

キラキラと瞳を輝かせ、即答した親友を羨ましそうな顔で見つめていたタバサは、ちらと己の『パートナー』を見た。すると、そこには……待ってましたと言わんばかりに視線を投げかけてくる太公望の姿があった。

あの目。彼は、間違いなく何かを企んでいる――それに気付いたタバサであったが、しかし。続いて太公望から出てきた言葉によって、彼女は完全に我を忘れてしまった。

「タバサには、いよいよ次の段階――『空間座標指定』そして『複数同時展開』習得用の課題を渡す。『烈風』殿と同様に、わしの『使い分け』をほぼ完璧に見切ることができていたということは、すなわち！　それをするための準備が整ったに等しいからだ」

遂に来た！　タバサの両手に力が籠もる。これで、例の『天使の羽衣』を存分に生かすことができる。おまけに、彼女にとっての憧

れであった『空間座標指定』つきだ。喜ばないほうがおかしい。

――周囲が強力になってくれれば、そのぶんだけ自分の負担が減る。つまり、ぐうたらできる時間が増える。相変わらず、将来の平和と怠惰のために、今の努力……現在の仲間育成に余念がない太公望であった。

○●○●○●○●

――その翌日。

道中、眼下にあったそれなりに設備の整った宿屋で一泊し、その後ものんびりと空の旅を楽しみつつ学院玄関前に降り立った一同を出迎えたのは、太公望を見た途端、何故か慌てふためいてすっ飛んできたメイドの少女、ローラであった。

「みみみミスタ！　お、お客様が！　学院長室で……」

どうやら、太公望ひとりで来いということらしい。狸ジジイめ、何かやらかしおったか!?　太公望はそんな風に考えつつ、タバサたちへ先に部屋へ戻っているよう伝えると、ローラの案内で学院長室へと出向いた。

……そこで待ち受けていたのは。

「あた、あた、あたし、ま、魔法が……つつ、使えなくなっちゃった……！」

泣きながら飛びついてきたルイズと、困惑げに立ち尽くす学院長、

そして恐縮した様子で自分を見つめてくるルイズの姉エレオノールであった。

――それから30分ほどして。

どうにかルイズを落ち着かせ、それから詳しく話を聞いた太公望は、学院長室のソファーの上で腕を抱え込みながら思案に暮れていた。

ルイズの話はこうだ。

遂に＜虚無＞に目覚め、その際に最初の魔法として＜瞬間移動＞を習得した。そして、今まで毎日練習を繰り返していたのだが、今朝になって突然＜瞬間移動＞が一切発動しなくなったというのだ。おまけに＜念力＞まで、ほとんど使えないらしい。

「具体的に、今＜念力＞で、どの程度のことができる？　たとえば……学院長の机に置いてある、羽根ペンを持ち上げるくらいのことは？」

「全然ダメ。持ち上がらないの。せいぜいカタカタ揺れるくらい」

「なるほど。と、いうことはつまり……全く使えないというわけではなく……何らかの原因で、極端に＜力＞が弱まっているということかのう」

今朝になって突然なのか。それとも、以前から予兆があったのであろうか。太公望は、魔法について詳しく、かつずっとルイズの側についていたというエレオノールから、より詳しい事情を聞いてみ

ることにした。

「エレオノール殿。ここ数日間に、何か変わったことはありましたか？　生活習慣を極端に変えたとか、特に重い荷物を＜念力＞で運んだといったような？」

「いえ、特には。せいぜい、朝起きる時間を1時間ほど早めただけで……って、まさか！　この子、極端に寝起きが悪いから、それが影響したなどということが？」

「ねねね、姉さま！！」

こんなところでそんなはずかしいはなしをしないでくださいあたしどうしたらいいのかわからないじゃないですか……と、息継ぎ無しで姉に抗議した直後に頬をつねり上げられたルイズを見遣りつつ、太公望は呟いた。

「就寝時間は変わらず、ですか。しかし、睡眠時間の減少程度で魔法が使えなくなるというのはおかしい。どれ、ちょっとルイズ殿を診てみましょうか……と、学院長、それにエレオノール殿。ここで例の＜フィールド＞を使っても？」

例のフィールド。確か、異端すれすれと言っていたアレか！　即座に思い当たったエレオノールは、内心でほんの少しだけ葛藤したのだが……研究者としての好奇心、そして妹への心配がそれを上回った。

「わしは構わん。むしろ頼む」

「わたくしもです。どうか、お願いします」

「了解した。では、ルイズ。以前の＜フィールド＞を展開するので、わしが『はじめ』と言ったら、あの羽根ペンに向かって＜念力＞を唱えるのだ」

その言葉にコクリと頷いたルイズ。そして太公望は『打神鞭』を構えると、床に半跏趺坐（はんかふざ）の姿勢で座り込み、例の『見えないものが視えるようになる』場を創り出したのだが――。

「なんだこれは！　＜器＞の中身が、ほとんどなくなっておるではないか！！」

そう――何故か、以前は『大樹』と表現して差し支えないほどに揺らめき、立ち上っていた＜力＞が、ほとんど消えてしまっているのだ。

「う～む。これでは、魔法が使えなくなったのも無理はない。何故こんなことになったのじゃ！？」

オスマン氏が、立派な髭をしごきながら呟いている側で、エレオノールは顎に手を当て、何かを考えている。ルイズに至っては、再び半泣き状態だ。

「普通ならば＜精神力＞は、眠ることで徐々に回復するものなのじゃが……」

オスマン氏の言葉に、エレオノールが補足意見を述べた。

「オールド・オスマン。それには日常生活で魔法を使った程度なら、という但し書きをつける必要がありますわ。さらに、気絶する

程大きな魔法を立て続けに使用した場合、完全に回復するまでに数週間、場合によっては1ヶ月以上かかることが判明しております。これは、以前我が王立アカデミーで実証された研究内容ですから、確かですわ」

これを聞いて、太公望は閃いた。ひょっとすると――。

「ルイズよ。まさかとは思うが、毎日＜瞬間移動＞を多用しておったのか？　それも……短距離ではなく、長い距離を跳躍し続けていたなどということは？」

「え、ええ……練習しなきゃって思ったから……」

太公望は、片手で顔を覆った。なるほど、そういうことか……。

「あのな、前に＜サモン・サーヴァント＞の説明をしたのを覚えておるか？　そこで、わしはおぬしにとんでもない素質があるという話をしたと思うのだが」

「ええ。よく覚えてるわ」

「でだ。その際に『空間ゲート』同士の『距離』が長ければ長いほど、それらを接続するためには多大な＜力＞を必要とする……という説明をしたはずだ」

太公望の言葉に、ルイズはハッとした顔を見せた。

「つ、つまり……長い距離を飛び続けていたから、＜精神力＞の回復が、眠っただけじゃ間に合わなくなっちゃった。そういうこと？」

「おそらくそうだ。『空間移動』は、とんでもなく疲れる＜技術＞だからのう」

やれやれと、苦笑いをしながら太公望は肩をすくめた。

「自分と目的地までの『距離』を無理矢理ねじ曲げ、縮める……もしくは対象物を粒体に変換した上で、別空間に作製した『超高速流動亜空間通路』を通して他の場所へと移送するのが『空間移動』の主流だ。こんなとんでもない真似をするわけだから、当然必要とする＜力＞は多くなる。ちなみに、わしの師匠がこれを利用した＜マジック・アイテム＞の開発に成功しておる。国内にひとつしかない超貴重品だ」

たったひとつだけとはいえ、彼の国ではそんな道具まで造り出されているのか！　と、驚くオスマンとエレオノール。いっぽうのルイズはというと、聞いた内容を反芻しながら、自分の＜魔法＞についての見解を述べた。

「あたしの＜瞬間移動＞は、あとのほうに近い感じがするわ。うまく言えないんだけど、何か全身と行き先に『流れ』みたいなものを感じるというか……でも、何かを曲げているような感覚もあるから……どっちなのかって言われると、少し困るかも」

「ほほう！　それは興味深いな。ちなみに『空間移動』は、通常の＜移動系＞技術と比べ、圧倒的な速度と距離を稼げるのだが、先に述べた通り、極端に＜力＞を消耗するという欠点がある。しかし、どうもルイズの場合は、それだけではないような気がするのう」

「確かに……普通でしたら、睡眠を取ることによって＜念力＞が

使える程度には＜精神力＞が回復していてしかるべきなのです。なのに、おちび……いえ、ルイズのそれは、正しく回復していない」

「エレオノール君の言うとおりじゃ。確かに、これはおかしい」

揃って頭を抱えてしまった研究者たちを見ていたルイズは、既に涙目である。

「他に＜精神力＞を回復する手段と言えば……」

腕を組み、片手で顎を抑えながら考え込む太公望の横では、エレオノールがこめかみを抑えつつ、次善案の検討を行っていた。

「そうですわね……やはり＜感情の爆発＞でしょうか。怒り、喜び、悲しみ。これら感情と＜精神力＞は深く結びついていますから」

太公望は、ポンと手を叩いた。

「そうか！　エレオノール殿の言う通りだ。うまく、いずれかの感情をコントロールすることができれば、あるいは……」

だが、その意見にオスマンが異を唱える。

「いやしかし、心を落ち着かせて冷静になる……というならばともかくじゃな、その他の感情をわざと爆発させるのは難しいじゃろう。いくらミス・ヴァリエールが＜爆発＞の名人だとしてもじゃ」

「爆発の名人ってひどい！　ひどすぎるわ！　学院長、それはあんまりです！！」

思わず、大口を開けガーッとオスマン学院長に喰ってかかったルイズであったが、そのすぐ側では、太公望が再び床に座り込んでいた。

「ルイズ。ちと＜念力＞を使ってみるのだ」

「今はそれどころじゃ……！」

「いいから、あの羽根ペンを浮かせてみろと言っておるのだ！」

その剣幕に気圧されたルイズは、素直に＜念力＞を唱えた……すると。

「う……浮いた！？」

いつもの通り、ぷかぷかと浮かんだ羽根ペン。そして。

「ふたりとも見てみろ、さっきよりも明らかに＜器＞の中身が増えておる」

「ええ……少しだけですが回復、していますわね」

「フォフォフォ、思った通りじゃ。＜怒りの爆発＞で、精神力が戻ったか」

「さすがは狸ジジイ。自然かつ、実に見事な怒らせ方であった」

そこには――ルイズ本人に気付かれぬよう、こっそりと＜フィールド＞を再構築し、冷静に観察している研究者たちがいた。

「わざと!?　あれ、わざとだったんですか学院長!?　しかも、これってみんな、あたしが絶対怒るって、わかってやってたってことよね!?」

「ほれ、また＜力＞が溜まってきておる。母君もそうであったが、ルイズは感情を＜爆発＞させることで、体内を巡る＜精神力＞の回復速度を、一般的なメイジよりも極端に上昇させるという特質があるようだのう。怒りっぽい性格で得をしておるという、ある意味非常に珍しいケースだ」

言葉を用いて、さらにルイズを煽る太公望。他人を挑発させたら、この男の右に出る者はそうはいまい。あまり威張れたことではないが。

「ぐぬぬぬぬ……」

怒れる妹の横で、彼女の姉エレオノールは『東方』の技術に魅入っていた。

「これが＜フィールド＞。たしかに、興味深い技術ですわね」

異端すれすれどころか、これをロマリアの神官が見たら、聖堂騎士団を引き連れ、異端審問状を片手に学院へと乗り込んでくる可能性すらある。それほどに異質な技術だ。ブリミル教の敬虔な信者にして研究者たる彼女は、そう判断した。

しかし――この技術が自分たちにあれば、今回のような異変の察知や才能の発掘など、間違いなく国の発展に繋げることができる。実際に自分の目で見て、オールド・オスマンがこれを欲しがる理由が、エレオノールにはよくわかった。

もしも、これを見たのが数ヶ月前の彼女であったなら、ここまで冷静な目で分析をすることなどできなかっただろう。だが、家族が＜虚無＞に覚醒したという危機と、新たに『魔法科学者』として目覚めた者としての見識が、これまでエレオノール女史の中に存在していた、進歩と成長を阻害する束縛を徐々に打ち消しつつあった。

エレオノールは嘆息した。何故この『西方』ハルケギニアには『異端』などという言葉が存在するのだろう……と。だが、彼女はすぐさまぶんぶんと頭を振り、その罰当たりな考えを外へ追い遣った。そして、心の中で『始祖』ブリミルに懺悔した。

いっぽう、太公望はさらに分析を続けていた。

「ルイズよ。ひょっとして、おぬし……ここ最近ほとんど怒ったり、極端に喜ぶようなことがなかったのではないか？」

「そういえば……」

ルイズは、改めてここ半月あまりの生活を思い起こしてみた。

規則正しい生活、姉たちとの楽しいお茶会、才人との気の休まる会話。『伝説』に目覚めてしまったという使命感からくるプレッシャーはあったものの、家族に囲まれ、穏やかな生活を送っていたおかげで、それをほとんど感じずに済んでいた。よって、感情が爆発するような出来事も、一切起きなかった。

「だが、それ以前に……」

太公望は、ジロリとルイズを見据え、言い放った。

「おぬし、帰省してから『瞑想』をサボっておるだろう？　ついでに言うと、今朝も間違いなくやっておらぬな。どうだ？」

「な、なんでわかる……あ！」

「気付いたようだのう。そうだ……毎日ちゃんと『瞑想』をしておれば、ここまで極端に＜精神力＞が減る前に、自分で＜器＞の異変に気付けたはずなのだ！」

ここで、エレオノールが割り込んできた。片手で縁なし眼鏡の端をキリリと持ち上げ、太公望へ向き直る。

「失礼、ミスタ。その『瞑想』というのは、いったいなんですの？」

「それをお教えするのはやぶさかではないのですが、ひとつ条件があります」

「条件……とは？」

途端に、太公望の顔が深く陰った。

「絶対に……母君には内緒にしておいて下さい……」

ルイズの表情まで沈んだ。どうやら、彼女は問題点に気付いたらしい。

だが、エレオノールとオスマンには、彼らがそんな顔をする理由がさっぱりわからない。顔中に疑問符を浮かべている姉と学院長に、

ルイズが解答した。

「お母さまが……今よりも、ずっと強くなってしまう危険性があるの……」

その言葉を最後に、黙り込んでしまった妹を見たエレオノールは、呆然とした。

「つ、つまり……せせ、精神力を、大幅に回復するだけではなく……増強する効果のある技術。そ、そういうことかしら？」

揃って、震えながらカクカクと頭を上下に動かすふたりを見て、エレオノールとオスマンは思わず怯んだ。確かに、それを『烈風』に教えたら、大変なことになる。おもに、周囲の人間が苦労する的な意味で。最も被害を被る人物は、ほぼ間違いなく彼女の夫であるラ・ヴァリエール公爵だ。それだけはなんとしても避けねばならない。

そんなふたりの思惑を知ってか知らずか、太公望がぽつりと呟いた。

「もしも夫人に知られてしまったら……このわしの＜風＞と＜技＞の全力をもってしても、反撃はおろか捌くことすらできなくなってしまうやもしれぬ」

「そこまでかい！」「ぜ……絶対内緒にしますわ。始祖に誓って」

「それを聞いて安心しました。ちょうどこの部屋は＜力＞が集う『中央塔』にございますので、エレオノール殿にもお教えしましょう……念のため聞いておいてやるが、狸ジジイはどうする？」

「ずいぶんと扱いが違うのう、このガキジジイめが！　まあええわい、ようは他に漏らさねばいいということじゃろう？」

「その通りだ。この技術は間違っても他者へは漏らさないで欲しい。将来的に、コルベール殿への伝達は検討しておるが、それ以外の場所へ流出すると、色々と問題があるからのう。それと……」

「桃りんごのタルト1ホールでどうじゃ？　季節モノだから美味いぞ」

「タルブのいいやつがついたりはしないのかのう？」

「それは、おぬしが厨房への土産に買ってきたやつじゃろうが！　アルビオンの古いので手を打たんかい。あ、ボトルではなくグラスじゃからな？」

「トリステイン魔法学院の長ともあろうものが、ケチくさいこと抜かすでない！」

「誰のせいで倹約生活を強いられとると思っとるんじゃ！」

「元はと言えば、おぬしの自業自得であろうが！！」

さっぱり事情のわからない姉妹をよそに、丁々発止の喧嘩漫才的な交渉を繰り広げるふたり。その決着がつき、実際に『瞑想』のレクチャーが行われたのは、それから数十分後のことであった――。

――数時間後。

約1時間の『瞑想』を行うも、全体の10分の1程度しか＜精神力＞が戻らなかったルイズは、今夜は魔法学院の自室に残り、明日改めて回復を行うことになった。

既に『始祖の祈祷書』の返却期限が過ぎており、王室の宝物庫へ戻されていたのも、帰宅せずに残留した理由のひとつだ。

エレオノールは、妹の＜魔法＞が、明日以降完全に回復する見込みであるということを、不安な面持ちで待ち続けている家族に報告するため、竜籠に乗ってヴァリエール領へと戻っていった。覚えたばかりの『瞑想』を、籠の中で練習しながら。

いっぽうそのころ。ラ・ヴァリエール公爵家の城では、平賀才人が呻き声を上げていた。今日に限って、何故か極端に身体が重く、いつものように動けなかった。そのせいで、カリーヌ夫人の剣戟を全く捌くことができず、まともに受けてしまったのだ。

稽古の後、ズタボロになった身体を引き摺りながら自室へと戻った才人を出迎えたのは、カチカチと鍔を鳴らしながら相棒の帰りを待っていたデルフリンガーであった。

彼は、才人が部屋に入ってきた瞬間、こうのたまった。

「よう相棒、こりゃまたひでェ状態だね。ああ、そうか！　嬢ちゃんがすぐ近くにいなかったせいで＜ガンダールヴ＞の能力が弱まってたのか」

「は！？」

「いやあ、すっかり忘れてたぜ。＜ガンダールヴ＞は、もともと『担い手』を護るために存在するんだ。だから、誰かを護るって気持ちが強まれば強まっただけ、誰かのために戦うんだって、心が震えれば震えただけ＜力＞が上がるんだ」

「へ！？」

「護る対象がいなけりゃ、当然＜ガンダールヴ＞は弱くなる。そんで、心が震えてなきゃ最悪の場合、発動しない。そうだった、そうだった。やっと思い出した。まァ、嬢ちゃんが近くにいない上に、ただの稽古だかんね。＜力＞が弱まるのも仕方ないやね」

才人は、両手をぷるぷると震わせ、デルフリンガーを引っ掴んだ。

「そういうことは、早く言え――ッ！　ルイズゥ、カムバァ――――ック！！」

――ラ・ヴァリエール公爵家城内で、才人のせつない叫びが響き渡った――

第８１話　軍師、未来を見据え動くの事（後書き）

ひさしぶり？　の、ぐだぐだな日常回でした。

遂に明かされた女狐の正体、そして虚無の蓄積特性（まだ完全解明ではない）とガンダールヴの関係。そう……ルイズと極端に離れてしまうと、心が大きく震えていない限り、発動しなくなるんですよね、アレ。才人、気の毒に……今夜のルイズはお泊まりデスヨ。

さらに、登場時にはさらっと流されたコルベールの二刀流が再び出て参りました。そう……彼は、例の手術で覚醒していたのです。『スクウェア』にではなく『複数同時展開』に！　しかも『杖二刀流』という、他者には到底真似できない超特殊技能つき。ただし、ＭＰ消費２倍なので、使いどころを気をつけねばなりません。技巧派の彼が成長する場合、単純にランクやパワーが上がるよりも、変則的なほうが面白いかな？　というアイディアからこうなりました。

イメージ的には、ファイナルファンタジー？の『にとうりゅう』での杖装備です。ＦＦの場合は、残念ながら単純に魔力の増強くらいにしか役に立ちませんでしたが、こちらは違います！　複数属性の重ねが必要なスペルでも、杖が２本あればダブルで飛ばせるという恐ろしさ！　もっとも先生の場合、戦闘じゃなくて開発技術に回しそうですけれどもね。

さらに、キュルケとタバサへ次の道が示されました。習得までにはもうしばらくかかりますが、これを身につけたらとてつもなくデカイです。特にタバサ。

そろそろ、予約の入っていたイベントがいくつか起動します。その

前の準備そのいちでしたということで、次回をお楽しみに！

追記：コメントでいただきました通り、ガンダールヴの能力に関する説明が足りなかったため、補足致しました。

護衛対象がいない（距離があっても、護るという意志があれば、いるという判定になる）と、力が弱まるという特性がついています。

これはオリジナルではなく、原作にもある描写です。アルビオン7万に突撃したのはルイズを逃がすためで、心が極限にまで震えていたため、問題なく発動しました。いっぽう元素の兄弟に倒されかけたのは、ルイズと喧嘩別れして、守護対象がいなくなってしまったからです。このときの才人は、情けないくらいに落ち込んでいたため、ろくに刃向かうことすらできない状態まで能力が落ちていました。ちなみに、ルイズが側にいても、力を使いすぎると……当然、疲れで能力がガタ落ちします。と、実は結構制限があるんです、ガンダールヴって。護衛対象がルイズ（担い手）でなくてもいいのですが、いちばん効果が高いのがルイズであると、こういうわけです。

なお、虚無のスペル詠唱中にもパワーアップ（気分高揚）します。これは、自分の主人に限らず、他の担い手の詠唱を聴いても同様です。実際に、ジョゼフの詠唱でこの効果が発動したことがありました。他にも隠し能力あるんじゃないかと思う今日この頃です。

とはいえ、発動しなかったというのは語弊がございましたので「弱まった」に修正と、詳細な説明を入れました。ご指摘ありがとうございました！

２０１１／０７／２９　ガンダールヴの能力について補足追加
２０１１／１０／０２　誤字脱字修正、本文加筆修正

第８２話　若人の悩みと先達の思惑

――日が落ちて数時間も経った頃。

竜籠に乗って、急ぎラ・ヴァリエール公爵家の城へと帰還し、ルイズの魔法に関する詳細説明を待ちわびていた家族たちへ、妹を突然襲った不調の原因と――早ければ明日、遅くとも明後日には元通りの状態まで回復するという報告を終えたエレオノールは、その足ですぐさま自室へ戻ると、机の上に置きっぱなしになっていた羊皮紙の束を手に取って、大慌ててめくり始めた。

「やっぱり、そうかもしれない。このわたくしとしたことが……！」

エレオノールは、自分の迂闊さを呪った。妹ルイズの不調と、これまで見たこともない魔法技術の目新しさに気を取られ、肝心なことに気付けなかったことを――彼女は徹底的に悔やんでいた。もしも、学院にいる時点でわかっていたら。もっと詳しい話を聞くことができていたかもしれないのに。だが、その事実に思い至ることができたのは、竜籠内部で行っていた『瞑想』の最中であった。

彼女が現在手にしている紙束。それは、以前『お客様』を歓待した際に行われた、東方の視点から見た、ハルケギニアの魔法に関する見解を書き留めておいたものだ。

エレオノールは、そこに書かれた一文を読み、唇を噛んだ。

『世界に溢れる粒状の小さな＜力＞を、メイジが持つ＜力＞と『ルーン語』を併せて用いることによって操作する。これが、＜系統

魔法＞とされるものである』

そして、彼女はごく最近取ったばかりのメモと見比べた。

『全ての物質は、世界に宿りし小さな粒より為る。四の系統は、その小さな粒に干渉し、影響を与え、かつ変化せしめる呪文なり』

「やっぱりそうだわ！　どうして、今まで気が付かなかったのかしら。世界に溢れる小さな粒。彼は『始祖の祈祷書』に記されていたことと、全く同じことを言っていたのに」

そこへ至るまでの『道』が、目の前に何本も用意されていたにも関わらず、不安と焦りという名の深い霧に迷わされ、完全に見逃してしまっていた。エレオノールは、それが本当に悔しかった。

国立アカデミーの首席研究員ともあろうものが、こんな……研究室に配属されたばかりの新人がするようなミスをしてしまうだなんて！　金髪の女史は、思わずその美しい眉根をぎゅっと中央へと寄せた。

「ミスタは、今日はじめておちびが＜虚無＞に目覚めたことを知ったはずなのに、その事実に一切動じていなかった。おまけに、あの＜移動魔法＞について、まるで最初から、全部わかっていたような受け答えをしていたわ。そして、彼の先生は、あの魔法と同じ効果のある＜マジック・アイテム＞の開発に成功しているとまで言っていた。つまり……」

――彼、ミスタ・タイコーボーの国では＜虚無＞が失われておらず、残っている。あるいは、非常に近しい魔法が数多く存在している。

「そうよ！　『始祖』ブリミルは『聖地』を通って、遙か東の大地から、このハルケギニアへやって来たという説まであるくらいなんだもの。いいえ……それどころか、ひょっとすると……ミスタ・タイコーボーの出身国こそが『始祖』生誕の地だということすら考えられるわ！」

エレオノールは、己の内に浮かび上がってきた思考を、さらに先へと進めた。

もしかすると、かの国には『始祖』ブリミルの血に連なる者――つまり、彼の親戚縁者が大勢いるのではないだろうか。

そのために、本来であれば『始祖』の血を受け継ぐ者でなくては使うことができず、かつ扱いが非常に難しい＜虚無＞が、時間の経過と共に失われずに済んだのかもしれない。そのため『失われた系統』『伝説の再来』などと、極端に神聖視されていないのではないだろうか。だからこそ、彼はルイズの覚醒を聞いても、全く動じなかった。

そして。虚無魔法を『道具』（マジックアイテム・マスター）に込めることができるほどの技術と知識を持つ、魔法具工匠の存在。つまりミスタ・タイコーボーの先生も、その＜力＞と叡智を受け継ぐ者のひとりなのではないだろうか？　そこまで考えるに至り、エレオノールの身体が、ぷるぷると震え始めた。

「そういえば、ミスタは『魔法は、通常ならば＜力＞のコントロールを覚えてから習得するもの』だと言っていたわね。にも関わらず、ハルケギニアにはそれらの技術が伝わっていない、あるいは既に失われているようだと推測していたわ。と、いうことは……」

そこから導き出される解答。すなわち、始祖ブリミルは――生誕の地『東方』ロバ・アル・カリイエで、自分の一族と共に魔法の基礎部分を開発し、ひとびとの間へそれを広めた後に『西方』ハルケギニアを訪れたという可能性がある。

始祖が『降臨』した当時――つまり６０００年前は、あの＜フィールド＞や『瞑想』は極秘の技術とされていて、自国の者以外に教えることを、固く禁じられていたのかもしれない。それならば、ハルケギニアに伝わっていないのは当然だし、納得もできる。

ひょっとすると＜錬金＞は、始祖がこのハルケギニアへ辿り着いてから、新たに生み出した魔法なのではないだろうか。それならば『東方』に＜錬金＞の概念が一切ないというのも頷ける。あの博識な『東の参謀』殿が、全く知らない魔法だと驚いていた程なのだから、これは充分にありえる説だ。

あと数日で、取得していた休暇期間が終わる。アカデミーへ戻ってから、始祖に関する資料を確認してみよう。それと、王立図書館の蔵書も調べなければならない。ただし、家族の秘密に抵触する危険性も否定できないため、あくまで極秘裏に。

「その前に、ミスタ・タイコーボーからお話を聞いておくことができれば――この説は、さらに信憑性を帯びてくるかもしれないわ。明後日、おちびを学院へ迎えに行くついでに、改めて対談を申し込むことにしましょう。ええ、そうよ。そうすべきだわ！」

眼鏡の奥で、瞳をぎらぎらと光らせながら、エレオノールは独白した。

「も、もしかすると、わ、わたくしは……ここ、これまで、完全に不明とされていた『始祖』に関する謎――誰にも解明できなかった生誕の地について、そして魔法開発に関する秘事に踏み込む好機に恵まれたのかもしれないわ！」

絶対にこの機会を逃してはいけない。何故なら――。

「そうだわ、きっとこの謎を解くことこそがわたくしの！　『虚無の担い手』を家族に持ち、アカデミーの首席研究員となったこのわたくしに『始祖』がお与えになられた＜使命＞に他ならないからよ！！」

エレオノールは、興奮で震える腕を押さえるのに苦心しながらペンを取り、ここまでの考えをレポートに纏め始めた。明後日に控えた『対談』予定に備えて。

○●○●○●○●

――同時刻。魔法学院内の寮塔5階にある、タバサの部屋内では。

「うぬぬぬ……真夏だというのに、いったいなんだ？　この寒気は」

何の前触れもなく突如襲いかかってきた強烈な悪寒に、太公望が腕を抱え震えていた。

「……夏風邪？」

自分の手を、太公望の額へぴたりと当ててみたタバサであったが、

しかし。別段冷たすぎたり、熱すぎたりといったようなことはなかった。

「たぶん、違うとは思うのだが……念のため、今日は早めに寝ようと思う」

「そのほうがいい。ところで……数時間ほど前に、窓からラ・ヴァリエール公爵家の紋が入った竜籠が飛んでいくのが見えた。ルイズも、寮の部屋へ戻ってきている。まさか彼女の身に、何かあったの？」

心配げなタバサの問いに、太公望は思わず頭を抱えそうになった。あんな派手な来訪をすれば、当然目立つだろうに――ルイズも、その家族たちも、余程慌てていたのだろう。まあ、今までやれていたことが、突然できなくなったのだ。家族としては無理もないことではあるのだが……あとしまつをする者のことも、少しでいいから考えて欲しかったと。

こうなっては仕方がない、ある程度の情報を公開しておいたほうがいいだろう。そう判断した太公望は、今回ルイズに起きたトラブルに関して、外部へ漏れても問題のない一部の出来事を、今後間違いなくタバサの役に立つであろう知識をいくつか付け加える形で、内容を開示することにした。

「ああ、あの件だがな……ルイズのやつ、どうもわしらがゲルマニアへ移動した後に、家族の前で必要以上に張り切って魔法を披露しすぎたようでのう。今朝になって、何故かまともに飛べなくなってしまったと、わしに泣きついてきたのだ」

まともに飛べなくなった……？　どういうことだろう。＜フライ

＞の魔法ならば、精神力不足で浮かべなくなることはあっても、動作そのものがおかしくなるようなことはないはずだ。ひょっとすると＜念力＞での浮遊は、何か特別な制限があるのだろうか。そう考えたタバサは、素直にそれを聞いてみることにした。

「それなのだが。＜フライ＞の場合は、自身の周囲に＜風＞を纏うことで飛翔する魔法であるため『空間把握』が最低限できれば、問題なく飛ぶことができる。ところが＜念力＞で同じことをしようとした場合、ちょっとでも『感覚』が狂うと、まともに浮かぶことすらできなくなるのだよ」

「それは、たとえば……風邪をひいて熱が出ると、集中力が阻害されて、うまく魔法が使えなくなるのと同じようなもの？」

「その通りだ」

タバサの問いに、太公望は頷いた。

「念力による＜高速飛行＞をする場合、自分と行き先の間にある空間と距離、そして座標を完全に把握しておく必要があるのだ。先程タバサが例に挙げたように、風邪などで体調を崩したり、疲れで極端に集中力が落ちると、それに比例して『掴む』ための感覚が鈍る。その結果、まともに飛ぶことができなくなるのだ」

「理解した。＜フライ＞よりも遙かに繊細な『感覚』を必要とするため、身体にほんの少し違和感が生じただけで、障害が発生してしまうということ。でも、それなら今まで『疲れ』による飛行阻害が起きなかったのは何故？」

「それは、ルイズがこの魔法学院で生活していたからだよ。あの

娘は、感情の起伏が激しいからのう。わしらから見たらごくごく日常のささいな出来事に対しても、いちいち怒ったり、大喜びしたり、何かと跳ね返っておったであろう？」

使い魔召喚の儀以降、何かとルイズと関わる機会が増えたタバサは、なるほどと頷いた。かつて、ルイズは『ゼロ』と周囲から馬鹿にされ、いつも激しく怒っていた。あるいは、悔しさにじっと耐え忍んでいた。

ここ最近の彼女は、魔法が使えるようになった喜びを、全身で現していた。感情と＜精神力＞は密接な関係にある。実家へ戻って、静かな生活を送るようになった彼女の回復力が落ちてしまうのも当然だ。

「本来であれば、それに加えて『瞑想』を行うことにより、体力と精神力を回復させることができていたはずなのだが……」

太公望は、頭を掻きながらぼやいた。

「わしとしたことが、あまりにも基本的な内容であったがために、教えるのをすっかり忘れておったのだ。『瞑想』は＜霊穴（パワースポット）＞で行わなくとも効果を発揮するということをな。『蓄積』こそできないが＜力＞の回復に関しては、ただ眠るよりも圧倒的に早く行える」

それを聞いたタバサは、なるほどと頷いた。

「つまり、それを知らなかったルイズは、外での『瞑想』を全く意味のないものと認識してしまい、帰省してから一切行わなかった。結果、家族の前でいつも以上に張り切って＜念力＞を使い過ぎた彼女は、深く疲労し……精神力の回復も間に合わなくなった。そのせ

いで、うまく飛べなくなった。これで合っている？」

「うむ、完璧だ。これは、前もってきちんとそれを教えておかなかったわしのミスだ。その結果、帰還した直後にルイズの調子を診る羽目になったと。こういうわけだ」

「ひょっとして、さっきからずっと机に向かっているのは、それに関すること？」

そう――学院長室から自分たちの部屋へ戻ってきてからというもの、太公望はずっと机に向かい、羊皮紙に何かを書き記し続けていたのだ。

「いや、これはおぬしへ与える、新たな課題に関するものだ」

そう言って、太公望は書き終えたページの1枚をタバサへ手渡した。

「空気の重さ……圧力とその流れ……そして風の発生。これは……！」

タバサは、その内容を理解し……驚きのあまり目を見開いた。以前書店で買い求め、自室の本棚に収めてある、ハルケギニアの天気と風の関係について記された書物。その内容をさらに吟味した上で凝縮し、煮詰めたようなものが、そこにびっしりと書き記されていたからだ――しかも、非常にわかりやすい図解つきで。

「何故風は吹くのか。どうして、空気の流れが発生するのか。つむじ風が発生する理由とは。そういった＜風＞に関する『自然科学』の根本を纏めたマニュアルを作製しておるのだ。わしからおぬしに

与える次の課題は、それを『ガリア語』で読み上げながら『古代ルーン文字』で紙に書き写すという内容だ」

「ひょっとして『複数思考』の訓練課題？」

「そうだ。『声に出して読む』『書かれた内容を正しく理解する』『頭の中で、別言語に翻訳し直す』『腕を動かして紙に書き写す』という、同時に全く別種かつ複雑な思考を要する特別メニューだ。さらに、時折わしが話しかけるので、それに答えて貰う」

「複数思考中でも、集中力を乱さないための特訓。それがあなたからの対話」

「その通り。しかも、そのマニュアルを使うことによって＜風＞に関する理解が深まり、メイジとしての総合力まで上げられるという、実にお得感溢れる訓練なのだ」

確かに、これはとてつもなく難しいが、最後までこなすことができたら――今後、大いに役立つ訓練だ。タバサは奮い立った。

「これは、今から始めても……？」

「もちろんかまわぬが、ゲルマニアから帰ってきた直後で、疲れておるのでは？」

「大丈夫、問題ない」

「そうか。だが、疲れて効率が落ちては意味がないので、今夜はあくまで練習。最初の３ページだけ試すまでに留めるのだ」

「わかった」

タバサは、早速自分のぶんの紙とペンを用意すると、少し離れた場所に置いてあるテーブルの上にそれらを広げ、マニュアルに書かれた内容を声に出して読み上げ始めた。

「風が吹くとはつまり、空気が動くことである。この動きが発生するのは……」

少女の声、そしてカリカリと紙の上をペンを走らせる音が部屋に響く。

「タバサ、読み上げが止まっておるぞ」

「……思っていたより、ずっと難しい」

「最初からいきなりできるようなら、わざわざ訓練する必要なかろう？」

「……努力する。ん……と、動きが発生するのは、空気に重さが……これを空気圧と呼ぶ。この圧力の違いにより……流体である空気が……圧力の……」

「ところでタバサよ。明日の昼食についてなのだが」

「食堂は開いているはず……低いほうへ移動を開始する。これが風である」

「ほれ、今度は手が動いておらぬぞ」

「……いじわる」

「ウハハハハハ！　そう簡単に達成させてなるものか！」

「今のタイミング、まさか……わざと？」

「当然だ！　集中が乗り始めたところへ声が掛かる恐怖を、存分に味わうがよい！！」

「……悪趣味」

「クックック……何とでも言え。果たしておぬしは就寝時間前までに、３ページ全てを訳し終えることができるかな！？」

「意地でも終わらせる」

「ふふん、このわしの妨害を受けてなお、任務を達成することができるかのう？　ま、せいぜい無駄な努力をするがよい……って！　これタバサ、杖を構えるな！　そして殴るな！　痛い！　その杖は固いから、叩かれると本当に痛いのだ！！」

主人と使い魔の、心温まる（？）交流はその後しばらく続き――結果。この夜の訓練は目標の３分の１も進まぬまま、終了したのであった……。

――それから数時間後の、真夜中。

タバサは、ベッドの中で横たわったまま、薄く目を開いた。

昨夜、宿に泊まったときもそうだったが……うまく眠ることができない。ニィドの月は、このハルケギニアが最も暑くなる時期だ。しかし、今日は寝付けないほどの熱帯夜ではない。その証拠に、同居人は部屋の反対側に置かれている折りたたみ式寝具の上で、すやすやと寝息を立てている。

外の風が入ってくるよう、窓は全て開け放ってある。窓際に椅子を置き、そこに腰掛けたタバサは、杖を手に取り、手元へ空のグラスを引き寄せると＜水＞の初歩魔法である＜凝縮（コンデンセイション）＞のスペルを唱えた。

水蒸気が集まり、液体となってグラスを満たす。その中に小さな氷を浮かべ、いっきに飲み干した。ひんやりとした水が喉を潤してくれたが、美味しいとは到底言い難かった。人工的に創り出した水は、自然に湧き出たそれと比べ、数段味が落ちるのだ。

「水くみ場で、冷たい水を飲んでこよう」

そのついでに、少し空を舞って気分転換をすれば、すんなりと眠れるかもしれない。そう考え、外へ飛び出したタバサであったが――しかし、残念ながらその試みは成功しなかった。部屋の中では『パートナー』の静かな寝息が響いているにも関わらず、だ。

仕方なく、タバサは再び杖を手に取ると――自分に＜眠りの雲＞をかけた。それで、ようやく彼女は夢の世界へ旅立つことに成功した。

――ただ、あまり良い夢を見ることはできなかった。

○●○●○●○●

――それから1日が経った、ラーグの日早朝。

「うぬぬぬぬ……そろそろ来るだろうとは思っていたが、やっぱりか」

太公望が、灰色の伝書フクロウによって届けられた『召喚状』を前に、唸っていた。ついに彼の元へ『シュヴァリエ』と『東薔薇騎士団章』の正式受勲の手続きを行うため、ガリア王宮プチ・トロワへ出頭せよと書かれた命令書が届いたのだ。

さらに、タバサにも出頭命令書が届いている。任務の詳細内容については、いつも通り何も書かれていない。

「ある意味予想通りとはいえ、時期が時期だけに慎重を期したほうがいい」

オルレアン公夫人を救い出した直後であるため、タバサが相手方の動向を不気味だと感じるのは当然だ。太公望も、彼女と全く同意見だった。彼はふうっと大きく息を吐くと、改めて口を開いた。

「とはいえ、現時点で深く考え過ぎても仕方なかろう。もちろん、用心を怠るつもりはないが。しかし、ふたり揃って小宮殿のプチ・トロワ指定ということは……ジョゼフ王が自ら出てくるわけではなさそうだのう。一度、顔を拝んでおきたかったのだが」

タバサは、小さく首を振った。

「ガリア国内で余程名を上げるか、花壇騎士団の中で相当序列が

上がらない限り……普通の貴族では、ジョゼフ王と謁見することはまず叶わない。わたしも、イザベラから『シュヴァリエ』の任命状を受け取った」

「なるほど。まあ、そのあたりは大抵の国に共通することだから仕方がないとして……まったく、ルイズの件といい、これといい……ちと住処を空けただけで、どうしてこうも厄介事がまとめて飛び込んでくるのだ？」

実に迷惑げな顔で、届いた『召喚状』をひらひらさせながら呟く太公望。

「そういえば、ルイズはもう大丈夫なの？　夕べ食堂で顔を合わせたときは、それほど疲れているようには見えなかったけれど」

「ああ、それなら心配ない。まだ完全に＜精神力＞が回復したわけではないが、今まで通り魔法を使うぶんには問題なかろう」

「元の＜器＞が大きいと、回復にも時間がかかる」

「ルイズのアレは、特別大きなものだからのう。ま、瞑想についてもちゃんと説明しておいたし、魔法の使いすぎにも注意するよう念を押しておいたから、もう帰宅しても平気であろう」

しかし――太公望には、ルイズについて、いくつか気になることがあった。

そのうちのひとつは、ルイズの『回復速度』が、自分たちのそれと比べて、異様に遅いことだ。ルイズの『瞑想』が下手というわけではない。むしろ、太公望が教えた子供たちの中では巧いほうだと

いっていい。にも関わらず――昨日、約半日かけて＜器＞の半分近くまで戻すのが精一杯であった。

家系的に、そういう特異体質なのだろうか？　あるいは＜虚無＞特有の何かがあるのかもしれない。念のため、オスマン氏を交えて３人で会談してみたが、体質についてはもちろんのこと、虚無の特性についてもたいしたことはわからなかった。なにせ、数千年前に失われた系統のこと、比較対象どころか、資料すらろくに残されていないのだから。

そのあたりについて、今日改めて調査を行う予定であったのだが……この『召喚状』が届いてしまったが故に、それはできそうもない。

「とりあえず、学院長から国境越えの認可証を貰いにいってくる。おぬしのぶんも受け取ってくるので、その他の支度を頼んでもかまわぬか？」

「わかった。ところで、その手に持っているものは何？」

タバサが指摘したものは。布にくるまれた、一抱えほどある謎の包みであった。

「ああ、狸ジジイに頼まれとった書類だ。あやつ、最近わしを秘書か何かと勘違いしておるのか、やたらと仕事を持ち込んでくるのだ」

「昨日、一昨日と連続で出てきた桃りんごのまるごとタルトは……」

「その報酬だ。まったく、あのようなもので、このわしを釣るとは！」

学院関連の書類作製を、デザートを報酬に引き受ける――やっぱり、彼に何かモノを頼むときには、甘味を与えるのがいちばんなのだ。充分わかっていたつもりであったが、今更ながらそれを思い知らされたタバサであった。

○●○●○●○●

――その日の夕方。

トリステイン魔法学院の学院長室内で、ひとりの女性の絶叫が響き渡った。

「が、が、ガリアへ、かっ、帰ってしまわれたですってェ――！？」

大声の主は、ルイズを竜籠で迎えに来た、姉エレオノールであった。

「う、うむ。今朝方、ミス・タバサのご実家から報せがあってな……急いで戻ってくるようにと、国元からわざわざ迎えが来たのだ。当然のことながら、ミスタ・タイコーボーも、彼女について行ったのだよ」

凄まじい剣幕で、自分の前へと詰め寄ってきたエレオノールにたじたじとなりながら、オスマン氏はそう答えた。

「で、でもですね、あのかたには、おちび……い、いえ、その、ルイズの件を、お、お任せしていたわけで」

「それなんですが、姉さま。ミスタは、あたしにこれを読むように、って」

そう言ってルイズがエレオノールに手渡したのは、古代ルーン文字がびっしりと並ぶ書類であった。それは＜風＞に関する『自然科学』の書（図解付き）、そして＜念力＞で簡単な＜風＞を発生させるためのコツを記した簡易マニュアル、さらに＜瞬間移動＞を行う際に注意すべきことを箇条書きにしたメモであった。

「あの男、本当に用意周到というか……ミス・ヴァリエールの話を聞いた後、即座にそれを纏めておいたらしい。あくまで基礎の基礎の基礎らしいが、いやいやどうして、良く書けておるわ。わしも勉強になった」

可能であれば『フェニアのライブラリー』に収めたいくらいじゃ。おまけに、あえて不勉強な者には読めぬよう、共通語ではなく古代ルーン語で書かれているのがまた憎たらしい。そうぼやき続けるオスマン氏の声は、しかしエレオノールには届いていなかった。

「そ、それで？　ミスタはいつ学院へお戻りになるんですの！？」

「さあ……」

「さあ……って、そんないい加減な！」

机を叩いて抗議してきたエレオノールの迫力に、オスマンは思わずたじろいだ。

「いや、そんなことを言われても。そもそも彼らはガリアの『騎士』じゃからのう。ああ、何やら親族への顔見せも兼ねとるらしいから、いつ戻れるかわからんとも言うておった。最低でも1週間……ひょっとすると、夏休みが終了するまで戻ってこんかもしれん」

「そ、そんな……ッ」

エレオノールは、がっくりと落ち込んだ。傍目に見てもわかるくらいに。

それはそうだろう、過去６０００年間、誰も辿り着けなかった『道』を発見したかもしれないのに、その手がかりとなると思しき人物が、しかも、今日会えるとばかり思っていた相手が、いきなり目の前から消えてしまったのだ。そのうち戻ってくるとわかってはいても、気落ちしてしまうのは当然だろう。

「なんじゃ？　エレオノール君。そんなにあの男に会いたかったのかの？」

オスマン氏が、いつもの軽口のつもりで叩いたそれに戻ってきた返答。まさか、これが事件の始まりになろうとは、発した本人も、受けた者も、思いも寄らなかった。

「えっ？　え、ええ……まあ。そ、その、彼と、お話し……したいことが……」

顔を小さく俯かせ、そんなことを言い出したエレオノールの様子に、オスマン氏は仰天した。一緒に聞いていたルイズまでもが目を丸くした。

なにこの態度。本当にこれが……いつも強気で、周りを威圧するような空気を纏っていた、あのエレオノール姉さま？　いったいどうしちゃったの！？　姉のただならぬ様子に、ルイズは心の底から驚いた。

だが、それ以上にびっくりしていたのがオスマン氏だ。なにせ、ラ・ヴァリエール公爵家の長女・エレオノールといえば、トリステインの社交界でもその名が知られた存在なのだ――正直、あまりよろしくない方向で。

とにかく、性格がキツい。その伝統と格式高き家柄を誇るあまりに、爵位の低い者に対しては鼻もかけない高慢さが、持ち前の美しさを全て台無しにしているのだと。

つい先頃、長年付き合っていた貴族の男性から、我慢の限界だと一方的に婚約を破棄されたという噂まで耳に届いていた。それが本当の話ならば……エレオノールは、元婚約者から、こう言われたに等しい。彼女と結婚するくらいなら、国内で最大の権勢を誇るヴァリエール家との繋がりを断っても構わない――と。

だが、ラ・ヴァリエール公爵家での歓待期間中やその前後、エレオノールと実際に話してみた時には、そのように高慢な印象など、ほとんど受けなかった。学生時代と比べ、たいぶ丸くなったものだ。噂は所詮、噂でしかなかった。オスマン氏は、そう思っていた。

いや、まさかとは思うが……念のため、確かめてみるか。そう考えたオスマンは、エレオノールに対し、いくつか質問をしてみることにした。

「話とは、いったい何だね？　わしでもよければ相談にのるぞい？」

「いえ、あ、あの、個人的なことですから……結構ですわ」

えっ、嘘。これ当たり？　ひょっとして当たりなの!?　まさか、最近彼女が妙に柔らかくなったのって、そのせいだとか!?　オスマン氏は、顔が引き攣るのを懸命にこらえながら、必死の思いで次の言葉を紡ぎ出した。

「そうか。では、戻り次第、君宛に連絡を入れたほうがよいかの？」

「お願いします！　来週からはトリスタニアへ戻りますので、そちらへ」

即答である。しかも、身を乗り出すようにして、連絡先を書き記したメモを手渡してきた。これは、ほぼ確定と言っていいだろう。オスマン氏は、そう結論した。もちろん、エレオノールが太公望と話したいのは『始祖』に関することであって、それ以上でも以下でもない。だが、ここに至るまでの態度がいかにもまずかった。

あの『彫像』エレオノール女史が、まさかあんな年下好みとは――あ、いや中身はジジイじゃったから年上か。お互いに学者肌で話が合う上に、メイジとしての強さは、かの『烈風』に匹敵する男。これは、ある意味仕方のないことなのか……。

しかし、あやつの爵位は貴族として最下級の『シュヴァリエ』で……と、待て。そういえば、国元で大公位を蹴ったとかミス・タバサが言っておったわい。おまけに、総軍司令官を務めるほどの軍人

で、元政治家。現在はともかく、昔の身分を考えれば、充分釣り合う。だが……オールド・オスマンの中で、数々の思いが縦横無尽に駆け巡りはじめた。

目の前にいる老人が、まさかそんなことを考えているなどとは、今のエレオノールには気付けない。現在、彼女を盲目にしているのは『恋』ではなく『知識欲』であった。と……彼女はふいに気付いた。最大の目的が果たせなかったのは残念だ。しかし、彼から妹に託されたものについては――。

「ほらおちび！　急いで帰るわよ。それではオールド・オスマン。ミスタがお戻りになったら、必ず連絡をお願いしますわ！　絶対ですわよ！？」

「ね、ね、姉さま！？」

ルイズの手を引っ掴み、駆け出すように外の竜籠へ向かったエレオノール。彼女は、先程渡された数々のレポートを早く読んでみたくてたまらなくなった。オスマン氏が太鼓判を押すほどの内容。それは、いったいどれほどのものなのかと。

――こうして。本人たちが全く与り知らぬ場所で、想像だにしなかったことを切っ掛けに、大変な人物の中に、とんでもない誤解が生じてしまったことを、改めてここに記す。

第８２話　若人の悩みと先達の思惑（後書き）

一部については元々本編内で予告済みではありましたが、またおかしなフラグがあちこちで立ち上がっております。ひとは、自分の見たいものを見る傾向があるんですよ……と。

２回連続でダベり＆検証回でございました。切りが悪かったため、普段よりちょっと短めとなっております。目立っちゃいけないのに、つい派手な突撃をかましてしまうのは、きっと母方の血のせいです。絶対知られてはいけない密命の帰りに、風竜でお城の前に降り立っちゃうとか、城門前で大騒ぎするとかネ！

次回は、本編内で触れております通り、ガリア編です。ついに受勲です。果たして、今度の依頼は何でしょうか。そして、ついに某会長との顔合わせ。果たしてうまくいくのでしょうか。

第８３話　雪風と軍師と騎士団長

――魔法学院の学院長室を起点に、妙な事件が発生しようとしていたのと同日。

ガリア王家が迎えに寄越した風竜の背に跨ったタバサと太公望は、途中で街道へと舞い降りてトリステインの国境を越えると、そのまま旧オルレアン大公領に佇む公邸――タバサの実家へと立ち寄っていた。

今まで通り、出迎えに現れた老僕ペルスラン――彼そっくりに見せかけられた魔法人形は、これまたいつもタバサが訪れたときと変わらず、食事と寝所の用意をしてくれた。彼曰く、時折王家から差し向けられた兵士たちが見回りに来るものの、これといった異変はないとのことだった。

つまり、屋敷はかつての状態まま、そこに在るということだ。

既に母さまたちは異国ゲルマニアへ脱出し、元気でいる。頭ではわかっていても、屋敷の惨状を――特に、狂乱した母親の姿をした人形によって壊され、飛び散った陶器の破片で散らかった部屋を目にしたとき、タバサの心は酷く乱れた。

正直なところ、こんな偽りの姿を見続けるのは辛い。立ち寄ることすら苦痛だ。しかし、目を背けてはいけないのだ。かつてと同じように、機会があるときは、こうして出向かなければならない。王政府に、屋敷内の異変を悟らせないためにも。

ここはもう、ただの人形屋敷なのだ。そう思い込むことによって、

なんとか悪夢を払おうとしたタバサであったが、やはりその夜も…
…うまく寝付くことができなかった。

そして、明けた翌朝。日が昇る前に屋敷を後にしたふたりは、一路ガリア王国の首都リュティスへと向かった。その日の朝に出頭するよう、厳命が下されていたからである。

――ニイドの月、フレイヤの週、オセルの曜日。

壮麗な大宮殿ヴェルサルテイル、その一画を占める小宮殿プチ・トロワでは、そこの主である青髪の王女イザベラが、暇をもてあました様子で、近くに控える侍女をからかって遊んでいた。何やら新しい＜水＞の魔法を覚えたらしき彼女は、それをお前たちを使って実験してやるなどと言って、控える者たち全てを怖がらせ、悦に入っていた。

……この王女に暇な時間を与えると、本当にロクでもない行動に走るのである。

と、そこへ呼び出しの衛士がやってきて、イザベラが待っていた人形姫と、その使い魔の来訪を高らかに告げた。

報せを受けたイザベラは、顔中に笑みを浮かべた。ただし、それは慈愛や微笑と呼べるものからは、ほど遠いものであった。

「通しなさい」

現れた者たちの様子は、前回会ったときとは大幅に異なっていた。イザベラの従姉妹姫であるタバサは、いつも通りの無表情。だが、

もうひとり――太公望の瞳に、初めて謁見したときと同様の光が戻っていた。

どうやら、惚れ薬の後遺症はなさそうね。当時のことを思い出し、うっかり吹き出しそうになるのを堪えながら、イザベラは視線を太公望へ向け、じろじろと眺め回すと……おもむろに口を開いた。

「よろしい。ちゃんと略章を身に付けて来たね。いい子だ」

と……そのイザベラに、太公望が疑問を投げかけた。

「あのう……王女さま。お聞きしたいことがあるのですが」

「なんだい？」

王女の下問に、太公望は頭を掻きながら、心底困ったといった声で答えた。

「これ、お返しすることはできませんかのう？」

この発言に、謁見の間に居合わせた者たちがどよめいた。

無理もない、国王から受け取った騎士団章を、よりにもよってその娘であるイザベラに返却するということは、つまり……この国に仕えたくないと言っているにも等しい、不敬極まりない行為であるからだ。だが、それを聞いた王女は怒るどころか、遊び甲斐のあるおもちゃを見つけた子供のような顔をして尋ねた。

「どうしてだい？　その『花壇騎士団章』はね、欲しいと思っても、なかなか手に入るものじゃないんだよ」

「それは、ご主人さまにも言われたんですがのう。でも……わたくしは、こんな大きなお国から、勲章をいただけるような働きなど、何もしておりません。にもかかわらず、これを身につけるというのは……その、重すぎるのです」

イザベラは、その美麗な顔に愉悦の笑みを浮かべた。

「あっはっは、何を言ってるんだい。お前はね、とてつもない戦果を挙げたんだよ」

「戦果……とは？」

おかしくてたまらないといった風情で、イザベラは続けた。

「なんだ、わかってないみたいだね……まあ、いいわ。お前がそれを身につけているだけで、さらに戦果は拡大するんだ。いや、縮小すると言ったほうがいいかもしれないねえ。いいから、大人しく受け取っておきな」

「そうなのですか。王女さまがそのように仰るなら、そうします」

「ふふん、素直でよろしい。それじゃ、これも渡しておくわ」

イザベラがパン、パン、と手を叩くと、脇に控えていた侍女が前へと進み出た。その手には黒塗りの盆が乗せられており、そこには2枚の紙と、品の良い装飾が施された小箱が置かれていた。

「騎士（シュヴァリエ）と、東花壇警護騎士団（エストパルテル）の任命状、そして騎士団章だ。父上からの手紙に書いてあったと思うけれど、今後はそれを身につける

ようになさい。それと……」

イザベラは、手元にあった紙と太公望とを交互に見ながら、声を出した。

「おまえの正式な所属先は、この『北花壇警護騎士団』だ。シャルロットから聞いているかもしれないけれど、うっかり抜けているところがあるといけないから、このわたしが自ら説明してあげる。光栄に思いなさい」

――そして、イザベラは改めて『北花壇警護騎士団』についての説明を行った。

この騎士団は、ガリア王国の『裏』仕事を一手に引き受ける部署であること。

表向きは存在しないとされているため、本来の所属を明かすのは禁忌であること。

ここに所属する者は、互いに名前では呼び合わず、番号で名乗る決まりがあること。

「あんたに割り振られた番号は『8』だ。最近ちょうど空きが出てね。ご主人さまの隣で覚えやすいだろう？　よかったね！」

本人としてはにっこりと――端から見ると、ニヤリといった表現のほうが正しい笑顔で、イザベラは先を続けた。

「それと、年金についてだけど……財務庁に任命状を持っていけば、持ってる勲章に応じた額が月割りで支払われる仕組みよ。最初

は、ご主人さまに連れて行ってもらいなさい。そうそう、毎月ガリアへ戻ってくるのは大変でしょうから、最大3ヶ月分まで前借りができるようにしておいたわ。どう？　わたしって、とっても優しいでしょう！？」

「はい、ありがとうございます」

この返事を聞いたイザベラは、さも驚いたといった顔をした。

「おやまあ……最初の頃と違って、ずいぶんと大人しくなったじゃないか。シャルロット、あんた、やっと使い魔のしつけをする気になったみたいだね」

ようやくイザベラから言を向けられたタバサであったが、彼女の表情は全く変わらなかった。いつもの通り、まるで人形のように表情を動かさない。

「なんだい、結局『心』は返したってわけかい。もうしばらく、あのままのほうがよかったんじゃないかい？　そうすれば、あんたの父親に忠実だった連中から、同情が引けたかもしれないよ！？　おお、なんとお気の毒なシャルロットさま！　あんなに涙を零されて……なんてね！」

その言葉にも、タバサは答えを返さない。

「ふん！　相変わらず、ちょっと魔法ができるからって、余裕気取っちゃって。まあいいわ、今回の任務に、その無表情は役立つでしょうし」

イザベラの顔が、さらに凶悪な笑みで歪んだ。部屋の両脇で不安

げに立つ侍女たちを呼びつけると、口早に命じた。

「ほら、お前たち！　さっさとこの子たちを連れて行きな。例の支度をするんだよ」

そう言うと、イザベラはあごをしゃくった。それを、侍女たちの後についてゆけと解釈したタバサと太公望は、静かに部屋を後にした。

○●○●○●○●

――それから1時間ほどして。まずは、太公望が謁見の間へ姿を現した。

彼の装いは、先刻までとは一変していた。

銀糸の入った上品なシャツに濃緑色のベスト、白い乗馬ズボンという服装に、騎士団の象徴とおぼしき刺繍が裏地に縫いつけられた、フードつきの紺色のマントを身に纏い、さらに、彼の頭には巻き帯部分に薔薇の花と茎をあしらった小さな銀細工がついた、つば広帽子が被せられていた。これらは、東薔薇花壇警護騎士団に所属する者が一般的に身につけている衣装である。

「なかなか似合ってるじゃないの。どう？　ガリア騎士の格好をした感想は」

「首のあたりが、えらく窮屈です」

謁見室に残っていた衛士たちが、思わず苦笑する。

「あははははっ、すぐに慣れるから我慢しなさい！　と……お前のご主人さまが、支度を終えてきたみたいだよ」

イザベラに促された太公望は、視線を扉のほうへと移した。そして、入ってきたタバサの姿を見て、思わずほう、と唸った。

おそらく湯浴みをさせられたのであろう。やや上気した顔には、華麗な化粧が施されていた。ゆったりとした豪奢なドレスを身に纏い、全身を宝石や装飾品によって飾り立てられたタバサは、その内に隠されていた神秘的ともいえる高貴さが浮き彫りとなり、どう見ても完璧な姫君そのものであった。後ろについてきた侍女たちも、その可憐な姿を見て感嘆のため息を漏らしている。

「ふん、まあまあってところかしら」

イザベラは、席を立ってつかつかとタバサの側へと歩み寄ると、その手で従姉妹姫の頭をぐりぐりとこねくり回した。そして、邪悪といってもいい笑みを浮かべながら、自分の頭を――より正確にいうと、そこに乗せられているものを指差した。それは、宝石がふんだんに散りばめられた、ミスリル銀製の冠であった。

「ねえ、シャルロット。あんた、これが欲しいんでしょう？　もしかすると、あなたのものだったかもしれない、王女の冠よ」

その言葉によって、室内にいる者たちの間に緊張が走った。だが、タバサは相変わらず無表情のまま、空虚な瞳でそれを見つめている。

「ほら！　かぶってみたいでしょう、ねえ？　素直に、欲しいって言ってごらんなさいな。そうしたら、あげてもよくってよ」

イザベラは冠を取り、なんとタバサの目の前で、指を入れてくるくると回し始めた。表情を変えぬままそれを見ていたタバサは思った。今のわたしが目指しているものは、それではないと。そんなタバサの様子を見ていたイザベラが、フンと鼻を鳴らした。

「相変わらず頑固な子。ま、いいわ。それじゃあ、今回の任務を説明するわね」

そう言って冠をタバサの頭にかぶせたイザベラは、手を叩いて室内にいた衛士を含む召使いたち全てに退出を促すと、再び椅子へ腰掛けた。

部屋の中に、自分たち3人しかいなくなったことを確認すると、イザベラは声を上げてひとりのメイジを呼んだ。緞子（どんす）の影から、若い騎士が姿を見せる。

「お呼びでございますか」

歳のころは２０をいくつか過ぎた程度であろうか。ぴんとはった髭が凛々しい、なかなかの美男子であった。

「東薔薇警護騎士団団長バッソ・カステルモール、参上仕りました」

カステルモールと名乗った騎士は、イザベラの前で膝をつくと、一礼した。

「カステルモール。そこにいるのが、例のリョボー・タイコーボーだ。父上から説明は受けているわね？」

「はっ、書面にて頂戴致しております」

「本来は、わたしの預かりなんだけど……表向きは、お前のところに所属しているということになる。面倒を見てやってちょうだい」

「承知仕りました」

カステルモールは、立ち上がってくるりと振り向くと、太公望へ視線を投げてよこした。それを見た太公望は、慌てたように、ぎくしゃくとした礼をする。

「よ、よろしくお願いします」

「ふむ、最低限の礼儀は心得ているようだな。しかし、姫殿下の御前で緊張しているとはいえ、その礼はいただけない。これからは、名誉ある東薔薇花壇警護騎士団の一員として、相応しい所作を身につける努力をせよ」

「か、かしこまりまして、ございます」

そんなふたりの様子を、実に面白そうに眺めていたイザベラが、口を挟んだ。

「挨拶は済んだようだね。じゃ、そこにいる『人形』に化粧をしてあげて」

「御意」

イザベラの命令に頷いたカステルモールは、すらりと杖を引き抜

いた。青白く鈍い光を放つ、相当に使い古された杖である。これほど見事な古杖を持っているということは、年齢によらず、かなりの使い手なのだろう。この若さで、花壇騎士団の長に抜擢されるだけのことはある。タバサは、カステルモールをそのように評価した。

と、カステルモールは素早く呪文を唱え、タバサに向けて杖を振り下ろした。すると……タバサの姿、いや、正確にいうと彼女の顔に変化が現れた。なんと、イザベラと瓜二つになったのだ。

風と水の合成魔法。スクウェア・スペル＜フェイス・チェンジ＞だ。＜水＞を3つ重ねる必要があるため、基本が＜風系統＞であるタバサには、未だ使いこなすことができない非常に高度な魔法である。

とはいえ、全身を完全に変化させることのできる『如意羽衣』とは異なり、この魔法では顔形を変えることしかできない。しかし、今回言い渡される任務には、これで充分なようであった。

「あっはっは！　そっくりじゃないのさ」

大声で笑いながら、イザベラはタバサの眼鏡を取り上げた。こうして顔を突き合わせているところを見ると、まるで双子の姉妹のようだ。

「わたしね……地方の領主に招かれて、旅行をすることになったの。あんたは、その間の影武者ってわけ。理解できた？」

イザベラの問いに、タバサはコクリと頷いた。

「ま、あんたはこぉんなにちっぽけで、やせっぽちで……おまけ

に、美貌では到底わたしには及ばないけどさ。ハイヒールを履いて、胸に詰め物でもすれば、まあ誤魔化せるでしょう」

出発予定時刻まで、あと2時間と予定が押している。イザベラは3人に命令を下すと、ひとり謁見室に残った。イザベラは、その細く切れ長な目をさらに細めると、誰にも聞こえないほど小さな声で独白した。

「あの日から、今日でぴったり2ヶ月目。偶然って本当に怖いわぁ～。あたしね、最近やっと気付いたのよ。たとえ遊びでも、絶対に手を抜いちゃいけないんだってね」

○●○●○●○●

――ガリアの首都リュティスから、南西に１００リーグほど離れた地方都市・グルノープルへ向かう馬車の中で、イザベラは機嫌の良さを隠そうともしなかった。

彼女は、王女付きの侍女に変装していた。なんと、自慢の蒼髪をわざわざ栗色に染めるほどの念の入れようだ。新しく雇い入れた女官という触れ込みで一行に紛れ込んだイザベラは、身分を完全に隠し、他の召使いや侍女たちを欺いているのであった。

「どう？　あたしの変装術は。誰もわたしが王女だなんて、気付いてないわ！」

イザベラは、自慢げに――自分のすぐ隣に座っている、王女の衣装に身を包んでいるタバサに声を掛けた。変装術というよりは、イザベラが生まれ持った資質――ありていに言えば、まるで王女らし

くない立ち居振る舞いや、その性格面からくるのものであるのだが、この場に居合わせた者たちは全員、それを口にするほど愚かではない。

現在、馬車の中にいるのは4名。影武者であるタバサと、そのお付きの女官に扮したイザベラ。そして、彼女たちの護衛という扱いでカステルモールが同乗しており、さらに、王女から『道中の退屈しのぎに東方の話を聞かせろ』という気まぐれという名の命令によって、正式にガリア騎士となったばかりの太公望が一緒に乗り合わせていた。

今回の旅行中、王女の護衛を担当するのは、東薔薇花壇警護騎士団と、西百合花壇警護騎士団、そして影ながらイザベラに付き従う、北花壇警護騎士団の精鋭たちである。

この小旅行は、現地滞在が3日、往復にかける時間が4日という予定であった。アルトーワ伯爵領は、竜籠を利用すれば数時間程度で到着できる距離にあるのだが、そこをあえて時間のかかる馬車で行くのが、王族というものである。この旅行は、ガリア王家の権威を国民たちに見せつけるための、大切な行事ともいえるのだ。

一行は、先頭にガリア王家の紋章が描かれた青い旗を掲げた騎士を立て、中央の列には、王女たちが乗る豪奢な装飾の施された四頭立ての馬車と、その前後を挟むかのように並べられた、護衛の兵士や召使いを乗せた馬車を従え、その後ろについた2つの騎士団が整然と隊列を組み、威風堂々と街道を征く。

行く先々では、周辺の通り沿いに住まう者たちが整列し、歓呼の声を投げかけてきた。

「イザベラさま、万歳！　ガリア王国、万歳！」

小さく開いた馬車の窓からタバサが軽く手を振ると、住民たちはさらに熱狂した。

「あはははは、みんながあんたのこと、本物の王女さまだと勘違いしてるわ！　よかったねえ、気分だけでも王族に戻れて！」

げらげらと笑い続けるイザベラには目もくれず、タバサは黙々と手を振り続けた。

「今回向かうのは、アルトーワ伯爵が治める地方都市よ。あんたは、アルトーワ伯のことを知っていて？」

タバサは、外に向かって手を振りながら、小さく頷いた。

「ガリア王家の分家筋」

「あら、よく覚えてたじゃないの。外国生活が長いから、とっくに忘れているものだと思ってたのに。ああ、ひょっとして自分の味方になってくれそうな人間だから、目を付けていたのかしら？」

イザベラは、タバサの頭に被せた冠をつつきながら問うた。

「そんなこと、考えてない」

と、そんなタバサの口調が気に障ったのか、カステルモールが窓の外には見えぬよう、すらりと杖を引き抜いた。

「おのれ、影武者風情が……王女を愚弄するか！」

「おやめ、カステルモール。今はわたしが話しているのよ」

イザベラの言葉で、若き騎士団長は杖を収めた。だが、その顔は怒りに歪んでいた。

「失礼致しました。しかし……敬愛する我らがイザベラ姫殿下に対して、あのような口の利く無礼に、このバッソ・カステルモール、我慢がならなかったのであります」

口を閉じてなお、タバサを睨み付け続けるカステルモールの態度が、どうやらイザベラにはお気に召したらしい。すっと左手の甲を差し出した。

「お前の忠誠に、疑うところなどないわ」

笑みと共に差し出された手を、カステルモールは恭しく取ると、そっと口付けた。

「ねえ、シャルロット。あんたはずっと外国暮らしだから知らないでしょうけど、最近リュティスを中心に、新教徒たちが大暴れしているの。このあいだは、国軍の施設が襲撃を受けてね、怪我人が大勢出たわ」

タバサは、何も答えない。実際、そのような事件が起きていたことなど、彼女はこれまで知らなかったからだ。

「旅行なんてやめたほうがいい。そう思うでしょう？　けどね、そうはいかないのよ」

ふっとため息をついたイザベラは、今度はタバサの頬を指でぷにぷにと突き始めた。

「アルトーワ伯はね、長年ガリア王家に忠誠を誓い続けてきた、本当に誠実な紳士なの。そんな人物が半年以上も前から申し込んで来ていた園遊会への招待を、たかが襲撃騒ぎ程度で断るわけにはいかないのよ。王家の名に傷がつくものね。ああ、王族でいるのって本当に辛いわ！」

「だから、わたくしのご主人さまを影武者にされたのですか？」

太公望の言葉に、イザベラは満足げに頷いた。

「その通りよ。見てご覧なさいな、この青い髪」

イザベラは、タバサの髪を撫で回した。この色だけは、どんな染料を使っても真似できない。高位スペルである＜フェイス・チェンジ＞をもってすら、再現するのが難しい輝きを放っているのだ。

「お前のご主人さまは、わたしの影武者には最適なのよ。この子はもう王族じゃないけど……髪の色だけは、王族のままだからね！　とはいえ、シャルロットだけをアルトーワ伯爵のところへ送り込むわけにもいかないのよ。わたしが側にいないと、対応できない事もあるでしょうから」

そう言うと、イザベラは髪を掻き上げながらタバサに告げた。

「そういうわけさ、人形7号。王女さまのお仕事は、あんたに任せたよ」

○●○●○●○●

――その日の夜。

タバサたちは、街道途中にある宿場町へ到着した。前もってガリア王家からの予約を受けていた、その町の宿という宿は、１００人を軽く越える王女さまご一行の到着で、全て満室となっていた。

タバサには、町でいちばん上等な宿屋の2階にある、最も豪華な部屋があてがわれた。イザベラは、その客室までタバサを案内すると、恩着せがましい口調でこう言った。

「ここが、あんたの部屋。こんな上等な客室で過ごせるだなんて、夢のようだろう？　せいぜいわたしの慈悲に感謝するんだね」

侍女姿のイザベラは、召使いに扮していた数名の北花壇騎士団の者たちと共に、階下の部屋へと引っ込んだ。いっぽう太公望のほうはというと、この建物へ来る以前に、カステルモールの手によって、東薔薇花壇騎士団の詰める宿へと連れて行かれてしまった。

広い部屋でひとりきりになったタバサは、奥にあった鏡台の前に立つと、じっとそこに映る姿を見つめた。王女が纏うドレス、そして冠……。

イザベラは「これが欲しいんでしょう？」と、蒼い冠を突き出してきたが、タバサは別に、そんなものが欲しいとは思っていなかった。彼女が今、探し求めているものは――。

「妹の消息、そして父さまの死の真相に関する情報」

タバサは、ひとり呟いた。これが半月前ならば違っていただろうと。あのとき、わたしが欲しかったのは、イザベラ――あなたのお父さんの首。しかし、数多くのことを知ってしまった、今は違う。

簒奪だと思われていたジョゼフ王の即位は、大司教も認める正統なものだった。

心優しき善人だと信じていた父は、王座を狙い、人知れず暗躍を続けていた。

復讐を求めていると感じていた母の心は、王族として国の安寧を願っていた。

一人っ子だった自分には、実は何処とも知れぬ遠地へと流された、双子の妹がいた。

父の人物像については、未だ真相はわからない。あくまで、母からの伝聞でしかないからだ。しかし、それ以外については――裏付けがほぼ取れている。

窓際に置かれていたサイドテーブルに冠を置くと、タバサは天蓋つきの豪華なベッドに、その小さな身体を横たえた。次いで……その小さな口から、歌声が漏れだした。

それは、幼い頃……まだ眠りたくないとぐずる自分を寝かしつけようと、母が枕元で唄ってくれた子守歌であった。

かつて、タバサはよくこの歌を口ずさんでいた。何故なら、この子守歌は――彼女にとってわずかな希望を繋ぐ、極細の糸であった

から。

深い絶望のあまり、遠くへ去りたいと願うことすらあったタバサを、かろうじて現世に繋ぎ止めていた、懐かしくも優しい思い出。ほんのわずかに過ぎないが……こうして歌うことによって、タバサの脳裏へ静かに蘇るのだ。幸福だった昔と、微笑みに溢れた日々の記憶が……。

久しく歌っていなかった、その歌を紡ぎ出していると……ふいに扉を叩く音がした。タバサは、側に置いてあった杖を手元に引き寄せる。その表情は、既に騎士のそれだ。

「誰？」

「わたしだ。カステルモールだ」

慎重に扉を開けると、そこに立っていたのは、間違いなくタバサの顔に＜フェイス・チェンジ＞をかけた、東薔薇花壇騎士団の長、そのひとであった。

「何の用？」

短く問うたタバサに、片手の指を1本立てる仕草を見せたカステルモールは、慎重に周囲と部屋を見渡すと、さっと中へ滑り込み、後ろ手に扉を閉め……さらに＜魔法探知（ディテクト・マジック）＞を唱えた。

「……怪しい者も、魔法で聞き耳を立てている輩もいないようだ」

ある意味、あなたがいちばん怪しい。一瞬そんな風に考えたタバサであったが、しかし。その場で恭しく帽子を取り、足元に跪いた

カステルモールを見て、内心驚いた。もっとも、表情は相変わらず全く動かなかったが。

「どうか、わたくしめに殿下をお護りする栄誉をお与えくださいませ。昼夜を問わず、護衛つかまつります。隣の部屋に、隊員を待機させる許可をいただきたくあります」

「必要ない。わたしは、ただの影武者」

タバサの否定に、カステルモールは首を横に振った。

「いえ……シャルロットさまは、いつまでも我々の姫殿下でございます」

どういうこと？　そう呟いたタバサに、カステルモールは静かに告げた。

「わたくしめは……いえ、我ら東薔薇花壇警護騎士団一同は、表にできぬ、変わらぬ忠誠をシャルロットさまに、そして今は亡き大公殿下に捧げております」

どうやら、彼は亡き父に縁がある人物らしい。しかし、時期が時期である。こうして近付いてくる相手を、簡単に信用するわけにはいかない。タバサは、小声で尋ねた。

「昼間のあれは……？」

カステルモールは、その声にビクリと身体を震わせた。

「大変、失礼をば致しました……王権を簒奪した者の娘に、我が

心の内を悟られては……と、愚考した次第」

しきりに恐縮する彼の様子は、タバサの見たところ……演技だとは思えないほどに真摯なものであった。もしも、彼が『本物』ならば……是非とも聞いてみたいことがある。

「あなたは、父を知っているのですか？」

タバサの問いに、カステルモールは俯かせていた顔をぱっと上げ、瞳を輝かせた。

「よく、存じております。今のわたくしがございますのは、亡き殿下……いえ、陛下のお引き立てがあってこそ。身分を問わず、誰にでもお優しいおかたでした」

彼は、父に何らかの強い恩義を感じているために、わたしを護ろうとしてくれているのだろう。タバサはそのように判断した。しかし、現時点では万が一にも騒動を起こすわけにはいかない。よって、受け答えは慎重に行わねばならない。そう考えたタバサは、思いついた言葉の中で、最も無難であろう答えを返すことにした。

「ありがとう。その言葉だけで充分」

「シャルロットさま。どうか、御身をお護りする許可を……」

だが、タバサは静かに首を横に振った。

「今のわたしは、北花壇騎士（シュヴァリエ・ド・ノールバルテル）。それ以上でも、以下でもありません」

真剣な目で自分を見つめてくるタバサに、カステルモールはそれと同じか、それ以上に生真面目な瞳で答えた。

「シャルロットさま。あなたさまさえ、その気であれば……我ら、東薔薇花壇警護騎士団一同、決起のお手伝いをば……」

カステルモールの言葉を聞いたタバサは、はっとした。今、彼は『決起』と言った。つまり、いざというときは反乱も辞さないということだ。もしも、このまま放っておけば、このひとたちは……いつか、暴走してしまうかもしれない。それは、多くの血が流れる道に繋がる。瞬時にそう判断したタバサは、静かな声でこう告げた。

「そのようなことを言ってはいけません。わたしはこれ以上、不幸になるひとを増やしたくなどないのです。その代わりに……」

続く言葉を紡ぐのを、酷く躊躇うかのようなタバサを、カステルモールは怪訝な面持ちで見つめた。

「シャルロットさま……？」

「いつの日か、あなたの知る父の話を……わたしに聞かせてくれますか？」

それを聞いたカステルモールの全身が、瘧のように震えた。タバサは、そんな若き騎士の姿を、静かに眺めて続けている。

それからわずかの間を置いて。カステルモールは静かに立ち上がると、タバサの手を取り、そっと接吻した。

「真の王位継承者に、変わらぬ忠誠を」

「いいえ、わたしは北花壇騎士。感情を持たぬ、ただの人形です」

「左様ですか……承知致しました。ですが、たとえ御身を地の底に落とされたとしても……我らが心は変わりませぬ」

カステルモールは、そう言い残して部屋を出て行った。顔の隅に、抑えようにも抑えきれぬ、僅かな笑みを浮かべて。

「……また、巻き込んでしまった」

部屋に取り残されたタバサは、窓の外に浮かぶ双月を眺めながら、ぽつりと呟いた。真実を知りたいという、自分勝手な欲求のせいで、また無関係なひとを裏道へ誘い込んでしまった。彼らの暴走を抑えるという、自分の心に都合の良い言い訳をして。

タバサは、空に輝く双つの月に向かって小さく独白した。

「わたしは、本当にこの道を歩んでもいいの……？」

だが、その問いに答えてくれそうな者は、今――この部屋にはいなかった。

――バッソ・カステルモールは、己の内に沸き上がる感激を抑えるのに、全身全霊をつぎ込まねばならなかった。

「昼間、あのような無礼を働いたにも関わらず、シャルロットさまは寛大なお言葉をかけてくだすったばかりか、我らの身まで気遣ってくださった。さすがは、シャルル殿下が遺された姫君だ。あの

かたと同じく、どこまでもお優しい心根をお持ちであられる」

で、あればこそ。何としてでも、御身をお護りせねばなるまい。若き騎士団長は、仕えるべき姫君の身を、心から案じていた。

「ここ最近、国営施設に対する爆破予告や、襲撃事件が後を絶たない。それだけ、現在の王政府に不満を持つ者が多いということだ。そしてこの行幸は、あの厚顔無恥で畏れを知らぬ僭王の娘が、身の危険を感じてわざわざ己の影武者を立てるほど危ういもの。敬愛する我らがシャルロット姫殿下を、あの女の身代わりになどしてたまるものか！」

真の王位継承者を護ることこそ、我らの務め。心の底からそう信じているカステルモールは、タバサの部屋を出た直後。即座に彼が纂奪者と断じている者の娘・イザベラの元へと向かい、頭を下げるという屈辱に耐え、必死の思いで『影武者』を護りたいと願い出た。そのほうが、襲撃者が現れた際に、本物と錯覚するであろうという嘘までついて。

しかし、イザベラの許可は降りなかった。それどころか、彼ら東薔薇警護騎士団は――本来であれば、騎士団ではなく平民の警備兵が行うような、宿場町外周の警邏任務を命じられてしまった。

「おまけに、よりにもよって件の『異邦人』まで一緒に連れて行けとは！　かの者は、当初想像していたほどの礼儀知らずではなかったが、しかし……あのような子供を連れ歩くなど、我らにとって足手まとい以外の何者でもない」

せめて、外から賊が入り込まぬよう、精一杯努力しよう。敬愛するシャルロット姫殿下の御為に。そう決意したカステルモールであ

ったが、しかし。その判断は、既に遅きに失していた――。

第８３話　雪風と軍師と騎士団長（後書き）

以上、コスプレ大会でした。いや、ちょっと違うか。だいぶ違いますね。すみません。太公望のエントリーナンバーは８でした。

タバサって、なにげに原作中トップクラスの衣装替え経験者なんですよね。才人の夢にまでコスプレ姿で登場してますし。あれは正直、台詞を含め反則だと思うんだ。だがそれがいい。

今回の元となったエピソードは、既に原作をお読みのかたはご存じ、タバサの冒険・第１巻の某話です（ご存じない方にはとてつもないネタバレになるので、正式エピソード名はまた後ほど）。当時はまだ平団員だったカステルモールさんが、時の経過によって騎士団長まで上り詰めているのは、既に本作にて書いている通りです。

そして、原作をご存じのかたはイザベラさまの変化にもお気づきかと思います。王天君を召喚してから、ぴったり２ヶ月でこんなことになっております。たいへんだ……どんどんレベルアップしていくよ……早くなんとかしないと……！

いっぽう、タバサの悩みがより深くなってきております。言い方はあまり良くないのですが、ただ復讐だけを考えていればよかった過去と異なり、その何倍も難しい道を選択してしまった彼女は、このまま、まっすぐに進むことができるのでしょうか。

なお、今回は『前編』です。次回でこのエピソード自体は終わる予定なのですが……予定は未定であって決定ではないということで。

２０１１／０８／０６　誤字・脱字、本文加筆修正

第８４話　古兵と鏡姫と暗殺者

――東薔薇騎士団団長・カステルモールが、憤然として王女イザベラの部屋を後にした、ちょうどそのころ。騎士団の詰め所として指定された宿屋の片隅で、ひとりの騎士が苦笑していた。

彼の名は、アルヌルフ。東薔薇花壇警護騎士団の副団長を務める人物である。団長であるカステルモールとは、親子ほども年の離れているこの初老の騎士は、長年この騎士団に所属し、団長の補佐を行ってきた。

彼がこの歳になるまで騎士団長になれなかった理由は、３つある。

ひとつめは、彼がメイジとしても、騎士としても『平均点』以上になれなかったこと。彼にあるのは、長年の積み重ねによる経験、そして知識だけであった。

ふたつめは、家格が低かったせいだ。もしも、彼の実家が男爵程度の位を持ってさえいれば――既に団長のひとりとして、いずこかの騎士団を任されていたかもしれない。

最後の理由は、彼の性格によるものだ。アルヌルフは頭の回転速度はそこそこであるものの、慎重に慎重を重ね過ぎ、素早い決断ができぬ男であった。なればこそ、自分はこれまで積み重ねてきた経験を生かし、補佐役に徹したほうがよい。アルヌルフは、己の性質と能力について、よく弁えていた。よって、彼は副団長という現在の地位に満足しており、出世を望んでいないのだった。

アルヌルフは『東薔薇花壇騎士団の執事長』などと周りから揶揄

されても、逆に喜んでそれを受け入れてしまう懐の深さを持っていた。そんな彼の人柄故に、歴代の団長たちから寄せられた信頼は厚く、それは現団長カステルモールも例外ではない。

よって、カステルモールはそれがさも当たり前であるかのように、新たに増えた『異邦人』の面倒を見るよう、彼に命じた。新人の教育も、アルヌルフにとっては毎度お馴染みの仕事であった。

そんな彼が、思わず苦笑いをしてしまった原因たる存在が、現在彼をはじめとする東薔薇花壇騎士団の団員たちが居る場所――宿屋の地下に設置された居酒屋、そこにある横長のテーブルの中央付近に腰掛け、大勢の騎士たちと一緒に笑い合っている少年である。

――使い魔召喚の儀で起きた事故によって、東方から呼び寄せられた『異邦人』。

彼ら東花壇騎士団に属する者たちは、件の少年をそう呼んでいた。敬愛する大公殿下の遺児・シャルロット姫殿下が、たった一度だけ犯してしまった『失敗』の結果であると。

だが、そのたった一度の失敗が、大公姫を苦境に陥れた。

主君に忠誠を誓う貴族たるもの、仕えるべきおかたの小さな失敗に心を揺るがすことなど、あるわけがない。そう信じていた東花壇騎士団の面々は、完全に裏切られた。その日まで熱心にシャルロット姫を支持していた貴族たちの一部が、あっさりと手のひらを返し――現王家に永遠の忠誠を、などと言い始めたのだ。そして、そんな貴族たちの離反行動は、未だ続いている。

かつて『シャルル派』と呼ばれたガリア国内最大規模の派閥は、

現王家によって行われた激しい粛正と、この失敗により、今や見る影もないほどに縮小していた。かの『異邦人』は、ただそこに現れただけで、残っていたシャルル派の貴重な兵力を、大幅に削ってしまったのだ。

本来であれば、憎むべき対象は変節した貴族たちだ。しかし、人間の心とは複雑なもの。そう簡単に割り切れるものではない。結果、全く罪のない子供――『異邦人』に恨みが向いてしまうのではないかと危惧していたアルヌルフであったが、それは全くの杞憂に終わった。

いや、合流した当初こそ、騎士団内にぎくしゃくとした空気が醸し出されていたのは確かだ。それを霧散させた最大の功労者は――宿の地下に設置されていた、この居酒屋兼食堂である。

街道沿いにある宿屋の食堂で出される食事など、普通であればさほど期待できるものではない。ところが、ここで出された料理と酒はどれもこれも及第点以上だった。おまけに、地元で採れた川魚やキノコ、芋などの材料がふんだんに盛り込まれた夕食は、王都リュティスではまずお目にかかれない、珍しいものばかりであった。

美味いつまみと酒があれば、自然と心が広くなる。宮廷内で日がな一日机に向かい、そうでない時は、どろどろとした心理戦を繰り広げ続けている腐敗した役人どもならばまだしも、城門の外を活躍の場としている騎士団員であれば、基本的にその性格はさっぱりとしたものだ。

問題の子供自身も、これまで流されてきた噂とは異なり――厚顔無恥な浮浪者などではなかった。歳のころは１５～６程度であろうその少年は、食事前の簡単な自己紹介のあと、全員に向かって礼儀

正しく頭を下げたのだ。何も知らない不作法者ですが、皆様どうかよろしくお願いします……と。

どこか初々しいその様子は、騎士団の者たちから好意的に受け入れられた。自分たちの従士時代――正式に王国花壇騎士として叙任を受ける前の、右も左もわからぬ見習いであった頃を思い出したのであろう彼らは、やれこのワインを飲んでみろだの、こっちの野菜とキノコを詰めた芋が美味いだのと、競い合うかのように少年の世話を焼き始めた。

少年のほうも、それが大層嬉しかったらしく、まるでミルク入りの大皿を与えられた子犬のように、勧められるまま酒と料理をたいらげていった。腹を壊してしまうため、肉や魚はどうしても食べられないのだと断っていたが、その言葉すらも「ならば、別のものをもっとたくさん食わねば大きくなれぬぞ」と、料理皿の枚数を増やされる等、一種のからかいとなって昇華された。

どうやらうまく溶け込んでくれたようだな、心配は無用であった。とはいえ、甘やかしすぎてはいけない。念のため、釘を刺しておかねば。そう考え、行動を起こそうとアルヌルフが席を立ったちょうどその時、先程までイザベラ王女の護衛任務に就いていた騎士団長カステルモールが居酒屋へ顔を出した。そして、彼ら東薔薇花壇騎士団に命じられた任務を静かに告げた。

「これより、日の出まで宿場町外周の警邏を行う。２人１組となって行動せよ」

――アルヌルフ副団長は、迷わず新入りの少年と組んで任務に就くことを選んだ。

雲一つない晴れ渡った夜空の上で、双月が静かに輝いている。その淡い光の中を、アルヌルフ副団長と太公望は、騎乗して闊歩していた。

月明かりに照らされた周囲は明るく、たいまつや＜光源＞の魔法を使うまでもなく、視界良好であった。そんな中で、アルヌルフは感心していた。

「様になっているではないか。きみは、乗馬が得意なのかね？」

「はい。幼い頃より、父に鍛えられておりましたので」

流浪の民だと噂で聞いていたが、なんと父親から馬術を習っていたとは。その言葉を裏付けるように、少年は今日初めて騎乗した軍用馬を、見事なまでに乗りこなしている。ひょっとすると、彼は東方ではそれなりに家柄のよい、貴族の子弟なのではなかろうか。元来心配性であったアルヌルフは、念のため確認してみることにした。

「そうか。では、今頃家族は心配しているのではないかね？　その……きみが、突然いなくなってしまったわけだから」

「いえ、それはありません」

「何故だね？」

「わたくしの故郷は、既に妖魔の軍勢によって滅ぼされているのです。生き延びたのは、わたくしと兄だけでした……その兄とも、しばらく顔を合わせておりません。そもそも、お互いに今どこで、何をしているのすらわからない状態ですから」

アルヌルフは、絶句した。自分と轡を並べて進む少年の顔には、諦観ともいうべき色が浮かんでいる。おそらく、彼の発した言葉に嘘はないのだろう。だいたい、そんな偽りを並べ立てたとして、いったい彼に何の得があるというのだ。

「立ち入ったことを聞いて、悪かった」

「いえ、お気になさらないでください副団長殿」

屈託のない笑顔を見せた後、まるで何事もなかったかのように常歩で馬を進める少年を、アルヌルフは横目で観察した。おろしたての騎士服が、彼にはいかにも窮屈そうだ。しかし、少年の腰に下げられている長さ５０サントほどの使い古された杖が、初老の騎士の目を引いた。

金属製――おそらく鋼鉄であろう杖の先端には、丸い宝玉が填められている。少なくとも、ガリアではまず見かけないタイプの杖だ。頑丈そうな造りではあるが、正直なところ軍杖として相応しい形状とは言い難い。だが、目を凝らしてその杖の全体をよく見たとき――初老の騎士は、思わず息を飲んだ。何故ならば、そこには魔法や武器によってつけられたとおぼしき傷が、多数刻まれていたからだ。

アルヌルフは、ごく少量ながら東方諸国の茶や交易品を取り扱う王城出入りの大商人から、ロバ・アル・カリイエには、エルフたちと交戦している国があるという話を聞いたことがあった。かの地には、ハルケギニアと比べて妖魔や亜人が数多く存在するという噂も耳にしていた。

そんな東方から召喚されて来たこの少年は、見かけによらず相当

な修羅場を潜ってきているのではなかろうか。杖を見れば、持ち主の力量がある程度判断できる。アルヌルフが長年積み重ねてきた経験と、それによって裏打ちされた勘が、この少年は断じて非力な子供などではないと告げていた。

と……ふいに、件の少年が馬を止めた。

「どうかしたのかね？」

「いや、奥に見える建物なのですが――部屋のひとつに明かりがつきました」

これが、もっと早い時刻であったなら――アルヌルフは特に気にせず、流してしまったかもしれない。だが、現在時刻は深夜2時を既に回っている。使用人が朝の支度をするために起き出すには早すぎ、かつ、宵っ張りの貴族が就寝前の読書をするにしては遅すぎる時間だ。よって、彼は念のため確かめることにした。

「それは、どこだね？」

少年が指差す先には、この宿場町でいちばんの宿と、唯一明かりのついた窓があった。アルヌルフは、急いで懐に入れてあった宿場町の割り振り一覧を確認し――顔色を変えた。彼は、その部屋に宿泊している人物がいったい誰であるのか、正確に掴んでいた。東薔薇花壇騎士団の団長・カステルモールの口から、信頼のおける副団長たる彼にだけは明かされていたのだ。

ここ最近増えてきた、新教徒やその他勢力と思われる者たちによる襲撃事件。それらの脅威があってなお、やむにやまれぬ事情から中止できない地方都市への行幸。用心のために立てられた、王女の

影武者――その役目を引き受けているのは、自分たちが敬愛するシャルロット姫殿下。

彼はその名を口にするほどの愚か者ではなかった。しかし、呟きは漏れてしまった。

「あそこは、姫殿下の寝室……！」

――風は、本来目には見えないものだ。しかし、アルヌルフはそのとき確かに目撃した。双月の下、濃紺色の軌跡と共に……突風が吹き抜けてゆくさまを。

○●○●○●○●

少年――太公望が、宿場町の外から怪しい明かりを発見する、ほんの少し前。

夜空に並んだ双月が、王女イザベラの影武者たるタバサに割り当てられた客室の中を照らし、窓枠の影を床に描いたのとほぼ同刻。がらがらと台車か何かを押すような音が、彼女の部屋に向かって近付いてくると――扉の前で、ぴたりと止まった。

夢と現実の狭間を揺れ動いていたタバサは、その気配で完全に目を覚まし、急いで身を起こすと、眼鏡をかけ、手元に杖を引き寄せた。ついで、燭台に立てられた蝋燭に火を灯す。月明かりと蝋燭の炎によって、部屋は淡い光に包まれた。

ベッドの横に設置された小机の上に乗っている時計は、現在の時刻が深夜2時過ぎであることを示している。こんな時間に訪問者が

やってくるとは、いったいどういうことだろう？　当然のことながら、タバサは警戒した。

すると、ふいに扉が開かれ、若い娘が現れた。手押し車を押すその横顔に、タバサは見覚えがあった。確か、一行に付き従っていた、お付きの侍女のひとりだ。

タバサがじっと見ているにも関わらず、その侍女はまるで気にしていないといった様子で、手押し車に乗せられていたティーポットを持ち上げ、お茶を淹れ始めた。もちろん、タバサはお茶を頼んだりなどはしていない。

そして侍女は、

「どうぞ」

と、カップに注がれたお茶を差し出した。タバサはそれを受け取らず、まっすぐに侍女の目を見、そして疑問に思った。なんだろう……この瞳の色は、どこかで見たような記憶がある。

「どうぞ、受け取ってください」

「わたしは、頼んでいない」

「お飲みになったほうがよろしいですよ。とても良く眠れますから」

にっこりと微笑みながら、侍女は告げた。

「どうか召し上がってください。高貴なおかたの末期の顔を、苦

痛で歪ませるというのは……私の主義に反しますので」

タバサは弾かれたように飛び退ると、早口で呪文を唱えた。

「ラナ・デル・ウィンデ」

＜風槌（エア・ハンマー）＞が完成した。タバサの目の前にあった空気が急激に膨張すると、巨大な塊となって侍女に扮した暗殺者に襲いかかる。しかし、女は身体を素早く回転させ、魔法を避けた。どうやら彼女は、並の刺客ではなさそうだ。

続けさまにタバサは攻撃呪文＜風の刃（エア・カッター）＞を解放した。しかし、幾重にも放った見えない刃を、暗殺者とおぼしき女は、なんなく躱していく。おそるべき体術の使い手であった。

「おやおや。イザベラさまは、かなりの使い手であられるようですね。まったく……噂など、当てにならないものです」

タバサは、杖を構え直した。どうやら相手は、イザベラの暗殺を請け負っているらしい。すっかり彼女をイザベラだと思い込んでいる様子だ。

「いったい誰の差し金？」

「さぁ。私は、あなたさまを永遠に眠らせて差し上げろという依頼しか受けておりませんので。どうか、大人しくお休みになってはいただけませんでしょうか」

そう言うと、侍女は馬鹿丁寧に一礼した。あまりにも堂々としたその仕草は、彼女の自信の表れであろう。タバサは無表情を装いつ

つも、その内心では少しずつ焦りを覚えはじめていた。

建物の内部は＜風＞メイジにとって、非常に相性の悪い地形だ。何故なら、外部とは異なり操作できる空気の最大量に限りがあるからだ。たとえ全ての窓が開いていたとしても、壁やその他の障害物によって、風の流れを妨害されてしまうことに変わりはない。

「ふぅ。どうあっても眠っていただけないとあらば、仕方がありません」

聞き分けのない子供をあやすような口調で、刺客の女は呟くと……左手を突き出した。

「イル・ウォータル・スレイプ・クラウディ」

その詠唱を聞いた瞬間、タバサはぎゅっと唇を噛みしめた。悔しさ故ではない、その呪文が発するであろう効果に耐えるためだ。

タバサの予測通り、青白い霧が彼女の頭を覆った。＜眠りの雲＞の呪文である。猛烈な眠気がタバサに襲いかかってきたが、しかし彼女は耐えきった。メイジの最上位『スクウェア』クラスである彼女は、もともと＜抵抗（レジスト）＞能力が高い。それに加え『痛み』という負荷を付け加えていたため、なんとかやり過ごすことができた。

「なかなか聞き分けのよろしくないおかたですね、イザベラさまは。この点は噂通り」

余裕の笑みを浮かべる刺客を、タバサはぐっと睨み付けた。しかし彼女の心は、驚愕のあまり激しく震えていた。この『暗殺者』は、間違いなく系統魔法を使ってきた。しかも……！

「杖を持たずに、いったいどうやって魔法を使っているのか。それが不思議でならないといったお顔ですね」

微笑みながら近寄ってくる暗殺者の言葉と顔に、タバサは一瞬怯んでしまった。そこへ、再び呪文が飛んできた。今度は、タバサが最も得意とする呪文＜氷の矢（ウィンディ・アイシクル）＞だ。なんとかぎりぎりで身を翻したが、どうしてもかわしきれなかった数本が、彼女の身体を傷付けた。タバサの腕と足から、つうっ……と幾筋もの血が滴り落ちた。

「動かないほうがよろしいですよ。苦しみが長く続くことになりますから」

次に来る呪文は何だろう？　タバサは、必死で頭を高速回転させた。ぴりぴりと肌を刺す『感覚』が痛い。空気の全てが張り詰めている。そしてこの室内は、ほぼ乾燥しきっているようだ。

この状態では、もう水分を凝固させる性質を持つ攻撃魔法＜氷の矢＞＜氷の槍（ジャベリン）＞などは使えないだろう。そう判断したタバサは、小さく呪文を唱え――自分の周囲に風の流れを作り出した。

こうしておけば、たとえ＜風の刃＞や＜風の針＞が飛んできたとしても、即座に軌道を逸らすことができる。＜風の槍＞なら、持っているこの杖で、ある程度対応可能だ。

そしてほぼ予測通り、タバサに向かって飛んできたのは＜風の刃＞であった。しかし、暗殺者が次に唱えた魔法は、そういった類のものではなかった。

「……ッ！！」

侍女が唱えたのは、なんと＜風の縄＞。目標を拘束する風魔法であった。＜風の刃＞は完全に囮。それを放つことでタバサの周囲にある空気の流れを変化させ、逆に利用したのだ。全身を縛り上げられ、口をも封じられてしまったタバサは、もはや声を出すことすらできなくなってしまった。

「イザベラさまは、どうやらご自身の腕に絶対の自信があったようですが……ここは、大声で助けを呼ぶべきでしたね」

タバサは呻いた。確かに救援を求めるべき状況だった。わたしは、相手を心のどこかで侮っていたのかもしれない。魔法の使えない平民くらい、ひとりで対応できると。だから、詠唱を聞いて焦ってしまったのだと、心の底から悔やんだ。しかし、全てが遅きに失した。

完全に無力化された少女の胸の内は、目前に迫る死という名の極限の恐怖によって、凍て付いた。暴れようにも、力が入らぬように縛られているせいで、まったく身体が動かない。助けも呼べない、口が開かない、悲鳴を上げることすら叶わない。

床に転がっているタバサの姿を、何の感情も映さぬ瞳で見下ろした暗殺者は、右手袖口から滑らせるようにして1本の短剣を取り出すと、固く握り締めた。

「では、おやすみなさいませ」

暗殺者が膝をつき、タバサの胸に短剣を振り下ろそうとした――その瞬間。

ガシャン！　という激しい音と共に窓ガラスが割れ、何者かが飛

び込んできた。

「うぐっ！」

突入してきた者の手によって、暗殺者は部屋の反対側まで吹き飛ばされ、小さく悲鳴を上げた。それと同時に、タバサの拘束が解かれる。＜風の縄＞の効果が消えたのだ。

「すまぬ、遅くなった！」

外から突入してきたのは、太公望であった。アルヌルフの言葉を聞いた時点で、瞬時にタバサの危機を察した彼は「先に行きます」という断りをいれた直後＜高速飛行＞で部屋までまっすぐに駆けつけてきたのだ。

そして、床に倒れているタバサと、それを見下ろす女を見た太公望は、迷わず部屋へ飛び込んだ――得意の蹴り技で。そう、暗殺者は手ではなく足で吹き飛ばされたのだ。なお、この際「太公望キーック！」などという台詞が一緒についてきたのだが、幸か不幸か、誰もそれを聞いてはいなかった。

太公望は、急いでタバサに駆け寄ると、周囲を警戒しながらそっと彼女を抱き抱え、傷の具合を確かめた。

「う……タイコー……ボー……？」

全て急所は外れている。命に別状はないようだが、出血が多い。

「もう大丈夫だ、すぐに手当てを……」

と、バタンと勢いよく扉が開き、どやどやと警備の騎士たちが大勢なだれ込んできた。彼らはカステルモール率いる東薔薇花壇騎士団ではなく、下の階に詰めていた西百合花壇騎士団の者たちであった。

「姫殿下！」「イザベラさま！」

そして、彼らは見た。夜着を血で濡らしている姫君と、割れた窓ガラス、ぐったりとした彼女を不敬にも抱きかかえている、不審な騎士の姿を。

「おのれ、貴様！　姫殿下に何をする！」「殿下を離せ！！」

……部屋の反対側に倒れていた暗殺者は、ちょうど彼らの死角になっていたのだった。

太公望は、彼としては珍しく非常に焦った。この状況は、あきらかにまずい。よって、早急に誤解を解かねばならぬ。そう判断した彼は、声を上げた。

「待て！　話せばわかる！！」

「問答無用！」

危うく、どこかの城内であったようなやりとりが起ころうとしていたその直前。怒り狂う騎士たちを止めたのは、タバサのか細い声であった。

「彼は、わたしを助けてくれた騎士。本物の刺客は、そこに」

タバサ――現在はイザベラの顔をした彼女が指差す先には、侍女の格好をした女が倒れていた。それを見た騎士たちは、ぐるりと刺客を取り囲んだ。いっぽう、騎士たちの中にいた＜水＞のメイジたちは、一斉にタバサと太公望の元へと駆け寄ってきた。

「姫殿下！　なんと酷いお怪我を……」「すぐに治療致します、今少しのご辛抱を」

即座に＜治療＞の魔法が唱えられ、タバサの身体につけられた傷は癒えていった。

「ありがとう」

いつもは短気で気まぐれな王女イザベラから、ふいにかけられた優しい言葉に、騎士たちはしばし目を白黒させていたが……姫君が無事とわかると、ほっと息を吐き、救助に来るのが遅れたことを深く謝罪した。

いっぽう、刺客を取り囲んでいた騎士たちは、倒れ伏していた女を抱え起こすと、激しく揺り動かした。

「おい貴様！　起きろ！」

「ううん……」

揺さぶられた侍女は、深いため息をつくと、ゆっくりと目を開けた。どうやら気が付いたらしい。そして彼女は、自分の周りをぐるりと取り囲んだ騎士たちを見ると、大きく目を見開いた。

「きっ……」

「き？」

「キャアァァアア――――――ッ！！」

耳をつんざくような悲鳴に、部屋にいた関係者一同は、思わず耳を塞いだ。なんとか立ち直った騎士のひとりが、侍女の尋問を開始した。

「きゃあじゃない！　貴様、何故姫殿下を襲った！？」

「えっ？　イザベラさまを襲う！？　わたしが！？　ど、どういうことですか？」

「おのれ、とぼける気か！？」

「そんな、わ、わたし、目が覚めたらここにいて……」

侍女は、本当に何も知らないといった様子で、がたがたと震えながら、あたりをきょろきょろと見回している。それを見たタバサは、ふいに気付いた。彼女の瞳が、先程までとはまるで違う色――いうなれば、光を宿しているように見えたのだ。

先程までの侍女の瞳は、かつて『薬』によって正気を失ってしまった自分の母、そしてパートナーのものとよく似ていた。だからこそ、タバサはそれに気がつけた。

「まさか……＜制約（ギアス）＞！？」

「はっ！？　どういうことでありますか」

騎士の問いを目で制すると、タバサは気丈にも身体全体がふらつきそうな状態に耐え――ゆっくりとした足取りで侍女のもとへ近付いていった。イザベラの横暴ぶりをよく知る侍女は、それで完全に怯えてしまった。その目からぽろぽろと涙を零している。

「ひえ……お、お許しを……」

「あなた、名前は？」

「な、ナタリー……です。お、お助け……」

「ナタリー、あなたが覚えている範囲でいいから、詳しく話を聞かせて。いったいどこから記憶がないの？」

ナタリーと名乗った侍女の話はこうであった。夕食を済ませたあと、同僚たちと共に部屋へ戻り、そのまま眠っていた。気が付いたらここにいて、床に倒れていたのだという。

「あなたは、メイジなの？」

「と、とんでも、ご、ございません……」

と、ここで西百合花壇騎士のひとりが手を挙げた。どうやら、その騎士とナタリーは顔見知りであったらしい。彼女は、身元のしっかりした平民の出であるという証言を得たタバサは、念のため確認をすべく、杖を手に取った。もちろん、彼女は＜魔法探知＞をかけようとしただけだったのだが……これを見たナタリーは、ふたたびぐんにゃりと気を失ってしまった。

「……身体に魔法反応なし。彼女は、本当に何も知らない可能性が高い」

「どういうことでありますか？」

彼ら警護騎士たちの反応はもっともである。よってタバサは、先程あった出来事を、彼らに余すことなく伝えることにした。

夜中に、突然ナタリーが茶を持って現れたこと。永遠に眠らせろという依頼を、何者かから受けたと言っていたこと。そのときの彼女は、まるで別人であるかのように昏い目をしていたこと。とてつもない体術の使い手であったこと。杖を持たずに、複数の＜系統魔法＞を放ってきたこと――。

「なるほど、それで＜制約＞の疑いがあるということでありますか……」

「おのれ！　新教徒どもが、好んでやりそうな手だ！！」

＜制約＞とは、水系統に属する『対象者の心を操る』スペルである。この魔法をかけられた者は、平時はごく普通に生活を送っているが、日時や置かれた状況など、使い手が設定した条件を満たすことで、突如豹変し――命令された内容を忠実に実行する、操り人形と化す。しかも、効果が切れた後に痕跡を残さぬという、実に厄介な呪文だ。

『新教徒』と呼ばれる者たちのほとんどは平民だ。しかし、貴族――つまりメイジがまったくいないわけではない。そして彼らは、実際に＜制約＞を使うことによって、過去に何度も事件を起こしてきた。

かけられるほうも『殉教』という言葉に酔い、自ら望んでそれを受け入れるため、呪文の効果を強く受けやすく、しかも見分けるのが非常に困難であった。それ故＜制約＞も、新教徒が唱える『実践教義』も、ガリアの国法で禁じられたのだ。

「だが、仮に＜制約＞だとしてもだ。いったいどうやって平民に魔法を唱えさせていたというのだ？　体術にしてもそうだ。かの禁呪に、そのような付加効果はないはずだぞ」

喧々囂々の議論で、場が騒がしくなる。そのうち、話が「誰が彼女に＜制約＞をかけたのか」という内容となり、怪しいのは最近雇い入れられた者、あるいはこの宿場町にいた者であるというものに変化し――いつしかその疑いが、あまりにもタイミングよく姫君を助けに現れた新入りの騎士、つまり太公望に向けられようとしたそのとき――ようやく、アルヌルフが部屋に現れ、いきり立つ騎士たちに、状況の説明をした。

太公望が、つい先刻までアルヌルフと共にいたこと。外で警邏任務に就いている最中、自分たちは偶然部屋の異変に気付いたのだと告げた。その上で、そこが王女の部屋であると教えたのはアルヌルフであり、それを聞いた途端、彼は先行して飛び込んでいったのだと証言した。他の騎士団にも、古参としてその名を知られているアルヌルフの仲裁は、太公望を窮地から救った。

「まったく、若さゆえの思い切りのよさというか……いやはや、怖ろしいな」

「だが、それが姫殿下のお命を救ったのは確かだ。よくやったな、少年」

口々に太公望を褒めそやした西百合騎士団の面々は、恭しくタバサに一礼すると、壊された窓を＜錬金＞で直し――警備体制をより強化すべく、詰め所へと戻っていった。

部屋に残ったアルヌルフは、彼らが完全に立ち去ったことを確認すると、タバサの前に跪き、一礼した。

「イザベラさま……ご無事で何よりでございました」

「ありがとう。あなたが彼を寄越してくれたお陰で、この命を救われました」

タバサは、心からアルヌルフに感謝していた。もしもあと数秒、太公望が部屋へ飛び込んでくるのが遅れていたら、彼女は父の待つ天界（ヴァルハラ）へと招かれていたかもしれないのだ。

さらに、彼は太公望にかけられそうになっていた容疑も晴らしてくれた。実際、アルヌルフがこの場に現れてくれなければ、最終的に、タバサは自分の正体を明かすしかなかったかもしれない。それは即ち、任務失敗を意味する。そうなれば、タバサだけではなく太公望も、イザベラから厳罰が下されていただろう。

そんな恩人たる彼に報いるため、現在イザベラの姿をとっているタバサは――アルヌルフの前へ、ごく自然に左手の甲を差し出した。

タバサに忠誠を誓ってくれているという東花壇騎士団、その副団長のイザベラに対する評価を上げてしまうなどといったような些細なことは、タバサの頭にはなかった。ただ、彼に対して純粋に、今できる最大限の礼をしたい。その思いだけが彼女を動かしていた。

「おお、姫殿下……もったいのう、もったいのうございます……！」

かたやアルヌルフも、内心で感激していた。今、自分に御手を許してくれようとしているのは、彼ら東薔薇花壇警護騎士団の者たち全てが真の主君と崇める、シャルロット姫殿下なのだ。しかも、深い恨みを持っているであろうイザベラの姿をしていてもなお、それを行うということは……心からの感謝を、彼に捧げてくれていることに他ならない。騎士として、これほどの幸せが他にあるだろうか。いや、ない。

――互いに真実を知らぬまま、主君と古参騎士の絆は深められた。

いっぽうそのころ。

詰め所としている部屋に戻った西花壇騎士団の者たちは、念のためナタリーを監視下に置きつつ、彼女の持ち物を調べていた。

「ジェイク、何か変わったものはあったか？」

ジェイクと呼ばれた騎士は、ナタリーが倒れていた場所の近くに落ちていたナイフをじっと観察している。

「いや……特に何も」

「そういえば、さっきの姫殿下はなんだかおかしかったな。いつもなら『お前たち、いったい何をやってたんだい！』なんて大騒ぎして、減給処分を言い渡されていたところだ。いったいぜんたい、

あのヒステリー王女に何があったんだろうな？」

だが、ジェイクはナイフを見つめたまま、返事をしなかった。

「そのナイフがどうかしたのか？」

「いや、どうもしないよ」

ジェイクは、あっさりとそのナイフを手放すと、元あった位置へと戻した。しかし――彼は、同僚たちが目を逸らした途端。それをなめし革に包むと、自分のポケットにそっと仕舞い込んだ。

――その翌日。

グノープルの街に到着した王女一行は、熱烈な歓迎を受けた。

領主たるアルトーワ伯爵は、自ら街門外へ出て、彼らを出迎えた。王家の分家筋である彼の髪は、やはり珍しい青色であった。しかし、その色はタバサやイザベラ、そしてジョゼフとは異なり、やや黒みがかった水色に近いものだ。

老いて痩せこけた身体を深く折り曲げ、アルトーワ伯は一礼した。

「これはこれはイザベラさま、ようこそグノープルの街へ。われら一同、殿下の行幸を今か今かと、首を長くしてお待ちしておりました」

リュティスに比べましたら、田舎町で何もございませんが、どうかごゆっくりおくつろぎくださいませ。人品の良さそうな笑顔で、

そう挨拶してきたアルトーワ伯爵の声は、しかしタバサの耳には届いていなかった。いや、正確に言うならば……完全に通り抜けてしまっていた。

タバサの心の中では、つい先ほど馬車の中で聞いたイザベラの声が、ぐるぐると渦を巻いていた。

「昨日のことは、西百合の騎士たちから聞いたよ。どうだい、おちおち眠れやしないだろう？　わたしはね、ずっとあんな恐怖に耐え続けているの。いつ家来たちに寝首を掻かれるか、ってね。ま、外国でのんびり学院生活を送っているあんたには、わたしの気持ちなんか……絶対にわからないだろうけどさ！」

いつもの哄笑ではなく、やや影のある乾いた笑みを浮かべながらそう言い放った従姉妹姫の姿は、タバサの脳裏に深く焼き付いた。歓迎の宴も、翌日の園遊会で披露された華麗なダンスも、タバサの心を晴らしてはくれなかった。

それから、小旅行が終了するまで――タバサが刺客に襲われることはなかった。

○●○●○●○●

――リュティスへの帰還後。プチ・トロワ宮殿内にて。

イザベラは、ご機嫌であった。その理由たる者が、己の手の内にあったからだ。

『さすがだね『地下水』。よくぞあそこまで、あの子を追い詰め

てくれたわ』

『恐悦至極に存じます』

イザベラの懐中には、あの侍女ナタリーが握り、ジェイクという名の騎士が自分のポケットに放り込んでいたはずの『短剣』が収められていた。彼女は、なんとその短剣と、心の中で会話をしているのだ。

傭兵『地下水』。ガリアの『裏』で、凄腕の＜水＞メイジとして広く名の通った存在だが、その実体は完全に謎に包まれていた。地下に湧き出る水のように、じわりと現れ、音もなく流れ、静かに目的を果たして消えてゆく。性別はおろか年齢も、その姿も一切わからないとされている、凄腕の暗殺者。

『地下水』について、ただひとつわかっていることは――狙われたら最後、絶対に逃げることができないということであった。

そんな『地下水』の正体が、表に出なかった理由は簡単だ。彼は人間ではなく、短剣に込められた＜意志＞であったからだ。手にした者の意志を奪い、意のままに操る能力を持つ＜インテリジェンス・ナイフ＞。それが、ガリアの裏世界で広く畏れられる、暗殺者の正体であった。

『それにしても、襲いかかるのが一度きりでよいとは。てっきり、何度も恐怖を味わわせるものとばかり思っておりましたが』

『そうしたいのはやまやまだったんだけどさ、あの子の側に、とんでもないのが付いてるものだから、迂闊に手を出しづらいのよ』

『ひょっとして、あのガキのことですかい？』

『それは秘密ということにしておくわ。そうそう、今回の報酬は、いつも通りシレ銀行の口座に入れておくわね』

『へへっ、毎度ありがとうございます。こういう変わった仕事は大歓迎です、退屈しのぎになりますからね。いつまでも、お得意様でいてくださいよ』

『もちろんよ。あたしはね、信用の置ける部下は大切にする主義なの』

と……そこへ、ひとりの侍女が現れた。イザベラが呼び出していたのだ――『地下水』を握らせるために。だが、その侍女はとんでもないものを持っていた。

「イザベラさま。実は……先程お帰りになられた、ミスタ・タイコーボーから伝言を頂戴したのですが」

あの男から伝言？　イザベラの心は浮き立った。襲撃を表沙汰にすると、王家の威信に傷が付いてしまうというもっともらしい理由をつける必要があったため、王女の命を救ったという、本来勲章ものである働きに対し、金貨しか与えられなかったイザベラであったが――それでも、太公望と東花壇騎士団の副団長に、それぞれ５００エキューという大金を渡した彼女は、感謝されてしかるべきであった。

ひょっとすると、シャルロットから乗り換えたい……なんて申し出だったりして。そんな期待を胸に抱いたイザベラであったが、しかし、伝言の中身はというと――彼女が心待ちにしていたものなど

ではなかった。

「その……『窓が大層お気に召したようで、なによりです』だ、そうです」

侍女に『地下水』を握らせた後、足をふらつかせながら自室へと戻ったイザベラは、王天君に声を掛けると、彼の『部屋』にある長椅子の上に、ばたりと倒れ込んだ。

「嘘よぉ……なんでバレたの!?　あの作戦の、どこがいけなかったのよぉ!?」

太公望に、自分の存在を気取られることを警戒し、イザベラたちを一切『窓』で監視していなかった王天君は、作戦内容の詳細を彼女から聞いた上で、こう返した。

「イザベラよぉ。オメー、ちぃとばかしオレの『色』を出しすぎたみてぇだな。せめて襲撃2回なら、まぁだ引っ張れたかもしれねぇんだがな」

「も、もしかして、警戒しすぎたってこと!?」

「あァ、そうだ。襲わせる場所の選択は悪くなかった。太公望をあの女から引き離しておいたところまでも、まァよかったと思うぜ。わざわざ怪しい状況で、あいつに手を出させることになったってのも、ある程度想定してた事なんだろ？　実際、もうちっとでふたりとも追い込めたわけだしな」

アルヌルフとかいう騎士が、その場に居合わせなければ。そう王天君から指摘され、イザベラはぐっと詰まった。

「そうね、わたしとしたことが本当に迂闊だったわ。あなたの『弟』と組む人間まで、ちゃんとこっちで指定しておくべきだったのにぃ～！」

懐から取り出した絹のハンカチを、ギリギリと噛みしめながらイザベラは悔やんだ。

うまくいけば、任務失敗の罰を生意気な従姉妹姫に与えることも、状況次第では、影武者を立てていたことを知らぬ騎士やお付きの者たちに、彼は自分の命を救ってくれたのだからと言い添えて、王天君の弟を『王女のお気に入り』とし、奪い取ることすらできたかもしれないのに、と。

「平民に魔法使わせたのも失敗だったな。せめて騎士に持たせてからヤるべきだったんじゃねーかァ？　そのせいで、あいつに『道具』の存在を疑われたんだ」

ニイッ……と、不気味な笑みを浮かべながら、王天君は続けた。

「とどめに、さんざんあの人形姫を脅した後で、イイコちゃんな太公望の同情引くような台詞吐いた挙げ句、たった1回しか襲撃を起こさなかった。実にオレ好みな、効果的で、しかも手のかからねェ精神的追い込みだぜ。こんだけの状況が重なれば、あいつなら当然、オレの影に辿り着くわな」

「ううッ……わたし、まだまだ詰めが甘いわぁ～」

もともと、ある程度の目星はつけてたんだろうが。そう思った王天君であったが、それはあえて言わないでおくことにした。こうい

うところは『母親』そっくりである。

「今回のことや、あなたのことは、もう……あの子に全部バラされちゃったかしら」

「さァ、そいつはどうかな。見てみるか？」

そう言って、王天君が新たに開いた『窓』には、風竜の背に跨り、トリステイン魔法学院への帰路についた太公望とタバサの姿が映し出された。

風竜の手綱を握っているのは、太公望であった。タバサは前方に座っている。そして彼女は太公望にもたれかかるようにして、こっくりこっくりと船を漕いでいた。

「まったく！　どこかにいる誰かのせいで、この一週間ろくに眠れなかったようだからのう。せめて帰り道くらい、ゆっくりさせてやってもよいのではないかとわしは思うのだが……どうだ？」

そうぽつりと呟いた太公望は、その言葉とは裏腹に――黒い気配を全身に纏い、嗤っていた。完璧に気付かれている。口から覗く鋭い八重歯は、まるで牙のようだ。そんな彼の貌を見、声を聞いたイザベラは、やっぱり王天君と彼は正真正銘、本物の兄弟なんだわ……と、改めて実感し、顔全体を引き攣らせた。

だが、イザベラは……後に続いた言葉に、思わず目を見開いた。

「見事にしてやられたわ。まあ、今回の件は黙っておくことにする。代わりといってはなんだが、わしは次の機会に是非『話し合い』の機会を持ちたいと考えておる」

その言葉を最後に『窓』が音を立てて割れた。

「ったく、相変わらず大人げねぇなァ、太公望ちゃんはよぉ。フツー『太極図』まで使うかァ!?　この程度の場面で」

「な、何？　今のは何なのッ、オーテンクン!?」

「これ以上覗くなっていう、アイツなりの警告だ。で、どーすんだ？」

王天君の問いに、イザベラはごくりと唾を飲み込んだ。

――ちょうどそのころ、東薔薇警護騎士団の詰め所では。アルヌルフのおごりで飲みに繰り出そうという提案が、本人を含めた全員一致で可決されていた。

実は、暗殺者に襲われたのがシャルロット姫であったこと。

姫君を窮地から救ったアルヌルフは、騎士団の誉れ高き英雄であるということ。

この事実だけで、飲みに行く理由としては充分である。勇ましくそう宣言したカステルモール団長の声に、騎士団の者たちは賛同し――副団長は、思わず苦笑した。

「例の子供も、噂に聞いていたような礼儀知らずではなかったしな」

「そういえば副団長殿は、リョボーの腕前を見たんですよね？」

彼は、どの程度のメイジだったのですか？　好奇心も顕わに尋ねてきた団員たちに、アルヌルフは苦笑しながら答えた。

「いや、残念ながら私は見ていないのだよ。とにかく急いで反対側から回り込まねばならない状況だったしな。だが、あの思い切りのよさは買いであるな」

それは残念。そのうちまた機会があるだろう。いや、下手にあっても困るのだが。そんなことを言い合いながら、騎士たちは詰め所を出て行った。

アルヌルフは、別に手柄を独り占めしようとしたわけではない。彼は、あのとき吹き抜けてゆく＜風＞を見た。しかし、それは――まだ周囲に明かしてはならないものだと、長年の経験から判断したのだ。

あの少年は、やがて姫君にとって大きな＜力＞となりうる存在だ。なればこそ、今は側についていてもらったほうがよい。もしも、かの少年が持つ力量が、周囲に知れ渡ってしまったら……最悪の場合、王家の手によって排除されかねない。足手まといにしかならぬどっちつかずの馬鹿貴族どもが、またぞろ戻ってくる可能性もある。

――この東薔薇花壇警護騎士団を、シャルロット姫殿下が最も望むことのために動く存在にしなければならない。それが私の役目だ。初老の騎士は、その誓いを胸に秘め、ゆっくりと詰め所を後にした。

第８４話　古兵と鏡姫と暗殺者（後書き）

パワーランチってひとを選ぶけど、有効な手段でもありますよね。社会人になりたてのころは、ビビリまくっていたものですが！　未だに緊張しますが！！

さあ、ついに王天君がどっちについているか、太公望にバレてしまいました！　どうするイザベラさま！　ある意味絶対絶命のピンチだ！？　でも、剥かれなかっただけ良かったか！？

そして、今回登場したアルヌルフさんですが。西百合騎士団の老騎士さんではありません。東薔薇騎士団に所属している、古強者です。原作ではほんのチョイ役でしたが、無理矢理表舞台に出て頂きました。カステルモール無双を期待していたかたには誠に申し訳ございません。が！　筆者の力量では、現時点ではどうにも彼をうまく動かすことができなかったのです……間違ってもマイナス方面に堕とすような真似はしたくありませんでしたし。充分落ちてるって？　ごめんなさい。

と、いうわけで東薔薇騎士団の参謀役にして軍曹であり執事でもある彼に出てきていただきました。アルヌルフさんがいったいどこに出てくるか知っているひとは、正真正銘の原作通です。他の騎士団と連携をとるために、カステルモールの裏で動いてたり、滅茶苦茶慎重だったり……実に自分好みでよさげなキャラなんだけどなあ、彼。勿体ない。

最後に、原作エピソードは「タバサと暗殺者」でした。筆者が無理矢理同じ場面を再現しようとした結果、こうなりました。地下水さんが初っぱなから単なる脅しではなくマジモードで行った結果ホラ

ー気味になってしまい、タバサには誠に申し訳なく。ということで今回は〆させていただきます。

２０１１／０８／０８　２２：２０　誤字脱字修正、本文加筆修正

第８５話　策謀家、過去を顧みて鎮めるの事

――イザベラは、幼い頃そうしていたように、無意識に親指の爪を噛んでいた。

「悔しいけど、オーテンクンの言う通りだったわ。まだ早すぎたみたいね……」

途中までは、たしかに上手くいっていたのだ。ここ最近、自分の手の者を使って引き起こしていた自作自演の爆破予告や襲撃事件は、完全に新教徒や王家に不満を持つ者の仕業であるという『偽りの確証』を、北以外の花壇警護騎士団のみならず、一般の民たちにまで持たせることに成功していた。王都リュティスに住まう民たちの間で、まことしやかに流されている噂話が、それを証明している。

その背景を元に、いかにもイザベラ自身が『襲撃』を畏れているように見せかけ、ごく自然に従姉妹であるシャルロットを影武者として仕立て上げることもできた。

『地下水』と、信用の置ける自分の手駒を利用して偽の暗殺未遂事件を起こし、本来＜水＞を最も得意とする暗殺者に、あえて＜風＞を主体とした戦法をとらせることによって、魔法の巧さを鼻に掛けた小生意気な人形娘の自信を、根底から打ち砕いてやれた。

残念ながら『任務失敗』まで状況を持っていくことはできなかったが、その代わりに王天君の『弟』を、自分の陣営へ引っ張り込むための布石は打てた。イザベラは、そう感じていた。

ところが、今回の『策』最大の対象者たる相手は、ごくごくわず

かな綻びから自分の兄・王天君の影に辿り着いたばかりか、王女襲撃事件そのものがイザベラの自作自演であると看破してしまったらしい。

おまけに、わざわざ向こうから『話し合い』こそ持ちかけてきてくれたものの、相当怒っているように見えた。王天君の『窓』が音を立てて割れたとき、イザベラがそれまで持っていた自信も一緒に、粉々に砕け散った。

「彼の前で、シャルロットをいじめすぎたのがまずかったのかしら……計画は完璧だったはずなのに、どうしてこんなことになっちゃったの!?　そもそもわたしは、あなたの弟と敵対するつもりなんか、これっぽっちもなかったのよぉ！」

そう王天君に向かって叫んだイザベラの胸は、暗澹たる思いでいっぱいになっていた。

――イザベラには、昔から『敵』が多かった。

地方都市へと向かう馬車の中で彼女が語った、

「自分を狙う刺客の存在に毎日怯えて過ごし、ろくに眠ることもできない」

という話は、実は周囲の者から同情を買うつもりで吐いた台詞などではなく――彼女の内で澱のように沈殿していた、心からの本音を吐露したに過ぎない。もっとも、これには『王天君や地下水が側にいてくれなければ』という但し書きがついてくるのだが。

実際に、イザベラ王女の命を狙う者は大勢いる。現国王ジョゼフ一世は、まだ４０を少し越えた程度の若い王だ。しかし彼にはイザベラしか子供がおらず、王妃も既に流行病で世を去っている。よって、イザベラが夭逝することで多くの者に好機が訪れるからだ。

たとえば、現在ジョゼフが囲っている愛人たちがそうだ。今はまだ子を為すまでには至っていないが、もしも彼女たちに子供ができたとしたら……ガリア王国の王位継承権第１位を持つイザベラは、当然の如く目の上のタンコブとなるだろう。

そして、その規模こそかつての状態と比較して大幅に縮小したものの、未だ亡き大公シャルルに忠誠を誓う『シャルル派』と呼ばれる貴族たちも、時折イザベラに『刺客』を放ってくる厄介な存在だ。

未だ『正統な王権』だの『正義』がどうこう言っている者たちが大勢いることは確かなのだが、それでも。この後に及んでも、なおシャルル派にしがみついている者たちのほどんどが、かつて担ぐべき者を間違えたばかりに、現在は不遇をかこつ、落ちぶれ貴族たちで構成されているのは間違えようのない事実だ。

もしもイザベラがいなくなれば、彼らはシャルルの遺児であるシャルロット姫を『御輿』として担ぎ上げ、彼女に王位継承権を与えるべく、策動を始めることができる。

また、現王家を打倒するために大勢の兵を雇うよりも、数名の暗殺者を『王』または『後継者』の元へ送り込んで始末させたほうが、遙かに安上がりであるし――なによりその功績によって『御輿』の覚えを良くすれば、後々美味しい思いができるなどと考えるのは、時勢の読めない二～三流の策謀家ならば、ある意味当然であろう。

今はイザベラの配下となっている『地下水』も、数年前までは――そんな、身の丈に合わぬ大それた野望を持つ貴族に雇われた、暗殺者のひとりであった。

傭兵『地下水』は、変わった性質を持つ暗殺者だ。暗殺や雇われの傭兵といった仕事を『単なる暇つぶし』として捉えていることもそうだが――それ以上に、他の刺客とは決定的に違う点があった。理由はよくわからないが、名誉よりもカネを。報酬よりも楽しく過ごせる時間、つまり『面白い仕事』を欲する傾向が強かった。

そんな暗殺者に、あるときひとつの依頼が来た。それが王女イザベラの抹殺だった。とても面白そうな仕事だったので、『地下水』は迷わず仕事を引き受けた。

いつも通りの手順で王宮内部へと潜入し、多くの者たちが寝静まった夜半過ぎに、たったひとりでイザベラの部屋を訪れた『地下水』の手には、1本の短剣と――紅く透き通った液体が、なみなみと注がれたティーカップがあった。

いっぽう、狙われたイザベラのほうはというと。暗殺者と思しき相手から、湯気の立つ『茶』をすっと差し出されたとき。ふいに、とある噂話に思い当たった。そして、それを利用してこの場を切り抜けられないか――そう考えた。

ティーカップを受け取ったイザベラは、精一杯の微笑みを浮かべて言った。

「お前――『地下水』だね？」

暗殺者は、にっこりと微笑んだ。

「これはこれは、よくご存じで」

イザベラは、受け取った茶の香りをかいだ。＜水＞メイジである彼女には、それだけで茶に含まれた成分について、おおよその検討がついた。

「強い睡眠薬が入れてあるんだね。けれど、何故こんな回りくどい真似をするの？」

「高貴なおかたの末期の顔を、苦痛で歪ませるというのは、私の主義に反しますので」

馬鹿丁寧に一礼した『地下水』を前にして、イザベラは心の奥底にどっしりと根付いた恐怖を、必死の思いで押さえつけていた。

彼女が刺客に狙われたのは、これが初めてではない。しかし、ここまで接近された経験はなかった。でも、宮廷雀たちの噂――この『女』が、面白い仕事を優先して受ける暗殺者だという話が本当ならば、まだ切り抜けられる可能性がある。そのためにも、怖がっていることを悟らせてはならない。イザベラは、文字通り必死に頭を回転させた。

「なるほど、よくわかったわ。お前のことは、もちろん知っている。普段、どんな仕事を請け負っているのかもね。わざわざ訪ねて来てくれるだなんて、嬉しいわ。一度でいいから、直接会って話をしてみたかったんだよ」

『地下水』は――侍女の姿をした暗殺者は、イザベラの言葉に目を丸くした。

「なんともはや、まさか一国の王女さまからそのようなお言葉を頂戴するとは、光栄でございます。で……姫君御自ら『お話』とは、いったいどんな内容でございますか？」

「普段は自由に動いてくれていて構わない。依頼を受けたときだけ、わたしの部下として働く気はないかい？　もちろん、相応の金は出すよ」

『地下水』は考えた。派閥争いに敗れてもなお無駄な暗躍を続けようとする、先の読めない三流貴族と――命の危機に瀕した際に、なんと自分を狙う暗殺者に対して、微笑みを浮かべながら『雇用契約交渉』を持ちかけるほどの余裕を見せた、実に度胸のある王女。どちらを正式な『雇い主』とすれば、より楽しい時間を過ごすことができるだろうかと。

「なかなか興味深いお申し出でございますね、大変結構です。それでは、イザベラさま。よろしければ具体的な報酬と契約内容について、詳しいお話を伺いたく存じます」

提示された条件は『地下水』にとって十二分に満足のいくものだった。よって、彼は以後イザベラの命があったときだけ動く『懐刀』となることを承諾した。

もちろんその前に、かつての雇い主の頭に『元』をつける必要があったが、そんなことは凄腕の暗殺者たる『地下水』にとって、赤子の手を捻るよりも簡単なことであった。

こうして。文字通り命がけの『交渉』を見事成功させたイザベラは、以後ガリア最凶の暗殺者から狙われる確率を大幅に下げること

ができた。状況次第では、刺客に反撃を加えることすらできるようになった。

そして、イザベラが『地下水』を自分の配下としてから……数ヶ月後。

何度も官職への就任願いを出していたイザベラの希望が、ついに通った。しかし、それは彼女が望んでいたような、華やかなものなどではなかった。なんと、国の裏仕事――つまり汚れ役の長である『北花壇警護騎士団』の団長就任を命じられたのだ。

当然のことながら、イザベラは荒れた。

「どうして？　なんでわたしがこんな裏仕事をしなければならないのよ！　わたしは魔法が下手だから、表舞台に出すわけにはいかないって言いたいわけ！？」

彼女は怒り狂い、地団駄を踏んで悔しがった。そして、メイジとしての才能に溢れ、多くの者たちに愛され、その境遇に対して同情され続けている従姉妹姫・シャルロットへの憎しみと妬みが、よりいっそう募っていった。

『北』の支配者になったのをいいことに、イザベラは以前にも増して無理難題を従姉妹姫に対して押しつけるようになった。だが、憎い相手はいつも無表情で、何をしても人形のように自分を見返してくるばかり。それがまた、イザベラを激しく苛立たせた。

○●○●○●○●

――それから数年後。イザベラにとって、まさしく『運命』の日が訪れた。

無様な失敗をした従姉妹姫を嘲笑ってやろう。その程度の軽い気持ちで唱えた＜サモン・サーヴァント＞が、イザベラに比類なき『パートナー』をもたらしてくれたのだ。

突如現れた『光の道』によって、誘拐同然に連れ去られた『弟』を探すために、自分の召喚に応えてくれたという彼――王天君は、本当に素晴らしかった。持っている＜力＞もそうだが、何よりも彼が持つ考え方が、イザベラに強烈な衝撃を与えた。

それは、ハルケギニアの常識では考えられない価値観。

「魔法なんてなァ、所詮ただの『道具』だ。物事を達成するためのひとつの手段に過ぎねェ。そんなモンの上手下手なんぞにいちいち拘るのは、おつむの弱い馬鹿のやることだからやめときな。わたしは魔法の腕でしか人間の価値を計る方法を知りません、って書かれた看板を、首からぶら下げてるようなモンだぜ？」

神の御技たる魔法を『ただの道具』と言い切った王天君自身が、己が持つ強大な＜力＞を、つまみぐいや覗き見などといった『単なる暇つぶし』に使う姿は、それまで頑強なまでに凝り固まっていたイザベラの＜魔法＞に対する思考を解きほぐすには充分であった。宮廷の内外にいる貴族たちを見る目も、それと同時に少しずつ変わっていった。

やがてイザベラは、自分を＜魔法＞でしか計れない者とそうでない者を、完全にではないが見分けられるようになった。これは、彼女にとっても、配下である『北花壇警護騎士団』に所属する多くの

者たちにとっても、非常に良い変化であった。

彼らはもともと、汚れ仕事を引き受ける『闇の騎士』だ。よって、相手を色眼鏡で見ることは、最悪の場合死に繋がるということを充分承知している者が多く集まっていた。そのため、彼ら北花壇騎士団に所属する騎士たちのほとんどが、イザベラの持つ手腕と、与えられる報酬のみで彼女を評価していた。

その事実に気付けたイザベラは、より良い仕事をする者に対し、厚く報いることで応えるようになった。その結果、裏側の騎士たちの忠誠が、国ではなくイザベラ個人に対して大きく傾いていったのは、ある意味当然の流れであろう。

こうして、未来の女王は――自分に忠実な下僕たちを手に入れることに成功した。

ふいに襲いかかってくる刺客に関しても、常に見張りをしてくれる王天君のお陰で、完璧に躱せるようになったし――なにより彼の『窓』のお陰で、任務に失敗し、逃げ戻る刺客の追跡も容易になった。イザベラは、王天君の到来によって、はじめて心からの安寧を得ることができたのだ。

もちろん、刺客を送り込んできた者に対する反撃には『地下水』を使った。ガリアの裏にその名を轟かせる暗殺者は、以前にも増して楽しい仕事を割り振ってくれるようになった『お得意様』に、大きな期待を寄せるようになり――ついには、自分の『正体』を明かすほどの信頼関係を築くに至った。

王天君ほどの者を召喚できたという事実も、イザベラにとって大きな自信となった。

「こんなに素晴らしい『パートナー』を呼び出すことができたわたしに、魔法の才能が全くないわけがないじゃないか！」

自信は、時として固い殻を打ち破るための＜力＞となる。それまで＜水＞系統のメイジとして『ドット』スペルしか唱えることが叶わなかったイザベラは、いつしか『ライン』に昇格し――ついには、かの禁呪＜制約＞を扱えるほどにまで成長していた。

しかし、イザベラにとって――そんなことは、もはやどうでもいいことに変化しつつあった。何故なら、彼女にとって、もう＜魔法＞は絶対のものではなくなっていたから。

そう考え、改めて周囲を見渡してみたイザベラは、遂に知るに至った。『無能王』と国内外で蔑まれる自分の父親が、為政者としてどれほど優れた手腕を持っていたのかを。

過去の歴史を鑑みても、現在ほどガリア王国が繁栄した時代はない。ジョゼフ一世が即位してからというもの、魔法だけではなく、それ以外の技術分野も、経済的な面でも飛躍的な進歩を遂げている。

たとえば『測量』だ。国防上だけではなく、政を正しく行う上で重要となる『正確な地図』を作製するための技術が、メイジたちの間だけではなく、国から支援を受けた平民の技術者によって確立されつつあった。それを元に行ったラグドリアン湖の干拓事業は、現在は王家の直轄領となっている旧オルレアン公領を、公が運営していた当時よりも、遙かに実り豊かな土地へと変えていた。

さらに、サハラとの国境にある都市アーハンブラを、対エルフ用の城塞都市ではなく、東方諸国との貿易中継都市として再整備した

結果、珍しい茶葉や置物をはじめとした貴重な交易品が、ガリア国内だけではなく、ハルケギニアの他の国にまで届くようになった。彼ら交易商人たちの動きで、それまで停滞気味であったガリア国内の経済は、まるで水と肥やしを与えられた草木のように、ぐいぐいと伸びを見せ始めた。

そして『ガリア王国両用艦隊（パイラテラル・フロッテ）』の存在。

普段は軍港サン・マロン近郊の海上でその偉容を見せつけている戦列艦の全てに＜風石＞が積み込まれており、帆を空用のものに張り替えれば、即座に空軍艦に早変わりするという、最新鋭の造船技術が投入されている。今でこそアルビオン王国の持つ空軍に『世界最強』の名が冠せられているが、早ければ半年――遅くとも1年後には、国内外の評価は完全に塗り変わるであろう。

これら新型戦艦の大量建造計画が持ち上がったのは、ジョゼフの即位後である。そして、まもなく『最強』となる艦隊を揃えたにも関わらず、軍事費の大幅増加に伴う税率の上昇などは一切なかった。

国が発注した大量の戦艦建造を契機に、造船業をはじめとした魔法技術産業の発展と、それらが生み出す人と金の流れに勢いがつき、軍事関連施設を置く都市近辺は、かつてない好景気によって大いに潤い、先に述べた東方交易とこれらが合わさった結果――商家や直轄領から入る税収が大幅に増え、国庫には多くの蓄えができていたからだ。そんな状態で、わざわざ税金を上げ、民の感情を逆撫でする必要などないというわけだ。

――魔法ができない『無能王』は、それ以外の＜力＞を使って国を大きく発展させている。かの王は、まさしく国の＜支柱＞たる存在だ。

それを脇から支える『ジョゼフ派』の貴族たちも、王の魔法については関心を払っていない。ただ彼の腕たらんとして、精力的に働いている。そう、彼らはジョゼフが即位する前から、ちゃんとわかっていたのだ。

「国王として立つ者に求められるものは、魔法の腕などではない」

……と。ガリアの国王は、そんな『見る目』を持った貴族たちに囲まれている。そして、彼らを上手く使うことで、国を運営していたのだ。イザベラは父王に被せられた『無能』という名の仮面の下に隠されていた素顔を知った時、驚愕のあまり打ち震えた。

そんな王が、国の『裏側』を自分に任せた。これはいったいどういうことなのか。

表沙汰にできない、国にとって都合の悪い『仕事』が多く持ち込まれる『北花壇警護騎士団』を取り仕切らせるということは、文字通り自分の背後を任せる――それも、国を背負う重鎮のひとりとして扱っているに等しい。

つまり、ジョゼフ王は自分の娘・イザベラの持つ『才能』を正しく見出していたのだ。おそらくは『地下水』の一件からそれを判断したのだろうジョゼフ王は、間違いなく『国の裏側』にまで届く『手』を持つ、優れた政治家であった。

それに気が付いたとき。イザベラは、人知れず涙を流した。

イザベラには、父王ジョゼフと触れ合った記憶がほとんどない。皇太子の娘としての教育を受けていた彼女は、父親と共に過ごす機

会を、ほとんど持たせてもらえなかった。幼い頃は、そのことで幾度も寂しいと泣いた。しかし母親や家臣たちから、逆に『王女たるもの、そんな軟弱なことではいけません』などと窘められ、親子としての交流を、ほぼ遮られてしまっていたのだ。

にも関わらず、父は自分の弟の家を訪問する際には、大量の菓子やおもちゃを持って行くという。まだ子供だった頃に、一緒に遊んでいた従姉妹姫シャルロットの口からそれを聞いたイザベラは――それ以降、彼女と距離を置くようになった。

このときイザベラの内部に生じた小さな憎悪こそが、後に従姉妹姫が持つ魔法の才能への嫉妬と複雑に絡み合い――現在に至るまで続く、憎しみの原点なのである。

イザベラは、そんな子供の頃から鬱積してきた数々の想いや『裏方』に回されたことで、父親を少なからず恨み、人知れず悩んでいた。

「父上……あなたは反逆者の妻と娘に、生命を助けるなどというこれ以上ない程の愛情を与えておきながら、何故それをたったひとりしかいない娘に対して、向けてくれないのですか？　わたしは、実の父親にすら嫌われ、疎まれる存在だというの？」

かつて、まだ王天君と出逢う以前。誰もいない広々とした自室の中で、そんなことを呟きながら、ひとり悔し涙を流すこともしばしばであったイザベラは、だからこそ泣いた。

そこに親子としての愛は存在しないのかもしれない。だが、少なくとも父は――娘を＜魔法＞という名の色眼鏡を一切通さず、ただひとりの『人間』として見てくれていた。

そして、自分の背中を任せても大丈夫だと信用してくれたから、わざわざこの仕事を寄越したのだと悟ったイザベラは、父の期待に応えようと思った。自分を信じて任された仕事に対し、本気で向き合う気になった。

それを素直に自分のパートナーへ告げたところ、以後王天君は――それまでの『見張り役』『話し相手』としてだけではなく、イザベラの行動に対して時折助言をくれるようになった。ただし、それは直接的なアドバイスではなく、やや迂遠なものではあったが。

たとえば、それは人間の心の弱さを見抜き、そこを効果的に突く手法。

影から他者を操り、望み通りのことをさせるための上手いやりかた。

そういった王天君の持つ『技術』は、もともと『裏』仕事をするための素養が高かったイザベラを、大きく成長させた。

その結果、時折助言を受けつつではあったが――わずか2ヶ月で、国内の不穏分子を抑えるための自作自演による襲撃事件を考え出した上で立案し、さらには父王から、

「余が口を挟む必要を感じない。おまえの良きに計らえ」

という、笑顔の『お墨付き』まで貰い、最高責任者として計画を実行するまでに至った。しかも、芋づる式に新教徒の裏組織や、近年不穏な動きを見せていた、一部過激派の隠れ家を押さえることにまで成功するという、素晴らしい結果までついてきた。

イザベラは、得意の絶頂にあった。わたしの『策』は、政治家として凄い＜力＞を持つ父上から正式に認められた。しかも、あんな笑顔を見せてくれたのは初めてだったと喜んだ。わたしと同じ歳の娘で、これほどのことができる者が他にいるものかと高笑いした。

そんな時だ。イザベラが、とあることを思いついたのは。

「ねえオーテンクン、あなたの『弟』を、シャルロットから奪い取れないかしらッ。もちろん、あなたみたいに気が向いた時でいいから、わたしの仕事を手伝ってもらえると嬉しいんだけど……どう思う？」

だが、てっきり諸手を挙げて賛成してくれるとばかり思っていたパートナーは、なんと爆笑でもってその案に応えた。王天君は、げらげらと大笑いしながらこう言った。

「あいつに仕事をさせるのは骨だから、やめときな。今のままでも充分だろ？」

次いで、王天君はとんでもないことをさらりと口にした。

「前に言ったと思うが……オレは『裏』。あいつは『表』で仕事をしてたんだ。少なくとも、このオレを言いくるめることができるくらいでなきゃあ、太公望に何か仕掛けるのは無謀ってモンだぜ」

王天君は、基本的にイザベラのほうから聞かない限り、昔のことを語ろうとはしない。言いたくない何かがあるのだろう――そう考えていたイザベラは、これまで彼ら兄弟が何をしてきたのかについて、詳しく尋ねたりはしなかった。王天君のほうも、イザベラの過

去をわざわざほじくり出すような真似はしなかった。いつしかそれが、ふたりの間で暗黙のルールのようになっていた。

よって、イザベラは王天君や彼の『弟』が、このハルケギニアに召喚されるまでの間、いったい何をしていたのか、どんな仕事をしていたのか、全くといっていい程知らなかった。せいぜい、ふたりで旅をしていたことくらいしか聞いていない。

だからこそ、王天君の言葉に興味を持った。

「ねえ、オーテンクン。あなたたち兄弟は、いったいどんな仕事をしていたの？」

珍しく自分たちの過去を問うてきたイザベラに、王天君は口端を上げた。

「でけェ計画（プロジェクト）に関わってた。もっとも、オレたちにとっちゃいい迷惑だったんだがな、あの仕事はよォ」

イザベラは、驚きのあまり思わず目をしばたたかせた。何らかの計画に携わるには、それ相応の実力がなければ不可能だ。王天君の能力については、疑うべくもない。『窓』を含む情報収集だけでなく、イザベラ自身に伝授された『技術』からも、それは伺える。

では、彼の『弟』はどうなのだろうかとイザベラは考えた。少なくとも、魔法の＜力＞が強いのは確かだ。それは、ラグドリアン湖近隣の森をひとつ、たったの一瞬で消し飛ばしてしまったことが証明している。しかも、その気になれば1時間以内にリュティスを更地に変えることすら可能らしい。

だが、その本質はイイコちゃん。争いごとが大嫌いで、少なくとも、人間の戦争に進んで干渉したりはしないだろうとも聞いている。そんな人物が『表』でしていた仕事とは、いったいなんだろう。兄弟一緒に、揃って世界各地を巡っていたらしいのだが……イザベラは、ふと思いついた、それらしき『職業』について口にしてみた。

「あなたたちって、ひょっとして『情報斥候』だったの？」

「似たようなコトはよくしてたっけなァ。少なくとも、盗みの腕は保障するぜ」

くつくつと嗤いながら答える王天君に、イザベラは絶句した。そして、とんでもないことに気が付いた。もしや、東方諸国を渡り歩いていたという彼らは『機密情報』を盗む専門家だったのではないだろうか。それならば、ふたりの役割分担にも頷ける。

弟が愛嬌のある態度を周囲に振りまきながら、ごくごく自然に目的地へと忍び込み、そこを起点に兄が『窓』を開ける。なるほど、これは素晴らしい『泥棒』たりえる。しかも、弟は凶悪な＜風＞の使い手だ。たとえ単独潜入に失敗したとしても、ただ逃げるだけではなく、戦って切り抜けることすら可能だろう。性格的に、後者はそうそう選ばないであろうが。

これまでは、王天君の『弟』に対し、とてつもない＜風＞の使い手であり、ただ存在するだけで従姉妹姫シャルロットの味方を減らしてくれるという程度の評価しかしてこなかったイザベラは、俄然彼が手元に欲しくなった。

「ふぅん……腕のいい泥棒ねェ。すっごく興味深いわ！　ねえオーテンクン。あなたの『弟』は、ガリアの裏を支配するわたしの側

にいるほうが、本来の能力を活かせるとは思わなくって？」

「オレは、やめといたほうがいいと思うんだがなァ。ま、どーしてもオメーがやってみたいっつーなら止めねぇが」

王天君からそう忠告を受けたものの、自信に満ちあふれていたイザベラは、そこで立ち止まろうとはしなかった。優秀な暗殺者と、有能な泥棒を手元に置くことができたなら、自分の仕事がさらにやりやすくなる、そう考えたから。

そうなれば……もっと父上に喜んでもらえるかもしれない。父上が、わたしをもっと認めてくれるかもしれない。イザベラは頑なまでにそう信じた。他者……特に父親からの愛情に、心の底から飢えていたが故に。

とはいえ『弟』の有能ぶりを表沙汰にするわけにはいかない。それをしてしまうと、最悪の場合、彼の『功績』によって大幅に勢力を減らした『シャルル派』が、再び息を吹き返してしまうという危険性がある。

そう考え、計画・実行した『策』が、件の『王女暗殺未遂事件』（自作自演）だったわけだが――結果はご覧の通りである。

イザベラは困り果てた。彼女は、念のため『失敗』した時のこともある程度考えて行動し、準備を進めていた。だが、もしも『策』が露見し、相手……従姉妹姫ではなく王天君の弟を本気で怒らせてしまった場合どうなるか。そこまでは計算に入れていなかった。

魚を傷付けることすら嫌がり、鉤なしの針で釣りをするような優男。怒り狂って巨大な竜巻を発生させたのは、あくまで『薬』のせ

いでおかしくなっていたからだ。そう信じ切っていたイザベラは、彼が纏っていた黒い気配を思い起こし、背筋が凍り付いた。

「ううッ……こんな……どうしたらいいのよぅ……」

親指の爪を噛み締め、必死に解決策を考えだそうとしたが、うまく頭が回らない。初めて地下水と相対したときに感じたものと同等か、それ以上の恐怖がイザベラの心を押し潰そうとしていた、そのとき。横から、ふーっというため息が聞こえた。

「ったくしゃーねぇなァ。オレがナシ付けてきてやるよ」

「えっ！？」

イザベラは驚いた。彼女は、当初からこの計画に反対していた王天君が、まさか援助を申し出てくれるとは思ってもみなかったのだ。

「た、助けて、くれるの……？　わたし、あなたの忠告を無視したのに……？」

「オメーには色々と世話になってるしな。あーあ、オレも甘くなったもんだぜ……コレもあいつの影響ってやつかねぇ」

頭を掻きながら立ち上がり、大きな『窓』を作った王天君が、その中へと消えていく姿を――イザベラは、ただ見送ることしかできなかった。

○●○●○●○●

――王天君は、太公望の元へ繋がる『道』を辿りながら、思いを巡らせた。

「ハハ……ハ……ハハッ、太公望のやつ、マジで怒ってやがったぜ！　そりゃあそうだよなァ、いくらイザベラに才能があるっつっても、まだ１８にもなってねェガキだ。そんな小娘に、よりにもよってお得意の『頭脳戦』で、あと一歩ってトコまで追い込まれたりしたら……自分自身が許せねえよなァ」

王天君は、自分の『半身』がしたであろう思考の流れを、ほぼ正確に掴んでいた。そう、太公望はイザベラに対して怒りを向けていたわけではない。

もちろん、何とも思っていないということはないだろう。だが、それ以上に……イザベラという少女の持つ『策謀家』としての才能を甘く見ていた自分の不甲斐なさに対して憤り、わざわざ『太極図』を展開するなどという大人げない真似をしでかしたのだ。

もっとも、王天君がイザベラから『作戦』内容を聞いた限りでは、太公望がそこまでの危地に陥った理由は、イザベラが想定していた最高の――太公望とタバサにとっては最悪のタイミングで、襲撃現場に飛び込んでしまったからに過ぎない。

いくらイザベラに才能があるとはいえ、彼の目から見ればまだまだ未熟だ。事実、彼女が立てた『策』には、あちこちに穴が存在した。そうでなければ、太公望がこうまであっさりと王天君の『影』に辿り着いたりはしなかっただろう。

とはいえ、そこまでわざわざイザベラに教えてやるほど王天君は優しくない。こうして救いの手を差し伸べたこと自体が奇跡といっ

てもいいくらいだ。もしも、イザベラに援助を申し出た場面を太公望が見ていたら、

「おぬしに、いったい何があったというのだ……！？」

などと、真顔で聞いてきかねない。

「とりあえず準備は整ったみてぇだし、そろそろ仕上げにかかるとすっか」

凶悪な笑みを顔中に貼り付け、王天君は『空間』を駆けた。

――そして、数時間ほど後。

太公望の元へ到着した王天君は……目の前に広がる光景に唖然としていた。

「おい、なんだよこりゃあ……？」

十二畳くらいある落ち着いたデザインの洋室、それは別にいい。壁面に置かれた本棚と、机やテーブルの上に積み重なっている書類の束についても、まあいいだろう。部屋の片隅にある衣紋掛けに、無造作に掛けられたマントや帽子類についても、これといって問題はない……だが。

「こいつら……よりにもよって、一緒に住んでたのかよ……」

王天君の場合は『空間』を隔てているので、イザベラと同居しているわけではない。にも関わらず、太公望と彼を呼び出した『人形

姫』は、同衾こそしていないとはいえ、どう考えても長期間、同じ場所で一緒に寝泊まりしている。生活臭が漂う部屋の様子が、それを明確なまでに物語っていた。

王天君は、彼としては珍しくぽかんとした表情で、既にそれぞれの寝所で横になって休んでいるふたりを眺めた。まさかあの太公望が、おかしな真似をしでかすとは考えられないが、しかし。

「ビーナスにこれ見られたら、下手すりゃ建物ごと破壊されるんじゃねーか？」

太公望の妻を自称する娘の姿を思い浮かべつつ、それはそれで面白そうだと王天君は独りごちると、パチンと指を鳴らした。それと同時に、眠っていた太公望の『真下』に『窓』が開き――彼を飲み込んで、消えた。

ボスッというくぐもった音と共に、用意した『部屋』に設置しておいたソファーの上へ落ちてきた太公望を窓越しに見て、王天君はげらげらと笑い声を上げた。

「せ、背中から落とすとは……卑劣なり王天君……」

「あんたが話し合いたいっつったから、遠くからわざわざ来てやったんだろーが。つーか、あんな啖呵切った後なんだから、ちったぁ警戒しとけよ。何あっさり寝てんだ」

したたかに背中を打ち付けた衝撃で、げほげほと咳き込み続ける太公望に、王天君は冷ややかな声でそう追及した。

「わ、わしが話し合いたいと言ったのは、おぬしではなくあの意

地悪姫とだ！」

叩き付けるようにそう言い放った太公望へ、王天君は実に愉快げな声で答えた。

「だったらちゃんと名指ししろよな。こちとらてっきり、用意した『趣向』を存分に楽しんでくれたんだとばかり思ってたんだぜぇ？」

「王天君。それは、どういう意味だ？」

怪訝な面持ちで訊ねてきた太公望に、王天君は意地の悪い笑みを見せた。

「なんだァ？　まさか本当に気付いてなかったのか！？　たった数ヶ月で随分と鈍っちまったみてぇだな太公望ちゃんよ！　せっかく、あんたの可愛い可愛い妹分に、凄腕の暗殺者から狙われるっつー、滅多にできねぇ経験を積ませてやったってのによぉ」

王天君の言葉に、太公望は驚きの表情を浮かべた。

「ぬな！？　あれは、おぬしの仕業だったというのか！？　何故あんな真似を？」

「その理由は、あんただってわかってるんじゃねぇか？」

実際に計画を実行したのはイザベラであって、王天君ではない。しかも、王天君はあくまで終了後に感想を述べただけで、一切手を出してはいない。だが、当然そんなことは知らない太公望は、その顔に一瞬だけ怒りの表情を浮かべ――すぐさま不敵な笑みを見せる

と、王天君がいる『窓』に向けて指をビシリと突き付けた。

「ふ、ふん。だとしたら、おぬしのほうこそ、えらく腕が落ちたのではないか？　王天君！　西百合騎士団に潜り込ませた配下がしていた『誰が＜制約＞を使ったのか』などという、あきらかに不自然な話題への無茶な誘導のしかたといい、利用した者たちの後始末といい、お粗末極まりなかったではないか！」

ムキになってそう指摘してきた『半身』へ、即座に切り返す王天君。

「そのお粗末極まりない策に追い込まれかけたのは、一体誰だったのかねぇ」

「うぬぬぬぬ……」

「そもそもだな、あんた、オレに言うべきことがあるんじゃねーか？」

仕切り窓越しに、冷え切った目で太公望を見つめながら、王天君は息を吐いた。

「あ……う、その……ずいぶんと久しぶりだのう」

「ふーっ、まったくよぉ……こちとら散々苦労して、ここまであんたを探しに来たっつーのに、なんだそりゃ！？　どうせまた衣食住に釣られて、しばらくオレのこと忘れてたんだろう！？」

「わ、わしは、一時たりともおぬしを忘れてなどおらぬぞ～？」

太公望の顔が一瞬引きつり掛けたのを、王天君は見逃さなかった。
やっぱり忘れてやがったな、この野郎は……なら、しっかりとその報いは受けてもらわねぇとな。王天君は、内心で呟いた。

「嘘だな、完璧に忘れてたろ……まァ、オレは別にこのままでも構わねぇけどよ。ここ最近の怠け暮らしも、思ったほど悪くねぇと感じはじめてきたところだったしな」

「は？」

「毎日、好きなときに、好きなだけ食える生活」

「なぬ！？」

「自由につまみぐいだの噂話やらを楽しみながら、ごろごろできる空間」

「ちょ」

「オレも、オレなりに、オレとしてやってきたってコトだ。それを、ホイホイと捨てられるわけねーよな」

「待て！　どこかで聞いたような台詞を吐くな！！　と、いうかさっさと融合を」

「オレの気が向いたらな。さぁて、いつになったらその気になるのかねぇ……１０年後か、それとも１００年先か……こればっかりは、オレにもわからねぇなぁ」

「な、な、なななななな」

目に見えて動揺しはじめた太公望に向けて、王天君は嗤いながら宣告した。

「オレは、しばらく前からイザベラんところで厄介になってるんだ。送迎に、捜索、ついでにイザベラへの迷惑料だ！　このオレから逃げられるだなんて思うなよ！？　優先的に仕事回してやるから、融合してもらいたけりゃ大人しく働け！！」

「嫌ァァァアア――――――――ッ！！！」

――王天君が仕掛けた、太公望にとって、ある意味もっとも精神的に堪えるであろう仕返し。それは、現在自分がしている『怠けぶり』を知らせた上で、強制的に働かせること。亜空間の中に取り残された上に、忘れ去られていたことで、王天君本人がイラッとした結果、自業自得とはいえ、太公望は最も嫌いな『労働』をさせられる羽目に陥ったのだった――。

第８５話　策謀家、過去を顧みて鎮めるの事（後書き）

太公望さんボッシュート。
背中からグサリじゃなくてドサリ。

さて、今回はひさしぶりのイザベラ・王天君主人公回でございました。

タバサと太公望たちが動いていた裏で、彼女たちはこんなことをしていましたという。教師、そして導き手である太公望とは異なり、王天君はあくまでパートナー、ある程度心を開ける友人というスタンスを崩していません。過去についても、太公望のように語ったりはしていません。

そう、王天君はイザベラに対して懇切丁寧に教えるのではなく、あくまでアドバイスをするだけに留めていたわけです。にも関わらず、この成長ぶり。イザベラさまやばい。はやくなんとかしないと……！

また、ついにジョセフ王とガリア周辺について言及しております。実は、ちょっと見るだけでこんだけやばかった無能王。しかも、これで全てじゃないから怖ろしい。レコン・キスタを裏から率いて、さらに情報収集能力も凄まじいという。彼を無能呼ばわりしている貴族は、本当に魔法しか見てないんだなあというのが正直なところです。そりゃ落ちぶれるだろうっていう。

イザベラとジョゼフの関係は、いわゆる「近親憎悪」というやつです。ただし、それは一方的なものですが。原作ジョゼフ曰く「あいつは、おれとそっくりだからどうにも可愛がる気が起きない」だ、そうですから。間違いなく親子だよ、あなたたちは！　そりゃあイ

ザベラさまがひねくれるわけですよ。従姉妹を憎むはずだよ。弟の家族は可愛がってるくせに、娘は放置ですからね……。

『地下水』との出会いは、案外こんな風だったんじゃないかなあという想像でした。本作では、後に王天君が現れた影響で、地下水は裏切りませんでした。つまり、イザベラさまは剥かれずに済んだと、こういうわけでした。よかったね！

それでもって、遂に明かされた『王天君なりの復讐』。太公望よ、あっさり融合できると思ったら甘い！　筆者はそこまで優しくない！　ついでに、話の都合上、融合されるとパワーバランスが崩れる、さらに敵対勢力がいなくなってしまって面白くないということもあり、出会い後即座に融合しないというのは既定路線でした。夢世界以外での伏義登場を期待している皆様には、誠に申し訳なく。

……まあ、頑張って働いてください、太公望さん。

２０１１／０８／１５　誤字脱字修正、王天君のＳ度がちょっとＵＰ
２０１１／０９／２３　本文加筆修正

第８６話　微熱、燃え上がる炎を纏う事

――王天君がイザベラの元へ帰還した後。太公望は、部屋の隅にある書き物机の上に突っ伏して、独り思考の淵へと沈み込んでいた。その魂魄は、半分ほど飛びかけている。

「おのれ、王天君のやつめ。言いたいことだけ言って帰りおって！　それにしても、まさかこのような形で仕返しをしてくるとはのう……」

正直なところ。王天君の存在を――実時間で数ヶ月ほどの間、完全に忘れていた太公望の側に非があることは間違いない。しかも王天君は、本人曰く相当な苦労をして、この世界まで彼のことを探しに来てくれたらしいのだ。

太公望は、深い深いため息をつきながらぼやいた。

「いまさら、わしの側からはどうしようもなかったのだ、などと言っても通用しないだろうしのう……考えていた最悪中の最悪の事態に陥っていなかっただけでもましであると、前向きに考えるしかないか」

太公望が想定していた『最悪中の最悪』とは。王天君が、ガリア国王ジョゼフの＜使い魔＞としてハルケギニアに＜召喚＞されていた上で、ジョゼフ王の手足となり働いている――つまり、この世界全体に『干渉』するという事態に陥っていた場合のことである。

王天君の持つ＜力＞は、支配階級にある者にとって喉から手が出るほど欲しい『情報』の収集に、際だった効果をもたらすものだ。

また、彼の持つ＜頭脳＞と、それに伴う＜技術＞も、間違いなく人類にとって脅威となる。そんな王天君を、この世界最大の隆盛を誇る国の『王』が手に入れたらどうなるか。結果はわかりきっている。

もちろん、普段の王天君ならば、素直に人間の王に従ったりなどしないだろう。だが、己の半身たる太公望が、よりにもよってジョゼフ王と敵対する派閥『シャルル派』の旗頭たりえる少女の手によって、たとえそれが『事故』だったとはいえ、半ば無理矢理にこの世界へと拉致されているのだ。

つまり、状況次第では太公望を取り戻し、かつ誘拐犯と目した少女への復讐を兼ねて、王天君自身が何らかの行動を起こしていてもおかしくなかったということだ。

王天君は、伏義の『心の闇』を象徴する存在だ。『光を映す鏡』たる太公望が持っているような人間らしい甘さは一切ないに等しい。目的を達成するためならば、自身の＜力＞をもって、この世界を舞台に争乱を引き起こすことすら躊躇わなかっただろう。

もしも、そうならなかったとしてもだ。ここハルケギニアには、精神攻撃にはめっぽう強い太公望ですら、完全には＜抵抗＞しきれない程に強力な『薬』が存在する。精神的に疲弊しており、かつ既に『心』を壊されている王天君が、万が一あのようなものを飲まされたりしたら――想像するだに怖ろしい。

『薬』以外にも、人間の心を支配し、思いのままに操る効果を持つ魔法や道具が実在しているのも確かだ。それらに、かつて殷の国で猛威を振るった『傾世元嬢』ほどの威力があるとは考えにくいが、用心しておくに越したことはない。

故に、太公望はガリア国内に在るうちは常に警戒を怠らず、王天君の気配を探し続けていた。だが『部屋』に籠もっているらしき彼を捉えることはできなかった。

そこへ、王天君と非常に似通った手法の『策』を講じてきた者がいた。それがイザベラ王女だった。よって、太公望は彼女ひとりに対象を絞って『罠』を仕掛けたのだが――なんと、あの『王女暗殺未遂事件』は、イザベラではなく王天君が仕組んだものだった。太公望は、王天君の手によって完全に嵌められていたのだ。

「まったく、見事にしてやられたわ。とはいえ、本当にあの意地悪姫が仕掛けてきていたのだとしたら、それはそれで先行きが不安だったわけだが。この世界に、王天君の影響を受けた、新たなる『女狐』が現れることに繋がるやもしれぬからのう」

……くどいようだが、実際にあの『自作自演劇』の脚本を書いたのは、太公望が看破した通り、イザベラである。王天君が、太公望が張った『罠』を、逆に反撃の好機として利用するために、自分がやったのだと言い張ったに過ぎない。だが、今の太公望にはもちろんそんなことはわからない。

「それにしても王天君のやつめ。このわしだけではなく、まさかタバサのような子供を相手に、あのような真似をしでかすとは！相当腹に据えかねておったのか、あるいは、あの意地悪姫のことが気に入ってしまったのか」

＜サモン・サーヴァント＞は、基本的に召喚者と相性の良い者を呼び出す魔法とされている。『裏』を司る姫君が王天君を呼び込んだ上で、完全に意気投合してしまったというのは、ある意味当然の流れだったのだろう。太公望は、そう判断した。

「おまけに、あやつがまさか夢のぐうたら生活を手に入れておったとは！」

太公望は、歯噛みして悔しがった。自分は苦労に苦労を重ね、必死の思いで居場所作りをしていたというのに、後から召喚された王天君は、なんとイザベラ王女の側で、何不自由ない生活を送っていたというのだ。怠けることを至上の喜びとしている太公望にとって、こんな理不尽な話はない。

しかも、王天君はそんな『ぐうたら生活』の様子を太公望に対して開示したばかりか、よりにもよって、彼が一番嫌っている『労働』を強制してきたのである。自分が撒いた種、身から出た錆ではあるものの。何やら完全に『半身』たる王天君の掌の上で踊らされているようで……それが妙に癪に障る太公望であった。

「状況いかんによっては、別に無理して融合せずともよいのだが……」

全ての役割を終えた今、地球の『始祖』伏羲としてではなく、再び『太公望』呂望となり、新たな世界で悠然と人生を送る。それはそれで悪くない選択なのだが……しかし。

「わしら＜仙人＞が、これ以上人間たちの世界や政に『干渉』するような事態だけは、絶対に避けねばならぬ。よって、このまま王天君のやつを放置しておくわけにはいかんのだ。とはいえ、無理矢理融合しようとすれば、どうなるかわからぬ」

かつて、地上世界で『軍』を率いていた時とは異なり、あくまでひとりの人間――このハルケギニアにおける特権階級的存在である

＜メイジ＞としてではあるものの、現在のようにいち個人として、日常的な事件を解決する程度であるならば、世界へ及ぼす影響を最小限に抑えることができる。

オスマン氏と協力したり、ラ・ヴァリエール公爵と友誼を結ぼうとしたのは、決して政治的な発言力を求めてのことではない。あくまで『個人ができる範囲内で』周辺に巻き起こりそうな争乱の芽を潰そうとしただけに過ぎない。彼はただ、心を許せる仲間たちと共に、平和な世界で、のんびり気ままに生きてゆきたいだけなのだ。

力在る者が、持たぬ民たちの上に君臨しているという事実については、正直複雑どころではない感情を抱いてはいるものの、それがこの世界の『理』であるということならば、異界の『始祖』たる自分が手を出すべき事柄ではない。それこそ傲慢というべき行為だ。

もしも現状を由とせず、変えていきたいと本気で願う者が居るならば、それはこの世界に生まれた者が、自分たちの意志でもって行うべきことなのだから。

――かつての太公望や、彼を取り巻く大勢の仲間たちがそうであったように。

仮に、そういった＜世界を変える意志＞を持った者たちから手助けを請われた際に、太公望がいったいどういった選択をするのか。それはまた別の話だ。

それにしても……と、太公望は頭を掻きながら呟いた。

「わしの存在そのものが、王室が勲章を下賜するほどの『大戦果』に繋がる、か」

太公望が見た、またこれまで集めた『情報』から判断する限り、ガリア王国は間違いなくこのハルケギニアで最大の隆盛を誇る国家だ。

首都リュティスの賑わいや、市井の民たちが、酒場などで自国の王を『無能』などと揶揄しても罰を受けない自由な国風。これほど安定した治世であれば、王の実力も相まって、既にさほど魔法を重視しなくなっているのではないか。そう考えていたのだが――。

「かの国には、未だ極端な魔法偏重のきらいがあったのだな。いや……より正確には、王が魔法を使えないことを理由として兵を挙げることが『正義』であると認められるような土壌が未だ残っていた、というべきか。たった一度の『失敗』が、よもや現王家の敵対派閥に大打撃を与えることになるとはのう」

当初、忠実な家臣と称してすり寄ってくる者に対する『踏み絵』を兼ねて、タバサへと提言した『失敗報告』が、まさかそこまでの影響を及ぼすとは、現在ならばともかく、当時の太公望にはそれこそ思いも寄らぬことだったのだ。

もっとも、そういった事情を考慮すれば、イザベラの下につくことに問題はない。

タバサの持つ事情もあり、それについてはもともと大人しく受け入れるつもりであったし、なにより太公望がイザベラの目論見通り――つまりタバサが起こした『失敗』の象徴らしく、ごくごく平凡な子供として動いてみせることによって、身勝手な理由で内紛を起こさんと謀る者たちの数を減らすことに繋がるのであれば、

「力在る者による理不尽な理屈で引き起こされる戦によって、民が巻き添えになる」

という、太公望が最も嫌う形式の『戦乱』を防ぐことができる。彼の『ご主人さま』であるタバサも、国を分かつ戦争を起こすことなど望んではいない。彼女は今、復讐ではなく――さらに困難な『道』である、真実を追い求めることに目を向けているのだから。

そういう意味で、イザベラとタバサには『共闘』できるだけの理由が存在するのだ。

イザベラと話し合いの機会を持とうとしたのも、元はといえば、彼女たちふたりが歩み寄るための条件を探ることを目的としていたのだ。王天君がイザベラの側にいることが確定した今ならば、彼と融合することによって、それが実現できると見越した上で。

だが、そう上手く事は運ばなかった。それどころか王天君は太公望の元を離れ、よりにもよってあちら側についてしまった。そのせいで、彼と融合せずに放置するという選択が採れなくなった。この世界への影響のみならず、先に危惧していた、最悪の事態が発生する危険性があるからだ。

「うぬぬぬぬ……わしとしたことが、完全に読み違えてしまったわ。やはり王天君の言う通り、鈍ってしまっておるのだろうか。まったくもって不本意極まりないのだが、事ここに至っては、あやつの機嫌が直るまで、大人しく言うことを聞くしかない」

王天君とイザベラを相手に、一敗地に塗れることとなった『軍師』は、もはや彼らの下で『働く』しかない。しかも『仕事』を選ぶこともできず、拒否権すらない。一見ふらふらといい加減なようでい

て、実はとてつもなく責任感の強い太公望の頭の中には、既に『ここから逃げ出す』という選択肢は残されていなかった。

――王天君の、ある意味最も効果的な仕返しに、ぐったりと机に身体を預け、ただ頭を抱えることしかできなかった太公望は、夜半過ぎから日が昇るまで、一切そこから動くことができなかった――。

○●○●○●○●

――キュルケは、今日という日に大いなる期待をしていた。

それというのも、昨夜こんなことがあったからだ。

夜遅く、窓枠にもたれかかりながらワイングラスを傾けていたキュルケは、その視界に輝く双月を背に、ゆったりと地上へ舞い降りてきた風竜の姿を捉えた時、ほっと息を吐いた。ああ、ふたりとも無事に帰って来られたのね、良かったわ……と。

だが、次の瞬間。彼女は、首筋に冷たい氷の刃をあてがわれたような恐怖を覚えた。風竜の背に跨る人影が、その帰還を待ち望んでいた者たちのそれとは、明らかに異なっていたからだ。

「あのシルエット……どう見ても騎士装束よね。まさか、タバサかミスタ・タイコーボーの身に、何かあったんじゃ……！？」

彼らふたりが、ガリア王家から言い渡されたという『任務』に赴いていたことを知っていたキュルケは、沸き上がってくる不安を必死に押し殺し、慌てて校門前まで駆けつけたのだが……その甲斐あ

ってか、ある意味彼女にとって、素晴らしいものを目撃できた。

風竜に乗っていたのは。騎士装束に身を包み、つばつき帽子を被った太公望と……彼の胸にぐったりと身体を預けるようにもたれかかり、寝息を立てているタバサであった。

これはまるで、絵物語に登場する姫君と、それを護る騎士のようではないか。キュルケは、両手の拳を天にかざし、大声で快哉を叫びたい気持ちを必死の思いで堪えた。

と、さらにそんなキュルケへ、太公望が小声で囁きかけてきたのだ。

「ちょうどよいところへ来てくれた。今回の任務で、相当疲れてしまったようでな、これこの通りの状態なのだ。起こすのも気の毒なので、部屋へ運ぶのを手伝って欲しい」

「あら？　ミスタがそのまま連れていけば……って、ああ、そういうことね」

「うむ。おぬしが得意なアレを頼みたいのだ」

「別に＜アンロック＞は、あたしの得意技ってわけじゃないんだけど……そういうことなら喜んで」

その後、タバサの寝支度が終わるまで部屋の外で待っていると告げ、くるりと背を向けて扉から出て行った太公望を横目で見遣りつつ、半分寝ぼけた状態の少女を着替えさせてやったキュルケの顔には、抑えようにも抑えきれない微笑みが浮かんでいた。

「タバサが、あんなふうに誰かに寄りかかって眠るだなんて……ちょっと前なら、絶対ありえなかったことなのにね」

親友である自分以外の人間には、全くといってよいほど心を開こうとしなかった、あの『雪風』が、疲労の極致にあったとはいえ、その身の全てを預けられるほどに信頼できる相手ができた。

さらに、それが異性だという事実は、キュルケにとって大変喜ばしい出来事であった。ふたりの間に横たわる年齢差やその他諸々の事情など、彼女にとって考慮に入れる必要のないものであったから。

「そうよね、タバサもそろそろ恋の喜びを知ってもいい頃だわ。あの子は今まで、ずっと辛い思いをしてきたんだもの。お母さまも助かったことだし、これを機会に少しくらい楽しいことをしたって罰は当たらないわよ！」

『燃える恋愛』を至上とし、家訓とするツェルプストー家の娘として生まれたキュルケにとって、恋愛は娯楽のひとつでありながら、最も熱心に取り組むべき対象なのである。

そんな彼女自身も、現在＜情熱の炎＞でその身全てを焦がし尽くすような恋の真っ最中であった。

キュルケが虎視眈々と狙っている獲物――学院の教師コルベールは、今のところ学問と研究に愛の全てを注ぎ込んでいるような状態ではあるものの、決して彼女を邪険に扱っているわけではない。それどころか、キュルケの訪問を心から喜んでいるフシがある。もっとも、彼らの関係はまだ男女のそれではなく、いち教師と生徒のままなのではあるが。

しかし、キュルケは彼女独自の勘によって、既に確信していた。コルベールはやや奥手な上に、男女の関係について少々お堅い面はあるものの、決して女嫌いなどではない。いや、むしろその逆なのだということを。

その証拠に、キュルケがコルベールの手元を覗くふりをして、さりげなく相手の背中にこぼれんばかりに豊かな胸を押しつけると、彼の身体は見事なまでに硬直する。そして、

「先生の研究所って、閉め切っているせいか本当に暑いですわね」

などと呟きながらシャツのボタンをいくつか外してみせると、

「そ、そうかね。なら、風通しがよくなるように窓を開けるとしよう」

と、ドタバタと窓を開けながらも、視線が泳ぎ始める。実になんともわかりやすい反応ではないか。キュルケは、そんな初心な年上の教師が、もう可愛くて仕方がなかった。

「先生は、思ったほど鈍い訳じゃないし……生徒と教師っていう壁さえなければ、すぐにでも応じてくれそうなんだけどね、お嫁さんを探してるって公言してるくらいだし。けど、ここで変に焦っちゃダメ。このあたしが、やっと見つけた『道』なんだから！」

これまで大勢の男性と付き合ってきたのは、運命の相手を探すためだ。そう言って憚らなかったキュルケが、ついに最終目標を見定めた。実家への滞在中、首都見学にかこつけて、さりげなく家族へコルベールを紹介しているあたりに、彼女の真剣さが伺えよう。

「あたしと同じ＜火＞系統のメイジで、おまけに元特殊部隊の指揮官！　有名な軍人を大勢輩出している我がツェルプストー家に迎え入れるには、ぴったりの男性よね」

軍人としての実力、そして度胸についても申し分なし。キュルケの芯に＜火＞が通ったのは、実際に彼の戦い振りを間近で見て、それを知ったからだ。生徒たちを護るため、エルフを相手にしてもなお一歩も引かぬその背中は、まさしく剛炎の壁そのものであった。

過去の事情が故に、コルベールは戦いを好まないが、キュルケの実家はグラモン家のような軍閥貴族というわけではない。それどころか、領内にいる数多くの職人たちを支援し、新技術――特に魔法以外の技術開発に注力しているという、ハルケギニアでも特に先進的な考えを持つ、珍しい家なのである。そういった意味で、これはコルベールにとっても決して悪い話ではないのだ。

……おまけに、彼にはキュルケの家にとって、とてつもない『付加価値』がある。

「あのラ・ヴァリエール公爵の目に留まった天才学者っていうのもポイントよね。直接王室へ論文を届けてもらえるなんて、実際とんでもない話よ？　そんな彼を、あたしがお婿さんに迎える……フォン・ツェルプストー家の者として、実に相応しい行動だわ」

『仇敵』ヴァリエール家にとって重要な人物を奪う。これは、ツェルプストー家に代々伝わる伝統行事のようなものだ。歓待期間中、かの家の人物たちとはそれなりに仲良くなれたキュルケであったが、それはそれ、これはこれである。

コルベールを――本人には内緒で紹介した当初こそ、微妙に難色

を示していた父親も、これを話した途端、完全に折れた。今では、連日のように娘の元へ『相応しい』服や装飾品、おまけに軍資金まで送りつけてくる等、積極的に後押しをしている始末だ。

よって彼女は、学院への帰還後毎日のように、太公望からガリアへの出立前に教えられていた『込める』ための練習を終えた後、コルベールの邪魔をしない程度に彼の研究所を訪れては、いろいろと工夫をこらしたちょっかいをかけているのである。

『恋愛』の手腕手管に長けたフォン・ツェルプストー家の娘キュルケが、実家のバックアップを受けた上で、一方的な『攻撃』を加えている現在、本物の戦場ならばともかく、こういった『戦い』にはてんで弱いコルベールには、もはや逃れる術はない。

――お堅い『教師』が陥落するのは、最早時間の問題といっても差し支えないだろう。

そんなキュルケだからこそ、唯一無二と信ずる親友であるタバサに、是非とも『恋』をする喜びを知って貰いたい。楽しみを分かち合いたいと考えるのは、至極当然の成り行きなのだ。対象となりえる相手が身近にいるとなれば、なおさらだ。

「うふふふふ……今度こそ、もしかすると、もしかするわよね……」

これまで、タバサを相手に恋愛のなんたるかを説くのは、水をたっぷりと吸い込んだ薪に火を灯すような行為であった。だがしかし、遂に機は熟した。これを生かさずしてなんとする。フォン・ツェルプストー家の娘として、頑としてやり遂げねばならぬ。

「いつかあたしたちと一緒にダブルデート！　なんていうのも悪くないわよね～！」

それが実現できたなら、絶対楽しいに違いない。そう考え、早速朝食後にタバサを呼び寄せ、今後についてのアドバイスを送ろうとしていたキュルケだったのだが……朝、アルヴィーズの食堂に現れたふたりを見た瞬間。彼女は思わず叫び声を上げそうになった。

キュルケの目に飛び込んできたのは。目をしばたたかせ、まるで何かに憑かれたかのようにふらふらと足元をふらつかせながら歩く太公望と。逆にぐっすり眠って、すっかり疲れが取れたといった顔をしつつも、足取りの怪しい彼を気遣うタバサの姿であった。

「こ、これは……まさかの大逆転……！？」

タバサの表情から察するに、キュルケが期待するような『何か』があったわけではなさそうだ。だがしかし、彼女の『パートナー』の様子が、明らかにおかしい。あれは、どう見ても何事かを深く悩むあまりに、一晩中眠れなかったといった雰囲気だ。

いったい彼が何を悩んでいたのか。そんなものは決まり切っている。キュルケは、内心で狂喜乱舞した。正直なところ、タバサの『お相手』を落とすのは、自分の全力を持ってしても難しいのではないかと考えていたからだ。

何故ならあの太公望という男は、とにかく『女性』に興味を示さない。

……たとえば、以前こんなことがあった。

校庭で実習授業が行われた際に、突如巻き起こった悪戯なつむじ風が、女子生徒たちのスカートを膝上２０サントほどまでたくし上げたことがある。

その時、周囲にいた男子生徒のみならず、教師までもが（名誉のため、あえて名前は挙げないこととする）彼女たちのあられもない姿に視線が釘付けとなったのだが――唯一太公望だけが、まるで何事もなかったかのように授業の再開を待っていた。

……また、こんなことまであった。

訓練用に作った畑で、水まきをしている最中のことだ。ルイズがうっかり目測を誤り、キュルケの頭上に桶の中の水をぶちまけてしまったことがあった。当然のことながら、そのせいでずぶ濡れとなったキュルケのシャツは、まるで身体のラインを強調するかのように、ぴったりと上半身に張り付いた。

それを見た『水精霊団』男子のうち１名が、

「ハルケギニアの女の子って、やっぱりブラジャーつけてないんだネ」

などという意味不明な言葉を発した後、鼻血を流して倒れたり。

別の１名が眼鏡を外し、自分は何も見なかったと言わんばかりに後ろを向いた後、その場でしゃがみ込んだり。彼女の肢体を目にする直前、突如沸き上がった＜水柱＞によって視界を遮られた者が約１名いた中。平然とした顔で手ぬぐいを寄越してきただけでなく、そのままでは風邪をひいてしまうからと、タバサと揃って＜ウインド＞を唱え、服を乾かす手伝いまでしてくれた。

その結果。キュルケは体調を崩すことこそなかったものの、言いようのない敗北感に襲われ、夜、自室でひとりワインを呷る羽目に陥った。

その後、彼が実は７０歳をとうに越えていることが判明し、さらに老いてなお盛んであるオールド・オスマンの「枯れたジジイ」発言により、興味のあるなし以前に、既に『過ぎて』しまっていることを悟らざるを得なかったキュルケは、内心頭を抱えていたのだ。

――いくら肉体が若返っているとはいえ、彼を『その気』にさせるのは相当難しいのではあるまいか――と。

もしもだ。太公望がタバサの『パートナー』ではなく、かつコルベールという『運命の相手』と出逢っていなかったとしたら。キュルケは、ツェルプストー家の名誉にかけても、彼を落としにかかっていただろう。実際彼女は、それだけの価値を太公望という人物に対して見出していた。

だが、現状でそれはありえない。よって、キュルケは親友を応援することに注力する決意を固めていたのだ。だが、前述の理由から、恋愛スキルの高い彼女を持ってしても相当『難易度』の高い相手であることを承知していた。よって、いかにして『攻略』するべきか、タバサとふたりで知恵を絞って考えよう。そう決心していたのだが……。

「明らかに……気になって眠れなかったってカンジよね、あれ」

太公望が気にしていたのは、王天君の動向と今後の展望であって、キュルケが考えているようなものではない。しかし、当然のことな

がら彼女にはそんなことはわからない。

「ええ、わかる、わかるわ。昨日のタバサってば、女のあたしから見ても、本当に愛らしかったもの。さすがのミスタも、あれで落ちちゃったって訳ね」

本音を言えば、ものすごくイジりたい。だがしかし、ああいうタイプが『出来上がる』前にちょっかいをかけると、せっかくの＜火＞が消えてしまう可能性が高い。過去の経験から、それを嫌と言うほど思い知っているキュルケは、必死の努力で自分を抑えた。

「おはよう……じゃなくて、おかえりなさい。ふたりとも無事で本当に良かったわ」

本音を一切表に出さずにこれを言うことができた彼女は、相当頑張ったといえよう。

「ありがとう」

「うむ……心配をかけたようだな、すまない」

挨拶までは、いつも通り。だが、席についた途端、太公望は何かを考え込むように、両手で顔を覆うと、外には聞こえないほどの声でぶつぶつと何事かを呟き始めた。

「ねえ……どうしちゃったの？　彼」

心底不思議そうな顔をして、そう聞いたキュルケに、

「わからない。わたしが起きたときには、既にこうだった」

タバサは、普段感情を表に出さない彼女にしては珍しく、困惑げな声で答える。

夏期休暇中だけあって、現在食堂内にいる生徒は彼ら3人だけであった。今、この場には他に誰もいない。一応、給仕のメイドがいるにはいるのだが、距離が離れているため、ちょっとした内緒話をする程度ならば問題ない環境だ。そう判断したキュルケは、万が一聞かれても支障がない程度の内容を、小声で話を聞いてみることにした。

「まさかとは思うけど『任務』中に、何かあったの？」

と……この言葉を聞いた太公望が、ふいに顔を上げ、タバサに声をかけた。

「任務……か。そうだ、タバサよ。頼みがあるのだが」

「わたしにできることなら」

「食事の後、できればでかまわぬので、わしに＜制約＞をかけてはもらえぬだろうか」

太公望の爆弾発言を耳にしたキュルケは、盛大に咽せた。

「……使ったことがない」

タバサの答えに、太公望は首をかしげた。

「つまり、その気になれば唱えられるということかのう？」

太公望の問いに、タバサは首を横に振った。

「＜制約＞は禁呪。各国の法律で使うことを禁止されている。だからわたしは、効果についてはある程度学んでいるけれど、ルーンまでは知らない。ただ、覚える気になれば、やれないことはないと思う」

「ふむ、そうか……おぬしにかけてもらえるならば助かったのだが、これればかりは無理に頼めることではないからのう」

え、何？　彼、もうそこまで追い込まれてるの！？　禁呪で縛られないと自分が抑えられないってわけ！？　それともまさか……そういう趣味だとか！？　キュルケの胸の内は、歓喜と動揺とがないまぜとなって溢れかえっていた。

……説明するまでもないことだが、太公望が＜制約＞をかけて欲しいと言っているのは、自分がちゃんと＜抵抗＞できるかどうかを試すためであって、キュルケが考えているようなものでは、断じてない。だが、燃え始めてしまったキュルケは止まらない。彼女の思考は、完全にそっちへ向いてしまった。声には出さず、ひたすら先に思いを馳せる。

「＜魅了＞じゃなくて＜制約＞ってところがニクいわね。ううん、もうすっかりタバサに参っちゃってるから、そっちはいらないって意味の告白かしら。そう考えると素敵だわ。でも、いざとなると大胆ね、ミスタって。人前でいきなり縛ってくれ、だなんて」

ああ……もうだめだ、あたしは彼をイジらずにはいられない。キュルケが勢いよく立ち上がろうとしたその時だ、無粋な闖入者が現

れたのは。

「なんなら、わしがかけてやってもええぞい」

「おぬしだと＜抵抗＞に失敗した時に何をさせられるかわからぬ。よって却下だ」

それは教員用のロフト席から降りてきた、オールド・オスマンであった。

「というよりもじゃな、何故自分に対して＜制約＞なんぞをかけてもらう必要があるのか。わしはそれが知りたい」

ニヤニヤと笑いながら顔を近づけてきたオスマン氏に、太公望はぶっきらぼうに返す。

「……個人的なことなので、おぬしに話すわけにはいかぬ」

「個人的、のう。君ともあろう者が、迂闊にもこんな場所でそのような話をするとは、相当切羽詰まっておるようじゃのう。ほれ、このわしでよければ相談に乗ってやるから話してみんかい。ん？ん？」

「おぬしに話したら、余計に混乱するに決まっておる！　ところで、何か用なのか？」

「君、わしのこと全く信用しとらんな……？　ああ、そうそう。個人的で思い出したわい。明日は何か予定が入っとるか？　特にないなら、早急な用件で会談を申し入れてきておる人物がおるのじゃが」

「……わし個人に、か？」

「うむ。実は、君たちがガリアへ向かった直後に申し込みがあってな」

そう言うと、オスマン氏は再びニヤリと笑って太公望を見た。

「で、明日以降の予定は？」

「できることなら、今日から数日間は勘弁してもらいたいところではあるのだが、相手にもよる」

「ああ、会談相手はエレオノール女史じゃよ」

オスマンの言葉に、太公望の眉が動いた。キュルケの眉もピクリと上がった。

「そういうことならば仕方がないのう……ただし、会談場所はできるだけ学院内に設定してくれ。さすがにあちらの屋敷まで出向くというのはご免被りたい」

「それならば心配ないわい。既にそのように話はつけてある」

「わかった。では、日時が確定したら、連絡をくれ」

「疲れておるところすまんのう。何せ彼女ときたら、相当焦っておるようだったので、さすがのわしにも断りきれなんだわ」

しきりに、心の底から済まなさそうな声で太公望へと語りかけて

いるオスマン氏を見たキュルケは思った。これは怪しい……と。確かにその声音こそ申し訳なさそうなものではあるのだが、目元が微妙に笑っているのだ。

急ぎの会談……しかも、個人的なもの。申し込んできたのは、ヴァリエールのお姉さま。そこまで考えるに至って、彼女はとんでもない可能性に気が付いた。

「まさか……あのひと、ミスタ・タイコーボーのこと――！？」

思い当たる節はある。会談期間中、やたらと彼と話をしたがっていた。彼の言葉に、いちいち頷いて、メモを取っていた。それだけならまだしも、単に研究熱心だと言うには、あまりにもミスタの側にくっつき過ぎていた気がする。ただ、キュルケはエレオノールからそれらしき雰囲気を感じていなかったため、これまで気に留めていなかったのだ。

「おまけに、わざわざトリステインの王立図書館へ入館するために必要な、外国人特別許可証を取得する手助けを申し入れていたわよね。最初は、単にタバサとミスタへのお礼だと思っていたけれど、こうやって状況を並べてみると、怪しすぎることこの上ないわ」

オスマン氏が用件を言い終え、その場を立ち去った後も、キュルケは考え続けていた。もしかすると、自分の思い違いかもしれない。しかし、せっかく彼に＜火＞がつきそうな状況にも関わらず、別の『女性』に外からおかしな横槍を入れられてはたまらない。

よって、彼女はしかるべき最初の一歩を踏み出した。

「ねえ、タバサ。＜制約＞覚えてみてもいいんじゃない？」

「いや、別に無理をしてまで覚える必要は……」

そう告げた太公望の言葉を、しかしキュルケは遮った。

「きっと『フェニアのライブラリー』になら、魔法書があると思うわ。あたしは入れないけど、タバサなら許可証を持っているでしょう？」

「……ん。タイコーボーがわざわざ頼んで来るということは、何か大切な理由があるからだと思う。なら、わたしは力になりたい」

「そうよね～、さっすがタバサ。あなたみたいないい子、なかなかいないわよ！」

そう言ってキュルケは親友にぎゅっと抱きつくと、その頭を優しく撫でた。

「と、いうわけですからミスタは、先にお部屋へ戻っていてくださいな。なんだかすっごく疲れてるみたいですから！」

そしてタバサとキュルケのふたりは、まるで吹き抜ける突風のように、図書館へ向けて飛んで行ってしまった。後に残された太公望はというと……。

「部屋に戻れと言われても……鍵、閉まっとるのだが。どうしろと……？」

――そう。これまで＜アンロック＞の魔法は全てタバサに任せっきりにしていた太公望は、部屋の鍵を開ける手段を持っていないの

であった。その気になれば、無理矢理こじ開けることは可能かもしれないが、しかしそんな気力など、今の彼には無く。

「仕方がない……瞑想しながら考えを纏め直すとしようかのう……」

よたよたと外へ向けて飛び去っていった太公望。だが、彼の心だけではなく、周囲に巻き起ころうとしている争乱は、収まる気配を見せなかった――。

第８６話　微熱、燃え上がる炎を纏う事（後書き）

更新にやたらと間が空いてしまいました……申し訳ありません。筆者が「コレ系」を書こうとすると、こんな調子になります。と、いいますか太公望使ってコレ系の騒動って、難易度高いとかってレベルじゃないということを改めて思い知った次第であります。

もっとも、騒ぐのは本人ではなく……なのですが！

あと、コルベール先生頑張れ。いろいろな意味で。

ハルケギニアの女の子は……つけてないし、はいてない。

そして、太公望が考慮している『世界への影響』ですが。既にとんでもないレベルで影響ががががが……本人としては『個人』として動いているだけで、民の営みに大きな影響（争乱を起こす系という意味で）を及ぼす系の干渉をしているつもりはなかったものの、実は出現しただけで結構動いていましたという。主にガリアとか。バトルフラグ壊滅状態タグは伊達ではない……ッ。

次回は、得意（？）のダベり系になりそうです……が、果たしてちゃんと纏めきれるのか！？　乞うご期待。

２０１１／９／８　２３：００　誤字脱字修正、本文加筆修正

第87話　雪風、その資質を示すの事

――慌ただしかった朝食の後、魔法学院の図書室にて。

比較的容易に発見できた＜制約＞のルーン、そして使用に関する注意事項をまとめた資料を閲覧しながら、タバサとキュルケは揃って頭を悩ませていた。

「想像していた以上に、難しい魔法だった……＜制約＞だけに」

「制限がある？　タバサ。あなたって、たまに顔色ひとつ変えずに冗談言うわよね」

＜制約（ギアス）＞。水の系統魔法に属するこのスペルは、古来よりハルケギニアのほぼ全ての国において使用を禁止された『禁呪』のひとつである。

この魔法が禁じられた理由は簡単だ。呪文の対象者に特定の『行動命令』を与え、本人の意志に関係なく操ってしまうという効果があるからだ。おまけに、指示を受けたことや命令行動中の記憶が一切残らない。

腕の良くないメイジが使用した場合、対象者の目に独特の＜魔光＞が宿るため、比較的簡単に見破ることができるが、熟練者がこれを唱えた場合、瞳の奥に＜魔光＞が完全に隠されてしまうため、効果が発動するまで、本人は勿論のこと、周囲も＜制約＞をかけられていることに気付けない。おまけに＜魔法探知＞にも反応しなくなるという、非常に厄介な特性までついている。

「ただ……この資料によると、例の『惚れ薬』ほどの効果を現すわけではない」

「アレは危険すぎたものね……まあ＜水の秘薬＞があってこそなんでしょうけど、本当にどんな命令でも聞く、って感じだったもの。一部例外もあるみたいだけど」

そう。＜制約＞は、かの『惚れ薬』のように、対象者を完全なる『操り人形』にしてしまうほど強力な魔法などではなかったのだ。たとえば、

『日の入りと同時に』『倉庫の中にある箒を1本持ち出し』『自室の壁に立て掛けよ』

と、いう『発動条件』『行動指定A』『行動指定B』という命令が可能なのだが――。

「このように指定した場合、複数本箒があった場合どれを選ぶか、どうやって持ち出すか、また、立て掛ける位置などについては、かけられた人間の裁量任せになってしまう」

「しかも、条件付けを増やすためには、そのぶんだけ『属性』を足さなきゃダメとか……なんで禁呪指定されるほど危険な魔法が『ライン』スペルなのか、ずっと不思議に思ってたんだけど、こういうことなら納得できるわ」

まず『唱える』ために、水属性を1つ使い、次に『行動内容』を指定するために、2つ目の＜水＞を重ねる必要がある。そう、先に述べたような3つの『指定』を行えるのは、＜水＞を4つ重ねることのできる『スクウェア』メイジのみであると、ふたりの前にある

資料には記されている。これを見たタバサは、小さく眉根を寄せて呟いた。

「わたしは『スクウェア』に達してはいるものの、基本は風系統。風だけならば４つ重ねられるけれど、＜水＞については、今はまだふたつまでが限界」

もっと修行を積まなければならない、という親友の呟きを受け、キュルケがぼやいた。

「火系統で『トライアングル』のあたしじゃ無理ね。たとえ唱えられたとしても、まともに効果が発動するかどうかすら怪しいわ」

――基本的に、自分の系統に属さないスペルを成功させるのは難しい。さらに、相反する属性――＜水＞ならば＜火＞、＜風＞の場合は＜土＞といったように、正反対の系統に属する魔法を成功させるのは、特に難易度が高いとされている。

使用する属性が１つで済む『ドット』スペルならば、さほど腕を必要としないのだが、他系統で複数の属性を重ねる必要がある、つまり『ライン』よりも上位の魔法を扱うとなると、生まれつき＜複数属性＞の資質を持つメイジでないと厳しいのだ。

ごく稀に、４属性全てをハイレベルで扱えるような『天才』も存在するが、そのようなケースは、ごく少ない特殊事例なのである。特にそれが『スクウェア』ランクまでとなると、世界中を見渡してみてもまず居ないといっても過言ではない。

ちなみに、タバサの父であるオルレアン公シャルルは、全系統『スクウェア』を達成した史上稀に見る天才だったとして、ガリア国

内では有名である。彼以外で完全制覇したとされているメイジとなると、なんと『始祖』ブリミルしか例がないのだ。

トリステイン魔法学院の長たるオスマン氏も、国の歴史に残る程に天才的なメイジだが、その彼の実力を持ってしても、４系統全てをスクウェアレベルで扱うことはできない。なお、かの『烈風』カリンは＜風＞に特化しているため、他系統は不得手である。

そう、オルレアン公シャルルがそれほどまでの『天才』だったからこそ、彼とその家族の身に悲劇が降りかかってしまったのかもしれない――閑話休題。

タバサは、資料のページをめくりながら呟いた。

「しかも、この本によれば……＜制約＞は、スペルを確実に対象者の耳へ入れなければ効果を発揮せず、さらに『命令』の指定もできないと書かれている」

同じく資料に視線を落としていたキュルケがぼやいた。

「おまけに、唱える時には対象者と視線を合わせなきゃいけない上に、相手の意志が詠唱者よりも強かったら、あっさり＜抵抗＞されるとか……条件が厳しすぎるわよ！　それなのに、たったの１回しか発動させられないなんて……使いづらいったらないわ」

「少なくとも、夜中に部屋へ忍び込んで、眠っている人間に＜制約＞をかけるといった真似は不可能ということ」

「人混みに紛れて狙い打ちする、なんていうのも難しそうね。これを見る限りだと」

タバサは、これらの資料に目を通して、ようやく納得した。何故『実践教義』を信奉する新教徒たちが＜制約＞を多用し、凶悪な事件を起こし続けてきたのか。どうして旧教徒と呼ばれる一般的なブリミル教の信者が、この魔法を新教徒に対抗するために利用しようとしなかったのかを。

新教徒を構成しているのは、一部の欲深い貴族や寺院によって抑圧され、社会に不満を持つ平民たちがほとんどだ。ごく少数だが、フーケのように地位を剥奪された元貴族や、自ら貴族であることを捨てたメイジたちも含まれる。

彼らの中には、自分や家族たちが不当に貶められているのは、強欲な貴族が寺院と結びつき、己に都合の良いように『始祖』の教えをねじ曲げているからだという認識がある。

その考えが故に『ブリミル教が、本来在るべき姿を取り戻す』という使命感に燃えており、そのためならば、死さえもいとわない――つまり『殉教』意識の強い者が多い。それ故に、最初から容易に＜制約＞を受け入れる者が多いのだ。

逆に言えば、旧教徒――平和な暮らしを営んでいる平民や、ごくごく一般的なメイジたちを相手に＜制約＞を成功させるのは、熟練者でない限り困難だということになる。

タバサはがくっと肩を落とし、うなだれた。

「あのとき、ここまでの知識と情報があれば、もっと上手く立ち回れたはず。禁呪だからといって、調べてはいけないという法はない。今回のことで、それがよくわかった」

＜制約＞は禁呪ということもあり、おそるべきスペルとして、その効果は世に広く知れ渡っている。ただし、それはあくまで『呪文の対象者へ強制的に命令を刷り込むもの』という、非常に曖昧な情報だけに限られる。

タバサは、その事情ゆえに『裏仕事』に関わることが多かった。よって、一般的なメイジよりも多くの知識――＜魔光＞の存在についてや＜魔法探知＞にかからなくなるという情報を持ち合わせていた。だからこそ、あの夜襲いかかってきた侍女が、実は＜制約＞によって操られていたのではないかという推理を働かせることができたのだ。

だが、さすがの彼女も＜制約＞という魔法が、これほど発動条件の厳しい呪文だということまでは知らなかった。元より禁呪であるため、本や資料の数は限られている。この情報自体、数千年分の蔵書があり、一般生徒立ち入り禁止の『フェニアのライブラリー』でなければ集められなかったものだ。

嘆息したタバサに、キュルケが反応した。周囲を伺い、聞き耳を立てている者が誰もいないことを確認すると、彼女は親友に囁きかけた。

「もしかして、例の『任務』のことかしら？」

「そう。タイコーボーが、わたしに＜制約＞をかけて欲しいと言ってきたのは、おそらくそれが理由」

「それ……もう少し詳しく教えてもらっても、構わなくて？」

タバサはこくりと頷くと、キュルケに向かって静かに語り始めた――今回の任務について。あの怖るべき夜の話と、その後起こった出来事を。

○●○●○●○●

――いっぽうそのころ。

ガリア王国のヴェルサルテイル宮殿、その一画にあるプチ・トロワでは。イザベラ王女と王天君が『部屋』の中で、厨房から拝借――例によって『窓』からこっそりとパクったワインを飲み、新鮮な果物をつまみながら、昨夜の一件について振り返っていた。

王天君の報告によれば、彼の手腕により、弟の怒りを打ち消すことに成功しただけでなく、兄としての貫禄で、大人しくイザベラの下で働くことを承諾させてきたらしい。

当然のことながら、それを聞いたイザベラは歓喜した。自分の失敗のせいで、喉から手が出るほど欲しかった有能な部下を手にする好機を逸してしまったばかりか、凶悪な＜力＞を持った相手を完全に怒らせてしまったと落ち込んでいただけに、喜びもひとしおであった。

「さすがはオーテンクンね！　これで、わたしの『組織』をさらに強化できるわッ！」

「ククッ……ま、せいぜいこき使ってやんな。つっても、やりすぎるとアイツぁスネるから気ぃつけろよ……なんてこたぁ、さすがにもう言うまでもねぇか」

「ありがとッ。今後は、あなたの弟に向いた仕事を厳選するようにするわね！　それと……シャルロットをいじめるのも、ほどほどにしておくわ」

「そうしときな。それはともかくよぉ。あいつらのことだが……」

食器を使わず、なんと指で果物をつまんでぽいっと口に放り込むという、まるで王女らしからぬ振る舞いを見せながら、イザベラは笑った。

「あの子たちが、同じ部屋で暮らしていた……ねえ。まあ、貧乏貴族が従者用の部屋を借りるだけのお金がなくて、自分と一緒に住まわせている……なんてことは、特に珍しい話じゃないし、一般的な貴族ならこれといって気にしないことなんだけどね」

「へぇ、そぉいうモンなのか」

「ええ。だがらこそ、一緒にいても学院側が問題にしていないんだと思うわ」

イザベラは、手にしていたグラスに新たなワインを注ぎ込みながら嘲笑った。

「それにしても……ぷぷっ、あの子もとうとう貧乏根性が染みついてきたってわけね！　あれでも一応は王家に連なる者なのに、みっともないわぁ！　どうせなら、思いっきりそのあたりを突っついてやりたいところなんだけど……」

「仮にも元王族相手にそれをやっちまうと、うるせぇコトになる

……か」

「そういうこと。まったく面倒だわぁ～、王家の血筋って。おまけに、万が一あなたの弟が人間じゃないことがバレると、それはそれで別の問題が発生するしね」

シャルロットが、よりにもよって強力なエルフの亜種（と、イザベラは思っている）を使い魔として従えていることが外に漏れたら、またシャルル派の連中が息を吹き返すかもしれないわ……と、声を出さずに続けるイザベラ。

と、そんな彼女の内心を知ってか知らずか、王天君がニヤリと嗤う。

「まあ、オメーが気にしないってんなら別にいいけどよ」

「あら、何か含みのある言い方ね？　まさか、他にまずいことでもあったの？」

「いや……な。アイツは『人間』が大好きだからよぉ」

これを聞いたイザベラは、口に含んでいたワインを吹き出しこそしなかったものの、思いっきりむせた影響で気管の中へと流し込んでしまい、げほげほと激しく咳き込んだ。

エルフたちは、ハルケギニアに住まう人間全てを『蛮人』と蔑み、自分たちよりも生物として格下であると認識している。そのため、人間とエルフが結ばれることなどまずありえない。よって、従姉妹が未だ自分の＜使い魔＞の正体を知らないことを差し引いても、間違いが起こる事など絶対にないだろう。イザベラは、そう考えてい

たのだが……。

「昔っから、内緒で住処を抜け出しては、しょっちゅう人間どもの国へ遊びに行ってたくらいだしな。まあ、オメーが気にしないってんならオレは別にかまわねーんだが」

「ちょ、ちょっと待って！　ま、まさか……」

「今はじっくり『育ててる』真っ最中ってトコだろーな。アイツ、妙にあの『人形姫』が気に入ったみたいだしよ」

「そ、育ててるって！　確かに、あの子は年齢の割に小さいけど……それって……」

イザベラの顔色は、赤と青を交互に行ったり来たりしていた。いや、まさかあの子に限ってそんなことは。でも、あの風竜で飛んでいたときのふたりの様子は、まるで……。

「まぁ、いくら気に入ったからっつっても、さすがに喰ったりはしねぇだろうが」

「つまり、絶対じゃないってことよね!?　いくらなんでも、それはヤバいわぁ～！」

彼女の従姉妹姫シャルロットは、既に王族としての身分を剥奪されている。とはいえ、元王族ともあろう者が、万が一にもメイジの天敵であるエルフと情を交わし、さらにそれが外部へと漏れたとしたら……ただの醜聞などというレベルでは済まない。最悪の場合、ガリア王家の威信に傷がつくどころか、国が傾きかねない程の一大事だ。

……それほどまでに、この世界に住まう人間たちによる、エルフへ対する敵対感情と畏れは根深いものなのである。

イザベラは、慌てて立ち上がると『部屋』の外へ飛び出そうとした。だが、王天君がそんな彼女を引き留めた。

「オイ、イザベラ。まだ話の途中だぜぇ？」

「悪いけど、また後でね！　急いで部屋を別にするよう命令しないといけないし！」

「なんでだよ？　さっきまでは気にしないって言ってたじゃねぇか」

「だって、あなた言ったじゃないのよぉ！　育ててるって！！」

「あァ。アイツのことだから、たぶん色々面倒見てんじゃねーかと思ってな」

「だから！　それがまずいっていうのよぉ！！」

自慢の蒼髪を振り乱して叫ぶイザベラに、王天君はニヤリと嗤って見せた。

「そーか。やっぱりアイツが人形姫の勉強を見てやるのは、ヤバイことだったのか」

「は？」

「アイツぁ、口では面倒くさいだのなんだの言いながら、結構なお人好しだからよぉ。だから、普通の人間ともすぐに仲良くなっちまうんだ。ちらっと部屋ん中見た限りじゃ、効率よく＜風＞を起こすための基礎から教えてやってるみたいだったなぁ」

「ええっ？」

「従者っつーより、親の顔だよなありゃあよぉ。いや、兄貴か！？　『惚れ薬』の影響残ってんじゃねーかっつーくらい、あの人形姫のこと気にしてたからなぁ……ったく本当に物好きなヤツだぜ。ああ、ちなみに太公望もオレと同じで、肉は喰えねーからな？」

イザベラは思い出した。そうだ、あの男は『心』を強制的に塗り替える効果を持つ、魅了の秘薬『惚れ薬』を飲まされてもなお、シャルロットを『妹認定』したのだ。つまり、従姉妹姫のことを『異性』として全く意識していない――と、ここまで考えるに至って、イザベラはようやくその事実に気付き、顔を熟したリンゴのように赤らめた。

「オーテンクン。あなた、わたしのことをからかってたのね！？」

その声に、実に悪い笑顔でもって応えてきた王天君を見て、イザベラは叫んだ。

「もうっ！　オーテンクンのいじわる～ッ！！」

「ハハッ、これに懲りたら、今後はオレの言うことをもっとちゃんと聞きやがれ」

「うううう～ッ、わ、わかったわよぅ……」

「っつーわけでだ。あいつに寄越す仕事はだな……」

――ガリア王国のプチ・トロワ宮殿は、今日『は』平和であった。

○●○●○●○●

――そして場面は、再びトリステイン魔法学院の図書室へと戻る。

キュルケは、背中にびっしょりと嫌な汗をかいていた。

「聞いておいてよかったわ……」

「どういうこと？」

「ああ、気にしないで。こっちの話だから」

危なかった……もし、あのとき下手にイジっていたら、せっかく盛り上がってきていた雰囲気を、完全に壊してしまったかもしれない。キュルケは、絶妙なタイミングで乱入してきてくれたオスマン氏に、心の中で感謝した。

「＜制約＞で、暗殺命令を与えられていた可能性のある侍女……ね。でも、今聞いた話と、この資料を調べてみた限りでは、なんだか違うっぽいわね」

「その通り。だからこそ、この情報を知っていれば、もっと別の可能性を追えたかもしれないと思った」

なるほど……と、キュルケは思った。確かにタバサの言う通り、ミスタ・タイコーボーはそれを知りたいが為に＜制約＞をかけて欲しいと言ってきた可能性がある。それなら『任務』という言葉に反応した理由として納得もできる。

ただ……それなら何故、彼はあんな顔をしていたのだろうか。どう考えても、何か別のことに気を取られていたように感じたのだが……。

「ねえ、タバサ。夕べ、何かおかしなことはなかった？」

「……わからない。どうやって寝間着に着替えたのかも、よく覚えていない」

一瞬「ミスタが着替えさせてくれたんじゃないの？」などと、からかいたくなったキュルケであったが、先程の件があったので、さすがに自重することにした。

「ああ、それならあたしが着替えさせてあげたのよ。あのときミスタに頼まれて……って、あああああっ！！」

突如大声で叫んだキュルケに、タバサは思わずビクリと身体を震わせた。図書室出入り口付近のカウンターにいた司書がものすごい顔で睨み付けてきたことに気付き、慌てて彼女の口を塞ぐ。

「ここは図書室。司書のほかに誰もいないからといって、大声はだめ」

「ご、ごめんなさい。けど、あたし、大変なことを忘れてて……」

「大変なこと？」

夕べ、他にも何かあったのだろうか？　思わず首をかしげてしまったタバサへ、キュルケが至極真面目な顔で囁いた。

「ミスタは……ほら＜念力＞と＜ウインド＞しか使えないでしょう……？」

……それはつまり。

「部屋に……戻れない！？」

「そうよ、あんなに疲れた顔をしてた彼を、閉め出して来ちゃったのよォ～！」

今まで、あまりにも自然に――必ずふたり揃って、あるいはタバサが側にいる時だけ、部屋への出入りをしていたので、全くその事実に気付けなかった彼女は愕然とした。まさか、これも偽装のひとつたったのか……と。

「それはまずい」

「でしょ！？　早く戻らないと！！」

つい大声を上げてしまい、再びギリギリと睨み付けてきた司書へ慌てて頭を下げたふたりは、大急ぎで資料を片付け、寮塔へと戻った。しかし、当然のことながらそこに太公望の姿はなく。揃ってあちこち探し回った末に、彼が本塔近くの日陰で『瞑想』という名の昼寝をしているところを発見したのは、既に太陽が空の真上へと昇った後であった……。

余談だが。本塔で太公望を発見したタバサとキュルケは、当初彼が昼寝をしていることに、全く気付けなかった。声をかけても完全に無反応。そっと近寄ってみて、ようやく彼が寝息を立てている――つまり、眠っているという事実に到達することができたのだ。

「だって、あれはどう見ても……」「瞑想しているようにしか見えなかった」

……とは、彼女たちふたりの素直な感想である。相変わらずおかしなところで器用な太公望であった。

――そして、軽い昼食の後。彼ら3人は、揃ってタバサの部屋で『夕べの出来事』について話し合うこととなった。

当初は、立ち会いを遠慮していたキュルケであったが、詳しく話を聞いていくうちに、これは同席しておいて良かったと、心の底から安堵した。

何故なら、昨夜太公望の『兄』が現れたという話を聞くことができたからだ。同時に、そのせいで彼が一晩中眠れなかったのだということも判明した。

キュルケは、心の中でそっと呟いた。

「危なかったわ……もしも、このことを知らないで、あたしが余計な気を回してたら、タバサの恋路を邪魔しちゃったかもしれないわ」

お相手の心を確認せずに、見当違いの茶々を入れるなど『恋愛マスター』として危うくやってはいけない失敗をするところであったと、キュルケは冷や汗をかいた。先の判断の時点で、既に暴発寸前だったのはさておくとして。

だが、太公望が語って聞かせた内容は――恋愛云々以前に、彼女たちふたりの想像を遙かに超えていた。

「お兄さんと『一騎打ち』になったって……怪我はないようだけれど、大丈夫なの？」

「うむ、背中を少々打ち付けた程度だ。痛みはもう引いておる」

「それなら良かった。でも、全然気が付けなかった……」

悔しそうに唇を噛むタバサに、太公望は思わず苦笑した。

「おぬしが気に病むことではない。そもそも王天君の接近に気付けるような者は、そうはおらぬ。実際、わしも完全に不意を打たれてしまったのだ」

「そ、それで、勝負のほうはどうなったんですの……？」

不安げに自分を見つめてくる少女たちに、太公望は事実を告げることにした。

「嘘をついても仕方がないので言っておく。手も足も出ずに完封された挙げ句『実戦からしばらく離れていたせいだろう、完全に鈍っている』と、叱り飛ばされてしまったわ」

そう呟いた後、がっくりと肩を落とした太公望を見たふたりは、仰天した。

「あなたのお兄さんが凄腕だというのは聞いていたけれど……」

「ミスタを完封するって、どこまでとんでもない実力者なのよ！？」

かの『烈風』と引き分け、エルフを一方的にあしらった太公望を完封した挙げ句「鈍っている」とまで言い放った人物。前もって凄腕の暗殺者だという話を聞いていたタバサとキュルケであったが、これまではいまいち実感が伴っていなかった。

だが、実際にこうしてその実力の一端を垣間見た――いくら疲労の極致にあったとはいえ、北花壇騎士として『裏』の経験を積んでいるタバサに、自分の接近を察知されなかったばかりか、戦いが起きたことすら悟らせなかった――ことで、恐怖以上に純粋な興味がわいた彼女たちは、彼はいったいどんなひとなのだろうかと思いを馳せた。

……完全無警戒でぐーすか寝こけていたところを、問答無用で亜空間へ叩き落とされ、抵抗する間もなく『労働』を押しつけられたとは、さすがに言えない太公望であった。おもに、自分の威厳を保つ的な意味で。

「と、いうわけでだ。あやつが意地悪姫の使いとして現れた事実と、わしに『鈍った』などと言ってきたことから考えるに、今後はさらに危険な『仕事』が増えるやもしれぬ。わしが至らぬばかりに、おぬしのことを巻き込んでしまって、本当に申し訳ない」

深く頭を下げた太公望を、タバサは遮った。

「元はといえば、わたしのせい。巻き込まれたのは、あなたのほう」

「いや、そんなことはない。そもそもだな……」

まるで精霊飛蝗（ショウリョウバッタ）のように、ぺこぺこと交互に頭を下げあうふたりを見ながら、キュルケは激しい憤りを覚えた。そして、太公望の『兄』へ向け、心の中で怒鳴りつけた。

「風使いのお兄さんなんだから、少しは空気読みなさいよ馬鹿――――ッ！！」

……と。

「せっかく、風竜の上でいい雰囲気だったのに。しかも、タバサが言うには、任務中に殺されそうになったところを、ぎりぎりで飛び込んできたミスタに助けてもらったとか。不謹慎かもしれないけれど、そんな女として憧れるようなシチュエーションまで実現してたのに……夕べのタバサは、あんなにも愛らしかったのに！　お兄さんのせいで、それが全部吹っ飛んじゃったじゃないのよ、あんまりだわ！！」

別の『空気』を読んだからこその来訪だったわけだが、そんなことは『恋愛の伝道師』たる彼女にはわからないし、関係ない。せっかくの好機を潰されたと、まだ見ぬ王天君への評価と好感度を大幅に下げたキュルケであった。

……そんな彼女の思いとは裏腹に、タバサと太公望の話は続いて

いた。

「あなたのお兄さんが、イザベラの使い魔になっているというのは、確実なの？　イザベラは命令を出しているだけで、周辺の誰かが本当の召喚者ということはありえない？」

「うむ。あの意地悪姫が、王天君と共に『窓』からわしを覗いている『感覚』を捉えることができた。あのとき『部屋』の中にいたのは、間違いなくあの娘だけだ。王天君の性格からして、無関係の者を『自分の部屋』へ招き入れることはまずありえぬ。よって、彼女が主人であると判断した」

「お兄さんの性格、とは？」

「わしと違って、あやつは他者を自分の側に近づけるということをしないのだ」

「見た目がエルフに似ているから？」

タバサの問いに、太公望は小さく頷いた。

「それもあるだろう。だが、あやつは『空間使い』であるため、近接での戦闘には慣れておらぬのだ。基本的に、空間を隔てた遠隔攻撃を主軸としておるからのう。よって、己の弱点を晒さぬため、敵対の可能性がある他者を自分の側に置いてはおけないのだよ」

「そういうこと。にもかかわらず、イザベラが一緒にいたということは……」

「そうだ。既に、それなりの信頼関係を築いていると見て間違い

なかろう。おまけに、あやつが最も得意とする＜フィールド＞は、水と縁が深いものだ。タバサよ。あの意地悪姫の系統を、おぬしは知っておるか？」

太公望の言葉に、タバサはあっという顔をした。

「イザベラの系統は、わたしが知っている限りでは＜水＞だったはず」

「そういえば、ミスタは＜風＞で……お兄さまの系統が＜水＞ってことは！」

「＜サモン・サーヴァント＞は、詠唱者と相性のよい者を自動的に選択する。タイコーボーのお兄さんの場合、自力でイザベラとの間に『窓』を開いた可能性があるとしても、系統が同じならば、その『縁』で引き寄せられたとも考えられる」

タバサの言葉に、太公望は同意を示した。

「ガリアの『裏』を取り仕切る姫と、＜金鰲＞の『闇』を司る策謀家だ。系統だけでなく、相性的にもぴったりなのだ。ある意味、落ち着くべきところに落ち着いてしまったというべきかもしれぬ」

そう呟いた太公望の顔が、なにやらほっとしているように見えたタバサは、素直にそれを聞いてみることにした。

「どうして、あなたはそんな顔をしているの？　お兄さんがイザベラの使い魔になってしまったのに」

「それなのだが。万が一ジョゼフ王の使い魔になっておったとし

たら、最悪の場合……わしは、この命に替えても兄を討伐しに行かねばならなかったからだ」

血を分けた自分の兄を討つ。そう告げた太公望の顔は、どこまでも真剣そのもので。それがふたりの少女を不安にさせた。

「それは、お兄さまが凄腕の『暗殺者』だから、ですの？」

震えるようなキュルケの声に、太公望は深刻な顔で頷いた。

「そういう意味では、王女の側にいるだけでも不安なのだが……夕べ見た限りでは、幸いなことに、完全に自分の意志で行動しておるようだった。早いうちに、こちらへ引き戻すことができればよいのだが……」

これを聞いたタバサは、ピンと来た。

「もしも、あなたのお兄さんに＜制約＞がかけられてしまったらどうなるか、それが知りたかったということ……？」

だから、わたしに＜制約＞をかけてほしいと願ったのか。そう問うてきたタバサへ、太公望は頷いた。

「そうだ。そうなった場合の恐怖を、おぬしは身をもって体験したであろう？」

タバサはコクリと頷いた。あの日、彼女は『他者に操られた平民の侍女』の手にかかって、危うく命を落とすところであったのだ。

今回の調査で知り得た情報から判断する限り、＜制約＞であのよ

うな『命令』を実行させるのはまず不可能だ。つまり、あの侍女は全く別の手段で操られていたか、あるいは、何も知らない被害者のふりをして、周囲を欺こうとしていたという可能性もある。

もしも＜制約＞で似たようなことをしようとした場合は、有能な暗殺者を『素材』として用意する必要がある。手間はかかるが、その場合は『ライン』程度の指示だけで充分だろう。『目標を屠れ』これだけで済んでしまうのだから。

タバサは身震いした。その『素材』となるのが、自分のパートナーを一方的に打ち倒すほどの実力者だとしたら。それほどの人物が、大人しく＜制約＞の対象になるとは思えないが、万が一ということもある。『狂王』ジョゼフが彼を手に入れ、思いのままに操れるようになったらどうなるか……想像するだに怖ろしい。

ジョゼフ本人が魔法を使えなくとも、彼の側には大勢のメイジが控えているのだ。王女の側にいるだけでも不安だという太公望の言葉を、タバサは嫌というほど理解できた。

「わしは＜抵抗＞のための厳しい訓練を受けておるので、そう簡単にはかからぬとは思うのだが、できれば機会があるときに試しておきたかったのだ。そうすれば、どれほどの＜抵抗力＞があれば耐えられるか、ある程度当たりがつけられるからのう」

「お兄さんも、あなたと同じ訓練を受けているの？」

「いや、兄は受けておらぬ。おまけに、一度『心』を壊されておるので＜抵抗力＞がわしに比べて圧倒的に弱いのだ。だからこそ、心配なのだよ」

「それも、隠れている理由のひとつ？」

「ではあるだろうな。まあ、あやつに＜制約＞をかけるくらいなら『魔法薬』を飲ませるほうがずっと簡単だろうし、そちらのほうが怖ろしいのだが、念のため確認をしておくことで、ある程度の指針とすることはできるからのう」

薬と聞いて、タバサはぞっとした。確かに、発動条件その他諸々が厳しい＜制約＞よりも『魔法薬』のほうが比較的使用が容易であるし――なによりジョゼフ王ならば、エルフ由来の品を持っている可能性が高い。そう、自分の母を狂わせたようなものを。

「と、いうわけでだ。そちらの準備ができたのならば、早速実験してみたいのだが……かまわぬか？」

そう申し入れてきた太公望へ、タバサは早速覚えたばかりの＜制約＞を試すこととなった。なお、被験者は多いに越したことはないため、キュルケも参加することになった。

――実験開始。

被験者、太公望・キュルケ。実行者、タバサ。

実験内容概略……被験者へ『ライン』レベルの＜制約＞をかける

※注意事項

・命令内容は『左手を上に挙げる』に統一すること

・他の魔法を併用しないこと（例：眠りの雲　など）
・試行回数はそれぞれ5回までとする

――実験の結果。

「……かからない」「かからぬのう」「魔光も現れないわ……」

スペルは正しく紡がれている。だが、効果が現れるどころか、命令以前の段階で完全に＜抵抗＞されてしまっている状態である。太公望、キュルケ共に同様の結果に終わった。

「あたしは反属性の＜火系統＞とはいえ『トライアングル』だから『ライン』スペルを簡単に打ち消せるのはわかるとして……『ドット』のミスタにもぜんぜん効果が現れないって、どういうことなのかしら」

キュルケは首を捻って考えた。メイジの常識でいえば『ドット』の太公望にまで呪文が通らないというのは、おかしなことなのだ。

「わしの場合は、無意識に＜抵抗＞してしまっておるようだ。魔法が完成した途端、身体の中に嫌な『流れ』が生じるからのう」

「具体的には？」

太公望は、こつこつと指で自分の頭をつつきながら説明した。

「うむ。感情を司るのは頭……つまり脳みそだ。魔法が完成した瞬間、ここの『流れ』を無理矢理歪ませるような、気持ち悪い感触

が頭の中に入ってきてな。訓練の成果なのだろう、無意識に弾いてしまうのだよ」

「そういえば、あなたの国の周辺には＜精神攻撃＞を仕掛けてくる妖魔が大勢いたという話を、前に聞いたことがある」

タバサの呟きに、キュルケが納得したといわんばかりに頷いた。

「なるほどね。だから＜抵抗力＞が普通のメイジに比べて高いのね。ところで＜制約＞と『魔法薬』って、同じような『流れ』があるんですの？」

「似たような『流れ』は感知できたぞ、強さは段違いだがのう」

「やはり『魔法薬』のほうが強力ということ？」

「そうだのう。わしが実際に受けてみた感覚だと＜制約＞による『支配』は、あくまで感情と記憶の一部を操作するだけで、タバサの母上に使われた『魔法薬』のように、魂魄にまで影響を及ぼすことはないようだ。あくまで『ライン』レベルでは、だが」

ただでさえ＜精神系攻撃＞への抵抗力が強い太公望には、少なくとも『ライン』程度の＜制約＞はかからないことが実験結果により判明し、太公望は、ほっと息を吐いた。

「この程度ならば、王天君に＜制約＞がかかることはないであろう。ただし、上位のメイジが唱えた場合は、その限りではないが」

それについては、タバサの腕が上がった時点で、もう一度協力を依頼したい。そう告げてきた太公望へ、今度はタバサが別の角度か

らの実験を提案した。

「その『嫌な流れ』に、あえて乗ることはできそう？」

「ふむ、やれないことはないと思う。ただ……その場合、命令内容を知らないほうがよい。どうしても意識してしまうからのう。よって、できれば今の実験とは方向性の異なる『行動』を設定してみてはくれぬか？　ああ、言うまでもないことだが……」

「大丈夫、おかしな『命令』はしない」

タバサは、当然だといった顔で頷いた。

「さっきから横で笑っておるキュルケの入れ知恵は無しで頼む」

「え～、せっかくの機会なのに」

「おぬしはそれだから不安なのだ！」

「大丈夫、ちゃんとわたしが考えた『指示』を与える。おかしな真似はしない」

「……信用しておるからな？」

……そして。タバサの提案通り、太公望が『流れ』に乗ってみた結果――。

「魔光……瞳の奥に出てたわね」

「間違いなく、それらしきものが出ていた。しかも『薬』で精神を塗り替えられた時のものとは、明らかに異なる。あちらは完全に『光』を失うけれど、＜制約＞の場合は、逆に輝きが増すことがわかった」

手元に置いてあった羊皮紙に、実験結果をさらさらと書き記すタバサ。

「あれじゃあ、操られてますって看板を首から提げてるようなものだわ。それにしてもタバサ。あなた、結構キツい『命令』したわよね」

「そうでもない」

「まあ、確かに普段の彼なら、絶対にやらない行動なのは間違いないけど……あたし、いくらなんでもあれはないと思うわよ？」

「そんなことはない」

「タバサって……ううん、なんでもないわ」

――ちなみに、タバサが太公望に対して行った『指示』とは――。

「ぐおおおおッ！　口の中が！！　何故かとてつもない苦みであふれておる！！　誰か水を……いや、甘いものをくれ――ッ！！！」

アルヴィーズの食堂内の床を転げ回る太公望を尻目に、タバサはポツリと呟いた。

「……おいしいのに」

「タバサ。あなた、やっぱり酷いと思うわ……」

『命令：今日の夕飯に出されるハシバミ草のサラダを完食せよ』

で、あった。

第87話　雪風、その資質を示すの事（後書き）

タバサとイザベラって、間違いなく従姉妹なんだなあというオチでメてみた。

ゼロ魔最大の謎。

「何故、ルイズと才人が同居していることを、誰も問題視しないのか」

これに迫ってみました。実際、お年頃の男女を一緒に詰め込んでおくってどうなの？　って話。単に貴族と平民だからというには、正直危険すぎるかと。実際2巻のようなイベントが発生しているわけですし。まあ、あのふたりが一緒じゃないとラブコメにならないと言われてしまえばそれまでなのですが！！

そして、本作品では最早お馴染みの検証ダベり。今回の題材は＜制約＞でした。

ご禁制の品と謳われつつも、その気になれば平民でも手にすることのできる『惚れ薬』（闇マーケットに立ち入らなければいけませんが）に比べ、手軽に使えそうな魔法にも関わらず、何故これが多用されないのか。禁呪とされるからには、スペル単体の難易度は低い可能性がある……ただし。という理由をこじつけてみました。発動すると怖ろしいけれども、さほど難しい指定はできないのは、こういった事情的な。

原作中で＜制約＞が使えると確定しているのは、リュシーとイザベラのみというサンプルの少なさに絶望した！　おそらく地下水も可

能でしょうが、彼はセルフ制約持ちなので、使う機会はあまりなさそうです。

もうすぐ（作品中の）夏休みが終わります。その前に、予告した来訪者が……今回は幸い？　にして暴走列車赤髪号は緊急停止しましたが、果たして！？

では、次回をお楽しみに。

２０１１／０９／０４　２１：００　追記　ちなみに、今回は記載しておりませんが＜制約＞には『鏡に反射する』という特性があります。つまり、自分自身に＜制約＞をかけることも可能ということです。原作「タバサの冒険」で、これを行っているキャラクターが存在します。制約に限らず、他にも反射する魔法はいくつか存在します。本作で＜糸＞や『座標指定』を重視しているのは、実はそこから来ていたりします。

なお、この＜制約＞や＜複数属性＞については、筆者の独自解釈ですので誤解のなきようお願い申し上げます。

複数属性のメイジについては、原作キャラ（２０巻時点）で思い当たるところを並べると、

タバサ（風■、水△）、レイナール（風火ライン）、コルベール（火△、他全属性ライン）、オスマン（土■、他全属性△）、カステルモール（風水２系■）、リュシー（水■、風ライン）、シャルル（全属性■）が相当するわけですが……こうして見るとコルベール先生やっぱりヤバイ。このひと、ランクアップしたらシャレにならない気がする。オスマンの場合は年齢と元々学者タイプというのが相まって、勿体ないことになっている気ががが。

修正　２０１１／０９／０４　２２：３０　誤字脱字修正、本文大幅加筆

第８８話　軍師は外へと誘い、雪風は内へ誓う事

王都トリスタニアの西端にある広大な敷地と、中央にそびえ立つ地上３０階建ての魔法塔を含めた、ひとつの拠点と呼んでも差し支えない佇まいの其処は、創立から数千年の歴史と伝統を誇る魔法研究所、通称『アカデミー』と呼ばれる学術研究機関にして、トリステイン王国の『知』を司る場所だ。

こういった研究機関は、トリステイン王国に限らず他国にも多数存在するが、その研究内容は千差万別。国家や機関によって大きく異なる。

たとえば、ガリア王国で現在最も盛んに取り組まれている研究内容は、魔法人形――『ガーゴイル』に関するものだ。これらは衛兵の代わりにガーゴイルを置いて門を守らせたり、重い荷物の運搬を補佐するなど、生活に即した技術として利用されることが多い。

この研究を始めた当初こそ、一部の貴族や寺院などから、

「神の御技たる魔法をそのように使うのは下賤で、はしたないことなのではないか」

と、いったような意見が出ることもあったが、鼻薬を嗅がされたり、もたらされた研究成果によって自身の領地収入や寄付金の額が大幅に増えたことがわかった途端、彼らは一斉に口をつぐんでしまった。

……結局のところ。新しい技術が台頭してきたとしても、自分たちが損をせず、逆に大きな利益があることさえ理解できれば、こう

いった輩は文句など言わなくなるのだ。

帝政ゲルマニアでは『魔法と工業技術の融合』に関する研究が盛んだ。中でも、冶金技術の向上に関して、特に熱心に取り組んでいる。

＜錬金＞の魔法で金属を錬成すると、どうしても不純物が多く混じってしまう。これは、メイジ個人がそれぞれに持つ『感覚』と『イメージ』によって、錬成結果が大きく左右されてしまうためだ。

だが、問題の不純物さえ上手く取り除くことさえできれば、将来的に鉱山で採掘した鉱石から精製される金属と同等か、それ以上の物が比較的安定して入手できるようになるという見込みから、この研究に投資している資産家は多い。なお、錬成における個人差を埋めるための魔法研究も、併せて行われている。

これらの研究による副産物として、ゲルマニアでは『錬金術師』と呼ばれる、＜錬金＞を専門としたメイジが数多く輩出されている。

中でも、世界中にその名を轟かせている『宝剣の錬金術師』シュペー卿が作る宝剣は、その美術品としての価値も相まって、なんとトリスタニアの郊外に屋敷を構えることができるほどの高値で取引されている。彼の作品を、自分に仕える平民の従者や護衛士に持たせることが、一種のステイタスになっている程だ。

ある意味、過去の常識や伝統に囚われず、金と実力さえあれば、魔法の有無に関係なく貴族の身分を手に入れることができるゲルマニアならではの現象とも言えるだろう。

――そして、トリステイン王国の王立魔法研究所の基本方針はと

いうと。

かの機関では、創設当初からの理念と伝統を守り、所属する研究者の全てが一丸となってひとつの課題に取り組んでいた。そのテーマとは、

『魔法をより深く学ぶことで、始祖の御心を知る』

ことである。ただし、それは

「なぜ、魔法によってこのような事象が発生するのか」

と、いったような、魔法の仕組みや詳細を調べるための研究ではなく、

「かつて『始祖』ブリミルが用いた炎は、どのような形をしていたのか」

とか、

「聖具を作成するための金属として、どのようなものを用いるのが最も適しているか」

とか、

「寺院に設置された燭台の火を揺らすための風量は、どの程度の強さが望ましいか」

などといった、およそ生活の役に立たないもの――すなわち『神学』の域を出ないものがほとんどであった。とはいえ、トリステイ

ンのアカデミーが『始祖に関する研究』という分野において、ブリミル教の総本山たるロマリア皇国連合に次ぐ研究成果を上げているのは、間違いようのない事実である。

……それがきちんと国政に生かされているのかどうかについては、また別の話だ。

そして、このような気風が故に、少しでも変わった研究テーマ――たとえば、風と火の魔法を利用した暖房装置の制作などといった『始祖から伝えられし魔法本来の用法から外れたもの』を提示すると、最高評議会と呼ばれるアカデミーの運営意志決定機関によって、研究の開始前段階で全て弾かれ、消えてゆく。

審査によって弾かれ、研究予算が下りない程度ならばまだいい。あまりにも『伝統』から外れたテーマを出したりすると、最悪の場合『異端』の烙印を押された挙げ句、研究員としての資格をも剥奪され、アカデミーはおろか学会からも永久に追放されてしまう。

これが『伝統』と『格式』を重んじる、トリステイン王立魔法研究所の現実だった。

だが、そのような空気が蔓延している機関だったからこそ、長期休暇を終えて戻ってきた直後にエレオノールが示した姿勢は、評議会のメンバー達から高く評価された。

復帰直後。評議会長の元へと挨拶に訪れた彼女は、なんと、こう言ったのだ。

「長期の休暇をいただきましたお陰で、改めて自分の研究について見つめ直すことができましたの。『始祖』の御心に近付くために

は、神学をより深く学び直す必要性がある。今のわたくしに真に不足しているものは、それなのだと」

エレオノールの言葉を聞いたアカデミー評議会長のゴンドラン卿は、大いに喜んだ。

「さすがは、国内でも特に伝統と格式を重んじる、ラ・ヴァリエール家のご息女だ。一時期は、その、なんだ。色々あっていまいち研究に熱が入らないようであったが、彼女本来の調子が戻ったようで何よりだよ」

などと、会談終了後に自分の秘書に向かって、ほっとした様子でそう告げたほどだ。

だが、そんなエレオノールの態度を、逆に不安視する者たちも存在した。その筆頭は、彼女の同僚であり後輩でもある、ヴァレリーという名の女性研究員だ。

「神学をさらに追究する、ですって？　まさかとは思うけれど……例の一件を気に病んで、将来は修道女になる、なんて言い出したりしないでしょうね」

エレオノールが、長年付き合っていた貴族から一方的に婚約を破棄されたという噂は、既に魔法研究所中に広がっている『公然の秘密』であった。噂が出回り始めた当初こそ、単なる噂だろうと思っていた人々も、

「そうよ……こんなふうに研究一辺倒の生活を送っているから、彼との縁がなくなってしまっただけなのよ。わたくし個人に難があるわけではないの」

などと、どんよりとした空気を纏い、ひとりぶつぶつと呟き続けていたり――もちろん当の本人は、そんな自分の思考が、外界へだだ漏れになっているなどとは思いも寄らなかったわけだが――どこかで『結婚』という単語を耳に入れた途端、それを発した者の側へと電光石火の如き素早さで駆け寄り、ぎりぎりと喉を締め上げながら、

「そのように縁起の悪い言葉を、わたくしの前で軽々しく口に出さないでくださる？」

と、凄まじい勢いで詰め寄った挙げ句、

「さあ『結婚は人生の墓場』とおっしゃい！　じ・ん・せ・い・の！　は・か・ば！！それを理解しなければ、あなたの全てが終了するのよ……ふふ……ふふふふふっ」

などと、不気味な微笑みを浮かべながら復唱を迫る姿を見てしまっては、真実であると認めざるを得ないだろう。特に、エレオノールと仲の良いヴァレリーは――自身が締め上げられた経験を持つだけあって、他の人間よりも余計に、同僚の行く末を案じていた。

「彼女、戻ってきてから自分の研究室に籠もりっぱなしだし……きっと、精神的に不安定になっているに違いないわ。少し気分転換させてあげたほうがいいわよね」

ヴァレリーはそっと自室の外へ出ると、研究塔の４階にある、エレオノール専用に設けられた研究室へと向かった。

――いっぽうのエレオノールはというと。一部の同僚たちから、

そんな目で見られていることなどつゆ知らず。ただひたすらに、自分の征くべき『道』を邁進していた。

半月ほど前。彼女の妹が、真の系統に目覚めた直後のことだ。エレオノールは、ひとり父親の書斎へと呼び出され、衝撃の事実を知らされていた。

「が、が、ガンダールヴの名を聞いたときに、もしやとは、思っていました、けど……やっぱり、あ、あのサイトが、おちびの使い魔……しし、しかも、み、ミスタ・タイコーボーもミス・タバサに＜召喚＞されて、このハルケギニアへやって来たですって！？」

同席していたオールド・オスマンが、重々しく頷いた。

「彼の件については『事故』として処理した上で、箝口令を敷いておるが、教職員たちはともかく、生徒たちや学院内で雇っておる平民たちについては、完全に手を回しきれたとは言い難い。よって、いつかは外に漏れてしまう可能性のある情報であることと……」

オスマン氏の視線を受けたラ・ヴァリエール公爵が、その後を引き継いだ。

「我がヴァリエール公爵家の長女であり、アカデミーの主席研究員たるおまえならば、自力でそこへと辿り着く可能性がある。それを踏まえた上で、エレオノールよ。おまえにだけは前もって伝えておいたほうがよいと判断した」

ルイズの系統と同様、決して他言無用である。そう前置きをした上で、ラ・ヴァリエール公爵は娘に訊ねた。

「例の歓待を行う前。魔法学院から帰還した直後に、おまえはわしにこう言ったな？　ミス・タバサはガリア王家の血を引く、高貴の出である可能性があると」

「え、ええ。そもそも『タバサ』という名前自体、普通ならば人間につけるようなものではありませんわ。ですから、偽名を使っておられるのではないかと判断したのです。それに、わたくしは実物を見たことはありませんでしたが、透き通った水底のような髪色は……ガリア王家か、それに近しい者にしか現れない色とされていますから」

エレオノールの答えに、ラ・ヴァリエール公爵は至極満足げに頷いた。

そもそも『タバサ』という名前は、ハルケギニアの国々において、犬猫などの愛玩動物や人形などに用いるのが普通だ。人間につけることなど、まずありえない。現代日本風に喩えるならば、自分の子供に『ポチ』と名付けるようなものだ。

また『ガリアの青』は、その名前こそ通ってはいるものの、実際にどのような『青色』であるのかを詳しく知る者は少ない。ガリアの宮廷に出入りする者たちならまだしも、他国の人間ならばなおさら知り得ないことだ。

実際、このハルケギニアには青色がかった緑や、濃紺色の髪を持つ者なども存在する。よって、身近に『青い髪』の者がいても、すぐに『ガリアの青』と結びつけて考えることのできる者は、ごく一握りの者に限られていた。

これまで研究一筋に生きてきたとはいえ、トリステインの社交界

に通じ、海外の事情についてもそれなりに承知していたエレオノールだからこそ、タバサが偽名を使ってまで身分を偽る必要のある人物だという可能性に辿り着くことができたのだ、とも言える。

「君の推測は当たりじゃよ、エレオノール君。とはいえ、さすがにミス・タバサの素性まで明かすわけにはいかんが……ここまで聞いて、何か思い当たることはないかね？」

オスマン氏からそのように告げられて、エレオノールは考えた。おちびの系統を知った直後、新たにわたくしへともたらされた情報について精査しろということか、と。

「ガリア王家の血を引く者にしか現れないとされる青髪の少女が、おちびと同じように『人間』の使い魔を呼び出した。おちびの使い魔サイトは『あらゆる武器を使いこなす』能力を持つ、かつて『始祖』ブリミルが使役したとされる伝説の使い魔と、同じルーンを刻まれし者……」

わずかな時間、頭の中で検討を重ねた結果――彼女はすぐさまそこへ到達した。

「ま、まさか、ミスタも……伝説の使い魔の一柱だと仰るのですか！？　いえ、そう言われてみれば確かに、あのかたが持つ知識や、魔法具を複数お持ちだという話は……始祖の伝承に記された『神の本』そのものだわ！」

思わず叫び声を上げ、興奮して椅子から立ち上がったエレオノールであったが、何故か目の前にいる老人がくすくすと笑っているのを見て、少々気分を害した。

「な、何がそんなにおかしいんですの！？」

「いや……な。その若さでたいしたものだと感心しておったのじゃよ。わしが、もしも契約の儀式に立ち会っておらなんだら、ほぼ確実に、君と同じ間違いをしていたと思えるだけに、なおさらじゃ」

「わたくしと、同じ間違い？」

「そうじゃ。彼に刻まれたルーンは＜アンサズ＞で、＜ミョズニトニルン＞ではない」

「アンサズ……確か、暦の『アンスール』の元になったとされる、古代ルーン文字ですわよね。わたくしの記憶では＜知恵＞を象徴する文字だったと思いますが」

これを聞いたオスマン氏は、満面の笑みを浮かべてラ・ヴァリエール公爵を見た。

「いやはや、公爵のご息女は本当にたいしたものですじゃ。若くしてアカデミーの主席研究員の席を確保しただけのことはありますわい。古代ルーン語の資料なしで、これほど即座に答えを出せる者など、そうはおりませんぞ」

自慢の長女について、オスマン氏から飾り気のない賛辞を受けたラ・ヴァリエール公爵は笑み崩れそうになったが、状況が状況だけに、必死の体でそれを押さえ込んだ。

「つまりだ。君ほどの知識と情報を持つ者ならば、最悪の場合、彼が『神の本』であるという間違った結論に達した挙げ句、おかしな推論を重ねて、時間を無駄にしかねない。そう判断したため、念

のため話しておこうと考えたと。こういうわけなのじゃよ」

「おまえは、我がヴァリエール公爵家の中で、最も『始祖』と『伝説』に関する知識を持ち合わせている。その学識と頭脳を、正しき方向へ向けて欲しいのだ」

「おちび……いえ、祖国と家族を守るために……ですわね？」

長女が導き出した答えに満足したラ・ヴァリエール公爵は、それ以上言葉を重ねることはなかった。

――そんな父の期待を背に受けたエレオノールは、ただひたすらに、己の信じた『道』を突き進んでいた。それが本当に正しいものかどうかはさておくとして。

「これよ……この資料だわ！　わたくしの『学説』を後押ししてくれるのは！！」

現在彼女が手にしているのは、ごく最近ロマリアから輸入されてきた、最新の神学書に記載されていた『始祖の調べ』という歌であった。似たような資料は、アカデミーの書物庫や王立図書館にも存在していたが、伝説の使い魔についてここまで詳しい記述があるものは、他に無かった。

そして問題の書物には、こう記されていた。

――神の左手ガンダールヴ。勇猛果敢な神の盾。左手に掴んだ大剣と、右手に構えた長槍で、道征く我を守りきる。

――神の右手はヴィンダールヴ。心優しき神の笛。あらゆる獣を操りて、導きし我を運ぶは地海空。

――神の頭脳はミョズニトニルン。知恵のかたまり、神の本。あらゆる知識を溜め込みて、迷いし我に助言を呈す。

――そして最後にもうひとり……記すことさえ憚られる者……。

――4人のしもべを引き連れて、我はこの地へやってきた……。

「この資料によれば『始祖』ブリミルは、ハルケギニアで使い魔を呼び出したのではなく、共に連れて来られた……つまり、祖国または近隣諸国のいずれかで、彼らを従えた後に、この地へと降臨なされたということだわ」

そして彼女は、さらに推測を重ねた。

「サイトとミスタは、髪や肌の色といい、特徴的な顔形といい、実の兄弟と言っても通じそうなほどによく似ているわ。オスマン氏がおっしゃるには、ふたりの出身国は隣同士だとか。ああっ、もう！　ミスタ・タイコーボーが今ここにいらっしゃれば、すぐにでも事実確認ができるのに……」

と……そんな彼女の声に応えるかのように、一羽のフクロウが窓をコツコツを叩いた。慌てて窓を開いたエレオノールは、フクロウの足に括り付けられた書簡を開く。途端に、彼女の顔はぱあああっと華やいだ。

何故なら、そこには彼女が待ち望んでいた人物が帰還したという報せと、希望する会談日時を折り返し送付されたし――と、いうオスマン氏からの伝言が記されていたからだ。

エレオノールは急いで羽根ペンを取ると、手元にあった羊皮紙にすらすらと文字を書き付け、窓枠に留まって返事を待っていたフクロウの足へと括り付けた。

そして、見るからに頑丈に造られた金庫の中から、複数の紙束を取り出して鞄に詰め込み、部屋の外へと飛び出そうとしたその瞬間。コンコンと遠慮がちに扉がノックされ、エレオノールは口から心臓が飛び出すかと思うほどに驚いた。

「ど、どうぞ」

内心の動揺を押し殺すように、来訪者へ入室を促す。

扉を開けて入ってきたのは、ひっつめ髪に眼鏡をかけた妙齢の女性であった。彼女は、エレオノールの様子を見て言った。

「もしかして、お取り込み中だったかしら」

「え、ええ。これからちょっと、急いで出かける必要があるの。ところで、何か御用かしら？　ヴァレリー」

ヴァレリーと呼ばれた女性は、エレオノールの足元に置かれた鞄をちらと見て、顔にわずかな戸惑いの表情を浮かべながら答えた。

「良かったら、今夜街で一緒にお食事でもどうかと思ったんだけれど……これから出張なら、残念だけれど無理ね」

「ごめんなさい。悪いけれど、また今度誘ってもらえるかしら？」

「ええ、もちろん。でも、思ったより元気そうで良かったわ」

「あら。わたくしが、どうかしまして？」

「あ、ううん、こっちの話だから気にしないで。お邪魔しちゃってごめんなさい」

そう言って、慌てたように部屋を出て行ったヴァレリーの後ろ姿を見送ると、エレオノールは今度こそ目的地へ移動すべく、外へと飛び出した。彼女の行く先はもちろん、トリステイン魔法学院である。

ちなみに。先程返送した手紙には、こう書かれていた。

『今から3時間後に、お邪魔致します』

……普段はそれなりに落ち着いている彼女も、やはり『烈風』の血を引く者であった。

○●○●○●○●

――どうやら彼女たち姉妹の＜力＞は、何かを『掴む』ことに特化しているようだ。

来客室に通された後、挨拶も早々にエレオノールから手渡された論文に目を通した太公望は、そのように結論した。

今まで開示されていたごくごくわずかな情報の断片から、彼女がとある可能性――

「太公望の師が、始祖あるいはそれに近しい者の叡智と〈力〉を継ぐ者である」

「始祖ブリミルが、太公望の祖国からハルケギニアへやって来た可能性がある」

ここまで辿り着けたことに、太公望は素直に感心していた。なるほど、末妹が『虚空』を掴み、次女が『思考』を拾う者だとするならば、彼女は『真理』を手にする者なのかもしれない……と。

こういった『天才』は、過去の歴史においてもごく稀に存在した。そこへ至る道順や数式が完全に間違っている、あるいは存在すらしていないにも関わらず、いったいどういう理屈からなのか、最終的に正しい解答を導き出してしまうのだ。

だが、ある意味当然のことながら、彼らは他者に経緯の説明を行うことができず、やがて個の中に埋没し……そして長い刻を経て、ようやく正しい道筋を開拓した者たちの手によって、その功績を評価される。ただし、それは既に『真理』へと導いた功労者が、儚く世を去った後であることが多い。それはさておき。

――まずは、太公望の師・元始天尊について。

崑崙山の教主・元始天尊が、地球の『始祖』伏羲の同盟者にして、理念を共有する者であったことは確かだ。

その力と叡智についても、５人の始祖が万が一のときの為に残した『最強の７つ』のひとつにして、周囲の重力を自在に操るスーパー宝貝『盤古幡（ばんこはん）』を完全に使いこなせるほどの実力があったことや、残された知的財産を元に、数多くの宝貝を生み出せた事実。そして封神計画の根幹を立案した腹黒さ――もとい知謀などを鑑みても、彼が『始祖』たちの＜意志＞を色濃く受け継いでいたことは間違いない。

ただし、これはあくまで地球の『始祖』の話であって、＜虚無＞云々を含めた、ハルケギニアとの関連性は一切不明だ。そもそも、虚無魔法とされるものが、未だ＜瞬間移動＞だけしか開示されていない現状で、それを判断するのは無理があるというものだ。

――次に、ハルケギニアの『始祖』ブリミルが、太公望の祖国……つまり地球からやって来た可能性について。

これは実際にゼロではない。ただし、絶対とも言い難い。何故なら、これは以前太公望が才人たちに語った内容でもあるのだが、ブリミルが『滅びた世界』から星の海へと逃げ延びた者たちのひとり、あるいは彼らの子孫であるということも考えられるからだ。

『杏黄旗』の起動状況から判断するに、それは決してありえない話ではない。確率からいえば、五分五分といったところか。

じっと黙り込み、額を抑えて思考の海に埋没してしまっていた太公望に向けて、エレオノールが不安と期待に満ちたような声をかけてきた。

「あ、あの……それで、いかがでしょうか？　この、説についてなんですけれど」

正直なところ、なんとか煙に巻いて誤魔化したいというのが太公望の本音だった。

だが、これほどの知識と感覚を持つ者を放置し、間違った『道』を探らせ続けるのは忍びない。自分のように永遠を生きる者ならばともかく、ごく限られた『時』しか持たない人間が相手ならば、なおさらだ。

――結局のところ。太公望という男は、やはりどこまでもお人好しなのであった。

とはいえ、自分や周囲を大きく脅かすほどの危険までは冒したくない。そう考えた太公望は、大きく息を吐き出した。

「エレオノール殿、念のため確認したいのですが」

「は、はい、な、なんでしょう？」

「これはまだ、誰にも……？」

その問いに、眼鏡の端を抑えながらエレオノールは答えた。

「当然、秘匿しておりますわ。わがヴァリエール公爵家だけではなく、国家の安全に関わる情報となる可能性をも秘めていますから」

「左様ですか。ならば、ひとつエレオノール殿にお伺いしたいこ

とがあります」

「な、なんでしょう……？」

これまでになく真剣な顔で、そう問うてきた太公望を見たエレオノール女史は、思わず息を飲んだ。

「あなたは、真理を追うためならば、輪の外へ飛び出す――そう、たとえ『異端』と後ろ指を差されても構わないと言えるだけの、強い覚悟をお持ちですか？」

○●○●○●○●

――いっぽうそのころ、学院長室には。

「もうええ加減、＜魔法探知＞の効果は切れとる頃じゃろ。モートソグニル～」

「……ちゅう」

そう呟き、いそいそと自身の使い魔を忍び込ませる『準備』をしていた人物がいた。それはもちろん、この部屋の主であるオールド・オスマンそのひとである。

「うくくくく……個人的な話、のう。はてさて、あのエレオノール女史がどんなことを言い出すのか、楽しみじゃわい」

……とんだ出歯亀ジジイが鎮座していた。

――さらに。寮塔5階、タバサの部屋では。

「ねえ、タバサ。ミスタたちが何をしているのか、興味ない？」

「それほどは」

「それほどってことは、少しはあるってことよね！　だったら『水の塔』の屋上へ行ってみない？　あそこって、ほら……来客室の窓がよく見える場所でしょう？」

「……そこから＜遠見＞で、中を覗けということ？」

「んもう！　タバサってば覗きなんて言っちゃダ・メ。ただの確認なんだから」

……キュルケが、親友を焚きつけていた。

「わたしは気が進まない」

付き合いの長いキュルケにしかわからない程度に顔をしかめて、タバサが答えると。彼女の親友は、自慢の赤毛を揺らしながら青髪の少女にしなだれかかった。それでも、少女はぴくりとも動かない。

「本当にあのひとたちのこと、気にならないの？」

「話してもいい内容なら、あとで聞けば教えてもらえる」

ついにキュルケは、恋愛に関してはそれなりに気の長い彼女としては珍しく……しびれを切らしてしまった。

「……質問を変えるわ。ねえタバサ。あなた、ミスタのことをどう思う？」

「どう、とは？」

いつも通り全く感情を表に出さぬまま、タバサは親友に訊ねた。

「そうねえ……たとえば、一緒にいるとわくわくしてこない？」

「確かに、色々なことを知ることができて楽しい」

思わずがっくりしそうになったキュルケであったが、ギリギリのところで耐えた。

「そ、そう。なら、彼の近くにいると、どんな感じがする？」

「……どきっとする」

この答えに、キュルケは顔全体を輝かせた。

「そ、それは、もっと具体的に言うと！？」

「すごく……心臓に悪い」

……だが、帰ってきた答えは想像以上に無情だった。

それから十数分後。肩を落とし、何やら悟りでも開いたような顔をしたキュルケが部屋から出て行くのを見送ったタバサは、ひとり静かな思いに耽っていた。

タバサは、キュルケが本当は何を言いたかったのか、自分にいったい何を求めているのかを充分に理解していた。だからこそ、彼女は何もわかっていないふりをして、わざわざあんな答えを返したのだ。

「キュルケは、わたしに恋人ができればいいと思っている」

なにせ、1年以上も前から、タバサはキュルケにこう言われ続けてきたのだ。恋は本当に素晴らしい。わくわくして、どきどきして、ただそのひとのことを考えるだけで、夜も眠れないほど興奮するのだと。そして、〆の文句はいつも同じだった。

「だから、恋人を作ってみない？　なんなら良い男を何人か見繕ってくるから！」

もはやお決まりとなっていたその言葉を、キュルケはここ最近全く口にしなくなった。その代わりに、タバサと太公望の様子を、時折こっそりと探るように見つめてくるのだ。

そんな彼女が、ここ数日間何やら妙に張り切っていた。そこへ、よりにもよってルイズの姉と太公望が会談している場面を覗けなどという、おかしな催促までしてくる始末。

いくら恋愛事情に疎いタバサでも、さすがにそこまでされたら――自分たちふたりが、親友から何を期待されているのかぐらいは判断できる。

「間違いなく、わたしとタイコーボーが恋人同士になればいいと願っている」

その考えを口に出したタバサは、改めて自分の心に向けて問い質してみた。わたしは、彼のことをどう思っているのだろう。もしかすると、本当にキュルケが期待するような対象として、彼のことを見ているのだろうか……と。

確かに、一緒にいると楽しい。だが、わくわくするかと言われると、違う気がする。

近くにいて彼の言動を見続けていると、心臓だけではなく、胃がキリキリしてくる。

彼を思って興奮するどころか、逆に冷静な視点で自分を観察し直すことができる。

キュルケの言葉だけでなく、これまで多くの書物から得てきた『恋』に関する知識と照らし合わせて検討してみても……自分が『そういう対象』として彼を見ているとは到底思えない。ただ……と、タバサは考えた。では、いったいどう感じているのだろうかと。

――そして彼女はふいに思い出した。あの日のことを。

あのとき。暗殺者の手にかかって、命を失いそうになったあの夜。絶望に塗り潰されかけていた心の片隅で、ごくごく僅かにだが期待している自分がいた。

必ず、彼が助けに来てくれる――と。

そして、期待通りに彼は現れた。半分途切れそうになっていた意識の中、タバサの心は安堵と喜びで満ち溢れていたのだ。ほら、や

っぱりこのひとは来てくれた……と。

だからこそ、イザベラが放った言葉に激しいショックを受け――そこではじめて、自分の従姉妹が置かれた立場や、王女というものについて、真剣に考えるに至ったのだ。

正統な手段で王座を継承したにも関わらず、簒奪者と呼ばれ続ける国王の一人娘。

いつなんどき、そんな嘘にまみれた噂を信じた家臣たちに寝首を掻かれるかわからず、夜もおちおち眠れない。だが、今のタバサのように――いざという時に、手を差し伸べてくれるひとは誰もいない。数少ない味方であるはずの父王との関係も、非常に薄いと話に聞いたことがある。

国の裏側の支配する者として、間違いなく高い実力を持っているにも関わらず、ただ魔法が下手だというだけで笑われ、宮廷のそこかしこで陰口を叩かれ、誰からもその手腕を正しく評価してもらえない――孤独な姫君。

かつて、太公望はイザベラをしてこう評した。

「他人に自分の存在価値を認めてもらいたくてたまらない、孤独な子供」

……と。

あのときのタバサには、その意味が全くわからなかった。豪奢な王宮で大勢の家臣に傅かれるイザベラの、いったいどこが孤独なのかと反論した。今でも、彼女の心情を完全に理解できたとは言い難

い。しかし、その内情くらいはわかるようになった。

広い王宮の中に、イザベラの味方と呼べる者は――ごく僅かにしかいないのだろう。

そんな状況下で、あの東薔薇花壇騎士団の長のように、表では自分に忠誠を誓っているように見せかけつつも、裏では反逆者の娘に心を捧げている者が大勢いることを知ってしまったら――それはいったいどれほどの孤独と恐怖を、心の内に呼び込むのだろうか。

「けれど、イザベラは王女だから怖いと言えない。代わりに、周囲に不満をぶつけて、自分のほうが従姉妹よりも優れているとわめき散らしていた……子供だから。恐怖と悔しさを打ち消すために。そして、さらに味方を失っていくという悪循環に陥っている」

ガリアの政情から遠く離れたトリステインの魔法学院で、心を許せるパートナーや友人たちに囲まれた生活を送っている自分には、到底理解しえないだろう感情を、イザベラはずっと抱え続けていたのだ。そこに思い至ったとき、タバサの不眠はさらに酷くなった。

もしも、父がジョゼフ伯父上を打ち倒し、正統な王権を奪い取っていたとしたら。自分が、イザベラと全く同じ立場に置かれたとしたら――果たして耐えられるのだろうかと、ありえない妄想を描き出したことによって、昏い思考の淵に囚われてしまったが故に。

ところが、とある出来事をきっかけに……不眠の原因が、あっさりと消え去った。

任務を終え、ガリアから戻ってきたあの夜。タバサは夢現の中に在りながら、ぼんやりと覚えていた。太公望に背負われ、キュルケ

から静かに見守られながら、自分の部屋まで戻ってきたことを。

その後――タバサは夢を見た。幼い頃、未だ健在であった両親に連れられて、ラグドリアン湖へピクニックに出かけたときの夢を。嬉しくて湖畔ではしゃぎ回り、水遊びに疲れた自分をおぶってくれた父親と、笑顔でそれを支えてくれた母親の姿を。幸福と温もりに包まれたその幻は、彼女にまとわりついていた暗闇の雲を、綺麗に祓ってくれたのだ。

「ごめんね」

思考の末、遂に結論へと達したタバサは、微かに口元を綻ばせながら小さく呟いた。

まさか『雪風』とまで呼ばれた自分が――年長のパートナーと親友のことを、どうやら心の奥底で、父と母のように感じていたらしいなどということは……赤面するほど恥ずかしくて、表に出すことなんか絶対にできない。当然、ふたりにも話せない。

「イザベラのことを、子供だなんて言えない。わたしだってそう」

今ならわかる。病から回復し、元気を取り戻した母さまと離れればなれになったというだけで、わたしは不安のあまり眠れなくなったのだ。けれど、信頼できるひとたちが自分の側にいてくれるのだと改めて確認できたから、こんなにも落ち着くことができたのだと、タバサは心で理解した。

「今のわたしは、昔よりもずっと弱くなってしまったのかもしれない」

復讐だけを胸に抱いて、全ての感情を封じ込めていたあの頃。それ以外のことから耳を閉ざし、目を瞑っていたときは、内に秘めた憎しみだけが自分を突き動かしていた。物言わぬ、冷たい人形の兵士として。

それが――母を無事救い出した途端。封印していた感情だけでなく、これまで知り得なかった、いや、知ろうとしなかったことに目を向けた瞬間。タバサの視野は大きく広がったのだ。心の安定と引き替えに――。

「ううん、安定していたんじゃない。無理矢理押さえつけていただけ。だから、母さまが助かったとわかってから、心の動きを抑えきれなくなったのね」

あの時から、タバサは人形ではなくなった。感情豊かなシャルロット姫に戻ったのだ。周囲の出来事に大きく心が揺れるようになったのが、その証拠だ。

だからこそ。キュルケは、今までよりもずっと熱心に恋愛を奨めてくるのだ。タバサの中で一つの区切りがついたと思しき今、自分が最も楽しいと感じているものを共に分かち合おうと、親友である自分を誘ってくれているのだと、タバサは受け取った。

「キュルケの気持ちは嬉しいけれど、わたしはまだ、恋人を作ったりなんかできない。だって、子供だし……なによりも、やらなければいけないことがあるから」

弱くなってしまったぶんは、別のところで取り返さなければいけない。自分の目的――妹の消息を掴み、真実を知る上で、それは絶対に必要なことだから。でも……。

「全てが終わった後、わたしが本当に恋人をつくることができたなら……その時には、いちばん最初に、あなたに報告するから。今はまだ……許して欲しい」

タバサは、心の内だけでこっそりと――赤毛の親友に誓った。

第８８話　軍師は外へと誘い、雪風は内へ誓う事（後書き）

とんだ流れになって参りました。

各国の研究事情については一応原作を踏襲しております。本編で出番のなかった（？）シュペー卿がこんなところに登場。ジョゼフは、きっと人型二足歩行ロボに浪漫を感じるタイプなのだと思います。トリステインのアカデミーは、新技術開発には厳しいものの、逆に神学についてはどん欲というイメージ。

書いていて改めて感じたのですが、本当に太公望に恋愛という要素は「混ぜるな危険」ですネ。筆者には、他キャラはともかくとして、太公望側からのリアクションが全く想像できない……ッ。よって、どうしてもこんな流れ（周囲が騒ぐ系）になってしまいます。

また、今回ついにタバサから太公望に対する心情を書いてみました……どう見てもお父さんです本当にありがとうございました。フラグクラッシャーの名は伊達ではなかったという。代わりに違うフラグが立っちゃった的な。

不眠症になっていたはずの彼女が、熟睡していて王天君と太公望のバトル開始に気付けなかったのは、実はこれの前振りでもありました。すみません。

次回『輪の外』についてと……です。エレオノールにあんな質問をして、果たしてどんな展開になるのかは……なんとなく予想はつくかと思われますが、今しばし内緒ということで宜しくお願い致します。

２０１１／０９／１２　９：００　誤字脱字修正、本文加筆修正
２０１１／０９／１７　２１：００　遠見の鏡からモートソグニル潜入に修正

第８９話　女史、輪の内に思いを馳せるの事

――時は、数日前の朝まで遡る。

エレオノールは鏡に映った自分の顔を見て、笑みが溢れ出るのを止められなかった。

「う、うふ、うふふふふ……まるで学生時代に戻ったようだわ！これって、やっぱり『瞑想』の付加効果よね」

末妹ルイズに起きた異変について、かの『東の参謀』太公望を頼った際に、話の流れで教えてもらった『東方の秘術』が、彼女のご機嫌を最高の状態にまで高めていた。

「毎日１時間実行するだけで、お、お肌の張りが……髪のツヤが……あの『魔法酒』に浸したときのように、ツルツルのすべすべになるだなんて！　本当に素敵ですこと」

そもそも仙人界における『瞑想』は、＜生命力＞の回復と精神の安定のために生み出された技術であるため、実行すれば『仙酒』ほど強力ではないものの、ほぼ同様の効果が現れるのは至極当然のことであり――お肌の曲がり角を意識し始める妙齢の女性にとって、到底抗い難い魅力があることは言うまでもない。

「ミスタ・タイコーボーが、未だに子供のような姿を保っておられるのは、もちろん『妖精の祝福』があってこそなんでしょうけれど、この『瞑想』の効果もあるのではないかと思うわ。ああ、もう！　なんて素晴らしい魔法なのかしら！！」

そう口に出した瞬間。エレオノールは、大変な事実に気がついた。いま、わたくしは何と言った？　素晴らしい魔法。すばらしいまほう。スバラシイマホウ。

「そそ、そうよ……こ、これって……精神力と身体を、か、回復してる……魔法よね。つまり、杖も、ルーンすら用いずに行える＜治癒魔法＞の一種じゃないのよ！」

エレオノールは、その場で冷えきった青銅の彫像と化した。

実際には、仙界流で言うところの＜星の意志＞が集約し、具現化した存在たる＜精霊＞の助力を得て奇跡を行使するのが精霊魔法、つまり＜先住魔法＞なのであって、それと『瞑想』とは根本から性質の異なる『技術』なのだが、そのようなことはエレオノール――いや、ハルケギニアの人間たちには関係ない。

なにせ、彼らはゆりかごの中にいる時から、

「神の御技たる魔法は、杖と魔法語を用いて行われる奇跡である。しかるに、異教を信ずるエルフや妖魔どもは、それらを使わずに魔法を行使する。偉大なる『始祖』ブリミルの業績を認めぬ、罰当たりな亜人たちが扱う邪悪な技。それが＜先住＞の魔法なのだ」

……このように教わり、育てられているのだから。

乱暴な話だが、彼らの間では『杖』と『魔法語』つまり、ルーンを用いずに行使される魔法的事象は、コモン・マジックという一部の例外を除き、全て『先住魔法』という名のカテゴリとして一括りに纏められてしまっているのが現状だ。

そう……つまり。彼らハルケギニアの民の間に広まっている『常識』と照らし合わせて考えるならば。エレオノールは、なんと邪悪な異教の技とされている『先住の治癒魔法』を身につけてしまったことになるのだ。

その、とてつもない現実を前にしたエレオノールは、自分の身体からざあっと血が引いていく音を聞いたような気がした。

「も、もしも、ここ、これがブリミル教の、神官に知られたら、い、異端認定確実よ。アカデミーから除名される程度じゃ済まない。その場で拘束されて、聖堂騎士団に引き渡されるかもしれないわ。そうなれば、ま、間違いなく異端審問にかけられた挙げ句に有罪判決を下されて、釜茹で。もしくは火あぶり」

たとえ寺院に気取られずとも、問題は山積みだ。その筆頭が『烈風』カリンこと、エレオノールの母親の存在である。

『鋼鉄の規律』などという仰々しい二つ名を持つ母に、先住魔法を覚えてしまいましたなどと告げたらどうなるか。ほぼ間違いなく、厳しい裁きを受けることになるだろう――それこそ、異端審問など生ぬるいと思える程に苛烈のものを。

そこまで思い至ったエレオノールは、その場で小さく蹲り、ガタガタと震え出した。

それから、彼女はすぐさま『始祖』に許しを請うべく、身を清めて屋敷の礼拝堂に籠もり、一心不乱に祈りを捧げたのだ。たとえ意図したことではないとはいえ、ブリミル教の教えから外れてしまった自分に、どうかお慈悲を賜らんことを――と。

――彼女のことを笑ってはいけない。これは、敬虔なブリミル教信者の視点から見た場合、ごく当たり前ともいえる反応なのだ。むしろ、何の疑問もなく『瞑想』を受け入れてしまった『水精霊団』の面々のほうがおかしいのである。

もっとも彼らの場合は、この――ブリミル教信者にとっては――忌むべき技が内包する大変な問題に、ちっとも気が付いていないだけのことなのだが。

思わぬことから魂の危機に瀕したエレオノールであったが、しかし。幸いなことに、彼女は希望の光ともいえる『道』を見出しかけていた。それが、

「始祖ブリミルが、太公望の祖国からハルケギニアへやって来た可能性がある」

と、いう彼女自身が打ち立てた学説である。

「そうよ！　わたくしの説が正しければ『始祖』生誕の地では、ごく当たり前とされている、別系統の魔法を身につけただけ。そういうことになるのよ！！」

ただの屁理屈。現実から目を逸らしているだけだと言われてしまえば、全く持って反論できないことではあったのだが、それでも。エレオノールには他に縋るものがなかった。よって彼女は――その時以降、より熱心に自説の証明のために奔走した。

……そして、現在に至る。

結果として。『始祖』は彼女に微笑んではくれなかった。期待３

割、不安7割で提示した論文に目を通した後、彼女の学説を証明してくれるであろう人物から、改めて現実を突き付けられてしまった――こう問いかけられたことによって。

「真理を追い求めるためならば『輪の外』に出る……そう、たとえ『異端』と後ろ指を差されても良いと言えるだけの覚悟がありますか？」

――と。つまりは、そういうことだ。結局のところ、どう足掻こうとも現在のブリミル教の観点からすれば『瞑想』が異端視されてしまうことに変わりはなかったのだ。

これを聞いたのが、数ヶ月前の彼女であれば――その場で席を立ち、太公望を「異教の手先」「不信心者」などと激しくなじった上で、頬のひとつも張っていたかもしれない。

だが、現在のエレオノールはそうしなかった。いや、できなかった。

誰にも――家族はおろか、アカデミーですら突き止めることができなかった、末妹ルイズが起こす失敗の原因と、すぐ下の妹カトレアが抱えていた病の根源を見出すために用いられた『異端』の技が、間違いなく有用なものであることを知ってしまっていたから。

あの技がなければ――＜虚無＞は現代に蘇ることなく、その『担い手』たるルイズは、おちこぼれと周囲から蔑まれたまま、潰れてしまっていたかもしれない。原因不明の病に苦しんでいたカトレアは、衰弱し続け――最後には寝たきりになっていただろう。

彼女の大切な妹たちが『異端』によって救われたのは、確かな事

実であり――目の前にいる人物は――紛れもなく、家族の恩人だ。
エレオノールは、それを充分承知していた。

とはいえ、これはすぐさま「はい」と言えるほど、軽い問いかけではない。

『始祖の教え』すなわちブリミル教は、彼女――いや、ハルケギニアに住まう人間……特にメイジにとっては、全ての価値観の土台となるものであり、頭ではなく魂に刷り込まれた、まさに己を形成する『根幹』に関わるものだからだ。

その『教え』から外れろというのは、現在持っている地図を捨て、道先案内人どころか灯火も無しで、闇に包まれた樹海の中へ飛び込めと言われているに等しい。

突如迫られた『選択』に、エレオノールは細かく肩を震わせ、ただ押し黙ることしかできなかった――。

○●○●○●○●

――いっぽう、そんなエレオノール女史の葛藤などつゆ知らず。溢れる期待に胸を踊らせている者がいた。

それはもちろん、自身の使い魔・ハツカネズミのモートソグニルを通して、こっそりと『覗き』もとい『盗み聞き』を敢行しようとしていたオスマン氏である。

「これは、将来国を背負う若者たちの未来を憂いての行動であって、決して単なる好奇心からくるものではないのじゃ。それにして

も……エレオノール君の発言も気になるが、あのガキジジイがどんな反応をするのかも見物じゃて。うしししし……」

現在の彼は、なんというかもう、いろいろとダメな大人の見本と化していた。

オールド・オスマン。既に１００歳、いや、それどころか３００歳を越えているなどと噂されるかの老爺は、メイジとしての力量のみならず、偉大な教育者としても名の通った存在なのだが――そんな彼にも、たったひとつだけ、どうしようもない悪癖があった。

……彼は、自他共に認める女好き――とんでもないスケベジジイなのである。

スキンシップと称して、美人秘書のお尻をタッチするなど序の口。使い魔のハツカネズミを女性の足元に忍び寄らせ、身につけている下着を覗き込んだり。酒場で、酔ったふりをして給仕の女の子の胸目掛けて倒れ込んだりなど、事例を挙げればきりがない。以前起きた『破壊の杖盗難未遂事件』も、元はといえば、彼の女癖の悪さが招いたものだ。

しかもだ。そういった行為を他者から窘められても、

「何故おなごに触れたがるのかじゃと？　そんなものは決まっとる。そこに女体があるからじゃ！　わしは決して悪くなんかない！　美人はな、ただそれだけでイケナイ魔法使いと化すんじゃからして！！」

……などと、反省するどころかおかしな逆ギレをかます始末。これさえなければ、立派なお方だと手放しで評価できるのに……とい

うのが、彼の側近くにいる者たちのほぼ全てが、共通して持つ認識である。

オスマン氏なりのストライクゾーン、あるいは良心の呵責なるものが存在するのであろう、生徒には絶対に手を出さないだけ、まだマシなのであるが……『老いてなお盛ん』などとキュルケその他関係者一同から評価されている通り、女性に対する（悪い意味での）行動力及び好奇心が、とにかく半端ないのだ。

そんなオスマン氏が、このような面白い場面を見逃すわけもなく。

とはいえ『遠見の鏡』では、直接部屋の中を覗くことはできない。かといって、窓越しでは肝心の音声が拾えない。そこで、ふたりとも＜サイレント＞の魔法が使えないことを承知していた彼は、隣室の戸棚の裏へ巧妙に隠されていた、ごくごく小さな亀裂を通じてモートソグニルを忍び込ませたのだ。

「よしよし、潜入成功じゃわい。さぁて、なにを話しておるのかの～」

にやけ顔で耳をすましたオスマン氏の元に、早速室内の声が飛び込んできた。

（わたくしとしたことが、少し先を急ぎすぎましたかな。その、驚かせてしまって申し訳ありません）

（え……あ……）

オスマン氏の目が、くわわっ！　と、見開かれた。なんじゃ？この妙に冷静かつ意味深なセリフにかぶさってきた、エレオノール

女史の動揺しきったような声は。

（ですが、どうしても確認せざるを得なかったのです。エレオノール殿から頂戴したのは……実に複雑な問題をはらんだ内容でしたから）

（は……はい……）

張り詰めたオスマン氏の全神経は、完全に使い魔の『耳』だけに集中した。

（今すぐに答えを出すのは、まず無理でしょうな……お互いに、立場や価値観といった分かちがたいしがらみによって、縛られておりますので）

（そ、そうですわね……おっしゃる、通りです）

（ですから、この先へ進むためには、エレオノール殿にとって……いや、このわたくしにとりましても、相応の時間が必要であると考えます）

先に進むとはどういうことだ！？　オスマンは考えた。もうエレオノール女史からの告白は終了していて、あやつはその返事を保留しておるということか！

「いや、それならば最初の意味深なセリフはなんだったんじゃ？　まさか、エレオノール君の想いを受け入れた上で、手のひとつも握りおったのか、あのガキジジイめが！」

もちろん、これは完全なる誤解であるのだが……そんなことは、

初めから話を聞いていたわけではない彼にはわからない。オスマン氏は、両の手を握り締め、足を踏み鳴らしながら羨ましがった。

「おのれ、娘が3人に曾孫までおる隠居の分際で、あんな美人に言い寄られるとは……うらやまけしからん話じゃ！　くそッ、わしに娘のひとりくらい紹介してくれてもバチは当たらんのと違うか！？」

普段は明晰であるはずの彼の頭脳は――何故か、女性がからむことによって、おかしな方向へと走り出してしまうのであった。

ついでに言うと。娘を紹介しろなどと言われたら、太公望は肩の荷が下りたとばかりに喜び勇んで、自分が面倒を見ている3姉妹の世話を任せるはずだ――ただし、下のふたりはともかくとして、長女については無理、いや無駄だろう。なにせ、彼女は心の底から太公望に惚れ抜いている上に、彼の妻を自認しているのだから。

……そんな真相を知らぬオスマン氏の思いとは裏腹に、室内での会話は続いていた。

（とはいえ、このままお帰りいただくというのは、さすがに失礼かと存じますので……少し、お話をさせていただいてもよろしいですか？）

（えっ！　ええ、はい……喜んで！）

「カァーッ！　なぁにが『お話をさせていただいてもよろしいですか』じゃ！　子供みたいなツラして、いっちょまえに気取りおってからに！　だいたい、もう清く正しい男女交際なんて年齢じゃなかろ!?　いっきにガッと行かんかい、ガッと!!」

興奮して、思わずドンと机を叩いたオスマン氏であったが、学院長室の扉をコンコンとノックする音が、そんな彼の無駄に盛り上がりまくった気分に水を差した。

「く、ここからが本番じゃというのに……入りたまえ」

扉を開けて部屋に入ってきたのは『疾風』のギトーであった。

「ったく、風メイジなんじゃから空気読めっちゅうの……」

「はっ、何か？」

「いや、こっちの話じゃ。で、何用かね？」

「いえ、まもなく職員会議が始まるのですが、学院長がお見えにならないので……」

「なぬ！？　もうそんな時間じゃったのか！　むむむむ……了解した。すぐに支度をして向かうので、今少しだけ待つよう、皆に伝えておいてくれんか」

「承知しました」

そう言うと、ギトーの姿はその場でかき消えた。どうやら＜遍在＞を寄越したらしい。

「はあ、まったく……げに悲しきは宮仕え、か」

立場上、会議に集中せねばならない。それに、客室内に使い魔を

放ったままにしておいて、万が一客人たちに発見されたら目も当てられない。仕方なく、モートソグニルに自分の元へ戻るよう指示を出すオスマン。彼の愛鼠は、命令を受け即座に引き返してきた。

「実にええところじゃったのに。のう？　モートソグニルや」

「……ちゅう、ちゅう！」

駄賃に好物のナッツをもらったモートソグニルは、オスマン氏が抱く複雑な思いなど、どこふく風といった様子で嬉しげに鳴いた。

……こうして。オスマン氏の中で、またしても言葉のすれ違いによって、妙な方向にエレオノールとその相手に関する誤解が深まってしまったことを、念のためここに記す。

○●○●○●○●

「あ……あの魔法が、まさか、そんな……！　で、でも、確かに……」

その話を聞いたエレオノールは、驚きを顕わにしていた。

「どうやら、おわかりいただけたようですな？」

「ええ。そういうことでしたの……だから、おちびは他の魔法が一切できなかったにも関わらず＜サモン・サーヴァント＞と＜コントラクト・サーヴァント＞を成功させることができたのですね。かの魔法が――虚無の系統に属するものだったから」

ルーンではなく口語で編まれ、かつ自分の系統に合った魔法だった。故に＜爆発＞させずに済んだ。そう結論したエレオノールに、太公望は頷いた。

「そうです。最初にコルベール殿から『コモン・マジックのほとんどが、元は系統魔法の初歩の初歩とされていた』という事実を発見したと伺った際に、もしかすると、そのふたつが『そう』なのではないかと思い当たったのですが……残念ながら、確証を得るには至らなかったのです」

「ですがミスタは『始祖の祈祷書』の中に、同じ『空間移動』に属する＜瞬間移動＞が記されていたという事実によって、それを確信なさったというわけですのね」

エレオノールが提示した説に、太公望は頷きつつも補足を行った。

「そもそも、遠く隔てた『空間』同士を繋ぐ『扉』を作るのみならず、使い魔との意思疎通を図るための『翻訳機能』や『感覚の共有』などといった、とてつない特殊効果が付与されている魔法が、コモン・マジックとされている時点でおかしいのですよ。あ、いや……だからこそ、なのかもしれませんが」

エレオノール女史の眼鏡の端が、キラリと光った。

「もしかすると『始祖』ブリミルは、自らの後継者――『担い手』を見出すために、あえて魔法語――ルーンに翻訳せず、口語のままとされておられたのかもしれませんわね？『伝説』を呼ぶことができる者を、探し出すために」

太公望は、同意の印に頷いた。

「案外、それが真相なのかもしれませんな。エレオノール殿のおっしゃる通り、伝説の使い魔を呼び出せた者が『担い手』となる――すなわち『秘宝』を受け継ぐことができると考えるのが自然でしょう。現に『使い手に最も適した系統を判断する』ための儀式専用魔法として、長く利用されてきたわけですから」

もしも本当にその通りならば、これはコルベールの論文をも越える歴史的な大発見だ。エレオノールは、それを思うと悔しくてならなかった。

その気になれば、妹の話を一切からめずとも、この説を展開させることは可能だろう。だが、少なくともトリステインのアカデミーには持ち込めない。

何故なら、よりにもよって『失われた系統』『王家の魔法』とされ、神聖視されている＜虚無＞が、実は失われてなどおらず、汎用魔法（モン）のひとつとして現代に伝わっていたなどという学説が――たとえ、それが紛れもない事実だったとしても――現在のアカデミー内部に蔓延る風潮や、ブリミル教における観点から考えれば……絶対に認められようはずがないからだ。

それどころか、逆に『罰当たり』『異端論者』などと非難され、首席研究員の資格を剥奪されてしまう可能性のほうが高いだろう。

エレオノールは、深く嘆息した。ほんの少し、他と違うものを表に出すだけで『伝統』や『異端』という名の、分厚い壁に阻まれてしまう現状に。

そして、彼女は『瞑想』のみならず、自分が書いた論文そのもの

が『それ』に抵触するものなのだと気が付いた。今、目の前にいる人物が――自ら危険を冒してまで、ブリミル教という名の『概念』を外れる覚悟があるかと問うてきたのは、そのためだったのだ。

俯きながら、金の髪の女史は言った。

「ミスタの、おっしゃる通りです。今のわたくしは、立場やしがらみだけではなく……これまで学んできた伝統や、価値観に強く囚われています」

だが、彼女はその言葉を発した後、ぐっと顔を上げた。

「自分から押し掛けてきておいて、このようなことを申し上げるのは大変失礼なことですが……この論文について、いったん取り下げてもよろしいでしょうか。今はどうしても『輪の外』へ出る勇気が持てませんの。お恥ずかしい話ですが……」

しかし、その言葉を受け止めた人物は、笑みを浮かべていた。

「とんでもない！　むしろ、即答されなかったことに安心致しました」

驚いた顔で自分を見つめるエレオノールに、太公望は言った。

「外を見る勇気は、確かに自分を成長させる上で必要なものですが――時には立ち止まって、じっくりと周囲を確認することも、また大切なことなのです。何事も、ただまっすぐに突き進めばよいというものではありません――勇気と無謀は、別物なのですから」

○●○●○●○●

――それから、数時間後。

王立アカデミーの正門前に、家紋入りの豪奢な馬車が停められていた。たまたま部屋の中からそれを見かけたヴァレリーは、小さく呟いた。

「あら、もう出張から戻ってきたのね」

ヴァレリーの予測通り、馬車から降りてきたのはエレオノールであった。従者に大きな書類鞄を持たせたエレオノールは、足取りこそしっかりしていたものの、その顔には深い疲労の色が浮き出ていた。

「ずいぶんと疲れてるみたいだけど、大丈夫かしら？」

そこまで口にしたヴァレリーは、はたと気が付いた。良いものがあるではないかと。

「うふふ、ちょうど疲労回復の『魔法薬』を調合したばかりだったのよね。何本かエレオノールに差し入れてあげようっと」

彼女は、アカデミーの中でも特に優秀な＜水＞の使い手にして『魔法薬』調合の名手でもあった。ヴァレリーは、手近の棚に並べられていた小瓶を数本ばかり手に取ると、足早にエレオノールの研究室へと向かった。

――エレオノールは、自室に戻ってからも悩み続けていた。

歴史と伝統を守ることは、とても大切なことだ。しかし……本当に、このままで良いのだろうかと。

以前見せてもらった〈フィールド〉が、この国を発展させうる技術であることは間違いない。だが、現状では『あれ』を取り入れることなどできないだろう。展開する際に杖を構えていたとはいえ、ほぼ確実に『異端』認定される。それほどまでに異質な技だった。むしろ、オスマン氏が平然と受け入れていたこと自体が信じがたい。

『瞑想』にしてもそうだ。精神力を回復するのみならず、最大量を増加させた上に、なんとお肌がスベスベに――いや、それはともかく。明らかに利益に繋がるものでありながらも『異端』に触れるため、使うことができない。髪もツヤツヤになるのに――いや、それは脇へ退けておくとしてだ、惜しいなどという言葉で片付けるには、あまりにも――。

と、そこへ遠慮がちなノック音が響いた。

「どうぞ」

扉を開けて入ってきたのは、エレオノールの同僚ヴァレリーだった。その手に小瓶を数本持っている。

「だいぶお疲れみたいね。これ、良かったら飲んで」

微笑みながら差し出されたのは、疲労回復によく効く『薬』であった。時折、彼女はこんなふうに自作のポーションを差し入れてくれるのだ。

「まあ、ありがとう。喜んでいただくわ」

何らかの香草を付け加えてあるのだろう、瓶の中から清涼感に満ちた香りが溢れ、エレオノールの鼻孔をふわりとくすぐった。

「素敵な香りね。あ、ひょっとして新レシピかしら？」

「ご名答。季節の花のエキスを加えてあるの。もちろん、薬効があるもの限定よ。効果は実証済みだから、安心して飲んでちょうだい」

新レシピ。新しい調合。自分の言葉に、エレオノールは引っかかった。

「そうよ……調合……回復薬は新しくても問題にならない……でも……だから……」

薬を飲む前に、突如トリップしてしまったエレオノールを前にしても、ヴァレリーは全く動じない。彼女が、いきなりこんなふうに考え事を始めるのは、今に始まったことではないからだ。

「ねえ、ヴァレリー。ちょっと質問があるんだけれど、構わなくて？」

「まあ、何かしら？　少し香りが強すぎた？」

「いえ、そういうことじゃないの。いい？　あくまでもたとえ話よ！？　もしも、自分の目の前に＜精神力＞を回復したり、増幅するような効果のある、全く新しい『道具』や『薬』があったとしたら……あなたは、欲しいと思う？」

その質問に、ヴァレリーは目を丸くした。

「あらあら、ずいぶんと『異端』的な考えじゃないの！　エレオノールったら、らしくないことを聞くのね」

「やっぱり、あなたもそう思うわよね……」

だが、溜め息混じりのその声に対して戻ってきた反応は。エレオノールの予測していた、遙か斜め上を行っていた。

「実はね、わたし……作ったことがあるのよ」

「えっ？」

ちろりと舌を出しながら、ヴァレリーは言った。

「ここだけの話よ？　わたしね、昔『精神力増幅薬』の調合について、研究したことがあるの。だって、上手くいったら絶対に売れること、間違いなしでしょう！？」

エレオノールは仰天した。大人しい顔をした同僚が、まさかそんなとんでもない真似をしていたなどとは、思いもよらなかったからだ。

「で、でも、それって……『異端』よね！？」

「その通りよ。研究の途中で評議会にバレて、即刻中止させられたわ」

おかげで、首席研究員の席につくまでに時間がかかっちゃったわ。

そう言って肩をすくめた同僚を、エレオノールはぽかんとした表情で見つめた。そういえば……ヴァレリーはアカデミーで最も優秀な＜水＞の使い手にも関わらず、自分よりずっと出世が遅かった。まさか、それが原因だったのか。

「そ、それで……調合には、せ、成功したの？」

そう声に出すのがやっとだったエレオノールに、ヴァレリーは苦笑でもって応えた。

「それがね、確かに『増幅』させることはできたんだけど。酷い副作用があったの」

「副作用……あ、まさか！」

「ええ。たぶん、あなたが思った通りよ。＜精神力＞は、怒りや悲しみ、それに喜びといった『感情の揺れ』に大きく関わるものでしょう？　一時的に、器を大きくすることはできるんだけど、それと同時に感情の動きが激しくなってしまうの。最初に自分で飲んで試してみたんだけれどね……狂ってしまうかと思ったわ」

「む、無茶をしたものね……あなたが無事で、本当に良かったわ……だけど、よく異端審問にかけられずに済んだわね、それ」

エレオノールが口元を引き攣らせながらそう言うと、ヴァレリーはふふんと笑った。

「まったく、馬鹿馬鹿しい話よね……異端認定だなんて。まあ、わたしから言わせてもらえれば『異端』なんて言い方自体がおかしいんだけど」

「……えっ？」

「薬で精神力の増幅をしたら『異端』？　『始祖』ブリミルが、そんなことを仰ったわけじゃないでしょう？　わたしの研究を『異端』と認定したのはアカデミーの評議会よ。そもそも、地元の司祭さまにこの話をしたら、お怒りになるどころか、興味津々って顔をされたくらいなのよ」

「異端認定をしたのは……評議会……？　司祭さまは、反対しなかった……と？」

「そうよ！　それどころか、本当にそんな『魔法薬』がこの世にあれば、救われる命が増えるかもしれないのに、なんて残念がっておられたわ」

ブリミル教の司祭さまが認めておられるのに、評議会は異端認定した。これはいったいどういうことか。エレオノールは、足元が大きくぐらついたような感覚に陥った。

「みんなが幸せになれるかもしれないのに、なんでもかんでも異端、異端って。結局、自分たちが理解できない新技術が出てくるのが気に入らないだけなのよ、上の連中は！」

「理解できないから、気に入らない……だけ？」

「そうよ！　『異端』って、本当に便利な言葉だわ。それで下を脅して、押さえつけておくだけで、あのひとたちの地位は、ずっと安泰なんですもの」

自身の過去を思い出したのであろう、痛烈なまでの皮肉を放ったヴァレリー。だが、エレオノールはそこに、確かなものを見出した。

「安泰……だから、異端……新しいものを……否定……それが『輪の中』……」

――新しいもの、つまり今までの『常識』の中になかったものを、ずっと否定し続けていれば……それは『現状維持』に繋がる。発展はないかもしれないが、常に安定する。

現状を維持することで、利益を得る者たちがいる。だからこそ、彼らは声高に『異端』と叫び続ける。多くの民を『伝統』や『格式』という名に彩られた、見かけだけは美しい『輪の内』に無理矢理閉じ込めて、外の世界へ一歩も出さないようにしているのだ。

――わたくしは、いま、とてつもない『真理』を掴んだのではないだろうか。

「ねえ、ヴァレリー。明日の夜、時間を取ってもらえないかしら？」

「え、ええ。それはかまわないけれど……何かあるのかしら？」

「夕食を一緒にどうかと思って。どうしても、あなたにお礼がしたいの」

「ええっ！？　わ、わたし、そんなつもりで『薬』を持ってきたわけじゃ……」

「もちろんそれだけじゃないわ！　あなたはね、本当に素晴らし

いものを、わたくしにもたらしてくれたのよ！！」

突然、自分の身体を抱き締めてきたエレオノールに、ヴァレリーは目を白黒させた。

こうして。思いも寄らぬ場所で〈天啓〉を受けることとなったエレオノールは、自身の中にあった頑迷な『鎖』のうちの1本を、見事断ち切ることに成功した――。

第８９話　女史、輪の内に思いを馳せるの事（後書き）

実はブリミル教の観点からいくと、瞑想はアウトだったというお話。

杖なしで回復、しかも精神力増強までしちゃってる時点で誰かわかれという。美肌効果は、若い学生どもが使っていたために、恩恵に全く気付けていなかったというオチ。

ブリミル教（と、いうよりもロマリアとトリステインの一部）って、もの凄いガチガチですよね……今回出てきた『輪の中』は、ハルケギニアの進歩が異常なまでに遅いことに関する、個人的な解答です。変化がないのではなく、できるだけ変化をさせないシステムになっているのではないかという。それを打ち壊しに来たのが、原作才人なんじゃないかなあと。

今回のことで、ヴァリエール家の中で最も頑迷なエレオノールが、大きく前進しました。持つべきものは、良い同僚。ちなみに、このヴァレリーはちゃんと原作にいて、しかも増幅薬を作製しておりますので、念のため（失敗についてもそのままです）。

そして、さらっと出した＜サモン・サーヴァント＞＜コントラクト・サーヴァント＞虚無系統説。あんなトンデモ魔法がただのコモンであってたまるかあ！　と、いうのが自説であります。過去の流れから、これについては予測しておられたかたもおられるのではないでしょうか。

ところで、恋愛系のネタを期待されていた皆様、こんな結果で申し訳ございません。筆者にはこれが精一杯でございます。お前いつもこんな勘違い系ばっかりかという。本当にすみません。

次回からは新章。新学期が始まります～。

２０１１／０９／１９　２３：００　誤字脱字修正
２０１１／０９／２０　２１：００　誤字脱字修正、本文加筆修正

第９０話　灰を被るは激流、泥積もりしは鳥の骨

――夏の終わりも間近。ニイドの月、ティワズの週、ユルの曜日。

例年ならば、王都トリスタニア近辺の街道は、避暑地でのバカンスを終えて戻ってきた貴族や一部の裕福な平民たちの往来が目立ち始める時期だ。しかし、今年はそんな季節の風物詩の代わりに、全く別のものが随所に見られた。

「あれは、グラモン家の紋章じゃないか……ギムリの言った通りだ」

魔法学院へと向かう乗合馬車の中窓から外を眺めていたレイナールは、普段は冷静な彼にしては珍しく、驚きもひとしおといった顔で、側に腰掛けていた少年に声をかけた。

「だろう？　グラモン元帥が首都防衛責任者に任命されたってのは、父上が宮廷のサロンで聞きつけてきた話なんだから、絶対間違いないないって」

ギムリと呼ばれた少年――レイナールと同じ馬車に乗り合わせていた彼のクラスメートは、友人からの問いに、訳知り顔で胸を張った。

級友の発言を受け、改めて外を見たレイナールは、街道要所に王軍だけではなく、諸侯軍――それも、王国元帥であるグラモン伯爵家の兵士たちが多く配備されている事実に、心の底から驚いていた。戦時下でない今、ここまで諸侯軍が展開するなど、数千年の長きに渡るトリステインの歴史を振り返ってみても、ありえない事態なの

だ。

レイナールは、途中の駅で購入した新聞を広げた。トリステインには、王政府が各種の布告を行う際に利用する広報機関の他に、トリスタニア近郊に広がっている様々な噂話を集めて記事にまとめ、売り出している小規模の新聞社がいくつも存在する。いま彼が手にしているのも、そんな情報紙のうちのひとつだ。

――今からちょうど1ヶ月ほど前。アルビオン王国の空軍都市『レキシントン』を落とした貴族連盟『レコン・キスタ』は、怒濤の勢いで進軍を続けていた。戦略空域を抑えられ、さらに王軍最大のフネにして旗艦であった『ロイヤル・ソヴリン』を奪われた王党派は、国内各地で敗走を繰り返している。現在紙面を賑わしているのは、専らアルビオンの戦況に関する情報だ。

「アルビオン王党派拠点・王都ロンディニウム、貴族派によって完全包囲さる――か。想像以上にアルビオン王家は追い込まれているようだね」

「それ、いつの情報だ？」

「ええと……3日前だね。さすがに、王都がそう簡単に陥ちるとは思えないけど……」

「だな。レキシントンの例があるから、どう転ぶかわからない」

アルビオンの空軍施設都市・レキシントンが、包囲されてからわずか半日で陥落したという衝撃的な事件は、既にトリステインのみならず、世界各地へ広まっていた。

「このままアルビオン王家が倒れた場合、次に狙われるのは、ほぼ間違いなく我がトリステイン王国だろうから、王政府が早急に防衛の準備を開始するのは当然だとしても……こんなに早い時期からグラモン元帥が出てくるなんて、正直驚いたな」

「それだけどさ、あの『鳥の骨』がグラモン閣下を推薦したらしいぜ」

「えっ、本当かい！？　ギムリ」

「うん。なんでもレキシントンが陥落した日に、緊急で開かれた議会中に提出したんだとさ。おまけに、全会一致で可決したらしい」

「意外だな。いや、決定内容がどうこういう話じゃなくてさ、その……」

「きみが言いたいことはわかるよ。いつもの王政府なら、誰を防衛責任者にするかで大モメするか、ぎりぎりまで引っぱった挙げ句ド・ポワチエ中将あたりを出して様子見する程度だっただろうに、今回はいやに動きが早かったからな」

「こ、声が大きいよ！」

友人の不敬な発言に慌てたレイナールは、慌てて彼を制すると、用心深く周囲を見回した。だが、幸いなことに、彼らの話に聞き耳を立てている者は、車内にはいなかった――単に聞いていないふりをしているだけなのかもしれないが。

それからしばらくの間、ふたりは無言のまま馬車に揺られながら、車窓の外をゆっくりと流れゆく景色を眺めていたが……ふいにレイ

ナールが、ぽつりと呟いた。

「始祖の御代から続いた『王権』の1本が、ついに倒れる……か」

「グラモン元帥が防衛に立ったくらいだから、それについてはほぼ確実だろうな」

「もうすぐ、戦争になるんだろうね」

「……だろうな」

○●○●○●○●

「そうとも限らない。逆に、完全に防衛を固めてしまったトリステインに攻め込むのを躊躇するかもしれぬな。うまくすれば、戦自体が起きない可能性もある」

――翌日。食堂にあるテラス席で、見てきたままを伝えたレイナールに対して太公望が行った返答がこれであった。ちなみに、現時点で学院に帰還を果たしている『水精霊団』のメンバーは太公望、タバサ、キュルケ、レイナール、モンモランシーの5名だけだ。

モンモランシー曰く、ギーシュはひとつ上の兄と共に、領内に現れた妖魔の討伐に出かけた関係上、学院に戻るのは新学期の直前になるという手紙を寄越してきたらしい。

ルイズと才人については、あと数日で戻ってくるとのことだ。これは、先日王立図書館への立ち入りに関する口利きをしてくれた、エレオノールからもたらされた情報である。

何かを深く考え込むような表情で、レイナールは言った。

「それは……『レコン・キスタ』と『アルビオン貴族派』本来の目的がそれぞれ異なるから、ということでいいのかな？」

「ふむ。その答えが出せるということは、なぜ此度の戦が起きたのか、おぬしは知っておるのだな？」

太公望の問いかけに、レイナールは頷いた。

「確か、モード大公――アルビオンの王弟殿下が粛正されたことが、大公殿下に仕えていた貴族たちが、王家に反乱を起こすきっかけになったんだよね。最初は小さな内乱だったんだけど、レコン・キスタが戦列に加わったことで、一気に流れが変わったんだ」

「ああ、なるほどね。大公の仇を討ちたかった貴族派と、王家を倒して『聖地』奪還を目指すレコン・キスタは当面の目的が一致していたから、手を組んだ。でも……」

キュルケの言葉に、タバサが追従する。

「大公の敵討ちを果たした貴族派が、その時点で離脱する可能性がある」

ふう……と、憂い顔でため息をひとつついた後、太公望は口を開いた。

「嫌な言い方だが、戦によって勝ち得た土地を切り分けるという、大切な仕事も残っておるしのう。特に、勝ち馬に乗って後から貴族

派に鞍替えした者どもは、本当に取れるかどうかわからぬ『聖地』や隣国などよりも、目先の利益に飛びつくであろうしな」

ハーブティ入りのカップを口に運んだ後、モンモランシーは呟いた。

「わざわざトリステインに攻め込むよりも先に、新しい領地の確保に走ろうとするひとたちが大勢出るってことね」

「そういうことだ。ところがレコン・キスタは『頼りない王家を打破して、自分たちが旗頭となり聖地を目指す』という大義を掲げる以上、急いで体制を立て直して、残る2王家へ攻め込まねばならぬ。そうでなければ、内部勢力や民の支持を得られないからな」

「でも、既に目的を達成した貴族派と、日和見に徹している者たちを動かすのは大変」

「相手が完全に守りを固めちゃったトリステインと、ハルケギニアで一番大きな国家ガリアだもの、説得するのも骨よね。かといって『聖地奪還戦争』を取りやめて領地の奪い合いをするなんてことは、彼らの『正義』に反することだから、無理でしょうしね」

『聖地奪還戦争』と『正義』というフレーズを妙に強調したキュルケだったが、この場に集っていた全員が、彼女と全く同じ思いを共有していた。

「最終目標が完全に異なる者たちが多数集まっておる。しかも、彼らの『連盟』を構成する大きな勢力のうち2つの目的は、アルビオンが陥ちた時点で達成されてしまうのだ。このような状況下では、ほぼ間違いなく揉め事が起きるであろうな」

「そうなれば、貴族連盟は空中分解。足並みを揃えてトリステインに攻め込むことなんて、まずできなくなる」

太公望とタバサの言葉に、レイナールは思案げな顔で頷いた。

「なるほどね。こんなに早く防衛を固めたことにも、いきなり王国元帥のグラモン伯爵が出てきたのにも驚いたけど、そうか。そういうことなら納得できるな。この布陣最大の目的は、防衛ではなく、相手の結束を揺るがすことだったんだね」

「うむ。実際、かなりの牽制になるだろうな。そうして空の上で敵軍がもたついている間に、トリステイン側はさらに防衛を固めつつ、その他の国と交渉して、上手く連携を取ることができれば――相手の本拠地が孤立した『浮遊大陸』だけに、あっさりと包囲網を作り上げることができるであろう」

レイナールは懐からメモ帳を取り出すと、ここまでの会話内容を書き記した。そんな彼の様子を好ましげに見遣りながら、太公望は続けた。

「とはいえ、あくまでこれは机上の空論だ。もしやすると王党派がここから奇跡の大逆転を果たすかもしれぬし、レコン・キスタと貴族派の結束が想定以上に固く、包囲網を敷くのが間に合わぬ可能性もある」

「ガリアとゲルマニア、それとロマリアがどう出てくるかもわからないしね」

「そうだのう。政治や戦は生き物だ。どう動くか、ある程度の予

測はつくが、実際のところはその時になってみるまでわからぬ。だから、わしらが今できることといえば……」

と、そこへ同じく実家から戻ってきていたメイドのシエスタが、新しいティーセットと大きなフルーツケーキを持って現れ、テーブルの上へ静かに乗せた。

「これを切り分けて、みんなで仲良く味わうことくらいだ」

そう言ってナイフを手にした太公望を、タバサが制した。

「わたしが切る」

「まあまあ、ここはわしに任せておけ！」

「ホールの5等分はすごく難しい」

「だからこそ、このわしが自ら公平に切り分けようと言っておるのだ」

「やっぱりわたしが切る」

「のう、タバサよ……まさかおぬし、わしのことを信用しておらぬのか？」

「あなたがいちばん小さなピースを取るというのなら、任せてもいい」

「……」

「何故黙っているの？」

「ピースの選択順は、くじ引きで決めるというのはどうだ？」

「ナイフを寄越して」

「なんなら、じゃんけんでもかまわぬぞ？」

「デル・ウィ……」

「ま、待て！　魔法で切ろうとするでない！！」

ふたりのやりとりを見たキュルケが、思わずぼやいた。

「ケーキひとつとってもこれだもの。それが領土となったら、モメて当然よね」

○●○●○●○●

――若き貴族たちが、隣国の未来とケーキの大きさを比較していたちょうどそのころ。

ゲルマニアから王都トリスタニアへ続く街道を、風格溢れる四頭立ての馬車が、ゴトゴトと音を立てて進んでいた。その中には、トリステイン希代の宰相が静かに座していた。車内に、同乗者は存在していない。

マザリーニ枢機卿、当年とって４０歳。だが、その髪や髭はすでに深雪のように白くなり、肌には深く細かい皺が刻まれ、長く伸び

た指は骨張っていた。

そのせいで、少なくとも５０代、いや６０代と言っても通用するほどの老爺に見える。先帝亡き後、トリステインの内政と外交の全てを執り仕切ってきた激務の日々が、彼の姿を老人そのものに変えてしまっていたのだ。

マザリーニは、ただひたすらに第二の祖国であるトリステインに、己の全てを捧げ尽くしていた。だが、そんな彼のいじらしいまでの献身と確かな政治手腕を見てもなお、民衆たちは『鳥の骨』などと枢機卿を揶揄し、嫌っている。

先代国王即位の際に、異国ロマリアから派遣されてきた司教枢機卿であること。平民の血が混じっているなどと、まことしやかに囁かれていることなどが、宮廷の内外に、彼が意図せぬ敵を多数作り出していた。他国ならばまだしも、特に伝統と格式を重んじるトリステインにおいて、マザリーニの出自は逆風にしか成り得なかったのである。

小さく揺れる馬車の中で、枢機卿はひとり思考の淵へと深く沈み込んでいた。

「やはり、これが皇帝の狙いであったか。いや、考えるまでもなかったな。だからこそ事ここに至るまで、返答を引き延ばしていたのだろうから」

数日前に軍事同盟締結に向けて帝都ヴィンドボナにて行われた、ゲルマニア皇帝アルブレヒト三世との対談中に、トリステインの将来に関する憂慮すべき懸案事項が持ち上がったが為に、彼はひとり静かに物思いに耽っていた。

「王室同士の結びつきが両国の同盟に花を添えるなどとは、皇帝め……よくも言ったものだ。姫を娶ることで、我が国を緩やかに併合することこそが自分の狙いだと、口以上に目が語っておったわ」

ゲルマニアがトリステインと軍事防衛同盟を結ぶにあたり、その条件として皇帝アルブレヒト三世が求めたものとは――トリステインが誇る麗しき白百合姫・アンリエッタとの婚姻であった。

ゲルマニアの皇家は『始祖』ブリミルの血を引いていないという理由から、ハルケギニアの諸王国において、トリステイン、ガリア、アルビオンの三王家及びロマリア皇国連合よりも格下であるとされている。そのため、かの帝国を統べる皇帝は、トリステイン王家と血を通わせることによって、自らの地位と家格を高めることを強く望んでいた。

また、トリステインの王室にはアンリエッタ以外に子が存在しない。よって、彼女がゲルマニアの皇室へ嫁いだ場合、伝統ある王家の直系が途絶えてしまうことになる。

そればかりか、姫君と皇帝の婚姻関係、あるいは彼らの間に生まれた子を継承者として強く前面に押し出すことで、将来的にトリステインがゲルマニアのいち地方とされてしまうことは、ほぼ確実。よって、どんなに国が困窮しようとも、アンリエッタを嫁がせることなど、ありえない話であった――つい先日までは。

マザリーニは、声を上げずに嗤った。

「皇帝よ、残念ながらそう上手く事は運ばぬぞ。既に我が国の『王権』は、しかるべき場所へと移動しておるのだから」

現在、王政府の内部において、王国宰相にしてブリミル教司教枢機卿マザリーニだけが知る『王権』の在処。当然、それを所持する本人――国境守護役ラ・ヴァリエール公爵も事の重大さを充分に理解している。

ふたりは既に秘密裏に会談を行い、事実と意志の確認を行っている。もっとも、現時点でそれを表沙汰にして、国をふたつに割るような真似をするほど、彼らは愚かではない。

特に、トリステイン王国の乗っ取りを企んでいるなどと、あらぬ噂を立てられているマザリーニが慎重になるのは当然だ。

よって、彼らは表向きは今まで通り、互いに中立あるいは不仲であるよう振る舞い――だが、裏ではしっかりと手を取り合っていた。それがまた、マザリーニには嬉しかった。

公爵ほどの大物が、色眼鏡を通して自分を見ることなく、正当に評価してくれていたことがわかったばかりではない。彼が宰相として背負い続けてきた重荷の半分を、自ら引き受けてくれようとしているのだから。

「姫殿下が仰った通り、かの『指輪』が、あのお方を変えてくださったのだ」

トリステインで最大の権勢を誇るだけでなく、このハルケギニアでも有数の大富豪にして、王位継承権第3位まで持つ大貴族でありながらも、その立場に驕ることなく、常に周囲の者たちを立て、影ながら王家を支え続けてきた、忠臣の中の忠臣。

可能であれば、ラ・ヴァリエール公爵に摂政の座へ就いてもらい、アンリエッタ姫が成長して王配――婿を迎えるまでの間、共に政治の杖を振るって欲しいと心密かに願っていたマザリーニであったが、常に控えめな公爵の人柄を鑑みるに、それは到底叶わぬことであろうと、最初から諦めていたのだ。

ところが、そんな人物が前へ進み出てきてくれたのだ。『王権』を手にして。しかも、国の存続がかかった一大事に、自ら立ち上がってくれた。

公爵の『導きの指』で輝く『水のルビー』を目にしたそのとき。マザリーニの心は、年甲斐もなく躍ったのだ。

――戦の才能に恵まれていたが故に、他国や内部の反乱勢力との闘争にのみ明け暮れ、国政を一切顧みることのなかった先々代国王フィリップ三世が落とした影によって、大きく傾きかけていた国をなんとか立て直すべく、先帝は、当時まだ２０代であった若き枢機卿マザリーニを宰相として重用した。枢機卿も、彼の引き立てに応えるべく努力した。

手を取り合い、共に苦難の道を歩むうち、王と宰相の間には、いつしか友情という名の固い絆が生まれていた。ふたりは、苦心惨憺して国政に立ち向かって行った。

それから十数年後。苦労の甲斐あって、少しずつだがトリステインが上向きとなる兆しを見せ始めていたそのとき――まるで、彼らの努力を嘲笑うかのように、死に至る流行病が発生した。恐るべき病は平民も、王侯貴族たちにも分け隔て無く襲いかかり――多くの民と、善き国王を天界へと連れ去ってしまった。

片翼を失った王国は、もう一枚の羽根によってかろうじて高度を保ちつつ、だが、静かに地面へと向けて、落ちてゆこうとしていた。そこに、新たな翼が生えてきたのだ。

あの議会中、公爵が行った大立ち回りを見たマザリーニは、まるで志半ばで倒れた先代国王が、天界から舞い戻ってきてくれたような錯覚に陥った。それほどまでに『指輪』によって生まれ変わった公爵の姿は、眩しかった。

さらに公爵はマザリーニに対し、裏で密かにこう告げたのだ。

「枢機卿猊下。長きに渡り続いてきた『伝統』を打ち壊すという大罪を負い、末期の灰を被るのは……わたくしのような老い先短い年寄りにこそ相応しい役目だと思うのです」

公爵が放ったこの言葉が『王国の守護者』たる枢機卿の意志を、完全に決定した。始祖に捧げる懺悔の如き言葉の中に込められた、公爵の固い決意を知ったマザリーニの心は、激しく震えた。

ラ・ヴァリエール公爵は、国と民草を救うためならば、自らを『簒奪者』の立場にまで貶めても構わないと言っているのだ。何代にも渡って、王家の側近くに仕え続けてきた名家の当主がこの決断をするまで、果たしてどれほどの勇気を振り絞る必要があったのか。マザリーニは、その心情がわからぬような馬鹿者ではなかった。

ブリミル教司教枢機卿たるマザリーニは、公爵の前に深く頭を垂れて宣言した。

「閣下。なんとしても、あなたさまを清い御姿のまま、王座につけてご覧にいれます。そのためならば、わたくしめはいくらでも泥

を被ってみせましょう。何故なら、それこそがトリステインを混迷の内から救い出す唯一の『道』にして、希望だからです」

……この時から、彼らふたりは『盟友』となった。

清廉潔白な人格者として、国内外に知られるラ・ヴァリエール公爵にも、敵対する者が全く居ないわけではないが――いや、むしろ一切敵を作らぬよう、周囲の機嫌だけを伺いながら行動するような人物が、有能な政治家にして『王』たりえるはずがない。

もともと、マザリーニは公爵が持つ為政者としての手腕を疑うどころか尊敬すらしていた程であるし、そういった意味でも、彼に大きな期待を寄せていた。

マザリーニ枢機卿の胸の内では、もはやトリステインの王座は空位ではない。彼の脳裏には、そこに座る人物が――登場を待ち焦がれていた『強き国王』の御姿が、まざまざと浮かび上がっているのだ。

「皇帝からの申し入れは、ある意味渡りに船だ。『王権』を持たぬゲルマニアと誼を通じることで、強力な軍事同盟を結べるばかりか、レコン・キスタの矛先を、ある程度分散させることにも繋がる」

本来、王権を持たないゲルマニアはレコン・キスタの攻撃目標たり得ない。かの国を攻めることは、彼らが掲げる理念に反するからだ。ところが、トリステインとゲルマニアの両国が血の絆によって結ばれ、さらに軍事防衛同盟を組むとなれば話は別だ。

ゲルマニアは、本来不必要であった貴族連盟への防衛に戦力を回さねばならず、しかも自国領を戦火にまみえさせぬために、アルビ

オン大陸からの防波堤となるトリステインを死守する必要性が出てくるのだ。

唯一人の姫君を娶った上で、トリステインを見捨てるなど論外だ。もしもそれを行った場合、ゲルマニアは国際的な評価を大きく下げるばかりか、攻め入るための口実を得て勢い付いたレコン・キスタの手によって、激しい戦禍に晒されることになるだろう。

「姫を娶ることは、ゲルマニアにとって、自ら大きな危機を呼び込むことに繋がる危険な賭けなのだが、領土の拡大と地位向上に熱心な皇帝は、どうやらその事実に気が付いていないようだな。だからこそ、平然とあのような申し入れをしてきたのだろう」

いっぽうレコン・キスタの側はというと。これまではトリステインとガリアの動向にだけ気を配っていればよかった彼らは、ゲルマニアからも目が離せなくなる。

既に、トリステイン内部に放たれている間諜――高等法院の長リッシュモンや彼の取り巻き、一部の有力な商家がその役割を果たしているという驚愕の内偵調査報告をラ・ヴァリエール公爵から受け取っていたマザリーニは、自身も信頼を置く密偵を各所に放ち、情報収集に奔走している。

結果、国内で蠢いていた者どもの『目』が、外――特に、ゲルマニア周辺に向けて動き出していることを突き止めている。諜報と策動のために、より多くの人員を割くことを余儀なくされた『裏切り者』たちは、これから大変忙しいことになるだろう。

マザリーニは、そんな者たちに同情するほどお人好しではない。既に、いつでも不逞の輩を取り押さえることができるよう、特に有

能な部下を使い、物証集めに余念がない。あとは逮捕状を用意するだけで、複数の佞臣を処断することができる状態にまで準備を整え終えている。

序盤戦である情報収集において、トリステインが貴族連盟と帝国を完璧に抑え、イニシアティブを取れた。これは情報伝達手段が少ないハルケギニアにおいて、非常に大きい。

「王家の『血』を、戦禍を被る危険性の高いトリステインから、比較的安全な帝国領内へと避難させることにもなる。国同士を婚姻によって結びつけるという、実にもっともらしい理屈をつけた上で……な」

そうしておけば、最悪トリステインが『レコン・キスタ』によって陥とされても、主家の血筋を絶やすことなく、残すことができる。この場合、トリステインが革命貴族連盟による共同統治、あるいはゲルマニア領となってしまうことは避けられないが、どのみち国が滅亡しているのだから『血』を残すことができるだけ、まだましと言えるだろう。

「しかも、内乱を起こすことなく堂々と『陛下』を王座に上らせることまで可能としてくれるとは、なんともはや素晴らしき提案だ」

先日まで王位継承権第1位を持っていたマリアンヌ王妃については、既にその権利を放棄している状態だ。よって、現在継承権第1位のアンリエッタ姫が他国へ嫁げば、その時点で彼女の持つ権利は完全に消え失せてしまう。

結果、自然と王冠はラ・ヴァリエール公爵の手元に転がり込んでくるのだ。しかも、それ以降の継承順位については、特に定められ

ていない。王家の存続を図る上では危険極まりないことではあるのだが、お陰で、公爵は誰憚ることなく王座につくことができる。

もちろん、宮廷内外での反発が一切起きないでもないだろう。王座が不安定な今だからこそ、甘い汁を吸えている者が大勢いるからだ。王位継承権を持つ身とはいえ、公爵が『主筋』ではないからと難色を示す者が、ほぼ間違いなく出てくるはずだ。

とはいえ、唯一家柄で公爵の対抗馬たりえたモンモランシ家は、ラグドリアン湖の干拓事業に失敗したばかりか、そこに住まう水の精霊の怒りを買い、ついには交渉役の任をも解かれ、すっかり没落してしまっている。王権を争う能力など、あろうはずもない。

ラ・ヴァリエール公爵家に次ぐ資産を誇るクルデンホルフ大公家は、豊富な資金力によってその地位まで上り詰めた、所謂『成り上がり』だ。また、当主が王家の血を引いているわけでもない。よって、家柄に関して言えば完全に位負けしている。

それに名目上とはいえ、クルデンホルフは既に大公国としてトリステインから独立した国家となっているため、即位に関して口を挟むのは難しいだろう。

第一、クルデンホルフ大公はトリステイン国内での影響力こそ強いが、ラ・ヴァリエール公爵家には血筋・資産共に到底及ばない。それどころか、大公自身が、

「トリステイン王家と宰相マザリーニ、そしてラ・ヴァリエール公爵には全く頭が上がらない」

……などと、自認しているほどなのだ。

そんなわけで、万が一クルデンホルフ大公が王位継承戦に立ったとしても、既に勝負は見えている。彼の味方につこうなどという奇特な者も、ほぼ皆無であろう。

懐の寂しい大勢の貴族たちに金を貸し付け、それによって彼らの首根っこを強引に押さえつけている『金貸し』クルデンホルフ大公は『鳥の骨』マザリーニよりも人気が無い。それどころか、憎まれているといっても過言ではない。

国軍・諸侯軍の頂点に立つグラモン伯爵家に至っては、古くから公爵の盟友として通っており、既に水面下では公爵・枢機卿・伯爵の間で三者同盟が成立していた。

つまりトリステイン国内には、単体で『御輿』となりえるような候補はいないも同然なのだが、それでもあえて誰かを挙げるとするならば、フィリップ三世の一粒種・マリアンヌ王妃が残っている。

しかし、夫の死後長きに渡って喪に服し続けた上で、国内の主立った貴族たちからの女王への即位要請を断り続け、さらに宮廷付の医師たちから『心の病』という診断を下されている彼女を無理矢理持ち上げてみたところで、そこにあるのは見え透いた野心のみで、正義は存在しない。国民の賛同を得ることは難しいだろう。

ほぼ同様の理由から、ヴァリエール家に次ぐ家柄を誇るモンモランシ家に金銭的援助を与えた上で、担ぐことも不可能だ。かの家が起こしたラグドリアン湖に関する一連の大失態は、未だ宮廷内の記憶に新しいのだから。

そのような無謀な賭けに出るくらいなら、素直に公爵のもとに走

り、自分と領地の安寧を図ったほうが余程ましというものだ。そんなことすら判断できないような愚図は、公爵や枢機卿が手を下すまでもなく、勝手に自滅するだろう。

そもそも公爵は、姫から――たとえ彼女がそれを知らなかったとからはいえ『王権』の象徴たる『水のルビー』を手ずから下賜されているのだ。血筋についても王家の傍流。宗教的な見地からも、家柄の面においても、即位を反対される筋合いはないのだ。

とはいえ『指輪』を前面に出すのは、ロマリア宗教庁の不必要な政治介入を防がねばならないという意味合いから、あくまで最後の手段として取っておかねばならないが。

そう……全ては、アンリエッタ姫の去就次第なのだ。ここに来て、彼女は『クイーン』ではなく、トリステイン・ゲルマニア両国における『ジョーカー』と化していたのだ。

「急いては事をし損じる。かといって、この機会を逃すわけにはいかん。なにせ、これはガリアとロマリアが未だ『レコン・キスタ』に対する声明を出していない、今だからこそ行える『縁組み』とも言えるからな」

『始祖』に連なる『王権』を打破すると宣言している貴族連盟レコン・キスタは、本来であれば完全に『異端』認定されてもおかしくない存在なのだ。もしもロマリアが何らかの声明を出せば、たったそれだけで彼らを内側から崩壊させることもできるだろう。それほどまでに、ブリミル教の権威は強大なのである。

この状況下で、教皇とロマリア宗教庁は完全に沈黙を守っている。金にならぬことに余計な首を突っ込み、火の粉を浴びるような真似

を避けている。あるいは、頼られるのを手ぐすね引いて待っているのだというのが、マザリーニ枢機卿の見立てであった。

実際に、少しでもロマリアが持つ『権威』つまり、ブリミル教寺院の手を借りた場合、以後間違いなく内政干渉を受け続けることになり――実質上、かの皇国の属国と化してしまう。そうなったが最後、民は血の最後の一滴まで絞り尽くされることになるだろう。

それを極端に畏れるが故に、滅亡の危機に見舞われているアルビオンも、安易に彼らを頼ることができなかったのだ。『光の国』などと敬われるかの皇国の実体は、欲と陰謀にまみれた『魔窟』なのだから。ロマリア出身の『聖職者』であるマザリーニ枢機卿には、それが痛いほど理解できた。

残る『王権』を持つガリアはというと、内憂を払うことで手一杯という有様で、援軍を出す余裕などないという状態だ――表向きは。だが、実際のところはそれほどの脅威を受けているようには見えず、のらりくらりとトリステイン側から持ちかけた交渉を躱されているというのが実情だ。

だが『シャルル派』と呼ばれるガリアの反体制派が、レコン・キスタと繋がっている可能性も否定できないため、トリステインとしても兄弟国の絆を強調し、軍事的な支援を取り付けることができないでいる。援助を行うために貴重な戦力を割いてくれたガリアが、内部の反乱勢力の手によって、アルビオンの二の舞となる危険性を孕んでいるからだ。

「しかし、このような情勢だからこそ、我が国がゲルマニアと手を組むことを、状況的にも当然の流れと見せかけられる。しかも、同盟の条件である姫との婚姻は、我が方から申し入れたことではな

い。いやはや、実によいタイミングであったよ。皇帝『閣下』」

枢機卿の中では、既にアンリエッタ姫の輿入れは決定事項であった。あとは、細かい条件をよく検討して、じっくりと煮詰めるだけだ。自分が認めた『王』と共に。彼は、頑ななまでに、それが最善であると信じていた。

――しかし。歴史の流れは、敏腕政治家たるマザリーニが想像すらしていなかった方角から吹き始めていた＜風＞によって奔流となり、底深き滝壺に向かおうとしていた。

第９０話　灰を被るは激流、泥積もりしは鳥の骨（後書き）

ケーキのピースと平和をかけてみた。

原作ゼロ魔をご存じのかたは既にお気づきでしょうが……９０話目にして、ついに『アレ』が見え隠れして参りました。ここまで動きまくってしまった歴史で、かの出来事は一体どうなってしまうのでしょうか。

さて。今回触れた「ジョーカー」についてですが。原作ではしっかりと明記されていませんでしたが、アルブレヒト三世のほうからアンリエッタを迎え入れたいという申し出があったのだとしたら。実はとんでもない失策だったのではと自分は考えます。

いや、実際問題皇帝閣下（ハルケギニアでは、皇帝陛下ではなく皇帝閣下と呼ばれています。三王家よりも格が低いからです）アンリエッタを嫁にするって、いくら領土拡張の野望や血を目的としていたとしても、危険すぎると思うのです。ある意味、同盟を組むよりも、そっちのほうがよほどヤバイという。

内部に爆弾を抱えるだけでなく『王権打破』を目指すレコン・キスタに、戦争を引き起こすための格好の口実を与えてしまうことになるのですから。

特に、本作よりもレコン・キスタの勢力拡大が著しい原作上でそれをやらかしてしまった皇帝は、政治手腕に優れる彼としては珍しいレベルの失策をしてしまったものだなあと。タルブ戦役で援軍を出さずにトリステインを見捨てていましたが、もう遅いという。あのときルイズと才人によって救われたのは、実はトリステインだけ

ではなかったのです。

そして。名前だけはちらほら出ていたマザリーニ枢機卿が、ついにメイン格として登場です。この人物、（三銃士の）マザラン枢機卿というよりもリシュリュー猊下なんですよね、あくまで自分が持っているイメージは、ですが。立場的には明らかに前者なのですが、政治思想や行動が。ダルタニャン物語を読み返してみて、改めてそう思いました。エスターシュ大公とフィリップ三世のやりとりがモロに序盤のリシュリューと国王のそれで、思わず吹きましたが。いやあ、今読んでもやっぱり面白かったです、三銃士。

それと。アルビオンが落とされる前にロマリアが出てこなかったのは、こういう理由かな、などと考えてみました。陰謀大好きですからね……あの国……。

あと、ちらっと出てきたギムリ。彼のフルネームと系統も知りたいんですが……。

それでは、三連休中にもう1本アップできるように頑張ります。

２０１１／１０／０８　２０：００　誤字脱字修正、本文加筆修正

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4286r/

雪風と風の旅人

2011年10月8日22時50分発行